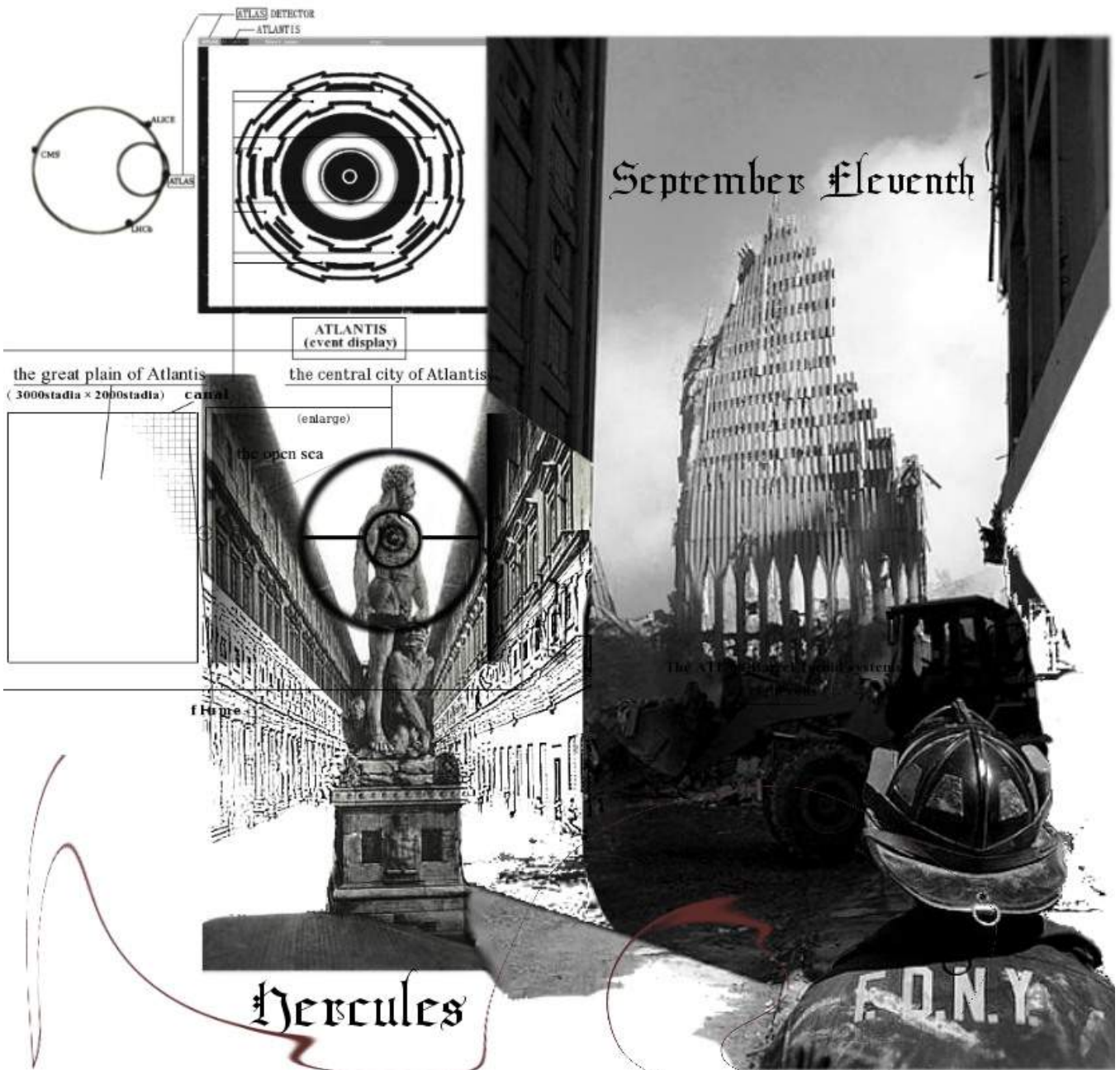


Entities that physicists refer to as Black holes , already fulfilled many extraordinary Predictions , and firm Guilty Intent

— [III] —



[本稿の内容検証に際して「特段に」注意いただきことらとして]

※ [委細を尽くしての細部] によって [本筋] を見失われないよう、ご注意くださいことらとして

それこそ「ざっと見」にてご一読いただくだけでもご理解いただけることとは存じますが、本稿は「非常に細々とした表記をなしているもの」となります。その点に関して文書製作者としては（非常に細々とした表記がゆえに）読み手の方々が文書主筋となる箇所を見失われかねない —（本稿が「なぜ」「どのような」問題意識をもって作製されたものなのか、その指し示事項は究極的には奈辺にあるのかについて把握するうえで難渋される（そして文書検討をおやめになる）とのことになりかねない）— とのことに危惧・懸念いたしております。それゆえ、ここ冒頭部にて次のこと、注意喚起なさせていただきますと思います。

（以下、文書内容についての冒頭部注意喚起としまして）

⇒「本稿の主要なる問題意識と訴求事項は文書タイトル — すなわちもってして Entities that physicists refer to as Black holes , already fulfilled many extraordinary Predictions , and firm Guilty Intent 『物理学者の類がブラックホールとよびならわしている存在ら、既に実現を見てきた異様な予見的言及、そして、確たる他害意志の介在問題について』とのタイトル — にすべて集約されています。いかに細々としたものであれ、本稿中の記述はこれすべてそちら文書タイトルで表しもしているまさにそのことを摘示「しきる」ために必要と判じてのものとして表記しております（脈絡・文脈なくも漫談じみた無為なるはなしを展開しようとの観点は全くございません）。微に入っ

て細やかな表記はそうもしてこれすべて【一つの目的に奉仕するために必要な手順】と判じてがゆえのものとなるのですが、他面、読み手銘々が一体全体何が問題になっているのか捕捉しづらいつのことが —（「ざっと見をまずもってなす」との嗜好が強い方ほど）— であろうかと書き手たるこの身が深く懸念していることにも相違ございません。そこで本稿を真摯に検討なそうとの方々には本稿が「厳密な意味での段階説明方式を採用している」とのことをご理解いただきました上での【文書の最初から順を追っての検証】を、何卒、願わせていただきたく次第でございます」

※ 本稿内の数多の出典紹介部、そのすべての記載内容の即時的かつ効率的な確認方法につきまして

本稿は申し分を支える根拠、その出所紹介を極めて重んじているものともなります（書き手として【我々の生き死に関わる事柄】を詳述詳解すべく死命を賭して作製しているとの本稿内容が実際にこれすべて【後追い可能かつ容易なる典拠】に基づいているとのこと、そのことを読み手第三者にご理解いただくことこそが何よりも肝要であろうとの認識があつてのこととしまして、です）。そのため、出典紹介部の比重が重くなっています。

さて、ここでは紙幅の多くをそこに割くとのかたちで本稿本文中に入れ込んでいる数多の出典紹介部らの内容すべてを、「都度」、必要に応じて即時的に確認するうえでの方式をご案内させていただきますと思います。

そちら【都度、即応的にすべての出典紹介部の内容を即時確認する方式】の実行の前提条件となることとしまして（出典の確認検証をなしたいとの方々におかれましては）まずもって本稿各巻巻末に全巻共通のものとして設けている【典拠紹介部ページ数一覧記載部】の内容「のみ」ご印刷いただきますよう（遺漏無くも確認にあつて必要なこととお含みいただきましたうえで「そこだけ」ご印刷いただきますよう）願わせていただきたく次第です。そして、印刷いただきましたうえでそちら【「数ページよりのみなる」各出典紹介部ページ数一覧】をお手元に置いていただきましたうえで —ここからがポイントとなるところなのですが— 別ファイル名で本稿と全く同じPDF ファイルを（お手持ちのパーソナルコンピューターにて）同時に開いていただきたく次第です（:まったく同一内容同一巻の本稿をかたやファイル名1、かやたファイル名2とのかたちの異なったファイル名称のPDF ファイルとして「同時に」別ファイルとしてオープン・閲覧していただければ、とのこととなります）。

さて、まったく同一の本稿を同時並行的に別ウィンドウにて閲覧できるとの状況になりもするのが、既述の、【別ファイル名にての保存ファイル】を別々にオープンしたケースとなる次第なのですが、片方の電子ファイルを順繰りに検討している中で、たとえば、出典紹介部2の内容をなんとしても確認したくなつたとのことがあつたとします。といった場合、（最前にて「そこだけ」印刷のうえでお手元にご用意いただきたいと申し伝えさせていただきました）【「紙ベースでの」わずか数ページよりなる出典紹介部一覧】にて出典紹介部2は何巻何ページにて記載されているものなのか、一目にての確認をまずもってなしていただければ、と思います。出典紹介部一覧表記部における出典紹介部2のページ数（出典紹介部2ならば、具体的には本稿第一巻53ページから59ページ）を確認いただければ、そちら該当ページに掲載の出典紹介部の内容の確認を【（振り返って特定出典紹介部の内容が確認したくなつたところの）現在読解のセクション】から立ち位置を動かさずに「同時並行的に」なせもします。本稿PDF文書（便宜的に呼称して【File1】とのかたちで開いていただいているものとします）を閲覧しつつ、もう一方の【File2】名称で開いている別ウィンドウ表示の同じくもの、同一の本稿別名ファイルにあつてそちらPDF上の（画面上部にての）ページ数入力ボックスに【印刷した出典紹介部にて記載のページ数】を入力いただければ、【出典委細確認の必要を感じたセクションの表記の継続閲覧】と【（都度もってしての）出典内容の委細確認】を同時になせもします —確認対象と読解対象が同一巻数（vol.1からvol.4と分かちての本稿の同一巻数）に位置していても同時になせもします—（流れとしては【文書読解】→【疑問点表出（典拠出典番号として記載されている従前の出典表記確認の必要性の認識）】→【印刷した出典表記一覧部の該当出典紹介部のページ数の確認】→【文書名を分けて同時オープンしたPDFのページ数入力ボックスに出典紹介部のページ数の入力】→【File1での疑問点を感じたセクション以降の読解の継続とFile2での出典委細の確認の間断なくも同時実行】とのフローとなります）。

以上ご案内させていただきました手法を採択いただければ、ほとんど印刷することもなく都度、出典中身すべてを必要に応じて即時的に確認いただきながら長大な本稿の検証をなしていただけることと存じます。

本書第三巻 (vol.3) の構成

先行する段にて「ブラックホール近似物の描写を(奇怪に)含む」との特性について解説してきたとのダンテ『地獄篇』とLHC実験命名規則を「さらに」濃厚に結びつける要素群について (**補説3**と区分付けしての部)

(うち、【ヘラクレス12功業とダンテ『地獄篇』との濃厚なる繋がりあい — 女神ペルセポネなども媒介項としつつの濃厚な繋がりあい — 】に関してのこととして表記表題の通りのことの解説を講じているとの部) p.8

女神ペルセポネと女神イシス、そして、シリウス。多くを加速器実験とブラックホールの問題に結節させしめる多重的相関関係の問題について (**補説3**と区分付けしての部)

(うち、【女神ペルセポネとエジプトからギリシャへの渡来神イシスの結合関係がいかようにして「多重的に」ケルベロスという怪物に通ずる関係性ともなっているのか、とのこと】の解説なしもしているとの部) p.137

(うち、【女神イシスおよび地獄の番犬ケルベロスの双方に結びつくとの式でいかようにして白色矮星シリウスBに純・記号論的に通ずる奇怪なる(歴史的文書らに見る)先覚的言及が人類史にあってなされてきたのか、とのこと】の解説をなしもしているとの部 — (世間的にはフリンジ領域(極めて疑わしきところがあるとの領域)の著作であるとの評価を伴う欧米圏にて物議を醸した書籍にあっての[少なくともそこだけは見るべきところがあるとの文献的事実に依拠しての関係性の指摘の部]などを援用しながらも表記のことの解説をなしもしているとの部 —) p.231

(うち、【(せんだってより引き合いに出しているとの)白色矮星シリウスBが「それなりの由縁あって」現代科学におけるブラックホール理論の開闢をもたらした天体とされているとのこと】の解説をなしもしているとの部) p.311

(うち、【三面のケルベロス捕縛にて終結を見るヘラクレス12功業と三面のルシファーに際会することで終結を見るダンテ『地獄篇』の「極めてもってして複層的な」繋がりあい】から何が問題になるのか、そのことについて訴求すべくも従前表記内容を整理しもしているとの部) p.330

(うち、【シリウス体现神格でもあるエジプトよりの渡来神イシスと結びつく女神ペルセポネ、そのペルセポネがルシファー(ダンテ『地獄篇』にてのブラックホール近似物描写にかかわる悪魔の王)およびケルベロスといかようにして複合的多重的繋がりあいを呈している存在なのか、とのこと】をさらにもの典拠を数多挙げながらも解説、そのことが何故、問題になるのか煮詰めもしているとの部) p.351

(うち、【先行するところの摘示事項らがいかにしてフリーメーソンのイニシエーションの体系にまで接合しているのか、また、そうもしたことがいかにして重きをもって迫ってくるのか、とのこと】の解説をなしもしているとの部) p.455

(うち、ここまでの摘示事項の内容を(委細を割愛しながら)整理しもしているとの部) p.481

[ブラックホール]、[ルシファーと呼称される宗教体系上の存在]、[特定シンボリズムら]の繋がり合いについて「さらにも」指摘しておくこととしたこと (**補説3**と区分付けしての部)

(うち、付記1および付記2と分類付けもして、表記表題の通りのことについてさらに指摘すべきと判じたことを解説しもしているとの部) p.494

(うち、軽んじざるべきことを峻別するうえで真摯なる読み手、その誰しもが押さえておくべきと判じたことを(付記として)表記しての部) p.526

露骨かつ確認容易なる[事後発生事件]の「事前」言及事例らが現実に存在していること、そして、それらが本稿ここまでで摘示してきたことと多重的に通じ合うものになっているとのことについての詳解(補説4と区分付けしての部)

(うち、**【憑きもの(聖書における予言の霊のごときもの)にでも憑かれたかのかたちで特定映画作品およびその原作小説にあまりにもできすぎたかたちでツインタワー崩落にまつわる予見的言及がなされている、ということ(たとえば911に通ずる数値使用と結びつくところで事件発生の前にツインタワー界隈のビル倒壊を扱っている等々)】**の委細解説および確認方法紹介を入念になしての部) p.537

(うち、**【911の事件の発生に対する「目立っての」予見的性質】**を帯びての作品がその予見性それ自体にかかわるところで共通のフリーメーソン・シンボリズム体系との歴然たる視覚的接続性を具現化させているものとなっているとのこと】の委細解説および確認方法紹介を入念になしての部 — 『ファイト・クラブ』に特化させて表記のこと(フリーメーソン・シンボリズムとの歴然たる接続性)を扱っての部 —) p.634

(うち、**【911の事件の発生に対する「目立っての」予見的性質を帯びての作品「ら」がその予見性それ自体にかかわるところで共通のフリーメーソン・シンボリズム体系との歴然たる視覚的接続性を具現化させているものとなっているとのこと】**の委細解説および確認方法紹介を入念になしての部 — 『ファイト・クラブ』「以外」の著名作品「ら」(国内作品「ら」も含む)に裾野を拡大しもし表記のこの詳説をなしているとの部 —) p.729

【予言】が存在しているとのこと、それが何故、科学的作用の所作と述べられるのか、そして、科学的作用の所作であるとのことがいかに剣呑な方向を指し示しているのかについて(補説4と区分付けしての部)

(うち、**【フィレンツェ在の特定作品における現代科学知識に通ずる異様な先験的特質および嗜虐的特質】**について詳説をなし、そのうえで、何が問題になるのかのこのことを扱っての部) p.891

(うち、**【フリーメーソン・シンボリズムおよび予見的言及ら特性に通ずるソロモン神殿にまつわる寓意付けの問題】**から人間「養殖」についてそうだと判じられるところを論じての部) p.961

各[典拠紹介部]記載箇所一覧表記部 p.1037

既に先行するところとして巻の一 (vol.1)、巻の二 (vol.2)、とのかたちで PDF ファイル形式を書き連ねてきているのではあるが、ここで、従前の段でいかようなことを摘示してきたのかについての振り返り表記をなしておくこととする。

[ここに至るまでの本稿内容の端的なる振り返り表記として]

本稿ではここに至るまで、大要、次のことらの解説をなしてきた (:それらのことが【なんら属人的心証など問題にならないとの堅い典拠によって指し示される現象】としてそこにあるとのことを(懇切丁寧を心掛けもし)解説なしてきた)。

・加速器実験によってブラックホール生成がなされると考えられるに至ったのはここ 10 数年とされている、正確には

【1998 年発の特定理論 — ADD Model — の登場を受けての (その後、数年の間) の理論動向の地殻変動】

を受けてのことであるとされており、2001 年に登場した第一線の科学者ら由来の特定の科学論文らにあってそうした可能性が主流筋の一部物理学者より示唆されるまでは

【(きたる) 加速器 LHC の始動によってブラックホールが生成される可能性】

などは「ありえないことである」と見られ、かつ、加速器実験実施機関からしてそうも断言していたとのことがある —— 同じくものことを多角的・一様に示す科学界の「公的」報告文書、そして、ノーベル賞級物理学者らの言行録らが存在して「いる」—— 。

(:1999 年になってはじめて「LHC 実験でブラックホール生成がなされる可能性があるのではないか?」との問題視が市井の活動家 — (ウォルター・ワグナー) — によってなされた、それがマス・メディアを通じて衆目につくようになったとの事情「も」ある中で、だが、そちら「1999 年の」ブラックホール生成可能性の問題視は運動家ワグナーによる懸念の理由付けも含めて科学界・主流科学者らになんら相手にされなかったとのことがあり(公式報告文書それ自体からして(先に引用しているように)「加速器でブラックホールが生成されるなどというのは狂人の妄夢 Pipe Dream のようなものである」との内容を前面に押し出していた)、そうした風潮が(ワグナー問題視に 1 年程先立ちもする) 1998 年の特定理論登場 (ADD Model) に由来する「水面下での」理論動向の変転を受けもし、「結局」、変化・変節を見ることになった、すなわち、**【プランク・スケールのエネルギー Planck Energy を極微領域投入した時のみのブラックホール人為生成可能性】**に対する観点の修正を受けて**【LHC による「科学の発展に資する」即時に蒸発する安全なブラックホール生成】**はありうると思われるようになったとの(発表動向変化にまつわる)事情がある)

・上の点(・)となんら間尺・平仄が合わぬこととして、である。**【加速器によるブラックホール人為生成】**について異様な程に正確に後の動向をなぞっているとの式での「予見的」特定フィクションらが実在しているとの事情がある。

(:本稿の従前の段では 1980 年初出の作品 — 過去改変を主軸たるモチーフとして いる作品 — にあって

【加速器敷設型核融合プラントにあつての極微ブラックホール生成】

の粗筋が具現化を見ていることを指摘し、その粗筋が

【極微ブラックホールの生成個数】（現実世界での後の見立てでは通年 1000 万個のブラックホール生成が論じられるようになったのに対して当該のフィクションでは短期間の加速器敷設型核融合プラントの運用に伴う数百万個のブラックホール生成が描かれている）

【欧州生成元におけるブラックホール生成懸念具現化時にあつてのホーキング輻射（極微ブラックホール蒸発に関する仮説）を持ち出しての責任逃れの言辞の具現化】（現実世界でも後にブラックホール生成可能性が問題視された折、ホーキング・エバパーレーション、ホーキング輻射による熱放射によるブラックホール消滅が安全性の論拠として盛んに強調されていたとの事情が存するのに対して、当該の小説ではブラックホール生成が問題視された折、「それでも蒸発するから問題ないだろう」との関係者強弁がなされていたと描かれている）

などの側面での【先覚性】が具現化していることを懇切丁寧に解説しもしてきた（さらに述べれば同じくものフィクションが異様なのはまだ建設計画の青写真すら存在していなかった（と実験機関文書らより後追いできるよになっている）LHC 実験の始動時期に「極めて」近い 30 年後の世界を当該作品が舞台にしているとのこと「も」ある）。

また、別の 1974 年初出のフィクションに関してはよりもって異様なることに CERN（現行の LHC 実験の主権者機関）を露骨に意識させる架空の欧州の加速器実験主権者機関によって

【往時想像だにされもしなかったし、青写真すら出されていなかった（と実験機関公的資料より後追いできる）ところの】兆単位電子ボルトを実現する「架空の」巨大円形加速器 —しかもその巨大円形加速器、往時の CERN 運営加速器よりも今日の LHC に「重心衝突系エネルギーベースの比率で 200 倍も近い」との一品となっている（繰り返すがそうしたものの建設計画がなんらもちあがっていなかった中でそうもして近いものとなっている）—】

などとのものが登場を見ており、そうした巨大円形加速器が多角的にブラックホール人為生成のメタファーと結節するよになっているとのことすら「も」がある)

・上にあつては

【加速器による「後の」ブラックホール人為生成問題（の議論）に通ずる「異様なる一貫性を伴った」予見性】

が現出していると（委細をすべて先立っての段に譲りつつも）申し述べているわけだが、

【「異様なる」予見性現出】

との点で言えば、911 の事件について「も」それが当てはまるよになっていると「ある」。

・直前の点(・)にあつて言及の、

【911 の「異様なる」予見性現出】

が、こともあろうに、

【加速器による「後の」ブラックホール人為生成問題(の議論)に通ずる「異様な一致性を伴った」予見性】

と結節点をいくつも有しているとのことが「ある」。

具体的には次のことらがそこに「ある」。

→

[— (「問題なのはそうしたことの現出が(予見性それそのものの発現も含めて)[偶然の賜物]か[確たる故意の賜物]なのか、どちらであるのかとのことにある」としつつも) — 911の一部予見事物「にも」ブラックホールおよびブラックホールに通ずるワームホールのメタファーが介在しているとのことがある]

[911の一部予見事物も「加速器のブラックホール人為生成問題」も【アトランティス】【アトラス】【黄金の林檎】とのユニークな(特異なる)要素との結節性を帯びているとのことがある(：911の一部予見事物がいかようにして[アトランティス][アトラス][黄金の林檎]と結びつくのかの(さらに補うことを前提にしての)一例紹介を先立ってなしもしている、また、LHC実験によるブラックホール生成可能性が【検出器ATLAS】【イベント・ディスプレイ・ウェア ATLANTIS】といったものらと結びつけて実験実施機関それ自体に発表されるようになっていったとのことがある — LHC実験では検出器ATLASの目たるところで「科学の進歩に資する」安全な極微ブラックホール生成を観測しうる、イベント・ディスプレイ・ツールであるところのATLANTISによってブラックホール生成イベントを捕捉・ディスプレイしうるとの言い分が関係者によって前面に出されたとのことがある(本稿ではそうした言い分に結実することになった命名規則確定の【時系列】も当然に問題視しており、たとえば、ATLASとの命名規則が確定したのは1992年のLHC計画(まだ正式にゴー・サイン・予算承認が出されていなかったところのLHC計画)関連の趣意書にあるといったこともCERNサイド文書よりの原文引用によって(先行する部にて)示している) —]

・直上言及のことにも関わるところとして — これまた実にもって奇怪なことなのだが — 「人類の歴史にあっては「現代的観点で見た場合の」ブラックホールおよびワームホールに通ずる「特異なる表現」が「超」がつく程に著名な古典らにすらみとめられる — しかも、そこまではまったく指摘されないところながらも複数著名古典の相互に通ずるところにそういう側面が見てとれる — とのことがある」

・直近の点(・)にて(委細を端折りながら振り返りもして)言及しているように

「人類の歴史にあっては「現代的観点で見た場合の」ブラックホールおよびワームホールに通ずる「特異なる表現」が「超」がつく程に著名な古典らにすらみとめられる — しかも、そこまではまったく指摘されないところながらも複数著名古典の相互に通ずるところにそういう側面が見てとれる — とのことがある」

と指摘させるのだが、(「そうしたことがあるのが【偶然の一致の賜物】なのか【故意の賜物】なのかとのことが問題になる」と先行する段にて述べもしてきた) 同じくもの関係性が

【アトラス】

【アトランティス】

【黄金の林檎】

【ヘラクレス】

との要素らに濃厚に接続しているとのこともがまたもってしてある。

そうした関係性の問題は先立って言及してきたところの【911の予見事物】【LHCによる

ブラックホール生成問題に関わる事物】の双方に通ずるもの「でも」あり(委細を先行する段に譲ってのことながらも最前の箇条書き部の他の点(・)らの内容として表記してきたことである)、またさらには

【伝承に見るトロイア崩壊の物語 — 欧米の基準古典となっているところのホメロス叙事詩がそちらをモチーフとしているところの「木製の馬が用いられての城市崩壊の物語」—】

【エデンでの禁断の果実による誘惑の物語】

【蛇の種族によるアトランティスへの侵襲・崩壊にまつわる「旋毛(つむじ)の向きが左がかった」申しようの類 (という筋立ての第二次大戦期に遡る神秘家という人種に由来する「一見する限りは、もの妄語の類) 」】

と「濃厚に」接続しているとのことがあるとのもの「でも」ある。

以上、箇条表記したことが本稿にあっての従前の段の主たる摘示事項らとなる。

(尚、上にて箇条表記したことは【Vol.1 とのかたちでまとめたの先行するところの PDF 文書】にてそれらの典拠 — 書き手たるこの身の属人的主観など一切問題にならぬとのかたちでの典拠 — となるところをあらかじめ指し示してきたことらであるのだが、先行するところの【vol.1 と振っての文書】に後続する【Vol.2 と振っての文書】(ちなみに現行は【vol.3 と振っての文書】)の中での話をなしている)「でも」同じくものことらを側面から補うべくもの多くの証跡を膨大な紙幅を割いて摘示しているとのことら「とも」なる)

(ここまでもってして、端的ながらも、先駆けての本稿内容の振り返り部とする)

直下、これよりの段より**補説 3**と振っての段に入ることとする(巻をあらためもしての本 PDF 文書固有の内容としてそちらセクションに入ることとする)。



先行する段にて「ブラックホール近似物の描写を(奇怪に)含む」との特性について解説してきたダンテ『地獄篇』と LHC 実験命名規則を濃厚に結びつける要素群について

ここ補説3と題しての部ではダンテ『地獄篇』がいかに多くをつなげる作品となっているのかについて詳解をなすこととする。

さて、本稿従前の段、

[出典(Source)紹介の部 55 から 出典(Source)紹介の部 55(3) を包摂する解説部]

にあつては、きちんとした論拠に基づいてのこととして、大要、以下のことを問題視してきた。

「 [ダンテ・アリギエーリ『地獄篇』にあつての [地獄に幽閉されたルチフェロ(サタン)] および [地獄門の先にある領域] と関わる部] にて [今日的な観点で見た場合のブラックホールに類似の要素を複合的に帯びての記述] が見てとれるとのことがある(にまつわつては複数の著名科学者らがそのことを(中途半端な式ながらも)匂わせているとのことなどがある)。他面、【ジョン・ミルトン古典『失樂園』にあつての [地獄に幽閉されたルシファー(サタン)] および [地獄門の先にある領域] と関わる部】にてまた別側面で [今日的な観点で見た場合のブラックホールに類似の要素を複合的に帯びての記述] が見てとれるとのことがある。

その点、

[今日的な観点で見たブラックホール]

が

[[1. 一端そこに入ったらば光さえ抜け出れぬ領域] であるとの [2. 重力の本源たる場] にして [3. その場にては時が止まった状況 (ブラックホール外部観察者たる生者の視点) にて粉碎劇が実現する (ブラックホール被吸引者たる死者の視点) との場] となっている]

とされているのに対して、前者(ダンテ『地獄篇』)にあつてはルチフェロ(ルシファー)を中枢とする地獄門の先にある領域が

[[1. 一端そこに入ったらば何者もそこより出れぬ(地獄門の不帰の地にまつわる隻句)との領域]、かつ、[1. 光(ルシファーとは元来、ラテン語のLuxと関連して光と結びつく語であるとされる)が幽閉されている領域] であるとの [2. 地球の中心、重力の中枢を囲む牢獄] にして [3. その場にては時が止まったような凍り漬けの状況(外部の視点)にて永劫の粉碎劇(噛み砕かれるものがどういふわけかいつまでも五体粉碎しないような状況を見ている)がなされているとの場] となっている]

と描写されていることがある。

他面、

[今日的な観点で見たブラックホール]

が

[[4. 時間と空間が意を失う領域] にして [5. 底無しの暗黒領域] となり、また、[6. 宇宙の揺り籠であるとの視点も存するもの] である]

とされているのに対して、後者(ミルトン『失樂園』)にあつてはルシファーに関わる地獄門の先の領域が

[[4. 時間と空間が意を失う領域] にして [5. 底無しの暗黒領域] となり、また、[6. 原初自然の祖] である]

と描写されているとのことがある]

※【外挿表記としまして】：ここでのそのように本稿では「頻繁に」文字色と背景色を変えての【出典紹介部】呈示のための表記をなしています。本稿全体の指し示し内容の重大性を顧慮して【後追い可能な典拠】の細部に至るまでの呈示からして必須事項ととらえているからではありませんが、無論にして、後追い「可能」であるだけではなく後追い「容易」である必要もあるとの認識が書き手この身にはございます。にまつわつて後追い「容易」性の方をもたらす方式、すなわち、【都度即応的にすべての出典紹介部の内容を即時確認するための方式】を本稿にあつての冒頭 p.2 で細かく紹介しておりますので「頻繁に本稿の典拠内容の確認をなす必要」を感じておられるとの方々におかれましてはそちら本稿 p.2 で案内させていただいております方式を採択いただければと考えます(典拠内容確認を容易・即応的になすとのその紹介方式とは本稿を収めたPDF文書を別名保存で二ファイル用意し、うち、片方を閲覧用、もう片方を(巻末数ページの出典紹介部「だけ」を印刷して役立てつつもの)出典確認用の電子文書として活用いただくとの方式となります)

以上表記では詰め込みすぎのきらいあり、分かりづらいかとも思うので、さらに [従前表記に倣いもしての分解しての再表記] をなすこととする。

(出典(Source) 紹介の部 55 から 出典(Source) 紹介の部 55(3) を包摂する本稿の従前の段にあって古典それぞれのものよりの原文引用なしつつも典拠示してきたこととして)

i

ダンテ・アリギエーリ 『地獄篇』 には

[今日、物理学分野の人間らが研究対象として取り扱っているとのブラックホールとの「質的」近似物]

が描かれているとの [現象] が認められる。

具体的には

- A. [ダンテらが「一度入ったらば[悲嘆の領域]に向けて歩まざるを得ず一切の希望を捨てねばならない」との [不帰の領域] にまつわる隻句 (『地獄篇』地獄門隻句) を目にしたところから入って最終的に到達した [悲嘆] を体現しての地点]
- B. [重力] —(古典『地獄篇』それ自体にて “ To which things heavy draw from every side ” [あらゆる方向から物の重さが引きつけんとする地点] と表されているところに作用している力) — の源泉と際立って描写されている場 (地球を球と描いての中心ポイント)]
- C. [(「悲嘆の」川コキュートス)にて(静的描写として)罪障がゆえに「凍りついた」者達が、と同時に、(動的描写として)「永劫に粉碎され続けている」との地点]
- D. [「光に「語源」を有する存在」(ルチフェロ)が幽閉されている地点]

との全ての要素を具備した [『地獄篇』にての地獄踏破にあっての最終ポイント] (コキュートス・ジュデッカ領域) にまつわる描写が

- A. [「一度入ったらば二度と出れない」との(事象の地平線の先にての)領域]
- B. [重力の源泉となっている場]
- C. [外側(生者)から見れば(静的描写として)被吸引者が「時が止まったような状況」になりつつも(動的描写として)その被吸引者本人(死者と化した者)から見れば「粉碎され尽くしている」との場]
- D. [「光さえもが逃がられぬ」とされる場]

との全ての要素を具備したブラックホール特性と共通のものとなっている(話としての奇異さはともかくも[記号論的一致性・文献的事実の問題]として共通のものとなっている)とのことが現実にある。



ii

他面、ジョン・ミルトン『失樂園』にあつて「も」
[今日の物理学上の話柄にあつてのブラックホールの「質的」近似物]
が描かれているとの[現象]が認められる。

具体的には

- E. [果てなき(底無し)の暗黒領域]
- F. [大きさ・「時間」・「場所」が無意味となる領域]
- G. [自然の祖たる領域]

とのミルトン『失樂園』に見るアビス(地獄門の先にある深淵領域)にまつわる描写が

- E. [底無しの暗黒領域]
- F. [時空間の法則が破綻する(「時間」と「空間」が本来通りの意をなさなくなる)領域]
- G. [それをもって自然の祖であるとする観点が存する場]

とのブラックホール特性と共通のものとなっているとのことが現実にある(※続く段に付しての補うべくもの出典(Source)紹介の部 55(3)を参照のこと)。

iii

ダンテ『地獄篇』にあつての、

[今日的理解にあつてのブラックホール近似物の描写 (於て:コキュートス)]

とミルトン『失樂園』にあつての同じくもの、

[今日的理解にあつてのブラックホール近似物の描写 (於て:アビス)]

は双方別個に別々の側面からブラックホールとの近似性を呈するとのものであるが、「極めて奇怪なことに」双方共に

[ルシファーによる災厄]

[地獄門の先にある破滅・悲劇に関わる通路]

と結びつけられているとすることがある。

以上、i. から iii. と区切つてのことらにつき、まとめれば、『地獄篇』および『失樂園』との両古典を合算して見た際に、

[[ルシファーによる災厄] および [地獄門(と描写されるもの)の先にある[破滅][悲劇]への通路] との両要素と結びついたポイント]

に関わるところで

- A. [[不帰の領域] にまつわる隻句 (『地獄篇』地獄門隻句) を目にしたところから入って最終的に到達した「悲嘆」を体現しての地点] (『地獄篇』コキュートス)
- B. [重力の源泉と「際立って」描写されている地点] (『地獄篇』コキュートス)
- C. [(静的描写として) 外側から見た際に罪障がゆえに「凍りついた」者達がそこに横たわっている、と同時に、(動的描写として) 当事者から見れば「永劫に粉碎され続けている」との地点] (『地獄篇』コキュートスの中枢ジュデッカ)
- D. [[光に語源を有する存在] (ルチフェロ) が幽閉されている地点] (『地獄篇』コキュートスの中枢ジュデッカ)
- E. [[果てなき(底無し)の暗黒領域] (『失樂園』アビス)
- F. [大きさ・「時間」・「場所」が無意味となる領域] (『失樂園』アビス/ 17世紀成立の『失樂園』の刊行時には時間と空間を有機的の一体と見る相対性理論に通ずる発想法は無論、なかった)
- G. [自然の祖たる領域] (『失樂園』アビス)

との要素らを「全て兼ね備えての」ありようが具現化していると述べられるようになっており、そうしたありようが現代物理学 —— (その担い手らが本質的には知性も自由度もないにも関わらず知性あるフリをさせられている下らぬ人種(ダンテ地獄篇にて欺瞞をこととする[人類の裏切り者]らとして氷地獄に閉じ込められているような者達)か否かどうかはこの際、関係ないものとしての現代物理学) —— の発展にて呈示されるようになったとの[「今日的な観点で見ての」ブラックホール像]と共通性を呈している、すなわち、

- A. [[「一度入ったら二度と出れない」との(事象の地平線の先にて)の領域] (ブラックホール内側)
- B. [重力の源泉となっている場] (ブラックホール)

- C. [(静的描写として)外側(生者)から見れば被吸引者が「時間が止まったような状況」になっているとのことがありつつも(動的描写として)その被吸引者本人(死者と化した者)から見れば「粉碎され尽くしている」との場] (ブラックホール)
- D. [[光さえもが逃がられない]とされる場] (ブラックホール内側)
- E. [底無し]の[暗黒領域] (ブラックホール)
- F. [時空間の法則が破綻する(「時間」と「空間」が本来通りの意をなさなくなる)領域] (ブラックホール)
- G. [それをもって自然の祖]であるとする観点が存する場] (ブラックホール)

との特徴を全て兼ね備えたものとしての「[今日的な観点で見ての]ブラックホール像」と共通性を呈していると摘示できるように「なっている」とのことがある。

(さらに加えての表記として)

次のことらについても、再度、言及しておくこととする。

第一。

ダンテ『地獄篇』と(今日的な観点で見た場合の)ブラックホールの特性が結びつくといった発想は無論、筆者の独創によるところなどではない(生き死にに関わるプラクティカルな領域にあっては一人合点の弊を帯びての主観先行の「独創」など本来的には問題視するに値しないことである。当然に筆者としてその程度のことは弁えているつもりである)。同じくもの点について部分的に示唆していた人間も今までにいた——やりようが([勇気]の問題なのか[自由度]の問題なのか何なのか)あまりにも不徹底に失するがゆえに問題なのだが、類似の点について示唆していた人間も今までにもいた——。の中には、はきと何が問題になるのか指摘しない、具体的にどこがどう一致性の範疇に入るのか何ら指摘なしていないとのやりようをとっていた(であるから、性質が悪いともとれるわけだが)との[著名なる科学者ら]が幾人も含まれており、については 一 本稿にての **出典(Source) 紹介の部 55** で言及しているように— [スティーブン・ホーキング] (車椅子のカリスマ物理学者として知られる著名人)、[レオナルド・サスキンド] (弦(ひも)理論の大家として知られる有力物理学者)、[クリフォード・ピックオーバー] (研究機関の研究者でもあり、有名なサイエンスライターでもあるとの向き)、[キップ・ソーン] (通過可能なワームホール概念を煮詰めたことでも有名なカリスマ物理学者。同男はダンテ『地獄篇』をブラックホールとはきと結びつけているわけではないが、自著冒頭部より登場させているブラックホールに[冥府][あの世]との名前を与え、[地獄篇]とブラックホールとの接点を臭わせている風がある)の各人らの名を 一 彼らの言い様の伝の引用をなすとともに— 本稿の先立っての段で挙げもしていた。

第二。

「どうしてなのか」肝心なことを解説していないとの先人言及のことに触れたうえで述べるが、ダンテ『地獄篇』がブラックホールのことを想起させるものであるとのことについては次のような事情「も」がある。

→ ダンテ『地獄篇』でダンテらが向かう先は [重力の中核としての氷地獄] であると『地獄篇』作中にてはきと明示されている。

その点について本稿にての **出典(Source) 紹介の部 55** の段ではダンテが

地球を球形に見立てているのみならず、地球の中枢(にして地獄の中枢)が
[重力の本源たるところである]
と記述していることの意味合い、重力が何たるかを理解しての如き書きようを
なしていることの意味深長さについて解説を講じている。

およそ次のようなかたちにて、である。

重力とはそもそも何か。それは現代科学にあって「次のように」定義さ
れるに至っているとのものである。

(以下、重力定義として)

「「重力とは、」[引力(質量に起因するところとしてあまねくも働く物
と物とが引き合う力)と遠心力(地球の回転に伴う慣性の力)の合
力]であり、そして、(時間と空間を一体化した[時空]を観念するに
至ったとの)アインシュタイン以後の観点では[物質(質量あるいは
エネルギー)に由来する時空の歪み(カーバチュアー)に起因する
力]と表されるものである」(巨大な物質・質量が空間に歪みを発
生させ、時空のシートないしトランポリンの上に鉄球を載せた際にそ
れが周囲のものを引きずる力として具現化するのが重力であると
いった説明がよくなされている)。

他面、ダンテ『地獄篇』ではダンテが向かった地獄中心地点が
[球形をなす地球の中心地点]

と描写され、かつもって、

[重さ(質量)「が」(周囲を)引きずる力が等しくも働く中心的ポイン
ト]

とのかたちにての描写もがなされているとのことがある ——本稿出

典(Source)紹介の部 55にて(ダンテに師父と慕われてのヴェルギ

リウスがダンテに語りかけるパートを収めての Henry Wadsworth

Longfellow (ヘンリー・ワズワース・グッドフェロー)、アメリカでは

じめてダンテ『神曲』を翻訳した 19 世紀の同文人の手になる英訳

版『地獄篇』よりの引用をなしたところとして) “ That side thou wast,

so long as I descended; When round I turned me, thou didst pass **the**

point To which things heavy draw from every side, And now

beneath the hemisphere art come Opposite that which overhangs the

vast Dry-land, and 'neath whose cope was put to death The Man who

without sin was born and lived. Thou hast thy feet upon the little

sphere Which makes the other face of the Judecca. Here it is morn

when it is evening there.” (拙訳として)「(地獄の中枢地点へ向け

て地下へと)私が下へ下へと下っていた際だけなのだよ、君(thou

は「君」の古語)のいる方面が[(地球の半球の)通り過ぎた向こう

側]だったのは。私が(地獄の底を突きぬけて)反転し振り返った折、

(脇にいた)君はもはや[あらゆる方向から物の重さが引きつけんと

する地点]を通過していたわけだ。そして、いまや我々は(地球の)

半球の下側、そう、乾いた大地に覆われ罪なくして生まれ生きた御

仁、そのうえで殺された御仁(設定上、イエスのことである)のおら

れた(地球の)半球の反対側にいるのだ。足をもってジュデッカ(地

獄の最下層たる氷地獄コキュートスの中心部)の反対側をなす矮

小な半球の上に置いているのである。あちらの半球で夜ならばこちら

側(側)の半球では朝なのである」との記述を引いているとおりで

ある(ポイントとなるところは[地球が球体であり各地に時差が生じてい

る])と描写されていること、そして、[ダンテらが通り過ぎた地球中

アインシュタイン以後の観点では【重力 Gravity】とは【引力】(質量に起因するところとしてあまねくも働く物と物とが引き合う力)と【遠心力】(地球の回転に伴う慣性の力)の合力)などと近代まで定義されてきたものを越えて、【物質(の質量あるいはエネルギー)に由来する時空の歪みに起因する力】と定義されている(たとえばもってして英文 Wikipedia [History of gravitational theory] 項目に現行、"Einstein proposed that spacetime is curved by matter, and that free-falling objects are moving along locally straight paths in curved spacetime." と表記されているようなところである)。ここで「こじつけがましい(far-fetched)主張である」との批判もまぬかれえぬところか、とは思うのだが、表記引用部に見るところの【the point to which [things heavy] draw from every side】とは【もの(の)重さ(質量)「が」周囲を引き込むポイント】と訳されるものである(主語・主体が物質質量になっており、それが周囲を引っ張っているのだと表記されている)。そこに見る重力観は(今日の)アインシュタインの見方に近いものであること、きちんと読解いただければ、理解なしでもらえることか、と思う(ただし、そうしたことが【先覚性】の範疇に入らなくとも、そう、筆者の謬見によるところでも、「はきと」問題になる「他の」ことが存在することに相違はない)。

たる地獄中枢地点が the point To which things heavy draw from every side [あらゆる方向から物の重さが引きつけんとする地点] である]と描写されていることである)——)。

そうした一事をとってからして[際立つての先覚性]が現われていると述べても決して言い過ぎにならない。

端的に述べれば、重力というものが

【引力(質量に起因するところとしてあまねくも働く物と物とが引き合う力)と遠心力(地球の回転に伴う慣性の力)の合力】
【物質(の質量あるいはエネルギー)による時空の歪みに起因する力】

であるとの[科学的説明]がなされるように「後の世にあって」なったところをダテが『地獄篇』にて地獄中枢(たる地球中心)をして

【重さ(質量)「が」(周囲を)引きずる力が等しくも働く中心的ポイント】

と描写しているとのことからして先覚性との意で際立っていると解されるようになってもいる。

またもってして、ブラックホールというものの存在が20世紀になってより問題視されだしたとのその初期、[重力の中核たる凍った世界]であると表されてもいた(ことも問題と見える)。それにつき、英文 Wikipedia [Black hole] 項目にあってからして現行、以下のような記載がなされているところとなっている。

(直下、英文 Wikipedia [Black hole] 項目にあっての History (理論史) の節に認められる現行にての記載内容よりの引用をなすとして)

Oppenheimer and his co-authors interpreted the singularity at the boundary of the Schwarzschild radius as indicating that this was the boundary of a bubble in which time stopped. This is a valid point of view for external observers, but not for infalling observers. Because of this property, the collapsed stars were called "frozen stars", because an outside observer would see the surface of the star frozen in time at the instant where its collapse takes it inside the Schwarzschild radius.

(入念に補いもしての拙訳として)

「オッペンハイマー (訳注: 重力崩壊に対する理論を煮詰めもしてブラックホール理論の旗手ともなっていたかのマンハッタン計画の主導者ロバート・オッペンハイマー) および彼の共著者ら —— (訳注: 文脈上、Tolman-Oppenheimer-Volkoff limit こと[トルマン・オッペンハイマー・ヴォルコフ境界]という星の重力崩壊の区切り点にまつわる理論を提唱したオッペンハイマーの理論展開にあたっての論稿共著者ら) —— は

【[シュヴァルツシルト半径] (訳注: 本稿にての **出典(Source) 紹介の部 65(3)** でも解説しているように物体がその半径内に押し込まれるとブラックホールができあがるとの円形領域の半径で思索対象となる物体の[質量]によってそちら[半径]が変動するとのもの) の境界面にあっての特異点 (訳注: そこを越えると従来の法則が成り立たなくなり際限なくもの重力崩壊プロセスが進むとのポイント)]

をして

【これは「時間」が停止を見る泡の境界を示しているのであろう】

と解釈していた。

こうした見方は外側の観測者ら(訳注:ブラックホールの外側の観測者ら)にとっては適正なる見方だが、ブラックホールに落ちこむ観測者らから見れば、適正なる見方ではない。

こうした属性がゆえに、[縮退星](訳注: collapsed star はブラックホールという言葉が生み出される前にブラックホールを指して用いられていたところの一呼称である)は

[frozen stars; フローズン・スターズ(凍り付いた恒星)]

とも呼ばれていた、というのも外側の観察者はその星がシュヴァルツシルト半径の内側へ向けて崩壊していくまさにその場、その瞬間を[凍り付いた恒星の外側]とのかたちで見るからである(訳注:ここにての[frozen stars]との呼称についての解説については引用元とした英文Wikipedia[Black hole]項目にて現行は Ruffini, R.; Wheeler, J. A. (1971). "Introducing the black hole". *Physics Today* 24 (1): 30–41.との出典が紹介されている。そちら出典表記に見る Wheeler, J. A.ことジョン・アーチボルト・ホイーラーはブラックホールとの呼称を生み出した著名物理学者のことを指す)

(補つてもの訳を付しての引用部はここまでとする)

表記のウィキペディアからの引用部(「たかが、」ものウィキペディアともされようものだが、上の記述に関しては正鵠を射ているとのこと、容易に確認できるところの部位)に見るように

「外側からの観察者が見た場合には[時が凍り付く]が如く様相を呈するために初期、(内側の存在は凍ったようなものの中で即時粉砕されてもいる)ブラックホールは[フローズン・スター](凍り付いた恒星)との呼び名を与えられていたとのことがある」

一方でのこととして

「ダンテ『地獄篇』では地獄の中樞が[重力の中樞ポイント]にして[生者]から見た[死者]が永遠に粉砕され続けているとの[氷地獄]の中心地点となっている」

とのことがあるわけである。

そうしたところひとつとって論じたうえでも

[古典(『地獄篇』)内容と今日的な理解で見たブラックホールの間
に[アナロジー(類似性)]を認める見方]

に無理がないとのこと、お分かりいただけるか、とは思う(：そして、問題なのは、そうした[類似性]が「他にも」横たわっているとのことがあり、そして、そこに相応の意図性も「多重的に」伴っていると指摘できてしまえるようになっていく(なっている)ことである)。

(加えての表記はここまでとする)

直上、要約のうえ、再掲なしたとの関係性について、そう、

[ダンテ『地獄篇』が[「他」古典(ジョン・ミルトン『失樂園』)と質的につながる箇所]と

双方共に合わさって [今日的な観点で見たブラックホール類似の存在] を指し示すところとなっている]

との関係性については、と同時に、

[ヘラクレスの12の功業] (内、[11番目の功業] は本稿の **出典(Source)紹介の部 35** から **出典(Source)紹介の部 36(3)** を包摂する解説部で指し示しをなしてきたところに見るように加速器 LHC との直接的つながりあいがある [黄金の林檎] と [巨人アトラス] が登場してくる功業となる)

との「濃厚なる」接合を観念できるとの「とも」になっている。

その点について、[ヘラクレス12功業] というものの意味合いを重視しつつ、以降、取り上げていくこととする(※)。

(※本稿を公開しているサイトの一にて従前より試験的に公開していたとの PDF 化しての論稿、

『911 の儀式性詳説 起こりうべき災厄の予測』

でも細かくも論じていることであるが、ここでは出典紹介を第一義にしなが、また、さらに進んで何が問題になるのかの入念なる解説をなすこととする)

それでは以降、

[ダンテ『地獄篇』と [ヘラクレスの12功業]]

の間の関係性について[1]から[5]の側面で典拠紹介および問題性摘示を入念にしつつもの解説を講じていくこととする。

(ここより長大な本論稿にての **補説 3** と振っての本段、その前半部の核をなすところとしての [1] から [5] の指し示しを以下、(少なからず紙幅を割いて)、なしていくこととする)

[1]

ダンテ『地獄篇』とは階層構造をとる地獄を下へ下へ、地球の中枢に下っていくとの物語である。その過程で

[ダンテおよびその同道者(ダンテが師父と慕うローマ期詩人ヴェルギウスの霊のことである)が「他の助力を受けて」「急降下する」とのプロセス]

が計二回ほど、発生している。

地獄の第7層から第8層にての移動 — 断崖絶壁よりの降下 — に際しての[ゲーリュオン]という助力を受けた(飛行可能な怪物ゲーリュオンの背に乗って弧を描きながら断崖を降下した)との下り、そして、地獄の第8層から第9層の移動 — 地球の中枢(重力の中枢)に向かう穴への降下 — に際しての[アンタイオス]という巨人の助力を受けた(巨人アンタイオスに担がれていけばもの肉体エレベーターにて最下層に降り立った)との下りがそうである(直下にて呈示の **出典(Source)紹介の部 90**

を参照のこと)。

その点、[計9層よりなる地獄]にあっての下部領域への踏破行にて

[第7層→第8層の断崖降下手法:怪物ゲーリュオンに「おぶわれて」の降下]

[第8層→第9層の地球中心に向かう穴にての降下手法:巨人アンタイオスに「おぶわれて」の降下]

とのことが現出を見ているわけであるが、それは次のように言い換えることもできる。

[第7層→第8層の断崖降下手法:[ヘラクレスの第10番目の功業にて誅された怪物]におぶわれての降下]

[第8層→第9層の地球中心に向かう穴にての降下手法:[ヘラクレスの第11番目(別バージョンでは第10番目)の功業の合間にて誅された怪物]におぶわれての降下]

ダンテとダンテに師父と慕われるヴェルギリウスをその背に乗せての断崖急降下なした(第7層から第8層に向けて急降下なした)怪物ゲーリュオンという存在がギリシャ神話上、「ヘラクレスの第10番目」の功業にて(目立って)誅伐されたとの存在となっており、また、同様にダンテとヴェルギリウスを担いで彼らを地獄の最下層(第9層)といざなった巨人アンタイオスが「ヘラクレスの第11番目」(伝承のバージョンによっては第10番目)の功業にて(目立って)誅伐されたとの存在となっているため、上の通りの言い換えが「純・記号論的に」なせるようになっているのである。

出典(Source)紹介の部 90

SOULS 90



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典(Source)紹介の部 90 にあつては、

[ギリシャ神話ではゲーリュオンがヘラクレスの 10 番目の功業にて誅伐された存在であるとされ、他面、ダンテ『地獄篇』では地獄での第 7 層から第 8 層への急降下を実現させしめた怪物であるとされていること]

[アンタイオスがヘラクレスの 11 番目の功業にて誅伐された存在であり、他面、ダンテ『地獄篇』では地獄での急降下を実現させしめた怪物であること]

の典拠を多少細かくも紹介しておくこととする。

まずもつて、

[ギリシャ神話ではゲーリュオンがヘラクレスの 10 番目の功業にて誅伐された存在であるとされ、他面、ダンテ『地獄篇』では地獄での第 7 層から第 8 層への急降下を実現させしめた怪物であるとされていること]

の典拠を紹介することとする。

(直下、誰でもオンライン上にて即時に確認できる場所として英文 Wikipedia[Geryon]項目より抜粋をなすとして)

In the fullest account in the Bibliotheca of Pseudo-Apollodorus, Heracles was required to travel to Erytheia, **in order to obtain the Cattle of Geryon as his tenth labour**. [. . .] On hearing the commotion, Geryon sprang into action, carrying three shields, three spears, and wearing three helmets. **He pursued Heracles at the River Anthemus but fell victim to an arrow that had been dipped in the venomous blood of the Lernaean Hydra, shot so forcefully by Heracles that it pierced Geryon's forehead,"**

「アポドーロスのビブリオテケー（訳注：本稿の先の段にてもそこからの原文引用をなしてきいたとのローマ期のギリシャ神話網羅的解説文書）の網羅的説明にてはヘラクレスは彼の 10 番目の功業にてゲーリュオンの家畜を取得するためにエウリュテイオンに向けて旅することを要求された。…(中略)…騒動の音を聞きつけ、ゲーリュオンは三つの楯と三つの槍を持ち、三つの兜をかぶり跳ね上がり行動に打って出た（訳注：伝承ではゲーリュオンは三面六臂の存在であるため、三つの兜・楯・槍で武装できたとのことになっている）。彼ゲーリュオンはアンティムス川までヘラクレスを追い詰め、しかし、ヘラクレスが強くも射かけたために頭部を貫通することになったとのヒドラの毒の矢の犠牲になった(以下略)」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

直上、ウィキペディア（「たかだかもウィキペディア。」とアカデミックな場では軽侮される媒体だが、英語圏のそれに関しては著名古典や著名伝承にあつての文献的事実としての筋立ての紹介には錯簡・誤記はあまり介在していないとのトレンドを呈しているとの媒体）の記述を引いが、同じくものことについては、加えもして、『ビブリオテケー』（アポドーロス、ローマ期ギリシャ人著述家によるギリシャ神話要覧書）、その岩波書店より出されている訳本たる文庫版『ギリシャ神話』よりの原文引用も —（当方所持の文庫版第 61 刷のもの、その第 2 巻 V の部よりの原文引用）— あわせてなしておくこととする。

「第十の仕事としてゲーリュオネースの牛をエリュティアから持って来ることを命ぜられた。エリュティアはオーケアノスの近くの、今ではガディラと呼ばれている島であった。この島にクリューサーオールとオーケアノスの娘カリロエーと子ゲーリュオネースが住んでいた。彼は三人の男の身体が腹で一つになっていて、脇腹と太腿からは三つに分れた身体を持っていた。彼は紅い牛を持っていて、その牛飼はエウリュティオン、番犬はエキドナとテューポーンから生まれた双頭の犬オルトスであった。そこで、ゲーリュオネースの牛を目ざしてヨウロッパを通過して多くの野獣を殺し、リビアに足を踏み入れ、タルテーススに來り、旅の記念としてヨウロッパとリビアの山上に向かい合って二つの柱を建てた。その旅の間に太陽神(ヘーリオス)に照りつけられたので、神にむかって弓を引きしぼった。神は彼の剛気に感嘆して、黄金の盃を与え、彼はこれに乗ってオーケアノスを渡った。そしてエリュティアに至って、アバース山中に宿った。犬が彼を認めて突進して來た。しかし彼はこれを棍棒で打ち、犬を助けに來た牛飼のエウリュティオンをも殺した。しかしそこで地獄王(ハーデース)の牛を飼っていたメノイテースが事件をゲーリュオネースに告げた。彼はアンテムース河畔に牛を追い去りつつあるヘーラクレースに追いつき、戦いを交え、射られて死んだ。ヘーラクレースは牛を盃に乗せ、タルテーススに渡航し、太陽神(ヘーリオース)に盃をかえした」

(引用部はここまでとする —※—)

(※尚、ここにて引用なししているとの岩波文庫版アポロドーロス『ギリシャ神話』p.97-p.98には[旅の記念としてヨウロッパとリビアの山上に向かい合って二つの柱を建てた]と記されているが、それがジブラルタル海峡の比喩的象徴物として知られるヘラクレースの柱のこととなる。その[ヘラクレースの柱]は(後述するが)ダンテ『地獄篇』内容にも関わってくるものとなる)

(さらに直下、オンライン上にて即時に確認できるところとしての英文 Wikipedia[Inferno]項目——『地獄篇』項目——の現行にての関連部記載内容より抜粋をなすとして)

The last two circles of Hell punish sins that involve conscious fraud or treachery. **These circles can be reached only by descending a vast cliff, which Dante and Virgil do on the back of Geryon, a winged monster traditionally represented as having three heads or three conjoined bodies. However, Dante describes Geryon as having three mixed natures: human, bestial, and reptilian. Dante's Geryon is an image of fraud, having the face of an honest man on the body of a beautifully colored wyvern, with the furry paws of a lion and a poisonous sting in the pointy scorpion-like tail** (Canto XVII).

(文法的に雅文調で曖昧としたところをより明確にしつつ、なおかつ、不足部を補うとのかたちで訳すとして)

「(ダンテ『地獄篇』にて描写される地獄にあつては)地獄の最後の二つの圏——『地獄篇』地獄が9圏にて構成されているなかでの第8層と第9層をなす領域——は[意識的詐欺]と[裏切り]を含む罪を罰するとのものであった。それら地獄の最後の二つの圏へは[伝統的には三つの頭と三つの身体を持つ姿で表されるが翼ある怪物として描写されてのゲーリュオン]の背に乗って[広

大な断崖]を降下することによってのみダンテおよびヴェルギリウスが到達しな
えたとのものであった。ゲーリュオンという存在は伝統的に三つの頭、三つの
身体を持つ姿で伝統的に表される存在ながらも、ダンテは「ゲーリュオン」をし
て三つの側面の混合した存在、「色鮮やかな色彩を呈するワイバーン(翼竜)
のそれに恐ろしげなライオンの前脚、そして、毒針めかした針を備えての蠍の
尾のような尾を伴っての胴体の上に正直然として男の顔をいただいで「人
間」・「裏切り(者としての唾棄すべき特性)」・「爬虫類」の三つの側面の混合し
た存在]として描いていた(第17歌)」

(訳を付しての引用部はここまでとする 一※一)

(※同引用部では地獄の第8圏および第9圏とそうではない領域の垣根に広
大な断崖が存在しており、その難所を通過するために、ダンテとヴェルギリウス
がゲーリュオン——直近にて誰でも確認可能なウィキペディアの(メジャー
な)神話解説部より引いた通り、ヘラクレスの10番目の功業にて誅伐された三
面六臂の怪物——の背におぶさられて移動したこと、すなわち、第7圏から
第8圏への降下へゲーリュオンの助力を受けたことが表記されているわけ
である。尚、オンライン上にて公開されているダンテ『地獄篇』の英語近代訳の
テキストを抜粋することに代えてここではたかだかウィキペディア程度の媒体よ
り引用をなすことにしたのだが、それは英文ウィキペディアの当該表記に誤り
がないとのことを確認してのうえで(通貫しての物語となっており、部分的にそ
こよりの引用をなしても内容把握しがたいとの英訳『地獄篇』よりの引用をなす
よりも)英文ウィキペディア程度のものよりの引用をなした方が理解に資するか、
との筆者なりの判断があったことによる)

次いで、

**[アンタイオスがヘラクレスの11番目の功業にて誅伐された存在であり、他面、ダンテ
『地獄篇』では地獄での急降下を実現させしめた怪物であること]**

の出典を挙げることとする。

(直下、誰でもオンライン上にて即時に確認できるところとして英文 Wikipedia[Antaeus]項目
より抜粋をなすとして)

Antaeus had defeated most of his opponents until it came to his fight with
Heracles (who was on his way to the Garden of Hesperides for his 11th
Labour). Upon finding that he could not beat Antaeus by throwing him to the
ground as he would rehaul due to his parentage (Gaia), Heracles discovered the
secret of his power. Holding Antaeus aloft, Heracles crushed him in a bearhug.

(訳として)

**「アンタイオスは[第11番目の功業]にてヘスペリデスの園(黄金の林檎の園)
に向かう途上にあつたヘラクレスと闘うことになるまでは大多数の敵対者を敗
北させてきた。その親となる存在(ガイア神)の加護によって大地に投げつけら
れた際にアンタイオスが治癒・回復を見ていることを見だし、ヘラクレスは彼
(アンタイオス)の強さの秘密を発見した。(そこでヘラクレスは)アンタイオスを
中空に持ち上げ、羽交い締めにしたうえでアンタイオスの身体を打ち砕いた」**

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上と同じくものことについては『ビブリオテケー』（ローマ期成立のギリシャ神話要覧書）、その岩波書店より出されている訳本たる文庫版『ギリシャ神話』よりの引用 —(当方所持の文庫版第 61 刷のもの、その第 2 巻 V の部よりの原文引用)— も直下なしておくこととする。

(直下、岩波文庫版アポロドーロス『ギリシャ神話』p.99 から p.100、ヘラクレスが黄金の林檎探索の過程でリビアに立ち寄ったとの部よりの原文引用をなすとして)

「第一一番目の仕事としてヘスペリスたちから黄金の林檎を持って来るように命じた。これは一部の人々の言うようにリビアにあるのではなく、ヒュペルボレアス人の国の中のアトラスの上にあったのである。それを大地(ゲー)がヘーラーと結婚したゼウスに与えたのである。テューポーンとエキドナから生まれた不死の百頭竜がその番をしていた。それとともにヘスペリスたち、すわなちアイグレー、エリュテイア、ヘスペリアー、アレトウーサが番をしていた。

…(中略)…

イリュリアーを徒歩で通って、エーリダノス河へと急ぎ、ゼウスとテミスとの間に生まれたニムフたちの所に来た。彼女らは彼にネーレウスを教えた。ヘーラクレスは眠っているところを捕え、あらゆる姿に変身するネーレウスを縛り、どこに林檎とヘスペリスたちがいるかを彼から教わるまで放さなかった。教わってから彼はリビアを通り過ぎた。この地の王はポセイドーンの子アンタイオスであつて、彼は異邦人を強いて相撲(すま)わしめては殺していた。ヘーラクレスは彼と相撲することを強いられたので、しっかりと両腕で抱えて高々と差上げ、粉砕して殺した。というのは彼は大地に触れると一層強くなったからである。それだから一部の人々は彼は大地の子であると主張したのである」

(引用部はここまでとする)

以上のようにアンタイオスは
[ヘラクレス 11 番目の功業の折に殺傷された存在]
として伝存しているわけだが、同アンタイオスがダンテ『地獄篇』にて[地獄第 8 圏から第 9 圏(最下層)への降下]の介添え役として登場を見ていることの典拠を挙げておくこととする。

(直下、オンライン上より確認できるところとしての英文 Wikipedia[Inferno]項目より該当部のみを抜粋するとして)

The giant Antaeus (being the only giant unbound with chains) lowers Dante and Virgil into the pit that forms the ninth circle of Hell (Canto XXXI).

(訳として)

「巨人アンタイオス(最下層間際にて捕らわれている巨人らの中で鎖につながれいなかった唯一の巨人)は地獄の第 9 圏をなす穴へとダンテとヴェルギリウスを引き下ろした(第 31 歌)」

(訳を付しての引用部はここまでとする／Inferno 本体よりの引用に代えてたかだかウィキペディア程度のものよりの引用に留めた理由は上にての「ダンテ『地獄篇』に登場する」ゲーリュオンにまつわる引用部にて申し述べていることと同文となる)



Geryon



Antaeus

画家ギュスターブ・ドレが近代刊行版ダンテ『神曲；地獄篇』に提供していた挿絵 — 日本でも某有名漫画家にインスピレーションを与えたなどとの伝で知られる一群の挿絵 — の中であって[ゲーリュオン]および[アンタイオス]を描いているとのものを挙げた。画に付してのキャプションの部、そして、ここに至るまでの解説内容から述べるまでもないことか、とは思うが、上の段に挙げてのそれがダンテとヴェルギリウスを背におぶって下層階に降下するところのゲーリュオン — (先述のようにギリシャ神話では[三面六臂の存在]であるところが地獄篇では[色鮮やかな色彩を呈するワイバーン(翼竜)のそれに恐ろしげなライオンの前脚、そして、毒針めかした針を備えての蠍の尾のような尾を伴っての胴体の上に正直然として男の顔をいただいで][人間]・[裏切り(者としての唾棄すべき特性)]・[爬虫類]の三つの側面の混合した存在]へと改変されているとのゲーリュオン) — の似姿となり、下の段に挙げてのそれがダンテとヴェルギリウスをおぶって地獄の最下層に到達なさしめた肉体エレベーターとでも述べるべき巨人アンタイオスの似姿となる。

(出典(Source)紹介の部 90) はここまでとする)

[2]

ダンテ『地獄篇』に登場するルシファーは

[地獄の第9圏に半身氷付けになって幽閉され、人類史、最も著名な裏切り者ら — [イエスを売ったイスカリオテのユダ] [シーザー(ユリウス・カエサル)を裏切って謀殺したマルクス・ユニウス・ブルータス] [同じくもシーザーを裏切って謀殺したガイウス・カッシウス・ロンギヌス] の計3名 — を「三つある」顔の「三つある」口にて噛み砕いているとの三面の存在]

として描かれている (: 重力が向かう先、[裏切り者の地獄] たる [コキュートス] にあって最も罪深い者達が幽閉される [ジュデッカ] でそういう格好のルシファーが「永劫に」人類史にあっての三大裏切り者を噛み砕き続けているとのシュールな描写がなされている)。

さて、

[[ヘラクレスの10番目の冒険にて誅伐された怪物;ゲーリュオン] によって7番目から8番目の階層への降下]

[[ヘラクレスの11番目の冒険にて(その途上)誅伐された怪物;アンタイオス] によって8番目から9番目の階層へと降下]

がなされて(出典(Source)紹介の部 90)、ダンテらに訪問された地獄の最下層(第9層)に囚われているのが

[三面構造の存在(ルシファー)]

となっているとのことで述べれば、

[ヘラクレス 12 番目の冒険にて捕縛対象となった「三つの顔を持つ」地獄の犬ケルベロス]

のことが想起されもするところである。

そも述べる理由 —地獄篇のルシファーがケルベロスに通ずるとのことになっていると述べるところの理由— は複層的に存在しているのだが(それら[各]理由については遺漏なくもこれよりの段で指し示していく)、まずもってはそこより問題になるのは [ヘラクレス功業の順序順番] との観点、くどくも繰り返しての表記をなすが、

「ダンテとダンテがその師父と慕うヴェルギリウスらが地獄巡りの後半部にて [ヘラクレス 10 番目の冒険にてヘラクレス相手方となった怪物] (既述のゲーリュオン)・[ヘラクレス 11 番目の冒険にてヘラクレス相手方となった巨人] (既述のアンタイオス)らに順次段階的に最下層領域へ向けていざなわれている — 直上の部にて言及のようにゲーリュオンにおぶられての第 7 層から第 8 層への降下、次いで、アンタイオスにおぶられての第 8 層から第 9 層(最下層)への降下とのかたちで最下層領域へ向けて順次段階的にいざなわれている— とのその先に控えるのは [ヘラクレス 12 番目の冒険にてヘラクレス相手方となった怪物] であるべきではないか、との予断じみた観点が生じもするとのことがあり、といった中でヘラクレス 12 番目の冒険にて相手となったのが三面構造のケルベロスとなっているのに対して地獄篇のルシファーがお詔(あつら)えむきに三面構造になっている、そう、アンタイオスにいざなわれての先(地獄最下層)に控えるのが同文に「三面構造の」ルシファーとなっているとのこと(古典にまつわる[文献的事実]の問題として)そこにある」

との観点があるがゆえに、

「地獄最下層第 9 圏内の「三面構造の」ルシファーと「三面構造の」ケルベロスの関係性」が想起されもする。

これよりは

ダンテらが [ヘラクレスが第 10 功業にて殺害した存在] (ゲーリュオン) および [ヘラクレスが第 11 功業にて殺害した存在] (アンタイオス) におぶわれて漸次降下していった先にあつての地獄の最下層にあつて控えるのが

[三面構造の存在としてのルシファー]

となっているとのことがある、そのことに関して、

[ヘラクレスの「12 番目の功業」にて捕縛対象となった「三つの顔を持つ」地獄の犬ケルベロス]

のことが(「事前経緯より」)想起される

とのことについての細やかなる典拠を挙げることとする。

SOURCE

90(2)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典(Source)紹介の部90(2)にあつては、

[ダンテらが「ヘラクレスが第10功業にて殺害した存在」(ゲーリュオン) および「ヘラクレスが第11功業にて殺害した存在」(アンタイオス) におぶわれて漸次降下していった先にあつての地獄の最下層にあつて控えるのが「三面構造の存在としてのルシファー」となっているとこのことがあり、他面、ヘラクレスの「12番目の功業」にて捕縛対象となりもしているのが「三つの顔を持つ」地獄の犬ケルベロス] であるとのことがある]

このことの典拠を挙げることにする。

につき、まずもつては、ダンテ『地獄篇』のルシファーが「三面構造を呈する」、より具体的には、

[古典『地獄篇』にあつては重力の本源たる中枢地点、「裏切り者の地獄」たる「コキュートス」にあつて最も罪深い者達が幽閉される「ジュデッカ」と呼ばれる領域で「三面構造の」ルシファーが人類史にあつての三大裏切り者ら(イスカリオテのユダ、マルクス・ユニウス・ブルータス、ガイウス・ロンギヌス・カッシウスの三名)を永劫に噛み砕いているとの描写がなされている]

このことの典拠紹介をなすことよりはじめることにする。

(直下、オンライン上にて即時に確認できるところの英文 Wikipedia [Inferno (Dante)] 項目よ

In the very centre of Hell, condemned for committing the ultimate sin (personal treachery against God), is Satan. **Satan is described as a giant, terrifying beast with three faces, one red, one black, and one a pale yellow:**
he had three faces: one in front bloodred;
and then another two that, just above
the midpoint of each shoulder, joined the first;
and at the crown, all three were reattached;
the right looked somewhat yellow, somewhat white;
the left in its appearance was like those
who come from where the Nile, descending, flows.

(訳として)

「まさしくもの地獄の中心部にて[神に対する私的動機に基づく裏切り]との究極の罪過を責められていたのはサタン(訳注:ダンテ『地獄篇』それ自体での表記はルシファーないシルチフェロ)である。 **サタンは「赤」「黒」「淡い黄色」の三つの面を持った巨大で恐ろしき獣として描写される。**すなわち、(『地獄篇』本体の記述として)

[彼は三つの顔を持っている／一つは中央の血を帯びた赤色を呈し、他の二つの顔、各々の肩の中間部のちょうど上にあり、第一の顔と結合していた／頭頂部でそれら三面は再結合を呈していた／右側の顔は幾分黄色、幾分白色を呈する、左側の顔はその外観にてナイル側がその下流へと流れていくところよりやってくる人々の色のような色]との記載がなされている」

(訳を付しての引用部はここまでする。尚、上にて紹介のルシファー(あるいはサタン)に関する英文ウィキペディア内の『地獄篇』引用文の引用元は Inferno, Canto XXXIV, lines 39-45, Mandelbaum translation と明記されての英訳版(1982年に Allen Mandelbaum という米国イタリア文学者の手になる英訳版)となる)

(続いて直下、オンライン上にて即時に確認出来るところの英文 Wikipedia[Dante's Satan] 項目、その冒頭部よりの原文抜粋をなすとして)

In Dante's Inferno, Satan is portrayed as a giant demon, frozen mid-breast in ice at the center of Hell. Satan has three faces and affixed under each chin are pairs of bat-like wings. As Satan beats his wings, he creates a cold wind which continues to freeze the ice surrounding him, and the other sinners in the Ninth Circle. The winds he creates are felt throughout the other circles of Hell. **Each of his three mouths chews on Judas, Brutus, and Cassius.**

(訳として)

「ダンテの『地獄篇』にてサタンは地獄の中枢にて胸半ばまで凍り付いた巨大な悪魔として描かれる。サタンは三つの顔を持ち、各々の顎の下にて結合状態を呈しているとのそのありように蝙蝠のような翼らが一對見てとれる。サタンがその翼を打ち鳴らすとき、その周辺に存在する氷および第9圏に存在する囚人らを引き続き凍りづけにすると冷風を発生させている。サタンが造り出した風らは地獄の他の階層すべてを通じて知覚される(との設定の)ものである。 **サタンの三つの口はそれぞれユダ、ブルータス、カッシウスらを噛み砕き続けている**」

※以上、オンライン上より難なくも即時確認できるとの英文ソースを抜粋したが、「それだけでは不十分である」
と述べる向きもいるかもしれないので(筆者は自身が[文献的事実]であると把握するところ以外、文言を引用しないようにしているのだが、思料すべきところとして先述のように易変性を伴い編者の錯簡・誤記が混入しやすいとのウィキペディア程度の媒体よりの引用は大学教育のレベルでさえ歓迎されないとの風潮があるからである)、オンライン上の青空文庫プロジェクト(著作権の切れた著作を公開しているとのプロジェクト)にてもその内容が確認できるとの山川丙三郎訳の『地獄篇』邦訳版、その第34曲の部より[上にて引用した部位に対応する部]も一応、原文引用なしておくこととする。

(直下、岩波文庫より出されている山川丙三郎の手になる神曲 —地獄— 上』
第34曲の部より原文引用するところとして)

我その頭に三の顔あるを見るにおよびてげに驚けることいかばかり
ぞや、一は前にありて赤く
残る二は左右の肩の正中(たゞなか)の上にてこれと連なり、かつ三
ともに冠(とさか)あるところにて合へり
右なるは白と黄の間の色の如く、左なるはニーロの水上(みなかみ)
より来る人々の如くみえき
また顔の下よりはかゝる鳥につかしき二つの大いなる翼いでたり、
げにかく大いなるものをば我未だ海の帆にも見ず
此等みな羽なくその構造つくりざま蝙蝠の翼に似たり、また彼此等を搏ち、三の風彼より起れり
コチートの悉く凍れるもこれによりてなりき、彼は六の眼まなこにて泣き、涙と血の涎よだれとは三の頤(おとがひ)をつたひて滴したゝれり
また口毎にひとりの罪人を齒にて碎くこと碎麻機(あさほぐし)の如く、かくしてみたりの者をなやめき
わけて前なる者は爪にかけられ、その背しばしば皮なきにいたれり、これにくらぶれば噛まるゝは物の數ならじ
師曰ふ、高くかしこにありてその罰最も重き魂はジユダ・スカリオット
なり、彼頭を内にし脛を外に振る
頭さがれるふたりのうち、黒き顔より垂るゝはプルートなり、そのもがきて
言ことばなきを見よ
また身いちじるしく肥ゆとみゆるはカッシオなり、されど夜はまた來れり、
我等すでにすべてのものを見ればいざゆかん

(引用部はここまでとする)

尚、上の大正期文語調の部を現代文調になおせば

「ルチフェロの持つ三面を見るだに驚かされること、筆舌に尽くしがたいところであった。(ルチフェロ)前方の顔は赤色を呈しており、残る二つは肩の部にあつて肩の上にて真正面のものと結合しており、三つの顔は頭頂部を共有している。右側の顔は白と黄色の中間色を呈し、左の顔はナイル川(ニーロ)の上流よりやってくる人らのような色を呈している。また顔面部の下には

鳥に似た巨大な翼が生えており、そうした巨大なものを海にあっての帆船の帆としても私は目にしたことがない(ほどに巨大なものである)。これらの翼は羽がなく、構造からして蝙蝠の翼に近く、また、それが揺らされることで、ルチフェロより風が発生している。コキュートス(コチート)がことごとく凍結しているのもその風に由来し、ルシファーは三つの顔面の六つの目でもって泣き、涙と血と涎が三つの顎をつたって滴りおちている。また各々の口で罪人を歯で麻ほぐし機のように粉碎し、そのために、各々の口で粉碎されている三人の者達は憂愁の憂き目に遭っている。それを見、師ヴェルギウスは口を開き、
「最も高いところに位置しているとの顔で噛み砕かれているのは
イスカリオテのユダであり、彼は頭を顎の中に入れられ、その脛(すね)の方を外でばたつかせている。頭が口より外側の下に出
ている者らについては、黒い顔より垂れ下がっている方がブ
ルートウスであり、そのものがくばかりで言葉を発しないとのありさま
に見てみるといい。また、体格が甚だしく肥満状態にあるのが
カッシウスである。さあ、もう夜が来た。見るべきものは見たので
先に進もう
と述べた」

と変換できる)

次いで、

[三面構造のケルベロスがヘラクレス 12 番目の功業にての捕縛対象となっていること]

についての典拠紹介をなしておくこととする。

(直下、ローマ期ギリシャ人著述家アポロドーロスによる『ビブリオテーケー』の岩波書店より出されている訳本たる文庫版『ギリシャ神話』よりのワンセンテンスのみの引用 —(当方所持の文庫版第 61 刷のもの、その第 2 巻 V の部 p.102 よりの原文引用)— をなすとして)

「第十二番目の仕事として地獄からケルベロスを持って来ることを命ぜられた。これは三つの犬の頭、竜の尾を持ち、背にはあらゆる種類の蛇の頭を持って
いた」

(引用部はここまでとする)

また、オンライン上より即時に確認できるところの媒体、ウィキペディア程度の媒体よりの引用をも一応、なしておくこととする。

(直下、英語版 Wikipedia [Cerberus] 項目にての「現行」記載内容よりの引用をなすとして)

Capturing Cerberus, without using weapons, was the final labour assigned to Heracles (Hercules) by King Eurystheus, in recompense for the killing of his own children by Megara after he was driven insane by Hera, and therefore was the most dangerous and difficult.

「ケルベロスを何ら武器用いることなしに捕縛すること、それこそが(ヘラ神によって狂気にかられたヘラクレスが彼自身とメガラーの間に出来た子らを殺害したがために(神託にて)対価として求められてのものとしての)[エウリュステウス王よりヘラクレス(ハーキュリーズ)に申し渡された最後の功業](12番目の功業)となっており、それがゆえに、同功業、最も危険かつ困難なるものであった」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上のようにケルベロス——三面の冥府の番犬——の捕縛がその数、計にして12に及ぶことになったとのヘラクレスの最後の功業となっている。

(:尚、ここでは三面構造のルシファーと三面構造のケルベロスの類似性に注意を向けたいので典拠紹介をなしているわけだが、ダンテ『地獄篇』には[地獄の最下層に控えるルシファー]とは[別個の存在]として[ケルベロス]が罪人の拷問に使役される存在として地獄の浅い階層に登場させられているとのある(のでそちらにまつわる言及も当然になしておく)。

すなわち、[地獄の第3圏;貪食者の地獄]、キリスト教的罪障観にあつての[七つの大罪]のうちの一つ[貪食](グラトニー／度を過ぎての暴飲暴食に耽ったとの罪)にてのその地獄にて貪食に起因する墮地獄の者達をケルベロスが見張り、何なれば、切り裂くとの描写が『地獄篇』にて見受けられるとのある。

については英文 Wikipedia [Inferno (Dante)] 項目にて

“The “great worm” Cerberus guards the gluttons, who are forced to lie in a vile slush produced by ceaseless foul, icy rain.” 「巨大な芋虫(グレート・ワーム)状のケルベロスが[汚濁し、そして、氷のように冷たいとのやむことなき雨にてかたちづくられての不快感ぬかるみ]の中に横たわることを強いられている暴食の咎人らを見張っている」

と記載されているところがそうである。

また、同じくもの部位の「邦訳」されての『神曲:地獄篇』についての記述も挙げておく。

大正期文語調にて極めて読みにくいものなれど、オンライン上の青空文庫プロジェクト(著作権の切れた著作を公開しているとのプロジェクト)にてもその内容が確認できるとの山川丙三郎訳の『地獄篇』邦訳版では[第三圏の地獄にてのケルベロス登場の下り]にあつては

(そこよりの中略なしながらの原文引用をなすとして)

“我は第三の獄(ひとや)にあり…(中略)…大粒の雹(ひょう)、濁れる水、および夢はくらやみの空よりふりしきり、地はこれをうけて悪臭(おしゅう)を放てり 猛き異様の獣チェルベロこゝに浸れる民にむかひ、その三(みつ)の喉によりて吠ゆること 犬に似たり これに紅の眼、脂ぎりて黒き髭(ひげ)、大いなる腹、爪ある手あり、このもの魂等を爬き、噛み、また裂きて片々(きりぎり)にす…(中略)…大いなる蟲(むし)チェルベロ我等を見し時、口をひらき牙をいだしぬ、その體(からだ)にはゆるがぬ處なかりき” (引用部はここまでとする)

と[ケルベロス(大正期文語ではチェルベロと表記)]が[大いなる蟲(グレート・ワーム)]として登場しているありさまが記載されている(以上は青空文庫のページからオンライン上で誰でも確認できるところだが、岩波書店より出されている文庫版『神曲 一地獄 上』(当方所持の増版重ねられての69刷版)ではp.42に全く同様の記述が認められる)——)

(これにて [三面構造をとるとの『地獄篇』ルシファー] 及び [三面構造を呈するヘラクレス
12 功業に登場するケルベロス] に関する出典紹介を終える)

視覚的訴求をなすために画家ギュスターブ・ドレ(先だっても『地獄篇』近代刊行版に用いられての同人物手仕事たる挿絵を挙げたとの著名画家)が『地獄篇』に提供していた近代挿絵よりの抜粋をなしておく。下図にあっての左上の部。地獄篇では [フォーム]としての格好を、すなわち、[巨大な蟲(むし)状の格好]をとる(英語での Larva[ラーヴァ]、芋虫系統の虫のような似姿をとる)との描写が「どういわけなのか」なされているとの『地獄篇』ケルベロス似姿を画家ギュスターブ・ドレが描いたもの。下図にての右下以下の部。『地獄篇』におけるルシファー(ルチフェロ・サタン)の似姿を画家ドレが描いたものら。分かりづらいことか、とは思うが、巨大なルシファーが三面構造呈しての存在として描かれている。

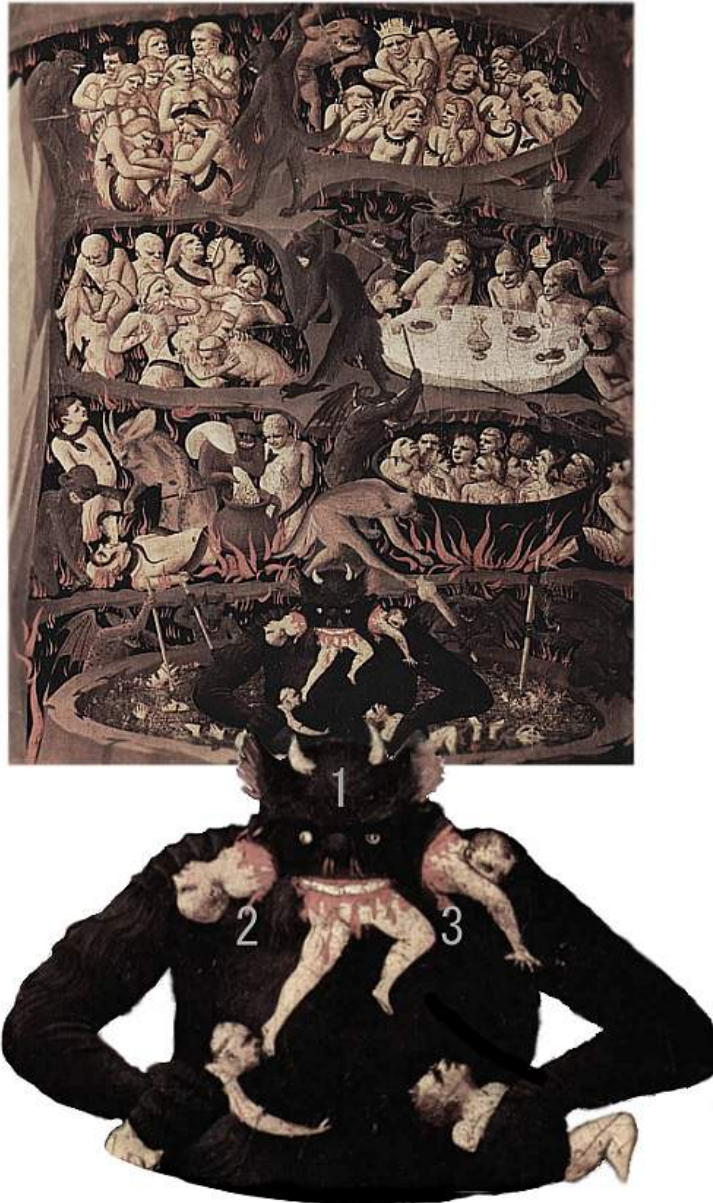


Cerberus of the third circle depicted as the "great worm"



Lucifer of the ninth circle, Cocytus

続いて初期ルネサンス期の代表的画家にして修道士でもあったとのフラ・アンジェリコの手になる『最後の審判』と画題付されての作品(そして、その表題通り、[キリスト教大系にあつての魂にあつての究極の二元論的行き先]を描いているとの作品)にあつての地獄 Hell の部を抜粋しての図を挙げる。フラ・アンジェリコがダンテ以後の人間であるがためにダンテの地獄観の踏襲があつてであろうが(Dante→Fra Angelicoとの流れがあつてであろうが)、下図にあつては地獄の最下層にて[ケルベロスのように三つの口を持つサタン]が罪人ら — 最前の引用部に認められるようにダンテ『地獄篇』では[人類の代表的裏切り者ら]としての[イエス・キリストを裏切ったイスカリオテのユダ]および[ジュリアス・シーザーを裏切ったマルクス・ブルートゥス]および[(同文にシーザーを裏切った)ガイウス・カッシウス・ロンギヌス]の三者との設定である— を噛み砕いているありようが見てとれる。



"The Last Judgment"
by Fra Angelico (c. 1395-1455)

(出典(Source)紹介の部 90(2)はここまでとする)

以上、関連図を挙げての視覚的強調をなしつつも典拠挙げてきたことについて、

『ルネサンス期ダンテ古典に見る世界観に対する [ヘラクレス 12 功業] の影響のありようなどに延々とこだわっているようだが、だから何だというのか。といった微細なこと（微細なことと判じられること）、トリヴィアにこだわるというのは浮き世離れしたそういう職掌や性癖を有した人間（プロとしての学者、アマとしての好事家）に任せていれば良いといったことであり、広く一般の人間が考える必要は「ない」ことであろう』

とここに至るまでの内容を把握されて「いない」との向きらは当然に思うところか、とも考える。しかし、「然にらず」と強調しておきたい。端的に述べれば、次の三点の事由からである。

第一。ダンテ『地獄篇』及びミルトン『地獄篇』の相互に相通ずる特性を帯びた部— [ルシファーの災厄にまつわる領域] および [地獄門(ゲイツ・オブ・ヘル)の先に関わりもする部]— にて

【現代的な観点で見てのブラックホール理解に通ずるものの描写】

が多層的に具現化を見ているとのことがある（:ダンテ『地獄篇』についてはそのことを把握したうえでであろうが、一部の著名物理学者らがブラックホールの特性について語るうえで当該古典『地獄篇』を引き合いに出してきたとの具体的経緯があることをも先述している——本稿にての先立っての部、[出典\(Source\)紹介の部 55](#)内の表記を参照のこと——）。

第二。ブラックホール生成——直上の第一の点にての内容を顧慮したうえで言い換えれば、[ダンテ『地獄篇』のルシファー領域にその[質的類似物]が認められるとのもの]の生成——の可能性が「最近になってより」取り沙汰されだした（「最近になってより」取り沙汰されだしたことにまつわる具体的経緯については本稿にての前半部、[出典\(Source\)紹介の部 1](#)から[出典\(Source\)紹介の部 3](#)を参照のこと）との CERN の LHC 実験にあっては「どういうわけなのか」「多重的に」

【ヘラクレスの 12 功業】

との結びつきが指摘できるとの側面が伴っている（:くどくも強調するところとして「多重的に」そうになっている。関連する文物らにまつわるところとして LHC 実験とヘラクレス 12 功業(なかんずく、の中の 11 番目の功業)の関係性が摘示できるようになっているとのことがあるのだが、その具体的内容については本稿にてのここに至るまでの膨大な解説を参照されればよくご理解いただけることかと思う——それにつき [多重的関係性摘示可能] との性質のことを問題視するのは [偶然性が否定され恣意性が明確化している] との中で背景(恣意の背景)に何があるのかとのことが当然に首をもたげてくるからである——)。尚、極々表層的なところでの LHC 実験とヘラクレスの第 11 功業の関係性については本稿にての[出典\(Source\)紹介の部 35](#)や[出典\(Source\)紹介の部 36\(3\)](#)を包摂する解説部などを参照されることだけでも理解が及ぶことか、と思う——といったこと、[LHC 実験とヘラクレス 12 功業の関係性] についてのこれ仔細なる指摘・指し示しをなそうとの人間はこの身、筆者を除きこの世界には存在していないようなのであるが(そも、非を鳴らして然るべきあからさまなる加速器実験発表動向にまつわる欺瞞を常識の線で裁判まで起こして非を鳴らそうとの向きすらもまたこの世界には絶無なまでにおらず、また、といった状況と表裏をなすところとして同じくものを手を替え品を替え訴求せんとしても [「相応の」機械的反応しかなさぬ要所所に配されたロボットら(最早人間とも言えないようなあらかじめ与えられたような反応しかなさないとの手合いら)] に台無しにされてしまうとの節があることも [実体験] させられているとの

ことがあるのだが)、といった指摘なす者の不在の状況であろうと、個人のせせこましい主観など問題とならずに現実的状况としてそのように指し示せるように「できあがっている」とのことは不変であると(くども)申し述べておく——)。

第三。先行する第一、第二の点の両二点を開わるところしてダンテ『地獄篇』のルシファーの座するところに至るまでの道程がヘラクレス 12 功業の寓意と密に結びついていると(すなわち本稿のここ本段にて指し示そうとしていると(くども)申し述べておく——)のであるとすれば、

[地獄篇] → [ブラックホールおよびヘラクレス 12 功業との関係性が想起される古典]

[LHC 実験] → [ブラックホールおよびヘラクレス 12 功業との関係性が想起される現実的営為]

との関係性の環の問題が観念されることになる。

そして、同じくもの [関係性の環] を別側面から補強しもする [具体的事例] が [相互に関連するところ] として極めて多数存在しているとのことがある。

直上、指し示しの背後にある問題意識の確認をなしたところで([ダンテ『地獄篇』とヘラクレス 12 功業の繋がり合い] について論ずべくも [1] から [5] と分けもして展開している中であつての) [2] と振っての部を終える。

[3]

(ダンテ『地獄篇』がヘラクレスの 12 功業と接合するとの話を続けるとして) ここでは直上の [2] だけでは未だ解説不十分であろうと見るところ、

「[ダンテ『地獄篇』最下層(地獄の最終地点)に登場するルシファー] からして [ヘラクレス 12 功業の最終目標たる冥界のケルベロス] を想起させる」

とのことについて「他」論拠となることを挙げておくこととする。

第一。

先述のように [地獄の最終階層] に向かう段階的降下は —— (先に原典としての古典そのものより抜粋なしながら解説しているように) ——

[ヘラクレス 10 番目の冒険にて誅伐された怪物]

[ヘラクレス 11 番目の冒険(の途上)にて誅伐された怪物]

によって実現を見ているとのことがある。

同じくものことに関わることとして、だが、先の部では解説をしていなかったところとして、[文献的事実の問題] (古典にそういう記載が確としてなされているとの問題) として次のようなこと「も」がある。

第 10 の冒険にてヘラクレスは

[3つの頭を持つゲーリュオン] (ダンテの地獄降下を助力した怪物として『地獄篇』にも登場し、その三面構造との点ではヘラクレス 12 番目の功業に登場するケルベロスや地獄最下層に陣取る『地獄篇』版ルシファー(ルチフェロ)と相似形をとる存在)を殺害したと伝わるが、その第 10 の冒険には他の存在も登場してきている。

まずもってゲーリュオンの島を舞台としている同第 10 功業についてはゲーリュオン配下の者としての [紅い牛(ヘラクレスの第 10 の功業の略取対象)を管理する牛飼いいエウリュティオン] という伝承上の存在が登場、牛を捕られてたまるものと強奪者ヘラクレスに反撃に出た際にそちらエウリュティオンがヘラクレスに殺害されたとされているのだが、そうしたヘラクレスの狼藉をゲーリュオンに報告した存在として「さらに」別の牛飼い、

[地獄王(ハーデース)の牛を飼っていたメノイテース]

なる存在が登場を見ているとこのことがある (:話がややこしくなっているが、ゲーリュオンの島に牛を略取するために上陸したヘラクレスが目的の紅い牛を奪う過程である牛飼いを殺し、そのことを[メノイテース]という牛飼い —ここで問題となる牛飼いがゲーリュオンに報告、ゲーリュオンがヘラクレスを退治するために出撃したところ、返り討ちに遭ったというのが第 10 番目の功業のストーリーである)。

さて、直上にて言及の牛飼い、

[第 10 番目の功業にてゲーリュオンにヘラクレスやりようを報告したハーデースの牛を飼っている牛飼いいメノイテース(Menoites ないし Menoetes)]

はヘラクレス第 12 番目の功業、[ケルベロスの地上への引き出しの功業]にて「も」登場してくる。

具体的には

[第 12 功業にてヘラクレスが地獄にて冥界の主催神ハーデースの牛 — — またもや牛である — — を殺した際にヘラクレスの狼藉をとがめるかたちでヘラクレスに相撲で挑み、脇腹を砕かれたもののペルセポネー(冥王ハデースの細君)による仲裁を受け、命をながらえたとの存在]

としてそちらメノイテースは第 10 の功業ばかりか第 12 の功業にも登場してくる (:下に古典の同じくもの部にまつわる下りよりの抜粋紹介も(出典紹介を密になすとの本稿の拠って立つ観点から)になすこととする)。

といった、

[第 10 の冒険にも第 12 の冒険にても登場する [地獄の王] の牛の牛飼いたるメノイテース]

は —これまた古典古代に由来する文献にはきと記載されている [文献的事実] の問題として—

[第 11 番目の功業の途上にてヘラクレスによって実演された巨人アンタイオスとの相撲よろしくの相撲を第 12 功業でヘラクレスと実演し、アンタイオスよろしく骨を打ち砕かれている存在]

となってもいる。

[第10の冒険 —三面のゲーリュオンを殺傷しているとの功業— にも
第12の冒険 —三面のケルベロスを引きづり出さんとしての功業— にて
も登場する[地獄の王]の牛の牛飼いたるメノイテース]

という存在は、

[第11の冒険にて相撲で敗北を見た巨人のように第12の冒険にてヘラク
レスとの相撲での勝負で敗北を見た存在]

となる(以上のことの典拠は続いての **出典(Source)紹介の部 90(3)** を参照のこと)。

ここで [10番目の功業] [11番目の功業] [12番目の功業] のすべてと通底すると
の特性を有する伝承上の存在たる [メノイテース] にあつての、

[[冥界下り] (ヘラクレス第12の功業:ケルベロスを求めてのヘラクレスの
冥界下り) および [地獄の王] と結びつく (メノイテースは冥界の主権神ハ
デス、転じて、キリスト教徒の地獄の呼称ともなったとのそのハデスの牛飼
いである) との側面]

[ゲーリュオンと結びつく側面]

[アンタイオスと結びつく側面]

のことまでも顧慮することで

「ダンテらは『地獄篇』の [冥界下り] にあつての地獄最下層、ゲーリュ
オン(第10功業にてのヘラクレス殺害対象)におぶられ、そして、アンタ
イオス(第11功業にてのヘラクレス殺害対象)におぶられて最終的に降下
した先たるその地獄最下層にて「ヘラクレス伝承にあつてはそうもした形態
を取るとのゲーリュオン状の」そして「ケルベロス状の」三面構造をとる
[地獄の王] ルシファーを目撃するに至った」

との一連の流れに [よりもつての恣意性] が見出せるとのことになる (: [第12功業に
も登場している冥界で地獄の王を飼うメノイテース] を結節点にヘラクレス第10功業の
ゲーリュオンおよび第11功業の繋がり合いがギリシャ神話からして観念できる中で
そうもなっている、でもいい。動機、何故、そうもした凝っているとはしか見えない側面が
見出せるのかとのその動機は [文豪ダンテのヘラクレス12功業を意識しての「趣味」]
以外には常識の問題では、通り一通りの話柄では説明がなしがたいことは置いてお
いても、とにかくも、そうもなっている)。

以上表記のことにまつわつての典拠を下に挙げる。

SOURCE

90(3)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典(Source)紹介の部90(3)にあつては、

[「冥界の王ハデースの牛飼いたる」メノイテースなる存在がゲーリュオンに対してヘラクレスやりように関する報告をなした存在としてヘラクレス第10番目の功業に登場し、また、同メノイテースがヘラクレスのケルベロスを探るための冥界訪問の過程で冥界にてヘラクレスに相撲を挑んだ存在としてヘラクレス第12番目の功業にも登場してきている]

このことの典拠を挙げることにする。

(直下、ローマ期ギリシャ人著述家アポロドーロスによる『ビブリオテケー』(の岩波書店より出されている訳本たる文庫版『ギリシャ神話』)よりの引用 —(当方所持の文庫版第61刷のもの、その第2巻Vの部98ページよりの原文引用)— をなすとして)

「第十の仕事としてゲーリュオネースの牛をエリュティアから持って来ることを命ぜられた。エリュティアはオーケアノスの近くの、今ではガディラと呼ばれている島であった。この島にクリューサーオールとオーケアノスの娘カリロエーと子ゲーリュオネースが住んでいた。彼は三人の男の身体が腹で一つになっていて、脇腹と太腿からは三つに分れた身体を持っていた。彼は紅い牛を持っ

ていて、その牛飼はエウリュティオン、番犬はエキドナとテューポーンから生れた双頭の犬オルトスであった。そこで、ゲーリュオネースの牛を目ざしてヨーロッパを通過して多くの野獣を殺し、リビアに足を踏み入れ、タルテースに來り、旅の記念としてヨーロッパとリビアの山上に向かい合って二つの柱を建てた。その旅の間に太陽神(ヘーリオス)に照りつけられたので、神にむかって弓を引きしぼった。神は彼の剛気に感嘆して、黄金の盃を与え、彼はこれに乗ってオーケアノスを渡った。そしてエリュティアに至って、アバース山中に宿った。犬が彼を認めて突進して來た。しかし彼はこれを棍棒で打ち、犬を助けに來た牛飼のエウリュティオンをも殺した。しかしそこで地獄王(ハーデース)の牛を飼っていた
メノイテース
が事件をゲーリュオネースに告げた。彼はアンテムース河畔に牛を追い去りつつあるヘーラクレースに追いつき、戦いを交え、射られて死んだ(以下略)」

(引用部はここまでとする)

上の引用部にて

[ヘラクレース第10の功業にて [ハーデースの牛飼いたるメノイテース] がゲーリュオン(ゲーリュオネース)にヘラクレースやりようを報告した存在として登場している]

ことの文献的論拠を指し示したことになる。

典拠紹介を続ける。

(加えて、直下、『ビブリオテケー』の岩波書店より出されている訳本たる文庫版『ギリシャ神話』よりの引用 —(当方所持の文庫版第61刷のもの、その第2巻Vの部102ページよりの原文引用)— をなすとして(尚、同引用部は先の **出典(Source) 紹介の部90(2)** と一部のみ重複するところとなっている))

「第十二番目の仕事として地獄からケルベロスを持って來ることを命ぜられた。これは三つの犬の頭、竜の尾を持ち、背にはあらゆる種類の蛇の頭を持っていた。

…(中略)…

地獄の門の近くに來てテーセウスとペルセポネーに求婚してそのために縛られたペイリトゥースとを見出した。彼らはヘーラクレースを見て、あたかも彼の力によって蘇生するように手を差し延べた。彼はテーセウスの手を取って醒ましたが、ペイリトゥースを立ちあがらせようとする、大地が動揺したので、彼は放した。彼はアスカラポスの岩をも転がし除けた。彼は靈魂に血を供しよう欲し、地獄王の牡牛の頭を殺した。しかし牡牛を飼っていたケウトーニュモスの子

メノイテース

がヘーラクレースに相撲の挑戦をした。そして身体の中をつかまれて、脇骨を砕かれたが、ペルセポネーに乞うけられた。彼がプルートーンにケルベロスを求めた時に、プルートーンは彼の持っている武器を使わないで圧伏して連れ出るように命じた。彼はケルベロスをアケローンの門で発見して、胸当てをつけ、獅子の皮で身を蔽い、犬の頭を両手で抱き、尾にある竜に噛まれたけれども、いうことをきくまでは猛獣をつかしめることはやめなかった。そして彼はそれを伴ってトロイゼーンを通過して上った(以下略)」

(引用部はここまでとする —— ※引用部にてギリシャ神話の冥界の主催神、ゼウスの兄たるハデスが[プルートーン]との式で「ローマ名」[プルートー] (和訳版ではギリシャの富の神たるプルートーンに近い響きの表記だが) の名で記されているのはここにて引用なしているアポロドーロスの『ビブリオテケー』が「ローマ時代」に成立している著作(であることを顧慮しての邦訳)だからと解される ——)

また、上記とほぼ記載部を一致するところで、なおかつ、オンライン上より確認できるところの英訳版ビブリオテケーの記載も(出典表記を厚くするとの意図あって)下に紹介しておく。

(Internet archive のサイトよりオンライン上より全文確認できるところのアポロドーロス著作『ギリシャ神話』(Bibliotheca ビブリオテケー. 本稿の先の段でも解説しているようにローマ期に成立したとされるギリシャ神話要覧書) 英訳版よりの抜粋をそれぞれ分けて以下なすこととする)

(直下、THE LIBRARY, II.V.(10)の部 —— The Library とはアポロドーロスの手になるギリシャ神話要覧書(Bibliotheca)の英語読みとなる—— より the 10th labour of Hercules に関する表記部よりの抜粋として)

when the herdsman Eurytion came to the help of the dog, Hercules killed him also. But Menoetes, who was there pasturing the kine of Hades, reported to Geryon what had occurred, and he, coming up with Hercules beside the river Anthemus, as he was driving away the kine, joined battle with him and was shot dead.

(先だって引用なした訳書の英訳版対応表記の引用部はここまでとする)

(直下、THE LIBRARY, II.V.(12)の部より the 12th labour of Hercules に関する表記部よりの抜粋として)

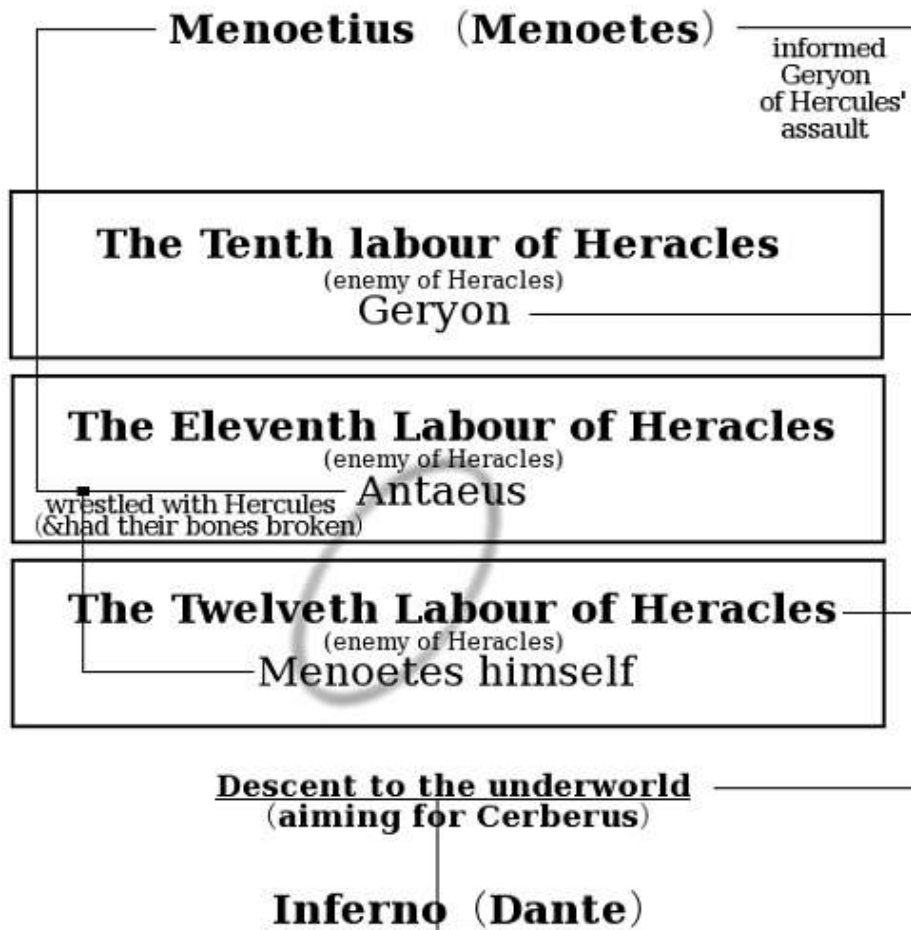
But Menoetes, son of Ceuthonymus, who tended the kine, challenged Hercules to wrestle, and, being seized round the middle, had his ribs broken ;however, he was let off at the request of Persephone. When Hercules asked Pluto for Cerberus, Pluto ordered him to take the animal provided he mastered him without the use of the weapons which he carried.

(先だって引用なした訳書の英訳版対応表記の引用部はここまでとする)

これにて

[ヘラクレス第 10 の功業にて登場した[ハーデースの牛飼いたるメノイテース]がヘラクレスの冥界下りの 12 番目の功業にも登場、ヘラクレスに相撲勝負を挑み(出典 (Source) 紹介の部 90 にて呈示のようにアンタイオスがそうなったように)ヘラクレスに骨砕きされたとのことが[文献的事実]の問題として古典に言及されている]

とのことの出典とした。



メノイテースは以下のような側面でヘラクレス10番目の功業、11番目の功業、12番目の功業と接合性を有する存在である。

- ・(第10の功業との接合性として) メノイテースは [ゲーリュオン] (ヘラクレス「第10の」冒険にて登場した三面六臂の怪物にしてダンテ『地獄篇』にて第7圏から第8圏への降下を助力した存在) にヘラクレス乱入・暴虐を報せた存在となっている。
- ・(第11の功業との接合性として) メノイテースは [アンタイオース] (ヘラクレス「第11の」冒険にて登場した巨人にしてダンテ『地獄篇』にて第8圏から第9圏への降下を助力した存在) と同様にヘラクレスと相撲勝負して同様に骨砕きの憂き目に遭った存在となる。
- ・(第12の功業との接合性として) メノイテースはそれ自体が冥界下りと強く結びつく存在 (冥界の王ハーデースの牛を飼う牛飼いであり、また、ヘラクレスの「12番目の」功業の目的地たる冥界にてヘラクレスと相撲勝負をなした存在) となっている。

以上、メノイテースを介して相互に結節点を観念できるとのヘラクレス10番目の功業、11番目の功業、12番目の功業らがダンテ『地獄篇』との結節点を [恣意的な側面] として帯びていると述べられるか否かがここにて問題視をなしていることとなる。(くどくも繰り返すが、10番目の功業に登場のゲーリュオンが『地獄篇』地獄巡りにてダンテらを地獄第7圏から地獄第8圏に降下なさしめている存在であるとのことがあり、11番目の功業に登場のアンタイオースが同古典にてダンテらを地獄第8圏から地獄第9圏(最下層)への降下をなさしめているとの点からして接合性を観念できる。そうしたことに加えてのこととして、ヘラクレス第12功業が [三面のケルベロスを目指しての地獄降下の物語] となっており、といったギリシャ伝承筋立てが欧州ルネサンス期成立の『地獄篇』の方の内容、 [三面のルシファーをゴールにしての地獄降下の物語] との内容と類似性を呈しているとのことがある、それにつき、『地獄篇』にヘラクレス12功業を「濃厚に」意識してのわざとのやりようが影響しているかどうかを(ここでは)問題視しているのである。メノイテースの話はそれが10番目功業・11番目功業・12番目功業は接合性を観念させるとのものである、それがゆえ、10番目・11番目・12番目が性質上通巻としているものらであれば、ダンテやりよう、ゲーリュオン・アンタイオースにそこに向けての順序降下をなさしめている最下層に三面のルシファーを配するとのやりようもヘラクレス最後の功業に見る三面のケルベロスに仮託しての恣意的な賜物であるように受け取れる、とのことを(同じくもの文脈で)指摘するために持ちだしているとのものである)。

(ここまでをもってして [1] から [5] と分割して説明なすと先だって述べているところの[ダンテ『地獄篇』と[ヘラクレス 12 功業]の接合性]にまつわる関係性表記にあつての [3] の部に一区切りをつけることとする)

[4]

ダンテ『地獄篇』(今日的な意味でのブラックホールと結びつく描写をミルトン『失樂園』と同文の式で含む、そして、そのことにまつわって LHC と共通の概念使用規則がみとめられるとのことで問題視なしている古典) では最下層に控える三面のルシファーとは別に [三面のケルベロス] が地獄の浅い階層、[貪食者の地獄] にて登場しているとの旨、本稿の先の段にて (出典挙げつつ) 言及していた。

(:大正期文語調にて極めて読みにくいものなれど、オンライン上の青空文庫プロジェクト(著作権の切れた著作を公開しているとのプロジェクト)にてもその内容が確認できるとの山川丙三郎訳の『地獄篇』邦訳版で[第三圏の地獄にてのケルベロス登場の下り]につき ―繰り返すも― (そこよりの原文引用するところとして) “我は第三の獄(ひとや)にあり…(中略)…大粒の雹(ひょう)、濁れる水、および夢はくらやみの空よりふりしきり、地はこれをうけて悪臭(おしゅう)を放てり 猛き異様の獣チェルベロに浸れる民にむかひ、その三(みつ)の喉によりて吠ゆること犬に似たり これに紅の眼、脂ぎりて黒き髯(ひげ)、大いなる腹、爪ある手あり、このもの魂等を爬き、噛み、また裂きて片々(きりぎり)にす…(中略)…大いなる蟲(むし)チェルベロ我等を見し時、口をひらき牙をいだしぬ、その體(からだ)にはゆるがぬ處なかりき” (引用部はここまでとする) との表記がなされている、そして、英文 Wikipedia[Inferno (Dante)]項目に (同文に再引用なすと) “The "great worm" Cerberus guards the gluttons, who are forced to lie in a vile slush produced by ceaseless foul, icy rain.” 「巨大な芋虫(グレート・ワーム)状のケルベロスが [汚濁し、そして、氷のように冷たいとのやむことなき雨にてもたらされている不快なぬかるみ] の中に横たわることを強いられている暴食の咎人らを見張っている」との表記がなされているとおりである)

といったかたちでのケルベロス登場の段は『地獄篇』第 6 歌の部 (欧米表記では Canto VI の部) となる。

そのケルベロス登場の段(第 6 歌)に直後続いての『地獄篇』第 7 歌 (Canto VII. ちなみに『地獄篇』は Canto XXXIV、すなわち、第 34 歌まで (『地獄篇』『煉獄篇』『天国篇』に三分割されての『神曲』全体の序曲を入れもして) 区分けされているとの作品となる) にて

[(ダンテ古典研究者らにとっての)有名な一節]

が登場してくる。

[冥界の神プルート **Pluto** (ギリシャの冥界の神ハデスのローマ版呼称) が喚いた [意味不明な内容の叫び] として文学者にはよく知られている、英文 **Wikipedia** にそのための解説項目が一項目設けられているぐらいによく知られているとの、**Papé Satàn, papé Satàn aleppe** 「パペ・サタン・パペ・サタン・アレッペ！」との一節]

がそうである。

ギリシャ神話の冥界の主権神ハデスがローマにてそのように呼称された存在たる[プルート]がダンテ『地獄篇』では(地獄の主権者などとしてではなく、

[地獄にて訳の分からぬフレーズ「パペ・サタン・パペ・サタン・アレッペ！」—ただし今日に至るまで文学者の間にてその意味性が論議的となってきたとのフレーズ— を突如として喚き散らした脇役]

へと変えられているとのことがあるのであるが、(その部の特異性は続いて呈示の [出典\(Source\) 紹介の部 90\(4\)](#) を参照のうえでご判断いただきたいとして)、問題は、

「プルートが意味の分からぬものと認知されているフレーズ (パペ・サタン・パペ・サタン・アレッペ!) を喚いたとされる場面がケルベロスが貪食者の地獄にて罪人を責めさいなむ場面を扱った第 6 歌から第 7 歌に切り替わった直後のことであること、プルトのその喚きが登場する地獄の階層が

[第 3 圏 : 貪食者 (キリスト教罪障観に見るセブン・デッドリー・シンズこと [七つの大罪] のうちグラトニー、[貪食] の罪を負った者) の地獄]

から

[第 4 圏 : 貪欲者 (キリスト教罪障観に見る [七つの大罪] のうちグリード、[貪欲] の罪を負った者) の地獄]

への階層移転

が生じた直後であり、[第 3 圏の地獄の懲罰執行存在兼番人] がケルベロスであるのに対してプルートが [第 4 圏の地獄の見張り番] にも「見える」との存在として描かれている」

ということである (ケルベロスとプルートが近接する地獄の階層にてそれぞれ見張りとしての役割を果たしているようにとれるようになっている)。



Dante's Pluto

著名な19世紀芸術家ギュスターブ・ドレがダンテ『神曲』近代刊行版に提供した挿絵に見るプルート。零落した(と述べるべきか)そのローマ神話における冥界の主権神が突如として喚き散らしたと描写されるフレーズを(何も知らぬとの人間にあっては尚更もって微細なることを延々と述べているように思うところか、とは承知のうえであるが)敢えても本段では問題視している。

ここで書くが、キリスト教から見ての異教の神、冥界の主権者神であるプルートが喚いているとのフレーズ、イタリア語でもラテン語でもなく、況や、英語などでは毛頭なく、とにかくも訳の分からぬフレーズとされている(後にてそれにまつわる言われよしの典拠も引くところとしての)「パペ・サタン・パペ・サタン・アレッペ！」については「サタン」との語を含むものである。

また、ギリシャおよびローマの神話体系「ではない」キリスト教の体系では

「(ハデスないしプルートではなく)サタンが地獄の中心となっている」

となっていることがある(先の抜粋部にも見受けられるようにダンテ『地獄篇』の地獄はサタンこと氷漬けのルチフェロを中心にした地下世界であると描写されている——押し広げて見れば、ダンテ『地獄篇』は我々が住まう世界たる地球が地獄のサタンを中心に成り立っていることを描写している作品ともなるのだが(地球の中心たる地獄の中心にサタンことルチフェロが幽閉されているからそうなる)、それについては、ここでは置く——)。

以上のことを加味して考えれば、である。

[キリスト教教義大系の問題で冥界の主権者としての地位をサタンに譲るような格好となっている(ギリシャの冥界支配存在ハデスの別名たる)プルート]

という存在が

[三面のケルベロス登場の下りと内容上近接する階層(ケルベロス登場の地獄第3圏に近接する地獄第4圏)および古典文章構成上近接しての部(ケルベロス登場の第6歌近接しての第7歌冒頭部)]

にあって殊更に目立つように

[サタンという語を含む訳の分からぬ(とされる)フレーズ——続いての**出典(Source)紹介の部 90(4)**で内容紹介するところの「パペ・サタン・パペ・サタン・アレッペ！」とのフレーズ——]

を意味意図不明に口にしているとのことは

[『地獄篇』のサタン(ルチフェロ)がケルベロスよろしくの三面構造を有しているとのことに対する意識誘導]

ではないかと解することも可能となっている。

さて、「仮に」付きであるが)そのような見立てが[なせる]に留まらず、それが現実にダンテ「の背面」にある意図であるとするのであれば、

「ルチフェロ(サタン)とケルベロスが確信犯的に結びつけられている」

との側面から先述の[1]から[3]で指し示したこと(「仮説」などではなく[はきと観察される事実関係]について解説したとのこと)の結びつきがいよいよもって「何故、そこまで執拗なことをするの

か」といった色合いを帯びてくるものとなるであろう。

以上述べたうえで典拠紹介をなすこととする。

出典 (Source) 紹介の部 90(4)

SOURCE 90(4)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典 (Source) 紹介の部 90(4) にあつては、

[ダンテ『地獄篇』に [パペ・サタン・パペ・サタン・アレツペ] とのフレーズが [プルート] (零落したローマ神話の [冥界の王] ないし [富の神]) と紐付けられて登場を見ていること]

についての出典紹介をなしておくこととする。

(直下、英文 Wikipedia [Papé Satàn, papé Satàn aleppe] 項目にての現行記載内容よりの引用をなすとして)

Papé Satàn, papé Satàn aleppe is the opening line of Canto VII of Dante Alighieri's *Inferno*. **The line, consisting of three words, is famous for the**

uncertainty of its meaning, and there have been many attempts to interpret it. Modern commentators on the Inferno view it as some kind of demonic invocation to Satan. The line is a shout by Pluto. Pluto (also identified with Plutus and Hades) was originally the Roman god of wealth and the underground, but in the Inferno, Dante has made Pluto into a repulsive demon who guards the fourth circle, where souls are punished who have abused their wealth through greed or improvidence.

「Papé Satàn, papé Satàn aleppe (「パペ・サタン・パペ・サタン・アレッペ！」)はダンテ・アリギエーリの『地獄篇』第7歌にての冒頭行(に見られるフレーズ)である。三語(パペとサタンとアレッペ)よりなるその下りは意味不明瞭さで有名であり、同下りに対する解釈を講じようとの多くの試みがなされてきた。近現代の地獄篇に対する評者らは同フレーズをもってして「悪魔サタンに対する悪魔的色彩を帯びた祈祷文」か何かではないかと見ている。その下りはプルートにて叫ばれているとの体裁をとる。プルート(「ギリシャの富の神プルートウス」ないし「ギリシャの冥界の主権者ハデス」と同定されもする存在)は元来ローマの富および地下の神であったが、Inferno『地獄篇』でダンテは地獄の第4圏、「食欲」ないし「無分別」にて自身の富を乱用した魂たちが罰せられるとのその第4圏を守る嫌悪感を引き起こさせる悪魔の類としている」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上表記されたうえで英文 Wikipedia にあつては Papé Satàn, papé Satàn aleppe の意味合いにつき Possible explanations [ありうべきことにまつわる説明として] と明示されたうえで

The earliest interpretations [最も初期の解釈ら]

The prayer theory [祈祷関連解釈]

The Hebrew theory [ヘブライ語立脚解釈]

The French theories [フランス語立脚解釈]

といった分類付けにて複数解釈が載せられている。

(:いちいち細かくも典拠を抜粋表記することはなさないが、現行の記載としては英語版ウィキペディアにあつて

[[パペ・サタン・パペ・サタン・アレッペ!]]のパペがラテン語の papae に由来、古典期の驚きや不快感を示すための感嘆語(現代英語の「オー」や「ダァム(ちくしょう)」の類)となっているのでは?)

といった意見、あるいは、

[aleppe がイタリア語「的に」ヘブライ数字の「第1」を意味するアレフを読んだとの意味でアレフを神に付けて「筆頭者」と表するように地獄の主権者との設定のサタンを地獄の住人が礼賛しているのではないか?]

との意見が初期より出されていた、とのことが言及されている

また、同じくもの項目(英語版 Wikipedia[Papé Satàn, papé Satàn aleppe]項目)ではさらに進んでのヘブライ語解釈として

「口語ヘブライ語の Bab-e-sciatan, bab-e-sciatan, alep!はマタイ福音書 16 章 18 節(Matthew 16:18)に記されているイエス言行録の内容、

[そこで、わたしもあなたにいう。あなたはペテロ(初代ローマ教皇と定置される 12 使徒のペテロ)である。そして、わたしはこの岩(ペテロには[岩]との意味合いがある)の上にながしの教会を建てよう。黄泉の力もそれに打ち勝つことはない]

との内容を反言したような響きのものとなるのでそれが原因なのでは?」

との解釈があること「も」言及されている。

につき、筆者が個人的に「そこまで考えられているのか」と思ったところとして同じくもの英文ウィキペディア(の現行記載)にては

「20世紀前半より地獄篇をアラビア語に訳したとの識者より『地獄篇』の同部についてはアラブ語の Bab Al-Shaytan, Bab Al-Shaytan, Ahlibu!に親和性高いもの、(「ダンテが(ルネサンス期)イスラム圏より幾分の影響を受けていた可能性があり)親和性高いもので[パペ・サタン・パペ・サタン・アレッペ!],そのアラビア語解釈で意味するところは「サタンの扉、サタンの扉、先へ進め」とのものではないかとの意見も呈示されている」

ということまでもが記載されている(英語版 Wikipedia に関しては欧米圏にて流通を見ている主流古典に対して、細かいところまであれやこれやのいままでの学究らの言辭が紹介される傾向がある中にてそうした記載までがなされている)。

尚、(余事表記に次ぐ要らずもの余事記載となるが)以上、解釈論の紹介をなしていることらについては

「生まれてこのかた、宗教とは実に性質の悪いもの、何故、大の大人がそのようなものに耽溺しているのか、共感など覚えたことがない」

との葬式仏教の無宗教の人間として辟易させられながらも敢えても「宗教的」解釈論の紹介をなしたこと、理解いただきたい次第である)



ながら作成したものとなり、いかにケルベロス登場の下りとプルートの登場の下りが近接しているかを訴求しようとするものとなる（ケルベロスは全 34 歌からなる地獄篇の第 6 歌の部 (CantoVI) に登場、他面、プルートは地獄篇第 7 歌の冒頭部に登場しているとのことがある）。

(出典(Source)紹介の部 90(4)はここまでとする)

(以上をもってして [1] から [5] と分割して説明なすと先だつて述べているところの [ダンテ『地獄篇』と [ヘラクレス 12 功業] の接合性] にまつわる関係性表記にあつての [4] の部に一区切りをつけることとする)

[5]

延々と細かい話に枝分かれせざるをえぬとの側面を伴っているとの話ともなるのだが、次のような観点から「も」ヘラクレス 12 功業とダンテ『地獄篇』の間には繋がり合いが観念されるところとなっている。

[西洋古典古代文学作品にあつて [冥界下り] (『地獄篇』の主要モチーフ) を描いた代表的作品はホメロスの手になる『オデュッセイア』とヴェルギリウスの手になる『アエネーイス』の二作品となるのであるが (内、『オデュッセイア』はギリシャ期の代表的古典となり、同『オデュッセイア』は後者、ローマ期ラテン文学の源流的作品とも表される『アエネーイス』に内容込みで多大な影響を与えている作品となる)、両作品共々、[トロイア崩壊にまつわる作品]「とも」なり、また、[ダンテ『地獄篇』に多大な影響を与えている作品]ともなっているとのことがある]

[ダンテ『地獄篇』に多大な影響を与えているホメロス『オデュッセイア』(ギリシャ期代表的古典)とヴェルギリウス『アエネーイス』(ローマ期ラテン文学の源流的作品)の両作品は [トロイア崩壊と関わる作品] であるとのことは直上にて表記したが、それら『オデュッセイア』『アエネーイス』の西洋代表的古典がそれにまつわるものである [トロイア崩壊] の原因と [ヘラクレス 11 番目の功業] 及び [ヘラクレス 12 番目の功業] が深く多重的に記号論的結節関係を呈しているとのことがある] (∴につき、直上表記の「『オデュッセイア』『アエネーイス』両古典 → (多大な影響を与える) → ダンテ『地獄篇』」との関係性にあつての意味合いが [『オデュッセイア』『アエネーイス』両古典 ↔ (トロイア崩壊の原因を介しての記号論的つながり合いが存在) ↔ ヘラクレス 11 功業 / ヘラクレス 12 功業] との関係性との兼ね合いで問題になる)

以上のことの論拠は分割し、順次、これより指し示していく (以下、[5-a] から [5-b] に分かちての指し示しをなす)。

[5-a]

ここではまずもって

[西洋古典古代文学作品にあって[冥界下り]（『地獄篇』の主要モチーフ）を描いた代表的作品はホメロスの手になる『オデュッセイア』とヴェルギリウスの手になる『アエネーイス』の二作品となるのであるが（内、『オデュッセイア』はギリシャ期の代表的古典となり、同『オデュッセイア』は後者、ローマ期ラテン文学の源流的作品とも表される『アエネーイス』に内容込みで多大な影響を与えている作品となる）、両作品共々、[トロイア崩壊にまつわる作品]「とも」なり、また、[ダンテ『地獄篇』に多大な影響を与えている作品]ともなっているとのことがある]

とのことから摘示していく。

それにつき、まずもって強調したいのは、

[欧州にて古代ギリシャの代表的叙事詩語り手たるホメロスの古典 一トロイア戦争の途中経過を扱った『イリアス』とトロイア崩壊後、トロイアに引導を渡した木製の馬の計略を考案したオデュッセウスの流浪を扱った『オデュッセイア』— の西洋文学に対する影響は「甚大」というより「絶大」なもので[ホメロスなくして今日の欧州文学はなかった]との評が存在している]

とのこととなる。

古代ギリシャの詩人たるホメロスが西洋文学（換言すればすれば、今日の人類文明のメインストリームとなった文明の文学的側面）および西洋文明それ自体に及ぼした影響力は

「『古事記』『日本書紀』『万葉集』『源氏物語』『平家物語』の代表的古典を「すべて和して」の文献内容が[日本にあっての後の文物や思想]に与えた影響力並みに重いものであると述べても過言ではない]

といった程度のものであるととらえられるようになっている、そのような論評が実際に存在しているとのことがある——続いて表記の**出典(Source)紹介の部 90(5)**はそのような論評の一例を紹介してのものとなる——（:その点、『古事記』『日本書紀』『万葉集』『源氏物語』『平家物語』のすべてが剥落しておれば、日本には[江戸期国学]どころか[中世の諸々の仏教説話集や軍記物]さえ生まれえなかったことになることは日本史についての多少の見識があれば、あるいは、『日本史』という科目を高等学校で[学習]している、銘々望みの大学に受かるぐらいにきちんと文系で[学習]している(なかならず国立大なら文章巧拙よりも特定ワードが含まれているかで減点式に採点されていく記述試験にての体系的アウトプットが可能とのレベルまで「詰め込み」している)人間ならば、そこになら深い理解など伴っていなくとも[そうになっている]ことは多少でも分かることかとは思われもする。より先立つ古典に拠って立つ[国学]のようなものが[江戸期末期のナショナリズムの高揚]にも建前上、甚大な影響力を与えたと「される」ことにつき鑑みれば、**先覚的古典（『古事記』『日本書紀』『万葉集』『源氏物語』『平家物語』）が「ない」とのことは歴史というものが回転する上での 一たとえそれが人形(のような内面空虚なる存在)らに与えられていたとの字義通り[下らぬ名分]にすぎぬものでも— [スローガンの元となるもの]が「ない」にも等しいことになるとも受け取れるようなところもあるとの式で、である（[日本古典文物に対する封建主義体制下、知識人の研究]→[江戸期国学隆盛]→[王政復古と夷狄排斥思想隆盛の下ごしらえ]→[尊皇攘夷思想勃興]→[維新の促進]→[結果的な意味での日本の近代化・強国化]との流れは少なくとも細かい流れでは[今日のそれ通り]には成立しなかったろうと解される）。さて、ホメロスらに代表される古典古代文物は表向き、[ルネサンス]の人文主義の理念に沿ってのもの、[行きすぎた神の教理の礼賛基調]（それが一時的に影響力を振るうべく振るうように**

なっていた長期的な流れの中での[スパイス]のようなものでも、とにかくもの、原理主義的な神の教理の礼賛基調) に対する欧州文明にての文明促進の緩衝材(バランサー)となったものであること、その意味につき、筆者は考えるべきであるにとらえている。

出典(Source)紹介の部 90(5)

SOURCE 90(5)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典(Source)紹介の部 90(5)にあつては、

[ホメロスの古典が欧州古典(ギリシャ・ローマから続く文物ら)にて[源流的存在]となっている]

とのことの典拠を極々基本的なところから挙げておくこととする。

(直下、英文 Wikipedia [Homer] 項目にての現行記載内容より的一部抜粋をなすとして)

In the Western classical tradition, Homer is the author of the Iliad and the Odyssey, and is revered as the greatest of ancient Greek epic poets. **These epics lie at the beginning of the Western canon of literature, and have had an enormous influence on the history of literature.**

(訳として)「西洋古典の伝統にあつてホメロス、『イリアス』と『オデュッセイア』の作者たる同ホメロスは古代ギリシャ叙事詩語り手の中で最も偉大な存在と評価されている。それら叙事詩は文学における「西洋のウェスタン・カノン; 基準的古典」の発端に位置するとのもので「文学の歴史」に多大な影響を与えている」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

上にては [**the Western canon of literature**] の始点にホメロス古典を中核としたギリシャ叙事詩が位置していると表記されているが、そも、そこにいう [**ウェスタン・カノン・オブ・リテラチュア**] とは何かと述べれば、

[知識人らが西洋文明の大元を構築してきた文学作品と定置している作品ら]

に対する総じての呼称ととらえてもらって構わないものとなる。

ここまでわざわざ書き連ねてきたことに対して、饒舌家ならば、

「あつらは文化って言っても、鄙(ひな)びた、しかし、人情の機微が生き生きと作用しているって類のもの、そういうものをそこそこに、そう、清涼剤程度に好くって程度の野人でありまして、公家さんらの世界の白粉(おしろい)がかつた[ハイカラ文化]のお話なんてのはどうも分かりかねますねえ」

などと述べもしようとの [世の中一般の高尚なところのその実の紛い物性にうんざりしている向きら] / [非実用的なこと(あるいはただただ原始的・本能的に生きるための飼料・馬草以外のこと)には冷淡な向きら] が本稿 —— 非実用的なことを延々細々と解説しているように見えて、その実、[人間を歯車にしての機械]にははなから最終目的としてのゴールがこの世界にて設定されているとのことをただひたすらに具体的論拠群からのみ指し示さんとしているとの本稿 —— を読まれている場合を想定、即時即座に誰でも確認できようとのその伝での「確認のためだけの」出典 (ウェスタン・カノン・オブ・リテラチュアとは何か、その [重要性] が如何程のものと言われているかにまつわる出典 / この際、ウェスタン・カノン・オブ・リテラチュアが個々のハイカラ志向の者達にあつての内心の位置付けがいかようなものと推し量れるかといった意味をなさないことを排して一般的世間的評価ありようについての出典) も挙げておく。

英文 Wikipedia [Western canon] 項目冒頭部から抜粋するが、そこにては

“ The term "Western canon" denotes a body of books and, more broadly, music and art that have been traditionally accepted by Western scholars as the most important and influential in shaping Western culture. As such, it includes the "greatest works of artistic merit". Such a canon is important to the theory of educational perennialism and the development of "high culture". ”

「ウェスタン・カノンという用語は西洋文化体系が形づくられてきたうえで最も重要かつ最も影響力あるものとして西洋圏の学者らに伝統的に認知されている書籍らの体系、そして、より広くは音楽および芸術作品の体系を指す用語である。そのようにそれ(ウェスタン・カノン)は[芸術的価値を持った最も偉大な作品ら]を包摂している。そのようなカノン(註: 元来、カノンとは[教会法]とのニュアンス強き言葉だが、ここでは[規範]といった色彩強くもの語感で用いられている)は [「教育」にての反復主義の方法論] および [ハイ・カルチャーの発展] にとり、重要なものとなっている」(引用部に対する訳はここまでとしておく)

と述べられているとのことがある。

以上のように定義付けられている [ウェスタン・カノン] の根本にあるものとして和文ウィキペディア、これまた同文に皮相的な同じくもの媒体とはなるが、同ウィキペディアにあつて次のような[評価について

の記述]がなされているだけのことがホメロス古典に関しては — 知名度・影響度合いとの兼ね合いで — 「ある」。

(直下、和文ウィキペディア[ホメロス]項目にあつての[後世の芸術作品への影響]との節にあつての現行現時点記載内容よりの引用をなすとして)

ホメロスが実在したか、あるいは1つの人格であるのかといった問題はさておき、ホメロスが古代ギリシアにとって、最初の最も高名な詩人であり、古代ギリシアは文化と教養の多くを彼に負っていると言っても誇張ではない。また「西洋文学の父」として、古代ギリシアの古典期、ヘレニズム時代、ローマ時代、(西欧でギリシア語の知識が部分的に失われた中世は除く。この時代、ホメロスの文学はギリシア人が支配階層となった東ローマ帝国に受け継がれた)、ルネサンスから現代に至るまで、ホメロスは西洋文学において論じられている。

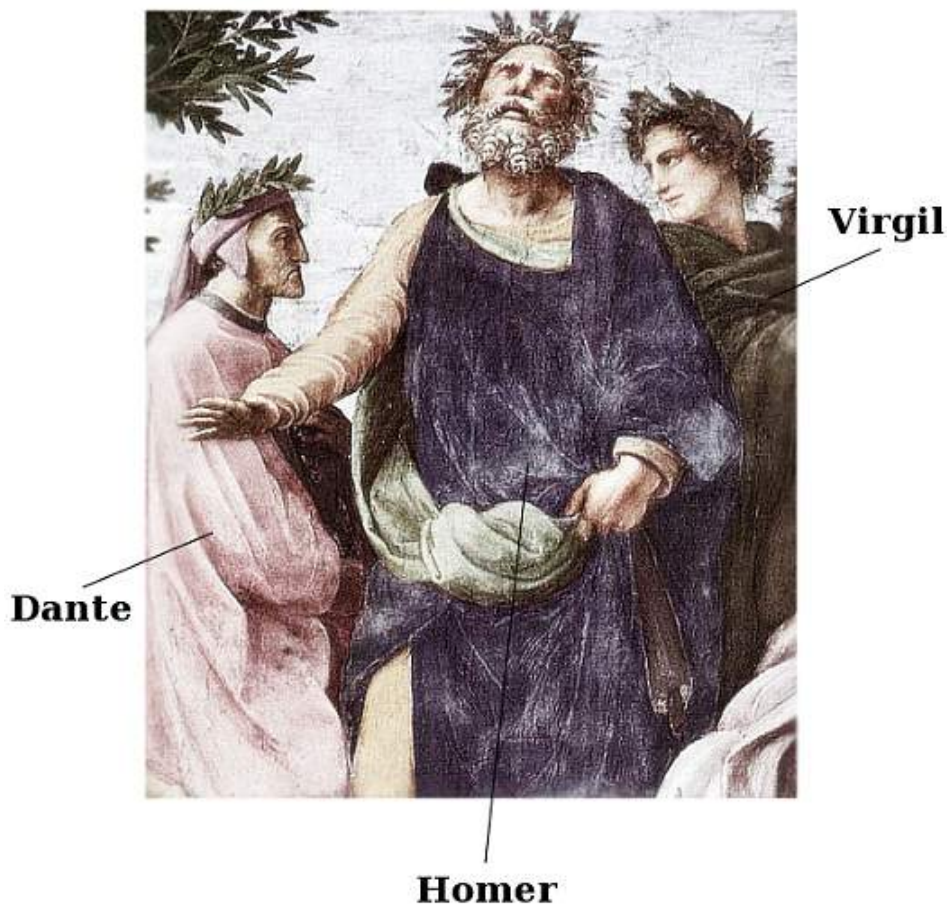
(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

以上、目につくところ、たかだかもウィキペディアよりの引用部だけをもってしてもホメロスという存在、そして、そのホメロスの古典が西洋文明にいかにか重んじられているのか、大体についてご察しいただけるのではないかと、思う。

(**出典(Source) 紹介の部 90(5)**はここまでとする)

(くどくも強調するが、ホメロスおよびその代表作たる叙事詩『イリアス』や『オデュッセイア』は表記のように西洋文明の源流的作品(ウェスタン・カンオン)となるものであるが、そうした[源流作品]を元に構築されていった[ハイ・カルチャー]につきハイ・カルチャーの如きものの「職業的な」論評者ら — [情緒的価値]の問題と[情報的価値]の問題の別を付けないような「相応の」宗教的・神秘主義的な者達 — のように云々することが本稿の趣意ではない(：はきと述べて[純文学信仰]のようなものは筆者とて[愚物・俗物や糸繰り人形の忌まわしきありよう]に通ずるとさえとらえている)。

本稿の趣意は「高尚」などとの言葉で表現される浮き世離れた非実用的なことについて云々することでは毛頭なく、[相互に多重的に繋がり合っている不快な事実関係の山]をはきと摘示、それら「[事実関係の山]が「[恣意性]なくして成立するようなものではない」とのこと、それが「[養殖種]と位置付けられての我々を皆殺しにする」とのことを「[露骨極まりなく]」「[実にもって執拗に]」示しているとの筋目のものである(しかもご丁寧にそこに「[人間業ではない予見的言及]」との属性もが伴っている)とのことを[証示]することにある。さらに述べれば、その[証示]が向かう先につき、(『そのための能力さえなければ我々の絶滅もやむなしか』とも思うところとして)[対応策]講じられて然るべきの[用意された帰結の問題]が伴っていることを遺漏なくも — 事実と証拠の山に基づいて「のみ」 — 呈示、もって、[確認]をなすことにある)



ホメロス・ヴェルギリウス・ダンテら作品の西洋代表的古典としての連結性について指摘しているとの本段にあってホメロス・ヴェルギリウス・ダンテらを併せて描いたルネサンス期制作の画を意図して挙げておく（画は英文 Wikipedia [Western canon] 項目に見るルネサンス期イタリアの巨匠ミケランジェロが製作した作品、バチカン宮殿の四つワンセットの部屋のうちの一つ、[署名の間]にて展示されている作品（ミケランジェロ代表作 The Parnassus 『パルナツス』よりの抜粋となる）。

同画、パルナツス山に集うアポロおよびその配下の芸術神（9人のミューズ）ら、そして、呈示の三大文豪らを描いたものとなり、三大文豪（の抜粋なした部）については左側がダンテ、そのルネサンス期にての典型的な描かれようとなり、中央が盲目のホメロス、右側がローマ期の代表的文人ヴェルギリウスとなる（そちら紹介のされようも英文 Wikipedia 程度の媒体から即時に確認できるようになっている）。

呈示の画に見るように三人の文豪が揃って描かれることは彼らが今日に遺した作品らに「あれなしやこれなし」の相関関係が根強くも介在しているとのことを想起させるところでもある（その点について以降、指し示していく）

ホメロスの作品らが西洋文明（とすれば今日の文明世界の本源たるところ）の源流古典となっている（と広く評されている）とのことは直近の出典紹介部でもって言及したとして、

【ホメロス『オデュッセイア』から甚大な影響を受けた作品】

として存在しているのが

ヴェルギリウス作 Aeneid 『アエネーイス』

という作品である。

当然にホメロス古典らと並んでこの身、筆者も読了しているところの作品だが、同作、『アエネーイス』

は「ラテン文学の最高傑作」と評されるものとなりもし（いいだろうか、ここで問題としているのは筆者の主観ではなく「世間での評されよう」である）、それ自体が源流古典（ウェスタン・カンオン）となっている作品でもあり、その作者のヴェルギリウス（英語表記：ヴァージル）は甚だしくは「欧米文学全体の祖父」とさえ言われている古代詩人となりもしている（下の出典紹介部を参照のこと）。

出典 (Source) 紹介の部 90 (6)

SOURCE 90(6)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典 (Source) 紹介の部 90 (6) にあつては

「西洋古典古代文学作品にあつて「冥界下り」（『地獄篇』の主要モチーフ）を描いた代表的作品はホメロスの手になる『オデュッセイア』とヴェルギリウスの手になる『アエネーイス』の二作品となるのであるが（内、『オデュッセイア』はギリシャ期の代表的古典となり、同『オデュッセイア』は後者、ローマ期ラテン文学の源流的作品とも表される『アエネーイス』に内容込みで多大な影響を与えている作品となる）、両作品共々、「トロイア崩壊にまつわる作品」「とも」なり、また、「ダンテ『地獄篇』に多大な影響を与えている作品」ともなっているとのことがある」

とのこと —ここ一連の流れにあつての指し示し事項— に関わるところとして

[ヴェルギリウスおよびヴェルギリウスの古典（『アエネイウス』）は欧州にての代表的文人および代表的古典となっている]

とのことの典拠を挙げることとする。

(直下、あまりにもありふれた基本的なところであるためにそれで十分かと判断、オンライン上より即時即座に確認できる場所としての英文 Wikipedia[Aeneid]項目にての[Influence]の部の現行記載内容より一部抜粋するとして)

(Influence) The Aeneid is a cornerstone of the Western canon, and early (at least by the 2nd century AD) became one of the essential elements of a Latin education, usually required to be memorized. Even after the decline of the Roman Empire, it "remained central to a Latin education".

「([影響力 Influence]の節として)『アエネイウス』は「ウェスタン・カノン」にあつての試金石となる作品であり、初期、少なくとも紀元2世紀頃にはラテン語教養の必須要素の一つとなっており、普通は内容を覚えることが(往時の人間には)必要とされていたものである。ローマ帝国の崩壊後でさえ、同古典はラテン語教養(教育)の中核にあるものとして位置し続けた」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

また、『アエネイウス』作者である古代詩人ヴェルギリウスが近代にあつてからしていかように称揚されていたのか、William Young Sellar という古典学者の手になる Project Gutenberg 公開の著作 — The Roman Poets of the Augustan Age— の記述内容も下に引いておくこととする。

(直下、Project Gutenberg を通じて公開されてい 19 世紀著作 The Roman Poets of the Augustan Age(1877 年初出:1897 年第三版刊行/『アウグストゥス帝時代のローマ詩人ら』)にあつての CHAPTER II. Virgil's place in Roman Literature(第二章ローマ文学にあつてのヴェルギリウスの位置付け)よりの引用をなすとして)

His pre-eminence not only above all those of his own country, but above all other poets with the exception of Homer, was unquestioned in the ancient Roman world. His countrymen claimed for him a rank on a level with, sometimes even above, that of the great father of European literature. And this estimate of his genius became traditional, and was confirmed by the general voice of modern criticism. For eighteen centuries, wherever any germ of literary taste survived in Europe, his poems were the principal medium through which the heroic age of Greece as well as the ancient life of Rome and Italy was apprehended.

(訳として)「ヴェルギリウスの優位性というものは彼の同国人(イタリア;ローマ)の誰よりも上を行くのみならずホメロスを除きその他の世界中のどの詩人よりも上を行くとのこと、そのことは古代ローマ世界にあつて疑問を呈するまでもないこととされていた。彼の同郷人(イタリア;ローマの向きら)はヴェルギリウスをしてそれ以上の存在、欧州文学の祖父と任じもしていた。そして、こうもしたヴェルギリウス才能にまつわつての見立ては伝統的なところとなっており、現代(訳注:表記著作が世に出ている 19 世紀)の批評家筋論調にあつての一般的ありようもなっている。一八世紀もの間(1800 年間)、ヨーロッパにて文学的嗜好が息づいていたとのどこにあつてもヴェルギリウス詩作らが古代ローマおよびイ

タリアの生活が理解されるうえでのそれと同文にギリシャ英雄時代が理解されるうえでの主たる媒質となりもしていた」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

(出典(Source) 紹介の部 90(6) はここまでとする)

※出典の話から離れて [基本的なところ] についての「一応の」補足として

ここで [世界史関連知識] を有していない向きを想定して「一応、」述べておくも、欧州の文明 —すなわち、今日の文明世界の基盤となっているところの文明— とは

[次の i. から v. の如き流れ]

を経て形成されているものであると日本の高校生らからして教育課程で「学習」させられることである (日本にても『世界史』を受験科目に選択すれば、「実に」基本的なところとして、下に羅列表記するような建て前上の人類史ありようについて大学に入る (意のまま、望むままの大学に入る) ために暗記を強いられるところとなる —※「それを延々となすのはこれ狭量なり、これ愚なりの手合いばかりであろう／といったものは人に不快感を与えるだけで話芸にもならぬことであろうよ」といった当然の世間的評価が伴いがちなもの、そう、[微に入っただけの手前語り] なぞを (『そうしたもの愚にもつかぬ行為でも本稿それ自体の信用性の担保に資すれば、』との発想でもって) 敢えてもなすが、本稿筆者は少年期、選択科目数が特段に多い (それもまた「えげつないことに」 [従順に言われたとおりのことを能率的にやるとの人間] を選り分けるための参入障壁となっていると小僧の時分から見ていたわけだが) との国立大を「社会とおのれの魂の最適点と見たところでの折り合いを付けるために」 確実に入学する必要があると判じていた関係上、理系科目と同様に [日本史][世界史] の双方 (そして予備として用意していた [地理]) にお受験プロパーのやりよう「でも」通曉している。そこに青年時代よりますます深化していったところの洋書と書問問わずもの乱読多読の癖が相乗作用をきたし、[人間の文明の縦軸(時間軸) にあつての常識レベルの建前上の話] をも深くも浅くもなすことが (多くといった話はわざわざなす意味・必要もないことかとは思ふが) そこそこになせるとの筋合いの者となりもする—)。

i. 文明揺籃期。

[ギリシャ文明の (先発のエジプト隆盛文明や地中海隆盛文明の影響を受けながらもの) 発展] → [ギリシャの東部、マケドニアに誕生したアレクサンダー大王によるインドに至るまでの征服活動による一大帝国の建立、そして、それに続く後のヘレニズム文化 —往古ギリシャ文化と往古オリエンタル文化の融合文化— の成立]

との流れが [西洋文明の礎石] たるところとして存在している。

ii. 上の i. の流れにて構築された文明が [後発のローマ帝国勃興] の中でローマ人に吸収されていった ([ラテン語を基軸とするローマ帝国(後裔) 文明の確

立の過程]／その過程で [ギリシャの宗教] は [ローマの宗教] へと吸収されていった)。

iii. 後、上の ii. にあつてのローマ帝国、欧州世界を僻遠の地を除きまるまる支配していたローマ帝国が [蛮族] と表されてのゲルマン人の侵入プロセスの中で徐々に衰退していった。

iv. 上の iii. の進行過程でギリシャ他神教あらためローマ他神教に代わるものとして初期迫害を見ていたキリスト教のローマ帝国での国教化が進行。キリスト教を為政者公認の一神教として公認したローマ帝国が 5 世紀後半に滅尽滅亡を見た (正確には東西分裂しての西ローマ帝国の方がゲルマン人によって滅尽滅亡を見た)。その後の混乱期を経、西ヨーロッパではゲルマン領主が王と臣下の契約関係で緩やかに結合したフランク王国を主たる統治体としての暴力装置と教会権力が癒着しての [封建時代] ([狂信] と [封建領主らの暴力支配] と [移動の自由さえ有していないとの奴隷たる農奴を労働力としての農奴制] に支えられたいわゆる中世暗黒時代) に突入する。

v. その後、上にてのフランク王国内部の小競り合い・フランク王国に臣従しつつ勢威を高めていたゲルマン人の中のノルマン系一派 (ヴァイキングと称される海洋交易民族) のイングランド侵攻 (いわゆるノルマン・コンクエスト) などの推移を経ながら今日の領域国家の基礎がフランク王国よりの踏襲・変質を見ながら確立されていく。また、多少時代を巻き戻してのこととして、欧州でローマ帝国を侵略したゲルマン人の一派たるフランク人のフランク王国が今日にてのドイツ・フランスの所在地域を扼 (やく) しながら教会権力 (ローマ時代よりの宗教的権力) との蜜月関係を構築していたまさにその折たる 7 世紀前半に興ったイスラム勢力、すなわち、[ムハンマドとその後継者らの勢力] によって [唯一神アラーの教えをあまねくも地に広めるためのジハード (聖戦)] が敢行されるに至り、ペルシャ・アラブらの中東領域は新興のイスラム勢力の拠点へと変質。同イスラム勢力が拡大基調を呈しての中、ギリシャやイベリア半島の一部 (今日のポルトガル・スペインの領域) までを蚕食、結果的にギリシャおよびローマ文明の名残りとなる知識体系が 一支配王朝は変転を見ることになったながらもものこととして 一 ギリシャらを含む広大な領域に及ぶことになったイスラム圏内にて中世暗黒時代にも多く保持されることになる。後、イスラム圏に保持されることになったそうした知識体系がキリスト教とイスラム勢力の対立 (戦争) と結びつきもしての人間の移動の中、欧州に「再」流入し、12 世紀より [後にルネサンスと呼ばれる古典古代の思潮を重んじての文化発展の流れ] が促されることになる。

以上の i. から v. の基本的な流れ、ルネサンスに至る基本的な流れに続いての [大航海時代] [絶対王政時代] [近代市民革命期] [列強帝国主義時代] を経て今日の文明世界の基礎が構築されていった。

そうした欧州文明成立のおおよそ大まかな流れの中でホメロス文物は [i. から ii. の区間] にて (その時代の人間の思考方式・気風を決するものとして) 多大な影響力を持っていたとのものとなり、それが v. のルネサンスの過程で今日に至るまでの欧米の文物に多大なる影響力をなすに至ったと述べられているところとなっている (ただし、ルネサンス後も欧州人の内面は最早、[ときに無体なこともやるとの人間的なる多神教の神々] の観念に対して「畏怖」しながらもの賛意を表するようなものではなく、[多神教時代の名残] を [一神教ドグマを容れきってのプログラム拘束的なる会衆] が「息が詰まらない」ようにものスパイスとして摂取してきた程度に留まっている節もある)。

他面、『アエネーイス』に代表されるローマ期古典の方については ii. 以降の

流れでホメロス文物のようなギリシャ期文物と同様の誕生・評価・(ほぼ)忘却ないし評価減・再評価の流れを経ているものになる。

以上が「世界史」というものの常識的な流れ——そこにて「モンキー・モデル(わざと劣った兵器を未開文明に高度文明が与えてご都合主義的なる戦いをほどよくなさせしめるとの式)に通ずる嗜虐的なる背景事情」がないと言えるのか、「家畜(あるいは本質的なことは一切自分自身で考えられないとの種別のロボット人間らでもいい)に与えられる「額面だけの」虚偽世界の由来にとどまる話としての性質」はないと言えるのか、といったことは敢えても述べずに伏せ、すくなくとも日本「でも」高校生程度が「学習」を強いられているところの一般教養のレベルで納得せせるとの世界史というものの常識的な流れ—— というものとなる)。

さて、欧州文明がそこに大なるところとしての淵源を持つローマ帝国、その「全ての道はローマに通ず」との文明の要衝にあったローマにての「教養の中心」となっていたとされる(先述のようにそうも評される)作品たる『アエネーイス』がいかにかホメロス叙事詩『オデュッセイア』と結びついているかについて言及するが、次のような観点で『アエネーイス』とホメロス古典は結びついていると述べられる。

第一。

ホメロス叙事詩『オデュッセイア』とは

「[木製の馬の計略考案]でトロイアに引導を渡した男たるオデュッセウスがトロイア戦争後、漂流を強いられ、艱難辛苦の冒険を強いられるとの内容の作品」

である(：ホメロス『オデュッセイア』粗筋については「あらためて」下にて呈示することとした **出典(Source) 紹介の部 90(8)**を参照のこと)。

対して、ヴェルギリウス叙事詩『アエネーイス』とは

「トロイア崩壊の後、例外的に生き残ったトロイア側の有力武将たるアエネーアース(アイネイウス)が艱難辛苦の旅を強いられる(そして後に「ローマ」となる領域国家をヘスペリア(Hesperia)と表されもしてきたイタリアに建立する——(ローマ人に流布された史観では自分たちがトロイアの民の後裔でもあるとするとのものがあり、その伝ではオオカミに育てられたローマの伝説上の建国者たるロムルスとレムスの兄弟もアイネイウスとその細君ラヴィニアの子孫とのこととなる)——)」

との筋立ての話(フィクション)である(：『アエネーイス』粗筋については下に表記の **出典(Source) 紹介の部 90(7)**を参照のこと)。

お分かりだろうが、

「(攻め手・守り手と違いはあるが)トロイア戦争の関係者が」
「艱難辛苦の旅を強いられる」

との式でホメロス『オデュッセイア』とヴェルギリウス『アエネーイス』は一致性を見ている。

第二。(ここからが一致性がさらに際立っているところなのだが)、ホメロス『オデュッセイア』もヴェルギリウス『アエネーイス』も

「主人公らが同種の怪物達と遭遇し苦しめられる」
「同じくも作中主人公らが[未来への洞察]を得るために冥界下りをなしている」

との内容を有している作品となる（：『オデュッセイア』主人公オデュッセウスが一目のサイクロプスや渦潮の怪物カリュブディスらに苦しめられているように『アイネイアス』主人公アイネイウスも全く同一の怪物ら、サイクロプス・カリュブディスらに苦しめられているとの作品となる。そして、オデュッセウスもアイネイアスも〔未来を知って指針を得る〕ために死者らの領域に赴いている）。

煩瑣であるとは思うのだが、表記のこの出典をこれより挙げることにする。

出典(Source)紹介の部 90(7)

SOURCE 90(7)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典(Source)紹介の部 90(7)にあつては

〔トロイア伝承関連のローマのヴェルギリウス古典『アエネーイス』（先述したように古代ローマ文明の中核古典）がトロイア伝承関連のホメロス古典『オデュッセイア』（先述したように古代ギリシャ文明の中核古典）の影響下にあること〕

についての一般的な言われようを紹介しておくことにする。

基本的なところとして和文ウィキペディア〔アエネーイス〕項目にての現行の記載を抜粋しておく。

構成はホメロスの『イーリアス』と『オデュッセイア』に範を取っている。すなわち、前半部分(1-6巻)の、アエネーアースがイタリアにたどり着くまでに放浪を続ける箇所が『オデュッセイア』的であり、後半部分(7-12巻)の、イタリアにたどり着いたアエネーアースが、土着の勢力と戦う箇所が『イーリアス』的であるとされる。前半部についてはアエネーアースにオデュッセウスが投影されていることは明らかであるが、後半部については『イーリアス』の様々な英雄の属性が投影されている。

(引用部はここまでとする —※—)

([※1:上について一応、補っての表記として]

本稿でも先の段にて呈示しているように(上にての引用部で言及されている)ホメロスの『オデュッセイア』も『イーリアス』も [トロイア戦争関連の物語] となる古典である。につき、本稿の先の段で古典名称『イリアス』(英文呼称イリアッド、語感としては the Song of Ilion ことイリオンの歌といった意味合いのタイトル) と結びつく [イリオス] という語からして [トロイア] と通じている。基本的かつ流布されている媒体で——和文ウィキペディア [イリオス] 項目より本稿の先の段 (出典 (Source) 紹介の部 56) にて抜粋したところとして—— “かつてイリオスのある地域は、スカマンドロス河とニュンペーのイディアの子であるテウクロス (テラモンの子テウクロスとは別) が王として治めており、テウクロイと呼ばれていた。そこへアトラスの娘エレクトラにゼウスが生ませた子であるダルダノスがサモトラケ島からやってきた…(中略)…ダルダノスの後はエリクトニオルスが相続した。エリクトニオスの後はトロスが継いだ。トロスは、自分の名にちなんでダルダニアの地をトロイアと呼ぶことにした” (引用部はここまでとする) との解説がなされているとおりである。

また、上に見るダルダヌスの地ダルダニアが転じてのトロス(トロイア)の地が『アエネーイス』主人公アイネイウスの出身地であること、アイネイウス(伝説上のローマの祖)が表記引用部に見るダルダヌス後裔として落ち延びたトロイア側有力武将であることは即時に確認いただけるとの性質の話である)

(※2:『アエネーアース』が先行するところのホメロス叙事詩の影響を受けているのはその冒頭部からしてそうだとの見解も呈されており、たとえば、先だってもそこよりの引用をなしたとの Project Gutenberg を通じて公開されている 19 世紀著作 The Roman Poets of the Augustan Age(1877年初出:1897年第三版出版/『アウグストゥス帝時代のローマ詩人ら』) にあっては “The double purpose of the Aeneid, and its contrast in this respect with the Homeric poems, is further seen in the statement of the motives influencing the Divine beings by whose agency the action is advanced or impeded. As in the opening paragraph Virgil had the opening lines of the Odyssey in view, in the second, which announces the supernatural motive of the poem *Musa, mihi causas memora, quo numine laeso*— / he had in view the passage in the Iliad beginning with the line / τίς τ' ἄρ σφωε θεῶν ἔριδι ξυνέηκε μάχεσθαι;” (大要として) 「叙事詩『アイネイウス』ありようにあつてのホメロス叙事詩との対称性は神なる存在らの進退姿勢に働きかけるが如くのやりよう、『アイネイウス』冒頭第一文からヴェルギリウスがミューズに語りかけるとの式(詩吟の神ミューズに語りかけ詩の代弁をなさしめるよう求めるとのインヴォケーションの式)をホメロス叙事詩『イリアス』の最初部の文言、 τίς τ' ἄρ σφωε θεῶν ἔριδι ξυνέηκε μάχεσθαι に

倣ってなしてそれを冒頭行に据え置いているとのことにもさらにもって見てとれる」といった表記がなされているところとなる)

(出典(Source)紹介の部 90(7)はここまでとする)

次いで、上にて表記の和文ウィキペディアよりの抜粋部にあって記載されているところ、繰り返すが、

[(ヴェルギリウスの『アエネーアース』にあつての) 構成はホメーロスの『イーリアス』と『オデュッセイア』に範を取っている。すなわち、前半部分 (1-6 巻) の、アエネーアースがイタリアにたどり着くまでに放浪を続ける箇所が『オデュッセイア』的であり、後半部分 (7-12 巻) の、イタリアにたどり着いたアエネーアースが、土着の勢力と戦う箇所が『イーリアス』的であるとされる]

にあつての

[『アエネーアース』 ↔ (類似性発露) ↔ 『オデュッセイア』]

との部を(古典の英訳版からそれぞれ該当部抽出することで)呈示しておく。

出典(Source)紹介の部 90(8)

SECRET 90(8)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典(Source)紹介の部 90 (8) にあつては、

[西洋古典古代文学作品にあつて [冥界下り] (『地獄篇』の主要モチーフ) を描いた代表的作品はホメロスの手になる『オデュッセイア』とヴェルギリウスの手になる『アエネーイス』の二作品となるのであるが (内、『オデュッセイア』はギリシャ期の代表的古典となり、同『オデュッセイア』は後者、ローマ期ラテン文学の源流的作品とも表される『アエネーイス』に内容込みで多大な影響を与えている作品となる)、両作品共々、[トロイア崩壊にまつわる作品]「とも」なり、また、[ダンテ『地獄篇』に多大な影響を与えている作品]ともなっているとのことがある]

このこと —ここ一連の流れにあつての指し示し事項— に関わるところとして

[『アエネーアース』 ↔ (類似性発露) ↔ 『オデュッセイア』の問題に関わるところの古文献記述内容]

のこを典拠として挙げることにする。

(直下、Project Gutenberg のサイトにて誰でも閲覧・取得できるとの THE ODYSSEY OF HOMER — William Cowper (18 世紀ロマン主義派英国詩人) の手になるホメロス『オデュッセウス』訳—— よりの抜粋として)

BOOK IX ARGUMENT

Ulysses discovers himself to the Phaeacians, and begins the history of his adventures. He destroys Ismarus, city of the Ciconians; arrives among the Lotophagi; and afterwards at the land of the Cyclops. He is imprisoned by Polypheme in his cave, who devours six of his companions; intoxicates the monster with wine, blinds him while he sleeps, and escapes from him.

(補つても訳として)

「[第 9 巻 (第九歌と和文では表されがちである) 要約]

ユリシーズ (オデュッセウスのラテン語表記ウリュッセウスがさらに転化しての呼称) はパイアキス人の地に自身がいるのを見出し、そして、彼の冒険の顛末を語り出した。彼、オデュッセウスはイスマロス、キコニアン人 (注: ホメロス版トラキア人) の都市を破壊したこと、その後、蓮食い人 (注: ロータスパゴイ。蓮を食して常に酩酊しているとの伝説上の民) の地に到達したこと、そして、後、二つ目巨人サイクロプスの地に至った (このことをパイアキス人らに説明した)。オデュッセウスはポリュペーモス (一つ目巨人サイクロプスのうちの一体)、彼の航海の同道者を 6 人ほど食らった存在によって洞穴に囚われ、の際に、怪物をワインで酩酊させ、それが眠っている間に目を潰し、そして、同存在から逃れた (このことをパイアキス人らに語った) 」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

(直下、同じくも、Project Gutenberg のサイトにて誰でも閲覧・取得できるとの THE ODYSSEY OF HOMER — William Cowper (18 世紀ロマン主義派英国詩人) の手になるホメロス『オデュッセウス』訳—— よりの抜粋として)

BOOK XII ARGUMENT

Ulysses, pursuing his narrative, relates his return from the shades to Circe's island, the precautions given him by that Goddess, his escape from the Sirens, and from Scylla and Charybdis; his arrival in Sicily, where his companions, having slain and eaten the oxen of the Sun, are afterward shipwrecked and lost;

and concludes the whole with an account of his arrival, alone, on the mast of his vessel, at the island of Calypso.

(補っての訳として)

「[12 巻要約]

ユリシーズは(パイアキス人に対して)彼の物語を続け、[影らの領域] (注: 第 11 巻の舞台となる影と化しての死者らの領域) から [魔女キルケの島] への帰還へとつなげ、さらに、(キルケによってなされた) 事前警告、そして、[サイレンら] (注: 人面鳥身の怪物ら) 魔手よりの逃亡、[スキュラ] (注: 上半身が女で下半身が複数の顔を持つ猛犬との怪物) および[カリュプデイス] (注: 渦潮の怪物)よりの逃亡、[シシリア島に到達、そこで彼の船旅の同道者らが太陽神の牛を屠殺・食したがために(神罰によって)後に座礁・消失の憂き目を見たこと] へと話をつないでいき、そして、カリュプソの島に彼の船のマストにつかまってたった一人到達したことを結論づけるべくもの話として語った」

(引用部の訳はここまでとしておく)

ここまでで

[オデュッセウス(ユリシーズ)は古典『オデュッセイア』にて「一つ目巨人」と遭遇し、[サイレン][スキュラ][カリュプデイス]らとの怪物に悩まされることになった]

との典拠を挙げたわけだが、

[オデュッセウスが降霊術によって死者の領域を訪れた]

このことをもさらに(それもまた『アエネーイス』との同質性に関わるため)呈示しておく。

(直下、英文 Wikipedia[Necromancy]項目にあつての現行記載内容よりの抜粋をなすとして)

The oldest literary account of necromancy is found in Homer's *Odyssey*. Under the direction of Circe, a powerful sorceress, **Odysseus travels to the underworld (katabasis) in order to gain insight about his impending voyage home by raising the spirits of the dead through the use of spells which Circe has taught him.** He wishes to invoke and question the shade of Tiresias in particular; however, he is unable to summon the seer's spirit without the assistance of others. The *Odyssey's* passages contain many descriptive references to necromantic rituals: rites must be performed around a pit with fire during nocturnal hours, and Odysseus has to follow a specific recipe, which includes the blood of sacrificial animals, to concoct a libation for the ghosts to drink while he recites prayers to both the ghosts and gods of the underworld.

(訳として)

「最も古き降霊術(ネクロマンシー)への文献上での言及はホメロスの『オデュッセイア』に認められる。力を持った魔女キルケの案内の下、オデュッセウスはキルケが彼に教えた術の使用を通じ、死者ら靈魂を呼び出すことで差し迫っての彼の故郷への航海にての洞察を(死者らに助言を求めて)得るために地下の国(katabasis)へと赴く。オデュッセウスは殊にテイレシアース(注: スフィンクスの謎かけでも有名なオイディプス王にまつわるギリシャ悲劇、そこでも予言者として登場したギリシャ古典にあつての代表的予言者)の影たる靈魂を呼び出し、その靈魂に質問をなすことを望んでいた。が、オデュッセウ

スは助力なくして予言者(テイレシアース)の靈魂を呼び出すことはできなかつた。叙事詩『オデュッセイア』のその下りは降霊術儀式らの事細かな描写的記述を多々含んでいる。儀式は夜間、火で照らしての穴の周辺にて行われなければならないこと、地下世界(冥界)の霊らと神々に対する祈祷を暗唱している間、霊らが飲むための捧げ物として調理すべくもの動物の血を含む特定のレシピに従わねばならなかつた、とのことらがそうである」

(引用部の訳はここまでとしておく)

ここまででもって(古典の近代英訳本に見る要約部および英文ウィキペディア記述の記述を通じて)次のことが申し述べられること、呈示した。

[叙事詩『オデュッセイア』にてはオデュッセウスが一つ目巨人サイクロプス(ポリュペーモス)に襲われ、サイレンやスキュラ、そして、渦潮の怪物カリュブデイスといった存在らの魔手から逃れ、また、そうした冒険の途上、降霊術を行うとのかたちで(地上にしばしば現出を見た)冥界にも足を運んでいると描かれている]

続いて、上記の『オデュッセイア』内容とヴェルギリウス ——『神曲;地獄篇』にダンテ同道者の亡霊として登場するとのローマ期の詩人となっているとの存在(後述)でもある——の手になるローマ期古典『アエネーイス』が類似性を有していることを示す典拠を挙げておくこととする。

(直下、英文 wikipedia[Aeneid]項目(『アエネーイス』項目)にての Journey to Italy (books 1 –6)の部より掻い摘まんでの引用をなすとして)

(前半部省略)

Heading into the open sea, Aeneas leaves Buthrotum, rounds Italy's boot and makes his way towards Sicily (Trinacria). **There, they are caught in the whirlpool of Charybdis and driven out to sea. Soon they come ashore at the land of the Cyclops.** There they meet a Greek, Achaemenides, one of Ulysses' men, who has been left behind when his comrades escaped the cave of Polyphemos. They take Achaemenides on board and narrowly escape Polyphemos.

[...]

In Book 6, Aeneas, with the guidance of the Cumaean Sibyl, **descends into the underworld through an opening at Cumae; there he speaks with the spirit of his father and is offered a prophetic vision of the destiny of Rome.**

(訳として)

「大洋の方向へと帆を向け、アイネイウスはブトロトゥム(注:今日のアルバニアに該当する一地域)を後にし、イタリアの足(ブーツ)を迂回、シシリー(トリナクリア)に向けて道筋を定めた。**そこで彼ら一行は渦潮の怪物カリュブデイスに足を取られ、海へと引きづりこまれそうになる。間を経ずに彼らはサイクロプスの地の岸辺にたどり着く。**そこにて彼らはアカエメニデス、ユリシーズの配下の者で彼の同士らがポリュペーモス(一つ目巨人)から逃げた折、取り残されることになった男と出会うことになる。彼らはアカメニデスを加え、ポリュペーモス魔手より狭き道を逃げることになる。

…(中略)…

第六の巻にてアイネイウスはクマエのシビュラの案内でもってクマエの入り口から冥界に下る。**そこにて彼は父の霊と語りあい、もって、(将来、アイエイウス**

の子孫が建立する)ローマの運命について予言的なヴィジョンを与えられることになる」

(訳を付しての引用部はここまでとする。尚、『アエネーイス』については岩波文庫より二巻本構成ででている邦訳文庫版を隅々まで目を通して検討している人間として申し述べるが、ここにて抜粋している英語ウィキペディア[Aeneid]項目に誤記の類はないと申し述べられる)

以上、抜粋してきた部に見るようにラテン文学の代表的古典とされる(そうした世評を指し示すべくもの材料も先に挙げている)『アエネーイス』はホメロス『オデュッセイア』と

[全く同種の怪物達(一つ目巨人のポリュペーモスや渦潮のカリュブデイス)と遭遇しその魔手から逃れる]

[同じくも作中主人公が[未来への洞察]を得るために冥界下りをなしている]

との側面を共有している物語となっている(:ただし『オデュッセイア』が冥界を地上に再現するものであるのに対して『アエネーイス』は冥界に直に下っている)。

長くもなったが、これにて

[トロイア関連の古典としての際立っての類似性を呈しての側面]

がギリシャ期古典『オデュッセイア』([ウェスタン・カノン]と呼ばれる一群の欧州文明にとっての最重要文物らの中にあって源流的作品となっている一作) および ローマ期古典『アエネーイス』(ウェスタン・カノンと呼ばれる一群の欧州文明にとっての最重要文物にあってラテン語文学の代表作となっている作品)らに共有されていることを指し示した。

(出典(Source)紹介の部 90(8)はここまでとする)

さて、ここまで問題視してきた『アエネーイス』の方の作者ヴェルギリウスがダンテ『神曲』にての地獄での案内役となっているとのことがある。

ダンテ『神曲;地獄篇』(及び『煉獄篇』)にあっては

[キリスト教が勃興する前の時代の間人かつ未洗礼者であり偉人たりといえども[異教徒の魂]としてヴェルギリウスは天国に入れず、彼の魂は他の古典古代の偉人らと地獄の辺獄(リンボ)に据え置かれており、といった霊体としてのヴェルギリウス(英語版呼称ではヴァージル)がダンテ初恋の人にして『神曲』にて神々しき純粹善の体現者との設定の存在とされている貴婦人ベアトリーチュの請願を受けてダンテの地獄巡りおよび煉獄巡り(天国巡りは除外される)の案内人に抜擢されたとの作中設定]

が採用されているのである。

同じくものことについても下に典拠を挙げておく。

出典(Source)紹介の部 90(9)

SOURCE 90(9)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典(Source)紹介の部90(9)にあつては

[『神曲;地獄篇』では作者ダンテに師として慕われてのヴェルギリウスが「地獄巡りの案内人」として登場してくる]

とのことにまつわつての基本的な解説のなされようを引いておくこととする。

(直下、『地獄篇』の上の通りの冒頭部粗筋についてここでは即時即座に確認出来るところの和文ウィキペディア[神曲]項目よりの抜粋をなすだけで十分と判断、同項目よりの抜粋をなすとして)

西暦(ユリウス暦)1300年の聖金曜日(復活祭直前の金曜日)、人生の半ばにして暗い森に迷い込んだダンテは、地獄に入った。作者であり主人公でもあるダンテは、私淑する詩人ヴェルギリウスに案内され、地獄の門をくぐって地獄の底にまで降り、死後の罰を受ける罪人たちの間を遍歴していく。ヴェルギリウスは、キリスト以前に生れたため、キリスト教の恩寵を受けることがなく、ホメロスら古代の大詩人とともに未洗礼者の置かれる辺獄(リンボ)にいたが、ある日、地獄に迷いこんだダンテの身を案じたベアトリーチェの頼みにより、ダンテの先導者としての役目を引き受けて辺獄を出たのである。

(引用部はここまでとする)

(直下、和文ウィキペディア[ヴェルギリウス]項目よりヴェルギリウスが『地獄篇』『煉獄篇』にて何故、案内役として登場してきているのか、『神曲』作者意図(ダンテ意図)として一般に解説されているところを引く)

ヴェルギリウスはダンテ・アリギエーリに大きな影響を与えている。ダンテは『神曲』においてヴェルギリウスを自分の詩の根源として称え、主人公ダンテの「師」として案内役に登場させた。二人の詩人は地獄・煉獄の2つの世界を遍歴していく。

(引用部はここまでとする)

上にて示していることから窺えるように[冥界下り]をモチーフとするダンテ『地獄篇』については

[[冥界下り]「をも」モチーフとしている叙事詩『アエネーイス』、その執筆を含むヴァージル(ヴェルギリウス)の文筆活動の影響を強くも受けており、それがためにヴェルギリウス(『アエネーイス』作者)がダンテの地獄巡りに師父として慕われる存在として同道している]

との一般的理解がなされているとのことがある (:ヴェルギリウスがダンテの案内人として [冥界下り] をなしているとのところに結節点としての特性が強くも表れている。ちなみにヴェルギリウスの代表作である『アエネーイス』(先述のようにトロイア後日譚がいかようにローマの礎に繋がっているかを描写している古典)は全12巻よりなるとの作品で、冥界下りはそのうち、第6巻が割かれているとのものとなる。12巻の内の1巻となると「文量的には少ないのでは。」ととらえる向きもあるかも知れないが、(イメージしやすくも述べるとし)、手前が(ラテン語からの)英訳版と並んで読了しているとの邦訳版、上下二冊に分かれての邦訳版の岩波文庫より出されている『アエネーイス』からして80ページ近くがその[冥界下り]に関する部に割かれており(手前の検討した邦訳文庫版では345頁から434頁がその部に相当)、決して[文量的に少ないところ]からこじつけているわけではない。尚、『アエネーイス』の冥界下りに関しては[トロイアよりの落人アイネイアスが未来に歩む道、そして、その結果、誕生したローマが歩む道が「克明に予言」されている]との伝で[冥界下りによって未来を知る]とのモチーフによって『オデュッセイア』に見る冥界下り(先述のようにオイディプス王などにまつわる予言で有名な予言者テイレスアースの助言を求めての冥界下り)と共通するところが多分にあり、そこからして複数古典が有機的に結びついていることが観念できるようにもなる——お分かりか、とも思うのだが、ここでの話は愚にもつかぬ文学談義をぶつてのものでもなければ、知識をひけらかさんとするペダン(論証などに必要であるといった以上に学識を鼻にかけるとの[術学家]などと漢字表記されて愚物視される人間類型)としての話をなしているわけでもない。そうしたこと「さえも」が[相応の最期を進呈しようとの計画性実在の具体的かつ多重の指し示し]に関わるところがある、その指し示しが我々全員の生き死に関わる、との認識で苦痛を伴う中、労をとってわざわざ細かくも筆を割いているのである——)。

(出典(Source)紹介の部 90(9)はここまでとする)

以上呈示してきたように、

「冥界下りにて「も」通じあうとの式で酷似した内容を有するヴァージル『アエネーイス』とホメロス『オデュッセイア』(および『イリアス』)の関係から[[『オデュッセイア』→『アエネーイス』→『神曲;地獄篇]]との関係性もが濃厚に想起される」

ようになっている。



Vergil & Dante

ダンテ『地獄篇』近代刊行版に19世紀活動の芸術家ギュスターブ・ドレが提供した挿絵よりの抜粋。挿絵に見るようにダンテは『地獄篇』地獄巡りにあつて始終、ヴェルギリウス(ウェルギリウス)の案内を受けることになっていた(上にて目に付くところからの引用をなしているとおり)。

ちなみに、上掲の図は

[Canto X(第10歌)にあつての[異端者の地獄]で[キリスト教にとっての異端者]が業火猛り狂う墓穴に閉じ込められ、永劫の苦しみを味あわされるさまを描いたもの]となる——尚、[余談めくも、の話]というより[余談そのもの]となるが、ダンテの時代のキリスト教ドグマに支配されたやりようを受けている、でなければ、ドグマチックな思考法を反対話法で啜うとの底意地の悪いブラックユーモアがかつた側面が具現化しているとの『地獄篇』側面が上の挿絵に関わる場所に見てとれもするようなどころがある。その点、『地獄篇』にあつては[ヴェルギリウスはキリスト教を奉じていないとの人間であるが、ヴェルギリスがキリスト「生誕」以前に没した人間であるため、死後、辺獄(リンボ)に置かれ、ダンテの案内をなすぐらいの余裕をもつての死後のありようを呈していた]との作中設定が採用されている(直近にての引用部に表記されている通りのよく知られた『地獄篇』作中設定でもある)。といった[ヴェルギリウスはキリスト前の人間であるから罪に問われない]との設定が採用されている一方でのこととして、呈示の図にて描かれているシーン、異端者が業火渦巻く墓穴の中に永劫に閉じ込められるとのシーンに関わる場所として、異端者の地獄の受刑者の中には「魂は肉体の死と共に滅亡する」との観念を「古代にあつて」唱道していたエピクロスおよびその思潮の崇拜者が含まれている、その教義、魂の不滅性を認めなかったとの教義ゆえに含まれているなどと描写されているとのことがある(については現行の英文

Wikipedia[Epicureanism]項目の“ In Dante's Divine Comedy, the Epicureans are depicted as heretics suffering in the sixth circle of hell. In fact, Epicurus appears to represent the ultimate heresy. ”「ダンテの『神曲』にてはエピクロス主義者は地獄の第六圏(異端者の地獄)で罪を受けている異端者らとして描写されている。実際、エピクロス彼自身も究極の異端の罪を体現した存在としてその場にて描かれている」との記

述程度のものから「も」確認なせるところとなっている)。エピクロスはキリスト以前(要するに「紀元前」、B.C.(Before Christ)の時代)に生きたと伝わっているわけであるから本来ならば、エピクロスもヴェルギリウス Virgil と同様同文に地獄の辺獄リンボ Limbo に拷問なくして据え置かれているとの式が理の流れとなると受け取れるのであるが、であるにも関わらず、彼エピクロスは教義と矛盾することを過去に唱道していたために異端者の地獄で永劫の苦痛渦巻く墓穴入りを強いられている。そこが性質が悪い、(法律施行前に犯した罪を後に施行された法律によって罰せられるような式で)永劫の拷問を喰らうことになっているとの設定が採用されているとのことに加えて『地獄篇』そのもののありよう、[時が止まったがようなブラックホール類似のもの(その描写が実に奇怪なるもの)の中での死ねぬ魂らに対する永遠永劫の拷問]を濃厚に作品のモチーフとしているとのありようから見て性質が悪いと述べるのである。矛盾論理(直近述べたところのヴェルギリウスとエピクロスへの対応の違いに見る論理矛盾)を含む、それでいて奇怪な特性を帯びているとの作品にあって[魂の不滅]が強くも容れられている一方でそれは[罪ある(と認定された)魂への永劫の呵責・断罪]の理念の容認でもある。．．． 述べたいことはお分かりいただけるであろう。閑話休題――。

ここまでの内容でもってして

[西洋古典古代文学作品にあって[冥界下り](『地獄篇』の主要モチーフ)を描いた代表的作品はホメロスの手になる『オデュッセイア』とヴェルギリウスの手になる『アエネーイス』の二作品となるのであるが(内、『オデュッセイア』はギリシャ期の代表的古典となり、同『オデュッセイア』は後者、ローマ期ラテン文学の源流的作品とも表される『アエネーイス』に内容込みで多大な影響を与えている作品となる)、両作品共々、[トロイア崩壊にまつわる作品]「とも」なり、また、[ダンテ『地獄篇』に多大な影響を与えている作品]ともなっているとのことがある]

とのことの典拠の指し示しを終える。

[5-b]

直近[5-a]と振っての段にて示してきたことを前提にしたうえで([ホメロス『オデュッセイア』はラテン文学の源流的作品とも表されるヴェルギリウス『アエネウス』に内容込みで多大な影響を与えており、『オデュッセイア』『アエネーイス』両作品共々、[トロイア崩壊にまつわる作品]「とも」なり、また、[ダンテ『地獄篇』に多大な影響を与えた作品]ともなっている]とのことを前提にしたうえで)、ここ[5-b]と振っての段では

[ダンテ『地獄篇』に多大な影響を与えているホメロス『オデュッセイア』(ギリシャ期代表的古典)とヴェルギリウス『アエネーイス』(ローマ期ラテン文学の源流的作品)の両作品は[トロイア崩壊と関わる作品]であるとのことは直上にて表記したが、それら『オデュッセイア』『アエネーイス』の西洋代表的古典がそれにまつわるものである[トロイア崩壊]の原因と[ヘラクレス 11 番目の功業]及び[ヘラクレス 12 番目の功業]が深く多重的に記号論的結節関係を呈しているとのことがある] (:につき、直上表記の[『オデュッセイア』『アエネーイス』両古典 → (多大な影響を与える) → ダンテ『地獄篇』]との関係性にあつての意味合いが[『オデュッセイア』『アエネーイス』両古典 ← → (トロイア崩壊の原因を介しての記号論的つながりあいが存在) ←→ ヘラクレス 11 功業/ヘラクレス 12 功業] との関係性との兼ね合いで問題になる)

とのことについて「まずもって」指摘しておくべきであるととらえるところを摘示することとする。

その点、

[古典『オデュッセイア』と 古典『アエネーイス』がそれをモチーフとしているところのトロイア戦争]

が [黄金の林檎] によって勃発したものであるとの伝承上の[設定]が存在していることは本稿の先の段で論じ尽くしているとのことである (※)。

(※振り返っての表記として本稿にての [出典\(Source\) 紹介の部 39](#) で引用・呈示したことを再度、ここに挙げておくこととする。

直下、

THE AGE OF FABLE (一世紀以上にわたって米国人の神話理解のための標準書となっていたとされるトマス・ブルフィンチ(日本でもその騎士道ロマンスにまつわる書籍などが岩波書店などから翻訳、刊行されているとの 19 世紀米国の代表的文人 Thomas Bulfinch)の手になる書.岩波書店や講談社学術文庫など出版元を異にして邦題を異にしての複数訳書が存在)

とのオンライン上より誰でも確認できるとのソース(著作権喪失著作を公開しているとの Project Gutenberg のサイトを通じて誰でも全文ダウンロードできるとのソース)に認められるところの記述を再度、引いておくこととする。

(Project Gutenberg のサイトにて公開されている BULFINCH'S MYTHOLOGY THE AGE OF FABLE —— Rev. E. E. Hale との人物による編による版—— にての Chapter XX と付されての部より「再度の」引用として)

Minerva was the goddess of wisdom, but on one occasion she did a very foolish thing; she entered into competition with Juno and Venus for the prize of beauty. It happened thus: At the nuptials of Peleus and Thetis all the gods were invited with the exception of Eris, or Discord. Enraged at her exclusion, the goddess threw a golden apple among the guests, with the inscription, "For the fairest." Thereupon Juno, Venus, and Minerva each claimed the apple. Jupiter, not willing to decide in so delicate a matter, sent the goddesses to Mount Ida, where the beautiful shepherd Paris was tending his flocks, and to him was committed the decision. **The goddesses accordingly appeared before him. Juno promised him power and riches, Minerva glory and renown in war, and Venus the fairest of women for his wife, each attempting to bias his decision in her own favor. Paris decided in favor of Venus and gave her the golden apple,** thus making the two other goddesses his enemies. Under the protection of Venus, Paris sailed to Greece, and was hospitably received by Menelaus, king of Sparta. **Now Helen, the wife of Menelaus, was the very woman whom Venus had destined for Paris, the fairest of her sex. She had been sought as a bride by numerous suitors, and before her decision was made known, they all, at the suggestion of Ulysses, one of their number, took an oath that they would defend her from all injury and avenge her cause if necessary.** She chose Menelaus, and was living with him happily when Paris became their guest. Paris, aided by Venus, persuaded her to

elope with him, and carried her to Troy, … (以下略)

(訳として)

「ミネルバ(女神アテナ)は智恵の女神でもあったわけだが、ある機会にて彼女はユーノー(女神ヘラ)、そして、ヴィーナス(女神アフロディテ)との美人競争に参加するのとてつもない愚行をおかした。

それはこのように起こったことである。

[ペレウスとテティスの婚礼の儀の折、その場には不和の女神たるエリス以外の全ての神々が招かれた。自身の排斥に激怒、不和の女神エリスは来賓らの間に「最も美しきものへ。」と記された[黄金の林檎]を投げ入れた。その挙を受け、ユーノー(ヘラ)、ヴィーナス(アフロディテ)、そして、ミネルヴァ(アテナ)は各々、林檎を我が物であると主張しだした。ジュピター(ゼウス神)はそのようなデリケートな問題を決するのには乗り気ではなく、それら三女神らを見目麗しきパリスが羊飼いとて羊の群れの世話をしていたとのイーデー山へと送る、「誰が最も美しいかを決させしめるべくもの役割」を負わせてのパリスの元へと送ることとした。女神らはそれがゆえにパリス
面前に現われ、各々が勝利の熱情に駆られながらパリスにバイアスがか
かった裁決を下させるべくも試み、ユーノー(ヘラ)はパリスに権力・富を
(彼女を勝たせる対価に)与えると提案、ミネルバ(アテナ)は栄光と戦にて
の名声を与えると提案、そして、ヴィーナス(アフロディテ)は彼の妻に最も
見目麗しき女を与えると提案した。

パリスはヴィーナスを支持することにし、彼女に

[(美人コンテストの勝者の証となっていた)黄金の林檎]

を与えることにしたため、他の二柱の女神は彼パリスの[敵]へと変ずることになった。

ヴィーナス(アフロディテ)の庇護の下、パリスはギリシャに向けて船出し、そして、そこにてスパルタ王であったメネラオス王の歓待を受けることになった。その当時、メネラオス王の妻に収まっていたとのヘレンはその美に秀でての女ぶりよりヴィーナスがパリスのものになるとの運命を与えたま
さにも女であった。(それに先立つところとして)彼女ヘレンは「数多の婚
約希望者に「花嫁に、」と求められていた存在」となってもおり、のような中、
ヘレンが夫たる者を決する前に婚約希望者らはユリシーズ(オデュッセウ
ス)の提案で(ヘレンの夫となった人間と他の婚約希望者らとの後々の禍
根を断つためもあって)「必要となれば、全ての暴力・彼女の歩んだ道に
対する復讐からヘレンを守る」との誓約をなしていた。彼女はメネラオスを選び、パリスが彼らの客としてその場を訪れるまで幸せに暮らしていた。ヴィーナス(アフロディテ)による助力を受けていたパリスはヘレンに彼と駆け落ちすることを説得しおおせことが出来るようになっており、彼女をトロイアに連れ出した —以下略— (後、オデュッセウスがギリシャ諸侯にヘレン絡みで取り交わすことを提案していた誓約に縛られていたためにギリシャ有力諸侯がこぞって参加してのヘレンの(元)夫たるメネラオスの兄アガメムノン王を盟主とする大量のギリシャ勢、アキレウスを最強の力を持った戦士として結集したギリシャ勢がトロイアに來襲することになったというのがトロイア戦争開戦を巡る顛末となる)」

(ここまでを訳を付しての引用部とする)

以上に見るように [黄金の林檎が勝者の証] となっているギリシャ神話の主要な三女神らがエントリーしていたとの美人コンテスト、その場に審判者として招聘されたパリス(トロイア皇子)が

[絶世の美女として知られていたヘレネー(ヘレン)の獲得]

を買収の条件、アフロディテを勝者とする買収の条件として受け入れ、黄金の林檎(不和の女神の投げ入れた黄金の林檎)をアフロディテに手渡したこと、その結果(パリスによるヘレン略取)に既にヘレネーの夫となっていたギリシャのスパルタ王たるメネラーオスが怒り、すなわち、メネラーオスの兄たるアガ멤ノン王を総指揮官にしてのギリシャ諸侯のトロイア攻め、パリスが王子としてロイヤル・ファミリーで重きをなすことになっていたトロイアの攻囲戦が開始されたとの運びとなっているわけである。



(本稿 [出典\(Source\) 紹介の部 39](#) にて挙げたトロイア崩壊をもたらす契機となったとの黄金の林檎を巡るパリスの審判にまつわる図の再掲) 図の上の段はスペイン人画家エンリケ・シモネ(Enrique Simonet)の手になる20世紀初頭のパリスの審判を描いての画となり(黄金の林檎を美の象徴として求めての女神らが自身の美を審判役たるパリスに示さんとしている場をモチーフとしているとの画となり)、下の段はそれぞれ黄金の林檎を巡ってのコンテストにエントリーしていた三女神([アフロディテ=ヴィーナス(パリスにヘレンと添い遂げることを賄賂として約束した勝者の女神)][アテナ=ミネルヴァ][ヘラ=ユーノー])をかたどった彫像、その写真として Project Gutenberg のサイトにて公開されている19世紀後半刊行の著作にて掲載されているとのものらとなる。

(振り返ってももの表記はここまでとする)

さて、

[古典『オデュッセイア』と古典『アエネーイス』がそれをモチーフとしているところのトロイア戦争のそもそもの原因となっている(とのこと、上にての再引用部を通じて再度の指し示しをなしたとの)「黄金の林檎」]

については

(これまた何度も何度も長大な本稿の中にて言及しているところとして)

[ヘラクレスが第 11 の功業にてそれを求めていた —巨人アトラスの娘らがそれを管掌しているため、巨人アトラスに請願をなすとの格好で求めていた— との果実]

「とも」となっている(※)。

(※黄金の林檎がヘラクレス第 11 功業の目標物になっていることについては本稿【出典(Source)紹介の部 39】にて引用なししているところのアポロドーロス(ローマ時代のギリシャ人著述家)によって著されたビブリオテケー(BIBLIOTHEKE)の和訳版(岩波より出されている『ギリシャ神話』/当方所持の文庫版では第 61 刷 99 ページから 101 ページ)よりの再度の引用をなすところとして

「エウルステウスは…(中略)…第一一番目の仕事としてヘスペリスたちから黄金の林檎を持って来るように命じた。これは一部の人々の言うようにリビアにあるのではなく、ヒュペルボレアス人の国の中のアトラスの上にあつたのである。それを大地(ゲー)がヘーラーと結婚したゼウスに与えたのである。テューポーンとエキドナから生まれた不死の百頭竜がその番をしていた。それとともにヘスペリスたち、すわなちアイグレー、エリュティア、ヘスペリアー、アレトウーサが番をしていた。…(中略)…ヒュペルボレアスの地のアトラスの所に来た時に、プロメーテウスがヘーラクレースに自分で林檎を取りに行かないで、アトラスの蒼穹を引きうけて、彼を遣わせと言ったので、それに従って蒼穹を引きうけた。アトラスはヘスペリスたちから三つの林檎をとって来て、ヘーラクレースの所へやって来た」(引用部はここまでとする)

と伝わっているとおりである)

ここまで指し示してきた流れより述べられるところ —属人的主観など一切問題にならぬとのかたちで文献的事実よりのみ述べられるところ— は次のことである。

ホメロス『オデュッセイア』と(『オデュッセイア』と際立つての内容接合性を有する)ヴェルギリウス『アエネーイス』がそれにまつわるところの物語となつていとのトロイア戦争の原因は

[黄金の林檎]

となつてい。

となれば、

[『地獄篇』に多大な影響を与えている作品ら](『アエネーイス』および『アエネーイス』の範となつていところの『オデュッセイア』)

は[黄金の林檎を原因とする戦争]に関連する作品ら、すなわち、

[ヘラクレスの 11 番目の冒険の取得対象となつていたものを原因とする戦争]

に関連する作品らとなつていとも指摘出来る。

そのように、

[ヘラクレスの 11 番目の冒険の取得対象(=[黄金の林檎])となつていたものを原因とする戦争]

に関連する作品ら —ホメロス『オデュッセイア』およびヴェルギリウス『アエネーイス』—、冥界下りをモチーフともしていとの両作品が

『地獄篇』（いいだろうか、本稿にて度々言及してきたように[現代的な意味でのブラックホール理解に近いもの]を「どういうわけなのか」登場させているのがそちら『地獄篇』である）

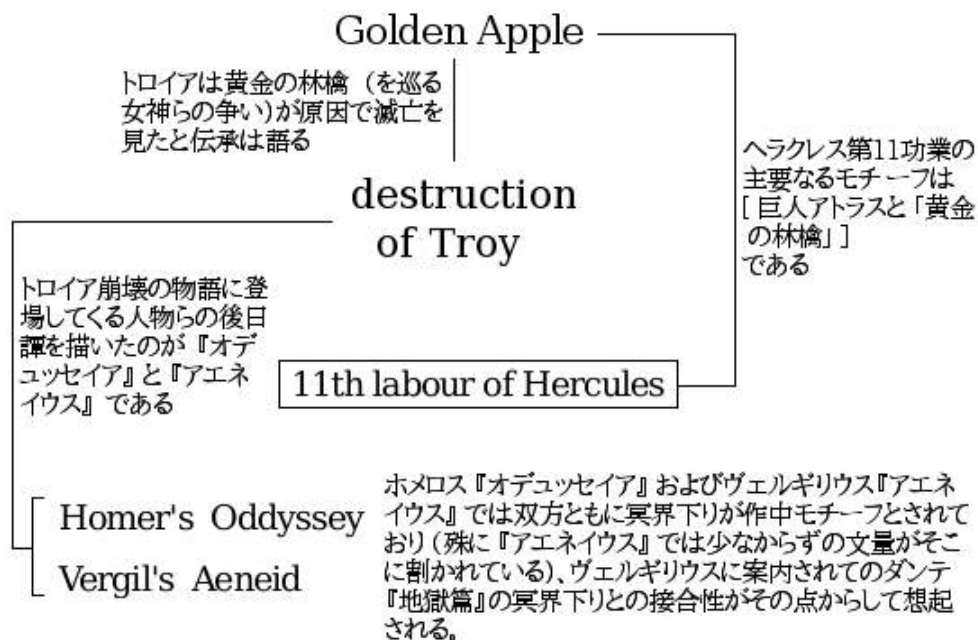
に多大な影響を与えていると指摘できる。

他面、先述なしてきたところの[1]から[4]の通りの[多重的結節点]が『地獄篇』と[ヘラクレスの12功業]の間には存在しているとのことがある。

すなわち、

[ダンテ『地獄篇』の最下層に向けての降下のプロセスには[ヘラクレス10番目の功業にて誅伐された怪物][ヘラクレス11番目の功業(トロイア崩壊の原因でもある黄金の林檎を取得するための功業)にて誅伐された怪物]が功業の順序に準拠するようなかたちで関与しており、最下層に控えるルチフェロ(ダンテ版サタン)からして[ヘラクレスの12番目の功業(冥界下りの功業)にて登場するケルベロス]状の三面構造を呈している(そして、ルチフェロに関しては[3]および[4]の段で摘示してきたように[第10功業・第11功業・第12功業を繋ぎ合わせる冥界の王の牛飼いであるメノイテースを介しての功業らそれら自体からしての連関性][階層の浅い段階で別個に『地獄篇』に登場してくるとのケルベロスにまつわる下りと冥界の王プルートの[サタン絡みの叫び]の結節にまつわる連関性]「も」がケルベロスとの絡みで問題になる)]

とのことがある。



さらに、である。ここ本段(補説3にあつての[5-b]と振つての段)では次の流れの通りの伝承伝存の形態が今日にあつて具現化を見ていること「をも」指し示すこととする。

[神話にて「黄金の林檎を巡る女神達の美人投票」に賄賂の具として用いられた絶世の美女ヘレン、彼女ヘレンは成人して人妻となる前、少女のみぎり「にも」(後にトロイアの王子パリスに連れて行かれてトロイア戦争の元凶となる前に) 特定の者達に

妻とすべくも誘拐されている]

⇒

[少女のみぎりの折のヘレンを略取したのは[アテナ王テセウスとその相棒のペイリオス]である(アテナ王テセウスとその相棒のペイリオスは絶世の美女ヘレンをテセウスの妻とすべくも略取した)]

⇒

[テセウスとその相棒のペイリオスはヘレンを妻とすべくも略取した(そして彼女が成長するまでテセウス母アイトラーの元に留め置いた)と伝わっているが、後、今度は[テセウスのヘレン略取]に付き合ったペイリオスの方がヘレンに釣り合いもする自身の妻を得るべくテセウスと共に[ペルセポネ](ゼウスの娘で冥界の女王)を略取するための冥界下りを二人で敢行したと伝わっている]

⇒

[テセウスとペイリオスはヘレン対価とすべくも神たるペルセポネを略取しようとしたとのその不敵な行為の罰を受ける格好で冥界に拘束され続けることになったと伝わっている]

⇒

[冥界の囚われ人となったテセウスとペイリオスに救いの手を差し伸べたのは[冥界下りの第12番目の功業]に挑んでいた折のヘラクレスであったと伝わっている]

⇒

[(以上より「まずもって」述べられるところとして)

美女ヘレンは【トロイア崩壊の原因となりもしたパリスの略取対象】(ヘレンは黄金の林檎を巡る女神らの美人投票の賄賂に用いられ、結果、略取の許可を得たパリスによって連れ去られトロイア戦争を引き起こした存在となる)であるのと同時に【テセウスとペイリオスの「元」・略取対象】であった。

他面、冥界の女王ペルセポネもヘレンと秤量されるかたちでの【テセウスとペイリオスの略取対象】となっている。

といった中、ヘレンおよびペルセポネを双方釣り合わせるように略取対象としたテセウスとペイリオスとその狼藉のために冥界に拘束され続けることになっていたところその冥界下りの第12功業—先述のようにケルベロス捕縛を主目的としての第12功業—でヘラクレスが救いだそうとしたと伝わっていることより、

【[黄金の林檎あらため絶世の美女ヘレンとの形態をとってのトロイア戦争の原因]と[ヘラクレス第12功業としての冥界下りの物語]の結節点】

が観念できることになり([テセウスとペイリオスの略取対象としてのヘレンおよびペルセポネ]及び[ヘラクレス12番目の冒険の性質]から観念できることになり)、11功業に見る黄金の林檎それ自体とは「また別の側面」から、[(既にその後半部がヘラクレス12功業と多重的に結びついているとのことについて詳述なしの古典である)「冥界下り」のダンテ『地獄篇』←→(濃厚な被影響・影響の関係が存在)←→トロイア戦争関連文物にして「冥界下り」をモチーフにしているヴェルギリウス『アエネーイス』←→(濃厚な被影響・影響の関係が存在)←→トロイア戦争関連文物にして「冥界下り」をモチーフとしているホメロス『オデュッセイア』]

との(最前取り上げもしてきたところの)関係性が[冥界下りのヘラクレス12功業]との絡みで「さらにもってして」想起されるところがある]

⇒

[また、[ホメロス叙事詩『オデュッセイア』—トロイアを木製の馬で陥落させた者、そして、そもそも[絶世の美女ヘレンと黄金の林檎をやりとりしての取引]がトロイア戦争の原因となった盟約の発案者でもある武将オデュッセウスを主人公とする叙事詩—とヘラクレス12功業との関係性]とのことで述べれば、ダンテ『地獄篇』にあつて「も」『オデュッセイア』主人公オデュッセウスが[ヘラクレス10番目の功業](三面のゲー

リュオン登場の功業)にて打ち建てられたと伝わるヘラクレスの柱を越えた段階で地獄行きを強いられ、その行き先が地獄下層8圏(マーレボルジェと呼称される地獄)の一部をなす[謀略者の地獄]であると描写されているとことがある(そして、[謀略者の地獄]はダンテらが(先述の)ゲーリュオンの背におぶわれて降下した先である悪意者の地獄の一面をなすところである)。すなわち、ヴェルギリウス古典『アエネイウス』を介して『地獄篇』との被影響・影響が観念されるとのホメロス叙事詩『オデュッセイア』主人公オデュッセウスは「ヘラクレスが三面のゲーリュオンを討伐することになった第10功業にて打ち建てたヘラクレスの柱」を越えた段階で「ダンテらがヘラクレス第10功業にて討伐されたゲーリュオンの背におぶわれて降下した先たる地獄の第8圏」に落とされた(と描写されている)とのことになる]

(※尚、(これより典拠を指し示していくところの)以上の流れが何故もって重要なのか、について述べれば、[テセウスとペイリトオスというギリシャ伝承上の英雄らの略取対象]となっていた[女神ペルセポネ]という存在が[ルチフェロ](ダンテのサタンに対する呼称)「とも」[ケルベロス](ダンテ版サタンがそうであるような三面構造を呈するヘラクレス第12功業の捕縛対象)「とも」[フリーメーソン団にあつての秘教主張]「とも」結びついている、[化け物がかった巧妙性]でもって結びついているとのことを指摘できるように「なってしまうている」存在であるとのことがあるからである —その点についてはここ[5-b]と振っての部では論じずにさらに続く段にて膨大な文字数を割いて入念にひたすらに出典に依拠しての解説を講じていくこととする—)

それでは表記のこと、繰り返すが、

[神話にて「黄金の林檎を巡る女神達の美人投票」に賄賂の具として用いられた絶世の美女ヘレン、彼女ヘレンは成人して人妻となる前、少女のみぎり「にも」(後にトロイアの王子パリスに連れて行かれてトロイア戦争の元凶となる前に)特定の者達に妻とすべくも誘拐されている](：便宜的にギリシャ文字小文字で【 α (アルファ)の部】とする)

⇒

[少女のみぎりの折のヘレンを略取したのは「アテナ王テセウスとその相棒のペイリトオス」である(アテナ王テセウスとその相棒のペイリトオスは美女ヘレンをテセウスの妻とすべくも略取した)](：便宜的にギリシャ文字小文字で【 β (ベータ)の部】とする)

⇒

[テセウスとその相棒のペイリトオスはヘレンを妻とすべくも略取した(そして彼女が成長するまでテセウス母アイトラーの元に留め置いた)と伝わっているが、後、今度は「テセウスのヘレン略取」に付き合ったペイリトオスの方がヘレンに釣り合いもする自身の妻を得るべくテセウスと共に「ペルセポネ」(ゼウスの娘で冥界の女王)を略取するための冥界下りを二人で敢行したと伝わっている](：便宜的にギリシャ文字小文字で【 γ (ガンマ)の部】とする)

⇒

[テセウスとペイリトオスはヘレン対価とすべくも神たるペルセポネを略取しようとしたとのその不敵な行為の罰を受ける格好で冥界に拘束され続けることになったと伝わっている](：便宜的にギリシャ文字大文字で【 δ (デルタ)の部】とする)

⇒

[冥界の囚われ人となったテセウスとペイリトオスに救いの手を差し伸べたのは「冥界

下りの第12番目の功業]に挑んでいた折のヘラクレスであったと伝わっている] (: 便宜的にギリシャ文字小文字で【ε(エプシロン)の部】とする)

⇒

[(以上より「まずもって」述べられるところとして)

美女ヘレンは[トロイア崩壊の原因となりもしたパリスの略取対象](ヘレンは黄金の林檎を巡る女神らの美人投票の賄賂に用いられ、結果、略取の許可を得たパリスによって連れ去られトロイア戦争を引き起こした存在となる)であるのと同時に[テセウスとペイリトオスの「元」・略取対象]であった。

他面、冥界の女王ペルセポネもヘレンと秤量されるかたちでの[テセウスとペイリトオスの略取対象]となっている。

といった中、ヘレンおよびペルセポネを双方釣り合わせるように略取対象としたテセウスとペイリトオスとその狼藉のために冥界に拘束され続けることになっていたところをその冥界下りの第12功業—先述のようにケルベロス捕縛を主目的としての第12功業—でヘラクレスが救いだそうとしたと伝わっていることより、

[[黄金の林檎あらため絶世の美女ヘレンとの形態をとってのトロイア戦争の原因]と[ヘラクレス第12功業としての冥界下りの物語]の結節点]

が観念できることになり([テセウスとペイリトオスの略取対象としてのヘレンおよびペルセポネ]及び[ヘラクレス12番目の冒険の性質]から観念できることになり)、11功業に見る黄金の林檎それ自体とは「また別の側面」から、

[(既にその後半部がヘラクレス12功業と多重的に結びついているとのことについて詳述なししているとの古典である)冥界下りのダンテ『地獄篇』←→(濃厚な被影響・影響の関係が存在)←→トロイア戦争関連文物にして冥界下りをモチーフにしているヴェルギリウス『アエネーイス』←→(濃厚な被影響・影響の関係が存在)←→トロイア戦争関連文物にして冥界下りをモチーフとしているホメロス『オデュッセイア』]との(最前取り上げもしてきたところの)関係性が[冥界下りのヘラクレス12功業]との絡みで「さらにもってして」想起されるとのことがある] (: 便宜的にギリシャ文字大文字で【ζ(ゼータ)の部】とする)

⇒

[また、[ホメロス『オデュッセイア』—トロイアを木製の馬で陥落させた者、そして、そもそも[絶世の美女ヘレンと黄金の林檎をやりとりしての取引]がトロイア戦争の原因となった盟約の発案者でもある武将オデュッセウスを主人公とする叙事詩—とヘラクレス12功業との関係性]とのことで述べれば、ダンテ『地獄篇』にあつて「も」『オデュッセイア』主人公オデュッセウスが[ヘラクレス10番目の功業](三面のゲーリュオン登場の功業)にて打ち建てられたと伝わるヘラクレスの柱を越えた段階で地獄行きを強いられ、その行き先が地獄下層8圏(マーレボルジェと呼称される地獄)の一部をなす[謀略者の地獄]であると描写されているとのことがある(そして、[謀略者の地獄]はダンテらが(先述の)ゲーリュオンの背におぶわれて降下した先である悪意者の地獄の一面をなすところである)。すなわち、ヴェルギリウス古典『アエネーイス』を介して『地獄篇』との被影響・影響が観念されるとのホメロス叙事詩『オデュッセイア』主人公オデュッセウスは[ヘラクレスが三面のゲーリュオンを討伐することになった第10功業にて打ち建てたヘラクレスの柱]を越えた段階で[ダンテらがヘラクレス第10功業にて討伐されたゲーリュオンの背におぶわれて降下した先たる地獄の第8圏]に落とされたとのことになる] (: 便宜的にギリシャ文字小文字で【η(エータ)の部】とする)

とのことらにまつわっての出典をこれより順次挙げていくこととする。

まずは直上にての枠内表記のことらにあつて便宜的に α (アルファ) から ε (エプシロン)

と振ってのことらの典拠を示すことにする。

出典 (Source) 紹介の部 90(10)

SOURCE 90(10)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典 (Source) 紹介の部 90(10) にあつては

[トロイア戦争の原因の一部をなす美女ヘレンが後にトロイア戦争の原因となるかたちで略取される「前」、少女のみぎりよりテセウス(アテナ王)とペイリトオスによる略取の対象となつていとのたこと] (先に便宜的に α アルファおよび β ベータと振っての部の内容)

[冥界の女王たるペルセポネがヘレンと釣り合わせるべくもの存在として同じくもテセウスとペイリトオスの略取対象となつていたとのたこと] (先に便宜的に γ ガンマと振っての部の内容)

[テセウスとペイリトオスが冥界の獄につながれることになった後に手を差し伸べたのが12功業に挑んでいたヘラクレスであったとのたこと] (先に便宜的に δ デルタおよび ϵ エプシロンと振っての部の内容)

との各点をカバーするところの典拠を一挙に紹介することとする。

最初にオンライン上より即時確認出来るところの現行現時点の英文ウィキペディア[Pirithous (ペイリトオス)]項目の内容を引くことから始める。

(直下、本稿本段執筆時現時点の英文 Wikipedia[Pirithous]項目の記述内容を原文引用なすとして)

Teseus, a great abductor of women, and his bosom companion, Pirithous, since they were sons of Zeus and Poseidon, pledged themselves to marry daughters of Zeus. **Theseus, in an old tradition, chose Helen, and together they kidnapped her, intending to keep her until she was old enough to marry. Pirithous chose Persephone.** They left Helen with Theseus's mother, Aethra at Aphidna, whence she was rescued by the Dioscuri.

On Pirithous' behalf they travelled to the underworld, domain of Persephone and her husband, Hades. As they wandered through the outskirts of Tartarus, Theseus sat down to rest on a rock. As he did so he felt his limbs change and grow stiff. He tried to rise but could not. He was fixed to the rock on which he sat. Then, as he turned to cry out to his friend Pirithous, he saw that he himself was crying out too. Around him was standing the terrible band of Furies with snakes in their hair, torches and long whips in their hands. Before these monsters the hero's courage failed and by them was led away to eternal punishment.

For many months in half darkness, Theseus sat immovably fixed to the rock, mourning both for his friend and for himself. In the end he was rescued by Heracles who had come down to the underworld for his 12th task. There he persuaded Persephone to forgive him for the part he had taken in the rash venture of Pirithous. So Theseus was restored to the upper air but Pirithous never left the kingdom of the dead, for when he tried to free Pirithous, the Underworld shook.

(訳として)

「名にしおう女らの略取者であったとのテセウスと同テセウスと気脈通じた友であったとのペイリトオスらは各々ゼウスとポセイドンの息子であったがため、ゼウスの娘達と結婚しようと堅く約し合った。アテナ王テセウスはヘレン (注:スパルタ王の娘とされるが、ゼウスが実父の半神であるともされる存在) を選んだと伝承にてされ、テセウスとペイリトオスはヘレンが結婚に十分な年齢に達するまで留め置くことを企図しながらヘレンを誘拐した。 (テセウスがヘレンをさらったのに対して) ペイリトオスの方はペルセポネを選んだ。 テセウスらはヘレンをテセウスの母(アイトラー)の元に引き留め —そこより後にヘレンはディオスクローイ(注:ヘレンの兄弟の双子であるカストールとポリュデウケースの両二名)にて救出されることになった(注:そしてトロイア戦争の原因になっている) —、次いで、両男はペイリトオスの方の主導的関与の下、地下へと、ペルセポネと彼女の夫たるハデスの領地(である死者の国)へと冒険に出た。 途上、タルタロス(奈落)の外延部を彷徨っているなかでテセウスは休むために岩の上に座った。途端、テセウスは脚に変化を感じ、そして、硬直のありようを呈するに至った。テセウスは立ち上がろうとするもかなわなかった。テセウスは座った岩に縛り付けられていた。それから友人たるペイリトオスに叫びかけるために振り返ったが、ペイリトオスも同様に叫び声を上げていること、見出すことになった。ペイリトオスのまわりには髪を蛇とし、松明と鞭を手にもった恐るべき一組の[フューリーら] (注:フューリーと表記されているが、その意味するところはギリシャ神話の怒りと復讐の女神たるエリュニーヌスらのことである) が立っていた。これら怪物を眼前にし、二人の豪傑の試みは失敗に終わり、そして、両男は永遠の制裁に身を曝されることになった。

薄暗き中での長き月日の間、テセウスは動けずに岩に固定され、友人および自身のために嘆き続けていた(注:テセウスとペイリトオスは茫然自失の有様で蛇が巻き付く忘却の椅子 chairs of forgetfulness に座り続けていたともされる)。結局、テセウスは[12番目の仕事]のために冥界に下ってきていたヘラクレスによって救われることになった。その場にてヘラクレスはペルセポネにテセウスがペイリトオスの性急な冒険に参加したことを赦すよう請うた。テセウスは上の世界の大気を再び我が物となせるに至ったが、ペイリトオスの方はヘラクレスが同男を自由にしようとした際に冥界が揺れたがため、死者の国を去ることはかなわなかった」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

上にての引用部内容については伝承によって多少異動があるとされる(冥界から生きて出られたかによらず異動があるとされる)が、先にそこよりの引用をなしているアポロドーロス、ローマ期ギリシャ人著述家による『ビブリオテケー』の岩波書店より出されている訳本たる文庫版『ギリシャ神話』には —(当方所持の文庫版第 61 刷のもの、その第 2 巻 V の部 102 ページよりの再度の原文引用をなすとして) — 上とほぼ同文に次のような記載がなされている。

(直下、岩波文庫版アポロドーロス『ギリシャ神話』p.102 よりの引用をなすとして)

「第十二番目の仕事として地獄からケルベロスを持って来ることを命ぜられた。これは三つの犬の頭、竜の尾を持ち、背にはあらゆる種類の蛇の頭を持っていた。…(中略)…地獄の門の近くに来てテーセウスとペルセポネーに求婚してそのために縛られたペイリトゥースとを見出した。彼らはヘーラクレースを見て、あたかも彼の力によって蘇生するように手を差し延べた。彼はテーセウスの手を取って醒ましたが、ペイリトゥースを立ちあがらせようとする、大地が動揺したので、彼は放した(以下略)」

(引用部はここまでとする)

以上、

[同じくもの二人の人間(テセウスとペイリトオス)による略取の誓約の対象者となっていた[ヘレン(トロイア崩壊の原因)]と[ペルセポネ]にまつわる冥界下りの物語]

が[ヘラクレス 12 番目の冥界下りの功業]と接合しているとの物言いが「一般論として」なせるとの典拠を示した — ウィキペディア程度の媒体を通じてでさえ難なくそういう言い伝えが遺されていることを古典(アポロドーロス『ビブリオテケー』)よりの文言引用と共に紹介した — (これにて[α (1 番目のギリシャ文字)から η (7 番目のギリシャ文字)]と便宜的に振ってのことらを取り扱っているとのここ本段にあって[α (1 番目のギリシャ文字)から ϵ (エプシロン、5 番目のギリシャ文字)]と振ってのことらが伝承にまつわる一般論として成立していることの紹介をなしたことになる)。

(**出典(Source)紹介の部 90(10)**はここまでとする)

上にて最低限ながらも典拠紹介したことより、

[トロイア崩壊の物語より派生してのものであり[冥界下り]を作中要素として具備している『オデュッセイア』『アエネーイス』が冥界下りを内容とするダンテ『地獄篇』とつながっていること]

に[ヘレンによるトロイア崩壊伝承を介しもしての「さらなる」連鎖的接合性]を見出すとのこと、そのことに無理はないことが本稿をきちんと検討いただければ理解いただけるかと思う。

その点、ここまでに α (アルファ) から ε (エプシロン) と振ってのことらの最低限ながらも典拠を挙げた段階でそれらと[本稿従前内容]を合算して導出出来るギリシャ小文字にて ζ (ゼータ(第6字母、六番目のギリシャ文字)) と上にて便宜上の分類記号付けてのことをも明言させるがゆえにそうも述べられる(地獄下りのダンテ『地獄篇』と冥界下りをもモチーフとしているトロイア関連古典であるホメロス古典『オデュッセイア』とヴェルギリウス古典『アエネーイス』の繋がり合いがヘレン関連で想起されると述べられる)、すなわち、

[美女ヘレンは[トロイア崩壊の原因となった、パリスの略取対象](ヘレンは黄金の林檎を巡る女神らの美人投票の賄賂に用いられ、結果、略取の許可を得たパリスによって連れ去られトロイア戦争を引き起こした存在となる)であるのと同時に[テセウスとペイリトオスの元・略取対象]であった。

他面、冥界の女王ペルセポネも[テセウスとペイリトオスの略取対象]となっている。

ヘレン(ヘラクレス第11項行の目標物でもある黄金の林檎の[対価])とされた存在／いわば、もの黄金の林檎と対になったトロイア戦争の原因)およびペルセポネの両者を双方釣り合わせるように略取対象としたテセウスとペイリトオスが狼藉のために冥界に拘束され続けるようになっていたところをその冥界下りの第12功業—先述のようにケルベロス捕縛を主目的としての第12功業—でヘラクレスが救いだそうとしたと伝わっていることより、

【[トロイア戦争(の原因)]と[ヘラクレス第12功業としての冥界下りの物語]の結節点】

が観念できることになり([テセウスとペイリトオスの略取対象としてのヘレンおよびペルセポネ]及び[ヘラクレス12番目の冒険の性質]から観念できることになり)、11功業に見る黄金の林檎それ自体とは「また別の側面」から、

【(既にその後半部がいかようにヘラクレス12功業と多重的に通じているのかについて解説してきたとの)冥界下りのダンテ『地獄篇』 ↔ トロイア戦争関連文物たるヴェルギリウス『アエネーイス』 ↔ トロイア戦争関連文物たるホメロス『オデュッセイア』】

の関係性がよりもって[冥界下りのヘラクレス12功業]との絡みで想起されるとのことがある]

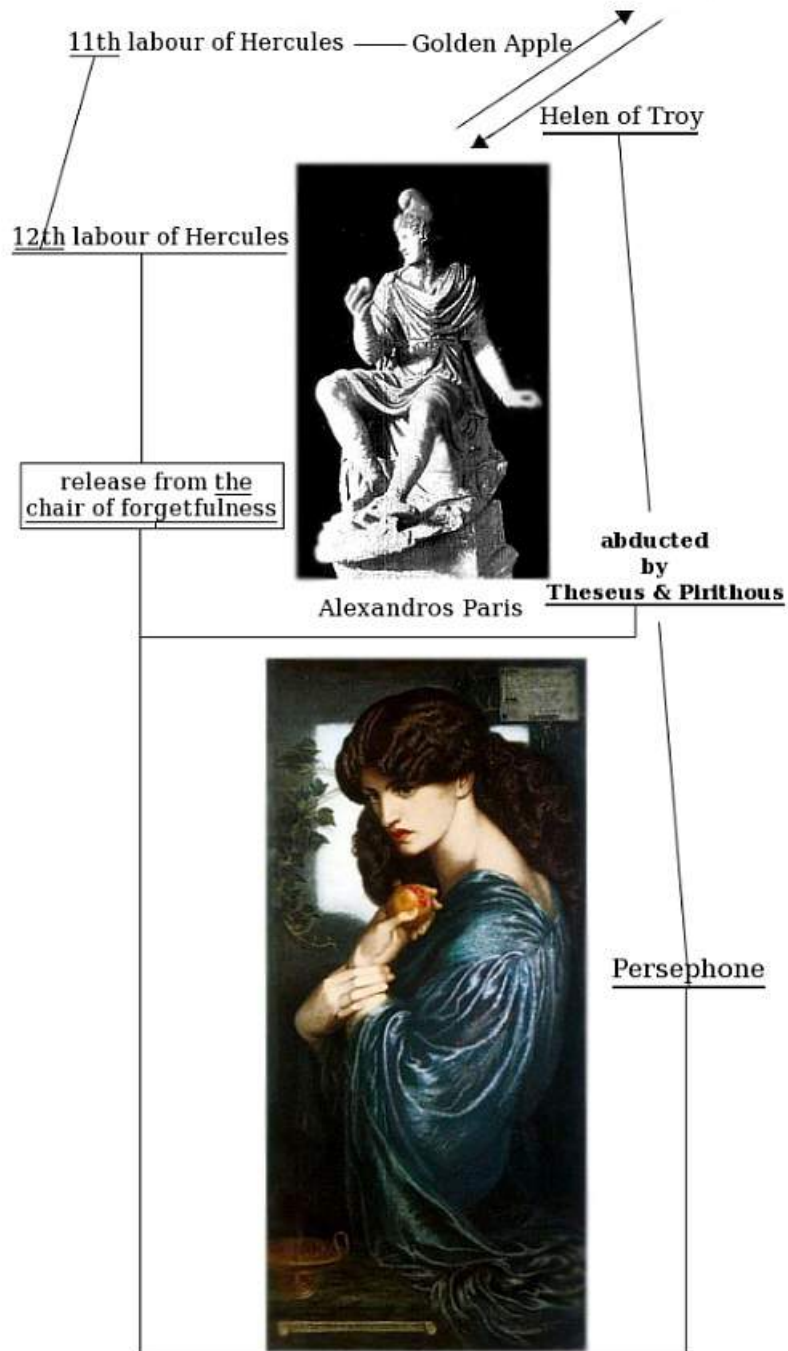
とのことまでをも示したとのかたち「とも」なる(尚、トロイアの崩壊にまつわる古典となっているホメロス『オデュッセイア』とヴェルギリウス『アエネーイス』がいかようにして結びつくかは—現況、[5-b]にての話をなしているわけだが— [5-a]の段にて指し示したこととなり、そのことを所与の前提にしての話をここではなしている)。



Minerva (Athena)

Juno (Hera)

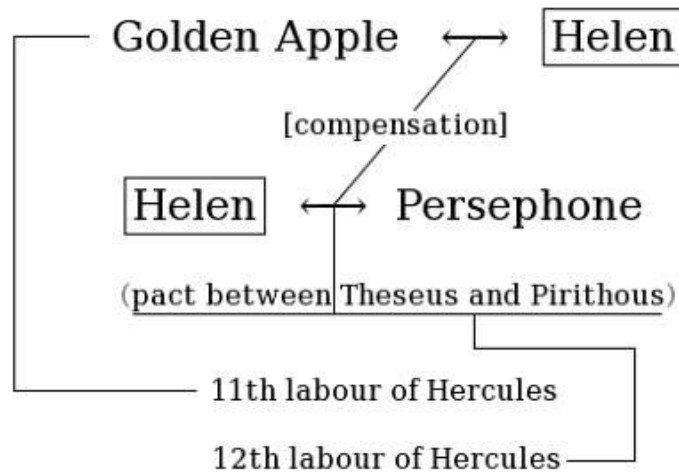
Venus (Aphrodite)



上の図は先に本稿出典 (Source) 紹介の部 39 にて挙げたところの図に多少、焼き直しを加えたものとなる、具体的には[ヘレン]と[ペルセポネ]の関係性を書き加えたものとなる(：ちなみに、図に付したペルセポネはダンテ『地獄篇』のことを問題視してい

る中で意図的に「ダンテ」・ゲイブリエル・ロセッティという画家が19世紀後半にて描いたペルセポネ画を挙げることにしている)。

上の図をもって視覚的に示さんとしていることはここまでの微に入っただけの解説部をきちんと読まれている向きには説明不要なことかとは思っているのだが、下にこの図解部をもってあらためて[整理]がてらの訴求をなしておく。



「本稿の後々の指し示しにあつての殊に重要な部に深くもかかわることである」との観点がこの身、筆者にあるため、「くどい」といった按配にての指摘をなしておく。

ここまで典拠を挙げながらも示してきたこととして、次のようなことがある。

第一に「絶世の美女ヘレン」は(結果的にトロイア崩壊の原因となることになった)[黄金の林檎]の対価としてパリスに提供の提案がなされた存在である([出典(Source) 紹介の部39] .尚、ヘレンの求婚者らのギリシャ諸侯の間では後に禍根残さぬようにとオデュッセウスが提案した誓約、ヘレンの夫の一難事には元ヘレン求婚者全員が協力すべしとの誓約が事前に交わされており、その伝でもヘレンは誓約にまつわる美女であつたとも述べられる)。

第二に、「絶世の美女ヘレン」はパリスに駆け落ちとのかたちで掠(さら)われる前にも略取の対象となつたとのことがあり、の際、ヘレン略取をなしたテセウスらとペイリトオスらは片方がヘレンを手に入れる代償にもう片方の妻君取得にヘレンを取得した方が協力するとの約定を結んでおり、結果的に「ペルセポネの略取」と「ヘレンの略取」が約定に基づき秤で釣り合わせられていたに等しきかたちとなつていたと伝わっているとのことがある([出典(Source) 紹介の部90(10)])。

以上より述べられることは駆け引きの具にされいていたとの「ヘレン」を中間項にして

「トロイア崩壊の原因(黄金の林檎)」

「ペルセポネの略取」

にはつながりが観念されることである(別段複雑な話ではなく、単純な話である)。

さて、そのように結びつきが観念できる「黄金の林檎」「ペルセポネ略取のエピソード」のうち、

「黄金の林檎」のほうはヘラクレス第11番目の功業の取得目標物となつており([出典(Source) 紹介の部39])、

「ペルセポネ略取のエピソード」は(無謀にも人間の身で神を略取しようとした誓約の当事者、テセウスとペイリトオスが冥府の女王への狼藉の罰として囚われていた冥界の忘れ椅子よりヘラクレスにその機会にて救われたとの式で) ヘラクレス第12功業と結びついている([出典(Source) 紹介の部90(10)])。

次いで、(後の段にて指し示す[ペルセポネ]を介しての連続性の問題を抜きにしたうえで)ダンテ『地獄篇』には[トロイア戦争とヘラクレスの12功業の結びつき]に関わるところとして、

[「ホメロス『オデュッセイア』とヘラクレス12功業との関係性」とのこと述べれば、ダンテ『地獄篇』にあつて「も『オデュッセイア』主人公オデュッセウスが[ヘラクレス10番目の功業(三面のゲーリュオン登場の功業)]にて打ち建てられたと伝わるヘラクレスの柱を越えた段階で地獄行きを強いられ、その行き先が地獄下層8圏(マーレボルジュと呼称される地獄)の一部をなす[謀略者の地獄]であると描写されているとのことがある(「謀略者の地獄」はダンテらがゲーリュオンの背におぶわれて降下した先である悪意者の地獄の一面をなすところである)。すなわち、ホメロス叙事詩『オデュッセイア』主人公オデュッセウス(トロイを木製の馬の奸計で滅ぼした謀将)らはダンテ『地獄篇』にあつては[ヘラクレスが三面のゲーリュオンを討伐することになった第10功業にて打ち建てられたヘラクレスの柱]を越えた段階で[ダンテらがヘラクレス第10功業にて討伐されたゲーリュオンの背におぶわれて降下した先たる地獄の第8圏]に落とされたと叙述されているとのことがある]

との側面が伴っていることの指し示しをなすこととする(先んじて便宜的にギリシャ文字小文字で[η(エータ)の部]と振りもしての箇所の指し示しをなすこととする)。

その点、『地獄篇』では次の通りの記述が[文献的事実]の問題としてなされている。

[ダンテらは地獄の最下層(第9層の[裏切り者達の地獄たるコキュートス])に至る前に地獄の第8階層(マーレボルジュと呼ばれる領域)でトロイアを木製の馬の計略で滅ぼしたオデュッセウス(ユリシーズ)らの霊と際会した。その折、オデュッセウス(ユリシーズ)らの霊によって語られたところでは、(ホメロスの『オデュッセウス』に見るギリシャ伝承が翻案されるとの式で)[(彼らオデュッセウスの)船旅の一行はトロイアを滅ぼした後の航海の中、ヘラクレスの柱—ヘラクレスが第10の功業にてゲーリュオンの島に行く前に打ち立てたもので地中海と大西洋を分かちジブラルタル海峡の象徴物でもある—を超えた後、旋風(つむじかぜ)に巻き込まれてオデュッセウスを含めて皆、死亡することとなり、そのまま、トロイアを[謀略]で滅ぼした代償にて[悪意者(詐害者)の地獄]である第八階層の地獄マーレボルジュの[謀略者の懲罰領域]行きを強いられることになった]とのことであつた...]

本稿の先の段で先述してきたようにホメロス叙事詩『オデュッセイア』にあつては

[渦潮の怪物カリュプティス](CERNのLHC実験にて用いられている[ブラックホール生成イベント・シミュレーター]たるCHARYBDISの名称との関係でも本稿の先の段**出典(Source)紹介の部46**にて問題視していたとの怪物)

に船旅の同道者が皆殺しに遭う中でオデュッセウス本人は一人生き残ったとされているのだが(そして、本稿前半部**出典(Source)紹介の部43**で既述のようにオデュッセウスはカリュプソの島、[アトランティス]にも仮託されてきたオギューギア島に唯一人漂着した)、ダンテ『地獄篇』でのオデュッセウスらは

[諸君らは人間として生まれたからには[知]の求道に努めねばならない]

と船旅の仲間達—トロイア戦争で木製の馬の奸計を成功裡に終わらせたオデュッセウス麾下の兵らであるとの仲間ら—に激励の演説をぶつた後でヘラクレスの柱(ジブラルタル海峡)の先の前人未到破領域—ジブラルタル海峡の先を進んだ先にはダンテの時代には未発見であつたアメリカ大陸がある—に足を伸ばした際に遭遇した旋風(つむじかぜ)によって仲間共々地獄落ちすることになったとの設定が採用されているとのことがある(続いての段にて同じくものことの典拠は[引用]にて紹介す

る)。

したがって、である。いさかかくどくもなるが、

「[ホメロス叙事詩『オデュッセイア』主人公オデュッセウス (トロイアに木製の馬の計略の考案で引導を渡した男) らが [ヘラクレスの柱] (第10功業の折のゲーリュオーンの島に行く際に打ち立てられた柱) を超えた段階で 一旋風(ワールウィンド)の襲来を受け—— 地獄行き(ダンテらがヘラクレス第10功業の怪物ゲーリュオンにおぶわれて降下した先たる地獄第八圏への墮地獄) を強いられている] との特段の描写が『地獄篇』にはされている、それがゆえに、[『オデュッセイア』と『アエネーイス』(双方共にトロイア崩壊の物語) に見るトロイア崩壊との結びつき] もが関わるところで『地獄篇』に [ヘラクレス12功業] との接合性を見出すことに「一層」無理はない」

とのことにもなる。

以上のことの出典を挙げることにする。

出典 (Source) 紹介の部 90(11)

SOURCE 90(11)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

[ホメロス叙事詩『オデュッセイア』主人公オデュッセウス(トロイアに木製の馬の計略の考案で引導を渡した男)らがダンテ『地獄篇』に登場を見ており、彼らは[ヘラクレスの柱](第10功業の折のゲーリュオンの島に行く際に打ち立てられた柱)を超えた段階で—旋風(ワールウィンド)の襲来を受け—地獄行き(ダンテらがヘラクレス第10功業にて誅伐されたはずの怪物であるゲーリュオンの背におぶわれて降下した先である地獄第八階層行き)を強いられている]

とこの典拠を挙げることとする。

(直下、Charles Eliot Norton という19世紀米國文豪の手になるダンテ『神曲:地獄篇』英訳版 *Inferno* (オンライン上よりPDF版取得できるのもの)に見受けられる[オデュッセウスとその一行がヘラクレスの柱を越えたところで海に飲まれて地獄行きすることになった部位]よりの原文引用をなすとして—19世紀末のものとして通例、現代英語では用いられない語句([thee]や[ye]といった語句)も含まれているが、といったことを含んでの訳も下に付した—)

CANTO XXVI

And the Leader, who saw me thus attent, said, "Within these fires are the spirits; each is swathed by that wherewith he is enkindled." "My Master," I replied, "by hearing thee am I more certain, but already I deemed that it was so, and already I wished to say to thee, Who is in that fire that cometh so divided at its top that it seems to rise from the pyre on which Eteocles was put with his brother?" He answered me, "There within are tormented Ulysses and Diomed, and thus together they go in punishment, as of old in wrath. And within their flame they groan for the ambush of the horse that made the gate, whence the gentle seed of the Romans issued forth.

[...]

Then moving its tip hither and thither, as it had been the tongue that would speak, it cast forth a voice, and said,

"When I departed from Circe, who had retained me more than a year there near to Gaeta, before Aeneas had so named it, neither fondness for my son, nor piety for my old father, nor the due love that should have made Penelope glad, could overcome within me the ardor that I had to gain experience of the world, and of the vices of men, and of their valor. But I put forth on the deep, open sea, with one vessel only, and with that little company by which I had not been deserted. One shore and the other I saw as far as Spain, far as Morocco and the island of Sardinia, and the rest which that sea bathes round about. **I and my companions were old and slow when we came to that narrow strait where Hercules set up his bounds, to the end that man may not put out beyond. On the right hand I left Seville, on the other already I had left Ceuta.**

'O brothers,' said I, 'who through a hundred thousand perils have reached the West, to this so little vigil of your senses that remains be ye unwilling to deny, the experience, following the sun, of the world that hath no people. Consider ye your origin; ye were not made to live as brutes, but for pursuit of virtue and of knowledge.'

With this little speech I made my companions so eager for the road that hardly afterwards could I have held them back. And turning our stern to the morning, with our oars we made wings for the mad flight, always gaining on the left hand side. The night saw now all the stars of the other pole, and ours so low that it rose not forth from the ocean floor. Five times rekindled and as many quenched was the light beneath the moon, since we had entered on the deep

pass, when there appeared to us a mountain dim through the distance, and it appeared to me so high as I had not seen any. We rejoiced thereat, and soon it turned to lamentation, for **from the strange land a whirlwind rose, and struck the fore part of the vessel. Three times it made her whirl with all the waters, the fourth it made her stern lift up, and the prow go down, as pleased Another, till the sea had closed over us.**”

(補いもしながらの拙訳として)

「[第26歌]

師父たるヴェルギリウスは私(ダンテ)を見、
「これら炎に包まれているのは靈魂だ。それらはいずれもが自身(の芯)が焼か
れているとの炎、その火勢に囲まれての似姿を呈しているのだ」
と言いもする。

「師よ。」

それに応えて、私(ダンテ)は
「貴方(訳注:原文に見る thee は[汝]を意味する英語にての古語である)より
そうもお聞きしましたことますます合点がいくようになりはしましたが、エテオ
クレが彼の兄弟と一緒にたにされ薪に供されているとの場所より上がっての地
点に見えるところ、その上方より分かれてやって来ているとのその[炎としての
靈魂]の中にいるのは一体、誰なのでしょうか」
と尋ね述べた。

師ヴェルギリウスが、に対して、言うところでは
「あちらにて責めさいなまれているのは[ユリシーズ](訳注:オデュッセウスのこ
と)と[ディオメデース](訳注:トロイア戦争にあつてのオデュッセウスの僚友
にあたるギリシャ側の将)であり、あの者らは憤怒にまみれてのありし日そう
であったようなかたちで罪過を罰する場へと歩んでいる。あの者らは —そこは
[ローマ人の心優しき祖]がそちらより一歩踏み出すに至ったところとなるわけ
だが— 城壁に[入り口]を造り出すに至った馬(トロイアの木製の馬)に伏兵と
して潜んでいたとのやりようがゆえに火の中であも喘ぎ苦しんでいるのだ
(訳注:ダンテ案内役として『地獄篇』に登場を見ているヴェルギリウスの代表
作は『アエネーイス』であるが、同作『アエネーイス』は[ローマ人の祖がトロイア
の落ち武者・落人一行である]との作中設定を有しており —本稿にての**出
典(Source)紹介の部 45**(に付しての補足の部)および**出典(Source)紹介の部
90(7)**を包摂するところにて既述——、ここではそうしたヴェルギリウス古典に
基づいての記載が(「オデュッセウスがローマ人の祖先の地の城壁に馬で入り
口を作った」との式で)ダンテ同道者となっているヴェルギリウス発言としてなさ
れている)。

…(中略)…

しゃべらんとする舌のようにその炎の先端がここ向こうへと動き、[炎](訳注:
炎に包まれての靈体としてのオデュッセウスのこと)が声を発して口をきくとのこ
とをなした。

「一年以上ガエタ、そう、アイネイスが名を与える前のその地にて我らを逗留
なさしめていた[魔女キルケ](訳注:叙事詩『オデュッセイア』に登場するオ
デュッセウスの船旅に関わった魔女)のところより発った折、我が子(訳注:
オデュッセウスの最愛の息子テレマコスのこと)や我が老父への哀憐の情、
そして、ペネロペ(訳注:オデュッセウスの細君)を喜ばせていたはずであろ
う自然ジネンたる愛情でさえも男達の悪徳、剛勇武勇譚の種としての[世界に

て経験を積みねばならぬという内なる情熱]を屈せさせしめることがなかった。

それゆえ我は深く広大なりし海に、船一つ、離散こそしはしなかったものの数僅少になっていたとの仲間とでもって漕ぎ出すことになった。

あちらの岸ではスペインを、こちらの岸ではモロッコを、とまみえることをなし、そして、サルディニア島および大洋が懐深くも水浴させているとの残りの島々をも見聞するとのことなしました。

ヘラクレスが彼に由来する境界線（訳注：ジブラルタル海峡の象徴物たるヘラクレスの柱のこと）を打ち立てた狭き海峡に達したとき、我とわが同僚らは古い、既に動作緩慢となっていた。

そこで右側にてはセビリアを後にし、反対側にてはセウタを後にすることとなった（訳注：ヨーロッパ側のセビリアを右側にして前方に進み、アフリカ側のセウタを左側にして前方に進んだ、とのことだが、それはすなわち、ジブラルタル海峡——ヘラクレスの柱——を通り過ぎ、アトランティック・シー、大西洋に漕ぎ出したことを意味している）。

「おお、我が兄弟たちよ。」

我は言った。

「幾百千の苦難を越え、西の地へと辿り着きし者達、こここれに至り、[今や汝ら自身の[感覚の不寝番]であり続けることがほとんどない]（訳注：生きて感覚を保っていられる期間が短い、[余生が短い]とのことの意であると解される）との汝らは（それであるからこそ）経験、人跡未踏の地、陽の向かう先へ先へと追って向かうとのその経験を否定しようとしないう者らでもある。汝ら起源を考えてみよ。汝らは野にあつての獣らのようにその生をかたちづくられたとのものではなく、美と知識をば追い求める者達であろう」

この短き演説をもってして我は我自身も後ろへとはほとんど引き返しがたい、そういった按配での方向へと同僚ら熱情を駆り立てた。

そして、常に左の方向をとるようにし、オールを狂的飛行をなすがごとくの翼のように漕ぎ、もってして、船尾を朝の方向に向けた。[夜]は今や(地の)他の極の側のすべての星々に臨んでおり、我々の側、それはとても低いところがあり大海原から[夜]がのぼりくるとのことはない（訳注：[夜の帳が落ちる]との日本語的表現もあるが、ダンテの時代の天動說的観点からまさしくも夜と昼のサイドで「別々の」空模様が向こうよりやってきて具現化を見ているとの描写とも「とれる」）。

我々が奥まっつての途に入って以来、遠方を臨んでおぼろげなる山、我が見たこともなかったぐらいに高くも見えたとの山が見えた折 月下、光が五度輝き、同じくもの回数で消滅を見た。我らはそれにて喜ばされたが、すぐにそれは嘆きへと転じました。

というのも、奇妙なる陸地より、[旋風]（訳注：つむじかぜ。渦巻き状の風勢にて襲いかかってくるとの強風）が巻き起こり、船の前面部を打ち付けたからである。海の水らとともに三度の旋風が船体を回転させ、他なる存在が喜んでいるように四度目のそれで船尾を持ち上げ船首を沈めさせ、そこで海が我々をその下へと覆い閉ざすことになった」（訳注：ユリシーズ＝オデュッセウスの語りはここまでとなり、この語りの終端部をもって『地獄篇』第26歌は終わる）

でもダウンロードできるとのもの— に拙訳(込み:細々とした注記)を付しての引用部はここま
でとしておく)

以上抜粋したオンライン上より確認できるとの英訳版に対応する邦訳版『地獄篇』の該当部、岩波
文庫から出されている山川丙三郎訳の『地獄篇』よりの原文抜粋も下になしておく —— 下にて表記の
通りの訳が大正期にあってなされているとのこと、すなわち、そういう[文献的事実]が存するとのこと
(先にも申し述べているように) 青空文庫プロジェクトを介してオンライン上より誰でも確認できるとのこと
である——。

(直下、岩波文庫刊行のそちら訳本が現在も広く書店にて流通しており、かつもって、オン
ライン上よりも青空文庫プロジェクト経由で内容全文確認できるようになっているとの山川丙
三郎の手になる『神曲 —地獄— 上』第26曲の部よりの引用をなすとして)

導者はわがかく心をとむるをみていひけるは、火の中に魂あり、いづれも己を
焼くものに卷かる
我答へて曰ひけるは、わが師よ、汝の言によりてこの事いよいよさだかになりぬ、
されど我またかくおしはかりて既に汝に
エテオクレとその兄弟との荼毘(だび)の炎の如く上方うへわかれたる火につま
まれてこなたに来るは誰なりやといはんとおもひたりしなり
彼答へて我に曰ふ、かしこに苛責せらるゝはウリッセとディオメーデなり、ともに
怒りにむかへるごとくまたともに罰にむかふ
かの焰の中に、彼等は門を作りてローマ人(びと)のたふとき祖先をこゝよりいで
しめし馬の伏勢(ふせぜい)を傷(いた)み
…(中略)…
年へし焰の大なる角、風になやめる焰のごとく微かすかに鳴りてうちゆらぎ
かくて物いふ舌かとばかりかなたこなたに尖(さき)をうごかし、聲を放ちていひ
けるは
一年(ひとゝせ)あまりガエタ(こはエーネアがこの名を與へざりしさきの事なり)
に近く我を匿(かくせ)しチルチェと別れ去れる時 子の慈愛(いつくしみ)、老
いたる父の敬ひ、またはペネローペを喜ばしうべかりし夫婦(めをと)の愛すら
世の状態(さま)人の善悪を味はひしらんとわがつよきねがひにかちがたく
我はたゞ一艘の船をえて我を棄てざりし僅かの侶ともと深き濶き海に浮びぬ
スペイン、モロッコにいたるまで彼岸をも此岸をも見、またサールディニア島及
び四方この海に洗はるゝほかの島々をもみたり
人の越ゆるなからんためエルクレが標(しるし)をたてしせまき口にいたれるころ
には我も侶等もはや年老いておそかりき、右にはわれシベリアをはなれ左には
既にセッタをはなれき
我曰ふ、あゝ千萬(ちよろづ)の危難(あやふき)を経て西にきたれる兄弟等た
ちよ、なんぢら目を追ひ
残るみじかき五官の覚醒(めざめ)に人なき世界をしらしめよ、汝等起原もとを
おもはずや
汝等は獸のごとく生きるため造られしものにあらず、徳と知識を求めんためなり
わがこの短き言(ことば)をきゝて侶は皆いさみて路に進むをねがひ、今はたと
ひとゞむとも及び難しとみえたりき
かゝれば艫ともを朝にむけ、櫂を翼として狂ひ飛び、たえず左に舟を寄せたり
夜は今南極のすべての星を見、北極はいと低くして海の床(ゆか)より登ること
なし
我等難路に入りしよりこのかた、月下の光五度(いつたび)冴え五度消ゆるに

及べるころ

かなたにあらはれし一の山あり、程遠ければ色薄黒く、またその高さはわがみし山のいづれにもまさるに似たりき

我等は喜べり、されどこの喜びはたゞちに歎きに變れり、一陣の旋風新しき陸(くが)より起りて船の前面おもてをうち

あらゆる水と共に三度(みたび)これに旋めぐらし四度(よたび)にいたりてその艫(とも)を上げ舳(へさき)を下せり(これ天意(みこころ)の成れるなり

(山川丙三郎の手になる『神曲 一地獄— 上』第26曲よりの引用部はここまでとする。尚、良くも表せば、「蒼古として趣がある」、悪くも表せば、「黴(かび)臭さがいかにも漂ってくる」とのレベルで文体が古く、それがゆえ、全くもって内容把握なしがたい」との上の『地獄篇』に対する大正期訳(オンライン上より誰でも確認いただけるとのものにして現在現況も同じくもの訳でもってして岩波文庫『地獄篇』訳本が書店にて流通しているとのもの)については直上にて挙げているところの「19世紀英訳版に対する拙訳」がその「現代訳」ともなるので、[文献的事実]の問題につき適切性判断・内容確認する必要をお感じになられたとの向きは両者を見比べてみればいいたろう)

(※以上、双方オンライン上より全文確認できるとの近代刊行の英訳版および和訳版より引用したとおりの経緯、

[冒険願望がゆえにオデュッセウスら一行が船旅を続け、結果、(老いてなおのこととして)、ヘラクレスの柱 —ジブラルタル海峡— を越えて大西洋にオールを漕いであらた新世界を目指していた折、旋風に襲われて、転覆・沈没(全員溺死)との憂き目に遭ったとの経緯]

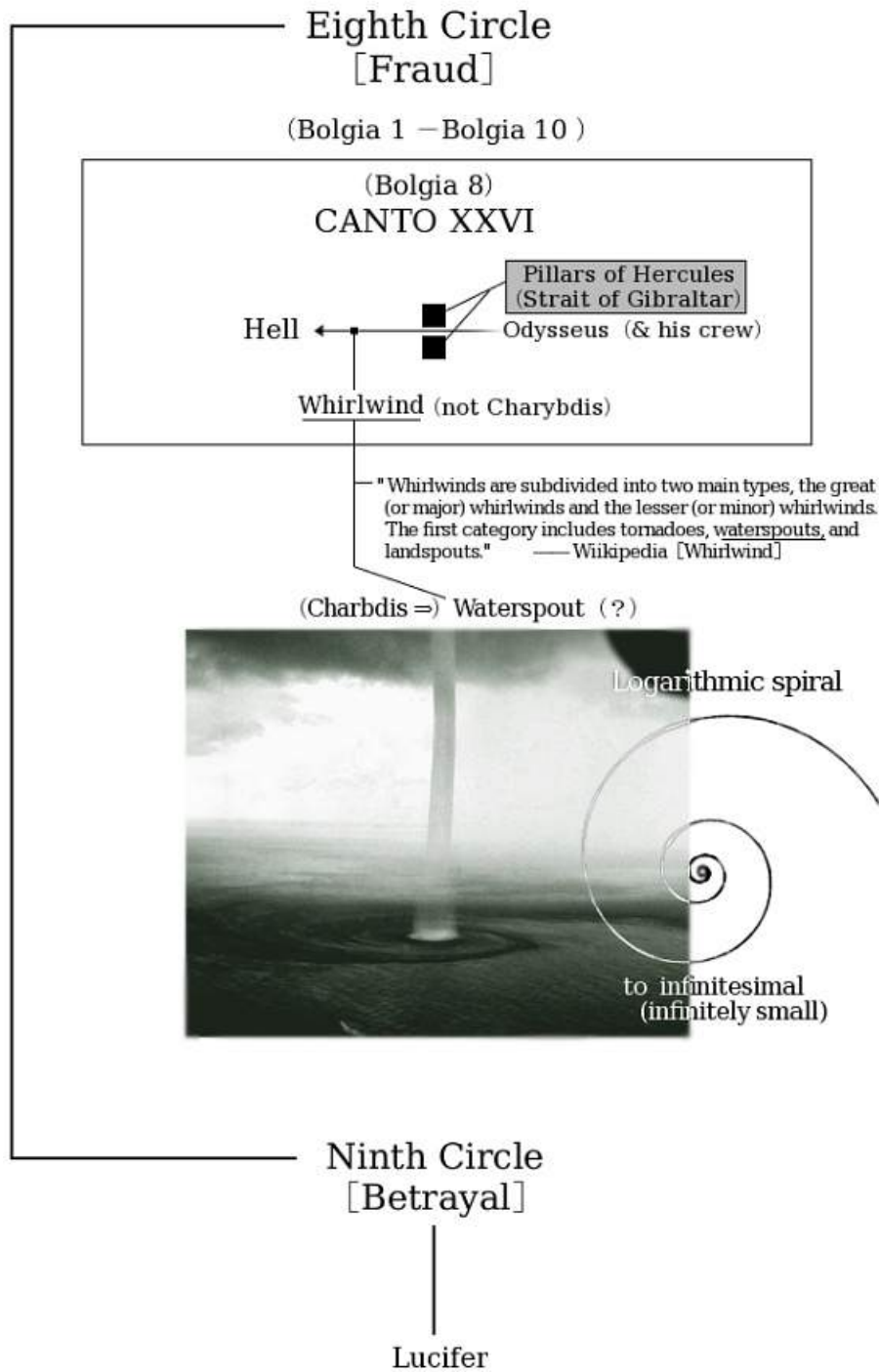
でもってオデュッセウスことユリシーズらが落とされた地獄が地獄下層第8圏、マーレボルジェと呼ばれる部にての[謀略者の地獄]となっている。

同地獄の概要、謀略をなした者達が自らを責め苛む炎に包まれた魂として彷徨を強られるとの[引用部に見る通りの)概要]については英文 Wikipedia[Odysseus]項目にて

“ Dante, in Canto 26 of the Inferno of his Divine Comedy, encounters Odysseus ("Ulisse" in the original Italian) near the very bottom of Hell: with Diomedes, he walks wrapped in flame in the eighth ring (Counselors of Fraud) of the Eighth Circle (Sins of Malice), ”

「『神曲;地獄篇』26歌にてダンテはオデュッセウス(原語イタリア語にてのウリッセ)と地獄の底の近くで出会ったところ、(オデュッセウスは)ディオメデスを伴い、悪徳の罪の地獄たる地獄第8圏にての第8の環たる[虚偽なしての助言者の地獄](訳注:第8圏の地獄たるマーレボルジェは10の部にて区画化されており、ユリシーズら収容部はその第8の部 Bolgia 8となる)を炎に包まれるとの格好で歩いていた」

と記されているとおりである —尚、オデュッセウスら収容の地獄の第8圏(総称してマーレボルジェと呼ばれる領域)にダンテらがゲーリュオーン(ヘラクレス10功業にて誅伐されている怪物)に背負われて降下しているとの点については本稿にあっての先行するところの部、[出典\(Source\)紹介の部 90](#)にて基本的解説のなされようを紹介しているところでもある—)



上の図はオデュッセイア(ユリシイズ) ——本稿にて何度も何度もトロイアを滅した木製の馬の考案者としての特質につき言及してきたとの伝承上、極めて有名な謀将——らの一行が

[ヘラクレスの柱](ジブラルタル海峡同等物/[出典\(Source\)紹介の部90](#))にて解説しているようにヘラクレスがゲーリュオンを結果的に殺した第10番目の冒険にて打ち立てている二本の柱は地中海と大西洋の境をなす海峡、ジブラルタル海峡の比喩的象徴物ともなる)

を越えた段階でワールウィンド(旋風)に巻き込まれて樺船沈没・乗員全員溺死のプロセスを経て地獄行きを強いられるとの粗筋が地獄篇第26歌(CantoXXVI)にて具現化を見ていること、その意味性を視覚的に訴求するために付したとのものとなる(:オデュッセウスことユリシイズらがヘラクレスの柱を越えて旋風に巻き込まれて落ち込んだ地獄の階層は第8階層(詐害者の地獄)だが、そのすぐ真下に地獄の最下層、[裏切り者の地獄]たる第9階層が控えているというのが『地獄篇』の作品設定である)。

ここまででもってして

[【ホメロス『オデュッセイア』とヘラクレス12功業との関係性】とのことで述べれば、ダンテ『地獄篇』にあっても『オデュッセイア』主人公オデュッセウスが[ヘラクレス10番目の功業(三面のゲーリュオン登場の功業)]にて打ち建てられたと伝わるヘラクレスの柱を越えた段階で地獄行きを強いられ、その行き先が地獄下層8圏(マーレボルジェと呼称される地獄)の一部をなす[謀略者の地獄]であると描写されているとのことがある。すなわち、ホメロス叙事詩『オデュッセイア』主人公オデュッセウス(トロイを木製の馬の奸計で滅ぼした謀将)らは[ヘラクレスが三面のゲーリュオンを討伐することになった第10功業にて打ち建てられたヘラクレスの柱]を越えた段階で[ダンテらがヘラクレス第10功業にて討伐されたゲーリュオンの背におぶわれて降下した先たる地獄の第8圏]に落とされたことになる]

このことの典拠となるところを指し示した(:便宜的にギリシャ文字小文字で[η(エータ)の部]と分類付けてのことと同義同文なることが古典にて見受けられる記述それのみから当然に導出できるとのことを示した。それにつきゲーリュオンが地獄第8圏への降下と関わっているとのことについては(現況、[5-b]の段にての記述をなしているわけだが)[1]の段にて示したことである)。

直上、古典よりの原文引用にて文献的事実の問題について摘示したことについて強調したきことらがある(のでそれらについてここにて筆を割く)。

第一に強調したきことは次のことである。

「『地獄篇』最下層、[裏切りの地獄](第九圏)の一つ前の階層の[詐害なした者の地獄](第八圏)、計にして10の[マーレボルジェ]——(日本語では悪の囊といったかたちで呼称されることが多い/「囊」との和訳通用化表現に認められる字句充ては背囊[はいのう]との言葉が示すように「囊=袋ごとの分別」といったニュアンスで業深き諸種の悪人らがまとめられているとのニュアンスである)——に分割されての[「第8の」マーレボルジェ(悪の囊「ふくろ」)]では

[ヘラクレス10功業に登場のヘラクレスの柱(著名なジブラルタル海峡仮託物でヘラクレスがゲーリュオンの牛の確保の功業を成し遂げる過程で道中、海峡を割って建立したとされる伝説的モニュメント)]

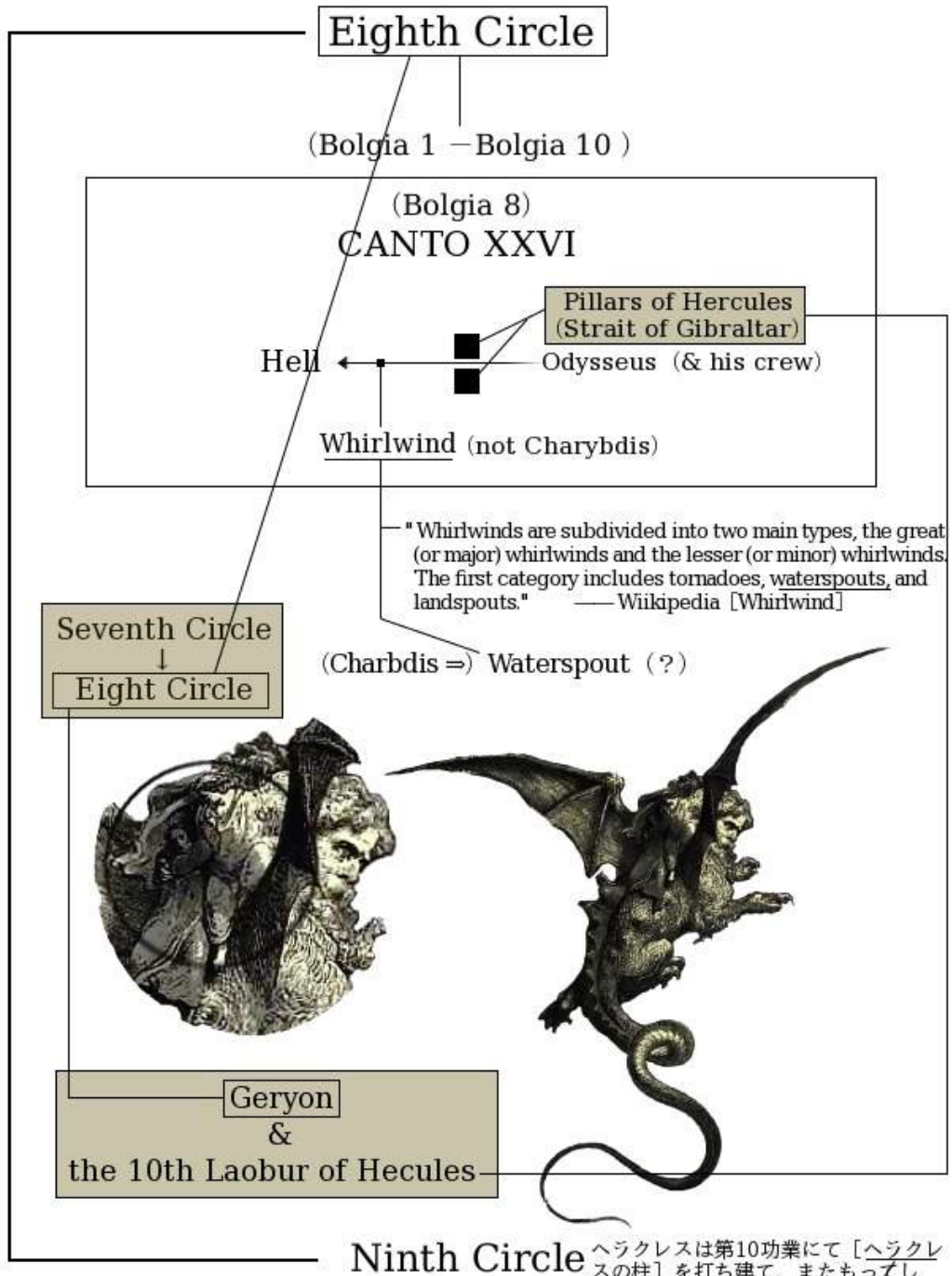
がオデュッセウス一行にとってのまさしくもの[冥土への分水嶺]となっているとの式で目立つように描かれているとのことがある——(ダンテらはマーレボルジェ(地獄第8階層)に[ヘラクレス第10功業]登場のゲーリュオンの背におぶわれて降下したと描写されるわけだが(出典(Source)紹介の部 90)、そうもして降下したマーレボルジェの踏破過程で(ゲーリュオンが討伐されることになった)[ヘラクレス第10功業]登場のヘラクレスの柱を越えた段階で地獄行き(の中のマーレボルジェー領域行き)を強いられたオデュッセウスらと際会していると描写されるわけである)——。

そして、そうもした[10番目の功業にて登場の柱とオデュッセウスらの地獄行き]についての叙述がなされてからさして間を経ずに『地獄篇』では[11番目の功業にて登場の巨人アンタイオス]の助力でダンテらが地獄降下をなしているとの描写がなされている。

以上のことと

[地獄篇地獄最下層に控えているサタン(ルチフェロ)にヘラクレス第12功業登場のケルベロス類似の要素が見出せる]

といったことらを複合顧慮することで「一層」、ヘラクレス12功業と『地獄篇』の結節点が観念されることがある(10番目の功業にての象徴物が登場を見た後、11番目の功業にての怪物によって地獄最下層降下を見ているとすることがあるがゆえに、である)



ゲーリュオンにおぶわれて降下した第8圏、その地獄行脚を経てからダンテらは巨人アンタイオス(ヘラクレスの第11功業に際して誅伐されたとされる巨人)におぶわれ地獄最下層、裏切り者の地獄に降下する。その「明示されての」「重力の中核」に控えるのが三面構造に翻案されてのルチファーとなる。

ヘラクレスは第10功業にて「ヘラクレスの柱」を打ち建て、またもってして、三面三対の身体構造を有しているゲーリュオンを殺害したとされる。ダンテ『地獄篇』では紳士然とした顔に蛇の胴体、蠍の尾などが融合した存在へと翻案されたゲーリュオンにおぶわれるかたちでダンテらは地獄の第8圏マーレボルジェ、非害者の地獄へと降り立つ。その第8圏「第8の囊」にてダンテらは「ヘラクレスの柱を越えて旋風に襲われて死んだオデュッセウスら」に際会する。

第二に強調したきことは次のことである。

「オデュッセウスはトロイアに引導を渡した[木製の馬]の考案者であるが、同オデュッセウスが引導を渡したトロイアとの兼ね合いでは既に指摘してきたように【**【トロイア崩壊にまつわる古典（ホメロス『オデュッセイア』／ヴェルギリウス『アエネイダス』）との関係性**】 および **【トロイア崩壊のプロセス（オデュッセウスがギリシャ諸侯らに提案しての誓約が悲劇的相乗作用を呈したとの旨が描かれる「黄金の林檎とヘレンを巡るやりとり）」との関係性**】

から「も」『地獄篇』とヘラクレス 12 功業の結びつきが観念されるとのこともまたある（黄金の林檎・ヘレン・ペルセポネといったことがそこにて摘示可能な媒質であること、先立っての段にて指摘してきた）。

といったことに加えてのこととして、『地獄篇』それ自体に[トロイア崩壊の物語]にての重要人物（木製の馬の考案者オデュッセウス）の最期が「別個に」ヘラクレス功業と結びつけられるように描かれているのであるから[トロイアとの絡みでの『地獄篇』にあってのヘラクレス功業との結びつき]が（相互関連性が強まってのところとして）よりもってして観念されることになる」

第三に強調したきことは、（その点についての遺漏なくもの理解にはここでの話を包摂する**補説 3**に先行する**補説 2**の内容の把握が必須となるところなのだが）、次のこととなる。

「本稿にての先の段で入念に指し示さんとしてきたところとして、**【対数螺旋構造（いわゆる渦巻き螺旋構造）と「黄金の林檎」の双方に関わるところの象徴体系・事物らがどういふわけなのか「ブラックホール生成挙動と結びつく」とされる実験】と多重的に接合している**

とのことが指摘できるようになってもいる。

他面、『地獄篇』ではその最下層、人類の裏切り者らの地獄にて罪人らを永劫に粉碎し続けている存在として登場を見ているルシファーの領域に今日的な視点で語られるところのブラックホールと類似の特性が具現化を見ているとのことがある（**【出典（Source）紹介の部 55】**から**【出典（Source）紹介の部 55（3）】**／重力の中心にて時が止まったような状況に陥っての永劫の粉碎劇が繰り広げられる）。といったルシファーの領域、「三面の」悪魔の王の領域がヘラクレス 12 功業の最後の「三面の」ケルベロスの捕縛の部と対応するようにどういふわけなのか**【多重的に「できあがっている」とのことを指し示すのに注力してきたのが本稿のここまでの流れとなるわけであるが、さて、直前言及のこと、**

【対数螺旋構造（いわゆる渦巻き螺旋構造）と「黄金の林檎」の双方に関わるところの象徴体系・事物らがどういふわけなのか「ブラックホール生成挙動と結びつく」とされる実験】と多重的に接合している

とのこととの絡みでは同じくものがここにてヘラクレスとの絡みで問題視しているダンテ『地獄篇』にもあてはまりそうなどころがある。

次の順序にて述べられるようなところとして、である。

⇒ [オデュッセウスは黄金の林檎（ヘラクレス 11 功業の目標物でもある伝説上の果実）が原因ではじまったトロイア戦争、その開戦につながった誓約の考案者であり、またもってして、同じくものトロイア戦争に木製の馬で引導を渡した存在である]

⇒ [黄金の林檎を巡る縁（えにし）—トロイア戦争— に結末を付けたのがオデュッセウスであるとも表せられるわけだが、の後、トロイアからの帰途にて同オデュッセウスが（対数螺旋構造たる）[渦巻き]の怪物カリュブディスに呑まれるというのがギリシャ古典『オデュッセイア』の粗筋となる（**【出典（Source）紹介の部 46】**）。それをダンテは『地獄篇』にて渦巻きの怪物カリュブディスに代えて[旋

風] (つむじかぜ) をオデュッセウスらを転覆なさしめたものへと切り替えている。そして、その旋風からしてカリュブディスと同様、[対数螺旋構造] と結びつくとのことがある (本稿にあってのつい先だつての段で挙げもしている図では英文 Wikipedia [Waterspout] 項目に掲載されている [典型的渦巻き構造] を呈する [水上竜巻] Waterspout の写真をも併せて挙げているが、といったものがオデュッセウスに引導を渡したと『地獄篇』には表記されているのだと解される所として、水上竜巻 waterspout は英語圏では旋風に相当する whirlwind の強力なる部類に内包されるとされるものである —— “ Whirlwinds are subdivided into two main types, the great (or major) whirlwinds and the lesser (or minor) whirlwinds. The first category includes tornadoes, waterspouts, and landspouts.” 「ワールウインドは二つの主たるタイプに副分類され、強度ワールウインズと低度ワールウインズがそれに該当する。前者のカテゴリーにては竜巻・水上竜巻・陸上竜巻がそれに内包される」との (現行にての) 英文 Wikipedia [Whirlwind] 項目にての記載内容に関わるところの話となる ——)]

⇒

[以上は [黄金の林檎を巡る縁 (えにし) にてはじまった戦争] に結末をつけた男が対数螺旋構造を呈するもの (カリュブディスにとって代わつての旋風) がゆえに地獄行きを強いられることになった、ルシファー幽閉領域、今日的な観点で見たブラックホール類似の特性を呈するルシファー幽閉の領域を描いているとの『地獄篇』にてのそのルシファー領域の近傍の領域 —— 第 8 圏マーレボルジェー —— との地獄行きを強いられることになったとの物言いがなせるとのことを意味しする]。

話が冗長にもなっているが、上のようなかたちで

[[対数螺旋構造] (いわゆる渦巻き螺旋構造) と [黄金の林檎] の双方に関わるところの象徴体系・事物らがどういうわけなのか [ブラックホール生成挙動と結びつくとされる実験] と多重的に接合している]

との本稿にての (紙幅にしてかなり厚くものところとしての) 先立つての段、**補説 2** の部でなしていた話が『地獄篇』にも接合することになる]

なすべきはそういった多重結つき関係が観念できるとのことが [偶然の一致] なのか、あるいは、[恣意の賜物] なのか、といったことを切り分けられるだけの典拠をきちんと呈示しきることであると筆者は当然に考えている。

ここまでにて

[神話にて [黄金の林檎を巡る女神達の美人投票] に賄賂の具として用いられた絶世の美女ヘレン、彼女ヘレンは成人して人妻となる前、少女のみぎり「にも」(後にトロイアの王子パリスに連れて行かれてトロイア戦争の元凶となる前に) 特定の者達に妻とすべくも誘拐されている] (: 便宜的にギリシャ文字小文字で **【 α (アルファ) の部】** とする)

⇒

[少女のみぎりの折のヘレンを略取したのは [アテナ王テセウスとその相棒のペイトオス] である (アテナ王テセウスとその相棒のペイトオスは美女ヘレンをテセウスの妻とすべくも略取した)] (: 便宜的にギリシャ文字小文字で **【 β (ベータ) の部】** とする)

⇒

[テセウスとその相棒のペイトオスはヘレンを妻とすべくも略取した (そして彼女が成長するまでテセウス母アイトラーの元に留め置いた) と伝わっているが、後、今度は [テ

セウスのヘレン略取]に付き合ったペイリトオスの方がヘレンに釣り合いもする自身の妻を得るべくテセウスと共に[ペルセポネ](ゼウスの娘で冥界の女王)を略取するための冥界下りを二人で敢行したと伝わっている](：便宜的にギリシャ文字小文字で【γ(ガンマ)の部】とする)

⇒

[テセウスとペイリトオスはヘレン対価とすべくも神たるペルセポネを略取しようとしたとその不敵な行為の罰を受ける格好で冥界に拘束され続けることになったと伝わっている](：便宜的にギリシャ文字大文字で【Δ(デルタ)の部】とする)

⇒

[冥界の囚われ人となったテセウスとペイリトオスに救いの手を差し伸べたのは[冥界下りの第12番目の功業]に挑んでいた折のヘラクレスであったと伝わっている](：便宜的にギリシャ文字小文字で【ε(エプシロン)の部】とする)

⇒

[以上より「まずもって」述べられるところとして]

美女ヘレンは[トロイア崩壊の原因となりもしたパリスの略取対象](ヘレンは黄金の林檎を巡る女神らの美人投票の賄賂に用いられ、結果、略取の許可を得たパリスによって連れ去られトロイア戦争を引き起こした存在となる)であるのと同時に[テセウスとペイリトオスの「元」・略取対象]であった。

他面、冥界の女王ペルセポネもヘレンと秤量されるかたちでの[テセウスとペイリトオスの略取対象]となっている。

といった中、ヘレンおよびペルセポネを双方釣り合わせるように略取対象としたテセウスとペイリトオスとその狼藉のために冥界に拘束され続けることになっていたところをその冥界下りの第12功業—先述のようにケルベロス捕縛を主目的としての第12功業—でヘラクレスが救いだそうとしたと伝わっていることより、

[[黄金の林檎あらため絶世の美女ヘレンとの形態をとってのトロイア戦争の原因]と[ヘラクレス第12功業としての冥界下りの物語]の結節点]

が観念できることになり([テセウスとペイリトオスの略取対象としてのヘレンおよびペルセポネ]及び[ヘラクレス12番目の冒険の性質]から観念できることになり)、11功業に見る黄金の林檎それ自体とは「また別の側面」から、

[既にその後半部がヘラクレス12功業と多重的に結びついているとのことについて詳述なしとの古典である)冥界下りのダンテ『地獄篇』←→(濃厚な被影響・影響の関係が存在)←→トロイア戦争関連文物にして冥界下りをモチーフにしているヴェルギリウス『アエネーイス』←→(濃厚な被影響・影響の関係が存在)←→トロイア戦争関連文物にして冥界下りをモチーフとしているホメロス『オデュッセイア』]

との(最前取り上げもしてきたところの)関係性が[冥界下りのヘラクレス12功業]との絡みで「さらにもってして」想起されるとのことがある](：便宜的にギリシャ文字大文字で【ζ(ゼータ)の部】とする)

⇒

[また、[ホメロス『オデュッセイア』—トロイアを木製の馬で陥落させた者、そして、そもそも[絶世の美女ヘレンと黄金の林檎をやりとりしての取引]がトロイア戦争の原因となった盟約の発案者でもある武将オデュッセウスを主人公とする叙事詩—とヘラクレス12功業との関係性]とのことで述べれば、ダンテ『地獄篇』にあつて「も」『オデュッセイア』主人公オデュッセウスが[ヘラクレス10番目の功業](三面のゲーリュオン登場の功業)にて打ち建てられたと伝わるヘラクレスの柱を越えた段階で地獄行きを強いられ、その行き先が地獄下層8圏(マーレボルジェと呼称される地獄)の一部をなす[謀略者の地獄]であると描写されているとのことがある(そして、[謀略者の地獄]はダンテらが(先述の)ゲーリュオンの背におぶわれて降下した先である悪意者の地獄の一面をなすところである)。すなわち、ヴェルギリウス古典『アエネーイス』を介して『地獄篇』との被影響・影響が観念されるとのホメロス叙事詩『オデュッセイア』

主人公オデュッセウスは「ヘラクレスが三面のゲーリュオンを討伐することになった第10功業にて打ち建てたヘラクレスの柱」を越えた段階で「ダンテらがヘラクレス第10功業にて討伐されたゲーリュオンの背におぶわれて降下した先たる地獄の第8圏」に落とされたとのことになる】（：便宜的にギリシャ文字小文字で【η(エータ)の部】とする）

このことらが順を追って述べられるとのことについての解説部を終える（[5-b]と振っての段にまつわっての解説部を終える）。

「訴求の用に供するべくもの「多少脇に逸れての」話として」

アルフレッド・テニスン(Alfred Tennyson)という英国文学史上、その名をよく知られた詩人がいる。

同テニスン、英国を代表する詩人「桂冠詩人」(王家より年金を受ける立ち位置にある当代随一と目されての詩人)に叙されているとの19世紀の人物となるのだが、彼テニスは

「ダンテ『地獄篇』に見るユリシーズ(オデュッセウス)のありよう」

をして

「これこそが「野の獣畜と一線を画する」人間存在の「知」を求める
人間存在の崇高で正しきありようだ」

と礼讃する『ユリシーズ』という詩 —オデュッセウスのラテン語転じての英語呼称ユリシーズを題名に冠しての詩— を1833年に生み出している(そちら刊行は1842年もされる)。

同じくものことについては英文ウィキペディアにあつて[Ulysses (poem)]との長々とした一項が設けられているようなところとなりもするのだが、その解説のなされようを — そのようなこととて我々を殺す欺瞞にも通ずるとの認識あつてのこととし— 「まづもつて」掻い摘まんで引く。

(直下、英文 Wikipedia[Ulysses (poem)]項目にあつての現行記載内容よりの掻い摘まんでの引用をなすとして)

"Ulysses" is a poem in blank verse by the Victorian poet Alfred, Lord Tennyson (1809–1892), written in 1833 and published in 1842 in his well-received second volume of poetry.

[...]

Facing old age, mythical hero Ulysses describes his discontent and restlessness upon returning to his kingdom, Ithaca, after his far-ranging travels. Despite his reunion with his wife Penelope and son Telemachus, Ulysses yearns to explore again.

[...]

The character of Ulysses (in Greek, Odysseus) has been explored widely in

literature. The adventures of Odysseus were first recorded in Homer's Iliad and Odyssey (c. 800–700 BC), and Tennyson draws on Homer's narrative in the poem. Most critics, however, find that Tennyson's Ulysses recalls Dante's Ulisse in his Inferno (c. 1320). In Dante's re-telling, Ulisse is condemned to hell among the false counsellors, both for his pursuit of knowledge beyond human bounds and for his adventures in disregard of his family.

For much of this poem's history, readers viewed Ulysses as resolute and heroic, admiring him for his determination "To strive, to seek, to find, and not to yield". The view that Tennyson intended a heroic character is supported by his statements about the poem, and by the events in his life—the death of his closest friend—that prompted him to write it.

(訳として)

『ユリシーズ』はヴィクトリア朝期詩人アルフレッド・テニスン卿(1809–1892)の手になる1833年に書かれ、そして、1842年によく知られたテニスン詩集第二集に組み込まれ刊行されたとの無韻詩(注:ブランクバース/韻律を伴う中で押韻は持たないとの詩)である。(詩の筋立てとしては) [老境に達し、伝説上の英雄ユリシーズ(オデュッセウス)は長い旅をなして戻った彼の王国イタカでの(日常への)不同意・不満足感を表明する。彼の妻ペネロペおよび息子テレマコスとの(望ましき)再開にも関わらずユリシーズは再度の冒険を切望することになる]とのものとなる。…(中略)…ユリシーズ(ギリシャ名オデュッセウス)の性格描写は(テニスンに限らず)広くも文学の世界で突き詰められてきた。最初のオデュッセウスの冒険はホメロスの『イリアス』および『オデュッセイア』(およそ紀元前800年から700年に成立)にて記録されており、そして、テニスはそちらホメロスの叙事詩に拠っての描写をなしもしている。しかしながら、大概の批評家筋はテニスン詩『ユリシーズ』が[ダンテが『地獄篇』(およそ1320年にて成立)で描いているウリッセ] (ユリシーズの『地獄篇』内表記)を再現していると(当然のこととして)見ている。ダンテが(ギリシャ神話から)再構成なしているとの語りではウリッセは[人智を越えた知識の探訪] および[彼の家族を無視しての冒険]の罪過を罰せられるのかたちで[生前にてあやまてる助言をなした(謀略で人をたばかった)との者達の地獄]に落とされている(注: “In Dante's re-telling, Ulisse is condemned to hell among the false counsellors, both for his pursuit of knowledge beyond human bounds and for his adventures in disregard of his family.” 「ダンテが再構成なしているとの語りではウリッセは[人智を越えた知識の探訪]および[彼の家族を無視しての冒険]の罪過を責め苛まれるかたちで[生前にてあやまてる助言をなした(謀略で人をたばかった)との者達の地獄]に落とされている」とのここでの訳の元としての現行Wikipediaの記述は不適切(improper)なものであると判じられる。『地獄篇』ではオデュッセウス(ユリシーズ/ウリッセ)の罪はトロイア住民らを[booby trap : ブービー・トラップ]で騙し討ち・皆殺しにしたことに帰せられており、属人的なせせこましい不品行が罰せられているわけではない—ダンテに同行しているヴェルギリウス(Virgil)の語りにもそのことが明示されている—)。

…(中略)…

このテニスン詩の歴年ありようにまつわってのこととして読み手らはユリシーズをして意志強固かつ英雄的な人物とみる、そして、テニスンが描くユリシーズの[励むこと、探求すること、見つけだすこと、そして、譲歩せざ

ること]の価値観を称賛するというのが常である。テニスンがユリシーズをして英雄的な人格描写にて示さんとしたとのその視点はテニスン自身の詩に対する申しよう、そして、同詩を書くよう詩人に促す契機となった(とのことである)彼テニスンの現実世界での極々近い友人の死という出来事によって支えられている(とのものとなっている)」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

さて、本稿筆者は以上引用なしたような概説が広くもなされてのテニスンの詩の存在のことを国内にて流通しているダンテ訳本 —河出文庫版ダンテ『神曲；天国篇』(平川祐弘東京大学名誉教授訳)— の訳者作品解説部の読解にてはじめて知った(：筆者もアルフレッド・テニスンの名ぐらいはなんとなくものうろ覚えで記憶していたのだが(そんな名前の文人がいたらしいな、程度である)、その作品内容にわざわざもって目を通すような文学嗜好の者などでもない中で複数検討してきたダンテ訳本の特定バージョンの読解にて[アルフレッド・テニスンのダンテのユリシーズのことを題材にしての詩]の存在のことを筆者ははじめて知るところとなった)。

そちら筆者にテニスンのことを教えてくれた河出文庫版ダンテ『神曲；天国篇』(にあつての訳者平川祐弘東京大学教授による解説部)の内容も直下、引用なしとしておくこととする —(同解説部、テニスンのここで問題としている詩の中身もきっちり挙げられているものとなりもし、以下にてはその日本語に訳されての内容(流石は人文系の学究が訳しあげたとの筋目のものだけあつて見事に日本語に調和するかたちで訳されているとのその内容)の一部とテニスン詩に対する同じくもの訳者の解説の一部を引いておくこととする)— 。

(直下、ダンテ『神曲；天国篇』(河出文庫版／初出2009年)にあつての訳者(平川祐弘東京大学教授)による神曲全体の解説部 —『ダンテと『神曲』の世界』と題されての部— の中にあつてのテニスン詩の紹介および書評の部となる p.491 から p.494 より
の掻い摘まんでの引用をなすとして)

(以下はテニスンの詩『ユリシーズ』本体が和訳されているところよりの引用である)

一向の世のためにもならぬ話だが
この痩せこけた巖(いわ)のあいだ、この静かな爐(ろ)のほとり
年老いた妻と結ばれた私は、他愛もない国王として、
未開の民に不平等な法律を施行する——
ためこみ、眠り、むさぼり喰らい、私のことすら知らぬ未開の民だ。
私は旅立たずにはいられない、私は人生の盃を余瀝(よれき)残さず飲み
干そうと思う。

…(中略)…

私は頭角をあらわし、世人から名誉をもって遇せられた、
そしてはるかかなた風すさぶトロイアの雄叫ぶ平原の上で
私は私に匹敵する者どもと一戦をまじえる喜びを味わった。
私は私が出会ったすべてのものの一部なのだ、
とはいえあらゆる体験は、それを通して未知の世界がほのかに光る
門でしかない、その未知の世界の国境(くにざかい)は
私が進めば進むほどますますかなたへかなたへと消え失せてゆく。

…(中略)…

私に残された余命はもはやいくばくもないのだ。だがそれでもあの永遠の
沈黙から
この一刻一刻は救われている、いやそれ以上のなにか、

新しいものをもたらすなにかが。三年かそこいらの歳月を
余命を惜しみ保身のうちに過ごすというのはいやしいことだ、
それにこの灰色の魂は、沈みゆく星のごとく、
人間思想の極限のあなたへ、
知識を求め、望み、憧れる。

…(中略)…

死は一切を閉ざす。だが終わりより前になにかが、
高貴な調べのなんらかの仕事が、まだなされるやもしれないのだ、
神々と競ったことのある人々に不似合でないなんらかの仕事が。

…(中略)…

大海は周囲で幾千もの声を発して呻(うめ)きとどろく。さあ行こう、わが友
よ、

より新しい世界を求めるのに遅すぎることはありはせぬ。

船を押し出せ、そして整列して腰をおろし

潮騒ぐ航跡を櫂(かい)で叩け。目標は日が沈むあなたへ

進むことだ、西方の星々がみなすべて海へ没するあなたへ

私が死ぬまで進むことだ。

(以下略)

(これよりはダンテ『神曲;天国篇』(河出文庫版/初出2009年)の訳者の
平川祐弘東京大学教授の解説の部に入っている記述として)

『神曲』地獄篇第二十六歌には、オデュセウスが大西洋を南下して進み、
ついに海没するという彼の最後の航海を彼自身が語るすばらしい劇中詩
が挿入されている。テニスンがダンテのこの詩を読み、彼もまた Ulysses と
いう独白体の詩を書いて、そこにひとつの人生観を示した。ダンテはオ
デュセウスを結局は地獄の第八圏の圏谷(たに)の第八の濠(ほり)へ落と
したが、テニスはオデュセウスをあくことない真理探究の典型として理想
化し、その心情に満腔(まんくう)の共感と同情を寄せたのである。

(以上、ダンテ『神曲;天国篇』(河出文庫版/初出2009年)p. 491 から p.494 に掲載
されているテニスンの『ユリシーズ』の訳者たる学究による手仕事か、との訳と訳者によ
る書評よりの抜粋とした 一※一)

※1: ちなみにオンライン上より労せずの確認できるとのテニスンの詩にあつ
ての(上にて引用なした邦訳版に対応する)原文にての表記は以下のところ
となる。

It little profits that an idle king,
By this still hearth, among these barren crags,
Match'd with an aged wife, I mete and dole
Unequal laws unto a savage race,
That hoard, and sleep, and feed, and know not me.
I cannot rest from travel: I will drink
[...]
Myself not least, but honour'd of them all;
And drunk delight of battle with my peers,
Far on the ringing plains of windy Troy.
I am a part of all that I have met;
Yet all experience is an arch wherethro'
Gleams that untravell'd world, whose margin fades
For ever and for ever when I move.

[. . .]

Little remains: but every hour is saved
From that eternal silence, something more,
A bringer of new things; and vile it were
For some three suns to store and hoard myself,
And this gray spirit yearning in desire
To follow knowledge, like a sinking star,
Beyond the utmost bound of human thought.

[. . .]

Death closes all; but something ere the end,
Some work of noble note, may yet be done,
Not unbecoming men that strove with Gods.

[. . .]

The long day wanes: the slow moon climbs: the deep
Moans round with many voices. Come, my friends,
'Tis not too late to seek a newer world.
Push off, and sitting well in order smite
The sounding furrows; for my purpose holds
To sail beyond the sunset, and the baths
Of all the western stars, until I die.)

(※2:以上引用のテニスの詩がダンテ『地獄篇』のそれといかに濃厚に関わっているかは下の再度の引用部の内容をご覧いただければ、自然(じねん)としてご理解いただけようとのものとなる。

(直下、Charles Eliot Norton という 19 世紀米国文豪の手になるダンテ『神曲:地獄篇』英訳版 *Inferno* (オンライン上より PDF 版取得できるのもの)に見受けられる[オデュッセウスとその一行がヘラクレスの柱を越えたところで海に飲まれて地獄行きすることになった部位]よりの「再度の」原文引用をなすとして)

CANTO XXVI

And the Leader, who saw me thus attent, said, "Within these fires are the spirits; each is swathed by that wherewith he is enkindled." "My Master," I replied, "by hearing thee am I more certain, but already I deemed that it was so, and already I wished to say to thee, Who is in that fire that cometh so divided at its top that it seems to rise from the pyre on which Eteocles was put with his brother?" He answered me, "There within are tormented Ulysses and Diomed, and thus together they go in punishment, as of old in wrath. And within their flame they groan for the ambush of the horse that made the gate, whence the gentle seed of the Romans issued forth.

[. . .]

Then moving its tip hither and thither, as it had been the tongue that would speak, it cast forth a voice, and said,
"When I departed from Circe, who had retained me more than a year there near to Gaeta, before Aeneas had so named it, neither fondness for my son, nor piety for my old father, nor the due love that should have made Penelope glad, could overcome within me the ardor that I had to gain experience of the world, and of the vices of men, and of their valor. But I put forth on the deep, open sea, with one vessel only, and with that little company by which I had not been deserted.
One shore and the other I saw as far as Spain, far as Morocco and the island of Sardinia, and the rest which that sea bathes round about. **I**
and my companions were old and slow when we came to that

narrow strait where Hercules set up his bounds, to the end that man may not put out beyond. On the right hand I left Seville, on the other already I had left Ceuta.

‘O brothers,’ said I, ‘who through a hundred thousand perils have reached the West, to this so little vigil of your senses that remains be ye unwilling to deny, the experience, following the sun, of the world that hath no people. Consider ye your origin; ye were not made to live as brutes, but for pursuit of virtue and of knowledge.’ With this little speech I made my companions so eager for the road that hardly afterwards could I have held them back. And turning our stern to the morning, with our oars we made wings for the mad flight, always gaining on the left hand side. The night saw now all the stars of the other pole, and ours so low that it rose not forth from the ocean floor. Five times rekindled and as many quenched was the light beneath the moon, since we had entered on the deep pass, when there appeared to us a mountain dim through the distance, and it appeared to me so high as I had not seen any. We rejoiced thereat, and soon it turned to lamentation, for **from the strange land a whirlwind rose, and struck the fore part of the vessel. Three times it made her whirl with all the waters, the fourth it made her stern lift up, and the prow go down, as pleased Another, till the sea had closed over us.**”

(補いもしながらの拙訳として)

「[第26歌]

師父たるヴェルギリウスは私(ダンテ)を見、
「これら炎に包まれているのは靈魂だ。それらはいずれもが自身(の芯)が焼かれているとの炎、その火勢に囲まれての似姿を呈しているのだ」

と言いもする。「師よ。」それに応えて、私(ダンテ)は
「貴方よりそうもお聞きしましたことますます合点がいくようになりはしましたが、エテオクレが彼の兄弟と一緒にたにされ薪に供されているとの場所より上がっての地点に見えるところ、その上方より分かれてやって来ているとのその[炎としての靈魂]の中にいるのは一体、誰なのでしょうか」

と尋ね述べた。

師ヴェルギリウスが、に対して、言うところでは
「あちらにて責めさいなまれているのは[ユリシーズ]であり、あの者らは憤怒にまみれてのありし日そうであったようなかたちで罪過を罰する場へと歩んでいる。あの者らは —そこは[ローマ人の心優しき祖]がそちらより一步踏み出すに至ったところとなるわけだが— 城壁に[入り口]を造り出すに至った馬(トロイアの木製の馬)に伏兵として潜んでいたとのやりようがゆえに火の中でああも喘ぎ苦しんでいるのだ (訳注:ダンテ案内役として『地獄篇』に登場を見ているヴェルギリウスの代表作は『アエネーイス』であるが、同作『アエネーイス』は[ローマ人の祖がトロイアの落ち武者・落人一行である]との作中設定を有しており —本稿にての **出典(Source)紹介の部 45**(に付しての補足の部) および **出典(Source)紹介の部 90(7)**を包摂するところにて既述—、

ここではそうしたヴェルギリウス古典に基づいての記載が(「オデュッセウスがローマ人の祖先の地の城壁に馬で入り口を作った」との式で)ダンテ同道者となっているヴェルギリウス発言としてなされている)。

…(中略)…

しゃべらんとする舌のようにその炎の先端がここ向こうへと動き、[炎](訳注:炎に包まれての霊体としてのオデュッセウスのこと)が声を発して口をきくとのことをなした。

「一年以上ガエタ、そう、アイネイウスが名を与える前のその地にて我らを逗留なさしめていた[魔女キルケ](訳注:叙事詩『オデュッセイア』に登場するオデュッセウスの船旅に関わった魔女)のところより発った折、我が子(訳注:オデュッセウスの最愛の息子テレマコスのこと)や我が老父への哀憐の情、そして、ペネロペ(訳注:オデュッセウスの細君)を喜ばせていたはずであろう自然ジネンたる愛情でさえも男達の悪徳、剛勇武勇譚の種としての[世界にて経験を積みねばならぬという内なる情熱]を屈せさせしめることがなかった。

それゆえ我は深く広大なりし海に、船一つ、離散こそしはしなかったものの数僅少になっていたとの仲間とでもって漕ぎ出すことになった。

あちらの岸ではスペインを、こちらの岸ではモロッコを、とまみえることをなし、そして、サルディニア島および大洋が懐深くも水浴させているとの残りの島々をも見聞するとのことなしました。

ヘラクレスが彼に由来する境界線(訳注:ジブラルタル海峡の象徴物たるヘラクレスの柱のこと)を打ち立てた狭き海峡に達したとき、我とわが同僚らは若い、既に動作緩慢となっていた。

そこで右側にてはセビリアを後にし、反対側にてはセウタを後にすることとなった。

「おお、我が兄弟たちよ。」我は言った。

「幾百千の苦難を越え、西の地へと辿り着きし者達、こここれに至り、[今や汝ら自身の[感覚の不寝番]であり続けることがほとんどない]

(訳注:生きて感覚を保ってられる期間が短い、[余生が短い]とのことの意味であると解される)との汝らは(それであるからこそ)経験、人跡未踏の地、陽の向かう先へ先へと追って向かうとのその経験を否定しようとしなない者らでもある。汝ら起源を考えてみよ。汝らは野にあっての獣らのようにその生をかたちづくられたとのものではなく、美と知識をば追い求める者達であろう」

この短き演説をもってして我は我自身も後ろへとはほとんど引き返しがたい、そういった按配での方向へと同僚ら熱情を駆り立てた。

そして、常に左の方向をとるようにし、オールを狂的飛行をなすがごとくの翼のように漕ぎ、もってして、船尾を朝の方向に向けた。[夜]は今や(地の)他の極の側のすべての星々に臨んでおり、我々の側、それはとても低いところにあり大海原から[夜]がのぼりくるとのことはない。

我々が奥まっつての途に入って以来、遠方を臨んでおぼろげなる山、

我が見たこともなかったぐらいに高くも見えたとの山が見えた折 月下、
光が五度輝き、同じくもの回数で消滅を見た。我らはそれにて喜ばさ
れたが、すぐにそれは嘆きへと転じました。

というのも、奇妙なる陸地より、

[旋風] (訳注: つむじかぜ. 渦巻き状の風勢にて襲いかかってくるとの
強風)

が巻き起こり、船の前面部を打ち付けたからである。海の水らとともに
三度の旋風が船体を回転させ、他なる存在が喜んでいるように四度
目のそれで船尾を持ち上げ船首を沈めさせ、そこで海が我々をその
下へと覆い閉ざすことになった」

(19世紀文豪 Charles Eliot Norton になされたダンテ『地獄篇』英訳版 —オ
ンライン上より誰でもダウンロードできるとのもの— に拙訳(込み: 細々とした
注記)を付しての「再度の」引用部はここまでとしておく)

さて、直上表記の如きテニスの詩のためによくも知られているところの

[老境に達してなお知識を求めておのが生命としての輝きに殉じようとする人
間存在の崇高さ]

と結びつけられているとのオデュッセウスありよう(さらに述べれば、ダンテ『地獄篇』に
みとめられるオデュッセウスありよう)とのことを露骨に想起させることを自分達を支える
精神のありようと鼓吹し、かつもってして、自分達こそが人間の科学の伝道師であるよ
うに鼓吹する一群の者達がいる。それが LHC 実験関係者らである。

ここでは同じくものことにまつわってリサ・ランドール ——[加速器によるブラック
ホール生成可能性]に直結する理論の旗手として知られる立ち位置、そして、問題あ
る(衆をたばかるとの意味で問題ある)申しようをなしてきたとのやりようについて本稿
従前の段にてその言行録を取り上げもしてきたとのカリスマ女流物理学者—— の手
になる著作、

Knocking on Heaven's Door『宇宙の扉をノックする』(NHK 出版)

よりの引用をなしておくこととする。

(直下、リサ・ランドール著作、**Knocking on Heaven's Door** の原著および訳書にて
の『宇宙の扉をノックする』(NHK 出版)にあつての CHAPTER THREE LIVING IN
A MATERIAL WORLD[第三章 物質世界に生きる]の章の記述内容を原文引用す
るとして)

Our universe is in many respects sublime. It prompts wonder but can be
daunting—even frightening—in its complexity. Nonetheless, the
components fit together in marvelous ways. Art, science, and religion all
aim to channel people's curiosity and enlighten us by pushing the frontiers
of our understanding. They promise, in their different ways, to help
transcend the narrow confines of individual experience and **allow us to
enter into—and comprehend—the realm of the sublime.** (See Figure
11.)

[...]

**[FIGURE 11] Caspar David Friedrich's Wanderer Above the Sea of
Fog (1818), an iconic painting of the sublime — a recurring theme in
art and music.**

「多くの点で、私たちの宇宙は崇高だ。その複雑さは好奇心を駆り立てはするが、無力感も抱かせるし、ことによっては恐怖さえも感じさせる。にもかかわらず、宇宙の構成要素は素晴らしくびたりと絡みあっている。芸術、科学、宗教は、いずれも人々の好奇心を促して、理解の限界を広げさせ、それによって私たちを啓蒙することを目指している。いずれもそれぞれのやり方で、個人の経験の狭い領域を越えさせることを約束している。それがかなえられたとき、私たちは崇高なものの領域に踏み込む——そして理解する——ことができるのだ (図 11 を参照)。…(中略)… [図 11]ドイツの画家カスパー・ダーヴィド・フリードリヒの「雲海の上の旅人」は、崇高なものを象徴的に描いた作品だ。崇高さは、美術と音楽に繰り返し登場するテーマである

(ここまでをリサ・ランドール著作『ノッキング・オン・ヘブンズ・ドア』原著および訳書よりの引用の部とする —※—)

(※表記のような記述が LHC の崇高なる営為と結びつけられているのがリサ・ランドールの Knocking on Heaven's Door 『宇宙の扉をノックする』(NHK 出版)との著作である (Knocking on Heaven's Door 『宇宙の扉をノックする』(NHK 出版)、同著にあつてはその冒頭部、Introduction の部より “ September 10, 2008, marked the historic first trial run of the Large Hadron Collider (LHC). Although the name—Large Hadron Collider— is literal but uninspired, the same is not true for the science we expect it to achieve, which should prove **spectacular.** ” (表記英文引用部に対する訳として)「2008 年 9 月 10 日、ラージ・ハドロン・コライダー (LHC) が歴史的始動を見た。[ラージ・ハドロン・コライダー]との名称は有り体に言ってインスピレーションを何ら与えぬとの平凡なものだが、私たちがそれ (LHC) に [証明すべきとらえている **壮大なる挙**] を託しているとの意では [科学 (の進歩)] にとり同じくものことは真実とはならない (LHC は際立つてのインスピレーションを与えるものである)」といった記述が目立ってなされている)



前掲図は物理学者リサ・ランドール —本稿出典(Source)紹介の部 76(6)などにて先述しているように LHC におけるブラックホール生成可能性の認容に繋がった理論(RS Model)の提唱者— が

「[個人の限界]を切り拓くことを約束する、そして、[崇高]なる領域に人をいざないうる」

との [科学と通ずる芸術のありよう] について論ずるうえで紹介しているとの画家カスパー・ダーヴィド・フリードリヒの手になる絵画『雲海の上の旅人』となる。

このような世界で果たして科学が人間を崇高なる領域にいざなうのか。「重要なることを黙過し、偽善・欺瞞の奴隷であり続けている種族に明日などない」。そうもした問題を押しつけられた種族(我々人類)に[崇高さ]の問題との絡みで呈示のような絵画を「あたかも」本当に崇高なるものの「ように」呈示・演出するやりようがいかように悪質なのかはいくら訴求してもしたりないと筆者などは当然に判じている。

一事が万事ではないが、LHC 実験に邁進している科学者(との立ち位置を与えられての者達)の一部、それも目立つところにいるような者達に関しては「遺憾ながら」以上のようなある種、宗教的ともとれる崇高さでもって自分達を美化・取り繕う傾向が強くもあると見立てるに至っている。

(:述べておくと、筆者はただの傍観者としてそのように述べているのではない。筆者は「彼ら」の国内セクションの中枢部、そして、次期国際加速器実験の主導セクションになりつつあるまさしくその紐帯と法廷にて一審からして二年続いての不毛なやりとりをなしているとの者でもあるとの人間として「彼ら」の中の[性質悪き部類]によるそうした気風によくも通暁しているのである——尚、海外にて[テニス「的なる」知の探求の礼讃気風]のためであろう(それがなければ感傷主義もないへったくれもない傀儡ググツかもしれない)、「LHC 批判者を分からず屋の狂人のようなものだ」と語気強くも宗教的苛烈さでもって感情的に指弾した LHC 実験関与の[現代物理学「教」信者]の類のそれとしてはジョン・エリスという物理学者や[芸能人]あがりのタレント物理学者ブライアン・コックスなどの発言内容が目立つところとして前面に出ているが(本稿にあつての出典(Source)紹介の部 17-2)における米国法学者文書よりの引用部などを参照されたい)、といった類が殊更に全体的気風の代弁者として振る舞っている節がある——)

さて、ここで述べるが、テニスンが礼讃するダンテ『地獄篇』的なるユリシーズがどうなったかと述べれば、である。[渦巻く旋風]に呑まれて、

[詐害者(悪意者)の地獄] (詐欺師・盗賊の類などとあわせて自己欺瞞の徒・偽善の徒輩も罰せられているとの地獄)

であるマーレボルジェに落とされている。トロイアの木製の馬を用いて多くの人間を殺したがゆえの罪過を問われるとの式にて、である。

何が言いたいかは分かるか、と思う。そして、遺憾なのは、である。ここでの話が額面通りの「ただの印象論」「ためにしての(そして、取り繕いつつも品性に欠けるところのあると見なされかねない)罵詈雑言としての話」では済まされないとことして次のことらが

確として摘示可能となって「いる」ことである。以下、**i.** から **v.** のことらを参照されたい。

i. オデュッセウス (ユリシーズ) はトロイア城市に木製の馬で引導を渡した後、故国イタカへと順風満帆には辿り着けず長年にわたっての艱難辛苦の航海を強いられており、の中で、渦潮の怪物カリュブディスに吞まれて船旅の同道者 (自己が君臨するイタカに分封の臣下でもあるとのギリシャ戦士ら) を全員失っている。そこに見るオデュッセウスら一行を呑み込んだとの渦潮の怪物 Charybdis (ダンテ『地獄篇』では同じくも対数螺旋構造をとる旋風、Waterspout の類に改変されているカリュブディス) の名を冠する [イヴェント・ジェネレーター] (Event Generator) なるソフトウェアでもって

[生成ブラックホール] (安全で科学の進歩に資すると主張されてのブラックホール)

の構造を関係者らがシュミレートしようとしているのが LHC 実験である。

ii. オデュッセウスは渦潮の怪物カリュブディスに吞まれた後、女神カリュプソの島オギューギア島に漂着したとされる。そして、同オギューギア島、アイザック・ニュートンやヨハネス・ケプラーなど今日の科学の恩人とされる歴史上の人物らも含めて

[アトランティス]

と定置されていたとのことが一部に知られる伝説上の地所である (単純化して述べれば、[カリュブディスによるオデュッセウスただ一人を除いての皆殺し] (原因) → [アトランティスと定置される島へのオデュッセウス漂着] (結果) ともなる)。

そして、アトランティスというのは、である。LHC 実験でブラックホール生成イヴェントをも検知しようとされている Event Display ツールの ATLANTIS —ブラックホール生成イヴェントをそれにて捕捉しようとされている LHC 実験用のイヴェント・ディスプレイ・ウェア— に名前が流用されているとの伝説上の陸塊となる。

iii. またもってして書くが、オデュッセウス (ユリシーズ) は

[絶世の美女ヘレンと黄金の林檎を巡る取引]

がトロイア崩壊に繋がったとのその [盟約] の提唱者でもある (: 先述のように [黄金の林檎を巡っての女神らの争い] の中でトロイア皇子パリスに [絶世の美女] が [黄金の林檎取得のための人のかたちをした賄賂] として呈示されるわけだが、その賄賂となった絶世の美女ヘレンについてはヘレン求婚者となっていたギリシャ諸侯の間で遺恨を遺さぬようにと「誰がヘレンの夫となろうと我々は彼およびヘレンの危難の折に手助けするとの誓いをたてる」とのオデュッセウスに由来する盟約が結ばれていたとのことがある (短期的にはそういう誓約ゆえに婚姻約定者が攻撃・殺傷されるのが防がれる)、それがために女神に赦されてのパリスのヘレン奪取の所業がギリシャ連合軍とパリスを王族として戴くトロイアの死命を賭しての戦争に発展した、などとの伝承上の [設定] が採用されている)。

さて、ヘレンの対価となった黄金の林檎 (トロイア崩壊の原因) は

[黄金の林檎の園]

にたわわに実るとされるが、そちら [黄金の林檎の果樹園] は巨人アトラスの娘らである [ヘスペリデスが管掌するヘスペリデスの果樹園] と同義同文のものとなり、ヘラクレスは彼の第 11 功業にてそちら [ヘスペリ

デスの果樹園]から黄金の林檎を取得すべくも巨人アトラス(ヘスペリデスらの父たる世界を支える巨人)に頼ったというのがギリシャ神話にみる筋立てである。そして、そこに見る[ヘスペリデスの果樹園](巨人アトラスの娘らの黄金の林檎が実っている果樹園)からして
[アトランティス]

と欧州一部識者に史的に結びつけられてきたとのことがある。そうもした背景から[巨人アトラス]の名前を冠する検出器 ATLAS でもってしてブラックホール生成を検知しうるとし、イベント・ディスプレイ・ツール ATLANTIS でブラックホール生成イベントをモニターしうる(直上にて言及)と銘打っている LHC 実験のやりようが気がかりなところとしてある(ダンテ『地獄篇』ではルシファーに起因する災厄の領域が今日的な視点で見た場合のブラックホール類似のありようを呈しているとのことがあると問題視してきたわけだが、加えて述べれば、そこに見るルシファーがエデンの誘惑者たる蛇に比定されもすること、またもってして、[エデンの園]および[禁断の果実]が[ヘスペリデスの園]および[黄金の林檎]に通ずるといった歴史的背景があること「も」本稿では詳述している)。

直前まで表記の i. から iii. の内容に関わるどころの本稿従前図解部の再掲を下になしておくこととする。

ΟΔΥΣΣΕΙΑ (Odyssey)

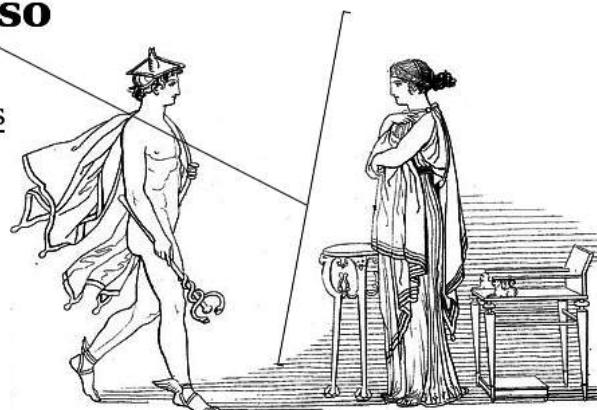
[Book 10]
Circe

[Book 12]
Siren

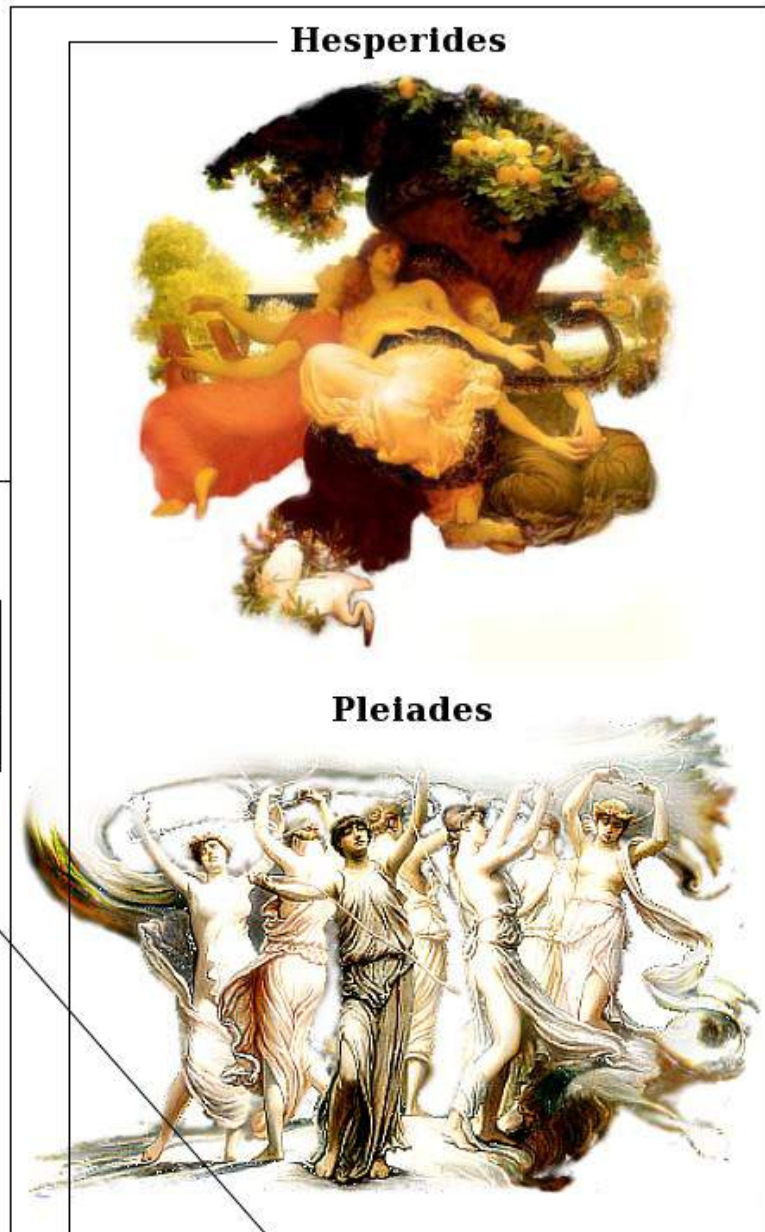
[Book 12]
Scylla
Charybdis

[Book 12]
Calypso

Ogygia
→
ATLANTIS



(オデュッセウスが渦巻きに呑まれた後、漂着したとされるカリュプソの島もアトランティスと同一視されているわけではあるが、他面、黄金の林檎の園 —ヘスペリデスの園— もまたアトランティスと同一視されているとことがある)



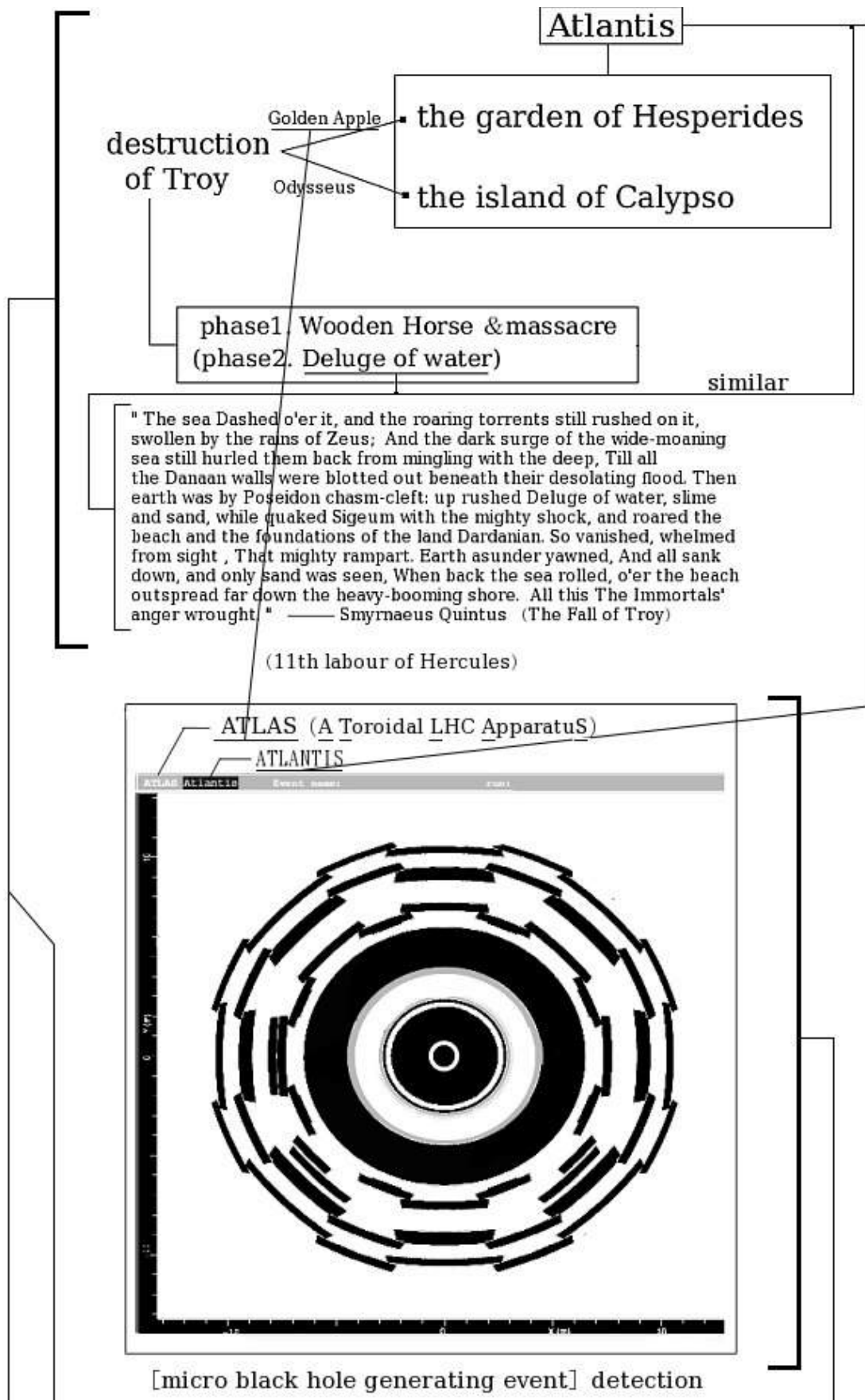
daughter of Atlas
=Atantis
(daughters of Atlas
=Atlantides)

the garden of Hesperides

Ogygia = The island of Calypso

legendary Atlantis

(LHC 実験はオデュッセウスが木製の馬の計略で引導を渡したトロイア戦争と複合的に結びつく実験ともなっているのだが、その結びつき関係は【黄金の林檎】【アトランティス】を介しての結びつき関係ともなる)



[トロイアとアトランティスの結びつき(1)]
 トロイアの崩壊は黄金の林檎によってもたらされたとも述べることもできる（[出典(Source)紹介の部39]）。その黄金の林檎が実るヘスペリデスの園が位置描写概要などよりアトランティスと結びつけられてきたとこのことがある（[出典(Source)紹介の部41]）。
 また、トロイの滅亡は木馬の計略によって完遂したと伝わるが、木馬の計略を考案したと伝わるオデュッセウスがトロイア崩壊後に流浪したさまを描く叙事詩『オデュッセイア』では[カリュプソの島]というものが渦潮にクルーと船を呑まれたオデュッセウス漂着先として登場を見ており、そのカリュプソの島、巨人アトラスの娘たる神格の住まう島からしてアトランティスと結びつけられてきた（e.g. アイザック・ニュートンの特定古典内での物言いなど）とこのことがある（[出典(Source)紹介の部43]）。

[トロイアとアトランティスの結びつき(2)]
 黄金の林檎を巡る女神らの美人コンテストに端を発して勃発したトロイア戦争。その終結をもたらしたのは木製の馬の計略であると伝承は語るが、今日、あまり知られていない古典ではそうやって滅びたトロイアにはさらなる破壊が及んだとの記述が含まれている。スミルナのクイントスに由来する『トロイア戦記』（英文タイトル the fall of Troy）に認められるところがそうで、トロイアを木製の馬で内側から破滅させたギリシャ勢も巻き添えにトロイアの存在が洪水にて完全抹消を見たとの伝承もよく知られていないところながら伝わっているのである（[出典(Source)紹介の部44-3]）。その点、[ギリシャ勢との戦闘に付随しての洪水による破滅]とのシチュエーションはアトランティスの最期と同一のものである（[出典(Source)紹介の部44-4]）に続いての段にてのプラトン著作よりの引用を参照のこと）。

[LHC実験とアトランティスの関係性について]
 どういう料簡でなのか、LHC実験はそのブラックホール生成可能性が現実的可能性をもって語られだしたとの始原期（LHC実験のブラックホール生成可能性論議を巡る経緯については本稿にての[出典(Source)紹介の部1]から[出典(Source)紹介の部5]を包摂する解説部を参照されたい）より前に遡る折柄、LHC計画がLEP加速器に接ぎ木しての加速器設置案としてCERNサイドで「正式に」ゴーサインを出されることになった1994年より前よりATLASとの名前と結びつけられているとこのことがある（本稿の[出典(Source)紹介の部36(2)]で解説しているように1992年からのことである）。
 そこに見るアトラスという名称はヘラクレスの功業に登場してきた伝説の天を支える巨人の名であるわけだが、同巨人アトラス、
 [トロイア滅亡の原因ともなっている黄金の林檎]
 がたわわに実る果樹園の所在地を把握していると伝わっている巨人にして、それぞれ別個に、
 [古のアトランティス]
 に比定される[黄金の林檎の園][カリュプソの島]、それらの地の代表的住人たるヘスペリデスおよびカリュプソという女の神格らの父親とされる存在でもある（[出典(Source)紹介の部39]以降の一連の解説部にて文献的論拠を明示していることである）。そうもしたことが指摘できる時点でCERNのLHC実験はアトランティスと接合していると述べられる。
 のみならず、LHC実験ではATLANTISとの名前が付されているEvent Displayツールでブラックホール生成イベントを観測する可能性が実験関係者によって「肯定的に」（科学的知見発展に資する安全なブラックホールの生成・観測との文脈で）宣伝されているとこのことがある。従って、ATLASとの名称それ自体に留まらずATLANTISとの名称をも用いているとこのことでLHCとアトランティスの関係はいよいよ色濃くも見えてくるとこのことがある。

（以上、先述 i. から iii. の部に照応するところの(再掲)図解部とする）

（図解部より i. から v. と振っての一連のこのの訴求に立ち戻るとし、）

iv. オデュッセウスの故地(故郷)はイタカ(イサケ、イタケとも)というギリシャの一地域となりもし、ホメロス叙事詩『オデュッセイア』は武将オデュッセウスが故郷であるそのイタカを目指して艱難辛苦の旅路を経験するとの筋立てのものである。

そうもしたオデュッセウスの旅路およびオデュッセウスによってもたらされたトロイア崩壊の寓意が —[イタカ]という地名それ自体のことも関わる場所として—

[米国科学界のオピニオン・リーダー]

とでも表される立ち位置にいたカール・セーガンという男の来歴、そし

て、同カール・セーガンが世に出しベストセラー記録小説『コンタクト』に「通底」するようになっている(と摘示できてしまう)とのことがある(：本稿にあつての補説2と銘打つての先だつてのパートで膨大な文字数を割いて極めて多くの典拠を挙げながらも詳解なしてきたことを参照されたいものである——例として同じくものパートではカール・セーガン小説『コンタクト』については[グランド・セントラル・ステーション]と表現されてのポイントにまつわって[オデュッセウス冒険にまつわる寓意]／[人類が百眼巨人アルゴスに仮託されながら屠殺者(現実世界のグランド・セントラル・ステーションにその彫像が据え置かれている[百眼巨人アルゴス殺しのヘルメス・マーキュリー)の元に導かれていくとの寓意]がいかにか多重的に込められているのか、『コンタクト』という小説が他の問題となる著名作品と[オデュッセウスを苦しめた人面鳥身の怪物サイレン]および[ヘラクレス]とを通じていかように結びつけられているのかといったことを「カール・セーガンという男の一大モニュメントがオデュッセウス故地イタカから命名されてのニューヨークの[イタカ]という地に設けられている」といったこととあわせて解説している——)。

同じくものこと、

「カール・セーガンという男の来歴、そして、同カール・セーガンが世に出しベストセラーを記録した小説『コンタクト』がオデュッセウス旅路およびトロイア崩壊の寓意と「通底」するようになっている」

とすることが何故もつてして特段に問題となるのかと言えば、カール・セーガン『コンタクト』が「ブラッホール・ワームホールの[ゲート]としての人為生成」を主要テーマとする作品であり(：尚、本稿の先だつての段でも解説していることだが、カール・セーガン『コンタクト』では[意図と機序(作用原理)が共に不明なものであると描写されている外宇宙より送られてきた設計図に基づき開発されることになった装置]が作中、10回以上も[トロイアの木製の馬]と明言されて建造過程で小説内人物らに揶揄されもする、だが、結果的にそれ(使用してみてもブラックホールないしワームホールを用いてのゲート装置であると判明したもの)が[仁慈溢れる異星文明からの贈り物]であったと判明したなどの筋立てが採用されている——背後背面の嗜虐的対話法の特質についてまで把握すればお寒いかぎりなのだがとにかく『コンタクト』はそういう作品となっている——)、かつもつてして、同作品が「通過可能なワームホール」との側面に絡んで「異常異様なる911の事件の発生の事前言及」と接続するようになっておりもし、また、同じくものことに関わるところで「黄金の林檎の寓意」(またもやのそれである)とも接続するようになっていると指摘できるようになっているとことあるからである(詳しくは本稿にあつての補説2の内容を参照されたい)。

(続いて、上のiv.の部に照応するところとして本稿従前の段で(文献上の典拠らの細かき摘示と共に)呈示してきた一連の図解部、その一部再掲をなすこととする)

(カール・セーガン小説『コンタクト』は【ギリシャ神話における百眼巨人アーガス】の名を冠する外宇宙星系発電波探査計画が外宇宙よりのゲート装置設計図受信に繋がったとの粗筋を有する作品となる。そこに見る百眼巨人アーガスとはギリシャ語の綴り込みでトロイアを包囲したギリシャ勢力の総称となり、またもつてして、トロイア攻めに決着をつけた謀将オデュッセウスの愛犬の名前でもある—そして、小説『コンタクト』作者カール・セーガンにもオデュッセウスとの繋がりが合
いがある—)



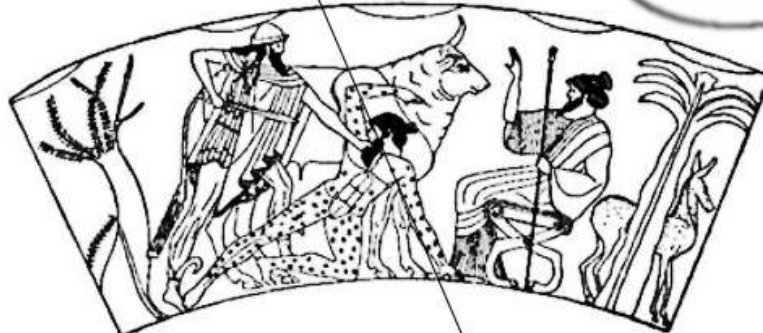
Kingdom of Greece
"Argos" (Ἄργος)
→ Agamemnon's kingdom

Troy
Destroyer

Odysseus' dog
"Argos" (Ἄργος)

Argos
(Ἄργος)

Argos Panoptes
OR
Argus Panoptes
(Ἄργος Πανόπτης)



Project "Argus"
(of Sagans' novel)

アルゴスとの名称、ギリシャ語表記では等しくも Ἄργος と表記されるとのその名称は [ヘルメスに蛇の杖で幻惑されて殺された百眼巨人の名前]・[トロイア包囲に参画したギリシャ勢の総称(アルゴス勢)と結びつくものにしてギリシャ方総大将アガメムノンの出身都市国家名称]・[トロイア方を滅亡に追いやった木馬の計略の考案者たるオデュッセウスの忠犬の名前]の全てを指し示うるものともなっている。

Contact (1985)

Project Argus (of human race) → Grand Central Station (of Black holes or Worm holes)

the side of the slaughtered giant → the side of the slaughterer

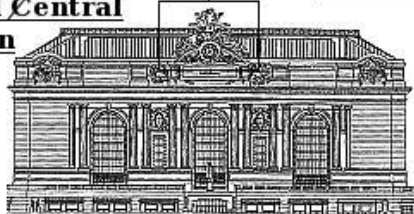
カール・セーガン小説『コンタクト』では「アーガス計画」の結果、宇宙にてブラックホール・ゲートないしワームホール・ゲートが集まるとのグランド・セントラル・ステーション行きが「人類の進歩に好ましいこと」として実現を見る。が、そこに見る「アーガス計画」の由来となった百眼巨人アーガスが現実世界にあつてのグランド・セントラル・ステーションの代表的アイコンとなつてのマーキュリーの同等物ヘルメスに眠りこまされ殺された存在であるとの神話的・地理的な理解がなせるため、「殺される存在の名を冠した計画」が「殺す存在を象徴とする場」への導きをなしているとのことになる。すなわち、「対話法」の奥が如実に伴っている。

kill
Hermes
Argeiphontes

ヘルメス・アルゲイポントース、すなわち、アルゴス殺しのヘルメスとの通り名を有するヘルメスは、その名の由来するところとして眠りこけさせるのかたちでアルゴスの目を封じ、同巨人を殺したと伝わっている存在である。



Grand Central Station



Hercules
Minerva
Mercury

ビッグ・アップルことマンハッタン、同地の世界的に群を抜いているプラットホーム数を誇つてのグランド・セントラル・ターミナル（別称グランド・セントラル・ステーション）には Glory of Commerceとの名称を持つ、商業神マーキュリー（錬金術の神でありヘルメスの同等物たるローマ神）とワンセットになった巨大時計のオブジェが駅それ自体を象徴するものとして存在している。

Contact (1985)

Project Argus (of human race) → Grand Central Station (of Black holes or Worm holes)

the side of the slaughtered giant → the side of the slaughterer

Troy destroyers & Argus (→Argos)

Argos (Argives commanded by Agamemnon)

Odysseus' dog, Argus

殺された側の巨人の名の「アルゴス」はトロイア陥落をもたらしたギリシャ勢（ギリシャ勢も結局は洪水にて壊滅したと伝わる）ことについては本稿の「出典 (Source) 紹介の部44-4」にて詳述）と複合的に、かつ、色濃くも結びつく名詞である。「攻囲勢総称としてのアルゴス勢」・「トロイの木馬の考案者オデュッセウスの犬アルゴス」といったかたちにて、である。

Ithaca & goal of life

トロイア戦争後の艱難辛苦の船旅の目的は故郷であるイサカに辿り着くことであつた（オデュッセウスはイサカの王である）。

Contact (1985) → Carl Sagan

「アルゴス計画」と「アルゴス殺しのヘルメスとつながるグランド・セントラル・ステーション」を結びつけたセーガンはイサカに埋葬され、同地イサカにはセーガンを記念しての規模大きくものモニュメントが存在する

& Sagan Planet Walk

セーガンは1960年代からスタートを見たSETIプロジェクトで主要な役割を果たした男だつた。そして、そのSETIにはフィクションに見るアルス計画と類似するサイクロプス計画が接合している。

SETI (1960s)

Project Cyclops (abandoned)

Trojan Horse creator, Odysseus (the great-grandson of Hermes) blinded Cyclops Polyphemus.

large numbers of radio telescopes to search for Earth-like radio signals

Project Argus (fiction)

Hermes (→ Mercury) blinded Argus (put all of Argus's eyes asleep).

(以上、先述 iv. の部に照応するところの(再掲)図解部とする)

v. つい最前の段にても言及していることだが、
[[対数螺旋構造](いわゆる渦巻き螺旋構造)と[黄金の林檎]の双方
に関わるところの象徴体系・事物らがどういうわけなのか[ブラックホ
ール生成挙動と結びつくとされる実験]と「奇怪な式で」多重的に接合し
ている]

とのことがある(ポイントは「奇怪な式で」そうもなっているとのことであ
る。奇怪な式とは詰まるところ、自然なるかたちで現出しているありよう
「ではない」、すなわち、恣意の賜物となるとのことを支持する特質とな
る)。

他面、オデュッセウス(黄金の林檎を巡っての諍(いさか)いがトロイ
ア滅亡に通じることになったとの誓約の発案者)はホメロス原典では
対数螺旋構造を呈する渦潮の怪物カリュブデイスに吞まれており、ダ
ンテ『地獄篇』にあつてのホメロス原典改変のシナリオでは対数螺旋
構造と結びつく旋風に襲われている。

以上のことら —ここでは i. から v. と便宜的に振りもしてのことら— がすべて成り
立っているとのその事実が示された折(本稿のかなりもってして従前の段ではそれら
が「実際に」成り立っているとのことを示さんとしてきた)、それをして[偶然の業]と思
うだろうか。残念ではならないが、本稿では[偶然]であるとの見方が斥けられてしま
うこと、代わって、すべては[執拗な恣意の賜物]であると判じられるとのことにまつわ
つての明快な論拠らをこれより「さらに」に「さらに」を加えて山ほど呈示していく(:そのこ
とを間接的に強調するためにテニスンの詩なぞを引き合いにしての意図しての訴求を
(といったものは「あてにならぬもの」と現物志向の筆者などが見立てている[過分
に[プロファイリング]がかったの申しよう]となっているところながらも厭わずに)な
したのである)。

[訴求の用に供するべくもの話はここまでとしておく]

さて、ここで「それだけで」100 頁に迫らんとする文量を割いて今までに示しもしてきたこと、[1] から
[5] と分かちもして、

[『地獄篇』とヘラクレス 12 功業の間には関係がある]

とのことにまつわつて示しもしてきたことの内容を振り返って見ることにする。

[1]

ダンテ『地獄篇』とは階層構造をとる地獄を下へ下へ、地球の中枢に下っていくとの

物語である。

その点、[計9層よりなる地獄]にあつての下部領域への踏破行にて『地獄篇』では

[第7層⇒第8層の断崖降下態様:怪物ゲーリュオンに「おぶわれて」の降下]

[第8層⇒第9層の地球中心に向かう穴にての降下態様:巨人アンタイオスに「おぶわれて」の降下]

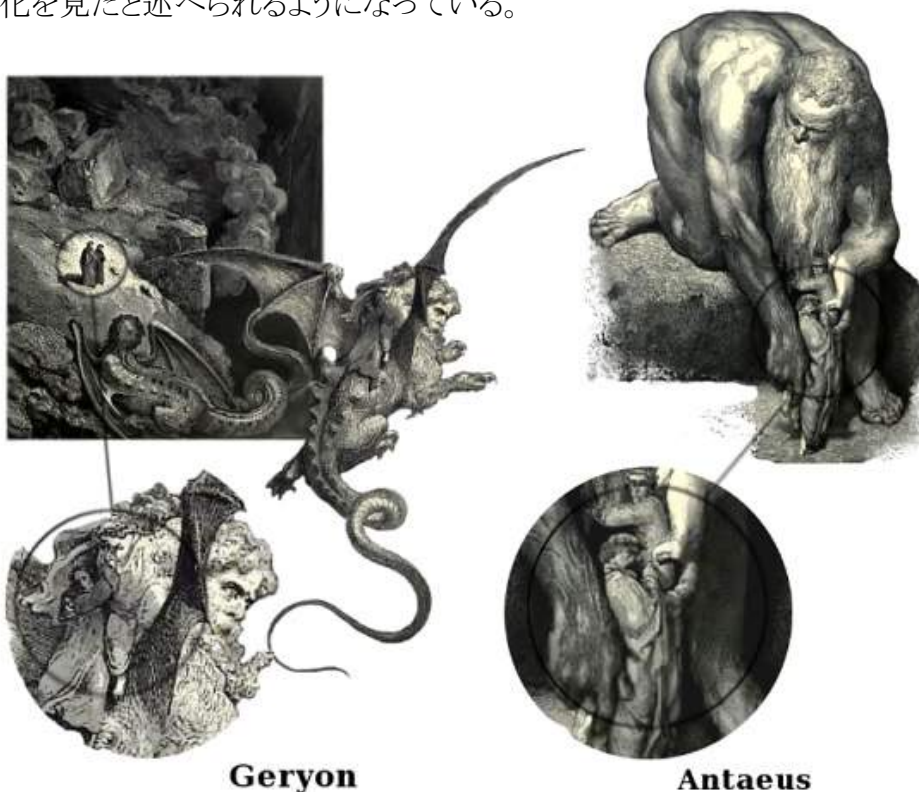
とこのことが現出を見ている。そして、そのことは

[第7層⇒第8層の断崖降下態様:[ヘラクレスの第10番目の功業にて誅された怪物]におぶわれての降下]

[第8層⇒第9層の地球中心に向かう穴にての降下態様:[ヘラクレスの第11番目(別バージョンでは第10番目)の功業の合間にて誅された怪物]におぶわれての降下]

どのように言い換えがなせるところのものである(出典(Source)紹介の部90)。

ダンテ『地獄篇』の最下層への降下は[ヘラクレス12功業にあつての10番目の功業にて誅された存在と11番目の功業(の過程)にて誅された存在]によって順次具現化を見たと述べられるようになっている。



[2]

上の[1]にて指摘しているように、

[第7層⇒第8層の断崖降下態様:[ヘラクレスの第10番目の功業にて誅された怪物]におぶわれての降下]

[第8層⇒第9層の地球中心に向かう穴にての降下態様:[ヘラクレスの第11番目(別バージョンでは第10番目)の功業の合間にて誅された怪物]におぶわれての降下]

が(『地獄篇』地獄にあつての)最下層へ向かう二段階降下ありようとなっているのだが、降下した先にあつてのルシファーの領域(本稿にての[出典\(Source\)紹介の部 55](#)から[出典\(Source\)紹介の部 55\(3\)](#)を包摂する解説部で今日的な観点で見てのブラックホールとの接合性を呈しているとのことを解説しているとの領域)に関しては

[ヘラクレスの12番目の冒険にて捕縛対象となった「三つの顔を持つ」地獄の犬ケルベロス]

のことが想起されるとのことがある([出典\(Source\)紹介の部 90\(2\)](#))。

[3]

ヘラクレスの功業のうち、最後の三つ、

[10番目の功業]([1]で指摘しているところとして『地獄篇』でダンテらの7階層から8階層への降下でダンテらをおぶったゲーリュオンが誅伐された功業)

[11番目の功業](同文に[1]で指摘しているところとして『地獄篇』でダンテらの8階層から9階層(ルチフェロが幽閉されている最下層)への降下でおぶったアンタイオスが誅伐された功業)

[12番目の功業](ダンテ『地獄篇』よろしくヘラクレスが冥界下りをなしてケルベロスを地上に引きづりだすとの筋立ての功業)

に関してはそれらすべてと結びつく特定存在のことが想起されもする。

その第10功業・第11功業・第12功業の全てとの接合性を呈している特定存在とは

[第10番目の功業にてゲーリュオンにヘラクレスやりようを報告した「地獄の王」ハーデースの牛を飼っている牛飼いメノイテース(Menoites ないし Menoetes)]

という存在となる。

同存在(メノイテース)に関しては

[[冥界の王ハーデースの牛飼い]となる同存在がゲーリュオンに対してヘラクレスやりように関する報告をなした存在としてヘラクレス第10番目の功業に登場し、また、冥界にて[ヘラクレスに相撲を挑み(第11功業にてのアンタイオスの運命と同じくも)ヘラクレスに相撲で骨砕きされた存在]としてケルベロス捕縛の任が課せられてのヘラクレス第12番目の功業に登場してきている]

とのことがある(出典(Source)紹介の部 90(3))。

そうしたヘラクレスの[10 番目の功業][11 番目の功業][12 番目の功業]を結びつけるメノイテースは[「地獄の王」の牛飼い][ヘラクレス第 10 功業でヘラクレス略奪行為の「三面の」ゲーリュオンへの注進に及んだ存在][ヘラクレス第 12 功業の「三面の」ケルベロス捕縛の任の途上でヘラクレスと相撲(という名のデス・マッチ)をなすに至った存在]としての特性から[「三面の」「地獄の王」たるルチフェロ]の領域への到達で終わるとの冥界下りのダンテ『地獄篇』と冥界下りのヘラクレス 12 功業との結びつきを想起させる存在ともなり、といった存在のことからダンテ『地獄篇』とヘラクレス 12 功業の関係を顧慮するのは「一層」無理がないと述べられもする。

[4]

ダンテ『地獄篇』ではケルベロスが地獄の浅い階層、[食食者の地獄]に登場を見ている。ケルベロス登場の段は『地獄篇』第 6 歌の部(欧米表記では Canto VI の部)となるが、そのケルベロス登場の段(第 6 歌)に直後続いての『地獄篇』第 7 歌にて[有名な一節]が登場してくる、

[冥界の神プルート Pluto(ギリシャの冥界の神ハデスのローマ版呼称)が喚いた[意味不明な内容の叫び]として文学者のような向きにはよく知られている、英文 Wikipedia にそのためだけの解説項目が一項目設けられているぐらいによく知られているとの、**Papé Satàn, papé Satàn aleppe!**「パペ・サタン・パペ・サタン・アレッペ!」にまつわる一節]

がそうである(出典(Source)紹介の部 90(4))。

ローマ神話にての冥王プルート(「キリスト教を社会基盤とする世界の中で零落して、」といった按配で『地獄篇』に登場しているとの冥王)によるその **Papé Satàn, papé Satàn aleppe** との叫びの登場の段が直前ケルベロス登場の段と連続関係を呈しており、また、その叫び自体に[サタン](最下層に幽閉されている三面のルチフェロ)への言及が含まれているとのことがあるため、(ケルベロスがダンテ地獄篇の浅い階層に別個に登場しているとはいえども)、最下層に控える三面構造のルチフェロ(サタン)との繋がりが想起され、それゆえ、『地獄篇』とヘラクレス 12 功業の(功業順序通りの)接合関係が「よりもって」想起されるとのことになる。

[5]

西洋古典古代文学作品にあつて[冥界下り]を描いた代表的作品はホメロスの手に

なる『オデュッセイア』とヴェルギリウスの手になる『アエネーイス』の二作品であるが、両古典共々、[トロイア崩壊にまつわる作品]「とも」なり、また、[ダンテ『地獄篇』に多大な影響を与えた作品]ともなっているとのことがある(出典(Source)紹介の部 90(5)から出典(Source)紹介の部 90(9)を包摂する解説部)。

につき、(ダンテ『地獄篇』に多大な影響を与えているとの指摘がなせるホメロス古典『オデュッセイア』とヴェルギリウス古典『アエネーイス』の両作品は[トロイア崩壊と関わる作品]であるとのことは上にて記しているとおりが)、それら『オデュッセイア』『アエネーイス』がそれにまつわるものである[トロイア崩壊]の原因と[ヘラクレス 11 番目の功業]及び[ヘラクレス 12 番目の功業]が多重的に関わり合っているとのことがある([トロイア崩壊の原因としての黄金の林檎の等価物ヘレン] [ヘレンと同じくもの制約にまつわる略取対象としてのペルセポネ] らについての解説をなしての出典(Source)紹介の部 90(10)を参照のこと)。

また、ダンテ『地獄篇』では『オデュッセイア』『アエネーイス』に大なるところとしてその役割が描かれる[トロイアに木製の馬で引導を渡した]とのオデュッセウスが[ヘラクレス第 10 功業に由来する象徴物(ヘラクレスの柱)]と結びつけられてダンテがヘラクレス第 10 功業にて殺害されたゲーリュオンの背におぶわれて降り立った地獄の特定階層 —悪意者の地獄たる第八階層— にて登場させられているとのこと「も」がある(『地獄篇』にて[ヘラクレスの柱]が[破滅への分水嶺]として登場してきていることを摘示しての出典(Source)紹介の部 90(11)を参照のこと)。

上のことからダンテ『地獄篇』とヘラクレス 12 功業の関係性が一層、想起されるとのこと「も」ある。

以上をもってして、である。[1] から [5] と振ってのことで通じて

【『地獄篇』とヘラクレス 12 功業の間には関係がある】

とのことを指し示さんとしてきたのか、そのおおよその振り返り表記とする。

さて、では、そもそもをもってして、「何故」、

【『地獄篇』とヘラクレス 12 功業の間には関係がある】

とのことを指し示さんとしてきたのか。

本稿の内容をきちんと把握しているとの向きにあらわれてはいちいち解説するまでもないことかとは思うのだが(それだけ執拗に背景事情につき説明してきたとのつもりでもある)、それは以下にて(極めて長々としたかたちでながらも)再表記していくことにしたことが有機的一体としてお互いに濃厚に繋がっているものとして「個人の属人的主観など一切問題にならぬところとして」重きをなしてそこに「ある」、あまりにも惨憺たるところとしてそこに「ある」、とのその現実に本稿筆者が気付いた(気付いてしまった)からである。

何故、ここまで [1] から [5] と振っての指し示しをなしてきたのかの背景について

まずもって本段を包摂する補説 3 と一区切りにしての部にあつて先ほど、よりもって従前の本稿内容

を振り返りもして再表記したことを(くどくもながら)以下、「再度に再度を重ねて」再表記なすこととする。

(**出典(Source)紹介の部 55**から**出典(Source)紹介の部 55(3)**を包摂する本稿の従前の段にあって古典それそのものよりの原文引用なしつつも典拠示してきたこととして)

i

ダンテ・アリギエーリ『地獄篇』には

[今日、物理学分野の人間らが研究対象として取り扱っているとのブラックホールとの「質的」近似物]

が描かれているとの[現象]が認められる。

具体的には

A. [ダンテらが「一度入ったらば[悲嘆の領域]に向けて歩まざるを得ず一切の希望を捨てねばならない」との[不帰の領域]にまつわる隻句(『地獄篇』地獄門隻句)を目にしたところから入って最終的に到達した[悲嘆]を体現しての地点]

B. [重力] —(古典『地獄篇』それ自体にて To which things heavy draw from every side[あらゆる方向から物の重さが引きつけんとする地点]と表されているところに作用している力)— **の源泉と際立って描写されている場**(地球を球と描いての中心ポイント)]

C. [(「悲嘆の」川コキュートス)にて(静的描写として)罪障がゆえに「凍りついた」者達が、と同時に、(動的描写として)「永劫に粉碎され続けている」との地点]

D. [[光に「語源」を有する存在](ルチフェロ)が幽閉されている地点]

との全ての要素を具備した[[『地獄篇』にての地獄踏破にあっての最終ポイント](コキュートス・ジュデッカ領域)にまつわる描写が

A. [「一度入ったらば二度と出れない」との(事象の地平線の先にての)領域]

B. [重力の源泉となっている場]

C. [外側(生者)から見れば(静的描写として)被吸引者が「時が止まったような状況」になりつつも(動的描写として)その被吸引者本人(死者と化した者)から見れば「粉碎され尽くしている」との場]

D. [[光さえもが逃がられぬ]とされる場]

との全ての要素を具備した**ブラックホール特性**と共通のものとなっている(話としての奇異さはともかくも[記号論的一致性・文献的事実の問題]として共通のものとなっている)とのことが現実にある。

ii

他面、ジョン・ミルトン『失樂園』にあつて「も」
[今日の物理学上の話柄にあつてのブラックホールの「質的」近似物]
が描かれているとの[現象]が認められる。

具体的には

- E. [果てなき(底無し)の暗黒領域]
- F. [大きさ・「時間」・「場所」が無意味となる領域]
- G. [自然の祖たる領域]

とのミルトン『失樂園』に見るアビス(地獄門の先にある深淵領域)にまつわる描写が

- E. [底無しの暗黒領域]
- F. [時空間の法則が破綻する(「時間」と「空間」が本来通りの意をなさなくなる)領域]
- G. [それをもって自然の祖であるとする観点が存する場]

とのブラックホール特性と共通のものとなっているとのことが現実にある(※続く段に付しての補うべくもの[出典\(Source\)紹介の部 55\(3\)](#)を参照のこと)。

iii

ダンテ『地獄篇』にあつての、

[今日的な理解にあつてのブラックホール近似物の描写(於て:コキュートス)]

とミルトン『失樂園』にあつての同じくもの、

[今日的な理解にあつてのブラックホール近似物の描写(於て:アビス)]

は双方別個に別々の側面からブラックホールとの近似性を呈するとのものであるが、「極めて奇怪なことに」双方共に

[ルシファーによる災厄]
[地獄門の先にある破滅・悲劇に関わる通路]

と結びつけられているとのことがある。

以上、i. から iii. と区切つてのことらにつき、まとめれば、『地獄篇』および『失樂園』との両古典を合算して見た際に、

[「ルシファーによる災厄」および「地獄門(と描写されるもの)の先にある
「破滅」「悲劇」への通路]との両要素と結びついたポイント]

に関わるところで

- A. [「不帰の領域」]にまつわる隻句(『地獄篇』地獄門隻句)を目にした
ところから入って最終的に到達した「悲嘆」を体現しての地点 (『地獄
篇』コキュートス)
- B. [「重力の源泉と「際立って」描写されている地点」] (『地獄篇』コ
キュートス)
- C. [(静的描写として)外側から見た際に罪障がゆえに「凍りついた」者
達がそこに横たわっている、と同時に、(動的描写として)当事者から見
れば「永劫に粉碎され続けている」との地点] (『地獄篇』コキュートスの
中枢ジュデッカ)
- D. [「光に語源を有する存在」(ルチフェロ)が幽閉されている地点」
(『地獄篇』コキュートスの中枢ジュデッカ)
- E. [「果てなき(底無し)の暗黒領域」] (『失樂園』アビス)
- F. [「大きさ・「時間」・「場所」が無意味となる領域」] (『失樂園』アビス/
17世紀成立の『失樂園』の刊行時には時間と空間を有機的の一体と見る
相対性理論に通ずる発想法は無論、なかった)
- G. [「自然の祖たる領域」] (『失樂園』アビス)

との要素らを「全て兼ね備えての」ありようが具現化していると述べられるようになっており、
そうしたありようが現代物理学——(その担い手らが本質的には知性も自由度もないに
も関わらず知性あるフリをさせられている下らぬ人種(ダンテ地獄篇にて欺瞞をこととする
[人類の裏切り者]らとして氷地獄に閉じ込められているような者達)か否かどうかはこの
際、関係ないものとしての現代物理学)——の発展にて呈示されるようになったとの
[「今日的な観点で見ての」ブラックホール像]と共通性を呈している、すなわち、

- A. [「一度入ったら二度と出れない」との(事象の地平線の先にての)
領域」] (ブラックホール内側)
- B. [「重力の源泉となっている場」] (ブラックホール)
- C. [(静的描写として)外側(生者)から見れば被吸引者が「時が止まっ
たような状況」になっているとのことがありつつも(動的描写として)その
被吸引者本人(死者と化した者)から見れば「粉碎され尽くしている」と
の場」] (ブラックホール)
- D. [「光さえもが逃がれられない」とされる場」] (ブラックホール内側)
- E. [「底無し」の暗黒領域」] (ブラックホール)
- F. [「時空間の法則が破綻する(「時間」と「空間」が本来通りの意をなさ
なくなる)領域」] (ブラックホール)
- G. [「それをもって自然の祖であるとする観点が存する場」] (ブラック

ホール)

との特徴を全て兼ね備えたものとしての「今日的な観点で見てのブラックホール像」と共通性を呈していると摘示できるように「なっている」とのことがある。

(補説3 冒頭部にてなしたところの振り返り表記をさらに再述したところの記述部はここまでとする)

以上、再度、そのままに繰り返しもして、注意を向けもした——ここまでの[1]から[5]の指し示しをなした、すなわち、[ダンテ『地獄篇』とヘラクレスの12功業が繋げられている]とのことにまつわっての指し示しをなしたその[動機]に関わるところとして注意を向けもした——とのことに通ずるものとして本稿にては次のことらをひたすらに指し示してきたとの【従前経緯】がある。

(指し示し順序を多少、というより、かなり違(たが)えながらも、の本稿の「従前」内容の確認をなすとして)

[本稿でネックとして重んじていることは[アトラス][アトランティス][トロイア]であると先にて明言している。その点、[アトラス]は「ヘラクレスの」第11番目の功業にて登場してくる[黄金の林檎]の管掌者らヘスペリデスの居所たる黄金の林檎の園の所在地を知る巨人であると伝わっている存在である(出典(Source)紹介の部39)が、その[アトラス]と同じくもの名前を持つ[アトラス王]に統治されている(出典(Source)紹介の部36)のが古の陸塊アトランティス——アトランティスは[アトラスの娘]といったニュアンスの言葉でもある(出典(Source)紹介の部40)——となる。そのアトランティスと[黄金の林檎]を媒介にしても結びつく要素を具備しているのが黄金の林檎ではじまった戦争にて木製の馬の計略で滅尽滅亡を見たとのトロイアである(出典(Source)紹介の部40から出典(Source)紹介の部45を包摂する一連の解説部)]

[11番目の功業にて[黄金の林檎]を探索し、アトラスにまみえたとのヘラクレスは[蛇の眷族退治の英雄]にして[メデューサ殺しのペルセウスの曾孫]にあたる存在であり、古今東西の伝承らの中であっておそらく最も多くの(固有名詞が付された)多頭の蛇の眷族を討伐しているとの存在である](：左記のことからして申し分が至当か、事実かどうか疑わしいとの向きにおかれては出典(Source)紹介の部63(4)を包摂する解説部を参照されたい)

[「アトランティスに対する蛇の種族による次元間侵略」という[「一見するだけでは」神秘家の妄言]ととれるものが前世紀、大戦期に近接する時期から存在している——についてはより従前より存在していたパルプ小説『影の王国』の筋立てを受けてのものであると皮相的表層的には解されるようになってもいるのだが、そうしたものなりといえども顧慮すべき他事情が存する——](：左記のことが事実かどうか疑わしきにおかれては出典(Source)紹介の部34および出典(Source)紹介の部34-2を包摂する解説部を参照のこと)

[その言行ありよう、事実・証拠に何ら依拠せぬことをとうとうとまくしたてるといったありようから世間一般(の良識層)には取り合ふに値せじの存在と看做されるような神秘家らといった向きらによるアトランティスに対する蛇の種族の次元間侵

略といった申しよう(直上にて言及の申しよう)と接合するように見えるところとして、**[恐竜人の種族による次元間侵略]**などのをストーリーを伴ったフィクションが「1993年に」登場を見ており、同作では**[片方の上階に風穴が開きつつ][片方が崩落する]**とのツインタワー —(恐竜人の首府と融合するとのツインタワー)— を描いての予見的描写が「現実に見てとれる —子供向け荒唐無稽映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』にまつわる話となる—」(:左記のことが事実かどうか疑わしきにおかれては**出典(Source) 紹介の部 27**を包摂する解説部を参照のこと)

[CERNのLHC実験]は「実際の命名規則の問題として」1990年代のプラン策定段階にての1992年(米国にて2004年に放映されていたテレビドラマ『スターゲイト・アトランティス』といったものを包摂する一連のスターゲイト・シリーズの嚆矢たる映画作品『スターゲイト』が1994年の公開にて世に出ることになった折より2年程前)より**アトラス —ヘラクレスの第11功業に[黄金の林檎]の在処を把握する存在として登場した巨人—**と結びつけられ、また、後に**そのアトラスと語義を近くもするアトランティスともブラックホール探索挙動との絡みで結びつけられるに至っている実験**となっている(しかもブラックホールの生成を観測しうるメカニズムと銘打たれているイベント・ディスプレイ・ツールのATLANTISについてはプラトンの古典『クリティアス』記述から再現できるところの古のアトランティスの城郭構造を意識させるようなモニタリング画面を用いているとの按配での堂の入りようとなっている)(:左記のことが事実かどうか疑わしきにおかれては**出典(Source) 紹介の部 35**から**出典(Source) 紹介の部 36(3)**を包摂する解説部および**出典(Source) 紹介の部 47**を包摂する解説部を参照のこと)

[古の陸塊アトランティスの崩壊伝承はトロイアの内破後の顛末と同様の側面を有する(双方ともギリシャ連合軍との交戦の後、終局的に洪水に吞まれてこの世から消えたと伝わる)。また、「巨人アトラスの娘」との語感を持つ伝説上のアトランティス大陸については[黄金の林檎(トロイア崩壊の原因)の園]とも一部にて結びつけられてきたとの存在でもある](:左記のことが事実かどうか疑わしきにおかれては**出典(Source) 紹介の部 40**から**出典(Source) 紹介の部 45**を包摂する一連の解説部を参照のこと)

[ヘラクレスの11功業は(直上そうだと述べているように)[巨人アトラス]および[黄金の林檎]に関わるものとなるのだが、「**どういうわけなのか**」[先の911の事件の前言を多重的に含んでいるとの事物ら]が存在しており、それらがまたもってしてその**[ヘラクレスの11功業]にまつわる寓意とも結びついているとのことがある** —[次元間浸潤妖怪の復活]や[古代アトランティスに対する蛇人間が道具として用いられての侵略]といった従前サブ・カルチャー(戦前期パルプ小説『影の王国』など)内容を受けてのものと思しき70年代に大ヒットを見ている『ジ・イルミナタス・トリロジー』が本稿にての「ここまでの段階で」挙げた一例となる—】(:左記のことが事実かどうか疑わしきにおかれては(まずもっての一例として他例に先駆けて呈示した『ジ・イルミナタス・トリロジー』にまつわる**出典紹介部のみ再言及して記しておくこととして****出典(Source) 紹介の部 37**から**出典(Source) 紹介の部 37-5**そして**出典(Source) 紹介の部 38**から**出典(Source) 紹介の部 38-2**を含む解説部 —『ジ・イルミナタス・トリロジー』という作品に

つきオンライン上より全文現行確認できるようになっているとの原著よりの原文抜粋および国内で流通している訳書よりの抜粋をなしつつ「どこが」「どのように」「[911の事件に対する奇怪なる前言と呼べるようなパートとなっているかにつき事細かに解説しているとの部——を参照のこと)

[911の先覚的言及をなしているといった形態をとる上記映画、一見するかぎりは子供向け荒唐無稽映画との形態をとる『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』は、(再度繰り返し述べ)、[(多世界解釈に接合する)他世界間の融合]との内容の作品となるが、そうした他世界間の接続問題と結びつきうる[ブラックホール][ワームホール]の問題を主色として扱い、また、同様に[911の事件]に対する多重的前言をなしているような奇怪な物理学者の著名論稿——BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』——が「現実」に存在しているとのことがある(:左記のことが事実かどうか疑わしきにおかれては(羅列しての表記をなし)出典(Source)紹介の部 28, 出典(Source)紹介の部 28-2, 出典(Source)紹介の部 28-3, 出典(Source)紹介の部 31, 出典(Source)紹介の部 31-2, 出典(Source)紹介の部 32, 出典(Source)紹介の部 32-2, 出典(Source)紹介の部 33, 出典(Source)紹介の部 33-2を包摂する解説部を参照いただきたい。以上の部では BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』が[双子のパラドックス(1911年提唱)][[91101(2001年9月11日となる数)との数値と開始郵便番号(ジップコード)にて結びつく地域(カリフォルニア州パサデナ)]と[双子のパラドックス]を結びつけるとの設定を多重的に採用][2000年9月11日⇒2001年9月11日とつながる日時表記の使用][他の関連書籍を介しての「ブラックホール⇄グラウンド・ゼロ」との対応図式の介在]といった複合的要素を[僅か一例としての思考実験]にまつわるところで同時に具現化させ、もって、[双子の塔が崩された911の事件]の前言と解されることをなしているとのことについて(筆者の主観など問題にならぬとの客観事実に関わるところとして)細大漏らさずにもの原文引用方式での摘示に努めている。また、それに先立つところ、本稿にての出典(Source)紹介の部 29から出典(Source)紹介の部 30-2を包摂する解説部ではその前言問題に関わるところの[双子のパラドックス](1911年提唱)というものと結びついているとのこと、よく指摘される[浦島伝承](初期(丹後国風土記)にては爬虫類(出典(Source)紹介の部 29にて呈示の書籍に見るように「亀」の化生した存在)と人間の異種結婚譚との側面も有していた浦島子にまつわる伝承)が欧州のケルトの伝承と数値的に不可解な一致性を呈していることなどを解説、その「伝承伝播では説明がつけがたい」との特異性についての指摘もなしている)

[**[加速器(およびそのゲート開閉)]と[爬虫類の異種族の来臨来寇]**との両要素と結びつく作品らが従前から存在しており(露骨なところではどこがどう問題となるのか原著及び訳書から原文引用なしつつも些細な解説を付したとの『リアンの剣』という作品がそうである)、の中には、カシミール・エフェクトといった後に発見された概念につき尋常一様ならざるかたちにて先覚的言及をなしているとの

作品『フェッセンデンの宇宙』が存在している](:左記のことが事実かどうか疑わしきにおかれては**出典(Source)紹介の部 22**から**出典(Source)紹介の部 26-3**および**出典(Source)紹介の部 65(6)**から**出典(Source)紹介の部 65(8)**を包摂する一連の解説部を参照のこと)

ここまでの振り返って記述をなしていることを押さえたうえで、また、『地獄篇』にて今日的な理解に基づくブラックホールと類似のものが現出を見ているとの指摘がなせることを押さえれば、——長大なる本稿にて膨大な文量を割いて問題摘示していることの過半を把握しておらずとも——何故に手前が

[『地獄篇』(本稿**出典(Source)紹介の部 55**から**出典(Source)紹介の部 55(3)**を包摂する解説部)にてブラックホールとの接合性を解説しているとの古典)とヘラクレス12功業の間には関係がある]

どのことを問題視しているのか(シンパシー、共感までは内容検証をきっちりなしていただくまでは求めることはしないとしても)「理解」なしていただけたことか、と思う(:尚、『致命的な状況が現実そこにありとの指し示しがなせるとの状況にて指し示しに対する[検討]の試みさえなそうとしないというのなら、そのような者に生存のための闘いなどできるわけがないだろう』との観点・認識が——そこにいう致命的な状況というものについての慮りをなして、たとえば、LHC関連の行政訴訟を権威の首府を相手方に国内でも一審からして二年ほど続かたちにて実行してきた(本稿の先の段にて既述)、自己満足ではなく「唯・訴求のためだけに」実行してきた人間として申し述べるのだが——この身、手前にはある。そして、さらに冷たくも言い放せば、「[行動]のみが求められる局面で行動をなさぬ種族には([できる/できない]の問題として)存続を[不可能]であろうし、[行動]のみが唯一、生存に通ずるところで何ら建設的なことをやろうせず、あまつさえ、軽侮を招くだけの証拠に何ら依拠していない陰謀「論」・陰謀「説」の類に[真実]を心中ないし外面で「貶める」というのなら、そういうことをなす愚劣な種族の裏切り者たる類を多数抱える種族は([できる・できない]の問題から離れての価値判断の問題として)存続に「値しなからう」との観点が手前にはある)。

だが、まだ足りないとの向きを想定して本稿では次のようなことらまで指し示してきたとのこと「も」振り返って一例摘示しておく(そちらもまた何を取り上げるのかの話柄選択以外には全て筆者主観とは無縁なること、客観的に堅くも指し示せるところとして指し示してきたところとなる)。

(指し示し順序を多少、というより、かなり違(たが)えながらも、の本稿の従前内容の確認として —2—)

[『黄金の林檎』についてはそれを**エデンの禁断の果実**を結びつける視点が欧州一部識者より呈されてきたとのことがある(**出典(Source)紹介の部 51**)。また、**トロイア崩壊に至る黄金の林檎に起因する争い**と**エデンの果実に手を出したことの楽園喪失**のそれぞれの物語の間には複合的に純・記号論的類似性が存するとの指摘がなせるようになっており(**出典(Source)紹介の部 48**から**出典(Source)紹介の部 51**を包摂する解説部の内容を参照されたい)、同じくものこと——**トロイア崩壊に至る黄金の林檎に起因する争い**と**エデンの果実に手を出したことの楽園喪失**の繋がり合い——が「奇怪も甚だしきことに」大航海時代の特定文明崩壊を巡る過程、[蛇の神による信仰がアステカ文明にもたらした惨状]と記号論的に接合しているとのことまで「もが」ある(**出典(Source)紹介の部 51**から**出典(Source)紹介の部 54(4)**を包摂する解説部)。それにつき、祝賀すべきとされた蛇の神ケツアルコアトルの再臨の年(一の葦

(あし)の年;セアカトル)にあってのスペイン人征服者ら来寇の意味合いを[神の再臨]と結びつけたために容易に滅ぼされたとされるアステカ文明で崇められたまさにその蛇の神ケツアルコアトルが[聖書の古き蛇;エデンでの誘惑をなした蛇]との共通属性を幾点も伴っているとの指摘がなせるようになっている(なかで本稿では実際にそれらの点について指し示してきた)うえにケツアルコアトルを崇めてのアステカ文明が栄えていた新大陸アメリカは[黄金の林檎の果樹園]とも記号論的に通ずるところがあると見られてきた領域となり、そして、同アメリカ大陸は[アトランティス]に同定されて「きた」領域でもあるとのことが[エデンの園←→黄金の林檎の果樹園]との関係と併せて思料すべきこととしてある(出典(Source)紹介の部 52 など)]

[ダンテ『地獄篇』と同様に[地獄に追放されたルシファーに起因する災厄][地獄門の先の領域]との絡みで[「今日的な意味で見ての」ブラックホール]の類似物が「どういうわけか」お目見えしているのが著名古典たるミルトン『失樂園』なのだが(出典(Source)紹介の部 55 から出典(Source)紹介の部 55(3)を包摂する解説部を参照のこと)、その『失樂園』で主要なるモチーフとされている樂園喪失をもたらしたエデンの林檎(ミルトンは[知恵の樹の実]を[林檎]と明言している)に関して問題となるところとして、である。ミルトン叙事詩『失樂園』にあっての[今日的に見た上でのブラックホール類似の特性 一時間と空間が意味を失う底無し¹の暗黒領域にして自然そのものの祖として描写されての特性一]を帯びた[アビス;深淵]の領域をサタンが横断する部]の内容が地理的にトロイア崩壊譚と結びつけられているものとなっている、のみならず、[アッシュールバニパル王の図書館より再発見された『ギルガメシュ叙事』]との関連性までも「時期的に不可解に」(明示できるところとしてギルガメシュ叙事詩の発掘による「再」発見前、それがゆえに、文化伝播が観念しがたいとの意で時期的に不可解に)見出せるものとなっているとことがある(出典(Source)紹介の部 59 から出典(Source)紹介の部 60(2)を包摂する解説部を参照されたい)。そして、洪水伝承と結節するところで[蛇による不死の草の略取]との結論が描かれている『ギルガメシュ叙事詩』に関して述べれば、それが多重的に[ヘラクレス(の黄金の林檎の物語と関わってくる 11 番目の功業)との結びつき]を呈しもしていることが摘示できるようになってしまっているとことがある(出典(Source)紹介の部 63 から出典(Source)紹介の部 63(3)を包摂する解説部)]

[ミルトン『失樂園』と「時期的に不自然に」内容上の記号論的類似性を有する(と直上言及しもしての)『ギルガメシュ叙事詩』。そちら『ギルガメシュ叙事詩』とそれまた記号論的に類似する(と上にて言及の)ヘラクレスの 11 番目の功業。そのヘラクレス第 11 功業の目標物となっていた[黄金の林檎]を巡る三女神らの争いがそこへの攻囲戦の元凶 一木製の馬の計略で終幕を見たとの城市への攻囲戦の元凶一 となっていると伝承が語り継いでいるのが古のトロイア城市となるわけだが(出典(Source)紹介の部 39)、同トロイア、往古より[洪水伝承](地理的にブラック・シー・デリュージ・ハイポセシスこと[黒海洪水仮説]とも結びつくように見て取れる洪水伝承)と結びつけられてきたとすることがあり、その黒海にまつわる洪水伝承とは[陸地に対する水流貫通のうえで海峡が構築されたとのボスポラス海峡構築伝承]にして、また、[神の粛清としてのノアの往古の洪水]とも関わるとの[解釈論]が近代より呈されるに至ったものでもあった(各地の洪水伝承を蒐集してまとめているとの論稿、引用をなしてきた Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law との論稿に見るジェイムズ・フレイザーが 20 世紀前半にて呈示の観点からしてそういうところがあると窺い知れ(出典(Source)紹介の部 58(3)および出典(Source)紹介の

部 58(4)、20 世紀最後の方にて科学的論拠というものを具備しつつ目立って提示されてきた方の[黒海洪水伝承]にも同様の色彩が伴っている(出典(Source)紹介の部 57)とのことが現実にある——であるから、疑わしいとの向きにあっては本稿にて細かくも引用しているそちら出典を確認いただきたい——)。他面、(神に見放されてのトロイア終末と同様に同じくも)[神の粛清]にまつわる話である[ノアの洪水]に先立つ出来事として聖書に見受けられる[神の粛清]たる[エデンの園からの追放]と関わるエピソードを描いた作品たるミルトン『失楽園』特定パートにては[トロイア崩壊伝承にまつわるエピソード]のことが持ち出され、そこにては[海峡構築と結びつけられての黒海洪水伝承内容]と結びつくものである特定ワード「ら」がそれと明示せずに「隠喩的に、」といったかたちで複合的に持ち出されているとのことが「現実」にある——具体的にはサタンがアビスの領域を横断して[擬人化されての妻子たる[罪]と[死]の餌食に人間を供する道]を拓いたとの部において[アケメネス朝の王クセルクセスがアジアとヨーロッパを結ぶかたちでボスポラス海峡([黒海洪水]説の具)に[船橋]を掛けようとしたことへの言及](出典(Source)紹介の部 56(2))、[[海峡構築に通じている洪水伝承]と結びつくダーネルス海峡(ボスポラス南方にてのトロイア創建の地界限)と同義のヘレスポントス海峡に対する「通路構築経路」にあっての貫通にまつわる隠喩的言及](出典(Source)紹介の部 56)、[後日譚(Posthomerica)『トロイア戦記』に見る後日譚]では攻囲勢も戦後の帰路にてことごとく[洪水]に呑まれたとの帰結が語られているトロイア戦争、そのトロイア戦争に木製の馬で引導を渡した謀将(オデュッセウス)が帰路にて際会した渦巻き怪物カリュプティスへの言及]がなされているといったことがある——(⇒出典(Source)紹介の部 55(3)にて『失楽園』より引用したパート、[And more endangered, than when Argo passed] [Through Bosphorus, betwixt the justling rocks ;] [Or when Ulysses on the larboard shunned Charybdis, and by the other whirlpool steered.][彼はその衝撃を排除し、必死に進路を求めて飛翔しつづけた。勿論、幾多の困難と危険にも直面したが、それは、互に闘(せめ)ぎ合う岩礁の間をぬいながら、ボスポラス海峡を通過したときのアルゴ号が、乃至は、左舷ではカリュプティスを避け右舷では渦巻すれすれに進路をとったオデュッセウスが、直面したものよりさらに甚だしいものであった]とのパートおよび[From Susa, his Memnonian palace high,] [Came to the sea, and, over Hellespont] [Bridging his way, Europe with Asia joined,] [And scourged with many a stroke the indignant waves.][この橋は、かつて[クセルクセス]がギリシャの自由を束縛しようとして、メムノンゆかりのあの宏大な宮殿の地スサから海岸地帯に降りてきて、[ヘレスポント海峡]すなわちダーネルス海峡に橋を架けることによって[ヨーロッパとアジアを結びつけよう]としたが、[その際反抗する狂欄を幾度も鞭打った]故事を偲ばせた]とのパートが該当部位の一部をなすところとなる。同部位、先述のように[現代的に見てのブラックホール近似の表現]が[[死]と[罪]の通用門に関わるところ]と接続する式で用いられもしている、同文に今日的な意味でブラックホールと呼ばれる存在の特性を多重的に帯びているものを持ち出しているダンテ『地獄篇』とも記号論的に通ずるとのありようで用いられもしている箇所「でも」があるがために問題となる(詳しくは出典(Source)紹介の部 55 から出典(Source)紹介の部 55(3)を包摂する箇所、解説分量にして数万余字の箇所を参照されたい)]

(「複雑ながらも重要なところである」と定置するため、「多少、表現を換えてながらも直上部までの内容の繰り返しとなる」との表記を多く含ませての「整理」のための話をなすとして)

[再述するが、ダンテ『地獄篇』と同様に[地獄に追放されたルシファーに起因する災厄][地獄門の先の領域]との絡みで[「今日的な意味で見ての」ブラックホール]の類似物が — 無論にして異常異様なる話なのだが — お目見えしているのがミルトン『失樂園』となっている(出典(Source)紹介の部 55 から出典(Source)紹介の部 55(3)を包摂する解説部)。その絡みで問題となるミルトン『失樂園』の特定部、ブラックホール類似物としての[アビス](時間と空間が意味をなさなくなる底無しの暗黒領域)を描いているとの部となり、そこでは[サタンが人間を林檎でたばかって擬人化されての[罪]と[死]の餌食へとアダムとエヴァの子孫たる人類を曝すことに成功するとのそのプロセス]が — ご確認いただきたい文献的事実の問題として — 描写されている(出典(Source)紹介の部 55(2)および出典(Source)紹介の部 55(3)の部で原著よりの抜粋をなしている)。そもした『失樂園』にあつてのブラックホール描写に通ずる部にあつて地理的に[黒海洪水仮説][黒海洪水伝承]を想起させるようなかたちで[トロイア近傍]に対する言及もがなされている。さらに述べれば、ミルトン古典『失樂園』の[林檎による誘惑]とワンセットのそもした[ブラックホール近似物たるアビスを登場させてのアビス領域通用路構築]を巡る内容はギルガメシュ叙事詩に見る洪水伝承関連のパートと時期的に不自然に(ギルガメシュ伝承が欧州にて再発見される前であつたので『失樂園』作者ミルトンがそれを知り得なかつたという意味で時期的に不自然に)記号論なる意味での類似性を呈してもおり、そして、ギルガメシュ伝承の洪水伝承にまつわるそちらパートは記号論的に多重的に[ヘラクレスが黄金の林檎を求めた第 11 功業]と接合すると指摘できるようになっている(出典(Source)紹介の部 63 から出典(Source)紹介の部 63(3))。他面、全くの別側面で[黄金の林檎]と[失樂園をもたらしたエデンの果実]には複合的つながりがある(出典(Source)紹介の部 51)、のみならず、[エデンの誘惑のプロセス]と[黄金の林檎を巡る争いに起因するトロイア崩壊プロセス]にも同文に純・記号論的なつながりがある(出典(Source)紹介の部 48 から出典(Source)紹介の部 51を包摂する解説部)と摘示なせるようになっており、といった中で[黄金の林檎]及びそれと結びつく[アトランティス]の寓意が「どういうわけか、」LHC によるブラックホール生成可能性に通ずる ATLAS や ATLANTIS を巡る命名規則に結びつけられているとのことがある(との指摘をもなしてきたのが本稿である — 出典(Source)紹介の部 35 から出典(Source)紹介の部 36(3)を包摂する解説部および出典(Source)紹介の部 47 を包摂する解説部を参照されたい —)]

(上記のことらに関わるところの従前[図解部]の再掲もここになしておく — オンライン上より後追い可能であるとのかたちにて細かくも原文引用をなしながらも付しているとの膨大な出典紹介部をすべて割愛して図の紹介をなすだけでも膨大なものになってしまうのだが、一部、図を選択して再掲をなしておく — 。より具体的にはブラックシー・デリュージ・ハイポセシス、黒海洪水説というものがいかにして[トロイア崩壊の物語]および[ミルトン『失樂園』にあつてのルシファーの誘惑プロセス — 続いての人類が擬人化されての[罪]と[死]の餌食とされたとのプロセス —]の双方と結びついているかについて[補説 1]と振つての部(現行は補説 3 にての表記をなしている)に立ち入る前の先立つての段で細々と述べてきたことを振り返るべくもの図解部再掲をなしておく)

トロイアについてはその創建伝承からして「洪水伝承」との結びつきが観念できるようになっている。しかもそこにて結びつきが観念される伝承は20世紀末にて注目を集め出した「黒海洪水「仮説」」(先述)のことを露骨なまでに意識させるとのものとなっている。

同点委細についてはダーダネルス海峡の命名由来にもなっているトロイア市創建者ダルダネスにまつわるところの伝承を紹介している著作、前世紀初頭に世に出たジェイムズ・フレイザー(著名な『金枝篇』の著者)の手になる洪水伝承蒐集著作よりのものとして下にて(再度の)引用をなしているところを参照すれば理解できるようになっている。

本稿にての [出典(Source)紹介の部58 (3)] および [出典(Source)紹介の部58 (4)] にて紹介した出典内容の再掲として

" From his home in the highlands of Arcadia, the emigrant Dardanus is said to have made his way to the island of Samothrace. According to one account, he floated thither great flood on a raft ; but according to another version of the legend, the great flood overtook him, not in Arcadia, but in Samothrace, and he escaped on an inflated skin, drifting on the whence he face of the waters till he landed on Mount Ida, where he escaped to founded Dardania or Troia. "

——James Frazer (Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law [CHAP. IV])

(ジェイムズ・フレイザーの洪水伝承蒐集論稿たる Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Lawの(紙幅の都合なのか全訳ではない抄訳なしてのものたる)訳書『洪水伝説』(国文社.訳者は英文学者の故・星野徹)にあっての原著抜粋箇所に対応する部分を抜粋する。該当部は61ページにあっての下の部となる)

「アルカディアの高地帯にあった故郷から、移住者ダルダノスはサモトラケ島へと移っていたと言われる。一つの説明によると、彼は筏に乗ってそこへ漂っていった。だがもうひとつの版の伝説によると、大洪水がアルカディアでなくサモトラケにおいて彼に追いついたので、彼は空気でふくらせた皮袋に乗って避難し、海面を漂ったあげくにイーダ山に上陸して、その土地に彼はダルダニア、またはトロイアを建設した」

" The causes which the Samothracians alleged for the inundation were very remarkable. The catastrophe happened, according to them, not through a heavy fall of rain, but through a sudden and extraordinary rising of the sea occasioned by the bursting of the barriers which till then had divided the Black Sea from the Mediterranean. At that time the enormous volume of water dammed up behind these barriers broke bounds, and cleaving for itself a passage through the opposing land created the straits which are now known as the Bosphorus and the Dardanelles, through which the waters of the Black Sea have ever since flowed into the Mediterranean. "

——James Frazer (Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law [CHAP. IV])

(上と同様に訳書(『洪水伝説』(国文社)にあっての原著抜粋箇所に対応する部分を抜粋する。該当部は62ページにあっての下の部となる)

「(洪水にあたって)生存者は高山に逃げのびたということだった。

(中略)

この高山があるためにいまでもサモトラケ島は北エーゲ海の最も目立つ

Studies in Comparative Religion, Legend and Law [CHAP. IV])

(上と同様に訳書(『洪水伝説』(国文社)にあっての原著抜粋箇所に対応する部分を抜粋する。該当部は62ページにあっての下の部となる)

「(洪水にあたって) 生存者は高山に逃げのびたということだった。
(中略)

この高山があるためにいまでもサモトラケ島は北エーゲ海の最も目立つものの一つとなっており、よく晴れた日にはその山々がトロイアからはっきりと見えるのである。海は逃げのびていく彼らをなおも追いかけてきたので、彼らは神々に救ってくれるようにと祈った。そして救われると島の周囲に、ここから自分たちが救助されたのだというしるしの境界線をつくり、また祭壇を築いてのちのちまで欠かさず犠牲を捧げてきた。

(中略)

サモトラケ人が、氾濫を引き起こした原因だと考えたものは、非常に注目すべきものであった。彼らによれば、大変動は豪雨のためではなく、黒海と地中海とをそのときまで分離していた障壁の陸地の崩壊によって海が突然異常に隆起したためであった。そのときこの障壁の背後に堰き止められていた膨大な量の海水が常軌を逸脱し、海水自体の力で堰き止めていた陸地に水路を切り開き、いまではボスポラス海峡とダルダネス海峡として知られる海峡をつくった」



頭部欠損を見た、著名なサモトラケ島出土の勝利の女神ニケの像。同ニケ像が出土した

[サモトラケ島]

に由来するものとして[黒海洪水仮説]とほぼ同じく、もの内容を有した伝承が存在していること、しかも、それが

[トロイア創建伝説]

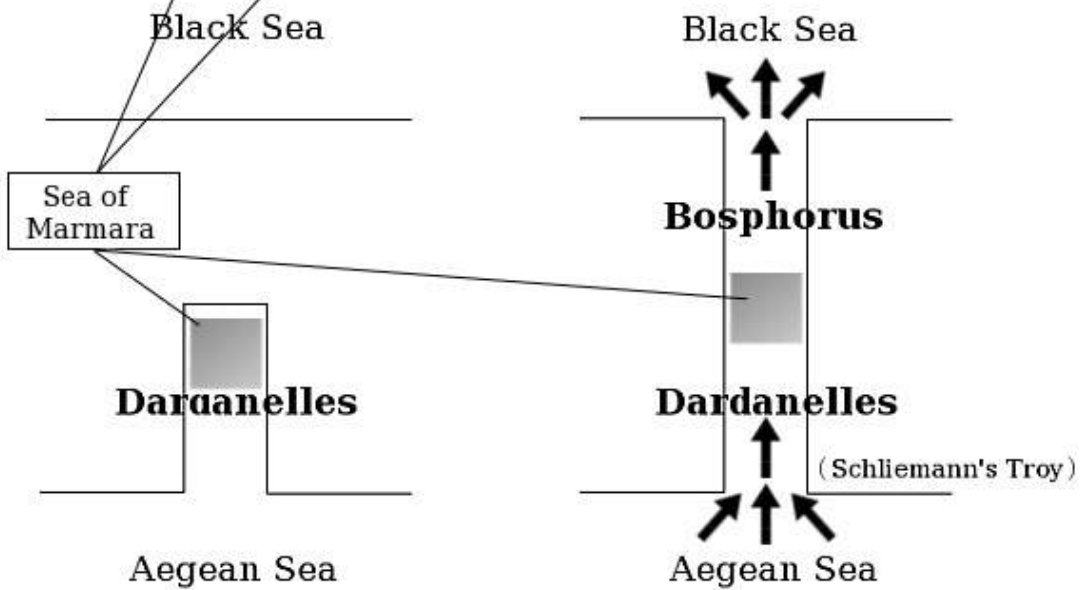
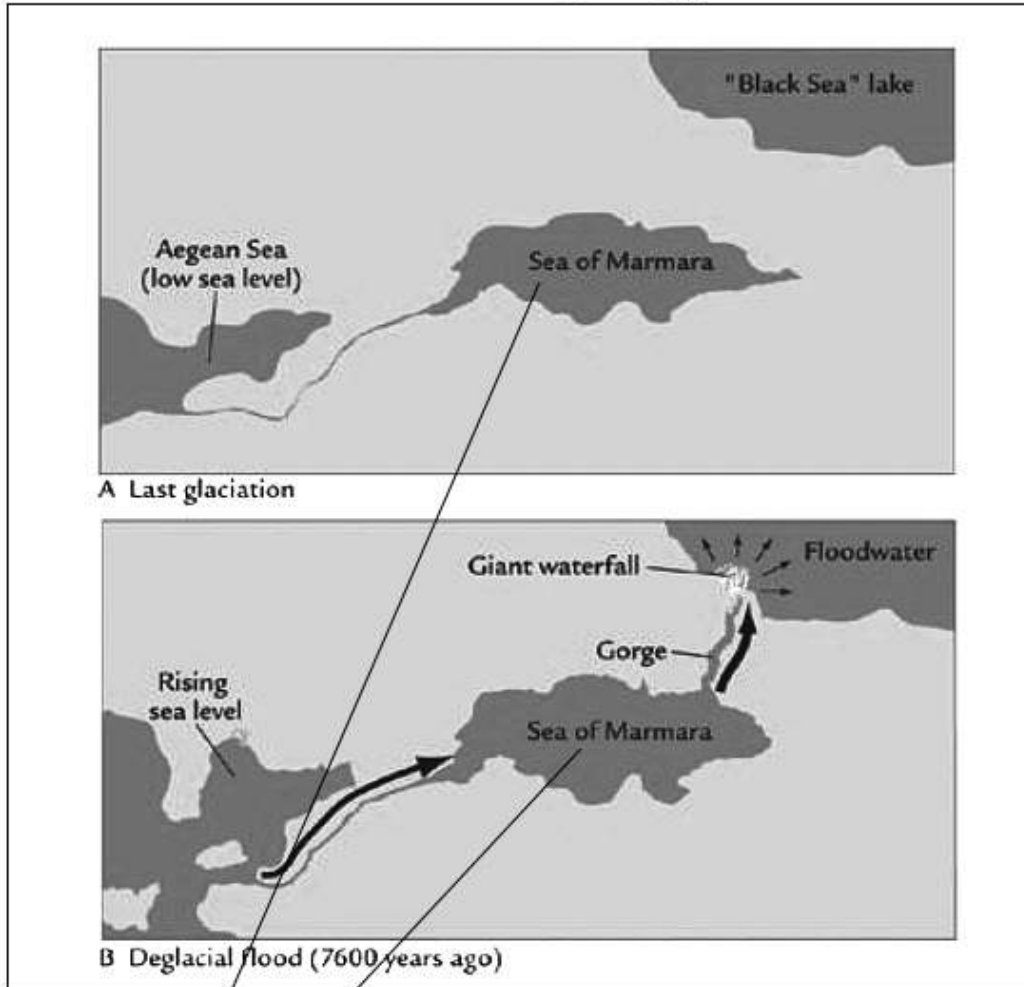
と関わっているのをご先にて指摘している(トロイア創建者ダルダノスがかようにトロイアに辿り着いたのか、という式にて、である)。

尚、ニケはアテナ神の「随神」であるとされるわけだが(それがためにパルテノン神殿の著名なアテナ神像の手の上にも翼を生やしたニケ神が乗せられている)、そちらアテナ神というのは

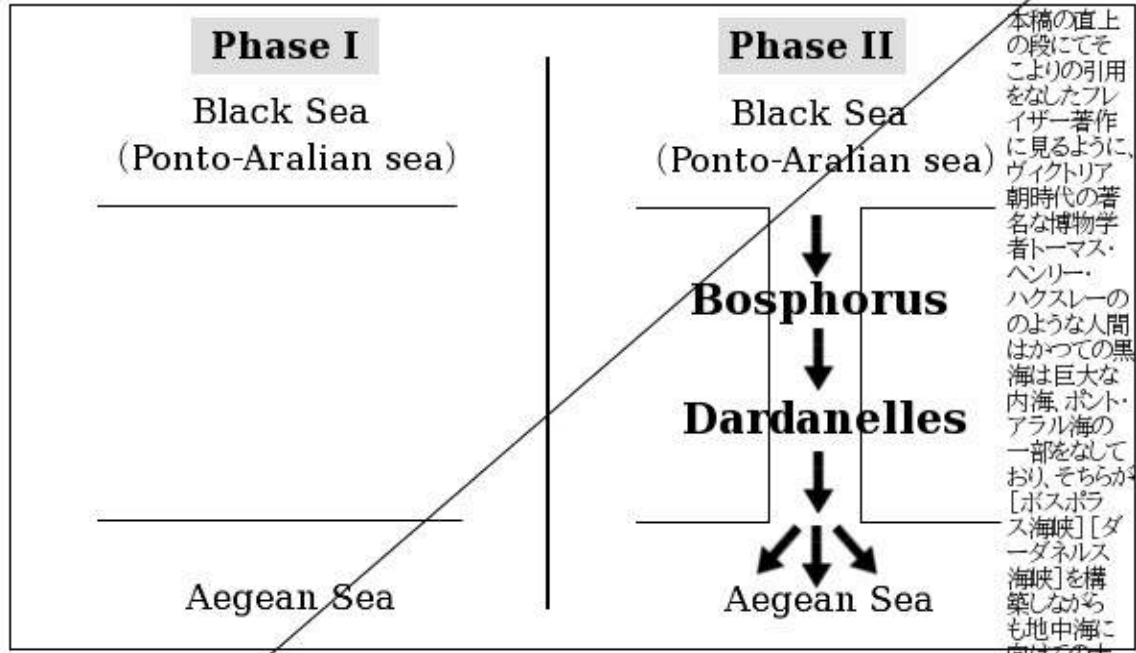
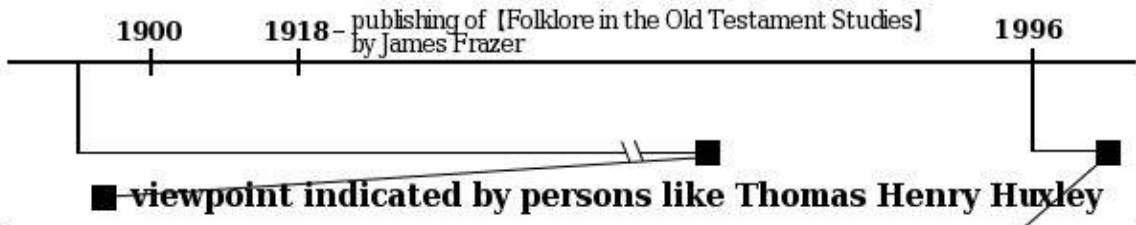
[黄金の林檎](エデンの果実と対称性をなす果実)を巡る美人コンテストに敗れた、トロイア王子のパリスへの収賄工作が失敗して敗れたために、トロイア戦争ではトロイア滅亡に向けて手を尽くし、トロイア崩壊につながった木馬の計略も彼女がオデュッセウスを手助けしたものであるとの伝承が伴う女神ともなる。「肝心要の部が欠けている」サモトラケのニケではないが、といったことに[我々人類の限定された視界には表立っては入らぬとの皮肉]が表出しているようにすら見えることも本稿を読みとく課程で理解いただけるだろう。

(以上図解部に見るような【黒海洪水伝承】に通ずるところがある近年(20世紀末)提唱の黒海洪水仮説にまつわっての従前呈示図解部を次いでもってして再掲することとする)

Black sea deluge hypothesis

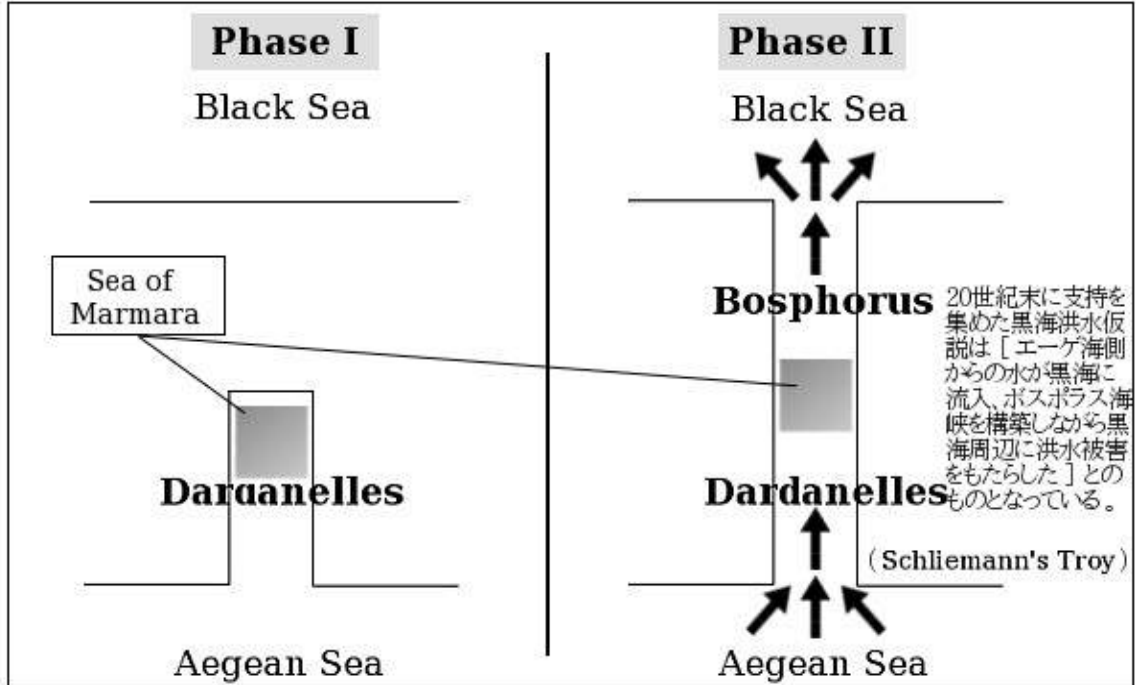


※ [エーゲ海] 側の水位が [黒海] 側の水位に比べて上昇を見ていた中、[エーゲ海] 側の海水がマルマラ海（ダーダネルス海峡とボスポラス海峡の間に位置している内海）に流れ込み、元来はそこに存在していなかったとされるボスポラス海峡を構築しながら、[黒海] 側に大量に流れ込み、もって、[黒海] 周辺地域に大氾濫（およびそれに付随する先史文明に対する大被害）をもたらしたというのが [ノアの大洪水のモデル説] としても取り沙汰されている黒海洪水説のおよその内容である。



本稿の直上の段にてそこよりの引用をなしたレイザー著作に見るように、ヴィクトリア朝時代の著名な博物学者トーマス・ヘンリー・ハクスレーのような人間はかつての黒海は巨大な内海、ポント・アラル海の一部をなしており、そちらが[ボスポラス海峡][ダーダネルス海峡]を構築しながらも地中海に向けての大氾濫を起こしたと主張していた。

■ (recent) Black Sea deluge hypothesis



20世紀末に支持を集めた黒海洪水仮説は「エーゲ海側からの水の黒海に流入、ボスポラス海峡を構築しながら黒海周辺に洪水被害をもたらした」とのもとなっている。

(以上図解なしたような黒海洪水伝承・黒海洪水仮説と通ずるところがあるとのジョン・ミルトン『失樂園』の特定パートにまつわっての従前呈示図解部を 一詰め込み過ぎ風の如実にある中でながら 次いでもってして再掲することとする)

Black Sea

[黒海] 方面

コンスタンティノーブル
(イスタンブール)
Constantinople

Bosphorus

ボスポラス海峡

名称由来はトロイ始祖ダルダニアDardania
ダーダネルス海峡

Dardanelles

Sea of Marmara (マルマラ海)

シュリーマンの発掘したトロイア
Troy ("of Heinrich Schliemann")

[エーゲ海] 方面
Aegean Sea

ダーダネルス異称: ヘルスポントス
Hellespont
(希臘語表記: Ἑλλήσποντος)

クセルクセス王の船橋
Xerxes' Pontoon Bridges



Persia (Asia)
↓
Greek (Europe)

トロイア戦争を巡る物語が古の出来事として語られていた時代、紀元前5世紀(480BC)にあつてのギリシャ都市国家群とアケメネス朝ペルシャ間の戦争にてペルシャ王クセルクセス1世は「船を橋にして」ダーダネルス海峡を越えてのヨーロッパサイドへの大軍の輸送作戦を実行に移させたと伝わる

Odysseus & Charybdis
devising the Trojan Horse

(「文献的事実」の問題(個人の主観や解釈論の問題ではなく文献字面にどう
表記がなされているかという「記録的事実」の問題)として線を引いた各要素は
古典『失樂園』の中にて関係づけられている)

connected (philological truth)

(John Milton's) Paradise Lost

The gate of hell

①Satan's (Lucifer's)
travel through Abyss

Eden (the world of
mankind)

Abyss

②one apple & fall of man

③Sin & Death → descendants of Adam & Eve
(Satan's wife & Satan's son)

(John Milton's) Paradise Lost

不死の喪失 蛇の詐欺的介入 (による不死の喪失)
 [loss of immortality] & [serpent's trick]
 [correlation with the ancient deluge]
 古代洪水伝承との関連性

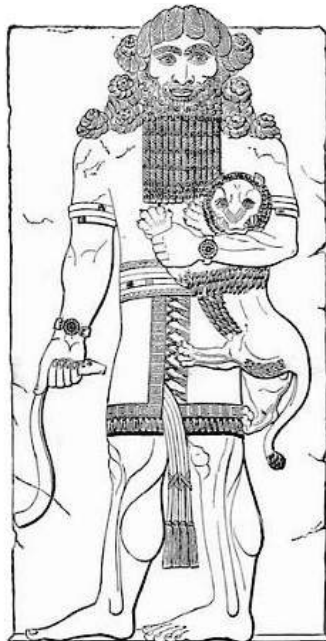
metaphorical context

" Adam was told he might eat freely of every tree in the garden, excepting only the Tree of Knowledge; we may, therefore, suppose that he would be sure to partake of the fruit of the Tree of Life, which, from its prominent position "in the midst of the garden," would naturally attract his attention. "
 (Plant lore, legends, and lyrics (1884))

Epic of Gilgamesh

不死の喪失 蛇の詐欺的介入 (による不死の喪失)
 [loss of immortality] & [serpent's trick]
 [correlation with the ancient deluge] — Utnapishtim legend (tablet XI)
 古代洪水伝承との関連性

本稿にあつての先立つての段ではジョン・ミルトン『失樂園』に見る、
 [ルシファーのアビス領域の単身飛行、それに次ぐ林檎によるエデンの誘惑]
 が何故、[不死の蛇による喪失] および [黒海洪水伝承] の双方と関わると受け取れるの
 かにつき述べ、次いで、[不死の蛇による喪失] および [洪水伝承関連] との双方の要素
 が問題になるのは『ギルガメシュ叙事詩』であるとのことを解説をなしてきた。



Gilgamesh



Heracles

- demigods
- lion hunters (& lion's pelt wearers) source53 (Norse mythology & Iðunn)

- targets of voyages & immortality
 ⇒ Plant of immortality & Golden Apple
- targets of voyages
 ⇒ Plant of immortality & [Golden Apple ⇒ Forbidden fruit]
 ; loss of immortality & serpent's trick
- destinations of voyages related with deluge myths
 ⇒ (Utnapishtim legend, Garden of Hesperides ⇒ [Atlantis])



Gilgamesh



Heracles

- demigods
- lion hunters (& ^{source53}lion's pelt wearers) (Norse mythology & Iðunn)

- targets of voyages & immortality
= Plant of immortality & Golden Apple
- targets of voyages
= Plant of immortality & [Golden Apple = Forbidden fruit]
; loss of immortality & surpents' trick
- destinations of voyages related with deluge myths
= (Utnapishtim legend, Garden of Hesperides = [Atlantis])

• "The Gardens of the Hesperides with the golden apples were believed to exist in some island in the ocean, or, as it was sometimes thought, in the islands on the north or west coast of Africa. They were far-famed in antiquity; for it was there that springs of nectar flowed by the couch of Zeus, and there that the earth displayed the rarest blessings of the gods: it was another Eden."
— Alexander Muray

- Eye & Forbidden fruit (depicted as an apple)
[Paris = Aphrodite; Venus] → [Adam = Satan (personification of the planet Venus)] "Fall" connection
femme fatale (Helen) & Golden apple
Francis Bacon's New Atlantis
- [the garden of Hesperides = Atlantis = America] → [Quetzacoatl (divine personification of the planet Venus) & betrayal] → [Satan] "Fall" connection

"Adam was told he might eat freely of every tree in the garden, excepting only the Tree of Knowledge; we may, therefore, suppose that he would be sure to partake of the fruit of the Tree of Life, which, from its prominent position "in the midst of the garden," would naturally attract his attention." — Plant lore, legends, and lyrics (1884)

- ここでの関係図で伝えんとしていることは
[ギルガメシュとヘラクレスの両雄] (半分、神の血を受け継ぐ半神との設定の存在ら) については次のような類似性が成立しているとのことである。
- 両雄共々、獅子を屠った英雄として偶像化されている。
 - 両雄共々、獅子の皮を被った英雄との話が伴っている。
 - 両雄共々、[世界の果てに向けての旅]をなし、その目的物が不死伝承と結びついているとの存在である (かたや不死を約する薬草ないし珊瑚、かたや黄金の林檎)。
 - 同じくもの [世界の果てに向けての旅] にあつての目的物が [蛇による不死略取] の物語と接合するとの側面を有している (Edenとの接合性を媒介とする)。
 - 同じくもの [世界の果てに向けての旅] にあつての目標地点が [洪水伝承] と結びついているとのことがある (Atlantis伝承との接合性を媒介にする)。

(従前内容を極々一部振り返つての再掲図解部はここまでとする)

以上のような流れに続くところとして本稿ではそれぞれ膨大な字数を割いての補説1および補説2を補うべくものこととして書き連ねてきたとの経緯がある、そして、現行、補説3の段にて筆を進めているとの経緯があるわけであるも、詰まるところ、同じくもの流れにて指し示してきたところの状況ありようが

[ダンテ『地獄篇』とヘラクレス12功業の多重の接合性]についても取り上げる必要があるとの認識に通じている。

何故、[1] から [5] と振っての指し示しをなしてきたかの背景についての表記はここまでとする

女神ペルセポネと女神イシス、そして、シリウス。多くを加速器実験とブラックホールの問題に結節させしめる多重の相関関係の問題について

さて、これよりは、である。こここれに至るまでに指し示しなしてきた、

[『地獄篇』とヘラクレス12功業の間には関係がある]

とのことに極めて重要な側面に関わるとの特定の事実関係が「際立っている」ところとして存在している、その点についての解説をこれ以降、— [A] から [F] と振って— なしていくことにする。

(以降、[A] から [F] の段は各段、文字数にして膨大なものとなること、ここに断っておく)



こちら [A] と振っての部には —極めて長くもなるが— 本書の p.137 から p.230 まで、100 ページ近くの紙幅を割くかたちとなっていると前もって申し述べておく。

本稿にての先だつての ([1] から [5] と分けてのパートの中での) [5-b] と振っての部にては

[トロイアの崩壊の原因の一となっている絶世の美女ヘレンが [テセウス(著名な伝説上の王政時代のアテナ王)とペイリトオスの略取対象] とされている一方で (ヘレンと秤量して釣り合わせられるかたちにて) 冥界の女王たるペルセポネも [テセウスとペイリトオスの略取対象] とされている]

[ヘレンとペルセポネを秤量しての略取対象としたテセウスとペイリトオスの両二名は冥界にて獄につながれることになり [ヘラクレスの12番目の冥界下りの功業] ——本稿にての先立つ段で [ダンテ『地獄篇』の三面のルシファーを求めての冥界下り] との接合性を問題視してきたケルベロス捕縛を目的にした12功業——にて救出を試みられている]

との伝承が存在していることを指し示した (出典(Source)紹介の部 90(10))。

さて、そのような式で伝存している伝承に関わるところの

[冥界の女王ペルセポネ]

が[ケルベロス] (ヘラクレス 12 番目の功業にてその冥界よりの引きつりだしが目標となっていた三面の犬の怪物) そのものと、そして、さらにはダンテ『地獄篇』で地獄の中枢に据え置かれている[悪魔サタン](ルシファー) とも —フリーメーソンという団体の秘教主義(正確にはフリーメーソンという団体にあつて履踐が因習として引き継がれている「動き方」の伝統に関わる場所の特質) に相通ずるところで— 「奇怪に」結びついている(結びつくようにさせられている) 存在であること、そして、そのことが[極めて悪質なやりよう] に接続しているとのことについてこれ以降、指し示すのに注力する — その点、ここ[A] の話を終えての続く段から順次段階的に同じくものが「ブラックホール理論の発展史」とも「奇怪無比なことに」「だが、明示できる場所として」濃厚に結びついていることを示す話をなしていく(※) — 。

(※ギリシャ神話の冥界の女神ペルセポネが[地獄の番犬ケルベロス] や[ダンテ『地獄篇』における地獄の核たるルシファー] と結びついているとの指し示しがなせるということについては比較的柔軟な向きには少し話を聞いた段階で「そういう関係性があつてもおかしくはないではないか」と思われることかもしれない、とは思ふ — [同じくもの冥界つながりの存在] としての縁起由来からである — 。

だが、ギリシャの冥界の女神が「ブラックホール理論の発展史」と結びついているとの物言いさえなせてしまうことについてはそういう話に片言にて相対する限り「？」(疑問符)しか出てこないか、とも思ふ(といった話を無条件になすのならば、普通の人間には「なんだというのか、頭の具合が疑われかねないな」との心証を抱かせることにならうと「当たり前のこと」ながら書いておきたいところでもある)。

しかし、反語[だが]に対して「が、」をさらに加えて述べる場所として、そうした読み手に去来しうべき心中の問題をおもんぱかって本稿では同じくものことの論拠を —きちんとしたやり方でその奇怪なることの指し示しをなそうとの人間はこの世界には絶無ともとれるかたちとなっているのだが— 入念に摘示していく所存である。その旨、ここに言明しておく)

それでは以下、

[冥界の女王ペルセポネ]

がいかにして[ケルベロス]と関わるかについて、とっかかりとなる場所の解説に入る。

さて、額面のみから見れば、ペルセポネとケルベロスはその双方が[冥界に関わる存在である] としか共通項を見出すことはできないとのことにはなる(ペルセポネはギリシャ神話における冥界の女王であり、ケルベロスはギリシャ神話における冥界の番犬である)。

しかし、といったことは(これより取り上げる一貫性問題にあつて取り上げるに値しないとの)[微々たる皮相的問題]にすぎない。

上のこと、述べたうえで書くが、

古典古代期(ギリシャ・ローマ期 ; グレコ・ローマン期) にあつて「幅広くも」いかなるものが[ペルセポネ質的同等物] と看做されてきたか

とのことが

[ペルセポネとケルベロスの「多重的」質的一貫性問題]

に関わってくることとなる。

そちら典拠もすぐに密に挙げることはなるが、ペルセポネは

[エジプト起源の女神にしてギリシャ・ローマ圏でも部分的崇拜基調が認められたとされるイシス] (古来エジプトでアセトと呼ばれていた女神がギリシャにてイシス Isis と呼称されるようになった女神)

と「極めて密接に」関わっているとされているとのことが講学的に論じられてきた存在であり、実際にそうもしたことが古典それ自体に基づき多重的に指摘できるようになっているとの女神である（これ以降の段にてその指し示しを細かくもなすこととする——それこそが露骨にして悪質な多重的関係性の中枢に関わっていることであると気づいた、気づいてしまった人間としての同じくものことの指し示しを委曲尽くしてなす——）。

Isis ↔ Persephone

逸失せずに現代この時代まで残置し、いまなお、欧米知識人によく知られている古文献らを渉猟し本稿筆者ですら把握するところとなったところとして、そのことには、すなわち、[ペルセポネがイシスとの同等物となっている]とのことについてはひとつに

[エレウシス秘儀] (英語呼称ではエレウシニアン・ミステリー Eleusinian Mysteries)

という秘教思潮、および、同秘教思潮を崇拝する、

[エレウシニアン・カルト]

という古代にあって影響力を行使していたとされる集団(秘密結社的集団)にまつわる動向が強くも関わっていると解されるようになっている。



上にて挙げた絵画はポーランドの画家ヘンリク・ジミラドフスキ (Henryk Siemiradzki)

の手によって19世紀後半に描かれた Phryne in Eleusis 『エレウシスにてのフリユネ』との画題が付された絵画となる。同画、古代世界にて富裕なること・美貌に恵まれていたとのことの点で有名であったコーティザン(高級娼婦)のフリユネという伝説上の人物がエレウシス秘儀を冒瀆すると看做された挙、裸体で海にダイブしたとの挙に出たとの一幕を描いているとのものだが、「問題は、」である。欧州世界にて19世紀の絵画のモチーフにそういう一幕が取り沙汰される程に[エレウシス秘儀]というものが[重き]をもって見られているとの歴史的背景があることである。

さて、[エレウシス秘儀]というのは

[ペルセポネの冥界への拉致(ペルセポネを当初、冥界の女神ではなかったところを冥王ハデスに略取されることになったとの神話的設定の女神である)に続く、ペルセポネ母親のデメテル神によるペルセポネ探索行程をなぞる儀式にしてペルセポネの地下世界から地上への復帰を祝う儀式]

とされるものである。

その [エレウシス秘儀] が —— (知能水準はともかくも) 知識水準が低いとの向きにあっては話柄から [陰謀論者らの戯れ言] の類とも「実際とは違う方向にて」響こうかとは危惧・懸念しるところなのだが ——

[フリーメーソンの秘教思潮]

[フリーメーソンの秘儀体系]

と密接に結びついているということは学究系の識者らによって「部分的に」ながら講学的に示唆されるようなところとなり —— (そちら識者物言いについても入念に挙げるとの式にて後述する。たとえば、[紛い物](そこらじゅうにそういうものが空虚な顔をして練り歩いているとの類でもいい)ばかりにしか口を開く権利が与えられていない節すらあると手前などが見ているここ日本「でも」各地に[交流会館]を歴史的に構築してきたフリーメーソンという組織、同組織の背景につき講学的に分析している(虚偽ばかりを並び連ねているとの相応の人間の手になる陰謀論本とは一線を画すやりようにて講学的に分析している)との学者の書物に「意図明示せず」エレウシス秘儀に対する言及が「不十分に」なされていたりする) —— 、そうしたエレウシス秘儀の今日に伝わる内容および特性について概説すれば、およそ次のようなものとなる。

([エレウシス秘儀] がいかなるものであるとされているのかにつき、(同秘儀にまつわる出典紹介に先立ってのこととし)、下に摘要表記をなすとして)

[エレウシス秘儀は秘教・秘儀と呼ばれる所以(ゆえん)として参入資格がある者のみが参加を許された儀式である —— 参加者が限られている秘密の儀礼、それがゆえにの[秘儀]である ——]

[エレウシス秘儀とは [大地の女神デメテルは自身の娘ペルセポネが冥界の王ハデスに略取されたことを嘆いて彼女を探して彷徨う過程を、そして、ペルセポネが地上に戻るとの過程を模し再現する] とのものとされるが、そうしたエレウシス秘儀のその細かい内容については今日に伝わっていないとされる]

[エレウシス秘儀にての儀式では酩酊作用が伴う薬物が利用されていたと推察されている([キュケオン] という大麦・ハッカ・水を主成分とする飲み物がアヘンを混入するかたちで利用されていたとの説が学者らによって展開されている)]

[エレウシス秘儀については [エジプト神話にあつての著名な筋立て] としての [悪神セトによってオシリス神がばらばらにされて殺された後 (セトは棺を用意して、まもなくオシリスをその中に誘い込み、そこでオシリスをばらばらにして殺したと伝わる)、オシリス神の妻たるイシス神がオシリスを求めての探索をなしたとの筋立て] に倣(なら)つての部分が多いと古文献の時点で言及されているとの側面がある]

[(繰り返すが)エレウシス秘儀は — 諸種要素(後述)から— フリーメイソンの秘教思潮・秘儀体系とのつながりが一部の識者に知られているとのものとなる]

上記のことらについての出典を以下、順次段階的に [出典\(Source\)紹介の部 91](#) から [出典\(Source\)紹介の部 93](#) と振って挙げることにする。



Pluto, Proserpina, and Furies.

18世紀末、1790年。フランス革命の発生が目前目睫に控えていたとの往時の欧州にてトーマス・タイラー(Thomas Taylor)という英国の文人によって記され、何度も改訂版が刊行されてきたとのエレウシス秘儀にまつわる古典的名著とされる著作、

Eleusinian and Bacchic Mysteries 『エレウシス秘儀およびバックス秘儀』
(1891年刊行版/現行、オンライン上より全文の内容を閲覧できるとの著作)

に付された挿絵(遺物を意識して作成されていると解される挿絵)を上にて抜粋した。

同挿絵には

[プルート(冥王ハデス)とそのプロセルピナ(女神ペルセポネ)の冥界の主権者夫妻がケルベロスに鎮座しているとのその脇にて蛇の髪を持った三人のフューリーら(復讐の冥界の女神ら/別名エリーニュース)らがはべっている構図]

が具現化を見ている(挿絵に付されての Pluto, Proserpina, and Furies のキャプションのとおりである)。これよりは同画に描かれる、

[冥界の女王ペルセポネ(ローマ表記:プロセルピナ)]

がどういう存在であるかとのことを入念に指し示していくことにする。

SOURCE 91



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典 (Source) 紹介の部 91 にあつては、

[エレウシス秘儀の基本的特徴 (世間一般での解説のなされよう)]

について紹介すべくも皮相的かつ目につくところの媒体よりの引用をなすこととする。

(直下、ウィキペディア [エレウシス] 項目よりの引用をなすとして)

デメテルの祭儀はエレウシスの祭儀、またはエレウシスの秘儀と呼ばれ、古典古代時最もよく知られた秘儀のひとつであり、しばしば単に「秘儀」として言及されることもある。エレウシスの秘儀は紀元前 1700 年頃ミケーネ文明の時代に始まったと言われている。マーティン・P・ニールソンはこの秘儀で「人を現世を越えて神性へと到らせ、業の贖いを保証し、その人を神と成し、その人の不死を確かなものとなす」事を意図されていたと述べている。

その内容を語ることは許されなかったため、断片的な情報のみが伝えられている。参加者の出身地を問わないこと(アリストパネスの断片による)、娘ペルセポネーを探すデーメーテルの放浪およびペルセポネーの黄泉からの帰

還の演劇的再現が一連の秘儀の中核をなしていたであろうことが推定されている。

秘儀への参加者には事前に身を清めることが要求され、その秘儀は神の永遠なる浄福を直接見ることといわれた。

キリスト教が広まり、ローマ皇帝テオドシウス1世により多神教的異教の祭儀が禁止されると、エレウシスの祭儀も絶えた。ドイツの哲学者フリードリヒ・シェリングは、その著書の中で、前哲学的思惟の形態としてのエレウシスの秘儀をしばしば論じている。

(引用部はここまでとしておく)

次いでもってして、同文に「極々基本的なところとして」単一記事としての文量が多い英文 Wikipedia [Eleusinian Mysteries] 項目 —— 本稿にての当セクション記述時には和文 Wikipedia ではカバーされていない項目 —— の記述より「引用として問題なき文量・態様」と判断しての) 掻い摘まんでの引用をなすこととする。

(直下、英文 Wikipedia [Eleusinian Mysteries] 項目よりの引用をなすとして)

Mythology of Demeter and Persephone

The Mysteries are related to a myth concerning Demeter, the goddess of agriculture and fertility as recounted in one of the Homeric Hymns (c. 650 BC). According to the hymn, Demeter's daughter Persephone (also referred to as Kore, "maiden") was gathering flowers with friends, when she was seized by Hades, the god of death and the underworld. He took her to his underworld kingdom. Distraught, Demeter searched high and low for her daughter. Because of her distress, and in an effort to coerce Zeus to allow the return of her daughter, she caused a terrible drought in which the people suffered and starved. This would have deprived the gods of sacrifice and worship.

[. . .]

Zeus, pressed by the cries of the hungry people and by the other deities who also heard their anguish, forced Hades to return Persephone. However, it was a rule of the Fates that whoever consumed food or drink in the Underworld was doomed to spend eternity there. Before Persephone was released to Hermes, who had been sent to retrieve her, Hades tricked her into eating pomegranate seeds, (six or four according to the telling) which forced her to return to the underworld for some months each year. She was obliged to remain with Hades for six or four months (one month per seed) while staying above ground with her mother for a similar period.

[. . .]

Secrets

The outline below is only a capsule summary; much of the concrete information about the Eleusinian Mysteries was never written down. For example, only initiates knew what the kiste, a sacred chest, and the kalathos, a lidded basket, contained. The contents, like so much about the Mysteries, are unknown. However, one researcher writes that this Cista ("kiste") contained a golden mystical serpent, an egg, a phallus, and possibly also seeds sacred to Demeter. The Church Father Hippolytus, writing in the early 3rd century, discloses that "the Athenians, while initiating people into the Eleusinian rites, likewise display to those who are being admitted to the highest grade at these mysteries, the mighty, and marvellous, and most perfect secret suitable for

one initiated into the highest mystic truths: an ear of corn in silence reaped."

Lesser Mysteries

[...]

Greater Mysteries

[...]

Entheogenic theories

Numerous scholars have proposed that the power of the Eleusinian Mysteries came from the kykeon's functioning as a psychedelic agent. Use of potions or philtres for magical or religious purposes was relatively common in Greece and the ancient world.

(訳として)

「[デメテルとペルセポネの密儀]

密儀は『ホメロス讃歌』（紀元前 650 年頃成立）にて言及される神の内の一柱たる農業と豊穡の女神たるデメテルにまつわる神話に関連しているものである。讃歌によると、デメテルの娘たるペルセポネ(Kore、[処女]とも言及される存在)が友人らと花々を摘んでいた折に死と地下世界の神たるハデスに捕えられてしまった。ハデスはペルセポネを彼の地下世界の王国へと連れて行った。取り乱し、デメテル神は高きの上って、そして、低きに下ってと彼女の娘を捜し求めた。彼女の嘆きがゆえに、そして、ゼウスに彼女の娘の帰還を許さしめるように圧迫をなすために、彼女デメテルは人々が打撃を被って飢えることになったとの恐るべき干魃を引き起こした。これは神々から神々への犠牲と崇拝を奪うとのことになった。

…(中略)…

ゼウスは飢えた人々の叫び、そして、苦痛の声を聞いた他の神々に圧力受けるのかたちにて(冥界の主催者たる)ハデスをしてペルセポネを帰還なさしめた。しかしながら、冥界の飲食物を口に入れたものは誰であれ冥界にて永劫、時を費やすことになる(訳注:日本の伊弉冉(イザナミ)神話に見る黄泉戸喫(ヨモツヘグイ)と通底する神話的設定でもある)というのが運命の神らが定めたルールでもあった。ヘルメス(訳注:伝令としての神格)の元へとペルセポネが解放なされる前にハデスは彼女をして柘榴(ざくろ)の種(伝承によれば六ないし四)を騙して食させしめ、それが年に何ヶ月かはペルセポネをして地下世界に戻らしめることになった。彼女は同じくもの期間、母の元にて上の世界に留まる一方でのこととして、六ヶ月ないし四ヶ月(ざくろの実ひとつに対して一ヶ月)ハデスの元に留まることを強いられることになった。

…(中略)…

[密儀の内容]

下記の密儀概要は大要にすぎぬとのものである。すなわち、エレウシス秘儀についての具体的情報の大部分は書きとどめられることがなかった(がためにカヴァーできるものではない)。たとえば、秘儀参入者のみが唯一、kisteという聖別された容器(チェスト・蓋付きの容器)、および、kalathos という蓋付きのかごにて何が含まれているのかを知っていた。密儀にあつての中身はそうして大部分知られていない。しかしながら、ある調査者は kiste が黄金の蛇、卵、男根、そして、デメテルに対して聖別された種子が入っていると書いている。[教父]のヒポリタス(訳注:初期キリスト教の主導的知識階級は[教父]と表されており、ここでの[教父] Hippolytus of Rome と呼称される人物はその古代にての作成文書が 16 世紀、1551 年に「再」発見されたとされている人物となる)が 3 世紀前半にて書き残した書物にて明かしたところでは、「都市アテネの住人はエレウシス密儀位階授受者へと人々を参入なさしめる一方で、そのうえ、密儀に

ての最上級位階に上がることを許されていた人々のみに「並外れ、驚嘆させるような最も完全なところの秘密」「最も高度な秘儀真実に接するのを許された人々に適したものとしての秘密」を「沈黙でもって刈り取られた穀物の穂」として開示していた」とのことである。

[小密儀(レッサー・ミステリーズ)]

…(中略)…

[大密儀(グレーター・ミステリーズ)]

…(中略)…

[幻覚剤使用理論ら]

数多くの学者らが「エレウシス秘儀の影響力は幻覚物質として機能した[キューケオン](訳注:密儀で供される飲料)に由来している」とのこと、提唱している。薬物、魔法がかかった媚薬の使用、宗教的目的は総じてギリシャおよび古代世界には共通のものであった。

(訳を付しての引用部はこれまでとする)

出典(Source)紹介の部 91 は以上とする

たかだか和文・英文のウィキペディア記載内容との基本的なところからの引用をなすとの式でながらエレウシス秘儀につき、

[デメテルのペルセポネを探し求めての彷徨がエレウシス秘儀の元となっている]

[参加者が限られての秘儀が秘儀たる所以としてその委細は今日に至っても謎である]

[秘儀には幻覚物質が用いられていた]

との特性が目につくところとして言及されていることを紹介した。

次いで、

[エレウシス秘儀については「エジプト神話にあつての著名な筋立て」としての「悪神セトによってオシリス神がばらばらにされて殺された後(セトは棺を用意して、まんまとオシリスをその中に誘い込み、そこでオシリスをばらばらにして殺したと伝わる)、オシリス神の妻たるイシス神がオシリスを求めての探索をなしたとの筋立て」に倣(なら)つての部分が多いと古文献の時点で言及されているとのことがある]

とのことを指し示すこととする。

出典(Source)紹介の部 92

SOURCE

92



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典(Source)紹介の部92にあつては、

[エレウシス秘儀については [エジプト神話にあつての著名な筋立て] としての [悪神セトによってオシリス神がばらばらにされて殺された後(セトは棺を用意して、まんまとオシリスをその中に誘い込み、そこでオシリスをばらばらにして殺したと伝わる)、オシリス神の妻たるイシス神がオシリスを求めての探索をなしたとの筋立て] に倣(なら)つての部分が多いと古文獻の時点で言及されているとのことがある]

とのことに繋がるどころのイシス・オシリス神話の特徴について紹介をなすこととする。

同じくもの点に関してはまづもつては

The Golden Bough In Two Volumes. Vol. I. (本稿でも洪水伝承関連でその著作の内容を引用していたジェイムズ・フレイザー、人類学分野の泰斗として知られる同学究の手になる『金枝篇』第1巻(1894年刊の初期版/日本の民俗学の父とされる柳田國男などもその原著から多くを学んだとされる『金枝篇』にはいくつかのバージョンが存在しており、日本にては岩波書店からはその内の1バージョンの抄訳版(多くを端折つての簡訳版)が出されており、国書刊行会という出版社からはその第三版に対する完訳版が一現時未完ながらも―漸次刊行されている格好となっている)

よりの抜粋をなすこととする。

(直下、The Golden Bough In Two Volumes. Vol. I. (1894) § 6. Osiris よりの引用をなすとして
一誰でも Project Gutenberg のサイトを通じて取得でき、また、表記のテキスト入力で検索エ
ンジン上でも内容確認できるとの書、1894 年版『金枝篇』「オシリス」の節よりの抜粋をなすと
して—)

The outline of his myth is as follows. Osiris was the son of the earth-god Qeb (or Seb, as the name is sometimes transliterated). Reigning as a king on earth, he reclaimed the Egyptians from savagery, gave them laws, and taught them to worship the gods. Before his time the Egyptians had been cannibals. But Isis, the sister and wife of Osiris, discovered wheat and barley growing wild, and Osiris introduced the cultivation of these grains amongst his people, who forthwith abandoned cannibalism and took kindly to a corn diet. Afterwards Osiris travelled over the world diffusing the blessings of civilisation wherever he went. **But on his return his brother Set (whom the Greeks called Typhon), with seventy-two others, plotted against him, and having inveigled him into a beautifully decorated coffer, they nailed it down on him, soldered it fast with molten lead, and flung it into the Nile. It floated down to the sea. This happened on the 17th day of the month Athyr. Isis put on mourning, and wandered disconsolately up and down seeking the body, till at last she found it at Byblus, on the Syrian coast, whither it had drifted with the waves.**

(訳として)

「彼オシリスの神話は次のようなものである。オシリスは大地の神ケブ(あるはセブとなり、その名前はしばしば書き直しを見ている)の息子であった。地の王として統治をなしており、オシリスはエジプトの民を野生状態より更正させ、彼らに法を与え、神を崇拝するよう教導した。オシリスの時代に到る前、エジプトの民は肉食を旨としていた。しかし、イシス、オシリスの妹であり、妻でもあるとの同女神イシスが小麦を発見し、それがほとんど野生では育たなかったところ、オシリスが彼らの統治下にある民にこれら穀物の栽培法を広め、によって肉食によってのみなる文化を捨てさせしめ、そして、心優しく穀物食を摂取するようになさしめた。後、オシリスは彼が赴くこととしたあまねくものところに文明を普及させるべくも世界中を旅をした。しかし、彼の帰還に際して、セト(ギリシヤ人にテュポーンと呼ばれる存在)および72名の他の者らはオシリスに対する謀略を巡らし、彼を美しくも装飾した棺に入り込むように唆し、その後、彼らはオシリスをその中に釘で閉じ込め、溶融した鉛で固く棺の封を強化、そのうえでその棺をナイル河に投げ捨てた。棺はそのまま下って海へと流れていった。これは Athyr の月の 17 日目に起こったことである。イシスは嘆きを身にまといながらオシリス死体を求めて上流・下流をわびしくも彷徨、ビブロス、波にいざなわれてそれ(オシリスの棺)が流れついたとのシリアの岸辺へと遂に到着するまで彷徨を続けていた」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

([出典\(Source\)紹介の部 92](#)の表記を続けるとして)

以上の『金枝篇』の記述にあって認められるところ、それは

[セトによってオシリスが殺された後、イシスがオシリスを探し求めての彷徨をなした]

との伝承があるとのことだが、同じくものことは

[ペルセポネが冥界に略取された後、デメテルがペルセポネを探し求めての彷徨をなした]

と関連付けされていると広くも指摘されてきたとのことがある。

上と関わる場所として第一に、である。

[オシリスは殺された後、そして、イシスに救助された後、復活を成し遂げられずに[冥界の統治者]として君臨することとなった存在である]

と知られているとのことがある。それは[よく知られた]とのぐらいい知られているところとなり、同じくの話がイシス・オシリス神話との関連性をここに問題視しているデメテル・ペルセポネ神話にも当てはまるところとなっている。

については目立つところの和文ウィキペディア[オシリスとイシスの伝説]項目程度のものに記載されていることを引くだけで十分と判断、そうすることとする。

(直下、和文ウィキペディア[オシリスとイシスの伝説]項目よりの原文抜粋をなすとして)

「オシリスの妻であり妹でもあるイシスは心を痛み、自らの長けた魔術を駆使し、乳母に化けてピブロスの宮殿に潜入した。流れ着いた場所でヒースの木に包まれ、そのまま加工され宮殿の柱となっていた棺を探し当てて見つけた。イシスは世話していた赤子を不死にする為に炎の中にいれ、自身はツバメに変身して柱の周りを飛び回った。宮殿に住む赤子の母親である王妃がこの様子を見て驚き、イシスは元の姿に戻って事情を明かして納得してもらい、柱を回収して秘密の場所に隠した。だが、それを知ったセトは執念で棺を探し回り、木棺の中の遺体を14の部分に切断してしまう。イシスは再び救出に赴き、パピルスの舟で遺体の破片を探し出し、オクシリンコスで魚に飲み込まれた男根を除く繋ぎ合わせた身体を強い魔力で復活させたが、不完全な体であった為現世には留まらなかった。そうしてオシリスは冥界の王として蘇る」

(引用部はここまでとする)



Osiris

英文 Wikipedia[Hanufer]項目 ([フネフェル]項目:エジプト第19王朝時代に存命していたと目される書記官となり、よく知られた Papyrus of Hunefer [フネフェルのパピルス]、[今日伝わる『死者の書』のよく知られたバージョン] が彼に由来するとされるところの人物フネフェルにまつわる項目) にその写真が掲載されている著名な『死者の書 (フネフェル奉獻版)』——死後、どのような審判・浄土行きのプロセスを経るかについて記した古代エジプトにての巻物——に見る冥界の主権者オシリス神の似姿を上挙げた。

他面、イシス・オシリス神話との関連性をここで問題視しているデメテル・ペルセポネ神話にあつては

[ペルセポネはハデスに略取された後、そして、デメテルに救助された後、完全に現世に復活できずに [冥界の統治者] として君臨することになった存在である]

と知られているとのことがある (：[出典 \(Source\) 紹介の部 91](#)と振っての段にて英文ウィキペディア [Eleusinian Mysteries] 項目にての Mythology of Demeter and Persephone の節よりの抜粋をなしたとの通りのこと —— “ However, it was a rule of the Fates that whoever consumed food or drink in the Underworld was doomed to spend eternity there. Before Persephone was released to Hermes, who had been sent to retrieve her, Hades tricked her into eating pomegranate seeds, (six or four according to the telling) which forced her to return to the underworld for some months each year. She was obliged to remain with Hades for six or four months (one month per seed) while staying above ground with her mother for a similar period. ” (補つても訳として) 「しかしながら、冥界の飲食物を口に入れたものは誰であれそこにて永劫、時を費やすことになる(訳注:日本の伊弉冉(イザナミ)神話に見る黄泉戸喫(ヨモツヘグイ)と通底する神話的設定でもある)というのが運命の神らが定めたルールでもあった。ヘルメス(訳注:伝令としての神格)の元へとペルセポネが解放なされる前にハデスは彼女をして柘榴(ざくろ)の種(伝承によれば六ないし四)を騙して食させしめ、それが年に何ヶ月かはペルセポネをして地下世界に戻らしめることになった。彼女は同じくもの期間、母の元にて上の世界に留まる一方でのこととして、六ヶ月ないし四ヶ月(実ひとつに対して一ヶ月)ハデスの元に(冥界の王の妃、冥界の女王として)留まることを強いられることになった」との通りのこと—— がよく知られている)。

([出典 \(Source\) 紹介の部 92](#)はここまでとする)

上にて紹介なした経緯に見るように

[救助をなそうと心を千々にも彷徨った者の助力で救助された後、完全復活できずに [冥界の統治者] として君臨することになった]

との類似性が[ペルセポネ]と[オシリス]という両者にはある(がために[デメテル彷徨]と[イシス彷徨]は結びつけてとらえられるだけの素地があり、実際にそうなっている(その典拠は続いて示す))。



上は The Abduction of Proserpina [ペルセポネの略奪] との題の 17 世紀作成彫刻 (製作年次 1621－1622) となる (Wikipedia にて掲載の著作権放棄意思明示がなされたうえでの写真)。

同彫刻の脇にては同じくもの Wikipedia 項目に同様に写真掲載されているところの、[三面のケルベロス] が精巧に彫り込まれている。

彫刻作品 [ジ・アブダクション・オブ・プロセピナ] を作成したベルニーニは [巨匠中の巨匠] とされる後期ルネサンス期の万能人 ——ローマ・カトリックの総本山たるサン・ピエトロ大聖堂の面前の広場 (本稿にての先の段にてでも取り上げているところの鍵状の構造を呈するサン・ピエトロ大聖堂前広場) をデザインしたのも同ベルニーニである—— となり、同ベルニーニの手になる上掲作品は筋骨隆々とした冥界の王ハデスがまるで生きでもしているかのように極めて写実的なありようでペルセポネをひっさらっていくとのその構図が多く画家らに踏襲されているとのことが指摘されるし実際にその類例は目に付くところとして多々あるとの按配の傑作視されている一品なのだ

が——現行、和文ウィキペディア[ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ]項目にて(引用するところとして)“「プロセルピナの略奪」(1622、ローマ、国立ボルゲーゼ美術館)圧倒的な迫力と躍動感に満ちた2つの肉体。冥界の王プルートが一目ぼれした女神の娘プロセルピナを連れ去ろうとする、ギリシャ神話の一場面である。逃げるプロセルピナを手に入れようと、力づくでつかみかかるプルート、その指はプロセルピナの柔らかな肉体に深く食い込んでいる。とても石でできているとは思えない肉体のリアリティ。それは彫刻史を塗り替える革新的な作品であった”(引用部はここまでとする)と記されているような著名作品としての特質が伴っているものなのだが——、ここで問題視しているのは

[芸術愛好家の間にあつては「超」が付くほどに有名な16世紀のベルニーニ代表作にあつて彫り込まれている女神ペルセポネの略取]

の筋立てが我々の今後極めて密接に関わるようになっている、そうした[指し示し]が具体的典拠に依拠してなせるようになっている(「なっている」)とのことである。

さて、ここに至るまでにあつては、である。

「[冥界の女王ペルセポネ]が[ケルベロス](ヘラクレス12番目の功業にてその冥界よりの引きづりだしが目標となっていた三面の犬の怪物)、そして、さらには[ダンテ『地獄篇』で地獄の中枢に据え置かれている悪魔の王](ルシファー)とも——フリーメーソンという団体の秘教主義(正確にはフリーメーソンという団体にあつて履践が因習として引き継がれている[動き方]の伝統に関わるところの特質)に相通ずるところで——「奇怪に」結びついて(結びつくようにさせられている)存在であること、そして、そのことが[極めて悪質なやりよう]に接続しているとのことについて以降、指し示していく」

との旨のこと、申し述べ、そのうえで、同じくものことに関わるところとして[エレウシス秘儀](古代ギリシャ及び古代ローマにて隆盛を見ていたと伝わる秘教会)というものの特質についての説明に入った。

以上振り返りもしたうえで述べるが、続いては上のような流れでその説明には入ったとのエレウシス秘儀についてさらに微に入つての解説をなすこととする——ちなみにくどくも振り返れば、先立つての部ではエレウシス秘儀、同密儀体系が[エジプトにあつてのイシス・オシリスの神話]といかように接合しているのかについてのまづもつての話をなしもしてきた——。

まづもつてはここまでの内容を敷衍(ふえん、押し広げ)しもして、

[「古代エジプト神話にあつて悪神セトによってオシリスが殺された後、イシスがオシリスを探し求めての彷徨をなしたとのエピソード」が[エレウシス秘儀]がそれにまつわつてのものである[ギリシャにあつてのペルセポネが冥界に略取された後、デメテルがペルセポネを探し求めての彷徨をなしたとの伝承]と接続性を呈している]

とのことについて次のことに「も」言及しておく。

⇒

[学究らに指摘されるところとしてオシリスには[穀物神]としての側面が古来より語られてきたとの背景がある。そして、そのことはデメテル・ペルセポネ母子が穀物の体現存在とされていることと——デメテル・ペルセポネ密儀とイシス・オシリス伝承の繋がり合いに関わりもしようところとして——平仄が合うようになりもしている]

上のことについては先だつてそこよりの抜粋をなした著作で Project Gutenberg サイトにて著作権喪失

を見ながら全文公開されている(すなわちオンライン上より誰でもダウンロードなせるし、一部テキストのみ検索エンジンより入力してその文献的事実たることを結果画面より容易に特定することもできるようになっている)との著作、

The Golden Bough In Two Volumes. Vol. I. (1894) § 6. Osiris. (表記表題で誰でも閲覧・取得可能なもの)

にあつてその 983 および 984 と注記番号が付けられているパートにて以下の如しの記載が簡潔になされているところである。

⇒

“ A name for Osiris was the “crop” or “harvest”; 983 and the ancients sometimes explained him as a personification of the corn.984 ” 「オシリスとの名前は収穫物ないし収穫それ自体を意味するものとなっており(注記番号 983)、古代にては彼はしばしば穀物の人格化存在と言及されていた(注記番号 984)」(※)

(※ちなみに、上に引用なしている The Golden Bough In Two Volumes. Vol. I. (1894) —『金枝篇』1894 年版(巻の 1)— のそちら引用部内にあつて注記番号 983 と振られているのはフランス人のエジプト学者、ユージェン・ルフェビュール(Eugène Lefébure)の手になる Le mythe Osirien (Paris, 1874-75), p. 188 となり、注記番号 984 と付されての后者はより [文献的事実]として重きをおけるところとしてのローマ期文人 フィルミクス・マテルヌス Firmicus Maternus の手になる De errore profanarum religionum との古文献およびエウセビオス Eusebius の Praeparatio evangelica との文献(本稿の先の段、[出典\(Source\)紹介の部 48](#)でも [明けの明星]にまつわる神話解釈とのことで同著作よりの引用をなしていたとの 4 世紀キリスト教の識者階層、「教父」のエウセビオスの手になる Preparation for the Gospel こと『福音の備え』)となる —フレーザー原著の方ではギリシャ語での原文引用などもなされているが、その部は割愛する—)。

また、デメテル・ペルセポネ母子が

[穀物の神格化存在ら] (直上にてエジプトのオシリス神がそうであったとの言われようを引いたような穀物人格化存在)

であることは「よく知られた」ことである(: 誰でも即時即座にオンライン上より確認できるところの英文 Wikipedia [Persephone] (ペルセポネ) 項目の現行にての記載内容として “ During summer months, the Greek Corn-Maiden (Kore) is lying in the corn of the underground silos, in the realm of Hades and she is fused with Persephone, the Queen of the underworld. At the beginning of the autumn, when the seeds of the old crop are laid on the fields, she ascends and is reunited with her mother Demeter, for at that time the old crop and the new meet each other. For the initiated, this union was the symbol of the eternity of human life that flows from the generations which spring from each other.” [80][81] (訳として) 「夏の間、ギリシャの穀物の女神たる Kore (コレ. 処女) はハデスの王国にての地下の室(むろ. サイロの時代がかったの訳として)に横たわっており、冥界の女王としてのペルセポネと融合している。秋のはじまり、古き穀物の種らが大地に蒔かれた折、彼女は上昇を見、母たるデメテルと融合をなし、その折、古き穀物と新しきが共に出会う。(エレウシスの) 秘儀参入者にとり、この結合過程は互いにわき出てくる世代らから流れ生じる人間の生命の永遠性の象徴でもある [80] [81] 」(引用部に対する訳はここまでとする) と広くも認知されてきたとのことがある —ちなみに表記引用部にあつて [80] [81] と注記番号振られながら出典とされているのは Martin P. Nilsson というギリシャ学者の手になる著作 The Greek popular religion, The religion of Eleusis に依拠して記載されていることとなる。また、同じくものこ

と、デメテル・ペルセポネ母子が穀物の体現存在であるとされていることについては先述の『金枝篇』を記したジェイムズ・フレイザーによって 20 世紀前半にてなされている指摘、「デメテル・ペルセポネ母子は [本来的には一体の存在] である」と見られていることに関わる場所としての指摘として本稿の後にての段でも取り上げることとする——)。

以上のこと、[穀物の象徴化存在としてのオシリス・およびペルセポネ] (に関わる [探索] と [幽冥境にしての離別] の物語) とのことで、

【 [イシス(Isis)とオシリス(Osiris)の物語] と [デメテル(Demeter)とペルセポネ(Persephone)の物語] 】

がよりもって接合すると述べられもし、実際に(後述するように)そのように指摘されている。

さらに、である。一致性問題について指摘するうえで避けては通れぬところとして [古代エジプトより伝わる幽冥境をすることになったオシリスを求めて彷徨中のイシスやりよう] と [古代ギリシャより伝わる幽冥境をすることになったペルセポネを求めて彷徨中のデメテルやりよう] が「細部に至るまで」非常に似通ったものであるとのこともある。

その点、——— ということまでが [エレウシス秘儀の秘儀内容] に影響を与えているとの可能性を顧慮すれば、非常に気色悪いこと限りなしではあるが——— ペルセポネの母親デメテルは(既述のようにオシリスのように冥界の統治者になる前に探索がなされることとなった) ペルセポネを探索する過程で

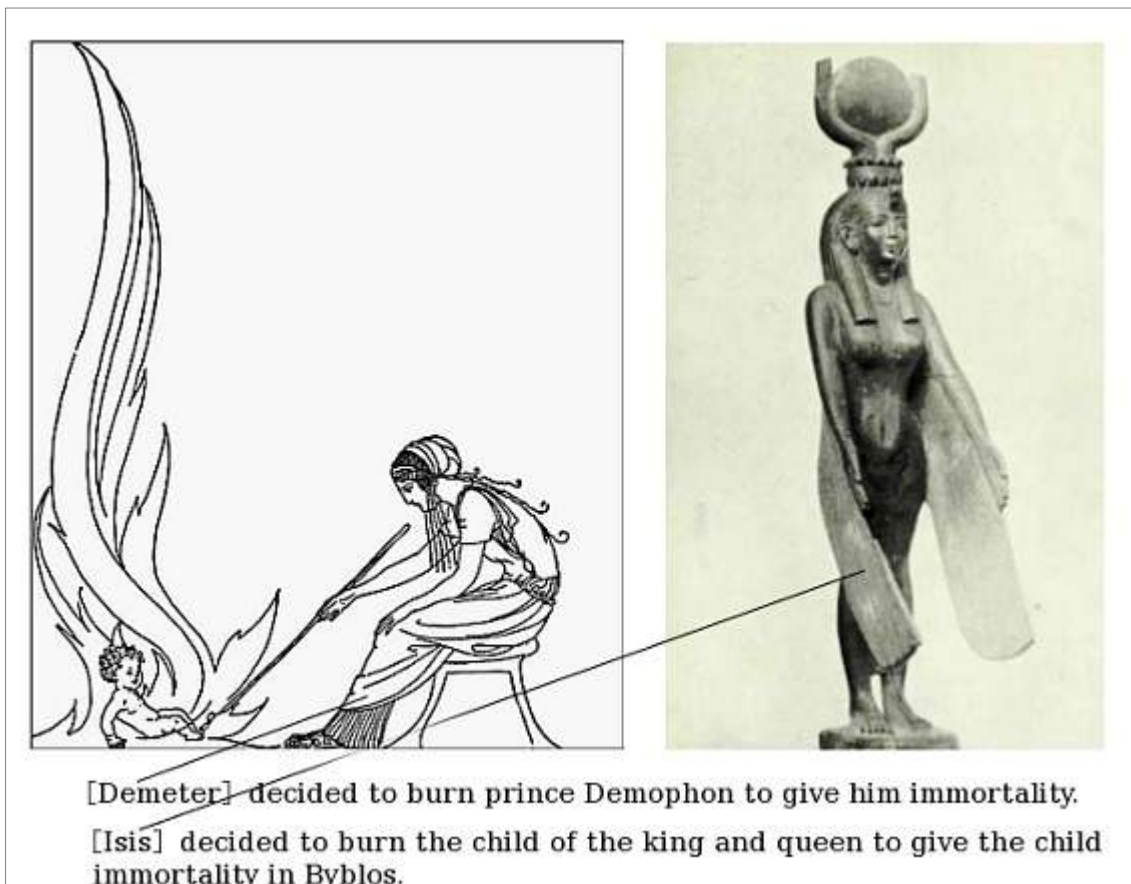
「子供を不死にするためにその子を燃やす」

とのことをなしている (:誰でも即時即座にオンライン上より確認できることとして英文 Wikipedia [Demeter] 項目にての [Demeter at Eleusis] (エレウシスにてのデメテル) の節にて “Demeter's search for her daughter Persephone took her to the palace of Celeus, the King of Eleusis in Attica. She assumed the form of an old woman, and asked him for shelter. He took her in, to nurse Demophon and Triptolemus, his sons by Metanira. **To reward his kindness, she planned to make Demophon immortal; she secretly anointed the boy with ambrosia and laid him in the flames of the hearth, to gradually burn away his mortal self.** But Metanira walked in, saw her son in the fire and screamed in fright. Demeter abandoned the attempt. Instead, she taught Triptolemus the secrets of agriculture, and he in turn taught them to any who wished to learn them. Thus, humanity learned how to plant, grow and harvest grain. The myth has several versions; some are linked to figures such as Eleusis, Rarus and Trochilus. The Demophon element may be based on an earlier folk tale.” 「デメテルのペルセポネを求めての探索行は彼女をアッティカにてのエレウシスの王、ケレウスのところへと赴かせた。デメテルは老女に身をやつし、ケレウス王に宿を乞うた。ケレウス王は彼女(姿を変えたデメテル)を彼とメタネイラの間に生まれた子供達、デーモポーンとトリプトレムスの乳母となした。そうもしたケレウス王の親切に報いるため、デメテルはデーモポーンを不死にすることを企図した。彼女は密かに少年をアンブロシア (注:ギリシャ神話で神々に不死を約束するとされる飲み物) で清め、彼の死を免れない側面を徐々に燃やし去るために彼を暖炉の炎にくべた。しかし、メタネイラが歩み近づいてきて、彼女の息子が炎の中にいるのを見、恐れおののき叫び声を上げた。そこでデメテルは試みを取りやめた。その代わりに彼女はトリプトレムス(注:火にくべられた子デーモポーンの兄弟)に農業の秘訣を教え、そして、転じて、トリプトレムスはそれを学ぶことを望むものには誰にでもその農業の秘訣を教えた。同神話にはいくつかのバージョンがあり、うち、いくつかはエレウシスのラウラスとトロキロスのような登場人物と接合している。デーモポーン的要素はより初期の民話に依拠してのものなのかもしれない」と—— Martin P. Nilsson というギリシャ学者の手になる著作 The Greek popular religion, The religion of Eleusis に依拠して—— 記載されているようなことがよく知られている)。

次いで述べるが、イシス「もまた」そのオシリス探索の過程で

「子供を不死にするためにその子を燃やす」

とのことをやっているとの言い伝えの伝がある（： ヴィクトリア朝から第二次大戦前までにての英国で影響力あった学者としてよく知られているエジプト・アッシリア学者の E. A. Wallis Budge（同ウォーリス・バッジについては大英博物館の責任者としても知られる）の手になる Egyptian Idea of The Future Life『来世に対するエジプト人の観念』との書籍、Project Gutenberg にて公開されている(オンライン上より全文確認なせる)との同著にての CHAPTER II.OSIRIS THE GOD OF THE RESURRECTION にあってはそより原文引用するところとして “ Isis fed the child by giving it her finger to suck instead of the breast; she likewise put him every night into the fire in order to consume his mortal part, whilst transforming herself into a swallow, she hovered round the pillar and bemoaned her sad fate. Thus continued she to do for some time, till the queen, who stood watching her, observing the child to be all in a flame, cried out, and thereby deprived him of that immortality which would otherwise have been conferred upon him. ” 「（イシスがオシリス探索の過程でたどり着いたビブロス Byblos にてその王女の子供に祝福を授けているとの文脈にて）イシスはビブロスのその子供に乳房を吸わせる代わりに彼女の指を吸わせ、そのようにして彼女は毎夜、子供の死を免れえぬとの部を費消しつくさせる(不死にする)ためにその子を火にくべ、一方で自身の似姿をツバメに変え、（オシリスの棺が埋め込まれた）柱の周りを飛び交い、そして、彼女の運命を嘆き悲しんだ。このようにして幾時かの間、彼女がなしていたとのことは女王（ビブロスの女王）が彼女の子供が全身、炎にくべられているのを立ち見するまで続き、彼女（ビブロス女王）が叫んだため、そうでなければ彼に与えられていたであろう不死を取り上げることになった」（引用部はここまでとする）と記載されているようなことがある —— 以上のウォーリス・バッジの物言いの元となっているところは二世紀帝政期ローマの著述家たるプルタルコスPlutarchの著作『モラリア』、その [イシスとオシリス] にまつわる巻に依拠している、すなわち、（The Online Library of Liberty を通じて PDF ファイル公開されているとの Plutarch, The Morals, vol. 4 (1878) よりの抜粋をなすとして） “ 16. Isis nursed the child by putting her finger into his mouth instead of the breast; and in the night-time she would by a kind of lambent fire singe away what was mortal about him. In the mean while, herself would be turned to a swallow, and in that form would fly round about the post, bemoaning her misfortune and sad fate; until at last, ” との部位に [そのまま依拠] しているものであるとのことも（その気があれば、だが）該当文書をダウンロードするなどしてすぐに確認なせるようになっている——）。



上掲図左は Project Gutenberg のサイトにて無償公開されている The Golden Fleece and the Heroes Who Lived before Achilles (1921) との著作に見るデメテル行状を描いた挿絵を抜粋したものとなる。デメテルは最愛のペルセポネの探索の過程で世話になった土着の王族の王子デーモポーンを不死にすべくも火にくべたとの話が伝わっている (よく知られたところの神話上の一挿話として英文ウィキペディア程度の媒体の目に付く現行の記述内容を上にて引いたとおりのことがある)。

上掲図右は Project Gutenberg のサイトにて公開されている Myths and Legends of Ancient Egypt (1915) との著作にて掲載されているツバメ (Swallow) に変じたイシスの似姿を彫った遺物を抜粋したものとなる。同遺物に見るようにツバメに変じながら移動していたイシスがシリアの王族の子供を不死にしようと火にくべたとの話が伝わっている — E. A. Wallis Budge の手になる著作権喪失の Project Gutenberg 公開著作 Egyptian Idea of The Future Life (1908) にての先述の引用部などにて解説されている (元となったのはプルタルコスの手になるローマ期古典か) ところとしてそういう話が伝わっている—)。

デメテルとイシスにまつわる以上エピソードから両女神に関係性があることを推し量るのは

[相似形 — 愛する存在の探索のため彷徨していたとの女神らとその過程で土着の王族の子供を不死にするために火にくべる (ものの覗き見られてその試みが失敗する) との相似形— があまりにも際立ったものである]

ために易いが、問題はといった接続関係が積もりに積もったところから何が申し述べられるようになっていくか、「なってしまうか」とのことであると強調したい (皮相の面で述べれば、ただ単純に「古代ギリシャの神話←(文化伝播と習合のプロセス)→古代ギリシャの神話」とのことでは片付けられるのは論を俟たないのだが、「同じくものが極めて重篤かつ悪質なやりように接続しもしているからこそ問題となる」とのことを異論など出もしなかりとうの式できちんと指し示すというのが本稿の趣意である — 以上、申しようが大言の類で済まされるのかよくも確認なしていただきたい—)。

ここまでにて事細かに典拠呈示しながらも指し示してきたような相似形が存している、すなわち、

1. [冥界行きを強いられた最愛の存在を探し求めての彷徨をなすに至った女神ら (古代エジプトのイシスと古代ギリシャのデメテル) は最愛の存在をついに発見したが、その最愛の存在 (オシリス及びペルセポネ) は結局、中途半端な復活しか成し遂げられず、その結果、冥界の統治者となったと伝わっている (オシリスは冥界にて審判をなす冥界の主権者神に、ペルセポネは冥界の王の伴侶たる冥界の女王になったと伝わっている)]
2. [デメテル・ペルセポネらに穀物の体現存在としての話が伝わる一方、エジプトのオシリス神に関しても同神は穀物の体現存在であるとの言われようがなされている]
3. [デメテルのペルセポネ探索時の行状は細かい部分からしてイシスのオシリス探索時の行状と酷似している ([デメテルが探索時にて土着の王族の王子を不死にするためにその子を火にくべていたもののそれが覗き見されて失敗した] との部と [イシスが探索時にて王族の王子を不死にするためにその子を火にくべていたもののそれが覗き見されて失敗した] との下りはそっくりである)]

との相似形が存在している中で、(それこそが [文献的事実] [記録的事実] の問題に関わる場所として肝要なことであると述べられもしようところなのだが)、エジプトのイシスとギリシャのデメテルの物語は [古代それ自体から文人に [類似のもの] として見られていたとのことが現実にある]

とのものとなっている。その点、本稿にあってのさらに続いての段で「エレウシス秘儀とイシス秘儀の間

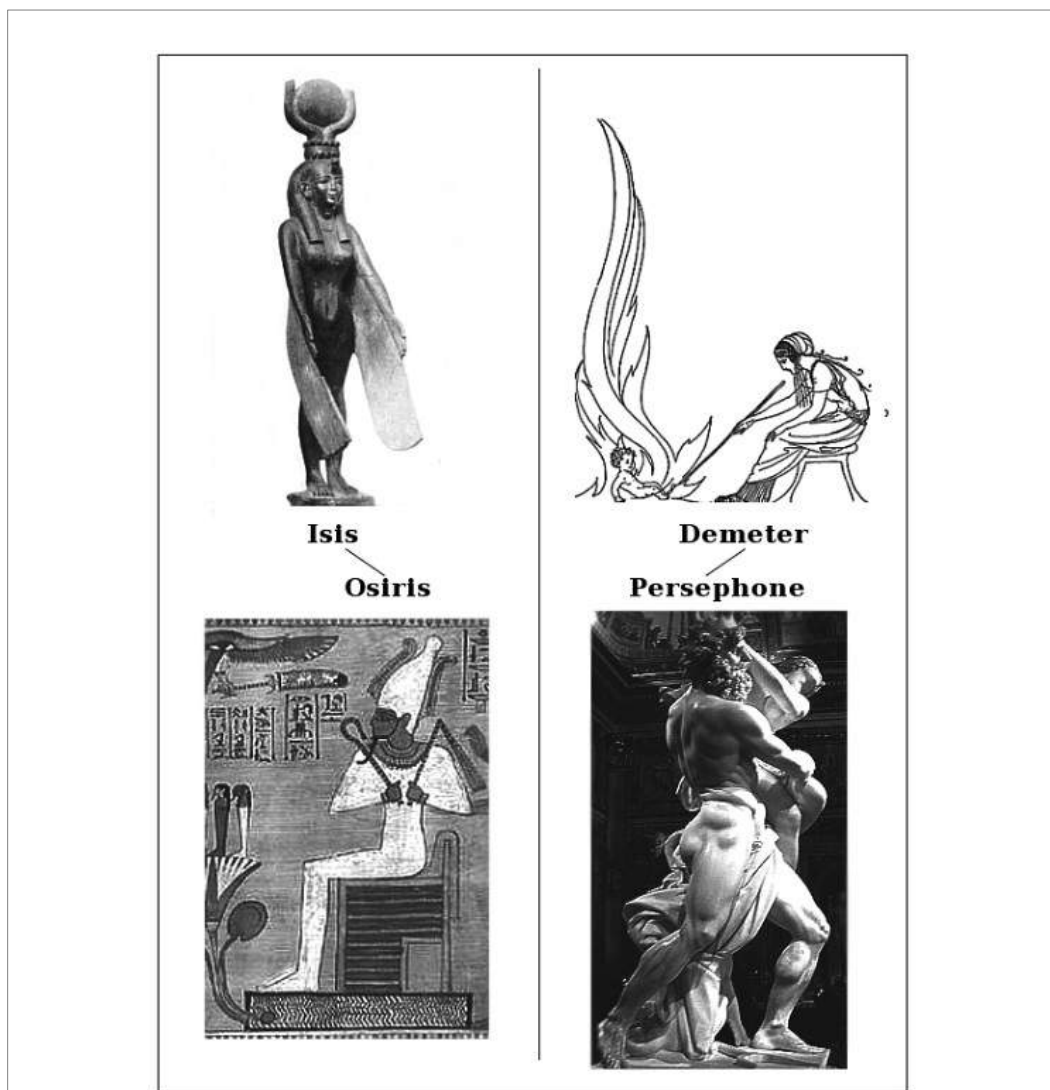
の類似性に関していかなる古代人視点が存在するのか]につきより真つ当な典拠らを挙げる所存だが、さしあたって、その記述を引けば、現行、英文 Wikipedia[Isis]項目に “ Using the comparative methodology known as *interpretatio graeca*, the Greek historian Herodotus (5th century BCE) described Isis by comparison with the Greek goddess Demeter, whose mysteries at Eleusis offered initiates guidance in the afterlife and a vision of rebirth. Herodotus says that Isis was the only goddess worshiped by all Egyptians alike. ” (訳として)「[*interpretatio graeca*](注:ラテン語にて[ギリシャ式翻訳法]との方式)を用いることでギリシャの史家ヘロドトス(紀元前5世紀活躍)はイシスをしてギリシャの女神デメテル、秘儀参入者に死後の案内と復活のヴィジョンを与えるとのエレシウス密儀体系の保持者としての同女神と結びつけての描写をなした(注:ウィキペディア同項目でも出典として挙げられているものだが、そのような描写が認められるのはヘロドトスの『歴史』ヒストリアである)。ヘロドトスの言うところ、イシスはすべてのエジプト人に似たりよったりで崇拝された唯一の女神であったとのことである」(引用部はここまでとしておく)と記載されている通りのことがある——上と同じくものことに関しては Project Gutenberg にて全文閲覧できるとの THE HISTORY OF HERODOTUS Vol.I には(そこよりワンセンテンス引用なすところとして) “now Isis is in the tongue of the Hellenes Demeter” 「現在、エジプト人のイシスはヘレネス(ギリシャ人)の舌にあってはデメテルとなっている」といった記述が認められるようになっている——)。

ここまでで

[セトによってオシリスが殺された後、イシスがオシリスを探し求めての彷徨をなした]

[ペルセポネが冥界に略取された後、デメテルがペルセポネを探し求めての彷徨をなした]

との言い伝えの伝が —エレウシス秘儀に通ずることとして— 「明確に」関連付けさせられているとの指し示しをなした。



直上まで展開の話をなす限りにおいては、そう、[ただ文化伝播の問題である]と「当然に」指摘されるようなところながらも純・記号論的な問題として上掲図にあっての左列と右列に際立っての相似形が具現化を見ている、すなわち、[イシスのオシリス探索神話]と[デメテルのペルセポネ探索神話]に際立っての類似性が存在すること、また、イシスとデメテルが古代人(ヘロドトス)のような向きにあってからして関連付けられていることの指し示しをなしてきた。

次いで、述べるが、

[エレウシス秘儀というものに関してはエジプトで悪神セトによってオシリス神がばらばらにされて殺された後、オシリス神の妻たるイシス神がオシリスを求めての彷徨いをなした故事に倣(なら)っての部分が多いと古文献の時点で言及されているのみならず、フリーメーソンの秘教思潮とのつながりが一部の識者に知られているとのもの「とも」なる]

ということが([それが何故、問題になるかは後の段にて詳述することにする]と)「ある」。

上記のこと——フリーメーソンの秘教思潮などと述べると、物識らぬ向きにとっては相応の情報操作要員、根拠に何ら依拠していないがゆえに何かを変える可能性が絶無であるばかりか何かを変えるのを困難ならしめるとの相応の陰謀「論」者ら由来の[陰謀論]との区別がなしがたいと見られることかも知れないが、文献的事実の問題として指し示せること—— について「細かくも」出典を下に挙げていくこととする。

出典(Source)紹介の部 93

SOURCE 93



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典(Source)紹介の部 93 にあつては、

[エレウシス秘儀はフリーメーソンの秘教思潮とのつながりが一部の識者に知られているともの「とも」なる]

とのことの典拠を挙げることにする(事前に断っておくが、ここ出典紹介部はかなりもって長くなる)。

まずは国内にて流通を見ている和書、

『フリーメーソンと錬金術 西洋象徴哲学の系譜』(人文書院)

よりの引用を手始めになす(:上著作『フリーメーソンと錬金術 西洋象徴哲学の系譜』は執筆時肩書きとして名古屋大学の吉村正和教授が執筆なしたとのものでフリーメーソンをして[何でもやり、何でもやらされるとの陰謀団]として取り上げる書籍としての側面は「絶無」に近く、フリーメーソンが講学的に見てどういふ象徴体系と結びついているのか「直接的に」ではなく「間接的に」示唆するように講学的に論じているとの著作となる)。

(直下、『フリーメーソンと錬金術 西洋象徴哲学の系譜』(人文書院)の p.22-p.24([ルキウスのイシス=オシリス密儀]の節)よりの[中略]なしつつの掻い摘まんでの引用をなすとして)

古典密儀宗教については現存する資料に限られており、正確な内容が伝えられていないことはすでに述べた通りである。その中で、アプレイウスの『黄金の驢馬』第十一巻は、ルキウスのイシス=オシリス密儀への参入をかなりなまなましく描いていることで有名である。物語形式を通して叙述されてはいるが、そこにはアプレイウスの実体験が入り込んでいることはほぼ確実であり、少し詳しく見てみるだけの価値がある。

『黄金の驢馬』の主人公ルキウスは、魔術への好奇心から鼻になって空を飛び回ろうとしたが、誤って驢馬に変身する。

…(中略)…

第一巻から第十巻において「運命の女神」に支配されたルキウスが、第十一巻においてイシスに救済されるまでの物語である。

…(中略)…

予言通りに翌日、イシスを祀る行列が繰り出され、ルキウスは大神官の待つ薔薇の花環を飲み込む。と同時に、ルキウスの体は驢馬から人間へと戻る。

…(中略)…

ルキウスは毎晩のように密儀を受けるようにというイシスのお告げを受けていたが、ようやく意を決して大神官のもとに行く。大神官は彼に対して、密儀参入が死を賭して行われるべき行事であること、「世俗の食べ物」や「禁制の飲み物」を断って心身の浄化に努めることを告げる。

ルキウスはまず齋戒沐浴ののち、十日の間「肉食と飲酒」を絶つ禁欲生活を送り、密儀参入の日を迎える。ルキウスは新しい亜麻布の衣服を着て、神殿の至聖所へと導かれる。アプレイウスはここで、密儀参入に関する秘密厳守の規定について、次のように述べている。

「あなたがたはおそらくその部屋で交わされた二人の会話とか、そこで起こった事件とかについて、何か話してほしいと強く要望なさることでしょう。…しかし、それについて不謹慎なお喋りをしたり、あるいは大それた好奇心から、それを聞こうとしたら皆さんのお耳も私の舌も等しく罰を蒙ることは必定です。」

古代密儀宗教はほとんど例外なく、密儀に関する沈黙の義務を参入者に課している。エレウシス密儀においても、「その密儀には恐れ畏むべきもので、これを侵すことも、それについて問うことも許されない」として、秘密厳守が要請

された。

(引用部はここまでとする)

上のように和書『フリーメーソンと錬金術 西洋象徴哲学の系譜』では

[イシス密儀が古代ローマにもものされた小説『黄金の驢馬(ろば)』(同小説については後に本稿でもその内容を取り上げる)にて作中、重要なモチーフとされていること]

[イシス密儀がエレウシス密儀 —(本稿の直近の段にて指し示しているようにイシスのオシリスを求めての彷徨はエレウシス密儀がその筋立てを重要視しているところのデメテルのペルセポネを求めての彷徨と対応関係にある)— と同様に参加者に秘密厳守を強いているとのものであること]

[イシス密儀の秘密厳守を求めるやりようは掟を破ったものに厳しい罰を強いるといった性質のものであること]

が言及されている(引用部記述要約として、である)。

同じくもの著作『フリーメーソンと錬金術 西洋象徴哲学の系譜』をものした大学人(書籍著者欄に紹介されている書籍執筆時点の肩書きに依拠して表記すれば名古屋大学の吉村正和教授)はどうしてそのようなイシス密儀のことをフリーメーソンの分析著作にて言及したのか細かくも明言してくれて「いない」のであるが、「その意図は明確で、」(当該問題に興味関心があつて、なおかつ、知識水準も高く、そして、ある程度の思考力を有している人間には明確であり)、要するに、

「イシス密儀およびエレウシス密儀のようなものは秘儀参入者に[秘密厳守]を強いるとのもので、また、その誓約の中には秘密漏洩者の死が含まれているため、[秘儀体系を秘匿化して保持し、組織の秘密の暴露者に死の制裁 —(浮かび上がらぬところで海に沈めるといった文言を含む[死の制裁]にまつわる具体的文言については本稿のかなり後の段にて原文引用にて紹介することにする)— を科すとの宣誓を強いる]との体裁をとってきたフリーメーソンの歴史的やりようはイシス密儀やエレウシス密儀の体系と地続きにある」

とのことを述べたいのだと分かるようになっている。

その点、これまた、『フリーメーソンと錬金術 西洋象徴哲学の系譜』という著作では「明示的に述べられて「いない」との節あることなのであるが、しかし、暗喩的示唆の式として

「[小説『黄金の驢馬(ろば)』に認められるイシス密儀の内容が黄泉の国に下って、それから、復活させての啓明を与えるとの筋立]が[死と再生、そして、光を与えるとの舞台設定を最大限活用しているフリーメーソンの儀式体系]に通ずるところがある」

との書かれようが同著にてなされている(同文にその伝でのフリーメーソンの儀式ありようについては続く段にフリーメーソン内部の人間による作成媒体を含めての出典紹介をなす)。

(直下、再度、表記の書籍『フリーメーソンと錬金術 西洋象徴哲学の系譜』(人文書院)の p.25 末尾—p.26 冒頭部よりの[中略]なしつつの掻い摘まんでの引用をなすとして)

アプレイウスはルキウスのイシス密儀への参入において最も重要な場面を明らかにしている。「私は黄泉の国に降りていき、プロセルピナの神殿の入口をまたぎ、あらゆる要素を通してこの世に還ってきました。」

…(中略)…

密儀参入の最も重要な部分は、「黄泉の国」、「プロセルピナの神殿」という言葉から推定できるように、死の試練を指すものと思われる。参入者は、死の試練を経ることにより生まれ変わるのである。

(引用部はここまでとしておく)

上にての引用部ではローマ期作成の小説『黄金の驢馬(ろば)』(著者アプレイウスがルキウスなる人物のイシス信仰への回帰を描く作品)にあつて

[黄泉行きを試みるイシス密儀]

が実践されるなかで、

[(さきだってエレウシス秘儀がそうしたものを使っていたらしいとのことについて一般的言われようを引いたところの[麻薬]でも使つか)[プロセルピナ(プロセルピナはペルセポネのローマ呼称である)の国行きが体験される]

との記述が含まれるとのこと、言及されているが、それは

「イシス密儀とデメテル・ペルセポネの儀たるエレウシス密儀が結びつく」

ことに明示的に言及しているとの記述であるばかりではなく、エレウシス密儀同様のイシス密儀が

[死と再生、そして、光を与えるとの舞台設定を最大限活用しているフリーメーソンの儀式体系と類似性を強くも呈している]

とのことが示唆されているとの部「とも」なる(それについては直下にてフリーメーソンらの同文の申しようを引いておく)。

(出典(Source) 紹介の部 93を続けるとして)

続いて、次の媒体よりの抜粋をなす。

The Symbolism of Freemasonry: Illustrating and Explaining Its Science and Philosophy, its Legends, Myths and Symbols (題名訳せば、『フリーメーソンの象徴主義:その科学と哲学、その伝説と神話とシンボルについての描写と説明』ともなろう同著、Project Gutenberg のサイトにて公開されているとの 1882 年に初出の書籍で講学的にメーソン・「インサイダー」(Albert Mackey という元医者にして史家であったとの人物) がメーソンのシンボリズムにつき解説しているとの書籍となる ——尚、本稿筆者はといった蒼古とした書籍にまで食指を伸ばし、メーソンのシンボリズムについて「も」知悉しているとの人間ではあるが、(自身の名誉に賭けて述べるどころとして)メーソンなでは「断じてない」——)

それでは以下、フリーメーソン内部の人間の手になるオンライン上全文確認可能なる 19 世紀末著作、**The Symbolism of Freemasonry** よりの引用をなすこととする。

(直下、The Symbolism of Freemasonry の XXVI.The Legend of the Winding Stairs(曲がりくねった階段(螺旋階段)の節)よりの引用をなすとして)

Hence there is in Speculative Masonry always a progress, symbolized by its peculiar ceremonies of initiation. There is an advancement from a lower to a higher state —from darkness to light— from death to life— from error to

truth. The candidate is always ascending; he is never stationary; he never goes back, but each step he takes brings him to some new mental illumination—to the knowledge of some more elevated doctrine. The teaching of the Divine Master is, in respect to this continual progress, the teaching of Masonry—"No man having put his hand to the plough, and looking back, is fit for the kingdom of heaven." And similar to this is the precept of Pythagoras: "When travelling, turn not back, for if you do the Furies will accompany you."

Now, this principle of masonic symbolism is apparent in many places in each of the degrees. In that of the Entered Apprentice we find it developed in the theological ladder, which, resting on earth, leans its top upon heaven, thus inculcating the idea of an ascent from a lower to a higher sphere, as the object of masonic labor. In the Master's degree we find it exhibited **in its most religious form, in the restoration from death to life—in the change from the obscurity of the grave to the holy of holies of the Divine Presence.** In all the degrees we find it presented in the ceremony of circumambulation, in which there is a gradual inquisition, and a passage from an inferior to a superior officer. And lastly, the same symbolic idea is conveyed in the Fellow Craft's degree in the legend of the Winding Stairs.

(補つても訳として)

「その上、思弁的メーソン (注:[スペキュレイティブ・メーソン] / 初期の石工の職能ギルドとしての色彩が強いメーソンをオペレイティブ・メーソンと表されるのに対して思弁的メーソンという言葉が生まれたと一般に説明されている) にはイニシエーションの独特な儀式らによって象徴化される進歩というものがある。**低き状態から高き状態への進歩があり、闇から光へ、死から生へ、誤りから真への進歩というものがある** (注:メーソンは表向き構成員の人格陶冶を謳っており表記のような記述がなされているわけだが、ここでは from death to life [死から生へ] というところが重きをなす)。候補者は常に上昇の過程にある。彼は決して留まっておらず、決して立ち戻ることもなく、彼がとる各々のステップが彼をして新しき精神の「啓明」(イルミネーション)へと、より上昇を見ての教義知識へといざなう。神性を帯びたマスターの教えはこの継続的な発展、「鋤を手元に持ったまま後ろを振り返り続けているような者は誰も天の王国に適合しない」とのメーソンリーの教えに通ずるものである。そして、これと似たようなものが(古代ギリシャの)ピタゴラス教団の指針、「旅をなしている折には振り返るな。なぜならば、そうすれば、怒り(あるいは怒りを体現しての復讐の女神ら)がおまえに付きそうことになるからだ」となる。

いまやこのメーソン・シンボリズムにまつわる規範が各々の場所、各々の位階にて明確なものとなっている。入門徒弟位階のそれにあつては我々 (注: The Symbolism of Freemasonry: Illustrating and Explaining Its Science and Philosophy, its Legends, Myths and Symbols の著者たる Albert Mackey はフリーメーソンリーの成員であるため、一人称がメーソンのそれとして「われわれ」と表記されていると推し量れる) は「神学的な梯子を発展させてのもの、すなわち、地にあつて留まり、天に向けてそのてっぺんを傾斜させ、「下からより上層の圏へ」の上層をメーソンの梯子の目標として教示しているとのもの」を見出すことができる。親方位階にあつては我々は**最も宗教的な形態にて、死から生への復活、墓の重しによる障害から神意介在しての聖なるものらの中にあつてのまさしくもの聖なるものに向けての変容にて呈示されるもの**を見出す。すべての位階にあつて我々は遠回しの(表現形態をとるとの)儀式にて呈示されるところのものとしての段階的探求、そして、低位から上位への成員への道程を見出すことになる。そして最後になるが、同一のシンボル上の観念が曲がりくねった階段(螺旋階段)の伝説とのかたちで「職人」(徒弟と親方の中

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上の抜粋部は

[死と再生の思潮及び儀式]

をフリーメーソンという団体がいかように重んじているかを指し示すうえでの好例となるものである(：上にて引用の、“ Hence there is in Speculative Masonry always a progress, symbolized by its peculiar ceremonies of initiation. There is an advancement from a lower to a higher state—from darkness to light— **from death to life**— from error to truth. The candidate is always ascending; he is never stationary; he never goes back, but each step he takes brings him to some new mental illumination—to the knowledge of some more elevated doctrine.” [思弁的メーソンにてはイニシエーションの独特な儀式らによって象徴化される進歩というものがある。低き状態から高き状態への進歩があり、闇から光へ、**死から生へ**、誤りから真への進歩というものがある。候補者は常に上昇の過程にある。彼は決して留まっておらず、決して立ち戻ることもなく、彼がとる各々のステップが彼をして新しき精神の[啓明](イルミネーション)へと、より上昇を見ての教義知識へといざなう]との記述、“ In the Master's degree we find it exhibited in its most religious form, **in the restoration from death to life—in the change from the obscurity of the grave to the holy of holies of the Divine Presence.**” [親方位階にあっては我々は[最も宗教的な形態にて、**死から生への復活、墓の重しによる障害から神意介在しての聖なるものらの中にあってのまさしくもの聖なるものに向けての変容**にて呈示されるもの]を見出す]との記述などがそのことをよく示している)。

さらに上と同じくもの著作、オンライン上より取得できるとの19世紀末のフリーメーソンの手になる著作である、

The Symbolism of Freemasonry: Illustrating and Explaining Its Science and Philosophy, its Legends, Myths and Symbols

よりの抜粋を続ける。

(直下、The Symbolism of Freemasonry にあっての XXVII. The Legend of the Third Degree
よりの抜粋をなすとして)

Thus in the Egyptian Mysteries **we find a representation of the death and subsequent regeneration of Osiris**; in the Phoenician, of Adonis; in the Syrian, of Dionysus; in all of which the scenic apparatus of initiation was intended to indoctrinate the candidate into the dogma of a future life.

It will be sufficient here to refer simply to the fact, that through the instrumentality of the Tyrian workmen at the temple of King Solomon, the spurious and pure branches of the masonic system were united at Jerusalem, and that the same method of scenic representation was adopted by the latter from the former, and the narrative of the temple builder substituted for that of Dionysus, which was the myth peculiar to the mysteries practised by the Tyrian workmen.

(訳として)

「このように古代エジプトの秘儀に関しては我々は[オシリス]に[死の表象]と[続いての再生]を見出すことをなし、フェニキアにては[アドニス]について同様のものを見出すことをなし、シリアにあっては[ディオニソス]につき同様のものをば見出すことをなし、それらについて[秘儀の背景にての仕組み]が

秘儀参入候補者を[後の日にあつての生への教義]の方へと教化するのを意図してのものであるとのすべてを見出せる。

ここでは[ソロモン王の神殿に関わるティロスよりの労働者らの尽力を通じて石工機構の非純正の、そして、純正の支部らがエルサレムにて結集を見、前者から後者によって背後の表象が採用され、[神殿建立者らの語りにてティロスの(ソロモン神殿建設に従事の)職人らによって実施されていた秘儀]がディオニソスに特有な神話であったとのことが代弁されることになる]と述べれば十分であろう]

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

上抜粋部については(多少、複雑な話とはなるが)

「フリーメーソンにはソロモン王の神殿をエルサレムにて建立した石工ら(聖書上ではティロス(ツロ)という古代都市国家、レバノン南部に現行遺跡が存在する国から来た石工ら)の故事を重んじての教義体系が存在しており、

そうしたメーソン教義体系に見る伝説上の石工ら(ヒラム・アビフというメーソン儀式体系にあつて重きをなす仮想の棟梁と結びつけられる石工ら)に対して、

[ディオニソス、オシリスやアドニスのように死と復活の神話が伴う神の秘儀への参入が認められた]

と —それが史実であるのとらえる余地あるものか否かは置いておいて— 表記引用部にては記載されているのであり、もつて、

[メーソンの [死と再生への固執] を [メーソンが重んじる伝説上の石工らのその伝での秘儀参入] と結びつけての話をなす]

との意図が抜粋著作の著者(アルバート・マッキー)にはあるのだと(「背景知識ある識者には、」だが)分かるようになっていたものである —ここにて取り上げなしている著作、Project Gutenberg のサイトよりダウンロードできるとの The Symbolism of Freemasonry (1882)にての巻末 “Synoptical Index.A” の段(各事項解説[ア行]段)の Adonis 解説項目にて In the mythology of the philosophers, Adonis was a symbol of the sun; but **his death by violence, and his subsequent restoration to life**, make him the analogue of Hiram Abif in the masonic system, and identify the spirit of the initiation in his Mysteries, which was to teach the second life with that of the third degree of Freemasonry.” (訳として)「哲学者らに由来するところの神話学見地にあつてはアドニスは太陽のシンボルとなる。しかし、**彼アドニスの暴力による死、そして、続いての生への復活**は同アドニスをしてメーソン体系にあつてのヒラム・アビフ(メーソンに重要視されるティロスの地からソロモン神殿建立のために馳せ参じた石工らの棟梁)の質的同等物となさしめ、彼アドニスの秘蹟へのイニシエーションの精神を[第二の人生への教授をなそうとの意味でメーソンの第三位階の秘蹟](訳注:マスター・メーソン位階への参入秘蹟)と結びつけるものである」と記載されていることから [同様のこと] はうかがえるようになっている —。

以上の学究系のフリーメーソンリー成員 — Albert Mackey — の手になる 19 世紀著作からの引用部、そこから分かることは

「メーソンの象徴体系には[死と復活の象徴主義]が色濃くも影を落としており」

「そうした要素と共にある神格ら神話(オシリス・アドニス・ディオニソスら神話)がメーソンに影響を与えているとの観点がメーソン自身にある」

ということである(ポイントはイシス秘儀にもエレウシス秘儀にもそういうモチーフが関わっているとのことである)。

([出典\(Source\) 紹介の部 93](#)を続けるとして)

さらに同じくもの点につき指し示すべくもの引用、

「メーソンのシステムは多く [エレウシス秘儀] (ペルセポネ・デメテルの神話に依拠しての秘儀) および [イシス秘儀] (イシス・オシリスの神話に依拠しての秘儀) に結節するように「できあがっている」」

とのことを指し示すべくもの引用をなすことにする。

その点、こまれたオンライン上より全文取得できる(ダウンロード閲覧できる)との、

THE ELEUSINIAN MYSTERIES AND RITES (1919)

という著作よりの引用をなす(: 同書 THE ELEUSINIAN MYSTERIES AND RITES (1919) は『エレウシス秘儀とその儀式』とでも訳せようものとなり、DUDLEY WRIGHT ダッドリー・ライトという人物、明示されての Freemason によってもものされた著作となる。(そして、容易に後追いでき可能なるところの典拠を挙げるとの本稿の方針に適うところとして) 現況、Project Gutenberg 経由で全文ダウンロードできるとの著作でもある)。

(直下、THE ELEUSINIAN MYSTERIES AND RITES (1919)、その冒頭部、Preface (序文)の部よりの抜粋として)

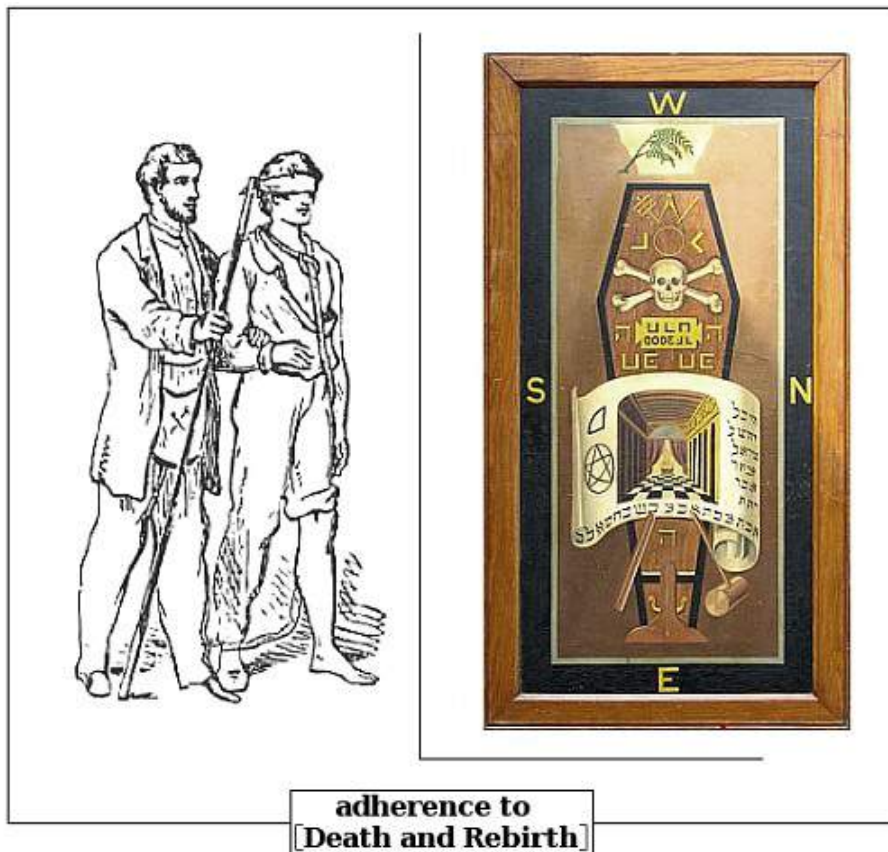
The Eleusinian Mysteries — those rites of ancient Greece, and later of Rome, of which there is historical evidence dating back to the seventh century before the Christian era — bear a very striking resemblance in many points to the rituals of both Operative and Speculative Freemasonry.

(訳として)

「エレウシス秘儀、古代ギリシャおよび後期ローマのそれら儀式がキリスト教時代より7世紀ほど遡るとの史的根拠を伴うとの同儀式は実務的フリーメーソンリー(注: オペレイティブ・メーソンリー. 職能組合的色彩が強かったと「される」前期メーソン紐帯)および思弁的フリーメーソンリー双方の儀式体系に対して多数の点でまさしくもの著しい一致性を帯びているとのものである」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上にて引証の材とした著作記述からお分かりかと思うが、メーソン自身が前世紀初頭より [エレウシス秘儀] が自分達の組織の儀式体系と甚だしくもの一致性を呈していると述べている (“bear a very striking resemblance in many points to the rituals of both Operative and Speculative Freemasonry” と述べている) とのことが「ある」わけである。



上掲図左部で挙げているのは(本稿にての後の段にてその内容を問題視する所
 存である書籍たる)19世紀後半にもなされたメーソンの象徴・儀式体系要覧書
Duncan's Masonic Ritual and Monitor(1866年刊行版/現行、全文オンライン上より
 取得可能となっているとの著作)にて掲載されているとの挿絵となり、

[フリーメーソンのエンタード・アプレントイス(第一位階 First Degree
 [徒弟]位階希望者)、すなわち、フリーメーソンの門を叩く者がそれを受
 けることを強制されるイニシエーション(画期としての儀式)にて
 [死刑囚の格好](目隠しをされ、絞首刑の縄を巻き付けられての格
 好)
 をなさしめられた後、目隠しを取られ、光を与えられるとの式がとられる
 との一連のそのプロセスを描いたもの]

となる。

他面、上掲図にての右側サイドに挙げているのはメーソンの第三位階 **Third Degree**(マスター・メーソン位階)に格上げされる者がその額面上の寓意性を学ばされ
 るとのトレーシング・ボードに見る棺桶の象徴となり、英文 Wikipedia[Tracing board]
 項目に現行、その写真が掲載されているとのものとなる(後の段でも触れるが、フリー
 メーソンのマスター・メーソン位階が棺桶およびそこよりの引き上げをモチーフとしてい
 ることはメーソン通にはよく知られていることである。ちなみにトレーシング・ボードとは
 [フリーメーソンの諸種様々なイラストレーションを組み合わせる形作られ、メーソンの
 各位階にての講義に用いられるとの絵画ないし版画]のことを指す —— 同じくもの
 図像の抜粋元となっているウィキペディア該当項目にて “Tracing boards are painted
 or printed illustrations depicting the various emblems and symbols of Freemasonry.
 They can be used as teaching aids during the lectures that follow each of the Masonic
 Degrees, when an experienced member explains the various concepts of Freemasonry

to new members. ” 「トレーシング・ボードとはフリーメーソンの諸種様々な紋章・シンボルらを描いているとの描画・印刷されての図像らとなる。それらは古参のメンバーが新参者に対してメーソンの様々な概念を説明する際に各々のメーソン位階に応じての講釈にて教示の材として用いられるとのものである」と記載されているとおりである——)。

上にて挙げたところのものらに見るように、メーソンの象徴体系は「生と死の象徴体系」と表裏をなすものである。そして、そのことと通ずるところとして他ならぬフリーメーソン関係者によって「メーソン象徴体系はエレウシス秘儀(ペルセポネの死と復活にまつわる儀式)と結びついている」との申しようがなされているとのことを実例挙げて指摘しているのがここでの話である。

※本稿の後の段の論証の布石として表記の著作 THE ELEUSINIAN MYSTERIES AND RITES (1919)には次のような記述が含まれていることを「も」問題視しておく。

(以下、THE ELEUSINIAN MYSTERIES AND RITES『エレウシス秘儀とその儀式』にての II THE RITUAL OF THE MYSTERIES[第二節 秘儀にての儀式]の節よりの抜粋として)

With regard to Hercules, there is a legend that on a certain time Hercules wished to become a member of one of the secret societies of antiquity. He accordingly presented himself and applied in due form for initiation. His case was referred to a council of wise and virtuous men, who objected to his admission on account of some crimes which he had committed. Consequently he was rejected. Their words to him were: "You are forbidden to enter here; your heart is cruel, your hands are stained with crime. Go! repair the wrong you have done; repent of your evil doings, and then come with pure heart and clean hands, and the doors of our Mysteries shall be opened to you." The legend goes on to say that after his regeneration he returned and became a worthy member of the Order.

(訳として)

「ヘラクレスに関してのこととなるが、ある時期のものとしてヘラクレスが古代の秘密結社の成員にならんと望んだことがあるとの伝承が存在する。彼はそれに応じて自身立ち位置を明らかにし、入会儀礼(イニシエーション)に適したかたちにての申し込みをなした。ヘラクレスの場合は評議会、賢く、また、美德を体現した者ら、ヘラクレスが従前犯してきたいくつかの犯罪行為に応じてヘラクレスへの入会許可に対する反対をなしたとの者らよりなる評議会にて取り上げられるとのことになった。結果、ヘラクレスは(エレウシス秘儀への入会を)拒絶なされることになった。評議会成員の彼に対する言葉は「ここに入ることは禁じられている。あなたの心持ちは冷酷で、あなたの両の手は罪で染まっている。いくがよい。自身がなした過ちを正すようにし、そして、自身の悪行らを悔やむがよい。そして、それから清らかな心ときれいな手でやってくるといい。さすれば、我々の秘儀の扉はあなたに対して開かれることになるだろう」とのものであった。伝承は(人格の)再生の後、彼が戻り、彼が秘儀団の価値あるメンバーになったと続いている」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上については THE ELEUSINIAN MYSTERIES AND RITES 文中には明示的論拠は呈示されていないのであるが、

〔「ケルベロス捕獲のために」ヘラクレスが 12 番目の功業にて冥界下りをなした〕

との伝承、そこにて冥界下りをなす前にヘラクレスがエレウシス秘儀を受けたとの故事に倣(なら)っているものともとれる。それについてはビブリオテーケー、本稿でも度々引用してきたアポロドーロスのローマ期にてのギリシャ神話要覧書にての記載されているところとなり、(ビブリオテーケーの邦訳版として流通している岩波文庫版アポロドーロス『ギリシャ神話』102 ページから 103 ページよりの再度の原文引用をなすとして) 上とほぼ同文に次のように記載されている。

(直下、岩波文庫版アポロドーロス『ギリシャ神話』102 ページから 103 ページよりの〔中略〕なしつつもの引用をなすとして)

「(ヘラクレスは)第十二番目の仕事として地獄からケルベロスを持って来ることを命ぜられた。これは三つの犬の頭、竜の尾を持ち、背にはあらゆる種類の蛇の頭を持っていた。これを目指して出発しようとして、秘教に入会させてもらう目的でエレウシスのエウモルポスの所へ来た。しかしその当時は異邦人は入会を許されなかったので、ピュリオスの養子となって入会した。しかしケンタウロスの殺戮から身を潔められていなかったので、秘教を見ることができず、エウモルポスに潔められて、それから入会を許された …(中略)… 地獄の門の近くに来てテーセウスとペルセポネーに求婚してそのために縛られたペイリトゥースとを見出した。彼らはヘラクレスを見て、あたかも彼の力によって蘇生するように手を差し延べた。彼はテーセウスの手を取って醒ましたが、ペイリトゥースを立ちあがらせようとすると、大地が動揺したので、彼は放した(以下略)」

(引用部はここまでとする —※—)

(※直近の部については Internet Archive よりダウンロードできる場所の Apollodorus のビブリオテーケーの英訳版、THE LIBRARY (BOOK II (V.)) に次のように記載されているところとなる —— (訳は上に邦訳版より引用している通りなので付さない) —— “ A twelfth labour imposed on Hercules was to bring Cerberus from Hades. Now this Cerberus had three heads of dogs, the tail of a dragon, and on his back the heads of all sorts of snakes. **When Hercules was about to depart to fetch him, he went to Eumolpus at Eleusis, wishing to be initiated. However it was not then lawful for foreigners to be initiated : since he proposed to be initiated as the adoptive son of Pylius. But not being able to see the mysteries because he had not been cleansed of the slaughter of the centaurs, he was cleansed by Eumolpus and then initiated. And having come to Taenarum in Laconia, where is the mouth of the descent to Hades, he descended through it.** [. . .] And being come near to the gates of Hades he found Theseus and Pirithous, ' him who wooed Persephone in wedlock and was therefore bound fast. And when they beheld Hercules, they stretched out their hands as if they should be raised from the dead by his might. And Theseus, indeed, he took by the hand and raised up, but when he would have brought up Pirithous, the earth quaked and he let go. ”)

以上、本稿の後の段での指し示しの布石となることとして

「ヘラクレス 12 番目の功業が [エレウシス秘儀] と伝承それ自体のレ

ベルで(古文献に見る)[文献的事実]の問題として結びついている」

とのことを指摘した —— 補っての話はここまでとする —— 。

([出典\(Source\)紹介の部 93](#)はここまでとする)

直近までの長くもなった出典(陰謀論者が持ち出すようなものではなく、そういう言及がなされているとのこと、それ自体が[文献的事実]として問題となるとの史書およびフリーメーソン内部者の「額面上の」理念の解説文書を含めての出典)を通じて次のことらを指し示してきた。

[エレウシス秘儀は秘教・密儀と呼ばれる所以(ゆえん)として参入資格がある者のみが参加し、その知識を参加者身内だけで保持するとのものである —— 参加者が限られている秘密の儀礼、それがゆえにも[秘儀]である——](通念化しているところの見解を[出典\(Source\)紹介の部 91](#)にて紹介)

[エレウシス秘儀は大地の女神デメテルが自身の娘ペルセポネが冥界の王ハデスに略取されたことを嘆いて彼女を探して彷徨う過程を、そして、ペルセポネが地上に戻るとの過程を模し再現するとのものである(しかしそうしたエレウシス秘儀についてはその細かい内容についてはまでは今日に伝わっていないとされる)](通念化しているところの見解を[出典\(Source\)紹介の部 91](#)にて紹介)

[エレウシス秘儀にての儀式では酩酊作用が伴う薬物が利用されていたとされる([キュケオン]という大麦・ハッカ・水を主成分とする飲み物がアヘンを混入されながら利用されていたとの説が学者らによって唱道されている)](通念化しているところの見解を[出典\(Source\)紹介の部 91](#)にて紹介)

[エレウシス秘儀については[エジプト神話にあつての著名な筋立て]としての[悪神セトによってオシリス神がばらばらにされて殺された後(セトは棺を用意して、まんまとオシリスをその中に誘い込み、そこでオシリスをばらばらにして殺したと伝わる)、オシリス神の妻たるイシス神がオシリスを求めての探索をなしたとの筋立て]に倣(なら)つての部分が多いと古文献の時点で言及されているとのことがある](学者らの指摘および記号論的類似性にまつわるところとして長くもなつての[出典\(Source\)紹介の部 92](#)にて解説)

[エレウシス秘儀はフリーメーソンの儀式体系とのつながりが一部の識者に知られているとのものとなる](メーソン内部の人間らの世間的申しよう及び記号論的類似性について細かくも言及しての長くもなつての[出典\(Source\)紹介の部 93](#)にて解説)

(:ちなみにエレウシス秘儀との連続性が観念されるところのイシス秘儀に秘密暴露者に死を含むと解される厳罰にての制裁を科するやりようがなされていること、それがローマ期古典『黄金の驢馬(ろば)』にて認められる表記であり、また、『フリーメーソンと錬金術 西洋象徴哲学の系譜』(人文書院)との著作でフリーメーソンやりようと結びつけられるが如くの物言いがなされているとのこと)も先に言及したことであるが、そこにては長くもなるために言及していなかったこと、メーソンにての[死の制裁の甘受にまつわる宣誓]の具体的内容については本稿にてのかなり後の段にて(そうした世間では知的でもなければ誠実で

もないとの陰謀論者話柄とされるようなことすらも重要なことに関わっているとの観点から)別途取り上げる——筆者自身はフリーメーソンなどという操り人形がかった団体の成員では断じてないが、仄聞されるところの具体的文言については後の段にて取り上げる—— こととする)

さて、ここまでの段にあつては、繰り返すも、

[エレウシス秘儀は秘教・秘儀と呼ばれる所以として参入資格がある者のみが参加する儀式である]

[エレウシス秘儀は大地の女神デメテルは自身の娘ペルセポネが冥界の王ハデスに略取されたことを嘆いて彼女を探して彷徨う過程を、そして、ペルセポネが地上に戻るとの過程を再現するとのものである]

[エレウシス秘儀にての儀式では酩酊作用が伴う薬物が利用されていたとされる([キュケオン]という大麦・ハッカ・水を主成分とする飲み物がアヘンを混入されながら利用されていたとの説が学者らによって唱道されている)]

[エレウシス秘儀については[エジプト神話にあつての著名な筋立て]としての[悪神セトによってオシリス神がばらばらにされて殺された後(セトは棺を用意して、まんまとオシリスをその中に誘い込み、そこでオシリスをばらばらにして殺したと伝わる)、オシリス神の妻たるイシス神がオシリスを求めての探索をなしたとの筋立て]に倣つての部分が多いと古文献の時点で言及されている]

[エレウシス秘儀はフリーメーソンの儀式体系とのつながりが一部の識者に知られているとのものとなる]

との各点につき指し示してきたわけではあるが、以上のことらと地続きにて問題になるところとして

[次のような指し示し]

もが「なせてしまう」とのことがある(：そして、その指し示しはさらに後に続く段で問題視するところとして[ブラックホール理論の開闢のプロセス]と「奇怪極まりなくも」の予見的な式でつながることと「とも」なっている——そちら奇怪性([奇怪]であるとのことは[不自然]であるとのこと、また、[恣意的やりよう]であるとのこととも同文である)が[人間存在のこの先の可能性]を否定するとのものであるがゆえに細々とした指し示しをなしてきたし、これよりもなすのだと何卒、よく含んでいただきたいものではある——)。

(ここまでの指し示し内容と[地続き]なることとしてこれより指し示していくところとして)

[エレウシス秘儀でその存在が極めて重要となっている女神ら、デメテル(母たる女神)とペルセポネ(娘たる女神)については[母子分かたれずに本来的に一体としての存在]であるとの分析が学究になされてきたとのことがある]

[一体一対の存在と見立てられもするデメテル・ペルセポネ母子は古文献それ自体のレベルで女神イシスと結びつけられている存在であるとのことがある]

[デメテル・ペルセポネ両者およびイシスとの結びつきに関しては[ヘカテ]という女神もその結びつきの環に入ってくるとの申しようがなせるところとなっている]

[デメテル・ペルセポネ両者およびイシスと結びつくヘカテという女神に関しては

「ヘラクレス12番目の功業にて登場した犬の怪物ケルベロス」にそれ自体で接合する存在となっているとのことがある」

以上のこらがきちんとした「資料的裏付けをもって」(要するに[言論の生まれ出うる土壌を馱法螺で埋め尽くして土壌汚染をなしているとの神秘主義者や陰謀論者ら由来の「相応の」軽侮して然るべき申しよう]とは一線を画するところとして)指し示せるとのこをこれより呈示する。

まずは

「エレウシス秘儀でその存在が極めて重要となっている女神ら、デメテル(母たる女神)とペルセポネ(娘たる女神)については「母子分かたれずに本来的に一体としての存在」であるとの分析が学究になされてきた存在であるとのこがある」

とのここの論拠を指し示すことにする。

同点については最初にジェイムズ・フレーザーの手になる分厚くもある[大著にして名著]と識者の世界で総括されている書、1894年版『金枝篇』—(著作権が切れ、Project Gutenbergのサイトにて公開されている(によって誰でも確認なせる)版)—よりの抜粋をなすことにする。

出典(Source)紹介の部 94

SOURCE 94



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典(Source)紹介の部94にあつては、

「エレウシス秘儀でその存在が極めて重要となっている女神ら、デメテル(母たる女神)とペルセポネ(娘たる女神)については[母子分かたれずに本来的に一体としての存在]であるとの分析が著名な学者になされている」

このことの紹介をなしておくこととする。

(直下、——多少長くなるも—— The Golden Bough In Two Volumes. Vol. I. (1894) § 8.—
Demeter and Proserpine の部よりの引用をなすとして)

Compared with the Corn-mother of Germany and the harvest Maiden of Balquhiddy, the Demeter and Proserpine of Greece are late products of religious growth. But, as Aryans, the Greeks must at one time or another have observed harvest customs like those which are still practised by Celts, Teutons, and Slavs, and which, far beyond the limits of the Aryan world, have been practised by the Incas of Peru, the Dyaks of Borneo, and the Malays of Java —a sufficient proof that the ideas on which these customs rest are not confined to any one race, but naturally suggest themselves to all untutored peoples engaged in agriculture. It is probable, therefore, that Demeter and Proserpine, those stately and beautiful figures of Greek mythology, grew out of the same simple beliefs and practices which still prevail among our modern peasantry, and that they were represented by rude dolls made out of the yellow sheaves on many a harvest-field long before their breathing images were wrought in bronze and marble by the master hands of Phidias and Praxiteles.

[. . .]

Thus the story that Iasion begat a child Plutus (“wealth,” “abundance”) by Demeter on a thrice-ploughed field, may be compared with the West Prussian custom of the mock birth of a child on the harvest field. In this Prussian custom the pretended mother represents the Corn-mother (Zytniamatka); the pretended child represents the Corn-baby, and the whole ceremony is a charm to ensure a crop next year. There are other folk-customs, observed both in spring and at harvest, with which the legend of the begetting of the child Plutus is probably still more intimately connected. Their general purport is to impart fertility to the fields by performing, or at least mimicking, upon them the process of procreation. Another glimpse of the savage under the civilised Demeter will be afforded farther on, when we come to deal with another aspect of these agricultural divinities.

[. . .]

The reader may have observed that in modern folk-customs the corn-spirit is generally represented either by a Corn-mother (Old Woman, etc.) or by a Maiden (Corn-baby, etc.), not both by a Corn-mother and by a Maiden. Why then did the Greeks represent the corn both as a mother and a daughter? In the Breton custom the mother-sheaf —a large figure made out of the last sheaf with a small corn-doll inside of it— clearly represents both the Corn-mother and the Corn-daughter, the latter still unborn. Again, in the Prussian custom just described, the woman who plays the part of Corn-mother represents the ripe corn; the child appears to represent next year's corn, which may be regarded, naturally enough, as the child of this year's corn, since it is from the seed of this year's harvest that next year's corn will spring. **Demeter would thus be the ripe corn of this year; Proserpine the seed-corn taken from it and sown in autumn, to reappear in spring. The descent of Proserpine into the lower world would thus be a mythical expression for the sowing of the seed; her reappearance in spring would express the sprouting of the young corn. Thus**

the Proserpine of this year becomes the Demeter of the next, and this may very well have been the original form of the myth.
But when with the advance of religious thought the corn came to be personified, no longer as a being that went through the whole cycle of birth, growth, reproduction, and death within a year, but as an immortal goddess, consistency requires that one of the two personifications, the mother or the daughter, should be sacrificed. But the double conception of the corn as mother and daughter was too old and too deeply rooted in the popular mind to be eradicated by logic, and so room had to be found in the reformed myth both for mother and daughter.

(注記付しながらもの拙訳として)

「[ドイツ(の遺風)に見る「穀物の」母]、そして、[Balquhidder (注:フレーザーが民話比較検討の対象としたスコットランドの小村)にての穀物の処女]と比較してみた場合、ギリシャのデメテル(母神としての「穀物の」神)とペルセポネ(乙女としての「穀物の」神)らは
[宗教的観念成長に伴っての後期的産物]となろう。

だが、アーリア人のように、ギリシャ人らからしてある時期、あるいは別の時期にて[収穫に関する文化]としてケルト人ら・チュートン人ら、そして、スラブ人らに今日もってなお実演され、アーリア世界の境界を遙か越えてはペルーのインカの民やボルネオのダヤクの民ら、そして、ジャワ島のマレーの民らに実演されてきたのと[同様のもの]を見出していたにちがいない——(そうした文化が一つの民族にとどまらず、農耕に従事しているとのすべての未開の民らに担われているところであるという点についてはそうした文化ら自体が生来、示しているとの十分な証拠がある)——。

従って、[デメテルおよびペルセポネら、ギリシャ神話にあつて堂々と、かつ、美しくもあつた彼女ら(と同一・同種たる)存在]が我々の近代と同時代の小作農らの間にも未だ流布しているとの共通の単純なる信仰形態およびその実演方式から生起してきたとのこと、そして、また、ペイディアスおよびプラクシテレス(注:ペイディアスもプラクシテレスも著名なギリシャ期の大理石彫刻家の名前である)ら匠の手によって青銅および大理石で息をしているような精巧な似姿が形作られるより遙か前より収穫もたらす場にて黄色き束によって構築された粗雑な作りの人形ら(案山子)によって彼女ら存在が体現されていたとのことはありえることではある。

…(中略)…

このようにイーアシーオンが[富と豊穡]を意味する[プルーツ]という子を[三度、鋤をいれられた農地] (訳注:三圃制は中世まで登場を見なかったともされるため、このように訳した)の野にてデメテルとの間に設けたとのこと(訳注:ギリシャ神話ではトロイア創建者ダルダノスと兄弟にあたり神の血を引く男というイーアシオンがプルーツという神をデメテルとの間に設けたとされる)尚、そのプルーツ、ペルセポネの異父兄弟にあたる存在は冥府の主権者たるハデスのローマ版プルーツとも同一視されることがある存在である)は[収穫の野にて子供の擬似誕生]を垣間見せているとの西プロシア(現:西部ドイツ)の文化と比較されうるものである。

このプロシア風習では母を模される存在は[穀物の母(Zytniamatka)]を体現しており、子供に模される存在は穀物の赤子を体現し、すべての祭りは翌年の穀物収穫を確実にするための誘因としての役割を果たしている。春および収穫期の双方にて観察される他の民族的風習ら、それらが子たるプルーツを生み出すとの伝承とよりもって密に関わるものとして存在しているとのことである。

それら風習のより一般なる目的は出産の過程を演じる、あるいは、少なくともそれを模すことで地に豊穰を与えんとすることであると思われる。文明化を見てのデメテル信仰の底流にある蛮風を他の側面で見望すること、それによって、これら農業の神格化存在の他の側面を取り扱う際にのさらにもっての視野が得られようとのものである。

…(中略)…

読み手らは現代的民俗風習にあつて穀物の霊らは[穀物の母](ないし老婆等々)あるいは[乙女](ないし穀物の赤子等々)によって体現されており、[穀物の母]と[穀物の乙女]の双方によって体現されては「いない」とのこと、観察されてきたかもしれない。では、何故、古代ギリシャ人らは穀物をして母(たるデメテル)と娘(たるペルセポネ)の双方にて体現させていたのか。ブルターニュ慣習にては母なる穀物の束、[小さな穀物の人形]をその中に蔵しているとの[過ぎ去らんとする年の穀物の束]にて構築されているとの巨大な人形が明らかに[穀物の母]と[穀物の娘]の双方を体現しており、後者は未だ生まれざるものとなる。再びの話として、先述のプロシア風習では[穀物の母]としての役割を演じるとの女性が[成熟を見た穀物]を表象する。翌年の穀物、次年度の穀物が産まれ出ることになるのが今年度の収穫物の種からなのであるから子自然にその年の穀物の子供と見なされるに十分であろうものとして子は翌年の穀物を表象している。デメテルはこのようにその年の成熟した穀物たるものであり、ペルセポネはそこより取られた種たる穀物、秋に播種(種蒔き)され、春に再度現れるとの類たる穀物たりうる。ペルセポネの地下世界への降下はこのように播種の神話的表現となっているのだろう。このように本年度のペルセポネは次年度のデメテルとなり、これが神話の原初的形態であるとよくも解されるところである。

しかし、宗教的思考法の発展を伴って穀物が人格化なされるようになった折、最早、年度内に収まった誕生・成長・生殖・死の全サイクルを伴って歩んだ存在としてではなく、しかし、一個の不死なる女神として人格化がなされている存在として、一致性問題は[二つの人格化の一なる存在]を要請するようになり、ゆえに、母あるいは娘が犠牲に供されることになった。しかし、母と娘の作物の二重概念はあまりにも古く、かつ、深く衆人の胸に根ざしているものとなり、論理では根絶できるようなものではなく、であるから、母と娘の双方のための改訂されての神話を見出すとの余地がなければならなかった」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

何がどう論じられているのか完全に汲みとりづらきかたちにての掻い摘まんでの引用にとどめざるをえなかったが(同じくものことを際限なく指し示している時間はないとの判断が手前にある)、上の『金枝篇』よりの引用部にての申しようの前提になっているのは次のような観点である。

[デメテルとペルセポネは行く年来る年の穀物を体現している存在で、本来的に一なる同一存在であると見立てられる(との視点が文化人類学を領分とする学者、斯界の泰斗として知られるジェイムズ・フレイザーの胸中に諸種領域の観察に基づいてあつた)]
(“Demeter would thus be the ripe corn of this year; Proserpine the seed-corn taken from it and sown in autumn, to reappear in spring. The descent of Proserpine into the lower world would thus be a mythical expression for the sowing of the seed; her reappearance in spring would express the sprouting of the young corn. Thus the Proserpine of this year becomes the Demeter of the next, and this may very well have been the original form of the myth.” 「デメテルはこのようにその年の成熟した穀物たるものであり、ペルセポネはそこより取られた種たる穀物、秋に播種(種蒔き)され、春に再

度現れるとの種たる穀物たりうる。ペルセポネの地下世界への降下はこのように播種の神話的表現となっているのだろう。このように本年度のペルセポネは次年度のデメテルとなり、これが神話の原初的形態であるともよく解される場所である」とフレーザー大著『金枝篇』にて掲載されているところである)

(出典(Source)紹介の部 94 はここまでとする)

などと摘示しても

「エレウシス秘儀でその存在が極めて重要となっている女神ら、デメテルとペルセポネについては[母子分かたれずに本来的に一体としての存在]であるとの説が存在する」

とのことはその道の大家なれど僅か一学究の申しよう(フレイザーのみの申しよう)にとどまるのではないかと見る人間もいるかもしれない(といった反論すらも機械・人工知能の類に脳の首座を奪取されでもしたかといった心もない、魂もないとの筋目の人間の胸中には去来しないかもしれないかとも思うのだが、ここでは人間性を蔵した向きのための筆の運びをなしている)。

であるから、さらに続いて、次のような申しようがなされていること「をも」一応、引いておく。

出典(Source)紹介の部 94(2)

SOURCE 94(2)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典(Source)紹介の部 94(2)にあつては、

「エレウシス秘儀でその存在が極めて重要となっている女神ら、デメテルとペルセポネについては[母子分かたれずに本来的に一体としての存在]であるとの言いようはその道の大家に限られてのものではない」

このことの典拠を — 不十分か、と思うところながらも — 挙げておくこととする。

(直下、英文 Wikipedia [Demeter] 項目よりの抜粋として)

According to the personal mythology of Robert Graves, Persephone is not only the younger self of Demeter, she is in turn also one of three guises of the Triple Goddess — Kore (the youngest, the maiden, signifying green young grain), Persephone (in the middle, the nymph, signifying the ripe grain waiting to be harvested), and Hecate (the eldest of the three, the crone, the harvested grain), which to a certain extent reduces the name and role of Demeter to that of group name.

(訳として)「ロバート・グレーヴズによる私的(に展開されていた)神話(解釈)によると、ペルセポネはデメテルの若き分身であるばかりではなく、彼女は本当のところ、三柱ワンセットの姿をした女神らの一柱、Kore(最も若きところで緑がかった若い穀物を意味するところの乙女)、Persephone(年が中頃になって刈り取りを待つところの成熟した穀物としてのニンフ)、Hecate(三柱の最年長で刈り取られた穀物の同等物)らの一柱であり、ある一定程度、(それら三位一体の神らの)集合名称であるデメテルのそれへと名前および役割を減じているのだというのである」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

表記ウィキペディアの元となっているところとして 20 世紀前半、英国にての文人として影響力を持っていた Robert Graves の The Greek Myths — (先にも本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 63\(3\)](#)で[ギルガメシュとヘラクレスの関係性で「こじつけがましき」説明をなしている書籍]とのことでその内容を批判的に問題視していた、オンライン上より内容確認できる書籍) — の DEMETER'S NATURE AND DEEDS の節よりの引用をなせば、

“ 1. Core, Persephone, and Hecate were, clearly, the Goddess in Triad as Maiden, Nymph, and Crone, at a time when only women practised the mysteries of agriculture. Core stands for the green corn, Persephone for the ripe ears, and Hecate for the harvested corn — the ‘carline wife’ of the English countryside. But Demeter was the goddess’s general title, and Persephone’s name has been given to Core, which confuses the story. The myth of Demeter’s adventure in the thrice-ploughed field points to a fertility rite, which survived until recently in the Balkans: the corn priestess will have openly coupled with the sacred king at the autumn sowing in order to ensure a good harvest. In Attica the field was first ploughed in spring; then, after the summer harvest, cross-ploughed with a lighter share; finally, when sacrifices had been offered to the Tillage gods, ploughed again in the original direction during the autumn month of Pyanepsion, as a preliminary for sowing (Hesiod: Works and Days; Plutarch: On Isis and Osiris; Against Colores).

2. Persephone (from phero and phonos, ‘she who brings destruction’), also called Persephatta at Athens (from ptersis and ephapto, ‘she who fixes destruction’) and Proserpina (‘the fearful one’) at Rome was, it seems, a title of the Nymph when she sacrificed the sacred king. The title ‘Hecate’ (‘one hundred’) apparently refers to the hundred lunar months of his reign, and to the hundredfold harvest. The king’s death by a thunderbolt, or by the teeth of horses, or at the hands

of the tanist, was his common fate in primitive Greece.”

(訳として)「1. [コレ] (注: Core あるいは Kore は[乙女]および[ペルセポネ]を指す語である)、[ペルセポネ]、[ヘカテ] (注: ヘカテは本稿のこれよりの段にてその特性を問題視する頭を三つ持つ魔術の神となる)は明らかに女性らのみが農業にまつわる秘儀を実演していた時代にての乙女、ニンフ、穀物としての三柱ワンセットの女神である。コレはまだ緑がかった穀物を表し、ペルセポネは成熟を見た穂を表し、ヘカテは刈り取られた穀物を、英国田園地帯の carline wife の如きものを表す。が、デメテルとなれば、女神らの汎用的な呼称となり、また、ペルセポネの名前がコレ(乙女)に対して与えられている、それがゆえに話がややこしくなっている。[三度、鋤を入れられた農地] (訳注: 三圃制は中世まで登場を見なかったともされるため、このように訳している)にてのデメテルの冒険の神話は豊穰の儀、それは[近年までバルカン地方にて息づいていたもの]であるとのもの、に関しては、穀物の女祭司が望ましき収穫を確実にしめんとすため、秋の播種の折、聖別された王と開放的につがいとなろうとのものであったが、豊穰の儀を指し示しているとのものである。アッティカ地方(注:ギリシャのアテナ周辺領域のこと)にては野は春にて最初に鋤を入れられ、それから、夏の収穫の後、より軽めの作物による連作が行われ、耕作の神々に対する犠牲(生贄の獣畜)が供され、秋にての[Pyanepsion の月] (注:アッティカ、すなわち、アテナ周辺地域の暦にての特定の月)の最中にて元あった方向を目指して、播種に先立ち、再度の鋤入れがなされる —— (ヘシオドス『労働と日々』、プルタルコス『イシスとオシリス』) —— 。

2. ペルセポネ(phero および phonos との部から[破壊をもたらす彼女]との意味合いの存在)、アテナのペルセファタ(ptersis と ephapto との部から[破壊を整える彼女]との意味合いの存在)、ローマにてのプロセルピナ([恐ろしき存在]との意味の存在)は、そう見えるところとして、彼女が聖別されし王を(豊穰の儀にて)犠牲に供した折にてのニンフの呼び名になっている。ヘカテ([百]を意味する)との呼び名は明らかにその統治下にある[百の(アッティカ地方太陰太陽暦の)月]に言及したもの、そして、百回の収穫に言及したものであろう。落雷ないし馬の歯ないし後継者の手になる王(儀式にて生贄に供されることになるとの王)の[死]は古代ギリシャにての彼の共通の死に様であった」

との部がその該当部となる。

尚、表記のロバート・グレーヴズの The Greek Myths (原著はオンライン上より全文閲覧できるが、訳書も『ギリシャ神話』との題にて紀伊國屋書店から出ているとの書)は

[the "personal" mythology of Robert Graves]

と「私的な」付きで Wikipedia にすら表記されているように[論拠を伴わないもの] (groundless)、それがゆえに、[さして信に値しないとのもの] (unreliable)とされてもいるが、ここ本稿では —— [デメテルとペルセポネの一致性]にまつわる見立てにつき —— 他に見るべき要素がある中でロバート・グレーヴズ申しようを「も」引いているとのこと、ご理解いただきたいものではある (:尚、さらに述べれば、日本では論拠がないばかりか、それ以前にあまりにも稚拙かつ馬鹿馬鹿しくもある(軽侮反応をそれを見た人間がきたせば御の字といった式で稚拙かつ馬鹿馬鹿しくもある)との陰謀論の類を後追いもしがたいとのかたちで再頒布しているような一群の者らが目立ち、といった者達が本稿公開をなすことにした媒体の一にすら[彼らの色] (「絶対に」何も変ええないとの色/そのためにこそその色)を付けんとしてきた様すら今までに観察してきたところなのだが(とといった中で筆者従前媒体が誰にも顧みられないとのことを観察しているのであるから、の中に、錯簡・錯誤・行き過ぎが一部含まれている中でも訂正表記をなそうとの意欲すらほとんどわなくなかった)、私的にも思い含むところがある国内にてのそういった筋目の者達のやりようと本稿筆者スタンスを峻別いただきたいものではある)。

(出典(Source)紹介の部 94(2)はここまでとする)

※直上にて英国にての著名なる学究(ジェイムズ・フレイザー)および言論人(ロバート・グレーヴズ)に由来するところとしての、

[[デメテルとペルセポネは同一の存在である]とする言辞]

を引いてきたわけだが、そこにて同一視の理由として挙げられている、

[穀物体现存在の世代交代(にまつわる宗教上の位置付け)]

といったことを観念せずとも両者、[デメテルとペルセポネの同一存在としての特性]は古典それぞれのものに由来するところとして「純・記号論的に」呈示できるようになっている。

第一。デメテルはエジプトからの渡来神イシスと同一視される存在であるとヘロドトスの古典『歴史』などにて記されているとのことがある(先にての **出典(Source) 紹介の部 92**にて表記のことを参照のこと)。

第二。ペルセポネもまたエジプトからの渡来神イシスと同一視される存在であるとローマ期の古典『黄金の驢馬(ろば)』にて表記されているとのことがある(これより後の段にての **出典(Source) 紹介の部 94(3)**を参照のこと)。

とすると、古典それぞれのものより[デメテル]=[イシス]=[ペルセポネ]との古代人のものの見方が存在していたと述べられることになる。

最前の **出典(Source) 紹介の部 94** 及び **出典(Source) 紹介の部 94(2)**にて

「デメテルとペルセポネは本源的に一なる神としての属性を伴っている節が如実にある」

との見立てが「象牙の塔の住人などにとっては」目立つところにて呈されているとのことを挙げたとして、である。

次いでもってして、先駆けてこれより証示の対象とすると申し述べていたことらにあつての、

「一体一対の存在と見立てられもするデメテル・ペルセポネ母子は古文献それ自体のレベルで女神イシスと結びつけられている存在であるとのことがある」

「デメテル・ペルセポネ両者およびイシスとの結びつきに関しては[ヘカテ]という女神もその結びつきの環に入ってくるとの申しようがなせるところとなっている」

との点らの [典拠に依拠しての指し示し] をなすこととする。

表記指し示し事項(の一部)に接合するところとして「既にもって」出典摘示を緻密にもなしてきたところとして

「[エジプトの女神イシスがオシリス(後、冥界の主宰者になった神)を求めて彷徨したことに由来する神話およびその神話に基づいての信仰形態]と[女神デメテルが娘ペルセポネ(後、冥界の女王)を求めて彷徨した神話およびその神話に基づいての信仰形態]とは顕著な一致性を呈している」

とのことが現実にもする (**出典(Source) 紹介の部 92**にて詳述. そこにてキーとなる概念は(**出典**

(Source) 紹介の部 93 の段でも先述のように [フリーメイソンの密儀体系] にも影響を色濃くも与えていることも指摘されるとの) [エレウシス秘儀] である)。

以上のことから

[イシス] ⇔ [デメテル・ペルセポネ母子]

との連続性が観念されるようになってきているわけであるが、さらに同じくもの両者の間にある連続性につき、

「古文献それ自体に認められる文献的事実の問題としても」

そちら関係性が認められるようになってきているとのことがあり、そこに見る [古文献上にての [イシス] ⇔ [デメテル・ペルセポネ母子] にまつわる記載内容] が、と同時に、[ヘカテ] という存在を環に入れての接続性の問題に通じているとのことをここでは問題視する (: そのような連続性が —ケルベロスを通じ— ダンテ『地獄篇』を巡る話とも接合し、「今日的な意味をもって」問題となることに結節していると述べられるように「なってしまう」とのことがあって、潰えた宗教体系にあっての女神らの関係性などとのことについてわざわざ微に入っている説明をなさんとしている)。

出典 (Source) 紹介の部 94(3)

SECRET 94(3)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典 (Source) 紹介の部 94(3) にあつては、

[[イシス] ⇔ [デメテル・ペルセポネ母子] との関係性が古文献にて言及されている中でそれがまた[ヘカテ]という存在との関係性にまつわるものともなっている]

とのことの典拠を挙げることにする。

さて、ここではローマ期の小説として完全体として伝存しているとのことで好古筋には有名な、

The Golden Ass『黄金の驢馬(ろば)』

という古典の内容を引いておくこととする（：その点、『黄金の驢馬(ろば)』という作品については先に本稿で取り上げたとの書籍、国立大学で[アカデミックポスト]を有する学究(吉村正和教授)による陰謀論とは無縁のメーソン分析書、『フリーメーソンと錬金術 西洋象徴哲学の系譜』(人文書院)にあって(その p.22 より再引用するところとして) “ 古典密儀宗教については現存する資料が限られており、正確な内容が伝えられていないことはすでに述べた通りである。その中で、**アプレイウスの『黄金の驢馬』第十一巻は、ルキウスのイシス=オシリス密儀への参入をかなりなまなましく描いていることで有名である。**物語形式を通して叙述されてはいるが、そこにはアプレイウスの実体験が入り込んでいることはほぼ確実であり、少し詳しく見てみるだけの価値がある ” (引用部はここまでとする)との言及のなされようが見受けられる古典ともなる)。

上 The Golden Ass『黄金の驢馬(ろば)』につき 国内で流通を見ている呉茂一(ホメロス古典の訳をなした人物で著名性伴つての学究(故人) / 東京大学、退官後、名古屋大学教授)に手になる訳本よりの引用をなす。

(直下、『世界文学体系』(筑摩書房) 掲載の呉茂一の訳になるアプレイウス『黄金の驢馬』第 11 の巻 —— (梗概(粗筋)として[驢馬(ろば)と化したルキウスの回復を祈る祈り、イーシス女神のこと、イーシスの祭に驢馬ルキウス、人間に生まれ返ること、ついでイーシスの信徒に加えられ、献身の秘蹟にあずかること、ローマに赴き浄福の生活を送ること]とのあらまし紹介がなされているとの巻) —— にあって驢馬(ろば)と化した主人公ルキウスがイシス神に「人間の姿に戻れるように。」との祈願をなしているとの段 (p.128) よりの引用をなすとして)

「天の女王よ、あなたさまは慈母ケレースとも呼ばれ、地上の作物の創造主でおいでになる。そしておん娘を探し出したお喜びから、大昔の食料だった櫛の実の代わりに、それよりもっと甘い食物を授けて、未開の人々をお養いになり、今日エレウシスの野に顕現なさいます。それがまた天上のウェネスとして、天地開闢の日にアモルを誕生させ相異なる二つの性をお結びになって以来、絶えず新たな生命を吹き込み、人類を永久につづけさせ、拡めなさいまして、今日に於いても波に囲まれたパポスの霊地に、崇拜されておいでになります。あなたさまはまた、ポエブスの姉妹にもお当たりで、女の産の苦しみを、和らげるくすりの手当てでもっておなだめになり、たくさんの人の心に光明を与えられ、あなたさまはまた夜の吼えに恐ろしいプロセルピナと呼ばれ、三種の顔をもち、悪霊どもの攻撃をおし鎮め、彼らを地下の牢獄に封じ込めて、聖なる森を彷徨し給うては、種々な儀式で祭をうけておいでです。あなたさまはまた、女性らしい光でもって、あまねく町の城壁をお包みになり、(以下略)」

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※1. 以上、邦訳書より引用なした部に対応する「オンライン上より後追い確認できるところの」英訳版表記も挙げておくこととする。ここでは誰でも確認できるところとして著作権保護期間超過を見ているとの書籍が全文公開している

Project Gutenberg のサイト、そこにて公開されている THE GOLDEN ASSE の 1639 年版よりの部分抜粋をなしておくこととする(につき、そちら 17 世紀刊行版『黄金の驢馬』に関しては全文呈示サイトにて The original spelling, capitalisation and punctuation have been retained「原典の綴り、大文字化方式、句読点を踏襲している」との表記の通り「多少読み解きづらいものである」(thou[汝]であるとか、そういう古語が用いられており、そも、驢馬 Ass を Asse と表記していることからしてそれが英訳された折の古英語の風が出ていて時代がかっている)とのこと断っておく)。それでは以下、オンライン公開版 THE GOLDEN ASSE にての THE ELEVENTH BOOKE にての訳本に対応する部位よりの引用をなす：“ **O blessed Queene of heaven, whether thou be the Dame Ceres which art the originall and motherly nource of all fruitfull things in earth, who after the finding of thy daughter Proserpina, through the great joy which thou diddest presently conceive, madest barraine and unfruitfull ground to be plowed and sowne, and now thou inhabitest in the land of Eleusie;** or whether thou be the celestiall Venus, who in the beginning of the world diddest couple together all kind of things with an ingendered love, by an eternall propagation of humane kind, art now worshipped within the Temples of the Ile Paphos, thou which art the sister of the God Phoebus, who nourishest so many people by the generation of beasts, and art now adored at the sacred places of Ephesus, **thou which art horrible Proserpina, by reason of the deadly howlings which thou yeeldest, that hast power to stoppe and put away the invasion of the hags and Ghoasts which appeare unto men, and to keepe them downe in the closures of the earth:thou which art worshipped in divers manners, and doest illuminate all the borders of the earth by thy feminine shape,** thou which nourishest all the fruits of the world by thy vigor and force; with whatsoever name or fashion it is lawfull to call upon thee, I pray thee, to end my great travaile and misery, and deliver mee from the wretched fortune, which had so long time pursued me. Grant peace and rest if it please thee to my adversities, for I have endured too much labour and perill. Remoove from me my shape of mine Asse, and render to me my pristine estate, and if I have offended in any point of divine Majesty, let me rather dye then live, for I am full weary of my life. When I had ended this orison, and discovered my complaints to the Goddess, I fortun'd to fall asleepe, and by and by appeared unto me a divine and venerable face, worshipped even of the Gods themselves.” (邦訳版よりの引用部に対する英訳版表記の引用部はここまでとする)

(※2 注記として:微に入っただけのこととはなるが、識見を蔵しているとの向きが読み手となっていることを想定して一応の付記をなしておく。

上の THE GOLDEN ASSE、その 1639 年版 — Project Gutenberg のサイトにて全文ダウンロードできるとの版— よりの抜粋部にあつては国内学究(ホメロスの訳業でも有名であったとの故・呉茂一)の手になる訳である、**あなたさまはまた夜の吼えに恐ろしいプロセルピナと呼ばれ、三種の顔をもち、悪霊どもの攻撃をおし鎮め、彼らを地下の牢獄に封じ込めて、聖なる森を彷徨し給うては、種々な儀式で祭をうけておいでです**
との部位と

“ **thou which art horrible Proserpina, by reason of the deadly howlings which thou yeeldest, that hast power to stoppe and put away the invasion of the hags and Ghoasts which appeare unto men, and to keepe them downe in the closures of the earth:thou which art worshipped in divers manners, and doest illuminate all the borders of the earth by thy feminine shape,**” (古語表記ゆえに筆者も訳しがたいところがあり苦吟して訳すとして)「なんじ、死の臭い

おびし叫びが呈しもする道理にあつては恐るべきペルセポネ、人間に影響を与える魔女・悪霊らの侵襲を押しとどめ排除せしめ、地の底へ留め置くとの力を蔵すること、明らかなりし存在ペルセポネでもあるなり。汝、種々折々の式にて崇拜され、女としての似姿を呈してはありとあらゆる地にての辻々を照らす存在なり

云々との部位が(全文対応すべきなのに)一部対応しきっていない、「三種の顔」といった表現が英訳版(1639年版)にては欠損を見ているといったところがある「とも」受け取れるようになっている。が、については(Project Gutenbergではなく) Internet Archive のサイトの方にて公開されている[1915年]敢行の20世紀初頭英訳版 THE GOLDEN ASS、具体的には S.Gaselee という人物の手によって再編集された版の巻 11 (BOOK XI)を見る限りは[国内流通版と英訳版の間にてほぼそのとおりの対応関係が成立していること]、伺い知れるようになっている(1915年初出の表記がなされている『黄金の驢馬』20世紀初頭英訳版には “ or whether Thou be called terrible Proserpine, by reason of the deadly bowlings which Thou yieldest, that hast power with **triple face** to stop and put away the invasion of hags and ghosts which appear unto men, and to keep them down in the closures of the Earth, which dost wander in sundry groves and art worshipped in divers manners ” と表記され、[ペルセポネ(ローマ名プロセルピナ)としての形態もとるイシス]が[ペルセポネ]の形状をとるときは[三つの顔] (**triple face**) を持つ存在であるとの言明が国内刊行版と同様になされている)

上のローマ期古典『黄金の驢馬』よりの表記の引用部にあつては、(引用部にあつて下線を引いたところの内容をほぼそのままに反芻(はんすう)するとして)、

[(イシスが驢馬に転じたローマ期小説主人公に祈りの対象とされている中で) [イシスは慈母ケレースとも呼ばれ地上の作物の創造主であり、娘を探し出した喜びから、未開人に甘き食べものを与え、今日はエレウシスの野に顕現する]

[(イシスが驢馬に転じたローマ期小説主人公に祈りの対象とされている中で) [イシスが[三種の顔(トリプル・フェイス)を持つペルセポネ]である]

との言及が —— 特定文献の中にこれこれこういう記載がなされているとの Philological Truth [文献的事実]の問題として—— なされているわけである (:と同時に、続いての段で[イシスはウェヌスことヴィーナスといった他のローマ期の女神の別相である]「とも」言及されているのだが、そのことはここでは置き、とにかくも、以上のような記述がなされている)。

以上のことは — [娘を捜し求め喜びの情を覚えたとの作物の授け手、エレウシスの野に顕現する存在]とされている[ケレース]が[ギリシャのデメテル神のローマ名]であるがゆえに—

「イシス神 (エジプトからギリシャ・ローマ世界に伝来したとの女神) が[デメテル(ケレース)]および[ペルセポネ(プロセルピナ)] と同一物である (と古代にて見られていた) と古文献 (ローマ期の小説として完全体として今日に伝存している『黄金の驢馬(ろば)』) の中で歴史的記録として言及されている」

とのことと同義となるわけだが、(後述するような観点から)、そのことは[ヘカテ] (という存在) との兼ね合いで意味をなすこと「でも」ある。

以上申し述べたうえでさらに『黄金の驢馬(ろば)』よりの引用を続けることにする。

(続けて直下、『世界文学体系』(筑摩書房)掲載の呉茂一の訳になるアプレイウス『黄金の驢馬』第 11 の巻の驢馬(ろば)と化した主人公ルキウスがイシス神に人間の姿に戻れるよう

に、との祈願をなしたのに応えてイシス神が現出し、同神の立ち位置を主人公ルキウスに言い聞かせているとの段(p.129)よりの引用をなすとして

「ルキウスよ、私はお前の祈りにたいへん心をうたれてここへ来ました。私は天地万物の母、あらゆる原理の支配者、黄泉の女王、天界の最古参として、あらゆる神々や女神たちのたた一つの形に示現するものです。…(中略)…最も古い人類の種族プリュギア人は、神々の母としてペシヌースに祀り、はえぬきのアッティカ人は、ケクロピアのミネルヴァと呼び、…(中略)…クレータ島人は、ディクチュンナのディアーナと、三カ国語を話すシクリー人はステュクスのプロセルピナと、古いエレウシースの住民たちはアッティカのケレースと呼びならわしています。ある地方ではユーノー、またの地方ではベローナ、ある所ではヘカテ、またラムヌーシアと呼ばれます。…(中略)…そして太陽神の、朝生まれたての光線に照らされるエティオピアの人々と、学問の古い伝統にかけては世界に冠たるエジプトの人々とは、いずれも私にふさわしい儀式を捧げ、本来の名前によって、イーシスの女王と呼びならわし崇めるのです(以下略)」

(訳書よりの引用部はここまでとする 一※一)

(※邦訳書より引用した上の部に対応するところとして「オンライン上より確認できるところの」英訳版表記も挙げておくこととする。については直上にてそうしたのと同様に Project Gutenberg のサイト、そこにて公開されている THE GOLDEN ASSE の 1639 年版よりの部分抜粋をなしておくこととする。(以下、引用なすとして) “ Behold Lucius I am come, thy weeping and prayers hath mooved mee to succour thee. I am **she that is the naturall mother of all things, mistresse and governess of all the Elements, the initiall progeny of worlds, chiefe of powers divine, Queene of heaven! the principall of the Gods celestiall**, the light of the goddesses: at my will the planets of the ayre, the wholesome winds of the Seas, and the silences of hell be diposed; my name, my divinity is adored throughout all the world in divers manners, in variable customes and in many names, for the Phrygians call me the mother of the Gods: the Athenians, Minerva: the Cyprians, Venus: the Candians, Diana: the Sicilians **Proserpina: the Eleusians, Ceres: some Juno, other Bellona, other Hecate**: and principally the Aethiopians which dwell in the Orient, **and the Aegyptians which are excellent in all kind of ancient doctrine, and by their proper ceremonies accustome to worship mee, doe call mee Queene Isis.** “ (引用部はここまでとする 一実にもって些細瑣末なことだが、表記引用版が 1639 年の古英語を踏襲しているためか principal が principall であるとか、celestial が celestiall であるとか今日の英語と綴りが違っても見受けられること、一応、誤解を避けるために言及しておく))

上の引用部にてはローマ期の小説の中で驢馬に姿を変えられた主人公の前に女神が顕現したとの段にて、

[Isis 神が自らをして自身が [ペルセポネ] (ローマ名表記で Proserpina プロセルピナ) や [ヘカテ] (Hecate) を含む多くの女神らの [真なる実相] であると宣言している]

との部位となる (引用部よりその部だけ再度、抽出すれば、“ the Cyprians, Venus: the Candians, Diana: the Sicilians Proserpina: the Eleusians, Ceres: some Juno, other Bellona, other Hecate ” (訳)「クレータ島人は、ディクチュンナのディアーナと、三カ国語を話すシクリー人はステュクスのプロセルピナと、古いエレウシースの住民たちはアッティカのケレースと呼びならわしています。ある地方ではユーノー、またの地方ではベローナ、ある所ではヘカテ、またラムヌーシアと呼ばれます」とのところが該

当部となりもする)。

The Golden Ass

Isis ⇄ Persephone

Isis ⇄ Hecate

(Persephone ⇄ Isis ⇄ Hecate)

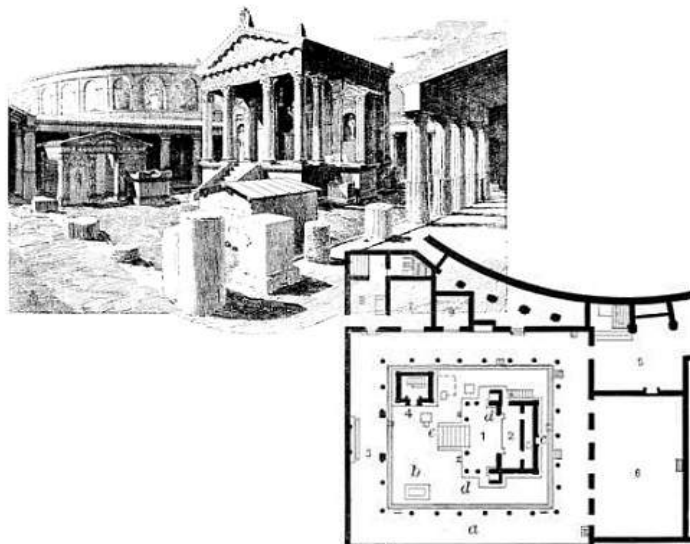
(出典(Source)紹介の部 94(3)はここまでとする)



Aset (Egypt)

→

Ἴσις (Greek) , De Iside (Latin)



エジプトで崇拝されていた女神アセットがギリシャ人によってイシス[Ἴσις]と呼びならわされるに至ったとされる——英文 Wikipedia にはヒエログリフ表記などが付されながら “The name Isis is the Greek version of her name, with a final -s added to the original Egyptian form because of the grammatical requirements of the Greek language (-s often being a marker of the nominative case in ancient Greek).” との解説がなされているようなところとなっている——。そのイシス神がギリシャ領域・エジプト領域を扼するに至ったローマ帝国の領内にて[有力神格]として崇拝されるようになったとの経緯がある（:それにつき本稿の後の段でも [イシスと今日のブラックホール理論開闢史との(存在することが自体が「奇怪無比な」)関係性] の実在問題と「どういわけなのか」関わる(とのことに通ずる指摘がなされている)との著作、イシスをタイトルに含むとの巻数を包含するローマ期のギリシャ人著述家プルタルコスの手になる著名著作 Moralia『倫理問答』にての De Iside et Osiride『イシスとオシリスについて』の巻の内容を取り上げることになる。そのように前もって述べておく)。

上掲図上部にて挙げているのは、そうしたローマの多神教体系に有力神格として取り込まれたイシス、同女神をかたどった彫像として英文 Wikipedia[Isis]項目にて現行掲載されている「ローマ期の」彫像(を撮影した著作権放棄表記伴っての写真)より抽出したものとなる。他面、上掲図下段にて挙げているのは紀元1世紀ヴェスビオ火山の噴火によって一昼夜にして火砕流に呑み込まれた(そしてローマ期習俗・建築物を今日に伝えるタイムカプセルとなった)ポンペイ遺構について解説した前世紀初頭の著作——Project Gutenberg のサイトにて全文閲覧・ダウンロードできる POMPEII ITS LIFE AND ART(1902年刊行版)との著作——にて掲載の[ポンペイ市にあっての今日に遺ったイシス神殿の遺構概要および遺構見取り図]を挙げたもの、火砕流に呑まれてそのまま保持されることになったとの一世紀ローマのイシス崇拝の遺構ありようを示すべくも挙げたものとなる。

さて、イシスがローマ期多神教にあっての有力神となっていたとして、イシス・オシリスの物語がデメテル・ペルセポネの物語と接合していること、先述なしてきたようなことをもってして、

[文化伝播]

の問題として済ませるのは易いことである(ギリシャ人・ローマ人がエジプトの神を自分達の宗教にあっての教義体系に取り込んだからこそ、デメテル神の彷徨の物語とイシス神の彷徨の物語らが似通っているのだと考えるのは実に容易いことである、としてもいい)。

その点、筆者も無論、そうした文化伝播の問題を否定しない。

だが、ここ本稿本段での指し示しの示す方向性は類似性の背面にそうした問題、[文化伝播]の問題が観念されようがされまいが、[ことの本質]に変わりはないものである。極めて悪質な関係性——我々を皆殺しにすると巧妙無比に身内間で意思表示しているが如くやりようを悪質「ではない」と述べなければ、悪質性が否定されがたいような関係性——がそこに存在しているとのことに変わりはないと述べるのである(そうもした申しようが至当適切なるものかは本稿のこれよりの内容を検証すればよく分かるであろう、[生存のための闘いへの勇気を問う](勇気が無い、屠所の羊として殺されていくだけとのその帰結を容れてしまっているとの御仁らには用がない)ものであるとのことはよく分かるはずであると強くも明言しておく)。

以上、ここまでの出典紹介部を通じて、

[イシス] ⇔ [デメテル・ペルセポネ]

との連続性が

「古文献それ自体に認められる文献的事実の問題 —— 容易に確認できる場所として特定古典にこれこれこういう記載がなされているとの事実の問題 —— 」

として表出していることを指摘し、かつ、同じくもの古文献内容が[イシス⇔ヘカテ]との記述とも接合しているとのことを問題となる古文献それそのものよりの引用を通じて部分的に示しめたわけであるが、次いで、

[ペルセポネ] ⇔ [ヘカテ]

の関係性についてよりもって細かくもの典拠を（脇に逸れての説明を直下なした「後」、）取り上げしもすることとする。

多少、非本質的な内容・余事記載を含んでの脇に逸れての説明として

本稿の先の段、**出典(Source)紹介の部 93**では直近そこよりの記述を引いたとのローマ期古典、『黄金の驢馬(ろば)』

が

[イシス密儀]

なるものを作中主要モチーフとしており、そちらイシス密儀と当該古典内それ自体の中で関連付けられているとの

[エレウシス秘儀(ペルセポネとデメテルに対する崇拜の儀式)]

を介して

[フリーメーソンの象徴主義との連続性を呈する]

ような古典「とも」なっていることを解説していたわけだが（端的に振り返れば、**出典(Source)紹介の部 93**にて挙げたフリーメーソンの手になる THE ELEUSINIAN MYSTERIES AND RITES (1919)との著作にあっての“**The Eleusinian Mysteries — those rites of ancient Greece, and later of Rome, of which there is historical evidence dating back to the seventh century before the Christian era — bear a very striking resemblance in many points to the rituals of both Operative and Speculative Freemasonry.**”（訳として）[エレウシス秘儀、古代ギリシャおよび後期ローマのそれら密儀がキリスト教時代より7世紀ほど遡るとの史的根拠を伴うとのそちら秘儀は**実務的フリーメーソンリーおよび思弁的フリーメーソンリー双方の儀式体系に対して多数の点でまさしくもの著しい一致性を帯びているものである**】とのことに通ずるような側面があることを解説していたわけだが）、先だつての部では言及なしで「いなかった」とのレベルで『黄金の驢馬』とメーソン・シンボリズムの間には連続性があるとのこともここ「脇に逸れての部では」指摘しておく。

その点、

[『黄金の驢馬』には[文献的事実]の問題として[盲目の運命の女神]によって驢馬(ろば)に変身する運命を歩むことになった主人公がイシス神の手によって[光]を与えられる]

との描写がなされている(直下**出典(Source)紹介の部 94(4)**にての抜粋表記を参照のこと。いいだろうか。続いて原文引用もなすように[文献的事実]の問題としてそういう描写がなされている)。

イシス密儀およびそれと類似性を呈すると既述のエレウシス秘儀がメーソンの象徴体系・儀式主義と接合を見ているとの申しようが学者、そして、フリーメーソンの内部者ら自身によってなされていることは先に**出典(Source)紹介の部 93**にて引いたわけだが、

[古典それそのものに[盲目の運命の女神]によって苦境に陥った主人公がイシスによっ

て[光]を与えられる]

との描写がなされている時点でメーソンの象徴主義との連続性を——「次のような」観点から——感じさせるとのことがある（こと脇に逸れてこの部で指摘しておく）。

（『黄金の驢馬』にあつての「運命の女神とイシスの帰依者の戦いの表現」がメーソン・シンボリズムと接合する理由として）

「[運命の女神]とは[盲目の存在]であると古典『黄金の驢馬』に記載されているが、その運命の女神、古典にて盲目なる存在として描かれている運命の女神は欧州では[目隠しをした姿]で描写されてきた。そして、目隠しを外して光を与えるとのことを儀式過程に取り組んでいるのがフリーメーソンであるとのことがある。

従って、「秘密主義を徹底する」「死と再生の再現をドクトリンに強くも取り組んでいる」との側面のみならず、古典に認められるところからしてイシス関連の秘教思潮はメーソンのそれと似通ったところを感じさせるものとなっている（そして、そのような要素がある古典で言明されている「イシス神とデメテル・ペルセポネとヘカテの関係」を然るべき理由——後述——あつて重んじて解説しているのが本稿のこの段である）」

出典 (Source) 紹介の部 94(4)

SOURCE 94(4)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典(Source)紹介の部 94(4)にあつては

[ローマ期古典『黄金の驢馬(ろば)』にて[盲目の運命の女神の拘束]から主人公がイシス神に[光を与えられて]啓明の道を見つけ出すとの描写がなされていること]

[フリーメーソンにあつては目隠しされた盲目状態からの光を与えられての啓明が(死と再生と結びつけられながら)重んじられているとのこと]

の典拠らを挙げておくこととする。

(直下、『世界文学体系』(筑摩書房)掲載の呉茂一の訳になるアプレイウス『黄金の驢馬』第11の巻、主人公ルキウスがイシス神の会衆となったことを身内が称揚しているとの段(p.133)よりの引用として)

あの盲目の運命の女神は、意地わるい策をめぐらしてお前をさんざん苦しめているうち、ひよつとしたいたずら心から、思いがけずお前をこのような法悦の世界につれてきてしまった。今こそ、運命の女神よ、このルキウスのもとから去って、どこか他の所に行き、存分、怒り狂うなりと、残忍さを満たす種なりと、かつてに探すがよかろう。なぜというと、われわれの信ずる女神が、御自分に奉仕させようと、その生命をお預りしなされた者どもに対しては、呪わしい災いも、つけ込むすぎがないのだから、そのような人間には、邪悪な運命の女神が、どんなに盗賊や野獣の苦しみを仕向けようと、小石だらけの曲がりくねった道を往復させようと、毎日死の恐怖を与えようと、所詮骨折り損にすぎないだろう。ルキウスよ、お前はもう運命の女神(フォルトゥーナ)——といつても今度は、目の開いた(盲目ではない)、どんな神々をさえ御自身の光でお照らしになる、イーシスの女神のお胸に抱かれたのだ。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※以上、邦訳書より引用なした部に対応するところとして「オンライン上より確認できるところの」英訳版表記も挙げておくこととする。については先と同様に Project Gutenberg のサイト、そこにて公開されている THE GOLDEN ASSE の 1639 年版よりの部分抜粋をなしておくこととする。(以下、古語で読み解きにくいところがあるものながらも引用をなすとして) “ **but howsoever the blindness of fortune tormented thee in divers dangers: so it is, that now unware to her, thou art come to this present felicitie:** let fortune go, and fume with fury in another place, let her finde some other matter to execute her cruelty, for fortune hath no puissance against them which serve and honour our goddess. For what availed the theeves: the beasts savage: thy great servitude: the ill and dangerous waits: the long passages: the feare of death every day? **Know thou, that now thou art safe, and under the protection of her, who by her cleare light doth lighten the other gods:**” (引用部はここまでとする)——)

The Golden Ass protagonist Lucius's inner war

=

Goddess Isis overcame blindfolded Fortuna.

" the blindnes of fortune tormented thee in divers dangers: so it is, that now unwares to her, thou art come to this present felicitie: let fortune go, and fume with fury in another place, let her finde some other matter to execute her cruelty, for fortune hath no puissance against them which serve and honour our goddesse. For what availed the theeves: the beasts savage: thy great servitude: the ill and dangerous waits: the long passages: the feare of death every day? Know thou, that now thou art safe, and under the protection of her, who by her cleare light doth lighten the other gods " —— THE GOLDEN ASSE , THE ELEVENTH BOOKE (1639)

『黄金の驢馬』主人公ルキウスの内面の闘いにおいて[目先不透明感をきたす目隠しされた運命の女神フォルトウナ]が[明朗たる運命の確定をもたらすイシス神]にて放逐されるとのプロセスが当該小説にて描かれる。

以上のように

[イシス神の導きで盲目の運命の女神に振り回されての危難で溢れた人生から盲目ではない、神らの光を与えられての存在へと化さしめられる]

というのが古典『黄金の驢馬(ろば)』に認められるイシス信仰(およびその密儀)のありようであるのに対して

[メーソンは目隠しをなさしめられ、それから光を与えられている]

とのイニシエーションの過程を辿る(ことが筆者のような部外の間にも漏れ伝わっているところとして知られている)。

出典としてメーソン自身によって著された書籍、Robert Lomas ロバート・ロマスおよび Christpher Knight クリストファー・ナイトという二名のメーソンの手になる書籍、THE HIRAM KEY(先だっても同著のことを取り上げ、主たる主張内容、その信憑性に疑義が投げかけられている[信用のおけぬ出典]unreliable sourceとして有名な書籍としてのありようについて言及したとの著作だが、Freemason の Spokesman 的な者達が生きている書籍だけあってフリーメーソンの儀式に対する言及の箇所は事実上依拠してのものと見受けられる書籍)の国内にて流通している訳書『封印のイエス』——[陰謀「論」関連本]や[トンデモ雑誌]をよく出すことでも知られる出版社である学習研究を国内にての版元としているとの著作——にての21ページから24ページよりの[掻い摘まんでの引用]をなしておくこととしておく。

(直下、ヒラム・キーの訳書、『封印のイエス』にての21ページより24ページよりの掻い摘まんでの引用掻い摘まんでの引用部として)

「いよいよ入団の儀礼。…(中略)…目隠しをされ、緩やかな白衣を着せられた。片足には簡素な上靴。左脚は膝まで露出させられ …(中略)… 首の周りには絞首刑の綱が巻かれ、背中に垂れ下がっていた。 …(中略)… すべての金属製のものを体から外させられ、 …(中略)… フリーメーソンの「テンプル」に入る準備が整った …(中略。一挙に24ページまでとぼす)… こうして目隠しが取り除かれた。 …(中略)… 前にいるワーシップフル・マスターは

…(中略)… メーソンリーの「光」の象徴に向けた。 …(中略)… そして、
…(中略)… 「エンタード・アプレンティス(徒弟)」という位階に受け入れられた、と告げた」

(引用部はここまでとする)。

以上引用したことについてはオンライン上に PDF 版が流通している(オンライン上より全文確認できる)との前世紀にてのメーソン儀式体系要覧書籍、

Duncan's Masonic Ritual and Monitor (1866)

にあつて見受けられるとの、

“ **The Deacon here ties a hoodwink, or hand-kerchief, over both eyes.** (In the time of Morgan, it was the usage to cover only one eye.) **The Junior Deacon then ties a rope, by Masons called a cable-tow,** twice around his arm. **(Formerly, the rope was put twice round the candidate's neck.)** Some Lodges follow the old custom now, but this is rather a rare thing. The reader will, however, do well to recollect these hints, as they are particular points. The right foot and knee of the candidate are made bare by rolling up the drawers, and a slipper should be put on his left foot. This being accomplished, **the candidate is duly and truly prepared.** [. . .] At this point the conductor unties the hoodwink, and **lets it fall from the candidate's eyes.** The Master then gives one rap on the altar with his gavel, when all the brethren but himself and the conductor (S. D.) take their seats. The Master then says to the candidate: / W. M.--My brother, **on being brought to light in this Degree,** you behold one point of the compasses elevated above the square (see altar and compasses in this Degree, p. 58), which is to signify that you have received light in Masonry by points. ”

と記載されている箇所が全く同じくものを扱った部となる。

(尚、Duncan's Masonic Ritual and Monitor(1866)にて掲載されている [イニシエーションに際して目隠しされた絞首刑囚の格好をしているメーソンの似姿] を描き取ったイラストレーションも続いての段にて抜粋しておく ——それと同じくものありようを写し撮った[写真]がメーソンの手になる書籍 THE HIRAM KEY (邦題)『封印のイエス』の 25 ページにても掲載されている(がゆえに疑わしきは表記著作の訳書を借りるなり何なりしてその部を確認いただきたい)——)。

以上、すぐ下の段にあつてありよう図版を呈示してのやりようにも認められるようにメーソンは徒弟位階に入る過程で

[首に縄を付けられて目隠しをなされての格好]

をさせられ、目隠しを外されて「光を与えられる」との流れでイニシエーションを受けるのである ——※巷間、多く嘘ばかりの陰謀論者らが二重話法込みで[イルミナティ](啓蒙された者達、光を与えられた者達)という言葉を使う背景にはそういうこと「も」強くも影響していると解されるようになっていると「私的には考えている」「私的に考えている」とのことでさらに述べれば、そうした儀式に字義通りの神秘性を求めるのはただの愚人ないし魂無き存在のやりよう、[脳に(重力波でか何かでか)結線された人工知能のようなものの領域]のさらなるコントロールの下に傀儡(くぐつ)を置くことの確認行為をして[ラザロ(一度死んで蘇ったなどとされるキリスト教の聖人)の復活]に仮託する並みにナンセンスなる視点であると私的には考えている)——)。

(出典(Source)紹介の部 94(4)はここまでとする)

(脇に逸れての部の表記を続けるとして)

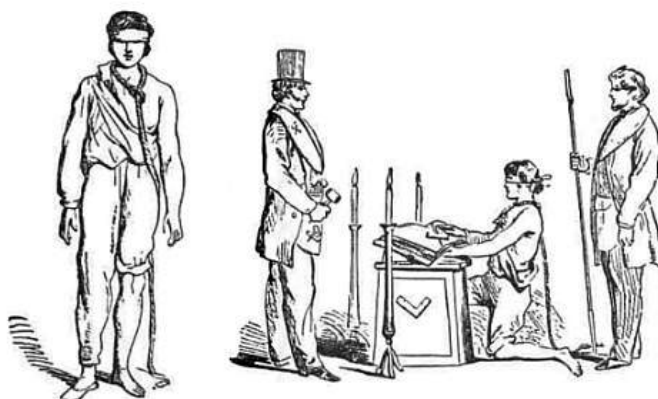
先だって原文引用にて示しているように古典 The Golden Ass『黄金の驢馬』は「盲目なる運命の女神の気まぐれに曝されての状況」から「イシスの恩寵を受けた者達」が「盲目ではない」「光が射し込む」との「確定された運命の状況」に「導かれての」状況に至ることを描いた作品となっている。対して、「秘密主義を徹底している(とされる)」「秘儀参入者には死の制裁にまつわる誓約を(額面だけのものなどとは世間一般にはされるが)容れることを強要する」とのメーソンの儀礼体系に関しては「エレウシス秘儀・イシス密儀にまつわる崇拜思潮との共通性にまつわる指摘」が存在している。これを「偶然」であると述べられるか。本稿筆者はそうは思っていない。

といった話は脇に逸れての話、そして、属人的観点の問題が強くも介在しているところとなり、本稿主題からは多くずれることとはなるが、そこには

[運命の悪戯(目隠された盲目の運命の女神に表象されてのもの)から他によって確定された「因果律」(チューリングテストに受かるような人工智能に完全に舗装されての流れかもしれない)を押しつけられての状況に移行「させられた」者達にまつわる寓意]

が込められていると筆者は考えており、敢えてもそのことをここにて問題視した(:本稿の後の段でもその属性について(必要性を感じて)入念に論じることとするのだが、この忌まわしき世界で普通人「以上に」[チェス盤上の駒]とされ、「フリー」という団体名に接頭語が付されているのも性質の悪いブラックユーモアの発露としか思えぬような組織 —マス・ゲームを「自由意思なき者達」(人間であることを「辞めた」機械のような者達)を用いて実施させるような組織—にて「運命を自身で「決められない」状況に追い込まれた者達」の寓意がそこにあると手前は考えている)。

(in one account)
blindfolded Fortuna + Nemesis with Sword
= Lady Justice (= "not" blindfolded Themis)



Far-fetched?

上掲図上部にて抜粋のイラストは[よく知られたシェリーフェンプランの完遂によってイギリス・フランス・ロシアら連合軍に勝てるとの目算を立てていた第一次世界大戦期のドイツにての戦意高揚のためのポスター]([目隠しをした正義の女神が第一次大戦期の独逸軍の勝利を約束するように英国ユニオンジャックが秤量なして軽いことを示しており、独逸語で DES KRIEGS JAHRES、すなわち、[戦争の年]と記されているポスター])となり、Project Gutenberg サイトにてその全文を閲覧できるとの War Posters Issued by Belligerent and Neutral Nations 1914-1919 との文書(1920年初出)より抜粋したものとなる(呈示のポスターが用いられたのは1917年と明示されている)。

他方、上掲図下部の図らは Duncan's Masonic Ritual and Monitor (1866) との著作—19世紀後半にもなされたメソンの象徴・儀式体系要覧書—より抜粋したフリーメソンの入門徒弟位階への希望者(フリーメソン入団希望者)が最初にそうしたイニシエーションの過程を経ることを強いられるところの伝統的プロセス、[目隠しをさせられた死刑囚の格好]をさせられ、それより目隠しを外されるとのプロセスを描いた図となる。

さて、目隠しされ剣を掲げる正義の女神、いわゆるレディー・ジャスティスのモデルに関しては

[目隠しをされた運命の女神フォルトゥナおよび剣を持った復讐の女神ネメシスらを含む複数の女神らの混交型]

であるとの説がある(：例えば、英文 Wikipedia [Lady Justice] 項目程度のものの「現行の」記述にも “ Her modern iconography frequently adorns courthouses and courtrooms, and conflates the attributes of several goddesses who embodied Right Rule for Greeks and Romans, blending Roman blindfolded Fortuna (fate) with Hellenistic Greek Tyche (luck), and sword-carrying Nemesis (vengeance). ” 「彼女、正義の女神の近代にての象徴物はしばしば裁判所・法廷らを飾っているとのものであり、そのありようの元となったところはギリシャ及びローマの正しき規範を体現しての女神ら、そして、ローマの目隠しなされての神フォルトゥナ(運命)、ヘレニズム期ギリシャの神ティケ(幸運)および剣を持ったネメシス(復讐)ら複数女神が融合してのところである」との申しようが見受けられる)。

その点、[法廷の女神]が[運命の女神]からも影響を受けているとされる理由としてはローマの正義の女神ティケ、ギリシャの同文同様の正義の女神テミスの類らが目隠しをされて「いなければ」、彼女らは今日知られる[正義の女神]よろしくもの秤も持っていなかったとのことが挙げられ、また、そも、法による紛争の解決が目隠しを伴ってのもの、[外貌に惑わされるが如く情理に流されてはならぬもの]たらねばならないとの観点が生まれたのは近世・近代以後であり、それまでは[神明裁判]・[決闘裁判]の類が大手を振って行われていたとのことも挙げられたりしている(ブラインドフォールデッド、目隠しをされた存在が裁判と結びつけられた論理は往古からあったものではないと指摘される—そこを目隠しをして規定の帰結、道理すら見えぬとの[人形]に世の趨勢を左右する重要などころではお定まりの醜悪なる帰結を押しつけるとのやりようが徹底化されてきた、たとえば、ソ連での大粛清時裁判やナチスでの人民法廷のようなルール・オブ・ローとは無縁なる、そう、[人の支配]を[公平度が高い法の支配]に置換するとの建て前上の理念とは無縁なる式で大量の人間を字義通り罵倒しながら殺していったとの[裁判]が具現化していたのが腐りきった偽りの世界(魂の抜けた傀儡くぐつのようなもので溢れかえった歴史の上に構築された偽りの世界)であると手前などは見ているわけだが、何も識らぬは幸いかとの者にはそうした視点の押しつけはなさない—)。

さて、現在の正義の女神の似姿にも影響を与えていると世間的に評されるところの「目隠しされての運命の女神については目隠しされた彼女の影響力が[イシス神]の恩寵によって惑える主人公の中から払拭される、そして、驢馬(ろば)に換えられもし

た男が啓明を得ることになるという粗筋が(イシス秘儀とエレウシス秘儀の類似性について示唆する記述を含むとの)ローマ期古典 The Golden Ass『黄金の驢馬(ろば)』に見受けられるとのことがある。

以上と話が通ずるところとして

[『黄金の驢馬』にてそれらありようも重要なモチーフとされている)イシス秘儀・エレウシス秘儀、それら秘儀体系との類似性・史的連続性を有していると有識者および他ならぬインサイダーに指摘されているとのフリーメーソンがその入団者に首に縄を巻かれての死刑囚の扮装をなさせたうえで目隠しをさせ、それを取り払って光(イルミネーション)を与えるとの形態の参入儀礼形態を有している]

とのことが着目に値するところとなっている。

そうした analogy(一致性)の問題を[偶然の一致の問題]として済ませてよいものであろうか。

筆者個人はといったことがあることからしておよそ[偶然]とは見ていない。

『運命どころか法の惑わざるの適用さえもが[人情どころかそれがなければ困るとの道理もないとのプログラム押しつけ力学]によって決められている節もある紛い物だらけの醜悪にして滑稽なるこの世界にて[世界]をそのようなものになさしめている[主力としてのエンジン]、そう、[運命の悪戯(人為ならざるどころ)から解放されて[偶然]に代えての[必然]の支配を受けることになった者達]が[チェス盤上の駒]のように操作されての[確定した運命]を押しつけられていることを「あてこすっての」(上位存在が愚弄しきっての)性質悪い寓意の体現そのものではないか』

と——ここでの話に関してだけは行き過ぎた側面があること、否定することはなさないが——「私的には」見ているわけである。

長くもなつての脇に逸れての話はここまでとする

(脇に逸れての記述から本題へと立ち戻りもして)

さて、先に挙げた出典(Source)紹介の部 94(3)をして

「ローマ期古典の中で「文献的事実」の問題としてイシスが[ペルセポネ]にして[ヘカテ]であるとされている」

とのことを紹介したわけだが、

[(イシスという中間項を介さずとも)ペルセポネがヘカテと同一視される存在である]

ということをこれ以降、問題視することとする。

それにつき前提としてヘカテがどういう存在か以下に解説することからはじめる。

出典(Source)紹介の部 94(5)

SOURCE

94(5)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典 (Source) 紹介の部 94(5) にあつては、

[ヘカテ(という女神)はそも、いかようなる存在なのかとのことについての世間的説明のなされよう]

について目につくところの記述を「とっかかりとして」紹介することとする。

さて、ヘカテがどういう存在かだが、同ヘカテ、

[三つの面を持った冥界の番人たる女神]
[魔術信仰の本尊としての魔女らの神としての性質を帯びた女神]
[日本の道祖神のように辻々を守護する女神]

として一般によく知られている。

については(通用度から誤謬が介在しにくい基本的なところであるうえ、実際に誤謬が認められないと判断し) 英文 Wikipedia [Hecate] 項目程度のものから同女神の特性紹介部の記述を引くとのことをなしておく。

(直下、即時に確認できるところの現行の英文 Wikipedia [Hecate] 項目より引くとして)

Hecate or Hekate was a goddess in Greek religion and mythology, most often

shown holding two torches or a key and **in later periods depicted in triple form**. She was variously associated with crossroads, entrance-ways, dogs, light, the Moon, magic, witchcraft, knowledge of herbs and poisonous plants, necromancy, and sorcery.

[. . .]

In the Homeric Hymn to Demeter, Hecate is called the "tender-hearted", a euphemism perhaps intended to emphasize her concern with the disappearance of Persephone, when she assisted Demeter with her search for Persephone following her abduction by Hades, suggesting that Demeter should speak to the god of the sun, Helios. **Subsequently she became Persephone's companion on her yearly journey to and from the realms of Hades. Because of this association, Hecate was one of the chief goddesses of the Eleusinian Mysteries, alongside Demeter and Persephone.**

[. . .]

It has been claimed that her association with dogs is suggestive of her connection with birth, for the dog was sacred to Eileithyia, Genetyllis, and other birth goddesses. Although **in later times Hecate's dog came to be thought of as a manifestation of restless souls or demons who accompanied her**, its docile appearance and its accompaniment of a Hecate who looks completely friendly in many pieces of ancient art suggests that its original signification was positive and thus likelier to have arisen from the dog's connection with birth than the dog's underworld associations. The association with dogs, particularly female dogs, could be explained by a metamorphosis myth. The friendly looking female dog accompanying Hecate was originally the Trojan Queen Hekabe, who leapt into the sea after the fall of Troy and was transformed by Hecate into her familiar.

(拙訳として)

「ヘカテないしヘケイトはギリシャにての信仰・神話上の女神であり、最もしばしば見られるところとして、二つの松明ないし鍵を掲げ、**後の時代にては三つ(の身体を持った)存在として描写されている**。彼女は様々な側面から十字路・入り口となる道・犬・月・魔術・薬草および毒性植物の知識・降霊術・魔術と関連づけられている。

…(中略)…

『ホメロス讃歌』にてのデメテルに言及しての段ではヘカテは[情け深き者]と呼ばれており、それはおそらくデメテルがハデスによる娘ペルセポネの略取の後、ペルセポネを探していたのをヘカテが援助、デメテルに太陽の神ヘリオスに相談持ちかけるべきであるとの提案をなしたとのことに見られもするペルセポネ消失にあつてのヘカテのいたわりを強調するための婉曲表現であろう。**続いてヘカテはペルセポネの1年を通じた旅、冥界からはじまり冥界に向かうとの旅の同道者となった。この協力のため、ヘカテはデメテルおよびペルセポネの脇にてエレウシス秘儀で祀られる主たる神格の一柱となっている**(注:ちなみにヘカテがデメテル・ペルセポネと並んでエレウシス秘儀の主要崇拝対象となっているとの点について英文 Wikipedia では出典として Charles M. Edwards との学者が米国にての 1986 年の考古学誌 (the American Journal of Archaeology, Vol. 90, No. 3) に寄稿しているとの記事、The Running Maiden from Eleusis and the Early Classical Image of Hecate 『エレウシスにての逃げ去る乙女、そして、初期古典期にてのヘカテ像』との記事が 一実にもって微に入っているところとして 一 挙げられている)。

…(中略)…

彼女ヘカテと犬らとの関係は彼女の [出産] との関係性を示唆するものである。というのも犬はエイレイテュイア、ジェネテュリス、そして、他の[出産]の神々に

対する神性なる存在であるからである。後の時代にて「ヘカテの犬」は彼女に同道する休息を得られぬとの死者ら魂あるいは悪霊らを表象するものであると考えられるようになったわけだが、古代美術のいくつもの断片に認められるそのおとなしめな外見およびまったくもって好意的に見えるヘカテへの同道ありよりその原初的意味合いはポジティブなものであり、犬の地下世界(死者の世界)との関係性というより出産と犬との関係性より生じたものであるとの提言がなされるところでもある。ヘカテの犬との関係性、殊に雌の犬との関係性は[変容神話]にて説明なされうるものである。ヘカテに付き添っての親しそうに見える雌の犬は原初的にはトロイアの女王ヘカベ、トロイア陥落の後、海上へと跳躍なさせられ、ヘカテによって眷属、使い魔(の類)に変身させられたというのである(以下略)

(訳を付しての引用部はここまでしておく)



上の写真・スケッチは双方ともに英文 Wikipedia[Hecate]項目に掲載されているとのもので上掲図左はローマ期のヘカテ彫像 —— 現行、プリマポルタのアウグストゥス像の収蔵でも有名なバチカン美術館に収蔵されているとのもの—— を写した写真となり、ヘカテが「三面の存在」であるとのことがはきと見てとれるとのものとなる(ただし、同彫像に見るヘカテは身体の一部が繋がって産まれてきたシャム双性児のように背骨が繋がった三対の女神といった格好を呈しているとのものともなり(それはよくそういう描かれ方をするヘカテ似姿である)、三面に一对の胴体との彫像形態をとってはいない)。上掲図右は18世紀英国の肖像画家(Richard Coswayという肖像画家)の手になるヘカテ像となり、三対の女神が融合してヘカテとの存在が成立しているとの似姿が描かれているとのものとなる。

(出典(Source)紹介の部 94(5)はここまでとする)

ヘカテがいかな存在であるかの基本的なところからの流布された解説を上を引いたうえで

[女神ペルセポネが女神ヘカテと同一視「されている」]

とのことの論拠を挙げる。

出典 (Source) 紹介の部 94(6)

SOURCE 94(6)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典 (Source) 紹介の部 94(6) にあつては、

[[イシス] との中間項を介さずとも [ヘカテ] と [デメテル] [ペルセポネ] らには接続性が存在するとのことの指摘が存在する]

とのことについての解説をなす。

まずはここに至るまでその内容を何回か問題視したとの人類学(さらに述べれば比較神話学)分野の大著として知られるフレイザー『金枝篇』よりの抜粋をなすこととする。より具体的には、

The Golden Bough Studies in the History of Oriental Religion Part IV: Adonis Attis Osiris. Vol. 1 of 2 (『金枝篇』第4章(の1)[アドニス・アッティス・オシリス]1911年版)

からの抜粋をなすこととする (：抜粋部元の表記の版の『金枝篇』の同じくもの巻の全文テキストは

Project Gutenberg のサイトから確認いただけるようになっている。ゆえに、[文献的事実]の問題、そのような申しようが象牙の塔の住人によって書きとどめられてきたとの事実の後追いも誰にでも容易になせる(本稿では意図的にそうした確認可能なる媒体を選択して出典として挙げている)。につき、Project Gutenberg の表記著作紹介ページ(検索エンジンで The Golden Bough Studies in the History of Oriental Religion Part IV との著書題名と Project Gutenberg との文字列を入力すれば行き着けるであろうとの著作紹介ページ)を開いて、表記のテキストの一致部をブラウザ(インターネットエクスプローラーのようなインターネット閲覧ソフト)の検索機能を Ctrl キーと F キーを同時押しすることでオンにしての精査をなせば、そう、チェックボックスに引用テキストの一部を入力すれば、長大な文書の中から該当部を労せず特定できる、それによって即時即座の確認がなせるようになっていると申し述べておく——また、より手間のかからぬ確認方法としてはある程度の文量を引用部テキストから引き直して、ダブルクォテーション(“)で括弧の[完全一致検索]をグーグル検索エンジン(タブーに関わら「ない」ところではキーワードによる外注が用いられてのセンサーシップ、非表示化処理はそうそうには現われないと見える検索エンジン)でなし、表示されてきたページを閲覧するとのやりようもあると申し述べておく——)。

(直下、The Golden Bough Studies in the History of Oriental Religion Part IV: Adonis Attis Osiris. Vol. 1 of 2 のうちの § 8. Cilician Goddesses. [キリキア地方(キリキアは現トルコ南部の地中海に面した地域を指す)の女神達]の節よりの抜粋をなすとして)

We may suspect that in like manner the Sarpedonian Artemis, who had a sanctuary in South-Eastern Cilicia, near the Syrian border, was really a native goddess parading in borrowed plumes. She gave oracular responses by the mouth of inspired men, or more probably of women, who in their moments of divine ecstasy may have been deemed incarnations of her divinity. Another even more transparently Asiatic goddess was Perasia, or Artemis Perasia, who was worshipped at Hieropolis-Castabala in Eastern Cilicia. The extensive ruins of the ancient city, now known as Bodrum, cover the slope of a hill about three-quarters of a mile to the north of the river Pyramus.

[...]

Only the wandering herdsmen encamp near the deserted city in winter and spring. The neighbourhood is treeless; yet in May magnificent fields of wheat and barley gladden the eye, and in the valleys the clover grows as high as the horses' knees. The ambiguous nature of the goddess who presided over this City of the Sanctuary (Hieropolis) was confessed by a puzzled worshipper, a physician named Lucius Minius Claudianus, who confided his doubts to the deity herself in some very indifferent Greek verses. **He wisely left it to the goddess to say whether she was Artemis, or the Moon, or Hecate, or Aphrodite, or Demeter. All that we know about her is that her true name was Perasia, and that she was in the enjoyment of certain revenues.**

(訳として)

「我々(注:ジェイムズ・フレイザーを含む大学研究者ら)は往時、シリアとの境界部境界の南東キリキアにて聖域を持っていたサルペードーンのアルテミスという女神は本当のところ、

[他から借り物の羽毛を纏ったうえで存在誇示しているとの土着の女神]なのではないかとの疑いを持っていた。

(往古、)[神聖なる恍惚の瞬間]が同女神(サルペードーンのアルテミス)の神性の顕現になっていると見たとの筋目の啓示を受けての男らの口を通じ、あるいは、女らの口を通じて同女神は託宣をなしていた。

他のもっとも浸透を呈していたとのアジア(トルコ境界)の女神は[ペラシア]という女神、[アルテミス・ペラシア]となり、彼女は東部キリキア地方にてのヒエロ

ポリス・カstabalaにて崇拝を受けていた。(その Castabala 界限、)ピュラモス川の北方よりおよそ4分の3マイルの丘陵部斜面を覆う格好で現在、ボドロウムとして知られる古代都市の広大な遺構が存在している。

…(中略)…

いまや流浪の牧夫らだけが春および秋にて放棄されたその都市(の遺構)に野営している。近傍には樹木とてなく、だが、五月には大麦および小麦が広大な野を覆って眼福を施し、峡谷にてはクローバーが馬の膝の部に達するまで成長する。その聖域ヒエロポリスとしての(遺構と化した)都市を統べていた女神の[曖昧多義的な性質]については困惑を呈していた崇拝者の一人、ルキウス・ミニウス・クラウディアヌスという医者 ―神たる女神自体に対するものとして幾分無関心さ呈したギリシャ語の詩歌にて疑義示しているとの人物― によって打ち明けられている。同人物は賢明にも女神につき[彼女はアルテミスなのか、月(の女神)、あるいは、ヘカテ、あるいはアフロディテあるいはデメテルなのか]との言を残しているのである」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく ―※―)

(※尚、表記引用部にあつての(再度、分けもして抽出するところとしての)
“ The ambiguous nature of the goddess who presided over this City of the Sanctuary (Hieropolis) was confessed by a puzzled worshipper, a physician named Lucius Minius Claudianus, who confided his doubts to the deity herself in some very indifferent Greek verses. He wisely left it to the goddess to say whether she was Artemis, or the Moon, or Hecate, or Aphrodite, or Demeter. All that we know about her is that her true name was Perasia, and that she was in the enjoyment of certain revenues .” 「その聖域ヒエロポリスとしての(遺構と化した)都市を統べていた女神の[曖昧多義的な性質]については困惑を呈していた崇拝者の一人、ルキウス・ミニウス・クラウディアヌスという医者 ―神たる女神自体に対するものとして幾分無関心さ呈したギリシャ語の詩歌にて疑義示しているとの人物― によって打ち明けられている。同人物は賢明にも女神につき[彼女はアルテミスなのか、月(の女神)、あるいは、ヘカテ、あるいはアフロディテあるいはデメテルなのか]との言を残しているのである」(分けてもこの引用部はここまでとする)との部については著者フレイザーによって、注記番号 491、492 と振られ、E. L. Hicks, “Inscriptions from Eastern Cilicia,” Journal of Hellenic Studies, xi. (1890) pp. 251-253 との出典が挙げられている)

直近にて古代人の弁として 20 世紀に名を馳せた権威 (『金枝篇』著者ジェームズ・フレイザー) によって紹介されていること、それは、

「 [アルテミス] あるいは [ヘカテ] あるいは [アフロディテ] あるいは [デメテル] らの別個独立の女神らがある、同一の女神の別相なのではないかとの認識が、(ローマ期に勢威を誇った女神にまつわるローマ期往時の人間に由来する遺物に見る書かれようを介して指摘されるところとして)、昔からあった」

ということである。

につき、本稿本段にあつては上の引用部にあつての、

[[ヘカテ] と [デメテル] を同一視するような視点があった]

との部を重んじている。

そも、直近引用元文書(『金枝篇』)にて古人に[ヘカテ]と同質視されるようなことがあったとのことが『金枝篇』著者たるフレイザーによって述べられている[デメテル]についてはその娘[ペルセポネ]と本来的に一体なる存在であると見られるとのことがある存在でもある(出典(Source)紹介の部 94)。それがゆえに、[デメテル]と[ヘカテ]が同質の存在と見られていたことは[ペルセポネ]と[ヘカテ]の一致性問題に意識を向けさせるようなものであるとのことに話が通ずる(※)。

(※ [ペルセポネ][デメテル]の母子に対する崇拝様式(エレウシス秘儀)がエジプトよりグレコ・ローマンの領域(古代ギリシャ・ローマ文明圏)へ伝来し崇拝されていたとの女神[イシス]に対する秘教崇拝様式と多重的に結びつき、そこにいう[イシス]が[ペルセポネ]および[ヘカテ]と結びつく存在であるとの記述がローマ期特定古典『黄金の驢馬(ろば)』に認められるとのことから[イシス]を媒介項に多くが結びつくことを問題視してきたのが本稿ここまでの内容ともなる——下にての振り返っての図を参照のこと——。対して、ここでは[イシス]という媒介項を介さぬ方向で[ヘカテ]と[ペルセポネ]の同質性・連続性が指摘出来るようになっていることを呈示することに重きを置いている)

さらに加えて【[ペルセポネ]と[ヘカテ]の連続性】に注意が向けられているとの文献的記録の紹介をなす。

メジャーどころとして一世紀以上にわたって米国人の神話理解のための標準書となっていたとされるトマス・ブルフィンチ(日本でもその騎士道ロマンスにまつわる書籍などが岩波書店なぞから翻訳、刊行されているとの19世紀米国の代表的文人)の手になる書、

THE AGE OF FABLE (『神話の時代』)とでも訳すべき同著もまた **Project Gutenberg** 経緯で全文確認可能なものとなる——プロジェクト・グーテンベルクのサイトにて頒布の同著、ここにて引用をなす版については **Revised by Rev. E. E. Hale** と改定訳付しての向きの名前が付されている版となる——)

の内容をここでは引用なすこととする。

(直下、THE AGE OF FABLEにての MEDEA AND AESON、[メディアとアイソン]の節——(金羊毛皮を巡るイアソンの冒険譚を描く古典『アルゴナウティカ』に対する言及部)——
よりの抜粋をなすとして)

Amid the rejoicings for the recovery of the golden Fleece, Jason felt that one thing was wanting, the presence of AESON, his father, who was prevented by his age and infirmities from taking part in them. Jason said to Medea, "My wife, I would that your arts, whose power I have seen so mighty for my aid, could do me one further service, and take some years from my life to add them to my father's." Medea replied, "Not at such a cost shall it be done, but if my art avails me, his life shall be lengthened without abridging yours." The next full moon she issued forth alone, while all creatures slept; not a breath stirred the foliage, and all was still. To the stars she addressed her incantations, and to the moon; to **Hecate (Hecate was a mysterious divinity sometimes identified with Diana and sometimes with Proserpine)**. As Diana represents the moonlight splendor of night, so Hecate represents its darkness and terrors. She was the goddess of sorcery and witchcraft, and was believed to wander by night along the earth, seen only by the dogs whose barking told her approach.), the goddess of the underworld, and to Tellus, the goddess of the earth, by whose power plants potent for enchantments are produced.

(拙訳として)

「金羊毛皮の取り戻しにてもたらされた歓喜の中、イアソンは(にも関わらず)ひとつ欠けているところがあると感じており、それは老齢と衰えのために彼ら一行の冒険にて参加できなかったとの彼の父アイソン (注:イアソンの父のアイソンについては伝承によってはイアソンが金羊毛皮探索に出る前、幼少のみぎりに世を去っているとのバージョンもある) のことであった。イアソンはメディアに言った。「我が妻よ。私は我に助力するうえであまりにも強力であるとのなんじの術の力を見ているわけだが、あとひとつ頼みたいところとして私のそれから命を取って、我が父のそれにその命を(付け加えて) 与えてくれないものであろうか」。メディアがそれに応えて言うには「そのような代償はなくとも、もし私の術があなたに及ぶのならば、あなたのそれを犠牲になさらずとも父君の命は長らえられましょう」。次の満月の晩、すべての生き物が寝入っている間、息が葉っぱを揺らすこともなく、すべてが静寂に包まれていた折、彼女は一人でことを起こした。星々に向け、そして、月に向けて彼女は魔法の言葉を発し、そして、**ヘカテ** ——**ヘカテはしばしば月神ディアナあるいはプロセルピナと同一視される神秘的な神格である**。ディアナとして夜にて壮麗さを呈する月光を体現するようにヘカテは夜にての暗黒および恐怖をも体現する。彼女ヘカテは魔術・妖術の女神であり、地にての夜の領域にて彷徨し、彼女の接近を告げるものたる犬の吠え声にてのみその存在が知れるとの存在である—— および地下世界の女神、そして、テールス、魔術に供される潜在力を有した力ある植物らを産生するところの大地の女神に向けて呪文の言葉を発したのである」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

上にて抜粋なししているとのトマス・ブルフィンチの神話・伝承解説部には筆者が和訳版を読了、英文近代訳版にも部分的に接しているとのイアソン(英文表記ジェイソン)の冒険譚たる『アルゴナウティカ』に含まれて「いない」パートが見て取れるため、文人ブルフィンチの脚色(embroidery)の類があるのではないかととれるのだが、そうしたことを差し引いても述べられることは

「ペルセポネとヘカテが同一視される存在であるとの見立てがある程度、よく知られたものとして ——見立ての中身の問題は取りあえずも置き—— 存在している(原文では“**Hecate was a mysterious divinity sometimes identified with Diana and sometimes with Proserpine**”)」

とのことである (:そも、ローマ期古典『黄金の驢馬(ろば)』よりの先にての引用部、**出典(Source)紹介の部 94(3)**からしてペルセポネがヘカテよろしくの三面構造をとるとの描写がなされているとのことを先に示しているわけであるから(先に抜粋しているようにイシスが自らをヘカテにしてペルセポネであると述べている部などを含む古典たる The Golden Ass の一九一五年に訳出された版にて “or whether Thou be called terrible Proserpine, by reason of the deadly bowlings which Thou yieldest, that hast power with triple face to stop and put away the invasion of hags and ghosts which appear unto men, and to keep them down in the closures of the Earth, which dost wander in sundry groves and art worshipped in divers manners” 「あなたさまはまた夜の吼えに恐ろしいプロセルピナと呼ばれ、三種の顔をもち、悪霊どもの攻撃をおし鎮め、彼らを地下の牢獄に封じ込めて、聖なる森を彷徨し給うては、種々な儀式で祭をうけておいでです」と記載されている)、そして、エレウシス秘儀でデメテルおよびペルセポネと共にヘカテが崇められているとされる ——先立つて**出典(Source)紹介の部 94(5)**にて英文 Wikipedia[Hecate]項目より “Subsequently she became Persephone's companion on her yearly journey to and from the realms of Hades. Because of this association, Hecate was one of the chief goddesses of the Eleusinian Mysteries, alongside Demeter and Persephone.” 「ヘカテはペルセポネの1年を通じての旅、冥界からはじまり冥界に向かうとの旅の同道者となった。この協力のため、ヘカテはデメテルおよび

びペルセポネの側にてエレウシス秘儀で祀られる主たる神格の一柱となっている」(引用部はここまでとする)との記述を引いているようなことがある—— のだから、表記のようなブルフィンチの見立ての元となった視点があるのも当然のことか、と思う)。

(出典(Source)紹介の部 94(6)はここまでとする)

以上でもって文献的事実にひたすらに依拠しての話 一実にもって忌まわしい、そう、真実を破壊し、言論の土壌を汚染するとの式で実にもって忌まわしいとの神秘主義者(あるいはその係累の陰謀論者)といった質的に狂った(あるいは狂った振りをして世を渡っている)人間の話柄とは一線を画しての式をとっての話— として、

(「同一存在であると見立てられもしている(先述)とのデメテル・ペルセポネは古文献それ自体のレベルで女神イシスと結びつく存在であるとの言及がなされている」とのことに加えて)

「デメテル・ペルセポネ両者については(イシスという中間項を介さずとも)ヘカテという女神と結びつく(との申しようが「複合的に」なせるようになっている)」

とのことの指し示しをなした(下にての整理がてらもの図の内容を確認されたい)。


α [Demeter = Persephone] (?)

"Demeter would thus be the ripe corn of this year; Proserpine the seed-corn taken from it and sown in autumn, to reappear in spring. The descent of Proserpine into the lower world would thus be a mythical expression for the sowing of the seed; her reappearance in spring would express the sprouting of the young corn. Thus the Proserpine of this year becomes the Demeter of the next, and this may very well have been the original form of the myth. "

———— The Golden Bough In Two Volumes.Vol. I. (1894)
§8.— Demeter and Proserpine

本稿 [出典(Source)紹介の部94] にて呈示のようにデメテルとペルセポネの母子は
[穀物の成長の異なるフェーズの体現存在として本来の意味での同一物(イコールの関係にある存在)]
であるとの指摘が学者より「ひとつの説明ありようとして」(in one account) なされてきたとの存在らである。

β [Demeter — Persephone]
[Isis — Osiris]





本稿 [出典(Source)紹介の部92] にて呈示のように [デメテルとペルセポネの関係を基軸に据えてのエレウシス秘儀] は [イシスとオシリスの関係にまつわる神話] と際立っての相似形を呈するものである。

γ [Hecate = Isis = Persephone]

本稿 [出典(Source)紹介の部94(3)] にて呈示のようにローマ期古典『黄金の驢馬(ろば)』にあってはイシスがヘカテやペルセポネと同一物であると言及が古典それぞれの中にて [文献的事実] (philological truth) の問題として見受けられるとことがある。

δ [Demeter ⇔ Hecate] [Persephone ⇔ Hecate]

直前までの本稿 [出典(Source)紹介の部94(6)] にて呈示のように古代にての遺物に見る証言や近代著名文人の物言いにあっては [女神デメテル] やその娘 [ペルセポネ] ちと [ヘカテ] との同一性に言及しているとの下りが存在している (:ここではといった下りの厳密なる意味での黒白よりも [そうした物言いが蒼古としたものとして存在している] ことそれ自体、および、その背景を問題視している)

上記のα(アルファ)からδ(デルタ)のことが各々別個の分立しての論拠から導出できるようになっていること、そのことから示される多重性が関係性色濃さを表しているのを重んじているというのがここでの話である。

さて、ここまできたところで述べるが、

[デメテル・ペルセポネ・イシスの各々と古典伝承にあって「多重的」結合関係を呈する (上の図の振り返っての図を参照されたい) との [ヘカテ] という女神はまたもってしてギリシャ神話の地獄の番犬ケルベロス ——ヘラクレス 12 番目の功業にて地上への引きづりが目的とされた存在—— と際立っての共通点を持つ存在でもある]

とのことが摘示可能ともなっている。

それについてはこれより呈示することとする [際立っての相似形] にまつわっての [出典\(Source\)紹介の部 94\(7\)](#) を参照されたい。

SOURCE

94(7)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典(Source)紹介の部94(7)にあつては、

[ヘカテという存在とケルベロスの間には際立つての接続性がある]

とのことについての典拠を挙げることにする(：何故、そうした話を延々諄々(じゅんじゅん)となしているのか、と述べれば、(さらに続けての後の段を精査いただければお分かりもいただいけようところとして)、ヘカテとケルベロスの接続性のようなこと 一傍から見れば神話伝承を好む向きの好事家話柄にしかかなりえないように解されもすること— が「悲劇的なことに」神秘家話柄などとは一線を画しての式で [ブラックホールにまつわる理論開闢史] さらには [ケルベロスという存在にまつわって指摘なせるようになっているブラックホールと通ずる特性] と接続しているなどとのことが「ある」、この世界には現実にもありもし、そして、同じくものことが [予見性・先覚性] との兼ね合いで [他の事柄] らと接続しながら「問題になる」とのだけのことがあるからである)。

([ケルベロス] と [ヘカテ] の接続性について)

第一。ケルベロスは有名なこととして「三つの頭」を持つ存在である。そして、ヘカテもまた「三つの頭」を持つ存在であるとされる。については、下の図像らだけでもその通りであるにご納得できることか、と思う。



上掲図左は先にダンテ『地獄篇』に登場するケルベロスにまつわる解説部でも挙げたところの挿絵、19世紀刊行のダンテ『神曲』近代刊行版に著名芸術家のギュスターブ・ドレが付した挿絵となる。上掲図右は先にて挙げたところのローマ期作成のヘカテ彫像(現時、バチカン美術館所蔵のローマ期遺物とされてのもの)となる。一目瞭然であろうが、ケルベロスもヘカテも三面構造との際立つての特色を有している。

第二。ケルベロスは「犬」の怪物である。また、ヘカテも「犬」と濃厚なる結びつきをもっている存在である。

(上の出典(Source)紹介の部 94(5))にて挙げたところの英文ウィキペディアにても(訳して)「彼女ヘカテと犬らとの関係は彼女の[出産]との関係性を示唆するものである。というのも犬はエイレイテュイア、ジェネテュリス、そして、他の[出産]の神々に対する神性なる存在であるからである。後の時代にて[ヘカテの犬]は彼女に同道する休息を得られぬとの死者ら魂あるいは悪霊らを表象するものであると考えられるようになったわけだが、古代美術のいくつもの断片に認められるそのおとなしめな外見およびまったくもって好意的に見えるヘカテへの同道ありようよりその原初的意味合いはポジティブなものであり、犬の地下世界(死者の世界)との関係性よりも出産と犬との関係性より生じたものであるとの提言がなされるところでもある。ヘカテの犬との関係性、殊に雌の犬との関係性は変容神話にて説明なされうるとのものである。ヘカテに付き添っての親しそうに見える雌の犬は原初的にはトロイアの女王ヘカベ、トロイア陥落の後、海上へと跳躍なさしめられ、ヘカテによって眷属、使い魔(の類)に変身させられたというのである」

との趣旨のことが掲載されているようにヘカテは「犬を連れた」似姿でよくも偶像化される存在である)。

第三。ケルベロスは「冥界」の番犬である。他面、ヘカテは死者の魂の化身ともされる犬を連れてペルセポネの「冥界」と地上を行き来する旅に同道する存在、また、十字路と(まるで番人であるように)結びつく存在であるとしてよく知られている(：上の出典(Source)紹介の部 94(5))で呈示の英文ウィキペディア[Hecate]項目よりの引用部にて“ Hecate or Hekate

was a goddess in Greek religion and mythology, most often shown holding two torches or a key and in later periods depicted in triple form. She was variously associated with crossroads, entrance-ways, dogs, light, the Moon, magic, witchcraft, knowledge of herbs and poisonous plants, necromancy, and sorcery ” 「ヘカテないしヘケイトはギリシャにての信仰・神話上の女神であり、最もしばしば見られるところとして、二つの松明ないし鍵を掲げ、後の時代にては三つ(の身体を持った)存在として描写されている。彼女は様々な側面から十字路・入り口となる道・犬・月・魔術・薬草および毒性植物の知識・降霊術・魔術と関連づけられている」と記されている部位、“ Subsequently she became Persephone's companion on her yearly journey to and from the realms of Hades. Because of this association, Hecate was one of the chief goddesses of the Eleusinian Mysteries, alongside Demeter and Persephone. ” 「ヘカテはペルセポネの1年を通じての旅、冥界からはじまり冥界に向かうとの旅の同道者となった。この協力のため、ヘカテはデメテルおよびペルセポネの脇にてエレウシス秘儀で祀られる主たる神格の一柱となっている」との部位、“ Although in later times Hecate's dog came to be thought of as a manifestation of restless souls or demons who accompanied her, its docile appearance and its accompaniment of a Hecate who looks completely friendly in many pieces of ancient art suggests that its original signification was positive and thus likelier to have arisen from the dog's connection with birth than the dog's underworld associations. ” 「後の時代にて[ヘカテの犬]は彼女に同道する休息を得られぬとの死者ら魂あるいは悪霊らを表象するものであると考えられるようになったわけだが、古代美術のいくつもの断片に認められるそのおとなしめな外見およびまったくもって好意的に見えるヘカテへの同道ありようよりその原初的意味合いはポジティブなものであり、犬の地下世界(死者の世界)との関係性よりも出産と犬との関係性より生じたものであるとの提言がなされるところである」との部位に認められるように(ヘカテのことを調べる限りにおいて)よく目にするところとなる)。

第四。これが大きい。ケルベロスの涎がトリカブトの由来であるとはよく知られたところである。他面、トリカブトはその別称として

[ヘカテの毒物]

と呼ばれているとされている。

その点、ローマ期に成立したオウィディウスの手になる有名な古典『変身物語』。その Project Gutenberg のサイトにて公開されている英訳版 THE METAMORPHOSES —— Henry Thomas Riley という訳者の手によって 19 世紀、ヴィクトリア朝時代に訳された版——にては(引用なすところとして)

“ Pallas, taking compassion, bore her up as she hung; and thus she said: “Live on indeed, wicked one,²⁹ but still hang; and let the same decree of punishment be pronounced against thy race, and against thy latest posterity, that thou mayst not be free from care in time to come.” After that, as she departed, she sprinkled her with the juices of an **Hecatean herb**;³⁰ ”

との記載 —— (大要として)[パラス(女神アテナとの神話的同等物)が(機織り女アラクネ Arachne と機織り勝負で)競い合い、の折、生きたような布地の織物を呈示され完膚なき敗北を見た。それによってアラクネに怒ってパラスはヘカテの毒薬をアラクネに振りかけた(そして蜘蛛に変身させた)]との趣旨の記載—— がなされている。

以上、オウィディウス『変身物語』英訳版より抜粋なした部にて 30 と注釈番号振られての部に対する解説 EXPLANATION. の部にあつては(一例となるところとして)「トリカブトはケルベロスないしヘカテと密接に結びつく毒である」との明示的言及がなされている。

すなわち、THE METAMORPHOSES 『変身物語』の Project Gutenberg 公開版の文中に

での注釈部 30 にあつては
(同様に抜粋するところとして)

“ [30. **An Hecatean Herb.**] — Ver. 139. This was **aconite**, or wolfsbane, said to have been **discovered by Hecate, the mother of Medea**. She was the first who sought after, and taught the properties of poisonous herbs. Some accounts say, that **the aconite was produced from the foam of Cerberus, when dragged by Hercules from the infernal regions.** ”

「30. ヘカティアン・ハーブ (ヘカテの薬草) とは: (139) これはメディアの母たるヘカテによって発見されたとされている[トリカブト] (アーコナイト)、すなわち、ウルフズ・ベイン (狼の毒) のことである。彼女ヘカテは毒草特性について追求、そして、教えをなしたとの最初の存在であった。幾人かの説明では[トリカブト]は黄泉の領域からヘラクレスによって引きづり出された折、ケルベロスの泡つばき(涎)から産生されたとのことである」

と記載されているとのことがある —— [ヘカテの毒物たるトリカブト] はまたもってして [ケルベロスの泡つばき(涎)から産生したもの] であると指摘されているとのことがある (尚、機織り女のアラクネが機織り勝負に負けたことを怒ったパラスによって [ヘカテの毒] でもって蜘蛛に変身させられたことは英文 Wikipedia [Arachne] 項目にて “ she ripped Arachne's work into shreds, and sprinkled her with Hecate's potion, turning her into a spider and cursing her and her descendants to weave for all time. ” と記載されているかなり知られたことである。問題はそのアテナによってアラクネに蜘蛛への変身を強要させることになった [ヘカテの毒] がオウィディウス『変身物語』に対する注釈部表記に一例を見るように [トリカブト aconite] であるとも定置されていることである) ——)。

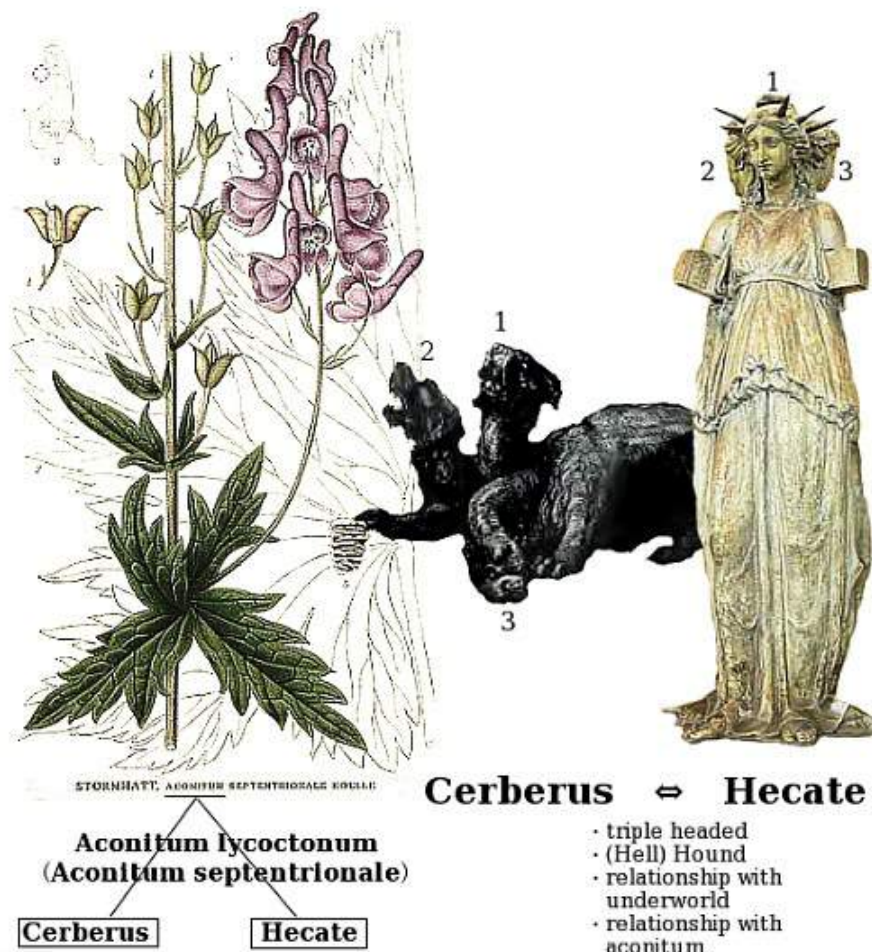


ベイン)との呼ばれようがなされるトリカブト、*Aconitum lycoctonum* (別名 *Aconitum septentrionale*)となる。同トリカブトが「ケルベロスの涎」とされるのと同時に「魔女ヘカテに由来する毒」とされているとのことをここでは問題視している。

まとめる。ケルベロスとヘカテの間には

- 「双方、[三面構造]を有した存在である」
- 「双方、[犬]との属性と結びつく存在である」
- 「双方、[冥界]と関わる存在である (それに通ずるところとして[冥界の番犬](ケルベロス)と[辻々の番人にして亡者の案内人](ヘカテ)との両者性質が重なるようなところもある)」
- 「双方ともに[毒物トリカブト由来]と濃厚に結びつけられている存在である」

との計四点の「際立っての類似性」が存する(：双方共に「冥界に関わる」「三面の」「犬絡みの」「トリカブトのそもそもの伝承上の由来として語られる」存在となっているということである)。



(出典(Source)紹介の部 94(7)はここまでとする)



以上の流れから

[ペルセポネ ⇔ ヘカテ ⇔ (際立っての相似形) ⇔ ケルベロス]

との流れもが一致性・接合性の問題として成立していること、お分かりいただけたか、と思う。

さて、ここまでの内容をもってして、ある。古代ギリシャ・古代ローマで行われていた[エレウシス秘儀]というものについて以下のことを指し示してきた。

[エレウシス秘儀は秘教・密儀と呼ばれる所以(ゆえん)として参入資格がある者のみが参加し、その知識を参加者身内だけで保持するとのものである —参加者が限られている秘密の儀礼、それがゆえにもの[秘儀]である—](通念化しているところの見解を [出典\(Source\) 紹介の部 91](#) にて紹介)

[エレウシス秘儀は大地の女神デメテルが自身の娘ペルセポネが冥界の王ハデスに略取されたことを嘆いて彼女を探して彷徨う過程を、そして、ペルセポネが地上に戻るとの過程を模し再現するとのものである(しかしそうしたエレウシス秘儀についてはその細かい内容についてはまでは今日に伝わっていないとされる)](通念化しているところの見解を [出典\(Source\) 紹介の部 91](#) にて紹介)

[エレウシス秘儀にての儀式では酩酊作用が伴う薬物が利用されていたとされる([キュケオン] という大麦・ハッカ・水を主成分とする飲み物がアヘンを混入されながら利用されていたとの説が学者らによって唱道されている)](通念化しているところの見解を [出典\(Source\) 紹介の部 91](#) にて紹介)

[エレウシス秘儀については [エジプト神話にあつての著名な筋立て] としての [悪神セトによってオシリス神がばらばらにされて殺された後(セトは棺を用意して、まんまとオシリスをその中に誘い込み、そこでオシリスをばらばらにして殺したと伝わる)、オシリス神の妻たるイシス神がオシリスを求めての探索をなしたとの筋立て] に倣(なら)つての部分が多いと古文献の時点で言及されているとのことがある] (学者らの指摘および記号論的類似性にまつわるところとして長くもなつての [出典\(Source\) 紹介の部 92](#) にて解説)

[エレウシス秘儀はフリーメーソンの儀式体系とのつながりが一部の識者に知られているとのものとなる] (メーソン内部の人間らの世間的申しよう及び記号論的類似性について細かくも言及しての長くもなつての [出典\(Source\) 紹介の部 93](#) にて解説)

(さらに加えて)

[エレウシス秘儀でその存在が極めて重要となっている女神ら、デメテル(母たる女神)とペルセポネ(娘たる女神)については [母子分かたれずに本来的に一体としての存在] であるとの分析が学究になされてきた存在であるとのことがある] (学者および言論人の指摘を [出典\(Source\) 紹介の部 94](#) および [出典\(Source\) 紹介の部 94\(2\)](#) にて解説)

[一体一対の存在と見立てられもするデメテル・ペルセポネ母子は古文献それ自体のレベルで女神イシスと結びつけられている存在であるとのことがある] (該当するところのローマ期古文献よりの原文引用をなしての [出典\(Source\) 紹介の部 94\(3\)](#) にて解説)

[デメテル・ペルセポネ両者およびイシスとの結びつきに関しては[ヘカテ]とい

う女神もその結びつきの環に入ってくるとの申しようがなせるところとなっている
(該当するところのローマ期古文獻よりの原文引用をなしての**出典(Source)紹介の部 94(3)**および**出典(Source)紹介の部 94(6)**にて解説)

[**デメテル・ペルセポネ**両者および**イシス**と結びつく**ヘカテ**という女神に関しては
[**ヘラクレス 12 番目の功業にて登場した犬の怪物ケルベロス**]にそれ自体で接
合する存在となっているとのことがある」(**出典(Source)紹介の部 94(7)**にて解
説)

以上、指し示しなしてきたことらにつき振り返ったところで述べるが、

「[**ヘラクレス 12 功業**]というものは

【**ペルセポネ**】(エレウシス秘儀で主として祭られている冥界の女王にして春に地上
世界に再臨する女王) ↔ [**ヘカテ**] (エレウシス秘儀にて**デメテル**神および**ペル
セポネ**神と共に祭られている「冥界の」「三面構造を持つ」「犬と接合しての」「トリカブ
ト由来と紐付けられての」女神) ↔ [**ケルベロス**] (ヘラクレス第 12 功業にて捕縛
されている「冥界の」「三面構造を持つ」「犬と接合しての」「トリカブト由来と紐付けら
れての」地獄の番犬)】

との関係性に通ずるものである」

とのことがある(先立って述べているように【**ペルセポネ**】に【**黄金の林檎**(ヘラクレス 11 功業の目的
物)と秤量された絶世の美女**ヘレネ**】と照応するような側面が伴って中以上表記の関係性の
こと「も」が想起されるとのことがある)。

「三面の」【**ケルベロス**】については先行する段にて**ダンテ『地獄篇』**の
「三面の」**ルシファー**と同存在がいかようにして**ヘラクレス**功業を通じて
多重的に接合しているのか、解説してきた存在となる。また、**ヘラクレス**
第 11 功業に登場する【**黄金の林檎**】については【**エデンの禁断の果
実**】を巡るエピソードとの兼ね合いでそれがいかように**エデンの誘惑の
蛇**と関わるのか、【**黄金の林檎**にまつわる誘惑にまつわる**アフロディテ・
ヴィーナス**】(金星体現存在)と【**エデンの蛇**に比定される**サタン=ルシ
ファー**】(金星体現存在)との兼ね合いでも詳述してきたものとなる。

が、それだけのことを論点として、そう、続いての話に関わる事柄として指し示したかったのであれば、

[**古典その字面のレベルにて同一視される**(**出典(Source)紹介の部 94(4)**)との女神ら(**イシ
ス**および**ペルセポネ**)が**エレウシス秘儀・イシス秘儀**を介して接合し、また、**フリーメーソンの
秘教思潮**とも接合している(**出典(Source)紹介の部 94(3)**)とのこと]

などについて「まで」細かくも論じる必要など特段なかったかもしれない。

だが、ここでの話が

「人間に与えられた [**ランダム性を奪われた運命**] (という忌むべき [予定]) が問題となって
くるものである」

とのことに関わるところとして表記のこと、[**エレウシス秘儀とフリーメーソン思潮の繋がり合い**] について
まで細々とした指し示しをなしていること、含んでいただいたうえで以降、続く内容をご検討いただき
たい。

[多少、脇に逸れての話として]

続いての段に立ち入る前に[多少、脇に逸れての話]をここにてなしておく（[ペルセポネ←→ヘカテ←→ケルベロス]との関係性、および、そこから何が指摘できるのかのことも本題としているところで脇に逸れるが、外挿しての話をなしておく）。

本稿の先の段ではダンテ Inferno『地獄篇』にあって

[（ギリシャ神話の冥界の主催神ハデスの零落しての姿とも解される）怪人プルート]

が登場、同プルートが『地獄篇』にてのケルベロス登場の下りとさして離れていないとの段にて意味不明なるものであるがゆえに学者のような類の間で有名なもの、Papé Satàn, papé Satàn aleppe!「パペ・サタン・パペ・サタン・アレッペ！」との叫び声を挙げていることの意味性を問題視していた（:詳しくは出典(Source)紹介の部 90(4)を参照のこと。ダンテ『地獄篇』では[グラトニー(貪食)]の罪 —セブン・デッドリー・シンこと七つの大罪の一つ— を懲罰するとの名目での地獄の浅い階層にてケルベロスらが囚人らを切り刻んでいるとの描写が第6歌でなされた後、第7歌冒頭部にてプルートが登場、表記のとおりの意味不明なるフレーズ、おそらく[悪魔の王サタンを礼賛してもの]であろうと指摘されている中でながらもヘブライ語・アラビア語・フランス語などに依拠してのいろいろな解釈論が出されている(既述)との意味不明なる叫び声を発しているとのことがある)。

そうしたことを本稿で指摘していたのは —三面のケルベロス登場から間を経ずにサタン礼賛のものともされる[意味不明なる叫き声](として有名な大音声)をあげるプルートが登場しているとのところにおいて—

[ダンテ『地獄篇』にての三面のルシファー(サタン)と三面のケルベロスがたかだかもその程度のことからして結びつく素地がある] (複合的な材料のうちの一つとしてそういう素地がある)

とのことを訴求するためであったわけだが、そうもした先だつての指摘の趣意から離れもして申し述べもするところとして Papé Satàn, papé Satàn aleppe!との意味不明なる叫き声を上げている(とダンテが描いている)プルートという存在は

[冥界の主催神ハデスのローマ化存在]

であると解される一方、

[豊かさを体現してのローマ神プルートと同一存在]

であるとの見立てがなされている存在「でも」ある（:オンライン上にて同じくものことにまつわる基本的なことを解説している媒体にての現行記述として目につくところを挙げれば、英文 Wikipedia[Pluto (mythology)]項目にあって — Classical Mythology: A Guide to the Mythical World of the Greeks and Romans との学界筋より近年刊行されている著作を出典としての表記がなされているところとして— “Pluto (Greek: Πλούτων, Ploutōn) was the ruler of the underworld in classical mythology. The earlier name for the god was Hades, which became more common as the name of the underworld as a place. In ancient Greek religion and myth, Pluto represents a more positive concept of the god who presides over the afterlife. **Ploutōn was frequently conflated with Ploutos (Πλοῦτος, Plutus), a god of wealth, because mineral wealth was found underground, and because as a chthonic god Pluto ruled the deep earth that contained the seeds necessary for a bountiful harvest.**” (訳として)「プルートは古典期神話体系にあっての冥界統治者となる。初期の同神の名はハデスとなり、その

名は[場所]としての[冥界そのもの]を指す名称としてより一般的になったとのものである(注:ここでの記述は欧州圏にてのキリスト教的観点では[ハデス]が冥界・地獄名称を指す言葉として認知認容されていることを受けてのものとなる)。古代ギリシャにての信仰および神話にてはプルートは[死後(世界)を管掌する神]にてのよりポジティブな側面を表象するものであった。プルートンはしばしば豊かさの神であるとのプルートスとしばしば一緒くたに見られもしていた。というのも鉱物としての富は地下にて発見されるとのことがあり、また、地下に住まう神としての冥界神プルートは豊穰なる収穫のために必要な種を含む地中深くを治めているからである(引用部はここまでとしておく)と記述されているような側面がある)。

さて、ダンテ『地獄篇』にて三面のケルベロス登場の後にサタン(ルチフェロ)礼賛のものともされる意味不明瞭なる叫び声を上げているとの怪人プルートが[冥界の主催神が零落しての似姿]にして[地下の鉱物の実りの体現神プルートスの似姿]であると解すれば(実際にそうと普通には解せられるようになっている中でそうも解すれば)、である。そこにあっては —ここまでその特性について論じてきたとの[エレウシス秘儀]にも関わるところとして— デメテル・ペルセポネとの結びつきが一層もってして観念されるとのこと「にも」なる。

何故か。

一義的には地下の実りの体現神プルートスという神がよく知られたところとして[デメテル神の息子]として伝わっている存在であるとのことがある —ウィキペディアなどに比べ確認しやすさの面で劣後するところがある媒体だが、確実不変なる文献的事実の問題を引くには有為であるとの媒体である Project Gutenberg のサイトにて公開されているとの Myths and Legends of Ancient Greece and Rome という著作 (Berens, E.M 表記の著者の手になる著作)にて “**Plutus, the son of Demeter and a mortal called Iasion, was the god of wealth, and is represented as being lame when he makes his appearance, and winged when he takes his departure. He was supposed to be both blind and foolish, because he bestows his gifts without discrimination, and frequently upon the most unworthy objects.**” 「プルートス、デメテル神の息子であり、死せる運命にある人の子らには Iasion と呼ばれる存在となる同神は富の神であり、彼が登場を見るときは身体に不自由を負った存在、立ち去る時は羽を生やした存在としての格好を呈する。また彼は自身の富を区別なくも与える、しばしば全くもって値打ちなきものに対しても対価として与えるために盲目の存在にして痴愚のありようを呈すとも考えられている」との表記が見受けられるようなところとなっている—— (ここまでの内容に鑑みて言い換えれば、プルートスとは[イシス神と際立っての相関関係を呈する女神デメテルの息子]と述べられもする存在でもあるとのことである)。

また、一関係性にあつてより重み付けを増さしめているところとして— ペルセポネを冥界へと連れ去った冥王プルート、そして、デメテルの息子プルートスとくれば、デメテル・ペルセポネが主催神として祀られるエレウシス秘儀に通ずるところでも重んじられている神でもあることが現実に伝わっているとのこともある。

英文 Wikipedia [Pluto (mythology)] 項目にて現行、**“A sanctuary dedicated to Pluto was called a ploutonion (Latin plutonium). The complex at Eleusis for the mysteries had a ploutonion regarded as the birthplace of the divine child Ploutos,** in another instance of conflation or close association of the two gods.” 「プルート神に奉獻された聖地は[プルートニオン](ラテン語呼称[プルトニウム])と呼ばれている。秘儀のためのエレウシスの複合施設は神なる子プルートスの生誕の地と定置されるプルートニオンを(冥王プルートと富の神プルートスの二つの神の習合にあつての例の一つとなるところないしは両者の緊密なる関係を体現したも

のとして)擁しもしていた」との表記が Bernard Dietrich, "The Religious Prehistory of Demeter's Eleusinian Mysteries," in *La soteriologia dei culti orientali nell' Impero Romano* (Brill, 1982)とのかたちで典拠表記なされつつも紹介されているとのことがあるのである —※ここでの微に入っただけの話にて着目いただきたいことにはプルート神に奉獻された聖地「プルートニオン」のラテン語呼称が「プルトニウム」となっていると「される」こと、そして、その「プルトニウム」(プルート神の聖域)が冥りをもたらしものとしてエレウシス秘儀にも関わっているとの申しようがなされているとのことである。その点、表記のこと、「プルート神の聖域」が「(冥界に通ずる経巡り・巡礼をモチーフとする)エレウシス秘儀」とも結びつくものとして「プルトニウム」とラテン語にて呼称されてきたとの伝統があるとのことについては、である。(『そこまでする必要はあるのか』との認識もあったのだが) Project Gutenberg にて公開されている *Greek and Roman Ghost Stories* との古書(『ギリシャおよびローマにての亡霊の物語について』/著者として Lacy Collison Morey というオクスフォード奉職の識者の名が付されているとの著作)にあって見受けられるところとして次のような識者申しようがなされもしているところとなる → (以下、引用なすとして) “ **The existence of sulphurous fumes easily gave rise to a belief that certain places were in direct communication with the lower world.** This was the case at Cumæ where Æneas consulted the Sybil, and at Colonus; **while at Hierapolis in Phrygia there was a famous "Plutonium," which could only be safely approached by the priests of Cybele.** It was situated under a temple of Apollo, a real entrance to Hades; and it is doubtless to this that Cicero refers when he speaks of the deadly "Plutonia" he had seen in Asia. ” (拙くもの即時手仕事ながらも訳を付すとして)「「硫黄ガスの存在」はそれと結びつく特定領域が地下世界(注:死後、下りもすると古代世界にて信じられていた地下世界)と直接的接触ある場所であるとの信仰をいとも容易くも生み出すことになりました。これはアイネイアス(注:本稿の先だつての段でもそのダンテ『地獄篇』に関わるとのそのありようについて論じているところの古代ラテン文学の最高峰とされるヴェルギリウス叙事詩『アエネーイス』、その主人公たるトロイアからの落人)が(死者の領域たる地下世界に下るにあたって)相談をなすことになったシビル(注:託宣をこととする古代世界の巫女)のいたクマエの地にも、また、コロノスの地(注:都市アテナの近傍か)にも当てはまることとなりもし、一方でフリギア地方にてのヒエラポリスにあっては有名な(地下世界とのゲートとなる)「プルトニウム」(注:「**Ploutonion at Hierapolis**」)とのかたちで英文 Wikipedia に一項目設けられているようなヒエラポリス遺構にあっての地下世界入り口とされていた遺跡)がありもし、そちらはキュベレ神(注:古代フリギア地方、現トルコ境界にて崇められていた地母神の類)の祭司のみが安全に接触できもする領域とされていた。その「プルトニウム」(プルート神聖域)はアポロの神殿の下部に存在しており、古代世界にて現実視されていたハデス(冥界)の領域の入り口だった。そして、それ(にまつわつての伝承)についてはキケロ(注:ローマ期の著名な政治家・文人)がアジアにて見たという死の臭い漂うプルートニア(地下の領域)について語っているとのことで疑う余地なきところとなっている」(引用部はここまでとする)。かくも「プルトニウム」との呼称は「エレウシス秘儀と通ずるプルート神聖域」(冥界への入り口)と接合しているとのことになっている—。

以上述べてきたうえで記すが、ダンテ『地獄篇』にてケルベロス登場のすぐ後に[サタン礼賛の叫き声](ともされる意味不明瞭がゆえに学者らの間で有名な大音声)をあげているプルートが本来的には

[デメテル神の息子](換言すれば、[イシス]と多重的に際立つての相関関係を呈するとの女神の息子)

にして、なおかつもって、

[エレウシス秘儀に通ずるところの神]

との顔を有しているとのことがあることにつき、

「これは不気味なことである」(あるいは「真実の酷薄なる面が部分的に表出しているようにもとれる」)

とのことが申し述べられるようになっている。

プルートーないしプルーツが冥王星を介しもして元素における、

[プルトニウム]

の語源となっており ([ローマ神話冥王;プルート] の名を冠する [冥王星] が 一表層・皮相的にはエレウシス秘儀関連施設にあつての [冥界の入り口] と同義となる聖域を指すラテン語表記プルトニウムと関連付けられること「がない」との式で— プルトニウムの語源となつているとのことがあり)、 [冥王] 由来のプルトニウムとくれば、広島 島の原爆投下に材料として用いられたもの、また、Demon Core [デモン・コア]との名称を付されてのその塊が [はじめての臨界事故] を起こしたものともなることが不快な かたちで意をなしてくるようにとれるとのことが問題となる、それだけのことがあるのである(※)。

(※指し示し事項に典拠となるところをすべからくも引用なしつつ挙げているとの本稿性質より

[元素プルトニウムの由来]

および

[臨界事故を起こしたプルトニウムの塊デモン・コア]

について「も」簡易なる出典紹介をなしておく。

まず、プルトニウムの語源が冥王プルートにあるとのことについてであるが、(科学史にまつわる基本的な話ともなり、そこからの引用だけで十分であろうととらえるところとして)ウィキペディア[プルトニウム]項目にあつての現行にてのそこにての記述を原文引用しておくこととする。

(以下、ウィキペディア[プルトニウム]項目にての現行記載内容よりの原文引用をなすとして)

[最初に合成・分離したのは1941年2月23日、アメリカの化学者グレン・セオドア・シーボーグ、エドウィン・M・マクミラン、J・W・ケネディー、およびA・C・ワールで、バークレーの60インチサイクロロンを使ってウランに重水素を衝突させる方法によって合成された。原子番号92のウラン、93のネプツニウムがそれぞれ太陽系の惑星の天王星、海王星にちなんで命名されていたため、これに倣って当時海王星の次の惑星と考えられていた冥王星plutoから命名された。シーボーグは冗談で元素記号として「糞」を意味する俗語pooに通じるPuの文字を選んだが、特に問題にならずに周期表に採用された。マンハッタン計画で、最初のプルトニウム生産炉がオークリッジに建設された。後にプルトニウム生産のための大型の炉がワシントン州ハンフォードに建造されたが、このプルトニウムは最初の原子爆弾に使用され、ニューメキシコ州ホワイトサンドのトリニティー実験場で核実験に使われた。また、このプ

ルトニウムがプルトニウムの発見からわずか5年後、第二次世界大戦末の1945年、原子爆弾ファットマンとして長崎市に投下された]

(引用部はここまでとする)

以上でもって[プルトニウム](エレウシス秘儀のプルーツ聖域[プルーツニオン]のラテン語呼称と通底するところの名称)の由来が表層的には冥王星プルート(すなわち冥王プルートに名称淵源を有するとの星)にあると発表されているとの話はここまでとする。次いで、Demon Core についてもよくまとまったウィキペディアの[デーモン・コア]項目よりの記述を引くだけで十分であろうと判断、そうすることとする。

(以下、ウィキペディア[デーモン・コア]項目にての現行記載内容よりの原文引用をなすとして)

[デーモン・コアとは、アメリカのロスアラモス研究所で各種の実験に使われ、後に原子爆弾に組み込まれてクロスロード作戦に使用された約14ポンド(6.2kg)の未臨界量のプルトニウムの塊。不注意な取り扱いのために1945年と1946年にそれぞれ臨界状態に達してしまう事故を起こし、二人の科学者の命を奪ったことから「デーモン・コア(悪魔のコア)」のあだ名がつけられた]

(引用部はここまでとする)

脇に逸れもしての話の中で重疊的にとの式で(入れ子構造との式で)指摘すべきかと判じたことをも図を付しもしながら、以下、指摘しておくこととする

ここまでにてプルトニウムが、(その塊が[悪魔のコア;デーモン・コア]といった呼称を付されたりもしての中でのこととして)、長崎に投下された原爆の材とされた — [1941年のプルトニウム発見が戦時下であるために秘匿とされた]といったことがある中で原爆の材とされた— のことについて [現代史にまつわる基本的なところとしての解説なされよう]を紹介したわけではあるも、対して [プルトニウム]という言葉が— 元素番号94番目の原子の名前となる前からのこととして— よりもって以前から存在しており、その意味するところはラテン語にて [プルーツ神の聖域] [エレウシス秘儀と結びつく冥界への入り口と見られてきた領域] を指すとのこと[をも](より先んじて段で)紹介した。

さて、[プルトニウム]がラテン語で [エレウシス秘儀と結びつく冥界への入り口と見られてきた領域] を指すとの言葉であったところを科学者グレン・シーボーグらが発見したとされる原子の名がそれと同じくも

[冥王星(プルート)から命名されての [プルトニウム]]

となったことが [奇縁] で済まされるのか、そこからして疑義が呈されるとのだけのことがこの世界にはある。

まずもってそこから申し述べるが、マンハッタン計画が進捗を見た後、[プルトニウムを用いての史上初の核兵器] が産まれ落ちた、それが [トリニティ実験] という原子爆

弾運用テストにて史上初の爆発を見た「プルトニウム使用型試験用原子爆弾」たる「ガジェット」(あるいはインプロージョン型プルトニウム式の背後にて功あった科学者ロバート・クリスティーズの名よりそう呼ばれての「クリスティーズ・ガジェット」)との史上初の核兵器となっているとのことがある(：英文 Wikipedia [Trinity (nuclear test)] 項目にて “ Trinity was the code name of **the first detonation of a nuclear weapon, conducted by the United States Army on July 16, 1945, as a result of the Manhattan Project [. . .] Trinity used an implosion-design plutonium device, informally nicknamed "The Gadget" or "Christy[']s Gadget" after Robert Christy, the physicist behind the implosion method used in the device.**[. . .] "The gadget" was the code name given to the first bomb tested. It was so called because it was not a deployable weapon and because revealing words like bomb were not used during the project for fear of espionage. **It was an implosion-type plutonium device, similar in design to the Fat Man bomb used three weeks later in the atomic bombing of Nagasaki, Japan.** ” と表記されているところである)。

そうもした「史上初の起爆を見た核爆弾」(「ガジェット」)がプルトニウム利用の結果として爆発テストに供せられもしての「トリニティ実験」が行われた地はニューメキシコ州 ジョルナダ・デル・ムエルト砂漠、かねてよりスペイン人征服者ら(アメリカ大陸に従前から拠っていた先住民族に対するコロンブス以後のスペイン人征服者ら)がスペイン語にて「死者の道」と呼びならわすことになっていたとの一画だったとのことがある(：英文 Wikipedia [Jornada del Muerto] 項目にあつての、現行、その先頭部および末尾の部近辺にてそれぞれ “ The Jornada del Muerto (**Spanish for "single day's journey of the dead man" hence "route of the dead man"**) in the U.S. state of New Mexico was the name given by the Spanish conquistadors to the Jornada del Muerto Desert basin, and the particularly dry 100-mile (160 km) stretch of a route through it.” 「ジョルナダ・デル・ムエルト(スペイン語にての「死せる者の一日の旅」ないし「死者の道」)は合衆国ニューメキシコ州の同名の砂漠型盆地にスペイン人のコンキスタドレス(新大陸征服者)らによって与えられた名称である」および “ On July 16, 1945 the first detonation of an atomic weapon occurred at the Trinity nuclear test site, approximately 40 miles NNE of the Jornada Del Muerto ” 「1945年7月16日、ジョルナダ・デル・ムエルトの北北東部でのトリニティ核実験実験用地にて世界発の核兵器の起爆が行われた」と表記されているとおりである。同砂漠地帯のありようについては下に挙げた地図を参照いただければ、と思う)。

ここで [[プルトニウム] (より従前からの意味合いでは[エレウシス秘儀と結びつく冥界への入り口と見られてきた領域]と同じくもの呼称) を用いての史上初の核兵器] (ガジェット) の爆発実験供与地が「死者の道」であるとのことに出来すぎ度合いを感じ取らざるをえぬところとして、である。史上初の核爆弾「ガジェット」爆発(1945年7月16日)から間を経ずに日本に投下された原子爆弾、その絡みで問題になるところとして「広島にまつわる伝統的理解」のこと「も」ある。広島という地、「プルトニウム使用型原子爆弾」というよりそれと同時に開発された「ウランをふんだんに用いたタイプの原子爆弾」(「ガンバレ型原子爆弾」と呼ばれるもの) を投下された地であると説明されているところだが、とにかくもってして、「長崎」とともに「マンハッタン計画の子供」である原子爆弾を投下されたとの広島という地に関しては江戸期より「広島に行く」との言葉が「死ぬ」の隠語的表現と認識・認知されてきたとのことが西日本一帯にて知られているとのことが現実にある(：現行にあつての和文ウィキペディア[広島市] 項目に見る「広島へ行く」の節で(以下、引用なすとして) “ 西日本の方言で、「広島へ行く」「ヒロシマにゆく」という表現が、「死ぬ」を婉曲に表す忌み言葉として使われることがある。この広島が都市の広島を指すかどうかについては不明だが、1741年(寛保元年)の『夏山雑談』に記述があり、起源は近世以前までさかのぼる。柳田國男は『広島へ煙草買ひに』という著作の中で、「ヒロシマ」は「会津檜枝岐などの狩詞で人里の

ことであった」、「ヒロシマヘユク」は「老岐では死ぬの隠語に代用して居ることが最近刊行せられた山口君の続方言集に見えて居る、ヒロシマといふ語にもし斯ういふ感覚が伴ふことを知って居たら、藝州の殿様も是を御城下の名にはしなかつたかも知れない。」と記し、さらに「タバコ」を「関西地方は殆ど一般に、休息の同義語に用いられている」とし、「広島へ煙草買ひに行く」というのは、伊予の内海側では「死ぬ」という代わりに時々使われる気のきいた忌み言葉になっている、と説明している”（引用部はここまでとする）と表記されているようなところである（※尚、今日、[広島市]が存在しているのは律令制下から[安芸の国]であるわけだが（半ばもの一般教養の話である）、同地に対する[広島]という呼称自体は広島城を築城したとの毛利輝元によって16世紀末、1591年に用いられるようになったと言われている）。

まとめる。意味合いにつき考えるべきところとして次のことがある。

[マンハッタン計画の子供である原子爆弾は **[死者の道]** を意味する砂漠（ジョルナダ・デル・ムエルト）にてその似姿を人類史にてはじめて現わした。そして、[死者の道] 砂漠で生まれ落ちた史上初の核兵器 [ガジェット] には [エレウシス秘儀と結びつく**冥界への入り口**と見られてきた領域プルトニウム] と同じくもの名の物質プルトニウム —冥王星より命名— が用いられもしていた。ここで **[死者の道]** **[冥界への入り口]** と結びつく史上初の核兵器の具現化] とのことで「奇縁」を感じさせるとの繋がりを見出せるところなのだが、原子爆弾が投下された場の一たる広島もまた内地、日本国内にて **[死]** と歴史的に結びつけられた地だった (**[広島に行く]** は伝統的に、原爆投下前から **[死ぬ]** の婉曲的表現とされてきたとのことが現実にある)

多くが [死への道程] にまつわっての歴史的な概念と結びついているとのここまで表記のこと、それは偶然で済ませられるような筋合いのことなのか？（無論、この世界にて人間存在が自分達自身ですべて物事を決めているという仮定を条件的に、いや、無条件に差し挟めば、そう、世間的にはその当然視が強いられるとの仮定を差し挟めば、「文化伝播や文化伝播を受けての人間の思惑の範疇で済まされるようなこと「ではない」」ために当然に恣意の可能性は斥けられ、[偶然]との観点が導出されてくるところであるわけだが）。

さらに話を続ける。同じくものことの思索にあつて意をなしてくると強調したいところとしてマンハッタン計画の結果に応じて造語された語である **[グラウンド・ゼロ]** との語のことが **脳裏をよぎらざるをえぬ** とのこともある (グラウンド・ゼロとの言葉のそもそもの由来が [マンハッタン計画] にあるとのことについては英文 Wikipedia [Ground Zero] 項目にあつての “ **The origins of the term ground zero began with the Manhattan Project and the bombing of Japan.** The Strategic Bombing Survey of the atomic attacks, released in June 1946, used the term liberally, defining it as: "For convenience, the term 'ground zero' will be used to designate the point on the ground directly beneath the point of detonation, or 'air zero'." ” **[グラウンド・ゼロとの言葉の[起源]はマンハッタン計画および日本に対する原爆投下にある。** 1946年6月に出された核攻撃の戦略的爆撃調査書では「爆発ポイント真下の地番、すなわち、エア・ゼロの場のことを示すうえで便宜上、グラウンド・ゼロとの言葉が用に適している」との言い方をなしながら同語をふんだんに用いていた」との記述を引きながら先だつて解説しているとおりである—尚、トリニティ実験にて史上初の核兵器が起爆されたポイントが [現・アメリカ合衆国エネルギー省] 由来の資料にてグラウンド・ゼロと表記されていることを示す図も下に挙げておくこととする—)。

その点、マンハッタン計画の結果、造語されたと知られている **[グラウンド・ゼロ]** とい

う言葉は、これまた先だって解説しているように、[ペンタゴン]ことアメリカ合衆国防総省を指す言葉としても冷戦期、認知されてきたとのことがある(英文 Wikipedia[Ground Zero]項目にあつて “The Pentagon, the headquarters of the U.S. Department of Defense in Arlington, Virginia, was thought of as the most likely target of a nuclear missile strike during the Cold War. The open space in the center is informally known as ground zero, and a snack bar located at the center of this plaza was nicknamed "Cafe Ground Zero" ” 「ヴァージニアはアーリントン(ワシントン郊外)にあるペンタゴンは冷戦下、最も[核]の標的になりやすきところであると考えられていた。その中央にあつての広場は非公式には(核兵器の標的になりやすきこと、そして、原爆投下地がグラウンド・ゼロと呼称されるに至っていた経緯から)[グラウンド・ゼロ]と呼ばれており、広場にある軽食堂は Cafe Ground Zero[カフェ・グラウンド・ゼロ]とのニックネームが与えられていた」と表記されているとのことがまたもってしてある)。

さて、ここからが問題なのだが、本稿にあつての[出典\(Source\)紹介の部 70](#)にて解説しているようにアメリカ合衆国防総省ペンタゴンが

[正五角形形状 — 本稿の先だつての段で説明しているように正確な五芒星と無限に続く相互内接外接関係を呈するとの形状 —]

を呈する建造物となりもし、(本稿にて[補説 2](#)と銘打つてのセクションで詳述済みの理由がゆえに)細かくも先だつて解説しているようにそちら国防総省庁舎ペンタゴン(に居を定めてのルーズヴェルト政権下のアメリカ軍部ら)の指揮命令系統下、より具体的には(ほぼ並行しての時期にあつて庁舎として完成を見たペンタゴン建設計画を主導した軍人でもあるとの)レスリー・グローヴズ准将の主導下で進められたのがマンハッタン計画となりもする(1941年9月11日に着工開始を見たペンタゴン建設計画とほぼ同時期、(準備期間を経ての)1942年より本格スタートを見たマンハッタン計画の現場指揮官は同じ軍人である)。そして、同マンハッタン計画の産物である原子爆弾 — プルトニウム使用型原爆ファット・マン — を投下された長崎市の表象シンボルからして戦前期、1900年(明治三十三年)より

[正五角形を内接する正確な五芒星]

となっているなどとのことが出来すぎたこととしてこの世界には「ある」(:インターネット上で[明治三十三年、市会議決、長崎市章]といったワードでお調べいただければ、関連ページを捕捉できるであろうが、[正五角形を内接する五芒星形状]を呈する長崎市の表象シンボル — 今日にても市旗・市章として用いられているシンボル — が用いられることになった由来は表向き、[草書の「長」を示す式にて[鶴が羽を広げたような形状から鶴の港との呼称を伴つての縁起を持つ長崎]に相応しくも折り鶴のかたちを[星状]にて配す]とのことに「世間的には」求められもしている)。

マンハッタン計画の結果、トリニティ実験で[死の道]砂漠にて生まれ落ちた原子爆弾が投下された長崎、その地区表象シンボルもがマンハッタン計画始動開始前、いや、戦前から **[正確な五芒星、および、それと内接関係をきたす正五角形]** との形状をとっていたとのことがある、また、グラウンド・ゼロとは広島・長崎への原爆投下地あらためペンタゴン — マンハッタン計画の監督を往時政権下、担っていた軍の拠っている **[正確な五芒星と永劫に続く相互内接外接関係を呈する正五角形]** 形状をとつてのアメリカ合衆国防総省 — の中央広場を指す語ともなつたとされることがある、そうしたことからまでもが[偶然]と言えるのか(マンハッタン計画の結果、グラウンド・ゼロが正確な五芒星と結びつく長崎に具現化し、また、正確な五芒星と結びつくペンタゴンにも具現化しているとのことまでを[偶然]と言えるのか)。

死者の歩む道程にまつわつての関係性のことを含めて以上のことから全て顧慮した上では偶然とは「軽々には断じられないことかとは思ふ(:ただし、無論、ここでの話だけをなす限りははまだ懐疑主義者の舌尖を口の中に引っ込めさせるには足りぬこと

かともとらえはするが)。

そして、この話には[さらに問題となりもすること]が伴っている(：既に先行するところの本稿補説2)にあって厭となるほどに詳説をなしてきたところとして【「黄金比」[911への事前言及文物]「ブラックホールとグラウンド・ゼロを結びつけるとの式」らを媒介項にしての「加速器実験とマンハッタン計画とペンタゴンの繋がり合い」】のことなどが大なるところとしてある。またもってして —そちらはここ本稿では紙幅と手間の面から解説しないこととはしたのだが— 【マンハッタン計画のシンボリズムと視覚的に通底するフリーメーソン・シンボリズム】と【「広島」「長崎」および「[竜宮の渡り]と呼ばれた関門海峡」の二等辺三角形をなす位置関係】との視覚的対応関係から【異界とのゲート】の寓意が「ヤコブの梯子」というものとの絡みで浮かび上がってくるということもがこの世界にはまたもってして「ある」。

その点、[人間世界の長期的営為]とは、すなわち、[歴史]とは根本根底からして[薬籠中のもの]であった、人間存在を外側から手繰る、しかも掛け詞(かけことば)を用いて歌の巧拙を競うように相互連関する命名規則を用いて人間存在を[マス](総体)としてのレベルで手繰りつつも[人殺しそれ自体をなにやらゲームのように愉しんでいる]節がある力学の薬籠中のものであったと考えることが行き過ぎぬにならぬ、そう、[ことが[偶然]で済まされるのか、あるいは、[操作にあつての故意を受けての必然]とまで考える必要があるかにあつて後者の方に秤が圧倒的に傾く]とのだけの事柄が現実にもありもする。そのことを、[すべてが相応の存在らの掌(たなごころ)の内、そして、そこに言う相応の存在らは我々人類に[忌むべき帰結]を用意しているとはきと判じられる]とのことを証示しようというのが本稿である。

尚、「であるから重要である」とのこととして同じくもの問題には[ブラックホール]のこと(ここまでダンテ『地獄篇』が何故もってしてそれと結びついていると述べられるのか、また、物理学者の類にも比喩的口上でながら結びつけられて述べられてきたのかとのことにまつわって仔細を心がけての説明をなしてきたとの『地獄篇』と通ずる[ブラックホール]の問題)が[マンハッタン計画]にも通ずるところとして意をなしてくるとのことがある。その点、先だつての出典(Source)紹介の部84にて細かくも解説しているような[次のこと]があるとのことだけ「この段階では」振り返り表記しておく。

ナチスのユダヤ人に対する迫害、そして、そのナチス・ドイツの征戦を勝利のうちに完遂させる可能性があつたナチスドイツの原始爆弾開発可能性。そうした状況に生存上の危惧を感じたユダヤ人科学者らが大同団結して開始を促したとの言われようが現代史にまつわるところでなされているマンハッタン計画 —(本稿の先の段にて既述のように)グラウンド・ゼロとの言葉を生みだした計画—については

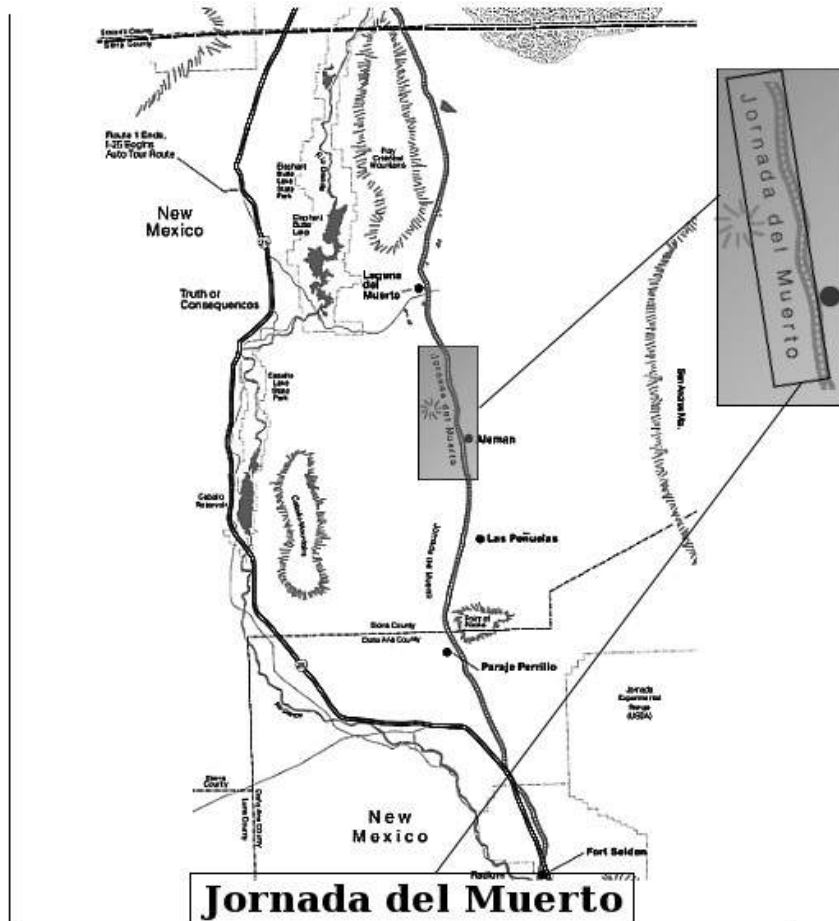
1. 「後にLHCに進化するに至った円形加速器、その円形加速器の[真の発明者]とされる人間(レオ・シラード)がそもそもの計画のプロモーター(推進者)となつていた計画」
2. 「公式上の円形加速器の発明者とされる人間(アーネスト・ローレンス)が、初期、とりまとめ役として重要な役割を果たしていた計画」
3. 「公式上の円形加速器の発明者とされる人間(アーネスト・ローレンス)に計画に招聘された人間たるロバート・オッペンハイマーが[ブラックホール(とかなり後になって呼ばれるようになった「縮退星」というもの)の研究で既に業績を挙げている科学者]として科学者陣を率いることになりもしていた計画」
4. 「戦後影響力を増した同計画関係科学者によってブラックホール

生成問題で矢面に立たされることになった研究機関らの主要なるもの(フェルミ国立研究所/ブルックヘブン国立研究所/CERN)らが設立なさせられることになったとの計画]

となっているとのことがある

ここまでの内容に関連するところの図解部を続いて設けておくこととする。

(以下にて呈示の図にあつての上の部の方は英文 Wikipedia[Jornada del Muerto] 項目にて掲載されているジョルナダ・デル・ムエトロ砂漠、[死者の道]の名を冠する砂漠型盆地の地図. 同じくも以下にて呈示の図の下の段にて挙げているのは Project Gutenberg のサイトにて現時、全文公開されており、[合衆国エネルギー省(the U.S. Department of Energy)に由来しニューメキシコ国立原爆資料館(National Atomic Museum, Albuquerque, New Mexico)にて保持のもの]であるとの記述がなされてのマンハッタン実験関連資料、そこに見るトリニティ実験実験用地概略地図よりの抜粋. それら呈示図らからジョルナダ・デル・ムエトロ砂漠にて実施のトリニティ実験ありようについて、そして、同実験関連資料にて[グラウンド・ゼロ]との言葉が目立って用いられてもしているとのことについて、納得いただければ光栄である)

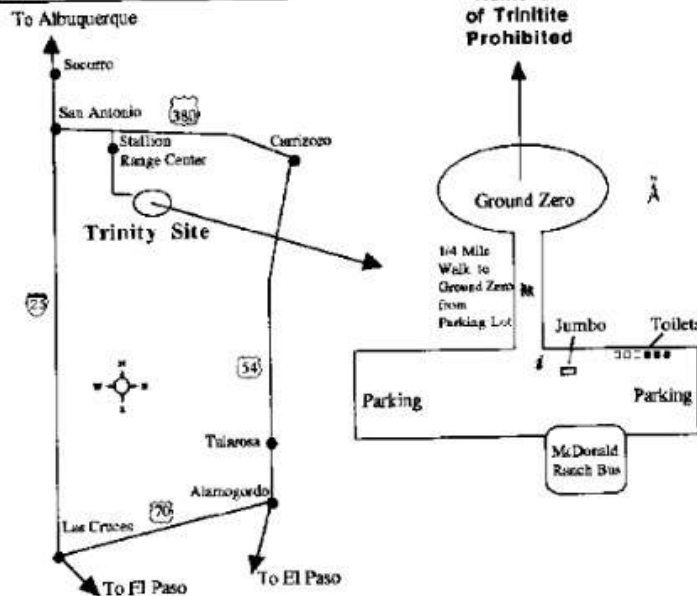
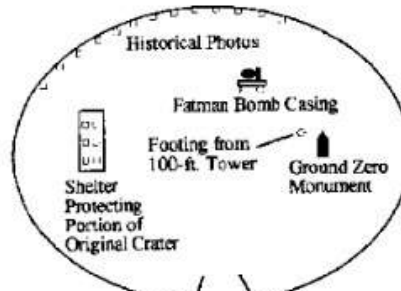


Mileage Chart	
San Antonio to Stallion exit	12
Carrizozo to Stallion exit	53
Highway 380 to Stallion	5
Stallion to Trinity Site	17
San Antonio to Socorro	10
San Antonio to Albuquerque	91
San Antonio to Las Cruces	130
San Antonio to El Paso	175
Carrizozo to Tularosa	46
Carrizozo to Alamogordo	56
Carrizozo to El Paso	146
Trinity Site to Alamogordo via the caravan	85





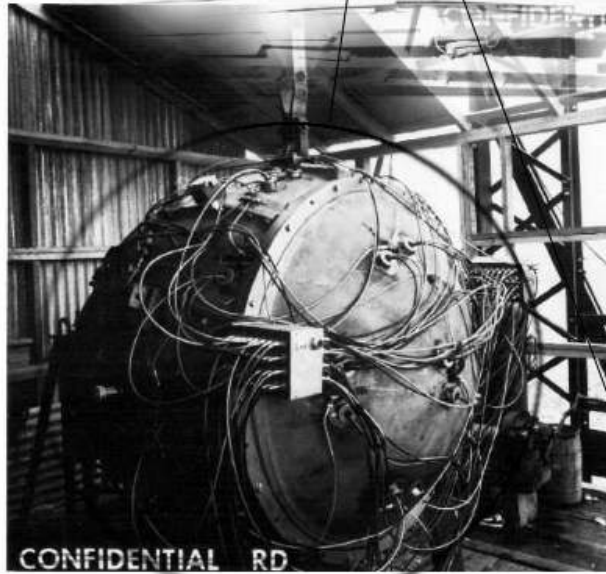
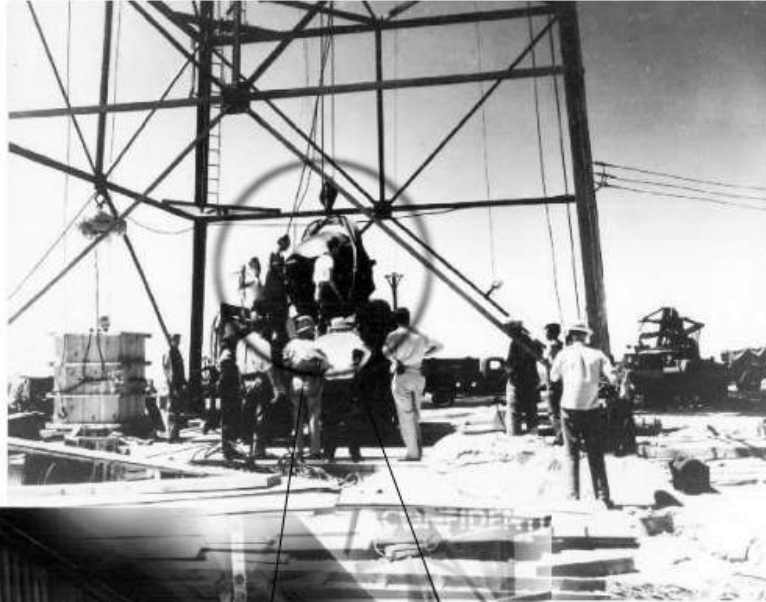
Mileage Chart	
San Antonio to Stallion exit	12
Carizozo to Stallion exit	53
Highway 380 to Stallion	5
Stallion to Trinity Site	17
San Antonio to Socorro	10
San Antonio to Albuquerque	81
San Antonio to Las Cruces	130
San Antonio to El Paso	175
Carizozo to Tularosa	46
Carizozo to Alamogordo	56
Carizozo to El Paso	146
Trinity Site to Alamogordo via the caravan	85



TRINITY SITE Map
(seen in the document of the U.S. Department of Energy)

(続いて呈示の図の上半分は Project Gutenberg のサイトにて現時、全文公開されており、[合衆国エネルギー省 (the U.S. Department of Energy) に由来しニューメキシコ国立原爆資料館 (National Atomic Museum, Albuquerque, New Mexico) にて保持のもの]であるとの記述がなされての(上掲図と同じくもの)マンハッタン実験関連資料に見る史上初の核兵器、通称[ガジェット]を写し撮ったの写真. また、以下にて呈示の図の下半分はいかようにして原子爆弾開発・投下挙動が[死者の道(を意味する実験用地)][冥界の門(を意味しもする主要材料)][死への寓意と通ずる地名(を有した爆弾投下地)]と結びつくのかを示し、またもってして、プルトニウム使用型原爆ファットマンが投下された長崎がマンハッタン計画監督のペンタゴンと[シンボル](1900年採択市章)の面でいかに通ずるのかについて訴求するためのものとなりもする)





CONFIDENTIAL RD

**implosion-design plutonium device
"Christy's Gadget"**

Plutonium

(Latin: [Sanctuary of Pluto]

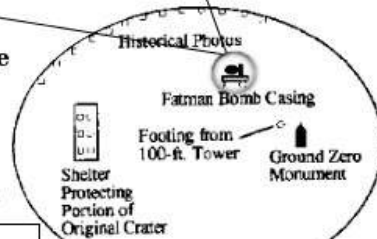
→ [Pluto's Gate; the Gates of Hell])

**Trinity Site (in the
Jornada del Muerto desert)**
= [route of the dead man] desert

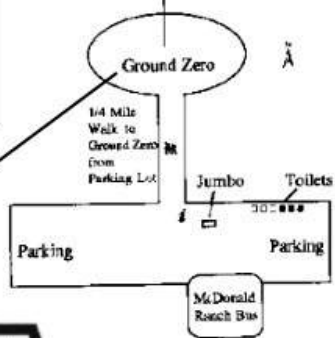
"traditional" viewpoint in Japan
[(phrase) go to Hiroshima]
implies [die]

(e.g. 夏山雑談 (1741))
natuyamazatudan, Edo period

Close



Removal
of Trinitite
Prohibited

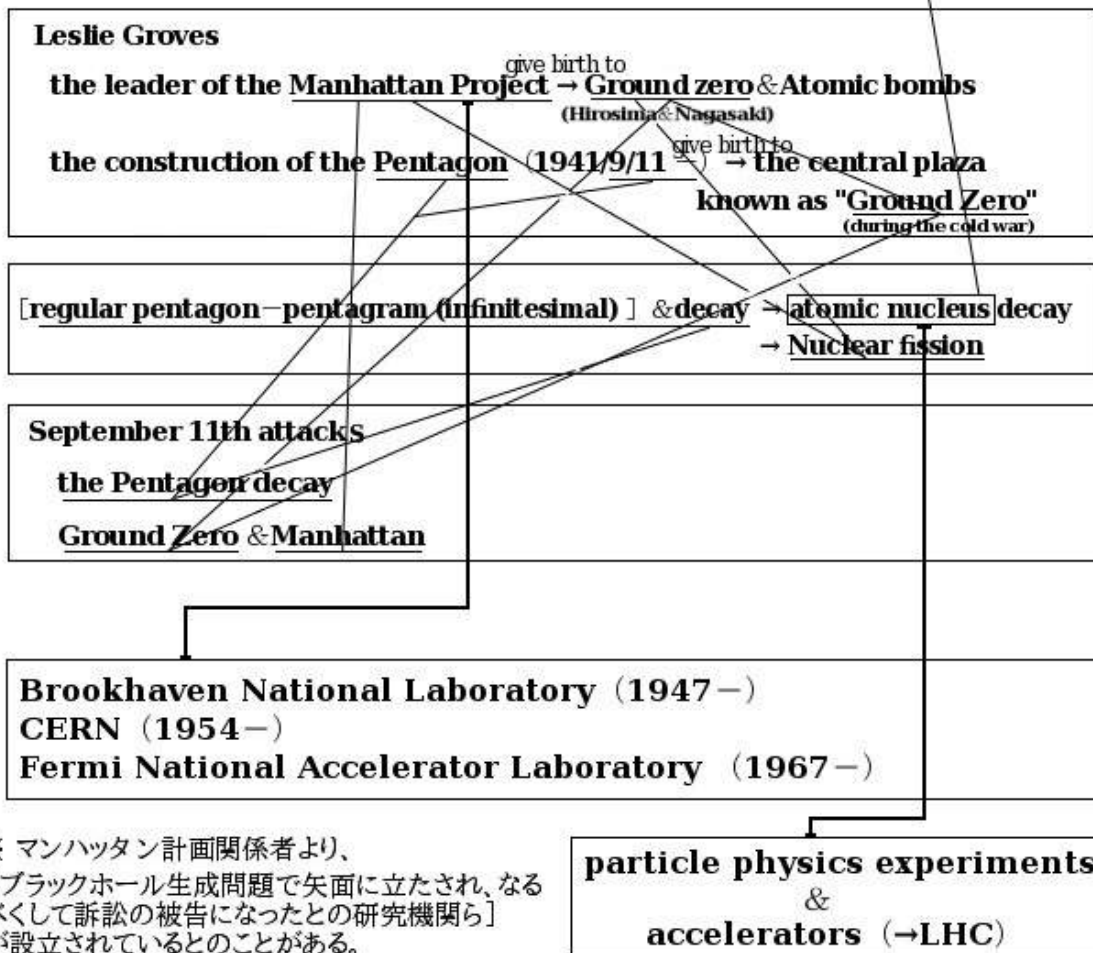
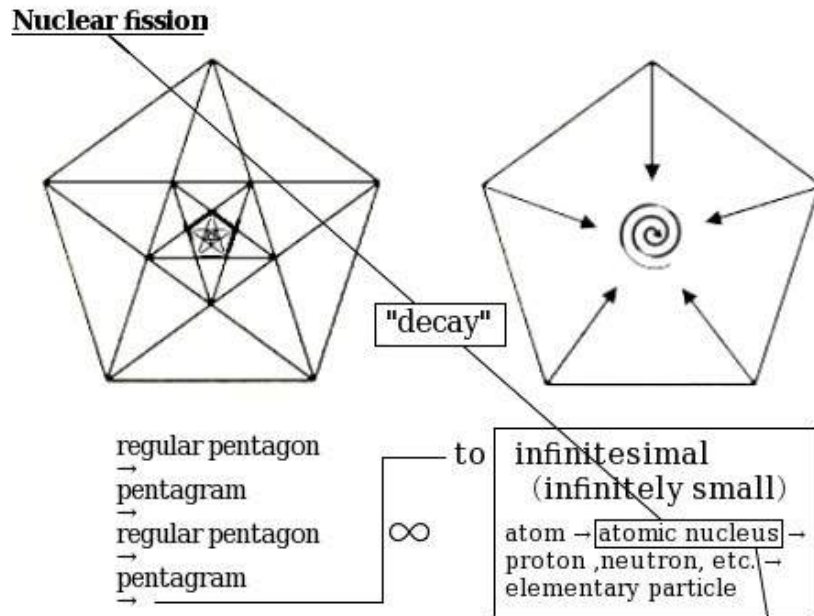


Pentagon & Ground Zero

Flag of Nagasaki City
(since 1900)
Meiji period
officially commented



(さらに挙げもしての以下の図は[本稿の補説2と振っての先だつての一連の段にてマンハッタン計画にまつわりどういった関係性が成立しているのか摘示していた折に呈示していた図]をそのまま再掲したとのものとなる)



※ マンハッタン計画関係者より、
[ブラックホール生成問題で矢面に立たされ、なるべくして訴訟の被告になったとの研究機関ら]が設立されているとのことがある。
また、マンハッタン計画にてその成果が利用されていたころの原子核領域の破壊作用は加速器「実験」(ブラックホールを生成するとされるに至った挙動)の基本となるところでもある。

**(needless to say,
[Only-conincidental] or [Deriberate] ,
that is "grave" question.**

脇に逸れての話の中で重疊的に、との式で(入れ子構造との式で)指摘すべきかと判
じての部はここまでとする

(直上までの重疊的に付記してきたとの表記がやたらと込み入りもして長くもなりもしたがここ脇に逸れての部の本題に立ち戻るとし、) ここまで述べてきたことにつきまとめでの表記を下になす。

- ・ダンテ『地獄篇』でローマ神話にての冥界の王が零落した姿とも解される存在プルートーがケルベロス登場の段のすぐ後に登場、サタン礼賛 (ダンテ『地獄篇』にて三面のケルベロスと結びつくようなかたちで登場してくる三面のルチフェロの礼賛) ともされるわめき声を上げている(出典(Source)紹介の部 90(4))。
- ・[冥王プルート]と[富の神プルートス]は同一存在と見られることが多く、彼らの神格としての習合 conflation を受けたものともされている聖域プルートニオン Ploutonionがエレウシス秘儀にあって[プルトニウム]との名称として設けられていたとのことがある(聖域 Ploutonion がラテン語に転じての plutonium となるとの言いようが存する)。
- ・エレウシス秘儀にての聖域プルートニオンのラテン語呼称プルトニウムと同じくものとなる[プルトニウム]は原爆の材料になったものであるが(そして常識上の話として原子炉の運用と密接不可分なものでもある)、そのプルトニウムの初期の塊が[デーモン・コア]などと呼ばれ、科学者らを殺した有名な臨境界事故の元となっているとのことがある。

以上、まとめでの表記から「悪魔のコア」(はじめての臨境界事故を引き起こしたマンハッタン計画遺物であるプルトニウムの塊)の問題との兼ね合いで筆者が何が述べたいのか中途半端でも想像いただけることかと思う。

『原子力テクノロジーを悪魔「的」発想法が集中しているところとしてそれを(ダンテ絡みの)冥界の王やエレウシス秘儀と結びつけようともいうのであろう?』

との観点から、である(:「ちなみに、」だが、プルトニウムを発見したグレン・シーボーグという科学者についてはカリフォルニア州にての古木が鬱蒼として茂る一画、ボヘミアン・グローブでのボヘミアン・クラブ祝祭 一真夏の夜に人形と「される」ものを異様な出で立ちの参加者が丸焼きする等のイベント内容が隠し撮りされ(流通隠し撮り画像に見る「ギャー」との叫びの[効果音]も堂に入っている)、物議を醸しているとの祝祭 一にての集(つど)いでまだ大統領になっていなかった若き日のニクソン、そして、まだ大統領になっていなかった俳優時代のレーガンと一緒に映っている写真が流出して「大統領選もすべて出来レースか」との論調が呈されることになったとの人物である(Conspiracy theorists 陰謀論者らの話柄に留まっているのではないか?と思われる

かもしれないが、Bohemian Grove, Glenn Seaborg, Richard Nixon, Ronald Reagan など入力しながら Google エンジン検索を突き詰めてなしていけば、ボヘミアン・グローブという場でのプルトニウム発見者シーボーク、「大統領になる前の」ニクソン、「大統領になる前の」レーガンらが一堂に会しそして歓談しているさまを写し取った写真が同定・捕捉できるところではある／ちなみにボヘミアン・グローブでのボヘミアン・クラブでの集いが(シーボーク発見のプルトニウムがその発見自体、秘匿化される中で供されたとの)[マンハッタン計画]の推進に大きな貢献をなしたとのことは 一同じくもの集いのある種、グロテスクな側面がいまだもってしてヴェールに覆われていた時分よりよく知られた[史実]の問題として諸所にて解説されているところである)。だからといって、そうした陰謀論「がかった」とのことまでを容れてほしいのことはここでは強要「しない」。そも、そうしたことを強要する必要とてない程、現在の状況は我々人類にとって悲観的にならざるをえぬもの、切迫したものであること、明確化しきっていると[具体的論拠の山]より判じきるとのありようにまで至っている人間としてそれも申し添えておく 一はきと述べ、為政者ら・強力なオルガナイザーの類が[どうしようもない傀儡(くぐつ)]であろうとなかろうと現在現況のありようがそれに対処しなければ[滅]しかないとの致命的状況にあることに変わりはないと判じられるだけのことである(ただし、為政者らの相応の特性およびこの世界の常識・建て前論を支えるシステムがその背面でいかに腐敗していて愚劣なるものかとのことを可能性論としてでも示すことはイギリスのアクトン卿に由来する格言、「絶対的な権力は徹底的絶対的に腐敗する」ではないが、[状況に対応する上での採択する限りのオプション]を選択するうえでためになる判断材料かとは思ひもし、ここでは表記の如き話をもなすこととした、相互不信・社会的分断をいい加減なやりようでのみ醸成しているその実の悪霊に憑かれたが如く者らと見えもする陰謀論者らやりようを心底忌みつつも、なすことにしたとのことも一応、断っておく一)。

直上にて挙げた、

[[「読み手の筆者ありうべき見立てを代弁しての見方 一『原子力テクノロジーを悪魔「的」発想法が集中しているところ悪者としてそれを冥界の王やエレウシス秘儀と結びつけようともいいうのであろう?』一]

だけでは問題となることの本質部をいまだまったく押さえていないのものとなる(:そも、『プルトニウムに先立つ原子番号 92 のウラン Uran が天王星 Uranus から命名され、かつ、原子番号 93 のネプツニウム Neptunium が海王星 Neptune から命名されているのであるから、原子番号 94 のプルトニウムが冥王星 Pluto からその名を命名されているというのは[土星→天王星→海王星→冥王星]と外延領域に星が連なっている太陽系の配置構造上、さして奇異・不思議ではないことだろう』と思われる向きも当然にあるだろう)。

その点、ここでの話が「真に完結する」のは

I. 「ブラックホール理論の深化、そして、ついにはブラックホールを生成するとの可能性が関係者にも「予想外に」取り沙汰されることになったとされる実験機関の産みの親がプルトニウムと結びつくマンハッタン計画となる」(既に本稿にての先行する段、[出典\(Source\)紹介の部 84](#)で細かく、また、長々と指し示していることである)

II. 「女神イシスという存在と結びつけられてきた天体関連事物が「これ奇怪にも」とのかたちで先覚性を伴ってブラックホール理論の沿革と関わっているとのことが現実に容赦なくも存在している」(そのような奇態に響こう

との申しようが具体的かつ説得力伴うかたちでなせるのかの典拠は本稿の後の段にて詳しく挙げる)

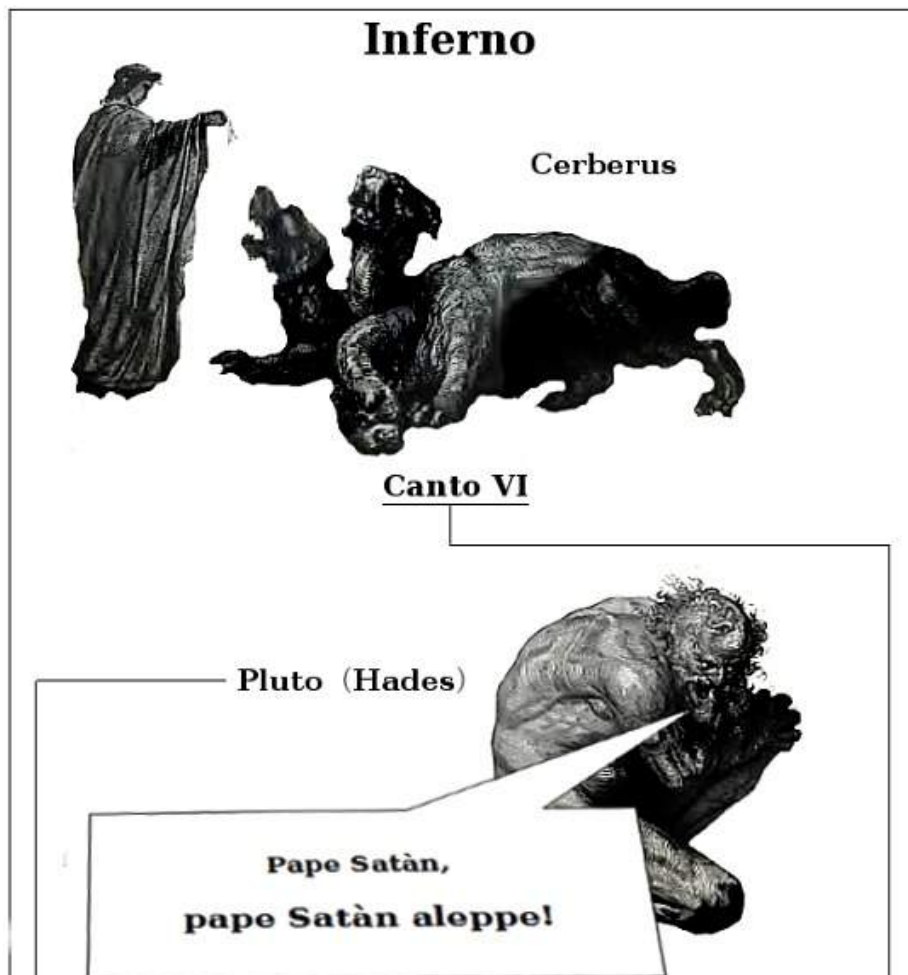
III. 「[イシスという女神の質的同等物たる存在(出典(Source)紹介の部92)となっているデメテル]の息子がプルートスである。そのプルートスと同一視されてきたプルートに由来するプルトニウムがディーモン・コア(悪魔のコア)との名称と結びつけられており、ラテン語プルトニウムを聖域の呼称とする冥王プルトの零落した存在とも介される怪人に称揚されている(ととれる)ダンテ地獄篇の冥界の中枢存在ルチフェロ(悪魔の王)がどういわけなのか今日的な意味でのブラックホール理解と同様の特質を帯びているとのことがある」(出典(Source)紹介の部 55 から 出典(Source)紹介の部 55(3))

との各要素全てを押さえればこそ浮き上がってくるとの、

[[イシス][イシスと同一視されてきたデメテル・ペルセポネ母子][デメテルの子とされる富の神プルートスと習合しての冥界の王たる)プルート][ブラックホール]を介しての不快な相関関係]

についてそれが偶然で済むのか、それで済まないのかとのことにまつわっての事柄らの証示(そして読み手サイドの検討)が遺漏なくもなされたときである。

以上、述べた上で[布石]としての多少脇に逸れての話を終える。



pape Satàn aleppe!

(the opening line of) Canto VII

Plutus

(although [Pluto] is not equal to [Plutus] , they are interchangeable)

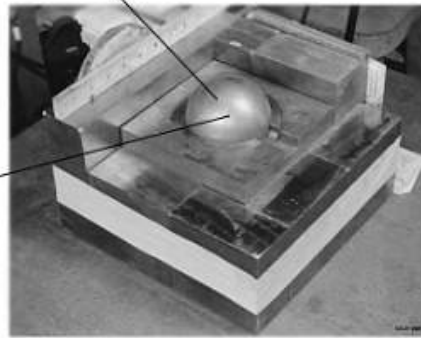
"Pluto (Greek: Πλούτων, Ploutōn) was the ruler of the underworld in classical mythology. The earlier name for the god was Hades, which became more common as the name of the underworld as a place. In ancient Greek religion and myth, Pluto represents a more positive concept of the god who presides over the afterlife. Ploutōn was frequently conflated with Ploutos (Πλούτος, Plutus), a god of wealth, because mineral wealth was found underground, and because as a chthonic god Pluto ruled the deep earth that contained the seeds necessary for a bountiful harvest."

—Wikipedia [Pluto] article
(based on William Hansen, Classical Mythology: A Guide to the Mythical World of the Greeks and Romans)

the son of Demeter
(the god of wealth)

(derivative)

Plutonium



Demon Core

(脇に逸れての話から [ペルセポネ⇄ヘカテ⇄ケルベロス] にまつわる関係性について今まで指し示してきたところの本題に戻るとし)

さて、(直近までの多少脇に逸れての冥王プルートーにまつわる冗長ともなった話を「すべてなかった」「存在しない」とのことにしたうえでも —現実にはそれは確としてあることなのだが、敢えても無視して存在していないとのことにしても—) 次のことらを呈示した段階でさらに先へと話を進めるための [前提条件] は揃っている。

「エレウシス秘儀でその存在が極めて重要となっている女神ら、デメテルとペルセポネについては[母子分かたれずに本来的に一体としての存在]であるとの見立てが存在する」

「両者一体の存在と見らもするデメテル・ペルセポネは古文献それ自体のレベルで女神イシスと結びつく存在であるとの言及がなされている」

「デメテル・ペルセポネ両者およびイシスとの結びつきに関しては[ヘカテ]という女神もその結びつきの環に入ってくる」

「デメテル・ペルセポネ両者およびイシスと結びつくヘカテという女神に関しては[ヘラクレス 12 番目の功業にて登場した犬の怪物ケルベロス]にそれ自体で接合する存



Persephone



Isis



Hecate

上図にて端的に強調しているように「ヘカテ」と「ペルセポネ」の関係性に「イシス」というギリシヤ・ローマへのエジプトからの渡来神の問題も明確に関わっているとのことがあること、その点についての多角的なる論証を試みてきたというのが本稿補説3の段にてのここまでの[A]の部と振っての部、出典(Source)紹介の部92から出典(Source)紹介の部94(3)を包摂する解説部である(：該当解説部では「ローマ期の特定古典で「三面構造との語句と結びつけられているペルセポネ」と「ヘカテ」がそれぞれ「イシス神」と同一視されている」、「イシス」の放浪の物語が「ペルセポネと同一視される存在でもあるデメテル」の放浪の物語と細部に至ってそっくりのありようで伝わっている」、「デメテル・ペルセポネ母子に対するエレウシス秘儀とイシス崇拝にての秘教会が古典そのものの中で対応付けされている」といったことらを典拠を仔細に挙げながら指し示している)。

上のことが

「個人主観など問題にならぬところで具体的かつ客観的に申し述べられるところ」

となっているとここに至るまでに指し示しているとのことがあるがゆえに、

「核(コア)となる話(仔細に「前提条件」を示した上で話を進めないと話者の正気が疑われるような筋目筋合いの話)」

がなせるようになった(と申し述べる) —— 続く [B] 以降ではその[核となる話]を強くも指向しての指し示しをなしていくこととなる——。

いわばもの予習のようなところとして申し述べるが、その、
[核となる話(だが、複雑な話でもある)]
とはおよそ次のようなことである。

既述のようにダンテ『地獄篇』では重力の中核にて人類の裏切り者らを永劫に粉碎し続けているとの三面構造(ケルベロス構造)の地獄の王たるルチフェロが登場する。そのルチフェロの領域にて「本稿の先の段にて入念に解説したこととして、」

[今日的な意味で見たブラックホールの「類似物」への言及]

が奇怪なことに多層的に見てとれるとのことが「ある」わけだが(本稿にての**出典**(Source)紹介の部 55から**出典**(Source)紹介の部 55(3)を包摂する解説部にて詳説の通りである)、そのことにも通底するところとして、

「**[三面構造をとるケルベロス][冥界の犬][イシス]らの全てを[(ブラックホール理論の開闢ともつながっている)特定天体の特性]と関連づける**

との「ある程度、見るべき論拠に依拠した」申しようが(一部の人間に知られているところとして)存在している。

具体的には 一筆者はそうした見解を容れているわけ「ではない」のだが—

[先史時代の人類文明に対する異星の知的生物介入理論]

などを広めるとのことをなしたとのロバート・テンプリという論客由来の書籍、欧米圏にて物議を醸した書籍たる、

The Sirius Mystery 『シリウス・ミステリー』(原著 1976 年初出)

との著作に見る申しようが

「**[三面構造をとるケルベロス][冥界の犬][イシス]らの全てを[(ブラックホール理論の開闢ともつながる特定天体(白色矮星シリウスB)の特性]と関連づける**

ものとして存在しているとのことがある(：本稿筆者は『シリウス・ミステリー』という書籍を読み込み、裏を取るとの式で分析対象としていたとのことがあり、同著著者ロバート・テンプリについて「たとえメーソンなりといえども(『シリウス・ミステリー』著者ロバート・テンプリについてはフリーメーソンリーに足入れしたとの弁が存在する)、
[一級の知識人](学歴が高いという意味合いではなくナレッジと思考能力の双方に恵まれたある種、ワイズな人間)であることに相違はないだろう」と感じてみいるのだが、
『シリウス・ミステリー』の[人をたばかるような欠陥性]についても(「穴が開くほどに同著を検討した人間であるから)知悉もしている —— 尚、そうも述べる人間として『シリウス・ミステリー』という著作の問題性・見るべき点それぞれについては本稿の続く段で細かくも指摘していく。さらに言い添えておくが、この身、筆者は[人間を菓籠中としている存在がエクストラテレストリアル、俗にイー・ティー、エイリアンなどとされる異星

の存在である] などということ (『シリウス・ミステリー』という著作の主要なる論点) を無条件に容れるべきだなどとのこと、そう、『頭の具合がよろしくはない』と多くの人間らに見做されるようなことを唱道しているわけ「ではない」(先に **出典(Source) 紹介の部 87(2)**、**出典(Source) 紹介の部 87(3)**と振っての段で[重力波]との絡みで観点呈示してきたように[可能性は複数ある]と解している。それら可能性のどれもが(当然にそれを観念して然るべき「具体的兆候」を伴っての)[マリオネット仮説]と接合するようなものであるとしつつも、である)——)。

そちら問題となる内容を含む『シリウス・ミステリー』という著作については、(同著、本稿の続く段にて事細かに後追い可能であるとの出典挙げながら解説していく著作とはなるが)、

[ブラックホール理論開闢史などについての言及は一切なされておらず、また、ブラックホールそれ自体への言及も全くなされて「いない」。その代わりに人類にブラックホール理論開闢の契機を与えた白色矮星シリウス B への古典内でのあからさまな言及に通ずることが「異星文明の原初地球文明への介入」との文脈にて問題視されている]

との筋目の著作となり、といった書である『シリウス・ミステリー』にあつての一部の[文献的事実]に依拠しての記載内容が

「これは『シリウス・ミステリー』著者に全くもって意図されてはいないことだろう」

との文脈で、そう、[異星人介入理論]なるものとは全く異なる側面、我々人間に押しつけられた科学教養(の中の高度なところ)に関連する領域で

[ブラックホール関連で多くを結びつける材料]

と(実にもって悪魔的に、だが)接合してしまうようになっているとのことを本稿筆者は重んじもしている —— ※[属人的主観が介在するところなどないとの根拠]と共にこれより仔細に呈示していくところとなるが、現代の科学史に細かくも目を這わせることで同じくものが分かるようになっている。[ペルセポネ]と[イシス]と[ケルベロス]の伝承上の各要素が相互に結線しながら、それがなされているは「いけなかった」往古にて[ブラックホール理論の黎明・揺籃・確立に関係している天体(シリウス伴星シリウス B)]への特殊なる言及が古典それぞれの中でのなされているとの指し示しが(表記の『シリウス・ミステリー』の中で[ブラックホール]のことを問題視していないとの別文脈の中で指摘されていることと話が通ずるような式で)なせるようになっており、よって、「この段階では、」複雑なる話、ゆえにテーゼとすれば、[消化不良を呈する]ようなところであろうと斟酌しつつもそこを敢えても述べたいところとして)、[ダンテ『地獄篇』に見る三面のケルベロス状のルチフェロにまつわるブラックホール寓意性]が[ヘラクレス 12 功業][ケルベロスとイシスとペルセポネを円環状に関係づけるものとしてのブラックホール理論開闢にまつわる天体シリウス B]と結線してしまうように多層的・複層的にできあがって「いる」とのこと「までも」がこの世界には「ある」(現行、そういうことを指摘する人間は(筆者を除き)国内外ともに絶無ではあるが、現実にはそういうことが「ある」(のでこれより詳述に詳述を重ねての解説をなしていく))——)。

こちら[A]と振っての部には本書のp.137からp.230まで、100ページ近くの紙幅を割くのかたちとなっている。

(直近、布石となることを述べた上で[A]の段を終えるとしてこれより[B]の段に入る)

B

ここ [B] と振っての部ではロバート・テンプル (Robert Temple) という論客の手になる、

The Sirius Mystery 『シリウス・ミステリー』

という書籍がいかようなものなのか、同著に対する世間的評価 —— 褒め殺しをこととするような詐狂者ら(あるいはわざとらしくもの[ウチュウジン]「信仰」信者ら)の言動「ではない」ところでは毀誉褒貶相半ばするというより「毀」ばかりが目立ちもするとの同著内容に対する世間的評価—— についての紹介をなす、表層的なところながらなすことより話をはじめることとする。

出典 (Source) 紹介の部 95

SOURCE 95



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

[**The Sirius Mystery** 『シリウス・ミステリー』 という著作の世間での理解なされよう]

について紹介なすことにする。

(直下、英文 Wikipedia [**The Sirius Mystery**] 項目より引用なすところとして)

The Sirius Mystery is a book by Robert K. G. Temple first published by St. Martin's Press in 1976. It presents the hypothesis that the Dogon people of Mali, in west Africa, preserve a tradition of contact with intelligent extraterrestrial beings from the Sirius star-system. These beings, who are hypothesized to have taught the arts of civilization to humans, are claimed in the book to have originated the systems of the Pharaohs of Egypt, the mythology of Greek civilization, and the Epic of Gilgamesh, among other things. Temple's theory was heavily based on his interpretation of the work of ethnographers Marcel Griaule and Germaine Dieterlen.

[...]

The “mystery” that is central to the book is how the Dogon allegedly acquired knowledge of **Sirius B, the white dwarf companion star of Sirius A, invisible to the naked eye**. Temple did not argue that the only way that the Dogon could have obtained what he understood to be accurate information on Sirius B was by contact with an advanced civilization; he considered alternative implausible possibilities, such as a very ancient, advanced, and lost civilization that was behind the sudden appearance of advanced civilization in both Egypt and Sumeria.

(訳として)

「**The Sirius Mystery** はロバート・テンプル (注: 同ロバート・テンプルの字面の肩書きとしてはペンシルヴァニア大でサンスクリットや東洋学を学問として修めた後、(参入規制は日本の物理学会のように緩いようだが)、王立天文学会の正会員となっているとの人物となる) によってマーティン・プレス社より1976年にはじめて敢行された著作である。

同書は西部アフリカ、マリにあつてのドゴン族が [シリウス星系に由来する地球外知的生命体とコンタクトをなしたとの伝統] を保持していることを呈示しようとの書籍である。

同書にては [人類に技術を授けたとの仮説が呈されるような存在ら] が他の事柄ら、エジプトのファラオ制度、ギリシャ文明にての神話、ギルガメシュ叙事詩までを創造したとの主張がなされている。

... (中略) ...

同書の主軸をなす [ミステリー] とはドゴン族の者達がどのようにして**シリウス A の伴星にして肉眼目視不可能な白色矮星たるシリウス B** の知識を得たのか、とのことになる。テンプルは (アフリカ・マリ) のドゴン族がシリウス B に関する正確な情報と彼が理解するところのものを手にしていることにつき、[より先進的な(欧州の)文明との接触]を唯一無二の方法として論じておらず、代わりに [(俗人には)信じがたいといった可能性ら]、たとえば、エジプトおよびシュメールにての進歩した文明、それら突如出現したとの文明らの背後にあつての太古にて進歩していた、かつ、失われた文明のようなものにまつわる [(俗人には)信じがたい可能性ら] に思いを巡らしている」

(訳を付しての引用部はここまでとする —※—)

※補足として

以上のように概要表記される『シリウス・ミステリー』については同じくもの

英文 Wikipedia [The Sirius Mystery] 項目

に批判的視点、Criticism となるところも記されており、(同項目にあつては今まで記載内容が有為転変としてしていることもこちらで把握しているわけだが)、「現行の」そちら批判についての記載内容を補足として下に引いておくこととする。

(直下、英文 Wikipedia[The Sirius Mystery]項目よりの引用をなすとして)

“ The claims about the Dogons' astronomical knowledge have been challenged. For instance, the anthropologist Walter Van Beek, who studied the Dogon after Griaule and Dieterlen, found no evidence that the Dogon considered Sirius to be a double star and/or that astronomy was particularly important in their belief system. 4 ” (訳として) 「ドゴンの民の天文学知識については検証がなされてきた。たとえば、人類学者の Walter Van Beek は[グリオールとディテルランのドゴンの研究] (注:[グリオールとディテルランの研究]とはドゴン族神話にシリウス B にまつわる知見が含まれるのはどういうことかと後に『シリウス・ミステリー』著者ロバート・テンプルに問題視されるに至った契機となっている人類学者ら研究(後述)のことである) の後にドゴン研究をなし、ドゴンがシリウスが連星系であると考えているとのことや彼らの信仰形態の中で天文学(的なるところ)が特に重要な立ち位置を示しているとのことにまつわる証拠を何ら見つけられなかった」

(引用部はここまでとする —※—)

(※Wikipedia にての表記引用部には 4 と振られての出典文書として Holberg, Jay B の手になる Sirius (2007) p176 との資料が具体的に挙げられている)

上の引用をなしたところでさらに続けて書くが、また、[Underdog(闘犬で負けるべくも用意されたが如く弱い犬)たる UFO Cult(ユーフオー信仰)に対する決めつけやりよう]のようなものとして「幾分、下卑た」(contemptible)あるいは「幾分、頭の悪い」(unintelligent)との色彩伴う批判であろうと [この世界の語られないところの現状、ゾンビワールド仮説もさもありなんといいたこの世界の語られないところの現状につき考えたことがある、知識ある人間] が見ればすぐに分かるうともとれる書きようとして次のような批判「も」同じくもの英文 Wikipedia [The Sirius Mystery] 項目上には載せられている。

“ The skeptic Jason Colavito counts The Sirius Mystery among the body of works in a tradition of ancient astronaut ideas that was ultimately inspired by H. P. Lovecraft's Cthulhu Mythos in his 2005 book The Cult of Alien Gods: H. P. Lovecraft and Extraterrestrial Pop Culture. ”

「懐疑主義者の Jason Colavito は彼の 2005 年の書籍『異星人の神々: ラブクラフトと異星人文化事象』にて『シリウス・ミステリー』をして[伝統的な古代宇宙飛行士介入説の一端をなすもの]、すなわち、[H.P.ラブクラフトのクトゥルー神話体系 (注:20 世紀米国にて隆盛を見た大衆文化事象として[クトゥルー神話の流行]というものがあり、それは大要、[グロテスクな異星種族が太古、地球圏文明に介入、同様にグロテスクな僻遠コミュニティを現代にまで残置させているといった筋立てを主軸とする荒唐無稽なフィクション体系]となる) に究極的には影響を受けているとの古代宇宙飛行士介入説の一端をなすもの]で

あるとみなしている」

(補足部として書いておくところとして) 以上の批判の内、[前者の批判 —ロバート・テンプレの話柄前提になっている民族学研究には信が置けないところがあると述べたの批判—]には見るべきところがあるのだが、[後者のような性質の批判 —ラブクラフト云々しての批判—] ([荒唐無稽な大衆文化]と[ある程度見るべきところがある高度な話柄])を一緒くたにして一味同仁とラベリングしながら総括しようとのやりよう)については本稿筆者としても一家言がある。

その点、

「筆者は ——日本の中世古文献(太平記)にすら中空に光る物体が[幻覚]として登場する、しかも、欧州の古文献と同様に疫病関連の箇所にて登場していることを指摘するような人間ではあるも—— 断じて[未確認宇宙飛行物体陰謀論]の唱道者などではない(I never be a UFO conspiracy theorist.)」

と申し述べたうえで強調しておくが (私をそのようなものと一味同仁に見せたいものらがいるとすれば、そのようなものらは(そうした類がいかにかに一誠もないとのありようで力(りき)んで味方であるように偽りをなそうが行為でそれと知れようとの)筆者敵手としての存在 —種族(人類)を裏切って嘲笑われながらも殺されるような筋目筋合いの者らともとらえるが、巻き添えにされるとのゆえになんら溜飲が下がることもないとの厄介な者らとも筆者が見るような類— である)、

「世間一般では宇宙人陰謀論なるものが相応の人間達によってこれぞ Freak show (畸形を売り物にするショー) といった話柄で [世の中について自分の頭で考えることをしない人間達] [自分の眼と耳で世の中を見てこようとしなかった人間達] を対象に流布されている」

とのことがある。

だが、いみじくも [思考する人間] を自認したいのであれば、[そういう悪臭(畸形を売り物にするような者達の悪臭)を醸し出してならぬとの言行] と [そうではないまともな言辞] を一緒くたにしようとの作用が世の中には [現実に観察・指摘可能なもの] として存在しているとのことがあり、[真実] というもの —— 『ヨハネの福音書』に由来するところとしてすら「[真実] は人を自由にする」 WAHRHEIT WIRD MAN FREI MACHEN との言葉もあるが、この場合の [真実] とは宗教に狂ったような徒輩らが無理矢理に他に押しつけてくるとの類の [[戯言] としての真実] ではなく (not as religious guffs broadcasted by meme "machines")、[そうなっているところの「生の」事実らの繋がり合い] のことを指す—— が [偽りに隷従する機構への同化作用をもたらさんとしての駒となっているような卑劣な手合いら]

によって [犠牲] に供されているようなことがこの世界には往々、いや、茶飯的にある (: 情動的価値など絶無に近いとの愚書悪書ばかりをまるでけばけばしい毒性植物のような式で山積み・林立させているとの日本の書店の書架の一面にそれ専門の馬鹿者共の手仕事による相応の知的レベル・誠実さ度合いの書籍らが据え置かれているとの現状を見れば分かるもの) である。そして、筆者が怒りを禁じ得ないところとして本稿公開をなすことにしたサイトの一に対してもそういう相応のやりようの徒輩が [彼らの色(絶対に何も変えられぬとの痴人あるいは畸形を売り物にする Fleak Show の色でもいい)] を付けてきたとの節があるからこのように書いている。その点、筆者が [その実の畸形] を売り物にする相応の手合いかどうかは是非とも呈示の論拠らを

精査の上できちんとご判断いただきたいものである ——※その点もってして Truly sound people will not ignore obvious relationships indicated by quite a lot of "clear" evidence, if those relationships are connected with our lives or at least they do seem to be so. And, this long report, I declare as the author, is one which think highly of only such obvious relationships. 「本当に健全なる人間はそれが生き死にに関わるものであるならば、あるいは、少なくともそのように考えられるとの余地があるのならば、多数の「明確なる」証拠らに依拠しての明らかな関係性を無視しないだろう。そして、本稿著者として明言しておくが、本稿は事実それ自体と数多の「明確なる」証拠らによって指し示されるとの自然なる因果関係を重視するとのものである（また、述べておくが、本稿にて問題視している明確なる証拠とは歴史的記録・文献的事実・歴史的事実として即時に真正なりしと確認できる事柄らとなる。A lot of "clear" evidence in this context mean [philological truths (facts based on historical documents which can be confirmed to be "genuine" easily)] . 」 ——)

(補足はここまでとしておく)

(出典(Source)紹介の部 95 は以上とする)

さて、ここまでにて『シリウス・ミステリー』という著作につき世に流布されているところを概説したところで、以降、同著の邦訳版および原著(原著の方はオンライン上より内容確認ができるようになっている)より『シリウス・ミステリー』の問題となる箇所を抜粋、その典拠となるところの検証をも合わせてなしつつ、『シリウス・ミステリー』の「部分的に真っ当なところの」申しようが本稿のここに至るまでの指し示し事項といかように関わるのかの詳解・詳説 —後追い精査を念頭に置いての入念なる解説— を試みることにする。

まずもって、ロバート・テンブルの主張骨子だが、(先の出典紹介部にて挙げた皮相浅薄な話から再引用をなせば)英文 Wikipedia [The Sirius Mystery] にて記載されているように、

(再度引用なすとして)

“ The “mystery” that is central to the book is how the Dogon allegedly acquired knowledge of Sirius B, the white dwarf companion star of Sirius A, invisible to the naked eye. Temple did not argue that the only way that the Dogon could have obtained what he understood to be accurate information on Sirius B was by contact with an advanced civilization; he considered alternative implausible possibilities, such as a very ancient, advanced, and lost civilization that was behind the sudden appearance of advanced civilization in both Egypt and Sumeria. ” 「同書の主軸をなす [ミステリー] とはドゴン族の者達がどのようにしてシリウスAの伴星にして肉眼目視不可能な白色矮星たるシリウスBの知識を得たのか、とのことになる。ロバート・テンブルは(アフリカ・マリ)のドゴン族がシリウスBに関する正確な情報と彼が理解するところのものを擁していることにつき、[より先進的な(欧州)の文明との接触]を唯一無二の方法として論じておらず、代わりに[(俗人には)信じがたいといった可能性ら]、たとえば、エジプトおよびシュメールにての進歩した文明、それら突如出現したとの文明らの背後にあつての太古にて進歩していた、かつ、失われた文明のようなものにまつわる [(俗人には)信じがたい可能性

ら]に思いを巡らしている」

とのものだが、その部 — Weak Point 弱点ともなるところ— に関わるところの The Sirius Mystery 原著および日本にて刊行された訳書よりの数カ所よりの原文引用を（前後関係順序不同とのかたちにてながら）なすこととすることとする — ※尚、原著より原文引用なしの部はオンライン上、検索エンジンに表記の原文を入力することで原著にそのようなことが実際に記載されていることが（欧米圏の書籍に対する取り扱い形態より）「現行は」可能となっている（そうもしたこともあってわざわざ原著よりの原文引用をもなしている）— 。

出典 (Source) 紹介の部 95 (2)

SOURCE 95(2)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典 (Source) 紹介の部 95 (2) にあつては

[The Sirius Mystery 『シリウス・ミステリー』 という著作にあつての込み入つての主張内容]

について「当該の著作それそのもの」よりの原文引用をなす — オンライン上より該当文言確認できるとの原著および国内にて流通しているとの訳書双方よりの原文引用をなす— との式にて紹介なしておくことにする。

(まずもって直下、オンライン上より該当部文言で検索なすことで確認できるところの The Sirius Mystery 原著の冒頭部、What is the Mystery? と表記の部よりの抜粋をなすとして)

Arthur pointed out to me a passage he had just read in this chapter, in which these anthropologists were describing the cosmological theories of the Dogon. I shall quote the paragraph which I read then, which first brought to my attention this whole extraordinary question, so that the reader will begin this subject just as I did, with this brief reference:

'The starting-point of creation is the star which revolves round Sirius and is actually named the "Digitaria star"; it is regarded by the Dogon as the smallest and heaviest of all the stars; it contains the germs of all things. Its movement on its own axis and around Sirius upholds all creation in space. We shall see that its orbit determines the calendar.'

That was all. There was no mention by the anthropologists of the actual existence of such a star which revolves around Sirius. Now Arthur Young and I both knew of the existence of the white dwarf star Sirius B which actually does orbit around Sirius. We knew that it was 'the smallest and heaviest' type of star then known. (Neutron stars and 'black holes' were not much discussed and pulsars had not yet even been discovered.) We both naturally agreed that this was a most curious allusion from a supposedly primitive tribe. How could it be explained? I had to let the matter drop, due to other activities and concerns at that time.

(『シリウス・ミステリー』原著よりの引用はここまでとする)

以上の部について日本にて出されている邦訳版『知の起源 文明はシリウスから来た』(角川書店)の該当部よりの抜粋も直下なしておく。一※日本にての「色物がかかったもの」を過度に「是」とする出版カルチャーをまさに体現しているとの装丁の書籍であるため(そのタイトルからして『知の起源 文明はシリウスから来た』などと「断定調」が用いられていることにも「相応の背景」があると筆者は見ている)、邦訳版よりの引用には逡巡するところがあったのだが、「文献的事実」の問題を掘り下げるために邦訳版『シリウス・ミステリー』からの原文引用をもなしておく。

(直下、上の原著引用部に対応する訳書『知の起源 文明はシリウスから来た』p.7からp.8よりの引用として)

アーサー・ヤングは世界中の様々な神話に興味を持っていた。小部族の神話も彼の興味の対象であり、私にアフリカの諸部族の神話を紹介した『アフリカの世界』という本を教えてくれた。その本の中に、ドゴン族という小部族に関する一章があった。マルセル・グリオールとジェルメーヌ・ディテルランというフランスの人類学者が書いたものだった。

アーサーによれば、それはドゴン族の宇宙論について調査したものであるという。その一章を実際に行ったとき、その中の一パラグラフが私の目を引いた。それが私の長年にわたる研究の始まりだった。

シリウスの周囲を廻る「ディジタリアの星」と呼ばれる星が創造の出発点である。ドゴン族によれば、この星はすべての星の中で最も小さく、最も重い星であり、すべての種子を内包しているという。その自転し、シリウスの周囲を廻る動きは、宇宙におけるすべての創造を支えている。その星の軌道は暦を決定する。

この「ディジタリアの星」(シリウスB)なるものが実在するか否か、二人の人類学者は言及していない。当時、私もアーサーも、シリウスBという白色矮星がシリウスの周囲を公転していることを知っていた。また、白色矮星が「最も小さく、最も重い星」であることも知っていた(当時は、まだ中性子星やブラックホールのはあまり知られておらず、パルサーに至っては発見すらされていなかった)のである。

(訳書よりの引用部はここまでとしておく —※—)

(※直近引用部に対して注記なすべきかととらえたところとして以下のこと、記しておく。

・引用部に認められる[アーサー・ヤング]という人物はフィラデルフィア大にて the Foundation for the Study of Consciousness との機構の旗振り役をやっていたとの縁にてフィラデルフィア大卒のロバート・テンプルと接触があったと『シリウス・ミステリー』の中で言及されている人物となり、同男、[米国にての実用的ヘリコプター機構の革新的考案者]としてよく知られている人物とされる(英文ウィキペディアに同人物にまつわっての一項目がそちらヘリコプターにまつわる記述が目立つかたちで設けられている)。

・上の引用部ではテンプルによって「また、白色矮星が「最も小さく、最も重い星」であることも知っていた(当時は、まだ中性子星やブラックホールのはあまり知られておらず、パルサーに至っては発見すらされていなかった)のである」との申しようがなされているが、テンプルはその一箇所を除き中性子星やブラックホールといったものに対する言及を一切『シリウス・ミステリー』文中でなしていない(と本稿筆者は精査して捕捉している)。そうしたことがある一方で本稿にあっては[ブラックホール理論開闢史]が人類にあって具現化した現代科学史にあって[シリウスB]と現実に「密接に」結びついているとのことを(いくつもの関連するところの理由あって)問題視するとのものである。

・上記の通り、テンプルは先達にあたるマルセル・グリオールとジェルメヌ・ディテルランの研究に基づいて[ドゴン族はシリウスの伝承を不可思議に語っている]とのことを述べているのだが、テンプルは彼・彼女ら民族学分野の先達は「そういうシリウスとドゴンとの奇怪なる関係性につき問題視しつつ」[プロの学者]として地球外文明介在説など述べることにはしていない、と続く後の段にて ——ディテルラン著書の The pale fox『青い狐』(1965年)内容に言及しつつ—— 書き記している(: Robert Temple は “ This book, by Griaule and Dieterlen, was produced ten years after the death of Marcel Griaule himself. It contains Mme Dieterlen's latest reflections on the Sirius system of the Dogon. ” と表記した後、“ But like a true professional, Mme Dieterlen merely cites the astronomical facts in this way in a short appendix at the back of her book without drawing any conclusions or even indicating the connection of this subject with the Dogon's traditions. [. . .] In fact, lest the reader assume otherwise, I must make clear that neither Marcel Griaule nor Mme Dieterlen has at any time (to my knowledge) made any claim of extraterrestrial contact to do with the Dogon. ” と The

Sirius Mystery の THE KNOWLEDGE OF THE DOGON の段、p.27
中で書き記している。その含みは明確で、[プロフェッショナルがそういうことをやればその方面より排除されるとの無言の圧力が働くこと]、そうした風潮の存在を所与のものとするスタンスの明示が —「自分はそうしたスタンスから自由である」と述べたいのかとのかたちにて— 著者
テンプルによってなされているとのことである)

さらにロバート・テンプル『シリウス・ミステリー』にあつての同書が拠って立つところの視点に対する引用を続ける。

(直下、The Sirius Mystery 原著の The Knowledge of the Dogon と表記の部よりの抜粋を
なすとして)

So we see the Dogon presenting a theory of Sirius B which fits all known scientific facts, and even some which are not known it presents as well. **They know that the star is invisible, but they know it is there nevertheless. They know that the star's orbital period is fifty years, which it really is. They know that Sirius A is not at the centre of its orbit, which it is not. They know that Sirius A is at one of the foci of Sirius B's elliptical orbit, which it is. They know that Sirius B is the smallest kind of star, which it is (barring totally invisible collapsing neutron stars). They know that Sirius B is composed of a special kind of material which is called sagala, from a root meaning 'strong', and that this material does not exist on the earth. They know that this material is heavier than all the iron on earth, etc.,** all of which is perfectly true. For Sirius B is in reality made of super-dense matter of a kind which exists nowhere on earth.

(検索エンジンなどにてのテキスト入力を通じてオンライン上より内容確認できるとの原著よりの引用部はここまでとしておく)

(上の原著引用部に対応する邦訳書『知の起源 文明はシリウスから来た』[第一章 ドゴン族の天文学] p.75 特定部よりの原文引用を下にてなしておく —(尚、日本にて流通を見ている訳書には誤解を招くような「文明はシリウスから来た」などと断定形が用いられているが、原著は[仮説]を強くも主張するとの体裁をとっている)—)

ここで、ドゴン族のシリウス B に関する知識を整理してみることにしよう。**ドゴン族は、シリウス B が肉眼で見えないにもかかわらず、厳然として存在することを知っている。また、シリウス B 公転周期が五十年であること、シリウス A は軌道の中心ではなく、楕円軌道の焦点の一つであるとも知っている。さらに、シリウス B が最も小さいタイプの恒星であること、「サガラ」(この単語の本来の意味は「強い」という地球上には存在しない特殊な物質で構成され、それが地球上のすべての鉄の重さに匹敵するほど重いことも知っている。これらはすべて事実である。殊に「サガラ」に関する理解は実に正しい。シリウス B は地球上に存在しない超高密度の物質で構成されているのである。**

(訳書よりの引用部はここまでとしておく)

※上の抜粋部に対する補足として

ここでは〔白色矮星が最早、核融合をなせずに超高密度状況をきたしている電子縮退圧 (electron degeneracy pressure) によってのみによって支えられている状態にあること〕をあからさまに示唆するようにドゴンがシリウス B が〔重量が極めて重き物質サガラ〕によって構成されていると把握しているとのロバート・テンブル申しようについての注記をなしておく。

については即時に確認いただけようところとして英文 Wikipedia [White dwarf] 項目の内容を掻い摘まんで引用するとして

“ A white dwarf, also called a degenerate dwarf, is a stellar remnant composed mostly of electron-degenerate matter. They are very dense; a white dwarf's mass is comparable to that of the Sun, and its volume is comparable to that of the Earth. [. . .] The material in a white dwarf no longer undergoes fusion reactions, so the star has no source of energy, nor is it supported by the heat generated by fusion against gravitational collapse. It is supported only by electron degeneracy pressure, causing it to be extremely dense. ”「白色矮星というものは縮退する矮星と呼ばれるものとなり、電子が縮退しての物質にて主として構成されているとの恒星の残滓となる。それらはとても高密度であり、地球程度のサイズの白色矮星が太陽と同程度の質量に相当するとのかたちとなっている。…(中略)…白色矮星にあつての物質は最早、核融合反応を呈することをなさず、であるから、同恒星はエネルギーの源を持たず、また、重力崩壊に抗するものとしてのエネルギーを生成する熱によって支えられてもいない。白色矮星を支えているのは唯、電子の縮退圧、超高密度状況をもたらしているそれのみである」

とある通りである (: 同様にオンライン上より即時確認いただけようところより引くとし、和文ウィキペディア[白色矮星]項目にて(上のことの結果として)“白色矮星は、恒星の進化の終末期となりうる形態の一つ。質量は太陽の同程度から数分の 1 程度と大きい、直径は地球と同程度かやや大きいくらいに縮小しており、非常に高密度の天体である”との趣旨と記載されている通りのものが白色矮星である)。

といった「非常に重い」星たる白色矮星たるシリウス B についてロバート・テンブルは「ドゴン族にてそれ絡みのものとしか思えぬ先覚的知識が克明に保持されている」との申しようをなしているわけだが、同じくものことについては、テンブル自身がはきとそのように申し述べているようにロバート・テンブルが初めて唱道したところではない。ロバート・テンブルは先達の人類学者らの申しよう——ドゴン族に対するフィールド・ワーク調査を行ったマルセル・グリオールおよびジェルメーヌ・ディテルランらフランス人民族学研究者らの研究報告に見る申しよう——をそのまま踏襲して話を展開しているのである。

ロバート・テンブルに先立つところとしてマルセル・グリオール及びジェルメーヌ・ディテルランがシリウス B に比定される [不可視]かつ[極めて重い物質にて構成されている]天体にまつわる神話をドゴン族が有していたことにまつわる調査結果を出していたとのことは、(下にて表記の抜粋英文テキストをオンライン上検索エンジンに入力することでそういう申し分がなされていること、現行にてはそのままに確認なせるところとして)、The Sirius Mystery 原著にての The Knowledge of the Dogon の節にて、

(直下、引用なすとして)

“ The Dogon describe Sirius B as 'the infinitely tiny'. As we know, Sirius B is a white dwarf and the tiniest form of visible star in the universe. But what is really the most amazing of all the Dogon statements is this: 'The star which is considered to be the smallest thing in the sky is also the heaviest: "Digitaria is the smallest thing there is. It is the heaviest star." It consists of a metal called sagala which is a little brighter than iron and so heavy "that all earthly beings combined cannot lift it". In effect the star weighs the equivalent of. . .all the seeds, or of all the iron on the earth . . .' (**all this from the following article by Griaule and Dieterlen**). ” 「ドゴンはシリウス B を [無限小といった小さきもの] として表している。我々が知るようにシリウス B は白色矮星であり宇宙にて何とか視認可能な星の中で最も小さい形態をとるものである。しかし真にドゴン申しようで驚くべきは次のことだ。「空にあって最も小さいと考えられるその星はまた最も重いものである。[デジタリアはそこにあるものの中で最も小さい、そして、最も重いものである]。それはサガラと呼ばれる金属、鉄より幾分光沢があり、そして、地球のすべてを集めてもそれを持ち上げることがあたわぬような重さを有しているとの金属によって構成されている。そのなすところによってその星(デジタリア)は地球上にてのすべての種子ら、すべての鉄と同等の重さを呈する・・・(これはすべて続いて述べるグリオールとディテルランの記事にて依拠していることである)」

と述べられているところである (ポイントは「これはすべて続いて述べるグリオールとディテルランの記事にて依拠していることである」との箇所である)。

追記として:ここではロバート・テンプルによって先達としての研究者であると述べられているところの人類学者マルセル・グリオール及びジェルメーヌ・ディテルランの手になる洋書としての The Pale Fox (仏語タイトルは Le Renard Pâle) およびその訳書(せりか書房との出版社より出されているまじめな民族学関連書籍としての体裁をもった訳書)の内容も引いておくこととする。

すなわち、

「ドゴン族が [シリウスの伴星(と呼ばれるところの星)] を [フォニオの星] と呼んでいる」

とグリオールおよびディテルラン (後述のようにグリオールの方はフランスにて一時、声望を誇った [グリオール学派] と呼ばれる学統の元となっている有力民族学学者である) が伝えていることを前提にしたうえで読み解くべきところの英訳書および訳書の The Pale Fox (仏語タイトル Le Renard Pâle) 『青い狐』よりの抜粋をなしておくこととする。

(直下、THE PALE FOX にての THE NOMMO'S ARK の章、p.505 よりの原文抜粋をなすとして)

b) The "star of the fonio," po tolo, turns around Sirius, sigi tolo. The revolution take fifty years. It is the most important of all the stars and plays a key role - in all the spiraling star worlds Amma formed.
An evidence of the po pilu, and born after the po had accomplished its

task it is considered to be the center of the stellar world.

The star's name connotes its priority: po, as we have seen, comes from polo, "beginning"; tolo comes from to, "deep." So, po tolo literally means "deep beginning."

The star of the po, a double of the germ of the whole creation, will also be of considerable value to human beings. Later, when they see it in the sky, it will be the testimony of the renewal of the world for them, the image of the "womb" of Amma, who preserves the basic signs for the whole creation within himself and who keeps the po pilu, which that star represents, in the sky. Therefore, one says that it is like "the egg of world," aduno talu, and like "Amma's eye," amma giri, the guide of the universe.

Because of the creative role of the po pilu, the star is seen as the reservoir or source of all things. **It is smallest, yet the heaviest, of celestial things." When the po pilu had finished making the world spin, this void transformed itself into the star of the po. Therefore, po tolo was heavy, (because) there was (in it) the remnant of the blood of the world that the spun around. (It is) the remnant of the blood of all the things it created. po tolo is the smallest of all things; it is the heaviest star."**

In its substance is evidence of everything the po pilu had contained. The star contains three basic elements, "air, fire, and water"; **the element "earth" is replaced by metal in all its forms, particularly by the metal called sagala, somewhat more shiny than iron and of such density that "all of the beings on earth together could not lift a small part of it."**

(仏語書籍の英訳版よりの引用部はここまでとしておく)

以上、オンライン上より文言確認なせるとの英訳書の内容に対応するところの訳書『青い狐』(せりか書房)よりの抜粋もなしておく。

(直下、『青い狐』[第五章 ノンモの箱船]にあつての p.452 から p.453、そこに見る [フォニオの星(=シリウス B と考えられる天体)]にまつわる記述の原文引用をなすと
して)

<フォニオの星>はシリウスのまわりをまわっている。その周期は五〇年である。これは、アンマが創造した複数の<螺旋状の星々の世界>全体にとって、最も重要な星であり、その役割は目を見張るほどのものである。白いフォニオの証拠として、それが仕事を完遂したあとで生まれるこの星は、星の世界の中心と考えられている。

この星の名前は、その性質に由来する。先に触れたように、pô は pôlo から、tolo は to<深い>から来ている。したがって、pô tolo は、文字通りに<深いはじまり>という意味になる。

フォニオの星は、創造の総体の萌芽のコピーであって、人間たちにとってきわめて重要な価値をもつようになる。後になって、人間たちは空にこの星を見ることになるが、**それは彼らにとって世界の更新の証拠となるのである。人間たちにとって、フォニオの星はアンマの<胎>のイメージ、つまり創造の全体を要約する根本的な記号をアンマが手元に保管し、この星が表象している白いフォニオを天上で保存している<胎>のイメージとなる。それだから、この星は<世界の卵>になぞえられ、宇宙を導く<アンマの目>にたとえられるのである。**

白いフォニオの創造的な役目のゆえに、フォニオの星は一切の存在

の貯蔵タンク、その源泉と考えられる。この星は天上の存在の中で最も小さいが、同時に最も重い。＜白いフォニオが世界を回し終えると、その殻がフォニオの星になった。それだからフォニオの星は重かった。(それは)それが創ったすべての存在の血の残りだ。フォニオの星はすべての物の中で一番小さい。それは一番重い星だ＞。

フォニオの星の実質の中には、白いフォニオが納めていた一切のもの証拠が入っている。それは＜気、火、水＞の三元素を含み、＜土＞の元素は、あらゆる形の金属、とくに sagala という名の金属になっている。この金属は鉄よりももう少し輝き、大変に密度が高いために、＜地上の存在が全部集まってもそのひとかけらを持ち上げられない＞ほどである。そのためこの星は重く、またその小ささのために密度が高いのである。

(訳書よりの引用部はここまでとしておく)

(より仔細なる中身に入って『シリウス・ミステリー』の解説をなすために設けた **出典**
(Source) 紹介の部 95 (2) は以上とする)

さて、フリンジの領域の話 — [常識] と [非常識] のボーダーにある話 — に職業的に異を唱えるような向きを含めての懐疑主義者ならずとも上のようなことに接すれば、

「馬鹿な。そのようなことはありえないことだ」

と声を大に喚きたくなるようなところであることか、と思う(当然であろう。そうした異議の呈しように「このような世界」での誠実性が伴っているかどうかは別としてながらもである — ※ちなみにこの身、筆者はこの世界でそれを遵守すべくものが徹底的に強いられているとの「常識から逸脱したところに対しては誠実性があろうがなかろうが無条件に(あるいは脊髄反射・条件反射的に)異を呈するようになっているとの向き」であって「も」【自身ないし自身の兒孫の命を容赦なくも奪い取るとの明言をなしているとの力学】が存在しているとのことの指し示しを「異論を赦さぬような式」で、また、「懇切丁寧かつ容易に後追い可能な式」でなされれば、なにがしかの建設的反応をなすのではないか、との(まったくもって徒(あだ)なるものであるかもしれないが)極々僅かなる期待をもってして長大なものなっている本稿をものしている — 。

その点、

[ドゴン族の神話 — 「フォニオの星はシリウス B の同等物である」云々の話に関わるところの神話 — のことをすべて無視してしまって「も」ロバート・テンブルの申しようには(同男が一切述べていないところながら)[我々を全員皆殺しにするつもりであると受け取れる最悪の寓意]との[奇怪なる結節]さえもが多重的・複合的、そして、(極めて重要なところとして)客観的に含まれていること、本稿にて後述するように「誰でも容易に裏取りできるとのかたちにて確たる文献的根拠に裏付けされてのもの」として含まれていることを「敢えても」指摘する人間]

として申し述べておくが、ドゴン族についてのロバート・テンブルの申しよう、

[先達としての二人の民族学学者マルセル・グリオールおよびジェルメーヌ・ディテルラン

(邦訳されてもいる The Pale Fox 『青い狐』 著者) の主張内容を踏襲しての申しよう]

に関しては、(その真偽どうあれ)、[威力なきもの]、すなわち、

[懐疑主義者、あるいは、信じがたいことを[「常識」の世界の保持]のために決して認めよう
としないすべての者らによる反論を目立って許す素地があるとのこと]

となっている。

にまつわっては、

[洋書 The Pale Fox に見る、論客ロバート・テンプルにその主張の核とされている申しようの
論拠を与えている人類学者マルセル・グリオールらの研究内容の真正さ]

が真偽不明なるものであること、そうもされているところの典拠を下に挙げておく。

出典(Source)紹介の部 95(3)

SOURCE 95(3)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典(Source)紹介の部 95(3) には

[The Sirius Mystery 『シリウス・ミステリー』に見るロバート・テンプル主張に典拠を与えたものとなっているフランス人民族学研究者らの研究内容に疑義が呈されるに至っており、それがゆえにロバート・テンプル主張が軽んじられる傾向がある]

このことについての典拠を紹介しておくこととする。

まずもって基本的なところとして 一媒体性質上、これより有為転変を見る可能性もあるが— 和文ウィキペディア [ドゴン族の神話] 項目にあっての「現行にての」記載内容を引いておく。

(直下、和文ウィキペディア [ドゴン族の神話] 項目にての [シリウス] の節にての現行の記載内容よりの引用をなすとして)

グリオールはドゴン族の宇宙に関する知識は西洋のそれと同様に高度であると訴えた。加えて、神話は木星に四つの衛星があると言及し、また、土星にリングがあることを言い当てていると紹介している。だが、グリオールの訴えは受け入れられなかった。グリオールがドゴン族と接触する前の 1920 年代に宣教師がドゴン族と接触している事実と、その当時に三連星説が主流であったことから疑念をもたれる。1915 年にアメリカのウォルター・シドニー・アダムズがシリウス B のスペクトル撮影に成功してシリウス B が「小さく」「重い」白色矮星であることを証明しており、報道によってシリウスの連星は広く知られている素地もあった。また、シリウスが登場する神話はドゴン族の小さな集団にしかなく、シリウスの連星に触れる神話はグリオールの取り上げたオゴトメリのものしかなかった。

(引用部はここまでとする)

以上のような申しようが表立って目につくところでも [シリウス・ミステリー] のミステリーに対する否定としてなされている。

続いて、英文 Wikipedia [The Sirius Mystery] 項目の記載内容を引く。

(直下、英文 Wikipedia [The Sirius Mystery] 項目の前半部一節を再度、抜粋するとして)

The claims about the Dogons' astronomical knowledge have been challenged. **For instance, the anthropologist Walter Van Beek, who studied the Dogon after Griaule and Dieterlen, found no evidence that the Dogon considered Sirius to be a double star and/or that astronomy was particularly important in their belief system.**

「ドゴンの民の天文学知識については検証がなされてきた。たとえば、人類学者の Walter Van Beek は「グリオールとディテルランのドゴンの研究」の後にドゴン研究をなし、ドゴンがシリウスが連星系であると考えているとのことや彼らの信仰形態の中で天文学(的なるところ)が特に重要な立ち位置を示しているとのこととまつわる証拠を何ら見つけられなかった」

(再度の引用部はここまでとする)

また、同様のことについては英文 Wikipedia [Nommo] 項目 (ドゴン族の神格 [ノムモ]) にまつわる項

目)にて

(以下、引用なすとして)

“Walter van Beek, an anthropologist studying the Dogon, found no evidence that they had any historical advanced knowledge of Sirius. Van Beek postulated that Griaule engaged in such leading and forceful questioning of his Dogon sources that new myths were created in the process by confabulation, writing that "though they do speak about *sigu tolo* [what Griaule claimed was Sirius] they disagree completely with each other as to which star is meant; for some it is an invisible star that should rise to announce the *sigu* [festival], for another it is Venus that, through a different position, appears as *sigu tolo*. All agree, however, that they learned about the star from Griaule" ” (大要とし)「ドゴン学を専門とする人類学者ワルター・ヴァン・ビークによると[グリオールがシリウスの先進知識と呼ぶものをドゴンが保持している証拠はなくグリオールがシリウスだと指摘したシグ・トロについてはドゴン族の間にそれがどの星なのかの意見の一致は全くない。シグ(祭り)を広く知らしめるために昇っている不可視の星と言うものもあるし、シグ・トロと呼ばれるものにつきそれは金星であるとする者もある。しかし、全員が同意するところとして彼らがその星についてグリオールの研究から(逆に)学んでいることである」

との申しようが [査読付きの人類学分野の学術誌 *Current Anthropology* (1991 年次 No.32 の 139 から 167 の頁)に寄せられているもの] とのかたちで出典付きで紹介されている)

その点、オンライン上より容易に確認できるところのソースとしてはシカゴ大学出版局より出されているとの Walter E. A. van Beek (上記英文 Wikipedia 項目に記載されている向きで問題となる報告時のポストはユトレヒト大の准教授か) の手になる論稿、シカゴ大学出版局にて PDF 化されて「オンライン上で公開されている」(従って誰でも全文閲覧できる)ところの

Dogon Restudied — A Field Evaluation of the Work of Marcel Griaule (『再検証されたドゴン:マルセル・グリオールの仕事の实地評価』とでも訳すべき論稿)

にての表記も下に引用しておくこととする。

(直下、オンライン上にて公開を見ている *Dogon Restudied — A Field Evaluation of the Work of Marcel Griaule* の p.149 から p.150 の抜粋として)

No Dogon outside the circle of Griaule's informants had ever heard of *sigu tolo* or *pô tolo*, nor had any Dogon even heard of *èmè ya tolo* (according to Griaule in RP Dogon names for Sirius and its star companions). Most important, no one, even within the circle of Griaule informants, had ever heard or understood that Sirius was a double star (or, according to RP, even a triple one, with B and C orbiting A). Consequently, the purported knowledge of the mass of Sirius B or the orbiting time was absent. The scheduling of the *sigu* ritual is done in several ways in Yugo Doguru, none of which has to do with the stars.

(大要訳として)「グリオールへの情報提供者以外のドゴン族の者達はシグ・トロなどシリウスに相当する言葉らについて聞いていないと述べている。最も重要なのはグリオールへの情報提供者のサークルにてあってもシリウスが二連星であること(あるいは、シリウス A に加えての三連星系)であることを聞いたとの向きがないとのこともある。結果的にシリウス B の質量に対する知識もなかったことになる。シグに関わって祭儀にて行われるとの儀式の日程もそれらシリウス絡みの星々と関連していない」

(大要訳付しての引用部はここまでとする)

要するに、

[先後関係の問題で主張が成り立たぬとする論法、[文化伝播の可能性の主張]をなされるだけの時系列的特性を伴っている]

[そもそも、誰でも確認できる確たる[文献事実] (本稿でその摘示に努めているとのフィロロジカル・トゥルース、[誰でも容易に確認出来るところとして著名な古文献や文書にこのように記載されているといった記録文献にて記載がなされているとの事実]のことに拠っているわけではなく、欧米圏にての二人の人類学者(マルセル・グリオールとジェルメーヌ・ディテルラン)による現地人に対する口承・口伝の類の調査の折における歪曲(ないし誤解)の介在として片付けられる素地が「濃厚に」ある]

とのことでロバート・テンプルの申しようは[脆弱性] (職業的懐疑主義者の類に脇腹を刺されるような[脆弱性 vulnerability]) を帯びていると申し述べられるようになっている — (※) —。

(※ちなみに同じくもの伝での[ロバート・テンプルの申しようの基礎にされているマルセル・グリオールおよびジェルメーヌ・ディテルランのドゴン族調査にあつての不確かさ]については The Pale Fox の邦訳版、『青い狐』(せりか書房)にての邦訳者によってよりも微に入つての表記が(多少、首をかしげざるをえぬ話柄を伴つて)なされてもいる。その点、邦訳版の The Pale Fox にあつては

(直下、『青い狐』(せりか書房)p.551 より引用するところとして)

著者のひとり M・グリオール(1898—1956)は、彼のもうひとつの代表的著作である『水の神』(坂井信三・竹沢尚一郎訳、せりか書房一九八一)のあとがきで紹介したとおり、フランスの第一世代の民族学者の代表的存在であり、一九四二年からパリ大学(ソルボンヌ)の民族学担当正教授の地位にあつてグリオール学派とよばれる一派を形成し、多くの第二世代の民族学者を養成した

(引用部はここまでとする)

とグリオールらが大物であるとの言及がなされている一方で

(直下、『青い狐』(せりか書房)p.563—p.564 より掻い摘まんでの引用をなすところとして)

ところでひとことつけ加えておくと、本書にはいわゆる「シリウス・ミステリー」なるものがまとわりついている。…(中略)…しかしこの「ミステリー」は、「文明から隔絶された未開人」というステレオ・タイプを前提にしたときにしかなりたない。ところが実際は、サンガのドゴン人は隔絶からはほど遠い状態にあった。歴史的な事実として、サンガにほど近いバンジャガラバンジャガラの町には植民地政府によって一九〇七年には小学校が建てられ、サンガには一九三六年以来プロテスタント系のミッションが入っており、一九四〇年には小学校ができてい(PALAU—MARTI 1957)。サンガはドゴン・ランドでも早くから開けたところなのである。一方彼らがシリウスに関する複雑な知識をもつことが明らかになったのは、一九四

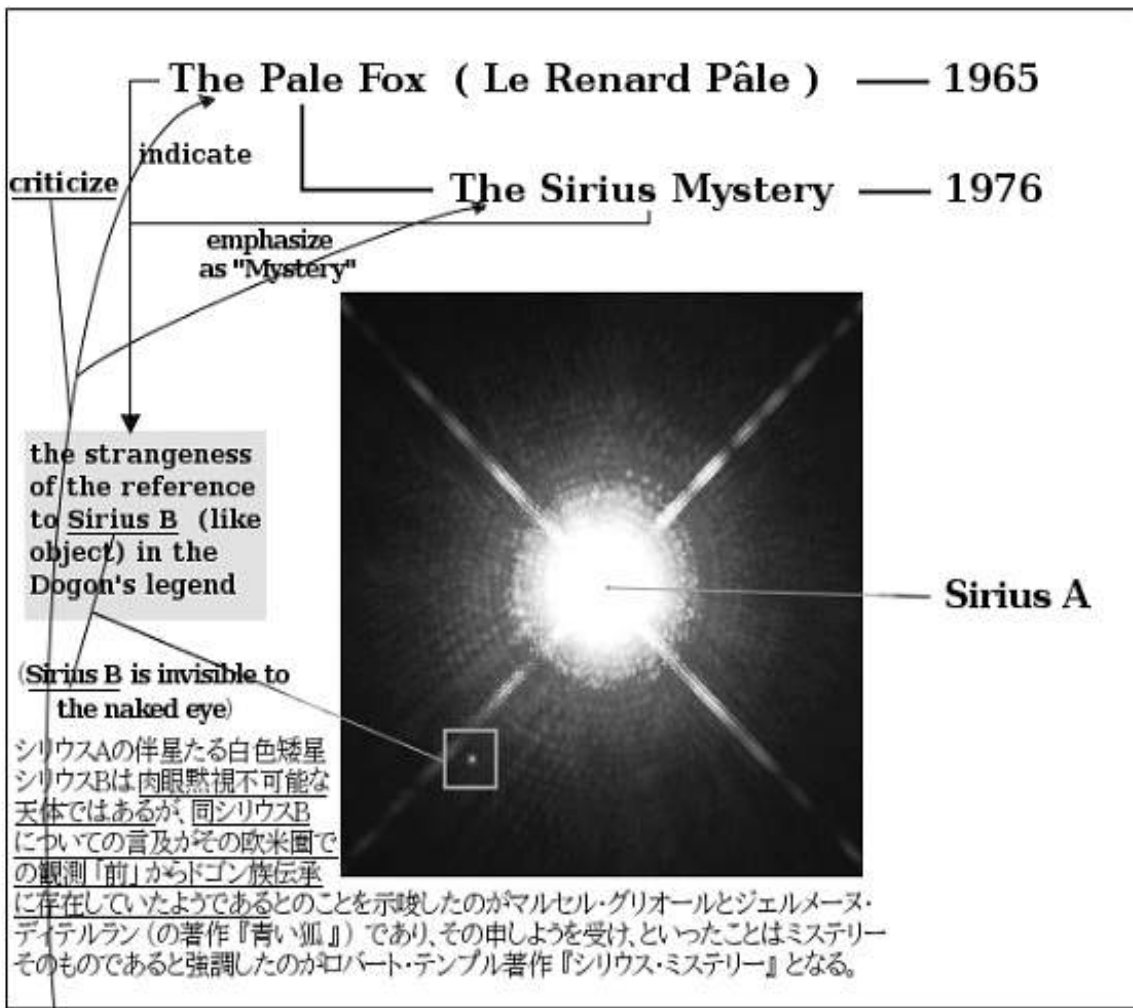
六年の調査よりもあとのことである。だからそれまでのあいだにサンガの人々が西欧の天文学に接する機会はあるに違いないと思われる。…(中略)…そのうえ本書の記述をすなおに読んでみれば、ドゴンの知識においては、シリウスにはフォニオの星、女のもろこしの星、米の星、ひえの星という四つの星があるのである。だからこの知識は、全体としてはむしろ現代の天文学の知見に符号しないというべきであり、フォニオの星に関する部分だけを取り出して「ミステリー」を云々するのは、全く粗雑な見方にすぎないことは明らかである。…(中略)…。いずれにせよ、「ミステリー」好きのSF愛好家には申し訳ないが、そうした天文学的知識が「異星人」から伝えられたものであろうが、ヨーロッパ人から伝えられたものであろうが、そんなことは大した問題ではない。むしろそうした興味本位の議論は、ドゴンの神話それ自体の価値と、それを記述したグリオールらの仕事の意味を矮小化することにしかならないだろう

(引用部はここまでとする)

とのかたちでドゴン族神話に「ミステリー」を見出すのは妥当ではないとの申しようがなされている（：「そうした天文学的知識が「異星人」から伝えられたものであろうが、ヨーロッパ人から伝えられたものであろうが、そんなことは大した問題ではない」などと「物事の重み付けに疑念符付けざるを得ない」との申しようとはなっているが、すなわち、出歯亀的とまでは言わぬも「発想の働きよう」と「誠実さ」に問題があるように書かれているところのタイプの人間、「SF愛好家」などという「まったくもってステレオタイプのなる人種」を持ち出したうえで「異星人介入の可能性」をして「どうでもいいものである」と疑念符付けざるをえない申しようをなしているものとなっているが、とにかくも、[訳者(西アフリカ史を専攻したとの学者(坂井信三(現)南山大学教授)によるシリウス・ミステリーのミステリー「否定」の解説]が付されている。

(出典(Source)紹介の部 95(3)はここまでとする)

(続けもしてシリウス・ミステリーのミステリーが何なのか、また、にまつわっての主唱者主張にどういう問題点がある(とされる)のか —ここまで解説してきたことらでもある— にまつわっての端的なる図解部を設けておく)



- 1862 : "first" observation of Sirius B (by Alvan Graham Clark)
- 1930s : Missions of Protestants to the Dogon area
- 1940s : Establishment of the elementary school in the Dogon area
- ? : [(Sirius B related) Legend] forgery (?)

(research by Griaule & Dieterlen)

シリウスBに対するドゴン族言及の奇怪性に言及している、ないしは、それを敷衍し(押し広げ)てドゴン族の伝承は人類文明初期のミステリーそのものを端的に示すものであると強調するとの式の言説に対してその批判者らは「ドゴン族には1930年代からプロテスタント系の伝道が盛んに行われ出しており、また、ドゴン族の住まう地にての拓けた領域にては1940年代には小学校までできていたのであるから、欧州にて(1915年にスペクトルが観測されて)話題を集めたとのシリウスBにまつわる情報がドゴン族に流入、シリウスBにまつわる太古の伝説が偽造物(forgery)として後付けで生成されたのであろう」との申しようをなしたりもしている。——ちなみに、ここでの記載内容はジェルメース・ディテルランの著作 Le Renard Pâle, 『青い狐』の邦訳版の刊行に関わっている国内の大学人の申し分(引用したところである)に多く依拠してのものとしてしたためている。

以上、**出典(Source)紹介の部 95(3)**にて挙げてきたようなかたちで

[ドゴン族のシリウス関連情報は情報が錯綜し、なおかつ、模糊として極めて怪しいもの]

との指摘がなされており、それがゆえにミステリーと銘打たれているところは批判を容易に許すものとなっている(正確にはそのように学者らに評価されている)。

その点、同じくものが、「(ないものねだりで)もし仮に、」

[文化伝播の主張(欧州からアフリカ・ドゴンのマリ族への文化伝播)など反論を許さないか]

たちにて問題となる伝承 —尋常一様ならざる先覚的言及を含んでいるとの伝承— が同定されているとのものとなっております]

[上にまつわる確たる文献的論拠がシリウス性質が明らかになる「以前に」取得されており、かつ、その文献的証拠が第三者に真性のものであると容易に確認されるような状況にあり]

[「後に」なるべくしてその先覚性にまつわる問題性が浮上してきた]

との類のものであれば、「話は違った」と思われるところではある（少なくともいろいろなところの働き具合のよくない人間あるいは[記録的事実]を見ることさえしないとの臆病な人間「以外の」人間が検証する限りは「話は違った」とも思われるところではある）。

たとえば、特定の[事柄A]に対する言及を含んでいるとの[文献B]が500年前より伝存しており、かつ、当時から[文献B]の原本までもがそのままに今日に伝わっているとのことにも異論が出る余地がないようになっていよう。そうした[文献B]に書かれている特定の[事柄A]が50年前に発見された科学的知見と平仄があう、あまりにも平仄があうとのことを述べているものだと判明したならば、どうか（たとえば、宇宙にてのこの境界の構造はどうなっているこうなっていると仔細に言及しているのであると判明したならば、どうか）。そして、それがおよそ偶然を許さぬ性質のものであればどうか。

そこにて問題になるのは —[具現化機序]の問題がその先にあるとして— まずもっては[操作の可能性]である。臆病な人間らは「それ(操作)を認めたならば」自分達ないし社会構造の重大なところにひびが入るとして認めない(ないしは認めることを許されていない)、あるいは、そもそも、[無視]とのかたちで情報として処理することを完全否定するかもしれないが、もし仮に、そうしたことが判明した社会に（ここではイフの話とはなるが）[操作の問題]を本当に真正面から認める力があるのならば、誰かはその意味性を認めるであろうし、また、社会も次第次第にそのことを認知・認容していくことになるだろう——対して、[操作の問題]を真正面から認める力がない社会ならば、いや、(養殖されその結果さえ見もしないとの)種族ならば、でもいいが、それを認めようとはついぞしまい。そして、筆者は[生き死にに関わる問題]に対して「も」そうなのか、突き詰めたくも非常に長いものとしての本稿を作成している——。

とにかくも、シリウス・ミステリーをミステリーたらしめる主軸となる部は不完全かつ不徹底であると申し述べられるように「なっている」(疑念があるというのならば、[出典\(Source\)紹介の部 95\(3\)](#)をもう一度見直せばよい)。

補足として

上にて言及もした[問題]と[問題となりがたいこと]の区別をつけることになる条件として要件1から要件3を下に呈示してみよう。

要件1: [特定事物を扱った文献的記録が特定の年代より存在していることがよく知られている]

要件2: [上の特定事物(伝承など事物)を収めた文献的記録が[その特定事物の問題となる点を否定するような捏造の問題]を観念できないようなかたちで存在しているとのことがある] (e.g.その文献的証拠が多数の第三者に「真性のものである」と容易に確認されるかたちでの永年、伝存を見てきたものとなっている)

要件3: [とある発見がなされて、特定事物及びそれについて言及した文献的記録に「偶然では説明できない」とのかたちでの[異様な先覚性の内包問題]が浮上してきた]

以上、要件1から要件3が全て充足しているとの事態が眼前に披瀝されたならば、[普通ならば]、そのことは当然に問題視されることになるはずである。そして、だ。そこに

要件4: [問題となる特定事物が [特定の方向性] を指しており、それは(要件3から[先覚性]が問題となっているところで) [嗜虐的な大量虐殺への言及をなす] (対象文明の成員をトロイアの木製の馬で皆殺しにする)とのものとなっている]

とのことまでを加えて考えてみよう。

以上の要件1から要件4を全て充足する特定事実および特定記録が一点だけではない、複数数多存在しており、なおかつ、それら特定事実および特定記録ら(要件1から要件4を充足するものら)が「相互に」「密接に」関係しているとのことがある — 普通人並みの事理弁識能力(日本の法律論で事理弁識能力となれば、10歳程度の児童ないし泥酔者に勝るところの認識能力とされるが、ここでは大体、義務教育課程の授業の内容を(それが「下らぬものである」と思っても)完全に理解できるだけの能力としておこう)を有していれば、そうした特定事物らが [関係性の環] をなしていることが確認できるようになっているものとする — とのことを示そう、「誰からの異論も許さぬであろうかたちにての客観性を具備した」摘示方式で指し示そうというのが本稿である。

そのように明言する(その明言が至当なるものなのか、その申しよう適切さの確認についてはここまでの文中で — 批判的検討をなしていただきたい — 何度も申し述べているところとなる)。

それにつき、テンプルらやりようとは性質的に異なるとのそうした指し示しをなしても

[敢えて話者や話柄の存在それ自体を [無視] する] (叙景的に表せば「脇を向いて相応の面構えで口笛を吹くが如くやりようをなされる」でもいい)

[証拠検討を放棄するとの式で応対される]

[まじめな話を貶めるとの褒め殺しの反応をなすだけの詐狂者(あるいは本当に頭の働き具合に問題がある、との手合い)に他の良識派ら — 仮に一派なすほどに良識人がこの世界にいれば、だが — への軽侮を誘発させるべくもの反応がなされるだけに終わる] (そうしたことをやった者達、やらせた者達の[気風]を断ずるだけの材料となる)

との相応の応対を見る可能性があるわけだが、とにかくものこととして、筆者は人間存在の限界を確認したくも(当然に「もう遅すぎる」とも考えているのだが)本稿を余力を全て投入して作成している。

(※話を進めるとのその前に補うべくもの表記をなしておくこととする。

その点、繰り返すが、ロバート・テンプルという人物は —くどくも繰り返すが— 、

[「肉眼では絶対に見えないはずの」シリウスBの存在、また、その公転周期(50年)や重量などの特性をドゴン族が昔から把握していたと主張する]

とのやりようをとっている（同男申しように見る [ドゴン族伝承先覚的側面] については元となった民族学者らの研究内容の誤りの踏襲可能性より、真実一路のものなのかは藪の中、疑わしいとのかたちとはなっているわけであるが、とにかくも、である）。

以上のテンプレの言いように関わるところでの [基本的情報の呈示] について多少、不足不備があったかと思うのでここにてほんの少々、付け足しての表記をなしておくこととしたい。

まず、シリウス伴星シリウス B の公転周期が 50 年であるとのことについてであるが、(即時に確認できる場所より挙げるとして) 和文ウィキペディア [シリウス] 項目からして伴星たるシリウス B の公転周期について「現況」右の概要記述部にて 50.09 年との表記がなされている (対して、英文 Wikipedia [Sirius] 項目では [ぶれ] を勘案しての表記として Period (P) 50.090±0.055yr との表記が「現行にては」なされている)。

何にせよ、伴星シリウス B が主星シリウス A を一回、まわり終える周期は限りなく 50 年に近い (ことがよく知られている) とのことそれ自体は事実である (: 先だってそちらからして引用なしてきた [テンプレ「的」主張 ードゴン族がシリウス B にまつわっての先覚的言及をなしているとの言いよう— への批判者ら言い分] もそうしたシリウス B の 50 年周期、それが正しいとのことまでは所与の前提としてのものとなっている)。

また、シリウス B が

[肉眼目視不可能で天体観測技術が向上を見たとの近年になるまで発見されえなかった]

とのことについても無論、容易に裏取りできるようになっている。のような中で同じくものことにまつわって珍しくも英文ウィキペディア「以上に」凝っての解説がなされているとの和文ウィキペディア [ドゴン族の神話] 項目に要を得た表記がなされていると見もしているのので、そこにての現行記載内容を引いておくこととする。

(直下、現況、長大な解説が講じられている和文ウィキペディア [ドゴン族の神話] 項目にての [シリウス] の節よりの引用をなすとして)

マルセル・グリオールはドゴン族の盲目の智者オゴトメリに取材した内容を元に、ジェルマン・ディータレンと共著で『スーダン原住民の伝承によるシリウス星系』を発表した。その研究論文では、天体の運行の秩序はシリウスの三連星のうち、宇宙で最も小さく、それでいて最も思いディジタルア星がもたらしたというドゴン族の神話を紹介している [18]。

ヨーロッパにおいてシリウスが連星であるとの説を最初に唱えたのはドイツの天文学者フリードリヒ・ヴィルヘルム・ベッセルで 1844 年のことであり、シリウス B の姿を最初に観測したのはアメリカの望遠鏡制作者アルヴァン・グラハム・クラークで 1862 年のことであるから、グリオールはドゴン族の宇宙に関する知識は西洋のそれと同様に高度であると訴えた。

加えて、神話は木星に四つの衛星 [19] があると言及し、また、土星にリングがあることを言い当てていると紹介している。

だが、グリオールの訴えは受け入れられなかった。

グリオールがドゴン族と接触する前の 1920 年代に宣教師がドゴン族と接触している事実と、その当時に三連星説が主流であった [20] ことから疑念をもたれる。1915 年にアメリカのウォルター・シドニー・アダムズがシリウス B のスペクトル撮影に成功してシリウス B が「小さく」「重い」白色矮星であることを証明しており、報道によってシリウスの連星は広く知られている素地もあった。また、シリウスが登場する神話はドゴン族の小さな集団にしか

なく、シリウスの連星に触れる神話はグリオールに取り上げたオゴトメリのものしかなかった[21]。さらにシリウスの連星に触れる神話の存在が確認されたのは1946年以降の調査のみである[22]ことから、1920年代以降に西洋からもたらされたシリウスの連星の情報が神話に取り入れられた可能性が高いと考えられている。

その後もグリオールら人類学者、オーパーツへの興味を持つ者たち[23]が神話の採集を続けたが、グリオールの考えを裏付ける新たな神話は見つかっていない[4]。11年間、ドゴン族と生活を共にしたベルギーのワルター・ヴァン・ビーク、同じく10年間神話の採集をしたジャッキー・ボウジョは「存在しない」と結論づけている[24]。

(引用部はここまでとしておく ー※ー)

(※尚、ウィキペディア記載の上引用部に付されての出典番号[4],[18],[19],[20],[21],[22],[23],[24]に対応するものとして当該ウィキペディア項目に現況現在付されているとの出典を挙げれば、[4](と振られての部)にてのそれはロバート・テンプリに啓発を与えた書籍となっている仏人民族学研究者マルセル・グリオールおよびジェルメール・ディテルランらの書 *The Pale Fox*『青い狐 ドゴンの宇宙哲学』(せりか書房)の後書き部、[18]にてのそれは『アフリカの創世神話』(紀伊國屋書店)という書籍、[19]にてのそれはウィキペディア[木星の衛星と環]項目記述、[20]にてのそれは[その後の研究によりシリウスは二連星であったことが判明]との文言での脇にての表記、[21]にてのそれはカール・セーガン(本稿でそのやりようを問題視してきたところの小説『コンタクト』作者にして著名な科学者)および日本にてオルガナイズドされての懐疑主義者団体関係者ら由来の書誌の内容、[22]にてのそれは[4]と同論拠、[23]にてのそれはロバート・テンプリの *The Sirius Mystery* の訳書それ自体、[24]にてのそれは日本の職業的懐疑主義団体由来の通俗的書籍となっている(：うち、[4][22][24]と出典付されての部にての内容は取り上げるに値することと見立ており、実際に本稿で細かくも解説してきた。その点、[4]と[22]と付されてのところの内容([ドゴン族にシリウスの知識があったという話は信に値しない]との内容)については *The Pale Fox* の原著および訳書にて付された邦訳者申しようの引用を本稿にての先立っての段 **出典(Source) 紹介の部 95(3)**にてなしもしており、[24]と付されてのところの内容([ドゴン族のシリウスに対する先覚知に関する報告にはそれを否定することになった別の報告が存する]との内容)についてはグリオールらの研究内容を否定した *Walter Van Beek* 由来のオンライン上より特定できるところの論稿よりの抜粋を同じくも本稿の **出典(Source) 紹介の部 95(3)**の段でなしている)

(※またもってしてシリウスBの観測年次、重い星としての捕捉年次については英文 Wikipedia[*Alvan Graham Clark*](アルヴァン・グラハム・クラーク)項目にあつての “ On January 31, 1862, while testing a new 18 1/2 inch refracting telescope, he made the first observation of Sirius B in Cambridgeport, Massachusetts. The magnitude 8 companion of Sirius is also the first known white dwarf star. ” 「(大要)シリウスBは初めて知られるところとなった白色矮星として1862年にアルヴァン・グラハム・クラークによって観測された」との記述や英文 Wikipedia[*Walter Sydney Adams*](ウォルター・シドニー・アダムズ)項目にあつての “ He was able to demonstrate that spectra could be used to determine whether a star was a

giant or a dwarf. In 1915 he began a study of the companion of Sirius and found that despite a size only slightly larger than the Earth, the surface of the star was brighter per unit area than the Sun and it was about as massive” .「(大要)1915年よりのスペクトル分析にてウォルター・シドニー・アダムスは若干地球より大きいにすぎぬとのサイズであるにも関わらずシリウスBが単位当たりで極めて輝度高く、また、太陽並みに重い天体であることを指し示した」(引用部に見るように実際の輝度はかなり高くとも、シリウスBはシリウスAの影に隠れて肉眼では目視不能な「暗い」星でもある。については和文ウィキペディア[シリウス]項目の天体パラメーターの[光度]表記のところが Sirius A が 26.01L (Solar luminosity)、Sirius B が 0.0024L となっていることで分かる)とあるとおりのことが諸所にて容易に確認できるようになっている)との記述など、目立つところの記述を一目するだけでも科学史の一断面としてそういうことがあることが窺い知れるようになっている)

これにて補ってもの表記を終える。

さて、批判家筋には「ほとんど」というより「全くもって」取り上げられていないことだが、ロバート・テンプルは

「肉眼では見えないはずの」シリウスBの存在、その周期、動き方(シリウスA周囲を50年で公転するとの動き方)をドゴン族は把握している、それは「本当の」先進文明との往古にてのコンタクトの賜物によるものである」

との申しようを支える論拠を — 筆者はそちらの方こそが「真偽 [怪しい] とのドゴン族伝承それ自体より遙かに重要である」と見ているのだが—

「ドゴンから「離れて」の他の文明圏の伝承」

「にも」求めている (:先に引用をなした英文 Wikipedia [The Sirius Mystery] 項目にて “ Temple did not argue that the only way that the Dogon could have obtained what he understood to be accurate information on Sirius B was by contact with an advanced civilization; he considered alternative implausible possibilities, such as a very ancient, advanced, and lost civilization that was behind the sudden appearance of advanced civilization in both Egypt and Sumeria. ” 「 [より先進的な文明との接触]を唯一無二の方法としてテンプルは論じておらず、彼は代わりに[信じがたい可能性ら]、たとえば、エジプトおよびシュメールにての進歩した文明の突如の出現の背後にあつての太古にて進歩していた、かつ、失われた文明のようなものにまつわる[信じがたい可能性ら]に思いを巡らしているとのものである」と記載されている通りのことがテンプル主張には見てとれる)。

そうした、

「ドゴン族伝承それ自体から離れたところで「も」先進文明との往古にてのコンタクトを示す証跡を示さんとしているとのロバート・テンプルやりよう」

の具体例として

「シリウスBの周期が50年であるという情報を[他の文明圏]が取得していた節があるとの申しようをロバート・テンプルがなしている箇所」

につき [オンライン上より文言検索で内容確認出来るとの The Sirius Mystery 原著] 及び [国内で流通しているとのその訳書] よりの引用を直下なすこととする (そうした引用を敢えてもなしている背景には [ロバート・テンプルの申しようにあつて何が本当に問題となるのかにつき([ロバート・テンプル本人

が「全く言及していない」との観点・方向性]から)指し示すための布石とする] との本稿筆者の意図がある)。

出典 (Source) 紹介の部 95(4)

SOURCE 95(4)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典 (Source) 紹介の部 95(4) には

[シリウス B の周期が 50 年であるという情報を[他の文明圏]が取得していた節があるとの申しようをロバート・テンプルがなしている]

とこのことを一例紹介しておくこととする。

(直下、The Sirius Mystery の A Fairytale ([おとぎ話]) の節よりの引用として)

On the subject of Anubis Plutarch reports (44:61) some interesting beliefs.
After referring to the view that Anubis was born of Nephthys, although Isis was his reputed mother, he goes on to say, **'By Anubis they understand the horizontal circle, which divides the invisible part of the world, which they**

call Nephthys, from the visible, to which they give the name of Isis; and as this circle equally touches upon the confines of both light and darkness, **This description could be taken to be one of the Sirius system. It clearly describes Isis (whom we know to have been identified with Sirius) as 'the confines of light' and 'the visible', and her sister Nephthys is described as being 'the confines of darkness' and 'the invisible',** and common to both is the horizontal circle which divides them - the horizontal circle described, perhaps, by the orbit of the dark companion about the bright star? And here, too, is an explanation of the symbolism of the dog which has always been associated with Sirius, which has borne throughout the ages the name of the 'Dog Star'.(. . .)

(原著よりの引用はここまでとする)

(直下、「上の原著引用部にほぼもってして照応している」訳書『知の起源 文明はシリウスから来た』、[第二章 イシスとオシリスの物語]p.103 該当部よりの原文引用をなす——(尚、日本にて流通を見ている訳書には誤解を招くような「文明はシリウスから来た」などと断定形が用いられているが、原著は仮説を強くも主張するとの体裁をとっている)——)

アヌビスに関連して、プルタルコスに興味深い記述を残している。一般にアヌビスの母神はイシスとされているが、プルタルコスはネフテュスがアヌビスの母神であるとの説を挙げた上で、次のように記述している。

アヌビスは水平な円であり、これにより「目に見えないもの」、すなわちネフテュスと、「目に見えるもの」、すなわちイシスが分割される。この円は光と闇の境界に存在し、光と闇に共有されている。

このプルタルコスの記述は、シリウス星系の構造について述べたものと考えられる。イシス(シリウスA)が「光」ないし「目に見えるもの」であるとすれば、「闇」ないし「目に見えないもの」と表現されるネフテュスはシリウスBということになる。そして、イシスとネフテュスに表象されるシリウスAとシリウスBは、アヌビスに表象される「水平の円」によって分割されているというのだ。

この「共有する水平の円」とは、シリウスBの描く軌道、つまり、イシスはシリウスA、ネフテュスはシリウスB、そしてアヌビスはシリウスBの描く軌道を表すのである。

(訳書よりの引用はここまでとする —※—)

※上に引用した部にて言及されているアヌビスという存在がいかな存在なのかについて多少補足しておく。

まずもって基本的なところとして英文 Wikipedia[Anubis]項目より引くとして
“Anubis also attends the weighing scale in the Afterlife during the "Weighing Of The Heart". [...] Anubis was associated with the mummification and protection of the dead for their journey into the afterlife. He was usually portrayed as a half human ? half jackal, or in full jackal form wearing a ribbon and holding a flail in the crook of its arm.” (訳として)[「アヌビスは死後の世界にて死者の心臓の重さが測られている間、秤量に参加している存在である。…(中略)…アヌビスは彼らの死後の世界にての旅のための死者のミイラ製作と死者の保護に関連付けられている存在である。彼は飾り紐をまとい、腕の婉曲部にてからざおを持っているとの半人・半ジャッカルの混淆形態

で描かれるか、あるいは、完全なるジャッカルとして描かれる」

(引用部はここまでとする)

との表記がなされているように[アヌビス]は[犬科(ジャッカル)の神][冥府の審判の介添え人との役割を有した存在]である。

また、そうしたアヌビスについては[シリウス(を主軸としたオオイヌ座)]と結びつく存在であるとの申しようが長らくもなされてきたとの存在である。

アヌビスをしてシリウスと結びつく存在と見做す歴史的背景があることについてまずもって天文学者の類の物言いを紹介する。

(直下、19世紀後半から20世紀初頭にかけて活動の英国天文学者 John Ellard Gore の手になる *Astronomical Curiosities Facts and Fallacies* ——1909年刊行版／『天文上の珍奇なることら、その事実性と誤謬』とでも訳せよう書籍—— という Project Gutenberg サイトより全文ダウンロードできる著作よりの引用をなすとして)

The constellation Canis Major, the Great Dog, is remarkable for containing Sirius, the brightest star in the heavens. In the Greek mythology it was supposed to represent a dog given by Aurora to Cephalus as the swiftest of all dogs. Cephalus wished to match it against a fox which he thought surpassed all animals for speed. They both ran for so long a time, so the story goes, that Jupiter rewarded the dog by placing it among the stars. But probably **the dog comes from Anubis, the dog-headed god of the ancient Egyptians.** According to Brown, Theogirius (B.C. 544) refers to the constellation of the Dog. He thinks that Canis Major is probably “a reduplication” of Orion; Sirius and β Canis Majoris corresponding to α and γ Orionis; δ , 22, and ϵ Canis Majoris to the stars in Orion’s belt (δ , ϵ , and ζ Orionis); and η ; and κ Canis Majoris with κ and β Orionis.「オオイヌ座は宇宙(そら)にあって最も明るき恒星たるシリウスを含むことで際立っている存在である。同オオイヌ座、ギリシャ神話では暁の女神アウローラによってケパルスに贈られた全ての犬の中で最も俊敏なる犬にて表象されているとも考えられている。ケパルスはその犬をして全動物の中で最も俊敏であると考えていた狐と競わせようと望んだ。両者が短期間に長距離を走りえたので、話が続くところとし、ゼウス神がその犬を星空に加えることを報酬として与えたという。しかし、(シリウスを含む)オオイヌ座の犬は古代エジプトの犬の神アヌビスに由来すると考えられる(以下略)」

(訳を付しての引用部はここまでとする。尚、アヌビスはオオイヌ座 Canis Major ではなくコイヌ座 Canis Minor の方と結びつくとの観点も広く流布されている)

上にて示しているようにシリウスを包含するオオイヌ座にアヌビスが仮託されるだけでなくアヌビスという存在は[フリーメーソンの教義体系](Freemasonic Dogma)にあってはまさしくシリウスの体現存在であると明言されている存在となる。

それについては ——フリーメーソンの象徴主義がいかようなる側面で問題になるのか、詳述していくことになるとの本稿にての補説4(現行、補説3)にあっての話をなしで深くも取り上げる所存であるとの書籍とはなるが——フリーメーソンの間で極めてよく知られているとの著作、19世紀米国にての大物フリーメーソンであったとのアルバート・パイクの手になる、

Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry
『古代より連綿と続く認証されしフリーメーソンのスコットランド位階の徳義と教義』

(1872)

との著作 ——(同著のためだけの解説項目が英文 Wikipedia に設けられており、そこにて同著が長らくの間、新参の米国フリーメーソンに無償で配られていたとのが記載されている(A copy of Morals and Dogma was given to every new member of the Southern Jurisdiction from the early 1900s until 1969 と記載されている)ことを見るようにメーソンの間でよく知られているとの著作)—— よりの引用を下になす。

(直下、Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry (1872)にての XXIV. PRINCE OF THE TABERNACLE の部よりの引用をなすとして)

When Isis first found the body, where it had floated ashore near Byblos, a shrub of erica or tamarisk near it had, by the virtue of the body, shot up into a tree around it, and protected it; and hence our sprig of acacia. **Isis was also aided in her search by Anubis, in the shape of a dog. He was Sirius or the Dog-Star, the friend and counsellor of Osiris, and the inventor of language, grammar, astronomy, surveying, arithmetic, music, and medical science; the first maker of laws; and who taught the worship of the Gods, and the building of Temples.**

「イシスが(彼女の伴侶たる)オシリスの遺骸を最初に発見したそのとき、ビブロスの沿岸部にてのその場にて、エリカ(訳注:ツツジ科エリカ属の植物たるエリカ)ないしギョリュウ(訳注:ギョリュウ科の植物)の灌木がその遺骸が放つ美德ゆえに樹木へと急成長、遺骸を守っており、そこには(フリーメーソンの象徴たる)アカシアの小枝もかかわっていた。**イシスのオシリス遺骸探索行にては犬の姿を取ったアヌビスが付き従っていた。同アヌビスはシリウス、ドッグ・スターであって、オシリスの友人にして顧問、そして、言語・文法学・天文学・測量学・算術・音楽そして医学の発明者となり、神への崇拜を、そして、神殿の造成について人間に教えたとの存在であった**」

(訳を付しての引用部はここまでとする ——尚、19世紀の米国の有力フリーメーソンであった Morals and Dogma 著者アルバート・パイクのアヌビスの役割に対する上にての書きようは幾分というよりかなり誇張が入っているものと解されもする(ただ、アヌビスが[イシスのオシリス探索行にてオシリスの死せる遺体をミイラ化して保全するとの役割を果たした]ことはよく知られ、については、英文 Wikipedia [Osiris Myth] 項目にて “ The goddesses find and restore Osiris' body, often with the help of other deities, including Thoth, a deity credited with great magical and healing powers, and Anubis, the god of embalming and funerary rites. ” 「女神ら一行はしばしば他の神々、巨大な魔力と治癒力で知られていたトや遺体保存および葬儀の儀の神であったアヌビスの助力をもってしてオシリス遺体を発見かつ修復なした」と表記されているようなところがある。さらに述べれば、本稿にての続いての**出典(Source)紹介の部 95(5)**の段にあつては**[アヌビスとヘカテは同じくもの存在と解される]**との言及を含んでいるとのプルタルコス著作(Plutarch, The Morals, vol. 4)についての記述を引くことになるわけだが、本稿にての先立っての段にあつての**出典(Source)紹介の部 94(5)**ではヘカテが**[イシスのオシリス探索のギリシャ版たるデメテルのペルセポネ探索]**に助力なしていたとの言われようがなされていることを紹介してもいる。そして、同じくものところに関わるところとして**[デメテルのペルセポネ探索行]**(およびそれにまつわつての**エレウシス秘儀**)は**[イシスのオシリス探索行]**(およびそれにまつわつての**イシス密儀**)と細かきところまで「酷似」していることも本稿では従前、詳説している([不完全復活しか出来ずに結局、冥界の統治者] となることになったとの最愛の存在 (ペルセポネないし

オシリス) を求めて女神達はその彷徨の途中にてやったと伝わっていること、たとえば、世話になった土着の王族の子を火にくべて不死にしようと試みたと伝わっていることなど「酷似」しているとのことを本稿では詳説している)。そうしたところとあわせて見、アヌビスはイシスのオシリス探索に助力しており、ヘカテは(イシスのオシリス探索と類似の要素を帯びている) デメテルのペルセポネ探索に助力しているとのことから[ヘカテとアヌビスの両神のつながりあい]が「当然に」観念されるところではある)——)

19世紀(1872年)に成立したフリーメーソンの教典といった位置付けに一時期なっていたとの著作、Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry の記述の方については正確性に欠ける(inexactである)ところがあるかとは見えるのだが、とにかくも、そうもした19世紀に成立したとの著作からしてアヌビスは[シリウス]であり[犬の星]の体現者であるとの明言がなされている。

そうもして人間の歴史にあって長らくも[アヌビス]とは[シリウス]と深く結びつけられている存在となっている。



Anubis

アヌビスの典型的な似姿を挙げておく。上掲図左は米国ボルチモア在の Walters Art Museum にて収蔵のものとして英文 Wikipedia に掲載されている[アヌビスおよび同神に拝跪の礼をもって応ずるとの信奉者を彫り込んでいるとの遺物]ありようを挙げたものとなる。対して、上掲図右は本稿の先の段でも挙げた Papyrus of Hunefer [フネフェルのパピルス] と呼称される[今日伝わる『死者の書』のよく知られたバージョン]の一部を拡大しての図像となる(ちなみにフネフェルパピルスの方でアヌビスと一緒に描かれている鱐の怪物はエジプト神話で死後の審判時、秤にかけられた魂(心臓)がマアトの羽(真実の羽)なるものより重かった場合には、すなわち、死者が偽りに生きた罪人と判断された際にはその死者の魂を永劫の無の領域へと噛み砕きつくすために控えているとの設定が付されているアメミットという存在となる —ここに図像を挙げている[アヌビス参加の秤量]が描かれたフネフェル・パピルスと関わる同アメミットありようについては和文ウィキペディア[アメミット]項目程度のものにも現行は言及がなされている—)。

(アヌビスがいかなる存在なのかにまつわる補足はここまでとしておく)

(出典(Source)紹介の部 95(4)はここまでとする)

ここまでの話、ロバート・テンプル著作『シリウス・ミステリー』より引用した箇所に見る、

[プルタルコスの記事 —「水平なる円としてのアヌビスによって「目に見えないもの」たるネフテュスと「目に見えるもの」たるイシスが分割される。この円(アヌビス)は光と闇の境界に存在し、光と闇に共有されている」との記事— が [シリウス星系の構造] について述べたものと考えられることができるような側面がある。イシス(シリウスAを表象する女神)が「光」ないし「目に見えるもの」であるとすれば、「闇」ないし「目に見えないもの」と表現されるネフテュスはシリウスB(不可視化天体たる重き白色矮星)ということになり、そして、イシスとネフテュスに表象されるシリウスAとシリウスBは、アヌビスに表象される「水平の円」(シリウスBの水平円の軌道)によって分割されているからである]

との話については [信じがたい] [穿ちすぎ(不必要に考えすぎ)] である] とする向きも多かろう。しかし、実際にはそうではない、まったくもってしてそうではない、とのことがある(穿ちすぎでもなんでもなくその伝では極めて真っ当な言いようであるとのことがある) のだが、それにまつわっての詳説に先駆け、オンライン上よりも即時即座に確認出来るところの「アヌビスによってイシスとネフティスが可視化存在と不可視化存在に分かたれている」とのことに言及しているプルタルコス古典、その原典よりの引用をなしておく。また、と同時に、「何故もってして「女神イシス」が「シリウスの体現存在」となっている」と論じられるのかの典拠も引いておくこととする(無論、同じくものことにつき問題となることの指し示しをそれに留めるつもりはないが、とりあえずも [とっかかり] として指し示しておくこととして、である)。

出典(Source)紹介の部 95(5)

ΣΘΥΛΚΤΞ 95(5)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典(Source)紹介の部 95 (5) には

[プルタルコス古典にて「[アヌビス] によって [イシス] と [ネフティス] が [可視化存在] と [不可視化存在] として分かたれている」とのことが言及されている]

とのことの典拠を挙げておくこととする。

同じくものことについては

Plutarch, The Morals, vol. 4 OF ISIS AND OSIRIS, OR OF THE ANCIENT RELIGION AND PHILOSOPHY OF EGYPT (1878) — (帝政ローマ期のギリシャ系文人たるプルタルコスの手になる『倫理問答(モラリア)』の一部分が『イシスとオシリス、エジプトにての古代宗教および哲学』と題されてのものとなり、**に対しての英訳が 19 世紀 (1878 年) に講じられているとのもの**) —

よりの原文抜粋をなすことにする(ちなみにラテン語表記にて De Iside et Osiride となるローマ期のギリシャ人著述家プルタルコス著作から 19 世紀後半の表記英訳版を作成した人物は William Watson Goodwin という 19 世紀米国の権威筋の学究 ——ウィキペディアに一項設けられているとの学究——となる)。

(直下、The Online Library of Liberty を介して PDF ファイル公開されているとの Plutarch, The Morals, vol. 4 (1878)よりの抜粋をなすとして)

44. And when Nephthys was delivered of Anubis, Isis owned the child. **For Nephthys is that part of the world which is below the earth, and invisible to us; and Isis that which is above the earth, and visible. But that which touches upon both these, and is called the horizon (or bounding circle) and is common to them both, is called Anubis, and resembles in shape the dog, because the dog makes use of his sight by night as well as by day.** And therefore **Anubis seems to me to have a power among the Egyptians much like to that of Hecate among the Grecians,** he being as well terrestrial as Olympic.

(拙訳として)

「第 44 節: ネフテュスがアヌビスを出産することになった折、イシスはその子を自身のものとした。ネフテュスは大地の下の世界、我々の目には不可視の世界の一部をなすものであった。イシスは地の上、目に見えるものであるとの世界の一部をなすものであった。これら両者に接し、境界線(あるいは境界となる円)と呼ばれるところをなし、そして、両者に共有されていたのがアヌビスと呼ばれる存在、犬が昼も夜も視界を保っているがゆえに犬の形態を模しているとの存在である。そして、地の存在であるのと同様にオリンポス世界としての側面を有しているがゆえに、アヌビスはエジプト人の間でギリシャのヘカテが有しているのと同じ力を保持しているように私(プルタルコス)には見える」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく —※—)

(※追記: 以上の部については京都大学学術出版会より[西洋古典叢書]シリーズと銘打って京大系の学者らによって出されている『モラリア』、その [イシスとオシリスについて] 掲載巻にあっての p.71 にて

(以下、原文引用なすとして)

“ 一方、ネフテュスがアヌビスを産むと、イシスはその子を自分の子として

育てます。というのは、ネプテュスとは大地の下の不可視の領域であるのに対して、イシスとは大地の上方の可視的な領域です。そして、このどちらにも触れていて、両者に共有されている円環——いわゆる地平線——がアヌビスと呼ばれ、その姿が犬になぞらえられているのです。なぜなら、犬は夜にも昼にも視覚を同じように用いることができるからです。そして、エジプト人たちのあいだでアヌビスは、ギリシャにおけるヘカテと同様の力を持っていると思われます。地下のクトンの世界に属するものでありながら、同時に天上のオリュンポスの世界に属するものでもあるわけですから”
(引用なしでの部はここまでとする)

と訳されている部位と同一のものである。

またさらにもって国内書店にて幅広くも流通を見ているとの式で岩波書店 —システムとしての委託販売方式(取り次ぎ会社を介さずにももの方式)にて書店にすすけた書籍らを置かせしめるだけの影響力を有している半ば[認識規定機構]としての役割帯びての老舗出版社— より流布されている『エジプト神イシスとオシリスの伝説について』(柳沼重剛筑波大教授(物故者)訳)の方での記載のなされようをも挙げておく。それでは『エジプト神イシスとオシリスの伝説について』(岩波文庫)p.84より引くとし、

(以下、原文引用なすとして)

“ ネプテュスがアヌビスを生むと、イシスはその子を自分の子として育てます。ネプテュスは地下のもの、見えないものです。それに対してイシスは地上のもの、はっきり見えるものです。この地上・地下の両方に接していて、境を分ける線(地平線)がアヌビスと名づけられ、姿としては犬の姿で表わされます。犬は夜の暗闇の中でも昼の明るさの中でも、同じように見ることが出来るからです。そしてエジプト人の間でアヌビスは、ギリシア人の間でヘカテが持っているのと同じ力をもっているようです。それはつまり、両方も地下世界のものでありながら、同時に天空オリュンポスの神でもあるという点においてです”

(引用部はここまでとする)

以上、国内にての訳書「ら」の対応記載よりの引用とした —ちなみに、岩波文庫より流布されている版ではない方の邦訳版、表記の京大系学究らの手になる[西洋古典叢書]シリーズの『モラリア』[イシスとオシリスについて]掲載巻では(プルタルコスの表記の著作『倫理問答集』について) この作品のテキスト伝存の状態は決して芳しくはない。十三世紀頃にプラヌデスが仕上げた校訂より古い写本は存在しないのである。しかし、近代における五百年間におよぶ編集努力のなかで数え切れない校訂がなされてきた。本書の底本であるトイプナー版(一九二九年)はその成果の一つであるが、それ以後も文献表に挙げたようないくつかの校訂本が出版されている (以上、解説部のp.339より抜粋)と[2世紀のプルタルコス著作が13世紀「以前」のそれとしては写本すらもが存在しないものであること]が述べられた上で、そして、校訂本もいくつか亜種があるとのこと、触れられもしている。それがゆえ、オンライン上にて検討した際などにて同じくもイシス・オシリス伝承取り扱い巻でも内容が異なる可能性があるようにもとらえられる、その旨、一応、断っておきたい—)

上にての引用部に見るようにローマ期の文人、プルタルコス著作のなかで [アヌビスとヘカテが同類・近縁の存在であると表されている] ことについて注意を促すべくもの図を挙げておく。

その点、

[アヌビスとヘカテとを同一物と看做すとの流れが実際に「如何程までに濃厚に」あるのか]

は判然としないのだが、そういう評価が特定古代人(プルタルコス)になされていたことを示す文献的記録が遺っていること、その意味性までは本稿が重んずるところとなる。一尚、[ヘカテ]については先だつての段からして、(出典(Source)紹介の部 94(3)から出典(Source)紹介の部 94(7)を包摂する部にて挙げてきた伝承上の記録に基づきもし)、「エレウシス秘儀にてペルセポネを助け同伴する存在として崇められる[ヘカテ]は[ペルセポネ][ケルベロス](同ケルベロスはアヌビスと同様に冥界と、そして、死者への処置と強くも結びつく犬科の存在である)との結びつきから重んじて然るべき存在である」と言及している存在ともなる。



Anubis



Hecate

" And therefore Anubis seems to me to have a power among the Egyptians much like to that of Hecate among the Grecians, he being as well terrestrial as Olympic."

———— Plutarch, The Morals, vol. 4 (1878)

"そして、エジプト人たちのあいだでアヌビスは、ギリシャにおけるヘカテと同様の力をもっていると思われます。地下のクトンの世界に属するものでありながら、同時に天上のオリュンポスの世界に属するものでもあるわけですから。"

———— 『モラリア』[イシスとオシリスについて] 71ページ
(京都大学学術出版会[西洋古典叢書]シリーズ)

(プルタルコス古典原文を挙げての出典(Source)紹介の部 95(5)はここまでとする)

以上抜粋したこと、古典にあつての誰でも後追いでできるとの記述に関してはロバート・テンプルの主観も、そして、本稿の筆者の主観も介在する余地はない。

すなわち、

[ネプテュスとは大地の下の不可視の領域であるのに対して、イシスとは大地の上方の可視的な領域です。そして、このどちらにも触れていて、両者に共有されている円環——いわ

ゆる地平線——がアヌビスと呼ばれ、その姿が犬になぞらえられているのです。なぜなら、犬は夜にも昼にも視覚を同じように用いることができるからです。そして、エジプト人たちのあいだでアヌビスは、ギリシャにおけるヘカテと同様の力をもっていると思われます]

との記述が2世紀に由来するとされるプルタルコス（の19世紀校訂版）の中に見受けられること、それはオンライン上より容易に確認できるところとして見受けられるとの「文献的事実」（philological truth）である。

（「問題は、」上のように「アヌビス」（「ヘカテ」と同一視されもするとの犬科（ジャッカル）の神）を境界線（あるいは境界領域）として可視化存在・不可視化存在に分割されているイシスとネプテュスがそれぞれ「シリウスA」と「不可視化天体シリウスB」の寓意と述べるに足りるのか否かとのことにあるとして）さて、容易にその通りの記載が古典になされていると確認できるとのプルタルコス申しよう、英訳版にての引用元表記にて繰り返すとして

And when Nephthys was delivered of Anubis, Isis owned the child. For Nephthys is that part of the world which is below the earth, and invisible to us; and Isis that which is above the earth, and visible. But that which touches upon both these, and is called **the horizon (or bounding circle)** and is common to them both, is called Anubis, and resembles in shape the dog, because the dog makes use of his sight by night as well as by day.

とのことにつき、「犬ないしジャッカルの神である（後述）アヌビスは地上可視のイシス領域と地下不可視のネプテュス領域とを分かち境界線（あるいは境界となる円）となっている」との部位につき、ホライズン（地平線）とバウンディング・サークル（環状の境界）が一緒くたにされていることに鑑（かんが）みれば、そして、

「アヌビスという存在は「シリウス」を包含するオオイヌ座と結びつけられており、また、シリウスそれ自体とも結びつく存在とされてきた存在である」（つい先だつての**出典（Source）**紹介の部 95(4)に付しての補足部にて解説）

とのこと、および、

「女神イシスという存在はまさしくものシリウスの体現存在（空にて目立つ可視化存在シリウスAの体現存在）として知られている神である」（こちら論拠は続いての**出典（Source）**紹介の部 95(6)にて挙げることとする）

とのことに鑑みれば、確かに、

（再度のテンプル著作 The Sirius Mystery よりの引用をなすとして）

“ **'By Anubis they understand the horizontal circle, which divides the invisible part of the world, which they call Nephthys, from the visible, to which they give the name of Isis; and as this circle equally touches upon the confines of both light and darkness, This description could be taken to be one of the Sirius system. It clearly describes Isis (whom we know to have been identified with Sirius) as 'the confines of light' and 'the visible', and her sister Nephthys is described as being 'the confines of darkness' and 'the invisible', and common to both is the horizontal circle which divides them - the horizontal circle described, perhaps, by the orbit of the dark companion about the bright star? And here, too, is an explanation of the symbolism of the dog which has always been associated with Sirius, which has borne throughout the ages the name of the 'Dog Star'.**

（...）」（割愛部も見受けられるのだが、ほぼ照応するところとなっている邦訳版表記では）「アヌビスは水平な円であり、これにより「目に見えないもの」、すなわちネプテュスと、「目に見えるもの」、すなわちイシスが分割される。この円は光と闇の境界に存在し、光と闇に共有されている。このプルタルコスの記述は、シリウス星系の構造について述べたものと考えられる。イシス（シリウスA）が「光」ないし「目に見えるもの」であるとすれば、「闇」ないし

「目に見えないもの」と表現されるネフテュスはシリウスBということになる。そして、イシスとネフテュスに表象されるシリウスAとシリウスBは、アヌビスに表象される「水平の円」によって分割されているというのだ。この「共有する水平の円」とは、シリウスBの描く軌道、つまり、イシスはシリウスA、ネフテュスはシリウスB、そしてアヌビスはシリウスBの描く軌道を表すのである」と記載されているとの部位となる)

は(述べていることの解釈部にての奇矯さはともかくも)多く[記録的事実に依拠しての申しよう]と解されはする(「問題は、それがこじつけで済むか否か、である)。

その点、話のまずもっての前提となるところとして

[イシス;プルタルコス曰くもの水平軌道にて分割される「可視化存在」の方の女神]

が(肉眼、ネイキッド・アイにて目視不可能なる不可視存在[シリウスB]に対する)[シリウスA]の体現存在であると知られていることについての出典を次いで挙げることにする(その点、古代エジプトの女神イシスは[シリウスの体現存在]としてよくも知られているわけだが、その出典を挙げておく)。

出典(Source)紹介の部 95(6)

SOURCE 95(6)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典(Source)紹介の部 95 (6) には

[(プルタルコスによって [アヌビスによって [可視化存在] [不可視化存在] の分割がなされている] との言いようがなされている中でここにて [可視化存在] とされている) [イシス] は [シリウス体現神格] (正確には有史以前、その存在が人類の目に映ってきたとの記録があるシリウス A の体現神格) であると古来から見られてきた]

このことの出典を挙げることにする。

(直下、Project Gutenberg のサイトより全文閲覧・ダウンロードできるところの The Golden Bough A Study in Magic and Religion Vol. VI. of XII. Part IV: Adonis Attis Osiris. Vol. 2 of 2. (『金枝篇』第 6 卷 4 章 (の 2) [アドニス・アッティス・オシリス] 1911 年版) の § 2. Rites of Irrigation. [灌漑の儀式] の節よりの抜粋として)

And **the sign of the rising waters on earth was accompanied by a sign in heaven.** For in the early days of Egyptian history, some three or four thousand years before the beginning of our era, **the splendid star of Sirius, the brightest of all the fixed stars, appeared at dawn in the east just before sunrise about the time of the summer solstice, when the Nile begins to rise. The Egyptians called it Sothis, and regarded it as the star of Isis, just as the Babylonians deemed the planet Venus the star of Astarte.**

「地に於ける水位上昇の気配は天に於ける予兆を伴つてのものであった。というのも、エジプト史揺籃期、我々の時代の幕開けより三千年から四千年ほど前にあつては (注: 文脈上、「紀元前数十世紀である」とのこと)、すべての恒星の中にて最も輝いていた壮麗なシリウスの星はナイル川が水位上昇を見始める時である夏至の折にて、日の出の少し前の夜明け頃、東から現れる星であつたからである。エジプトの民らはそのシリウス (注: 正確には不可視の白色矮星であるシリウス B に対して連星として空にて極めて目立つ可視化存在たるシリウス A) をもつてして [ソティス] と呼び習わし、バビロニア人が金星をアスタルテの星と考えたようにそれを [イシスの星] と看做していた」

(拙訳を付しての『金枝篇』原著よりの引用はここまでとする)

以上のジェームズ・フレイザーの『金枝篇』に見る申しようは有名な、

[シリウスによるヘリアカル・ライジング ([ヘリアカル・ライジング] とは [太陽が昇る少し前に他の天体が先だつて視認可能となる現象] を指す) と灌漑の関係性]

について言及しているとのものとなり、については和文ウィキペディア[ソプデト]項目にも

(掻い摘まんで同項目にての現行記載内容よりの引用をなすところとして)

“ソプデト(Sopdet)は古代エジプトの豊穡の女神で、「鋭いもの」を意味する。シリウス星が神格化されたもので、古ラテン語でソティス(Sothis)とも呼ばれる。ソプデト=ソティスを表す聖獣は(雌)犬。ソプデトはイシスの化身とされる。…(中略)…シリウス星は夏の代名詞であり、太陽が昇る直前に東の地平線上にシリウス星が現れる(ヘリアカルライジング)時期になると、ナイル川が年に一度の洪水を起こし始め、エジプトの大地に水の恵みをもたらす。そのため、洪水の時期を知らせるシリウス星であるソプデトは、肥沃の神としても崇拝された。シリウス星の出てくる方向に建てられた女神イシスの神殿では、ヘリアカルライジングの朝は、太陽(太陽神ラー)とシリウス星(女神ソプデト=イシス)の光が地平線上で交わり合いながら神殿内に射し込んだと言われている”

(引用部はここまでとする)

と記されているようなところとなっている。

につき、ソプテド＝イシスの聖獣が[犬]とされていることが直近表記の和文ウィキペディア[ソプテド]項目には記されているが、といったこともあってであろう、シリウスは[犬の星]として「も」非常に有名である。 英文 Wikipedia [Sirius] 項目にて

“ Many cultures have historically attached special significance to Sirius, particularly in relation to dogs. Indeed, it is often colloquially called the "Dog Star" as the brightest star of Canis Major, the "Great Dog" constellation . ” 「多くの文明文化が歴史的にシリウスに取り分けもってして重要性を見出しており、それは殊に[犬]らとの関係性にあつてであった。実際、[オオイヌ座]との意味合いとなる Canis Major にての最も明るい星としてそれは[ドッグ・スター]と日常会話にて呼びならわされてきた」

と記されているように、である —— 尚、オオイヌ座で最も明るきシリウスについては中国でもイヌ科の動物たる狼を体現しての[天狼星]との呼称を与えられていること、そういったこともすぐにオンライン上で確認できるようになっている——。

またもってして述べておくが、先だつてそこよりの引用をなしてきた古代文人プルタルコスの手になる古典『モラリア』、の中の「イシスとオシリスについて」掲載巻（「イシスとネフティスのアヌビスによる可視化存在・不可視化存在への分割という記述」がみとめられるとの巻）にあつて「も」、

[シリウスはイシスの星である]

との表記が同義同文になされている（のでそこからの引用も一応なしておく）。

（直下、The Online Library of Liberty を介して PDF ファイル公開されているとの Plutarch, The Morals, vol. 4 (1878) よりの抜粋をなすとして）

38. They believe likewise that of all the stars, the Sirius (or Dog) is proper to Isis, because it bringeth on the flowing of the Nile. They also pay divine honor to the lion, and adorn the gates of their temples with the yawning mouths of lions, because the Nile then overflows its banks, When first the mounting sun the Lion meets.

（オンライン上にて流通を見ている英訳版『モラリア』よりの引用はここまでとする — ※岩波書店より流布されている『エジプト神イシスとオシリスの伝説について』（柳沼重剛筑波大教授（物故者）訳）にあつての上引用部に対応する記載のなされようをここに挙げておく ⇒（以下、『エジプト神イシスとオシリスの伝説について』（岩波文庫）p.74 の記載内容より引用なすとして） “ 三八 星との関わりでは、犬星（セイリオス／シリウス）はイシスの星だとエジプト人は考えます。この星が水をもたらす、つまり洪水を起こすからです。また獅子座を崇めます。そして神殿の入り口の扉を、口をかつと開いた獅子で飾ります。ちょうど「太陽が初めて獅子座に接する時、」（アラトス『パイノメナ』一五一）”（引用部はここまでとする）— ）

Isis = Sopdet (Sothis) = Sirius

以上のこと、すなわち、[イシスはシリウス（可視化存在シリウス A）の体現存在であると見られてきた]とのことと複合顧慮すれば、

[犬の神たるアヌビスは水平な円であり、これにより「目に見えないもの」、すなわちネフテュスと、「目に見えるもの」、すなわちイシスが分割される。この円は光と闇の境界に存在し、光と闇に共有されている。このプルタルコスの記述は、シリウス星系の構造について述べたものと考えられ

る。イシス(シリウスA)が「光」ないし「目に見えるもの」であるとすれば、「闇」ないし「目に見えないもの」と表現されるネフテュスはシリウスBということになる。そして、イシスとネフテュスに表象されるシリウスAとシリウスBは、アヌビスに表象される「水平の円」によって分割されている]

とのロバート・テンプルの「プルタルコス古典内容に基づいての」申しようは捨て置けぬものであるとの判断が「取りあえずも、」は出てくる(：ここで強調したいのだが、問題はそのことが「さらにもつての取るに足る補強材料」を伴っているような性質の話なのか、それによって、説得力を有しての側面がさらに重み・深みを帯びてくるか、である。その点、ロバート・テンプルが只者ではない所以(ゆえん)は同男が「その他にも」極めて重くもある(頭の具合がよろしくはない状況にあるとの限りでないかぎり「極めて重くもある」ことが易々と判じられるとの)傍証事例を複合的に呈示していることである。—それらについても無論、細かくも続いての段にて呈示していく、[ロバート・テンプルが導出した帰結](異星系存在介入理論の類)と全く「異なる」ところを証示の対象としての本稿の帰結(養殖種である人類皆殺しの執拗な意思表示の存在)「にも」関わるるところとして続く段にて呈示していくこととする—)。

" On the subject of Anubis Plutarch reports (44;61) some interesting beliefs. After referring to the view that Anubis was born of Nephthys, although Isis was his reputed mother, he goes on to say, 'By Anubis they understand the horizontal circle, which divides the invisible part of the world, which they call Nephthys, from the visible, to which they give the name of Isis; and as this circle equally touches upon the confines of both light and darkness, " ————— The Sirius Mystery (1976)

Philological Truth

44. And when Nephthys was delivered of Anubis, Isis owned the child. For Nephthys is that part of the world which is below the earth, and invisible to us; and Isis that which is above the earth, and visible. But that which touches upon both these, and is called the horizon (or bounding circle) and is common to them both, is called Anubis, and resembles in shape the dog, because the dog makes use of his sight by night as well as by day. And therefore Anubis seems to me to have a power among the Egyptians much like to that of Hecate among the Grecians, he being as well terrestrial as Olympian.

————— Plutarch, The Morals, vol. 4 OF ISIS AND OSIRIS, OR OF THE ANCIENT RELIGION AND PHILOSOPHY OF EGYPT (1878)

Visible
Isis
(= Sirius)
the "Dog" Star
(Dog shaped) Anubis

Invisible
Nephtys

プルタルコス『倫理問答』に
あつての特定の下りには
「可視存在たるイシス（「犬
の星である」シリウス同等
物）」が「不可視存在たる
ネフティス」と「犬に似た」
アヌビスによって分割される
との記述がある。

Although Robert Temple's book ,The Sirius Mystery, have the defects of
it's qualities, above point based on the philological truth should be thought
highly of .

凡百の綺麗な物らとは「一線を画する」とのレベルで異なり知識水準も知能水準も高いことが容易に伺い
知れるとのロバート・テンプレの論理には欠陥がある、唾棄すべき綺麗な物らに裏め殺しされ、また、正
当派をもって任ずる類に攻められるとの欠陥性が伴っているのだが（一部は本稿にての先だつての段、
[出典(Source)紹介の部95(2)]にて呈示のところである)、文献的事実——古典それ自体にかく
かくしかじかの記載があるとの事実——に基づいての上の部に関しては重んじて然るべき格好となっ
ている(そも申し述べる論拠はさらに続いての段にて呈示する)。

(出典(Source)紹介の部 95(6)はここまでとする)

くどくもなるが、直近までにてロバート・テンプレの次の通りの趣旨の主張の中身について細かくも解
説してきた。

「プルタルコス古典は

[アヌビス（シリウスがそれと伝承上、深くも結びつけられてきた動物たる「犬」の姿を
とる神）は「円環をなす境界」として「可視存在たるイシス」（人類史にあつて重き
をなしてきた「犬の星」ドッグ・スターとして知られるシリウス A との同等物となっている
女神）と「不可視化存在たるネフテュス」とを分割する]

との記述を含むが、そもした記述は「イシス（；人類に灌漑時期目印などとなっていたなど
との意味で多大な影響を与えてきた恒星シリウス A の体現存在たる女神）」に対置されて
分割されるネフテュスたる「肉眼目視不可能天体たるシリウス B」を表しているとの帰結
につながるものである——シリウスは「ヘリアカル・ライジングを呈する人類史にあつて大き
な意味をなしてきた可視天体としてのシリウス A」と「肉眼目視不可能な 19 世紀まで発見な
されなかった白色矮星としてのシリウス B」との連星系であると今日もって理解されているが、
「シリウス体現存在としての女神イシス」が「[[犬]の星たるシリウス同様に犬と結びつくアヌビ
ス]によって「可視化部分」と「不可視化部分」に分割化されているとのローマ期成立古典に
見る伝承紹介がなされているのならば、それは(目視不能の)シリウス B について言及した
ものであると解される——」

以上の話、

「(説得力は「ある」が)それ単体で見れば、「こじつけがましさ」を未だに払拭できないと言わ

れもしよとのロバート・テンプルのその伝での話]

についてテンプルは他の論拠を用意しており、その点についてこれより順次 — 出典(Source) 紹介の部 95(7) および 出典(Source) 紹介の部 95(8) を介して— 紹介をなす (:再三再四述べておくが、自身の論証を支える論拠のワン・ノブ・ゼムとして本稿にて紹介しているにすぎぬとのテンプルの主張には [一番重要なところ] (ロバート・テンプルの説の帰結が [人類文明をシリウス由来の高度知性体が見守ってきた] とのことに通じていることに関わる一番重要なところ) で欺瞞性が介在していると当然に考えられるだけの材料・論拠を筆者は探求の結果、手元に保持するに至っている。それを呈示せんとするのが本稿となりもしていること、ゆめお忘れいただきたくはないものである —魂がないといった風情で頭の具合のよろしくはないといった風情のそら言 (宗教や神秘主義の手合いが軽侮されるだけとの式で持ち出すとの話柄) ばかりを口の端にかけるような類、そう、筆者が [一個の人格] (話をするに値する人間存在) と見る必要を微々としても感じないと空虚な類ではないまともな向き (たとえば、[養殖種として殺されるとのことが分かりきった状況] である際にはその帰結に人間存在として異を呈するとの向き) が本稿を検討されている場合を想定して申し添えるところとして、である—)。

出典(Source) 紹介の部 95(7)

SOURCE 95(7)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ 出典(Source) 紹介の部 95(7) にあつては

[ロバート・テンプルが [シリウスBの寓意] がドゴン族伝承 (既述) 以外にて古典文物に

含まれていると主張しているところの論拠、そのうちの一例]

を —まずもっては軽んじられるようなところから— 紹介することとする。

(直下、The Sirius Mystery 原著 The Hounds of Hell ([地獄の犬たち]) の節よりの引用として)

Actaeon happened to see the goddess Artemis (known to the Romans by her Latin name of Diana) of the silver bow bathingnaked. Artemis then hunted him down, with fifty hounds, transformed him into a stag, and killed him with her bow (not only are hounds connected with the Dog Star, but the bow is a familiar symbol connected also with Sirius, which was so often known in ancient times also as the Bow Star). Not only were the hounds of Hades who chased Actaeon fifty in number, but Robert Graves tells us 'Actaeon was, it seems, a sacred king of the pre-Hellenic stag cult, torn to pieces at the end of his reign of fifty months, namely half a Great Year.

(オンライン上より内容の精査ができるとの原著よりの引用部はここまでとしておく)

(直下、上の原著引用部に「ほぼ照応する」ところの訳書『知の起源 文明はシリウスから来た』、[第四章 地獄の猟犬]p.162 から p.163 よりの該当部原文引用をなすとして)

アクタイオンとは、女神アルテミスの裸身を見てしまったために生命を落としたことで知られる人物である。あるとき、アルテミスは銀の弓を携え、キタイロンの山中で狩りをしていた。清らかな泉があったので、お供の乙女たちと水浴びをすることになった。そこへ同じく狩りにきたアクタイオンが通りかかり、木陰からアルテミスの裸身を覗き見てしまったのである。起こったアルテミスはアクタイオンを一頭を鹿に変え、彼の連れてきた五十匹の猟犬をけしかけた。**アクタイオンは五十匹の猟犬に八つ裂きにされ、アルテミスの銀の弓で射殺されたのだった。**ここで「弓」と「五十」が登場する。言うまでもないことだが、「弓」とは「弓の星＝シリウス」であり、「五十」とはシリウスBの公転周期のことだ。アクタイオンと神聖なる「五十」との結びつきは、これだけにとどまらない。ロバート・グレイブズは次のように記述している。

鹿が信仰の対象となっていた前ギリシャ時代において、アクタイオンは鹿の聖王と見なされていた。グレート・イヤーの半分の期間、すなわち五十ヶ月の治世の後、アクタイオンは八つ裂きにされたという。

ここでは「五十」という数字が期間となって表れている。シリウスBの公転周期は五十年だが、鹿の聖王の治世は五十ヶ月である。

(訳書よりの引用はここまでとする)

上にての引用部でロバート・テンプルは

「ギリシャ神話のアクタイオンという男は「50匹」の「犬」をけしかけられ、そのうえで「弓」によって射殺されたと伝わっているが、そして、そうやって殺されたアクタイオンが鹿の聖王として「50ヶ月」の統治期間を有していたとの言い伝えが(文人ロバート・グレイブズ由来の言として)存在しているとされるが、それは「弓を体現しての星」「犬を体現しての星」「50匹の犬および50ヶ月の統治期間から想起される50と結びつく公転周期50年の星」たるシリウスBに隠喩的に言及してのことと解される」

と述べている(それ単体だけで見れば、これまた確かにこじつけがましいところだが、テンプルは[他の論拠](後述しするそちらの方を「ゆえあって」筆者は重んじている)の呈示もなしている)。

その点、上のテンプル申しようについてシリウスが[弓を体現しての星]であることについては英文 Wikipedia の[Sirius]項目にも同じくもの記述が現況出典明示なされずになされているが(“Several cultures also associated the star with a bow and arrows. The Ancient Chinese visualized a large bow and arrow across the southern sky, formed by the constellations of Puppis and Canis Major. In this, the arrow tip is pointed at the wolf Sirius. A similar association is depicted at the Temple of Hathor in Dendera, where the goddess Satet has drawn her arrow at Hathor (Sirius). Known as "Tir", the star was portrayed as the arrow itself in later Persian culture.”との記載が[50]と付されての出典、Holberg, J.B. (2007). Sirius: Brightest Diamond in the Night Sky と共に現行なされている)、その

[シリウス ⇒ 弓の星]

との伝承上の論拠が奈辺にあるのかは —— The Sirius Mystery 引用部に見るようにテンプルは “the bow is a familiar symbol connected also with Sirius, which was so often known in ancient times also as the Bow Star ” (日本で流通を見ている訳書では[「言うまでもなく」シリウスは弓の星である]と訳されている)とそれがさも自明の事のように述べているわけだが—— 世間一般の人間にはなかなか押し量りづらいところか、と手前は見ている。

にも関わらず、テンプルは明示的にソースを呈示してくれては「いない」のだが、本稿筆者が今よりも随分前に読了し、その著者らの博覧強記ぶりに感銘を受けたとの洋書、

Hamlet's Mill (初出 1969 年の書で直訳すれば『ハムレットの製粉機』ともなるが、文脈的に『ハムレットの臼』と訳せようとの書/現時未邦訳. 往時、マサチューセッツ工科大学で歴史を講じていた Giorgio de Santillana およびドイツの科学者 Hertha von Dechend の両名による伝承分析書)

には [シリウスが弓の星である] とのことにつき、次のような言及がなされている(のでその部よりの引用をなしておく)。

(直下、現時、オンライン上で HTML 版が公開されているとの Hamlet's Mill 『ハムレットの臼』(1969) Chapter XV The Waters from the Deep —— 筆者手元にある Paperback 版ではその p.215 から p.216—— よりの引用をなすとして)

The eight Yasht of the Avesta, dedicated to Sirius — Tishtriya, says of this star: "We worship the splendid, brilliant Tishtriya, which soars rapidly to Lake Vurukasha, like the arrow quick-as-lightning, which Urxa the archer, the best archer among the Aryans, shot from Mount Aryioxsutha to Mount Huvanvant." And what does Sirius do to this sea? It causes "Lake Vurukasha to surge up, to flood asunder, to spread out; at all shores surges Lake Vurukasha, the whole center surges up"(Yt.8.31; see also 5-4). Whereas Pliny wants to assure us that "the whole sea is conscious of the rise of that star, as is most clearly seen in the Dardanelles, for sea-weed and fishes float on the surface, and everything is turned up from the bottom." He also remarks that at the rising of the Dog-star the wine in the cellars begins to stir up and that the still waters move (2.107) — and the Avesta offers as explanation (Yt.8.41) that it is Tishtriya, indeed, "by whom count the waters, the still and the flowing ones, those in springs and in rivers, those in channels and in ponds."

This is, however, no Iranian invention: the ritual text of the Babylonian New Year addresses Sirius as "mul KAK.SI.DI.who measures the depth of the sea." mul is the prefix announcing the star, KAK.SI.DI means "arrow," and it is this particular arrow which is behind most of the bewildering tales of archery. The bow from which it is sent on its way is a constellation, built from stars of Argo

and Canis Major, which is common to the spheres of Mesopotamia, Egypt and China.

(補ってもの拙訳として)

「[アヴェスター] (訳注:イランにて信仰されていた[拝火教]として知られるゾロアスター教の聖典) にあつてのヤシュト第八章、同セクションは [シリウス・ティシュトリア神] (訳注:ティシュトリア、シリウスを体現した存在でゾロアスター教における星と恵みもたらす雨の体現存在としての神) に捧げられてのものとなっているのだが、聖典『アヴェスター』同セクションではシリウスに対して

「我々は壮麗かつ光り輝くテシュトリア、Vurukasha 湖に[アーリア人の間で最も優れた弓使いである Urxsa が Aryioxsutha 山から Huvanvant 山に向けて放った稲妻のように素早き矢の如く] 素早くも急上昇していくとの同神を崇めるものである」

との言及がなされている。

では、シリウスはこの海 (訳注:文脈上、先の段にて氾濫が問題となるとされている[内海]としての Vurukasha 湖のこと) に対して何をなしているというのか。

シリウスは Vurukasha 湖をして氾濫なさせ、水面散逸するかたちでの洪水を引き起こし、拡大なさせるとのこをなしている(と伝わっている)のである;[すべての岸辺にて Vurukasha 湖、その全中心よりの波が押し寄せる](ヤシュト 8. 41 の部)との部にあるとおりの伝にてである (訳注:本稿でもつい最前にあつての **出典(Source) 紹介の部 95(6)**にて言及していることではあるが、シリウスは原初の農耕文明にとり、その[ヘリアカル・ライジング]の時期をもってして灌漑に適切な時期を教え示していた天体としての側面を伴っている。ここでの氾濫にまつわる記述はそのことへの言及がなされていると解されるようになってい

る)。他面、プリニウス (訳注:ナチュラル・ヒストリーこと博物誌をものしたローマの著述家プリニーのこと) は、(シリウスというものにつき)、[海藻および魚らが沖まで浮かび上がってき、水底からよりすべてが持ち上げられているような有り様を呈するダーダネルス海峡にあつて最も明示的に見られるが如く、およそ [大海] と表すべきものはすべて同天体 (シリウス) 上昇を意識している(ような動きを見せる)]

と(読み手たる)我々に確信させたがっている。

彼(ローマ期著述家プリニウス)はまた、犬の星(シリウス)の上昇期にあつてワインセラーにてのワインが[動き]を見せもすること、また、静止した水が動くといったことを述べていた(2. 107. —訳注:プリニウス『博物誌』の当該事項言及箇所—)。

そして、[アヴェスター]はそのヤシュトの 8. 41 のセクションにての説明として [ティシュトリア神 (訳注:先に注記したようにシリウスの体現神格) が [真なるところ] として「静止した、そして、流れる水とのかたちにて」泉ら、河川ら、水路ら、池らに [水を加えて付け足す者] である]

とのことを呈示している。

こうした記述は、しかしながら、イランの民 (訳注:アヴェスターを生み出したゾロアスター教の担い手) の独創によるところではない。

バビロニアの新年に関する儀式的文書にあつてはシリウスという星は「海の深さ」を測る [mul KAK.SI.DI] と定置されている。それにつき、mul は「星」を意味する接頭語となり、KAK.SI.DI は「弓」を意味し、それは流布見ている「弓使い」の物語の過半、その背後にて特徴的なることとなっている (訳注: Hamlet's Mill では続いて [中国の天狼星としてのシリウス] が [弓使い] と結

びつけられての中華圏にてのイラストを挙げたりしているが、その出所が具体的にどこにあるかは不明なところがある。

その方面にて受け継がれているところの「弓」となれば、メソポタミア・エジプト・中華圏内にて共通するところのアルゴ座・オオイヌ座を構成している星々からなる星座となる。

(ここまでもってして拙訳を付しての Hamlet's Mill『ハムレットの臼』 Chapter XV The Waters from the Deep よりの引用部とする 一※一)

※[本題から脇に逸れての[余事記載]として]

尚、上にて引用元としたとの Hamlet's Mill という洋書については直近引用の Chapter XV The Waters from the Deep とのパートとその直前の段にての Chapter XIV The Whirlpool とのパートでもってして

[多くの文明圏伝承にて共通していることとして海にあっての「大渦巻」が「冥界と現世の境界」となっている]

とのことへの言及が — (本稿にての **出典(Source) 紹介の部 90(11)**]を包摂する解説部で触れたところの)「ダンテ『地獄篇』にてユリシーズが渦巻き状の旋風に吞まれて地獄行きを強いられたこと」など「とも」それが関わるような申しようがなされつつ — [古典古代の暗流としての世界原理理解] にまつわるところとして[凝ったやりよう]で引き合いに出されているが (余事記載の中で(本稿本論との兼ね合いでは放念いただいても構わないとの)さらに微に入って記載をなせば、(以下、原文引用なすとして) “ **DANTE kept to the tradition of the whirlpool as a significant end for great figures, even if here it comes ordained by Providence. Ulysses has sailed in his "mad venture" beyond the limits of the world, and once he has crossed the ocean he sees a mountain looming far away, "hazy with the distance, and so high I had never seen any." It is the Mount of Purgatory, forbidden to mortals. / "We rejoiced, and soon it turned to tears, for from the new land a whirl was born, which smote our ship from the side. Three times it caused it to revolve with all the waters, on the fourth to lift its stern on high, and the prow to go down, as Someone willed, until the sea had closed over us." The "many thoughted" Ulysses is on his way to immortality, even if it has to be Hell. / The engulfing whirlpool belongs to the stock-in-trade of ancient fable. It appears in the Odyssey as Charybdis in the straits of Messina-and again, in other cultures, in the Indian Ocean and in the Pacific. It is found there too, curiously enough, with the overhanging fig tree to whose boughs the hero can cling as the ship goes down, whether it be Satyavrata in India, or Kae in Tonga. Like Sindbad's magnetic mountain, it goes on in mariners' yarns through the centuries. But the persistence of detail rules out free invention. Such stories have belonged to the cosmographical literature since antiquity. ”**といったところ(Hamlet's Mill にける CHAPTER XIV The Whirlpool 冒頭部表記)が「ダンテ『地獄篇』にてユリシーズ(オデュッセウス)らを容赦なくも吞み込んで殺した[渦動の力](生者にはまみえることが禁じられた煉獄山より立ち現れた渦)、古来よりの伝承理解にあって世界原理との兼ね合いで重んじられていたそれである」と紹介しての『ハムレット・ミル』内表記となる)、 そうもしたところはこれより本稿にて問題視していく所存であるとの、

[(ブラックホール理論開闢史にも関わる場所の天体としてこれより詳述

していく)シリウス連星系の19世紀に発見されるに至った白色矮星]と相関関係を感じさせるような申しよう]

とまではなっていない(：ハムレット・ミルでは本稿にての**出典(Source)紹介の部 58(2)**および**出典(Source)紹介の部 58(3)**などを包摂する解説部にて先述のような意図あって細かくも解説しているところの[黒海洪水説]とも結びつくダーダネルス海峡(トロイア創設者ダルダネスに命名由来を持つ海峡)の氾濫が[シリウスの機序]と結びつけられてきたとのことが[渦巻きの話]からさらに進んでの話として指摘されているのだが 一上にての引用部に認められるように “Whereas Pliny wants to assure us that "the whole sea is conscious of the rise of that star,as is most clearly seen in the Dardanelles, for sea-weed and fishes float on the surface,and everything is turned up from the bottom." ” 「プリニウスは(シリウスにつき)[海藻および魚らが沖まで浮かび上がってき、水底からよりすべてが持ち上げられているような有り様を呈するダーダネルス海峡にあって最も明示的に見られるが如く、およそ[大海]と表すべきものはすべて同天体(シリウス)上昇を意識している(ような動きを見せる)]と(読み手たる)我々に確信させたがっていた」といったかたちにての[シリウス]と同著主要テーマとなる[世界原理としての渦動(かどう)の力に対する古来の見方]を接続させんとしていると解される指摘をなしているのだが 一、[シリウス]と[ブラックホール]が結びつく、実際に結びつけ「られる」ようになっているとのこと、(本稿にてのこれよりの段にて解説することになる)[20世紀前半にてのブラックホール理論の発展史]ありようと関わるような記述はハムレット・ミルには一切なされて「いない」)。

さらに述べれば、洋書『ハムレット・ミル』には[ブラックホール](「的なるもの」)のことそれ自体を問題視しての言及がまったくもって、そう、「一切」なされていない(だが、ただしもってして、『ハムレット・ミル』では(繰り返して)[ダンテ『地獄篇』にてユリシーズ(オデュッセウス)らが渦巻き状の旋風に吞まれて地獄行きを強いられたとの下り]、すなわち、**本稿にて出典(Source)紹介の部 90(11)**で解説しているとの[ブラックホール(の今日の理解)に通ずる記載がなされているダンテ『地獄篇』]と[ヘラクレス12功業]の接合性にまつわって重きをなしもしているとの下りなどを引き合いに出して[多くの文明圏伝承にて共通していることとして海にあっての大渦巻が冥界と現世の境界となっていること]への言及などは事細かになされている)。

Hamlet's Millの著者らはそういうことがあることにつき、すなわち、

[多くの文明圏伝承にて共通していることとして[大渦巻]が(ダンテ『地獄篇』のそのように)冥界と現世の境界となっている]

とのことがあることにつき、

[人類の伝承にては多く共通することが介在しており、そこに[先史時代から受け継がれてきた知]があるように見受けられる]

との食傷するまでに我々人類(にあっての[過去])を普通人より顧みようとする部類の人間)が押しつけられてきた、そう、たとえば、グラハム・ハンコックなぞの不正確な申しようを大衆受けするようになっている様に見るように押しつけられてきた[常識的なこと+アルファ]の文脈でしか述べておらず、それがゆえ、同著『ハムレット・ミル』に関しては

[ブラックホール(的なる時空の歪み)]

といったことに話がつながる素地すら「表層的に見れば」(強調しての「表層的に見れば」だが)なんらないとのかたちとなっている 一そも、Hamlet's Millという書籍は(筆者保持のペーパーバック版では)その表紙部からして AN ESSAY

INVESTIGATING THE ORIGINS OF HUMAN KNOWLEDGE AND ITS TRANSMISSION THROUGH MYTH [人間の知の起源および神話を介してのその「伝達」を精査してのエッセー] と記載されているような体裁、その伝のものに留まるとのかたちで「アカデミック・ポスト与えられての学者らやりように相応しく」ものされているとの書でもある一。

対して、なんらしがらみ無き一ただし相応の圧力団体の面々(理性で考えれば絶対に割り切れなかりとドグマに基づいての大義を「無恥にも」他に無理矢理押しつけようとするといった筋目の圧力団体の面々)には彼ら[存在意味]に関わるところなのか、「向こうから」ちょっかいをかけられてきたといったしがらみは([日常の慣性の力学に支えられた世の黙殺といった消極的]なものにとどまらずに)あるにはある一自由人としての魂を有しているとの筆者がものしている本稿では

(上 Hamlet's Mill でも取り扱われているとの)

[ユリシーズ(オデュッセウス)が渦巻き状の旋風に吞まれて地獄行きを強いられたこと]

にまつわる古典記述内容からしていかように[奇怪極まりない文脈]で問題視されて然るべきものなのか、できるだけ仔細に摘示することに力点を置いてもいる(本稿の先だつての段で何故もってして[ダンテに限らずものユリシーズ(オデュッセウス) 故事][現代加速器実験][ブラックホール]の間に呆れるばかりの人を食ったような複合的繋がり合いが具現化するようになさせられていると指摘出来るのか、それにまつわって何を具体的にどう細やかに指摘してきたのか、よく検討いただきたいところである)。

またもってして述べておくが、

[語るに値「しない」(と手前が見るような)人間]

に対する遠慮をあまりなしていない(というよりむしろそういう手合いを排除することを想定して「お呼びではない」との口上での物言いをわざとながら鼻につくほどにくどくもなしている)との本稿に比べて「も」格段に「一般的な水準に配慮なしていない」とのマニアックな話を選択的、不親切に書き連ねているとの洋書 Hamlet's Mill の内容を読解するには[ある程度の知識水準・知的意欲]が要求されることになろうともとらえられるところとなっているわけだが(であるから、尚更、[自分の意志の力で頭を鍛えた人間に相応しい思考能力]を持ち合わせて「いない」との向きらが同著を読しても(理解したフリはなせても)同著を理解できるような素地は「何らない」とも受け取れる)、といった書であっても、(脇に逸れてのこととして述べたうえでさらに敢えても書けば)、読むに値する人間がそれを目にすれば[多くのこと]が理解できるようになっている(と考える)。

であるから、[「似非」インテリの中でも一頭下等であるとの手合い]([自身の属する種ですら平然と売り払うとの魂(内的気風)を有しているのだろうと手前が判ずるような手合い])とは一線を画するとの[本当の識見]および[本当の誠意]に恵まれた人間が直に同著 Hamlet's Mill 現物を分析し、本稿にて筆者が呈示している[情報]とそちら内容を複合顧慮いただければ、ここにて述べるところの問題性について「も」半ばながら理解なせる素地はあるかとも見ている——につき、「込み入ったの識見なきこと自体はなんら罪ではない」(罪なのは[無知]に甘んじての中、そのうえに、言われるまま、命令されるままに我々の生き死にの問題にまつわる告発の類にすら[腐臭]を付さんとする、言論を立ち枯れ・根腐れにせんとするといったことである)としつつ述べれば、[知能](をもちたらず意志の力)はあっても(それすらも[意志]の力で得られるところかとは見るのだが)英文読解力や背景知識といった[識見]はないとの向きに対してはこ

ここで挙げているような『ハムレットの白』のような難解な書の読解は断じて薦めない（：基礎的なことからの説明を懇切になし、また、出典をすべて呈示しているとの本稿それ自体の難解度・不親切さ度合いを [1] か [2] とすれば、私見では海外で反響呈した書物ながらも『ハムレットの白』の難解度・不親切さ度合いは(それが日本語に訳されたうえでも)およそ[10]ぐらいであるとらえている)——。

以上、[本題から逸れての余事記載]はここまでとする。

(出典(Source)紹介の部 95(7)の表記を続けるとして)

直上脇に逸れての話が長くもなってしまった。とにかくも、[シリウス ⇒ 弓の星]とのテンプル『シリウス・ミステリー』に見る表記については上記のような申しようがあるのを引けば十分かと思うのであるも、

「ギリシャ神話のアクタイオンという男は「50匹」の「犬」をけしかけられ、そのうえで「弓」によって射殺されたと伝わっているが、そして、そうやって殺されたアクタイオンが鹿の聖王として「50ヶ月」の統治期間を有していたとの伝承が存在しているが、それは「弓を体現しての星」「犬を体現しての星」「50匹の犬および50ヶ月の統治期間から想起される50と結びつく公転周期50年の星」たるシリウスBに隠喩的に言及してのことと解される」

とのパートにつき、アクタイオンが「50匹の」犬を入浴を覗き見てしまったアルテミス神にけしかけられたとのことはきちんとした伝承論拠を有しているのか、ということについてはどうなのか。それにつき、少なくとも[前世紀初頭]に出た資料に同じくものことの典拠を見出すことができるようになってもいる。

すなわち、(現行、オンライン上より全文確認できるようになっているとの)、

[1911 Encyclopaedia Britannica] (その年次のものが執筆者が実にもって豪勢なことで殊によく知られるとのこと、本稿の先だつての段でも既述のブリタニカ百科事典 1911 年版)

にあつての Actaeon 項目にて

“ACTAEON, son of Aristaeus and Autonoe, a famous Theban hero and hunter, trained by the centaur Cheiron. According to the story told by Ovid (Metam. iii. 131; see also Apollod iii. 4), having accidentally seen Artemis (Diana) on Mount Cithaeron while she was bathing, he was changed by her into a stag, and pursued and killed by his fifty hounds.” (訳として)「アクタイオンはアリストアイオスとアウトノエーの息子となり、ケンタウロスのケイロンに訓練されたとの著名なるテーベの地の英雄にして狩人となる。(『変身物語』の作者たる)オヴィディウスによって語られるところの話では、同アクタイオンは偶然に山にてアルテミス神(ダイアナ神)の入浴中の姿を垣間見ることになり、その咎を責められるとのかたちにてアルテミスに鹿の姿に変じられ、そして、自身の五十の獵犬をけしかけられ、殺されたとのことになっている」

との記載が(オンライン上にて後追い出来る場所として)把握することができるようになっている。

次いで、「アクタイオンが鹿の聖王として50ヶ月との統治期間を保持していた」とのことについてだが、ロバート・テンプルによってそのことの出典として引き合いに出されている Robert Graves の手になる書籍たる The Greek Myth (邦題)『ギリシャ神話』(訳書ならぬ原著の方はオンライン上より全文確認なせるようになっている書籍)、同著 The Greek Myth は信用のおけない出典ともなりもする (unreliable source)。については、何故もってして「文人」ロバート・グレイヴズの手になる書籍たる The Greek Myth (邦題)『ギリシャ神話』が全幅の信に値しないと申し述べられるようになってしまっているのかについては

[ギルガメシュとヘラクレスの関係性などにまつわる「独創があまりにも先行しすぎての」そのや

りよう]

から先にも本稿 **出典(Source) 紹介の部 63(3)** を包摂する解説部にて指摘しているのだが、確かに「文人」ロバート・グレーヴズの手になる書籍たる『ギリシャ神話』そのように記載されており、(その部よりの引用をなせば)

“ On another occasion, Actaeon, son of Aristaeus, stood leaning against a rock near Orchomenum when he happened to see Artemis bathing in a stream not far off, and stayed to watch. Lest he should afterwards dare boast to his companions that she had displayed herself naked in his presence, she changed him into a stag and, with his own pack of fifty hounds, tore him to pieces. [. . .] Actaeon was, it seems, a sacred king of the pre-Hellenic stag cult, torn to pieces at the end of his reign of fifty months, namely half a Great Year; his co-king, or tanist, reigning for the remainder. ” (大要)「アリストアイオスの子アクタイオンは川辺でアルテミスが水浴びしているさまを留まって見るとのこをなした際、アルテミスはアクタイオンがその同僚に女神が自身の裸体を自分に見せたなどといったことを鼓吹することがなきように彼を鹿に変じさせしめ彼の 50 の猟犬に引き裂かせて殺した。…(中略)…アクタイオンはギリシャ前時代にての鹿崇拜信仰にての聖なる王、グレート・イヤーの半分にあたる 50 ヶ月後に細切れにされて殺されるとの存在であったと見えもする」

との箇所が該当部位となる ——※先の段 (**出典(Source) 紹介の部 63(3)**) にても筆者の指摘内容とバッティングしていることがそこに不適切に表記されている、そして、そちらがオンライン上での相応の類やりようとの兼ね合いから目立つようになっている節があるとのことで呈示してきたとの側面、[過度に行き過ぎた主観]を含んだ(論拠となるところのない)の申しようから[信用のおきがたい出典]であるとの側面を帯びているロバート・グレーヴズ版 *The Greek Myth*『ギリシャ神話』、同著の *Artemis's Nature And Deeds* の節が表記の記述を含むところとなる(:それにつき、ロバート・グレーヴズ書籍をもって[信用のおけぬ]としていることにつき、少なくとも俗世間にて[秀逸なる当代きっての文人]と担がれていた(とウィキペディア程度の薄い媒体でも即時確認できようとの)ロバート・グレーヴズの手になる書籍を[信用のおきがたき出典]とする資格がこの身にあるのか、とお考えになられる向きもいるであろう(殊に「感情的」な面で、そして、「利害」の面で筆者が好ましくはないとの立ち位置に立つよう強いられて唯々諾々と従っているとの向きにあっては尚更そうなるともとれる)。だから、この場にて述べておくが、本稿筆者は「実に」奇矯なる話もなすとの者だが、それは(読み手にそれを確認する雅量(寛容さ)があるかは置き)そうした話を「実に残念ながら」[把握しているところの事実群に依拠しての申しよう]としてなしているとの筋目の者である(筆者を批判してやろうとの意図でもいい、本稿の内容を批判的に検討してみるといい)。他面、ロバート・グレーヴズについては(心地良く安定感を感じさせるとの)[常識]の世界の住人がどの面下げてか逃げ惑うような[奇矯なること]は言わぬも、[さして材料なきところ]で行き過ぎた申しようをなすとのことが「一部にて知られているし」「実際に成程、そういうことか、と納得させられもする」論客となっている。その点、ロバート・グレーヴズについてはその邦訳なされていない(かと思われる)著作 *The White Goddess*『白き女神達』にまつわる Wikipedia [*The White Goddess*] 項目にての Criticism の箇所にて “ Graves's value as a poet aside, flaws in his scholarship such as poor philology, use of inadequate texts and out-dated archaeology have been criticised. ” 「グレーヴズの詩人としての評価はさておきも、同男は文献学のようなものに対する見識の低さ、不適切なる文章らの引用、有効性を失っている考古学上の知見の使用との学問的やりようゆえに同男は批判されてきた」といった赤裸々な書かれようがなされているところがある)。また、ロバート・グレーヴズの申しようを受けての式にてロバート・テンプルは「アクタイオンは 50 匹の犬をけしかけられたうえでアルテミスの弓によって射殺された」としているが、表記のロバート・グレーヴズの『ギリシャ神話』にての引用部からして「50 匹の犬に切り刻まれてアクタイオンは死んだ」と記載されているに留まり、そこに(ロバート・テンプルが書いているような)[犬をけしかけられた上での銀の弓による射殺]のニュアンスも見受けられないとのことも一応、断っておく(が、については(確認出来ていないのだが)伝承が複数バージョンあるところがそちら記載の所以たりえるとも考えられはする) —— 。

Robert Graves's work ,The Greek Myths (1955) seems to be insufficient as a basis , because it doesn't seem to be based on the philological truth , because its author Robert Graves seems to think highly of his imagination "too much" .

読み手にあって能動的に裏を取って[ことの真偽]の検討をなすだけの意欲意思がなければ、そして、実際に検証がなされなければ、論議の俎上にあげられていることが真実なのか否か、また、出典が挙げられているのならば、その出典が信用に値するものなのかそうではないのかとのことはその読み手の中では「本当に正しいかたちでは決して決着しない」、換言すれば、「偏向を見たかたちでしか決着を見ない」わけだが——人類の根本的悲劇に通底すると手前、筆者が見るところは「あまりにも多くの人間にあって物事の真偽を積極的に検討する意欲が[欠]を見ており、[意思なきロボット]のように話の俎上にあげられるようなことを言われるままに肯定する(首肯する)か、何かを言われるままに無視しきる(放念する)との向きでこの世界は横溢している(永遠に物事の真偽を適正に判断できないとの類でこの世界は満ちている)節がある、それがゆえに、そういう者らを主要構成要素としての種族の運命が露骨に透けて見える——、[話の俎上にあがっていることの真偽の程を検討しようとの向き]にとって、そう、真実の誠実なる見極めでもって何かを変えうるだけの[必要条件](十分条件ではない)を満たしており、本稿筆者が語るに足りる人間であると念頭におけるだけの向きにとってはロバート・グレイヴズという男の著作は(たとえ同男が権威ある英国の文人であったとしても)信に欠けるところが多すぎると見える——そのように述べる一部典拠は本稿にての[出典(Source)紹介の部63(3)]を包摂する部にて呈示している——。

(出典(Source)紹介の部 95(7)はここまでとする)

以上、引用なしてきたこと、

[ロバート・テンプルが『シリウス・ミステリー』にて複数文明圏にてシリウス(の伴星シリウス B)に対する先覚的言及がなされていると主張するうえでの「論拠の一つ」としているアクタイオン伝承]

について補いもしての紹介を長々となしてきたといった身ながら、本稿筆者としてはロバート・テンプルが展開しているとのそちらアクタイオンの話は

[重要な指し示し]

にあっては重きをなすものと見て「いない」。

同じくものこと、アクタイオン伝承をもってしてシリウス Bに通ずるなどとの申しようは主唱者テンプルがロバート・グレイヴズなどのその主観先行の風を批判されがちな(そして、それが至当なることを諸種文献の渉獵のなかで筆者が把握するところの)文人の言を引いているとのことをも顧慮し、「さらにもって付け足せば、」程度の話]にすぎぬだろう、としか見ていない(※)。

(※たとえば、アクタイオンを殺したと表記されているとの月神にして狩の女神たるアルテミス(のローマ版たるディアナ)が[イシス]と同等物とされていることがあっても、すなわち、本稿筆者が本稿にての立証のために先にその内容を抜粋しているとのローマ期古典 THE GOLDEN ASSE(『黄金の驢馬(ろば)』)の1639年版、現行のそれと英単語の綴りからして異なっているとのその THE ELEVENTH BOOKEにて(再引用するところとして)

“Behold Lucius I am come, thy weeping and prayers hath mooved mee to succour thee. I am she that is the naturall mother of all things, mistresse and governess of all

the Elements, the initial progeny of worlds, chiefe of powers divine, Queene of heaven! the principall of the Gods celestiall, the light of the goddesses: at my will the planets of the ayre, the wholesome winds of the Seas, and the silences of hell be diposed; my name, my divinity is adored throughout all the world in divers manners, in variable customes and in many names, for the Phrygians call me the mother of the Gods: the Athenians, Minerva: the Cyprians, Venus: the Candians, Diana: the Sicilians Proserpina: the Eleusians, Ceres: some Juno, other Bellona, other Hecate: and principally the Aethiopiens which dwell in the Orient, and the Aegyptians which are excellent in all kind of ancient doctrine, and by their proper ceremonies

accustome to worship mee, doe call mee Queene Isis. ” (対応するところの訳書、『世界文學体系』(筑摩書房)掲載の呉茂一(ホメロス古典の訳をなした人物で著名性伴っての学究(故人)／東京大学、退官後、名古屋大学教授)の訳業になる訳書『黄金の驢馬(ろば)』よりの引用として)「ルキウスよ、私はお前の祈りにたいへん心をうたれてここへ来ました。私は天地万物の母、あらゆる原理の支配者、黄泉の女王、天界の最古参として、あらゆる神々や女神たちのたた一つの形に示現するものです。…(中略)…最も古い人類の種族プリュギア人は、神々の母としてペシヌースに祀り、はえぬきのアッティカ人は、ケクロピアのミネルヴァと呼び、…(中略)…クレータ島人は、ディクチュンナのディアナと、三カ国語を話すシクリー人はステュクスのプロセルピナと、古いエレウシースの住民たちはアッティカのケレースと呼びながら住んでいます。ある地方ではユーノー、またの地方ではベローナ、ある所ではヘカテ、またラムヌーシアと呼ばれます。…(中略)…そして太陽神の、朝生まれたての光線に照らされるエティオピアの人々と、学問の古い伝統にかけては世界に冠たるエジプトの人々とは、いずれも私にふさわしい儀式を捧げ、本来の名前によって、イーシスの女王と呼びならわし崇めるのです(以下略)」

(再度の引用部はここまでとしておく)

との表記がなされていていようともアクタイオン伝承は問題となることを梁のように支える主たる論拠には満たないものととらえている — ※上にての『黄金の驢馬』の引用部位は先に本稿の重要な指し示しに関わるとの観点から [イシス] と [ペルセポネ] (プロセルピナ) を同一視する思潮が古代からあったことを示すための材料として本稿の先の段 (出典 (Source) 紹介の部 94 (3)) にて挙げたものであるのだが、の中では、イシスが [ヘカテ] でもあり、また、[ディアナ] (アルテミスのローマ版たる月神とすぐに確認できる存在) でもあると [文献的事実] の問題として記載されているわけである。とすれば、ロバート・テンプルはその式での指し示し方式の方は目立ってとっていないわけだが、[50の犬] が [シリウス体現存在たるイシスと同質性を古文獻の時点で強くも持つアルテミス(ディアナ)] によってアクタイオンにけしかけられたと伝わっていることからシリウス・コネクションを見出すことができるようになっている「とも」申し述べられる (:につき、くどくも述べておくと、本稿筆者は [シリウスから異星文明が人類文明に関与した] などとの [立証不可能なこと] を述べたいのではない (ロバート・テンプルやその著書を訳した者達はそうしたことを [可能性論] として行き過ぎた程に強くも前面に出しているようだが、筆者はそうした可能性論に必要以上に固執すると本当に重要な問題 — 自然な因果関係から導き出せる「何故?」の問題の方がより重要性を持つてくるとの問題 — が見えなくなると考えている)。そう、合理主義者、そして、自分の属する種族(人類)にあつての語るに値する人間らに (といった向きが本当にいけば、だが) [勇氣] と [意志] の問題を問いたいとの人間として筆者は [シリウスから異星文明が人類文明に関与した] などとの [立証不可能なこと] を訴求したいのではなく、[[今日的にブラックホールとの言葉で表されるもの] で我々人類を滅ぼすとの予告「としかとれない」ものが極めて巧妙に諸所あちらこちらで歴年、多重的・複合的になされ続けていた] とのことを (その [機序; 作用原理] の問題はともかくも) [現象の重視] との観点にて容易に後追い可能な根拠の山に

て指し示したい(立証したい)のであり、について、ここで問題視しているところの先にある[シリウスB]の話もが深くも関わっている(後の段まで読めば、その理由は「実にもって胸くそが悪くなる」ようなものだが、理解いただけるかと思う)がために本段に見るような話をわざわざもってなしている) ——)。

さて、「真に重要なのは、」ロバート・テンプルが、続いて指摘するように、

[[ケルベロス] とシリウスB が結びつくだけのことがある]

と主張し、そこに関しては[文献的事実]の問題として説得力が伴っていることである(と強調したい)。

そのように述べて、

[シリウスBに関する先覚的言及にあつてのロバート・テンプルの申しようには(ドゴン族云々といったところから離れれば)多くきちんとした論拠が呈示できるようになっている]

とのことについてのさらなる出典を挙げることにする。

表記のことに関わるところの説明をなす上での[布石]としての出典紹介部を、以下、設けておく。

出典(Source)紹介の部 95(8)

Source 95(8)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典(Source)紹介の部 95 (8) には

[ロバート・テンブルが「シリウスBの寓意」が(信憑性に難があるとの「ドゴン族伝承」(既述)以外にて)古典文物に含まれていると主張しているところの論拠、そのうちの他の例]

を「先だって引いたものよりも重んじられようとのところとして」紹介、次いで、その意味合いについて細かくもの解説をなすこととする。

(直下、The Sirius Mystery 原著 The Hounds of Hell ([地獄の犬たち])の節よりの引用をなすとして)

Graves informs us that, **'Cerberus was, at first, fifty-headed**, like the spectral pack that destroyed Actaeon (see 22.1); but afterwards three-headed, like his mistress Hecate (see 134.1).' (The three-headed Hecate is the three Sothis-goddesses blended in one and is an underworld counterpart, just as with the Sumerian 'Anunnaki of the underworld'.)

(オンライン上より労せずして文言確認できる(それがゆえのそこよりの引用を重視してなし)との The Sirius Mystery 原著よりの引用はここまでとする)

(直下、上の原著引用部に対応する、訳書『知の起源 文明はシリウスから来た』、[第四章 地獄の獵犬]p.164 の上にての引用の原著テキストに該当するところの引用をなすとして)

アクタイオンに襲いかかった五十匹の猛犬と、ヘラクレスが捕まえた地獄の番犬ケルベロスを同一視することも可能と思われる。アポロンの神託により、ヘラクレスはエウリステウス王から次々に難題を与えられたが、「地獄の番犬ケルベロスを捕まえてくること」というのは最後の難題であった。ケルベロスは三つの頭を持つ怪物であったが、これをヘラクレスは武器を使わずにうち負かし、英雄として名をあげたのである。このようにケルベロスは三つの頭を持つことで知られているのだが、ロバート・グレーヴズによると「もともとケルベロスは、アクタイオンを襲った地獄の動物のように**五十の頭を持っていた**が、後に主人となったヘカテのように三つの頭を持つようになった」という。

「後に(ケルベロスの)主人となった」ヘカテが「三つの頭を持つ」とは、シリウスの三女神、すなわち、ソティス、アヌキス、サティスが一人の女神に統合されたことを意味する。その統合体たる闇の女神ヘカテは、黄泉の国の支配者ハデスとも同一視され、シュメール=アッカド文明の「冥界の七人のアヌナキ」に対応するのである。

(訳書よりの引用部はここまでとする ※)

(※1 筆者は双方ともども検討しているわけだが、原著と国内で刊行された訳書には(分かり易くもするとの配慮あるいは出版上のその他の都合があつてか)一対一の対応関係が見出させないようにとれるところがあるとも述べておく)

(※2 上引用部に見るロバート・テンブル申しようのうち、
“ Graves informs us that, 'Cerberus was, at first, fifty-headed, like the spectral pack that destroyed Actaeon (see 22.1); but afterwards three-headed, like his mistress Hecate (see 134.1).' (The three-headed Hecate is the three Sothis-goddesses blended in one and is an underworld counterpart, just as with the Sumerian 'Anunnaki of the underworld'.) ” 「(ケルベロスが50の頭から3の頭にそれと類似する方向に切り替わったところの存在としての)[ケルベロスの女

主人となった三つの顔を持つ Hecate]は[シリウスの三女神]と結びつく」
との点について[論拠]の面で Robert Graves を典拠としているとのことがあるわけだが([ロバート・グレイヴズ曰く]との書き出しにてはじまっているわけだが)、それがゆえに、同セクション、
[信用のおけない(unreliable)]
と後ろ指さされかねないところが —グレイヴズ申しようを分析なしている本稿筆者からしてそうも申し述べたきところとして— ありもする(:そも、本稿にての **出典(Source) 紹介の部 94(7)** で呈示しているように[ヘカテ]と[ケルベロス]には際立っての類似要素がありこそすれ、テンプルが問題となる下りにてロバート・グレイヴズ申しようを引きつつ「ケルベロスの主人がヘカテである」「ヘカテはシリウス三女神の一柱である」などの見解を呈示していることには問題がありすぎる —『シリウス・ミステリー』著者ロバート・テンプルに申しようの典拠として引き合いにだされているロバート・グレイヴズという文人が罪作りなのは同グレイヴズが[当代きっての文人]なぞと評価されつつ(この世界ではどうしようもない者がアイドルよろしく評価されることがあると見受ける)も[過ぎし世と後世の人間の視点を眩(くら)ました、そして、死してなお眩まし続けるだけの役割を果たさせられている]との[出典論拠がどこにあるかも分からぬ話]をあまりにもの飛躍含めての申しようとして流布なしていることであり、そのことは一部にて認識されているところとなる(先に本稿ではギルガメシュ・ヘラクレス類似性問題にまつわるそうしたグレイヴズやりようを **出典(Source) 紹介の部 63(3)** にて具体例挙げて問題視している) — 。 その点、「ケルベロスがヘカテの使役する存在と見做される素地があったのか否かについても文献的出所を同定しがたいとのところがある(そこからしてロバート・テンプルが手落ちだったのか引き合いに出しているロバート・グレイヴズらしいと言えそういうやりようともとれる)。ましてや「[ソティス・アキサス・サティス]がシリウス三女神となって冥界の七人の神と同一視されている」との部にはかなり(直近にても信用できないところが多い)の事を再言及したところの) 文人ロバート・グレイヴズの恣意的解釈およびグレイヴズ「流の」飛躍が入り込んでいるように見受けられもし、古典上の典拠が奈辺にあるのかまったくもって曖昧となっている —少なくとも筆者は徒労となるのかたちで調査したが同じくものことにまつわって典拠を見出せずに終わった—)

上にて引用なした箇所にてロバート・テンプルは

“ Graves informs us that, 'Cerberus was, at first, fifty-headed, like the spectral pack that destroyed Actaeon ” 「ロバート・グレイヴズによると、もともとケルベロスは、アクタイオンを襲った地獄の動物のように五十の頭を持っていた」

と書いているわけではあるが、

「ケルベロスが三面構造ではなく 50 の頭を持っている」

とされることについての言及文物は —「文人」ロバート・グレイヴズの手になる著作といった(先述もしたような)[問題点をはらんでのもの]を引き合いに出さずとも— 目に入るところにある。

具体的には著名な『神統記』 —この場合の「著名な」というのは(ロバート・テンプルが問題視しているとの[プルタルコス]についても同じくものが当てはまるわけだが) 日本のお受験嗜好の高校生らが[世界史]との[教科]を選択した折、その中身を一切無視しての名称だけの[暗記]が[意のまま、望むままの大学に入学する]ために求められるとのレベル、たかだかもそのレベルの知識であるという意で「著名な」ということである— 、推定紀元前 700 年との太古にて成立したとされる叙事詩となるヘシオドスの手になるそちら Theogony『神統記』がケルベロスの(3 つならぬ)50 の頭に言及した著名古

典となる(ので以下、同古典より問題となる下りを抜粋する)。

(直下、『神統記』英訳版としてオンライン上にてPDF版が取得なせるとの Martin Litchfield West (M.L. West) という学究の手になる Theogony and Works and Days (『神統記』および『労働と日々』とのヘシオドス作の二篇を収めたバージョン) より原文抜粋をなすとして)

First she gave birth to Orthos, a dog for Geryoneus. Secondly she bore an impossible creature, unspeakable, **the ravening Cerberus, Hades' dog with a voice of bronze, fiftyheaded**, shy of no one, and powerful.

(拙訳として)

「最初に彼女(エキドナという存在)はオルトロス、すなわち、ゲーリュオーンの犬たる存在を産み落とし、次いで、彼女はありうべかざる生命、言語に絶し、**青銅の声を持ち、五十の頭を有し(fiftyheaded)**、そして、誰にも恥じるところがなく力も強いとの貪欲なるケルベロスを生み落とした」

(引用部はここまでとする)

その点、以上引用なした著名古典内表記(ヘシオドスの有名な『神統記』を介してもケルベロスが50の頭を持つ存在とも伝わっているとのこと)を顧慮し、そのうえで、ケルベロスを50年の公転周期を持つ「犬の星たる」シリウスの伴星たる肉眼目視不可能天体シリウスB(ロバート・テンプルが可視化存在たるイシスに対して地下世界の不可視存在ネフテュスにて体现されているとのこと)を主張している天体)と結びつけるとの観点の適正さについて考えた際には

[「ヘカテ」と「ケルベロス」(50の頭を持つと直上にて引用なしているケルベロス)が浅からぬ関係性を呈していること] (ヘカテとケルベロスという存在の間にはいくつもの際立つての類似性が存在していること)

[プルタルコス古典『モリア』にあっては「可視存在・地上世界存在イシス」と「不可視存在・地下世界存在ネフテュス」を分割する水平円存在としての犬の神「アヌビス」のことが言及されているが、と同時に、プルタルコス古典『モリア』の同じくものパートにあっては「アヌビス」(それ自体、犬の星シリウスと結びつくとの言われようがなされていること、先述の犬の神)と「ヘカテ」との同一性を問題視する記述もが含まれていること]

[「ヘカテとイシス(同イシスも先だって呈示のように犬の星たるシリウスの体现神格でもある)の両者もまたローマ期古典の中で一致視されていること]

のすべてを指し示せば(：「実際に」本稿では「ヘカテとケルベロス」の一致性については **出典(Source) 紹介の部 94(7)** の段で個人の属人的主観など問題にならぬ、誰が見ても異論がなかりうとの四つのポイント —ケルベロスもヘカテも双方とも「冥界関連の存在であり」「三つの顔を有しており」「番人としての側面を有する犬絡みの存在であり」「毒性植物トリカブトの縁起由来と結びつけて語られる存在である」との4つのポイントで際立つての類似性を有している— との式で指し示しているし、プルタルコス古典にて「エジプトのアヌビス」(シリウスと結びつく存在)と「ギリシャのヘカテ」(ケルベロスと結びつく存在)とがまさしく問題となるところで結びつけられてることついで最前の **出典(Source) 紹介の部 95(5)** にて示している。また、シリウス体现神格であることをこれまたついで最前、示してきたとのイシスについても同神が「ヘカテ」(50の頭を持つとされる犬のケルベロスと結びつく存在)とローマ期古典内にて結びつけられているとのこと若干先駆けての **出典(Source) 紹介の部 94(3)** にて示している)、【ケルベロス(50の頭を持つともされる地獄の犬) ↔ (多重的一致性あり) ↔ ヘカテ ↔ (同一視の見解が古典そのものからして存在) ↔ アヌビスおよびイシス(両者共々の犬の星たるシリウス象徴存在)】との式で「何が問題になるのか」の主軸となる指し示しが遺漏なくもなされたとの格好となるものでもある

(関連するところの図解部も下に挙げておく)。

それゆえ、テンブル申しようについては

「色々と批判がなされるとのロバート・グレーヴズなどの著述をまったくもって無批判に根拠として持ち出している時点で論拠（文献的事実としての論拠）の欠如から全幅の信をおけないとも「表層的には」見えもするが、ただしもって、十分に二の足で立てるまでに補うことが易々とできる（誰が見ても揺るがないとの著名古典内『神統記』記述の摘示および「ヘカテとケルベロスの際立っての一致性」「ヘカテとシリウス体現神格イシスとの歴史的同一視にまつわっての古典内記述」の摘示をもってして補うことが出来る）ものでもあり、エッセンス(精髓)となるところが顧慮に値するものであることに相違はない」

と述べられるものともなる。

(以下、ここまで記述のことにまつわっての図解部を設けることとする)

Graves informs us that, 'Cerberus was, at first, fifty-headed, like the spectral pack that destroyed Actaeon (see 22.1); but afterwards three-headed, like his mistress Hecate (see 134.1).' (The three-headed Hecate is the three Sothis- goddesses blended in one and is an underworld counterpart, just as with the Sumerian 'Anunnaki of the underworld' .

—— The Sirius Mystery , PART TWO – 4 The Hounds of Hell

?

philological truth

First she gave birth to Orthos, a dog for Geryoneus. Secondly she bore an impossible creature, unspeakable, the ravening Cerberus, Hades' dog with a voice of bronze, fiftyheaded, shy of no one, and powerful.

—— Hesiod's Theogony (translated by Martin Litchfield West)

既述の理由からロバート・テンブルがロバート・グレイヴズを論拠としている点についてはいただけないと解されるところでもあるのだが、ケルベロスが50の頭を持つと表記していること自体はヘシオドス(英語表記ヘシオッド)、古代ギリシャの叙事詩人として極めて有名な同ヘシオドスの代表作『神統記』に認められる文献的事実となり、そのことはオンライン上の一次資料より確認させるようになっている。

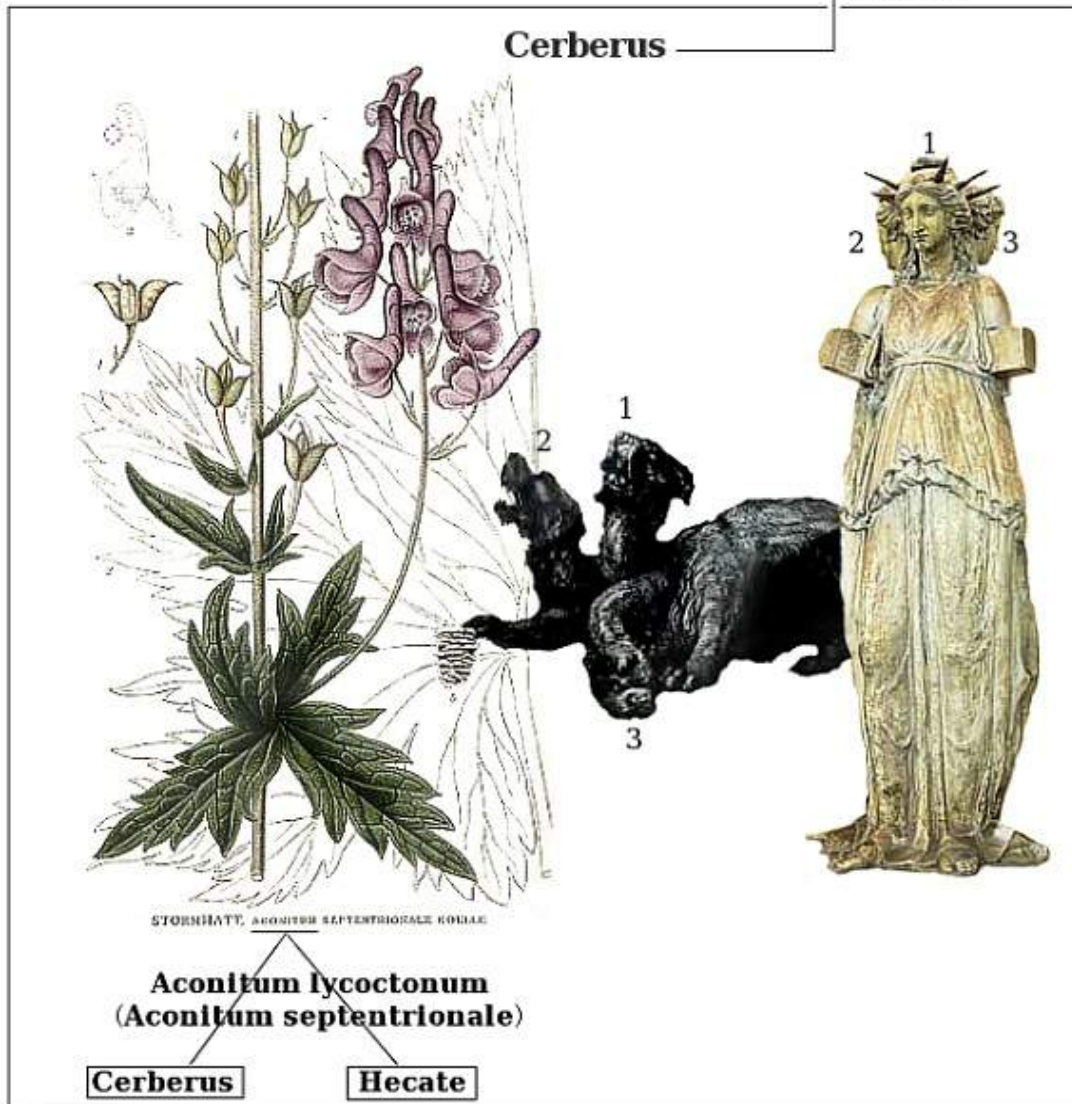
The Golden Ass
(by Apuleius)
Persephone ⇄ Isis ⇄ Hecate
(triple face)

Sopdet, Sothis

Sirius

- triple headed
- (Hell) Hound
- relationship with underworld
- relationship with aconitum

Cerberus



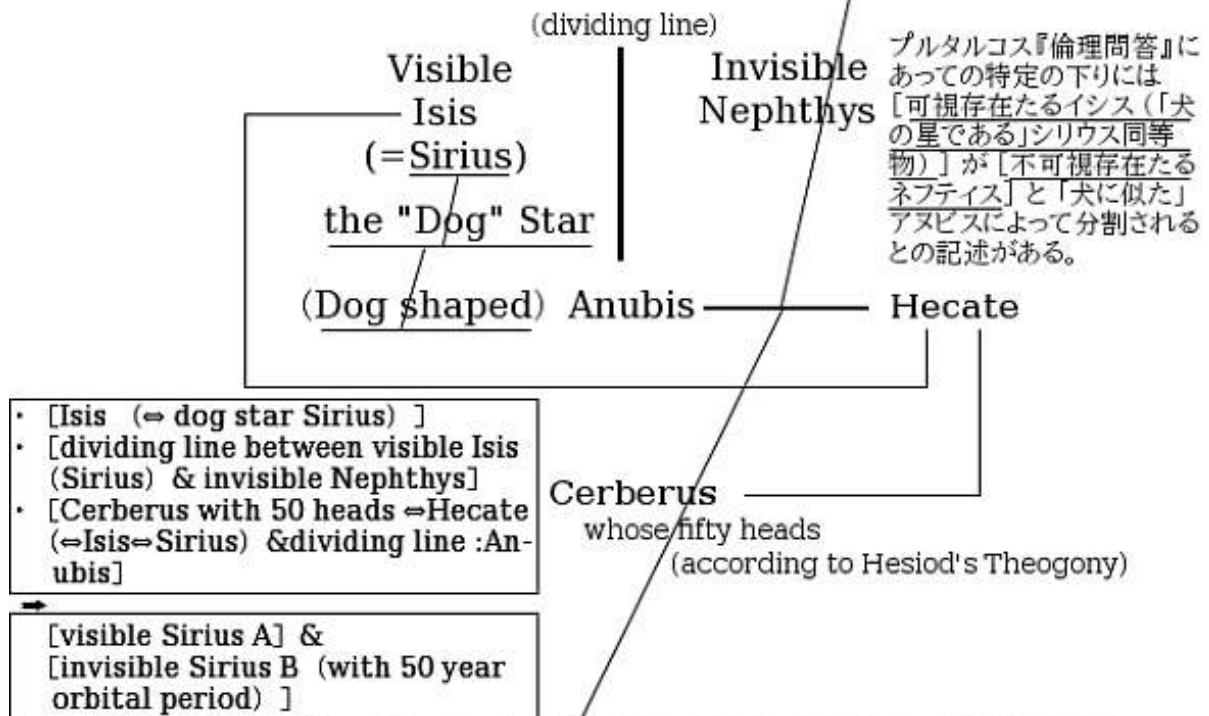
ローマ期文人アプレイウスの手になる古典として今日に伝わっている、
The Golden Ass『黄金の驢馬』
には文献的事実(philological truth)の問題として、
「イシスは(三種の面を持つ)ペルセポネであり、ヘカテである」
との筋立ての表記が含まれている（〔出典(Source)紹介の部94(3)]）。

につき、
[イシス⇄ペルセポネ⇄ヘカテ]
のコネクションを示す材料はそれだけに留まらないわけだが（本稿にての〔出典(Source)紹介の部94(6)]を参照のこと）、問題はそうして結びつく指摘されている〔イシス〕が〔シリウス〕に置換できる存在となっており（〔出典(Source)紹介の部95(6)]）、他面、〔ヘカテ〕の方が〔ケルベロス〕と複合的に結びつく存在となっている——〔ヘカテ・ケルベロス双方共に三面の存在である〕〔双方共に冥界と関わる存在である〕〔双方共に犬という属性と結びつく存在である〕〔双方共にトリカブトの由来と結びつく存在である〕——とのことである（〔出典(Source)紹介の部94(7)]）。

Philological Truth

44. And when Nephthys was delivered of Anubis, Isis owned the child. For Nephthys is that part of the world which is below the earth, and invisible to us; and Isis that which is above the earth, and visible. But that which touches upon both these, and is called the horizon (or bounding circle) and is common to them both, is called Anubis, and resembles in shape the dog, because the dog makes use of his sight by night as well as by day. And therefore Anubis seems to me to have a power among the Egyptians much like to that of Hecate among the Grecians, he being as well terrestrial as Olympiac.

Plutarch, The Morals, vol. 4 OF ISIS AND OSIRIS, OR OF THE ANCIENT RELIGION AND PHILOSOPHY OF EGYPT (1878)



Plutarch『倫理問答』にあつての特定の下りには「可視存在たるイシス(「犬の星である」シリウス同等物)」が「不可視存在たるネフティス」と「犬に似た」アヌビスによって分割されるとの記述がある。

- [Isis (= dog star Sirius)]
- [dividing line between visible Isis (Sirius) & invisible Nephthys]
- [Cerberus with 50 heads => Hecate (= Isis = Sirius) & dividing line : Anubis]

[visible Sirius A] & [invisible Sirius B (with 50 year orbital period)]

本稿のこれまでの段にて指し示してきたように「イシス」とは「シリウス」の体現存在とされる女神であり、同イシス、ローマ期の古典にてヘカテとの同一性が言及されている存在ともなる。といったこととPlutarch古典『倫理問答』(モラリア)の中での「アヌビスとヘカテへの同質性への言及」のこと、そして、「ケルベロスとヘカテの同質性」(先述)のこと、「アヌビスとケルベロスの類似性」(双方共に冥界に関わる犬科の存在となる)のことを複合的に顧慮すれば、アヌビスをシリウスとの絡みで「ケルベロス」に置換可能とする見方に「行き過ぎは何らない」と述べられるであろう。さて、ケルベロスはヘシオドスの古典『神統記』では3つではなく50の頭を持つ存在であったとされるわけだが、そのことをここでの置き換えの方式に照らしあわせて見れば、次のようになる。

「可視存在たるイシス(シリウス)と不可視存在たるネフティスが50の頭を持つケルベロス(同ケルベロス自体、ヘカテを介してイシス=シリウスと結びつく)によって分断される」

ここで考えるべきは可視天体として極めて目立つシリウスA(犬の星にしてイシスの星)の背後に

ここで考えるべきは可視天体として極めて目立つシリウスA(犬の星にしてイシスの星)の背後には不可視化天体であるシリウスBが存在しており、同白色矮星シリウスBの公転周期が50年であるとされていることである。

話を単純化しよう。

a1. [犬の星シリウスと関わる女神(イシス)]

b1 [上女神と特定存在(ヘカテ)を介して接合する50の頭を持つ犬の怪物(ケルベロス)]

c1. [シリウスと同等視される可視化存在と不可視化存在の50の頭を持つ上怪物との同等物による分断]

との三つの要素が全て出揃っているとき、そこに

a2. [犬の星シリウス]

b2. [50の公転周期]

c2. [シリウスAに対して不可視化している50の公転周期のシリウスB]

を想起「せざるをえない」と述べるのは行き過ぎになるか、なるわけがないであろう。否、むしろ、それはシリウスAとシリウスBの関係性を想起しないほうがどうかしているとの程度の按配の質的類似性の問題でもある(繰り返すが、カードは [シリウス] [シリウスと結びつく50の値] [シリウスと結びつく50絡みの存在による可視化存在と不可視化存在の分離]である)。

そして、「皮相的に問題となるのは、」以上のような関係性が古代ローマの時代には出揃っていたとのことであり、にも関わらず、シリウスBの存在が明らかになったのは近代以降の話であるということである(「皮相的に問題となるのは、」との物言いに違和感を覚えるのが普通の感覚であろうが、そのような指し示しの背後に控えている問題として、そう、真に問題になることとして、我々全員に相応の最期を進呈するとの露骨・悪辣なメッセージ性があることに筆者は気付いているためにそうした書きようをなしていること、お含みいただきたいものである——といった申し分の適正さを筆者としては検証いただきたい、すべて容易に後追いでできるとの典拠を挙げ連ねての本稿を介して検討いただきたいと考えている——)。

(図解部はここまでとする)

(長くもなるが、[出典\(Source\)紹介の部 95\(8\)](#)をさらに続けるとして)

さて、

[50の頭を持つケルベロスがシリウスBと結びつく素地ある存在となっている]

との申しようがなされている(そしてそれが十二分に取り合うに足りるだけの背景事情がある)とのことにつき入念に解説してきたのに続いて、次の部を(他視点・他材料よりの検証をなすことを前提に)『シリウス・ミステリー』より引用しておく。

(直下、The Sirius Mystery 原著 Origin of the Dogon ([地獄の犬たち]) の節よりの原文引用をなすとして)

Graves continues: 'Cerberus, associated by the Dorians with the dog-headed Egyptian god Anubis who conducted souls to the Underworld, seems to have originally been the Death-goddess Hecate, or Hecabe; she was portrayed as a bitch because dogs eat corpse flesh and howl at the moon. . . . Orthrus, who fathered [various creatures] on Echidne was Sirius, the Dog-star, which inaugurated the Athenian New Year. He had two heads, like Janus, because the reformed year at Athens had two seasons, not three.' The three heads of Hecate, of Cerberus in his simplified form, etc., possibly all represent the old, original year which had three seasons and originated in Egypt with the three seasons of their (1) inundation, (2) sowing, (3) harvesting, which were traditional there. But it seems unlikely. For why would the three goddesses sail in their Sirius boat in Egyptian representations which have absolutely nothing to do with a calendar? In short, the three goddesses and the three-headedness always to do with Sirius are not calendrical at all.

(原著よりの引用部はここまでとする。尚、繰り返すが、文中にてその言動を引き合いに出されている Robert Graves の申しようは「文献的事実(philological truth)の問題」にこだわる

限りは[信用のおけないものとなる(unreliable)]ことになるとも申し述べておく

(直下、上の原著引用部に対応する訳書『知の起源 文明はシリウスから来た』、[第六章 ドゴン族の起源] p.219 から p.220 にての部よりの原文引用をなすとして)

グレイヴズはケルベロスとシリウスの関連性について次のように記述しているが、同時にケルベロスの三つの頭や、その弟であるオルトロスの二つの顔について筆者とは異なる解釈を提示している。

ドーリス人はケルベロスをエジプトの神アヌビス——魂を冥界へと導く犬頭の神——と同一視していたが、そもそもケルベロスは死の女神ヘカテを表すとされていた。犬が死肉を食らい、月に向かって吠えることから、女神ヘカテはメス犬の姿で描かれたのである。……オルトロスはアテナイに新年の訪れを告げる星シリウス、すなわちドッグ・スターである。オルトロスはヤヌスのように二つの顔を持つが、これはアテナイの新しい暦の方式において、一年の季節が三つから二つへと減少したことに由来するものである。

この記述に示されるとおり、五十の頭を持つケルベロスが、シリウス B の公転軌道を現わすアヌビスと同一視されていたという事実から、ついにアヌビスと神聖数「五十」を結びつけることができる。エジプト神話においては、アヌビスは明らかにシリウス B の公転軌道を表していると解釈しうるものの、アヌビスと「五十」を結びつける要素は何ら存在しなかったのである。この記述においてグレイヴズはケルベロスの三つの頭を、洪水、播種、収穫という三つの季節を表すものであり、オルトロスの顔が二つに減少したのは、季節の分類が三つから二つへ減少したためと解釈している。

(日本国内で流通しているとの邦訳書よりの引用部はここまでとしておく)

直近引用なししたところを含めてロバート・テンプル『シリウス・ミステリー』特定部にて述べられていることら、それらについては「そうである」と明示的に強調こそされていなくとも、

「「文脈上、自明にも」次のことらをも主張要素として内包している

こと、押し量れるようになっているものである。

(どこに出典を求めているのか、判然としないことで悪評が伴っているロバート・グレイヴズ申しようなどを典拠としているロバート・テンプル主張の特色を敢えて捨て置きながらもテンプルの言い分が当然に含意していると解されることを羅列表記、また、それが何故、重んじて足りるのかの根拠をも併せて以下、表記することとする)

[犬のケルベロスは3つの頭ではなく50の頭を持っていたともされる。それがゆえに、[50年の公転周期をもって「犬の星」のシリウス星系を回るシリウス B]と[50の頭を持つ犬たるケルベロス]の結びつきが — 顧慮すべき他事情を顧慮した際に — 「想起」される] ⇒ (以上、ロバート・テンプル申しようにあつてのケルベロスが[50の頭を持つ]と伝わっているとの部は容易に確認可能な事実である — **出典(Source)紹介の部 95(8)** —)

[上の結びつきは[50の][猟犬]が[弓]と結びつく狩人の女神アルテミスによってアクタイオンにけしかけられるとの文脈にても[犬の星]にして[弓の星]たるシリウス、「50年の周期と結びつく」シリウス B との絡みでより「想起」されることである] ⇒ (以上、ロバート・テンプル申しようにつき、アクタイオンが50の猟犬

をけしかけられたとの伝承を語り継ぐ資料が存在すること「まで」は事実である — **出典(Source) 紹介の部 95(7)** —)

[上の結びつきは[[可視存在シリウス A(イシスによって象徴)]]と[不可視存在シリウス B]を分かち存在とプルタルコス古典にて記述されているとの「判断」がなされるどころの「冥府の犬の神」たるアヌビス(同アヌビス自体、シリウスと結びつく存在である)]]と[ケルベロス]との結びつきに着目することで問題となるところである] ⇒ (以上、ロバート・テンプル申しようにつき、**[[水平円とワンセットのアヌビス](シリウスを包摂するオオイヌ座と結びつけられ、また、シリウスそのものとも結びつけられてきた存在)によって「イシス」(シリウス A の象徴神格として知られる)と「ネフティス」が可視・不可視存在に分断される]]との一見する限りは意味不明なる暗号がかった記述がプルタルコス古典『モラリア』にて具現化を見ていることは容易に確認出来るどころの事実である(問題はそうした古典記述が**【水平円軌道をなし、50年の公転周期を有し、19世紀まで発見されることがなかった肉眼目視不可能存在であるシリウス B】と【星天にあって目立つシリウス A】の連星系であるシリウス星系の構造をネフティス・イシスの分割にて示していると言えるか、である)**。また、**プルタルコス古典『モラリア』にて【可視存在イシスと分割されての地下世界の不可視存在】とされるネフティスが地下世界の存在であるようにケルベロスもアヌビスも冥界(地下世界)の犬科の存在である**と**のこと**もまた事実である — **出典(Source) 紹介の部 95(5)** —)**

(くどいが) 以上のことから、ロバート・テンプルがその内容を前提に[常識では説明がなせないとのシリウス B に対する往古世界での先覚的言及がなされていた]とのことを主張しているとのことは

[テンプルが参考としていることを『シリウス・ミステリー』文中にて明言しているとのロバート・グレーヴズの信のおけぬ申しよう — (すなわち、[ケルベロスは死の女神ヘカテを表すとされていた。犬が死肉を食らい、月に向かって吠えることから、女神ヘカテはメス犬の姿で描かれたのである。……オルトロス(オオイヌ)はアテナイに新年の訪れを告げる星シリウス、すなわちドッグ・スターである。オルトロスはヤヌスのように二つの顔を持つが、これはアテナイの新しい暦の方式において、一年の季節が三つから二つへと減少したことに由来するものである]といった内容を含む申しよう) —]

を[夾雑物]として一切顧慮に入れずに端折っても、「その通りである」と[容易に指し示せる]との側面を帯びてのものである(詳しくは先立っての図解部およびそれにまつわるより先立っての出典紹介部、そして、一部続けてなすところの説明(に付しての引証の材)を参照されたい)。

そして、本稿では上のような特性と共にあるロバート・テンプル申しよう、繰り返すが、

[ケルベロスは三つの頭ではなく 50 の頭を持っていたともされる。それがゆえに、[50年の公転周期でもって「犬の星」のシリウス星系を回るシリウス B]と[50の頭を持つ犬たるケルベロス]の結びつきが — 顧慮すべき他事情としてのケルベロスとシリウス体現存在との連続性を顧慮した際に — 「想起」される]

[上の結びつきは【[[可視存在シリウス A(元来イシスによって象徴)]]と[不可視存在シリウス B(地下世界のネフティスによって象徴)]を分かち存在とプルタルコス古典にて記述されているとの冥府の犬の神たるアヌビス】(そして[ヘカテ])と[ケルベロス]との結びつきに着目することでその至当性が論じられるとのものである] (:尚、先に付しての解説をなしている部では次の通りの内容を古典より引いていた→ [プルタルコスはローマ時代の古典『倫理問答(モラリア)』にて「アヌビスはヘカテと結びつく」と記している] (**出典(Source) 紹介の**

部 95(5))。その点、アヌビスと結びつくとの意見が古人(プルタルコス)にて呈されていた[ヘカテ]については[ヘカテ⇄ケルベロス]との記号論的關係性が導出できるようにもなっている(出典(Source)紹介の部 94(7))。そこから「冥界の犬の審判員たるアヌビスは冥界の犬の番犬たるケルベロスと結びつく」との観点が自然ジネンとして出てくる)

[上の結びつきは [50 の] [獵犬] が [弓] と結びつく狩人の女神アルテミスによってアクタイオンにけしかけられるとの文脈にても [犬の星] にして [弓の星] たるシリウス、うち、「50 年の周期と結びつく」シリウス B との絡みでよりもって強くも「想起」されるところである]

のうちの、

[上の結びつきは [50 の] [獵犬] が [弓] と結びつく狩人の女神アルテミスによってアクタイオンにけしかけられるとの文脈にても [犬の星] にして [弓の星] たるシリウス、うち、「50 年の周期と結びつく」シリウス B との絡みでよりもって強くも「想起」されるところである]

を(そのように指摘できることが事実として存在していても) [こじつけがましき側面強きところ]として敢えて軽視(あるいは捨象)したうえでも

[ケルベロスは三つの頭ではなく 50 の頭を持っていたともされる。それがゆえに、[50 年の公転周期でもって「犬の星」のシリウス星系を回るシリウス B]と[50 の頭を持つ犬たるケルベロス]の結びつきが 一顧慮すべき他事情としてのケルベロスとシリウス体現存在との連続性を顧慮した際に—「想起」される]

[上の結びつきは【 [可視存在シリウス A(元来イシスによって象徴)] と [不可視存在シリウス B(地下世界のネフティスによって象徴)] を分かち存在とプルタルコス古典にて記述されているとの冥府の犬の神たるアヌビス】(そして [ヘカテ]) と [ケルベロス] との結びつきに着目することでその至当性が論じられるとのものである]

とのことらを取り立てて重視するものである(※)。

(※再三再四どころか再四再五となして述べるが、以上、本稿で取り立てて重視すると明言する二つの要素については、

[[容易に後追い確認な歴史的事実]に依拠して主張されているところと確認できることである]

と指し示し可能なところである(ロバート・テンプルのその他の主張論拠に問題が多分に伴っていようと、である)。

その [客観的に指し示し可能] との特性を示すべくも本稿ここまでの段にて(テンプル書籍の[不親切][不十分]ととれる出典紹介の不備を補うかたちで) オンライン上より全文確認のプルタークの *Moralia* 『モラリア』英訳版の問題となる部 —イシス・ネフテュス・アヌビスにまつわる下り— の抜粋やヘシオドスの *Theogony* 『神統記』の問題となる部の抜粋 —ケルベロスの頭の数にまつわる下り— を [イシスと結びつくシリウスの惑星特性についての出典紹介] (たとえば『金枝篇』記述の紹介) とともになしてきたのである)

(出典紹介のみならずその出典の意味合いについて事細かな解説を付しましたとの出典(Source)紹介の部 95(8)はここまでとする)

さて、ここで再度、振り返るが、ロバート・テンプレルの主張骨子は次のことにある。

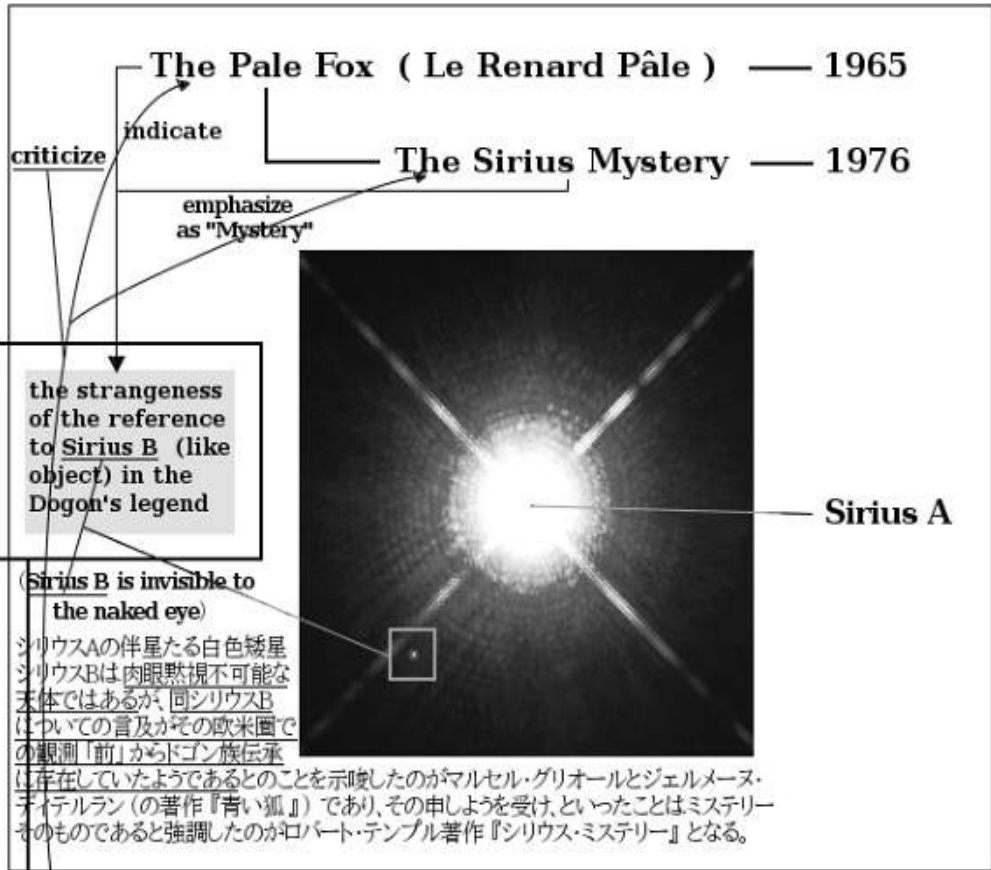
「ドゴン族は人間の目では目視不可能なシリウス B の特性を把握している。それはありえないことである(肉眼目視不可能であるシリウス B の発見は 19 世紀のことであるがゆえにありえないことである)。そして、類似のことは他文明の歴史的記録にも見てとれる」

そうしたテンプレル主張 —シリウス・ミステリーにあっての [ミステリー] の中心となるところ— につき、彼の主張の骨子をなすところの [ドゴン族の神話伝存形態] それ自体については

「胡散臭い」

「信憑性がない」

との申しようがなされているとのこと、細々と先だって紹介なしてきた (: だがもってして、相応の陰謀論をこととする者達、指し示し内容の重要性から我が身を怒りに打ち震えさせたところとして本稿公開サイトにもその下等な色合いを付けようとしてきたし、いまなお付けようとしているとの相応の陰謀論をこととする者達ら由来の馬鹿話の頒布ないし再頒布行為 — 筆者は相応の者達に起因する頭の具合のよろしくはないとの駄法螺ではなくそういうことをやらかす者達を動かす背景の力学として何があるのか、それが [どういう結末を招来しうるのか] とのことを分析の対象にしている — よりはロバート・テンプレルやりようは [まともなもの] ではある。すなわち、ロバート・テンプレルの主張は (そこに全幅の信がおけるかは別問題として) アカデミズム・サイドのマルセル・グリオールやジェルメーヌ・ディテルランの主張を踏襲し、また、(20 世紀英国の文人として有名であったロバート・グレーヴズの分析との比較検討をなすとのやりようはともかくも)、古典にての内容の分析を高度に知的になすとのやりようをとっているからである (そうしたことは思考力がないか、不十分なる取り合にたらぬ者、愚者狂人の類に出来ることではないのだからテンプレルやりようは重んずべきところとなる)。しかしながらも、ロバート・テンプレルのそうしたやりようにつき主張の骨子をなすドゴン族の神話の部について — 英文 Wikipedia [Nommo] 項目 (ドゴン族の神格 [ノムモ] にまつわる項目) より再度の引用をなすところとして — “ Walter van Beek, an anthropologist studying the Dogon, found no evidence that they had any historical advanced knowledge of Sirius. Van Beek postulated that Griaule engaged in such leading and forceful questioning of his Dogon sources that new myths were created in the process by confabulation, writing that "though they do speak about *sigu tolo* [what Griaule claimed was Sirius] they disagree completely with each other as to which star is meant; for some it is an invisible star that should rise to announce the *sigu* [festival], for another it is Venus that, through a different position, appears as *sigu tolo*. All agree, however, that they learned about the star from Griaule" ” (大要として) 「ドゴン学を専門とする人類学者ワルター・ヴァン・ビークによると [グリオールがシリウスの先進知識と呼ぶものをドゴンが保持している証拠はなくグリオールがシリウスだと指摘したシグ・トロについてはドゴン族の間にそれがどの星なのかの意見の一致は全くない。シグ (祭り) を広く知らしめるために上がる不可視の星と言うものもあるし、シグ・トロと呼ばれるものにつきそれは金星であるとする者もいる。しかし、全員が同意するところとして彼らとその星についてグリオールの研究から (逆に) 学んでいることである」 との意見が査読付きの人類学分野の学術誌 *Current Anthropology* (1991 年次 No.32 の 139 から 167 の頁) に寄せられているといった致命的弱点、職業的懐疑論者 (その知的レベルはさして問題にならない) に難詰めされるだけの [弱さ] が伴っていることも指摘されているところである — 詳しくはテンプレルが核となるところで出典としている *The Pale Fox* の邦訳版にてどういう学者の意見が付されているのか、などにも言及の出典(Source)紹介の部 95(3) を参照すればお分かりになるうとのところである —) 。



- 1862 : "first" observation of Sirius B (by Alvan Graham Clark)
- 1930s : Missions of Protestants to the Dogon area
- 1940s : Establishment of the elementary school in the Dogon area
- ? : [(Sirius B related) Legend] forgery (?)

(research by Griaule & Dieterlen)

シリウスBに対するドゴン族言及の奇怪性に言及している、ないしは、それを敷衍し(押し広げ)てドゴン族の伝承は人類文明初期のミステリーそのものを端的に示すものであると強調するとの式の言説に対してその批判者らは「ドゴン族には1930年代からプロテスタント系の伝道が盛んに行われ出しており、また、ドゴン族の住まう地にての拓けた領域にては1940年代には小学校までできていたのであるから、欧州にて(1915年にスペクトルが観測されて)話題を集めたとのシリウスBにまつわる情報がドゴン族に流入、シリウスBにまつわる太古の伝説が偽造物(forgery)として後付けで生成されたのであろう」との申しようをなしたりもしている。——ちなみに、ここでの記載内容はジェルメーズ・ディテルランの著作 Le Renard Pâle、『青い狐』の邦訳版の刊行に関わっている国内の大学人の申し分(引用したところである)に多く依拠してのものとしてしたためている。

Whether Dongon's reference to Sirius B is genuine or not, it makes no difference .

はっきりと申し述べ、ドゴン族の神話が往古からシリウスBに「際立って」酷似するものに言及していたということが[真実]なのか、あるいは、[捏造・錯簡の賜物]かどうかすらも一切問題にならない。

他所にて、
[異論の出る余地なき文献的事実に基づき述べられるところ]
として[シリウスB同等存在]への隠喩がかつてのものながらもの複合的言及がなされていたとの申しようがなせるようになっていくとのことがこの世界にはある、それがゆえに、ドゴン族の曖昧模糊たる伝承由来などを重要な論点にする必要などないとのことがあるからである。——などと述べれば誤解を招く、そして、人類の進歩・進化の可能性(押し広げてみれば種の望ましき存続の可能性)を否定するが如くの相応の類が同文のものへと[褒め殺し]や[非管掌領域からの介入]にて眩める材料にしかねないとの一抹の危惧がよぎるから述べておくが、筆者は[無条件のエイリアン介入陰謀論者]でもなければ、[憑かれたような奇矯さを呈し、そう、軽侮・失笑を買って当然との頭の具合の程が容易に推し量れるように動くとのUFOマニア]の類でもない (I am not a UFO conspiracy theorist.) —— 。

以上述べたうえで「くどくも繰り返すが、」我々の前に控える「断崖」にも関わるところの論証をなすうえで一つの材料に関わりもするところで

「ドゴン族にまつわる真偽不明な伝承など問題視する必要はない。一切ない。そうもした「その他の」重要要素がロバート・テンプル著書（『シリウス・ミステリー』）からして——テンプルが一切論じていないところながらも——導き出せることがある」

このことを問題視しているのが本稿である。

それにつき、結論奇矯さはともかくも、

[ケルベロスとは三つの頭ではなく50の頭を持っていたと伝わる。そして、50の頭を持つとも伝わるケルベロスはヘカテを介しての複合的なパスでシリウス体現存在たる[イシス]および[アヌビス]らと結びつき、うち、[地下世界の犬の神たるアヌビス]についてはプルタルコス古典にて—可視存在シリウスAと不可視存在シリウスBの連星系であるシリウス星系のことを想起させるように—【可視存在イシス(シリウスAの体現神格として伝わっている存在)】および【不可視の地下世界存在ネフテス】の水平円をなす分割者としてまったくもって意味不明なる暗号的な式で言及されており、そうもしたプルタルコス古典に見るアヌビス関連記述がゆえに【アヌビス(シリウスの体現存在でもある冥府の犬科存在) ↔ ケルベロス(50の頭を持つ冥府の犬)】との関係から【ネイキッド・アイ、肉眼では目視不可能で「19世紀まで発見されることがなかった」天体にして50年の周期を持ち、水平軌道をなすシリウスB】との同質性が当然に【アヌビスにて「も」象徴される犬のシリウス(星系)】との絡みで問題になる]

このことは古典にあつての記載内容その字面「のみ」から申し述べられるようになってもいることである（：いいだろうか。「判断」が導き出す結論が奇矯であり、受け手がそれを容れるか容れないかの問題は生じこそすれ、論拠となるところ自体はすべて「適正であると確認できるようになっていること」（そして「本稿にあつてその確認、オンライン上より容易になせるとの確認に必要な全要素を原文引用とのかたちで事細かに挙げ連ねていること」）なのである—であるから、「問題は、」そういう「できすぎた記号論的一致性」が指摘できるようになっているとの現実に対して、「それが偶然で済むか否か」の検証の問題が必要になるとのことである（そして、筆者は（お分かりかとは思いますが）その検証にあつて意をなす材料群を「我々を皆殺しにする（後述するように[シリウスBとも結びつきもするもの]）によって我々を皆殺しにする）との執拗な意思表示とワンセットになったものら」として事細かに、山と呈示するこのことを本稿の使命と定置している）—）。

以上、「確認のために、」実にくどくも申し述べていることについては、（筆者筆力の問題と前提指し示し事項の多さも悪影響し）、[非常にややこしいこと]を述べているのだと受け取られる向きもあるかもしれない。だから言葉を換えてよりもって端的に述べておくと、

「[ヘカテ Hecate] ⇔ [イシス Isis] (→シリウス)、[ヘカテ Hecate] ⇔ [アヌビス Anubis]、[ヘカテ Hecate] ⇔ [ケルベロス Cerberus] との [ヘカテ Hecate] を介しての相互変換がなせるようになっており（すべてきちんとした論拠を伴ってなせるところの相互変換がなせるようになっており）、そうもした中で [相互変換によって浮き上がってくる存在——あるいはヘカテを軸としての共通領域——の特性] を分析すると、

[犬]にして [シリウス] と濃厚に結びつく存在で [可視存在と不可視存在の分割] と結びつく存在にして [50] との数値と結びつく存在]

とのものが立ち現れてくるこのことになり、[古典上の記述]から明確に導き出せ

るそうした存在を巡る特性よりいやがうえにも

[[犬]の星として定置されてきた[シリウス]の伴星で[可視存在(シリウスA)に対する不可視存在]になっている[50]の公転周期を持つシリウスB(肉眼目視が完全に不可能であるため、19世紀になるまでその存在が一切捕捉されることはなかったとの天体)

のことが想起されるとのことになる」

とのことがあるから問題となる(そして、シリウスBについては[本稿で今まで問題視してきた凶器(犯行凶器)]との繋がり合いがあるとのことも後にて解説していく)。

以上、くどくも振り返り表記なししていることについては、

「[イシス](シリウス体現存在)は数多い女神すべての代表的象徴化存在となっており、たまさかヘカテがその中に含まれていることとのだけで話を進めるとの式では牽強付会(こじつけがましきやりよう)ではないのか」

との見立てが半ばなりとも話を理解出来ているとの読み手の胸中に生起することもありうるか、とは思う。

そうした見方を斥けるものとなるのが本稿にての先の段にて詳述の、

[[ヘカテ]と[デメテル・ペルセポネ]と[イシス]の一致性問題]

なのである。

その点もってして、

[[デメテル・ペルセポネ Demeter/Persephoneの両者一体性が問題視される母子人格] ↔ (グレコ・ローマン時代(ギリシャ・ローマ期)にあつての複数ソースにての関連付け) ↔ [(エレウシス秘儀に関わる[デメテルの神話にてのやりよう]と酷似するとの挙をなしての女神たる)イシス] ↔ (回帰) ↔ [デメテルと一体視されるペルセポネ] ↔ (グレコ・ローマン時代にあつての複数ソースにての関連付け、および、近代以後の学者らの呈示見解にての関連付け) ↔ [ヘカテ]

との関係性について論拠委細までは「先の段に譲りもして」端折ったうえで、再言及しておくとのことをなしておく(直下の流れを参照されたい)。

[デメテルとペルセポネの同質性について]

⇒

本稿にての**出典(Source)紹介の部 94**(及び**出典(Source)紹介の部 94(2)**)で指し示しているようにペルセポネとデメテルの母子らについては本来的に同一の存在が分化してのものであるとの見立てが存在する。

[エレウシス秘儀がそれをモチーフとして構築されているとのデメテル・ペルセポネの物語とイシス・オシリスの物語の際立っての相似性について]

⇒

本稿にての**出典(Source)紹介の部 92**で指し示しているようにデメテルのペルセポネを探し求めての彷徨の物語とイシスのオシリスを探し求めての彷徨の物語には際立っての相似性が成立している(類似性の問題として第一に[オシリスは殺された後、イ

シスに救助されて[冥界の統治者]として君臨することとなった存在であるとのことがあるのに対して、ペルセポネは略取された後、デメテルに救助されたものの[冥界の統治者]として君臨することとなった存在である]とのことがある。第二に[イシスに探し求められたオシリスに穀物神としての縁起由来があるとされる一方でデメテルに探し求められたペルセポネにも(母デメテルと共に)穀物神としての特質が伴っている]とのことがある。第三にイシス彷徨の過程で起こったこととデメテル彷徨の過程で起こったことが非常に似通っているとのことがある、すなわち、イシスもデメテルも最愛の存在(オシリス/ペルセポネ)の探索の過程で「土着の王族の子を不死にするために火にくべる」とのことをなしている]とのことがある。 といった文化伝播の体現ともとれる類似性のことがあってであろう、ローマ期の文人アプレイウスの『黄金の驢馬』にあってペルセポネとイシスの同質性についての言及がなされているのであろうと当然に解されるようにもなっている —— 尚、以上の関係性([イシス・オシリスの物語]と[ペルセポネ・デメテルの物語]の関係性)の問題にも関わるところとして先述のように[ペルセポネとデメテルの物語と密接不可分にあるエレウシス秘儀]には[フリーメーソンの秘教思潮]と[際立っての類似性・関係性]があるとの指摘が陰謀論者などという相応の人種「ではない」との向きやフリーメーソン内部の人間そのものから出されているとのことがある(:たとえば、[出典\(Source\)紹介の部 93](#)にて挙げているFreemasonの手になるTHE ELEUSINIAN MYSTERIES AND RITES(1919)、Project Gutenbergのサイトより確認できる同著にてはその冒頭部、Preface(序文)の部より “The Eleusinian Mysteries — those rites of ancient Greece, and later of Rome, of which there is historical evidence dating back to the seventh century before the Christian era — bear a very striking resemblance in many points to the rituals of both Operative and Speculative Freemasonry. ” 「エレウシス秘儀、古代ギリシャおよび後期ローマのそれら儀式がキリスト教時代より7世紀ほど遡るとの史的根拠を伴うとのものは実務的フリーメーソンリーおよび思弁的フリーメーソンリー双方の儀式体系に対して多数の点でまさしくもの著しい一致性を帯びているとのものである」などと記載されているだけの事情がある)。そうしたフリーメーソンリー思潮との接続性という特性についても続く段でその[意味性]について考察を加えていく——)

[イシス(シリウスとの同等物)と古典にて結びつけられているとのペルセポネと女神ヘカテの同質性について]

⇒

本稿にての[出典\(Source\)紹介の部 94\(6\)](#)で指し示しているように文人・学究らが直接的・間接的に[ペルセポネとヘカテの同質性](ないしペルセポネと同一存在との見方が成り立つデメテルとヘカテの同質性)について言及している、史的根拠あって言及している — たとえば、ジェイムズ・フレイザーにあっては先だって引用の『金枝篇』記述内容に見るように古代人の残存している記録を引用している — とのことがある。また、本稿にての先の段にて同文に示しているようにヘカテはペルセポネ・デメテルらとエレウシス秘儀にての崇拜対象として並べて推戴されてきた存在でもある。

以上の再提示の部にて

[[デメテル・ペルセポネ Demeter/Persephone の両者一体性が問題視される母子神格] ↔ (グレコ・ローマン時代(ギリシャ・ローマ期)にあっての複数ソースにての関連付け) ↔ [(エレウシス秘儀に関わる [デメテルの神話にてのやりよう] と酷似するとの拳をなしての女神たる) イシス] ↔ (回帰) ↔ [デメテルと一体視されるペルセポネ] ↔ (グレコ・ローマン時代(ギリシャ・ローマ期)にあっての複数ソースにての関連付け、および、近代以後の学者らの呈示見解にての関連付け) ↔ [ヘカテ]

についてのくども振り返っての表記をなしたとして、同じくもの関係性が「イシスとヘカテ(ないし三面のペルセポネ)との結びつき」にまつわるローマ期古典『黄金の驢馬』の記述内容に色濃くも影を落としているのであろう(と「当然に」推察される)と明言できるのがここでの話である。

上のような式で「側面(別方向)から強くも補強されもしている」とのかたちで

「[ヘカテ Hecate] ⇔ [イシス Isis]、[ヘカテ Hecate] ⇔ [アヌビス Anubis]、
[ヘカテ Hecate] ⇔ [ケルベロス Cerberus] との [ヘカテ Hecate] を介しての相互変換がなせるようになっており(すべてきちんとした論拠を伴ってなせるところの相互変換がなせるようになっており)、そうもした中で
[相互変換によって浮き上がってくる存在 ——あるいはヘカテを軸としての共通領域—— の特性]
を分析すると、

[[犬] にして [シリウス] と濃厚に結びつく存在で [可視存在と不可視存在の分割] と結びつく存在にして [50] との数値と結びつく存在]

とのものが立ち現れてくるとのことになり、[古典上の記述]から明確に導き出せるそうもした存在を巡る特性よりいやがうえにも

[[犬] の星として定置されてきた [シリウス] の伴星で [可視存在(シリウスA)に対する不可視存在] になっている [50] の公転周期を持つシリウスB] (肉眼目視が完全に不可能であるため、19世紀になるまでその存在が一切捕捉されることはなかったとの天体)

のことが想起されるとのことになる」

とのことがあるから問題となる(そして、**シリウスB**については「本稿で今まで問題視してきた凶器(犯行凶器)」との繋がりが合いがあるとのことも後にて解説していく)。

との見方の妥当性が増すこと、強調しているのである(換言すれば、「わざとそうもさせられていると当然に考えられるようになっていく」ということである)。

以上指摘したうえで、である。さらにもってして問題になるとのこととして

[次のような一般論が呈示することができる]

とのことも「ある」(と強調したい)。

([契機]としてそこからして問題となりもすることとして)

[エジプトの冥界の裁きの補助者アヌビスがそれを手に持っている [審判の秤] (現世での行いをすべからず秤量するとの秤) と照応するように日本では冥界の裁判官たる閻魔が嘘・偽りを暴く [浄玻璃の鏡] (現世での行い(の善悪)を全て映し出すとされる鏡) を保持しているとの申しようがなせもする]

実にもって下らない迷妄である(と筆者は見る) 宗教的観念にあつての上のことらにつき、エジプトのアヌビス神は冥界の審判の秤の保持者であるにのみならず秤にての秤量機構の一部をなす存在とすら化している。それに関してここではといった描写を含む死者の書(下に図示)の解説媒体、Project Gutenberg にてダウンロードできるとの学者 Wallis Budge (本稿にてのかなりもって先立つところの出典紹介部で典拠として引き合いに出した折に先述のことでもあるが二次大戦前までの英国にてのエジプ

ト・アッシリア学の権威たる学者 / ここにてその著書『シリウス・ミステリー』の内容を問題視しているとのロバート・テンブルのような論客もその著作を引き合いに出している(英国にての学者) による EGYPTIAN IDEAS OF THE FUTURE LIFE『来世にまつわるエジプト人の観念』(第三版) CHAPTER IV よりの引用をなしておく。

(直下、Project Gutenberg のサイトにて公開されている EGYPTIAN IDEAS OF THE FUTURE LIFE(1908)より引用をなすとして)

In the underworld, and in that portion of it which is called the Hall of Maati, is set a balance wherein the heart of the deceased is to be weighed. The beam is suspended by a ring upon a projection from the standard of the balance made in the form of the feather which is the symbol of Maat, or what is right and true. [. . .] It must be distinctly understood that the heart which was weighed in the one scale was not expected to make the weight which was in the other to kick the beam, for all that was asked or required of the deceased was that his heart should balance exactly the symbol of the law. The standard was sometimes surmounted by a human head wearing the feather of Maat; sometimes by the head of a jackal, the animal sacred to Anubis;

「死後の世界、そのマート(訳注:エジプトで司る真理の女神のこと)の広場と呼ばれる一画にて死者心臓の重さが量れる秤が用意されている。その秤の横梁は[マート神の象徴たる羽との形にて秤量基準が設けられている]との式にて突起部の上の秤によって引っ張り下げられており、それが右に傾けば、真実がそこにあるとのことになっている。…(中略)…片方の秤にて秤量されているとの心臓は他の方にて秤の横梁を蹴り上げるほどの重みをなすことを望まれていない、というのも死者にて問われるあるいは要求されることのすべては彼の心臓がしっかりと法のシンボル(マートの羽)と釣り合うことであるからである。…(中略)…秤はしばしばマートの毛をかぶった人間の顔にて置かれており、また、しばしばジャッカル(ジャックアル)の頭部、聖なるアヌビスの頭部にて置かれているとのものとなる」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上のようにアヌビスは

[真実を計測する(亡者罪過の程を計測する)との冥界の秤量機構の一部をなすに至っている存在]

である。

他面、閻魔が

[浄玻璃の鏡生前の行為を写しだし、いかなる隠し事の存在も許さぬその鏡でもって嘘を吐いた罪人の舌を抜くといったことをなす存在]

であるとのことは——和文ウィキペディア[浄玻璃鏡]項目にあつて(そこにての現行記載を抜粋するところとして) “ 地獄を守護する閻魔が亡者の裁判で亡者の善悪の見極めに使用する水晶製の鏡である。この鏡には亡者の生前の一挙手一投足が映し出されるため、いかなる隠し事もできない。もしこれで嘘をついていることが判明した場合、閻魔に舌を抜かれてしまう ” (引用部はここまでとする) と記載されているように——よく知られたことである。



上掲図左はアヌビス似姿を呈示すべくも先立って挙げた図像と同一のものである(アヌビス似姿を彫り込んだ遺物とフネフェル・パピルスのアヌビス描画部の再掲)。他面、上掲図右は絵師・河鍋暁斎が描いた閻魔像となる。アヌビスが死者の魂を秤量するための真理を重んじての秤での秤量行為でもって冥府の主催者オシリスに奉仕する存在である一方、閻魔は真理を映し出す浄玻璃の鏡を所有している。そういうことが上の図像からも分かるようになっている。

何故、といったこと、

[エジプトの冥界の裁きの補助者アヌビスがそれを手に持っている[審判の秤](現世での行いをすべからず秤量するとの秤)と照応するように日本では冥界の裁判官たる閻魔が嘘・偽りを暴く[浄玻璃の鏡](現世での行い(の善悪)を全て映し出すとされる鏡)を保持しているとの申しようがなせもする]

などとのことを問題視しているのか。それは次のようなことが「ここまで述べてきた話と結合するところとして」「論拠に基づいて」申し述べられることを本稿筆者が重んじているからである。

(各別にそれらのことを支える典拠は後続する段にて挙げる所として)

「亡者を裁く死後の旅にて死者が冥界の裁判官ら 一閻魔を含む中国より輸入されたとのいわゆる十王信仰にいうところの十王ら— より良い心証より得られるように、となされるのが、仏教で言うところの

〔中陰(中有)の期間の服喪期間 一死後 49 日間— での供養(くよう)〕

であるとされている」(：シジュウクニチ、49 日の期間の終了時にてなされる最も重要な法要が中陰法要、いわゆる、七七日、大練忌の法要で、その達成後にて忌み明け(50 日目到達)とあいなり、(筆者もそうだが)葬式仏教にすぎないといった程度の向きら — の中でも家長であれば、世話になっている寺の僧を招いて「こちらに粗飯をご用意いたしました。どうぞお召し上がりください」なぞと惣領風で歓待などしながら法事を執り行う義務があるわけだが— でも伝統的仏教徒に分類されている人々の位牌は〔白木造りの位牌〕から〔真っ黒な漆塗りの本位牌〕に切り替えられるとの風習がある)

⇒

〔哀しき永代供養・無縁仏の問題とも間接的に関わるところ、また、「東京人は三代続かない」といった側面から〔そうしたこと〕がいかに都市部にて執り行われているか、不分明ではあるが、49 日を経たの〔忌み明け〕(没後 50 日後)のことを想起させるように日本にあっては(故人死後 50「年」を経たの)〔50 回忌〕にて故人の名前が過去帳に転写、遺骨が土に返される、との風習がある。さて、ここでもまた〔死者にまつわる境界線〕として〔50〕が重きをなす 一位牌模様替えとのことで故人の扱いが画期を迎える 50 日後の〔忌明け〕および故人の名が過去帳に写され供養が終わるとの〔50 回忌〕に見られる〔49 と 50 の境目〕が意味をなす— 〕

⇒

「49 日の法要に関わる十王信仰に見る十王の内の一人、冥界の代表的審判者である閻魔(エンマ)のそもその由来はヤマ Yama と呼ばれる『リグ・ヴェーダ』(紀元前インドにて隆盛を極めたバラモン教の聖典)に見る神、さらに遡れば、イラン一帯に起源を持つとされる神にあるとされている。そのヤマ、〔文献的事実〕の問題として〔二匹ワンセットの四つの目を持つ犬〕の連れがいるとされており、そのヤマの犬らは「ケルベロスと結びつく」との文献学者ら(権威サイドの学者ら)よりの指摘がかなり前から存在している」

⇒

「以上のような話 — 〔〔冥府の犬〕(ヤマの犬)と〔冥府の審判役〕(ヤマあらため閻魔)と〔50 絡みの冥府の裁判と結びつく境界線〕の接合〕にまつわる話— はここまでに指し示してきたことら、

【アヌビス (シリウス A 体現存在である〔イシス〕を〔可視存在〕として〔地下世界の不可視存在であるネフティス〕と水平円をなすかたちで分割するなどとされている地下世界(冥府)の犬の神格/それ自体からしての犬の星シリウスと通ずる存在) との結びつきが観念されるケルベロスは三つの頭ではなく 50 の頭を持っていた「とも」される。それがゆえに、〔50 年の公転周期でもって「犬の星」のシリウス星系を水平円軌道で回る不可視存在のシリウス B 〕と〔50 の頭を持つ犬たるケルベロス〕の結びつきが「想起」される】

とのことらが問題なくも申し述べられるようになっていくとのロバート・テンプル主張内容の〔重み〕を側面(別方向)より増大させることともなる]

上記のことらの出典をこれより挙げる。

SOURCE 95(9)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典 (Source) 紹介の部 95(9) にあっては

「日本の法事の類までもがロバート・テンプルの言い分・言いようと [50 を基礎に置く冥界存在との観点] で接合する」

とのことの典拠を順次段階的に挙げていくこととする。

その点、まずもって

「亡者を裁く死後の旅にて死者が冥界の裁判官ら 一閻魔を含む中国より輸入されたとのいわゆる十王信仰にいうところの十王ら— より良い心証より得られるように、となされるのが、仏教で言うところの [中陰 (中有) の期間の服喪期間 — 死後 49 日間— での供養(くよう)] であるとされている」

との仏事についての通俗的理解に関して、(社会通念を扱っていることであるので出典としてはウィキペディア程度のものより挙げる程度で十分であろうと判断、そうするとし)、和文ウィキペディア [中陰] 項目および同 [十王] 項目の内容を引いておく。

中陰(ちゅういん)、中有(ちゅうう)とは、**仏教で人が死んでからの49日間を指す。死者があゝ世へ旅立つ期間。四十九日。死者が生と死・陰と陽の狭間に居るため中陰という。**…(中略)…**発祥地であるインドの仏教においては、臨終の日(命日)を含めて7日ごと、7週に亘り法要を行っていた。輪廻の思想により、人の没後49日目に、次に六道中のどの世界に生まれ変わるかが決まる、と考えられていたからである。それが日本に伝わり、宗旨によって考え方は様々であるが、人は死後、魂を清めて仏になる為**に中陰の道を歩き、あゝ世を目指す。その所々に審判の門があり、生前の罪が裁かれる。**罪が重いと魂を清めるため地獄に落とされるが、遺族が中陰法要を行い、お経の聲が審判官に届けば赦される。それが下記の7日毎に行う法要である。**…(中略)…**位牌を用いる宗旨では、四十九日までに臨終後すぐに作られる白木の位牌である「内位牌」から、漆塗りの位牌である「本位牌」に作り変える。**

(和文ウィキペディア [中陰] 項目よりの引用はここまでとしておく 一※一)

(※尚、上のウィキペディア [中陰] 項目ではこれより修正・削除を見る可能性もあることとして、

「49日とのやりよう、七七日が用いられているのは古代インド文明の七進法に基づき七ごとなのである」

などとも「現況」、記載されているが、筆者が把握しているところとして、その点については疑わしい、というより「どうしてこのような出鱈目がこの場にて？」という記述とも受け取れるところではある。

個人的興味から数学史にまつわる書籍を幾冊も読んできた人間として調べたところとして7進法(7で桁上がりするとの数字記述法)が人類の文明にて重きをなした事例は目立って存在して「いない」ようであるとのことがある(にも関わらず和文ウィキペディア [中陰] 項目には49日の問題について印度で古代、7進法が用いられていたからだ、なぞと記載されている。一週間の曜日のように天体の影響を受けているとの書きようならばまだしも、である)。

それにつき、[12進法]や[60進法]といったものが(60進法を採用していたとされるバビロンの例のように)往古ならずとも僻遠の地にて用いられてきたとのことがあるようなのだが、人類史にあつて7進法 一対数にて底が7(base 7)の数、英語で述べるところの **Septenary**— が取り立てて目立って用いられてきたとのことは(根拠伴わぬ属人的印象論を書き綴っただけのブラヴァッキーのような前世紀オカルト論者由来の[信憑性低き出典]以外のところでは)聞かれないし、調べても目立って見つからないようになっている(日本語媒体にては論拠よくも調べていない中でだろう、国内ウィキペディアの記述それ自体に惑溺させられている節ある誤情報の再流布媒体も見られる中にて、である)。

その点、印度の数学とのことで述べれば、ゼロが印度数学にて現れる前に用いられていたのは英文 Wikipedia にも一項目設けられている [**Brahmi numerals** (ブラーフミー数字)] と呼ばれる記数法であり、そこにては [**nava**] と呼ばれる「9」の数までが桁の区切りに用いられていたとのことが知られている。

以上より[誤記]と見るべきか、との記述も当該ウィキペディア項目(引用元となした[中陰]項目)には現況含まれているとしつつ述べておぐが、[因習]それ自体にまつわる記述は正確であると見、上にてそこよりの記述を引いていること、一応、断っておく

(次いで中国でも信仰がなされ、その因習が認められるとのことである十王信仰について解説しているとの和文ウィキペディア[十王]項目より中略なしつつもの引用をなすとして)

十王(じゅうおう)とは、道教や仏教で、地獄において亡者の審判を行う10尊の、いわゆる裁判官的な尊格である。数種の『十王経』類や、恵心僧都源信の『往生要集』に、その詳細が記されている。人間を初めとするすべての衆生は、よほどの善人やよほどの悪人でない限り、没後に中陰と呼ばれる存在となり、**初七日 - 七七日(四十九日)及び百か日、一周忌、三回忌には、順次十王の裁きを受けることとなる、という信仰である。**…(中略)… 仏教が中国に渡り、当地の道教と習合していく過程で偽経の『閻羅王授記四衆逆修生七往生浄土経』(略して『預修十王生七経』)が作られ、晩唐の時期に十王信仰は成立した。また道教経典の中にも…(中略)…同名で同順の十王を説く経典が存在する。…(中略)…『預修十王生七経』が説くのは、生七齋と七七齋という二つの仏教儀礼の功德である。このうち、生七齋は、生者が自身の没後の安穩を祈願して行う儀礼であり、その故に「預修」(または「逆修」という。…(中略)…没して後、七日ごとにそれぞれ秦広王(初七日)・初江王(十四日)・宋帝王(二十一日)・五官王(二十八日)・閻魔王(三十五日)・變成王(四十二日)・泰山王(四十九日)の順番で一回ずつ審理を担当する。七回の審理で決まらない場合は、追加の審理が三回、平等王(百ヶ日忌)・都市王(一周忌)・五道転輪王(三回忌)となる

(和文ウィキペディア[十王]項目よりの引用はここまでとしておく)

これにて

「亡者を裁く死後の旅にて死者が冥界の裁判官ら 一閻魔を含む中国より輸入されたとのいわゆる十王信仰にいうところの十王ら— より良い心証より得られるように、となされるのが、仏教で言うところの

[中陰(中有)の期間の服喪期間 —死後 49 日間— での供養(くよう)]

であるとされている」

とのことの典拠を紹介とした。

次いで、

[忌み明け(没後 50「日」後)を想起させるように日本には(故人死後 50「年」を経たの) 50 回忌にて過去帳に故人の名前は転写され、遺骨は土に返される、との風習がある。ここでもまた(49 日と同様)[死者にまつわる境界線]として [50] が重きをなす]

とのことの典拠を紹介しておくこととする。

同文に世に言い古された社会通念を扱っていることであるので出典としてはウィキペディア程度のものより挙げる程度で十分であろうと判断し和文ウィキペディア[忌年]項目内容を引いておくこととする。

(和文ウィキペディア [年忌] 項目より中略なしつつもの引用をなすとして)

中陰法要(忌明け)後、命日から100日目に「百ヶ日」の法要が行われるが、この「百ヶ日」と「一周忌」、「三回忌」の3つの法要は、中国の儒教の祭祀の影響によって付加されたものである。これは、亡者が「初七日」-「七七日(四十九日)」と「百ヶ日」を含めた8つの忌日と、「一周忌」、「三回忌」の2つの年忌の、合計10度の時点で、冥界の十人の王に審判を受けるという「十王信仰」

に基づいている。…(中略)…「七回忌」以降の法要は、日本で独自に付加されたものである。日本では11世紀以降に、十王信仰が広まった。さらにその後、鎌倉時代に、「七回忌」、「十三回忌」、「三十三回忌」が行われるようになったが、これは、「十三仏信仰」に基づいている。これは、十王信仰の各王を垂迹と見て、それぞれの王に本地となる仏菩薩を擬定し、それぞれの法要の時には、その仏菩薩を本尊として法要を行うというものである。…(中略)…神道では三十三回忌をもって荒御霊が和御霊(祖霊)になるとするため、三十三回忌を区切りとする。日本の仏教の一部では、神仏習合の影響により、三十三回忌・五十回忌をめぐりに「祖先神」として一体化すると考える場合もある。…(中略)…一般人の場合、三十三回忌もしくは五十回(遠)忌を最後の年忌にするのが一般的であり、それを弔い上げ、あるいは、間切りと呼んでおり、その時に、寺への寄進や永代供養を行う場合が多い。なお、宗祖や中興の祖、その寺の開山などの僧などについて五十回忌以降に行われる年忌について遠忌と呼ばれることが多い

(和文ウィキペディア[忌年]項目よりの引用はここまでとしておく)

これにて、

[忌み明け(没後50「日」後)を想起させるように日本には(故人死後50「年」を経ての)50回忌にて過去帳に故人の名前は転写され、遺骨は土に返される、との風習がある。ここでもまた(49日と同様)[死者にまつわる境界線]として[50]が重きをなす]

とのことの典拠紹介とした。

さて、次いで、(それこそが本稿ここでの話にて重みを有しているところなのだが)、

[49日の法要に関わる十王信仰に見る十王の内の一人、冥界の代表的審判者である閻魔(エンマ)のそもそもの由来はヤマ Yama と呼ばれる『リグ・ヴェーダ』(紀元前インドにて隆盛を極めたバラモン教の聖典)に見る神、さらに遡れば、イラン一帯に起源を持つとされる神にあるとされている。そのヤマ、[文献的事実]の問題として[二匹ワンセットの四つの目を持つ犬]の連れがいとされており、その犬らは「ケルベロスと結びつく」との学者ら(権威サイドの学者ら)よりの指摘がかなり前から存在しているとの神格でもある]

とのことの典拠を以下、紹介することとする。

閻魔の由来がヤマとされる神であるとのことについてはオンライン上より即時確認できるとの[基本的なところ]からまずもって挙げることにする。

(直下、和文ウィキペディア [閻魔] 項目よりの引用をなすとして)

閻魔は、サンスクリット語及びパーリ語のヤマ (यम Yama) の音訳。ヤマラージャ(यमराज, Yama-rāja, ラージャは王の意味)とも。音訳は閻魔羅閻(えんまらじゃ)、意識は閻魔大王(えんまだいおう)。略して閻羅王(えんらおう)、閻(えん)とも。

…(中略)…

『リグ・ヴェーダ』では人間の祖ともされ、ヤマとその妹ヤミーが兄弟姉妹婚により最初の人類が生まれ、人間で最初の死者となったゆえに死者の国の王となった。虚空のはるか奥に住むという。インドでは、古くは生前により行いをした人は天界にあるヤマの国に行くと言われた。

…(中略)…

骨の姿をした死の病魔トウルダクや、二匹の四つ目で斑の犬サーラメーヤを従える。現在のインドでは、青い肌で水牛に乗った姿で描かれる(本来は黒い肌だが美術上の様式として青く描かれる)。

(引用部はここまでとしておく —※—)

(※注記: 上の和文ウィキペディア解説項目では[1][2][5]と振られるとのかたちで閻魔の由来がリグ・ヴェーダの神ヤマに由来すること、また、そのヤマが犬を連れているとのことの出典が紹介されている。具体的には[1]は『東洋神名事典』(新紀元社)、[2]は『仏尊の事典』(学習研究社)、[5]は草野巧『地獄』(新紀元社)が取り上げられている著作となる。尚、閻魔の由来についてはインドおよび中国での縁起が解説されているとの英文 Wikipedia[Yama]項目にも Naraka —ナラカは奈落のサンスクリット呼称である— としてマンダリン(中国の公用語としての官話)にて Diyu とされるヴェーダの Yama 同等物が冥土の裁判官としての閻魔王となっていること(Enma-O or Enma Dai-O judges souls in Meido となっていること)が[基本的なところ]として記載されている)

次いで、閻魔の由来となっているとされるヴェーダの神(冥界の裁定者)であるヤマにつき、そのヤマがケルベロスと結びつくとのより学術的な出典よりの抜粋をなす。

(直下、Project Gutenberg を通じて公開されている論稿にして 20 世紀初頭、[文献学]を専門としていたとの学究(Maurice Bloomfield モーリス・ブルームフィールドという学究)の手になるものである Cerberus, The Dog of Hades The History of an Idea (1905)『ケルベロス、ハデスの犬 —観念の歴史— 』、その THE TWO DOGS OF YAMA.[ヤマの二匹の犬]の節の p.13 から p.14 よりの抜粋をなすとして)

The tenth book of the Rig-Veda contains in hymns 14-18 a collection of funeral stanzas quite unrivaled for mythological and ethnological interest in the literature of ancient peoples. **In hymn 14 there are three stanzas (10-12) that deal with the two dogs of Yama.** This is the classical passage, all depends upon its interpretation.

[...]

In the first place, it is clear that we are dealing with the conception of Cerberus. In stanza 10 the two dogs are conceived as ill-disposed creatures, standing guard to keep the departed souls out of bliss. The soul on its way to heaven is addressed as follows:

"Run past straightway the two four-eyed dogs, the spotted and (the dark), the brood of Sarama; enter in among the propitious fathers who hold high feast with Yama."

A somewhat later text, the book of house-rite of **Acvalayana, has the notion of the sop to Cerberus:**

"To the two dogs born in the house of (Yama) Vivasvant's son, to the dark and the spotted, I have given a cake; do ye guard me ever on my road!"

(補つてももの訳を付すとして)

「リグ・ヴェーダ (訳注: 古代印度の聖典ヴェーダの中にて最古のものとする) の第 10 卷は古人の文物にての神話学のおよび民族学的な興味関心との式では他に類を見ぬとの送葬供養の歌の節の束としての[聖歌 14—18]を含んでいる。うち、**聖歌 14**にては

ヤーマの二匹の犬について扱うとの三つの節(第10から第12節)が含まれている。これは古典的な一節であり(現代語と通ずるところがないため)、ほとんどすべての部位は解釈に依存するところのものとなる。

…(中略)…

ヒンドゥー教徒らがそれらと関係づけているとの観念すべてを入念になぞるとのことをなせば、それら聖歌の節らは一対の自然なるものへ適切かつ密接にそれら自体としてあるべきところとしてまとまっていく(リゾルブ、解決する)とのものである。第一に、ケルベロス(の同等物)の観点を我々が扱っていることに関してその含むところは明確である。第10の節(訳注:文脈上、リグ・ヴェーダ第10巻の中の聖歌14に見る第10の節)によれば二匹のイヌら(ヤマの犬ら)は死者の彷徨える霊らが無上の喜びの境地(文脈上、死の国のことか)より出でぬように見張っているとの「性質が悪い(非友好的な)生き物ら」であるとの理解が示されている。(その点、)天国への道を歩む魂につき次のような描写がなされている。

[まっすぐと二匹の四つ目の犬ら、まだら模様にて色黒き Sarama (訳注:ヤマの犬の名前でサーラマーヤと呼ばれるそれ)の群れを後にする:ヤーマと一緒に高遠なる祝祭の宴を張っているとの好意的な父祖らの間に入っていく]。

そのやや後にて成立した文献、一族の祭儀(冠婚葬祭)を記している『アシュヴァラヤーナ』では「ケルベロスに対する贈り物」(訳注:ギリシャ神話ではプシケの冥界下りとのエピソードがあり、にあつては「ケルベロスに贈り物としての甘い物が食餌として供されケルベロスをやり過ぎた」との故事が現実存在するのでそれを指してのことと思われる)の概念と通底することが描かれている。すなわち、「ヤーマ Vivasvant の息子の館にて生まれし二匹の犬ら、闇およびまだら模様らに対して私は菓子を与える。そなたら(訳注:ye はあなたらの古語)よ、我が道を守れ!と」とのことが描かれている

(訳を付しての引用部はここまでとしておく ——ポイントは「ヤマ(冥府の審判者たる閻魔の起源となった存在)の犬」が「冥界の犬にして」「死者の見張り番であり」「菓子の類をもってしてそれに由来する災厄を避けられると伝わっている」存在であるとの点で「ケルベロス」との共通性を有していると指摘されていることである——)

これにて、

[49日の法要に関わる十王信仰に見る十王の内の一人、冥界の代表的審判者である閻魔(エンマ)のそもそもの由来はヤマ Yama と呼ばれる『リグ・ヴェーダ』に見る神、イランに起源を持つとされる神にあるとされる。そのヤマ、[文献的事実]の問題として[二匹ワンセットの四つ目の目を持つ犬]の連れがいとされており、その犬らは「ケルベロスと結びつく」との学者(権威サイドの学者)よりの指摘がかなり前から存在しているとのことがある]

とのことの典拠を示したことになる。

(※尚、上にて Project Gutenberg のサイトにて公開されている1915年の論稿の作者モーリス・ブルームフィールドは(引用部からも古典の文献的記述をこだわっていることもそれに所以するところとしてであろう)[文献学] —古典にて字面としていかなことが文献的事実として記載されているかを重んじ、その縁起を重んじるとの学問(本稿でも重要視している[文献的事実]を第一義にしての学問) — を専門としている研究者であるとされている。については英文 Wikipedia[Maurice Bloomfield]項目にて現行、Maurice Bloomfield, Ph.D., LL.D. (February 23, 1855 — June 12, 1928) was an American philologist and Sanskrit scholar.「モーリス・ブルームフィールドは学術博士号および法学博士号保持の米国人[文献学]学者(philologist)にてサンスクリット学者であった」と表記されているとおりで

ある。物事の理非曲直の程を解釈論・目分量を交えて述べ、それでいて常識よりの逸脱性が問題にならぬとの式を取る社会科学系の学者稼業一般の人間の申し分に比べて、物事の理非曲直以前に特定文献にどういう記述がなされているとのことを重んじるとの風がある[文献学]を専門とする向きとなれば、(考古学・古文書学的側面での捏造や誤解読の問題が介在しなければ、だが)、「その言や、よりもって軽んじられじ」とのことになろうことか、とは思われる)

(※さらに分け入っての話として: 上にて引用したところ、20世紀前半まで活動した学究 Maurice Bloomfield は表記の論稿、

Cerberus, The Dog of Hades The History of an Idea (1905)『ケルベロス、ハデスの犬 — 観念の歴史 — 』

にての THE TWO DOGS OF YAMA EXPLAIN THEMSELVES. の節、その p.20 にて次のようなことをも指摘している。

(ワンセンテンス引用をなすところとして)

The Veda of the Katha school (xxxvii. 14) says: "These two dogs of Yama, verily, are day and night,"「カータカ派のヴェーダ文献が語るところではヤマのこれらの二匹の犬はまさしくもの[昼]と[夜]の体現存在である」

以上は四大ヴェーダの内の一つヤジュル・ヴェーダ、それが細分化しての黒ヤジュル・ヴェーダ(クリシュナ・ヤジュル・ヴェーダ)のカータカ(カタ)系の文書にて「ヤマの二匹の犬が昼および夜を示す」とのことが記載されているとのことを指しての部位となる。

さて、本稿にては先の段にてロバート・テンプルが論拠としているところとしてプルタルコス文書(『倫理問答』こと Moralia)の中にて次のような記述が含まれていることを紹介した。
"44. And when Nephthys was delivered of Anubis, Isis owned the child. For Nephthys is that part of the world which is below the earth, and invisible to us; and Isis that which is above the earth, and visible. But that which touches upon both these, and is called the horizon (or bounding circle) and is common to them both, is called Anubis, and resembles in shape the dog, because the dog makes use of his sight by night as well as by day. And therefore Anubis seems to me to have a power among the Egyptians much like to that of Hecate among the Grecians, he being as well terrestrial as Olympian." (同じくもオンライン上より確認できるプルターク古文献テキストについては京都大学学術出版会より[西洋古典叢書]シリーズと銘打って京大系の学究らによって出されている『モラリア』、その[イシスとオシリスについて]掲載巻にあつての p.71 にて(原文抜粋するところとして)[一方、ネプテュスがアヌビスを産むと、イシスはその子を自分の子として育てます。というのは、ネプテュスとは大地の下の不可視の領域であるのに対して、イシスとは大地の上方の可視的な領域です。そして、このどちらにも触れていて、両者に共有されている円環——いわゆる地平線——がアヌビスと呼ばれ、その姿が犬になぞらえられているのです。なぜなら、犬は夜にも昼にも視覚を同じように用いることができるからです。そして、エジプト人たちのあいだでアヌビスは、ギリシャにおけるヘカテと同様の力をもっていると思われます。地下のクソ的世界に属するものでありながら、同時に天上のオリュンポスの世界に属するものでもあるわけですから。]と訳されているところのものである)

表記のテキストでは

「アヌビス(冥府の犬の神にして罪状を測る秤の保持者)は[昼]と[夜]とが見分けられる存在である/昼「的」なる可視世界の体現者イシスと夜「的」なる不可視世界の体現者ネプテュスを分けられる存在である」

と明言されている。『そこからしてできすぎであろう』と筆者はとらえている —ケルベロスとアヌビスの一致性問題に関わる場所としてとらえている— 次第でもある。誤解を恐れずに敢えても述べれば、そこからして「機械的に」そういう風にしつらえられている臭いがすると述べたいのである)

[閻魔の元となったヤマの犬] が [ケルベロス] との連続性を有しているとのことについて「さらにも、」

の典拠を下に挙げておくこととする。

具体的には英文 Wikipedia [Cerberus] 項目にての特定部記述 — 出典表記が Mallory, J. P.; Adams, D. Q. (2006). "Chapter 25.10: Death and the Otherworld" とのかたちで学究筋の著書そしてその該当部記述を挙げるとのかたちでなされている部にての特定部記述 — 「および」 Project Gutenberg にて公開されているとの著作、19 世紀末刊行の The Popular Religion and Folk-Lore of Northern India, Vol. II (of 2) (1896) という学究 William Crooke — 同ウィリアム・クルークは英文ウィキペディアにてそこそこの文量で解説設けられているような往時にあつて令名を博していた英国にての権威筋の東洋学者となる — の手になる著書からの抜粋をなしておく。

下をご覧頂きたい。

" The name "Cerberus" is a Latinised version of the Greek Kerberos. The etymology of this name prior to Greek is disputed. It has been claimed to be related to the Sanskrit word सर्षरा sarvarā , used as an epithet of one of the dogs of Yama, from a Proto-Indo-European word *kérberos, meaning "spotted" ^[18] (This etymology suffers from the fact that it includes a reconstructed *b, which is extremely rare in Proto-Indo-European. Yet according to Julius Pokorny it is well distributed, with additional apparent cognates in Slavic, British and Lithuanian. ^[19]) "

—— Wikipedia [Cerberus] article

(from Reference of the above article

18. Mallory, J. P.; Adams, D. Q. (2006). "Chapter 25.10: Death and the Otherworld". Oxford Introduction to Proto-Indo-European and the Proto-Indo-European World.

19. Indogermanisches etymologisches Wörterbuch by Julius Pokorny)

(上抜粋部に対する [註] を付すとのかたちでの多少補つてもの訳として)

「Cerberus との名前はギリシャ系の Kerberos のラテン語系名称である。ギリシャに先立ってのこの名称の [語源] については議論がなされてきたところである。同名称ケルベロスについては [(冥界の神たる) ヤマの犬] を指す語として用いられてきたとのサンスクリット名称 सर्षरा sarvarā に語源があるとも主張されてきた、印欧祖語(プロト・インド・ヨーロッパ) にあつて「斑点のある」との意味を有する語句 *kérberos — (註: ここでの *kérberos は同語の前にてのアスタリスク * の使用規則から見て [再構形]、想定上の再構築語との趣旨のものであろう) — のありようより見て (註: 文脈上、祖上にあげられているサンスクリット sarvarā が「斑点のある」との語句と結びつくからであると述べたいのだと解されるところとして) 主張されてきたとのことがある (この語源解釈は同語が再構形の b、印欧祖語では非常にレアであるとの [*b] — 註: 添付の * の使用規則から見て比較言語学的意味合いで再構築されていることを想定されてのものとしての b か — を含んでいるとのことの影響をも受けている。だが、Julius Pokorny によれば、スラブ、英国、リトアニアにての追加されての明白なる同種語でもって、といった事例 (*b を含んでの事例) は幅広くもの広がりを見せているとのことにもなるようである) 。

" The most touching episode of the Mahâbhârata is where Yudhisthira refuses to enter the heaven of Indra without his favourite dog, which is really Yama in disguise. These dogs of Yama probably correspond to the Orthros and Kerberos of the Greeks, and Kerberos has been connected etymologically with Sarvari, which is an epithet of the night, meaning originally "dark" or "pale"

[. . .]

Throughout folk-lore the dog is associated with the spirits of the dead, as we have seen to be the case with Syâma, "the black one," and Sabala or Karvara, the "spotted ones," the attendants of Yama. "

—— William Crooke , The Popular Religion and Folk-Lore of Northern India, Vol. II (of 2) (1896)

(上抜粋部に対する [註] を付すとのかたちでの多少補ったもの訳として)
「マハーバーラタにあつて最も胸を打つとのエピソードはユディシュティラが彼のお気に入りの犬の同伴なくしてはインドラの主権する天の国に入ること、それを拒んだとの部である —— 註: [ヤマが姿じての姿の存在であつたとの犬] と上の抜粋部原文には記述されているが、そちらはヤマではなく法の神 Dharma と置換できるようになって「も」いる。古典『マハーバーラタ』のクライマックス部に近いところにてのユディシュティラの天国の門への到達のエピソードにあつては同古典を貫く「[正しき法] (と述べても宗教的観点に依拠しての疑うことから知性が生まれることを無視しての絶対なる法というものだが) たる [ダルマ] の遵守こそ尊い」との観点から [ヤマ] が法の神 [ダルマ] と同義の存在であるとの式での記述がなされている、すなわち、ユディシュティラは法の具現化存在 (犬に姿じての存在) を伴っていたがために天の門まで至つたとの記述がなされているのである (それゆえ、『マハーバーラタ』の犬の下りをダルマが姿を姿じての犬と冥界神ヤマの名を出さずにまとめている媒体もあるので筆者誤記と思ひ違ひしないでもらいたい) ——
これら [ヤマの犬] はおそらくもつてギリシャにてのオルトロスないしケルベロスと対応しており、ケルベロスは語源的にはサバリ (Sarvari)、原意としては [闇] または [薄暗さ] を意味するとの夜を指す同語と結びついていた存在である。… (中略) … 伝承を通じて、[黒きもの] を意味する Syâma のケースおよび Sabala あるいは Karvara、[斑点のあるもの] を意味するヤマの同伴者 (たる犬ら) のケースにて既に我々が見てきたように犬は死者の霊と結びついてきた」

呈示の部をきちんと読まれればお分かりいただけようが、ケルベロスとの語のそもそもの由来がヤマの犬の名前 [Sarvara] (sabala) にあるとの申しようが 19 世紀末から今日に至るまでなされているとのことがある —— それにつき、ケルベロスの語源について [闇] [薄闇] といったニュアンスがあるとの申しよう「も」19 世紀著作にてなされているが、それが至当か否かについては (言語学上の知識の不足から) 何とも申し述べるができない —— 。

(出典 (Source) 紹介の部 95 (9) はここまでとする)

「亡者を裁く死後の旅にて死者が冥界の裁判官ら 一閻魔を含む中国より輸入されたとのいわゆる十王信仰にいうところの十王ら— より良い心証より得られるように、となされるのが、仏教で言うところの

【中陰(中有)の期間の服喪期間 一死後 49 日間— での供養(くよう)】

であるとされている」(また、それに伴い位牌が[白木造りの位牌]から [真っ黒な漆塗りの本位牌]に切り替えられるとの風習がある)

⇒

【49 日を経ての「忌み明け」(没後 50 日後)のことを想起させるように日本にあっては (故人死後 50「年」を経ての)「50 回忌」にて故人の名前が過去帳に転写、遺骨が土に返される、との風習がある。ここでもまた「死者にまつわる境界線」として「50」が重きをなす 一位牌模様替えとのことで故人の扱いが画期を迎える 50 日後の「忌明け」および故人の名が過去帳に写され供養が終わるとの「50 回忌」に見られる「49 と 50 の境目」が意味をなす— 』

⇒

「49 日の法要に関わる十王信仰に見る十王の内の一人、冥界の代表的審判者である閻魔(エンマ)のそもそもの由来はヤマ Yama と呼ばれる『リグ・ヴェーダ』(紀元前 インドにて隆盛を極めたバラモン教の聖典)に見る神、さらに溯れば、イラン一帯に起源を持つとされる神にあるとされている。そのヤマ、**【文献的事実】の問題として「二匹ワンセットの四つの目を持つ犬」の連れがいており、そのヤマの犬らは「ケルベロスと結びつく」との文献学者ら(権威サイドの学者ら)よりの指摘がかなり前から存在している」**

⇒

「以上のような話 — **【冥府の犬】(ヤマの犬)と【冥府の審判役】(ヤマあらため閻魔)と【50 絡みの冥府の裁判と結びつく境界線】の接合**にまつわる話— はここまで指し示してきたことら、

【アヌビス (シリウス A 体現存在である【イシス】を【可視存在】として【地下世界の不可視存在であるネフティス】と水平円をなすかたちで分割するなどとされている地下世界(冥府)の犬の神格/それ自体からしての犬の星シリウスと通ずる存在)との結びつきが観念されるケルベロスは三つの頭ではなく 50 の頭を持っていた「とも」される。それがゆえに、【50 年の公転周期をもって「犬の星」のシリウス星系を水平円軌道で回る不可視存在のシリウス B】と【50 の頭を持つ犬たるケルベロス】の結びつきが「想起」される】

とのことらが問題なくも申し述べられるようになっているとのロバート・テンプレート主張内容の**【重み】**を側面(別方向)より増大させることともなる]

との流れが「論拠にあって問題ないところとして」成り立つとの典拠を挙げました。

さて、ここまできたところで、である。**補説 3**と題しての本稿のこのパートにあって、先立つ [1] から [5] に続いて[A]から[F]と振ってなすと言明してきた話の中にある [B] の話を 一実にもって長くもなってしまったが— 終えることとする (なお、これよりの [C] の段では「シリウス B」が「ブラックホール」といかなような側面で結びつけられてきた天体なのか、その解説をなすこととする。より具体的には「**【現実に現代科学史にあっては白色矮星シリウス B が「ブラックホール理論の発展経緯」と密接に結びついているとの背景がある】**」とのことの解説をなすこととする)。

(ここより[C]と振っての段に入るとして)

本セクション、[B]と振っての部には本書 p.231 から p.310 までの紙幅を割くのかたちとなりました。



「まずもって述べるが、」

[シリウスBについては「同天体シリウスBによってブラックホール理論がこの世に産み落とされる契機になった」との指摘が存在し、また、そうした指摘については「シリウスBの最も目立つシリウスA伴星との地球に対するポジション」および「科学の発展動向」から見れば、自然なことであるととれるような事情も存する]

とのことがある。

上のことに関して「どういうことか」との解説を以下、二段階に分けてなす。すなわち、

[シリウスBについては「同天体によってブラックホール理論がこの世に産み落とされる契機になった」との指摘が存在している]

[シリウスBの地球に対するポジションと科学の発展動向から見れば、同天体がブラックホール理論開闢と結びついているとのことは自然なことであるととれるような事情が存する]

との二段階に分けて解説(そして、「がてらも」の典拠紹介)を以降、各別になしていくこととする。

出典(Source)紹介の部 96

SOURCE 96



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典(Source)紹介の部 96 にあってはまずもって

[シリウス B については [同天体によってブラックホール理論がこの世に産み落とされる契機になった] との指摘が存在している]

とのことの典拠を挙げることにする。

その点、ここでは典拠としてロンドン大教授(退役教授)として [科学史研究] を専門としているとの向き (Arthur I. Miller アーサー・ミュラーという向き) を著者とする、

Empire of the Stars Friendship, Obsession and Betrayal in the Quest for Black Holes
(邦題)『ブラックホールを見つけた男』(原著 2005 年刊、邦訳版 2009 年刊/邦訳版版元は草思社)

という書籍の内容を引証の材として引くことにする。

(直下、Empire of the Stars Friendship, Obsession and Betrayal in the Quest for Black Holes (邦題)『ブラックホールを見つけた男』(草思社)にての [地球圏より極めて目立つ恒星としてのシリウス A の伴星たるシリウス B が [白色矮星] であると判明した経緯] について扱った部である [第三章 天体物理学の巨人エディントン] p.94-p.96 より中略しながらもの掻い摘まんでの引用をなすとして)

シリウス B はシリウス A の伴星である。

…(中略)…

十九世紀の天文学者たちがシリウス A に伴星があるのではないかと考えるようになったのは、シリウス A が滑らかな軌道をたどらず、ふらつくことに気づいたからである。

…(中略)…

シリウス A とシリウス B が互いの周りを回るのに要する時間と軌道の不規則さの度合い、さらに地球からこの二つの星までの距離から、天文学者たちはシリウス B の質量を計算することができた。その結果、シリウス B の質量は太陽とほぼ同じで、ほぼ 2×10^{33} グラムであることがわかった。

…(中略)…

半径も一万八〇〇〇キロメートルほどと計算されたが、

…(中略)…

言いかえると、シリウス B は、地球と大して変らない体積のなかに太陽の全質量を詰め込んでいるのである。このために、シリウス B の平均密度は一立方センチメートル当たり、なんと六万ー〇〇〇グラムにもなってしまった。白色矮星の密度が極端に高かったため、天体物理学者たちは、このような星の記述には、これまでとは別の形の完全気体の法則を捜さなければならないのではないかと考えた。

(訳書よりの引用部はここまでとしておく)

以上はシリウス B が [白色矮星] としていかにエポックメイキングな天体として存在予測されるに至ったのかということにつき言及した部である (：そも、白色矮星こと [ホワイト・ドワーフ] という言葉、[太陽と同様の質量を持つにかかわらず地球と同程度かやや大きめのサイズに縮小したとの恒星] を指すとの自体が生み出されたのもシリウス伴星たるシリウス B の恒星分類法におけるスペクトル分類が A 型、白色系統であったとのことが和文ウィキペディア [白色矮星] 項目に現行記載されているとのこともある —— (和文ウィキペディア [白色矮星] 項目にての [形成過程] の節より抜粋をなせば) “「白色

矮星」という語は、シリウス伴星が白色、スペクトル分類が A 型であったところからできたものであるが、観測の結果、他にも青・青白・黄白・黄・橙・赤など通常の恒星と同じものが存在することがわかった”（引用部はここまでとする）とされているようなところがある——）。

それにつき述べておけば、

〔白色矮星と「後に」呼ばれるようになったもの〕

の嚆矢はエリダヌス座のエリダヌス 40 番星の伴星（40 Eridani B）であるとされもしている。既に 18 世紀後半、1783 年より発見されていたとのことである [エリダヌス B] が「1910 年より」白色矮星と呼ばれるようになった（スペクトル分類が公にされたのは 1914 年とも）、それは【シリウス B の白色矮星としての」定義年次】（1915 年／シリウス B の存在自体は本稿にてここまで引用なしてきたところにて言及されているように既に 1862 年に（アルヴァン・グラハム・クラークという人物によって）特定されていたとされる）に先立つこととされもしている（：英文 Wikipedia [White dwarf] 項目にて “ The pair 40 Eridani B/C was discovered on January 31, 1783, by William Herschel. It was again observed by Friedrich Georg Wilhelm Struve in 1825 and by Otto Wilhelm von Struve in 1851. In 1910, it was discovered that although component B was a faint star, it was white in color. This meant that it had to be a small star; in fact it was a white dwarf, the first discovered. [. . .] The unusual faintness of white dwarfs was first recognized in 1910 by Henry Norris Russell, Edward Charles Pickering, and Williamina Fleming ; the name white dwarf was coined by Willem Luyten in 1922. In 1910, Henry Norris Russell, Edward Charles Pickering and Williamina Fleming discovered that, despite being a dim star, 40 Eridani B was of spectral type A, or white.[. . .] The spectral type of 40 Eridani B was officially described in 1914 by Walter Adams.”（大要）「エリダヌス 40 番星のエリダヌス B および C は 1783 年ウィリアム・ハーシェルにて発見された。次いで、それが観測されたのはフリードリヒ・ジョージ・ヴィルヘルム・シュトルーベによる 1825 年のこと、次いで、オットー・ヴィルヘルム・フォン・シュトルーベによる 1851 年のこととなり、1910 年にはエリダヌス B がおぼろげな星でありながら白色を呈していることが発見されることとなり、そのことはエリダヌス B が小さな恒星に違いなく白色矮星であるとのことを意味していた。…（中略）…白色矮星のおぼろげさに依拠しての特色はヘンリー・ノリス・ラッセルらによって 1910 年に発見されることとなり、白色矮星との呼称それ自体は 1922 年にウィレム・ルイテンによってあみ出された。1910 年、ヘンリー・ノリス・ラッセルらは[か細い星であるにも関わらず、エリダヌス 40 番星の伴星がスペクトル分析における A 型、すなわち白色を呈している]ことを「発見」、そちらがウォルター・アダムスによって 1914 年に公に記述されるに至った」と記載されているとのことがある）。

尚、[エリダヌス B] のスペクトル分類を [後に白色矮星と呼ばれるもの] として公的に表現するに至ったとされるウォルター・アダムズ (Walter Adams) という人物がシリウス B の白色矮星としての側面を発見した人物「とも」なっているとされることもある —英文 Wikipedia [Sirius] 項目にて “ In 1915, Walter Sydney Adams, using a 60-inch (1.5 m) reflector at Mount Wilson Observatory, observed the spectrum of Sirius B and determined that it was a faint whitish star ” .と記載されているようなところがある—。

とにかくも、である。

表記の著作、

Empire of the Stars Friendship, Obsession and Betrayal in the Quest for Black Holes『ブラックホールを見つけた男』(草思社)

ではそうしたエリダヌス 40 番星のシリウス B に先立つ白色矮星としての同定の経緯も踏まえられたうえで（同著邦訳版 p.96 には（中略なしつつも引用するところとして）“ウォルター・S・アダムスは…（中略）…シリウス B の明るさとスペクトル型を測定し、シリウス B も α^2 エリダヌス座 B と同じく、スペクトル分類は A だが、温度は若干低く約八〇〇〇ケルビンであることを見出した。 α^2 エリダヌス座 B は単なる異常現象ではなかったのだ”（引用部はここまでとする）と記載されている）、そのうえで

「シリウスBこそがブラックホール理論登場に極めて重要な役割を果たした星である」

とはきと言明されている。その点についてはこれよりの当該著作よりの引用部を参照いただきたい。

(直下、[ブラックホール理論の開闢と白色矮星がいかように結びついているのかの経緯説明]をなしている部として訳書『ブラックホールを見つけた男』(草思社)の[第五章 英国への旅立ちから運命の日まで]、の中での[ブラックホールへと至る洋上の構想]と付された節にての p.146 よりの引用をなすとして)

ファウラーの場合と同じく、チャンドラも完全に冷えきった白色矮星に焦点を合わせていた。それは、白色矮星がどこまで大きな質量をもてるかには限界があるというものだった。チャンドラは計算によって、限界質量が太陽の質量と同程度であることを明らかにした。だが、燃料を使い果たしたあとに、いま求めた限界値よりも大きな質量で最期を迎えた場合はどうなるのだろうか?収縮に歯止めをかけるものは何もないから、どこまでも収縮しつづけるのだろうか。

(掻い摘まんでの引用部はここまでとする)

(直下、[ブラックホール理論の開闢と白色矮星がいかように結びついているのかの経緯説明]をなしている部として訳書『ブラックホールを見つけた男』(草思社)[第五章 英国への旅立ちから運命の日まで] p.172 よりの引用をなすとして)

計算をつづけていたチャンドラは、一九三一年の終わりに、相対論的縮退からは、もう一つ、驚くべき結果が出てくることを知った。それは、放射圧が総圧力の一〇パーセントを越えている星は、完全に縮退してしまうのを防ぐ縮退コアを生み出すことができないというものである。電子が密集してどれほどぎゅう詰めになっても、そのような星の内部は必然的にもすごい高温になるから、星は完全気体の状態を保たせよう。縮退圧がなければ、非常に固い非圧縮性コアが生じることはありえず、したがって、燃えつきた星が重力によって限りなく高密度の無限に小さな点にまで押し潰されるのを妨げるものは何もないことになる。

(掻い摘まんでの引用部はここまでとする)

以上、科学史を専門とする大学人にもなされた Empire of the Stars Friendship, Obsession and Betrayal in the Quest for Black Holes (邦題)『ブラックホールを見つけた男』より引用してきたとの下りは

[スブラマニアン・チャンドラセカールという大英帝国植民地時代のインド出身の若者(後にノーベル賞を受賞することになった物理学者/その叔父はチャンドラセカール渡英の折と同年の1930年にノーベル物理学賞を受賞しているインド人物理学者チャンドラセカール・ラマン)が英国ケンブリッジ目指しての航海航程にてその洋上、船中にて白色矮星が崩壊したらばどうなるのか、ということにまつわる着想を得、英国到着後もそのことを煮詰めることになった]

とのことを取り上げた部位となる。

同部ではチャンドラセカールが[白色矮星](往時、シリウスBが代表例であると認知されていた白色矮星)がどの程度までの質量を持てるのかの計算をなし(引用部にあるようにその[限界質量]については[限界質量が太陽の質量と同程度であることを明らかにした]とされているものである)、そうした質量

上の限界を超える恒星が崩壊した場合に —ブラックホール存在予測にそれがつながることになったこととして— [どうなるのか]とのことが表記されているわけである([いま求めた限界値よりも大きな質量で最期を迎えた場合はどうなるのだろうか?収縮に歯止めをかけるものは何もないから、どこまでも収縮しつづけるのだろうか] との訳書『ブラックホールを見つけた男』引用部にて表記されている問いの答えとしてブラックホールの存在が予想されることになったとのことがある)。

それにつき、科学史家アーサー・ミラー著作の訳書、『ブラックホールを見つけた男』(草思社)の[第九章 星の研究をはじめた物理学者たち]の段(p.309以降の段)ではチャンドラセカールが呈示した議論は誰にも答えられなかったこと、そのような中でオープンハイマー(マンハッタン計画を主導したかのロバート・オープンハイマー)が同じくこの領域に踏み込み、

[ブラックホール理論(より具体的には主流の科学者らが「シュヴァルツシルト半径の問題から予測されるもの」でありながらチャンドラセカールを「除いて」誰も認めなかったとの「ブラックホールと今日呼ばれるようになったもの」にまつわる理論)の泰斗]

となったことが紹介されているので、その部よりの掻い摘まんでの抜粋を下になしておくこととする。

(直下、訳書『ブラックホールを見つけた男』(草思社)[第九章 星の研究をはじめた物理学者たち]の段、p.309より的一部引用を下になすとして)

このときまで、チャンドラの理論が提起した重要な疑問、すなわち、チャンドラが見出した上限質量を超す白色矮星はどうなってしまうのかという疑問には、だれ一人答えを出していなかった。

そのような星が収縮していった、ものすごい高密度の、想像もつかないような小さな点になってしまうというようなことがほんとうに起こるのだろうか?ようやくオープンハイマーがこの問題に取り組むことになった。…(中略)… 彼は星が最期を迎える四番目の道筋を検証した。それは、星がどこまでも崩壊をつづけ、ついには周囲の空間そのものを「食欲な胃袋」に呑み込んで一生を終えるというものである。これは天体物理学の最前線への攻撃であり、オープンハイマーはのちにマンハッタン計画を立案したときと同様、周到に準備をして戦いを仕掛けた)

(掻い摘まんでの引用部はここまでとする)

(さらに続けて直下、『ブラックホールを見つけた男』(草思社)[第九章 星の研究をはじめた物理学者たち]の段、p.312より的一部引用を下になすとして)

先人たちとは異なり、オープンハイマーとスナイダーはシュワルツシルト半径を真剣に受けとめ、これを実際の星に当てはめることができるかどうかを調べはじめた。

二人が発見した驚くべき結果は、一定の条件のもとでなら、大質量の星は確かに内側に向けて爆発(爆縮)を起こすことができ、最後にはシュワルツシルト半径よりも小さくなって周囲の空間を引き寄せ、見えなくなってしまうものだった。科学者たちはシュワルツシルト半径を指すのに、最初は「シュワルツシルトの特異点」という言葉を使った。光がこの領域の内側から外に出るには無限の時間がかかるからである。けれども、この用語は間違った呼び方であることが明らかになる。

シュワルツシルト半径がそのような範囲を定めるものであるのに対して、爆縮する星こそ、最後はどこまでも小さくなって無限大の密度になる、すなわち特

異点になるのである。奇妙で不可解ではあるものの、星が特異点になるというこの解は、かつてチャンドラが述べたことにほかならなかった。チャンドラは、ある一定の質量を超えた星が、まさしくそうした振る舞いをするを見出していたのだ。チャンドラの発見がついに立証されたのである。

オッペンハイマーとスナイダーの研究は好奇心をそそる謎を生み出したが、彼らはどう説明すればいいのか困惑してしまった。収縮して、ほぼシュワルツシルト半径の大きさになった星とともに運動している観測者の見方と、星を遠くから眺めている観測者の見方とがあいまいにならないように思えたのだ。星とともに運動している観測者は、物質が速度を上げながら内部に流れ込んでいくのを見る。シュワルツシルト半径によって定まる地平面に近づけば近づくほど、重力場はますます強さを増して物質を引き寄せるからである。…(中略)…したがって、遠方の観測者は、星がシュワルツシルト半径に達しているとき、収縮している星が「凍りついたように動きを止めた」と報告するだろう。収縮する星の強力な重力に押さえ込まれてしまうため、光がそこから脱出するにはますます長い時間を要するようになり、最後には星が空間と時間のうちに「凍りついて」、もはや動いていないように見えてしまうのである。

(掻い摘まんでの引用部はここまでとする —※—)

(尚、表記引用部にみとめられる(再度繰り返してその部を引くとして)“したがって、遠方の観測者は、星がシュワルツシルト半径に達しているとき、収縮している星が「凍りついたように動きを止めた」と報告するだろう。収縮する星の強力な重力に押さえ込まれてしまうため、光がそこから脱出するにはますます長い時間を要するようになり、最後には星が空間と時間のうちに「凍りついて」、もはや動いていないように見えてしまうのである” (引用部はここまでとする)との部、Frozen Starと呼ばれていた当初よりのブラックホール理解がダンテ『地獄篇』における「光の名を冠する存在(ルシファー)が囚われておりもし、明示的にそうであると言及されての「重力の中核」にての凍り漬けの世界にて凍り漬けにされた者達の主観上の粉碎劇と客観上の外側観測者から見ての凍り漬けが並列しているとのありさま — [永劫の悲嘆の領域]として一度入れば、希望を捨てよ、出ることはあたわぬと地獄門に描写されての悲嘆の川(コキュートス)の領域— といかように間尺が合うものなのか、とのことを本稿の先だつての段では解説してきたとのことがある — その点、さらに振り返れば、ダンテ『地獄篇』における「地獄門の先にある」[ルシファーによる災厄に関わる]領域がミルトン『失樂園』の方では「時間と空間が意味をなさなくなる領域」(時間と空間をあわせて描写するなどまさしく(ミルトン時代から数百年後の)後にあつてのアインシュタイン的理解そのものの描写がなされての領域)にして「ルシファー(光)さえそこに落ち込めば脱出不可能なる永劫の底無しの暗黒領域」と描写されもしており、似通ったものに対するミルトン『失樂園』のそうした描写と複合思料することで今日、「ブラックホールと表されているものに対する現代的理解にそのまま通ずるもの」が(『地獄篇』描写から)多層的の一致性を帯びながら立ち現れてくるのが問題になりもする——(振り返つての表記はここまでとする))

直上引用なしたところの内容をまとめれば、である。

[先にチャンドラセカールが「白色矮星シリウスB」を契機に問題視していたのと同様のこと — 白色矮星のようなものが崩壊し続けた場合、どうなるのかと問題視していたのと同様のこと — が後にオッペンハイマーら(マンハッタン計画に関与する前のオッペンハイマー

ら)によって [シュヴァルツシルト半径のことを天体の爆縮作用に応用しての検討] で裏付けられることになり、によって、シュワルツシルト半径に達した天体につき [光が脱出することも出来ずに時間と空間にて凍りついたような様相] が具現化を見る(要するにブラックホールと今日、呼ばれているものの特性の具現化を見る)との帰結が導き出されたということになっている]

とのことが「ある」、そのように科学史ができあがっているとの表記がなされているとのことである。

それがためにチャンドラセカールは

[ブラックホールを見つけた男]

と表されているのである。

なおもってして述べておくが、まだ圧壊していない白色矮星と無限大の質量が無限小の領域に集中しているが如きブラックホールでは密度凝集度合いが圧倒的に異なるとされている(白色矮星の密度が1 cm³あたり 500kg であるのに対してブラックホールのそれでは1 cm³あたり 200 億 kg であるなどとされ、cm³あたりの重さが1対 4000,0000 ぐらい異なるとされる)。そうもした単位面積あたりの質量には圧倒的な差分があるわけではあるが、といった差分の問題に通ずるところとして重さがどれくらい集中すれば、【重力崩壊】というものが生じるのか、ブラックホール化などに向かう星の崩壊がはじまるのかとのその発想法の原典が奈辺にあるのかの問題(ブラックホールの実在性に通ずる観点、その原点がどこにあるのか)を【現実世界に存在する白色矮星(のシリウスB)にまつわる思考の「歴史的」深化」との兼ね合いで指摘している著作がイギリスの科学史家(アーサー・ミュラー)の手になる *Empire of the Stars Friendship, Obsession and Betrayal in the Quest for Black Holes* 『ブラックホールを見つけた男』というわけである。

ここまで堅い筋目の書籍の内容を引き合いに出しながら問題視してきたのはいわゆる、

[チャンドラセカール限界]

の発見経緯にまつわる部位である。

その点、[チャンドラセカール限界]とは、一言表記すれば、

[寿命を終えて(核エネルギーを使い果たして寿命を終えて)重力崩壊を起こすことになった恒星のうち、ある一定以上の質量限界を超過した星は白色矮星にはならず中性子星やブラックホールになるとのその限界線]

のことを指している(英文 Wikipedia [Chandrasekhar limit] 項目の Applications (効果解説) の節にて “The core of a star is kept from collapsing by the heat generated by the fusion of nuclei of lighter elements into heavier ones. At various stages of stellar evolution, the nuclei required for this process will be exhausted, and the core will collapse, causing it to become denser and hotter. A critical situation arises when iron accumulates in the core, since iron nuclei are incapable of generating further energy through fusion. **If the core becomes sufficiently dense, electron degeneracy pressure will play a significant part in stabilizing it against gravitational collapse. If a main-sequence star is not too massive (less than approximately 8 solar masses), it will eventually shed enough mass to form a white dwarf having mass below the Chandrasekhar limit, which will consist of the former core of the star. For more massive stars, electron degeneracy pressure will not keep the iron core from collapsing to very great density, leading to formation of a neutron star, black hole, or, speculatively**”

„a quark star.” (訳として)「星の中心核はより軽い元素らの原子核がより重いものらのそれへと核融合する過程にて発生する熱によって崩壊を免れている。恒星の漸次的変化にての様々な局面にてその崩壊阻止のプロセスに要求される原子核は使い果たされ、そして、中心核はやがて恒星をより密度高く、また、熱いものとなさしめつつ崩壊を見ることになる。決定的なる状況は(鉄の原子核は核融合を通じてさらなるエネルギーを生成できないがゆえに)鉄が中心核にて蓄積したときから生じる。もし核が十分に密度高いものであるのならば、電子縮退圧が重力崩壊に抗して恒星を安定化させるうえで重要な役割を果たすことになるだろう。主系列星がもし十二分に大きくはない(およそ8太陽質量以下であるのならば)、それは結果的にチャンドラセカール限界以下の質量を持った白色矮星、かつて星のコアを構成していたものを形成するのに十分といった質量のそぎ落としをなすことになる。より重きところの恒星らにあつては、電子縮退圧も星の鉄の中心核をしてすさまじい密度へと崩壊することを妨げることはなく、[中性子星]あるいは[ブラックホール]あるいは思索上の存在ではあるが、[クオーク星]の形成とのことになるだろう」との記載はその特性を端的に表記しているとの部位となる)。

くどくも説明のなされようを紹介すれば、同チャンドラセカール限界、[寿命を終えて(核エネルギーを使い果たし寿命を終えて)重力崩壊を起こすことになった恒星の内、ある一定以上の質量限界を超過した星は白色矮星にはならず中性子星ないしブラックホールになるとのその限界線]についてチャンドラセカールが煮詰めることとなったとされる、そう、ブラックホール(的なるもの)の形成が周囲の科学者に否定される中で(:英文 Wikipedia[Chandrasekhar limit]の冒頭部にて “ This limit was initially ignored by the community of scientists because such a limit would logically require the existence of black holes, which were considered a scientific impossibility at the time ” .「この限界線はそれが論理的に往時、科学的に不可能と考えられていたブラックホールの存在を要するとのものであったため往時の科学者らのコミュニティにて無視された」と記載されているとおりでである)若き日のチャンドラセカールが渡英を企図しての航路の途上の計算を端緒にして煮詰めることとなったとのそのチャンドラセカール限界がゆえに、「**ブラックホールの実在を真に具体的かつ先覚的に予想したのはチャンドラセカールである**」とされているわけである。

そのことを細かくも扱った書籍が

Empire of the Stars Friendship, Obsession and Betrayal in the Quest for Black Holes
(邦訳版タイトル『ブラックホールを見つけた男』/半ば、チャンドラセカールの自伝的な色彩を呈しての書籍)

なのである(まさしく邦題にて[ブラックホールを見つけた男]とされているとおりでである。尚、原著タイトルに付された Friendship, Obsession and Betrayal in the Quest for Black Holes [ブラックホールら探索にあつての友情・偏見・そして裏切り]との部位は往時の英国学界に君臨していた大物理学者のアーサー・エディントンとその影響下にある学究らがチャンドラセカールの理論を決して認めようとしなかったとのこと、そして、の過程で伝手・頼みの綱にしていた友誼を結んでの学者らにまで若き日のチャンドラセカールが失望させられたとのことを指しての表題となっている)。

ここで本稿にて問題視しているところの、
[Sirius B]
に注意を向ける。

先にて抜粋なした訳書『ブラックホールを見つけた男』(草思社)p.146よりの引用部にあつて

[ファウラーの場合と同じく、チャンドラも完全に冷えきった白色矮星に焦点を合わせていた。それは、白色矮星がどこまで大きな質量をもてるかには限界があるというものだった。チャンドラは計算によって、限界質量が太陽の質量と同程度であることを明らかにした。だが、燃料を使い果たしたあとに、いま求めた限界値よりも大きな質量で最期を迎えた場合はどうなるのだろうか?収縮に歯止めをかけるものは何もないから、どこまでも収縮しつづけるのだろうか]

と記載されているようにブラックホール実在理論（とワンセットになったのチャンドラセカール限界の導出）には「白色矮星」の考察が重きをなしており、それについては、チャンドラセカールの限界線の発見は

[特定の白色矮星・シリウス B の存在あつてのもの]

であると同じくもの著作（Empire of the Stars Friendship, Obsession and Betrayal in the Quest for Black Holes（邦訳版タイトル『ブラックホールを見つけた男』）それ自体に「はきと」記載されている。以下の部がそのことを「端的に」表記している部となる。

（直下、[シリウス B がブラックホール理論の開祖として知られるに至ったチャンドラセカールの運命を変えた星であること]について言及した部として訳書『ブラックホールを見つけた男』よりの[第三章 天体物理学の巨人エディントン]にての p.94 冒頭部より抜粋をなすとして）

二五年後、エディントンとチャンドラは、これら謎に満ちた白色矮星が最後に迎える運命をめぐって激しく議論を戦わせることになるが、そのときには天体物理学者たちは、白色矮星は燃えつきた星だと考えるようになっていた。さらに一九一四年には、一人の天文学者が、別の白色矮星シリウス B に関して、ちょっと信じがたいような観測結果を発表していた（後述のアダムズによる観測のこと）。このシリウス B が、チャンドラとエディントンの生涯と、天体物理学のその後の歩みを変えることになる。

（掻い摘まんでの引用部はここまでとする）

上の引用部と先立っての引用部でもってお分かりいただけようが、[シリウス B]こそが、そう、

[論客ロバート・テンブルが「人類の遺した古典にてその奇怪なる存在指し示し材料が数多見受けられる」とのことを指摘していた（テンブル主張内容については本稿にての先立っての[B]の段で詳述なしてきたことである）との星天にあつて最も明るき恒星たるシリウス A の伴星たるシリウス B（シリウス A に対して肉眼目視不可能であるがゆえに古代にては言及されているようなことが「あつてはならない」との天体）]

こそが

[ブラックホールという存在の実在を理論的に示すとのことをなした男（チャンドラセカール）のまさしくそのエポックメイキングな予想]

の具にされているとのことが [事実] としてあるとされるのである。

（：チャンドラセカールがおおよそ 80 数年前に新規理論を煮詰めていたとの英国、その英国にてのロンドン大で科学史の専門家として奉職しているとの著者 Arthur I. Miller の手になる Empire of the Stars Friendship, Obsession and Betrayal in the Quest for Black Holes の訳書（草思社より刊行の『ブラックホールを見つけた男』）よりの関連するところの抜粋を（より端折っての式で）再度なすこととする。

（引用をより掻い摘まんでなすところとして）

“このときまで、チャンドラの理論が提起した重要な疑問、すなわち、チャンドラが見出した上限質量を超す白色矮星はどうなってしまうのかとう疑問には、だれ一人答えを出していなかった。そのような星が収縮していった、ものすごい高密度の、想像もつかないような小さな点になってしまうというようなことがほんとうに起こるのだろうか？ようやくオープンハイマーがこの問題に取り組むことになった

…（中略）…

彼は星が最期を迎える四番目の道筋を検証した。それは、星がどこまでも崩壊をつづけ、ついには周囲の空間そのものを「貪欲な胃袋」に呑み込んで一生を終えるというものである

…(中略)…

先人たちとは異なり、オッペンハイマーとスナイダーはシュワルツシルト半径を真剣に受けとめ、これを実際の星に当てはめることができるかどうかを調べはじめた。二人が発見した驚くべき結果は、一定の条件のもとでなら、大質量の星は確かに内側に向けて爆発(爆縮)を起こすことができ、最後にはシュワルツシルト半径よりも小さくなって周囲の空間を引き寄せ、見えなくなってしまふというものだった。

科学者たちはシュワルツシルト半径を指すのに、最初は「シュワルツシルトの特異点」という言葉を使った。光がこの領域の内側から外に出るには無限の時間がかかるからである。けれども、この用語は間違った呼び方であることが明らかになる”(訳書よりのまとめを兼ねての引用はここまでとする)。

(出典(Source)紹介の部 96)はここまでとする)

History of Science

the Schwarzschild solution (1916)	Sirius B lead the Chandrasekhar limit (1930 -)
(schwarzschild radius, gravitational collapse)	
Black hole theorization	

ヒストリー・オブ・サイエンス、[科学史]にまつわる常識論上の話として上にて書籍に解説されていることを引いたことを前提に申し述べれば、ブラックホール理論(今日、ブラックホールと呼ばれている時空間にあっての凄まじい重力を呈する構造体にまつわる理論)をもたらした契機は 一時間と空間に対する見方を変えたとのアインシュタインの相対性理論のこと言うに及ばず—

[[シュヴァルツシルト半径] (質量に応じて決まるその半径よりも狭いところに収縮した物体は理論上、ブラックホールになると後に考えられるようになった半径)との概念をもたらしたシュヴァルツシルト方程式という式の解法の呈示] (1916年にての出来事 / 本稿では出典(Source)紹介の部 65(5)などにて言及)

および

[星の重力崩壊のプロセスを導き出す契機となったチャンドラセカール限界の呈示] (1930年以後 / 本稿にての直前の段までにて解説)

である。

うち、今日のブラックホール理論が登場するうえでの土台となったチャンドラセカール限界というもの、重力崩壊のプロセスが煮詰められることとなった原因となっているのが[シリウスB] (の観察)であると指摘されていることを重んじているのが(くどくも強調しておくが)本稿である。

さて、

[シリウスBがブラックホール理論の開闢と結びついている]

とも述べられるわけであるが、先述のように[シリウスB]に対する[シリウスA]が

[農耕発展史と密接に結びつくような星にしてこの地球から見て最も目立つ「恒星」—地球近傍の「惑星」・「衛星」たる月や金星には見やすさで劣るが、「恒星」としては全天で最も目立つと先述の天体—]

となっているとの事情がある(本稿の先の段 **出典(Source) 紹介の部 95(6)**でも Project Gutenberg のサイトより全文閲覧・ダウンロードできるところの The Golden Bough A Study in Magic and Religion Vol. VI. of XII. Part IV: Adonis Attis Osiris. Vol. 2 of 2. (『金枝篇』第6巻第4章(の2)[アドニス・アッティス・オシリス]1911年版)にあつての§ 2. Rites of Irrigation. [灌漑の儀式]の節よりの抜粋をなし、“**And the sign of the rising waters on earth was accompanied by a sign in heaven. For in the early days of Egyptian history, some three or four thousand years before the beginning of our era, the splendid star of Sirius, the brightest of all the fixed stars, appeared at dawn in the east just before sunrise about the time of the summer solstice, when the Nile begins to rise.** The Egyptians called it Sothis, and regarded it as the star of Isis, just as the Babylonians deemed the planet Venus the star of Astarte.「地にての水位上昇の気配は天にての予兆を伴つてのものであつた。というのも、エジプト史揺籃期、我々の時代の幕開けより三千年から四千年ほど前にては、すべての恒星の中にて最も輝いていた壮麗なシリウスの星はナイル川が水位上昇を見始める時である夏至の折にて、日の出の少し前の夜明け頃、東から現れる星であつたからである。エジプトの民らはそのシリウス(訳注:正確には不可視の白色矮星であるシリウスBに対して連星として空にて極めて目立つ可視化存在たるシリウスA)をもってして[ソティス]と呼び習わし、バビロニア人が金星をアスタルテの星と考えたように、それを[イシスの星]と看做していた”(訳を付しての再度の引用部はここまでとする)とのことを紹介していたとおりである)。

従つて、夜空にてそのシリウスが

[文明(農耕と結びついた食料供給のシステムでもある)を構築していった者達](原初人類でもいい)

からよくも観察されるのは必定、そして、天体観測技術が発展すれば、そこに[シリウスB]との肉眼目視不可視の伴星が伴つていることも遠からず知られることになるのも必定。そう受け取れるようになっている。さらに述べれば、文明が発達していく中で「地球圏より最も目立つ」恒星たるシリウスAの伴星たるシリウスBが小さい星であるうえに極めて重い星であることが遠からず知られることになるのも必定、シリウスAとその発見されし伴星が相互に辿る軌道および地球との距離関係などにつき考察・望遠鏡観察がなされれば遠からず知られることにならうとのことも必定。そのように受け取れるようになっている。

そして、—今日のGPS技術(グローバル・ポジショニング・システム技術)の位置補正にも有名どころとしてその応用成果が使われ、それなくしてGPS装置が正確に作動しないことに見るように人類の科学にとり不可欠な地歩を占めるに至っている相対性理論と呼ばれる理論体系の提唱をなすまでに文明が発達しているのならば— そのシリウスBの分析からブラックホールの特性予想がなされることになるのも必定、であるがゆえに、「そうなるべくして」シリウスBがブラックホール理論の開闢の契機となる

星となったと受け取れ「も」する。

以上、「必定」続きの話と結びつくところとして、

[シリウスBの地球に対するポジションと科学の発展動向から見れば、同天体がブラックホール理論の開闢と結びついているとのことはある種、自然なことであるととれるような事情が存する]

このことの典拠となるところを先に抜粋した書籍『ブラックホールを見つけた男』より引用しておくこととする(出典(Source)紹介の部96と多くも重複するところもあるが、とにかくも、上記のことに関わるところよりの引用をなす)。

出典(Source)紹介の部96(2)

SOURCE 96(2)



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典(Source)紹介の部96(2)にあつては

[シリウスBの地球に対するポジションと科学の発展動向から見れば、同天体がブラックホール理論の開闢と結びついているとのことは自然なことであるととれるような事情が存する]

とのことにまつわっての論拠を紹介する。

(直下、訳書『ブラックホールを見つけた男』 p.94－p.95 より引用をなすとして)

[シリウス B はシリウス A の伴星である。シリウス A は夜空でいちばん明るい星で、太陽の二六倍もの明るさがある。…(中略)…十九世紀の天文学者たちがシリウス A に伴星があるのではないかと考えるようになったのは、シリウス A が滑らかな軌道をたどらず、ふらつくことに気づいたからである。…(中略)…シリウス A とシリウス B が互いの周りを回るのに要する時間と軌道の不規則さの度合い、さらに地球からこの二つの星までの距離から、天文学者たちはシリウス B の質量を計算することができた。その結果、シリウス B の質量は太陽とほぼ同じで、ほぼ 2×10^{33} グラムであることがわかった。…(中略)…半径も一万八〇〇〇キロメートルほどと計算されたが、…(中略)…言いかえると、シリウス B は、地球と大して変らない体積のなかに太陽の全質量を詰め込んでいるのである。このために、シリウス B の平均密度は一立方センチメートル当たり、なんと六万一〇〇〇グラムにもなってしまった。白色矮星の密度が極端に天体物理学者たちは、このような星の記述には、これまでとは別の形の完全気体の法則を捜さなければならないのではないかと考えた]

(引用部はここまでとする)

上にて述べられているのは、

「地球から距離 86 兆キロ(光が 1 年に進む距離、1 光年が 9.5 兆キロであるので約 8.6 光年)と遙か彼方にあるのにも関わらず、その明るさより[夜空で一番明るい恒星]となっているシリウス A の伴星シリウス B が発見された後、地球とシリウス星系の距離、そして、シリウス A とシリウス B のお互いの軌道の関係性から天文学者らはシリウス B の重さまで割り出すことができ、によって、シリウス B の軌道計算から導き出せる重さが 1 立方センチメートル当たり 61000 グラムが詰め込まれているとの途方もないものであると判明したため、従来の法則を改めて見なければならぬとのものであった」

とのことである。

そこより白色矮星シリウス B が

[(相対性理論登場の流れを受けての)ブラックホール理論の開闢に関与した天体]

として科学史に浮上してきたのには[シリウス B が伴星となっているところのシリウス A の地球にあつての重要性 —最も星天にあつて目立つとの恒星であった(※)との側面、そして、文明発祥の地で灌漑時期判断材料として用いられてきたような目印としての重要性—]からと受けとれる。

(※上にての邦訳版『ブラックホールを見つけた男』よりの引用部では「シリウスが夜空で一番明るい星である」と表記されているが、それについては英語のスターを [恒星] と訳しての [恒星 (star) としては最も明るい天体] とのニュアンスを旨く汲みとれきれないものであると思われる。地球から見える最も明るく見える天体は月、次いで、金星と表すべきところで、シリウスは「恒星としては」最も明るい目立つ天体と述べるべきところであろうか、と思われる —英文 Wikipedia [Sirius] 項目の Visibility との節にても (極めて常識的などところとなるが) “ With an apparent magnitude of -1.46 , Sirius is the brightest star in the night sky, almost twice the brightness of the second brightest star, Canopus.

However, it is not as bright as the Moon, Venus, or Jupiter. At times, Mercury and Mars are also brighter than Sirius.”と表記されており（シリウス A は恒星 star としては最も明るい星だが、その明度は恒星ではないとの地球近傍の天体、サテライト衛星やプラネット惑星としての[月][金星][木星]に劣ると表記されており）、 紛らわしいところか、と思われる—)

(出典(Source)紹介の部 96(2)はここまでとする)

以上、ここまでにて

[シリウス B については[同天体によってブラックホール理論がこの世に産み落とされる契機になった]との指摘が存在している] (出典(Source)紹介の部 96)

[シリウス B の地球に対するポジションと科学の発展動向から見れば、同天体がブラックホール理論の開闢と結びついているとのことは自然なことであるととれるような事情が存在する] (上出典(Source)紹介の部 96 と重複するところ大なるところとしてながらも出典(Source)紹介の部 96(2))

とのことを解説した。

さて、[シリウス B]については以下、再掲のことを指摘してきたとの経緯がある。

(先にての [B] の段で詳説なしてきたところについて部分的に再度振り返って)

ロバート・テンプル、『シリウス・ミステリー』 — 帰結自体は[常識の奴隷ら]に軽侮を買うことも多かろうとの地球「外」知性の初期文明介入仮説展開の書籍— の著者の主張を論拠「補って」分析することで

[[犬] の星として定置されてきた [シリウス] の伴星で [可視存在 (シリウス A) に対する不可視存在] になっている [50] の公転周期を持つシリウス B] (肉眼目視が完全に不可能であるため、19 世紀になるまでその存在が一切捕捉されることはなかったとの天体)

が現実にもそこにある一方で(確とした事実として存在している一方で)のこととして、

[[犬] にして [シリウス] と濃厚に結びつく存在で [可視存在と不可視存在の分割] と結びつく存在にして [50] との数値と結びつく存在]

などとの奇怪なるものがプルタルコスの手になるローマ期古典に見出せるとのことがある。

そうして [シリウス B を意識させる存在] のことが古文献(の中の文献的事実)のみによって実際に指し示せるとの中、シリウス B 自体が発見されたのはここ百数十年のこと、19 世紀後半以降のことである (肉眼目視が絶対に不可能な白色矮星、シリウス B の観測は先述のようにアルヴァン・グラハム・クラークの手になる 1862 年のそれが初である)。「それがゆえにこそ、」の奇怪無比さである。

以上のようなことについてロバート・テンプルという人物は

[シリウス星系に出自を持つ存在が介入しているからそのようになっているのではないか]

とのことを — [可能性論][仮説]と額面上は銘打ってであるが— 強くも前面に出しての主張をなしている(※)。

(※本稿の先の段 ([A] から [F] に分けての中での [B] の段) で解説してきたところのロバート・テンプレの主張特性についての補足として)

水準が高い人間としてロバート・テンプレはこれぞ [狂気の行状] といったやりよう— ないしは詐狂者としての駄法螺の類 (まともな話を妄言で埋め立てようとするの式での駄法螺の類) を撒くことでシステムに認容されているとの下らぬ相応の手合いのやりよう— といった按配で「論拠・支持材料を伴わぬ」がゆえに [断言・明言できぬこと] を流布するとのことをなすような人間「ではない」。

同男ロバート・テンプレは

[シリウス星系に居を定める存在が地球文明に干渉したと考えるのが自身の「仮説」である]

とハイポセシス、[仮説]であることを断つての[宗教の徒輩] (未確認飛行物体「宗教」の類ら)とは異なるやりようをとっているのである (:テンプレが軽んじられないのはその [仮説] に(枢要たるどころの欠陥性はさておきも) 見るべきところが多いからでもあるのだが、その点については、ここまでにて論じてきたことである)

につき、テンプレ主張特性について解説するところとして — 本稿筆者にはテンプレの説の一部の欺瞞性 (下にてでも端的に言及するが如き欺瞞性) よりロバート・テンプレの主張の [帰結] までを援用擁護する意図はないのだが、引き合いに出している説であるためにテンプレ主張特性について解説するところとして — テンプレは『シリウス・ミステリー』冒頭部にて次のようなことを述べてもいる。

(直下、Robert Temple が The Sirius Mystery 冒頭部の What is the Mystery?にて述べていることを原文引用なすとして)

It should not surprise us that there must be other civilizations in our galaxy and throughout the entire universe. Even if the explanation of the Sirius mystery is found to be something entirely different in the years to come (though I cannot imagine what), we should bear in mind that, as we are definitely not alone in the universe, the Sirius mystery will have served to help us speculate along proper and necessary lines, and opened our innately lazy minds that much further to the important question of extraterrestrial civilizations which must certainly exist.

[...]

In the light of the evidence connected with the Sirius question, as well as other evidence which has either been dealt with by other authors or remains to be tackled in the future, it must be entertained as a serious possibility that civilization on this planet owes something to a visit by advanced extraterrestrial beings. **It is not necessary to postulate flying saucers, or even gods in space suits. My own feeling is that this.**

(拙訳として)

「我々の住まう銀河および全宇宙にあつて他の文明が存在しているにちがないとの観点は我々を驚かせるようなものではないはずである。たとえもし、本書『シリウス・ミステリー』の説明が将来にて [全く異なる何か] を指す

とのことが判明しようとも(しかしながら私はそれが何たるか分からない)、我々は我々が宇宙にて唯一無二の存在でないこと、心に留めておくべきであり、本書『シリウス・ミステリー』が適切かつ当然たる線らを推察(スペキュレイト)するうえで助けとなろうとこと、および、本書がさらに遠くへと、我々の生来、知的に怠慢なる精神をして確かに存在しているに違いないとの地球外文明に対するより重要な問いへと向かわせることを心に留めておくべきである。

…(中略)…

他の著書らに扱われてきた、あるいは、将来にて取り組まれるだろう残余の部と同じくもシリウスにまつわる問いと接合した証拠の照らすところによれば、[この惑星地球にての文明が[先進的な地球外の存在の訪問]にて幾分かのところを拠っている]という重んずべき[深刻なる可能性](possibility)が考慮されなければならないだろう(訳注:テンプルは[深刻なる可能性]としてドゴンに伝わる水陸両棲の神格ノンモが人類に文明を与えた異星人の寓意的象徴物ではないだろうかとのことを問題視している論客である)。[空飛ぶ円盤]の類や宇宙服に身を包んだ神々を仮定する必要はないが、私の気持ちはそうしたものである

(引用部に対する訳はここまでとしておく)

以上引用部に見るようにロバート・テンプルはシリウスよりの知的生命体の介入理論について[断言]をなしておらず、代わって、それが自己の支持する[一つの可能性論][一つの仮説(Hypothesis)]として問題視しているとの向きとなる(他面、商業主義、あるいはその他の理由があつてなのだろうか、国内にて流通を見ている The Sirius Mystery の邦訳版にあつては『知の起源 文明はシリウスから来た』などとのタイトルその字面のレベルでバイアスを強くも前面に表出させたものとなっている)。

そして、同テンプルは、(直上にて一言述べていることとなるが)、日本そのほかに見受けられる[UFO 教信者]のような向きら、[物病み]あるいは[マニアック](英語本来のニュアンスでもっての悪い意味での「マニアック; maniac=crank」である)と世間的には表されるような向きらと同文のやりよう、

[「証拠が伴っていない」ないし「何ら質的に重きを置くに値しない材料(捏造の可能性が顧慮されるような証拠や証拠として主張されているもの、事実関係に全く即していないか科学的に明らかに誤っているもの)しか伴っていない」ところで[エイリアン]や[未確認飛行物体]の存在の類を[真実]と呼ばわるような —いかにも物病みらしい— やりよう]

をとるような向きではなく、そうしたやりようをとる UFO 狂(ないし UFO 狂仕様の詐狂者)と自身を峻別するように手ずから強調している向きともなる。

にまつわり、ロバート・テンプルは『さもあんなん』ととれるところとして、

「自身を順を追って批判できずに貶めようとの「卑劣な」向きに限って自分を UFO 宗教(UFO Religion)の徒輩と[同一化]するようなやりようをとるのだ

と強調しており、その点については例えば、次のようなオンライン上に認められるテンプル言辞から伺い知れる。

(『シリウス・ミステリー』という著作がかつてカール・セーガン (本稿の先の段、補説2の部にあつての出典(Source)紹介の部80から出典(Source)紹介の部85を包摂する解説部にてその問題となる特性につき細々と解説してきたとの小説『コンタクト』の作者にして一時期、米国科学界を代表していた論客) の批判にさらされた書ともなった件につき) オンライン上に PDF 形式で公開されている文書、

THE SIRIUS MYSTERY : Answering the Critics (1997) 『シリウス・ミステリー: 批判家らに対する回答として』

と題されての文書ではその冒頭頁、1 と振られた頁にて次のように主張している。

(直下、THE SIRIUS MYSTERY : Answering the Critics (1997) より原文引用するところとして)

Carl Sagan published an attack on The Sirius Mystery in the August 1979 issue of Omni Magazine, entitled 'White Dwarfs and Green Men' (pp. 44—9 and 116—8). The subtitle was 'Did ancient astronauts visit the Dogon?' Anyone who has read my book will know that I have never suggested that ancient astronauts visited the Dogon, nor did the Dogon exist in ancient times for any ancient astronauts to visit, of course. **The fact that Sagan was launching a public attack on me on such a false basis seemed to me pathetic in the extreme. If you can't criticize someone honestly, why bother to do so dishonestly?**

「1979年8月号オムニ誌にての44から49ページおよび116から118ページにて掲載の『白色矮星と緑の小人』(訳注:リトル・グリーン・マンは英語圏にてウチュウジンと呼称される存在を指す俗語のことである)と題された記事にてカール・セーガンは『シリウス・ミステリー』に対する非難をなした。その副題は『古代にて宇宙飛行士がドゴン族を訪問したのか』と振られてのものだった。私の本を読んだ向きならば誰でも知っていることとして、私は決して「古代宇宙飛行士」がドゴンを訪問したとは提案していない(訳注:但し、すぐに把握される場所としてテンプルはシリウスに由来する異星文明のドゴンへの介入可能性を積極的に[仮説]として前面に押し出しているので、テンプルの言い様はいささか妥当性を失するようにもとれる)。カール・セーガンがそのような過る前提に基づいて私に対する公的非難をなしはじめたとの事実は「「際立って」感情的なやりよう」である」とらえている。もし読者が誰かを誠実・正直に非難することができないのならば、何故、不正直・不誠実なるやりようで非難することをなすとのこと、思い悩むことがあろうか」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

さて、ここで申し述べるが、

[相応の存在ないし相応の存在の手先にとって真っ当に対峙しても批判がなせぬとの標的となる言論の申しよう]

が現実にもそこにあつた場合、それを[台無し]にする(あるいは[毀損]する)やりようとしては

[標的の存在自体ないしその言論を物理的暴力ないし言論封殺で視界「外」に持って行く(放逐する/先進国では本来的に違法なる検閲 censorship を相応の人間 一あるいは人間「未満」のリモコン付きのチン

パンジーあるいは豚でもいいが— を用いて実行する)]

とのやりようも観念される場所であるが、

[菓籠中の権威(と世間的に認知されている類)にターゲットのこき下ろしをなさしめる]

あるいはその対極として

[(言論を完全に視界外に持って行きがたく、その潜在する威力よりターゲット自体の存在を知らしめること自体がマイナスとなるかの判断がある場合は) 信用性を毀損させるような下らぬ者達 —インテリのフリをさせているだけといった程度低きごろつきの類など、はなから取り合うに足りる内面が欠乏を見ているとの下らぬ者達— に毀損させる方式での部分的担ぎ上げ(広域指定暴力団が政治屋に対してやったような褒め殺し方式である)をなさしめる]

との手管が用いられるケースが考えられる(ただし前段階として存在自体がないように無視の力学を強くもはたらかせるとのことが当然に観念されるわけだが)。

以上述べたうえで

「問題なのは、」

『シリウス・ミステリー』著者ロバート・テンプル言論に対して

[カール・セーガン(同セーガン自身が実際はマーベラスとしか述べようがないやりようをとっていたとのことは本稿補説2の段で[セーガンの[嗜虐的な隠喩的言及の予言者]としてのやりよう]との絡みで事細かに問題視している)のような人間が音頭を「とらされ」ての不適切不穏当な批判を平然となす]

とのことがなされ、もって、

[[中途半端なところ]から議論が[より真つ当な方向]に向けて決して向上していない]

と現実に見受けられるとのことがあることである。

(:尚、以上のこと、ロバート・テンプレを擁護するように述べている人間とはなるが、筆者はロバート・テンプレに全幅の信を置いているわけでもなければ、同男をして全面的殉難者であるなどと思っているわけでもない。

そうも見ている理由の第二。同ロバート・テンプレが実際には[徹底無視](ないし[言論封殺])とのかたちで世の言論機構に応じられたわけではないとのことがあり、[中途半端なもの]ながら自説をカール・セーガンに「不適切に」批評される程度にまでは広められたとのことがある(本当に威力が高い言辞を展開しているのならば、セーガンのような人間らを動かす力学があるのだとすれば(セーガン著作の臭気を放ってやまないとの異様な先覚性と二重話法の問題は先行する段にて詳述をなしている)、そちら力学に徹底的に黙殺されることになるかとも思われる)。そして、その点については本稿にての**出典(Source)紹介の部 95(3)**でもって示したように[アフリカのマリ人のドゴン族の信憑性おけぬと総括されている伝承体系]を同男、ロバート・テンプレが過度に重んじていることで —当人がそのような状況を認容しようとして認容してまいと— テンプレは結果的に[闘犬にて負けるためにはなから用意されているとの噛ませ犬][目立ってのアンダードッグ]のようなものに「されてしまっている」向きであるとの可能性

も脳裏をよぎるとのことがある(テンプルは間違いなく智者の範疇に入る人間とはとらえているのである)。

理由の第二。ロバート・テンプルの主張が「人間存在を芥子粒程度にし、か看做していないとの悪辣な側面で満ちあふれているこの世界の[現状]にての忌むべき側面」を一切無視、「[往古にての]異星系文明の知的介入があった」ことを[神のような存在]との絡みで[仮説]として問題にしているにすぎないとのこと「も」テンプルを殉難者とは見れず、また、そのやりように共感を持たないとのことがこの身、本稿筆者にはある。テンプルが「往古にて」高度文明を持った存在が人類に文明を接受したとの仮説を唱道するに留め、この世界に嗜虐的特性が「いまなおもって」顕在化しているように受け取れる[現状]を一切無視していることに筆者のような人間には「胡散臭い」と感じさせられるところがあるのである（:それは世間一般に数多いとの賢き臆病者らの特性、本当に恐ろしいことは一切合財見ないようにして結局は[自身の確定した運命]を変え得ぬとの特性かとも見るのだが —(その点、[生存をなさしめる賢さ]と[生存をなさしめる臆病さ]は大概もって比例関係にあるともとれるがゆえ筆者などは世間一般の中で[単純な生存を約束する知性]だけはあるとの向きには愚人ないし狂人と取られてしまいがちであろうが、「最早、後がなく、といった局面では死命を賭すしかない」との帰結に至った人間として「話はそれで済まない」とのことを訴求しているのが本稿であると強調しておきたい次第でもある) —、テンプルやりように関してはそうした世間の気風を理解したうえで消極的に「読み手・聞き手が見たくないところを見せないようにしている」というより、能動的に「読み手・聞き手に見せたくないことを文明の接受者としての異星系文明の介入などといったロマンチックな話の筋立てで隠している」ような側面が感じられなくもないのである)。

テンプルに全幅の信を置いていないし、同男を殉難者と見ぬところの理由の第三。フリーメーソンであるとのオンライン上の言辞が同ロバート・テンプル「自身」に由来するところとして存在しているとのこととも筆者がロバート・テンプルについて属人的に信のおけぬ理由となっているとのことがあるわけだが(ただし、それは属人的特性の問題であり主張適正さの問題ではない。程度の高い人間の物言いに対して属人的特性と主張適正さの問題を履き違えるのは宗教的狂人 —コンピューター・プログラムのように決められた思考しかなせぬとの存在— など他愛もない相応の人種らだけであろうとも当然に見ている)、同テンプルに関しては[シリウスC(彼の言で言うところのシリウス・トリプル・スター・システム)なるもの]の存在を無責任・不穏当に主張しすぎているきらいもまたあり(ただし、シリウスCなるものが「これより」発見される可能性も絶無ではないとも受け取れる)、もって、[程度の高い情報発信者に相応しからぬやりよう]「をも」取っているとの観点で「信がおけない」と見ていることもある)

後半部は筆者の意見も付すことになったが、これにてロバート・テンプル主張に対する補足とした。

ここに至るまでに摘示してきたことらにあつて「危急存亡に関わるところとして問題なのは、」

[ロバート・テンプルが強くも[仮説]として前面に押し出しているようなところ、[シリウス星系

に出自を持つ存在が介入しているからそのようになっているのではないか]とのこと、「ありもするかはきと分からぬ異星文明 —その点、筆者は亜地球・パラレルワールドの存在仮説のことも本稿の先の段で(筆者が重んじている重力波の問題なども交えつつ)紹介してきた— についての仮説の中身の軽重・適正さへの出口の見極めがたい思考]

よりもむしろもってして

【複合的に「ブラックホール」と「トロイアの崩壊」に通ずる寓意】が奇怪な先覚性を伴ってのかたちで【共通のコンテクスト(文脈)】上のものとして過去から現在に至るまで存在している】とのことが具体的事実関係の束から、そう、相互に連結する態様にて巨大な動かしがたい一つの山脈をなしているとの具体的事実関係の束から導出できるとのことがある。 そうもした中で、「他面で」のこととして、天体「シリウスB」がブラックホール理論開闢にシリウスの位置および天体それ自体の特性からそうなるべくして関わっているとの節がありもし(既述のように「チャンドラセカール限界」というものが星天にあって極めて目立つシリウスの伴星であるシリウスBの特色観察より導出され、その先にブラックホール理論の開闢があったとのことがあり)、またもってして、そちら白色矮星「シリウスB」、19世紀になってようやく発見された同天体を表象しているといった按配の「異様な先覚性」を伴っての古典記述がみとめられるとのことがありもし、かつ、そのことにすら問題となる【共通のコンテクスト】(【「複合的に」 「ブラックホール」と「トロイアの崩壊」に通ずる寓意】が奇怪な先覚性を伴ってのかたちで具現化している中でそこにみとめられる【共通の文脈】)との接合性が「ヘラクレス12功業」というものを介してみとめられ「も」するとのことがある]

とのその事実であると判じられる (:世の中には「たまたまそうなっているだけなのかもしれない」との見立てをまったくもって排除できないとの話、たとえば、[火星に人面状の岩が存在しているらしい(現在は「パレイドリア効果」というものによる錯視の賜物と見られている)]といったことをもってそれを異星文明の介在の証左となしたりするやりようが存するが、ここで問題視しているのはそのような性質のこと—ロバート・テンブル「ですら」そのような物言いはなさぬとのこじつけがましきこと—ではなく、山なす具体的事実(過半は不変なる文献的事実とそこより導き出せることら)がまずもってそこにあり、それらより[ブラックホール]と[トロイアの崩壊]のことが「奇怪にも」明示的に浮かび上がってくるとのことである—につき、[シリウスBが人類史にあって相対性理論の鬼っ子であったブラックホール理論の検証に(なるべくして)用いられたと考えられる]などということだけでそうしたことに注意を向けているの「ではない」。同じくものことを問題としているのは山ある論拠から[ブラックホールと関係性の環の中で多層的に接合するとの古文獻に見る異常なる先覚的言及ありよう]が現代科学史にあっての(シリウスBと結びついで) [ブラックホール理論の開闢]とさえも多重的・複合的に接合していることすらある、ということなのである(につき、筆者筆力の問題から理解に窮するとの向きも続く段をよく検討いただきたいものである) —)。

以降、上にて表記のことについて、ここ補説3の部で指し示したいところを ([D]と振っての続く段以降にて) 呈示していくこととする。



振り返りをなすことから始める。ここ補説3の部にある[A]から[F]と振っての段 (うち、現在は[D]の段にて筆を進めている) に入ることになったとのその前に本稿にあっては [1] から [5] と区分

けしもしてのセクションで

[古典『地獄篇』が「どういわけなのか」 多重的・執拗に[ヘラクレス 12 功業]と結びつけられている]

と述べられるところの論拠を事細かに摘示していた(出典(Source)紹介の部 90 から出典(Source)紹介の部 90(11))を包摂する解説部が該当するところとなる)。

そうもして [ヘラクレス 12 功業] と結びつくのたことを指摘してきたダンテの手になる『地獄篇』という古典が

[現代的観点で見た場合のブラックホール類似のもの]

をその作中にて登場させていることを本稿ではより先駆けての段から問題視してきたとの経緯がある。

繰り返しに次ぐ繰り返しの話とはなるが、具体的には

[ダンテ『地獄篇』にあつての最下層に控える三面構造呈してのルチフェロ幽閉領域に[今日的な視点で見てのブラックホール類似特性]が「奇怪にも」具現化を見ている]

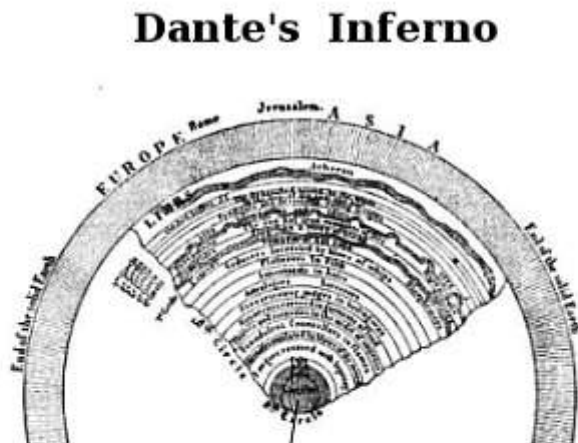
とのことをひたすら文献的事実と現実世界の科学史を巡る経緯に触れながら解説してきたとの経緯がある(細かくはここ補説 3 の部の冒頭部ないしは出典(Source)紹介の部 55 から出典(Source)紹介の部 55-3 を参照されたい)。

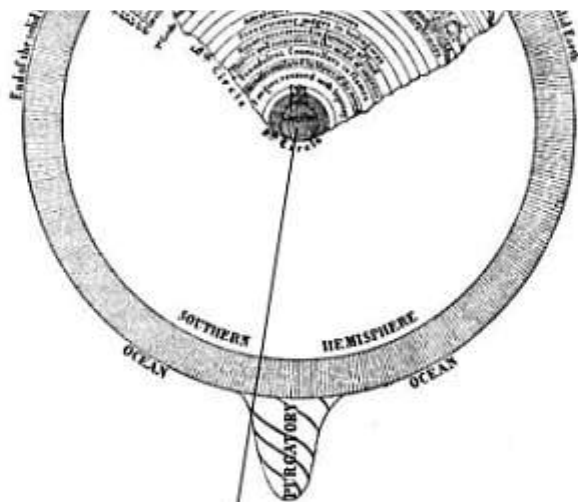
(直上、振り返りもしてのことにまつわたつての再掲図として)

ここでは

[ダンテ『地獄篇』にあつては三面構造のルシファーが控える地獄の最終階層(コキュートス)に至る [第七階層→第八階層] [第八階層→第九階層(最終階層)] への移動が [ヘラクレス 12 功業] にあつての [10 番目の功業にて誅伐された存在] と [11 番目の功業にて誅伐された存在] によつて実現している]

とのことを訴求すべくも作成した図を「問題として呈示した図らの一例として」再度、挙げておく(：最終階層に控えるルシファーがヘラクレスの 12 番目の功業に登場する [ケルベロス] と類似構造を呈することの意味性を再度、強調するために、である)。





地獄の中核(地球のコア)に向けての踏破行後半部を一直線で表すると次のようになる。



"The Last Judgment"
 by Fra Angelico (c. 1395 - 1455)

またもってして

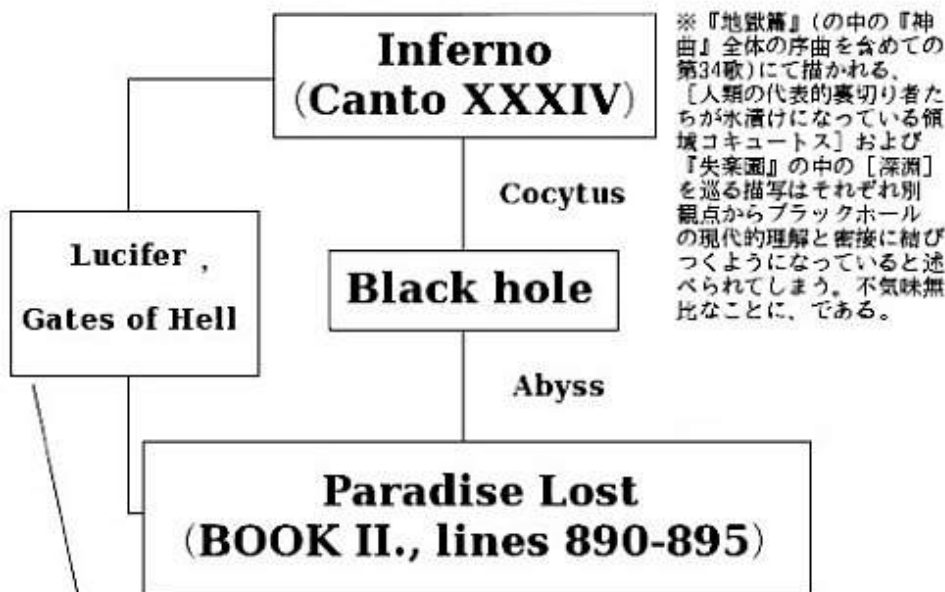
[ダンテ『地獄篇』にあつての三面構造のルシファーが今日的なかたちで定義付けされているブラックホールと呼ばれるものと類似の特色を帯びている、他古典ミルトン『失樂園』と絶妙に結びつきながら、そのような特色を帯びている]

とのことに通ずる一例としての図も(くどくも)再掲しておくこととする。

外側から見れば時間が凍り付いたポイント(重力の中核でもあるポイント)で永劫の粉碎劇が展開している

「ダンテ『地獄篇』では[地獄門の先に存する場]として
[光と語源的に結びつく存在(ルチフェロ)が幽閉された領域にして重力が向う先でもある領域にて人類の裏切り者らが氷漬けになったうえで永劫に噛み砕かれ続けるシュールな世界]が描かれる(上がいかがようにしてブラックホール寓意と結びつくかは先に仔細に解説している)。

他面、ミルトン『失樂園』では[地獄門の先に存する場]として
[ルチフェロと同義の墮天使サタンが人類を己が妻子たる[罪]と[死]の餌食に供するとの結末をもたらすため、誘惑でもって構築した通路が通る場となり、なおかつ、[底無し]の暗黒領域]にして[時間も空間も意味をなくす場]であり[自然の祖]であるアビスこと深淵が描かれる(上がいかがようにしてブラックホールの寓意と結びつくかは先に解説している)。



※『地獄篇』(の中の『神曲』全体の序曲を含めての第34歌)にて描かれる、[人類の代表的裏切り者たちが氷漬けになっている領域コキユートス]および『失樂園』の中の[深淵]を巡る描写はそれぞれ別観点からブラックホールの現代的理解と密接に結びつくようになっていくと述べられてしまう。不気味無比なことに、である。

※『地獄篇』と『失樂園』を巡るブラックホール関連の話には[共通項]も存在しており、その共通項とは[ルシファー(悪魔の王)]および[地獄門]となる(ルシファーについては[光でも脱出速度のハードルを越えられぬブラックホール特質]のことが問題になり、[地獄門]については(人形らに許された何も変ええぬ不明なレベルの話と受け取れるが)一部の著名な科学者らが極めて隠喩的に、かつ、示唆する程度にブラックホールの外延部[事象の地平線]と結びつけてダンテ『地獄篇』の地獄門のことを持ち出している、との経緯が問題になる)。

(以上について疑わしきは本稿にての[出典(Source)紹介の部55]および同[出典(Source)紹介の部55]を補うべくもの典拠紹介をなしているとの[出典(Source)紹介の部55(2)],[出典(Source)紹介の部55(3)]の段を参照のこと)

さて、三面構造、ケルベロス類似構造を呈するとのルシファー（原義は「光」を指すラテン語名詞にあるとのサタンの別称）の幽閉領域がダンテ『地獄篇』にあって

〔(光さえ逃さぬ重力の怪物である)ブラックホールの「質的類似物」〕

となっている（『何故もってして14世紀初頭成立古典にて重力概念さえ満足に存在していなかった中で今日的な重力概念に通ずるところの描写が露骨になされているのか？』『古典にてどうして今日的な意味でのブラックホールの質的類似物が多層的に具現化を見ているのか？』とのその奇怪なる側面は置いておくとして、とにかくも、そうもなっている）とのことは、である。

ヘラクレス12功業にてその捕縛こそが最終目標となっていたとの「ケルベロス」という存在が（先に論客ロバート・テンプレの申しよう及び具体的古典にての記述内容を引き合いに事細かにそのように定置される理由を解説しているように）「シリウスB」と「異様なる式で」結びつくとの指摘がなされ（そしてその指摘に「至当であろう」と受け取れるところが文献的事実に基づき「少なからずある」と判断がなされるようになっており）、そちら「シリウスB」が

〔「ブラックホール理論の開闢」と20世紀にあっての科学史にあって密接不可分に結びついている天体〕

となっていることと平仄が合うにも程があるとのことである（：「ブラックホール理論の開闢になるべくしてなっている節ある天体」←「シリウスB」←「ケルベロス」→「ダンテ・ルチフェロ領域との関係性」→「ブラックホール質的類似物との多重的関係性」とのケルベロスを基軸にしての関係性が成立しているから「平仄が合うにも程がある」と述べている—そして、そちら関係には（すぐ下にて再度、振り返るが）他側面からLHC実験との容赦ない結合性がヘラクレス12功業との絡みで存する—）。

その点、シリウスBが「ブラックホール理論の開闢」と結びつけられていることそれ自体は同天体（シリウスB）を伴星とするシリウスAが我々の住まう地球に対する位置関係上、極めて目立つ存在となっており、また、歴史にて果たしてきた役割も大きい（農事暦においてシリウスAが灌漑に適した期間を報せる重要な天体であったとのことも先に紹介している）との関係上、さして不自然なことではないと判じられる。否、シリウスBの「重力崩壊に関する考察をもたらす質量重き星」としての特性が着目されるべくして着目されたとの意味合いでそれ自体は「不自然ではない」というより、むしろ、自然・自明のことと思われるようにすらなっている（[出典\(Source\)紹介の部96\(2\)](#)）。

であるが、

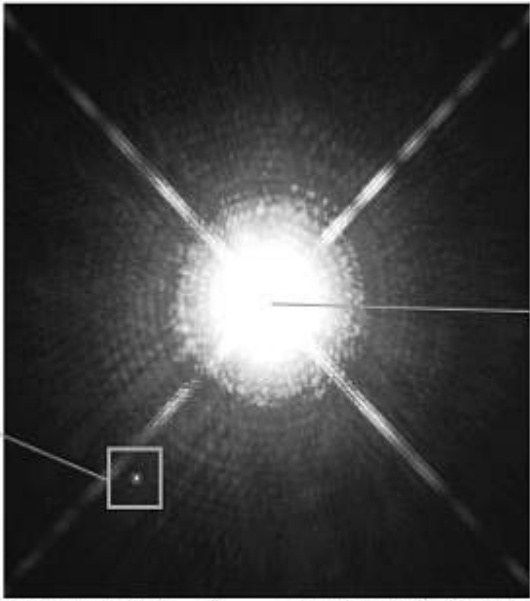
〔「ブラックホール理論の開闢になるべくしてなっている節ある天体」←「シリウスB」←「ケルベロス」→「ダンテ・ルチフェロ領域との関係性」→「ブラックホール質的類似物との多重的関係性」〕

との関係性が全くの別文脈にて成り立つようになっているのは奇怪なことである。

関係性「の環」が自然には成立すべきではないところでそれが「現実に」成立しているとのことになっているからである（：そも、シリウスBがケルベロスと結びついているなどという指摘もロバート・テンプレのような論客が古典における「文献的事実」と関わることをもって指摘し出すまで誰も主張しようとしなかったことになる。といった「誰も主張しようとしなかったこと」をかつて把握のうえで、また、なおかつ、ダンテ『地獄篇』におけるルシファーにてケルベロス接合特性が伴い、そして、また、そこにはブラックホール類似特性が伴っているとのことまでを把握のうえで、そういう「把握づくめ」の人間がブラックホール理論の開闢をシリウスBにまつわるところとしてもたらしたとでもいうのか？否。それはないのである。そのようなことは論ずるまでもないことであろう。そして、ブラックホール理論が生まれいずる経緯をもたらしたのは本稿の[出典\(Source\)紹介の部96](#)でも事細かに解説しているように「インドの若者チャンドラセカールが英国に向かう客船の中でシリウスB重力崩壊にまつわる計算に注力したことにある」などとされるのだが、若き日のチャンドラセカールがそうした「把握づくめ」の人間であったとはおよそ判じられないとのことがある。第一。インドの二十歳前後の若者がローマ時代のプルタルコス

の古典の微々たる内容を把握し、そこにシリウスBと通ずる比喩が現われているとの知識を有していた（今日に至るまでロバート・テンプル主張がなされるまで誰も述べていなかったようなことを把握していた）などということにも無理があれば、そもそも、ブラックホールの思索はチャンドラセカールのシリウスBに対する思考の「帰結」であって「原因」ではないと判じられるとのこともあるからである。

そこに何が介在しているのか、「お人形」にまつわる仮説は置いておいて、問題となることに関わる図も —（先立っての部の摘示事項を把握していないとやたらと細々としたものに映るだけかもしれないも）— 下に挙げておく。



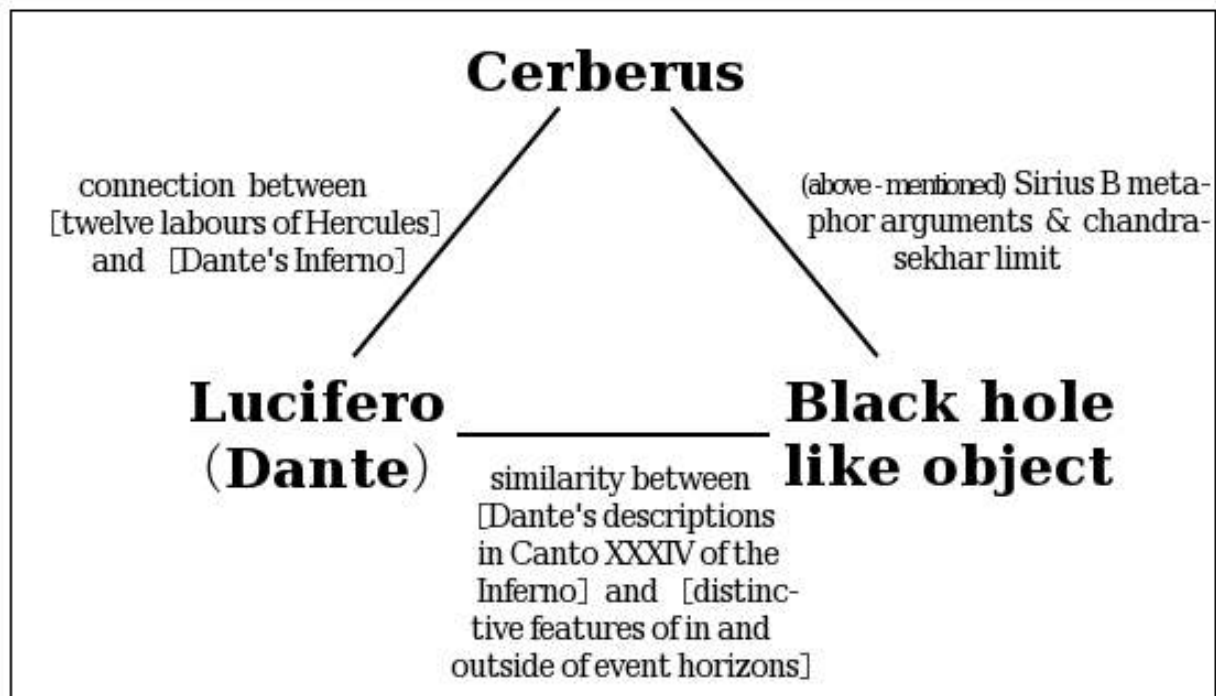
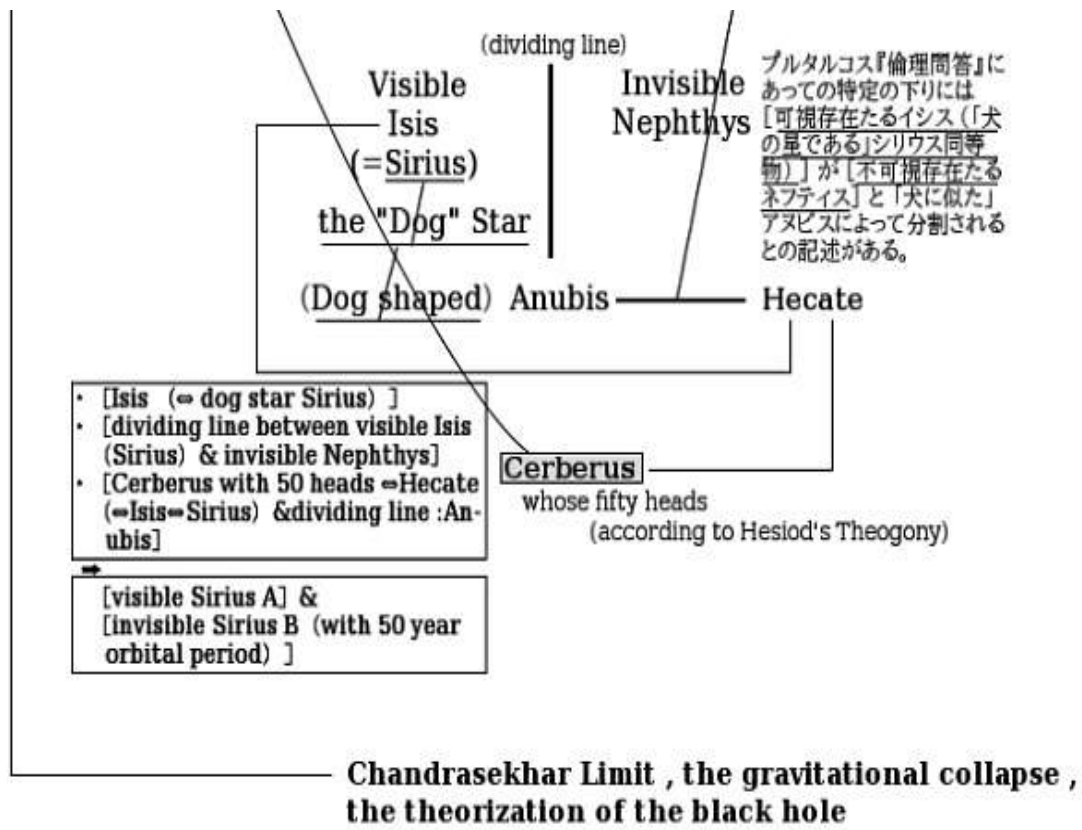
Sirius B is invisible to (the naked eye)

本稿の先の段では
[ケルベロス]
[アヌビス]
[ヘカテ]
らが Sirius B と「奇怪に」
結びつくとの論が存在して
いること、そして、その論調
論理が往古文献 —— プルタルコス古典 *Moralia* —— に見る [文献的事実] の問
題など複合的材料から至当と受け取れる素地あるものであることを訴求してきた。

Sirius A

44. And when Nephthys was delivered of Anubis, Isis owned the child. For Nephthys is that part of the world which is below the earth, and invisible to us; and Isis that which is above the earth, and visible. But that which touches upon both these, and is called the horizon (or bounding circle) and is common to them both, is called Anubis, and resembles in shape the dog, because the dog makes use of his sight by night as well as by day. And therefore Anubis seems to me to have a power among the Egyptians much like to that of Hecate among the Grecians, he being as well terrestrial as Olympic.

—— Plutarch, *The Morals*, vol. 4 OF ISIS AND OSIRIS, OR OF THE ANCIENT RELIGION AND PHILOSOPHY OF EGYPT (1878)



以上をもってして本稿筆者が何を問題視しているのか、本稿をまじめにご検討いただいている向きにはおおよそながらもご理解いただけていることか、とは思う(：筆者の意中にあるのはそういう[現象]が奇怪にも具現化している、恣意ならざればありえないようなこととして具現化していることの先にあるそもそもの「モチベーション」(糸を引く存在を仮定したうえでの「執拗さ」の背後にある動機)と言ってしまっても構わないようなことである)なのだが、についてのおもんばかりは本稿の内容を全体として検討のうえでなしていただきたいものである)。

さらに、である。ここでの話がはきと観察可能な重篤な事実につまるところで真に問題になりもする理由として

[ブラックホール類似物を描いているダンテ『地獄篇』およびケルベロス捕縛とも多重的に接合しているとの)ヘラクレス12功業 —なかんずくその第11番目の功業— は「ブラックホール生成」の可能性が中途より取り上げられるに至ったLHC実験「とも」多重的連結関係を呈している]

とのことがある。

すなわち、

[ヘラクレス12功業のうちの「巨人アトラス」と「黄金の林檎」が登場する【11番目の功業】—ケルベロス捕縛功業の一つ前の功業—]

[【ヘラクレス11番目の功業】でそこが目指されている「黄金の林檎の園」との一致性が歴史的に観念されてきたところのアトランティス]

[黄金の林檎によって滅亡したトロイア]

に関わるものらが「ブラックホール生成」に関わるところでLHC実験の命名規則に「どういわけなのか」多重的に用いられているとのことがある—再度、申し述べれば、である。ブラックホール・イベントをも観測するとされるATLANTISや同ATLANTISがイベント・ディスプレイ・ツールとして用いられる中で「安全な」ブラックホール生成イベントを検知するなどと主張されてきた検出器ATLAS(黄金の林檎の所在地を把握する存在として【ヘラクレス第11功業】に登場する巨人アトラスの名を冠する検出器)などとの兼ね合いでそうもさせられているとのことがある([出典\(Source\)紹介の部 35](#), [出典\(Source\)紹介の部 36\(3\)](#), [出典\(Source\)紹介の部 46](#)) —。

とのこともある(※)。

※上記のことにまつわり振り返っての表記をなしておく。

その点、ここに至るまでの流れをきちんと検討いただいているとの向きにあらわれては把握いただけていることかとは思うのだが、本稿では大要、次のことを問題視してきたとのことがある。

古典にみとめられる「文献的事実」およびそれにつまわる自然なる解釈から以下のようなことが摘示なせるようになっている。

[トロイア崩壊に至る戦争は「ヘラクレス11番目の功業にて」取得目標物として登場する「黄金の林檎」がそもそもの因となってもたらされたものであるというのが伝承の語り継ぐところである([出典\(Source\)紹介の部 39](#))]

[「トロイア崩壊伝承」と「アトランティス沈没伝承」とは双方が多重的に結

びつくと要素を伴っている（第一。本稿にて先述のこととして[スミルナのクイントス]の手になる特定古典(Posthomerica こと『トロイア戦記』)に見るようにトロイアの最期は[アトランティスよろしくギリシャ勢との戦の後の洪水による破壊]であったと伝わっている — 出典(Source)紹介の部 44-3 から 出典(Source)紹介の部 44-5 — 。第二。イタリアのフィレンツェのマイナーな地誌、『新年代記』の類には古のアトランティスの王であったと伝わるアトラス王と結びつく存在がトロイアの創設者ダルダネスの父親であったなどとの記載が(無論、それ単体で見るとは取るに足らぬ偽史にまつわるものではあるが)なされてもいる — 出典(Source)紹介の部 45 — 。第三。大きなところとして伝説上のアトランティスにまつわるあれやこれやの議論の中では[トロイア崩壊の原因となった黄金の林檎がたわわに実るヘスペリデス(巨人アトラスの娘ら)の園とアトランティスの同一性]や[トロイアに引導を渡したオデュッセウスが漂着したオギューギア島(アトラスの娘たるカリュプソの島)とアトランティスの同一性]が取り沙汰されてきたとの史的背景がある — 出典(Source)紹介の部 41 を包摂する解説部および 出典(Source)紹介の部 42, 出典(Source)紹介の部 43 を包摂する解説部 —)]

以上のような [【ヘラクレス 11 番目の功業】の取得目標物 — 黄金の林檎 —] を留め金としての

[【トロイア】(最終的に木製の馬の計略で滅ぼされたとの話がありにも有名などころとして伝わっている伝承上の都市国家)と【アトランティス】(ヘラクレス第 11 番目の功業に登場する巨人アトラスと同様のアトラスという名前の王にその名が由来するとされる往古、大海に沈んだとされる伝承上の陸塊およびその陸塊に拠つての国家)の接合問題]

と相通ずるところとして、

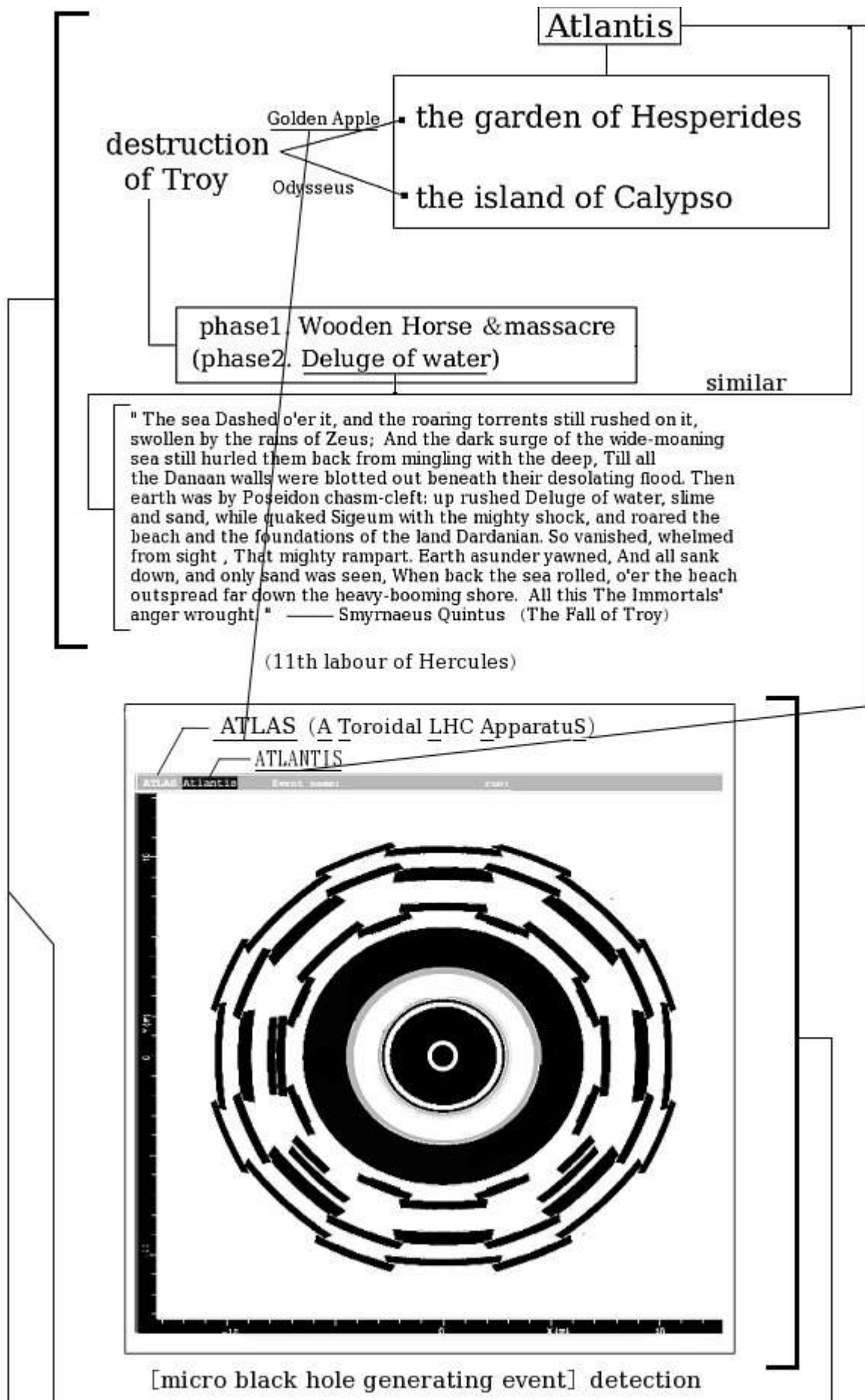
[LHC 実験の実験関係者らが【ATLANTIS】というイベント・ディスプレイ・ツール — そちらディスプレイ・ツールの再現図を挙げて同じくものがプラトン著作に見る古のアトランティスと相似形を呈しているかの紹介も先になしている — を用いて、それでもって生成ブラックホール(科学の進歩に資するなどと呼ばわれての安全無害な生成ブラックホール)を観測しうるとの可能性を呈示しているとのことがある]

[LHC は、(それが【ATLANTIS】というイベント・ディスプレイ・ツールの名称の由来にもなっているわけであるが)、【ATLAS】という検出器でもってブラックホールを観測する可能性を鼓吹しているとの実験となっているとのことがある(換言すれば、ヘラクレス第 11 功業に登場し、また、トロイアの崩壊原因ともなっているとの【黄金の林檎】の所在を知ると伝承が語る巨人アトラスの名を冠する検出器でブラックホール探索もが試みられていることともなる)]

[LHC 実験では[(黄金の林檎にてはじまった戦争にて)トロイアに引導を渡したオデュッセウスら一行を呑み込んだ渦潮の怪物カリュプディス]の名前から命名されての CHARYBDIS といったブラックホール・シミュレーション補助ツールを当該実験にて用いているとのこともある]

とのことらが具体的論拠にて遺漏無くも呈示できるようになっている — 出典(Source)紹介の部 35 から 出典(Source)紹介の部 36 (3) を包摂する解説部、 出典(Source)紹介の部 46 を包摂する解説部を参照のこと —。

(本稿にての先行する段で何度となく挙げてきたとの図をくどくも再掲しておくこととする)



[トロイアとアトランティスの結びつき(1)]
 トロイアの崩壊は黄金の林檎によってもたらされたとも述べることもできる（[出典(Source)紹介の部39]）。その黄金の林檎が実るヘスペリデスの園が位置描写概要などよりアトランティスと結びつけられてきたことがある（[出典(Source)紹介の部41]）。
 また、トロイの滅亡は木馬の計略によって完遂したと伝わるが、木馬の計略を考案したと伝わるオデュッセウスがトロイア崩壊後に流浪したさまを描く叙事詩『オデュッセイア』では
 [カリュプソの島]
 というものが渦潮にクルーと船を呑まれたオデュッセウス漂着先として登場を見ており、そのカリュプソの島、巨人アトラスの娘たる神格の住まう島からしてアトランティスと結びつけられてきた（e.g. アイザック・ニュートンの特定古典内での物言いなど）とのことがある（[出典(Source)紹介の部43]）。

[トロイアとアトランティスの結びつき(2)]
 黄金の林檎を巡る女神らの美人コンテストに端を発して勃発したトロイア戦争。その終結をもたらしたのは木製の馬の計略であると伝承は語るが、今日、あまり知られていない古典ではそうやって滅びたトロイアにはさらなる破壊が及んだとの記述が含まれている。スミルナのクイントスに由来する『トロイア戦記』（英文タイトル the fall of Troy）に認められるところがそうで、トロイアを木製の馬で内側から破滅させたギリシャ勢も巻き添えにトロイアの存在が洪水にて完全抹消を見たとの伝承もよく知られていないところながら伝わっているのである（[出典(Source)紹介の部44-3]）。その点、[ギリシャ勢との戦闘に付随しての洪水による破滅]とのシチュエーションはアトランティスの最期と同一のものである（[出典(Source)紹介の部44-4]に続いての段にてのプラトン著作よりの引用を参照のこと）。

[LHC実験とアトランティスの関係性について]
 どういう料簡でなのか、LHC実験はそのブラックホール生成可能性が現実的可能性をもって語られたとの始原期（LHC実験のブラックホール生成可能性論議を巡る経緯については本稿にての[出典(Source)紹介の部1]から[出典(Source)紹介の部5]を包摂する解説部を参照されたい）より前に遡る折柄、LHC計画がLEP加速器に接ぎ木しての加速器設置案としてCERNサイドで「正式に」ゴーサインを出されることになった1994年より前よりATLASとの名前と結びつけられているとのことがある（本稿の[出典(Source)紹介の部36(2)]で解説しているように1992年からのことである）。
 そこに見るアトラスという名称はヘラクレスの功業に登場してきた伝説の天を支える巨人の名であるわけだが、同巨人アトラス、
 [トロイア滅亡の原因ともなっている黄金の林檎]
 がたわわに実る果樹園の所在地を把握していると伝わっている巨人にして、それぞれ別個に、
 [古のアトランティス]
 に比定される[黄金の林檎の園][カリュプソの島]、それらの地の代表的住人たるヘスペリデスおよびカリュプソという女の神格らの父親とされる存在でもある（[出典(Source)紹介の部39]以降の一連の解説部にて文献的論拠を明示していることである）。そうしたことが指摘できる時点でCERNのLHC実験はアトランティスと接合していると述べられる。
 のみならず、LHC実験ではATLANTISとの名前が付されているEvent Displayツールでブラックホール生成イベントを観測する可能性が実験関係者によって「肯定的に」（科学的知見発展に資する安全なブラックホールの生成・観測との文脈で）宣伝されているとのことがある。従って、ATLASとの名称それぞれ自体に留まらずATLANTISとの名称をも用いているとのことでLHCとアトランティスの関係はいよいよ色濃くも見えてくるとのことがある。

以上、振り返りもしながら指摘してきた相互関係性の問題に関しては「さらに述べて」次のことが問題になるところとなりもする。

少なくとも

[LHC 実験関係者の実験関係者「だけ」の意図意中の問題]

としては

「ブラックホールと結びつくところがある」（と**出典(Source)紹介の部 55**にて一例摘示なししているように一部物理学者にもそれとなく示唆されもしてきた）ダンテ『地獄篇』にあつては[ヘラクレス 12 功業]との結びつき「もが」あること

を観念しての LHC 実験への命名規則決定 —ヘラクレス 11 功業にまつわる命名規則決定— がなされているのだとは考えられるところではない」

との側面がある、「非常に問題となる」ところとしてそういう側面がある。

そうも述べるところの理由としてモスト・インポートなところは一義的には、

[「話として奇矯なれども」][どういわけなのか]911の事件が起こることを先覚的に言及しているとの文物らが存在しており、それら文物らに[ヘラクレス12功業](の中の黄金の林檎が登場する第11功業)との多重的關係性といった要素を[文献的事実]の問題として複層的に具備している]

[「奇怪なことに」911の事件の[質的前言]をなしている ーただし、読み手が「2001年9月11日」との日付けや「双子」といった要素を「多重的に」事件の何年も前に持ち出している文物を[質的前言]「ではない」と述べたければそうとらえればいいとも思う(そういう人間ならば銃口が突きつけられても目を瞑っての観念観想の世界でそれを抹消することとは思いますが、滅であれ、結果を引き受けてそうとらえればいいと思っている)ーと指摘できてしまうようになっているとの文物で、なおかつ、(LHC実験でそれが生成されるうと中途より考えられるに至ったとの)ブラックホールおよびワームホールの理論を扱った文物などが現実に存在しているとのことがある]

との指摘がなせもする(そのような馬鹿げた指摘が現実に堅くも多層的になせるように「なってしまう」)ようなところで「ブラックホール生成は人類の科学進歩に資する」などとの弁まで講ずるに至った実験機関の人間の意図意中の問題として

[「ブラックホールと結びつくところがある」(と本稿にて一例摘示なしているように一部物理学者にもそれとなく示唆されてきた)ダンテ『地獄篇』にはヘラクレス12功業との結びつきもあること]を折り込み済み、事前認識しての人間レベルの実験関係者によってLHC実験への[第11功業]を意識しての命名規則決定がなされているのだ]

などとのことを想起するのは「ナンセンス」である(とのことがある)。

※上記のことに関わるところの振り返っての話として

本稿の先立つ段にあっては問題となる特定の文物、それら原著・訳書よりの原文引用をなしながら ー英文テキストについては英語書籍の海外にての検索可能状況に照らしてオンライン上より該当部、確認可能となっていることが多いとの事情によって原文引用をなしながら ー、そして、それら原文引用情報にだけ基づきもしながら、いかようにもってして[911前言事象]が具現化を見ているのかとのことについて細やかなる摘示をなしてきた。

そして、それら[911の前言文物]となっているものらが

[いかようにしてヘラクレス12功業と関わっているのか]

[いかようにしてブラックホールやワームホール理論の類と関わっているのか]

ということも折に触れて細かくも論じてきた(：ただし同じくものことについてはまだ触れていない他例(多例)があるとも先だつての段からして申し述べもしており、については本稿のよりもつて後の段で扱う)。

ここではここに至るまで何度も振り返ってきたところのそうした前言文物の中で特段に悪質性を帯びているとの「一例」を引いておくこととする。

具体的には

BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんもない遺産』(邦訳版版元は白揚社)

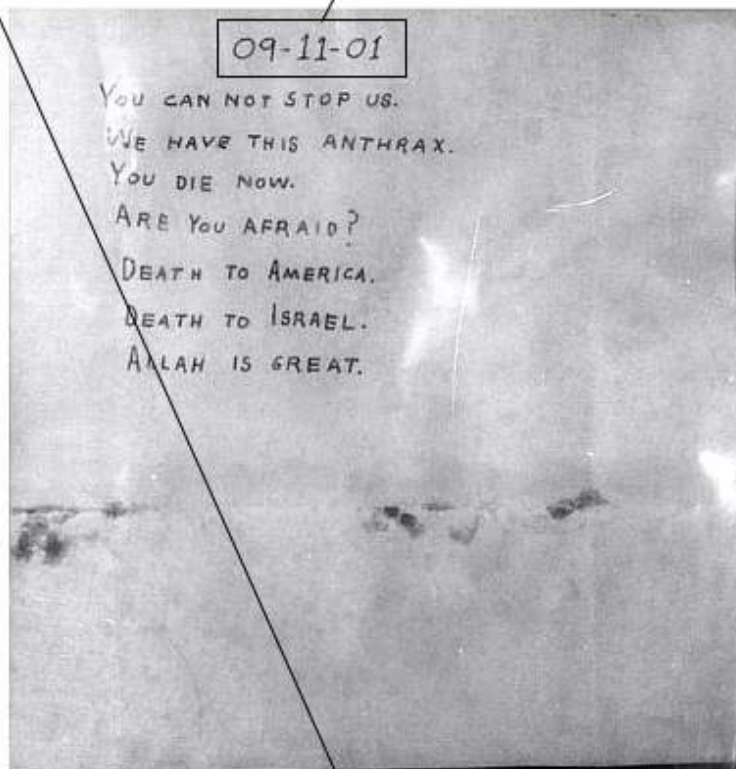
との著作 ー通過可能なワームホールについて取り扱っているとの論稿にして著作ー が[911

の事件の前言的側面をいかにして「多層的に」帯びているのか] について「再度振り返って」の言及をなしておくこととする（原文引用を通じての細かき指し示しに関しては先の段にての解説部 — 羅列しての表記をなせば、本稿にての **出典 (Source) 紹介の部 28** から **出典 (Source) 紹介の部 33-2** を包摂する解説部 — を参照されたい）。

(以下、『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』が何故、前言文物として問題となるのかの再掲をなすとして)

[原著は1994年に刊行を見、邦訳版は1997年に刊行を見たとのキップ・ソーン著書 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(邦訳版版元は白揚社) という著作にあっては [仮説] を支えるための [机上のシュミレーション (思考実験)] が「目立って911の事件とつながるような数値および意味上の規則を伴って」持ち出されているとのことがある。につき、まずもって述べれば、物理学者キップ・ソーンとその妻が「郵便番号91101」(こちら91101という数値は20「01」年「9」月「11」日を米国にてのIDカード日付表示などにて911/01とのかたちで指し示す日付表記たりうるものでもある — (英文Wikipedia [Calendar date] 項目にて9「月」11「日」(20)01「年」表記に通ずる Gregorian, month-day-year [グレゴリウス方式: 月: 日: 年] とのフォーマットについて This sequence is used primarily in the United States. 「こちら ([月] [日] [年] の順番での) 日付表記法は主として合衆国にて用いられるものである」と記載されているようなところとしてそうもなっている —)、すなわち、米国郵便番号に該当するZIPコードが91101ではじまる地域で [「双子のパラドックス」に依拠したワームホール型タイムマシン生成挙動] を開始したとの思考実験 (現時点での人類文明にあっての実現不可能技術を前提にしての思考実験) が同著にあって登場を見ているとのことがある。そちら思考実験につき、問題と見えるポイントは [双子] との言葉を含む [双子のパラドックス] と結びつく思考実験を [91101] というかの事件、 [双子の塔が崩壊させられたかの事件] を想起させる郵便番号の地番ではじまる地域 (英語圏表記で01年9月11日の略記数値列でもある91101で郵便番号がはじまるパサデナ) を「始発点として」実施しているとのことである]

Second anthrax note



(From Wikimedia Commons)

炭疽菌テロの容疑者 (suspect) としての Bruce Ivins 容疑者が書いたとされる犯行声明書 (英文 Wikipedia 掲載のものよりの転載)。同犯行声明文については (本稿の後半部にて意図して) 後にも問題視する所存だが、ここで注目いただきたいのは犯行声明文に見る「91101」というナンバー、米国記述式で2001年9月11日を指すものとして用いられているとの同ナンバーがパサデナという地区のジップコード (郵便番号) の開始番号となっていることに「こだわらざるをえぬ」との奇怪な相関関係が現出していることである。

[上にて表記の BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』に認められる「ゾーンが郵便番号91101ではじまる一画 (Pasadena) にてなしはじめたとの設定のシミュレーション (思考実験)」にあってその原理が利用されている「双子の」パラドックスというものだが、その提唱年は前世紀初頭「911」年であると一般に認知されている (出典も無論、先に挙げている)。それにつき「問題となるのは、」(「それなくしてはキップ・ゾーン著作に見る表記の思考実験、すなわち、[ゾーンが郵便番号91101ではじまる一画にてなしはじめたとのシミュレーション (思考実験)] が語れないとの按配になっている) そちら [「双子の」パラドックス] の提唱年が「911」年であることより「双子の」塔が崩された日付 (9月11日という日付) が想起されもするということである]

[ゾーンは自著『ブラックホールと時空の歪み』にて [「双子の」パラドックス] にまつわるシミュレーション、[パサデナにて「空間軸上の」始点を置くワームホールタイムマシン生成挙動] たるシミュレーションに言及する前に「また別の」思考実験、[パサデナを走行する自動車の上で爆竹を順次爆発させるとの設定の思考実験] を——双子のパラドックス (上述のように1911年に提唱された概念) に通ずる時間の相対性の説明との絡みで——引き合いに出すとのことをなしている。そこにいう他の思考実験にあって「も」認められる [パサデナ] とは (繰り返すが) 郵便番号「91101」が最も若い番号 (地区にての筆頭郵便番号) として割り振られている一画となる。であるから、[通過可能なワームホール] にまつわる思考実験の議論の前提として持ち出されている思考実験からして [「双子の」パラドックス (1「911」年提唱)]、[パサデナ (空間軸上の開始ポイントで郵便番号にして91101から地番表記されているとの一画)]、[(車上) 爆竹の「順次」起爆 firecrackers detonation] との観点で二〇〇一年九月一日に起こったツインタワー崩落事件 (「時間差を呈して」崩落したツインタワー以外に計七棟のビル群がワールド・トレード・センターにて崩れ去った事件) のことを想起させるとのことがある]

[先述のように (ゾーン著作『ブラックホールと時空の歪み』にあっての) パサデナを始点とする——郵便番号91101ではじまる地域区画を始点とする——シミュレーション (思考実験) は [双子のパラドックスを応用したワームホール型タイムマシン生成挙動] として言及されているものであるが、同じくものゾーン著作 (原著1994年刊行) ではその思考実験開始年次につき [2000年1月1日午前9時] との明示がなされている (: ややこしいととらえられるところだろうが、1994年に刊行の書籍の中で双子のパラドックス (1911年提唱) を応用しての思考実験がパサデナ (地番91101ではじまる地区) を「空間軸上の」始発点にし、なおかつ、2000年1月1日9時を「時間軸上の」始発点として開始されたとの設定が採用されているわけである)。その開始年次、2000年1月1日午前9時につき時間の単位として若い順番、[時刻→日付→年次] との順番で配置すると一般的な「はない」方法で並べかえすと「9」「1」「1」「2000」とのかたちとあいなるものである。かの911の事件の発生時 (「9」「1」「1」「2000」) と差分が1年しかない日付け表記を意識させる数値が出てくる——それ単体だけについて述べれば、牽強附会 (こじつけがましき論法) と見做されかねないだろうが、ゾーン著書の兼ね合いでは [パサデナ郵便番号問題] [双子のパラドックスにまつわる意味的問題] が全く同じところで問題となっていることに留意すべきである——]

[直近にて言及のようにゾーン著書『ブラックホールと時空の歪み』にて取り上げられる [双子のパラドックスを応用したワームホール型タイムマシン生成挙動] の開始時期は2000年「1月1日午前9時」であるとされているわけだが、2000年という時期は [2000年紀のはじまり] (ニュー・ミレニアムの開始時期) として [2001年] と混同されるとの一般的理解が存し、その点について扱った科学読み本——チャールズ・サイフェ Zero: The Biography of a Dangerous Idea『異端の数ゼロ』——よりの引用も本稿の先の段でなしているとのことである。そして、その2000年に原著が刊行されたその問題となる他著作、2000年と2001年という年度が [どちらがニュー・ミレニアムの始点か] との観点で混同されているとのことに言及しているとの著作——チャールズ・サイフェ『異端の数ゼロ』——からして911の事件が発生する前よりブラックホールとの言葉を [グランド・ゼロ] と結びつけているとのことをなしているとの著作となり、また、キップ・ゾーン『ブラックホールと時空の歪み』に挿絵提供しているのと同様のイラストレーターの手になる独特な画風のイラストレーションを [通過可能なワームホール絡みの図像] として挙げているとの著作とすらなっている (であるからあまりにもできすぎている)。その点も加味して、キップ・ゾーン著作『ブラックホールと時空の歪み』の時間の単位を若い順に挙げての「9」「1」「1」「2000」とのワームホール・ゲート構築開始時期は「9」「1」「1」「2001」と混同されるものとしての重み付けをなすべきである——片方で「9」「1」「1」「2000」と結びつく日付け表示がなされているかと思えば、それと同じイラストレーターの手による挿絵を [同じくものトピック] にまつわる挿絵 (通過可能なワームホールにまつわる挿絵) として採用しているとのもう一方の他の著作が「2000年と2001年のニュー・ミレニアム始点としての差分は曖昧模糊としている」とのことを述べている著作であるとのこと、その意味を重んずべきである——]

まとめれば、

「問題となる 1994 年初出の(幅広く流通しての書籍化を見ている)科学解説書 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』では [通過可能なワームホール; traversable wormhole] にまつわる思考実験が掲載を見ており、まさしくものそちら思考実験にあつての[空間軸上の始点となるポイント]、そして、[時間軸上の始点となるポイント]、その双方で[先に発生した 911 の事件を想起させる数値規則]が用いられており、かつまた、そちら思考実験で用いられるメカニズムからして[「1911 年に提唱された」双子のパラドックス]、要するに、[911 と双子を連想させるもの]となっている。だけではない。そちら思考実験、[通過可能なワームホール]にまつわる思考実験のことが叙述される前の段で同じくもの 1994 年初出の著作『ブラックホールのと時空の歪み』にあつては他の思考実験のことが挙げられており、その実験(通過可能なワームホールのタイムマシン化に向けての応用の前提となる[時間の相対性]のことを説明するために挙げられている思考実験)からして[空間軸上の始発点]を[地番スタート番号との兼ね合いで 911 と結びつく地域]に置いており、また、同実験、[時間差爆発]を取り扱っているものともなる([911 との数値]と[時間差爆発]との兼ね合いでかの 911 の事件を想起させもする)。

加えて、である。そうもした思考実験らを掲載している著作とまったく同じテーマ(通過可能なワームホール)をまったく同じイラストレーターの手になるところとして扱っている「他の」著作 Zero: The Biography of a Dangerous Idea『異端の数ゼロ』からして[911 の事件とブラックホールの繋がり合い]を想起させるものとなつてもいる(2001 年に 911 の事件が発生する前、2000 年に世に出た「他の」著作からしてそうしたものとなっている)」

とのことが成立している。

(※以上、冗談のように聞こえるかもしれないが、すべて文献的事実として客観的に述べられるところ 一具体的には本稿にての [出典\(Source\) 紹介の部 28](#), [出典\(Source\) 紹介の部 28-2](#), [出典\(Source\) 紹介の部 28-3](#), [出典\(Source\) 紹介の部 31](#), [出典\(Source\) 紹介の部 31-2](#), [出典\(Source\) 紹介の部 32](#), [出典\(Source\) 紹介の部 32-2](#), [出典\(Source\) 紹介の部 33](#), [出典\(Source\) 紹介の部 33-2](#)らの部によって(オンライン上からの原著確認にも配慮して原著の問題となるところの英文テキストも逐一抜粋しながら)[(文献的)事実]であると指し示しているところ— のみに基づいて解説をなしているところとなる)

そして、以上のようなかたちで前言がなされているキップ・ソーン著作、

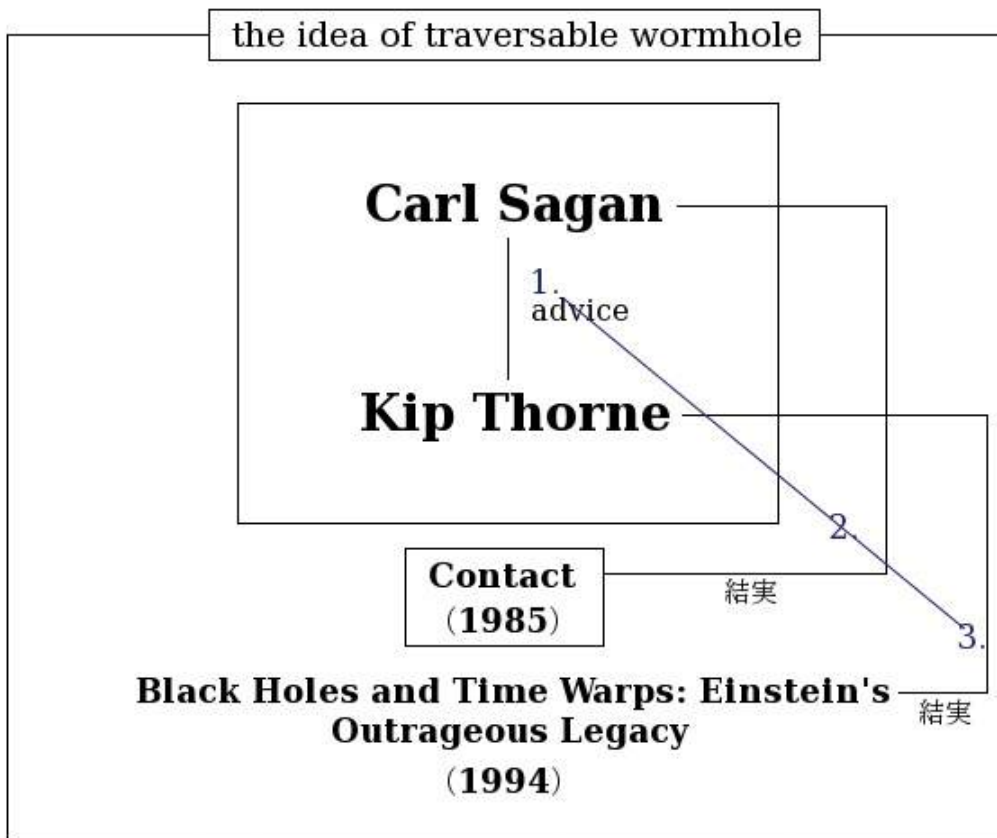
BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』

については

[その他の文物との関係性]

を介してこれまた [ヘラクレスの 12 功業] と結びつくかたちでの前言がなされていると申し述べられるような作品「とも」なっている —※キップ・ソーン著作 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺

産』との絡みでは [同著著者(キップ・ソーン)による [通過可能なワームホール] のアイデアの供出・被供出] との兼ね合いで同作と結びついているとの著名小説『コンタクト』(ハードSFというジャンルにしては珍しくもミリオン・セラーを記録した著名小説) に伴う不快かつ奇怪なる側面を細々と摘示することで同作『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』と [ヘラクレス12 功業] [911 前言事象と関わる側面] の関係性を指し示すことに本稿では注力している (: この部の字面だけ追えば不明瞭かつ奇矯なる申しようや響こうが、本稿補説2の段にあつての出典(Source)紹介の部80から出典(Source)紹介の部85を包摂する解説部をご覧いただければ、述べんとしていること、ご理解いただけるか、と思う。一言で述べれば、はきと摘示できるところとして、「『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作は [通過可能なワームホール] を介しカール・セーガン『コンタクト』(1985)という作品と接合しており、その『コンタクト』からして [通過可能なワームホール] を介して [存在自体が奇怪なる他の911の事件に対する事前言及要素を含んだ「他の」ヘラクレス12 功業との関係性が問題となる作品] と接合している」とのことが「現実に」あるのである—)。



1985年以前に遡る [物理学者キップ・ソーンと天体物理学者にしてメディア露出型の万能型言論人であったカール・セーガンのやりとり] から [通過可能なワームホール] のアイデアが科学的に煮詰められ出したとの経緯がある。

お分かりいただけることと願いたいのだが、「上にて極一例、典拠としての委細の部を先の段に譲って再掲しているようなことが複合的・多重的に「どういうわけなのか」目立つところ、方々にて成立している—しかも、相互関連するかたちにて成立している— がために、」本稿では

「 [ヘラクレス12 功業 —ダンテ『地獄篇』の地獄最深部に控えるルチフェロと同様の三面

構造を呈するケルベロスへの地上引きぶりだしをもって終わる第 12 功業—]と [ブラックホール生成実験] が [トロイア崩壊伝承] [トロイア崩壊伝承と複数の観点で結びつくアトランティス沈没伝承] [黄金の林檎] といった要素を介して結びついていること]

の意味性を重んじており (そこに恣意性の問題が濃厚に観念できるがために重んじており)、また、[ヘラクレス 12 功業] と [ダンテ『地獄篇』] (ブラックホール類似領域たるルチフェロ幽閉領域に向かう物語) が結びついている件につき別方向から [シリウス B とケルベロスの関係性] [シリウス B とブラックホールの関係性] のことが観念されることの意味合いを重んじているのである。

ここで考える必要がある。

[何故、911 の事件にまつわる多重的前言のようなことが (現にそれそのもののことが認められるために) 存在していると指摘可能となっているのか]

とのことを、である。

その点、ロバート・テンプルは往古文明に対するシリウス由来の異星生命体の介入の可能性を仮説として自著にて仄めかしているとのことをなしているわけだが、筆者は次のように申し述べたい。

「誰も現在に生きる人間を対象としない、あるいは、そのような立論ありようとなるよう巧妙に調整されているとの、

[往古古代にて介入問題 一本稿にての **出典 (Source) 紹介の部 95 (3)** の段でその主張としての問題点を指摘しているように「胡散臭い」ドゴン族への介入問題等等—]

では話は当然に済まされず、現在「でも」少なからぬの人間が [人類とは別の存在の操作の影響] を (意識的ないし無意識的に) 受けていると —「具体的材料に基づいて」— 考えられるようになってい、なってしまう。

それだけの [証跡] — ([科学的知見に依拠しての予言] (とすれば [前言]) および [一見にして無関係な人間らを操っての奇怪なる関係性の具現化操作] が冷然となされ続けたとのことは露骨に示すものであるとの証拠ら) — がある」

[理念]の問題を伝えつつ [対処] を求めるべくものことを申し述べるための脇に逸れての話として

上にて述べているようなことと響きだけは近いとのことを

[遙かにレベル低きやりよう]

で [無知なる者]・[騙されやすき者]・[憑かれたような者達] を対象にしているとのかたちで流布・拡散している、

[完全にとんでしまっている、ないし、頭の具合が [真つ当な大人] に比して著しくもとるといったモード・スタイルを前面に押し出しての一群の質的狂人 (含: ドグマ入力に反応して脳内で快樂物質でも放出されているのかといった按配での宗教的狂人) あるいは 詐狂者ら]

であるとのことになっているとのことがこの世界にはある — 能動的に説得力という名の威力を発揮する特定の言論を封殺したり色を付けようとの相応の種別の類 (それが問題になりうるのならば、「特定」言論封殺や「特定」言論に対する間接的色づけに関わることになるとの人間性が疑われるような類ら) ではなく、そもそももって [問題となり

うる事項に対する立論がなされたり、それがなされたうえで視界に入ってくるとの環境] それ自体を破壊してしまおうとの種別の言辞、そういうものが[質的狂人ないし詐狂者らとの方向性が透けて見えるとの一群の向きら]によって目立って拡散されているとのことがある、でもいいー。

それがため(直上表記のような環境的要因のために)、重要な話でも

[人間とは 一意識的あるいは無意識的に 質的に操られているとの存在である]

との話を無条件・下手になせば、[「相応しくも」の相応の者達]のやりよう同文に徹底無視の方向性がとられる、ないし、誤解曲解を招くだけであろう(あるいは悲劇的人間存在というものに『そういう反応でもって応じて構わぬ』との言い分を与えるだけであろう)、それが我々を取り巻くこの世界の状況であろう、と筆者は見立てている(：が、敢えても[誤解]や[レッテル貼り]、そして、[それが最もありえるところであろう]と筆者などが納得させられるに至っているとの[徹底無視](言うまでも無く[無能なる者]にとっての[問題の最も簡明なる解決法]でもあり[身の破滅の原因]たりうる行為である)との式の反応を想定しつつも筆者はここにて扱っているようなこと、「ロバート・テンプレの如き論客が主唱するような往古の介入問題だけでは話が全くもって済まされない」「危険性が露骨に現出していることがホワイ・ダニット、何故そのようなことがなされたのか、始原期より続いている悲劇の核にして原因となっているとの式で我々の行く末に関わる」とのことを論じている 一※何故、筆者が理性ある人間がなしたがるようなそうした申しよう・立論を敢えても余力を注力してなさんとしているのか、[いかなる状況でも、そう、狂った人間の世界に放り込まれたといった状況でも理性ある人間たりたいと考えている人間]として筆者が何故、ありとあらゆるリスク・犠牲・労をいとわずになしているのかは[主観など問題とならぬとの指し示しを客観的証拠をオンライン上より容易に後追い出来るかたちにて挙げ連ねているとの本稿全体の内容とその不愉快・不快極まりない帰結](ただし[自分の運命さえ決められぬとの臆病者らは逃げ惑うだけであるとの帰結]かもしれない)でもって判断いただきたいものではあるー)。

上のことを述べた上で突拍子なくも書くが、かつて、チャールズ・フォートという男がいた。

原著にてこの身も読了したことがある書籍としてザ・ブック・オブ・ザ・ダムド、『呪われし者の書』といったものをものしていた、膨大な不審事象にまつわるデータを羅列・呈示しながらもの同男の主張はこうであった。

「人類はどこぞやら介入してくる超存在、そういったものの薬籠中の存在であると「考えられる」「仮説付けられる」だけの材料がある」(：フォートは「考えられる」「仮説づけられる」との話柄をワン・クッション置いて強くも採用していた。それにつき和文 Wikipedia[チャールズ・フォート]項目にての関連するところの現行の記載を引けば、(引用なすとして)“1919年の時点で既に、チャールズ・フォートは地球の「所有者」または地球外からの「訪問者」の存在を想像していた。…(中略)…しかし、フォートが自分の理論を「信じて」いたわけではなく、あくまでも集められた現象の解釈に過ぎない、と明確に強調していたことには留意すべきである”(引用部はここまでとする)と記載されているところにて同じくものがよく示されている)

はっきりと述べ、といった物言いをなしているチャールズ・フォート自身の申しよう(第二次世界大戦「前」の前世紀前半にての申しよう)はフォートによる呈示データの問

題として見れば、弱点があると受け取られてやむなしのものである。見識を深めに深めるよう努め続けてきたとの筆者自身からしてそうとらえているし、また、一般論の話としても、今という時代より振り返りみられる中で、「未成熟 immature」なものではあると受け取られているとのものである。

それにつき、Charles Fortはその著書 *The Book of the Damned* の開巻劈頭の辞からして“By the damned, I mean the excluded. We shall have a procession of date that Science has excluded.”「[呪われし者]との申しようでもって私が意図しているところは[除外されし者]であるとのことである。我々は科学が除外するところのデータを列なすようなところとして保持していることとあいなろう」と定義づけしているわけだが(上フレーズは筆者がかつて検証した分厚いフォート全集の冒頭にて配置されているザ・ブック・オブ・ダムドのそのまた冒頭に配されているため、非常に目立って読み手に迫ってくるものとなる)、といった目立ってのフォート主張からしてフォートが[問題事]と呈示していたところ、すなわち、フォート収集のデータが多く今日の批判家らよりの反駁に強くも曝されるか、曝されやすくなっているがため、その申し分の力強さが削がれることとなっているものともなっている — フォートがいみじくも「原理主義的側面を有しているがためその伝では宗教的であろう」と総括していたとの[科学]というものが、そして、高度情報化社会にあつての常識教の信者らがフォート呈示のデータやフォート呈示の[除外領域]の不備をカヴァーするようになっている、あるいは、カヴァーしているとの主張がなしやすくなっているがためにフォート申しようは多く斥けられるものとなっている(“Looking back from viewpoint of the present day, "data" offered by knowledgeable early 20th century person Charles Fort are "weak" ”.と当然に見えもする)とのことがある—。

たとえば、フォートが際立って問題視しているところとしての[中空から得体の知れぬものが降ってきたとの話]も[ファフロツキーズ現象]といったかたちで今日的説明が講じられているようなものとなっており(堅い証拠群およびそうした証拠群より導き出せる堅い因果関係のみを重要視している本稿の視点では「それ専門の」役者の好事家らのみが傾聴したがるような[超常現象論議]などどうでもいいとらえているようなところがあり、であるから、解説も省くことにしたとの[ファフロツキーズ現象]にまつわる主張については(興味があられるのならば)各自御調べいただきたい)、また、フォートが先覚的に問題視していたとの[幻影としての未確認飛行物体]についても往時からすれば確かに世人の好奇心に応えるものであったかもしれないが(そして、彼の後裔の「相応の人間」らにそのやりようは[様式化]して踏襲されているようなものだが)、今より見れば、そのやりようからして[人間の脳の問題として幻影が具現化するだけの機序があつた]、あるいは、[幻影を幻影としてではなく押し売りするとの種別の「病的な」人間が世には予想以上に跋扈横溢している](ミステリー・サークル、英語で呼称されるところのクロープ・サークルを自作自演で構築していたと自白する者らなどが出てきた)とのことで説明がなしやすくなっていることとなる。

また、フォートの衣鉢を部分的に継いでいるようにも「とれる」、超常現象の類に懐疑的・批判的視座でもって向き合うとの式でのみフォートの衣鉢を継いでいるようにも「とれる」との、

[現代にあつての職業的懐疑主義団体 (そのやりようについて既述のカール・セーガンといった向きが重要人物に名を連ねていたところの CSICOP と いった団体が著名どころとなっている)]

についてはその特質がまったくもって褒められたものではなく、(向きによっては遠慮会釈なくも「その者達がそういう意味での[下らぬ相応の役者][人類の恥部]だからだろう。」と述べるどころか、ともとらえるのだが)、[トンデモ理論](正気の人間の口の端にのぼるとは思えぬものとなり全般的に具体的かつ客観的な論拠を伴って「い

ない」との馬鹿話を否定する — アンダードッグ (闘犬で負けるべくもわざと用意された弱い犬) 由来の馬鹿げたトンデモ理論を否定する — 「だけ」の役割を負い、結果的側面から見てのその特性が

[[常識の壁] (それが真っ赤な偽りでもそれを堅守することが生活を質草にとられ、また、精神気風を規定されているとの人間らに徹底的に求められているとお題目・額面の建前の類と述べられればいいすぎになるだろうか) を会社に都合の良いように動く御用労組のような式で堅固にしようとしているだけのように見える]

とのものとなっているとのことがある (勝手にフォート後裔を任じているとの者達には、そも、[不可解なるものを真に煮詰めようとの気概] [過てるものからそれがあれば正しきものを救い出すとの気概] なぞを伴っているようには全く見えず、[水準が低いもの] を同文に水準が低いことが多いとのやりよう、[識見]や[論理の映え]の欠如などに見るところとして水準が低いとのやりようでただただ槍で嬉嬉として突き刺し続けるだけであるとのことが散見される — [下らぬもの]の粗探しだけに注力しているとの者達がそこにいるだけであり、[下らぬものを越えたもの] があるかないかの問題を見極めようとするとの気概が(フォートの時代より強固・強力なものとして呈示されるどころの重要なデータが無視されるなかで) 欠如を見ている風が世界には如実にある —)。

であるから、チャールズ・フォートの事績について今更もって甲論乙駁するのめどうかとも思うのだが、しかしながら、

「フォートが述べていたことの一つとして人類はどこぞやら介入してくる超存在の薬籠中の存在であると「考えられる」「仮説付けられる」だけの材料がある」

とのことにだけは同意できるところがあると筆者はとらえている。

フォート自身はそうした観点を[可能性論]として前面に出すとの筆の運びをなしていたわけだが、筆者が本稿にて呈示している[証拠]の山 — 性質上、決して時代によって経年劣化・摩耗化を見ぬであろうとの按配での具体的証拠の山、[古文獻にみとめられる文献的事実]や[現代にての文物に至るまで通貫としてみとめられる人間存在の実態を「目的論的に」指し示す文献的事実]等等 — は同じくもの方向性にまつわるところで完全に明確化を見ているとのものらであり、

「そうしたことがある中にて[偶然性]を否定するほうがむしろどうかしている」

との性質のものであると明言できるものとなっている (明言できるものと「なってしまっている」) ために、そも、フォートの[介入]を強くも念頭に置いての申しように関してだけは同意できるところがあると述べるのである。

その点、論拠を羅列するためのものでもあるとの本稿が「どれだけの文量」でもって「どれだけの論拠」を呈示しているものなのか、納得行かぬとの向きには振り返っていただきたいものである、そして、本稿にて呈示されている論拠らが相互に連関しながら密接に結びついていることの意味性につき、よく考えてみてもらいたいものであるとここにての(脇に逸れての)話でとにかくも強調したいとのことがある(そちら訴求のためのここでのまどろっこしくなりもしての脇に逸れての部である)。

(尚、筆者は知識水準(あるいは知識無くとも知能水準))が筆者に近くもあるとの向きらを想定して、本稿の後の段にて[確率論]の話も[付録と位置付けての部](誰でも分かる話をなしているとの本論の部に対して読み手

を数理に明るい(といっても大学卒業ぐらいの知識で計数的に物事を見ようとの程度に数理に明るい)人間に限っての意図しての付属的な部)として付すが([ベイズ推定について微に入っての説明付しながらもの数理的分析部])、そこからして [事態の奇矯性] にとどまらず [事態の重篤性 — 葉籠中のものであれなんであれ種族の存亡に関わるものであろうとの事態の重篤性—] 「をも」明確に示すものであると強調なせるものとなっている(強調なせるように「なっている」)。

さらに述べておくと、筆者が『世に資するものであってほしい』と小閑を偷(ぬす)んでものしているとの本稿にあって目指しているとの方向性は [人間および人間が寄り集まって成立している今日の文明社会が想像絶するような式でコントロールされていること] を専らに示すことではない (とのことも断っておく)。

といった断り書きをわざわざなすことにしたとのその意中の問題にも通ずるところとして、この身、筆者には自身のことを好かぬとの人間らの気風の問題を慮(おもんばか)って、『 [筆者の言論の存在意味や言論がそこより発しているところの筆者の値打ちなど認めたくはないとの人間ら] にあっては筆者をして [ただの好事家向けの限界領域の話の摘示に努めるだけ — フォート流の話芸をなすだけでもいい— の人間] ととらえるに留まり、そちら [自己完結] (あるいはインプットに基づいての人間未満の機械的処理) という名の停留・停滞を見た観点で筆者をして [終わっている人間] であると思込もうとするだけであろう (であるから [無視] あるいは最悪、 [褒め殺しなどといった形態での妨害] なしても構わないなぞとの自己欺瞞が生じるとも思うのだが、それは置く) 』との見立てがあるわけだが、[行間に込めての節々の書きよう] から「はじめから」明示しているように本稿の意図しているところの方向性はただただひとつ、たかだか [既存のシステムの問題性の粗探しに注力する] といったこと程度にはとどまらず、

[自身の属する種族が生き残るに値する種族か見極めつつ [覚悟] を問う] とのことにこそある (その覚悟を問う声が黙殺、掻き消されるのであれば、それもまた [我が属する人間という種族の回答] であろうと見立ててもいる)。

そう、筆者の念頭にあるのは [[操られ人らの先に控えている] のが [相応のゴール] であることを [確とした論拠らの呈示] でもって示そうということ、そして、「それで本当によいのか」となにかの建設的反応を期しもして問うこと] へのみある)

長くもなったが、[理念] の問題を伝えつつ [対処] を求めるとの脇に逸れての部はここまでする。

直近、脇に逸れての話から [はきとそうであると観察できるところの「現象」] を重んじての本題となるところに回帰させる。

その点、ここ [D] と振っての段で強調すべくも問題視してきた、

「 [ヘラクレス 12 功業 — それら功業と [文献的事実] の問題として 「多重的に」 接合する作中内要素が目立ちもするダンテ『地獄篇』の地獄最深部に控えるルチフェロと同様の構造を呈する三面のケルベロスへの地上引きづりだしをもって終わる計 12 の功業—] と

[ブラックホール生成実験(LHC 実験)] とが [トロイア崩壊伝承] [トロイア崩壊伝承と複数の観点で結びつくアトランティス沈没伝承] [黄金の林檎]にまつわる命名規則 から結線しているとの状況が見られる]

[ヘラクレス12 功業] と [ダンテ『地獄篇』] (今日的に見た場合のブラックホール類似物を描いている領域と述べられるようになってしまっているケルベロス状の三面構造を呈するルチフェロの幽閉領域に向かって冥界下りをなしていくとの物語) とが古典描写ありようとして現実に接合している一方でそれとは「別方向にて」[シリウスBとケルベロス(ヘラクレス12 功業の最後の段、冥界下りの段にて登場した怪物にして、ダンテ地獄篇ルチフェロと類似構造を有する怪物)の古典ら描写を通じての関係性] および[シリウスBとブラックホール理論開闢史の関係性] についての指摘がなせるようになっている]

とのことらについては次いで [E] の部にて摘示していくような側面「も」が伴っている。



本セクション、[E]と振っての部には本書 p.351 から p.455 までの紙幅を割いている

ここ [E] と振っての段に関しては

「説明が非常に長くもなる」

と断っておく。

さて、先立つ段にて典拠を密に挙げながら — Project Gutenberg サイトなどで誰でも取得できるとの前世紀識者らの学術的分析論稿を原文抜粋するなどして典拠を密に挙げながら— 解説しているところとして、

「[冥界の女神ペルセポネ] は [シリウス象徴神格ソティスとしての色彩をも具備する女神イシス] と — [イシス・オシリス伝承] および [エレウシス秘儀] の関係もあって— 際立っての同質性を [多層的に] 帯びている存在である」

と指摘できるようになっているとのことがある (:ペルセポネとイシスを同一存在であると記述するローマ期古典(ルキウス・アプレイウス著『黄金の驢馬(ろば)』) があるとのことにも先だてて言及してきたわけだが、両者ペルセポネとイシスについてはそうした古文献内での言及にとどまらず、イシス・オシリスに関する崇拝態様およびエレウシス秘儀(デメテル・ペルセポネにまつわる秘儀)との絡みで顕著なる関係性が観察されるところとなっている — 出典(Source)紹介の部 92 から出典(Source)紹介の部 94(3) —)。

さて、[イシス] とはシリウス体現神格として知られているがため(出典(Source)紹介の部 95(6))、ペルセポネという女神についてはシリウス体現神格と結びつく女神とのことにもなるわけだが、同ペルセポネ、

[冥界下りの物語]

と密に結びついた存在であること、既に先述のことである(出典(Source)紹介の部 91 など)。

以上申し述べたうえで、ここでは

[冥界下りとペルセポネと同文に深くも関わる女神にして、また、ペルセポネと同一の要素を多分に帯びている女神]

としてシュメールの「イナンナ」という名の女神(アッカド語名では「イシュタル」という名の女神)のことを問題視することとする。

その点、まずもって述べるが、[ペルセポネ]と[シュメールの女神イナンナ(アッカド名イシュタル)]の間には次のような関係性が—これより具体的論拠指し示しに注力するところとして—存する。

・[ペルセポネ]と[シュメールの女神イナンナ(アッカド名イシュタル)]は双方共に**冥界下りをなした存在**である。

・[ペルセポネ]と[シュメールの女神イナンナ(アッカド名イシュタル)]は双方共に**[植物神としての「死と再生の神」として同一視されるだけの縁起が伴っているとの存在]を愛人化している女神ら**でもある(具体的には[植物神としての「死と再生の神」たるアドニスという神およびタンムズという神をそれぞれに愛人化している女神ら]として知られている—ペルセポネとイナンナは[同一の存在と見做されてもいる神ら(アドニスとタンムズ)]を愛人としている冥界下りをなした女神らでもあると記号論的には述べられるようになっている—)

・シュメールの女神イナンナは

[金星の体現存在]

[愛の女神]

としてギリシャ神話の「アフロディテ」という女神(そして、そのローマ版たるヴィーナスという女神)と縁起由来を一とする神であるとの言説がかなりもって昔から存在している。

また、[ペルセポネ]に関して「も」同女神が「アフロディテ」(ヴィーナス)といった**女神と同一の存在である**(一なる存在の別相である)との申しようが古人に由来するところとして存在している。

続けての段にて上記の各点についての典拠を挙げていくこととする。

(振り返ってもの話として)

ここでは「ギリシャ神話のペルセポネ」と「シュメール神話のイナンナ」が記号論的に**顕著なる共通の特性を有していること**の典拠を挙げるその前に

[「イナンナ」および「ペルセポネ」と各別に同質視されてきた(とのことの典拠をこれより挙げる)との「ギリシャ神話におけるアフロディテ」(ローマ神話におけるヴィーナス)という女神]

について本稿の従前の段にて何を述べていたのかの振り返っての表記をなしておく。

その点、本稿にての先の段にあつての解説部(出典(Source)紹介の部 39)の内容を前提に置いてのこととしての出典呈示をなしていたとの**出典(Source)紹介の部 50**から**出典(Source)紹介の部 51**を包摂する解説部)にて示したように女神アフロディテは

[悪魔の王サタン(ルシファー)]

と「純・記号論的に」結びつくようになっているとの存在でもある(：世間一般ではそのようなことを取り立てて問題視する向きはほとんどいないのだが、女神アフロディテと悪魔サタンの間には顕著なる多重の接続性が見出せるようになっている)。同じくものこと、アフロディテと悪魔の王サタンの純・記号論的なる結びつきとのことについては

[金星の体現存在とされるアフロディテ=ヴィーナスがそれを巡ってのやりとり

にこだわったとの[黄金の林檎]](トロイア崩壊の原因となっているもの)と[キリスト教的理解ではサタン、金星のラテン語呼称ルシファーの名で引き合いに出されもするそのサタンに比定されるとの[エデンの蛇]がそのやりとりにこだわった[エデンの禁断の果実]が多重多層的に結びつくようになっている]との摘示がなせるようになっており、そして、そうもした摘示がなせるようになっていることが

[[黄金の林檎「の園」]と[エデンの禁断の果実「の園」]の双方と結びつく素地を有しているとのかたちで欧州にて取り上げられもしてきた[アトランティス](伝説上の陸塊／ヘラクレス第 11 功業に登場する巨人アトラスと同名のアトラスと名称としては結びつく古の陸塊)に通ずる存在]を介して「も」結びつくようになっている

とのかたちで解説をなしてきたとのことがある。

(上にまつわるどころとしてルネサンス期画家ルーカス・クラナッハ・エルダーの手になる絵画を再掲しておく)



Venus & Cupid
(Aphrodite)



Works of Lucas Cranach the Elder



Lucifer



(John Milton's Paradise Lost)

細々と論拠挙げながら先行する段にあって指摘してきたようにギリシャ女神アフロディテは【金星の体現存在】 / 【黄金の林檎にまつわる誘惑に関わっている存在】 / 【ファム・ファタール(男を破滅にいざなう運命の女)になることになったヘレンを誘惑に用いた存在】

となっている。

他面、ルシファーは

【金星の体現存在】 / 【林檎ともされる果実にまつわる誘惑に関与したエデンの蛇の実体とされる存在】 / 【ファム・ファタールになることになった女(イヴ)を誘惑に利用したとされる存在】

である。

類似性の根は他にもあるのだが(黄金の林檎の園はエデンよろしく蛇(ラドン)と結びつく / 黄金の林檎の園を管掌する存在とされるヘスペリデスらは【ヘスペリス=金星体現神格】と結びつき、その意で【金星=明けの明星のラテン語呼称と結びつくルシファー】に通ずる等々)、問題はそうして類似する両存在 —アフロディテとルシファー— の誘惑の果実、【エデンの禁断の果実】と【黄金の林檎】の間につながりあい観念されるとのことである。

(従前表記を振り返っての部はここまでとする)

(直前までの振り返っての話から引き戻し) それでは直下、[ギリシャ神話のペルセポネ]と[シュメールの女神イナンナ]がいかにして「純・記号論的に」顕著な一致性を呈しての存在となっているのかの典拠を挙げていくこととする。

出典(Source)紹介の部 97

SOURCE 97



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

■ 外挿付記として：ここ【典拠紹介部 97】には「長くも」の p.354 から p.371 との頁数を割いていもするため、以降【典拠紹介部】(従たるところ)と【指し示しの主軸たるところ】の関係について感われぬよう、何卒ご注意いただければ、と申し述べさせていただきます。また、「お勧めはいたしません」が典拠委細読み飛ばしのうえで内容把握なそうの向きにおかれましては(歩を進めていただきもし)本書 p.371 から読解いただければ、と考えています。

・[ペルセポネ] と [シュメールの女神イナンナ(アッカド名イシュタル)] は双方共に冥界下りをなした存在である。

・[ペルセポネ] と [シュメールの女神イナンナ(アッカド名イシュタル)] は双方共に [植物神としての「死と再生の神」として同一視されるだけの縁起が伴っているとの存在] を愛人化している女神らでもある (具体的には [植物神としての「死と再生の神」たるアドニスという神およびタンムズという神をそれぞれに愛人化している女神ら] として知られている — ペルセポネとイナンナは [同一の存在と見做されてもいる神ら(アドニスとタンムズ)] を愛人としている冥界下りをなした女神らでもあると記号論的には述べられるようになっている —)

・シュメールの女神イナンナは

[金星の体現存在]

[愛の女神]

としてギリシャ神話の [アフロディテ] という女神 (そして、そのローマ版たるヴィーナスという女神) と縁起由来を一とする神であるとの言説がかなりもって昔から存在している。

また、[ペルセポネ] に関して「も」同女神が [アフロディテ](ヴィーナス) といった女神と同一の存在である (一なる存在の別相である) との申しようが古人に由来するところとして存在している。

とのことらの出典を 一きわめて長くもなってしまうが 順次段階的に挙げていくこととする。

まずもって

[ペルセポネとシュメールのイナンナが共に冥界下りをなした女神として [「一般に」知られている] こと]

についての出典を挙げることとする。

につき、ペルセポネが冥界下りをなした女神である — 冥界の主権神たるハデスに連れ去れて冥界の食べ物たる柘榴(ざくろ)を食したため、地上界に留まれるのが一年の内、限られた期間となっているとの女神である(の折が春の訪れ・収穫祭と結びつけられている女神である) — とのことにまつわる出典は既に呈示しているので(本稿の先の段、[出典\(Source\)紹介の部 91](#)などを参照されたい)、ここではイナンナという女神が冥界下りの女神であることの出典を挙げておくこととする。

(直下、オンライン上より即時確認できるところの現行、和文ウィキペディア[タンムーズ]項目記述内容よりの抜粋として)

イナンナ(アッカドではイシュタル)が姉妹エレシュキガルの支配する地下世界であるクル(Kur)に向かった時、そこを自分のものであると考えたであろう。イナンナ/イシュタルは七つの門を通ったが、一つの門を通る毎に装身具を一つずつおいて行く必要があった。その結果七番目の門を通過した後は全裸になっていた。僭越なことをし過ぎるなという忠告にもかかわらず、イナンナ/イシュタルは振り向くことなくエレシュキガルの王座に腰を下ろしてみせたのである。とたんに、冥界のアヌナキの裁きが下り、死をもたらす両眼で彼女を見つめた所、イナンナ/イシュタルは鉤にぶらさがる死体と化した。…(中略)…イ

ナンナの忠実な召し使いは他の神々に助けを求めたが、応えたのは賢神エンキ／エアのみであった。エンキとエアでは生き残らせる二つの神に違いがあるが、イナンナ／イシュタルの復活という目標は共通していた。エンキ／エアは自身の体から作り出した従者をクルに送り込み、イナンナ／イシュタルに生命の食物と生命の水を与えて蘇らせた。ところが、「魂の保存則」によって、クルにイナンナ／イシュタルの身代わりとして残す誰かを探さなければならなかった。…（中略）…そこで見たのが、彼女の王座に居座るドウムジ／タンムズの姿であった。恋女房であったはずなのに、彼は明らかに彼女に消えて欲しくてたまらなさそうだった。俄然イナンナ／イシュタルは彼に死に神(demons)をおしつけた。

(引用部はここまでとしておく 一※一)

(※上をもってシュメールの女神イナンナが冥界下りをなしたとのこと、そして、彼女が冥界から脱出するために[ドウムジ]という存在を身代わりに据えたとのこと「一般に知られている」ことを示す出典とした。尚、上にて引用なしての部は英文 Wikipedia[Inanna]項目にあつての[**Inanna's descent to the underworld; イナンナの冥界への下降**]の節にて “ **The story of Inanna's descent to the underworld is a relatively well-attested and reconstructed composition.** In Sumerian religion, the Underworld was conceived of as a dreary, dark place; a home to deceased heroes and ordinary people alike. [. . .] Following Ereshkigal's instructions, the gatekeeper tells Inanna she may enter the first gate of the underworld, but she must hand over her lapis lazuli measuring rod. She asks why, and is told 'It is just the ways of the Underworld'. She obliges and passes through. Inanna passes through a total of seven gates, at each one removing a piece of clothing or jewelry she had been wearing at the start of her journey, thus stripping her of her power. When she arrives in front of her sister, she is naked. "After she had crouched down and had her clothes removed, they were carried away. Then she made her sister Erec-ki-gala rise from her throne, and instead she sat on her throne. The Anna, the seven judges, rendered their decision against her. **They looked at her - it was the look of death. They spoke to her - it was the speech of anger. They shouted at her - it was the shout of heavy guilt. The afflicted woman was turned into a corpse. And the corpse was hung on a hook.** ” と [フックにぶら下げられての宙吊り死体化] の経緯がまとめられている部と全く同文の内容のものとなる。といったイナンナを巡るエピソードが神話通に有名なものとなっていることについては(上にての記述の引用元としての和文ウィキペディア[タンムズ]項目からして同様の伝での記載がなされていることだが)1915年に世に出た、Descent of the Goddess Ishtar into the Lower World という Morris Jastrow, Jr. という前世紀前半まで活動の米国人史家の手になる文書、[イナンナのアッカド版の神格たるイシュタルの冥界下りの神話]を扱った文書の内容が強くも人口に膾炙(かいしゃ)していることが影響しているとのことがよく指摘されているところである ——※同じくものことについては(和文ウィキペディア[タンムズ]項目にての記載を引くところとして) “ 最初に発見された文書に基づき、以前はイシュタル／イナンナの冥界落ちはタンムズ／ドウムジの死の前ではなく後で、目的もタンムズ／ドウムジを救うためだとされていた。インターネット上で広範に出回っている M. Jastrow の “Descent of the Goddess Ishtar into the Lower World”(『女神イシュタルの地下世界への下降』、1915年)でもおなじみである。1963年に復元された新しい文書では物語の様相を全く異にしているのだが、古い解釈もまだ通用している ” (ここまですべてを引用部とする)との申しようがなされたりもしている——)

次いでもってして、

[シュメールのイナンナとギリシャのペルセポネが共に [植物神としての死と再生の神] と結びついていること]

の出典を挙げることにする。

上にて [イナンナ(ないしはそのアッカド版たるイシュタル)が冥界下りをなした神であること] を示すために引き合いに出した和文および英文のウィキペディアよりの [イナンナの冥界下りのエピソードにまつわる引用部] は

[イナンナがドゥムジ (タンムズという名前に置き換えられる存在にしてイナンナのアッカド版の古代崇拝神格たるイシュタルの愛人の名として知られる存在) を身代わりに立て、冥界より脱出したとの神話が存すること]

を記載しているとの部(巷間にもそういう話がよくも伝わっているとの部)ともなる。

そこにて言及されているところのドゥムジ・タンムズが、そして、ペルセポネが愛人化していたと伝わるアドニスという存在が

[植物神としての死と再生の神]

に分類される神格であるとのことについての出典紹介を以降、1. から4. と振ってなすことにする。

1. まずもって、ドゥムジないしタンムズという神が「冥界下りの」イナンナないしイシュタルの愛人としての神であると伝わることについて目に付くところの解説のなされようを引いておく。

(直下、ドゥムジ(イナンナの冥界下りにて身代わりに処された存在)とタンムズ(イシュタルの愛人)が伝承にあつての同一存在であると看做されていることの英文 Wikipedia [Tammuz] 項目、その [Ritual mourning] (儀式的慟哭の儀)の節よりの抜粋をなすとして)

In Babylonia, the month Tammuz was established in honor of the eponymous god Tammuz, who originated as a Sumerian shepherd-god, Dumuzid or Dumuzi, the consort of Inanna and, in his Akkadian form, the parallel consort of Ishtar.

「バビロニアにあつて(暦の一たる) [タンムズの月] は原初、シュメールにあつての牧羊の神であつたドゥムジドないしドゥムジ、イナンナの伴侶にして、そのアッカド版ではイシュタルの伴侶となる同神に由来する神たるタンムズ神の名を祝して設けられたとのものである」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく —※—)

(※上にてはドゥムジが牧羊の神と表記されているが、タンムズ・ドゥムジが植物神・収穫祭の神 (gods of food and vegetation) であることはよく知られていることである —植物神としての来歴にまつわる典拠は下に挙げる— 。 また、[タンムズ] はキリスト教・ユダヤ教教徒らの根本信仰を規定している旧約聖書にもその名を見出せるとの「よく知られた」古代中近東信仰体系にあつてのメジャーな神であり、決してマイナーな神格の話を微に入つて取り上げているわけではないこと、お含みいただきたいものである —※旧約聖書のエゼキエル書第8章12節—14節より引用(当方も所持しており、誰でもオンライン上よりPDF版の内容を確認できる日本聖書協会にてまとめられている流布版電子版旧約聖書にてのエゼキエル書第8章12節—14節より引用)なせば、“彼らは言う、『主

はわれわれを見られない。主はこの地を捨てられた』と」。またわたしに言われた、「あなたはさらに彼らがなす大いなる憎むべきことを見る」。そして彼はわたしを連れて主の家の北の門の入口に行った。見よ、そこに女たちがすわって、タンムズのために泣いていた”（引用部はここまでとする）との部位が該当部となる。ユダヤ教信者に旧約聖書の中で忌むべき異教崇拝の存在として [タンムズ] が言及されている同節をもってタンムズが古代中近東信仰体系にあって影響力ある神格となっていたと欧米圏では看做されているとことがある)

2. 次いで、上記のようにイナンナないしイシュタルの愛人たる神であるドゥムジないしタンムズが [[植物神]としての意味合いをもって信仰されていた神格となっていたとの指摘がなされていること]

の典拠を挙げることにする。

(直下、Project Gutenberg のサイトより誰でもダウンロード可能な The Golden Bough Studies in the History of Oriental Religion Vol. V. of XII. Part IV: Adonis Attis Osiris. Vol. 1 of 2. (1914) (『金枝篇』第5巻4章(の2) [アドニス・アッティス・オシリス] (1914年版) にての Chapter IX. The Ritual of Adonis.よりの引用をなすとして)

The character of Tammuz or Adonis as a corn-spirit comes out plainly in an account of his festival given by an Arabic writer of the tenth century. In describing the rites and sacrifices observed at the different seasons of the year by the heathen Syrians of Harran, he says: “Tammuz (July). In the middle of this month is the festival of el-Bûgât, that is, of the weeping women, and this is the Tâ-uz festival, which is celebrated in honour of the god Tâ-uz. The women bewail him, because his lord slew him so cruelly, **ground his bones in a mill, and then scattered them to the wind. The women (during this festival) eat nothing which has been ground in a mill, but limit their diet to steeped wheat, sweet vetches, dates, raisins, and the like.**”689 Tâ-uz, who is no other than Tammuz, is here like Burns's John Barleycorn—

(微に入っの訳注を付しもしての拙訳として)

「主に10世紀にてのアラビア人著述家によって呈示されているところの祭儀に関する説明によるところとして**[穀物の精霊としてのタンムズ神ないしアドニス神の特性]**が明確化してくる。年を通しての季節、その折々にて観察されていたところの儀式および儀式にての生贄の儀をハランの地の異教徒のシリア人が叙述するところでは、曰く、

「タンムズ、暦にての7月。この月の中頃にての祭りは el-Bûgât の祭り、すなわち、**[嘆き女らの祭り]**の月となり、そして、これは**[Tâ-uz の祭り]**、Tâ-uz 神を祝しての祭りとなる（訳注：本稿にての上の段の付記部でも述べていることであるが、タンムズのこととは旧約聖書エゼキエル書にて**[嘆かれての神格]**として登場してくる。といった死が嘆かれての穀物神としてのタンムズ神のことがここにて引用をなしている『金枝篇』では問題視されている）。彼タンムズの主(あるじ)たる神が残酷無残にも同神を殺害、**製粉機**（訳注：ストーン・ミルのように臼とのニュアンス強きものかもしれない）**で穀物のように彼の骨を粉々にし、そして、風にて飛び散らせたので、彼女ら(Tâ-uz 神祝祭の参加者たる嘆き女)は彼のために嘆くのである。そうした女らは祭りの最中には製粉機(ないし臼)で粉々にされて底にあるものらを何も食せず、しかし、その食事を小麦粥、甘味帯びての豆類、ナツメヤシ、レーズン、そのようなものらに制限する**とのことをなす

(注 689)] (訳注:ここでアラビア人著述家申しようとして伝存する[タンムズ神の穀物神としての特性]にまつわる証言の出典としてフレーザーは 689 と注記番号を振って D. Chwolsohn, Die Ssabier und der Ssabismus (St. Petersburg, 1856), ii. 27; id., Ueber Tammuz und die Menschenverehrung bei den alten Babyloniern (St. Petersburg, 1860), p. 38. Compare W. W. Graf Baudissin, Adonis und Esmun, pp. 111 sqq.とドイツ人の 19 世紀、1856 年の著作を挙げもしている)。

(そうして嘆かれ崇拜されるとの) Tâ-uz というのはタンムズのことを指しているに他ならず、ここでも

[バーンズ (訳注:18 世紀のスコットランド詩人ロバート・バーンズ Robert Burns のこと) の手になる [ジョン・バーリーコーン] (訳注:ジョン・バーリーコーンはイギリスに古くから伝わる民謡で穀物の大麦とウィスキーらそれよりなるアルコールを擬人化して唄った民謡と認知されている / 表記のロバート・バーンズがそちら民謡にアレンジを加えて出版化したりもしているとの事情がある) と同じような様相]

が見受けられるとのものである」

(補いながらもの訳を付しての引用部はここまでとする)

上の引用部をもってして 19 世紀から 20 世紀に影響力を行使した伝承研究を本義としていた学者 (ジェイムズ・フレイザー) の指摘としてタンムズ・ドゥムジが

[穀物の神格 — corn spirit —] (『金枝篇』にて引き合いに出されているシリア人の文献記録では穀物のように骨が挽き臼によってばらまかれて供養される神)

として存在していることを示したわけだが、については、また、[アドニス]という神と同じくものであると上にては言及されてもいる (再引用すれば、“**The character of Tammuz or Adonis as a corn-spirit comes out plainly in an account of his festival given by an Arabic writer of the tenth century.**” との部位がそうである)。

3. ここまできたところで上にてタンムズ・ドゥムジとの連続性が示されている (典拠は後述) とのアドニスという神の特性が

[冥界下りをなしたペルセポネに愛人化されての [植物としての死と再生のサイクル] を体現した植物神]

であるとのことを指し示すことにする (: によって、ここでの指し示し事項、冥界下りのイナンナ・イシュタルおよびペルセポネの両者ともどもが [植物神としての死と再生の神] と結びついている ([植物神としての死と再生の神タンムズ・ドゥムジないしアドニスを愛人としている神ら] として結びついている) とのことを摘示を全うしたことになりもする)。

(直下、アドニス神の [植物 (穀物) の死と再生の体現者] としての側面を強くも指し示すものとして英文 Wikipedia [Adonia] — [アドニア; アドニスの祝祭] — 項目にての記述を掻い摘まんで引用なすとして)

Adonia or Feast of Adonis was an ancient festival mourning the death of Adonis.

[...]

The origins of the festival are unknown, but Photius records that it came to Greece from Cyprus and Phoenicia. We do not know when the Adonia was first

observed in Athens: a mid-fifth-century date has been suggested on the basis of vase-paintings. Casual remarks in Aristophanes' *Lysistrata* (lines 387-96) and elsewhere show the Adonia was a familiar, though disruptive, element of Athenian life in the 420s.

[...]

The date of the early summer festival of Adonia has been debated: it was tied to the cycle of the new moon on the ninth day of Hecatombion. This festival was the only celebration of Adonis at Athens: there was no temple to honour him, and he had no place in the official cults of the polis.

[...]

One of the features of the holiday was the creation of "Gardens of Adonis".

This involved sowing seeds of quickly-germinating plants — wheat, barley, lettuce, fennel — in shallow baskets, bowls or even in shards of clay. Tended by the women, who watered them daily, the plants grew rapidly but had shallow root systems.

(補いもしての訳として)

「アドニア、あるいは、アドニス祭はアドニスの死を嘆くとの意味合いが付された古代の祭りである。

…(中略)…

同祭儀の起源は分かっていないが、フォティオス（訳注:9世紀のコンスタンティノーブル大司教のフォティオス1世を指す。同・歴史記録上の人物については古代ギリシャに対する造詣深き者として知られ、その手になる著作、*Bibliotheca*『図書総覧』 一本稿で度々問題視してきたアポロドーロスの有名なビブリオテーケーとは別物— のことも欧米圏の歴史通にはよく知られている）が記録するところでは同祭儀（アドニア;アドニス祭）はキュプロス島およびフェニキアを通じてギリシャに渡来したようである。我々は都市アテナの住人によって、いつ、アドニス祭が見出されることになったのか知るところではないが、[前5世紀半ば]が(起源として)壺絵の形態から提案されるところではある。アリストファネス（訳注:同アリストファネスは高等学校で世界史の授業を選択し、それを受験戦争にての手段に使うのならば、暗記プロパーとなっているところのギリシャの主要な文人らのうちの、戯曲『女の平和』などで知られる前5世紀から前4世紀に活動したとされる女詩人のことである）の戯曲『女の平和』にての微に入っていない(casualな)言及 一行387から396の部位にての言及— および他資料が示すところでは前420年頃にはアテナ市民の生活にてアドニス祭は(その実施にて)分裂的傾向を呈していたようだが、通用化してのものでもあったようである。

…(中略)…

初夏にてのアドニス祭実施の時期についてはそれが何時だったのか今日に至るまで議論されているところである。アドニア(アドニス祭儀)はヘカトンバイオン（訳注:ギリシャで用いられていたアッティカ暦の月の名で今日の暦の7月に対応）の月の9日目にての新月の折と結びつけられていたものである。こちら祭儀はアテナ市民によるアドニスへの祝祭にとどまるものであった。アドニスに荣誉与えらるゝとの神殿もなければ、アドニスはポリスの中に自身に対する制度化されたカルト(としての信徒集団)を抱えているわけでもなかった。

…(中略)…

アドニアにての祝日にあつての一つの特性としては「アドニスの園(ガーデン・オブ・アドニス)」の構築が挙げられる。これは即時に芽吹く種別の植物ら—小麦、大麦、レタス、茴香(ウイキョウ)—の底の浅いカゴ、椀、あるいは粘土小片にての種蒔きを伴うものである。日課としてそれらに水やりする女性らに世話さ

れ、それら植物は即時成長を見るが、深く根付いて繁茂するとのものではなかった」

(訳を付しての引用部はここまでとする —※—)

(※尚、上記のような引用をなしての英文 Wikipedia [Adonia] 項目にはフレイザーなどがアドニスの祝祭をしてそれが穀物の再生を祈念してのものであると論じていたことについて異論もあるとの書きようもなされているが(“ Sir James Frazer believed that Gardens of Adonis provided sympathetic magic that encouraged fertility, growth and the vegetational death of Adonis, as a life-death-rebirth deity, as he was honoured in the Levant: see Adonis. But, Marcel Detienne, the author of Gardens of Adonis, a structuralist analysis of the practice, has a different view.” とされているが)、については、[アドニスの園]を即席的に造ろうとの側面などに見るアドニスの植物神としての側面に異動はないとのこと、本稿では強調しておく —— 英語版にての Wikipedia [Adonis] 項目にて “ Women in Athens would plant "gardens of Adonis" quick-growing herbs that sprang up from seed and died. The Festival of Adonis was celebrated by women at midsummer by sowing fennel and lettuce, and grains of wheat and barley. The plants sprang up soon, and withered quickly, and women mourned for the death of the vegetation god. ” 「アテネ市にあっての女の市民は[アドニスの園]に対して種から芽吹き枯死するまでのサイクルが早いとの急成長なすハーブらを植える。アドニス祝祭は真夏にて茴香(ういきょう)、レタス、小麦と大麦ら穀物を種蒔きすることによって女らに祝われたものとなる。植物は急激に芽吹き、そして急激にしおれ、そして、それでもって女らは[植物神](アドニス)の死を嘆いた」と記載されている部位が同じくものと結びつく部位である——)



植物としての死と再生の神としての特性を帯びていたとジェイムズ・フレイザーに目立って指摘され、また、今日もそのように語られ続けているとのアドニスという神の祝祭、アドニア(Adonia)の模様を描いた 19 世紀後半の絵画 (John Reinhard Weguelin という画家の手になる作)よりの抜粋

次いで、タンムズ神と結びつく「植物の生と死を体現しての」アドニス神、ここまでその特性を問題視し

てきた同神がペルセポネに愛人化されている神である — (下に典拠を挙げるようにアドニスとの質的同等物にあたるドゥムジ・タンムズがイナンナ・イシュタルの愛人とされているようにアドニスとペルセポネに愛人化されての神であると伝わる) — とのこの出典を挙げる。

(直下、[アドニス神が冥界下りをなしたペルセポネと密接に結びついた死と再生のサイクルを体現した植物神]を示すものとしての The Golden Bough Studies in the History of Oriental Religion Vol. V. of XII. Part IV: Adonis Attis Osiris. Vol. 1 of 2. (1914) (『金枝篇』第5巻4章(の2)[アドニス・アッティス・オシリス] (1914年版.年度を異にする各版とも全文 Project Gutenberg のサイトよりダウンロードできるとの著名な書) にての Chapter I. The Myth of Adonis.よりの引用をなす)

The tragical story and the melancholy rites of Adonis are better known to us from the descriptions of Greek writers than from the fragments of Babylonian literature or the brief reference of the prophet Ezekiel, who saw the women of Jerusalem weeping for Tammuz at the north gate of the temple. Mirrored in the glass of Greek mythology, the oriental deity appears as a comely youth beloved by Aphrodite. In his infancy the goddess hid him in a chest, which she gave in charge to Persephone, queen of the nether world. But when Persephone opened the chest and beheld the beauty of the babe, **she refused to give him back to Aphrodite**, though the goddess of love went down herself to hell to ransom her dear one from the power of the grave. **The dispute between the two goddesses of love and death was settled by Zeus, who decreed that Adonis should abide with Persephone in the under world for one part of the year, and with Aphrodite in the upper world for another part.** At last the fair youth was killed in hunting by a wild boar, or by the jealous Ares, who turned himself into the likeness of a boar in order to compass the death of his rival. Bitterly did Aphrodite lament her loved and lost Adonis. The strife between the divine rivals for the possession of Adonis appears to be depicted on an Etruscan mirror. The two goddesses, identified by inscriptions, are stationed on either side of Jupiter, who occupies the seat of judgment and lifts an admonitory finger as he looks sternly towards Persephone. Overcome with grief the goddess of love buries her face in her mantle, while her pertinacious rival, grasping a branch in one hand, points with the other at a closed coffer, which probably contains the youthful Adonis.

(込み入った話にまつわる訳注を付しもしての拙訳として)

「[アドニスの悲劇的な物語と憂鬱なる儀式]のことは

[バビロニア文物の断片的情報や寺院北門にてタンムズのために嘆くエルセレム女性を目にしたとのことである予言者エゼキエル (訳注:本稿の先の段でも一言述べたことだが、旧約聖書、の中のエゼキエル書にもタンムズの名前が登場してくるとのことがあり、ここでの話はそのことを指す) の言及]

に由来するところよりも

[ギリシャ著述家らの叙述]

を通じて(今日生きる)我々によく知られていることである。

ギリシャ神話体系にあっては(タンムズとの類似性との意で)硝子に反射される如くのオリエン特地方神格(アドニス)が[アフロディテ神に愛された若人]として立ち現れてくる。その幼少期、女神(アフロディテ)は匣(はこ)にアドニスを隠し、冥界の女王たるペルセポネに管理を委ねた。しかし、ペルセポネが匣(はこ)を開き、そして、赤子の美しさに触れた折のこととして、[墓所(冥界)の力学]から彼女が愛すべきものを身請けするために愛の女神(文脈上、アフロディテ)が彼女自身冥界に赴くとのことをなしたにも関わらず、**ペルセポネは同赤子(アドニス)をアフロディテに返却することを拒んだ。**

「愛」と「死」の二人の女神らの諍(いさか)いは
「一年にあつての一期間、アドニスとペルセポネと共に冥界にいるべし、そして、
その他の期間はアフロディテと共に上方の世界(冥府に対しての上方の世界)
にいるべし」

との沙汰を下したゼウスによって裁定を見ることとなった。

後、ついに美しく成長した若人(たるアドニス)は狩猟の折にて野生の猪、すなわち、恋敵の死を企図・実行するために猪の形状をとるに至った嫉妬の情に駆られてのアレス神によって殺されることになった(訳注:ギリシャ神話の設定上ではアレスは美の神アフロディテの愛人とのことになっている。それにつきアフロディテとの仲の濃密性を妬いてのアレスによるアドニス殺しにはペルセポネの介入があったともされており、ペルセポネがアレスを焚き付けてその挙に出させたとの話も存する)。

アフロディテは彼女が愛し、失われもしたアドニスのために痛烈にも嘆いた。

以上、アドニスの保有を巡ってライバル関係にあつての神格らの諍(いさか)いの話はエルトリアの鏡の遺物(訳注:注記にてエルトリア期の鏡とアドニスらとの関係性が示唆されている)にて描写されるが如きものである。そこでは銘にて特定化できるところの二人の女神らが審判の席にあり厳しくもペルセポネを見据え勧告のために指を上げているとのジュピター(ゼウス)の両脇に配されている。彼女の辛抱強きライヴァルが片方の手で枝を掴み、もう片方の手で閉じられた匣(はこ)、おそらく若きアドニスを取めているのだろう匣を指しているとの一方で悲嘆に圧倒されるかたちでか愛の女神が彼女の顔を外套に埋めている(とのさまがその遺物に見てとれもする)」

(訳を付しての拙訳はここまでとする)

(直下、[アドニス神がペルセポネによって愛人化された存在であること]とのよく知られたエピソードを示すものとして英文 Wikipedia[Adonis]項目にての現行記載内容よりの引用「をも」なすとして)

The most detailed and literary version of the story of Adonis is a late one, **in Book X of Ovid's Metamorphoses**. The central myth in its Greek telling, Aphrodite fell in love with the beautiful youth (possibly because she had been wounded by Eros' arrow). Aphrodite sheltered Adonis as a new-born baby and entrusted him to Persephone. Persephone was also taken by Adonis' beauty and refused to give him back to Aphrodite. The dispute between the two goddesses was settled by Zeus (or by Calliope on Zeus' behalf): Adonis was to spend one-third of every year with each goddess and the last third wherever he chose. He chose to spend two-thirds of the year with Aphrodite.

「最も詳細に綴られており文献としての体裁もとっているとのアドニスの物語(のバージョン)は後者のもの、**オヴィディウスによる『変身物語』、その巻の五の部のものである**。ギリシャ人が語り継いできたところの神話の主要なところは[アフロディテ神がアドニス神の美しき若さに対し、恋に落ちた]とのものである(ありうるところとしてそれはアフロディテがエロス神の愛の矢によって傷つけられていたからであろう)。アフロディテは新生児としてのアドニスを保護し、ペルセポネに彼(の養育)を委ねていた。ペルセポネもまたアドニスの美しさに惹かれるところがあり、そして、アフロディテに彼を返すことを拒んだ。両女神の間の紛争はゼウス神(ないしゼウスを代理してのカリオペ)によって収められることとなった。アドニスは毎年うちの三分の一を一方の女神と過ごし、もう残りの三分の二を彼が選んだ女神と過ごすことになった。彼アドニスは(結局のところ)一年の三

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上に引用なししているところに見るようにアドニスは[ペルセポネに愛人化された穀物の体現存在]と伝わっている(より正確に述べれば、[ペルセポネとアフロディテの両女神の共通の愛人となさしめられている穀物の体現存在]となっている)。

4. さらに、[死と再生を体現しての植物神][ペルセポネの愛人化存在]としての特性を強くも帯びてのアドニス神が「強くも」タンムズ神 —先述なししてきたところのイナンナ神の愛人化存在ドゥムジと共通の存在— との一致性を指摘されてきた存在であるとのことの出典を挙げることにする。

(直下、[アドニス神が冥界下りをなしたタンムズと密接に結びついた死と再生のサイクルを体現した植物神]を示すものとしての The Golden Bough Studies in the History of Oriental Religion Vol. V. of XII. Part IV: Adonis Attis Osiris. Vol. 1 of 2. (1914) (『金枝篇』第5巻4章(の2)[アドニス・アッティス・オシリス]にての Chapter I. The Myth of Adonis.よりの引用をなすとして)

The worship of Adonis was practised by the Semitic peoples of Babylonia and Syria, and the Greeks borrowed it from them as early as the seventh century before Christ. The true name of the deity was Tammuz: the appellation of Adonis is merely the Semitic Adon, “lord,” a title of honour by which his worshippers addressed him. In the Hebrew text of the Old Testament the same name Adonai, originally perhaps Adoni, “my lord,” is often applied to Jehovah. But the Greeks through a misunderstanding converted the title of honour into a proper name.

(拙訳として)

「アドニス崇拝はバビロニアおよびシリアのセム系の民らによって執り行われており、ギリシャ人らがそれをキリストの時代よりも七世紀程早くも彼らから拝借するの事になりもしていた。(崇められていた)神の本当の名前は(アドニスではなく)タンムズであった。アドニスとの名称はただ単純にセム系におけるアドン、[主(天上界の主)]、彼の崇拜者らが彼に付したとの尊称を指すにすぎない。旧約聖書に見るヘブライ語文書にて見受けられる同名のアドナイ、おそらく原義としてのアドナイは「我が主」との語であり、度々、エホバを指す語として用いられてきたものである。しかし、ギリシャ人らは誤解をなしてその尊称を正式名称(アドニス)に変えてしまった」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

ここまでの 1. から 4. と振ってのこと(にまつわっての出典紹介)にて次のことらを指し示してきた。

(1. にて解説したこととして) [ドゥムジとその質的同等物タンムズは「冥界下りをなした」イナンナ・イシュタルの愛人としての神である]

→

(2. および 4. にて解説したこととして) [ドゥムジ・タンムズは植物の死と再生を体現しての存在であるが、彼らドゥムジ・タンムズとの[一致性][同一起源]を帯びての神格としての特性が指摘されているのが古代オリエントからギリシャに渡

来したアドニスという神である]

→

(3. にて解説したこととして) [アドニスという神は「冥界下りをなした」ペルセポネに愛人化されての死と再生のサイクルを体現した植物神である]

→(以上より、)

[双方共に「冥界下りをなした」女神らであるイナンナ(イシュタル)とペルセポネの両神らは「オリエントの死と再生の植物神として同一性が指摘されてきたドゥムジ(タンムズ)・アドニス」を介しても接合する]

Persepohne ← Inanna

- Both of them descend to the underworld .
- Both of them have lovers as a [vegetation deity] and [dying-and-rising deity].
- According to some scholars, above lovers, [Adonis] & [Tammuz] are identified with one another .

ペルセポネとイナンナの両女神に関しては彼女らが「冥界下りをなした女神」であるとの共通性が見受けられるに留まらず、彼女らが「植物神としての死と再生の神」らを愛人化していると伝わっているとの共通性が伴い、——そしてこれが大きいわけだが——彼女らの愛人とされているとの「植物神としての死と再生の神」らとしてのタンムズ神とアドニス神からして「同じくもの起源をもった同一の存在」であるとの申しようがなされているとある。

さらに加えて、ここ出典紹介部にあつて長々と引証の材を引きもしている対象としていることらのうち、

シュメールの女神イナンナについては

[金星の体現存在]

[愛の女神]

としてギリシャ神話の「アフロディテ」という女神(そして、そのローマ版たるヴィーナスという女神)とも縁起由来を一とする神であるとの言説が存在している。

また、往古より伝存してのものとされる申しよう、そこからも認められるところとして「ペルセポネ」に関して「も」同女神が(ペルセポネと同時にアドニス神を愛人化している神として語り継がれてきた女神たる)「アフロディテ」といった女神と同一の存在である(一なる存在の別相である)との申しようが古人に由来するところとして存在している。

とのことについての出典紹介なすこととする。

まずもって「イナンナ・イシュタル」と「アフロディテ」の間に結びつきがあることを(誰でも容易に確認できる論拠に基づいての話をなすとの本稿のスタンスに則りつつ) 順々に指し示していく。

(直下、4世紀にあつての「教父」(初期キリスト教知識階級としての著述家らをして「教父:チャーチドクター」と呼び慣わすとの慣行がある)たるエウセビオスの遺した古典としてギリ

シヤの美の女神アフロディテの星が[宵の明星]こと金星であるとの言及がなされている
Preparation for the Gospel, 1903, E.H. Gifford, BOOKIII —グーグル検索エンジンに入
力して表示されてくるとの著作(上にての E.H. Gifford とはエウセビオス著作を英訳した訳
者のことである) — よりの(出典(Source)紹介の部 48 にて抜粋した部と同じくものところか
らの)再度の抜粋をなすとして)

The star of Aphrodite they observed as tending to fecundity, being the cause of
desire and offspring, and represented it as a woman because of generation, and as
beautiful, because it is also the evening star

(意識して)

「古代ギリシヤ人はアフロディテの星をして多産(fecundity)傾向を示すもの、欲
望および子種の因、出産がゆえの女性象徴、そして、[宵の明星]ともなってい
たことがゆえ美の象徴ととらえていた」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

上引用部ではギリシヤの美の女神アフロディテが古文献それ自体 —エウセビオス由来の古典として
今日に伝わっている Preparation for the Gospel『福音の備え』— にあって[宵の明星(すなわち金星)
の体現神格]と看做されていることが示されているわけだが、金星とは英語で述べるところのヴィーナス
(Venus)である。そして、そのヴィーナスが [ローマ版アフロディテとしての美の女神の名前] と [なるべ
くしてなっている] とのことがあり、そのことが金星の体現存在、先行しての古代宗教にて崇められてい
たシュメールのイナンナ(イシュタル)と結びつけられてきたとのことがある。たとえば、基本的なこととし
て和文ウィキペディア[金星]項目にても —先にもそこよりの原文引用をなしたわけだが、再度の引用
をなすとして— “(金星は)欧米ではローマ神話よりウェヌス(ヴィーナス)と呼ばれている。メソポタミア
でその美しさ(明るさ)故に美の女神イシュタルの名を得て以来、ギリシヤではアフロディーテなど、世界
各国で金星の名前には女性名があてられていることが多い。天使の長にして悪魔の総帥とされたルシ
ファー(ルシフェル、Lucifer、光を帯びた者)も元々は明けの明星の神格化である”と記載されていると
おりのこととなっていることはすぐに確認がなせるところである。

アフロディテ・ヴィーナス(往古よりの金星の体現神格)のメソポタミア文明版がイナンナ・イシュタル
(太古にあつての金星の体現神格)となっているとのことのさらなる出典を挙げる。

(直下、Project Gutenberg のサイトより全文ダウンロード可能な Donald A. Mackenzie という
民俗学者の手になる MYTHS OF BABYLONIA AND ASSYRIA (1915)『バビロニア及び
アッシリアの神話』にての Chapter XIII. Astrology and Astronomy の部よりの端的なる原文
引用をなすとして)

In Babylonia all the planets were identified with great deities. Jupiter, for
instance, was Merodach, and one of the astral forms of Ishtar was Venus.

「バビロニアでは(太陽系にての既知の)全惑星は偉大とみられていた神々と対
応付けさせられていた。木星はたとえば、マルドック神と対応付けさせられ、イ
シュタルの天体にての体現物は金星(ヴィーナス)であった」

(引用部はここまでとする —※—)

(※端的な引用をなしているが、長めの原著から引用部にて呈示の通りの記載
がなされていることを即時に確認する術を紹介しておく(確認をなす・批判的視
座でもって検討しむるとの[運命]に抗う上で必要になりもしようとの知識の補

充にやぶさかではない読み手が果たして数えるほどにいるのか、このような世界にいるのかについては不分明ではあるが本稿筆者なりの節義節度の問題として確認する術を紹介しておく)。その点、Project Gutenberg のサイトなどより継続して原著公開ページが閲覧可能であり続けるようになっているのならば、すなわち、(ページの細かい URL は変化変動を見る可能性もあるかとは見るが、といった中でも) [Project Gutenberg] と [MYTHS OF BABYLONIA AND ASSYRIA] の両語句の検索エンジンの入力で易々と行き着けるとの原著公開ページが閲覧可能であり続けるのならば、そちら原著公開ページを閲覧した折に [ctrl キーおよび f キーの同時押しでブラウザ(ウェブ文書閲覧ソフト)の検索機能をオンにして] そちら検索窓に上の引用テキストの一部を入力するとやりようで[文献的事実]の有無の確認が即時になせる。また、より容易な確認方法としてはグーグル検索エンジンに直にここでの抜粋英文テキストにあつての長文センテンスを入力、そのとおりの文言を含むページが表示されてくるか確認するといった方法もある(その際には [ダブル・クォーテーション””マークで括弧の完全一致検索]をなせば該当ページがスムーズに特定なせるところである))

以上のように同じく金星に対応付けられている存在であるため(そこには愛の神との共通性もあるわけだが) [イナンナ・イシュタル]と[ローマのヴィーナス(ギリシャのアフロディテ)]は相互に結びついた存在であると論じられている存在となる。そのことを示すさらにももの出典を下に挙げておく。

(直下、Project Gutenberg のサイトよりダウンロード可能な Donald A. Mackenzie という民俗学者の手になる MYTHS OF BABYLONIA AND ASSYRIA (1915)『バビロニア及びアッシリアの神話』にての Chapter V. Myths of Tammuz and Ishtar の部よりの原文引用をなすとして)

The goddesses of classic mythology had similar reputations. Aphrodite (Venus) had many divine and mortal lovers. She links closely with Astarte and Ashtoreth (Ishtar), and reference has already been made to her relations with Adonis (Tammuz). These love deities were all as cruel as they were wayward.」

「古典古代にての女神らは似たような評されようがなされての存在であった。アフロディテ(ヴィーナス)は多くの神としての、そして、死の運命を背負った(人間であるとの)恋人らを持っていた。彼女は極めてアシュタルト・アシュトレト(イシュタル)と密接なつながりがある存在であり、そして、アドニス(タンムズ)との関係への言及がなされての存在であった。これらの愛の神々は放縦であったのと同様にむごくもの存在でもあった」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上でもってアフロディテ・ヴィーナス(ギリシャ・ローマの金星の象徴神格)とイシュタル・イナンナ(古代メソポタミアの金星の象徴神格)が結びついていることの典拠とした。

Ishtar (or Inanna)



Venus (or Aphrodite)



本段ではギリシャのアフロディテ（ローマのヴィーナス相当存在）が長らくもメセポタミア圏では古代シュメールの女神イナンナ（時代下ってのアッカド期におけるイシュタル相当存在）と同一性帯びての存在であるとの見立てがなされてきたとのことを取り立てて問題視している（：ちなみに上にてはルネサンス期の著名絵画『ヴィーナスの誕生』（ボッティチェリ作）も視覚的訴求のために挙げることにした）。

ここで振り返るが、ローマ・ギリシャの多くの女神らについて彼女ら諸々の女神らをして
[元来は一なる存在の別相]

であると看做す風が「ローマ期より」存在しているとの指摘をなしてきたのが本稿である（：ルキウス・アプレウス『黄金の驢馬(ろば)』、テキスト伝存するローマ期の小説にての記述を引き、ペルセポネやダイアナ(アルテミス)らといった女神らが [エジプトより伝来のイシス] を基軸にしての同一性存在であったとの認識があったことを本稿では先に 出典(Source)紹介の部 94(3) にて— 指摘している）。

そのような女神らの同一視風潮の中に

[ペルセポネと同一存在と受け取られているその母神デメテル（ペルセポネとの元来にての同一性指摘が穀物の成長サイクルとの兼ね合いで指摘されている穀物神）やペルセポネとの質的一致性を帯びている女神ヘカテらと [アフロディテ]（ここにて問題視しているとの惑星・金星との照応関係が古来指摘されてきたとの女神）との同一視]

とのもの「も」含まれているとのことが現実にある。

同じくものことを示す出典を (出典(Source)紹介の部 94(6) からの再引用をなすとして) 繰り返し挙げることにする。

(直下、The Golden Bough Studies in the History of Oriental Religion Part IV: Adonis Attis Osiris. Vol. 1 of 2 のうちの § 8. Cilician Goddesses [キリキア地方 (キリキアは現トルコ南部の

We may suspect that in like manner the Sarpedonian Artemis, who had a sanctuary in South-Eastern Cilicia, near the Syrian border, was really a native goddess parading in borrowed plumes. She gave oracular responses by the mouth of inspired men, or more probably of who in their moments of divine ecstasy may have been deemed incarnations of her divinity. Another even more transparently Asiatic goddess was Perasia, or Artemis Perasia, who was worshipped at Hieropolis-Castabala in Eastern Cilicia. The extensive ruins of the ancient city, now known as Bodrum, cover the slope of a hill about three-quarters of a mile to the north of the river Pyramus.

[...]

Only the wandering herdsmen encamp near the deserted city in winter and spring. The neighbourhood is treeless; yet in May magnificent fields of wheat and barley gladden the eye, and in the valleys the clover grows as high as the horses' knees. **The ambiguous nature of the goddess** who presided over this City of the Sanctuary (Hieropolis) was confessed by a puzzled worshipper, a physician named Lucius Minius Claudianus, who confided his doubts to the deity herself in some very indifferent Greek verses. He wisely left it to the goddess to say whether she was Artemis, or the Moon, or **Hecate**, or **Aphrodite**, or **Demeter**. All that we know about her is that her true name was Perasia, and that she was in the enjoyment of certain revenues.

(訳として)

「我々(注:ジェイムズ・フレイザーを含む大学研究者ら)は往時、シリアとの境界部界隈の南東キリキアにて聖域を持っていたサルペードーンのアルテミスという女神は本当のところ、

[他から借り物の羽毛を纏ったうえで存在誇示しているとの土着の女神]なのではないかとの疑いを持っていた。

(往古、)[神聖なる恍惚の瞬間]が同女神(サルペードーンのアルテミス)の神性の顕現になっていると見たとの筋目の啓示を受けての男らの口を通じ、あるいは、女らの口を通じて同女神は託宣をなしていた。

他のよりもって浸透を呈していたとのアジア(トルコ界隈)の女神は[ペラシア]という女神、[アルテミス・ペラシア]となり、彼女は東部キリキア地方にてのヒエロポリス・カstabalaにて崇拝を受けていた。(その Castabala 界隈、)ピュラモス川の北方よりおよそ4分の3マイルの丘陵部斜面を覆う格好で現在、ボドロウムとして知られる古代都市の広大な遺構が存在している。

...(中略)...

いまや流浪の牧夫らだけが春および秋にて放棄されたその都市(の遺構)に野営している。近傍には樹木とてなく、だが、五月には大麦および小麦が広大な野を覆って眼福を施し、峡谷にてはクローバーが馬の膝の部に達するまで成長する。その聖域ヒエロポリスとしての(遺構と化した)都市を統べていた女神の[曖昧多義的な性質]については困惑を呈していた崇拝者の一人、ルキウス・ミニウス・クラウディアヌスという医者 —神たる女神自体に対するものとして幾分無関心さ呈したギリシャ語の詩歌にて疑義示しているとの人物— によって打ち明けられている。同人物は賢明にも女神につき [彼女はアルテミスなのか、月(の女神)、あるいは、**ヘカテ**、あるいは**アフロディテ**あるいは**デメテル**なのか]との言を残しているのである」

(※上の再引用部では[ヘカテ][デメテル][アルテミス][アフロディテ]の一致性に関する同一性認識がローマ期の人間にあったことが記されているわけであるが、そこに見る[ヘカテ][デメテル][アルテミス][アフロディテ]のうち[ヘカテ][デメテル]は濃厚に[ペルセポネ]との結びつきを指摘できる存在となっており(本稿の先の段、[出典\(Source\)紹介の部 94](#) および [出典\(Source\)紹介の部 94\(3\)](#)を包摂する解説部にて詳述)、同文に先述なしているところとして[アルテミス(ダイアナ)とペルセポネの(渡来神イシスを介しもしての)同一性]もローマ期の小説『黄金の驢馬(ろば)』や近代人の神話研究家トマス・ブルフィンチの著作にて言及されていることである([出典\(Source\)紹介の部 94\(3\)](#) および [出典\(Source\)紹介の部 94\(6\)](#)を包摂する解説部にて言及)。それがゆえに「一古来往古にての[宗教]という懐疑主義的であることを拒否した・辞めた、あるいは、甚だしくは基本的なことからして自分で考えることを拒否した・辞めたとの向きの脳の認識のなしかたを規定する[固定化幻像の押しつけ体系]にあつて(上の『金枝篇』からの引用をもってして)[アルテミス]を介しての[アフロディテ]と[ペルセポネ]の質的連続性もが示唆されるところとなる。

まとめれば、

[デメテル(⇔ペルセポネ)とアフロディテの[一なる存在としての関係性]への言及]

[ヘカテ(⇔ペルセポネ)とアフロディテの[一なる存在としての関係性]への言及]

[アルテミス(ローマ期古典『黄金の驢馬』によれば[一なる女神としてのイシス]のペルセポネらと同様の体現存在)とアフロディテの一なる存在としての関係性への言及]

が古人に由来するところとしてなされているとの式が上の『金枝篇』よりの引用部にあっても見てとれる)

上もて

[ペルセポネとアフロディテとの間からして質的一致性の問題が観念されるところである]

とのことの出典とした。

ここまでの流れにて、である。[ペルセポネ]と[イシュタル]の間には次のような関係性が成立していること、そのことにまつわつての典拠を遺漏無くも示してきたことになる。

・[ペルセポネ]と[シュメールの女神イナンナ(アッカド名イシュタル)]は双方共に冥界下りをなした存在である。

・[ペルセポネ]と[シュメールの女神イナンナ(アッカド名イシュタル)]は双方共に[植物神としての「死と再生の神」として同一視されるだけの縁起が伴っているとの存在]を愛人化している女神らでもある(具体的には[植物神としての「死と再生の神」たるアドニスという神およびタンムズという神をそれぞれに愛人化している女神ら]として知られている「ペルセポネとイナンナは[同一の存在と見做されてもいる神ら(アドニスとタンムズ)]を愛人としている冥界下りをなした女神らでもあると記号論的には

述べられるようになってい—)。

・シュメールの女神イナンナは

[金星の体現存在]

[愛の女神]

としてギリシャ神話の「アフロディテ」という女神（そして、そのローマ版たるヴィーナスという女神）と縁起由来を一とする神であるとの言説がかなりもって昔から存在している。

また、[ペルセポネ]に関して「も」同女神が「アフロディテ」(ヴィーナス)といった女神と同一の存在である（一なる存在の別相である）との申しようが古人に由来するところとして存在している。

(長くもなつての順次段階的なる指し示しをなしての **出典(Source) 紹介の部 97** はここまでとする)

以上、ペルセポネとイナンナ・イシュタルの接合性、すなわち、

・[ペルセポネ] と [シュメールの女神イナンナ(アッカド名イシュタル)] は双方共に冥界下りをなした存在である。

・[ペルセポネ] と [シュメールの女神イナンナ(アッカド名イシュタル)] は双方共に「植物神としての「死と再生の神」として同一視されるだけの縁起が伴っているとの存在」を愛人化している女神らでもある（具体的には「植物神としての「死と再生の神」たるアドニスという神およびタンムズという神をそれぞれに愛人化している女神ら」として知られている —ペルセポネとイナンナは「同一の存在と見做されてもいる神ら(アドニスとタンムズ)」を愛人としている冥界下りをなした女神らでもあると記号論的には述べられるようになってい—)。

・シュメールの女神イナンナは

[金星の体現存在]

[愛の女神]

としてギリシャ神話の「アフロディテ」という女神（そして、そのローマ版たるヴィーナスという女神）と縁起由来を一とする神であるとの言説がかなりもって昔から存在している。

また、[ペルセポネ]に関して「も」同女神が「アフロディテ」(ヴィーナス)といった女神と同一の存在である（一なる存在の別相である）との申しようが古人に由来するところとして存在している。

とのことを指し示してきたことになるわけだが、これより

「何故もってして、そのような指し示し —ギリシャの冥界の女王ペルセポネとシュメールバビロニアのイナンナ・イシュタルの間に横たわる多重的一致性にまつわつての指し示し— をなしたのか」

の話に入る。

その点、

「イナンナ・イシュタルについては[金星の象徴化存在]として、および、その他の意味合いで[悪魔の王ルシファー]との「純・記号的」なる接合性・同一性を多重的に指摘可能な存在となっており」（典拠となる部について出典番号を込みに続く段にて[再言及]するところとなるが、それは[属人的主観が問題にならぬこと]である）

「上の伝での接合性・同一性 —[イナンナ・イシュタル⇔悪魔の王との記号論的接合性・同一性]— の環には[ペルセポネ]も関わることとなり」（直近までの指し示しもこちらの点に関わる）

「といったことと【[ペルセポネ]と[シリウス] および[シリウスBの体現存在と同定されるケルベロス]との接合性】及び【[シリウスB]と[ブラックホール理論開闢史]との接合性】及び【ヘラクレス12功業との多重的関係性を呈しているダンテ『地獄篇』、同『地獄篇』に登場するヘラクレス第12功業捕縛対象であったケルベロス状の似姿を呈するルチフェロ(ルシファー)とブラックホールの「奇怪なる」接合性】らのことを複合顧慮すると、(問題となる接合性「ら」の基本たるところは先の段までにて順序立てて解説してきたところだが、再度の振り返り表記を続けてなすとして)、【ブラックホールを環の中心に置いての多重的関係性】もが「多角的・多重的に」指し示されるようになってもいる」

とのことが問題になる。

非常に[奇矯]かつ[複雑]なる話ではありはする。だが、

「奇矯なることは真実性を否定するうえでの[必要条件]にも、況や、[十分条件]にもならぬであろう」

と断ったうえで、そして、

「複雑なる話でも要素要素に分解すれば、多くの人間に —(理解しようとする意思の力が、そも、あるのか否かがネックなのであるが)— 理解可能な呈示の仕方が可能との観点を重んじてのものが本稿である」

と述べたうえで、表記のこらについて以下、煮詰めていくこととする。

まずは

「イナンナ・イシュタルについては[金星の象徴化存在]として、および、その他の意味合いで[悪魔の王ルシファー]との「純・記号的」なる接合性・同一性を多重的に指摘可能な存在となっており」（典拠となる部について出典番号を込みに続く段にて[再言及]するところとなるが、それは[属人的主観が問題にならぬこと]である）

「上の伝での接合性・同一性 —[イナンナ・イシュタル⇔悪魔の王との記号論的接合性・同一性]— の環には[ペルセポネ]も関わることとなり」（直近までの指し示しもこちらの点に関わる）

「といったことと【「ペルセポネ」と「シリウス」および「シリウスBの体現存在と同定されるケルベロス」との接合性】及び【「シリウスB」と「ブラックホール理論開闢史」との接合性】及び【「ヘラクレス12功業との多重的關係性を呈しているダンテ『地獄篇』、同『地獄篇』に登場するヘラクレス第12功業捕縛対象であったケルベロス状の似姿を呈するルチフェロ(ルシファー)とブラックホールの「奇怪なる」接合性】らのことを複合顧慮すると、(問題となる接合性「ら」の基本たるところは先の段までにて順序立てて解説してきたところだが、再度の振り返り表記を続いてなすとして)、【ブラックホールを環の中心に置いての多重的關係性】もが「多角的・多重的に」指し示されるようになってもいる」

とのことらについて、

「イナンナ・イシュタルについては「金星の象徴化存在」として、および、その他の意味合いで「悪魔の王ルシファー」との「純・記号的」なる接合性・同一性を多重的に指摘可能な存在となっている」

とのことの指し示しをなすこととする。

(：イシュタルとルシファーの質的同一性については本稿の先の段に、**出典(Source)紹介の部 48**および**出典(Source)紹介の部 49**を包摂する部にて解説を講じてきたところである。

すなわち、「再度の」話をなすところとして、

[ルシファーは「エデンの林檎の園にての誘惑」と関わりとキリスト教教義体系上では語られている存在ではあるが(e.g.ミルトン『失樂園』に見る筋立てなど)、そうしたルシファーと結びつく存在としてイシュタルという存在がディヴァイン・パーソニフィケーション・オブ・ザ・プラネット・ヴィーナス、「金星の体現存在」にして、なおかつ、「ギリシャのアフロディテ(ヴィーナス)の質的同等物」となっていることからして問題となる(とのことがある)。ギリシャ神話の体系にあつては[トロイア崩壊と結びつく「黄金の林檎」の取得を争つての美人コンテスト]にてトロイア王子パリスに[ヘレン(トロイア戦争を引き起こした絶世の美女)]を与えたのがアフロディテ(ヴィーナス)であるとの神話・伝承上の流れが存在しているわけだが、そのように[トロイア崩壊の原因たる黄金の林檎と絶世の美女ヘレン]と結びつけられてのアフロディテ、イシュタルとの接合性が語られる女神アフロディテやりようと関わる[黄金の林檎]というのは[エデンの園の禁断の果実(林檎とも)]と記号論的に多重的に結びつくものとなっているとのことがあるからである(：[ルシファー ← (同質性) → イナンナ・イシュタル]、[イナンナ・イシュタル ← (メソポタミア神話と関連付けられての後発のギリシャ神話のありよう) → アフロディテ]、[アフロディテやりように見る黄金の林檎 ← (記号論的類似性) → ルシファー比定物たる蛇のやりように見るエデンの禁断の果実]との式での[関係性の環]が成立しているから問題になる)]

との文脈にて、である。

その点については同じくもの摘示をなしている部を振り返って確認なすのも読み手にとり手間がかかることも判断、人によってはくどくも映ろうと承知の上で「再度の」内容紹介を部分部分端折りながらなしておくこととする)

まずもって述べるが、

[イナンナ・イシュタルが[金星の体現存在]としてローマの神格ヴィーナス(ギリシャ期の美の女神アフロディテのローマ版がヴィーナスである)と接合している]

とのことについては(最前、つい先ぞの**出典(Source)紹介の部 97**にも同じくものことを入れ込んでの解説をなしていたため)繰り返す必要もないか、と思う(ので典拠紹介をそちらに譲る)。

ここでは

[イナンナ・イシュタルは[金星の象徴化存在]として、および、その他の意味合いで[悪魔の王ルシファー]との接合性・同一性を帯びている存在である]

とのことについての(再度の)指し示しを重点的になすこととする。

同じくものことに関しては

[サタンとの名前でもより広くも知られるキリスト教教義体系にあつての悪魔の王ルシファーが金星と深くも結びつけられてきたとの事情がある]

とのことより言及をなす。

(ルシファーが金星の体現存在であることは本稿の先の段でも言及なしていることではあるのだが、(確認も兼ねて)出典を下に再掲する)

(直下、Project Gutenberg のサイトにて全文公開されているとのブリタニカ百科事典第 11 版、Encyclopaedia Britannica, 11th Edition, Volume XVII, Slice 1 の LUCIFER にまつわる項目より(本稿**出典(Source)紹介の部 54**で引いていたところを)再度の原文引用をなすとして)

LUCIFER (the Latinized form of Gr. φωσφόρος, “light-bearer”), **the name given to the “morning star,” i.e. the planet Venus when it appears above the E. horizon before sunrise**, and sometimes also to the “evening star,” i.e. the same planet in the W. sky after sundown, more usually called Hesperus (q.v.). The term “day star” (so rendered in the Revised Version) was used poetically by Isaiah for the king of Babylon: “**How art thou fallen from heaven, O Lucifer, son of the morning! how art thou cut down to the ground, which didst weaken the nations**” (Is. xiv. 12, Authorized Version). The words ascribed to Christ in Luke x. 18: “**I beheld Satan as lightning fall from heaven**” (cf. Rev. ix. 1), were interpreted by the Christian Fathers as referring to the passage in Isaiah; whence, in Christian theology, Lucifer came to be regarded as the name of Satan before his fall. This idea finds its most magnificent literary expression in Milton’s Paradise Lost. In this sense the name is most commonly associated with the familiar phrase “as proud as Lucifer.”

(日本語表現に適合するように訳なしての拙訳として)

「LUCIFER とは

[φωσφόρος, [光を運ぶ者]との意のギリシャ語のラテン語表記]

となり、[明けの明星](モーニング・スター)、すなわち、

[日の出前に東の地平線の上に現われるとの金星]

に与えられての呼称、あるいは、しばしばもって、同様に金星、日没前に西の空に現われるとの[宵の明星](こちらは通例、ヘスペラスと呼ばれるところのもの「とも」なる)に与えられての呼称となっているとの語である。

同語、[デイ・スター](明けの明星)はバビロンの王によるやりようにまつわるところで(改訂訳版聖書に収録のその部にて記述されているように)旧約聖書イザヤ書にて

”**O Lucifer, son of the morning! how art thou cut down to the ground, which didst**

weaken the nations”「黎明の子、明けの明星 (Lucifer) よ、あなたは天から落ちてしまった。もろもろの国を倒した者よ、あなたは地に倒れてしまった」

と述べられているようなところの存在となり(オーサライズド・バージョン＝欽定訳聖書イザヤ書 14 章 12 節)、そうした書かれようと[ルカによる福音書]第 10 章 18 節にあつてのキリストによる言葉、

“I beheld Satan as lightning fall from heaven”「彼らに言われた、「わたしはサタンが電光のように天から落ちるのを見た」

との文言(そちらについては Rev. ix. 1 すなわち、レベレーション (Apocalypse) 『黙示録』第 9 章第 1 節をも参照のこと)との兼ね合いでキリスト教教父らに解釈されてきたところ、そして、キリスト教神学で解されてきたところとして、(同じくものルシファーという語は)

[墮天の前にあつてのサタンの名称]

へとなったとのものでもある。

この観点はミルトンの『失樂園』にて最も壮麗なる文学的表現を見ているところのものとなり、そこより同語(ルシファー)はよく知られたフレーズ、“as proud as Lucifer.” 「ルシファーよろしく高慢な」とのフレーズと巷間にて最もそうもなされているところとして関連づけられるようになったとのものである」

(訳を付しての引用部はここまでとする ー※ー)

(※その点、上にてのブリタニカ百科事典原文にて言及されている旧約聖書(『イザヤ書』)と新約聖書(『ルカによる福音書』)の日本語訳の部だけは日本聖書協会による 1954 年改訳版日本語聖書 ーオンライン上にて PDF 版が広くも流通しているとの日本語訳聖書ー の文言をそのまま利用することとしたこと、断っておく。また、「ちなみに」だが、ここにて引用元としたとの第 11 版ブリタニカ百科事典であるが、その通用性が極めて高いとのものともなり、(以下、現行にての和文ウィキペディア [ブリタニカ百科事典第 11 版]項目の記載を掻い摘まんで原文引用するところとして) “ブリタニカ百科事典第 11 版は、1910 年から 1911 年にかけて発行されたブリタニカ百科事典の 11 番目の版で、全 29 巻からなる 20 世紀初頭の知識の集大成である。製作には当時の著名な研究者や、後に有名になる執筆者が多数参加している。また、この版は現在、米国で著作権の保護期間を経過しパブリックドメインになっている ” (引用部はここまでとする) とのものとなっている)

以上のようにルシファーについてはイナンナ・イシュタル、そして、アフロディテと同様、金星の体現存在であるとされている(尚、英文 Wikipedia [Lucifer] 項目の冒頭部直下の箇所にも “ Later Christian tradition came to use the Latin word for "morning star", lucifer, as a proper name ("Lucifer") for Satan as he was before his fall. [17] As a result, "Lucifer has become a by-word for Satan in the Church and in popular literature", [3] as in Dante Alighieri's Inferno and John Milton's Paradise Lost. ” 「キリスト教伝統的解釈はラテン語にて明けの明星を指すものとして用いられていたルシファーをして地に落ちる前のサタンを指すものとして用いるようになっていた。結果、ルシファーは教会およびダンテ・アリギエーリの『地獄篇』やジョン・ミルトンの『失樂園』のような著名古典にてサタンの別称として用いられてきた」との通俗的理解が記されているとおりでである)。

さらに再度の引用を続ける。

(直下、UNIVERSITY OF NEBRASKA STUDIES IN LANGUAGE, LITERATURE AND CRITICISM Number 2 と付されての Project Gutenberg のサイトにて公開されているネブラスカ大学所属の学究 (Florence Grimm との人物) がものした ASTRONOMICAL LORE IN CHAUCER (1919) との著作、『チョーサー(カンタベリー物語の作者の 14 世紀詩人ジェフリー・チョーサー) に見る天文上の知識』とでも訳すべき著作より (出典 (Source) 紹介の部 49 にて引いていたところ

ながらも) 再度引用なすとして)

Of all the planets, that most often mentioned by Chaucer is Venus, partly, no doubt, because of her greater brilliance, but probably in the main because of her greater astrological importance; for few of Chaucer's references to Venus, or to any other planet, indeed, are without astrological significance. **Chaucer refers to Venus, in the classical manner, as Hesperus when she appears as evening star and as Lucifer when she is seen as the morning star**

(訳として)「チョーサーに言及されている全ての天体の中で最も多く言及されているのは疑いもなく[ヴィーナス](金星)であるとのことがあり、その理由については、金星の輝度の高さ、しかし、主たるところではその天文学における重要性にある(と解される)。チョーサーの[ヴィーナス](金星)への言及、そして、他の天体への言及のどれをとっても本然的に天体に重きを置いてのことなくして成り立つようなものではない。チョーサーが[ヴィーナス](金星)に言及するとき、そのやりようは古典的なところに従っており、金星が[宵の明星](イブニング・スター; 夕闇にて見受けられるとの金星似姿)として現われての折には[ヘスペロス Hesperus]として金星につき言及し、金星が[明けの明星](モーニング・スター; 明け方にて見受けられるとの金星似姿)として認められるときには[ルシファー Lucifer]と言及していた」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく —※—)

(※本稿にての**出典(Source)紹介の部 54(3)**でも解説したことはあるが、旧約聖書内のイザヤ書物 14 章 12 節以下にみとめられるくんだり —「オンライン上よりダウンロードできる」との分かりやすい章節番号が付されている邦訳版 PDF 版電子版聖書(日本聖書協会)よりも労せず確認できるとのくんだり— が[金星=ルシファー=悪魔]の典拠とされてきた件については

「天より落とされた存在としての明けの明星」(イザヤ書物 14 章 12 節)

「陰府(よみ)に落とされ穴の奥底に入れられた存在」(イザヤ書 14 章 15 節)

「国々を動かし世界を荒野のようにし、その都市を壊し、捕らえた者たちを解き帰さなかった存在」(イザヤ書 14 章 16 節—17 節)

「つるぎで殺され存在に覆われ踏みつけられた死体のように穴に下る存在」(イザヤ書 14 章 19 節)

との表記がそこにて認められるからである。

バビロンの暴虐とされるものの絡みでその部しか —有名どころとして— 聖書それ自体の中では[明けの明星(金星)]を悪魔の中枢存在たるサタンと比定する上での論拠となるところがないとのことになっているとされているのだが(そうした中で現実にキリスト教会はルシファーこと明けの明星を悪魔の王としてきたとの経緯がある)、そちら『イザヤ書』該当部については中近東の異教神(旧約聖書を奉じていた一神教たるユダヤ教からみたうえでの異教神)たる[アッタル]という神(ウガリットの明けの明星と結びつく神)を指すのではないかとの理解「も」なされており、和文ウィキペディア転じて同様に誰でもオンライン上より即時確認できるとの英文 Wikipedia[Lucifer]項目にあつてはそちら方向での理解に基づいての記載がなされている —原文引用をなせば英文 Wikipedia[Lucifer]項目にて Mythology behind Isaiah 14:12[イザヤ書 14 章 12 節の背景にある神話]と振られた節にあつての “ In ancient Canaanite mythology, the morning star is pictured as a god, Attar, who attempted to occupy the throne of Ba'al and, finding he was unable to do so, descended and ruled the underworld. ” 「古代カナン地方神話にあつて明けの明星はアッタルという神、バアルの玉座を奪おうとして、それが出来ぬことがわかって、冥界

に下り、そこを統治したとの神と結びつけられている」との言及がなされているところである——)

以上をもって悪魔の王ルシファーが

[惑星の金星と関係する存在]

となっていることへの(再度の)典拠紹介となしたが、

[続けて摘示するところの観点]

よりそうした悪魔の王ルシファーがイシュタルらと結びついていると述べられもするところとなっている。

さて、ここでの指し示し事項、すなわちもってして、

「イナンナ・イシュタルについては[金星の象徴化存在]として、および、その他の意味合いで[悪魔の王ルシファー]との「純・記号的」なる接合性・同一性を多重的に指摘可能な存在となっている」

とのことに関わるところとして本稿では以下、枠内にて表記の通りのことを示すべくもの説明をなしていたとの事前経緯がありもする。

(既に本稿にての従前の段で典拠を指し示してきたところながらも繰り返し言及するところとして)

・【[明けの明星＝金星]が星天にて辿る経路を[墮天(冥界落ち)した悪魔の王]および[冥界下りの女神](イシュタル)の両者と結びつけて解説を試みる】との論調の申しようが「常識論の世界にて」存在しているとのことがある（：英文 Wikipedia [Lucifer] 項目にての Mythology behind Isaiah 14:12 [イザヤ書 14 章 12 節の背後にある神話]との部よりの現行にあつての記述 — (易変性伴つての媒体性質より改訂を見るかもしれないが、「現行にあつての」記述) — の原文引用をなせば、“**In ancient Canaanite mythology, the morning star is pictured as a god, Attar, who attempted to occupy the throne of Ba'al and, finding he was unable to do so, descended and ruled the underworld. The original myth may have been about a lesser god Helel trying to dethrone the Canaanite high god El who lived on a mountain to the north. Hermann Gunkel's reconstruction of the myth told of a mighty warrior called Helal, whose ambition it was to ascend higher than all the other stellar divinities, but who had to descend to the depths; it thus portrayed as a battle the process by which the bright morning star fails to reach the highest point in the sky before being faded out by the rising sun. Similarities have been noted with the East Semitic story of Ishtar's or Inanna's descent into the underworld, Ishtar and Inanna being associated with the planet Venus.**” (細かくも補いながらもの訳として)「古代カナン地方神話にあつて[明けの明星]はアツタルという神、(有力神たる)バアルの玉座を奪おうとして、それが出来ぬことがわかって、冥界に下り、そこを統治したとの神と結びつけられている。その原初となる神話は劣位の神 Helel が北面の山に住まっていたカナン人の高位の神 El(エル)を王位から引き下ろそうと試みていたとのものであるのかもしれない。ヘルマン・グンケル (訳注:19 世紀末尾から 20 世紀前半にかけて著述活動なしていたとのドイツの旧約聖書学者 / 和文ウィキペディア「にも」現行、一項設けられているとの向きで[中近東の古代信仰と聖書の連続性]を問題視していたことで知られる学究) によつての神話の再構成

は「他の主要な神々よりも上位の存在を越えようとしたこと、しかし、冥界に下らざるをえなかったとの Helal と呼ばれる万能の戦士神」について語っている（訳注：中近東地方にて発生したのがヤハウエと呼ばれる唯一神を崇めるユダヤ教であるが、そのユダヤ教および陸続きの唯一神信仰たる唯一神に抗い「墮天」した存在が後の悪魔の王ルシファーであるとの設定がキリスト教体系にて採用されていること、そうしたことがここにて引き合いに出されているヘルマン・グンケル申しようの背後にある）。それは光輝く明けの明星（金星）が空にあっての最高地点に達しようとする中で昇り行く太陽に霞み、視界よりの消滅なさしめられる（フェード・アウトする）前に失敗を見ることを「闘い」として描いたとのものである（ように解される）。イシュタルおよびイナンナは惑星の金星に関係付けられる神格なのであるから、一貫性問題は東部セム系に伝わるイシュタルまたはイナンナの冥界下り（訳注：ルシファーが墮天して地獄に下ったことを意識させるとの書きようとなる）に関する注目させられようとのことになる（訳注：ここにては現行、注記番号[36]と振られており、申しようの出典として Marvin Alan Sweeney, (1996). Isaiah 1-39. Eerdmans. p. 238.との著作が紹介されている）」（訳を付しての引用部はここまでとする）。以上長々と引用のようにイシュタルとルシファーの接続性を問題視する見方も存在する）。

・（先の出典(Source)紹介の部 61で既に取り上げてきたところとして）中米にて「ケツアルコアトル」という神格が崇められていたとのことがある。同ケツアルコアトルは「人類に文明を授けた羽毛の生えた蛇にして「金星の」体現存在」との側面を持つ存在としてアステカ文明の成員らの元への帰還が待望されていたとの存在である。そして、同ケツアルコアトル、冥界に「双子の兄弟たる神ショロトル」を持つ存在であると語り継がれている。

他面、古代メソポタミアの冥界下りをなしたイナンナ・イシュタルは「金星の体現存在としての神格」にして「冥界に双子の姉妹エレシュキガル」を持つ存在であると語り継がれている（先にての出典紹介部、出典(Source)紹介の部 61にて解説しているようにエレシュキガルについては単にイナンナ・イシュタルの姉妹であると紹介されることもあるが、他面、ブリタニカ百科事典などの言及を引いているように、【カウンターパート】と表現されもしてきた、一対となるプラス・マイナスの双子の如き存在であると表現されもしてきた存在でもある）。

従って、「ケツアルコアトル」と「イナンナ」は「金星の体現存在にして冥界に双子の血族を持つ存在」との際立っての側面を共有しているとのことがある。

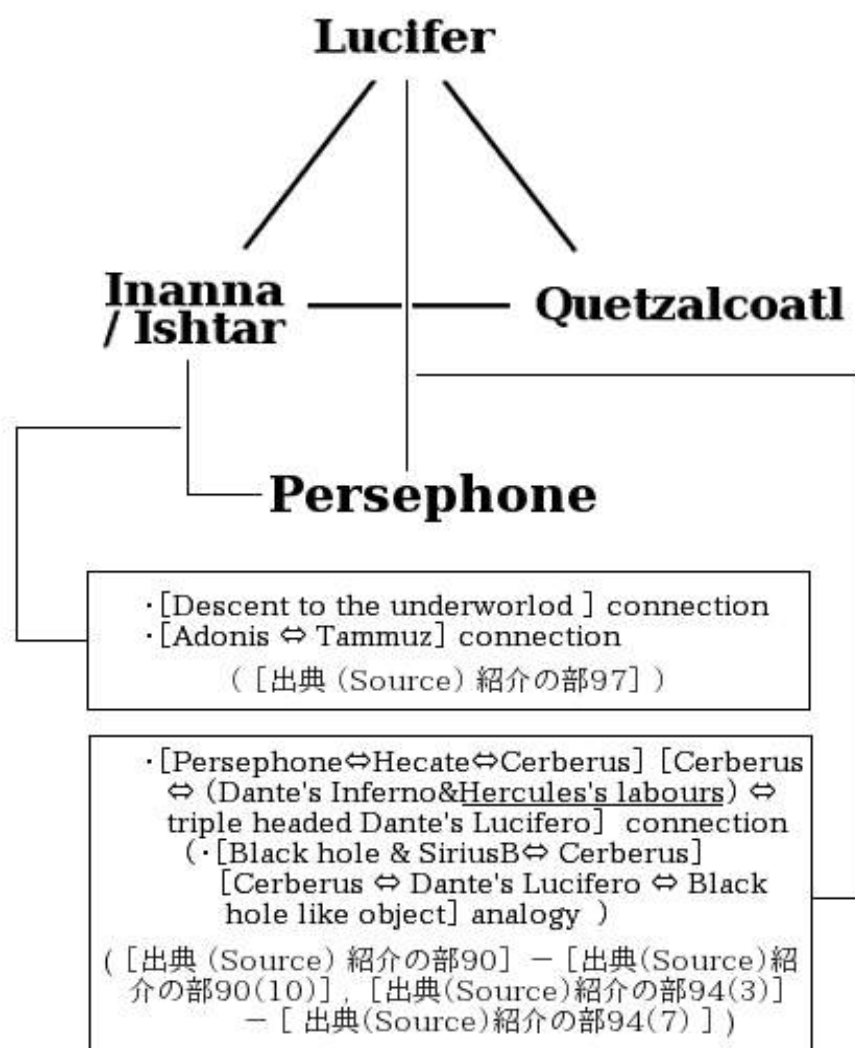
・上述のケツアルコアトルに関しては（既に先立っての段、本稿にての出典(Source)紹介の部 53から出典(Source)紹介の部 53(4)を包摂する段で述べていたところとして）次のような観点で「悪魔の王サタンにも比定されるエデンの誘惑の蛇」と類似性を帯びている存在である。

⇒

「金星」と深くも結びつくルシファーことサタンが「人類にエデンで知恵の実（を食す機会）を与えた蛇」とキリスト教教義体系にて結びつけられる存在であるのに対して、（イナンナと結びつく素地ありの）ケツアルコアトルは「人類に文明を授けた羽毛の生えた蛇」とされている。

また、そのケツアルコアトルがアステカの地に帰還すると予言なされていた年 1519 年に（それが果たして「予言通りの年」であったのか論が分かれたるところでもあるのだが）新大陸の征服事業の一環としてアステカに到達したスペイン人侵略者らをしてアステカ人がケツアルコアトルが帰還したと誤信、もって、スペインから持ち込まれた天然痘ウイルスによって現地人口の圧倒

的縮減がなされる中でアステカが侵略されていったとのことが世界史上の一エピソードとして見受けられるとのこと「も」サタンとの類似性の絡みで問題になる。 というのも、アステカが滅ぼされたのは16世紀頃であるが、それよりも遙か昔に成立したことになる新約聖書の末尾にあってのヨハネの黙示録では「蛇たるサタンが衆をたばかり地獄に道連れにするとの筋立て」が採用され、また、同じくものヨハネの黙示録では獣と龍による破滅の前の先触れの段にて「黙示録の四騎士」と結びつく「戦乱・疫病」が地上の人間に苦しみをもたらすとの「設定」もが採用されており、そこからして「ケツァルコアトル信仰」と「聖書を基軸に見てのサタンありよう」の間の目立っての類似性の問題が当然に観念されるようになってきているからである ——※[中米での歴史的出来事]（【[金星の体現存在]にして[文明の恩人たる蛇]の帰還に「騙された」文明が「疫病と[戦乱]で滅亡を見たとの出来事】）と「聖書の黙示録の筋立て」（【[金星と結びつくルシファー]を別名とする[エデンの園で知恵を授けた蛇と同一視される存在]の望むべからざる来臨と同存在への「欺瞞に満ちた崇拜」のために文明が「疫病」と「戦乱」の内に絶滅を見るとの筋立て】）が「文献的事実」と「歴史的事実」の接近との観点での一致性を帯びているとのことがある——。



さて、ここまでにて論拠を呈示しながら次のような関係性の環が「何の無理もなく」描けることの訴求に注力なしてきた(ことにもなる)。

イナンナ・イシュタル ⇔ (金星の体現存在／冥界に双子の神を持つ存在) ⇔ ケツアルコアトル

ケツアルコアトル ⇔ (金星の体現存在／文明の授け手／蛇と結びつく存在・期待を裏切って会衆に破滅をもたらす存在) ⇔ ルシファー・サタン

ルシファー・サタン ⇔ (冥界(地獄)下りの存在／金星の(軌道の)体現存在) ⇔ イナンナ・イシュタル(⇔ケツアルコアトル(回帰))

以上のような関係性、[ルシファー]と[イナンナ]が(純・記号論的に)多重的に結びつくとのことにまつわっての「具象論に依拠しての」話をなした上で強調するが、さらに「別方向から」加えもしてのこととして、

[イナンナ・イシュタル] ⇔ [アフロディテと同一視される存在]

[アフロディテによる黄金の林檎を巡っての計略が奏功したパリスの審判] ⇔ (記号論的一致性が多重的に存在) ⇔ [エデンの園の誘惑]

[エデンの園の誘惑] ⇔ [ルシファー(サタン)による[失樂園]誘発のプロセスとする見方の通念化]

とのこと「も」が成り立つとの意味で多くのことが、あまりにも多くのことが接合してしまうとのことがある—※—。

※ここでは、(くどいとは承知の上にてであるが)、

[[シュメール神話・アッカド神話のイナンナ・イシュタル]が[ギリシャ・ローマ神話のアフロディテ・ヴィーナス]と同一視されるだけの所以(ゆえん)があること]

[(イナンナ・イシュタルと同一視される)アフロディテが関与しての黄金の林檎を巡っての籠絡(絶世の美女を取引の具にしての工作)のありようが(サタンに比定される存在による)エデンの誘惑プロセスと多重的類似性を呈していること]

の各点について振り返っての説明をなしておく。

まずもってして

[[シュメール神話・アッカド神話のイナンナ・イシュタル]が[ギリシャ・ローマ神話のアフロディテ・ヴィーナス]と同一視されるだけの所以(ゆえん)があること]

についてであるが、(出典(Source)紹介の部 61(2))にも解説していたようなところとして、次のように文献上の典拠が見出せるようになっている。

(直下、ヘブライ語文献学にあつての学究として前世紀に令名を馳せていたとのスタンリー・アーサー・クックという学究の手になる著作、Project Gutenberg のサイトにて全文ダウンロード可能であるとの THE RELIGION OF ANCIENT PALESTINE (1908)にての CHAPTER VII THE PANTHEON よりの「再度の」原文引用をなすとして)

The phonetic equivalent of Ishtar in old Arabia was a god (so perhaps also in Moab, ninth century), and **Ishtar herself appears in Assyria with a beard and is likened**

to the god Ashur, thus finding a later parallel in the bearded Aphrodite (Astarte, Venus) of Cyprus.

(拙訳として)

「古代アラビア界隈(メソポタミア)にてのイシュタル、その発音に即しての同等物はモアブ地方の前9世紀にての神となり、同イシュタルはアッシリアにてあごひげをたくわえた姿でアッシュール神と結びつくかたちで現われもし、そして、「あごひげをたくわえたキュプロスのアフロディテ」(アスタルテないしヴィーナス)との相似形を後に見出せることとなった存在でもある」

(引用部に対する訳はここまでとする)

上にての専門の学者解説よりの引用にてお分かりいただけようかと思うが、[イシュタル(イナンナ同等物)]と[アフロディテ(ヴィーナス同等物)]は歴年、学者らによって同一視されるべき存在であるとの見方が提示されてきた女神らとなっている——※(これまた本稿の先にての**出典(Source)紹介の部61(2)**の内容を繰り返しての話とはなるが)古代宗教に詳しく見巧者にあつてはイシュタルといった女神に関しての話となると[巫娼]、すなわち、[聖域で春をひさぐことを強いられての神殿娼婦ら]にまつわる淫風と結びつく妖しく淫らな女神という印象を強くも受けることもあるかとは思われるのだが、さらに事情に詳しく専門家の類にはイシュタルやアフロディテはバイ・セクシャル的な存在とも見られているようなのである。直上にての引用部に見るように[あごひげをたくわえたイシュタル]や[あごひげをたくわえたアルロディテ]の像が存在していることがその理由となる(につき、ギリシャ・アフロディテの同等物たるローマ・ヴィーナスに関わるところとして英文 Wikipedia[Venus Barbata]項目にあつて “ Venus Barbata ('Bearded Venus') was a surname of the goddess Venus among the Romans. Macrobius also mentions a statue of Venus in Cyprus, representing the goddess with a beard, in female attire, but resembling in her whole figure that of a man (see also Aphroditos). ” 「あごひげを生やしたヴィーナスを意味する Venus Barbata はローマ人の間にてのヴィーナスの名となっている。マクロビウス(訳注:ローマのサトゥルナリア祭に材をとった作品を遺していることで知られる5世紀初期に生きた文人)が言及しているところとして[キュプロス島にてのヴィーナス](訳注:直前にてそこよりの引用をなした THE RELIGION OF ANCIENT PALESTINE (1908)で言及されている存在)はあごひげをもった女神としての姿を呈しており、女の服装なしている中で全体として男としての似姿を呈していたとされる」(引用部はここまでとしておく)——。

とにかくも諸種背景があつてであろう、一般論として[イシュタル(イナンナ)とアフロディテ(ヴィーナス)は同一の由来に帰着する存在である]と見られている(アフロディテにまつわる英文 Wikipedia[Aphrodite]項目にて “ In native Greek tradition, the planet had two names, Hesperos as the evening star and Eosphoros as the morning star. The Greeks adopted the identification of the morning and the evening stars, as well as its identification as Ishtar/Aphrodite, during the 4th century BC, along with other items of Babylonian astrology, such as the zodiac (Eudoxus of Cnidus). ” 「ギリシャにあつての本来の伝統にあつてはその星(金星のこ)は二つの名を持っていた、すなわち、宵の明星としての Hesperos と明けの明星としての Eosphoros である。ギリシャ人らは紀元前4世紀のバビロニア占星術、たとえば、エウドクソスの黄道十二宮概念のようなものらの他事項を傍目にイシュタル(バビロニアの女神)／アフロディテに対するのと同様に明けの明星と宵の明星の意味付けをなした」(再度の引用部はここまでとする)と表記されているように、である)。

(ここまでを[イナンナ(イシュタル)とアフロディテ(ヴィーナス)の一致性]にまつわるところとして振り返っての話とする)

また、

[(イナンナ・イシュタルと同一視される)アフロディテが関与しての黄金の林檎を巡っての籠絡(絶世の美女を取引の具にしての工作)のありようがエデンの園の

誘惑プロセスと多重的類似性を呈していること]

については下のようなかたちで振り返り表記を(実にもってしてくども)なしておく。

([パリスの審判]というものが[古の都市トロイアの崩壊の原因]となっていること、そして、そちら[パリスの審判]の中身が[最高の美神の証とされるに至っていた][黄金の林檎を巡っての女神らの譚い(一種の神々の美人コンテスト)に審判役としてかかづらわされることになったパリス(トロイア皇子)が[絶世の美女](ギリシャ有力諸侯の人妻ヘレン)を得ることを条件に女神らの一柱、アフロディテに[黄金の林檎]を渡して同女神を最高の美神と認定することとした]とのものであった — **出典(Source)紹介の部 39**にて事細かに出典紹介挙げながら解説しているようにそうしたものであった— とのことを前提に、以下、前前の内容を振り返るとして)

1.

トロイアは[黄金の林檎]が[取引の具]にされてのパリスの審判が原因になって崩壊することとなった。他面、エデンでは[ときに林檎と定置されての禁断の果実]が[取引の具]にされて人間が墮落を見る、キリスト教ドグマに見る[原罪]を負うことになった。につき、双方、[林檎との特質を具備したものに起因する悲劇的・破滅的結末]とのことで共通性がみとめられる(聖書それ自体にはエデンにて用いられたフォウビドゥン・フルーツ、そちらが林檎であると明言しての言及はなされていないわけであるも、古典内記述を含めてそれがいかように林檎と欧州にて定置されてきたのかも本稿では仔細に典拠紹介している)。

2.

パリスの審判の黄金の林檎を巡っての誘惑のプロセスは[女難]を[誘惑された者]に与えたものとなる(トロイア皇子パリスは黄金の林檎を巡る争いにおいて審判役として任じられた折に絶世の美女、ファム・ファタールと表されもするヘレン獲得を取引の具に持ち出され、彼がその取引に応じたために、結果的にヘレンの夫およびその兄アガメムノンの召集に応じてのギリシャ連合軍のトロイア遠征がはじまることになる)。他面、エデンの園の誘惑も[女難]を[誘惑された者]に与えたものとなる。蛇がアダムの妻のイヴの方から先だつて籠絡し、梃子(てこ)に使われたとの格好でファム・ファタールとも評される女、イヴの誘いに応じてアダムの方も知恵の樹の実を食して結果的にアダム・イヴ双方共々楽園追放の憂き目に遭うことになったとの[設定]が採用されているわけである。

3.

黄金の林檎を巡っての誘惑のプロセス(トロイア崩壊につながったパリスの審判にて表出を見た誘惑のプロセス)は[惑星の金星の体現神格]としてのアフロディテ(ローマ神話におけるヴィーナス)によってもたらされたものとなっている。他面、エデンの誘惑の果実を用いた蛇の正体が[サタン]本体であるとする見解(旧約聖書にはその旨、明言されていないが、欧州にて歴年呈されてきたし、ミルトン『失楽園』にその最たるところが見出されるとの見解)を容れるとサタンという存在が別名ルシファーとなっているとのこと、また、ルシファーという名称が[明けの明星]としての金星と密接に結びついていることより、エデンの誘惑のプロセスも(パリスの審判同様)[金星の体現存在]によってもたらされたものとなっていると述べられる。

4.

(パリスの審判それ自体を巡る話から多少離れるも、のどころとして)黄金の林檎はヘラクレス第11功業にて登場を見るものでもある。そちらヘラクレス第11功業にて黄金の林檎を管掌しているとされるのはヘスペリデスという存在だが、彼女達はその係累の問題も含めて「宵の明星」としての金星と強くも結びつくとされる存在である(金星と結びつく存在が管掌をなしているとの林檎)。他面、エデンで「林檎」と定置されるもする禁断の果実を誘惑の具とした蛇はそれをサタンの体現存在と見ると、サタン⇒ルシファー⇒明けの明星⇒金星との観点で金星と結びつくことになる(直上の3.の繰り返し)。黄金の林檎を巡るやりとりでパリスにヘレンの提供を提案したアフロディテが金星と強くも結びつく神格であることを脇に置いたうえでも、黄金の林檎は(ヘスペリデスという存在を介し「も」して)金星と結びつく素地があり、その伝でルシファー(明けの明星⇒金星)が用いたともされるエデンの禁断の果実と接合するものでもある。

5.

(パリスの審判それ自体を巡る話から多少離れるも、のどころとして)ヘラクレス11功業では黄金の林檎を守護する怪物として「100の頭を持つ爬虫類」としてのラドンという存在(童とされるが、ギリシャ神話の童は半ば蛇のようなものでもあると本稿の先の段で細かくも解説している存在)が配されているとの伝承の伝わりようがなされているが、エデンの誘惑も爬虫類、の中の、蛇とつながっている。

6.

「黄金の林檎の園」は実際に欧州学究や芸術家によって「エデンの園」に仮託されてきたものともなっている(ルネサンス期画家ルーカス・クラナッハ・ジ・エルダーの画に見る視覚的ありようや近代の権威筋の学究たるアレクサンダー・ムーレイのその著作での申しようを引きあいに出しての本稿にての**出典**(Source)紹介の部51の内容を参照のこと)。一致性にまつわる申しようとしては「黄金の林檎の園」も「エデンの園」も双方共に「不死とつながる食物が(林檎と関わるようなかたちで)存在する場」「失われた理想郷としての場」であるとのことが引き合いに出されたりもしているが、(以上の1.から5.の関係性を念頭に置いても)、そうした受け取り方には無理がないと解されもするところである。

以上のようなかたちで

〔(イナンナ・イシュタルと同一視される)アフロディテが関与しての黄金の林檎を巡っての籠絡(女を取引の具にしての工作)のありようがエデンの園の誘惑プロセスと多重的類似性を呈している〕

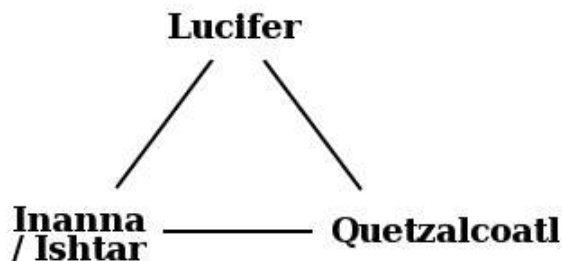
とのことが摘示できるようにもなっている。

さらにここまで表記してきた際立つての多重的关系性 —イナンナ(イシュタル)・アフロディテ・ケツアルコアトル・ルシファー(エデンの蛇)らにまつわっての多重的关系性— にまつわる図解部を下に設けておくこととする。

(直上まで表記の部にて示してきた多重的关系性にまつわっての図解部として)

先行する段ではイナンナ・ケツアルコアトル・ルシファーの間にあつての関係性の環を摘示してきた。簡略表記すると次のように図示できるとのかたちにて、である。

Inanna / Ishtar	⇔	Lucifer
Inanna / Ishtar	⇔	Quetzalcoatl
Quetzalcoatl	⇔	Lucifer



さて、本稿にての**出典 (Source) 紹介の部 52**ではフランシス・ベーコンという歴史上の人物(フランシス・ベーコンは同じくもの出典紹介部**出典 (Source) 紹介の部 52**にて評価のなされようも紹介しているように世界史上、極めて有名な英国の思想家にして文明のプロモーターとされる人物となる)がアメリカ大陸をして

[アトランティス] (ニュー・アトランティスに対する大アトランティス)

である、そのようにその著作『ニュー・アトランティス』で定義しているとのことを同著作『ニュー・アトランティス』そのものからの長くもの原文引用をなしつつ示しもしていた。

(ベーコン著書『ニュー・アトランティス』表紙)

NEVV
ATLANTIS.
 A VVorke vnfinished.

VVritten by the Right Honourable, FRANCIS
Lord Verulam, Viscount St. Alban.



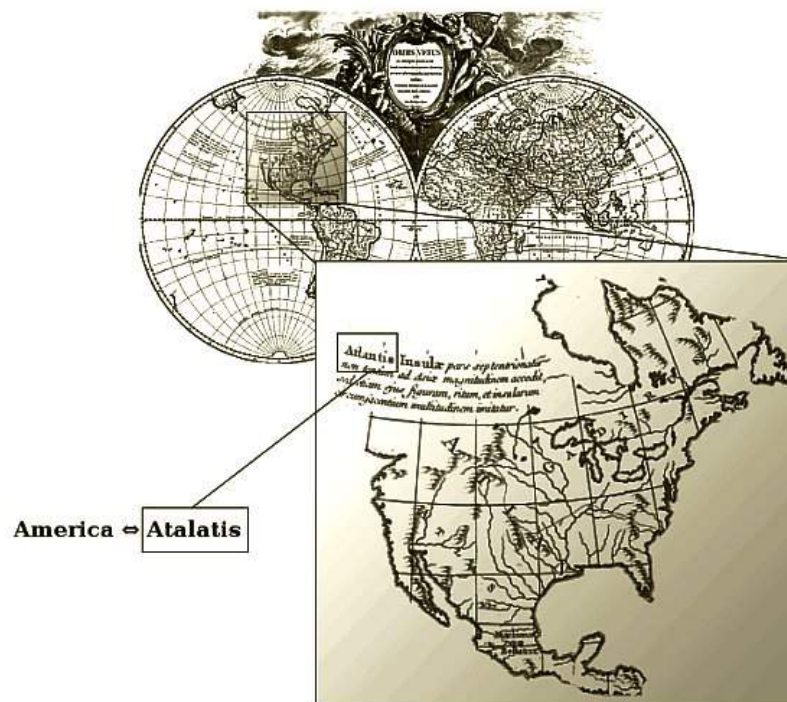
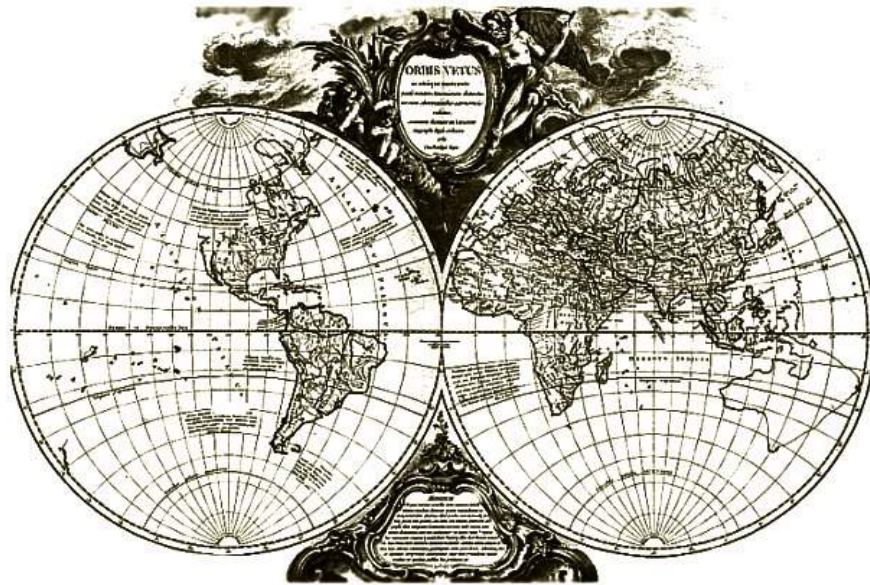
フランシス・ベーコンがアメリカ大陸をして「アトランティス」と定置していたのは(**出典**)

(Source) 紹介の部 36にてプラトン古典『ティマイオス』の書かれようを原文引用なしつつ呈示しているように)アトランティスが

[[ヘラクレスの柱] (ジブラルタル海峡／地中海と大西洋を分かち海峡)の先に控える、リビュアとアジアを合わせたよりも大きな島(“ there was an island situated in front of the straits which are by you called the Pillars of Heracles; the island was larger than Libya and Asia put together ”)]

と伝わっている、そこから、欧州人に新大陸などと呼び慣わされていたアメリカ大陸がアトランティスに対する定義付けとある程度合致していることも影響しているように当然に受け取れるようになっている(そうもした解釈が成り立つ中で下にて呈示の Gilles Robert de Vaugondy との 18 世紀作成の地図にてもアメリカ大陸がアトランティスとのかたちで形容されている)。

Robert de Vaugondy's map of the world



以上のようにプラトン古典に見る地理関係上の問題もあってアメリカと同一視されるところが

あったのであろうと単純には想起されもするアトランティスについては

[黄金の林檎の園と同一物]

であると述べられるような存在「とも」になっていた。

というのも、

「[巨人アトラスの娘らが [アトランティス] とも呼称される中で」(アトラスの娘らは複数形では **Atlantides**、単数形では **Atlantis** と呼称される存在であるとされる — **出典(Source) 紹介の部 40** —)、アトランティスら、[巨人アトラスの一群の娘] らの中に黄金の林檎を管掌するとの娘らヘスペリデスが含まれていること、彼女らヘスペリデスの [黄金の林檎の果樹園] が (欧州人から見ての西の彼方とも言うべきアメリカのことを想起させるように) 大洋の彼方にあつたと伝わっていることからアメリカとアトランティス (アトラスの娘ら⇔アトランティス⇔古の陸塊) との想起がなされるようなところがあつた

のである (例示を **出典(Source) 紹介の部 41** にてなしている)。

そして、アトランティスと同一視されもしていた [黄金の林檎の園] に関しては [エデンの園] と同一となっているとの申しようがしばしば欧州識者層によってなされてきた (**出典(Source) 紹介の部 51**)。ひとつにそのことにはエデンの園が [不死に関わる(失われた)楽園と伝わっている] [禁断の果実が林檎と結びつけられてきた] といった事情があると考えられる中で、である。

以上のようなこと — [アメリカとしてのアトランティス] と [黄金の林檎の園] および [エデンの園] の接合 — をここまで同存在にまつわる関係性について摘示に努めてきた [ケツアルコアトル] (コロンブス、そして、スペイン勢力到達前、歴年、アメリカ大陸にて崇められてきた蛇の神) のことまで複合顧慮のうえで見ると次の関係図に見るが如きことが摘示できるようになって「も」いることになる。

フランシス・ベーコンの著作ではアメリカはグレート・アトランティスと呼称されている

Atlantis ⇔ America

[太平洋に浮かぶ広大な陸地] と伝わるアトランティスは [アトラスの娘ら] に管掌される [西の果てにあつての果樹園] たる [黄金の林檎の園] と同一視されることがある

**Atlantis ⇔ the garden of
the golden apple**

黄金の林檎の園はエデンの園とも同一視されることがあつた場所となる

**the garden of the golden apple
⇔ the garden of Eden**

Serpent deities of Aztec

(Mesoamerican civilization)

黄金の林檎の園とアト
ランティスが接合する
とのことを示すのにも

Francis Bacon's
New Atlantis

力点
を置
Great Atlantis civilization

きもしてきたのが本稿
である。

the garden of Hesperides
& Golden Apple



Coatlicue (Teoyamiqui)

フランシス・ベーコンの古典において大アトランティスであるとされているアメリカで栄えたアステカ文明、そこでは蛇の神々が崇められていた（左上図は大地母神コアトリクエの発掘彫像の模写、右上はコアトリクエの息子、主要神ケツアルコアトルの古写本内似姿）



Quetzalcoatl



Milton's Lucifer (Satan)



the morning star
Planet Venus

黄金の林檎の園と同一視されることもあるエデンの園、その場にての誘惑を奏功させたサタンは

[知の接受者（善悪の樹の実を食べさせての知の接受者）] / [人類を裏切って破滅にいざなった存在（エデンでの策略、および、黙示録の描写）] / [蛇としての似姿を持つ存在] / [金星の体現存在（ルシファーとしての側面）]

としての特性を持つ存在である。

他面、黄金の林檎の園と同一視する視点があるアトランティス、その場にも比定されてきたアメリカ大陸での崇拝対象であったケツアルコアトルは

[知の接受者（文明発達の恩人としての神）] / [信徒を裏切って破滅にいざなった存在（ケツアルコアトルの再臨をスペイン征服者に見たアステカ帝国の破滅のプロセス）] / [蛇としての似姿を持つ存在] / [金星の体現存在]

としての特性を同様に持つ存在である（⇒ 文献的根拠の指し示し箇所としては本稿にての [出典 (Source) 紹介の部53] から [出典 (Source) 紹介の部53 (4)] を包摂する解説部、そして、 [出典 (Source) 紹介の部54] から [出典 (Source) 紹介の部54 (4)] を包摂する解説部を参照のこと）。



Quetzalcoatl

Aphrodite

Inanna (Ishtar)

being the divine personification of the planet Venus
 having the counterpart (twin) in the netherworld

ケツアルコアトル、そのアステカ文明崇拝神格と
 [ギリシャのアフロディテ (ローマのヴィーナス) との質的同質性が歴年取り沙汰されてきたところのシュメールのイナンナ (アッカドのイシュタル)]
 の間にあつては
 「双方共に金星の神格化存在である」
 「(顕著な側面として)双方共に冥界に双子の片割れを持っているとの存在である」
 との一致性が存在している。

訴求したきところはお分かりのことか、とは思う。(ひとつひとつの関連性は薄いものでも複数関係性がひとところに結線しすぎるとの意で問題になるとの)[意味的連結の多重性の問題]として[黄金の林檎]と[エデンの林檎]と[ルシファー]で話がつながりすぎるとのことを問題視しているのである。

(図解部はここまでとしておく)

さて、ここまでもってして

「いかようにもってしてルシファーとイナンナ・イシュタル(そしてケツアルコアトル)の関係性が尋常一様ならざる関係性の環を描いているのか」

の指摘を(本稿の従前内容を[整理]するとかたちで)なしてきたわけだが、同じくもの話の流れに加

えて、

[イナンナ・イシュタルとペルセポネの間の関係性] (先立って委細を解説してきたところの多重関係性)

「をも」複合顧慮するとよりもって尋常一様ならざる関係性の「環」の存在が眼前に立ち現れてくる、しかも、ブラックホール (の類似物) 具現化にまつわるところでそうもなっているとのことが「ある」。

以降、同じくものことについて —不快でならないとの話ではあるが— 万事万端遺漏無くにももの詳解を講じていくことにする。

ここで (これまたくどくも、の) 振り返り表記をなしておくが、(指し示し要素選択以外に主観の問題は介在しないところとして)、[イナンナ・イシュタルとペルセポネの間] には次のような関係性が成立していることを本稿では既に呈示している。

[ペルセポネもイナンナ・イシュタルも冥界下りをなした女神である] (出典 (Source) 紹介の部 91、出典 (Source) 紹介の部 97)

[古代中近東のドゥムジ神とその質的同等物タンムズ神は「冥界下りをなした」イナンナ・イシュタルの愛人としての神である。他面、ドゥムジ・タンムズと起源を同一とすると指摘されているアドニス、植物の死と再生のサイクルを体現しての同神はペルセポネの愛人としての神である。そうもしてイナンナ・イシュタルとペルセポネは双方質的同一存在を愛人としている (さらに述べれば、彼女らのその愛人は女神らのやりように応じて非業の死を遂げてもいる)] (出典 (Source) 紹介の部 97)

[アフロディテ —アドニス神をペルセポネと「共に」愛人としていた神— はイナンナ・イシュタル —アドニス同等物とされるドゥムジ・タンムズ神を愛人としていた存在— と [金星の体現神格] にして [愛の女神] としての側面から結びついているとの指摘が学者らによってなされてきた存在である。そして、アドニスをペルセポネと「共に」愛人を共有していたと伝わる同アフロディテ (ヴィーナス) については [ペルセポネら複数女神の一なる相としての女神] と看做されての申されようを古代人になされていた存在ともなる] (出典 (Source) 紹介の部 94 (6) の内容を振り返っての 出典 (Source) 紹介の部 97)

以上、振り返りもして表記のことらから、最前、振り返って解説してきた、

[ルシファー ⇔ (多重関係性の成立) ⇔ イナンナ・イシュタル]

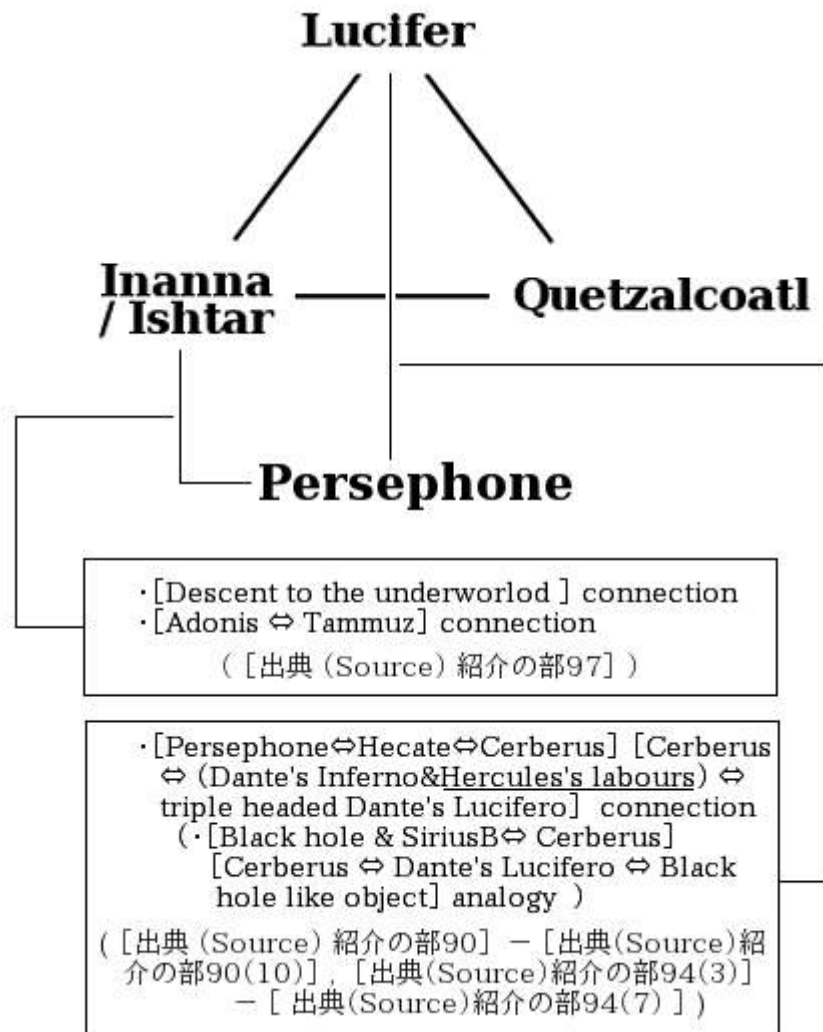
とのことと、

[イナンナ・イシュタル ⇔ (質的同質性の問題が介在) ⇔ ペルセポネ]

とのことがあわせて述べられもするわけではあるが、

[全くの別方向、他の側面にあってよりペルセポネとルシファーとの間に [奇怪なる接合性] が見出せるようになっている]

とのことを本稿筆者は非常に重んじている (続いての解説部をご覧戴きたい)。



その点、ペルセポネとルシファーにあっての[奇怪なる接合性]については

[ペルセポネの [ペルセポネと同一視される女神ヘカテ] を介してのケルベロス — 黄金の林檎取得がヘラクレスの第 11 番目の功業の目標であったのに対してその捕縛および地上引きづり出しがヘラクレスの第 12 番目の功業の目標となっているとの三面の地獄の犬 — との連続性] (典拠: [出典 \(Source\) 紹介の部 94 \(3\)](#) から [出典 \(Source\) 紹介の部 94 \(7\)](#) を包摂する解説部)

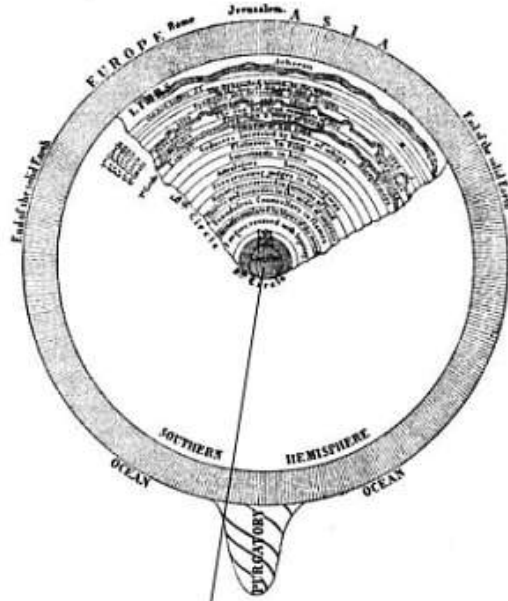
[ダンテ『地獄篇』とヘラクレス 12 功業の多重接合性、の中で、自然(じねん)として想起させられるようになっている三面構造のケルベロスとダンテ『地獄篇』の三面構造のルシファーとの接続性] (典拠: [出典 \(Source\) 紹介の部 90](#) から [出典 \(Source\) 紹介の部 90 \(10\)](#) を包摂する解説部)

でもってそちら両者の接合性が観念される場所となっている (端的に表せば、のこととしてである)。

そして、そちら一貫性については — 摘示をなすための図解部を下に設けるが — [ブラックホールを巡る問題] もが関わってくるがゆえに奇怪性が問題となるとのことがある。

(上のことにまつわる [復習] [整理] を兼ねての「長くもなつての」図解部を設けるとして)

Dante's Inferno



地獄の中核(地球のコア)に向けての踏破行後半部を一直線で表すと次のようになる。

Geryon Seventh Circle → Eighth Circle

The Tenth Labour of Heracles

ダンテらは
【ヘラクレスの第10番目の功業にて討伐されたゲーリュオン】(神話が語るころでは三面の怪物だが、ダンテが描くところでは鷹実な紳士の顔をした鋼体蛇の怪物)の背におぶられて地獄の下層に向けての急降下、断崖を超えるべく急降下を行う。



depth
地獄の
深度

Antaeus Eighth Circle → Ninth Circle (Cocytus)

The Eleventh Labour of Heracles

(or Tenth)
ダンテらはゲーリュオン助力で降り立った階層より下の階層に降りるべく【ヘラクレスの第11番目(あるいは第10番目)の功業の途上にて討伐された巨人アンタイオス】の助力を受ける。



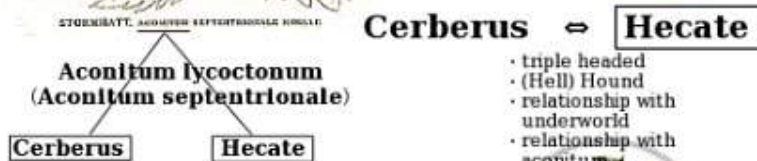
Lucifer (having three heads)

地獄の最下層、地球の中心部には【ヘラクレスの第12番目の冒険に登場したケルベロス状の三面構造をとるルシファ= (サタン)】が幽閉されている。



(Cerberus like)
triple headed Lucifer

"The Last Judgment"
by Fra Angelico (c. 1395 - 1455)



上掲図らは
[ペルセポネ]

[ヘカテ]

[ダンテ『地獄篇』に登場を見ているルチフェロ]

の関係性について端的に、他にも山と存在し本稿で既に指し示してきた関係性を全て脇に置いて端的に訴求しようと挙げたものとなるが、そこに見る

[[ケルベロスと結びつくヘカテ] [ケルベロスと「文脈上」多層的に結びつくようになっている『地獄篇』登場のルチフェロ]ら双方との関係性が問題になるペルセポネ]

については

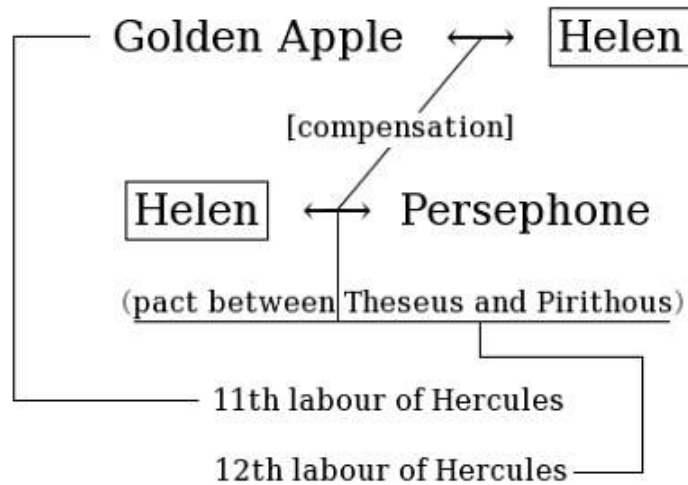
[ケルベロス捕縛が目標となるヘラクレス 12 番目の功業]

のみならず

[黄金の林檎取得が目標となるヘラクレス 11 番目の功業] (本稿で詳述してきたこと

に深くも通じているとの神話伝承上のエピソード)

にも接合する存在となっている。その点にまつわる関係図として先に挙げたところの図も下に再掲しておくこととする。



「本稿の後々の指し示しにあつての殊に重要な部に深くもかかわることである」との観点がこの身、筆者にあるため、「くどい」といった按配にての指摘をなしておく。

ここまで典拠を挙げながらも示してきたこととして、次のようなことがある。

第一に「絶世の美女ヘレン」は（結果的にトロイア崩壊の原因となることになった）「黄金の林檎」の対価としてパリに提供の提案がなされた存在である（「出典(Source)紹介の部39」）。尚、ヘレンの求婚者らのギリシャ諸侯の間では後に禍根残さぬようにとオデュッセウスが提案した誓約、ヘレンの夫の一難事には元ヘレン求婚者全員が協力すべしとの誓約が事前に交わされており、その伝でもヘレンは誓約にまつわる美女であったとも述べられる。

第二に、「絶世の美女ヘレン」はパリに駆け落ちとのかたちで掠(さら)われる前にも略取の対象となったとのことがあり、の際、ヘレン略取をなしたテセウスらとペイリトオスらは片方がヘレンを手に入れる代償にもう片方の妻君取得にヘレンを取得した方が協力するとの約定を結んでおり、結果的に「ペルセポネの略取」と「ヘレンの略取」が約定に基づき秤で釣り合わせられていたに等しきかたちとなっていたと伝わっているとのことがある（「出典(Source)紹介の部90(10)」）。

以上より述べられることは駆け引きの具にされていたとの「ヘレン」を中間項にして「トロイア崩壊の原因(黄金の林檎)」

「ペルセポネの略取」

にはつながりが観念されるとのことである（別段複雑な話ではなく、単純な話である）。

さて、そのように結びつきが観念できる「黄金の林檎」「ペルセポネ略取のエピソード」のうち、「黄金の林檎」のほうはヘラクレス第11番目の功業の取得目標物となっており（「出典(Source)紹介の部39」）、「ペルセポネ略取のエピソード」は（無謀にも人間の身で神を略取しようとした誓約の当事者、テセウスとペイリトオスが冥府の女王への狼藉の罰として囚われていた冥界の忘れ椅子よりヘラクレスにその機会にて救われたとの式で）ヘラクレス第12功業と結びついている（「出典(Source)紹介の部90(10)」）。

また、ペルセポネについていかなる関係性のパスが絵が描けるか、さらに下にてまとめたの呈示をなしておく(尚、以下呈示の関係性にあつての「媒介項」らについてはすべてここに至るまで典拠紹介部を設けてそれら概要について解説したものとなる)。

〔ペルセポネ Persephone〕 ⇔ (媒介項 Medium: [冥界降下 descent to the underworld をなした女神] / [双方が愛人としている神 Tammuz および Adonis の伝わる場所の同一性]) ⇔ **イナンナ・イシュタル Inanna/Ishtar**

イナンナ・イシュタル Inanna/Ishtar ⇔ (媒介項 Medium: [金星を神格化した存在 (divine personification of planet Venus) としての特性] / [冥界に双子の片割れエレシュキガル Ereshkigal およびショロトル Xolotl を持つとの共通性]) ⇔ **ケツァルコアトル Quetzalcoatl** ⇔ (媒介項 Medium: [蛇と結びつく【文明の接受者】 — promoters of civilizations related with serpent — としての特性] / [金星 Planet Venus と結びつくとの特性] / [期待を裏切るとのかたちで災厄をもたらした蛇としての共通性 — betrayal and disaster (the fall of Aztec civilization and "Quetzalcoatl like conquistadors" & [the fall of man and betrayal and disaster caused by old serpent seen in "Revelation"]) —] / [アメリカ大陸 American Continent → アトランティス Atlantis との見立てが存在し (e.g. Francis Bacon's Great Atlantis)、また、アトランティス Atlantis → 黄金の林檎の園 Garden of Hesperides (Atlantides) → エデンの林檎の園 Garden of Eden との見立てが存在するとの背景]) ⇔ **サタン Satan (ダンテ『地獄篇』 Dante's Inferno に登場するルチフェロ Lucifero)**

サタン (ダンテ『地獄篇』に登場するルチフェロ Lucifero) ⇔ (媒介項 Medium: ダンテ『地獄篇』 Inferno に見るケルベロス捕縛で終結するヘラクレスの計 12 の功業の後半部との際立つての近接性 (continuity between Dante's Inferno and 12 labours of Hercules)、そして、その近接性を介してのダンテ『地獄篇』に登場する三面のルシファーと三面のケルベロスの接合性) ⇔ **ケルベロス Cerberus**

(さらに以下、ケルベロス Cerberus を介しての関係性がいかに多重的にペルセポネ Persephone に回帰するかを複数パターンを羅列するとして)

ケルベロス Cerberus ⇔ (媒介項 Medium: 本稿にての先の段で詳述に詳述を重ねてきたところとして、[ヘシオドスの Theogony 『神統記』に見るところの 50 の頭を持つケルベロス fifty headed Cerberus] が [アヌビス Anubis] ・ [ヘカテ Hecate] といった別神格を通じてシリウスの伴星、50 年の公転周期を持つ白色矮星シリウス B と奇怪に結びつくことと述べられるだけの背景 — 例としてのプルタルコス古典に見る記述 (e.g. "strange" description about Isis = Sirius of Plutarch's Moralia) — が存在) ⇔ **シリウス B (Sirius B)** ⇔ (媒介項 Medium: エジプトよりのグレコ・ローマン・ワールド (古代ギリシャ・古代ローマ世界) への渡来神でもあった女神イシスの犬の星シリウスの体現神格としての特質) ⇔ **イシス Isis** ⇔ (媒介項 Medium: [ローマ

期古典『黄金の驢馬』 the Golden Ass に見る三面構造のペルセポネ triple headed Persephone やヘカテ Hecate とイシス Isis を同一視する叙述]あるいは[ペルセポネ・デメテルを崇拝するエレウシス秘儀 Eleusinian Mysteries とイシスにまつわる伝承との類似性]) ⇔ [ペルセポネ Persephone] (回帰)

ケルベロス Cerberus ⇔ (媒介項 Medium:「双方ともに三つの頭を持つ存在であり」「双方共に冥界と強く結びつく存在であり」「双方共に犬(番犬としての犬)と極めて濃厚に結びつく存在であり」「双方共に毒物トリカブトの縁起由来と強く結びつけられている存在である」とのありよう) ⇔ **ヘカテ Hecate** ⇔ (媒介項 Medium:両者を同一存在とする、古典に見る記録的叙述内容や学識者らの申しよう) ⇔ [ペルセポネ Persephone] (回帰)

ケルベロス Cerberus ⇔ (媒介項 Medium:上にて言及と同文の媒介項) ⇔ ルシファー Lucifero ⇔ (媒介項 Medium:[双方ともに金星と深くも結びつけられているとの存在であること、双方ともに冥界下り(ないしは冥界＝地獄落ちと幽閉)と関わる存在であることの式「でも」ルシファー Lucifero と結びつくイナンナ・イシュタル Inanna/Ishtar とアフロディテ・ヴィーナス Aphrodite/Venus の伝わる同質性を顧慮したうえでそこに見るアフロディテ・ヴィーナスの誘惑と関わる同質性の[黄金の林檎 the Golden Apple にまつわる誘惑]と[ルシファー(古き蛇)が関わりと伝わるエデンの禁断の果実 Forbidden fruit depicted as an apple にまつわる誘惑]における類似性までも顧慮することで浮かび上がってくるとの関係性) ⇔ イナンナ・イシュタル Inanna/Ishtar ⇔ (媒介項 Medium:上にて言及のものと同文の、[冥界降下をなした女神][双方が愛人としている神の際立つての同質性]との媒介項) ⇔ [ペルセポネ Persephone] (回帰)

ケルベロス Cerberus ⇔ (媒介項 Medium:直上言及と同文の媒介項) ⇔ ルシファー Lucifero ⇔ (媒介項 Medium:旧約聖書にあって登場の禁断の果実を林檎と見る歴史的視座の存在) ⇔ **林檎としてのエデンの誘惑の果実 Forbidden fruit depicted as an apple** ⇔ (媒介項 Medium:人間の楽園追放をもたらしたとの誘惑の果実がトロイア内破をもたらすことになった黄金の林檎と結びつけられるだけの質的類似性 一本稿にて詳述の[アフロディテ・ヴィーナスが勝利を見たパリスの審判 Judgement of Paris にまつわる特性とエデンの誘惑に伴う特性の記号論的連続性]や[黄金の林檎の園とエデンの園を同種のものとするような視座が一部の人間にあったとの事情]に関わる同質性の存在) ⇔ **黄金の林檎** ⇔ (媒介項 Medium:[黄金の林檎]の対価として差し出された絶世の美女ヘレン Helen と 一ケルベロス捕縛がモチーフとなるヘラクレス 12 功業にて救出されることになったテセウス Theseus ら誓約を介しての— ペルセポネとの連続性) ⇔ [ペルセポネ Persephone] (回帰)

(上にて整理・復習を兼ねて呈示の関係性らにあつての [エデンの禁断の果実] [黄金の林檎]を媒介項にしての部については関係図を直下、再提示なしておく)

Minerva (Athena)

Juno (Hera)

Venus (Aphrodite)

Serpent
(the 11th labour of Hercules & Ladon)

(dragons of Greek mythology
= serpent like dragons)



黄金の林檎はヘラクレスの功業の伝承にも登場、
そこでは大蛇としてのドラゴン、ラドンに守られ
た果実となっている

Golden Apple

① Helen of Troy
(femme fatale, deal)

女神アフロディテが美人コン
テストの勝者の証たる黄金の
林檎の付与権限を与えられた
王子、パリスに絶世の美女
ヘレンとの男女仲成を黄金の
林檎の対価として呈示、トロイ
の王子パリスはその提案に応
じて黄金の林檎をアフロディテ
に手渡した(人妻ヘレンの出奔
がその後のトロイア戦争および
パリスの死亡に通じているため、
パリスにとりヘレンは男を破滅
に導く女、ファム・ファタール
と呼ぶべき存在でもある)。



Alexandros Paris ②ruin

パリスは黄金の林檎を巡る取引の後、
結局、それが原因で身を滅ぼした

Hesperus

ヘスペリデスらは一説には
ヘスペラスの係累であると
されている

Hesperides



the evening star (Venus)



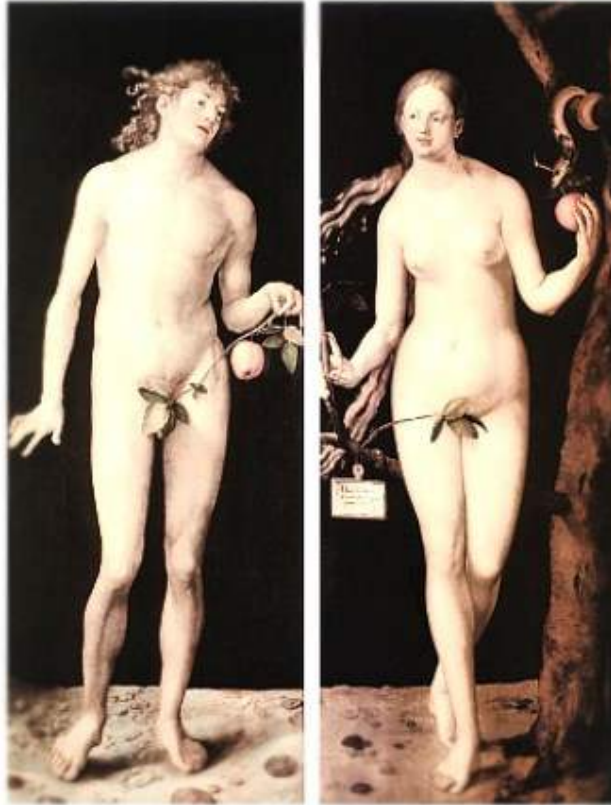
トロイアと同じくものギリシャ由来の伝承
であるヘラクレス伝承では黄金の林檎は
ヘスペリデスらによって管理されている。

ヘスペラスは金星の体現神格でもある。

Lucifer

(the morning star)

ルシファーは金星、明けの明星と名前を共有している。



①forbidden fruit
(depicted as the
apple)
&
Eve
(femme fatale,deal)

ルシファーとも同一視されるエデンの蛇はファム・ファタールとも評せられるイヴを用いて林檎とも見られている禁断の果実を食するよう、アダムを籠絡するとのことをなした。

②ruin アダムとイヴは行為を問責されるとのかたちで楽園より追い出された。

(planet)

Venus

金星は [ルシファー] と [アフロディテ] の双方に結びつく

アフロディテは林檎と関わる誘惑を女を用いて成就させた。

(Cause of the Trojan War)

Golden apple & femme fatale

ルシファーは林檎と関わる誘惑を女を用いて成就させた。

Forbidden fruit (depicted as an apple) & femme fatale

Aphrodite

Lucifer

Hesperus—Hesperides—connection

アフロディテ誘惑と関わる黄金の林檎 —蛇とも結びつく林檎— はヘスペリデスらに管理される林檎でもある。そのヘスペリデスらはルシファーと同文に金星の体現存在であるヘスペロスの係累であるとの説が伴っている者達である。

相互に円環上の繋がり合いを呈しているとの以上枠に括りながらも振り返っての関係性 —— 属人的主観などが問題になるものではなく、そして、容易に後追い可能である (ただしそうもしたことまでを敢えても指摘しようとの向きはこの世界にはどういいうけなのかなんら見受けられない) との関係性—— について問題となるところは次のようなところである (と本稿筆者は「当然に」とらえている)。

「果たして以上のような関係性は「手の込んだ」偶然の悪戯の問題 —— 恣意性なきところ—— で済むものなのか、でなくとも、特定の今日に残置している記録ら(神話・伝承

らを媒質として残置しているとの記録ら)の間に横たわる一致性は人間レベルの模倣・被模倣行為の賜物で済むものなのか」

上の疑問に対する筆者から呈示したき回答はこうである。

「当然に偶然の一致の問題では済まされない。関係性の環が相互に別個の方向から多重的に色濃くも具現化しているとのことがあり、その多重性の環がそれぞれ[同一方向]に通じているとのことがあり、それによって、[恣意性の問題]が極めて露骨に表出してくるとのことがある。

では、[恣意性の賜物の問題]となるとどうか。

については、[肉眼目視不可能天体たるシリウスBにまつわる科学的知見の先覚的言及に純・記号的に多重的に関わりとの要素が介在している(出典(Source)紹介の部 95(5)以降の部)] / [シリウスBとはブラックホール理論開闢になるべくして関わっている節ある天体である(出典(Source)紹介の部 96以降の部)] / [関係性の環にあってはまた別方向から『地獄篇』にブラックホール類似のものが描かれている(出典(Source)紹介の部 55以降の部)] とのことらがこれまた「全くの別方向から」関わっているがゆえに人間レベル —たとえば、ローマ期の文人であるプルタルコスや『黄金の驢馬』を記したアプレイウス、あるいは、ルネサンス期のダンテらのレベル— での模倣・被模倣でことが済むようになっては「いない」。それゆえ、人間業とはおよそ判じられない恣意性が透けて見えるから[奇怪である]とのことになるわけだが、その奇怪なる相関関係が[ブラックホール] および [トロイアの寓意] の方向性を執拗に指し示していることがとにかくもってして問題になる(続いて同点にまつわる再述もなす) ——※欧米圏文化の源流古典に位置するホメロス叙事詩ら(既述)にて描かれるトロイア城市が内側から完全崩壊に向かうことになった戦争の原因、その原因たる[黄金の林檎]と中東由来の一神教に見る[エデンの果実](キリスト教神学ではルシファー・サタンが用いた手管とされるもの)が結びつきながら、ブラックホールとの接合性を呈するとの関係性のようなものが歴史的に表出していればどうか。ここでは属人的なる主観とは無縁なること、要素要素に還元してすべて証拠を挙げ連ねようとの具象論に基づいてそういう話をなしている——」

(上の如きことらにまつわる[数理的分析]も本稿の後半部にてなすこととしたことについての「脇に逸れての」断りとして:

直上呈示の如き多重関係性が摘示できるようになっている、容赦なくも冷厳として「そうもなってしまうている」とのことについて本稿にてのこれよりの段ではそうした関係性に関わる他の問題事らについての指し示しに注力していく所存だが、そうもしてのさらに指し示していく「他」多重的事例を踏まえたうえでの確率論的な説明、

[高校生程度の数学知識で遺漏なくも理解できようのかたちにて調整したベイズ確率論にまつわる付説]

を本稿にての後の段で付すこととしたこと、ここに断っておく。

その点、小難しい数式と共に奇矯なることを述べもする、奇矯なることに関して確率論を振り舞わすなどとのことをなしもするとかくもってして似非科学者・マッドサイエンティストの類か、ないしは、詐欺師の類か、と看做されようことか、とは当然に思うのであるが、数学手法利用分析における筆者やりようは[極めて基本的なる公式]だけを用いての【これこれこういう仮説「ら」を入力要素にあっての尤度(likelihood)に対応するものとして設けて、[特定のアルゴリズムでフィルタリングをかけて顧慮すべきデータとして抽出した事実関係]らのありようから

(それら事実関係の確率的配分に対応するものとして設定した) [仮説]らの数
理的妥当性に対して分析するとこういう予測が試算として出すとの式での形態
の確率論】に留まると申し述べておく。などとくだくだしく申し述べてもこの段
階ではそうしたこと、理解など到底なしていただけぬところかとは思うのだが (『それが当たり前の反応か』と当然に思う。しかし、に対しては後の段で多くの
向きに理解いただけるようにと相当程度の紙幅を割いて実にもって細かい説
明をなす所存でもある)、具体的には本稿後半部では Bayesian method、
[[適正なデータ]入力さえなされるのならば、差分・誤差を吸収して現実的に妥
当性の高い方向性に次第次第に収斂していくとの柔軟性を有したベイズ推定]
(市場調査からスパムメールのフィルタリングまで幅広くも実務応用されていると
の確率論的手法の一類型)

とのかたちでの確率論の話をも付すことにしたとここに断っておく —— 数式を
手繰ることだけならば、それこそ漢字二字の罵倒語がまさしくも相応しかろうとの
向き(「専門何とか」あるいはより性質悪くもの「学者の皮をかぶった紛い物)」で
もできようことかとは思うのであるが、本稿では[我田引水方式の、詭弁を支える
ための数字操作や観念論に近いとの数式遊びなどには随さぬとのスタンスで
の[基本的確率分析]モデル]を付録として付す(知識がある向きならば[数式
処理]と[データの適正さ]と[仮説設定のありよう]しか問題にならぬことが理解
できようとのかたちでの近似的モデル分析のやりようを付録として付す) ——)

(後にての数理的分析の実行について先んじてなした話から本題に立ち戻りもし)

ここにてキーとなる存在であると強調したいのは[冥界の女王ペルセポネ]及び[ブラックホール]で
ある。にまつわって整理のためにここに至るまで解説を講じていることを(「またもや、」のこととして)
繰り返すが、冥界の女王ペルセポネについては長くも箇条表記しての次のことが摘示できるよう
になっているとのことが問題になる。

■ [ペルセポネ]は[ヘカテ]と結びつけられてきた、ときに「両者は同一物である」といっ
たかたちで結びつけられてきた存在となっているとの背景がある(：ペルセポネとヘカテは
エレウシス秘儀という古代の儀式体系で共に祭られる存在であった(出典(Source)紹介の
部 94(5)など)のだが、エレウシス秘儀との関係性を想起させるローマ期小説作品『黄金の
驢馬(ろば)』にて[三面のペルセポネ]とヘカテは[イシスの別相なる同一存在]として
言及されている存在である(出典(Source)紹介の部 94(3))。また、ペルセポネとヘカテ
との同一性については識者よりの関係性指摘が歴年なされてきたところでもある(トマス・
ブルフィンチの神話の解説著作 THE AGE OF FABLE を引き合いにした出典(Source)
紹介の部 94(6)などを参照のこと)。また、ペルセポネの母にあたる穀物神デメテルは原
初、娘にあたるペルセポネと同一であったとの指摘がなされている存在だが、ペルセポネ
と共にエレウシス秘儀にて祭られているとのそのデメテルとヘカテを同一視するローマ期
人間の物言いもがあることも — 19世紀から20世紀になった人類学分野大著、『金枝篇』
の内容を引き合いに — 出典(Source)紹介の部 94(6)にあって — 問題視している)。

そのように[ペルセポネ]と同一存在と扱われもするとの[ヘカテ]は冥界の犬の番犬
[ケルベロス]と濃厚に結びつく存在である。ヘカテは(これまたここに至るまで何度も述
べてきたことだが)「冥界と関わる」「三面の存在となっており」、また、「番をなす犬と濃厚に関
わる存在となり」「毒性植物トリカブトの由来と密接に関わっている」存在とされるが、他面、
ケルベロスは「冥界と関わる」「三面の存在となっており」、また、「番犬としての役割を果た
しており」「毒性植物トリカブトの由来と密接に関わっている」存在であるからである(出典
(Source)紹介の部 95(8)にあってその著述内の申しようを問題視していたとの著述家ロ
バート・テンブルが引き合いに出しもしているロバート・グレーヴズ物言いに依拠すると「ケ
ルベロスとヘカテは縁起由来を同一にする存在となる」とのことだが、といった物言いには

確たる古文献上の論拠をなかなか見つけられないとすることがあり(筆者は色々とそのために当たりをつけんとして無為なる結果を見た)、ここでは[純粹なる記号論的一致性]の観点から指し示せるヘカテとケルベロスの一致性の関係性を専らに問題視していること、お含みいただきたいものである)。

以上より[ヘカテ]を中間項にしてのペルセポネとケルベロスの際立っての類似性が觀念されるわけである(換言すれば、[ペルセポネ] ⇔ [ヘカテ] ⇔ [ケルベロス]との関係性が成り立つと述べられる)。

■[ペルセポネ]はエジプトの女神[イシス]と結びつけられるだけの背景を伴った神格「でも」ある(本稿でも出典(Source)紹介の部 92 および出典(Source)紹介の部 93にて出典挙げて入念に示してきたこととして、前世紀以前より学術文書で指摘されていることとして[デメテル・ペルセポネにまつわるエレウシス秘儀]と[イシス・オシリスの祭儀体系]の間には際立っての相似性・類似性が存在しており、実際にローマに伝来してのイシス信仰を中心にしての粗筋が展開するローマ期の小説『黄金の驢馬(ろば)』の中では(出典(Source)紹介の部 94(5)にて英訳版より和訳版よりの原文引用をなしているように)問題となる[エレウシス秘儀]とも通ずる式にて「ペルセポネやヘカテは[イシス]を実体としての一なる女神である」との書かれようがなされている)。

そして、そのように[ペルセポネ]との一致性が往古から語られていたところの[イシス]というエジプトよりの渡来神(エジプト名アセット Aset)については[恒星シリウスの体現存在]としての側面を有しており(本稿にての出典(Source)紹介の部 95(6)で先に詳述のようにヘリアカル・ライジング現象と共にある古代の灌漑にあって極めて重要な役割を果たしていたシリウスはエジプトにて[ソティス]という神格名でイシスと結びつけられていたとの背景があるとよく知られている)、同イシスについては

[冥界での魂の審判に携わる犬(ジャッカル)の神アヌビス 一同アヌビス自体が(出典(Source)紹介の部 95(4)に付しての補足の部にて典拠紹介しているように)[シリウス]と結びつく存在である—]

を紹介して不可解にも[古代人が認識できたはずがない肉眼黙示不可能なシリウスB]の方向性を指し示す存在であるとの指摘が —出典(Source)紹介の部 95(4)以降の部にて事細かに解説しているように— 説得力を伴ってなされているとの存在となる(※)。

※振り返っての話として:一時期物議を醸した英国の論客ロバート・テンプルに由来するところのものとして —筆者はそのテンプルの強調するところ(シリウス星系に親和性高い異星人介入の仮説)には重大な誤謬が含まれているとらえているわけだが— 次のような申しようを先に引いていた。

(ロバート・テンプルの申しようとして)

「近現代の天文学の発展によって19世紀よりようやく判明したこととして夜空にあっての最も明るい星には従前、発見されていなかった肉眼目視不可能な伴星としてのシリウスBが連星系として伴っていることが分かった。シリウスAが明るい可視の星であるのに対して、シリウスBは不可視の星となっている。それとの関わりが想起されることとしてプルタルコス古典『モラリア』にあっては【イシス(シリウス象徴存在)が「光」ないし「目に見えるもの」として、ネフティスたる「闇」ないし「目に見えないもの」とされ、それが水平円をなす(冥界の)犬の神アヌビスに分割されているとの記述が含まれている】との記述が含まれている。そして、そうしたプルタルコス古典にあっての記述が【犬の星たるシリウスAとシリウスB(50年の公転軌道を持つ肉眼目視不可能天体)に対する隠喩的言】であると考えられるだけの事情がある(細

かくも先述してきたところとしてそちら事情は[イシスと同文にシリウスと結びつけられてきたとのアヌビスとヘカテ・ケルベロスとの接合性][ケルベロスの(3つではなく)50の頭にまつわる伝承][犬の星シリウスにてのシリウスBの周期50年]といったことらと通じている) (ロバート・テンプルの申しよう紹介部はここまでとする)

取り上げたロバート・テンプル申しように関しては確認したところとして上の部の論拠「については」決して駄法螺などではない。きちんと古典、そこに見る文献的事実によって後追いできるものとなる —※**出典(Source)紹介の部 95(5)**にて挙げているように The Online Library of Liberty を介して PDF ファイル公開されている(従ってオンライン上にて検索エンジンにて表題入力し HTML 形式や PDF 形式の該当文書を同定するなどして誰でも確認をなせる)との Plutarch, The Morals, vol. 4 [1878] にあつては[文献的事実](philological truth)の問題として “ And when Nephthys was delivered of Anubis, Isis owned the child. **For Nephthys is that part of the world which is below the earth, and invisible to us; and Isis that which is above the earth, and visible. But that which touches upon both these, and is called the horizon (or bounding circle) and is common to them both, is called Anubis,** and resembles in shape the dog, because the dog makes use of his sight by night as well as by day. **And therefore Anubis seems to me to have a power among the Egyptians much like to that of Hecate among the Grecians, he being as well terrestrial as Olympic.** ” ([対応するところの訳として] 蔵書量がそこそこに豊かであるとの図書館より借り受けることも可能であるとの邦訳書、京都大学学術出版会より[西洋古典叢書]シリーズと銘打って京大系の学者らによって出されている『モラリア』、その[イシスとオシリスについて] 掲載巻にあつての p.71 にては(原文抜粋するところとして) “ 一方、ネプテュスがアヌビスを産むと、イシスはその子を自分の子として育てます。というのは、**ネプテュスとは大地の下の不可視の領域であるのに対して、イシスとは大地の上方の可視的な領域です。そして、このどちらにも触れていて、両者に共有されている円環——いわゆる地平線——がアヌビスと呼ばれ、その姿が犬になぞらえられているのです。なぜなら、犬は夜にも昼にも視覚を同じように用いることができるからです。そして、エジプト人たちのあいだでアヌビスは、ギリシャにおけるヘカテと同様の力をもっていると思われま**す” との訳がなされているとの部) が表記のテンプル主張内容に対応するところとなる—。

※ロバート・テンプル申しようについて多少細かく、また、長くもなつての「さらにも」振り返り表記をなしておく。

ロバート・テンプルは

「[冥府の犬科存在アヌビス]は[イシス]と同文に犬の星シリウスと結びつけられてきた存在だが、同アヌビス、冥府の犬ケルベロスと結びつけられもしてきた存在である。そして、ケルベロスについてはその頭を3つではなく50とするとの古代伝承があるがゆえに、**【[犬の星シリウスと結びつき50の頭を持つケルベロスとも結びつく水平円軌道をなすアヌビス]によって[可視存在イシス](史的に見てのシリウスA 体現存在でもある)と[不可視存在ネプテュス]が分割されている】**との記述がローマ期のギリシャ系文人プルタルコスの手になる古典上にあつてなされているのは[可視存在シリウスA]と[公転周期50年、水平軌道をなす不可視存在シリウスB]に対する隠喩的言及と判断なせる」

との「説得力を伴った」主張をなしているわけだが、

[アヌビス(シリウス体現存在ないしシリウスを包含するオオイヌ座と結びつく神格)による可視存在(シリウスA体現存在たるイシス)と不可視存在(ネフテュス)の分割]

に言及している問題となるプルタルコス由来のローマ古文献『モラリア』それ自体の中で[アヌビス]と[ヘカテ]が結びつくとの表記「も」がなされているのことがあり(出典(Source)紹介の部95(5))、そちら[ヘカテ]が[ケルベロス]と「多重的に」接合性を呈していると述べられるようになっていいるのだから(出典(Source)紹介の部94(7))、ロバート・テンプルの[アヌビスとケルベロスの接合性]を云々する物言いには一層もってして無理がないとのかたちとなっている。

さらに述べれば、ロバート・テンプルは

「ギリシャ伝承ではアクタイオンという男が50の猟犬をけしかけられて弓の神アルテミスに殺されたことになっているが、そのことからして[犬の星]のみならず[弓の星]ともなる[シリウス]およびその伴星の[50年の周期を持つシリウスB]と結びつくのであろう」

とも述べているわけであるも、その指し示しもまた多少ながら見るべきところを伴ってのものとなっている(出典(Source)紹介の部95(7))。

以上述べたうえで本稿にての先の分析内容も踏まえて書くが、ロバート・テンプルが強くも前面に押し出している仮説、

「人類の初期文明にてシリウス星系にて由来する超高度文明の介入があった」

との仮説の帰結自体は本稿筆者がそれを首肯(無批判なる肯定)などなんらなしていないとのものになるのではあるも(マルチバース・多世界解釈のことを考え、かつもって、凄まじい距離をもともせぬ介入手段の想像困難性のことを考えれば、介入者がシリウス星系に由来する云々以前にそも、異星人であるかどうか断じられないとのことがある)、[現象重視の観点]に立脚して物事を見れば、「ロバート・テンプルのシリウスBにまつわる先覚的言及に関する申しよう」については(その欠陥性・反駁容易なる側面 — (先にそうもした側面としてテンプル説の致命的欠陥(と見えるところ)としてドゴン族にまつわる主張の部で脆弱性がとみにみとめられるとのこと、詳述している) — を十分に顧慮したうえでも) 重んじて然るべきものであると解される側面があり、そして、その支持材料については我々身近「にも」散見されとのことがあり、について「も」本稿では事細かに取り上げてきたとの背景がある。具体的には

「東洋の冥府の審判官は常識の話として閻魔(エンマ)となっているが、原初、その閻魔は[ヤマ]と呼ばれる印度のヴェーダ文献の神、より遡っては古代イラン界隈からの渡来神であったとの指摘が諸所にてなされている存在となっている。そして、閻魔の元となった存在とされる[ヤマ]の方については[ケルベロスと起源同一視される犬の手先]を伴っているとの指摘が学究によって歴年なされてきたとの存在である(先に20世紀の[文献学]研究者の論稿の内容なども引いている)。

そうもした[ケルベロスと起源を一にする(とされる)存在]を伴ってのヤマ(あるいはヤーマ)から派生した存在とされている閻魔 — 同・閻魔、オシリスに従っての冥府の審判介添え役たるアヌビスが[虚偽を暴き魂を裁くためのマアトの羽を乗せた秤]と結びつけられているように[虚偽を暴き死者を裁くための浄玻璃の鏡]を持つ存在でもある—

をはじめ 10 人の冥府の審判官らに対する東洋にあっての[十王信仰]にあっては

[49 日]

との期間が冥界の裁判官らに対する情状酌量を求める祈念の期間とされているとことが現実にある(日本で多くの人間が細かきことについて知らず・考えずにその信徒に分類されているとの仏教、その法要での供養の様式では冥府の裁判官に情状酌量を願う十王信仰に起因するとも言われる[49 日]を終えての[50 日]をもって[忌み明け]として[白木造りの位牌]から[漆塗りの真っ黒の本位牌]への移行が行われたりすることが脳裏をよぎるところともなっている)。

そういった伝でも、

[[50]と[ケルベロス(閻魔の原初的形態としてのヤマの飼犬と起源的に同一のものであるとするとの見解が伝わっている存在にしてヘシオドス『神統記』など初期的古典では 50 の頭を持っていたとされる存在)やアヌビス(ケルベロスとの連続性の指摘がなせるようになってもいるシリウス象徴化存在)ら冥府の犬ら]を巡るシリウス B 周期(公転周期 50 年の天体)にまつわる話]

に話がつながる(50 と死後の世界の相通ずる日本の風習との絡みで言えば、故人没後 50 「年」を経ての [50 回忌] にて故人の名前が過去帳に転写、遺骨が土に返される、との風習が一部にてみとめられるとのこともまたある) 」

とのことを論じてきたとのことがある(表記のことについては Cerberus, The Dog of Hades The History of an Idea (1905) との文献学学者の手になる論稿などを引き合いに出しての [出典\(Source\) 紹介の部 95\(9\)](#) を参照のこと)。

(ペルセポネにつき先に述べてきたことの振り返り表記を続けるとして)

■ここまで[何度も出典とその出典を指し示す部を提示しながら申し述べてきた]ように[冥界の女王ペルセポネ]と[ケルベロス]は結びつくようになっている(【ヘカテ】を介しての連続性】や【ヘラクレス 11 功業およびヘラクレス 12 功業の関係性を介しての記号論的連続性】について詳解を講じてきたことである)。また、同文に[何度も出典とその出典を指し示す部を提示しながら申し述べてきた]ように[冥界の女王ペルセポネ]と[イシス]は結びつくようになっている。

さて、双方共々にペルセポネおよびヘカテと接合するイシスとケルベロスの両者に[シリウスおよびシリウス伴星の白色矮星たるシリウス B]

との関係性があるとされること(直近にても本稿の先の内容を振り返って言及しているとのこと)は

「奇怪なこと」

である。

何故か。

第一。

これまた何度も何度も申し述べてきたこととして、話が 19 世紀まで発見されることがなかったとの肉眼目視「不可能」であるシリウス B に対する[複数の古典らにての奇怪な言及]との話に関わっている、そこからして奇怪であるとのことがある(その[機序]が[現象]それ自体に対して説明が付きがたいこと、まさしくもの[ミステリー]に関わる —[ロバート・テンプル]がその主張の核にすえているとのアフリカにあってのドゴン族伝承に見るシリウス B への細やかな伝承]といったものについては「ミステリーにはあたらない、文化伝播(西洋

から後進地への情報移行)で説明がなせるところである」との反証がなされているとのことを本稿にての**出典(Source)紹介の部 95(3)**で解説している一方でのこととしてそちらは反駁(はんぱく)できぬところとして[ミステリー]に関わる一 ところとして奇怪である)。

第二。

シリウス B については

[[シリウス A の伴星であるがゆえに地球から見て極めて目が行きやすい (ただし天体観測技術が近現代レベルに到達すればこそ行きやすい) との位置関係] および [重力崩壊に関わるその白色矮星としての性質] から現代科学史に見るブラックホール理論開闢に極めて濃厚に関わっている存在と (そうなるべくような式で) なっている]

とのことがある (:本稿の先の段、[C]の段にての**出典(Source)紹介の部 96**を包摂する解説部で Empire of the Stars Friendship, Obsession and Betrayal in the Quest for Black Holes (英国の科学史専門の学究の手によって著されたとの書籍/国内版元の草思社より出されている邦訳版タイトルは『ブラックホールを見つけた男』) を引き合いに、その点、[シリウス B がブラックホール理論開闢史に (なるべくような式で) 濃厚に関わっている] ことについて渡英して挫折、後に一陽来復を見ることとなったチャンドラセカールの事績に関わるところとして入念に指し示しなしている)。

そして、

[ブラックホール理論開闢史と関わっているシリウス B]

[古典にそれに関する [不可解な言及] がケルベロスや [イシス(ペルセポネ質的同等物)とアヌビスとの関係] の絡みで具現化しているとの見解が複合的に呈されているとのシリウス B (近代まで発見されていなかった天体)]

とのことで述べれば、

「冥界下りの物語たるダンテ『地獄篇』にてのルチフェロ(サタン)がケルベロス構造(三面構造)を呈しながら今日的観点で見るところのブラックホール類似物としての特色を具備しているとのことがある (本稿にての**出典(Source)紹介の部 55**から**出典(Source)紹介の部 55(3)**で詳述を重ねてきたことである — 幾人もの物理学者言辞なども引きつつ、である—)」

「上記ルチフェロについては[イシュタル・イナンナ]という古代メソポタミアの神格と [ケツアルコアトル(中米で崇められていた羽毛ある蛇)] といった媒介項を介しもして記号論的に接合しており(すぐ前の段にて本稿のより以前の段の内容を振り返ってものを解説をなしてきたところである)、[イシュタル・イナンナ]と言え、ペルセポネとの同質性が複合的に見てとれる女神でもある(**出典(Source)紹介の部 97**)」

とのことから

[ペルセポネ(シリウス体現神格でもあるイシス同等物) ⇔ ヘカテ ⇔ ケルベロス ⇔ シリウス B との関係性が古文献記述態様より問題視されもしている存在 (⇔ シリウス B ⇔ ブラックホール理論の開闢に関わる天体)]

[ケルベロス ⇔ (ヘラクレス 12 功業を介しての**多重連続性**) ⇔ ダンテ『地獄篇』に見るルシファー (⇔ 今日的に見た上でのブラックホールの特質を**多重的に兼ね備えた描写**)]

[ルシファー ⇔ イシュタル・イナンナ ⇔ ペルセポネ(回帰)]

との円環状の関係性が想起されることになっている。それがため「も」あって奇怪、できすぎの感を否めない。

(ペルセポネにまつわる関係性の表記をさらに続けるとして)

■ (ここまで箇条表記してきたことに加えて)以下の i. から iii. のことから接合関係が呈示できるようになっている。

i. ダンテ『地獄篇』の(今日的に見た上でブラックホール類似物をどういうわけなのか具現化させているとの)ルシファーの領域に至る道程に関しては—木製の馬の計略で滅したトロイア崩壊の物語とも同時に関わるところにて—ヘラクレス 12 功業(冥界下りの上でのケルベロス捕獲で終わるとの 12 功業)との結びつきが多重的に見受けられるようになっているとある(:ここ補説3にある[1]から[5-b]と振っての部、**出典(Source)紹介の部 90**から**出典(Source)紹介の部 90(11)**を包摂する解説部を参照のこと)。

そうした『地獄篇』にある最下層へと至る下り—ルシファー幽閉領域に至るまでの描写—と濃密に関わるとの解説に努めてきた**「ヘラクレス 12 功業」**及び**「トロイア崩壊」**との接続性についてはブラックホールを生成するとの見解が近年呈されるに至っている加速器実験 LHC 実験の命名規則にも見てとれるとある。「理由ともあれ」現実にそういうことがある(**出典(Source)紹介の部 35**から**出典(Source)紹介の部 36(3)**を包摂する解説部および**出典(Source)紹介の部 46**を包摂する解説部を参照のこと)。

ii. [ブラックホール生成実験と近年評されるようになった LHC 実験]および[ブラックホール類似のものに関わる三面のルチフェロを登場させているとのダンテ『地獄篇』]の双方に「どういうわけなのか」関わる**「ヘラクレス 12 功業」**および**「トロイア崩壊の寓意」**とのことで述べれば、[冥界落ちの女神ペルセポネとヘラクレスの 12 功業の最後の冥界下りの目標物ケルベロスとの間には連続性があること][冥界落ちの女神ペルセポネはトロイア戦争の原因としての絶世の美女ヘレンと同様に同じくもの者達—テセウスとペイリトオス—の約定に基づく略取対象となっていること](**出典(Source)紹介の部 90(10)**)が想起されもするようになっている。

iii. 本稿は[エデンの園にてのルシファーの誘惑]と[黄金の林檎の園と関わるアトランティスの(伝承に見る)地理的特性]および[トロイア崩壊伝承]との関係性を仔細に摘示してきたもの「とも」なる—**出典(Source)紹介の部 48**から**出典(Source)紹介の部 51**—のだが、その伝からして多重性的関係性が観念できるようになっている(LHC 実験はヘラクレス 11 功業に登場する巨人アトラス、[トロイア崩壊の原因]でもあると伝わっている黄金の林檎が栽培されているとのまさしくもの[黄金の林檎の園]の所在地を知る巨人の名を冠した加速器付属検出器[ATLAS]で観測活動をなしている、さらにはそのためのイベント・ディスプレイ・ツールとして黄金の林檎の園の場にも歴史的に仮託されてきたアトランティス、ATLANTIS との名称の装置を使っているとのことがある—繰り返すが、本稿にての**出典(Source)紹介の部 35**から**出典(Source)紹介の部 36(3)**を包摂する解説部および**出典(Source)紹介の部 46**を包摂する解説部が同じくものことの解説部となる—)。

(ここまで述べてきたことを簡略化しての関係図に落とし込めんとすれば、以下呈示するようなかたちでの描画がなせる)

[ペルセポネPersephone] ⇔ (媒介項Medium: [冥界降下 descent to the underworldをなした女神としての特性] [双方が愛人としている神TammuzおよびAdonisの際立つての同質性]) ⇔ イナンナ・イシュタル Inanna / Ishtar.

イナンナ・イシュタルInanna/Ishtar ⇔ (媒介項Medium: [金星を神格化した存在 (divine personification of planet Venus)としての共通性] [冥界に双子の片割れエレシユキガルEreshkigalおよびショロトルXolotlを持つとの共通性]) ⇔ ケツアルコアトルQuetzalcoatl ⇔ (媒介項Medium: [蛇と結びつく文明の接受者 — promoters of civilizations related with serpent— としての特性 (アメリカ大陸に伝わる伝承および聖書に見るエデンの智慧の樹の実を食すことの教唆のエピソード)] [金星Planet Venusと結びつくとの特性] [期待を裏切るとのかたちで災厄をもたらした蛇としての共通性 — betrayal and disaster (the fall of Aztec civilization and Quetzalcoatl like conquistadors & the fall of man, betrayal and disaster caused by old serpent seen in "Revelation")—]) [アメリカ大陸 American Continent → アトランティスAtlantisとの見立てが存在し (e.g. Francis Bacon's Great Atlantis), また、アトランティスAtlantis → 黄金の林檎の園 Garden of Hesperides (Atlantides) → エデンの林檎の園 Garden of Edenとの見立てが存在するとの背景]) ⇔ サタンSatan (ダンテ『地獄篇』 Dante's Inferno に登場するルチフェロLucifero).

サタン (ダンテ『地獄篇』に登場するルチフェロLucifero) ⇔ (媒介項Medium: ダンテ『地獄篇』Infernoに見るケルベロス捕縛で終結するヘラクレスの計12の功業の後半部との際立つての近接性 (continuity between Dante's Inferno and 12 labours of Hercules), そして、その近接性を介してのダンテ『地獄篇』に登場する三面のルシファーと三面のケルベロスの接合性) ⇔ ケルベロスCerberus

(以下、ケルベロスCerberusを介しての関係性がいかように多重的にペルセポネPersephoneに回帰するかの複数パターンを羅列するとして)

ケルベロスCerberus ⇔ (媒介項Medium: 本稿にての先の段で詳述に詳述を重ねてきたところとして、[ヘシオドスのTheogony『神統記』に見るところの50の頭を持つケルベロス fifty headed Cerberus]が[アヌビスAnubis]・[ヘカテHecate]といった別神格を通じてシリウスの伴星、50年の公転周期を持つ白色矮星シリウスBと奇怪無比に結びつくと述べられるだけの背景 — 例としてのプルタルコス古典に見る記述 (e.g. "strange" description about [Isis = Sirius] of Plutarch's Moralia)— が存在) ⇔ シリウスB (SiriusB) ⇔ (媒介項Medium: エジプトよりのグレコ・ローマン・ワールド (古代ギリシャ・古代ローマ世界)への渡来神でもあった女神イシスの犬の星シリウスの体現神格としての特質) ⇔ イシスIsis ⇔ (媒介項: [ローマ期古典『黄金の驢馬』 the Golden Assに見る三面構造のペルセポネ triple headed PersephoneやヘカテHecateとイシスIsisを同一視する叙述]あるいは[ペルセポネ・デメテルを崇拜するエレウシス秘儀 Eleusinian Mysteriesとイシスにまつわる伝承との類似性]) ⇔ [ペルセポネPersephone] (回帰)

ケルベロスCerberus ⇔ (媒介項Medium: 「双方ともに三つの頭を持つ存在であり」「双方共に冥界と強くも結びつく存在であり」「双方共に犬 (番犬としての犬)と極めて濃厚に結びつく存在であり」「双方共に毒物トリカブトの縁起由来と強くも結びつけられている存在である」とのありよう) ⇔ ヘカテHecate ⇔ (媒介項Medium: 両者を同一存在とする、古典に見る記録的叙述内容や学識者らの申しよう) ⇔ [ペルセポネPersephone] (回帰)

ケルベロスCerberus ⇔ (媒介項Medium: 上にて言及と同文の媒介項)
 ⇔ ルシファーLucifero ⇔ (媒介項Medium: [金星と深くも結びつけられて
 いるとの存在らである、また、冥界下り(ないしは冥界=地獄落ちと幽閉)と
 関わる存在らである]との式「でも」ルシファーLuciferoと結びつくイナンナ・
 イシュタルInanna / Ishtarとアフロディテ・ヴィーナスAphrodite / Venusの伝わ
 るところの同質性を顧慮したうえでそこに見るアフロディテ・ヴィーナスの誘惑と関
 わるところの [黄金の林檎 the Golden Appleにまつわる誘惑] と [ルシファー
 (古き蛇)が関わりと伝わるエデンの禁断の果実 Forbidden fruit depicted as
 an appleにまつわる誘惑] における類似性までも顧慮することで浮かび上がって
 くるとの関係性) ⇔ イナンナ・イシュタルInanna/Ishtar ⇔ (媒介項
 Medium: 上にて言及のものと同文の、[冥界降下をなした女神][双方が愛人と
 している神の際立つての同質性]との媒介項) ⇔ [ペルセポネPersephone]
 (回帰)

ケルベロスCerberus ⇔ (媒介項Medium: 直上言及と同文の媒介項)
 ⇔ ルシファーLucifero ⇔ (媒介項Medium: 旧約聖書にあって登場の
 禁断の果実を林檎と見る歴史的視座の存在) ⇔ 林檎としてのエデンの誘惑
 の果実 Forbidden fruit depicted as an apple ⇔ (媒介項Medium: 人間の
 楽園追放をもたらしたとの誘惑の果実がトロイア内破をもたらすことになった黄金の
 林檎と結びつけられるだけの質的類似性 — 本稿にて詳述の [アフロディテ・ヴ
 ィーナスが勝利を見たパリスの審判 Judgement of Parisにまつわる特性とエデン
 の誘惑に伴う特性の記号論的連続性] や [黄金の林檎の園とエデンの園を同種
 のものと見るような視座が一部の人間にあったとの事情] に関わりとるところの質的類似
 性 — の存在) ⇔ 黄金の林檎 the Golden Apple ⇔ (媒介項Medium:
 [黄金の林檎]の対価として差し出された絶世の美女ヘレンHelenと — ケルベ
 ロス捕縛がモチーフとなるヘラクレス12功業にて救出されることになったテセウス
 Theseusら誓約を介しての — ペルセポネとの連続性) ⇔
 [ペルセポネPersephone] (回帰)

ATLAS detector
 (→ [Golden Apple Provider] Detector)
 ATLANTIS (Event display tool)

LHC

generate?

Black hole

- black hole like property (seen in Canto XXXIV of Dante's Inferno)
- flow of history of science, Chandrasekhar limit (Sirius B, gravitational collapse → theorization of the black hole)

(次いでもってして以上端的にまとめもしての相関関係を「よりもって端的に」表
 記するとどうなるのかにまつわっての図を — 多少不親切なものながらも — 挙
 げておくこととする)

ここでの話はだが、まだ終わらない。さらにもってして、

[ペルセポネを媒介項にしての多層的なる関係性]

が摘示できるようになっているとのこと「もある」のである。

さて、これ以降、[ペルセポネを媒介項にして奇怪なる関係性]の話をさらになすとして、それは

[レコンキスタ]

にまつわるところとなる（[レコンキスタ]の意味も無論、下に解説する）。

以降、a. から e. と振りもして述べていくことら（都度、「基本的な」典拠も付しながらも述べていくことら）について「も」その重要性にまつわる主張が適宜適切なものなのか、ご判断いただきたいものである。

a.

今日のスペイン・ポルトガルが存在するヨーロッパ西部地域、イベリア半島にあってはイスラム教政体（イスラム勢力）がキリスト教政体と割拠して存在していたとの時期（具体的には8世紀から1492年、15世紀末までの時期）が世界史上、存在していた。その時期にあってキリスト教勢力から見て、イスラム教勢力の領域—7世紀に興ったイスラム王朝ウマイヤ朝の勢力がヨーロッパ西部、ピレネー山脈に至るまでの領域をアフリカ北岸経緯で侵出、扼するに至ったことになったとの沿革が元にもって西ヨーロッパ・イベリア半島に飛び地的に存在することになったイスラム勢力の領域—を再奪取することを失地回復・再征服と銘打って[レコンキスタ]と呼び習わしていたとの背景がある（下らぬ受験勉強の話をなせば、高等学校で世界史を並んだ者が受験にて成果を出すために暗記を強いられるとの最も基本的なる知識の一つである。基本的なことであるのでその典拠としては下に和文ウィキペディア[レコンキスタ]項目程度のものよりの引用をなすにとどめる）。

（直下、和文ウィキペディア[レコンキスタ]項目にあっての現行記載内容より掻い摘まんでの引用をなしておく）

レコンキスタ(スペイン語: Reconquista)は、718年から1492年までに行われたキリスト教国によるイベリア半島の再征服活動の総称である。ウマイヤ朝による西ゴート王国の征服と、それに続くアストゥリアス王国の建国から始まり、1492年のグラナダ陥落で終わる。レコンキスタはスペイン語で「再征服」(re=再び、conquista=征服すること)を意味する。ポルトガル語では同綴でルコンキシユタという。日本語においては意識で国土回復運動や、直訳で再征服運動とされる。…(中略)… 718年、西ゴート王国の貴族を称するペラヨが、アストゥリアス地方でキリスト教徒を率いて蜂起し、アストゥリアス王国を建国した。多くの史家はレコンキスタの開始をこの年に設定している。722年(あるいは718年、724年とも)、ペラヨはコバドンガの戦いに勝利し、イスラム勢力に対するキリスト教国家として初めての勝利を手にした。これは実際には小規模な戦いに過ぎなかったが、イベリア半島のキリスト教徒にとっては象徴的な初勝利であった。…(中略)… 12世紀後半まで、キリスト教諸国とムワッヒド朝の戦いはほぼ互角といえた。キリスト教諸国はそれぞれの勢力拡張に重点を置き、統一戦線を張って戦おうとはしなかった。ムワッヒド朝も、本拠地が北アフリカであることから東方への拡張を主眼としており、イベリア半島にはそれほど戦力を割いていなかった。このような両勢力の事情から、決定的な局面はなかなか訪れなかった。…(中略)… 1230年頃、ムハンマド・イブン・ユースフ・イブン・ナスルがアルホーナで蜂起し、ナスル朝を建国した。ナスル朝は1235年にグラナダを攻略し、1238年に遷都した。このためグラナダ王国とも言う。グラナダは

シエラネバダ山脈の天険を最大の防御としており、キリスト教勢力も容易にこれを突破することはできなかった。…(中略)… 13世紀半ばにはムスリム勢力はグラナダに残るのみとなったが、キリスト教勢力の内部不一致などやグラナダの難攻不落のため、陥落するのは1492年までかかった。

(以上、和文ウィキペディア[レコンキスタ]項目にあつての現行記載内容よりの掻い摘まんでの引用とした)

レコンキスタの終焉はアラゴン・カスティリヤ同君連合王国がイベリア半島に拠っていた最後のイスラム勢力のナスル朝、イベリア半島にあつてのグラナダ地方に拠っていた同王朝を1492年に駆逐することによつてもたらされることになった ([ナスル朝][1492年(15世紀末)にあつての終焉]といったこともまた高等学校で世界史の科目を活用しようとした決めた向きが暗記を求められるようなところである)。

そのグラナダ地方に拠っていたナスル朝 一かのアルハンブラ宮殿を遺したことで知られるイスラム王朝一 に対して攻め手側であったアラゴン・カスティリヤ同君連合王国では[自分たちの領域としてのグラナダ王国]こそがその場に相応しいと主張、ナスル朝領域にキリスト教勢力版グラナダ王国の建立をナスル朝滅亡の前からして主張していたことがある。

そして、同グラナダ王国の紋章が
[ザクロ]
であった。

そして、そも、グラナダの語源がザクロとの言葉にあつたとのことが [ペルセポネ] に関わるところで「問題になる」(※)。

(※注記として:[グラナダ王国紋章がザクロであった]とのことまでは込み入つての話は日本の高校の科目としての世界史、その受験プロパーの学習としては暗記を求められるようなことでは「ない」。

さらに述べれば、日本の教育現場(良き社会の歯車、もとい、成員を構築すべくもカリキュラムが組み立てられているとの教育現場)では
[グラナダ王国]

と言うとグラナダに拠つての最後のイスラム王朝たるナスル朝の別称のように教育サイド(世界史知識供給サイド)にて呼称される傾向があるのだが(上にて引用した和文ウィキペディアの現行記載内容にあつても(再引用するところとして)“1230年頃、ムハンマド・イブン・ユースフ・イブン・ナスルがアルホーナで蜂起し、ナスル朝を建国した。ナスル朝は1235年にグラナダを攻略し、1238年に遷都した。このためグラナダ王国とも言う”(引用部はここまでとする)との記載がなされ、かつ、立ち読みにてすぐに同定できるところとして複数の教科書・参考書にもそうした記載がみとめられる)、しかし、英語圏では [グラナダ王国] とは [ナスル朝 (エミレーツ・オブ・グラナダ Emirate of Granada、ザ・ナシリッド・キングダム・オブ・グラナダと英文呼称されるナスル朝)の呼称] とは別物、征服側のキリスト教勢力側が [征服対象地に存在するもの] と号していた「本来あるべき」領域国家の呼称ともなっている(欧州人の見ているグラナダ王国とは他人の支配している土地をさして「あそこは我々の[グラナダ]ランドである」と呼称しているようなものでありもした)。

同じくものこと(グラナダ王国とはキリスト教勢力が征服対象地に一方的に存在を主張した王国の名でもあつたとのこと)、そして、[グラナダ王国]の紋章がグラナダとの地名と結びつくザクロであつたことについては英文 Wikipedia[Kingdom of Granada (Crown of Castile)]項目 ([グラナダ王国(カスティリーヤ君主制)]項目)にて “The heraldry of Granada was employed as a personal device by Henry IV of Castile before the conquest of Granada, **in the form of two fruited pomegranate branches, known as a granada in Spanish**, with the motto reinar es agridulce ("to

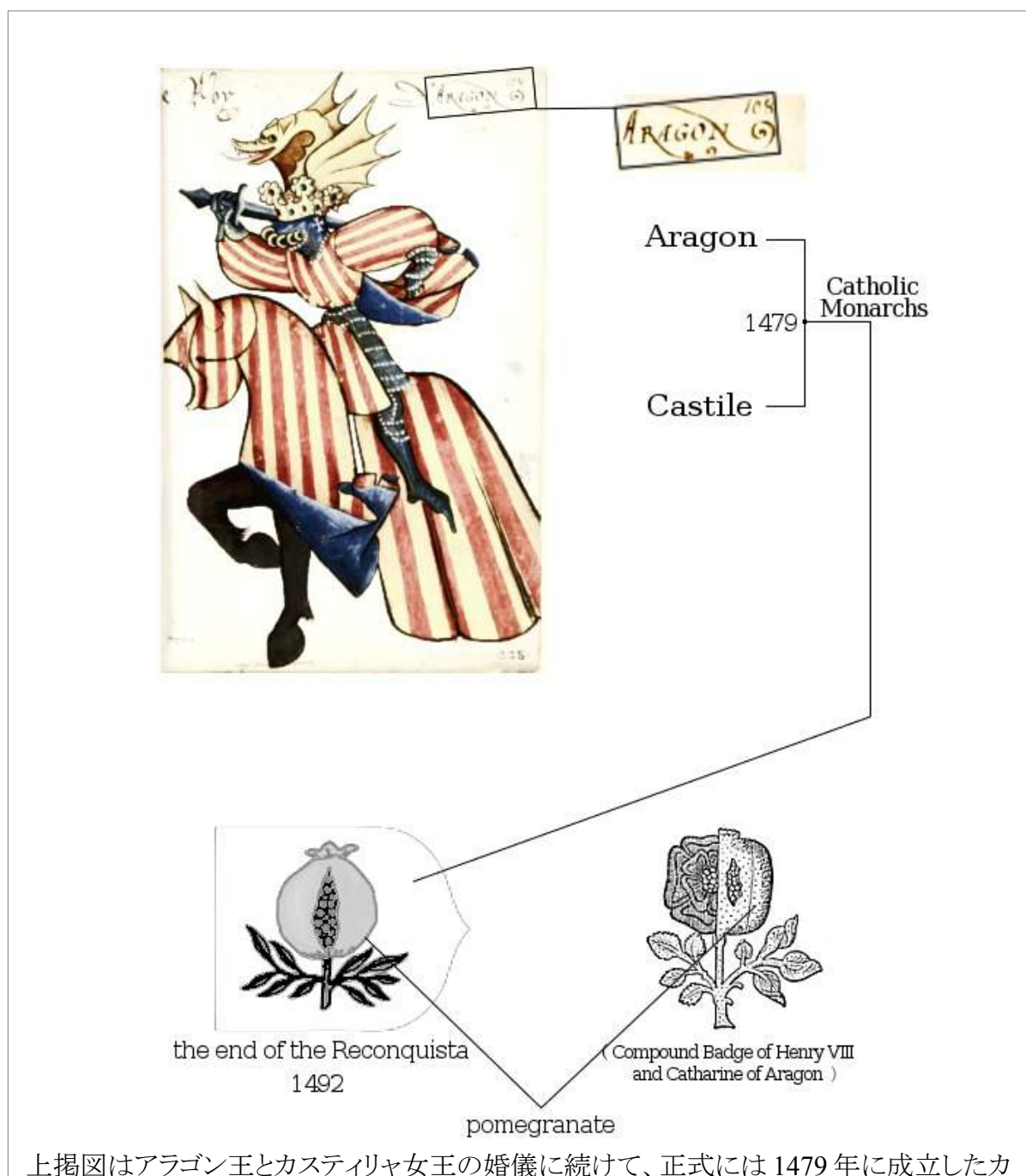
reign is bittersweet"). It was later incorporated into the coats of arms used by the Catholic Monarchs and their descendants. From 1475, the monarchs of Castile called themselves also monarchs of Granada, but it was not until 1492 that their military might made the title more than a boast. In 1497, a new coin, the excelente de granada featured the coat of arms of the Kingdom of Granada. This heraldic figure became part of Spain's national coat of arms. ” (訳として)「グラナダ紋章はカスティリヤ王国のエンリケ4世(Henry IV)にてグラナダ征服に先駆けて私的に採用されたとのものとなり、その形態は二つに枝分かかれし実をなしてのザクロ、スペイン語で[グラナダ]として知られるザクロの形状を取り、紋章モットーとしての[reinar es agridulce(統治なすことは甘く、また、苦いものである)]を伴っていた。同紋章は後にカトリック君主国およびその後裔の国家の紋章に取り込まれ受け継がれることになった。1475年までカスティリヤは彼ら自身をしてグラナダの統治者と自称もしていたが、そのことはその称号を同国軍隊が1492年に勝ち取る(訳注:グラナダに拠っていたイスラム王朝のナスル朝を滅亡させた、とのことである)まで高言にすぎなかった。1497年、新たな貨幣として the excelente de granada がグラナダ王国の [ザクロ] を模したものとして登場した。この紋章構図はスペインの国章の一部となりもした」(訳はここまでとする) と記載されているとおりでである

b.

[レコンキスタ]、すなわち、イベリア半島からのイスラム勢力の放逐運動兼領土拡大を進めていたアラゴン・カスティリヤ同君連合王国は1492年にかねてより [ザクロ] の紋章と(王たるエンリケ四世が)結びつけていたグラナダの地、すなわち、地名とザクロとの言葉が対応するようになっていたとの地 — (英文 Wikipedia [Kingdom of Granada (Crown of Castile)] 項目より “ The heraldry of Granada was employed as a personal device by Henry IV of Castile before the conquest of Granada, in the form of two fruited pomegranate branches, known as a granada in Spanish, with the motto *reinar es agridulce* ("to reign is bittersweet"). ” 「グラナダの紋章はカスティリヤ王国のエンリケ4世(Henry IV)にてグラナダ征服に先駆けて私的に採用されたとのものとなり、その形態は二つに枝分かかれし実をなしてのザクロ、スペイン語でグラナダとして知られるものの形状を取り、紋章モットーとしての [*reinar es agridulce*(統治なすことは甘く、また、苦いものである)] を伴っていた」との記述を先に引いているとおりにザクロとの言葉と地名が対応している地) — をイスラム王朝ナスル王朝を滅亡させることで名実ともに掌握するに至った(: 和文ウィキペディア [ナスル朝] 項目、の中にあつての、高校生ですらお勉強のために暗記を強いられるとのことを含む現行の記載内容を引けば、(原文引用するところとして) “ キリスト教徒の征服が差し迫った1487年、グラナダの法学者たちはムハンマド11世に対し、マムルーク朝に使節を派遣し救援を求めよう迫ったが、マムルーク朝の援軍は派遣されず、グラナダ攻略の見合わせを求めキリスト教修道士(聖墳墓教会)2名がカトリック両王に派遣されただけであった。1491年春にフェルナンド2世の1万騎の軍勢によりグラナダは包囲され、年末には籠城側の窮乏は限界となった。1491年末にムハンマド11世とカトリック両王間で降伏協定が結ばれ、1492年1月2日にグラナダは無血開城しレコンキスタが完了した” (引用部はここまでとする) とのこととおりでである。

そのグラナダの地(ザクロの地)の確保がなされた年と同様、1492年にコロンブスはかねてよりカスティリヤ女王イザベル1世と折衝していた新大陸発見事業につき国家よりのお墨付きを得た。すなわち、コロンブスが発見した土地にあつては同男が総督となる権利を、そして、公益上の紛争を裁く権利を与えられてのサンタ・フェ協約が締結されることになったとのことがある (によってコロンブスの発見事業は半ばもの国家公認事業となった。また、その航海費用の過半も王国より供出される運びとなった — 「本来ならば、引用先として望ましくはないと学術の世界では認識される媒体ながらも」「常識的なことについてはあまり謬見は認められないとの形となっており」「また、オンライン上より即時に確認できると

のメリットはある」英文 Wikipedia[Capitulations of Santa Fe]より記述を引けば、“ The Capitulations of Santa Fe between Christopher Columbus and the Catholic Monarchs were signed in Santa Fe, Granada on April 17, 1492. They granted Columbus the titles of Admiral of the Ocean Sea, the Viceroy, the Governor-General and honorific Don, and also the tenth part of all riches to be obtained from his intended voyage. The document followed a standard form in 15th-century Castile with specific points arranged in chapters (capitulos). Although not a formal agreement, the capitulations resulted from negotiation. ” (訳として)「クリストファー・コロンブスとカトリック教徒君主らの間の合意書は1492年4月17日、グラナダのサンタ・フェにて締結されることとなった。彼らはコロンブスが外洋にての提督の地位を保持すること、副王・総督、そして、栄典帯びての敬称としてのドン(Don)の称号を名乗れること、そして、彼が意図しての航海にて得たすべての富の十分の一を得られることで同意を見た。同文書はいくつか特殊な修正されての点を区分単位で含むとのものでありつつ15世紀カスティーリャにての正式文書としての体裁に準拠していた。公式の同意ではなかったが、合意書は交渉の賜物として得られたものでもあった」(訳を付しての引用部はここまでとする)といった風に細かくも記載されているところとなっている。そうして1492年にコロンブスは大西洋(アトランティック・オーシャン)の先に向けての航海に出た。



スティリヤ・アラゴン連合国が 1492 年にグラナダのザクロを掌中に収めてレコンキスタを完遂することになったとのことを示すために付した図となる。その点、上掲図左上は年代記に見るアラゴン王の[紋章を体現した象徴的似姿として描かれているとの姿]となる(出典となる史料は英文 Wikipedia に掲載されているとのものとなり、カスティリヤ王女と婚儀を交わした王たるフェルナンド 2 世の二代前の王アルフォンソ 5 世の治政に作成されたものとなる)。他面、下段の図らについてであるが、下段左は 1492 年、アラゴン王とカスティリヤ女王が婚儀結んで成立した同君連合国、カスティリヤ＝アラゴン連合国(英語圏では Catholic Monarchs と呼び慣わされる統治体)によって征服されたナスル朝の「後に」設置された統治体の紋章、[ザクロの王国紋章]となる(英文 Wikipedia [Kingdom of Granada (Crown of Castile)] に掲載されている紋章となる —(再述するが)日本ではイベリア半島に拠ったイスラム系の最後の王朝ナスル朝の別称をグラナダ王国とする風が強くもあるも、ここではその用法は取っていないとのこと、お含みいただきたい—)。加えて、下段図右についてではあるが、そちらはカスティリヤ＝アラゴン連合国、後のスペイン王国がいかようにしてザクロに対するこだわりを見せていたのかを示すために挙げたものとなり、出所は Project Gutenberg のサイトにて公開されているヘラルドリー、紋章学に関する 1909 年刊行の解説書たる A Complete Guide to Heraldry (同著者、その方面ではよく知られているようである紋章学関連の著述家 Arthur Charles Fox-Davies の浩瀚なる紋章学に関する知識がひしひしと伝わってくるような緻密なる解説書となる)より抜粋したものとなり、その図葉概要は [イギリス王室に嫁いだスペイン女王キャサリン・オブ・アラゴンとの兼ね合いで彼女の夫となったヘンリー 8 世と同キャサリン・オブ・アラゴンが共にバッチとのかたちで帯びていた紋章] となる(：[イギリスのティューダー朝王家の紋章たる赤薔薇・白薔薇紋章](ランカスター家とヨーク家の紋章の融合形)と[スペイン王家の象徴としての「ザクロ」]が合体を見ているとの紋章となり、といったものからしてスペイン王国のザクロへのこだわりが分かるようになっている —ちなみに(表記のようなザクロ・バラの混淆型であるバッジを帯びていたとのことである英国王の)ヘンリー 8 世となると自身の後添えアン・ブーリンに対する酷薄なる仕打ちでも歴史通には有名な王とはなっているが、呈示の紋章が生み出される契機となったキャサリン・オブ・アラゴンとの婚儀が「離婚」とのかたちで解消されたうえでヘンリー 8 世は同アン・ブーリンを娶っているのであり、その際、離婚を強行したヘンリー 8 世に対するカトリックからの破門措置、そして、イギリス国教会のカトリックからの分離とのかたちで歴史が展開を見ているとことがある(離婚と結びつきの揉め事のためにイングランド国教会が今日あるようなものになったことは日本でも高校生が世界史の科目で限定的に把握を強いられるぐらいに有名なことではあるが、キャサリン・オブ・アラゴンなど知らないとの向き、だが、アン・ブーリンのことは知っているといった向き、いたらば稀有であろうかもしれぬとの向きを一応想定しての多少細かくもの言及をなしておいた—)。

さて、ここより問題としたいのはスペインがザクロを掌中にしたその年、1492 年にあつてザクロの地(グラナダ)での協約(直上言及のサンタ・フェ協約)が原動力となつて開始された、[ヘラクレスの柱(ジブラルタル海峡)の先を目指しての航海]
[アメリカ大陸発見に結びついた航海]
がいかようにしてペルセポネと結びつくと述べられるようになっているか、である。

C.

上の b. にて紹介しているように、コロンブスのアメリカ大陸に向けての航海はスペイン(アラゴン・カ

スティリヤ同君連合) がグラナダを征服、「ザクロを食した」といった状況に至った直後にザクロを紋章とする土地、そして、ザクロとの言葉と対応しているとの地(グラナダ)のサンタ・フェでの契約を下に実現を見たとのものと述べられる。 といったコロンブス航海によって発見されたアメリカ大陸の植民地化事業を推進していたスペインは [ヘラクレスの柱およびそこに刻まれての特徴的なモットー(標語)] を紋章として利用するようになっていった。そして、その紋章ありようには新大陸へのスペインのスタンスが介在していると考えられる、[ジブラルタル海峡](南端をアフリカ、北端をイベリア半島とする地中海と大西洋の門となる海峡) が [ヘラクレスの柱]にて歴史的に象徴されてきたとの中でスペインのスタンスが介在しているように考えられるようになっていくとある。

それにつき、まずもって述べるが、

「ジブラルタル海峡に仮託される [ヘラクレスの柱] は古代より大西洋 (アトラスの海ことアトランティック・オーシャン) の先には何もない、そこより先に向かったものは戻ってこれないとの認識の下、ラテン語の *Nec Plus Ultra*「この先には何もない」とのフレーズと共にあったとされるのであるも、といったヘラクレスの柱の象徴的理解に対してカスティリヤ・アラゴン王国を継ぎスペイン王国の盟主となっていたハプスブルク家出身のスペイン王カルロス 1 世(同王、ドイツ皇帝位を戴いてのカール五世でもある)が *Nec Plus Ultra* とのそのモットーの部を *Plus Ultra*「この先を越えて」と変えて自己の標語として用いたとの経緯がある」

とされる。

以下、典拠を紹介するが、といった事情あってカルロス 1 世が王として君臨したスペインのモットーとなり *Plus Ultra* (この先を越えて) とのモットー付きのヘラクレスの柱そのものがスペイン国の紋章となったとの経緯があるともされている。

出典 (Source) 紹介の部 98

SOURCE 98



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典(Source)紹介の部 98 にあつては、

[ザクロのグラナダ王国を掌握することでレコンキスタを終えて大海原(ヘラクレスの柱で体现されるジブラルタル海峡を越えた先にある大西洋)に漕ぎ出したスペインの紋章が[ヘラクレスの柱と結びつくプルス・ウルトラ「さらに越えて」との標語]を用いてのものであった]

とのことの出典をここに挙げる。

まずもって基本的なところとしてそこよりの引用からなしはじめるが、オンライン上より即時確認できるところとして和文ウィキペディア[プルス・ウルトラ(モットー)]項目には「現行」、次のように記載されている。

(直下、和文ウィキペディア[プルス・ウルトラ(モットー)]の現行にての記載内容を引用するところとして)

プルス・ウルトラ(Plus Ultra,ラテン語でもっと先へ、もっと向こうへ、更なる前進)はスペインの国のモットーで、カルロス1世(神聖ローマ皇帝カール5世)の個人的なモットーから採用された。『グラナダにおけるカール5世の宮殿』(1985年)の著者アール・ローゼンタールはこのモットーの起源を研究した。モットーはヘルクレスの柱と密接に結び付けられた。それは…(中略)…当時知られていた世界の果てを示している。神話によれば、その柱はネク・プルス・ウルトラまたはノン・プルス・ウルトラ(Nec Plus Ultra, Non Plus Ultra,先には何も無い)という警告を発して、船員たち、探検家たちがそれ以上進まないための警告として役立っていた。

(引用部はここまでとする)

直近引用部では

[プルス・ウルトラが[もっと先へ]を意味するフレーズであること、それがスペイン国旗・国章に刻まれていること、元来、ネク・プルス・ウルトラとの文言が[この先には何も無い]との意味合いでヘラクレスの柱に刻まれていたとの伝承があること]

が言及されている。

につき、ウィキペディアなどより重んずべきもの、そして、オンライン上より即時に確認できる引証の材としての出典を挙げるとすれば、Project Gutenberg のサイトにて全文公開されている19世紀末の書、A SHORT HISTORY OF SPAIN (1898年刊行、Mary Platt Parmele という19世紀から20世紀活動の歴史家の手になる書籍)にてCHAPTERのIII、その18ページより抜粋するところに次のような記載がなされているところでもある。

(直下、Project Gutenberg より全文ダウンロード可能であるところの A SHORT HISTORY OF SPAIN (1898)にての CHAPTER III の記載内容よりの原文引用をなすとして)

In order to understand the indifference of Rome to the Spanish Peninsula at this time, it must be remembered that Spain was then the uttermost verge of the known world, beyond which was only a dread waste of waters and of mystery. To the people of Tyre and of Greece, the twin "Pillars of Hercules" had marked the limit beyond which there was nothing; and those two columns, Gibraltar

and Ceuta, with the legend ne plus ultra entwined about them, still survive, as a symbol, in the arms of Spain and upon the Spanish coins; and what is still more interesting to Americans, in the familiar mark (\$) which represents a dollar. (The English name for the Spanish peso is pillar-dollar.)

(拙訳として)「当時のローマの(現行にては)スペインを擁する半島に対する無関心さを理解するためにはスペインが当時、[既知の世界の極限の縁(へり)]に存在しており、そこを越えてあるのは[水と神秘の恐るべき荒地]であった(と考えられていた)とのこと、思い出されねばなるまい。ツロとギリシャの人々にとり「双子のように対なすヘラクレスの柱」は「その先には何もない」との限界線を示すものであり、そして、ジブラルタとセウタに存する二つの柱は伝説の ne plus ultra (この先には何もない)がそれらにまわりつくところとなりながら、スペイン貨幣上のスペイン紋章に見るシンボルとし、そして、アメリカ人にはより興味深いことにドルを体現するよく知られたドルマーク(スペイン・ペソ通貨の英語呼称は「柱のドル」となる)のシンボルとし、未だ存続を見ている

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上にての 19 世紀末に世に出ている歴史家の手になるスペイン史簡易解説書籍にては

[ジブラルタル海峡(欧州サイドをジブラルタル、アフリカサイドをセウタとする海峡)の象徴物としての双子の一对の柱たるヘラクレスの柱に「この先には何もない」との意味で ne plus ultra の碑が刻まれていたとの伝承が存すること、また、そのような碑が刻まれていたとされるヘラクレスの柱が(19 世紀末にて)スペイン紋章およびドル・マークにその姿を留めていること]

とのことが記載されている。

以上で指し示しを十全になしていることか、ともとらえるが、同様にオンライン上より即時確認できるとのメリットはある媒体よりの抜粋をもう少しなしておく。

(直下、英文 Wikipedia[Charles V, Holy Roman Emperor]項目にての Coat of Arms of Charles V(カール五世の紋章)の節よりの引用をなすとして)

Charles I also incorporates the pillars of Hercules with the inscription "Plus Ultra", representing the overseas empire and surrounding coat with the collar of the Golden Fleece, as sovereign of the Order. Being crowned Emperor in 1519, ringing the shield with the imperial crown and Acola double-headed eagle of the Holy Roman Empire and behind it the Spanish Cross of Burgundy.

(訳として)「スペイン王カルロス1世 (訳注: Charles I. 神聖ローマ帝国皇帝としては Chales V となり、日本語読みではカール5世) はまた(自身の)紋章にてのヘラクレスの柱にプルス・ウルトラの文言を組み込み、もってして、海外に広まった帝国 (訳注: ハプスブルク家出身のカルロス1世・兼・ドイツ皇帝カール5世の統治下のスペインは新大陸に足場を固め[日の沈まぬ帝国]と化していたことが知られている — 日本で世界史をお受験に使うことをした高校生ですら把握を求められるとの通用度合いの高い知識となる —) を表象し、紋章外面を金羊毛騎士団、同騎士団の絶対的優位性を示すものとして金羊毛の襟章 (訳注: 15 世紀に設立され、後にハプスブルクを中心とした紐帯になった定員数極少数の騎士団、欧州の際立っての貴顕が名を連ね、日本

の皇室もその勲章を与えられているところの[ギリシャ神話のイアソンに主導されての金羊毛皮ゴールデン・フリース獲得のためのギリシャ神話英雄がオールスター出演した伝承]に由来する金羊毛騎士団の襟章(えりしょう) で囲んだ。カルロス1世が1519年、皇帝位を授与されたことを受け、紋章にての楯の部は帝国の宝冠、神聖ローマ帝国の双頭の鷲にて周辺を円環に取り囲まれることになり、その後ろにバーガンディーのスペイン十字が配されるに至った」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

また英文 Wikipedia[Plus ultra (motto)]項目にては次のように記載されている。

(続いて直下、英文 Wikipedia[Plus ultra (motto)]項目よりの引用をなすとして)

The motto became popular in Spain after Charles V became king of both Aragon and Castile in the early 16th century. It subsequently became the motto of Habsburg Spain and featured on the Spanish dollar. The motto was used to encourage Spanish explorers to go beyond the Pillars of Hercules and on to the New World. Today the inscription, along with the Pillars of Hercules, is featured on both the national flag and emblem of modern Spain. It was also featured on the shield of the Second Spanish Republic.

(訳として)「プルス・ウルトラとのモットーはカール五世が16世紀前半にてアラゴン・カステール両国の王になった後にてのスペインにてよく知られたものとなった。同モットーは順次、ハプスブルク家統治下のスペインのモットーとなり、そして、スペインドルにて示されるとのものになった。同モットーはスペイン人探検家らが新世界(アメリカ)へとヘラクレスの柱を越えて行くことを鼓舞するために用いられたとのものである。今日、ヘラクレスの柱の側にての同標語の刻み込みがスペインの国旗および国章の双方にて特徴的に見て取れるようになっている。それはまた、第二スペイン共和国の紋章、その楯の部にてもその特徴をなすものとして用いられていたものであった」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

(**出典(Source)紹介の部98**はここまでとする)

これにて c. にて表記のこと、

「スペインがグラナダ(ザクロ)を扼するに至った年、グラナダの地にて1492年に締結されたサンタ・フェ協約に基づき、コロンブスの冒険的航海がスタートを見、新大陸アメリカが「発見」された。その新大陸アメリカの征服を国家として促進したとのスペインはジブラルタル海峡(大西洋と地中海を分かち海峡)の象徴物たる[ヘラクレスの柱]に「この先を越えて」Plus Ultraとの標語を加えてのものを国家の紋章として新大陸に漕ぎ出して行く者達を鼓舞した」

とのことの指し示しとなした。



Coat of Arms of Charles I of Spain

(from wikipedia [Charles V, Holy Roman Emperor] article, author: Heraldry)

Charles I of the Spanish Empire
Charles V of the Holy Roman Empire

[Nec Plus ultra (nothing farther beyond) of twin pillars of Hercules]
 → [Plus ultra (farther beyond)]

" In order to understand the indifference of Rome to the Spanish Peninsula at this time, it must be remembered that Spain was then the uttermost verge of the known world, beyond which was only a dread waste of waters and of mystery . To the people of Tyre and of Greece, the twin "Pillars of Hercules" had marked the limit beyond which there was nothing ; and those two columns , Gibraltar and Ceuta , with the legend ne plus ultra entwined about them , still survive , as a symbol , in the arms of Spain and upon the Spanish coins ; and what is still more interesting to Americans , in the familiar mark (\$) which represents a dollar : (The English name for the Spanish peso is pillar-dollar . "

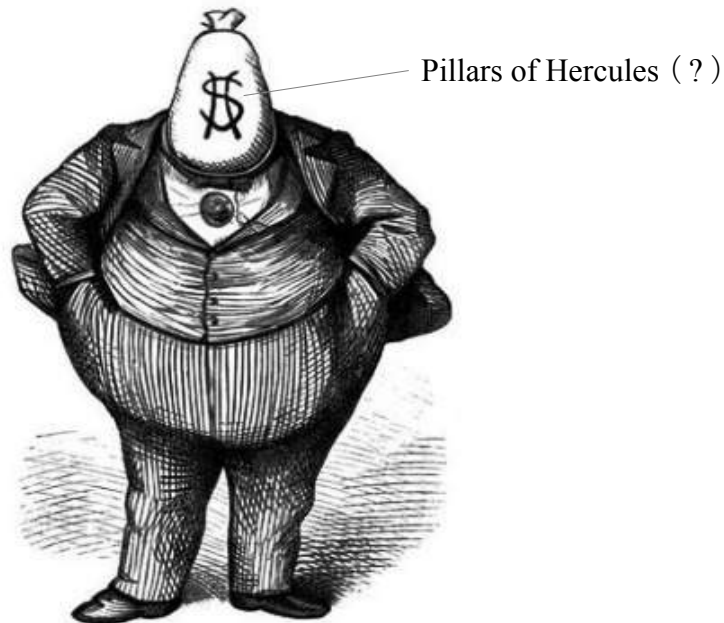
———— A SHORT HISTORY OF SPAIN (1898)
 CHAPTER III

視覚的理解を促すための図を挙げておく。
 その点、上掲図左上の部にあっては

[スペイン王[カルロス1世](英文表記は Charles I)との立ち位置に加えて後に神聖ローマ帝国皇帝[カール5世](英文表記は Charles V)としての立ち位置も兼ねるようになり名実共に[日の沈まぬ帝国]の君主となったとのハプスブルク王朝主導者の似姿を描いた肖像画 —— (同画にあっての鎧にての反射光を描く絵筆の妙からして唸らされるようなところがある、その卓抜した腕前がゆえに16世紀にあって声望を博していた肖像画家ティチアーノの作としてのカール5世肖像画) ——]

を挙げておくこととした。同肖像画に描かれたカルロス1世・カール5世が鷲を軍旗としていたローマの継承者としての自負から自分達の紋章としていたとの[双頭の鷲]、ハプスブルクの表象としての[黒き双頭の鷲]を刻み込んだスペイン紋章に [Plus Ultra [この先を越えて]とのフレーズとワンセットになったヘラクレスの柱]をもまた刻み込んだということを示すために挙げたのが上掲図右上の紋章呈示の部となる(出典は英文 Wikipedia となる)。

カルロス1世にしてカール5世でもある大領域国家の君主が [ヘラクレスの柱に Plus Ultra[この先を越えて]との文言を加え込んだもの]を紋章に加えたこと、そのことにまつわる文字情報としての典拠についてはここまでにて細かくも紹介してきたところだが、とにかくも、上掲図でもってしても紋章に刻み込まれた、[ヘラクレスの柱と Plus Ultra[この先を越えて]]がいかなうなものなのか、視覚的にも理解いただけることか、と思う。



拝金宗の信徒ら(男を金づるとしか見ないような性質をもった骨の髄までの水商売のお姉さん方や金などのために人の尊厳を犯罪的「ビジネス」で鋳つぶすことを是とするが如き相応の脂ぎった男共が拝金宗の最たる信徒だろう)が[ほぼ万能の存在]として崇め奉るマニー。そのマニーにあって事実上の世界基軸通貨と化しもしているドラーに刻まれる二本線の由来は[ヘラクレスの柱]にあるといわれている(上にて呈示のイラスト、 **Project Gutenberg** にて公開されている **CARICATURE AND OTHER COMIC ART IN ALL TIMES AND MANY LANDS (1877)** との19世紀洋書に掲載のイラストにはドルマークに二本線が入っていること、お分かりだろうが、先んじての引用部ではその由来が「ヘラクレスの柱にあり」との表記を引いている)。そして、本稿では往々にして【空虚なる紛い物】に固執する — マニーでなければ、「市井の」宗教警察がときにその実効性を担保しようとする宗教的狂信などの紛いものに固執する — 人間という種族を「皆」殺しにすると宣言・前言しているが如き力学がまさしくもの(ドルマーク由来とされる)ヘラクレスの柱にまつわるものであることを告発なさんとするものである — なおもってして述べておくが、筆者は[貨幣の物神崇拜]といった言いまわしに固執する(『資本論』を読むぐらいの程度はすくなくとも有している)左翼でもなければ、(他所からの借り物でも)信用創造機能(経済学にての基礎となる概念)でマニーを生産する中央銀行についての陰謀論をそればかりに問題が収斂しているように振り回す相応の陰謀論者の類でもないこと、一応、断っておく(筆者は我々の生存の限界線に関わる問題を客観的に煮詰め、そちら成果物で自身の属する種族に問題本質を問いたいと考えている、ただそれだけの人間である) —

d.

ここに至るまで

[1492年:ザクロを紋章とすることになった王国の所在地にしてスペイン語のザクロが地名と対応しているとの地グラナダの制圧によるスペイン(カスティリヤ・アラゴン同君連合)のレコンキスタ完遂] → [いわばものザクロを食した状況の具現化] → [1492年:ザクロのグラナダにてのサンタ・フェにての協約の締結によつてのクリストファー・コロンブスの新大陸発見航海の開始] → [16世紀(スペインの新大陸植民地化事業が進んだ1500年代)にてのスペイン紋章にてのヘラクレスの柱および Plus Ultra の刻字、そして、それによる新大陸事業関係者への鼓舞]

との史的経緯について指し示してきた。

以上の流れが何故、問題になるのか。

これより順次、その点についての詳解を加えていくが、問題であると見立てているのは一義的には

「冥界の女王ペルセポネに通ずる「残酷な」複合的關係性を同じくものところに見出せる」

とのことが「ある」からである。

その点、まずもって述べるが、

「ペルセポネはザクロを食したため冥界の住人になったと伝わる存在である」(先にも [エレウシス秘儀] にまつわるところとして英文 Wikipedia [Eleusinian Mysteries] 項目にての Mythology of Demeter and Persephone の部にての記載として “ Zeus, pressed by the cries of the hungry people and by the other deities who also heard their anguish, forced Hades to return Persephone. **However, it was a rule of the Fates that whoever consumed food or drink in the Underworld was doomed to spend eternity there. Before Persephone was released to Hermes, who had been sent to retrieve her, Hades tricked her into eating pomegranate seeds, (six or four according to the telling) which forced her to return to the underworld for some months each year. She was obliged to remain with Hades for six or four months (one month per seed) while staying above ground with her mother for a similar period.** ” (訳として) 「ゼウスは飢えた人々の叫び、そして、苦痛の声を聞いた他の神々に圧力受けるとのかたちにて(冥界の主権者たる)ハデスをしてペルセポネを帰還なさしめた。しかしながら、冥界の飲食物を口に入れたものは誰であれ冥界にて永劫、時を費やすことになる (訳注:日本の伊弉冉(イザナミ)神話に見る黄泉戸喫(ヨモツヘグイ)と通底する神話的設定でもある) というのが「運命の神ら」が定めたルールでもあった。ヘルメス(訳注:伝令としての神格)の元へとペルセポネが解放なされる前にハデスは彼女をして(冥界に由来する)柘榴(ざくろ)の種(伝承によれば六ないし四)を騙して食させしめ、そのことが年に何ヶ月かはペルセポネをして地下世界に戻らしめることになった。彼女は同じくもの期間、母の元にて上の世界に留まる一方でのこととして、六ヶ月ないし四ヶ月(実ひとつに対して一ヶ月)冥界のハデスの元に留まることを強られることになった」(訳付しての引用部ここまでとする)との内容を引いていたとおりのこととして [ペルセポネがザクロを食したために冥界の住人になった] とのことは欧米圏にて実によく知られていることである)。

図示なしながらも脇に逸れての話として

ここでは脇に逸れての話、それも多少、

[行き過ぎて過度に憶測がかった話と見做されましょうとの話]

を意図的になしておく。

以上、そうした話の性質につき断ったうえでのこととして、である。下の図をご覧頂きたい。



Grenade



Pomegranate = (spanish) Granada

図にての上の段では[手榴弾]（英語でいうところのハンド・グレネード）の姿を挙げている。細かくは上の段にての左側が「安全ピン装着式としては」第一次大戦にあって初出の[手榴弾] 似姿が一次大戦直後に刊行された著作（Project Gutenberg のサイトにて全文公開されている1919年に刊行の *Inventions of the Great War* との著作）にあって[一次大戦付随の発明]として紹介されているものとなり、他面、上の段にての右側が（1906年に発明されたとされる[近代式手榴弾]）に間を経ずにの一次大戦から今日あるような[安全ピン]を付

けられたバージョンが登場しだしたとの)手榴弾がマイナーチェンジを継続けた結果、今日、米軍らに主力兵器として採用されている[M67「破片式」手榴弾]の似姿となる。さて、呈示の図の見るような「破片式」手榴弾とは英語で表記するところの fragmentation hand grenade のものであるが、その兵器名、手「榴」弾というものが元来からしてそうであるように爆発力それ自体で標的を殺傷する兵器であるのと同時に爆発として飛び散った碎片ら ―悪魔の果実種でもいいだろうが― でもって標的を殺傷する兵器であることを強くも前面に押し出している名称とも言える(その点、[爆発で飛び散らせて対象を害するように仕込まれている碎片の束]でもって殺傷をなそうとの兵器発想法がいかなうものなのかは ―ここでの話が意図しているザクロ、その果実の問題にも通ずるところがあるからこそ、細々と言及するのだが― その史的背景も含めて英文 Wikipedi[Fragmentation (weaponry)]項目に詳しい)。

下段の図はザクロの学名 *Punica granatum* ―(granatum と granada との言葉を(先になしている話からお分かりいただけようかとは思いますが)同系統の言葉である)― と結びつくところとして作成されもしているものを引いてのザクロ細部紹介図となる。

さて、米軍歩兵の主力兵器となっている M67 破片手榴弾(上掲図上段図右)と下のザクロ概要図に見るザクロ似姿に

[形状上の「際立っての」相似形] (細かき湾曲の仕方も含めての相似形)

を見出すのは容易いのであるが、米軍歩兵主力兵器がそうした似姿になっているのは(人間工学的合理性を追求した結果とのこともあろうかとは思いたくもあるのだが)ザクロとの関係性が当然に想起されることとなっている。というのも、手「榴」弾、ハンド・グレネードに見るグレネードの名称はそもそも柘「榴」ザクロ、スペイン語ではグラナダにもなるとのザクロと密接に結びついているとのことがあるからである(：戦争映画などで兵隊らが英語で「グレネード!」と喚いているのをご覧になられた向きもあるかもしれない。そういう描写は投擲するか、投擲されてくる手榴弾グレネードの語源がザクロにあるとのことを顧慮すれば、「ザクロ!」と喚きたてているのに等しいとのことでもある)。

(直近述べてのこの出典として：まずもって英文 Wikipedia [Hand grenade] 項目にての Etymology (語源) の節にての現行記載を挙げおく。

(原文引用するところとして)

“ The word "grenade" derives from the French word for a "small explosive shell". **Its first usage in English dates from the 1590s. It is likely derived from Old French pomegranate (influenced by Spanish granada), so called because the many-seeded fruit suggested the powder-filled, fragmenting bomb, or from similarity of shape.** ” 「グレネードとの言葉は [微少なる爆発に伴う碎片] を意味するところのフランス語に由来している。同語の最初のイギリスでの使用年次は 1590 年代に遡る。それは相応しくも古フランス語の [ザクロ] の語 (スペイン語のグラナダ = ザクロに影響を受けている言葉) にそうなるべくして由来している、というのも、多数の種を含むザクロ果実が火薬で満たされ破裂する爆弾と通ずるところがある、ないしは形状上の相似形があるからである」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

以上のことだけでは納得できなからう向きもあろうか、と思うから、そも、hand grenade の grenade、上にてはスペイン語のザクロ(グラナダ)に影響を受けたとも記述されているそのフランス語単語がザクロそのものを指す言葉であるとのことについてさらなる引用をもなしておくこととする。

については英文ウィキペディアのザクロにまつわる項目よりの引用をなしておくこととする。

(以下、英文 Wikipedia[Pomegranate]項目にあつての Etymology and terms for pomegranate in other languages[ザクロの語源とザクロを指す他の言語での言葉として]の節での現行記載内容より原文引用をなすとして)

“The name pomegranate derives from medieval Latin pomum "apple" and granatum "seeded". This has influenced the common name for pomegranate in many languages (e.g. granada in Spanish, Granatapfel or Grenadine in German, grenade in French, granatapple in Swedish, pomograna in Venetian).” 「pomegranate(ザクロ)との言葉は中期ラテン語にての林檎を指す pomum と果実に恵まれたを指す granatum に由来している。これが諸種言語にてのザクロの共通する呼称に影響を与えている。例えば、(ザクロを指すところとしての)スペイン語にあつての granada、ドイツ語にあつての Granatapfel ないし Grenadine (訳注:アプフェル apfel はドイツ語では林檎を指す語であり、それが grana との接頭語と結びつけられている)、フランス語の grenade (訳注:ここがハンド・グレネードのグレネードがフランス語のザクロとなっていることを示す部となる)、スウェーデン語の granatapple、ヴェネチア様式の pomograna などがそうである」
(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

さて、欧米で第一次大戦の折にあつて安全ピン装着型の今日あるような形状が生み出されたとの携行型ザクロ、ハンド・グレネード、それが戦中期日本にあつて自決用 一軍属・民間人双方にての自決用— に多用されたとのことがあるのはよく知られたことである (映画などではクリントン・イーストウッドが撮った『硫黄島からの手紙』、同映画にて酸鼻を極め現実もまたさもあつたのであろうといったかたちで手榴弾を使つての自決がインパクト強くも多数回描かれている)。

といった先の大戦での日本での手榴弾による自決はハンド・グレネードとの言葉のありようから、

[ザクロ(グレネード)の実(四散する碎片)を喰らつての死]

であつたとも言い換えられるわけだが、それはもののいいようとして

[日本の死と汚れの神・伊弉冉(イザナミ)の伝承]

ともオーバーラップするものであると述べれたらばどうか。

その点、

「ペルセポネは冥界の食べ物たるザクロの実を食して現世に顕現できない冥界の住人になつたと伝わるが(直近にて基本的なる典拠は挙げているところである)、日本のイザナミにあつて「も」冥界の食べ物を食して現世に後戻りできない冥界の住人になつた —いわゆる黄泉戸喫(よもつへぐひ)をなして冥界の後戻りできない冥界の住人になつた— との伝承が伝わっており」(イザナミの似姿を見たイザナギの恐怖と狼狽の話ばかりが目立っており、あまり知られていないことだが、そういうエピソードが伝わっており)、

とすれば、

「ペルセポネの冥界入りの果実たるザクロ(グラナダ/グレネード)を喰らつて現世と決別するという最期のありようは [伊弉冉(いざなみ)の黄泉への定着方式] と記号論的には結びつく」

とも述べられるとのことがある（出典表記として：イザナミがいわゆる「黄泉戸喫（よもつへぐひ）」なる行為をなして、すなわち、冥界の飲食物を食して冥界の住人になったとの描写が古事記になされていること、そのことの出典表記もなしておく。それに関しては和製 Project Gutenberg とも言えるかたちで著作権が喪失を見た著作を無償公開しているとの青空文庫にてのページでも全文閲覧できるところの角川書店出版版『古事記』（昭和にあつて国文学者として令名を馳せていた武田祐吉によって監訳されている版）より次の記載内容を — 「青空文庫、黄泉戸喫」などとの検索エンジン入力で該当部記述をオンライン上より特定できようことかとは思ふが — 原文引用しておくこととする。（武田祐吉監修の『古事記』より該当部引用するところとして）“ここに伊耶那美の命の答へたまはく、「悔やしかも、速（と）く來まさず。吾は黄泉戸喫（よもつへぐひ）しつ。然れども愛しき我が汝兄（なせ）の命、入り來ませること恐（かしこ）し。かれ還りなむを。しまらく黄泉神（よもつかみ）と論（あげつら）はむ。我をな視たまひそ」と、かく白して、その殿内（とのぬち）に還り入りませるほど、いと久しくて待ちかねたまひき”（引用部はここまでとする）。お分かりのことかとは思ふが、ここで問題視しているのは「文献的事実の問題」としてイザナミが“悔やしかも、速（と）く來まさず。吾は黄泉戸喫（よもつへぐひ）しつ。然れども愛しき我が汝兄（なせ）の命、入り來ませること恐（かしこ）し”と述べている部である — 現代文で表せば、「来るのが遅すぎました。すでに私は「ヨモツヘグイ」してしまった（黄泉のものを食してしまった）のです。しかしながら、愛しいイザナギ様がやってきてくれたこと、まことに恐れ多いことです」とでもなるうかといった部を重んじている — ）。

それにつき、日本の記紀神話に見る、

「冥府に亡き妻を求めて向かったイザナギ（イザナミノミコトの夫）が腐乱したイザナミを見たがためにイザナギと訣別をなすことになった」

との一幕、いわゆる「見るなのタブー」に関わる一幕が含まれていることは有名なことではあるが（和文ウィキペディア「イザナミ」項目にあつての現行の記載を — 出典表記を重んじる本稿であるからこそ、煩瑣でありながら、そして、読みやすさを犠牲にしながらそのようなことまでわざわざなしているとの式で — 引用するところとして）“死後、イザナミは自分に逢いに黄泉国までやってきたイザナギに腐敗した死体（自分）を見られたことに恥をかかされたと大いに怒り、恐怖で逃げるイザナギを追いかける。しかし、黄泉国と葦原中津国（地上）の間の黄泉路において葦原中国とつながっている黄泉比良坂（よもつひらさか）で、イザナミに対してイザナギが大岩で道を塞ぎ会えなくしてしまう。そしてイザナミとイザナギは離縁した”（和文ウィキペディア「イザナミ」項目よりの引用部はここまでとする）と表記されているようなところである）、同じくものその「見てはならないのタブー」に関わる側面で古代ギリシャのペルセポネと関連するところの神話がイザナギ・イザナミ神話に共通する側面を帯びているとのことがこの話 — 日本にてのザクロ（グレネード）による自決・玉砕・冥府行きとギリシャのペルセポネのザクロ飲食による冥府の存在化に関するこの話 — に重みを持たせるところともなっていると申し述べたいとのこと「も」ある（先にペルセポネとイザナミの間には冥界の食べもの摂取による冥界の住人化との話が伝わっていると紹介したが、彼女らには「振り返って見てはならないのタブー」の問題も関わっている）。

ギリシャ神話にあつてはオルフェウス、その豎琴と歌の名手オルフェが冥王ハデスと「ペルセポネ」からの許しを受けて自身の亡き妻エウリュディケの現世への引き戻しを「彼女の姿を見なければ」との条件付きで認められたとの一幕が存在しており、そこにあつてはオルフェウスが妻エウリュディケの姿を見たために彼女と永劫に訣別したとの伝承が伝わっていることも

[[ギリシャ神話]（柘榴を食して冥界の者になったペルセポネも関わる冥界を生死両界を境にしての訣別の神話）と[[日本の神話]（イザナミと黄泉戸喫（よもつへぐひ）して冥界の者となったイザナギの生死両界を境にしての訣別の神話）の

結合点]

として挙げられる、それがゆえに、話の重みを増させるところ「でも」と述べたいということもある。

(出典表記として:オルフェウスが亡き妻エウリュディケを追って冥界下りをなし、もって、その返還を冥府の王ハデスと王妃ペルセポネに請うた、美しき豎琴の調べをもってして請うたがために、「振り返らざるに妻の魂を現世に連れ戻せたらば」、との条件付きで妻の返還を赦されたとのエピソードについての神話的エピソードにまつわる典拠紹介からなしておく。具体的には Project Gutenberg のサイトにて公開されている古色蒼然とした書たる *Myths and Legends of Ancient Greece and Rome* 『古代ギリシャおよびローマの神話と伝承』にあつての Orpheus 関連エピソードの部より掻い摘まんでの抜粋をなしておくこととする。(以下、表記著作よりの引用をなすとして) “ His longing to behold her once more became at last so unconquerable, that he determined to brave the horrors of the lower world, in order to entreat Aides to restore to him his beloved wife. Armed only with his golden lyre, the gift of Apollo, he descended into the gloomy depths of Hades, where his heavenly music arrested for a while the torments of the unhappy sufferers. [. . .] Undismayed at the scenes of horror and suffering which met his view on every side, he pursued his way until he arrived at the palace of Aides. Presenting himself before the throne on which sat the stony-hearted king and his consort Persephone, Orpheus recounted his woes to the sound of his lyre. **Moved to pity by his sweet strains, they listened to his melancholy story, and consented to release Eurydice on condition that he should not look upon her until they reached the upper world. Orpheus gladly promised to comply with this injunction, and, followed by Eurydice, ascended the steep and gloomy path which led to the realms of life and light. All went well until he was just about to pass the extreme limits of Hades, when, forgetting for the moment the hard condition, he turned to convince himself that his beloved wife was really behind him. The glance was fatal, and destroyed all his hopes of happiness;** ” (訳をなすとして)「彼女(亡き妻エウリュディケ)への哀憐の情はついには克服しがたきものとなり、それがゆえ、彼(オルフェウス)はアイデス(冥王ハデス)に最愛の妻を返すように求めるため、地下世界の恐怖をものともせずのに拳を敢行することにした。アポロンよりの贈り物であった黄金の豎琴のみを帯び、彼オルフェウスが天上の音の調べにてしばしの間、不幸なる囚われ人の苦しみを和らげたとの冥界ハデスにあつての陰鬱なる深みへと降りて行った。…(中略)…どこにいても眼前にあつた恐怖と苦しみの光景に周章なしながらも、オルフェウスはアイデス(冥王ハデス)の宮殿に至るまで探索をなし続けた。無情なる冥王ハデスおよびその妻ペルセポネが座すとの玉座の前に詣でて、彼オルフェウスは豎琴の調べにあわせて苦難の物語を語った。オルフェウスの甘き旋律に憐情を催すところがあり、ハデス・ペルセポネらは妻エウリュディケを彼が[現世](地下世界に対するアッパー・ワールド)に至るまでに彼女似姿を振り返って見ないのならば、との条件付きでエウリュディケを解放することに同意した。オルフェウスは喜んでこの(解放にあつての)差し止め条項を呑み、エウリュディケを連れ立つとのかたちにて生命と光の領域(現世)に向け、陰しく、そして、沈鬱なる道を登っていくこととなった。全てが順調に運び、まさしく冥界との極限の部を通りこそうとした際、ほんの寸刻、状況の困難さを忘れ、彼は自分の最愛の妻が本当に自分の後ろにいるのかどうか確認すべく

も振り返りをなしてしまった。その一目が致命的となり、オルフェウスの幸せへの望みを断ち切ることとなった」(訳を付しての引用部はここまでとする)。



Orpheus and Eurydice

ここまでの内容を整理する。

「ギリシャ神話におけるペルセポネは「冥界に属していたザクロを食して冥界の存在(冥界の女王)と「確定」した存在」と伝わっている。他面、日本の記紀神話における伊弉冉(いざなみ)は「冥界の飲食物を飲食した、黄泉戸喫(よもつへぐひ)をなしたために冥界の存在として「確定」した女神」と伝わっている。

といった共通項のみならず、ギリシャ神話では「ペルセポネ」らの許可を受けて最愛の妻を冥府から連れ出そうとしたオルフェウスがその妻(エウリュディケ)の姿を振り返って見てしまったがために彼女と幽冥境にすることになった、エウリュディケの冥界の存在としての側面が「確定」し生死両界を挟んでの離別をなすことになったとのエピソードが伝わっている。それと極めて似たようなところとして日本の記紀神話でも亡き妻イザナミに逢うために黄泉へやってきたイザナギ神につき「イザナミの姿を見たために彼らの訣別が固まった」との描写がなされている。

そうした按配で複合的類似性を呈している[(ペルセポネ関連の)ギリシャ神話と日本神話にての特定描写]に関わる場所として—「イザナミ・イザナギが大戦終結まで実質的国教であったとの国家神道にあっても[国産みをなした神]として崇拝をなされていたことに関わる場所でもあるように」映るところとして—日本にては戦中期、[ザクロ(グレネード)を喰らっての冥府行き]が戦地自決とのかたちで横行していた。それをして偶然で片付けられるところと言えるか(イザナミ・イザナギを国産みの神として尊崇視するとの体系

を核に据えての国家神道が人々の精神を拘束していた際に「天皇陛下万歳！」などと今際の際にて大音声(だいおんじょう)で呼ばわり、[現人神]としての風采の上がらぬ小男を神として崇めてのザクロ(グレネード)による自決が横行していたのを偶然と、そう、[神道]と[ギリシャ神話のザクロの冥府の女王]のエピソードの連続性のことも加味して偶然として片付けられるか)といったことを問題視している」

ここではそういう話をなしているのである。

上のことを前提に置いたうえでここ本題から脇に逸れての話で訴求したいと考えているとのことは、

「問題はそうした側面が伴っていること、修羅の巷といった按配の戦場にて具現化してきた[ザクロ](手榴弾;グラネード)を喰らうことで生きることを放棄しての行為(あるいは結果的にグラナータを喰らわされて殺されたも同文の生きることを放棄「させら」れての行為)に計算尽くの[背景設定]—自分で本質的に何かを考えるようなことをしないと機械ら、その行為を規定するプログラミングのフローのような背景設定—のようなものが介在していれば、その背景設定にあっては

[人の生き死にを巧妙に、かつ、冷酷・嗜虐的に操作しようとの力学](先だっても似たようなことを申し述べたとのことだが、まるで歌を詠んだ際の掛け詞の妙なぞを競うがように人の死でもってグロテスクな造化の妙を競う(殺人劇を何かに見立てて実演する、そう、見立て殺人Ritualistic Murderをまるで歌会か何かのように実行している)とのやり方を呈している、それも露骨に見えもする力学でもいい)

が強くも作用している、そして、人間の生き死にの問題がそういう力学の薬籠中のものとして芥子粒のように扱われてきたのが人間の歴史というものである」

とのことなのではあるが、ここでの伊弉冉(いざなみ)にまつわる話は

「印象論に傾きすぎているくらいありと見なされるものであろう」

とのことで堂々となすことを念頭に置いてのものではない—脇に逸れてのここでの図示の段に入った時点で先に「脇に逸れての話、それも多少、行き過ぎて過度に憶測がかった話とみなされましょうことを意図的になしておく」と申し述べていたとおりで—。

ただし、それも断りつつ明言するが、

「ここでの話は印象論がかったものなれど[脇に逸れての意図しての話]としてはなすべきに値するものとなるだけの側面が伴っている、それだけ本筋となる[ペルセポネを巡る「他の」関係性]については重んじて然るべき側面が伴っている(ペルセポネを巡る関係性の多重性度合いはあまりにも異常なものとなり、それなればこそ、の問題として、「ここでの[手榴弾]と[ザクロ]と[黄泉戸喫(よもつへぐい)]の話とて行き過ぎの話、ただそれだけにとどまるものではないだろう」と申し述べる)」

具体的証拠の山とそこから自然に導出できるとの因果性の呈示でもってして[人間を馬鹿にし尽くしたうえで殺し尽くそうとしているとの力学があること]を示しても、そこに[聞く耳]が存在しなければ何にもならないわけだが、とにかくも、(聞く耳を持った、機械のような存在では「ない」との向きが読み手であった場合を想定して)、続けての話をなすこととする。

さて、[レコンキスタ] にまつわって先述のこと、

「レコンキスタがその征服にて完了することになったグラナダはザクロを意味する言葉となり、また、ペルセポネがザクロを食したことで冥界の住人になった」

とのことだけでは、無論にして、

[スペインがザクロ (を意味するグラナダの地) をものにした (との按配でのレコンキスタ完遂をなした)]

とのことに [ペルセポネ伝承との奇怪なるアナロジー (類似性)] を見出すことは「まだ」できない (こじつけにすら「ならない」ところであろう。当たり前である、とのこととしてである)。

しかし、次の各点を念頭に置いての分析をなすことで導き出せるとの側面、そこまでを複合顧慮すると[アナロジー] (類似性) の問題が偶然で済むようなものではないとの式で浮かび上がってくることが分かるようになってもいる。

[スペイン(カスティーリャ＝アラゴン連合王国)によるグラナダに拠ってのイスラム王朝たるナスル朝征服直後にて幕開けを見た大航海時代 —ザクロのグラナダにて締結されたサンタ・フェでのサンタ・フェ協約で幕開けを見た大航海時代でもいいだろう—にあって、後、スペインはヘラクレスの柱(ジブラルタル海峡象徴物、すなわち、新大陸と旧大陸の間に横たわる第一関門となった大西洋と地中海世界の分かれ目の象徴物)に Plus Ultra「この先へ」と刻んでの紋章を世界帝国を表象するもの・スペイン勢力への新大陸進出を後押しするものとして用いた(つい最前にての [出典 \(Source\) 紹介の部 98](#), [出典 \(Source\) 紹介の部 98](#)にて先述)]

[ヘラクレスの柱及びそこに刻まれた碑(プルス・ウルトラ)でもって大航海時代の新大陸事業を促進したカルロス1世(先述のようにドイツ皇帝カール5世でもある)治世下のスペインでアステカを侵略したコンキスタドレス(新大陸征服者)がエルナン・コルテスであり、同コルテスが現地人にケツァルコアトルの神使(エミッサリー・オブ・ケツァルコアトル)ないしケツァルコアトルそれ自体であると[[ケツァルコアトル再臨の予言](#)]に基づき看做されていたとの言い伝えが —その時代なりの真偽はともかくも— 記録として伝わっている。そして、そうした現地人の勘違いがゆえに現地人の滅びが加速されたとの歴史的評価がなされている([出典 \(Source\) 紹介の部 53 \(4\)](#)にて先述)]

[ダンテ『地獄篇』にては地獄の第8階層、「[謀略者の地獄](#)」にてオデュッセウス(ユリシーズ)が仲間の冒険心・探究心を鼓舞しつつ[ヘラクレスの柱]を越えた段階で[[旋風](#)](ワール・ウィンド)に巻き込まれて地獄行きを強いられたとの描写がなされている([出典 \(Source\) 紹介の部 90 \(11\)](#)にて典拠紹介のことだが、再度、下にその内容を問題視する)]

[ホメロスの叙事詩『オデュッセイア』原典では[ヘラクレスの柱]通過をなしてのダンテ『地獄篇』とは筋立てが異なり、オデュッセウスらは[元来、ペルセポネの侍女らであった]との伝承上の設定が伴っているセイレーン(ないしサイレン)らの歌をやりすぎた後、[[カリュプティス\(大渦\)](#)]に巻き込まれ、オデュッセウスのみが生き残り、[カリュプソの島](#) —[欧州識者によって古のアトランティスにも仮託されてきた存在であること](#)、

本稿にて先述のアトラスの娘カリュプソの島オーギュギア島— に漂着したと描写される(出典(Source)紹介の部 44-2 や 出典(Source)紹介の部 82 などにて先述のことである)]

以上の各点が [ペルセポネのザクロ伝承] と [ザクロを食してのレコンキスタの完遂] とを多重的に結びつけることともなっている。

どういうことか。

その「どういうことか」に関わる場所としてここに至るまで [ペルセポネ] に関して問題視してきたことについてまずもって振り返る。その点、本稿では下の通りの関係性を摘示してきたとのことがある。

[ペルセポネPersephone] ⇔ (媒介項Medium: [冥界降下 descent to the underworldをなした女神としての特性] [双方が愛人としている神TammuzおよびAdonisの際立つての同質性]) ⇔ イナンナ・イシュタル Inanna / Ishtar.

イナンナ・イシュタルInanna/Ishtar ⇔ (媒介項Medium: [金星を神格化した存在 (divine personification of planet Venus) としての共通性] [冥界に双子の片割れエレシキガルEreshkigalおよびショロトルXolotlを持つとの共通性]) ⇔ ケツアルコアトルQuetzalcoatl ⇔ (媒介項Medium: [蛇と結びつく文明の接受者 — promoters of civilizations related with serpent— としての特性 (アメリカ大陸に伝わる伝承および聖書に見るエデンの智慧の樹の実を食すことの教唆のエピソード)] [金星Planet Venusと結びつくとの特性] [期待を裏切るとのかたちで災厄をもたらした蛇としての共通性 — betrayal and disaster (the fall of Aztec civilization and Quetzalcoatl like conquistadors & the fall of man, betrayal and disaster caused by old serpent seen in "Revelation")—]) [アメリカ大陸 American Continent → アトランティスAtlantisとの見立てが存在し(e.g. Francis Bacon's Great Atlantis), また、アトランティスAtlantis → 黄金の林檎の園 Garden of Hesperides (Atlantides) → エデンの林檎の園 Garden of Edenとの見立てが存在するとの背景]) ⇔ サタンSatan (ダンテ『地獄篇』 Dante's Inferno に登場するルチフェロLucifero).

サタン (ダンテ『地獄篇』に登場するルチフェロLucifero) ⇔ (媒介項Medium: ダンテ『地獄篇』Infernoに見るケルベロス捕縛で終結するヘラクレスの計12の功業の後半部との際立つての近接性 (continuity between Dante's Inferno and 12 labours of Hercules), そして、その近接性を介してのダンテ『地獄篇』に登場する三面のルシファーと三面のケルベロスの接合性) ⇔ ケルベロスCerberus

(以下、ケルベロスCerberusを介しての関係性がいかように多重的にペルセポネPersephoneに回帰するかの複数パターンを羅列するとして)

ケルベロスCerberus ⇔ (媒介項Medium: 本稿にての先の段で詳述に詳述を重ねてきたところとして、[ヘシオドスのTheogony『神統記』に見るところの50の頭を持つケルベロス fifty headed Cerberus] が[アヌビスAnubis]・[ヘカテHecate]といった別神格を通じてシリウスの伴星、50年の公転周期を持つ白色矮星シリウスBと奇怪無比に結びつくこと述べられるだけの背景 — 例としてのプタルコス古典に見る記述 (e.g. "strange" description about [Isis = Sirius] of Plutarch's Moralia)— が存在) ⇔ シリウスB (SiriusB) ⇔ (媒介項Medium: エジプトよりのグレコ・ローマン・ワールド (古代ギリシャ・古代ローマ世界) への渡来神でもあった女神イシスの犬の星シリウスの体現神格としての特質) ⇔ イシスIsis ⇔ (媒介項: [ローマ期古典『黄金の驢馬』 the Golden Assに見る三面構造のペルセポネ triple headed Persephone やヘカテHecateとイシスIsisを同一視する叙述] あるいは [ペルセポネ・デメテルを崇拝するエレウシス秘儀 Eleusinian Mysteriesとイシスにまつわる伝承との類似性]) ⇔ [ペルセポネPersephone] (回帰)

直上呈示のパスにてここに至るまでの段にて詳述してきたことと、

[スペイン(カスティーリャ＝アラゴン連合王国)によるグラナダに拠ってのイスラム王朝たるナスル朝征服直後にて幕開けを見た大航海時代 —ザクロのグラナダにて締結されたサンタ・フェでのサンタ・フェ協約で幕開けを見た大航海時代でもいいたろう—にあって、後、スペインはヘラクレスの柱(ジブラルタル海峡象徴物、すなわち、新大陸と旧大陸の間に横たわる第一関門となった大西洋と地中海世界の分かれ目の象徴物)に Plus Ultra「この先へ」と刻んでの紋章を世界帝国を表象するもの・スペイン勢力への新大陸進出を後押しするものとして用い出した(つい最前にての[出典](#)(Source) 紹介の部 98, [出典](#)(Source) 紹介の部 98にて先述)]

[ヘラクレスの柱及びそこに刻まれた碑(プルス・ウルトラ)でもって大航海時代の新大陸事業を促進したカルロス1世(先述のようにドイツ皇帝カール5世でもある)治世下のスペインでアステカを侵略したコンキスタドレス(新大陸征服者)がエルナン・コルテスであり、同コルテスが現地人にケツァルコアトルの神使(エミッサリー・オブ・ケツァルコアトル)ないしケツァルコアトルそれ自体であると[ケツァルコアトル再臨の予言]に基づき看做されていたとの言い伝えが —その時代なりの真偽はともかくも— 記録として伝わっている。そして、そうした現地人の勘違いがゆえに現地人の滅びが加速されたとの歴史的評価がなされている([出典](#)(Source) 紹介の部 53(4)にて先述)]

[ダンテ『地獄篇』にては地獄の第8階層、「謀略者の地獄」にてオデュッセウス(ユリシーズ)が仲間の冒険心・探究心を鼓舞しつつ[ヘラクレスの柱]を越えた段階で[旋風](ワール・ウィンド)に巻き込まれて地獄行きを強いられたとの描写がなされている([出典](#)(Source) 紹介の部 90(11)にて典拠紹介のことだが、再度、下にその内容を問題視する)]

[ホメロスの叙事詩『オデュッセイア』原典では[ヘラクレスの柱]通過をなしてのダンテ『地獄篇』とは筋立てが異なり、オデュッセウスらは[元来、ペルセポネの侍女らであった]との伝承上の設定が伴っているセイレーン(ないしサイレン)らの歌をやりすごした後、[カリュプディス(大渦)]に巻き込まれ、オデュッセウスのみが生き残り、カリュプソの島 —欧州識者によって古のアトランティスにも仮託されてきた存在であること、本稿にて先述のアトラスの娘カリュプソの島オーギュギア島— に漂着したと描写される([出典](#)(Source) 紹介の部 44-2 や [出典](#)(Source) 紹介の部 82 などにて先述のことである)]

の各事項が多重的に結びついていると述べられることが問題になるのである。それにつき、続く e. の段にて示すこととする。

e.

「前提として」第一に述べたきことは次のことである。

「ペルセポネについては [ヘラクレス 12 功業] の最後の冥界下りの段にて登場するケルベロスとの連続性をヘカテ、ペルセポネと同一存在視されての古典上の記述が存する同ヘカテにまつわる特性を介しもして有しているとの存在ともなるのだが([出典](#)

(Source) 紹介の部 94(3)、ケルベロス捕縛の第 12 功業によって終わる[ヘラクレス 12 功業]にあつては [10 番目の功業] にて [ヘラクレスの柱] が打ち立てられていると伝わっている —— エトルリア語(ローマ隆盛の前にイタリアで栄えたエトルリア文明の言語)で Cerun と呼称されていたとの申しようもなされている「三面の」ゲーリュオンをヘラクレスが殺傷した[10 番目の冒険]にてヘラクレスはジブラルタル海峡に仮託される二本の柱を打ち立てていると伝わっている (：先に本稿の **出典(Source) 紹介の部 90** にて岩波文庫版アポロドーロス『ギリシャ神話』p.97—p.98 よりの原文引用なしたところを再引用するとして) “ 第十の仕事としてゲーリュオネースの牛をエリュティアから持って来ることを命ぜられた。エリュティアはオーケアノスの近くの、今ではガディラと呼ばれている島であった。この島にクリュースーオールとオーケアノスの娘カリロエーと子ゲーリュオネースが住んでいた。彼は三人の男の身体が腹で一つになっていて、脇腹と太腿からは三つに分れた身体を持っていた。彼は紅い牛を持っていて、その牛飼はエウリュティオン、番犬はエキドナとテューポーンから生れた双頭の犬オルトスであった。そこで、ゲーリュオネースの牛を目ざしてヨウロッパを通過して多くの野獣を殺し、リビアに足を踏み入れ、タルテーススに來り、旅の記念としてヨウロッパとリビアの山上に向かい合つて二つの柱を建てた” (引用部はここまでとする) とあるとおりである) —— 。

その点、

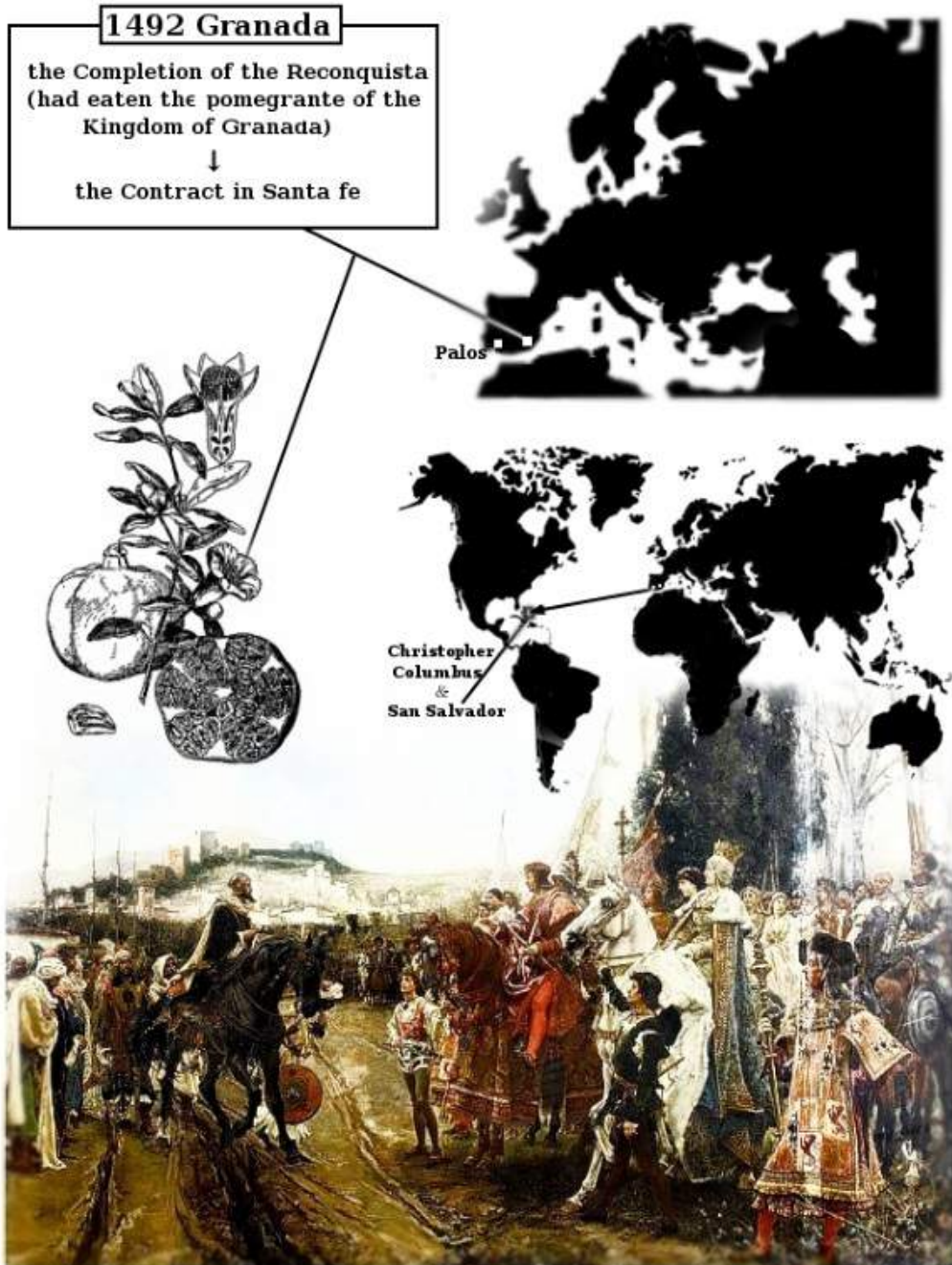
[ヘラクレス第 12 功業に登場のケルベロスとペルセポネの連続性] を示す事由は先述のようにヘカテを介してのそれにとどまらないのだが、とにかくもってして、ペルセポネがヘカテを介して [ヘラクレス 12 番目の功業(登場のケルベロス)] と結びつくと述べられる一方で「ペルセポネに冥界滞留を強いることになったとの果実である」ザクロを食した後のスペインが押し進めた新大陸事業では [ヘラクレス 10 番目の功業にて登場の柱] が重きをもって前面に押し出されていた。

まず、そのことが (続く本稿の内容に関わるところとして) 意をなしてくるだけのことが実際に「ある」

以下の図は先にての **b.** および **c.** の段 (現行にては **e.** の段での話をなしている) にあつて言及のこと、

[グラナダの地 (ザクロの地) にてレコンキスタ完遂の同年の 1492 年に締結されたのがサンタ・フェ協約であり、同協約にて認可・スタートを見たコロンブスの探索行 (港街パロスから一路、大西洋へと進んで行ったとの航海) が奏功した結果がスペインのコンキスタドレスら (征服事業者ら) のアメリカ大陸進出 (征服活動) であつた]

とのことが次の観点から問題になることを (布石として) 強調するためにもちだしたものととなる —— 同図、グラナダ (ザクロ) の地にてサンタ・フェ協約が締結されたことに関わるところとして [ナスル朝の降伏協定が結ばれグラナダの地への無血入城が決した折を描いての絵画] (The Capitulation of Granada と題されての 19 世紀後半に描かれた歴史絵画) と [ザクロ] と [地図] を一挙に挙げての図となる —— 。



さて、

「スペインがカール1世(サンタ・フェ協約を締結した女王イザベル1世の二代後の君主)の手によってプルス・ウルトラ Plus Ultra、[この先を越えて]とのフレーズを刻んでのヘラクレスの柱 —ヘラクレスの10番目の功業にて打ち建てられた一対の柱ら— を越えた先にての地で現地人にもたらされた災厄は「純・記号的に」ペルセポネとつながっている」

とのことが「ある」。その点についてどうということなのか、以降の流れをよく検討いただきたい。

直前図解部にて、さらにもってして、

[ペルセポネが [ヘラクレス12番目の功業(登場のケルベロス)] と結びつく]と述べられ

る一方で「ペルセポネに冥界滞留を強いることになったとの果実である」ザクロを食した後のスペインが推し進めた新大陸事業では[ヘラクレス 10 番目の功業にて登場の柱]が重きをもって前面に押し出されていた]

このことを強調したとして(事後の説明に向けての)「前提として」第二に述べたきことは次のことである。

ダンテ『地獄篇』にあつてはオデュッセウス(ユリシーズ)ら一行 — トロイア崩壊を木製の馬でもたらした者に率いられた一行 — が第 8 階層の地獄たる[謀略者の地獄]へ落ちるとの[ヘラクレスの柱を越えた段階での旋風(つむじかぜ)による船の沈没・クルー全員の溺死]とのかたちで強いられたと描写されている(出典(Source)紹介の部 90(11))。

といったオデュッセウスら一行が(渦潮の怪物カリュプティスではなく)渦を巻くが如くワールウィンド、日本語になおせば[旋風](つむじかぜ)にて吞まれて地獄行きを強いられたと描写されているその行き先たる地獄の第 8 階層、そちら第 8 階層に続く第 9 階層(地獄の最下層)にダンテらは[ヘラクレス 11 番目の功業にて登場した巨人アンタイオス]におぶられて降下したと当該古典(『地獄篇』)には描写されている(これもまた先述のことである)。

そもした『地獄篇』地獄最下層の第 9 階層でダンテらがまみえた存在こそがケルベロス構造をとる地獄の主ルチフェロ(サタン)となる — それにつき、[ヘラクレス 12 功業]というものが[三面のルチフェロ目指して冥界下りをなすダンテ『地獄篇』]と、いかに多重的に結びつくかは本稿のここに至るまでの段にて仔細に論拠呈示しながら詳述してきたことではあるが、ケルベロス構造のルチフェロがいかような論拠でケルベロス寓意に通じていると述べられるかもその中で示してきたことである — (『地獄篇』には貪欲(グラトニー)の罪を体現しての貪欲者の地獄にもケルベロスが登場してくると紹介しつつ、「12 番目の功業に登場のケルベロス構造を呈するルチフェロが控える最下層第 9 階層に至るまでの(『地獄篇』にて描かれる)二段階降下プロセスにはヘラクレス 10 番目、11 番目の功業 — 12 番目の冥界下りの功業と特定の登場人物メノイテースを介して接合する功業 — に登場した怪物らが関わっている」「そも、浅い階層でのケルベロス登場の段からしてプルーツ(ペルセポネの異父兄弟ともされ、また、冥王ハデスと結びつく存在)の意味不明さが有名なる叫びを介してサタンとつながられているとの解釈がなせるようになっていく」といったことらを厚く論じてきた — 出典(Source)紹介の部 90 から 出典(Source)紹介の部 90(10) —)。

以上、振り返りもして申し述べているところの、

[ケルベロス ⇔ 『地獄篇』ルチフェロ]

この見方に複合的に関わるどころとして、

[ペルセポネはヘカテを介してのケルベロス接合存在となり(文献的記録を記号論的に解釈したうえでの申しようである)、また、他面、ペルセポネは質的類似物となっているイナンナ・イシュタルを介しても(イナンナ・イシュタルと類似性を有するローマのヴィーナスや中米アステカ文明のケツアルコアトルを媒介項に)多重的にルシファー「とも」接合する存在となっている]

との指摘がなせるようになっていく(何度も指摘なしていることである)。

ここでこれまたくどくも振り返り申し述べるが、

[古代メソポタミアの女神イナンナ(ないしイシュタル)が「冥界下りをなした存在であり」「植物の死と再生にまつわる特性を帯びている神格(タンムズ・ドゥムジ)を愛人化している」存在である]

とのことがあるようにペルセポネについては

[「冥界下りをなした存在であり」「植物の死と再生にまつわる特性を帯びている神格(タンムズ・ドゥムジと同一視されるアドニス)を愛人化している」存在である]

との特性が伴っている

ということがある(典拠は出典(Source)紹介の部 97にて仔細に呈示している)。

といったペルセポネと際立っての類似性を呈するイナンナ・イシュタルについては(ルシファーがラテン語にてその体現物となっているところの)金星ことヴィーナスの体現存在たる女神ヴィーナス(ローマ期以前のギリシャ呼称ではアフロディテというペルセポネとアドニスを巡って争った存在でもある)と濃厚に結びつくとの指摘がなされている存在であり(その伝、明けの明星を介してのヴィーナスとの接合性との伝からして[明けの明星の体現存在としての冥界落ちのルシファー]と[冥界下りのイナンナ・イシュタル]の接合性が観念できる)、また、イナンナ・イシュタルは、(ここからがスペインの大航海時代の挙に関わるところなのだが)、[アステカで崇められていたケツァルコアトル]との間にて[双方共に金星の体現神格である][双方共に冥界に双子の姉妹(兄弟)を有している]との類似性を有しているとの存在[とも]なる(本稿出典(Source)紹介の部 61)。

そうしてイナンナ・イシュタル(ペルセポネと多重なる同一性を呈しているとの女神ら)と結びつくケツァルコアトルとえば、

- [1. 金星の体現存在]
- [2. 蛇としての属性を帯びた存在]
- [3. 文明の授け手としての存在]

との観点で [2. 蛇としての 1. 金星体現存在、3. エデンにて知恵の樹の実をアダム・イブラに食させた存在] との質的同一性を帯びている存在とも述べられるようになっていくことを本稿の先の段では詳述してきたことである。

そして、(さらに振り返っての記述を続いたの段にてなすことともなるが)、新大陸にてスペイン到来前から執り行われていたケツァルコアトル崇拝は

[その信徒の期待を裏切って彼らに破滅を呈した]

とのものである(とも述べられるようになっていく)。

ケツァルコアトルが再度の来臨を果たすことになるとされていたとのことである預言の年、1519年に([ザクロの地グラナダ]を掌中におさめたうえで新大陸へ向けて1492年から漕ぎ出したとの国家たる)スペインの征服者、コンキスタドールたるエルナン・コルテスの一行がついにアステカ領域に本格進出、当初、現地民より歓待なされることになった、すなわち、新大陸現地のアステカ帝国にて[ケツァルコアトル神ないしその神使]と看做されて歓待されることになったために新大陸の劫掠が容易に進んだと「スペインサイドの歴史的記録にては」伝えられているとのことがあるのである。そして、そうして歓待してまでの当初の現地民期待が裏切られ[戦乱][疫病]による破滅がスペイン勢によってもたらされた

いうのが歴史が語るありさまとなっている(：現地民 一生け贄の儀式を恒常的に、かつ、大量の犠牲者を出しながら行っていたとされる[醜悪な文明]の成員ではあるが、とにかくもの現地民— は[神と一度は信じた者]から侵略をなされたことになった、その際、戦乱と欧州から持ち込まれた天然痘で現地民人口は圧倒的に縮減を見たともされるわけだが、他面、聖書の末尾にあつての『黙示録』にては[[サタンと呼ばれる古き蛇にして竜なる存在と偽預言者と人々に刻印を与える獣]が衆生をたばかって神の勢力に対する敗北すべくもの戦いを仕掛ける]との筋立てが見て取れ、かつ、同文書(『黙示録』)では滅すべき対象とされた人間達が被ることになる被害態様には[戦乱]・[疫病]といったことが濃厚に影を落としている。それがために【キリスト教徒による[戦乱][疫病]を先住民に与えたケツアルコアトル崇拝(による裏切り)】と【キリスト教徒による聖戦の完遂と結びつく黙示録のサタンやりよう(とバビロンの衆に対する裏切り)】がオーバーラップして見えもするようになっている 一本稿にての **出典(Source)紹介の部 54(4)**の部で既に細かくも出典挙げながら呈示していたことだが、再度、振り返つての話も続いてなしておくー)。



黄金の林檎の園と同一視されることもあるエデンの園、その場にての誘惑を奏功させたサタンは

[知の接受者(善悪の樹の実を食べさせての知の接受者)] / [人類を裏切って破滅に引き落とす存在(エデンでの策略、および、黙示録の描写)] / [蛇としての似姿を持つ存在] / [金星の体現存在(ルシファーとしての側面)]

としての特性を持つ存在である。

他面、黄金の林檎の園と同一視する視点があるアトランティス、その場にも比定されてきたアメリカ大陸での崇拝対象であったケツアルコアトルは

[知の接受者(文明発達の恩人としての神)] / [信徒を裏切って破滅に引き落とす存在(ケツアルコアトルの再臨をスペイン征服者に見たアステカ帝国の破滅のプロセス)] / [蛇としての似姿を持つ存在] / [金星の体現存在]

としての特性を同様を持つ存在である(⇒ 文献的根拠の指し示し箇所としては本稿にての【出典(Source)紹介の部53】から【出典(Source)紹介の部53(4)】を包摂する解説部、そして、【出典(Source)紹介の部54】から【出典(Source)紹介の部54(4)】を包摂する解説部を参照のこと)。

(全て本稿の従前の段にて入念に指し示してきたことをくどくも繰り返してのこととなるのだが)

以上のような文脈からザクロ(スペイン語でのグラナダ)を食して冥界の主となったペルセポネに関して述べれば、ケルベロス(地獄篇にてのルチフェロと結線する存在)との接続性が問題になるばかりではなく、ペルセポネ質的類似物としてのイナンナ・イシュタルを介して「も」、そして、アメリカ大陸で崇

められていたケツアルコアトル —スペインがザクロ(グラナダ)を扼してから新大陸進出事業にいそしみだし、スペインの侵略者がこちらケツアルコアトルの再臨の形態で土着民に聖書の黙示録よろしくの破滅を進呈することになったとのことに関わるケツアルコアトル— を介して「も」(ポイントは度重ねてもそう表記できるようになってしまっているところの[助詞「も」付きの問題]である)ルシファー、聖書の誘惑の蛇にも比定されるサタンと接合する存在となっている。

その点、『地獄篇』最下層(コキユートス)手前の階層(マーレボルジェ)で

[オデュッセウスが [ヘラクレスの柱] を越えて地獄行き (第 8 圏マーレボルジェの [謀略者の地獄]行き) を強いられた]

と描写された後、さして間を経ずに登場してくる [第 9 圏のルシファー]が

[ケルベロス] [イナンナ・イシュタル (およびさらなる媒介項としてのケツアルコアトル)]

を介して

[ザクロ(グラナダ)を食したペルセポネ]

と結びつくとのこと (ここまでその繰り返しもしての強調に専心もしてきたこと) が不気味となる理由には「まずもって」次のようなことが —(本稿の内容をきちんと把握されているとの真摯なる読み手には想像いただけていることか、とは思うのだが)— ありもする。

「スペインがザクロたるグラナダの地 —(ペルセポネ([黄金の林檎の対価と後にされるに至った絶世の美女ヘレン])と秤量されるかたちで一時期、テセウスらギリシャ神話の英雄らの同一の誓約にまつわる存在とされていたとの女神)が[冥界の住人]へと変じた原因としての果実、そのザクロを名前に冠する地域)— を扼するに至った後、[ヘラクレスの柱]を越えての新大陸進出を鼓舞なしたとの歴史上の出来事はルシファーが最下層に控えるダンテ『地獄篇』にあつての、

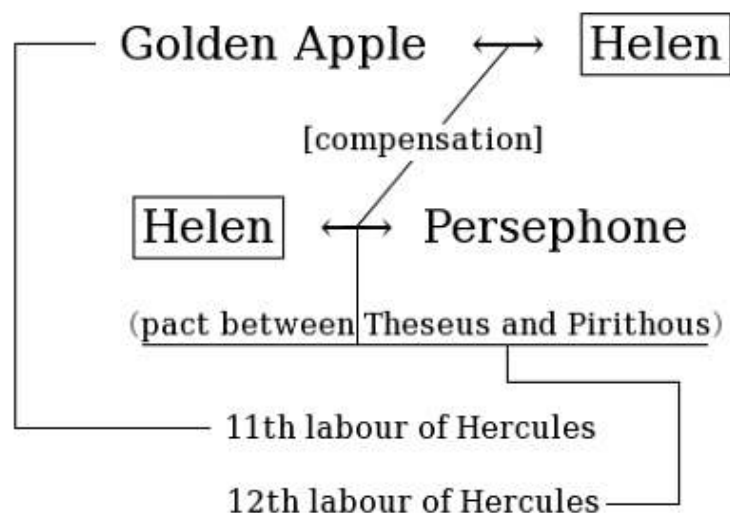
[[ヘラクレスの柱] 越えをなしたオデュッセウスら —黄金の林檎にてはじまったトロイア戦争に木製の馬の計略で引導を渡した謀将ら— が地獄行き(最下層より一階層手前の地獄八圏にあつての[謀略者の地獄]行き)を強いられたとの粗筋が具現化を見ているとの側面]

[三面のケルベロス構造を伴っているルシファー ([ヘラクレスの柱] を越えてオデュッセウスが落ちた地獄の第 8 圏のすぐ下の地獄の第 9 圏に幽閉されている存在) にあつてのザクロを食したペルセポネとの多重的关系性を想起させるとの側面]

と連続性を感じさせるものでもある」

([整理][復習]を兼ねての図の呈示部として)

先の出典(Source)紹介の部 90(10)の解説を終えての部にて呈示をなした図、そして、後続する段にても再掲を何度かなしていたとの図を(実にもつてくどくも、だが)再度もつてして再掲することとする(:同様の図は既に本書だけで通算にして三回挙げもしているので字義通り[再三再四挙げている]とのかたちでの再掲をなしておく)。



「本稿の後々の指し示しにあつての殊に重要な部に深くもかかわることである」との観点がこの身、筆者にあるため、「くどい」といった按配にての指摘をなしておく。

ここまで典拠を挙げながらも示してきたこととして、次のようなことがある。

第一に、「絶世の美女ヘレン」は（結果的にトロイア崩壊の原因となることになった）「黄金の林檎」の対価としてパリに提供の提案がなされた存在である（「出典(Source)紹介の部39」）。尚、ヘレンの求婚者らのギリシャ諸侯の間では後に禍根残さぬようにオデュッセウスが提案した誓約、ヘレンの夫の一難事には元ヘレン求婚者全員が協力すべしとの誓約が事前に関わされており、その伝でもヘレンは誓約にまつわる美女であったとも述べられる。

第二に、「絶世の美女ヘレン」はパリに駆け落ちとのかたちで掠(さら)われる前にも略取の対象となったとすることがあり、の際、ヘレン略取をなしたテセウスらとペイリトオスらは片方がヘレンを手に入れる代償にもう片方の妻君取得にヘレンを取得した方が協力するとの約定を結んでおり、結果的に「ペルセポネの略取」と「ヘレンの略取」が約定に基づき秤で釣り合わせられていたに等しかたちとなっていたと伝わっているとのことがある（「出典(Source)紹介の部90(10)」）。

以上より述べられることは駆け引きの具にされいていたとの「ヘレン」を中間項にして「トロイア崩壊の原因(黄金の林檎)」

「ペルセポネの略取」

にはつながりが観念されるとのことである（別段複雑な話ではなく、単純な話である）。

さて、そのように結びつきが観念できる「黄金の林檎」「ペルセポネ略取のエピソード」のうち、「黄金の林檎」のほうは「ヘラクレス第11番目の功業の取得目標物」となっており（「出典(Source)紹介の部39」）、「ペルセポネ略取のエピソード」は（無謀にも人間の身で神を略取しようとした誓約の当事者、テセウスとペイリトオスが冥府の女王への狼藉の罰として囚われていた冥界の忘れ椅子よりヘラクレスにその機会にて救われたとの式で）「ヘラクレス第12功業」と結びついている（「出典(Source)紹介の部90(10)」）。

何度となく挙げてきた上掲図にて訴求しているような関係が成り立っていること「も」あり、ペルセポネはヘラクレスの第 11 功業、そして、ヘラクレスの第 12 功業 —ケルベロスの冥界から現世への引きづり出しを目的にしての功業— と結びつくと言われる存在とはなっているのだが、またそれと同時に(これまた何度も何度もくどくど繰り返して述べてきたことだが) [ペルセポネ] は [ヘカテ] と結びつくとされてきた存在でもあり、その [ヘカテ] と [ケルベロス] との連続性がゆえに —連続性の先にあるところとして— そこからも [ペルセポネ] は [ケルベロス] と結びつくとも申し述べられる存在となっている。

ペルセポネが [ヘラクレスの第 11 功業(黄金の林檎の取得の功業)] [ヘラクレスの第 12 功業(ケルベロス捕縛の功業)] の双方と結びつく存在であるとし、そうもしてペルセポネと結びつく [ヘラクレスの第 11 功業] [ヘラクレスの第 12 功業] および付け加えての [ヘラクレスの第 10 功業] らとの質的連続性が(それら功業の順序にそのまま対応するかたちで) ダンテ『地獄篇』の後半部、最下層、三面構造のルシファーの領域に至るまでの道程にて認められるとすることがある(その指し示しに注力してきたのが本稿にての **出典(Source) 紹介の部 90** 以降の段である)。すなわちもってして、ダンテ『地獄篇』の後半部では

[地獄の第 7 圏⇒(ダンテらの降下)⇒地獄の第 8 圏(詐欺者の地獄)]

[地獄の第 8 圏⇒(ダンテらの降下)⇒地獄の第 9 圏(最下層・裏切り者らの地獄)]

との流れがそれぞれヘラクレスの第 10 功業および第 11 功業にて誅伐された怪物らの助力で実現している旨が描かれているとのこと、本稿にては指し示してきたわけである([地獄の第 7 圏⇒(ダンテらの降下)⇒地獄の第 8 圏] はヘラクレスの第 10 功業にて誅伐されたゲーリュオンとの怪物にダンテらがおぶわれて実現を見ており、[地獄の第 8 圏⇒(ダンテらの降下)⇒地獄の第 9 圏] はヘラクレスの第 11 功業の途上にて誅伐されたアンタイオスとの怪物にダンテらがおぶわれて実現を見ているとのかたちを本稿にての先立っての段にて指し示している)。

上に見る漸次的冥界降下にあつて『地獄篇』主人公のダンテは
[地獄の第 7 圏⇒(ダンテらの降下)⇒地獄の第 8 圏(詐欺者の地獄)]

との式での降下を

[ヘラクレスが第 10 功業にて誅伐したゲーリュオン]

におぶわれるとのかたちで実現しているわけではあるが、そうもしてダンテらが降り立った『地獄篇』地獄第 8 圏、

[詐欺者の地獄] (よく日本語では悪意者の地獄と訳されるが、語感として [Eighth Circle (Fraud)] は詐欺・騙りにて人を害した手合いらの地獄とのことで詐欺者の地獄と訳した方がより事宜に適っているように見えもするとの地獄第 8 圏)

にあつての彷徨の後半部で(ダンテおよびダンテに師父と慕われるヴェルギリウスの霊は)

[トロイア都市を木製の馬の奸計で内破させ住民皆殺しとの帰結をもたらしたオデュッセウス(ユリシーズ)らが炎に包まれての永劫の懲罰を受けているありさま]

に際会することとなる(本稿にての **出典(Source) 紹介の部 90(11)** で英訳版『地獄篇』などからの引用をなしているとおりでである)。

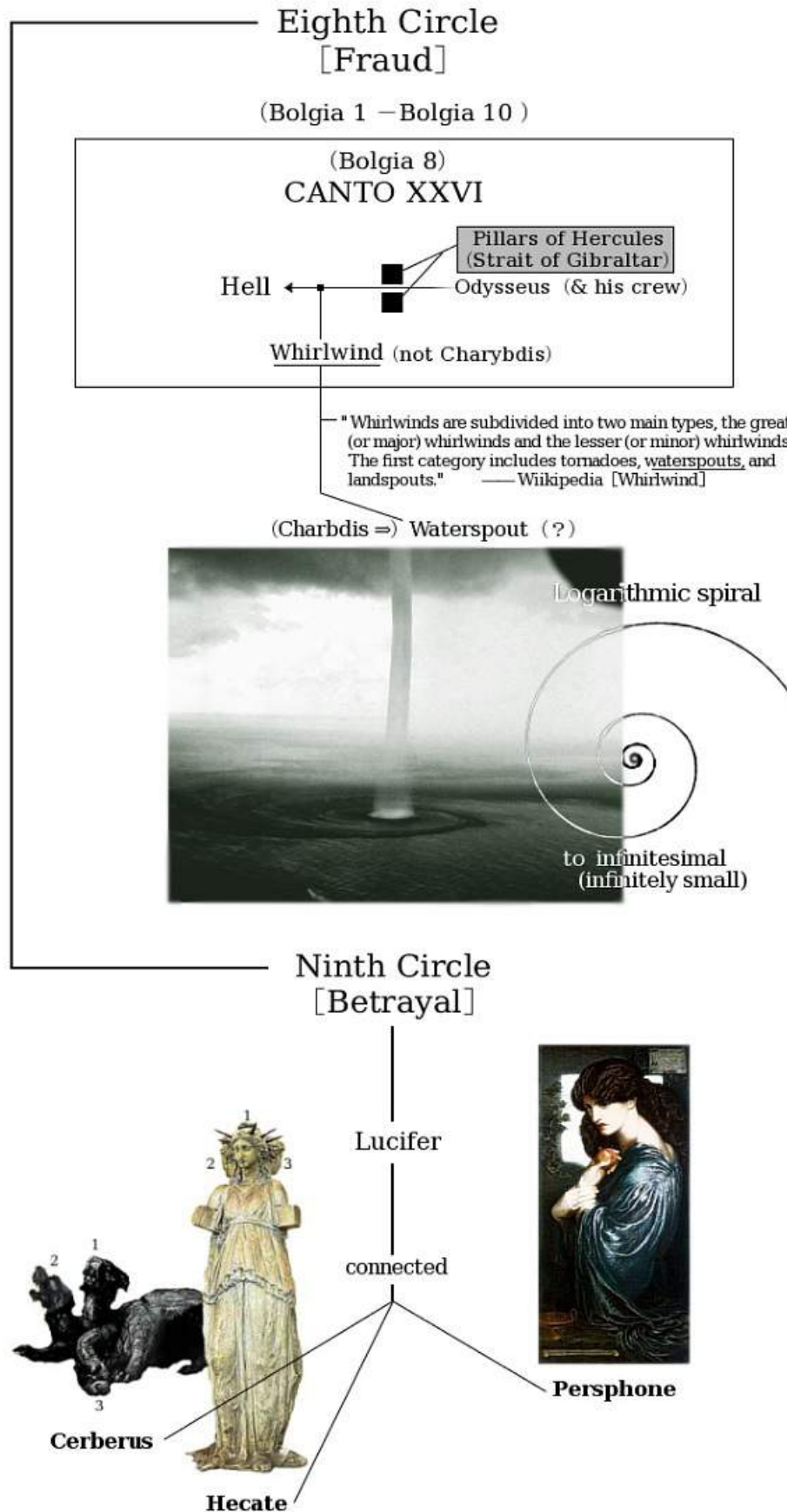
の折、ダンテらは炎に包まれて罰せられているとのオデュッセウスの亡魂から

「自分達はヘラクレスの柱を越えた折、旋風(つむじかぜ/英語でいうところのワール・ウィンド)に襲われ、座礁・転覆の憂き目を見、ここ(地獄篇、詐欺者の地獄)に至った」

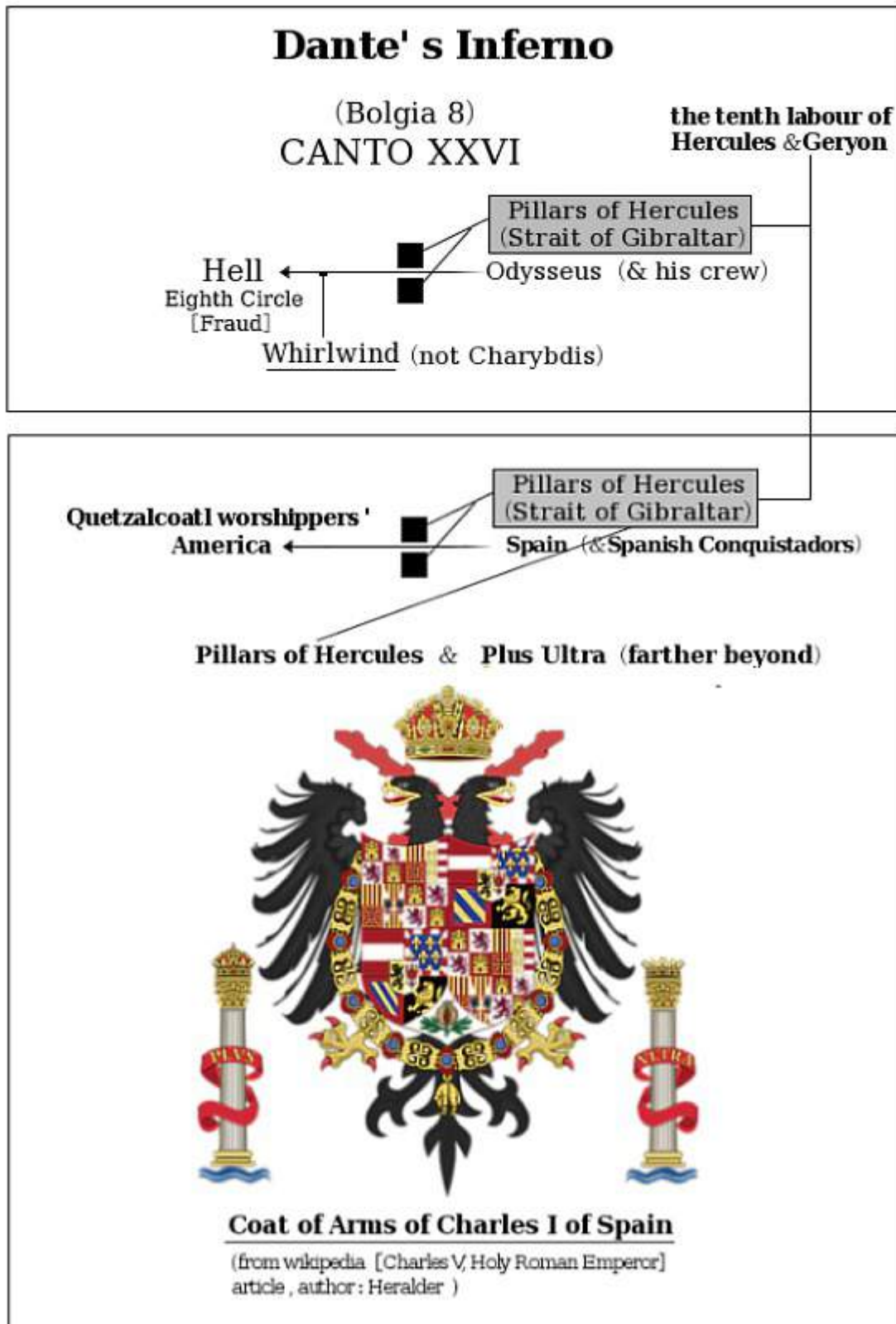
との話を聞く —※ホメロス叙事詩『オデュッセイア』ではオデュッセウスは渦潮の怪物カリュプティスに呑まれての船の大破・クルー全滅の憂き目に逢いながら、アイザック・ニュートンなどに言わせれば、アトランティスの別の顔とのことになっていとのカリュプソの島に漂着した(本稿にての **出典(Source) 紹介の部 43** でそちらいわれようについては事細かに解説している)、その

後、さらなる旅を経て、故郷に帰り着いたと描かれるのだが、ダンテ『地獄篇』ではそれがオデュッセウス含めてのヘラクレスの柱越えの後の全滅へとアレンジされている (といったアレンジの体現としての『地獄篇』に見るオデュッセウス口上については本稿にての [出典 \(Source\)](#) 紹介の部 90 (11) で事細かに引用なしているところである) —。

以上再述の流れに関しては [出典 \(Source\)](#) 紹介の部 90 (11) に後続する部にあつて図示なしたことも通ずるところとして以下のような図示がなせもするところとなっている。



上に見るような図と先に挙げたところのスペインおよびスペインに後援されての征服者らの動きは下の図のようなかたちで相似形を呈する。



この段階では [ヘラクレスの柱] を越えての共通性しか((括弧付きで)「表層的には、)見えないであろうが、

[ダンテ『地獄篇』がヘラクレスの計12の功業(の後半部)と密接に関わること、また、ダンテ『地獄篇』の三面構造のルシファーが三面構造のケルベロスと複合的に結びつく側面を帯びていること]

を顧慮しつつ、また、そのうえで

[直近にて繰り返しながら強調しているように)冥府の女神ペルセポネに「ケルベロス」および「ヘラクレス12功業」(にあつての第11功業および第12功業)と接続性が観念できること]

および

[スペインのアメリカ大陸進出がグラナダの地(ザクロの地)を掌中に収め、そのうえでグラナダの地でコロンブス航海への後押し決定がなされたために実現したとされること —そして、次いで、スペインは国是としてヘラクレスが第10功業にて打ち立てた柱を大航海時代の紋章に刻み込んだとされること—]

および

[ザクロはペルセポネと密接に結びつく果実であること]

および

[スペインがヘラクレスの柱(ジブラルタル海峡)を越えて進出した先の新大陸にて具現化したケツァルコアトル信仰にあつての信徒の期待への裏切りと黙示録に具現化を見ているサタン(悪魔)の会衆への裏切りとの間にはアナロジー(類似性)が存すること]

および

[ダンテ『地獄篇』ではヘラクレス第10功業にて打ち立てられた柱を越えた段階で墮地獄を見ることになったオデュッセウスらが地獄第8圏にて欺瞞によるトロイ劫略の罪にて罰せられているが、ダンテらはそうしたオデュッセウスらが罰せられている地獄第8圏にヘラクレス第10功業(要するにヘラクレスがジブラルタル海峡に仮託される柱を打ち立てている功業)にて誅伐されたゲーリュオンにおぶわれて降下していること、また、ダンテらは次いで地獄最下層たる中枢部にルシファーが控える領域(地獄第9圏)にヘラクレス第11功業にて誅伐されたとされる巨人アンタイオスにおぶわれて降下していること]

の各事項を顧慮しつつ、加えてのこととして、新大陸の悲劇がペルセポネ伝承と多重的に接合する —それはとどのつまり、「ペルセポネと『地獄篇』ルシファーが結びつくこと」に相通ずることでもある —と判断できるだけの「他の」論拠らがある。

そちら「他の」論拠は【アトランティス】伝承を介しての接続性にまつわることとなる。

アトランティスを介しての接続性が何たるかについて解説する前に「カルロス1世(ヘラクレスの柱の紋章化と結びつく為政者/1516-1556年にて王位君臨)統治下にてのスペインの侵略行為」が「ケツァルコアトルの裏切り」が具現化を見たようなものであった」とのことについての振り返り表記をなしておく

紙幅にしてもうかなり前であるとの本稿の先の段、**出典(Source)紹介の部 53**以降の段では

[スペインのコンキスタドール(征服者)であるエルナン・コルテスが征服活動を行ったアステカ帝国ではコルテス到達の1519年が「ケツァルコアトル再臨の年」と重なっていたとのことがあり、コルテスがケツァルコアトルないしその神使とされたことが征服活動を容易にしたと伝わっている]

[ケツァルコアトルの一派が再臨したとのことにまつわる現地人誤信がゆえに容易に進んだともされる征服事業の中、スペイン人が戦争と共に持ち込

んだとの) 現地人が耐性を有していなかった天然痘の影響もあって征戦それに続く土地収奪の中で現地人人口は圧倒的激減を見た]

このことを摘示している (本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 53 \(4\)](#) では現行、Project Gutenberg のサイトより全文ダウンロードできるようになっているとの 19 世紀にあって声望高かった考古学者 Daniel Garrison Brinton の手になる American Hero Myths (1882) の内容として “ He is born there, and arrives from there, and hence Las Casas and others speak of him as from Yucatan, or as landing on the shores of the Mexican Gulf from some unknown land. His day of birth was that called Ce Acatl, One Reed, and by this name he is often known.” 「ケツアルコアトルの降誕の年はセーアカトル (Ce Acatl)、一の葦の年となっており、その絡みで彼はしばしば知られるとのことになっている」といった記述を引きながら、スペインのコルテスの「来臨の」年が 1519 年となっているといったことについて細かくも解説している。それにつき、歴史家 Matthew Restall (の著書) によるところとして「コンキスタドレス (新大陸征服者) の代表的人物の一人であったコルテスが羽毛の生えた蛇と同一視されて征服が容易になったということ自体がスペインによる [アステカの征服後、間もなくしてより広がりだした「伝説」染みた物の言いよう] である」との見方もあるとも同じくもの先の段で紹介しているわけであるが、何にせよ、[スペインのコンキスタドレスが現地人にケツアルコアトルないしその神使と看做されたとのこと、そして、それによって侵略が容易になったとの言い伝えが今日に伝わっていること] 自体は —新旧の学者らの文献的事実として認められる書きようからも容易に真偽判断できるところより— 事実である (何百年も前に「実際に」現地人がそうしたやりよう (侵略者コルテスの来訪を神たるケツアルコアトルの再臨として歓迎したとのやりよう) をなしたか、あるいは、幾世紀にわたってスペインサイドの人間がそういう言い伝えを (事実と異なるところで) 捏造しながら構築していったのか、といったことはここでの話の本筋には関わらない)。また、本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 53 \(4\)](#) の段ではスペイン人の征服事業が現地民に何をもたらしたか、ということについて —(その後の [出典 \(Source\) 紹介の部 54 \(4\)](#) の段にて解説していること、[新約聖書ではその末尾の黙示録の部にてサタン、「金星と強くも結びつく存在」「一見にしては知性・文明の接受者としての側面を帯びている蛇としての存在」「会衆の期待を裏切って破滅へといざなった存在」「アメリカ大陸を黄金の林檎の園転じてのエデンと看做す風潮から見ればアメリカ大陸で崇められた神格との接合性を観念できる存在」としてケツアルコアトルと結びつくようになっているサタンという存在が偽りへの会衆を大同団結させて最後にキリスト教教徒との戦いに敗れ、サタンを崇めた者らに破滅をもたらすとの描写がなされている]とのこととの対応関係を論ずるための前段階として) — 解説を講じもしていた)。



(image from Wikipedia [Double-headed serpent] article)

上の写真は英文 Wikipedia [Double-headed serpent] 項目に掲載されているアステカ帝国由来の財宝の写真となる(同財宝、現行、大英博物館に収蔵のものとなる)。

写真に見るような双頭の蛇 —ターコイズにて装飾されたケツァルコアトルを象(かたど)っていると考えられもしている双頭の蛇— については由来がはきとしないといわれるのだが、

[スペインからの征服者エルナン・コルテスがアステカ首府入城をなした遂げた折、皇帝モンテスマ 2 世より同征服者(コルテス)に「敬意をもって」贈られたものである]との説明が(可能性論として)呈示されている —その点については当該遺物にまつわる英文 Wikipedia [Double-headed serpent] 項目にて “ It is not known how this sculpture left Mexico, but it is considered possible that it was amongst the goods given to the conquistador Hernando Cortez when he was sent to take the interior of Mexico for the Spanish crown. Cortes arrived on the coast of what is now Mexico in 1519, and after battles he entered the capital on November 8, 1519 and was met with respect, if not favour, by the Aztec ruler Montezuma II. Some sources report that Moctezuma thought that Cortes was the feathered serpent god Quetzalcoatl and treated him accordingly. ” (訳を付すとして) 「(双頭の蛇たる) この像がいかようにメキシコに遺っていたのかははきとしないのだが、彼がスペイン王室のためにメキシコ内部を扼するために送り込まれた時、征服者エルナン・コルテスに贈呈された品々のうちの一品であったというのがありうべきところとして考えられているとのものである。1519年に現在メキシコとなっている地の岸辺にコルテスは到着し、何度かの戦闘を経て1519年11月8日に(アステカ) 首府に入城、熱意を伴ってではなかったかもしれないが、アステカ統治者モンテスマ 2 世に敬意をもって迎えられることになりもした。いくつかの文献がモンテスマがコルテスを羽毛ある蛇の神ケツァルコアトルと考えており、彼をそれに応じて遇したとのことが伝えている」との記載がなされているところである—。

コルテスがケツァルコアトルと見做されたことからして不分明とされるような風潮があるのだが、とにかくも、コルテスがケツァルコルテスの再臨なした存在であると考えられていたとの文献的記録が残置していることが問題になる (尚、長大な本稿にての先立っての段にても言及なしていたことの再言及となるが、[アステカ皇帝モンテスマらがコルテスを神と信じていた] とのことについての初期の記述は早くも16世紀に成立していたスペイン側の記録、フランシスコ会修道士ベルナルディーノ・サアゲンが編纂主導して成立した Florentine Codex 『フィレンツェ絵文書』よりみとめられる(とされる)。また、モーリス・コリス著『コルテス征略誌』にてもコルテスへの神格化が征服者サイド記録にて記されていることがうかがい知れるようになっている)。

ここより【アトランティスを通じての結節性】についての話に入りたいのだが、今一步の前段階のこととしてくどくど強調したいところとして、アメリカ大陸で信徒を裏切るような史的結果をもたらしたとの信仰の崇拜対象、羽毛ある蛇ケツァルコアトルは多層的にルシファーと結びつく(本稿にての [出典\(Source\) 紹介の部 53](#) から [出典\(Source\) 紹介の部 54\(4\)](#) を包摂する部にて詳述を加えてきたところである) のと同時に、同ケツァルコアトルという存在は

[ペルセポネと記号的に濃厚に結びつく存在であると(本稿にての [出典\(Source\) 紹介の部 97](#) にあって) 指し示してきた女神 —少なくとも共に冥界下りをなした女神達について、それら女神らがそれぞれ愛人としていると伝わる植物神としての死と再生の神らが同一存在であると伝わっているのならば、「記号論的に濃厚に結びつく」と述べても何ら差し障りないであろう— であるイナンナ・イシュタル] (後のギリシャ・ローマのアフロディテ・ヴィーナスの元となったとされる古代中近東にて信仰を集めていたとの女神ら)

「とも」純・記号的に結びついていると先述してきた存在ともなっている(本稿にて [出典\(Source\) 紹介の部 61](#) の段で事細かに解説を講じてきたこととして(ペルセポネと濃厚に結びつく)イシュタル・イナンナは[金星の体現神格]であり、[冥府にエレシュキガルという対なる存在(双子)の係累を伴っている神

格]と伝わっているわけだが、ケツアルコアトルも[金星の体現神格]であり、[冥府にショロトルという双子の係累を伴っている存在]である)。

従って、新大陸にて現出した状況、

[ケツアルコアトルの再臨を信じたアステカの者達がスペイン人に持ち込まれた疫病と戦乱によって破滅的状況に陥った]

との状況は

[[**ペルセポネ(ザクロを食して【冥界の主催者】となった女神)**と記号論的・多重的に結びつく存在]の再臨によって疫病と戦乱によって破滅的状況に陥った]

とも「純・記号論的に」置き換えがなせるものとなっている(そこにて問題になるのは読み手が事実から何かを判断する能力があるかないか、だけである)。

以上表記のようなことがある中にて —これよりアトランティス絡みの指摘に入るとして—、

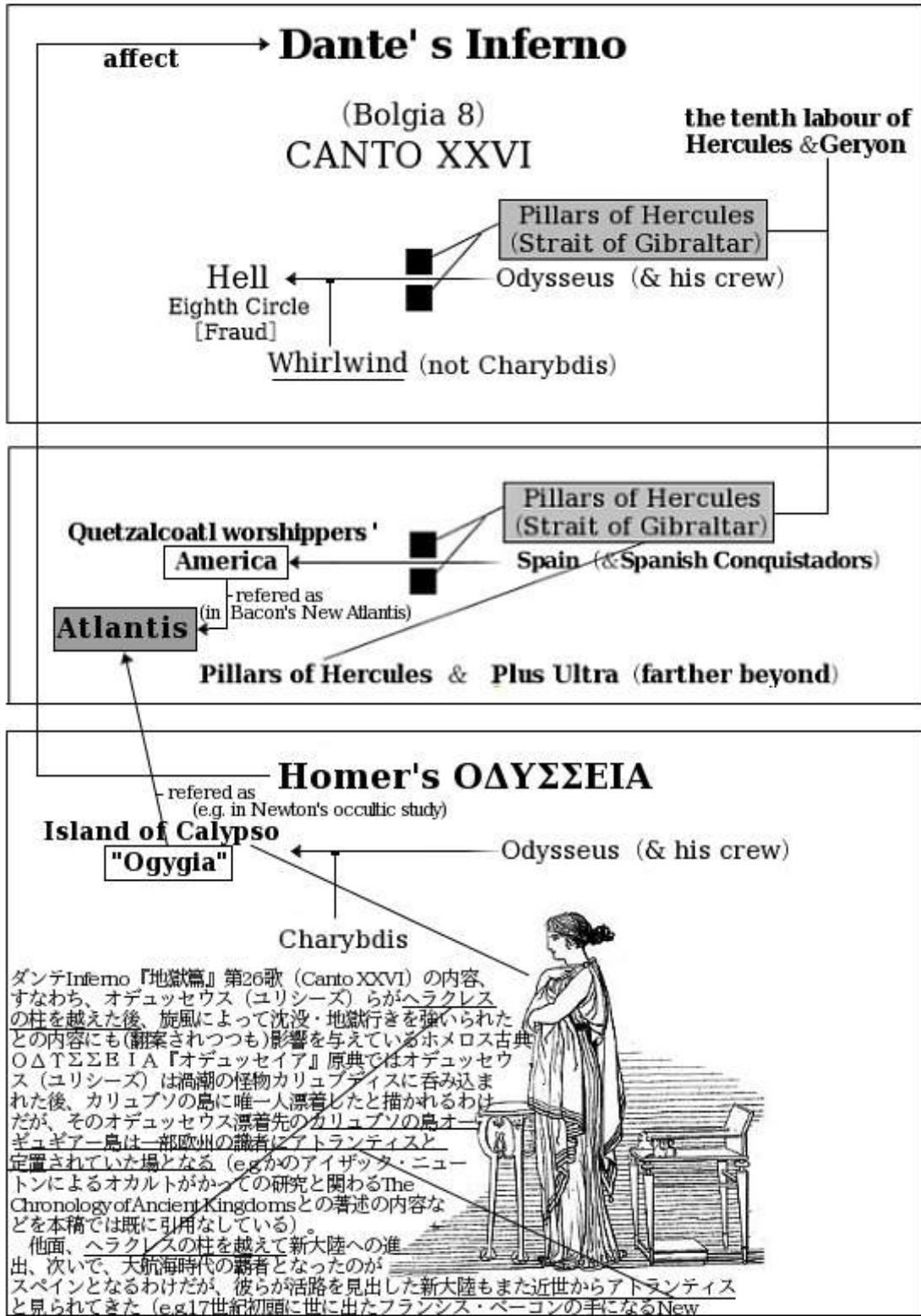
「ケツアルコアトル崇拝がなされていたアメリカ大陸 —すなわち、スペインが国章にヘラクレスの柱を刻み込んでヘラクレスの柱にて表象されるジブラルタル海峡を越えて進出の対象とした「新」大陸— は大航海時代欧州の折より欧州人に【伝説のアトランティス】(プラトン古典『ティマイオス』を通じて今日に伝わる大西洋の彼方にあるとされた陸塊)の同等物と見られるに至っていた」

「大航海時代が始まる「前」の欧州にてものされたダンテ『地獄篇』ではオデュッセウス(ユリシーズ)が「野獣とは異なる知を拓く冒険のためにこの先に漕ぎ出そう」と一席ぶった後にヘラクレスの柱(ジブラルタル海峡)を越えて、間を経ずに旋風(つむじかぜ; ワールウィンド)に襲われて船旅の同道者諸共、海の藻屑と消えた(そしてダンテらがヘラクレス第10功業に登場の怪物ゲーリュオンにおぼわれて降下した先たる地獄第8圏に墜ちた)。だが、そうしたオデュッセウス墮地獄のダンテ『地獄篇』粗筋に影響を与えたホメロス原典では(船旅の一行を襲ったのが「渦を巻く渦巻き」か「旋風」かの違いもあるのだが)オデュッセウスは同道者が皆、渦巻きによる難破で死ぬことになった中でただ一人生き残り、女神カリュプソの島オーギュギア島に漂着している。そして、そのオーギュギア島、アイザック・ニュートンやヨハネス・ケプラーら欧州の著名人らを含めて【アトランティス同等物】とみられていた領域である」

とのことがある(本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 43](#) ではアイザック・ニュートンの The Chronology of Ancient Kingdoms『古代王国年代記』の内容を引きながら、いかようにしてアイザック・ニュートンがカリュプソの島をアトランティスとして言及しているのか、その紹介もなしている)。

であるから、『地獄篇』(ペルセポネ関連の多重的一致性が問題になる古典)と【スペインのザクロ(グラナダ)を扼してよりの所業】(ペルセポネ関連のケツアルコアトルにまつわる一致性が問題になる所業)がアトランティスを介して「も」接続することになる —※尚、現行、日本語ウィキペディアなどに誤解を招く誤記があるようだが(後、訂正されるかもしれない)、ダンテ『地獄篇』とは違ってホメロス古典『オデュッセイア』それ自体にはオデュッセウスが渦潮に襲われたのがヘラクレスの柱の先であるとの表記などまったく見受けられない(そこをどういうわけなのか和文ウィキペディアではホメロス古典『オデュッセイア』にて「も」オデュッセウスがヘラクレスの柱を越えたとの誤解を与える表記が、訂正されるかもしれないも、現行はなされている)。その点もってして、ホメロス古典におけるオデュッセウスらの航海の領域にはいろいろな説が比定地との兼ね合いで呈示されており、たとえば、英文 Wikipedia [Geography of the Odyssey] 項目には(ホメロス原典にて)オデュッセウスらがサイレンや、スキュラ、渦潮の怪物カリュプティスらに襲われたのはシチリア近辺のメッシーナ海峡(the Strait of Messina)だとの説が紹介されているぐらいである)。であるから、アイザック・ニュートンらがオデュッセウスらが漂着し

た先たるカリュプソの島をアトランティスだと強弁するには(ホメロス原典にはオデュッセウスらが大洋＝大西洋の先に漕ぎ出したとの目立っての記述がないため)多少無理があるのだが、しかし、であればこそ、【スペインの「ヘラクレスの柱を越えての」進出先たるケツアルコアトルが崇められていたアトランティス仮託物(＝アメリカ大陸)】と【ダンテ『地獄篇』の「ヘラクレスの柱越えの後の」(ルシファーを中枢に据えての地獄への)オデュッセウスら墮地獄の筋立てに影響を与えているホメロス原典に見るアトランティス仮託物(カリュプソの島)】との関係性が自然ならざるところから出てきているわけではない(ただ単純に大西洋の彼方に漕ぎ出したからとのことでそういう一致性が自然なる解釈より出てきたわけではない)との意味で[恣意性](わざとらしさ)が問題になると映るところでもある――。



本稿出典(Source)紹介の部 52 ではフランシス・ベーコンという歴史上の人物(フランシス・ベーコンは同じくもの出典紹介部出典(Source)紹介の部 52)にて評価のなされようも紹介しているように世界史上、極めて有名な英国の思想家にして文明のプロモーターとされる人物となる)がアメリカ大陸をして[アトランティス](ニュー・アトランティスに対する大アトランティス)である、そのように同人自著『ニュー・アトランティス』で定義しているの事をベーコン著作『ニュー・アトランティス』からの長くもの原文引用をなしつつ示していた。

フランシス・ベーコンがアメリカ大陸をして[アトランティス]と定置していたのは(出典(Source)紹介の部 36)にてプラトン古典『ティマイオス』の書かれようを原文引用をなしつつ呈示しているように)アトランティスが

[「ヘラクレスの柱」(ジブラルタル海峡／地中海と大西洋を分かち海峡)の先に存在するリビュアとアジアを合わせたよりも大きな島 “ there was an island situated in front of the straits which are by you called the Pillars of Heracles; the island was larger than Libya and Asia put together ”]

として伝わっている、そこから、欧州人に新大陸などと呼び慣わされていたアメリカ大陸がアトランティスに対する定義付けとある程度合致していることも影響しているように当然に受け取れるようになっている。

さて、プラトン古典に見る地理関係上の問題もあってアメリカと同一視されるところがあったのであろうと普通には想起されるアトランティスは

[黄金の林檎の園と同一物]

であると述べられるような存在「とも」になっていた。

というのも、

「巨人アトラスの娘らが[アトランティス]とも呼称される中で」、といったアトランティスら、巨人アトラスの一群の娘らの中に黄金の林檎を管掌するの娘らヘスペリデスが含まれていること、彼女らヘスペリデスの[黄金の林檎の果樹園]が(欧州人から見ての西の彼方とも言うべきアメリカのことを想起させるように)大洋の彼方にあったと伝わっていることからアメリカとアトランティス(アトラスの娘ら⇔アトランティス⇔古の陸塊)との想起がなされるようなところがあったとされる」

からである(一例としての出典(Source)紹介の部 40)。

そして、アトランティスと同一視されもしていた

[黄金の林檎の園]

に関しては

[エデンの園](サタン・ルシファーに比定されもする蛇の誘惑が宗教ドグマにてなされたとされている領域)

と同一となっているとの申しようがしばしばもなされてきた(出典(Source)紹介の部 51)。ひとつにそのことにはエデンの園が[不死を約束する楽園と伝わっている][禁断の果実が林檎と結びつけられてきた]といった事情が影響を与えていると考えられもする。

フランシス・ベーコンの著作ではアメリカはグレート・アトランティスと呼称されている

Atlantis ⇔ America

[太平洋に浮かぶ広大な陸地]と伝わるアトランティスは[アトラスの娘ら]に管掌される
[西の果てにあっての果樹園]たる[黄金の林檎の園]と同一視されることがある

Atlantis ⇔ the garden of the golden apple

黄金の林檎の園はエデンの園とも同一視されることがあった場所となる

the garden of the golden apple ⇔ the garden of Eden

さて、[黄金の林檎の園]とのことで述べれば、それが問題になるのはヘラクレス 11 番目の功業であるのだが(出典(Source)紹介の部 39)にてアポロドーロスの古典 BIBLIOTHEKE 内記述を挙げてもいるようにヘラクレスの目標は黄金の林檎の園に実る黄金の林檎の取得であった)、ヘラクレスの 11 番目の功業についてはペルセポネとの[絶世の美女ヘレン(黄金の林檎の対価としての美女)]を通じての複合的な結びつきが観念できる功業ともなっている(本稿にての出典(Source)紹介の部 90(10)の段にて解説したことである。についてはつい先の段にてもペルセポネ Persephone とヘレネ Helen にまつわる関係図のくどくもの再掲をなしている)。

だけではない。黄金の林檎の園(ガーデン・オブ・ザ・ヘスペリデス)に関してはエデンの林檎の園[ガーデン・オブ・ジ・エデン]と結びつけられる存在であるとの視点が欧米人の一部識者に存在してきたとのこと(直近にての図解部にても取り上げていることであり、それもまた本稿にて何度も繰り返し指摘してきたとのこととなるが)も問題になる。エデンで禁断の果実を用いての誘惑をなした存在、蛇がキリスト教理解ではサタン(要するに地獄篇の最下層に幽閉されているルチフェロと同一存在)と見做されることが多く、となれば、

[[ケツァルコアトル] と [古き蛇としての悪魔の王(ルチフェロ)] の間に横たわる関係性]

との何度も注意を向けてきたとのその関係性が —[新大陸アメリカ]⇔[アトランティス]⇔[黄金の林檎の園と歴史的に見做されてきた地]⇔[エデンの園との一致性が一部で指摘されてきた地]との式で—「またもや」想起されるからである(わざわざ書くまでもなくここまでのくどくもの内容からお気づきいただけていることか、とも思うのだが)。

そして、(理解している向きには食傷するまでに繰り返しているところの回帰しての申しようをなせば)、『地獄篇』ルチフェロとケルベロスの結びつきがザクロを食した女神「とも」通じているというのが本稿ここにて(「関係性の多重性度合いから」)重視していることである。

上のことらは

[スペインがザクロ —ペルセポネの冥界滞留に関わる果実— を食した(グラナダを掌中に収めるに至った)後、ヘラクレスの柱を掲げつつ侵略活動を推進した]

とのことと

「あまりにも平仄があう」

とのことである (:ダンテ『地獄篇』にあっては[ヘラクレスの柱越えのオデュッセウス](黄金の林檎を巡る諍いで滅ぶことになったトロイア戦争での重要な存在)が旋風に巻き込まれて地獄行きを強いられ、

ルシファー領域一步手前の地獄の階層に落ちたとされるわけだが、対して、現実世界の大航海時代にあつてのスペインは[ヘラクレスの柱]を越えて[アトランティスと定置されもする新大陸]への進出にザクロ(グラナダ)を食した後、乗りだしたとのかたちともなっている。そして、そこにはダンテ『地獄篇』で地獄に落ちたと描写されるオデュッセウスがホメロス原典では渦潮の怪物に呑まれた後、「カリュプソの島」に一人だけ漂着したとされていること、その「カリュプソ(巨人アトラスの娘たる女神カリュプソ)の島」が「古のアトランティス」と見られてきたとのアナロジーが — [ケツアルコアトル ⇄ 『地獄篇』ルチフェロ(サタン) ⇄ ケルベロス ⇄ ペルセポネ(ザクロを食しての冥界の主権者)] / [ケツアルコアトル ⇄ イナンナ・イシュタル ⇄ ペルセポネ] との接続性に関わるところとして — みとめられもする。だが、他面で以上表記のように「アトランティス ⇄ アメリカ大陸 ⇄ 黄金の林檎の園 ⇄ エデンの園」と見るアナロジーの問題「も」同じくもの関係性を指示するものとして存在している。に関して問題なのは「あまりにも多面的多重的に物事が一箇所に集約しすぎている」とのことである。

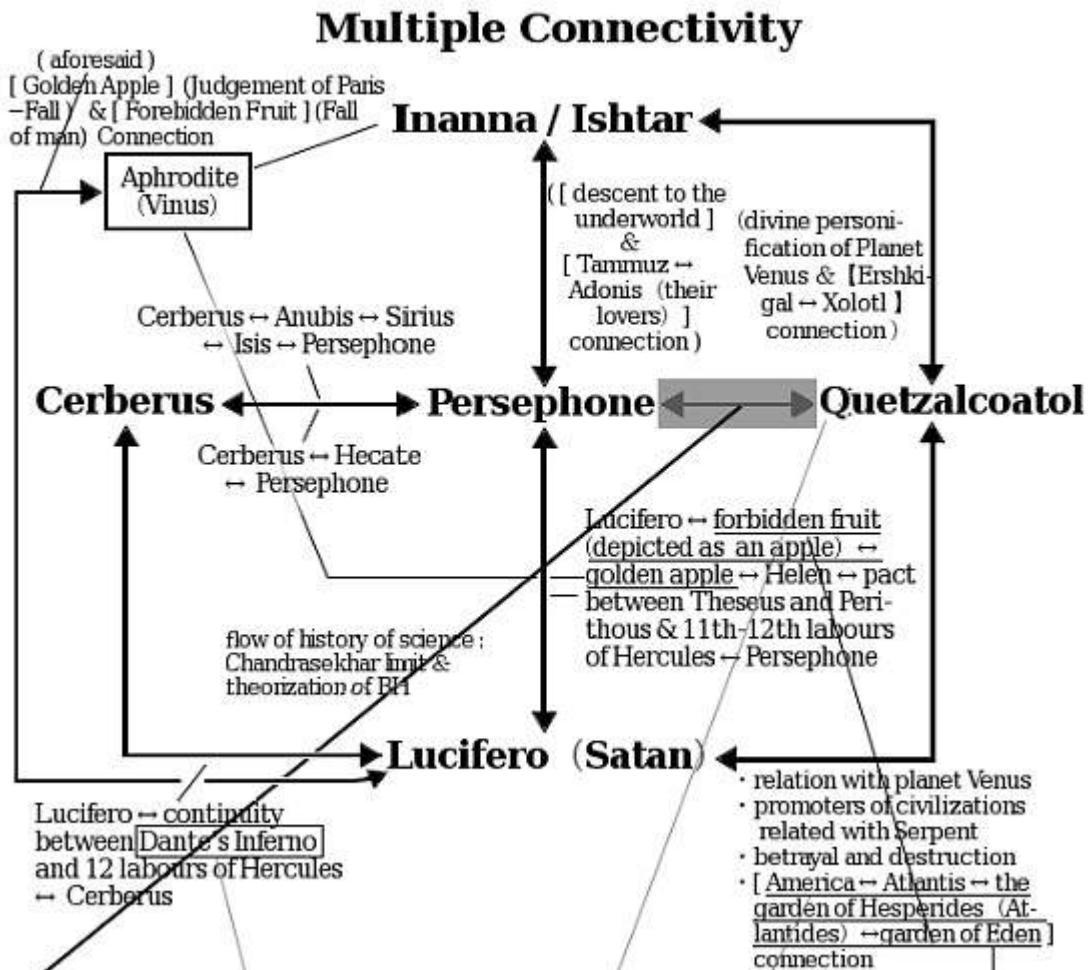
ここまでの表記にてアトランティスとの兼ね合いで何がどう複合的にさらに問題になるのか、お分かりいただけることか、と思う。

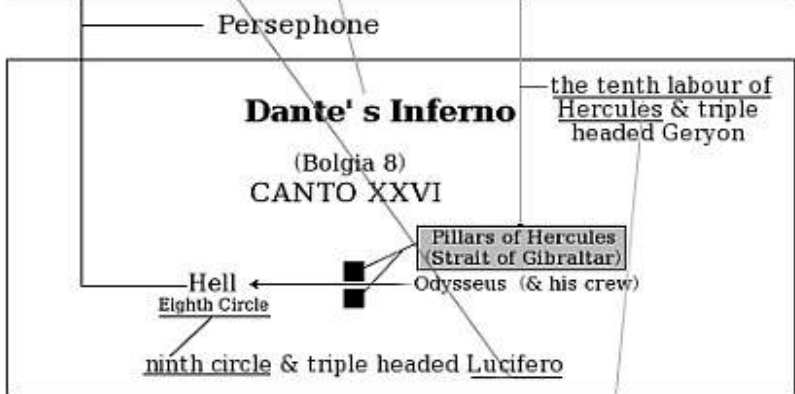
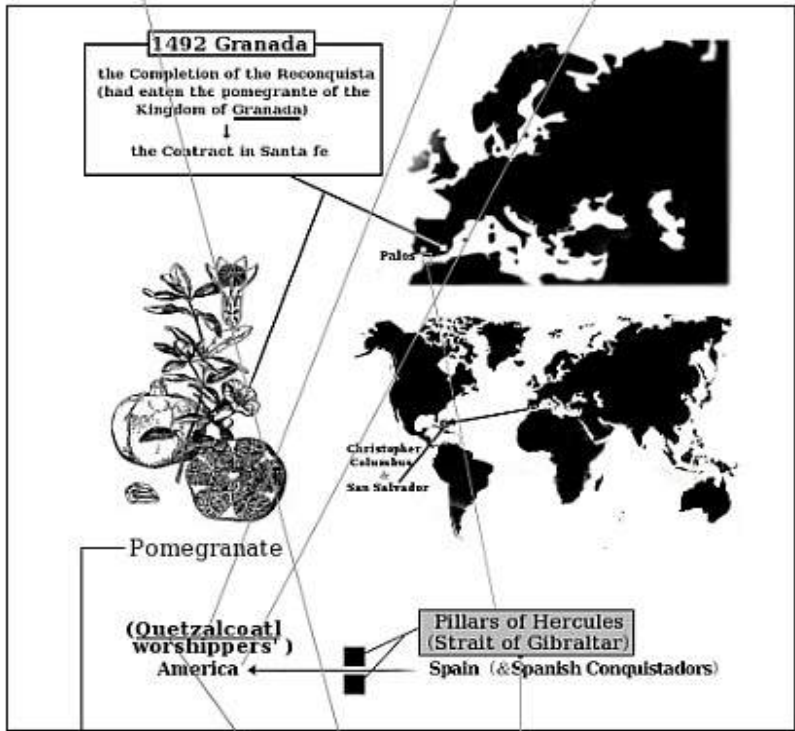
なお、「直近までの内容を理解している向きが読み手であればこそ、」との前提を置いた時にのみ、その整理のための用をなすとのまとめの図を下に付しておく。

筆者がここまでに問題視していたのは下に挙げての図にあつての
Persephone[ペルセポネ]

Quetzalcoatl[ケツアルコアトル]

との要素にあつて「も」関係性のパスが描ける、スペインの新大陸征服事業ありようを介して関係性のパスが描けるとのことである。





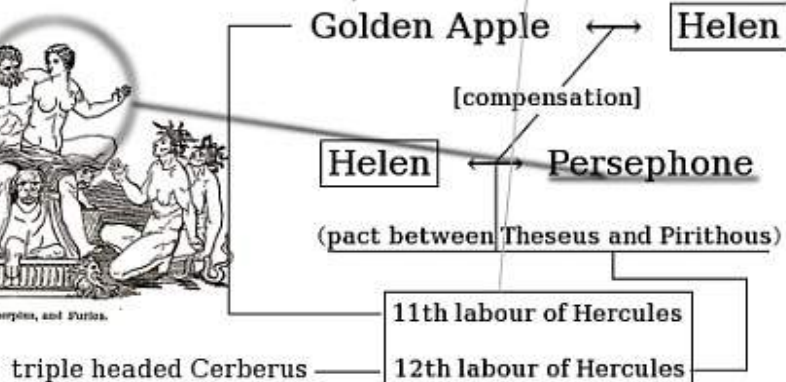
the Garden of the Hesperides— (far west) the Garden of the Atlantides — Atlantis — (e.g. Francis Bacon's New Atlantis)
— America — Quetzalcoatl worshippers' continent

" The Gardens of the Hesperides with the golden apples were believed to exist in some island in the ocean, or, as it was sometimes thought, in the islands on the north or west coast of Africa. They were far-famed in antiquity; for it was there that springs of nectar flowed by the couch of Zeus, and there that the earth displayed the rarest blessings of the gods: it was another Eden. "
— Alexander Murray (Manual of Mythology)

example



Helen, Persephone, and Cerberus.



(問題は以上のような多重的関係性が指し示せるようになっていく点につき「それが偶然、あるいは、こじつけで済むか」である。につき、人間のつながりを線で引いた場合に大概、数人を媒介項にただけで多くの人間に関係性を見出してしまうとの話柄などはよく耳にするところだが、といったことにも通ずるところとして「黒くもないところ」にこじつけで関係性を無理に導出しているわけ「ではない」とのことが筆者自身がよく知る(そして、それにつき読み手に確認いただきたい)とのことがここでの話となる。よく考えてみればいい。

ここでの話は関係性のパスが相互連結関係を呈しており、また、同じくもの方向性(ペルセポネでもいいしケルベロスでもいい)を指し示しているのである。

複数の人間が「相互に」仲良くしながら同じような服を着て同じ方向を目指して歩いていたら、そこに何らかの「紐帯」を見出せるであろう?(Aさん、Bさん、Cさん、Dさんが各別に人間関係を構築しているとの観察事実を捕捉している中、さらにもってAさん、Bさん、Cさん、Dさんが「一直線でつながる関係性のパス」で「全員」数珠つなぎでつながっているとのことまでを捕捉しているならば、そして、そこに基軸となる共通性(彼らは全員同じ「特殊な」服装をしている等々)があるとまで特定しているのならば、スポーツサークルつながりでもいいし、会社の同僚つながりでもいい、あるいは、宗教関連でもいい、何らかの「人間的紐帯;グループ」というものの存在が当然に推し量れるであろう? 一関係ない人間に組織の色を付けようとする、あるいは、虎の威を借り人間関係を偽るといったことが介在していないことを念頭に置いての「人定」がしっかりしているようなところで「相互」かつ「複合的」に通貫しての関係性のパスが見て取れる、しかも、そこに際だつての特性が見て取れるとのことに通ずる話をしていく。

そして、その「紐帯」が我々を皆殺しにしようとするような極悪非道のものであるとの要素をも帯びているとのことがその他事情から訴求できるようになっている。

雑文が過ぎた感もあるが、とにかくも、ここではそういうことにつまづく話をしていくこと、お含みいただきたい)

複合的・多重的な関係性が成立していることを(その想起するだに忌まわしき「機序」、[人間の意識的・無意識的コントロール]といった考えられるところの機序の問題は置いておいても)「偶然」で済ますことができるものか。

「否、できまい」

というのが本稿筆者が「具体的論拠の山より」導き出した帰結である(そも偶然の問題は成り立たぬと強調する背景には「[ここにて論じているところ]からして一部事例にしかなっていない」とのさらにもって濃密なる関係性の環を呈示する材料に事欠かないとのことがあり、につき、(ここ補説3の枠から離れてのこととして)本稿のここまでの段でも論じてきたし、これからも論じていく所存である)わけだが、そうしたことが「偶然ではない」として、それは

「これまであった悲劇(誰も語ろうとしないし、恐ろしくてか、あるいは制約上からか、見ること・聞くこともなさないとの節ある「過去の」悲劇)の問題」

に留まらず、「これよりの」問題、災厄発露の事前兆候の指し示しにまさしくも関わることでありと声を大にして述べたい(いいだろうか。筆者は陰謀「論」者(真に望ましき方向では何も変ええまいとの「主観に依存した馬鹿げた物言い」をなすとの手合い)の印象論などではなく理性的な人間としての「事前兆候」の指し示し(社会に、人間存在に「存続」に値するだけの自浄能力があるのならばそれを正しいかたちで再頒布できるとの「事前兆候」)の指し示しに努めているのである)。

その点、直近明示の関係性からして

「ブラックホール生成実験と言われるところの加速器実験と「複合的・多層的に 一すなわち、[執拗なる意志のありようが問題になる]との式で 一」接合する」

とのことがあるからこそ問題になる（：何度も何度も申し述べてきたこと、**[[アトランティス]**と**[[ブラックホール生成可能性が取り沙汰されることに中途よりなった加速器実験]**と**[[黄金の林檎が原因で滅したトロイア]**の関係性**[[ダンテ『地獄篇』とヘラクレス12功業とブラックホール関連事物らの関係性]**はここでは繰り返さないこととする）。

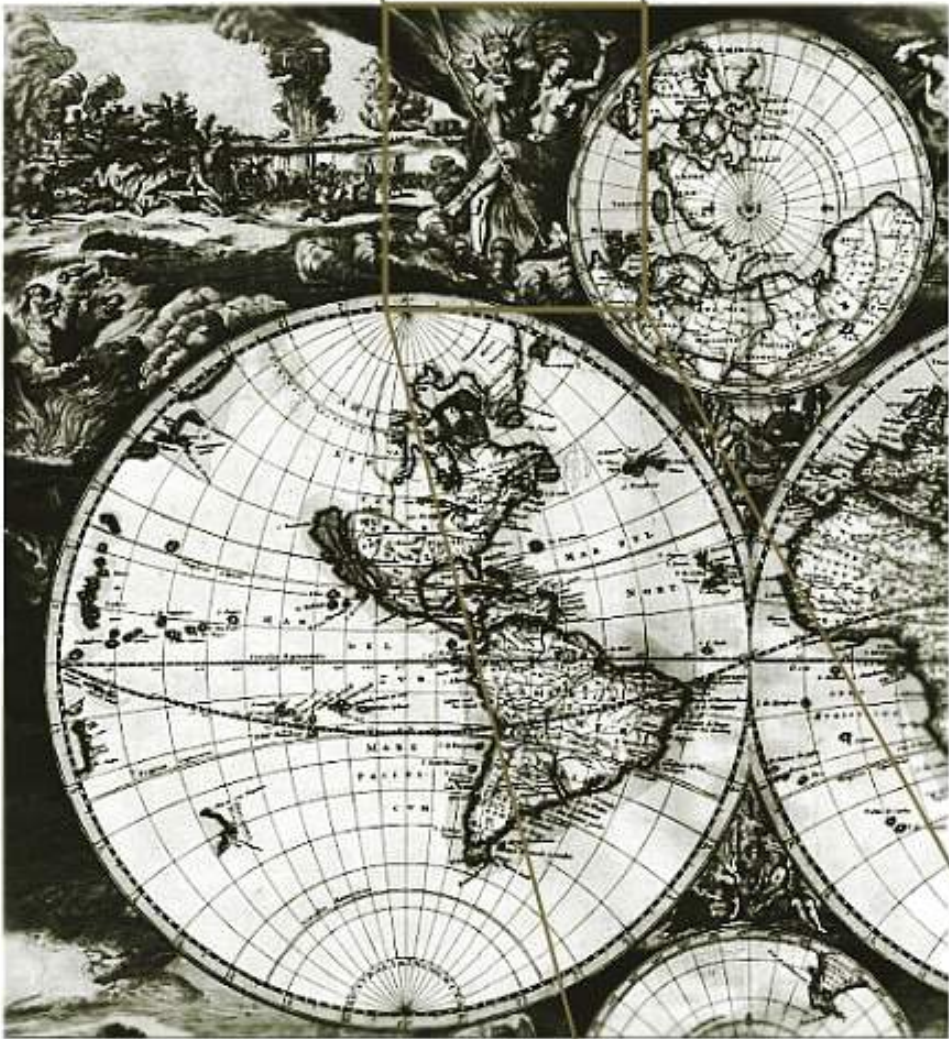
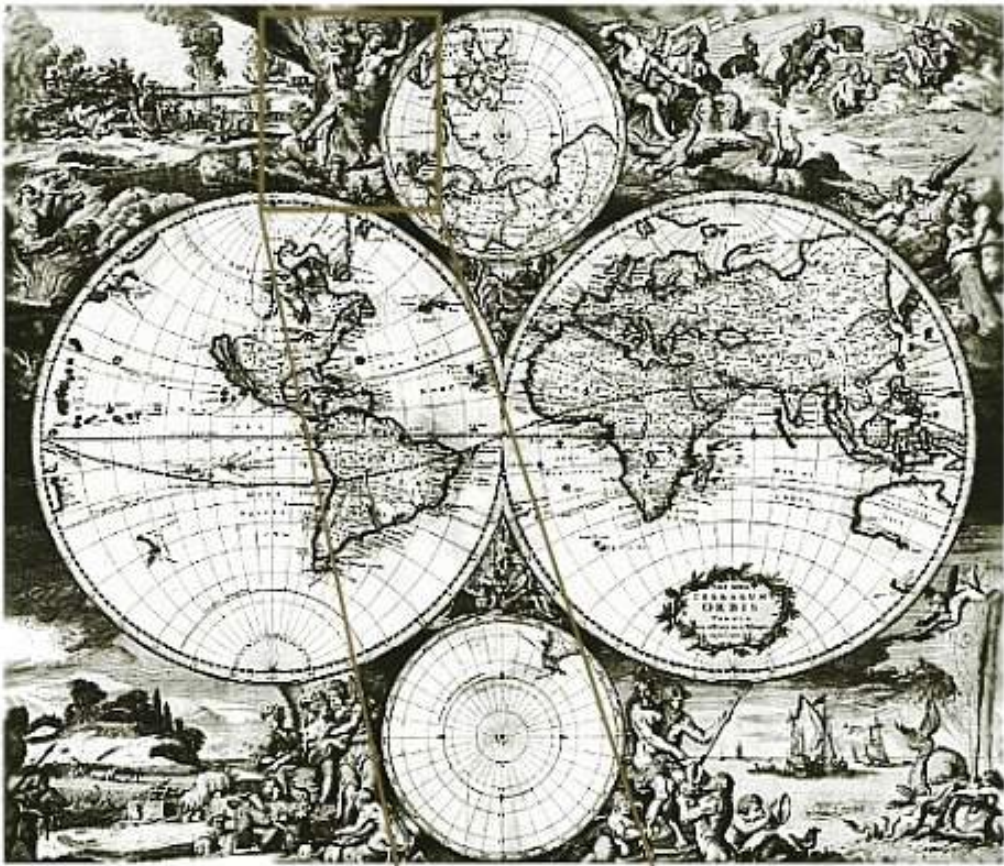
(脇に逸れての話として)

ここで物事の本質というものの絡みで問題となることについてさらに訴求するための意図しての話をなしておく。本稿にての先の下にて呈示の地図を材にして(ここでの話とは全く異なる方向性、黒海洪水説にまつわることに於ける)図解をなしていた。



上に再掲しての同地図は17世紀後半、1689年に Gerard van Schagen というアムテルダム の地図製作家に由来する古地図となるのだが、そうしたものにあってからして**[[新大陸とペルセポネの関係性を「想起」させるような側面]**を帯びている節がある。

下の図をご覧頂きたい。





Strife

Hades & Persephone

Cerberus



America



far-fetched?

地図にあっての左上方部には[冥王ハデス]とそのハデスに略取される[ペルセポネ]、そして、[ケルベロス]が配され、ペルセポネを抱えるハデスがアメリカ大陸(を中心とした地図の半球)を睥睨(へいげい)するかのような描かれようがなされているとのことがある。

その点、地図のハデス・ペルセポネ・ケルベロスらに囲まれて描かれる戦乱のありようについては

[新大陸にて原住民(インディオ等)と征服者の間で生じた紛争]

とは見えない — いかにもといったかたちでのアメリカ原住民然とした当事者の姿が見られない — とのことがあるのだが(新大陸で行われた殺し合いを描いているのか、旧大陸で行われた戦争のことを描いているのか判然としない)、筆者としては「であっても、」新大陸の殺し合いが

[ザクロの地での協約]

より始まったことが同地図より想起されるであろうととらえている(ペルセポネにまつわる新大陸にての腐臭を放ってやまないとの不快なる関係性について摘示してきた人間としてそうもとらえている)。

だが、ここでの地図を引き合いに出しての話については

[行き過ぎた印象論]

として斥けられたとしてもそれはそれで仕方ないととらえている(仮に地図の中にあつて[新大陸でのインディオの虐殺]と[ケルベロス]が極めて露骨に結びつけられているのならば話は別であったろうともとらえている中で、である)。

しかし、再度の「だが、」の問題として、直近の段にて呈示してきたペルセポネを巡る関係性の話が重きをもって存在していること自体に何ら相違はなく、いずれにせよ、それがゆえの歴史の酷薄さ・欺瞞性が問題になるとのことに変わりはない。読み手にはそのこと、ご理解いただきたいものである。

非常に長くなってしまったが、これにて([A]から[F]と分けて論じてきたところの)[E]の段での話はここまでとし、次いで、[F]と振っての段に入ることとする(※)。

(※本稿の複雑性がゆえに読み手が区切りの部を把握するのに難渋することであろうと考え、注記しておくが、ここでは補説3と銘打つての部 — 一本論に対する補説としての位置づけの部 — にての話をなしており、同じくもの補説3の部は

[ダンテ『地獄篇』とヘラクレス12功業の関係性]

を専らに問題視するとのことを

「[1]から[5]、そして、に続いての、[A]から[F]との各部にさらに細分化させて」なしているとのものとなる。そして、直近までの部は(補説3の中の[1]から[5]に続いての[A]から[F]のうちの)[E]の段に属さしめてのものであった)



先の段、[E]の段にては次のことが事実であると指し示すに足りるだけのことを摘示してきた。

「古代中近東の信仰にて崇められていた女神イナンナ・イシュタルについては[冥界下りして冥界に囚われた金星の象徴化存在]として、および、その他の要素、その他の媒介項をはさむことで[悪魔の王ルシファー]との接合性・同一性を「多重的に」指摘可能な存在ともなっており」

「上の伝での「多重的」関係性の環 —イナンナ・イシュタルとルシファーの間に横たわる関係性の環— には[ペルセポネ]という女神が関わることとなってもおり」

「[ペルセポネ]と([イシス] や [ヘカテ]を介しての) [シリウス] および [シリウス B の体現存在としてのケルベロス]との接合性を顧慮すると、[ルシファー]が古典『地獄篇』(ないし古典『失樂園』)にてどのように描写されているかとのこととも関わる場所として [ブラックホール]を環の中心に置いての多重的関係性「もが」見て取れるようになっている —シリウス B が 20 世紀に入ってより [ブラックホール理論開闢の材] とされている天体であるといったことがある中で、である— 」

ここ [F] の段では以上のことが

[フリーメイソンリー成員の(外部よりはきと押し量れる)内面世界を規定する思考法と密接に接合している]

とのこと「にも」なっているとのことを指し示すこととする(なおもってして述べておくも筆者は断じてフリーメイソンリー成員などではない; I swear, I am not a member of Freemason.)。

さて、先の段では

「[デメテル・ペルセポネを祭神としてのエレウシス秘儀]と [イシス・オシリスにまつわる崇拜体系] がフリーメイソンの儀式・典礼体系と発想として接合している」

とのことを出典に依拠して述べてきた(※)。

※**出典(Source)紹介の部 93**をほぼそのままに振り返っての記述として

本稿では和書、

『フリーメイソンと錬金術 西洋象徴哲学の系譜』(人文書院刊/名古屋大学吉村正和教授が執筆なした比較的学術的色彩が強き著作でフリーメイソンを陰謀団として取り上げるといった側面が絶無に近き書籍)

の p.22-p.24([ルキウスのイシス=オシリス密儀]の節)よりの中略なしつつの掻い摘まんだの抜粋として以下の記述を引いていた。

(直下、『フリーメイソンと錬金術 西洋象徴哲学の系譜』p.22-p.24 よりの「再度の」引用として)

古典密儀宗教については現存する資料が限られており、正確な内容が伝えられていないことはすでに述べた通りである。その中で、アプレイウスの『黄金の

『驢馬』第十一巻は、ルキウスのイシス＝オシリス密儀への参入をかなりなまなましく描いていることで有名である。物語形式を通して叙述されているが、そこにはアプレイウスの実体験が入り込んでいることはほぼ確実であり、少し詳しく見てみるだけの価値がある。

『黄金の驢馬』の主人公ルキウスは、魔術への好奇心から梟になって空を飛び回ろうとしたが、誤って驢馬に変身する。

…(中略)…

第一巻から第十巻において「運命の女神」に支配されたルキウスが、第十一巻においてイシスに救済されるまでの物語である。

…(中略)…

予言通りに翌日、イシスを祀る行列が繰り出され、ルキウスは大神官の待つ薔薇の花環を飲み込む。と同時に、ルキウスの体は驢馬から人間へと戻る。

…(中略)…

ルキウスは毎晩のように密儀を受けるようにというイシスのお告げを受けていたが、ようやく意を決して大神官のもとに行く。大神官は彼に対して、密儀参入が死を賭して行われるべき行事であること、「世俗の食べ物」や「禁制の飲み物」を断って心身の浄化に努めることを告げる。

ルキウスはまず齋戒沐浴ののち、十日の間「肉食と飲酒」を絶つ禁欲生活を送り、密儀参入の日を迎える。ルキウスは新しい亜麻布の衣服を着て、神殿の至聖所へと導かれる。アプレイウスはここで、密儀参入に関する秘密厳守の規定について、次のように述べている。

「あなたがたはおそらくその部屋で交わされた二人の会話とか、そこで起こった事件とかについて、何か話してほしいと強く要望なさることでしょう。…しかし、それについて不謹慎なお喋りをしたり、あるいは大それた好奇心から、それを聞こうとしたら皆さんのお耳も私の舌も等しく罰を蒙ることは必定です。」古代密儀宗教はほとんど例外なく、密儀に関する沈黙の義務を参入者に課している。エレウシス密儀においても、「その密儀には恐れ畏むべきもので、これを侵すことも、それについて問うことも許されない」として、秘密厳守が要請された。

(再度の引用部はここまでとする)

上にての和書『フリーメーソンと錬金術 西洋象徴哲学の系譜』よりの引用部では

[イシス密儀が古代ローマにもものされた小説『黄金の驢馬(ろば)』(イシスとペルセポネの同一性にまつわる言及がなされている古典)にて作中、重要なモチーフとされていること]

[イシス密儀がエレウシス密儀と同様に参加者に秘密厳守を強いているとのものであること]

[イシス密儀の秘密厳守を求めるやりようは掟を破ったものに厳罰を強いるといった性質のものであること]

とのかたちでイシス＝オシリス密儀とエレウシス秘儀(ギリシャにてのデメテル・ペルセポネ両女神にまつわる秘教儀式)の[密儀としての接続性]について言及されているわけであるが(尚、本稿では[エジプト伝来のイシス・オシリスの物語]と[ギリシャのエレウシス秘儀にまつわるデメテル・ペルセポネの物語]の間にて[第一、双方の物語で死した存在が哀惜の情を抱いてのパートナーに探し求められて、その死した存在が後に冥界の統治者に変ずるとの粗筋が採用されている]、[第二、双方の物語(あるいはその物語に基づいての著名な密儀)ともども穀物の成長に関わり、豊穡を願っての特性と関わっているとの指摘が(近現代の学究らによって)なされているとのことがある]、[第三、双方の物語にて死別したパートナーを探し求めている方

の存在がその途上、子供を火にくべて不死にしようとするが、失敗するとの際立って特異な下りが表出を見ているとのことがある]、[第四、実際に「イシス・オシリスの物語」と「ペルセポネ・デメテルの物語」が結びついているとの古代からの指摘がある]とのことをそれぞれ出典細かくも指し示しながら紹介してもいた)、本稿では相互に結びつく、

[イシスにまつわる崇拝体系]

[デメテル・ペルセポネにまつわる崇拝体系]

にはフリーメーソンの秘儀形態と通ずるとの認識がフリーメーソン自体にも存在していることを(前々世紀末期および前世紀前半の書籍よりの引用とのかたちで)指し示してきもした。

(直下、著名なフリーメーソンのアルバート・マッキーの手になる Project Gutenberg のサイトで公開なされている The Symbolism of Freemasonry (1882) の XXVII. The Legend of the Third Degree.よりの「再度の」引用をなすとして)

Thus in the Egyptian Mysteries **we find a representation of the death and subsequent regeneration of Osiris**; in the Phoenician, of Adonis; in the Syrian, of Dionysus; in all of which the scenic apparatus of initiation was intended to indoctrinate the candidate into the dogma of a future life.

It will be sufficient here to refer simply to the fact, that through the instrumentality of the Tyrian workmen at the temple of King Solomon, the spurious and pure branches of the masonic system were united at Jerusalem, and that the same method of scenic representation was adopted by the latter from the former, and the narrative of the temple builder substituted for that of Dionysus, which was the myth peculiar to the mysteries practised by the Tyrian workmen.

(訳として)

「このように古代エジプトの秘儀に関しては我々は「オシリス」に「死の表象」と「続いての再生」を見出すことをなし、フェニキアにては「アドニス」について同様のものを見出すことをなし、シリアにあつては「ディオニソス」につき同様のものをば見出すことをなし、それらについて「秘儀の背景にての仕組み」が秘儀参入候補者を「後の日にあつての生への教義」の方へと教化するのを意図してのものであるとのすべてを見出せる。

ここでは「ソロモン王の神殿に関わるティロスよりの労働者らの尽力を通じて石工機構の非純正の、そして、純正の支部らがエルサレムにて結集を見、前者から後者によって背後の表象が採用され、神殿建立者らの語りにてティロスの(ソロモン神殿建設に従事)職人らによって実施されていた秘儀」がディオニソスに特有な神話であったとすることが代弁されることになる」と述べれば十分であろう」

(訳を付しての再度の引用部はここまでとしておく —※—)

(※上にての引用部に関する注記を —**出典(Source)紹介の部 93**にあつてもほぼ同文のことを記載しているわけだが— ここになしておく。

その点、複雑な話ではあるが、
「フリーメーソンには「ソロモン王の神殿をエルサレムに建立した石工ら(聖書上ではティロス(ツロ)という古代都市国家、レバノン南部に現行遺跡が存在する国から来た石工ら)の故事を重んじての教義体系」が存在しており、
そうしたメーソン教義体系に見る伝説上の石工ら (ヒラム・アビフというメーソン儀式体系にあつて重きをなす仮想の棟梁と結びつけられる石工ら) に対して、
「ディオニソス、オシリスやアドニスのように「死と復活の神話が伴う神の「秘儀」への参入が実施されていた」
と(それが史実であるかは置き)表記引用部にては記載されているのであり、

もって、

[メーソンの [死と再生への固執] を [メーソンが重んじる伝説上の石工らのその伝での秘儀参入] と結びつけての話をなす]

との意図が表記著作 — The Symbolism of Freemasonry (1882) — の著者にあると(背景知識ある識者には、だが)分かるようになっていいるとのことがありもするのである ——「端的な引用に依拠しての端的な話をさらになす」としたうえで
も表記の著作、Project Gutenberg のサイトよりダウンロードできるとの The Symbolism of Freemasonry (1882)にての巻末 Synoptical Index.A の段(大要解説[ア]段)の Adonis 解説項目にて “ In the mythology of the philosophers, Adonis was a symbol of the sun; but **his death by violence, and his subsequent restoration to life, make him the analogue of Hiram Abif in the masonic system**, and identify the spirit of the initiation in his Mysteries, which was to teach the second life with that of the third degree of Freemasonry. ” (訳として)
「哲学者らに由来するところの神話学見地にあつてはアドニス(Adonis)は太陽のシンボルとなる。しかし、彼の暴力による死、そして、続いての生への復活は同アドニスをしてメーソン体系にあつてのヒラム・アビフ (メーソンに重要視されるティロスの地からソロモン神殿建立のために馳せ参じた石工らの棟梁) の質的同等物となさしめ、彼アドニスの秘蹟へのイニシエーションの精神を[第二の人生への教授をなそうとの意味でメーソンの第三位階の秘蹟] (訳注:マスター・メーソン位階への参入秘蹟) と結びつけるものである」と記載されていることから [同様のこと] はうかがえるようになっていいる ——)

(続けて直下、これまたフリーメーソン (DUDLEY WRIGHT ダッドリー・ライトという明示されての Freemason) の手になる著作として Project Gutenberg のサイトで公開なされていいる THE ELEUSINIAN MYSTERIES AND RITES (1919)、その冒頭部、Preface (序文) の部より先にて引用なしてきたことを「再度の」引用をなすとして)

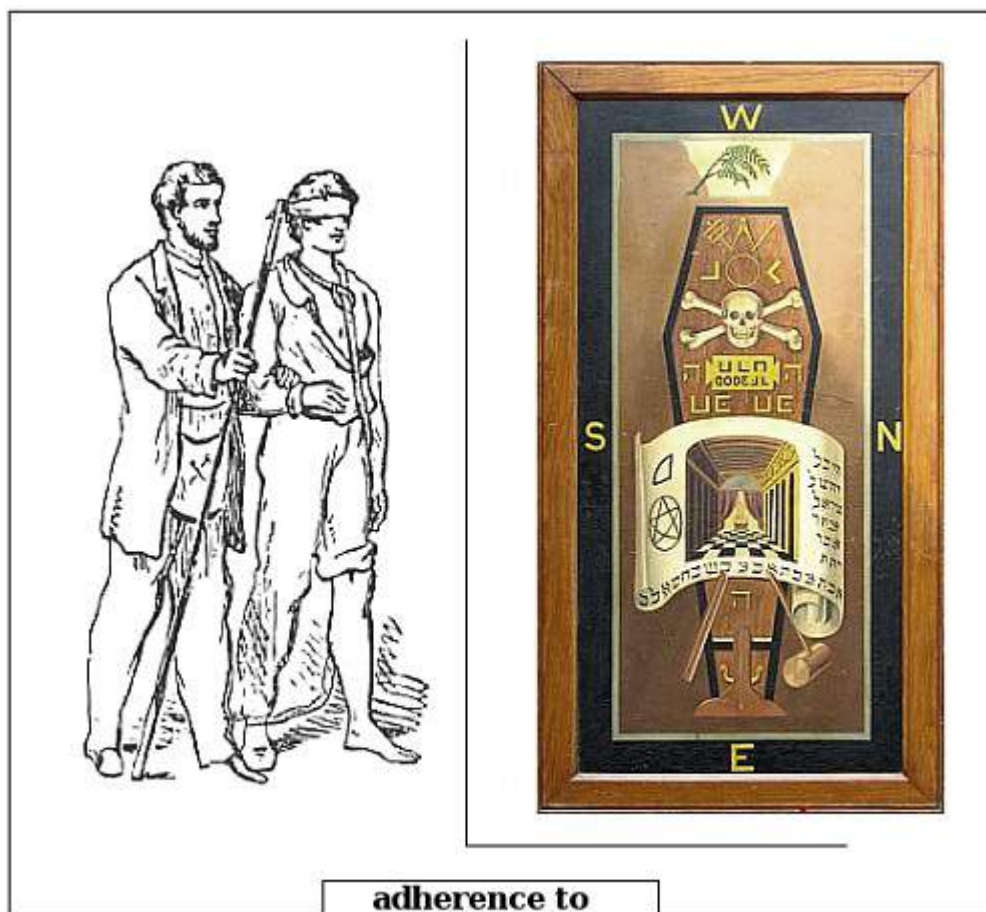
The Eleusinian Mysteries — those rites of ancient Greece, and later of Rome, of which there is historical evidence dating back to the seventh century before the Christian era — bear a very striking resemblance in many points to the rituals of both Operative and Speculative Freemasonry.

「古代ギリシャおよび後期ローマのそれら儀式がキリスト教時代より7世紀ほど遡るとの史的根拠を伴うとのエレウシス秘儀は実務的フリーメーソンリー (訳注: オペレイティブ・メーソンリー. 職能組合的色彩が強かったと「される」前期メーソン紐帯) および思弁的フリーメーソンリー双方の儀式体系に対して多数の点でまさしくもの著しい一致性を帯びていいるとのものである」

(訳を付しての再度の引用部はここまでとする)

(以上をもつてしてフリーメーソンの識者層が [イシス・オシリスの儀] [エレウシスの儀] を自組織イニシエーション思潮といかように結びつけての物言いをなしていいるかの紹介とした)

(続いて本稿にての **出典 (Source) 紹介の部 93** で取り上げたとのフリーメーソンへの死と再生へのこだわりを示す図像を「再度」挙げておくこととする)



adherence to
[Death and Rebirth]

[上掲図左]:メーソンの象徴・儀式体系要覧書 Duncan's Masonic Ritual and Monitor (1866 年刊行版/現行、全文オンライン上より取得可能となっているとの著作)にて掲載されているとの挿絵となり、

[フリーメーソンのエンタード・アプレントイス(第一位階 First Degree [徒弟]位階希望者)、すなわち、フリーメーソンの門を叩く者がそれを受けることを強制されるイニシエーション(画期としての儀式)にて

[死刑囚の格好](目隠しをされ、絞首刑の縄を巻き付けられての格好)

をなさしめられた後、目隠しを取られ、光を与えられるとの式がとられるとの一連のそのプロセスを描いたもの]

となる。

[上掲図右]:メーソンの第三位階 Third Degree (マスター・メーソン位階;後にフリーメーソン組織媒体における言われようを引くが、[候補者が象徴的に墓石よりの引き上げ]を見るとの位階)に格上げされる者がその額面上の寓意性を学ばされるとのトレーシング・ボードに見る棺桶の象徴となり、英文 Wikipedia[Tracing board]項目に現行、その写真が掲載されているものとなる。

(以上のこと、[死すべき者が光を与えられて復活を果たす]とのメーソンのイニシエーションの流れがいかようにエレウシス秘儀と結びついているのかとのことにつき(ローマ期古典『黄金の驢馬(ろば)』内容を加味しもし)解説を講じているのが本稿の [出典\(Source\)紹介の部](#) 94(4)である)

さて、直上まで枠で括って振り返ってのこと、すなわち、

[[イシス・オシリスに対する崇拜体系] および [デメテル・ペルセポネのエレウシス秘儀] とフリーメーソンの [死と再生に関わる典礼体系] の連続性]

とのことに加えてフリーメーソンに関しては「無論、出典に依拠してのこととして」次のようなこと「も」述べられるようになっている。

「フリーメーソンとは金星象徴神格ヴィーナスの象徴を彼ら位階引き上げの儀に見る様式に組み込んでいると彼ら成員自身が認めている(との組織でもある)」

続いて、(確たる問題意識あつてのこととして)、表記のことによつての典拠を挙げることにする。

その点もつてして、再言するも、筆者はフリーメーソンなどでは断じてないが、ここでは敢えても、

[フリーメーソン自身が運営するフリーメーソン特性解説 Web サイト —外部向け宣伝活動のためか、ないしは、身内間の当たり障り無き意思疎通を図るためかにか運営しているフリーメーソン特性解説 Web サイト—]

より

「フリーメーソンとは金星象徴神格ヴィーナスの象徴を彼ら位階引き上げの儀に見る様式に組み込んでいると彼ら成員自身が認めている(との組織でもある)」

とのことによつての「彼ら自身の」言を引いておくことにする。

(直下、現行、オンライン上より誰でも確認できるところとなっているフリーメーソン由来のメーソン関連情報紹介サイト www.masoniclibrary.org.au —[メーソン図書館. オーガニゼーション・オーストラリア]といったドメイン名のサイト— にての Venus&Freemason と題されたページよりの抜粋をなすところとして)

The layout of every Masonic Temple is said to be a model of Solomon's Temple, and **today every Master Mason is raised from his temporary death by the pre-dawn light of the rising Venus at a symbolic equinox.** The rising of Venus was central to Canaanite theology and was associated with resurrection, as it is in Freemasonry in our third degree. When the candidate is raised from his tomb his head rises in a curve towards the East to meet Venus which is also rising above the horizon. The East-West line marks the equinox, the point of equilibrium between the two solstices, when there are twelve hours of light and twelve of darkness. **It appears that some rituals of Craft Masonry are based upon astronomy and have a heritage well over five thousand years old. The W.M. directs the candidates gaze towards the East where he can see a five-pointed 'star' rising before the sun at dawn. The planet Venus as she moves around the sky touches the path of the sun in just five places, just like the W.M. embracing the candidate at just five points, when he is raised.**

(補つても訳として)

「メーソンのテンプル構図(神殿としての建築様式)はすべてソロモン神殿をモデルにしたものであると言われており、今日、全てのマスター・メーソン位階の者は[昼夜平分点(春分あるいは秋分)]を象徴し上昇を見るとの金星の夜明け前の光によってその

[一時的なる死]

より引き上げられる格好となっている。

[金星の上昇]は往古カナン人の神学(セオロジー)の大系にて中心をなして

いたところのものであり、フリーメーソンにあっては、
[我々 —(訳注:我々というのは引用元となっている www.masoniclibrary.org.au とのサイトが[メーソン由来のものであるところ]によつての表記となる)—
にあっての第三位階のフリーメーソンでの再生(を模しての儀式態様)]
のように[再生]にかこつけられているとのものである。

(マスターメーソン位階に推挙されようとの)候補者が(象徴的な)墓石から引き上げられるとの折、彼の頭は地平線の上へとぼっていき金星に向き合うようにと東に向けて曲げるとの式で上方へと引きあげられるとのかたちになっている。その折の東西のラインは光の十二時間と闇の十二時間とをあわせて存在するとの昼夜平分点、

[二つの至点(訳注:夏至・冬至/太陽が中空にあっての最高点ないし最低点に見えるとのポイント、半球に応じて昼か夜が最も長くなるポイント)の間の平衡点]

を表するとのものである。

クラフト・メイソンのいくつかの儀式は天文学に基づくように見え、また、5000年を優に越える(人類の)遺産を踏まえてのものに見える。W.M. (訳注:フリーメーソンの間で立場が上のロッジの上位者 Worshipful Master の略)は(マスター・メーソン位階に引き上げられるとの)候補者らをして夜明けにて太陽が出てくる前にのぼってくる五芒星が見えるようにと東側方向を向くように誘導する。惑星・金星が空を巡るとき、丁度、W.M.(ワーシップフル・マスター)が彼(マスターメーソン位階引き上げ対象の者)が墓石より引き上げられた時に彼を5カ所において受け入れるスタイル —こちらについては続く補説4の段でも解説することとなる The Five Points of Fellowship との抱き上げ儀礼のことか、と思われる— をとるように5カ所にて太陽の経路をなぞるものである]

(訳を付しての引用部はここまでとしておく —※尚、上の抜粋部についてはこれより改訂やページの抹消がなされて記述が残置していないとの状況になる可能性もあること、一応、断つておく)

以上、オンライン上のメーソンサイドにてのメーソンドグマ解説サイトに見るようにフリーメーソンのマスターメーソンへの位階引き上げ儀礼にての様式として

「金星の属性(春分・秋分の昼夜平分点にて視界に入ってくるとの[明けの明星]の特性)を墓からの復活と結びつける」

とのやりようがとられていると「されている」わけである(※)。

(※加えもして [メーソン儀式における金星重視の思潮に関連するところ] でどういった物言いがなされているのか、の情報も下に —[出典\(Source\)紹介の部 99](#)と付して— 呈示することとする)

SOURCE 99



Phryne at the Poseidonia in Eleusis (circa 1889)
Eleusinian Mysteries are obviously one of the key elements.

ここ出典(Source)紹介の部99にあつては、

[フリーメーソンはヴィーナスこと[金星]の象徴主義への取り込むとのやりようをなしている]

とのことがあるばかりではなく、

[「金星軌道を体現してのものでもある」五芒星 —(※[五芒星]と[金星]とが結びつくことについてだが、本稿にての出典(Source)紹介の部67でも紹介しているように五芒星が[金星関連の天文事象である会合(内合)周期]と結びつけられている図形であるとの事情が存する)— をフリーメーソンがその象徴主義にて多用している]

とのことにまつわつての典拠を紹介する。

その点もつてして最前の部にてはフリーメーソン由来の媒体からフリーメーソンが金星(ヴィーナス)を彼らの典礼の体系に取り込んでいることを紹介もしたわけであるが

[金星がルシファーの象徴物と歴年、キリスト教教義大系にて見倣されてきたとの経緯]

を踏まえもして、キリスト教教徒、なおかつ、反メーソンの思潮をとる者らは

「フリーメーソンは(五芒星シンボルの多用をもって)ルシファー崇拜を取り込んでいる悪魔主義の団体である」

といった物言いをなしていたりすることがある。その適切性・妥当性の問題は別として論調の存在とのこ

とではとにかくもそうした論調が現実に存在しているとのことがある（:ただし、その際の反メーソン論客の言いよりの伝には話者の知識水準および人格に依拠しての差分がある。批判者ら自身がその実、遮二無二、熱情や畏れ(怖れ)に依拠しての彼ら流の[神]（彼らがメーソンのやりようと相容れないとの存在であると規定している[神]なる存在）への崇拜を説くとの相応の種別の人間であるといったケースも—そうした者達が高等批評をなし難くし批判を逸らすための結果的ないし確信犯的な下らぬ職員である可能性も想起させるところとして— 目につく、オンライン上には「海外にあっても」目につくとのこともある、としつつも申し述べれば、である）。

そうした論調、

「フリーメーソンはヴィーナス（金星／明けの明星）関連事物をそのやりように取り込んでい
る。金星の軌道を体現し、魔符としての側面から金星ことルシファーのことを想起させる五芒
星の象徴を頻用していることもメーソンが悪魔主義的団体であるためである」

とのキリスト教サイドの指摘に対してメーソンサイドが「相応の」反論を用意していることもオンライン上より目に付くところとなっている（:たとえば、これより引用することとする言い分、カナダのフリーメーソンのグランドロッジにて運営されているとのサイトにみとめられるような言い分が目につくところとなっている）。それではメーソンサイドの五芒星頻用に対する彼らの言い分紹介を下にてなしておく。

(直下、Grand Lodge of British Columbia and Yukon の Web サイトにあつての The pentagram とタイトルに振られたページ、その左部記述部よりの引用をなすとして)

One of the arguments used by anti-masons to support their claim that Freemasonry is satanic is to refer to the masonic use of the pentagram. The short answer to this accusation is that the pentagram is not mentioned in any masonic ritual or lecture and is not contained within the lessons or teachings of Freemasonry.

True in essence, this response will not satisfy anti-masons who can point to the many books about Freemasonry that include the pentagram, or at least the five-pointed star, in their iconography, and the writings of such spurious, irregular or psuedomasonic authors as Count Cagliostro, Éliphas Levi and Aleister Crowley. **Although the pentagram, as a geometric figure, is of interest to freemasons since it is also a representation of the Golden Ratio, its esoteric significance is only of historical interest.**

(訳として)

「反メーソンの人間らによるメーソンは悪魔主義的存在であるとの彼ら主張を支えるうえでのひとつの申しようはメーソンの五芒星使用に対する言及をなすとのものである。こうした攻撃に対する端的な答えは
[五芒星はいかなるメーソン儀式、メーソン教義にあつても言及されておらず、フリーメーソンの講義・教説にも五芒星が含まれて「いない」]
とのことである。

この本質的真実に依拠しての回答は

[フリーメーソンにまつわる多数の書籍にあつて、そして、紛い物的・非正規・偽メーソンのカリオストロ伯爵やエリファス・レヴィ、アレクスター・クローリーの書物にあつて五芒星(すくなくとも五方向を指す星)にあつての象徴主義が図解にて含まれていることを指摘することができる]

との立ち位置にいる反メーソンの人間らを満足させることがないだろう。

しかしながら、「幾何学的文様としての五芒星」は「黄金比の体現物」であったことからフリーメーソン・メンバーの興味関心の対象物であったわけだが、それは「歴史的関心をそそるとの秘教的重要性を有した存在」に対する「歴史的」関心のそれにすぎなかった(そのためにメーソンの五芒星の頻用は不自然

ではない。 — 訳注:ここにの引用元となっているウェブサイトの右側下にては “ The masonic significance of the pentagram is controversial. While it often appears on masonic regalia and decorative illustration, nowhere is it mentioned in masonic rituals or lectures. This does not mean though, that individual freemasons, aware of its historical usage, have not used it to illustrate their own personal interpretations of Freemasonry. ” 「五芒星のメーソンにあっての重要性については議論がなされるところである。五芒星は頻りにメーソンの紋章あるいは装飾画に現われるが、メーソンの儀式および講釈にてはどこにても五芒星にまつわる言及がなされていない。これはしかしながら、歴史的使用に気づきもした個人としてのメーソンらがフリーメーソンにての個人的関心を図像化するためにそれをうい「なかった」ことを意味するわけではない」とも表記されており、五芒星多用が「メーソンリー成員の「個々」の嗜好の問題」であるとの書かれようもがなされている —) 」

(補いもしての訳を付しての引用部はここまでとしておく)

(直下、同じくも Grand Lodge of British Columbia and Yukon の Web サイトにあっての The pentagram とタイトルに振られたページ、その左下部記述部よりの引用をなすとして)

Symbols mean what the users want them to mean — and meanings change. Although Venus is termed the bright morning star or Lucifer; and the pentagram is claimed by Levi to represent the Baphomet; and the celestial motions of Venus sketch a pentagram in the sky; it does not follow that the pentagram represents Lucifer or that Lucifer equates with the Baphomet. Or that any of this has anything to do with Freemasonry.

(訳として)

「象徴というものは用い手がそれらに意味して欲しきところを意味するものであり、それがゆえに意味は可動的である。金星(プラネット・ヴィーナス)は「輝ける明けの明星」ないし「ルシファー」にて言語化なされていることもあるが、そして、「五芒星」はエリファス・レビによってバフォメットと結びつく主張され、そして、「金星」の軌道は星天にあって五芒星構造を描く形をとるが、それであつてもなお「五芒星」が(広く一般的に)「ルシファー」を意味することにはならないし、「ルシファー」が「バフォメット」と同義になるわけでもない。また、それはこのことにあるの如何なることもがメーソンに関係しているとのことを意味しているわけでもない」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上にて表記の引用部に見るメーソン側の言いようの伝としては次のようなことである。

「(メーソンが五芒星を多用していることに対して、それが悪魔主義的なやりようであるとの批判に対して述べられるところとして)「五芒星」は「金星の軌道の象徴物」ではあるが、それが必ずしも「ルシファー」を意味することにもならないし、批判者がメーソンがそのようなものを崇めていると評する「バフォメット」を必ずしも意味するものでもない。メーソンが五芒星を多用しているのはそれが「黄金比の体現存在」であり「メンバー各員の「歴史的」興味関心の対象となる存在」であつたからであつて五芒星についてはメーソン儀式、メーソン教義にあって言及されておらず、フリーメーソンの講義・教説にもそれ(五芒星)は含まれて「いない」」

以上のようなメーソンサイドの申しようについては次のことまでをも顧慮する必要がある。

「フリーメーソンは「現実に」金星こと明けの明星をマスターメーソン位階への引き上げの儀などで儀式に取り込んでいるとのフリーメーソン自体による組織的ウェブサイト解説がなされている」（直近にてここ[出典\(Source\)紹介の部 99](#)に入る直前に原文引用をなしたメーソン関係媒体での書かれようを参照のこと）

「フリーメーソンは「現実に」金星こと明けの明星の軌道を体現しての五芒星を際立って自分達の象徴体系 —シンボル画や団体徽章「そのもの」— に取り込んでいる」

以上のこと —本稿の後々の段にあって順次具体像も呈示するとのシンボリズムら— が露骨にそこにあってもフリーメーソンのグランドロッジの公式ページなどは

（繰り返すが）「メーソンが五芒星を多用しているのはそれが[黄金比の体現存在]であり[メンバー各員の興味関心の対象となる存在]であったからである」

と強弁しても

「自分たちが金星を儀式体系に深くも組み込んでいるから五芒星の象徴を多用しているのである」

とは「書いていない」のである（:それにつき述べておくが、“ the short answer to this accusation is that the pentagram is not mentioned in any masonic ritual or lecture and is not contained within the lessons or teachings of Freemasonry. ” 「この攻撃に対する端的な回答は[五芒星はいかなるメーソンの儀式、メーソンの教義にあっても言及されておらず、フリーメーソンの講義・教説にも五芒星が含まれていない]とのものである」との上にての抜粋部（ Grand Lodge of British Columbia and Yukon の Web サイトのウェブサイトよりの上にての抜粋部）に認められる物言いとフリーメーソン関連団体、フリーメーソンの係累の女のみからなるとの関連団体である The Order of the Eastern Star[東方の星]の組織象徴 —団体徽章— そのものが[明示されての五芒星]となっていることとすら両立するようには見えない（「教義・教説がない」との物言いで[社章]といった形で用いているマークの多用につき組織との関連性がないとする言い分を誠実な式と思われるだろうか）。フリーメーソンのダブル・スタンダードの論法 —どこぞやの国にあっての各組織滲透方針（総体なんとやら）を明確に打ち出している宗教団体、何度も何度も選挙違反事件を起こしている宗教団体にまつわる[政教分離]にまつわっての公式見解のようなダブル・スタンダードを体現しての論法でもよからう— はそういう側面がとみに目立つものであるが、とにかくも、メーソンはメーソン構成員の個人的見解の問題として片づけており、同じくものページにて “The use of a five-pointed star or pentagram in some Grand Lodge seals and banners as well as on the collar or jewels of office worn by the masters of lodges and Grand Masters of Grand Lodges is of interest to students of masonic history and art. But its absence from the ritual and lessons of Freemasonry point out that its value is ornamental and any symbolic value is a matter of personal opinion.” 「ロッジの親方およびグランドマスターによって着用されるところの首章および装身具と同様にいくつかのグランドロッジのシンボルおよび旗飾りなどに見る五芒星はメーソンの歴史および美術を学ばんとする者達の関心の産物である。しかし、メーソンの儀礼および教義それ自体に見る五芒星の不在はその値打ちが装飾的なものであり、象徴上の値打ちが個人的意見の問題であることを示している」などと記しながら（少なくとも現行はそのように記しながら）、[東方の星]（フリーメーソンの係累の女のみよりなる組織体）などの[五芒星]の組織表象シンボルとしての使用などを[組織ドグマ]と峻別してと述べんとしている —筆者はそうもしたやり方、また、手前が把握するところのメーソンによる五芒星の使用事例や言われようから「当然に詭弁 sophistry ではないのか」と欺瞞性を感じているわけだが、おかしいこと、不適切なことを申し述べていると思われるだろうか— ）。

これより上にて文言抜粋なししているとのカナダのグランドロッジの Web ページは内容変更を見るかもしれないが、現行にあっては

「黄金比の問題と個人的趣向の問題で五芒星使用傾向があるのであり、儀式に五芒星が関わっているわけではない」

との方便が強くも用いられているわけである。

また、それと並行してメーソンの表記の Web サイト (Grand Lodge of British Columbia and Yukon の Web サイト) では五芒星が魔の象徴「ではない」とのことが古典に典拠求めながらも主張されている。次のようなかたちにて、である。

「五芒星はキリスト教徒にも歴史的に多用されてきた象徴であり、悪魔的象徴とはならない」(たとえば、表記の Grand Lodge of British Columbia and Yukon の Web サイトではキリスト教の教会にてもそれが認められるとのことを論じている。引用なせば、“There are a number of examples of the pentagram found on buildings of a religious nature in Europe. Notable examples can be seen on gravestones in the Claustro da Lavagem in the Convento at Tomar, Portugal, the monastery of Ravna, Bulgaria and the Church of All Saints at Kilham, Humberside, Yorkshire, England, which incorporates the symbol on the columns which support the Norman doorway.” (逐語訳なさずに大要訳をなすとして)「欧州にては多くの宗教的建築に五芒星が入れ込まれているとの例が存在しており、目を引くとの例がポルトガルの宗教施設墓石に、ブルガリアの修道院に、そして、ヨークシャーの教会に見られる」のかたちにて、である)

「五芒星は(魔の象徴ではなく) [「退魔」の象徴]としての側面を強くも有している」(たとえば、表記の Grand Lodge of British Columbia and Yukon の Web サイトではキリスト教の教会にてもそれが認められるとのことを論じている。引用なせば、“Mephistopheles, in Goethe’s Faust (1808) calls the pentagram a witch’s foot as a charm to guard against evil but doesn’t determine its alignment: [Mephistopheles.] Let me own up! I cannot go away; A little hindrance bids me stay. The witch’s foot upon your sill I see. [Faust.] The pentagram? That’s in your way? You son of Hell explain to me, If that stays you, how came you in today? And how was such a spirit so betrayed?” (逐語訳なさずに大要訳をなすとして)「1808年刊行のゲーテ戯曲『ファウスト』でもメフィストフェレスが五芒星をして[悪の誘惑に抗する魔女の足跡]と評しており、その属性に対することを述べていない」のかたちにて、である)

だが、以上については次のように「再度の」問題呈示をなすことができる。

「[キリスト教大系がどのようにとらえようと関係ない]との宗教に対する中立的視点でものを見たうえでも、あるいは、キリスト教の酸鼻を極めた歴史的蛮行からキリスト教そのものからして[相応のもの]であるとの視点でものを見たうえでも、とにかくも、キリスト教が[人類に破滅と墮地獄をもたらす悪魔]としているのがルシファーとなり、ルシファーという語は(千数百年の前に遡るキリスト教教父による聖書解釈のありよう — 既述 — から) [金星]に由来するところの存在であるとされており(出典(Source)紹介の部 54(3))、金星とは — 天文事象たる内合の周期から — [五芒星]と結びつくものである(出典(Source)紹介の部 67)。また、歴史的に[退魔・封魔の呪符]であれ五芒星が悪魔の類と結びつけられてきたことに相違はなく、そこに[反対話法]の問題を — キリスト教それ自体の蛮行やナンセンスさの問題と複合顧慮すべきところとして — 観念すれば話はまったく異なってくる」(とのことは否定できない)

「現実に五芒星は退魔の象徴と用いられてきたものだが(上述)、他面、それは悪魔を呼び出し[使役する象徴]として用いられてきたとのもの「でも」ある」(先に本稿にての出典(Source)紹介の部 72でもそこよりの引用をなしたところとして17世紀になったとされるグリモア(魔術書)の中の一書、『ソロモンの小さな鍵』(ゴエティア)、その近代版である The Lesser Key of Solomon, Goetia — (Freemason と認知されている MacGregor Mathers マクレガー・メイザーズ、著名哲学者ベルグソンの係累としても知られる同男が1903年に訳をな

し、Lauron William de Laurence という人物の手になる 1916 年の版としてインターネット・アーカイブ上にて流通しているとの版— にあっては(そこよりの再度の引用をなすところとして) “ **This is the Form of Pentagram of Solomon, the figure whereof is to be made in Sol or Luna (Gold or Silver), and worn upon thy breast ; having the Seal of the Spirit required upon the other side thereof. It is to preserve thee from danger, and also to command the Spirits by.** ” 「これは[ソロモンの五芒星]の形態となり、ソル神(太陽体現神格/金)ないしルナ神(月体現神格/銀)にて形作られる構造にして、そして汝が胸にあって帯びられるものとなり、汝の側ではない方にて求め乞われているとの霊の印を伴っているものとなる。[ソロモンの五芒星]は汝をして危難より守り、また、**霊達** (訳注:ゴエティアが取り扱っているとのソロモン 72 柱の悪魔の如き悪しき霊) に[命令を与える]ことができるものである」(引用部訳はここまでとする)との記載内容が認められるように、五芒星は[退魔の象徴]であるのと同時にその背面、[悪魔を使役するための象徴]と見做されてきたものであるとの史的経緯がある。さて、「このような」世界でそこに反対話法が介在して「いない」と言い切れるか。[与えられた馬草を食(は)むしか能が無いとの家畜へ墮したが如く者達に押しつけられた欺瞞]が介在して「いない」と言い切れるか。筆者は『事情を知る真っ当な者であれば、反対話法の可能性がないなどそのような恥知らずな明言(実意なき明言)はできなからう』と考えている 一尚、**出典(Source)紹介の部 72**でも述べているように筆者はここにて文言引いている『ソロモンの小さな鍵』のようなグリモア(魔術書)など下らぬ人間らに食餌として与えられた非科学的極まりないものとしか見ていない (I am not an occultist.)。 「問題なのは、」そうした下らぬものが単線的にではなく複線的に同一方向を指す、不快な同一方向を指し示すように存在しているとの現象が「どういうわけなのか」この世界にあるということであると述べつつも一応、申し述べておきたきこととして、である (ちなみに日本国内では[不吉をもたらす鬼を避けるための護符][龍宮に引き込まれぬための護符]としての来歴がありもし(**出典(Source)紹介の部 74**)、といった[五芒星]と[ペンタゴン(五角形)]が内接関係を呈した際にその関係性がいかに[極小極微の原子核の領域への力学]や[ブラックホール実験に関わる領域]の問題に「奇怪に」関わるかについて「も」本稿の先の段 (**補説 2** の段)にて詳説を講じている—)

(以上で[フリーメーソン]における金星重視の秘教思潮に対してどういう物言いがフリーメーソンの自己よりなされているかを挙げての**出典(Source)紹介の部 99**を終える)

「上のようなことを呈示したうえで、」の話だが、とにかくもってして先掲のように

「金星の属性(春分・秋分の昼夜平分点にて視界に入ってくるとの特性)を[擬似的な死(墓)からの復活]と結びつける」

とのやりようがメーソンにてとられている —メーソン自身が自認するところとしてそういうやりようがとられている— としてそれが何故、問題になるというのか。

以下呈示の流れの通りのことが述べられるからである。

[(本稿にて先述のように) [女神イシスのオシリス探索行に通ずる神話体系] とメーソンの [死と再生の儀式] の間には関係性があるとの指摘が (メーソン内の識者らに由来するところからして) なされている] (: **出典(Source)紹介の部 93**にて動向解説したことである)

⇒

[(本稿にて先述のように) [女神ペルセポネに関連する儀式;エレウシス秘儀] とメー

ソンの死と再生の儀式の間には関係性があるとの指摘がなされている] (: 出典 (Source) 紹介の部 93 にて動向解説したことである)

⇒

[(本稿にて先述のように) 双方メーソンの象徴主義と接合するとの指摘がなされている存在である [女神イシス] と [女神ペルセポネ] に関しては同一存在であるとの物言いから古代からして存在しており (古典『黄金の驢馬』などにはその通りのことが文献的事実の問題として記載されている — 出典 (Source) 紹介の部 94 (3) —)、そこには今日のメーソンの秘教思潮に通ずるそれなりの背景がある (イシス・オシリスへの崇拜思潮とメーソンにおける死と再生の典礼に通ずるとされるエレウシス秘儀 — ペルソポネとデメテルとヘカテを主たる祭神とする秘儀大系 — の際立っての一致性の問題がそうである)] (: 出典 (Source) 紹介の部 92 にて紹介したことである)

α

[Demeter = Persephone] (?)

"Demeter would thus be the ripe corn of this year; Proserpine the seed-corn taken from it and sown in autumn, to reappear in spring. The descent of Proserpine into the lower world would thus be a mythical expression for the sowing of the seed; her reappearance in spring would express the sprouting of the young corn. Thus the Proserpine of this year becomes the Demeter of the next, and this may very well have been the original form of the myth."

———— The Golden Bough In Two Volumes.Vol. I. (1894)
§ 8.— Demeter and Proserpine

本稿 [出典 (Source) 紹介の部 94] にて呈示のようにデメテルとペルセポネの母子は
[穀物の成長の異なるフェーズの体現存在として本来の意味での同一物 (イコールの関係にある存在)]
であるとの指摘が学者より「ひとつの説明ありようとして」(in one account) なされてきたとの存在らである。

β

[Demeter — Persephone]
[Isis — Osiris]



本稿 [出典 (Source) 紹介の部 92] にて呈示のように [デメテルとペルセポネの関係を基軸に据えてのエレウシス秘儀] は [イシスとオシリスの関係にまつわる神話] と際立っての相似形を呈するものである。

γ

[Hecate = Isis = Persephone]

本稿 [出典 (Source) 紹介の部 94 (3)] にて呈示のようにローマ期古典『黄金の驢馬 (ろば) 』にあつてはイシスがヘカテやペルセポネと同一物であるとの言及が古典それそのものの中にて [文献的事実] (philological truth) の問題として見受けられるとことがある。

8

[Demeter ⇔ Hecate]

[Persephone ⇔ Hecate]

本稿 [出典(Source)紹介の部94(6)]にて呈示のように古代にての遺物に見る証言や近代著名文人の物言いにあっては [女神デメテル] やその娘 [ペルセポネ] らと [ヘカテ] との同一性に言及しているとの下りが存在している (:ここではといった下りの厳密なる意味での黒白よりも [そうした物言いが蒼古としたものとして存在している] ことそれ自体、および、その背景を問題視している)

上記の α (アルファ) から δ (デルタ) のこらが各々別個の分立しての論拠から導出できるようになっていること、そのことから示される多重性が関係性色濃さを表しているのを重んじているというのが本稿である。

Persephone (⇔ Demeter)

Eleusinian Mysteries

Isis

ここ本段では [ペルセポネ・デメテルにまつわるエレウシス秘儀] および [イシス・オシリスにまつわる崇拝様式] が フリーメーソンの死と再生の重要視ありようにつながるとの論調が (内部者に由来するそれも含めて) 存在していることを重んじている。

Freemasonry

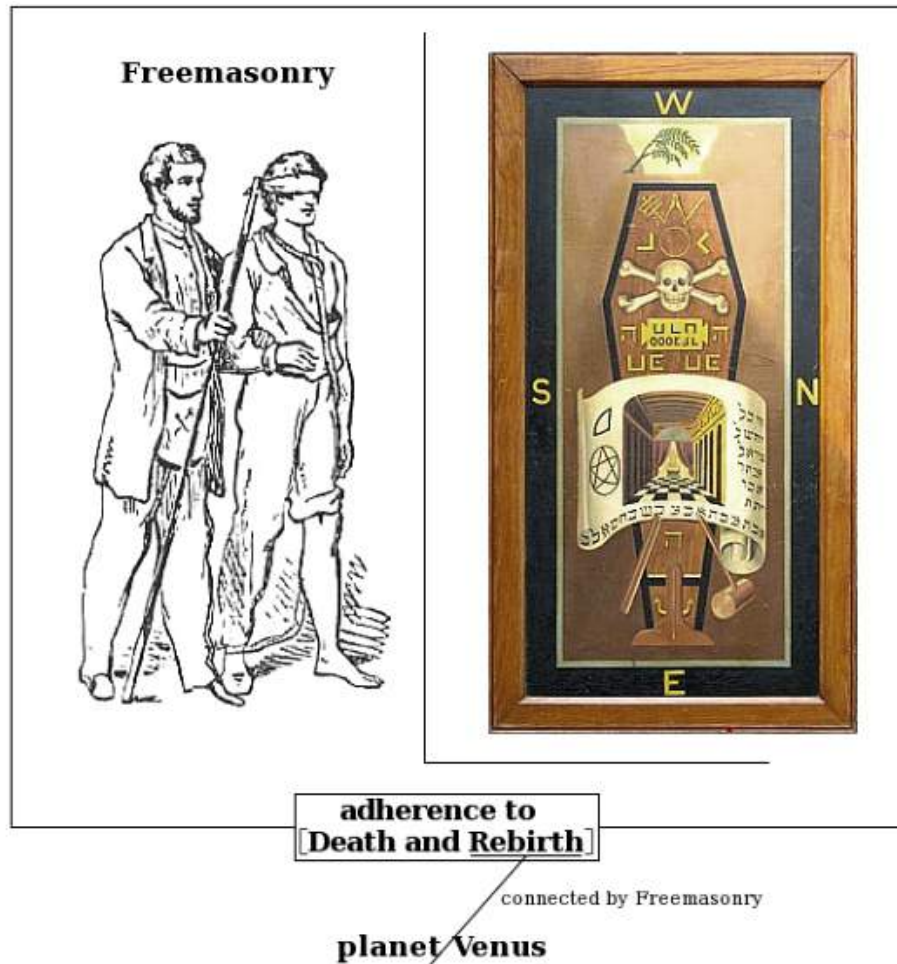


メーソンの [死と再生の儀式] が [エレウシス秘儀] といかように結びつくかは [出典(Source)紹介の部93] を参照のこと

adherence to Death and Rebirth

⇒

[(直近までに) [イシスに対する崇拝形態] および [ペルセポネらにまつわるエレウシス秘儀] の双方と接合する [メーソンの死と再生の象徴主義の重要視] の繋がり合いについて言及したわけであるが、 [メーソンの死と再生の典礼] とのことでは云えば、 金星ことプラネット・ヴィーナスとそちら [メーソンの死と再生にまつわる位階引き上げの儀] の間には関係性があるとの指摘が今日のメーソン自体よりなされている (:直近、フリーメーソンの申しようを一例 (just one example) として引いたとのこと、すなわち、 www.masoniclibrary.org.au との Freemason の手になる Venus&Freemason と題されたページに見る “ The layout of every Masonic Temple is said to be a model of Solomon’s Temple, and **today every Master Mason is raised from his temporary death by the pre-dawn light of the rising Venus at a symbolic equinox.** ” 「メーソンのテンプレの構図はすべてソロモン神殿をモデルにしたものと言われており、今日、全マスター・メーソンは [昼夜平分点 (春分あるいは秋分)] を象徴して上昇見る金星の夜明け前の光によって彼の一時的なる死より引き上げられるものとなっている 」 とのことを引いたとのこと、および、 [出典\(Source\)紹介の部93](#) の内容の複合顧慮することで申し述べられることである)



⇒

[(本稿にて先述のように) フリーメーソンの象徴主義にて重んじられている惑星金星とプラネット・ヴィーナスを体現する存在であるローマの女神ヴィーナス(ないしヴィーナスの元となったギリシャのアフロディテ) はメセポタミアのイナンナ・イシュタルと起源を一とする神格であるとの申しようがなされている] (: 出典 (Source) 紹介の部 48 にて引用しているとの記述および 出典 (Source) 紹介の部 61 (2) にて引用しているとの THE RELIGION OF ANCIENT PALESTINE (1908) にあつての記述を参照のこと)

⇒

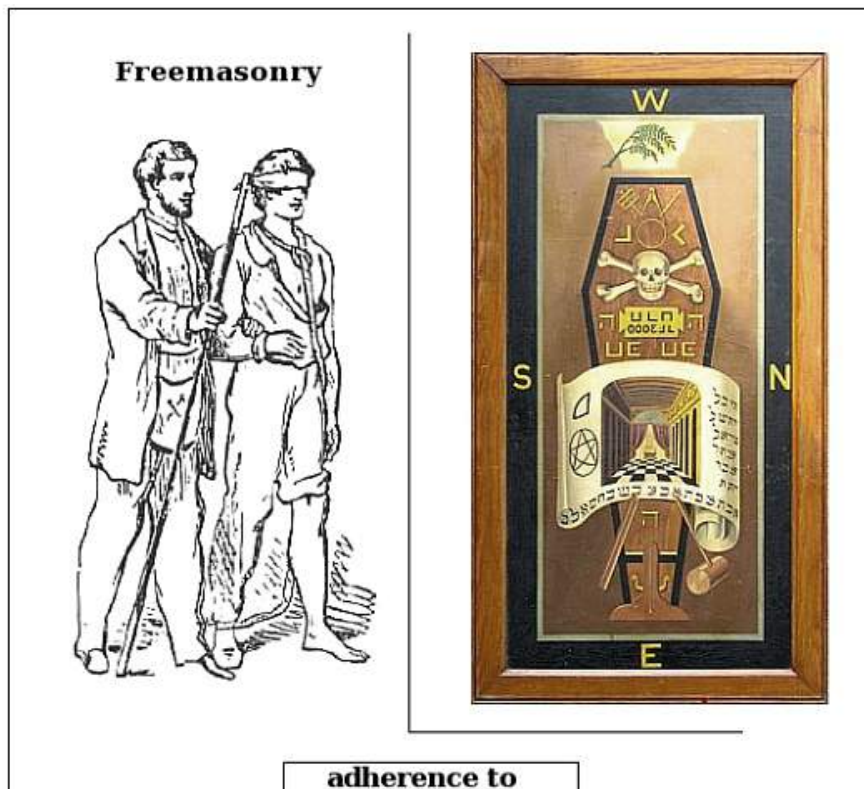
[(本稿にて先述のように) イナンナ・イシュタルは (媒介項を顧慮することで) 複合的に 悪魔の王ルシファーと結びついているとの指摘がなせもするようになって いる存在である — ※ 第二。まずもってイナンナ・イシュタルに関しては [冥界に望まずして幽閉されることになった存在] [金星を体現する神格] として [神への叛逆の咎から冥界落ちした存在] [金星の体現存在] たるルシファーと接合する、古代中近東に由来する神話体系に関する分析としてそういう見立てがあることを先に問題視していた (: [明けの明星] と [至高の太陽] の関係を視野に入れてのそういう分析があることに言及していた。については 英文 Wikipedia [Lucifer] 項目にあつての Mythology behind Isaiah 14:12 と振られた節にて “ In ancient Canaanite mythology, the morning star is pictured as a god, Attar, who attempted to occupy the throne of Ba'al and, finding he was unable to do so, descended and ruled the underworld. The original myth may have been about a lesser god Helel trying to dethrone the Canaanite high god El who lived on a mountain to the north. Hermann Gunkel's reconstruction of the myth told of a mighty warrior called Helal, whose ambition it was to ascend higher than all the other stellar divinities, but who had to descend to the depths; it thus portrayed as a battle the process by which the bright morning star fails to reach the highest point in the sky before being

faded out by the rising sun. Similarities have been noted with the East Semitic story of Ishtar's or Inanna's descent into the underworld, Ishtar and Inanna being associated with the planet Venus. ”(旧約聖書イザヤ書 14 章 12 節、そこにて明けの明星たるルシファーの冥界落ちについての言及がなされているとの見立てがなされているとの見解に対して述べているとの同項目に対する訳をなすとして)「[イザヤ書 14 章 12 節の[背後]にある神話として]古代カナン地方神話にあつて[明けの明星]はアツタルという神、(有力神たる)バアルの玉座を奪おうとして、それが出来ぬことがわかつて、冥界に下り、そこを統治したとの神と結びつけられている。その原初となる神話は劣位の神 Helal が北面の山に住まっていたカナン人の高位の神 El(エル)を王位から引き下ろそうと試みていたとのものであるのかもしれない。ヘルマン・グンケル(訳注:19 世紀末尾から 20 世紀前半にかけて著述活動なしていたとのドイツの旧約聖書学者)によつての神話の再構成は[他の主要な神々よりも上位の存在を越えようとしたこと、しかし、冥界に下らざるをえなかつたとの Helal と呼ばれる万能の戦士神]について語っている(訳注:中近東地方にて発生したのがヤハウエと呼ばれる唯一神を崇めるユダヤ教であるが、そのユダヤ教および陸続きの唯一神信仰たる唯一神に抗い「墮天」した存在が後の悪魔の王ルシファーであるとの設定がキリスト教体系にて採用されていること、そうしたことがここにて引き合いに出されているヘルマン・グンケル申しようの背後にある)。それは光輝く明けの明星(金星)が空にあつての最高地点に達しようとする中で昇り行く太陽に霞み、視界よりの消滅なさせられる(フェード・アウトする)前に失敗を見ることを[闘い]として描いたとのものである(ように解される)。イシュタルおよびイナンナは惑星の金星に関係付けられる神格なのであるから、一致性問題は東部セム系に伝わるイシュタルまたはイナンナの冥界下りに関しても着目させられようとのことになる」(訳を付しての再度の引用部はここまでとしておく)と記載されているようなところがあると本稿にて先述してきた)。

第二。また、加えて述べれば、イナンナ・イシュタルに関しては[金星の体現存在]にして[冥界に双子の対たる存在を有する存在]との側面で先コロンブス時代のアメリカ大陸にて信仰されたケツアルコアトルという神と共通性を有しており(ケツアルコアトルもまた金星の体現存在にしてショロトル Xolotol という双子の兄弟神を冥界に持つ神であること、本稿にてのついで先だつての段で再引用している)、そのケツアルコアトルという神は[金星の体現存在][蛇][文明の授け手][その信奉者らに期待裏切つての破滅をもたらした存在]との意味合いで黙示録で地獄へ多くの人間を道連れにすると描かれる古き蛇たるサタン(ルシファー)と接合しており、そして、さらには[アトランティスと歴年定置されてきたアメリカ(すなわちケツアルコアトルが崇拜されていた大陸)]と[黄金の林檎の園]と[エデンの園]との関係性が濃厚に観念されるとの識者物言いが存在することからして同ケツアルコアトルが[エデンの園]の誘惑者と同定されること多きサタンと接合して「も」いるとの物言いがなせる(出典(Source)紹介の部 52 から出典(Source)紹介の部 54(4)からの一貫通貫しての解説部)。

第三。さらにもつて加えて述べれば、(ケツアルコアトルという媒介項を観念せずとも)、メソポタミアのイナンナ・イシュタルについては彼女らがギリシャ版に焼き直された存在であると長らくも指摘されてきた神格であるアフロディテ(ローマのヴィーナス)を介してのルシファーとの連続性をも想起される存在となっている。につき、イナンナ・イシュタルとの同質性が歴年取り上げられてきたとのアフロディテ・ヴィーナスについては[トロイア崩壊をもたらすことになったパリスの審判]にあつての誘惑を奏功させた者]としての特性が今日に伝わっており、そちら特性が[エデンの園の誘惑者(ルシファー・サタンに比定される蛇)の特性]と純・記号論的なかたちで「複合的多重的に」相似形を呈しているとの指摘もなせるようになって、それがために、(同一起源存在扱いされているアフロディテ・ヴィーナスを介して「も」)ルシファーとイナンナ・イシュタルは接合するとのことがある(出典(Source)紹介の部 49 から出典(Source)紹介の部 51) ———]

(上にて呈示の関係式をより委細に踏み込んでの式で図に落とし込むと次のようになる)

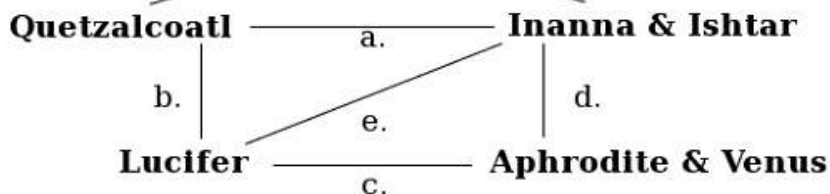


**adherence to
[Death and Rebirth]**

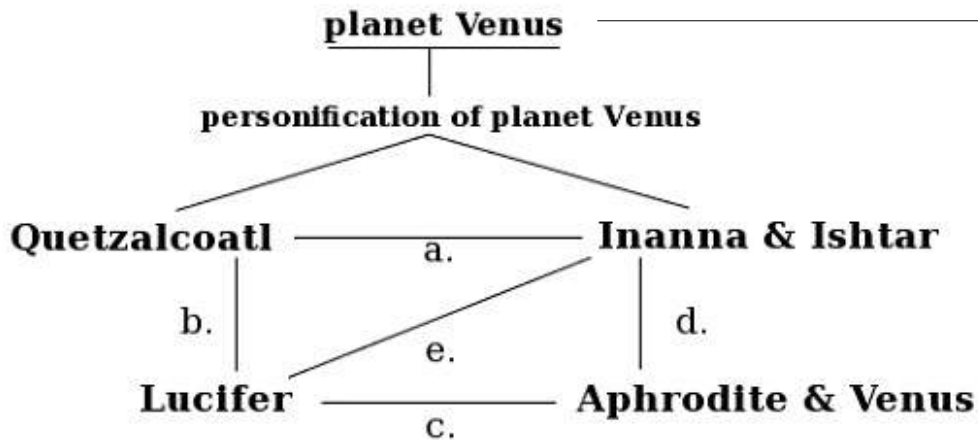
connected by Freemasonry

planet Venus

personification of planet Venus



- a . Inanna & Ishtar ↔ Quetzalcoatl :
- a1. divine personification of planet Venus
 - a2. counterpart (one of twins) in the underworld (Ereshkigal → Xolotl)
- b. Quetzalcoatl ↔ Lucifer :
- b1. [planet Venus] connection
 - b2. [promortors of civilization] connection
 - b3. [serpent] connection
 - b4. [betrayal to their worshippers & disaster] connection
 - b5. (aforesaid) [America (Quetzalcoatl worshippers' land) → Atlantis → Garden of Hesperides → Garden of Eden] connection
- c. Lucifer → Aphrodite & Venus :
- c1. [planet Venus] connection
 - c2. (aforesaid) [golden apple&fall of troy ↔ forbidden fruit & fall of man] analogy
- d. Aphrodite & Venus → Inanna & Ishtar :
- d1. [planet Venus] [goddess of love] connection
 - d2. the same derivation
- e. Inanna & Ishtar ↔ Lucifer :
- e1. [planet Venus] connection
 - e2. [confined in the hell (underworld)] connection



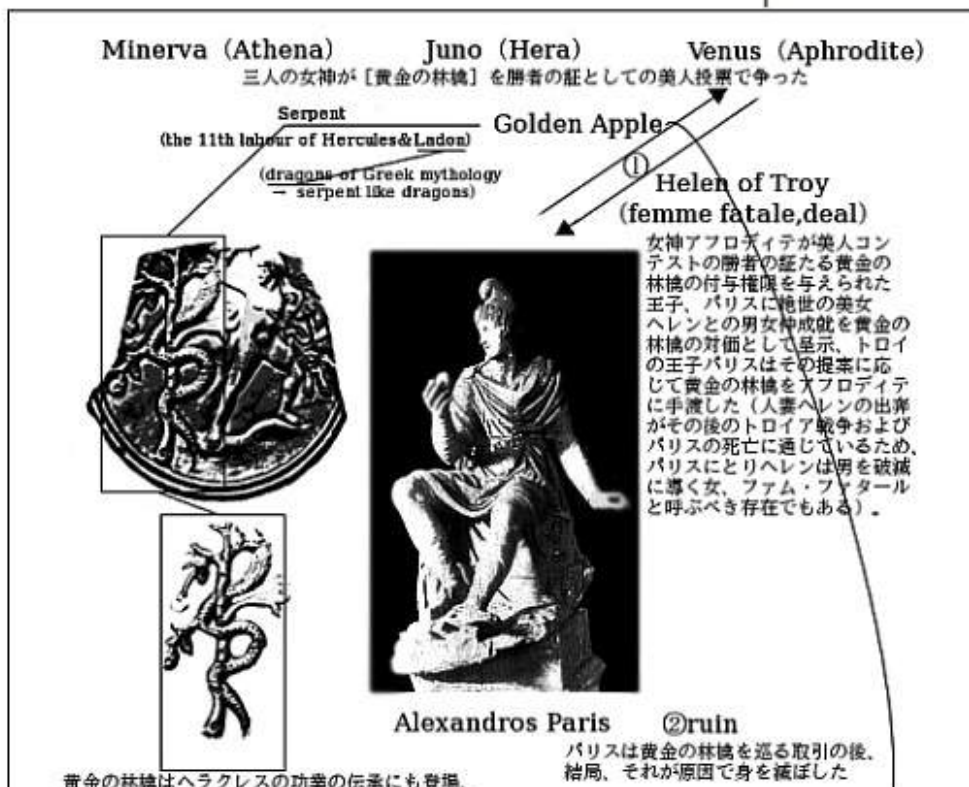
- a. Inanna & Ishtar ↔ Quetzalcoatl :
- a1. devine personification of planet Venus
 - a2. counterpart (one of twins) in the underworld (Ereshkigal → Xolotl)
- b. Quetzalcoatl → Lucifer :
- b1. [planet Venus] connection
 - b2. [promotors of civilization] connection
 - b3. [serpent] connection
 - b4. [betrayal to their worshippers & disaster] connection
 - b5. (aforesaid) [America (Quetzalcoatl worshippers' land) → Atlantis → Garden of Hesperides → Garden of Eden] connection

- c. Lucifer → Aphrodite & Venus :
- c1. [planet Venus] connection
 - c2. (aforesaid) [golden apple & fall of troy → forbidden fruit & fall of man] analogy

- d. Aphrodite & Venus ↔ Inanna & Ishtar :
- d1. [planet Venus] [goddess of love] connection
 - d2. the same derivation

- e. Inanna & Ishtar ↔ Lucifer :
- e1. [planet Venus] connection
 - e2. [confined in the hell (underworld)] connection

e.g.





Alexandros Paris ②ruin

黄金の林檎はヘラクレスの功業の伝承にも登場、
そこでは大蛇としてのドラゴン、ラドンに守られ
た果実となっている

パリスは黄金の林檎を巡る取引の後、
結局、それが原因で身を滅ぼした

Hesperus

ヘスペリデスらは一罰には
ヘスペラスの係累であると
されている

Hesperides



トロイアと同じくものギリシャ由来の伝承
であるヘラクレス伝承では黄金の林檎は
ヘスペリデスらによって管理されている。

the evening star (Venus)

ヘスペラスは金星の体現神格でもある。

Lucifer

(the morning star)

ルシファーは金星、明けの明星と名前を共有している。



①forbidden fruit
(depicted as the
apple)
&
Eve
(femme fatale, deal)

ルシファーとも同一視される
エデンの蛇はファム・ファタ
ールとも評せられるイヴを用
いて林檎とも見られている禁
断の果実を食するよう、アダ
ムを籠絡するとのことをなし
た。

②ruin アダムとイヴは行為を同責されるとのかたちで
楽園より追い出された。

(planet)

Venus

金星は【ルシファー】と【アフロディテ】
の双方に結びつく

アフロデ
イテは林
檎と関わ
る誘惑を
女を用い
て成就さ
せた。

(Cause of the
Trojan War)
Golden apple
& femme fatale

ルシファーは林檎と関わる誘惑を女を
用いて成就させた。
Forbidden fruit
(depicted as an apple)
& femme fatale

Aphrodite

Lucifer

Hesperus—Hesperides—connection

アフロディテ誘惑と関わる黄金の林檎 一蛇とも結びつく林檎— はヘスペリデス
らに管理される林檎でもある。そのヘスペリデスらはルシファーと同文に金星の
体現存在であるヘスペラスの係累であるとの説が併っている者達である。

⇒

[(本稿にて先述のように)女神ヴィーナスと一致性を呈する女神イナンナ・イシュタルについては「フリーメーソンの生と死の典礼と浅からぬ関係にあるとされる古代のエレウシス秘儀の崇拜神格である」女神ペルセポネとも際立っての相似形を呈する神格「でも」ある 一双方共に冥界下りをなした神であり、双方共に同一視存在とも見做されている[死と再生を体現する植物神]としてのドゥムジ・タムズおよびアドニスを愛人としている神であるとのことがある—] (: [出典\(Source\) 紹介の部 97](#)にて解説のことである)

⇒

[(本稿にて先述のように)イナンナ・イシュタルと同一存在といった一致性を呈するペルセポネは(同女神、エレウシス秘儀およびイシス密儀秘教思潮を通じてメーソンの死と再生の儀式とも結びつく存在であるわけであるが) [ヘカテ] を媒介に [ケルベロス] と結びつき、また、その伝に [ヘラクレス 12 功業] のことを加味して見てみるとダンテ『地獄篇』にあつての「ケルベロスとの結びつきが問題となる」ルシファーとの一致性が多重的に想起されるようになっている存在である] (: [出典\(Source\) 紹介の部 90](#)から [出典\(Source\) 紹介の部 90\(10\)](#) に至る通貫しての解説部および [出典\(Source\) 紹介の部 94\(5\)](#) の内容の複合顧慮で当然に導き出せることである)



Persephone



Isis



Hecate

⇔ ⇔

Persephone (⇔ Demeter)

Eleusinian Mysteries

Isis

Freemasonry



**adherence to
[Death and Rebirth]**

connected
by Freemasonry

planet Venus

(aforesaid)
[Descent to the under-
world] connection
[their lovers Adonis
→ Tammuz] connection

(aforesaid)
[Dante's Inferno
& Twelve labours
of Hercules] connection

personification of planet Venus

Quetzalcoatl

Inanna & Ishtar

a.

b.

d.

e.

Lucifer

Aphrodite & Venus

c.

Dante's Inferno

地獄の中樞(地球のコア)に向けての踏破行後半部を一直線で表すと次のようになる。

Geryon Seventh Circle → Eighth Circle

The Tenth Labour of Heracles

ダンテは、
【ヘラクレスの第10番目の功業にて討伐さ

Geryon Seventh Circle → Eighth Circle
The Tenth Labour of Heracles
 ダンテは【ヘラクレスの第10番目の功業にて討伐されたゲーリュオン】(神話が起るところでは三面の怪物だが、ダンテが描くところでは悪魔な騎士の顔をした胴体蛇の怪物)の背におぶられて地獄の下層に向けての急降下、断崖を超えるべく急降下を行う。

depth
地獄の深度

Antaeus Eighth Circle → Ninth Circle (Cocytus)
The Eleventh Labour of Heracles
 (or Tenth)
 ダンテらはゲーリュオン助力で降り立った階層より下の階層に降りるべく【ヘラクレスの第11番目(あるいは第10番目)の功業の途上にて討伐された巨人アンタイオス】の助力を受ける。

Lucifer (having three heads)
 地獄の最下層、地球の中心部には【ヘラクレスの第12番目の冒険に登場したケルベロス状の三面構造をどるルシファ = (サタン)】が幽閉されている。



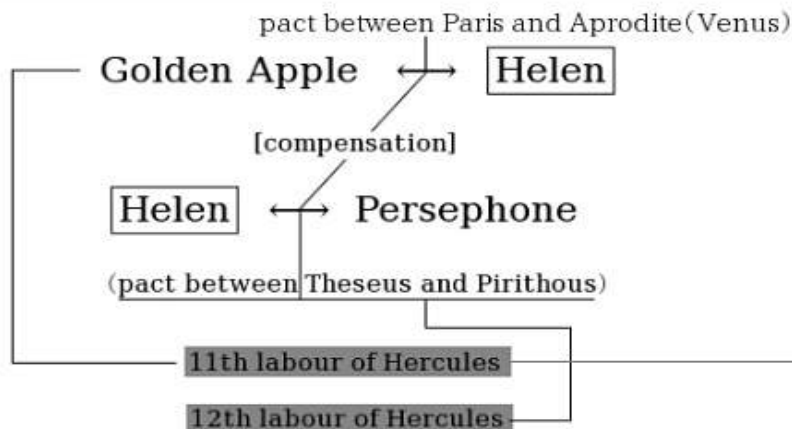


(Cerberus like)
triple headed Lucifer

Hecate

Persephone

"The Last Judgment"
by Fra Angelico (c. 1396 - 1455)



本稿にあつての先にての指し示し事項を(くどくも)繰り返す。
 第一に「絶世の美女ヘレン」は(結果的にトロイア崩壊の原因となることになった)「黄金の林檎」の対価としてパリスに提供の提案がされた存在である(【出典(Source)紹介の部39】。尚、ヘレン求婚者らのギリシャ諸侯らにあつては後に禍根を残さぬようにとオデュッセウス提案の誓約、[ヘレンの夫の一難事には元ヘレン求婚者全員が協力すべし]との誓約が事前に結ばれており、その伝でもヘレンは「誓約にまつわる美女」であつたとも述べられるようになっている)。

第二に、「絶世の美女ヘレン」はパリスに駆け落ちとのかたちで掠(さら)われる前にも略取の対象となつたとのことがあり、の際、ヘレン略取をなしたテセウスらとペイリトオスらは片方がヘレンを手に入れる代価にもう片方の妻君取得にヘレンを取得した方が協力するとの約定を結んでおり、結果的に「ペルセポネの略取」と「ヘレンの略取」が約定に基づき秤で釣り合わせられていたに等しかたちとなつていたと伝わっているとのことがある(【出典(Source)紹介の部90(10)】)。

以上より述べられることは駆け引きの具にされいていたとの「ヘレン」を中間項にして

「トロイア崩壊の原因(黄金の林檎)」「ペルセポネの略取」につながるが観念されるとのことである(別段複雑な話ではなく、単純な話である)。さて、そのような結びつきが観念できる「黄金の林檎」「ペルセポネ略取のエピソード」のうち、「黄金の林檎」のほうはヘラクレス第11番目の功業の取得目標物となつており(【出典(Source)紹介の部39】)、「ペルセポネ略取のエピソード」は(無謀にも人間の身で神を略取しようとした誓約の当事者、テセウスとペイリトオスが冥府の女王への狼藉の罰として囚われていた冥界の忘れ椅子よりヘラクレスにその機会にて救われたとの式で)ヘラクレス第12功業と結びついているとのことがある(【出典(Source)紹介の部90(10)】)。

以上、整理しもしてきたようなかたちにて

[メーソン象徴主義 ⇔ (多重的關係性の成立) ⇔ ペルセポネ・イナンナ・イシュタル・ヴィーナス・ルシファー]

との關係性が摘示できてしまう、円環状を呈するとの式での多重的關係性として摘示できてしまうとのことがあるのである。

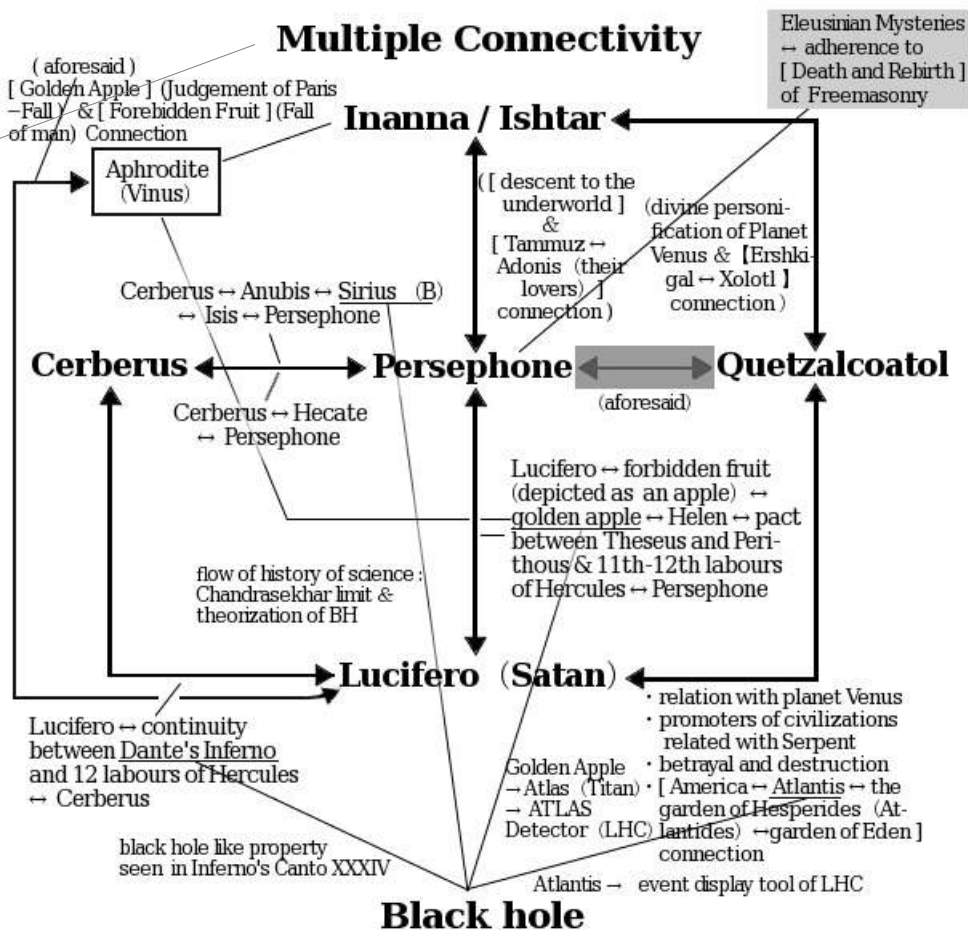
それにつき、くどくも強調したきところとして、この身は「宗教的觀點に依拠しての立ち位置などといった「愚劣極まりない」觀點」(と自身がとらえるもの)でメーソンを批判しているのではない(本稿にて何度も述べているように筆者は「葬式仏教」程度の無宗教の徒、無神論者である — As an atheist, I never think highly of "religious" dogmas.—)。

メーソンを批判することが多いキリスト教右派の宗教的觀點、ないしは、日本国内の狂的カルト・オウム真理教が如き[尊嚴]を蹂躪する動きを見せていた醜組織が資格なきところでメーソン批判をなしていた(唾棄すべき者達が集まって構築していたカルト・オウムがメーソン批判をなしていたことは(絶版本と化している風があるが)『オウム帝国の正体』(新潮社)に明るい)といったかたちでの宗教的觀點などに立ってものを述べているのではなく、ただ単純に「記号的に」上のような円環なす多重的關係性が導出できるようになっている — そのような多重的關係性が(不自然極まりなくも)偶発的に生じているなどとの知的に不誠実なことは口が裂けても言えないので[恣意性]も当然に問題になるところとして導出できるように「なってしまう」でもいいが — と申し述べたいだけなのである。

そして、そのような關係性を摘示した理由も「宗教的觀點(特定のドグマ)に基づいて」たかだかものメーソン程度のを[悲劇の源]として専らに批判することでは毛頭ない。

問題はそうした關係性からメーソンらに採用されている(というよりも押し「つけられている」としたほうが至当か)象徴主義重視思考の体系が次のような關係性のパスと「あまねくも」 — 誇張などなく「あまねくも」 — 通じていることである。

本稿本段にての問題意識は「多重的關係性の環」がここにて摘示の通りのかたちにて[事実の問題][動かぬ「現象」]として摘示できるようになっているとのケースにあって、それが「偶然ないし自然現象の可能性で説明がつくものなのか」「偶然性ないし自然発生が否定されるのなら何が問題になるのか」ということを問うことにある(：尚、客観性担保のため、關係性摘示に際しての出典紹介 — 通用度が高く、なおかつもってして、容易に確認可能であるところの出典の紹介 — には「当然に」注力している)



これにて筆者が述べたいことが何かを押し量りいただけることか、と思う。

すなわち、

([宗教的観点][イデオロギー]なぞの制約を受けずに)[歴史的物事としてはきとそこに存在していることが示せるとの現象ら Phenomena]の集積・相互密結合度合いに基づいて[特定の意図]がそこに介在していることが[あまりにも際立っての不自然性]ゆえに自然に想起されるようになっている、そして、そちら[想起されもする意図]の発するところが

[フリーメーソンリーのような影響力ある団体の紐帯に(その成員が自分では考えない[駒]であったとしても)取り込まれた一群の人間達] (あるいはそうした筋目の人間集団によって表象されるような人間存在一般のありかた)

に何を期待しているのか、押し量れるようなものとすらなっている

とのことを問題視しているのである。

以上、フリーメーソンリーという組織体について

[金星を死と再生の儀式・典礼の教義体系に組み込んでいるとの側面がある]

[(ペルセポネらを往古崇め奉ってのものであったエレウシス秘儀に通ずる)死と再生の儀式・典礼を重要視しているとの側面がある]

とのことから何が論じられるのかの話とした。

さて、海外では陰謀論、

[悪魔崇拝にまつわるもの]

などとしてのおどろおどろしさを感じさせる陰謀「論」として、あるいは、論拠の部分で真に識見伴った人間の了承を得られぬとの中途半端極まりないかたちで(すなわち、そういった話らに望まじき意味での現実改変能力は「絶無」とのレベルでしかないと押し量れるかたちで)フリーメーソンが — [金星との結びつき] といった従前から指摘されてきたこと以外に — [悪魔主義]なるものとの絡みで [シリウス]を儀式体系に取り込んでいることの意味をその方向性で論ずるとの向きも最近になって現われたことを観察しているのであるが(筆者が本稿を公開することとした Web サイトにての別ページにてシリウスとダンテ『地獄篇』の関係性について論じたあたりからそうした傾向が海外にて「さらに」強まったように観察もしている)、といった話柄と筆者申しようが質的に根本より異なるものであること、強調しておきたい(※)。

(※結論に至るまでの理由付けが正しくはないとのことが往々にして見受けられるのだが、

「シリウスがルシファーに「直接的に」同定される場所である」

などとしつつシリウスを崇めるメーソンを悪魔主義的団体であるとする話が

[キリスト教ドグマを奉ずる体裁をとっての者達] (あるいはそういう[ふり]をなしている者達か)

によって拡散されているとのことが現行、欧米圏にて観察される — ※ここに至るまでにはきとした出典に依拠して指し示してきたことをご検討いただければ、ご理解いただけることか、と思うのであるが、シリウスは「直接的に」ルシファーと結びついているというよりもルシファーと「間接的に」そして「多重的に」結びついていると述べることは「できる」天体となる — 。

それにつき、本稿の品位を落とさぬためにそうした者達の論調を紹介することは

なさないが、読み手が真に[物事を自分自身で調べる力量][自分自身で物事を考える能力]を有しているとの向きであれば、オンライン上の英文媒体にてそういうことを論じているのものに際会することもあるか、と思うとだけ申し述べておく)

また、以上のようなこと、フリーメイソンにシリウス尊崇視思潮があることをもってして、本稿にてその内容を問題視してきた『シリウス・ミステリー』をものしている男、ロバート・templがフリーメイソンであるとされる(フリーメイソンリーに属すると自称し他称されている『ヒラム・キー』 一本稿にての先の段でも[歴史的事実を歪曲しているとの意味で信用のおけない著作]としてながらも問題視した著作— 著者たるアラン・バトラーとクリストファー・ナイトといった者達との交流を伴うかたちでオンライン上にての英文媒体で紹介されているとのフリーメイソンリーのメンバーであるとされている) ことに言及しているとのオンライン上の英文媒体が存在することにも触れておく。

その点、ロバート・templが(本稿の先だつての段で欠点込みにその内容を事細かに紹介してきた著作である)『シリウス・ミステリー』刊行後、フリーメイソンリーに入団したというtempl自身の筆になるといったかたちでの英文情報もオンライン上に見受けられるとのことが現実にある。

引用は差し控えるが、といったオンライン上の英文媒体情報から見るにロバート・templは

[シリウスについての組織の秘教思潮についての考察をフリーメイソンリーに加入する前に「メイソンの」にしていたことをフリーメイソンリーに評価され、遠祖よりの縁もあって暗に勧められるようなかたちでフリーメイソンリーに加入した]

とのことであるようだが、「問題は、」

「ロバート・templの申しよう、同男がフリーメイソンリーに加入したとされる前よりものしていたとのことのような『シリウス・ミステリー』からしてそこに見受けられる申しようは確かにメイソンにあつての知恵の授け手がシリウス星系に存在するというフリーメイソンにとり[都合のよい]教義体系を迫認する役割を果たしているのやもしれないが、他面、[シリウスB]とは[地球より最も目立って見える恒星に伴つての伴星(白色矮星)]ということ

[白色矮星に対する考察からその理論の深化が一挙に進んだ(概念としての現実性を帯びてきた)ブラックホール理論]

と濃厚に関わっているものとなり、ロバート・templ自身も[シリウスBと関わる神話的象徴物]であると(それなりの論拠を伴うところとして)主張している存在たる地獄の犬 —ケルベロス— が[今日的な意味で見てのブラックホール類似の特性]と「複数教古典を介して」接合しているとのことが現実にある」

とのことにあると本稿筆者はとらえている(【[メイソンの五芒星重要視思潮]と[金星(モーニング・スター)]と[シリウス]との関係】についてはここ補説3のさらに後の段にても長くもなつての補足を付すこととする)。

これにて[A]から[F]と別ちての[F]の段の話を終える。

以上、ここまで来たところで長大な本稿にての補説3と振つてのこの段—数十万字との膨大な文量でもってひたすらに特定の事実関係の指し示しに注力してきたとの補説3と振つてのこの段—にていかような指し示しをなしてきたのか、直近まで書き綴ってきた[A]から[F]と分けての段にあつての[F]の段に至るまでの流れを端的に振り返ることとしたい(:述べておくが、ここ補説3の内容については都

度、文中にて振り返り表記をなしており、ここでの振り返り表記も何度となく言及してきたことを含むもの、さはさりながら、『微に入っの記載も今更、不用か』と思いつつも少しでも読み手理解の用に供していただければ、と付すこととしたものとなる)。

(再度、振り返っての [まとめ] 表記をなすとして)

まず、ここ補説3と振っての段にては補説部冒頭より以下のことに注意を向けました。

(本稿にての出典(Source)紹介の部 55から出典(Source)紹介の部 55(3)にて摘示していたことの内容に依拠して補説3の冒頭部より注意喚起をなしていたところとして)

「欧米圏で極めて著名な古典となっているダンテ『地獄篇』には [今日的な観点で見た場合のブラックホールと際立っての類似形を呈するもの] が多重的側面にて描写されているとのことがある」

「上記『地獄篇』(遅くとも14世紀初頭には成立していたとされる古典)と同様に [今日的な観点で見た場合のブラックホールの類似物] を描写している古典が存在しており、そちらはミルトン『失樂園』(17世紀、1667年に成立の古典)となっている」

「[今日的な観点で見た場合のブラックホールと際立っての類似形を呈するもの] を「どういわけなのか」描写しているとの意味で着目に値するとのダンテ『地獄篇』とミルトン『失樂園』の特定パートは共に「「地獄門の先にある領域での」悪魔の王ルシファーに由来する災厄を描いている箇所」となる」

上のような式で

[著名古典(ダンテ『地獄篇』とミルトン『失樂園』)における「先覚的なる」特質]

に注意を向けたうえで本稿では

[ダンテ『地獄篇』と「三面のケルベロス捕縛で終わる」[ヘラクレスの12功業伝承]との間には「明らかなる」多重的なる結節点が設けられている]

[上に言うところの「結節点」は『地獄篇』に登場する三面構造のルシファー(ブラックホール近似描写と当該古典の中で結びついているとの存在)と三面構造のケルベロス(ヘラクレス12功業の最後の功業の捕縛対象)との相関関係を多重的に意識させるものともなっている]

とのことの具体的指し示しに注力してきた([1] から [5] と振っての段、出典表記にして出典(Source)紹介の部 90から出典(Source)紹介の部 90(11)と振っての箇所をその指し示しに充てている)。

その上で(ダンテ『地獄篇』とヘラクレス12功業の間に[ケルベロス⇄ルシファー]の関係

性とも通ずる多重的接合関係が存在していることを指し示しもした上で)、[A] から [F] と振ってのパート(各別にかかなりの紙幅を割いてのパート)でもってさらに問題となる関係性の炙り出しに注力すると申し述べ、そちら指し示しの部に入った。それら [A] から [F] の部について極々端的に振り返りなせば、その内容は以下のようなところとなる。



本セクション、[A] と振っての部には本書 p.137 から p.230 を割いている

[A] と振っての部 — (出典 (Source) 紹介の部 91 から 出典 (Source) 紹介の部 94 (7) を包摂するパート) — では

古文献および古文献に基づいての欧州の近代以降の学識者ら申しようから導きだせるところとして、ギリシャ神話の女神 [ペルセポネ] は

[イシス] (エジプトにおける主要なる女神)

[ヘカテ] (往古ギリシャ神話にあつてのペルセポネ崇拜と濃密に関わる女神)

[ケルベロス] (ヘラクレス第 12 功業にて捕縛対象となった怪物)

の各存在と「一致」する存在と申し述べられるだけの特性を帯びた存在となっている

とのことの摘示に注力した。

([A] のパートでは [ペルセポネに対する崇拜様式] が [イシスに対する崇拜様式] と濃密に結びつくものであると何故もってして歴年述べられもしてきたのか、また、[ペルセポネに対する崇拜様式] [イシスに対する崇拜様式] の双方が [フリーメーソンリーのような存在の秘教思潮] と濃密に結びつくとのフリーメーソンリー成員や学識者らによる指摘が何故もってしてなされてきたのか、といったことにまつわる解説「も」遺漏なくもなさんと努めてきた)



本セクション、[B] と振っての部には本書 p.231 から p.310 を割いている

[B] と振っての部 — (出典 (Source) 紹介の部 95 から 出典 (Source) 紹介の部 95 (9) を包摂するパート) — では

先行する[A]の段にてギリシャ女神 [ペルセポネ] と一致性を呈するとのことを指し示してきた存在らである、

[イシス] (エジプトにおける主要なる女神)
[ヘカテ] (往古ギリシャ神話にあつてのペルセポネ崇拜と濃密に関わる女神)
[ケルベロス] (ヘラクレス第 12 功業にて捕縛対象となった怪物)

との各存在が

[[その肉眼目視不可能性より近代まで人類にとって観測されることがなかったシリウス B] に対する「奇怪なる」先覚的言及]

に関わっているとの論調が欧米圏にある

とのことを問題視し、そうした論調の内容の検証を事細かになしました。その過程で常識の世界では異端視される論調の帰結、[古代人が予見できたはずがないシリウス B に対する予見的言及とのパラドックスをきたすようなことの具現化は異星文明介入の存在に因を求められることである]との論調の帰結はさておきも[ローマ時代特定古典(プルタルコス『モラリア』)にてのシリウス B に対する先覚的言及を問題視してのパート]は現象論として同意できるようになっている(なってしまう)とのことの根拠を事細かに呈示した(:オンライン上よりも容易に全て確認できるとの古典にみとめられる[文献的事実]の問題を事細かに原文引用なしながらシリウス B にまつわる先覚的言及とが何なのか解説を講じた —※尚、問題となる論調は『シリウス・ミステリー』というロバート・テンプルという論客主著にまつわるものとなっておりもし、その帰結は「人類文明の黎明期にシリウス星系に由来する超高度生命体が人類文明に介入・干渉したからこそ、シリウス星系に対する奇怪なまでの先覚的言及が数多垣間見れるのだらう」という仮説を推し進めるためのものとなっているのだが、本稿筆者はそうした帰結を無条件には容れていない。無論、合理的なる理由があつてで、ある(本稿の諸所にてそこにいる合理的なる理由、よりもって不快なる人間操作の可能性に通ずるところの合理的なる理由については呈示するようにつとめている) —)。



本セクション、[C]と振つての部には本書 p.311 から p.330 を割いている

[C]と振つての部 —(出典(Source)紹介の部 96 から出典(Source)紹介の部 96 (2)を包摂するパート)— では先行する[A]および[B]の段にて指し示してきたことに依拠して次のことの指し示しに注力なしてきた。

それぞれギリシャ神話の冥界の女神ペルセポネに結びつく存在らでもあると摘示してきた、

[イシス] (エジプトにおける主要なる女神)
[ヘカテ] (往古ギリシャ神話にあつてのペルセポネ崇拜と濃密に関わる女神)
[ケルベロス] (ヘラクレス第 12 功業で捕縛対象となった怪物)

らの各存在と通ずるところでその先覚的なる言及が古文獻にみとめられると

の言われようが欧米圏にてなされている、

[シリウス B]

については

[ブラックホール理論開闢史に関わる天体]

として「なるべくしてなっている」節ありの科学史上にてブラックホールとの兼ね合いで意味なしてきた天体となっている（：[チャンドラセカール限界]（というもの）の導出に関わるブラックホール理論の開闢が（なるべくしての、といった流れによって）シリウス Bに通じている。それについてはアカデミズム系科学史史家 ロンドン大に奉職の科学史史家たるアーサー・ミュラーに解説されているところであるのでその解説ありようを本稿では細かくも引用、紹介している）。



本セクション、[D]と振っての部には本書 p.330 ら p.351 を割いている

ここ [D] の段に入るより「さらに二段階前」のこととして

[[C] の段に入る前に [B] と [C] の間に設けた幕間(インターミッション)の部]

にては(振り返るところとして)次の表記をなしていた。

⇒ 先行して [ダンテ『地獄篇』登場の三面構造のルシファーと結びつく [ヘラクレス 12 功業における捕縛対象たるケルベロス] に関わる] とのことを問題視しもしてきたわけだが、ケルベロス捕縛で終息するとのヘラクレス 12 功業との絡みでは次のようなことが問題となる。

「[ブラックホール生成]をなしうると「2001 年から」科学界にみとめられるところとなった LHC 実験 —1999 年にその可能性がはじめて問題視された折、「そのようなことはありえない」と物理学者が大同一致して否定の弁を表明していた(出典(Source)紹介の部 1 本稿冒頭部の発論文書ら引用セクションを参照のこと)にも関わらずブラックホール生成が現実によりうると認められることになったとの LHC 実験— については

(事実の問題として)

[ヘラクレス 12 功業のうちの[巨人アトラス]と[黄金の林檎]が登場する 11 番目の功業]

[ヘラクレス 11 番目の功業でそこが目指されている [黄金の林檎の園] との一致性が歴史的に観念されてきたところのアトランティス]

[黄金の林檎によって開戦を見た戦争で滅亡した [トロイア]]

に関わる命名規則が[ブラックホール生成]に関わるところで多重的に用いら

れているとのことがある —ブラックホール・イベントをも観測するとされる ATLANTIS や同 ATLANTIS がイベント・ディスプレイ・ツールとして用いられる中で「安全な」ブラックホール生成イベントを検知しうるなどと主張されてきた検出器 ATLAS などとの兼ね合いでそうもなさせられているとの格好となっている(出典(Source)紹介の部 35 および出典(Source)紹介の部 36(3) および出典(Source)紹介の部 46) — 」

「ヘラクレス 12 功業のうちの第 11 功業に登場する[黄金の林檎]に関しては(余程の歴史通でなければ把握するところではないと考えられるところなのだが)象徴上の問題として史的に[失樂園をもたらしたエデンの果実]と結びつけられてきたとの背景があるものである(出典(Source)紹介の部 51)。

その点、といった(暗流として、でも)一部識者に[黄金の林檎]と結びつける見方があるとの[エデンの禁断の果実]を —(旧約聖書それ自体ではフォウビドウン・フルーツ、禁断の果実が林檎であると明示的に言及がなされて「いない」ところを) — 同文に[林檎]そのものと定置して

[蛇に変じたルシファーによるアダムとイヴの林檎を用いての誘惑による人類の始祖の樂園からの追放]

を描いていたという古典がジョン・ミルトン『失樂園』となっているのだが、同古典、ミルトン『失樂園』「にも」殊に問題となるダンテ『地獄篇』と同様に[今日的な意味でのブラックホールと類似するもの]が「どういわけなのか」描かれているとのことがある。

しかも、その古典『失樂園』に認められる「奇怪な」と表せようものとしての[今日的な定義で見るブラックホールと類似するもの]については[ブラックホール類似形描写の形態としてはダンテ『地獄篇』にてのそれと「委細では」異なる特質(ブラックホールの「他の」属性)を描いているとのものである]

にも関わらず — (ダンテ『地獄篇』では【 1. 「光(ラテン語ルシファー)が囚われている」 2. [不帰の領域] としての 3. [重力の発する重力の中枢] にして 4. [外側からの観察者視点での「凍結した世界にての断末魔のありようの停止状態」】が際立って描写されており、もってして、【 [1. 「光とて脱出不能なる」 2. [不帰の領域] としての 3. [重力の中枢] にして 4. [外側からの観察者視点での「凍結した世界にての停止状態」】が具現化するとの研究初期、Frozen Star と呼ばれていたブラックホール】と多重的に接合するありようが見てとれるのに対してミルトン『失樂園』では【 (時空間なるものを観念しての) [時間と空間の法則の破綻状況] 中での [足を踏み入れたらば脱出不能なる永劫の暗闇にして底無し空間]】との式での今日的なるブラックホールの定義に当てはまるものが(『地獄篇』に見る類似物とはまた異なる側面として)描写されているとのことがある) — 、

[類似物が描かれているパートが[ルシファーに由来する災厄][地獄門(目立って描写されてのゲーツ・オブ・ヘル)の先の領域での特性]であるとの観点ではダンテ『地獄篇』と(ミルトン『失樂園』のそれは)共通しているとのことがあるというもの「でも」ある(出典(Source)紹介の部 55 から出典

[D]の段では以上の幕間の部にて振り返りもして解説しもしたことが指摘できるようになっていることと先の [A] から [C] の段にて摘示してきたことら、すなわち、

[シリウスB] ⇒ [ブラックホール理論の開闢に(「なるべくして、」のといったかたちで)影響を与えていたとのことが指摘されている天体]

[シリウスB] ⇒ [ケルベロスと結びつけられての奇怪なる先覚的言及に関わるとの物言いが(検証したところ、説得力を伴って)なされているとの天体]

[ケルベロス] ⇒ [ヘラクレス第12功業を介しての著名古典ダンテ『地獄篇』ルシファー(の領域)との接合] ⇒ [ダンテ『地獄篇』ルシファーの領域に際立って見受けられる現代的観点で見た場合のブラックホールに近似するものの描写]

を複合顧慮し、

「あまりにもできすぎている」

ことであるとの説明に注力なしもした(：「問題は、」そうした[関係性の環]が成立していることが[偶然の一致]で済むようなものなのか、あるいは、[恣意の産物]なのか、見極めることにあるだろうと述べられるところとして、である 一※一)。

(※ちなみに[D]の段では[偶然]か[恣意]かの問題を突き詰めて考えるうえでの材料として

[「人為的ブラックホール生成・人為的ワームホール生成を作中テーマとする作品として80年代に大ヒットを見てのハードSF作品『コンタクト』(1985年初出/「DVDコンテンツ版とは「異なり」原作小説版の方では」加速器のことが明示的には一切問題視されていなかったとの小説作品で本稿[補説2]の段で事細かに問題視していたとの作品)]

に[通過可能なワームホール]にまつわるアイデアを供与したことでも有名な物理学者キップ・ソーンのやりようをも本稿従前の内容を振り返って、再度、問題視した。すなわち、キップ・ソーンの手になるブラックホールとワームホールにまつわる理論解説書である BLACK HOLES & TIME WARP

Einstein's Outrageous Legacy 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんもない遺産』という著作が

[通過可能なワームホール]

にまつわる部で

[2001年9月11日との日付け表記との連関性が複合的に問題となる数値規則を体現してのもの「ら」]

を

[1「911」年提唱の「双子の」パラドックス]

を併せて引き合いに出しながら1994年初出の著作でありながらも「2001年9月11日に起こった」「双子の」塔、ツインタワー崩落事件の事前言及が如くことを「多重的に」なしていることを再度、解説し、そこから恣意的なれど「人間的ではおよそない」との先覚性が具現化しているように判じられるとのことを再度問題視した 一※[事前言及が問題となる具体的文言]を原著

および国内で流通している訳書より「原文」(原著のそれについてはオンライン上より確認可能であるとの「原文」)を事細かに抜粋しながら挙げ連ねての典拠紹介は本稿にての**出典(Source)紹介の部 28**から**出典(Source)紹介の部 33-2**を包摂するパートに譲りつつ、である—)



本セクション、[E]と振っての部には本書 p.351 から p.455 を割いている

ここ[E] —(出典(Source)紹介の部 97から出典(Source)紹介の部 98を包摂するパート)— と振っての部では

[女神 [ペルセポネ] は [イシス] [ヘカテ] [ケルベロス] ら各存在 — 各存在とも [シリウス B] に対する先覚的言及と関わっているとも一部論客にて指摘され、また、実際にそうであろうとの要素を指し示せるかたちとなっている存在ら— と一致性を指し示せる存在となっている]

とのことを顧慮しつつも、

[女神 [ペルセポネ] を基軸として [ルシファー] に接合する複線的な伝承上の関係性]

が存在していることの摘示に努めた。

すなわち、次のような関係性の摘示に努めた。

ギリシャの冥界の女神【ペルセポネ】

⇔

([媒介項] : [同一存在視される [植物神としての死と再生の神らアドニスおよびタンムズ] を愛人化しての存在] ・ [双方共に冥界下りをなした存在] [金星体現神格たるギリシャ女神アフロディテとの接続性] の各要素)

⇔

古代メソポタミアの女神イナンナ・イシュタル

⇔

([媒介項] : [金星の体現存在] ・ [冥界に双子の神を持つ存在] の各要素)

⇔

中米で信仰を集めていたケツアルコアトル

⇔

([媒介項] : [金星の体現存在] ・ [文明の授け手としての存在] ・ [蛇と結びつく存在] ・ [期待を裏切って会衆に破滅をもたらした存在] の各要素)

⇔

【ルシファー・サタン】(冥界落ちした明けの明星(金星)体現存在)

【ペルセポネ】

⇔

(直上の段にて言及の媒介項)

⇔

イナンナ・イシュタル

⇔

([媒介項]：[冥界(地獄)下り(落ち)の存在]・[金星(軌道の)体現存在]→「古代オリエントにて主神に含むところあって金星体現存在が冥界下りをなしたとの神話がみとめられる」ことに関しての一致性の指摘が学者由来のものとして呈されているとの存在]としての共通性)

⇔

【ルシファー・サタン】

【ペルセポネ】

⇔

(直近の段にて上述の媒介項)

⇔

イナンナ・イシュタル

⇔

([媒介項]：古代より同一視する視点が存在)

⇔

金星体現化存在たるギリシャのアフロディテ神(ないしローマのヴィーナス神)

⇔

([媒介項]：[黄金の林檎を巡ってのやりとり]と[エデンの林檎を巡ってのやりとり]の記号的な意味での多重的一致性を介しての接合性)

⇔

エデンの誘惑の蛇

⇔

【ルシファー・サタン】

【ペルセポネ】

⇔

(先述の媒介項)

⇔

古代メソポタミア女神イナンナ・イシュタル

⇔

(先述の媒介項)

⇔

中米で信仰を集めていたケツァルコアトル

⇔

([媒介項]：[中米アメリカ文明]と[アトランティス同等物と見做されもしてきたとのアメリカ大陸]の関係性)

⇔

アトランティス同等物と見做されもしてきた黄金の林檎の園

⇔

([媒介項]：黄金の林檎の園とエデンの園とがつながりあうとの側面)

⇔
エデンの蛇

⇔
【ルシファー・サタン】

【ペルセポネ】

⇔
([媒介項]: [ザクロを食して冥界の女神になったとの存在]・[ヘラクレス第11功業にて登場の黄金の林檎、その対価として別の神話上のエピソードで描かれている絶世の美女ヘレンと秤量されるかたちで同一の誓約に関わるところとなっていた存在]・[ヘラクレス第12功業にてペルセポネをヘレンと秤量するかたちで略取するとの約定を結んでいたギリシャ神話の著名人らが冥界の忘れ椅子より解放されるとの筋立てが展開] → ポイントとしての「ザクロ」「ヘラクレス12功業」)

⇔
ザクロの地(グラナダの地)のスペイン占領と大航海時代突入

⇔
ヘラクレスの柱を紋章に刻んでのスペインの新大陸積極進出

⇔
[[黄金の林檎の園とも見られていたアトランティス] / [オデュッセウス(ダンテ『地獄篇』ではヘラクレスの柱を越えた段階でルシファー幽閉階層一歩手前の階層での地獄行きを強いられたとの黄金の林檎を巡っての諍いがトロイア戦争に発展する原因を造った存在にしてトロイア戦争に木製の馬で決着をつけた武将)が漂着した先と伝わるオギューギアー島に結びつくとされてきたアトランティス] に史的に仮託されるだけの背景があつての現地アメリカにて(イナンナ・イシュタルおよびルシファーとの関係性が別個にて想起されるところの)蛇の神ケツァルコアトル信仰をなしていた者達の破滅

⇔
【ルシファー・サタン】

【ペルセポネ】

⇔
([媒介項]: [女神イシス(シリウス体現存在)と女神ペルセポネとヘカテとの同一性の古来よりの指摘])

⇔
女神ヘカテ(エレウシス秘儀にてのペルセポネと併せての崇拜対象)

⇔
([媒介項]: [ヘカテとケルベロスの多層的接続性])

⇔
ケルベロス

⇔
([媒介項]: [ケルベロス(の捕縛にて終息するヘラクレス第12功業)とルシファー(の幽閉領域)を介してのダンテ『地獄篇』での接続性])

⇔
【ルシファー・サタン】

【ペルセポネ】

⇔

(先述の媒介項)

⇔

女神ヘカテ(エレウシス秘儀にてのペルセポネと併せての崇拜対象)

⇔

(先述の媒介項)

⇔

ケルベロス

⇔

([媒介項] : [冥界の犬ケルベロスと冥界の犬科存在アヌビスとの一
致性]・[アヌビス(古来からの犬の星シリウスとの接合存在)をしてイ
シス(シリウスA 体現存在)とネフテュスを「可視存在」と「不可視
存在」に分割する水平円な存在とするプルタルコス古典描写]・
[アヌビス(シリウス接合神格)と通ずるケルベロス、同ケルベロスのヘ
シオドス『神統記』に見る50の頭を持つとの特性] ⇒ [シリウスBに
おけるシリウスA(イシスにて体現されてきた可視存在)に対して50年
の公転周期を呈する「不可視存在」としての特性]を想起)

⇔

(ケルベロスと結びつく)白色矮星シリウスB

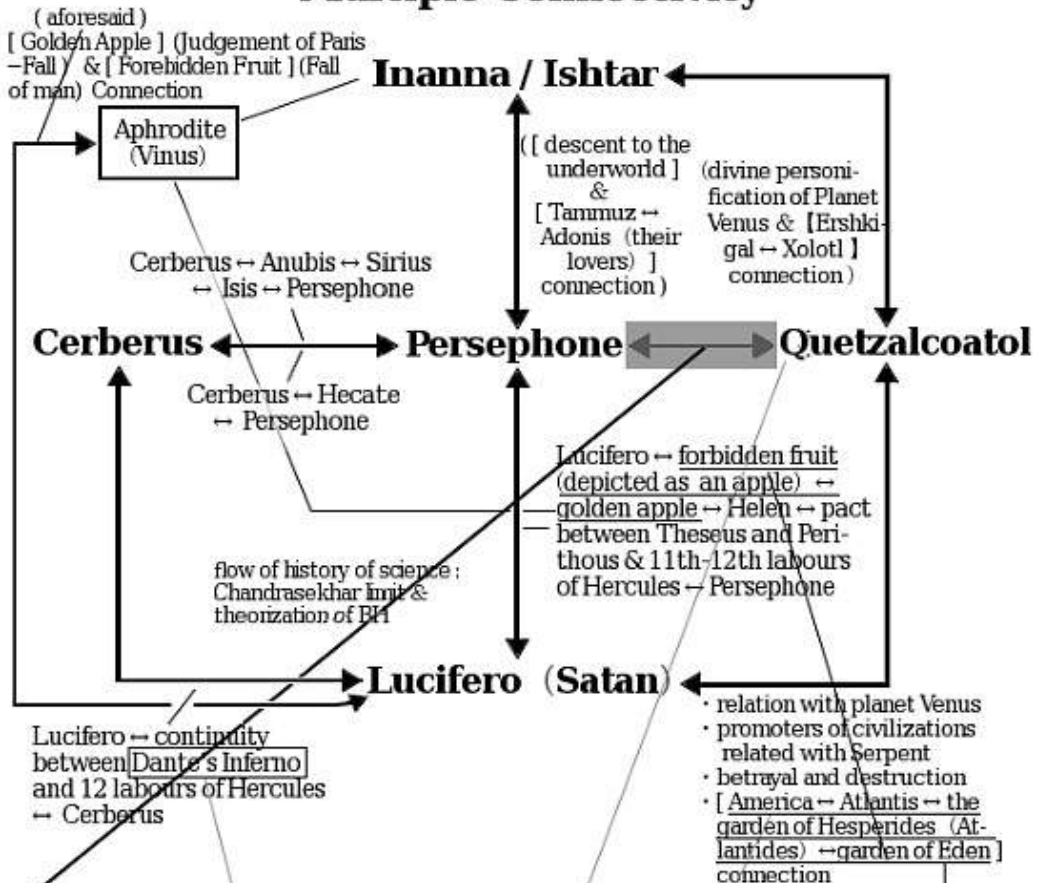
⇒

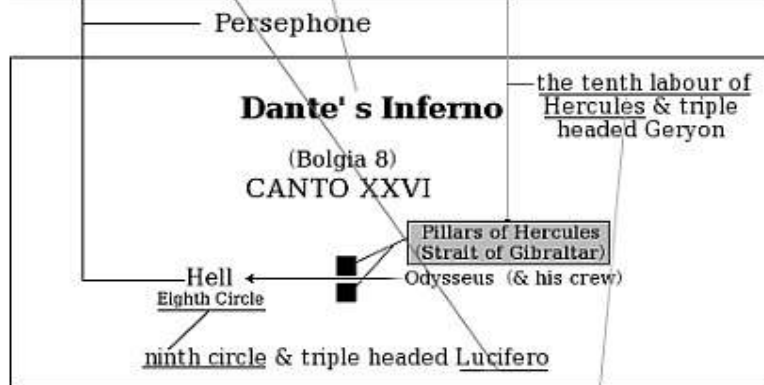
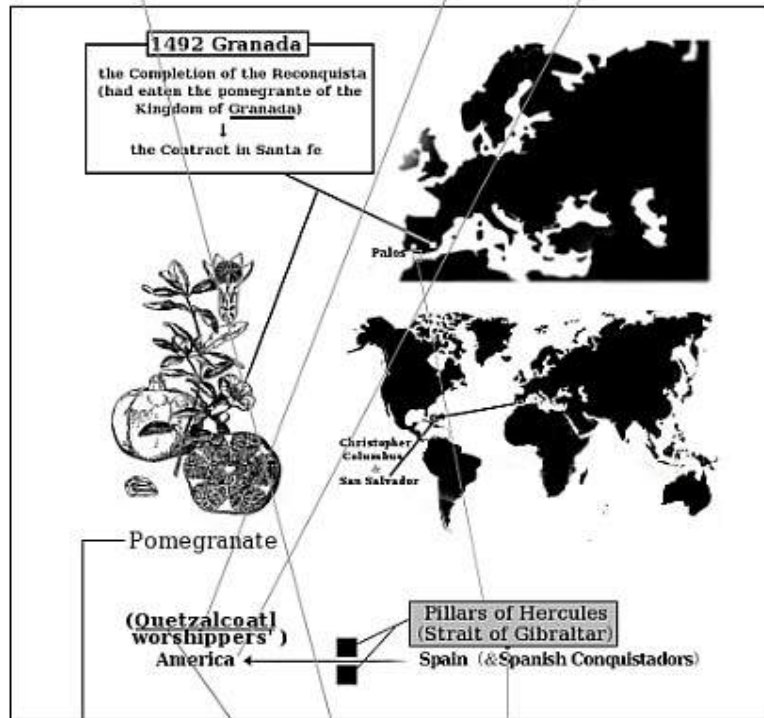
ブラックホール(初期フローズン・スター、凍った恒星と呼称されてのブ
ラックホール)の理論開闢をもたらした天体

⇔

【ルシファー・サタン】(が幽閉されている凍った領域にまつわってのダ
ンテ『地獄篇』描写)

Multiple Connectivity

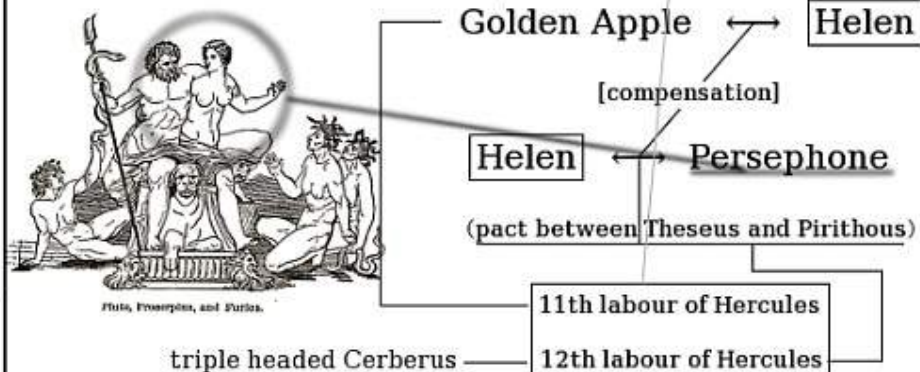




the Garden of the Hesperides – (far west) the Garden of the Atlantides – Atlantis – (e.g. Francis Bacon's New Atlantis)
 – America – Quetzalcoatl worshippers' continent

" The Gardens of the Hesperides with the golden apples were believed to exist in some island in the ocean, or, as it was sometimes thought, in the islands on the north or west coast of Africa. They were far-famed in antiquity; for it was there that springs of nectar flowed by the couch of Zeus, and there that the earth displayed the rarest blessings of the gods: it was another Eden."
 — Alexander Murray (Manual of Mythology)

example





本セクション、[F]と振っての部には本書 p.455 から p.481 を割いている

ここ [F] と振っての部 —(出典(Source)紹介の部 99 を包摂するパート)— では先行する [E] の段にてその摘示に努めていた多重の関係性に関わるところとして次のようなことが問題になると論じました。

フリーメーソンの死と再生の儀式的思潮には
[ペルセポネ・デメテル母子にまつわるエレウシス秘儀] [イシスの往古の
秘教崇拜思潮]

との結びつきが指摘・観念されることとなっている(一部の識者に百数十年前から指摘されもしてきたところである)。

さらに述べれば、フリーメーソンの死と再生の儀式的思潮には
[明けの明星、歴史的にはルシファーとの言葉の語源と結びつけられてきた金星にあっての「春分・秋分の昼夜平分点にて視界に入ってくるの特性」を「擬似的な死(墓)からの復活」と結びつける]

との側面が伴っているとフリーメーソン団の宣伝媒体に記載されているといったことがある(そうした中でフリーメーソンリーよりは[明けの明星をルシファーとする思潮を友邦団は意識しておらず、メーソン団におけるルシファー崇拜といった風説があってもそのようなものは取り合えずに値しない]とのいいようがパブリック・リレイションズといった観点で表に出されている)。

上のようなフリーメーソン自身による儀式解説動向を [E] にて(主観など問題なくも摘示できるようになっているとの)複合的関係性とあわせて顧慮すると —「何も分かっていない」とのチェスのポーンのようなものかもしれぬとの個々のフリーメーソンの意識どうあれ— そこより「さらにもって」「ルシファーとペルソポネとの関係性」が浮かび上がってくるように「記号論的には」多重的になっている。そして、さらに述べれば、それは重力(Gravity)の怪物ブラックホールに収束する関係性ともなる。

以上の枠内部表記をもって本稿のここ補説 3 の部にて事細かくも述べてきたことに対する [まとめ] の表記とした。そちら表記でもってここ補説 3 と振っての部のおおよその総括をし終えているつもりなのではあるが、なおもって続けもし、あと数点ほど、補足となることを記すこととして、それでもって補説 3 と振っての部を終えたいと思う。

[ブラックホール]、[ルシファーと呼称される宗教体系上の存在]、[特定シンボリズムら] の繋がり合いについてさらにもって指摘しておくこととして

「長くもなるも、」の付記として [1]

唐突となるが、ポール・ハルパーン (Paul Halpern) というフィラデルフィア工科大学の教職のポストにある米国人物理学者の著した書に

Cosmic Wormholes: The Search for Interstellar Shortcuts (邦題) 『タイムマシン ——ワームホールで時間旅行—— 』(原著 1992 年刊行. 訳書は丸善株式会社より刊行)

という書籍がある (: 同著作 Cosmic Wormholes: The Search for Interstellar Shortcuts については [カー・ヴォネガット『タイタンの妖女』とアーサー・クラーク小説作品『2001 年宇宙の旅』との関係性] について取り扱っている本稿にあつての **補説 1** (と振ってのパート) の終端部にてそちら内容を原文引用しながら問題視していた著作ともなる)。

国内でも流通しているとのそちら著作 Cosmic Wormholes: The Search for Interstellar Shortcuts の訳書 (『タイムマシン ——ワームホールで時間旅行—— 』) にあつては

[カー・ブラックホール] (**出典 (Source) 紹介の部 76 (3)** にて本稿でも人為生成が LHC 「実験」によってなされる可能性がある」と取り沙汰されてきたことを紹介したカー・ブラックホール)

について次のような記載がなされている。

(直下、ポール・ハルパーン『タイムマシン ——ワームホールで時間旅行—— 』p.78—p.79 よりの原文引用をなすとして)

シュワルツシルド・ブラックホールの中心領域とは異なって、カー・ブラックホールの内部は飛行可能であつて、強大な潮汐力をさけて運動できることが理論的に示されている。この重要な差異は、これら二つのブラックホールの特異点の形状の違いに起因している。シュワルツシルド・ブラックホールの場合には「点状」の特異点であるのに対し、カー・ブラックホールでは「リング状」の特異点になっているのである。理論的にはリング特異点も点状特異点と同様に危険なるものである。点状特異点のように時空の曲がりが無限であつて、その潮汐力で近づく物体を破壊し、強烈な放射にさらす。しかし、リング状の特異領域を避けることによって、宇宙船は運動を続けることができる。したがって、カー・ブラックホール中では長く生きながらえることのできる可能性があるのである。…(中略)…しかし、カーのトンネルは外界からの影響に対して極めて敏感である。ごくわずかな力によって構造が崩れてしまうのである。普通の大きさの宇宙船が入ってくることによって、トンネルは揺れ始め崩壊してしまう。その際には、重力とともに、そこにとらえられた物質が破壊されるときに放出する強力な放射も存在する。しかしカーのトンネルの崩壊をくいとめることは不可能ではない。強力な新物質を用いることのできる高度に発達した科学を持つようになれば、このトンネルが崩壊するのを防ぐ技術を開発できるかもしれない。

そうした時代には崩壊の心配もなく、トンネルを抜け出すことができるようになるであろう。したがって、カーのトンネルが宇宙飛行士にとって安全な抜け道となることは考えられないことではない

(引用部はここまでとする)

以上のような現代科学に依拠しての知見 — [時空間が破綻するブラックホールのトンネル] を抜けるのは [潮汐力] と [放射] の問題で一難事であるとの知見 — と以下の古典内の記述を引き比べて見てみたい。

(直下、[出典 \(Source\) 紹介の部 55 \(3\)](#)にて引いたところの記述内容、岩波文庫版『失樂園 (上)』(平井正穂訳)にての原著第2巻の部を含むパート(訳書 p.79)より再度の引用をなすとして)

「荒れ狂っているこの業火の円蓋は、われわれを九重の壁でとり囲んでいる。頂上から覆いかぶさる、そして炎々と燃えさかっているもろもろの金剛不壊の門は、頑としてわれわれが出てゆくのを禁じている。誰かがあそこを通り抜けたとしても、そのあとには、実体なき『夜』の底知れぬ空漠の世界が、大きな口を開けて待ち構えている。すべてを無に帰せしめんとするその淵に呑み込まれたら最後、もはや何もかも跡形もな消滅してしまうのだ。 かりにそこを脱れ、どこか未知の世界に達しえたとしても、やはりそこに待ち受けているものは、同じような未知の危険の危険であり、同じように困難極まりない脱出の模索に他なるまい」

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※尚、オンライン上より確認できるところの上の記述に対する対応部、Henry Walshとの人物を编者として著名な挿絵家 Gustave Dore の手になる挿絵が付されているとの Internet Archive 公開版(確認する気があるのならば全文ダウンロードできもしようとの版)のミルトンの『失樂園』PARADISE LOST 原著では上に対応するところの記述は BOOK II 433-466(行)を収めた 38 ページにあつての “Outrageous to devour, immures us round / Ninefold, and gates of burning adamant, / Barred over us, prohibit all egress. / **These passed, if any pass, the void profound / Of unessential night receives him next / Wide gaping, and with utter loss of being / Threatens him, plunged in that abortive gulf.** / If thence he 'scape into whatever world, / Or unknown region, what remains him less / Than unknown dangers, and as hard escape?” との部位となっている(地獄の牢獄が Ninefold「9重」と定義されているのは Dante の Inferno『地獄篇』地獄が 9 層であることの影響であろうと解されるところとなっている))

以上はジョン・ミルトン古典『失樂園』に見る、

墮天使の長ルシファーが

[呑み込んだものを完全に消滅させる永遠の夜の空漠の領域たるアビスを通過することの困難性]

を同輩の墮天使ら(悪魔ら)に語りもしているとの部 (よりの引用)

となる。

さて、上にてその通過困難性が語られているとのミルトン『失樂園』に見るアビスとは、と同時に、

[[時間]と[空間]が意味をなさなくなる自然の祖たる底無し領域]

と同古典にて形容されている領域「でも」ある ([出典\(Source\)紹介の部 55](#))。

といった[アビス]の領域をルシファーが決死の単身飛行で突破、エデンの園にてあらたに神に育てられた人間に対して、(自らを墮地獄の責め苦に追いやった神への復讐・意趣返しとして)、破滅をもたらさんとするとの物語が、要するに、ミルトン『失樂園』となる。

そうした『失樂園』に見る[アビス突破のエピソード]を

[[直近にての訳書『タイムマシン ——ワームホールで時間旅行——』にて言及されているような闇の領域たるカー・ブラックホールの突破の可能性]

と引き比べて見たらばどうかとのことをここでは問題視したい。

などと述べれば、普通人ならばこう思うはずである。

『全く関係ないところ(かたや17世紀古典『失樂園』、かたや20世紀末に出た科学読み本の内容)にて[因数分解もできないのにも関わらず因数分解なそうとしている]との狂人のなしようである』

『そも、相対性理論のソの字も知らなかった17世紀人(であるホメロスよろしくの盲目の詩人であったジョン・ミルトン)によって口述筆記されたとの17世紀古典(『失樂園』)の内容に対して[相対性理論の鬼っ子]とも表される重力の怪物ら(ブラックホールやワームホール)に対する[20世紀以後の理解]を持ち込もうとするなど痴愚「未満」のやりようである』

だが、そうした痴愚「未満」のやりよう(日本ではそういう痴愚「未満」のやりようをとる詐狂者の類、「学」や「識」以前に「人間性」に問題があろうという類がオンライン上で「発言」している、あるいは、空っぽの傀儡(くぐつ)としての口を動かされているとのこともあるようではあるも、何にせよ、痴愚「未満」のやりようにとらえられるところ)が「実体は、」そうはならぬと述べられるだけのことがある。

第一。

そも、本稿は

[人間にありえないものを現出させる力学が働いている節がある、具体的なる現象に依拠してそういう力学が働いている節が如実にあることを問題視する]

とのことを否定しない、否、どころか同じくものことを支持・指示する材料を数多呈示せんとしているとのものとなる。そして、[ありえない予見的言及]がなされての記録、本稿にて指し示しに注力なしてきた、そして、これよりさらに指し示しに注力しもするとのことらにあっては[時空間が破綻しており、光さえ逃れえないブラックホール]の問題が —「多く」執拗さが如実に感じられるとの式で— 関わっているとのことが「ある」。ひたすらに典拠となるところをオンライン上より確認可能との原文引用とのかたちで挙げながら摘示してきたところとして、である(であるから、ポール・ハルパーン『タイムマシン ——ワームホールで時間旅行——』内の記述内容とミルトン『失樂園』に見る[時間と空間の破綻する不帰の地たる底無しの暗黒領域(アビス)に対するルシファー(ラテン語にての明けの明星、[光]を運ぶものとの意とも結びつく存在)の決死の踏破行]を結びつけて語ることには[因数分解にすらならぬ狂人の所業]とは無条件には言い切れぬだけの前提条件があると述べる)。

第二。

引用元としているポール・ハルパーン『タイムマシン ——ワームホールで時間旅行——』(直近、

カー・ブラックホール特性についての記述を引いたとの書) それ自体からして

[ルシファー (ミルトン『失樂園』にてアビス越をなさんとしている存在) とブラックホールの関係性を臭わせるパートが含まれている]

とのことがある。

以上の点らのうち一点目は既に十全に解説したきたつもりである、対して、二点目の点についてここ付しての部にて解説することとしたい。

その点もってして前提となるところがゆえにまずもって述べるが、ポール・ハルパーンは同じくもの引用元著作『タイムマシン ——ワームホールで時間旅行——』にて映画『2001年宇宙の旅』に見る[スターゲイト機構]

の特性について語るとのこをなしている。下の引用部 一本稿にあつての補説1の末尾の段でも引用なしたところを繰り返しての部— を参照されたい。

(直下、物理学者ポール・ハルパーン著作邦訳版『タイムマシン ——ワームホールで時間旅行——』p.9 から p.12 より掻い摘まんでの再度の引用をなすとして)

アーサー・クラーク原作、スタンリー・キューブリック監督の「2001年宇宙の旅」は、月旅行よりも冒険に満ちた宇宙間旅行を知りたいという一般の人々の想像力をとらえた。何百万の観客がこの画期的な映画を見、空間を巡り時間を旅することに想像を馳せ、驚嘆し、信じられないほど当惑もした。映画は原始人が道具を使用するとする最初の試みから始まる。そして、突然、話は未来(2001年)にとぶ。そこでは、人間の発明した道具として、棒きれと尖った石にかわって、コンピューターと宇宙船が登場する。月面基地で、木星の衛星から送られてきた不思議な信号を受信する。科学者は、その奇妙な現象を調べるために急遽調査船を組織する。

…(中略)…

ボーマン船長は木星の近くで宇宙船が運転不可能になってしまったのち、小さな宇宙船に乗ってその巨大な構造物にむけて進入していく。驚くべきことにその内部は空洞であつて、たくさんの星が輝いているのである。えたいの知れない流れによって彼はモリスに引き込まれ、ついには時間と空間の入れ替わった領域に到達する。そこでは、空間の中を高速で移動するが、時間はまったく変化しないのである。かれがその奇妙な世界を進んでいくにつれ、彼のもっていた時計は次第に進み方が遅くなり、ついには止まってしまう。

…(中略)…

ボーマンは銀河間の異動を可能にする宇宙の関門であるスターゲイトを通過したのである。クラークの物語にしたがえば、この壮大な構造物は宇宙のはるかかなたに住む高度な知性をそなえた生命が星間空間旅行を高速化するために作り上げたことになっている。ボーマンは自分の時計がほんの数分進む間に、何十兆 km の距離を旅したのである。

…(中略)…

スターゲイトが実際に存在すると何が起こるかを考えてみよう。スターゲイトを宇宙空間の近道として使えば、宇宙船を使った長い旅や費用のかかる冷凍保存装置が必要ではなくなるのである。

(ここまでを訳書よりの引用部とする 一※一)

(※注記:「時間と空間移動の関係が破綻している」ボーマンの持っていた時

計の表示が止まってしまう」といった描写はスタンリー・キューブリック映画版『2001年宇宙の旅』にはまったくといっていいほど見受けられない。対して、映画版とほぼ期を一にして刊行された小説版にはそうした記述が克明になされている (少なくとも筆者手元にある早川書房より出されている『2001年宇宙の旅(決定版)』『第六部スターゲイトを抜けて』の部にはそうした記述がみとめられるようになっている)——)

以上は 1992 年に原著刊行されての科学読み本、

Cosmic Wormholes: The Search for Interstellar Shortcuts 『タイムマシン ——ワームホールで時間旅行—— 』 (同著、粒子加速器による人為的ブラックホール生成や人為的ワームホール生成の話が可能性論としても全くもって取り上げられていなかった時分に加速器に対する言及一切なしに[架空の超文明]が[詳細に言及されていないところの技術]で宇宙に存在しているカー・ブラックホールや人為生成してのワームホールの類をゲートとして使用できるかについて論じているとの著作となる。また、同著者ポール・ハルパーンは[加速器によるブラックホール生成がありうると認容されるようになった後]の 2009 年に原著刊行された著作、本稿にての **出典(Source) 紹介の部 18** でもそこよりの原文引用をなしているとの「かなり後に世に出た」著作 COLLIDER: The Search for the World's Smallest Particles (邦題)『神の素粒子 ——宇宙創成の謎に迫る究極の加速器—— 』(日経ジオグラフィック)にて加速器実験実験機関関係者および実験に好意的な筆致で LHC によるワームホール生成可能性をロシアの数理論物理学者らが呈示するに至ったとのことまでを紹介している物理学者となりもする)

にあつて

[2001: A Space Odyssey『2001年宇宙の旅』 (表記引用部に見るように作家アーサー・クラークが原案を担当し、スタンリー・キューブリックが撮ったとの映画版にて [冒頭部の類人猿が知能を増加させる黒曜石状の石碑(モノリス)に直面するシーン] が非常に有名な作品) の劇中に [銀河間の異動を可能にする宇宙の門であるスターゲイト(宇宙空間のモノリス内部に展開する内的世界)] が登場すること]

にまつわつての言及がなされているとの箇所となる。

その点、上の引用部に見る、

[(モノリス内部に展開する)時計の進みが遅くなり空間の中を高速で移動するが、時間はまったく変化しないとの領域に至るスターゲイト]

については[ブラックホール特性]と結びつきの言いようが同じくもの引用元著作内で以下のようなかたちでなされもしている。

(直下、同じくもの書籍『タイムマシン ——ワームホールで時間旅行—— 』、その p.170 より
の記述を引用するところとして)

「ブラックホールの地平線の内側には、時間と空間の逆転した領域があつて、時間座標と空間座標の役割が入れ替わるのは本当である。もう少し専門的にいうと、時空のメトリックの役割が入れ替わるのである。空間座標が実数から虚数へ、時間座標が虚数から実数へと変わる。そうすると、時間と空間が入れ替わったといえるのである。時間方向には自由に移動できるが、空間方向の移動は自由ではなくなる」

(引用部はここまでとする)。

以上の書きようと同じくもの書籍『タイムマシン ——ワームホールで時間旅行——』にてのモノリス内部領域に対する言及は、(一面で噛み合わないように見えるところもあるが)、時間が止まったのモノリスの内部にての「時間と空間が逆転してのありよう」(時間が「止まり」距離が「意味をなさなくなる」とも表記される)との点においては接合性が感じられるようになっている(『だからこそカー・ブラックホールとも結びつく『2001年宇宙の旅』の例としての持ち出しであろう』とのかたちとなっている、でもいい)。

ここまできたところで何故、

[2001: A Space Odyssey 『2001年宇宙の旅』に登場するモノリス・ゲート]

に対する話をなしたのか、ミルトン『失樂園』(の中に見るルシファー申しよう)との絡みで何故、同じくもの話をなしたかの話に入る。

その点、2001: A Space Odyssey 『2001年宇宙の旅』の原作者アーサー・クラークは、

[2001: A Space Odyssey 『2001年宇宙の旅』に登場するモノリス・ゲート(物理学者ポール・ハルパーンの書きようではブラックホールと通底するような側面を有してのスターゲート)と接合する [大量のモノリスによる惑星・木星の取り込み・暗黒化] を作中設定とする 『2001年宇宙の旅』続編の 2010: Odyssey Two 『2010年宇宙の旅』]

を世に出しており、の中では、モノリスの惑星木星の取り込み・暗黒化の結果、生まれたのが [ルシファー] と呼ばれる新天体としての恒星であるとの設定が採用されているとのことがある (いいだろうか。[モノリスによる惑星(木星)の取り込み・黒化、それに続く新天体(恒星)たるルシファーの誕生] である)。

[上のことの典拠として]

手っ取り早い確認方法は映画版『2010年宇宙の旅』をレンタルして確認することであろうが、ここでは上のことの典拠として正しいことが書かれていると確認している和文ウィキペディア[2010年宇宙の旅]項目にての「現行の」記述を引いておくこととする。

(直下、和文ウィキペディア[2010年宇宙の旅]項目にての現行の作品解説部よりの引用を中略しながらもなすとして)

『2010年宇宙の旅』(原題 2010: Odyssey Two)は、アーサー・C・クラークが1982年1月に発表したSF小説。クラークが小説版を執筆し、スタンリー・キューブリックが映画版を監督・脚本した『2001年宇宙の旅』(原題 2001:A Space Odyssey)の続編にあたる。前作のうち、少なくともディスカバリー号の目的地に関しては映画版に従っている。

…(中略)…

モノリスの大群が木星を被い尽くしてしまう直前に、レオーノフ号は木星を出て地球へ向かう。小説版で部分的な説明がなされるだけだが、モノリスの個数を増やして木星の質量を増加させることで、遂に核融合が始まり、木星は小さな恒星(ルシファーと呼ばれることになる)として輝き始める。小説版ではモノリスはエウロパに生息する生物を優先し、木星本星に生息していた生物を犠牲にして木星を恒星化したとしている(映画版では木星本星の生命体は描かれていない)。

(引用部はここまでとしておく)

以上のように解説されていること、『2010年宇宙の旅』にてモノリスによって木星が恒星ルシファーと化した経緯については英文 Wikipedia[2010: Odyssey Two]項目にあって

(引用するところとして)

HAL's telescope observations reveal that the "**Great Black Spot**" is, in fact, a vast population of monoliths, increasing at an exponential rate, which appear to be eating the planet.「HAL の望遠レンズにての観測が明らかにしたところでは[巨大なるブラック・スポット]は実際に[モノリスが多数蝟集したもの]であり、惑星を食っているような規模での拡大を呈しているとのことであった」

(引用部はここまでとする)

と記載されているようなものとなり、[ルシファー]を生み出すべくものその描写については一九八四年に封切られた映画版『2010年』をレンタルなり何なりしてご覧いただければ、まさしくものそのようなものであると理解いただけるようになっている)

以上、ここまでの話にて

「『失樂園』に見るルシファー口上 — [時間と空間が意味をなさなくなるアビス領域]に [取り込まれれば自分(=光と結びつく Lucifer)とて逃れえない不帰の地たる永遠の夜の領域] との評価を与えている口上— にあってのブラックホールと通ずる関係性]の

ことを
[時間と空間が意味をなさなくなる『2001年宇宙の旅』のゲートのことを取り上げている科学読み本(脱出困難性を伴うが通過可能なカー・ブラックホールのことを扱っているポール・ハルパーン著書 Cosmic Wormholes: The Search for Interstellar Shortcuts『タイムマシン — ワームホールで時間旅行— 』)の特定部記述内容]との兼ね合いで見出すことすらも行き過ぎにならないようなところがある」

と述べる理由の「一部」についてお分かりいただけたことか、とも思う。

だが、話はまだ終わらない。

そも、モノリスを登場させ、また、最終的にそのモノリス(上記の科学読み本にあってブラックホール・ゲートとしての特質が言及されているとのモノリス)による木星の取り込み・黒化に続く恒星ルシファーの誕生を描いているとの 2001: A Space Odyssey 『2001年宇宙の旅』や 2010: Odyssey Two 『2010年宇宙の旅』の英文原題に付された Odyssey [オデッセイ] とはトロイアを木星の馬の計略で滅ぼしたオデュッセウスが艱難辛苦の旅を強いられるとのホメロスの叙事詩 Odyssey 『オデュッセイア (O Δ Υ Σ Σ Ε Ι Α) 』に由来する語句であるとのことがある。(英語辞書を調べて見れば、Odyssey という語が[1.『ホメロス古典『オデュッセイア』、2. 上の 1. の古典名称より転じての放浪冒険譚]といった定義付けがなされている語であること、お分かりいただけることか、と思う)。

ここで [2001年宇宙の旅] (原題:2001 スペース・オデッセー) に付されたオデッセー (Odyssey) の原義がトロイアを木製の馬の計略で滅ぼした男の艱難辛苦の冒険を描いた叙事詩『オデュッセイア』にあることに言及したうえで振り返るが、本稿の先の段 — 現行、補説 1・補説 2 に続いての補説 3 での話として記述をなしているのであるが、補説 1 に先立つ本稿にての先の段— にあっては次のような流れにての申しようをなしていたとのことがある。

「ギリシャ期より伝わっていることになっているアトランティス伝承、そこに見る[アトランティス]との質的同等物として[黄金の林檎の園]としての[アトラスの娘ら(アトランティ

スとも呼称するヘスペリデス)らが管掌する場]のことが欧州知識人に取り上げられてきたとこのことがある(典拠は先の段、[出典\(Source\)紹介の部 40](#)から[出典\(Source\)紹介の部 43](#)を包摂する解説部などに詳細は譲る)

⇒

[ヘラクレス 11 番目の功業にて登場し、の中で、巨人アトラスが在り処を把握していると言及される[黄金の林檎]は[トロイア崩壊の原因]となっているのと同時に[エデンの禁断の果実]と複合的に結びつくとの物言いがなせるようになっているものである(典拠は先の段、[出典\(Source\)紹介の部 39](#)、[出典\(Source\)紹介の部 48](#)から[出典\(Source\)紹介の部 51](#)を包摂しての部位に譲る)]

⇒

[[エデンの禁断の果実(林檎とも)]と来れば、[エデンの誘惑的一幕]である]

⇒

[以上のようなことがある中でミルトン『失樂園』にあつては —「トロイア戦争終結をもたらしたオデュッセウスが『オデュッセイア』の中で遭遇した怪物らのことやトロイア比定地近傍に対する地域に対する言及がなされながら— サタン(ルシファー)がアビスを踏破して[死]と[罪]の食餌に人類を供するとの通用路を構築した(エデンの園で林檎 —聖書には[知恵の樹の実]が[林檎]であるとの言及はないが『失樂園』ではそのように言及されている— での誘惑を奏功させ、人間に原罪を負わせ、そのような通用路を構築した)との描写がなされている(典拠は原著記述の引用紹介による[出典\(Source\)紹介の部 55](#)から[出典\(Source\)紹介の部 55\(3\)](#)を包摂する部に譲る)]

上の委細を従前記述に譲りながらもの振り返り記載をもってしてこの身が

[ルシファーとモノリスとブラックホールをつなぐ作品となる **2001: A Space Odyssey**『2001年宇宙の旅』や **2010: Odyssey Two**『2010年宇宙の旅』に付された [オデッセイ] (*Odyssey*; 『オデュッセイア』)との言葉の兼ね合いで何が述べたいのか]

についてよりもって深く理解いただけたのではなからうか。

すなわち、『失樂園』のブラックホール関連記述との側面を帯びている(先述)との[地獄門の先にアビスの先の描写]が古典字面の面で

[ルシファーと[オデュッセイア]を(上記のような観点で)結びつけるもの]

となっていること、そこからして[オデッセイ]をタイトルに冠する **2001: A Space Odyssey**『2001年宇宙の旅』の問題となる記述「とも」接合して意をなしてくるように「できあがっている」、そう申し述べたいのである(：それにつき、「できあがっている」とのこと述べれば、直近にて記述の[エデンにての禁断の果実の誘惑の寓意]にも関わる —記号論的に多重的に通じ合うようになっている— ところの[トロイア崩壊の因となっている黄金の林檎の寓意]が「そうもしつらえられている」といった按配にて LHC 実験 —こともあろうに[エデンの禁断の果実と一致視されるような側面がある存在]にして[(オデュッセウスによって引導を渡された)トロイアの崩壊の限界]ともなっている[黄金の林檎]の場を知ると伝承が語り継ぐ巨人 ATLAS(の名を冠した検出器)に **Black hole** 探索をなさしめているとの実験 —に込められているのかたちと「なっている」ことについても本稿では仔細なる解説をなしてきた)。

以上のようなことが補っても話としてなせるような領域が[ルシファーとブラックホールの関係性にまつわっての領域]となるわけであるが、同じくものところが長くもなつての[補説 3](#)の部で指摘してきたペルセポネを巡るあまりにも多層的なる関係性と接合するようになっているからこそ問題なのである。その

ようなことは[執拗さ]がなければ具現化しえない、[執拗さ]が伴うとのことはそこにそれだけの[意図]がある、そして、その[意図]とは何かだが、それは[トロイアの木製の馬の[人類]（歴年、人工知能に育てさせた養殖種だったのかもしれない）に対する使用]であると解されるだけの十分な理由（対策を打って然るべきだけの兆候）がある。その理非について —もし読み手に従容と言われるままに死地を歩むだけではないとの[内面としての実質]があるのならば、だが— 自分の頭で検討頂きたいものである（検討した結果、筆者言いようが正しいと分かったならば、それと同時に何をなせばいいか分かるはずであろう。鍛え上げられた一振りの真実の剣でもってして —ノーベル賞受賞者ら・偽りの権威らの束に「それ」が守られているものでも— 粒子加速器実験に有効に異を呈すればいいだけである —※筆者は常識の世界で国際加速器マフィアの国内分局と行政訴訟で長々と争ったとの筋目の者でもあるが（先だって多少細かくも申し述べていることである）、の場にあつては、常識のフィールドでは「彼ら」がいかにも馬鹿げたことを言いもしても容易に逃げ遂せられるようになっていのかを思い知らされた（訴訟という場合は法の有効適用を争う場であつて[根本的欺瞞]や[非常識的話題]の理非を争う場ではない —裁判官は官吏であつて万物を見極める賢人などではない— 。そこでは被告によって不実な逃げ口上がなされ続ける、に対して、決定打にならぬ追撃が被告言い分に一対一で対応するところで要求されるとの延々無為たるやりとりとて具現化する）。また、そもそも、何のための[常識]なのか、何のための[家畜小屋のしきたり]なのかでもいいが、とのことを考えると[常識]のフィールド、そう、たとえば、[司法権]や[第四の権力など]（勝手に馬鹿共に）呼称されているマス・メディアも糸繰り人形よろしく真に種族（我々人類）に有用なる挙に出ることはない（それがゆえの[社会機構]の存立である）、そして、そうしたありようを支えているのは世間一般の人間諸々の無知・無関心・無気力、そう、そのようにしつらえられているとのものとはいへ、無知・無関心・無気力にあるとこの身は動き回ってよくも思い知らされているとの人間ともなる。といった中で真実の一振りの剣を鍛えるに注力し、それを頒布、勇気ある者（がいそうなところ）に意を問うとの途を選んだ。無論、それでも勝ち目は絶無に近いほどないであろうし（途が盤石にも固められきつていようとなかろうとまさしくも天につばを吐くの絵図でもある）、無謀もいいところなのであるが、あだ花に終わっても、人間として生きた、そして、自身同輩に最期まで人としての生きる道とは何か、納得がいくところまで確認したとのことにはなろうとの心根で本稿をものしてもいる（そうした身として述べておくが、残り余生がどれほどあるかは分からぬが、死ぬまで優しき幻影に浸っていたいと向きらには筆者の側に立てとは押しつけがましく言わぬし、それもまた一つの選択肢であろうとは思っている。結果重視のリアリストとしての見方が逃げる向きらは殺されるべくして殺されるのだらうとときに冷酷冷然と見切ろうとしはするのだが、とにかくものこととして、である）—— ）。

ここまでにて付記としての一点目のことの説明を終えることとする

「長くもなるも、」の付記として [2]

ここでは（先行するところとして取り上げてきた [A] から [F] と振っての部にあつての [F] の内容に関わるところとして）

[フリーメーソンが [明けの明星] や [シリウス] のことを秘教思潮に取り組んでいる団体であると自認している]

とのことについて —といったことですら重要な問題と陸続としているとの認識から— 典拠を挙げ連ねつつもの補つての説明をなしておくこととする。

さて、

[天体事象としての[内合]の周期から五芒星構造と結びつくと指摘がなされてきた(出典
(Source) 紹介の部 67) との金星]

については先に[フリーメーソンの公衆宣伝を兼ねてのものと思しき彼らのオンライン媒体]より原文引用をなして【[陰謀論]とは無縁のところとしてのフリーメーソンの惑星金星の重視思潮】についてのフリーメーソン内部の人間の申しようについて一例となるところを引いていた。

すなわち、

(フリーメーソンリー由来のメーソン関連情報提示サイト www.masoniclibrary.org.au —[メーソン図書館。オーガニゼーション・オーストラリア]といったドメイン名のサイト— にての Venus & Freemason と題されたページよりの「再度の」抜粋をなすところとして)

The layout of every Masonic Temple is said to be a model of Solomon's Temple, and **today every Master Mason is raised from his temporary death by the pre-dawn light of the rising Venus at a symbolic equinox.** The rising of Venus was central to Canaanite theology and was associated with resurrection, as it is in Freemasonry in our third degree. When the candidate is raised from his tomb his head rises in a curve towards the East to meet Venus which is also rising above the horizon. The East-West line marks the equinox, the point of equilibrium between the two solstices, when there are twelve hours of light and twelve of darkness. **It appears that some rituals of Craft Masonry are based upon astronomy and have a heritage well over five thousand years old. The W.M. directs the candidates gaze towards the East where he can see a five-pointed 'star' rising before the sun at dawn. The planet Venus as she moves around the sky touches the path of the sun in just five places, just like the W.M. embracing the candidate at just five points, when he is raised.**

(補ってもの訳として)

「メーソンのテンプル構図(神殿としての建築様式)はすべてソロモン神殿をモデルにしてのものであると言われており、今日、全てのマスター・メーソン位階の者は[昼夜平分点(春分あるいは秋分)]を象徴し上昇を見るとの金星の夜明け前の光によってその

[一時的なる死]

より引き上げられる格好となっている。

[金星の上昇]は往古カナン人の神学(セオロジー)の大系にて中心をなしていたところのものであり、フリーメーソンにあっては、

[我々 —(訳注:我々というのは引用元となっている www.masoniclibrary.org.au とのサイトが[メーソン由来のものであるところ]によつての表記となる)— にあっての第三位階のフリーメーソンでの再生(を模しての儀式態様)のように[再生]にかこつけられているとのものである。

(マスターメーソン位階に推挙されようとの)候補者が(象徴的な)墓石から引き上げられるとの折、彼の頭は地平線の上へとぼっていき金星に向き合うようにと東に向けて曲げるとの式で上方へと引きあげられるとのかたちになっている。その折の東西のラインは光の十二時間と闇の十二時間とがあわせて存在するとの昼夜平分点、

[二つの至点(訳注:夏至・冬至/太陽が中空にあっての最高点ないし最低点に見えるとのポイント、半球に応じて昼か夜が最も長くなるポイント)の間の平衡点]

を表するとのものである。

クラフト・メイソンのいくつかの儀式は天文学に基づくように見え、また、5000年を優に越える(人類の)遺産を踏まえてのものと見える。W.M.(訳注:フリー

メーソンの間で立場が上のロッジの上位者 Worshipful Master の略)は(マスター・メーソン位階に引き上げられるとの)候補者らをして夜明けにて太陽が出てくる前にのぼってくる五芒星が見えるようにと東側方向を向くように誘導する。惑星・金星が空を経巡るとき、丁度、W.M.(ワーシップフル・マスター)が彼(マスターメーソン位階引き上げ対象の者)が墓石より引き上げられた時に彼を5ヵ所にあつて受け入れるスタイル —こちらについては続く補説4の段でも解説することとなる The Five Points of Fellowship との抱き上げ儀礼のことか、と思われる— をとるように5ヵ所にて太陽の経路をなぞるものである]

(訳を付しての再度の引用はここまでとする)

との記述を引いているとおりである。

以上が [金星] のメーソンの典礼にあつての意味性の指摘の一例だが、対して、[シリウス] の方のメーソン思潮にあつての位置づけについては 19 世紀フリーメーソンの主要人物アルバート・パイク (Albert Pike)、そのオンライン上にて全文取得可能であると著書 **Morals and dogma** (端的には『道徳、そして、教義』とでも表題訳すべきかの著名著作で、その著名性や内容については後の段でもあらためて問題視する所存であるとの著作)、Internet Archive や Project Gutenberg のサイトより全文ダウンロード可能となっているとの同著に記載されているところの記述内容として次のようなことが挙げられる。

(直下、Project Gutenberg のサイトより全文ダウンロード可能な **Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry**『古代より連綿と続く認証されしフリーメーソンのスコットランド位階の徳義と教義』にあつての I. APPRENTICE. THE TWELVE-INCH RULE AND THE COMMON GAVEL『第一章 徒弟位階. 12 インチのルールと共通の小槌 たるところとして』の章よりの引用をなすとして)

To find in **the BLAZING STAR of five points** an allusion to the Divine Providence, is also fanciful; and to make it commemorative of the Star that is said to have guided the Magi, is to give it a meaning comparatively modern. **Originally it represented SIRIUS, or the Dog-star, the forerunner of the inundation of the Nile; the God ANUBIS, companion of ISIS in her search for the body of OSIRIS, her brother and husband.**

(拙訳として)

「(メーソンのシンボリズムにあつて) 神の摂理への示唆をなすところでもあるとの「**五つの方向を指すとの**」[ブレイジング・スター]はまた奇抜なやりようで凝ったものであるとのものでもある。マジ(東方の三賢人)の道しるべとなつたとされる星を記念するとの意味合いを呈すとのこと、それがゆえ、それ(ブレイジング・スター)に比較的近代がかったのひとつの意味合いを与えるとの式にもなっている。原初的にはその(メーソン象徴に見る)ブレイジング・スターはシリウス、すなわち、「犬の星」、ナイル氾濫にての先駆的存在となる星であり、そして、犬の神アヌビス、イシス神が彼女の兄にして夫であるとのオシリスの死体を捜索するうえでの連れ合いとなつたとの犬の神アヌビスを体現する存在であつた」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく —上にては the BLAZING STAR of five points と記載されているわけだが、Five Pointed Star が五芒星の表記法であること、そして、後述するような理由からそちらは「五芒星形のブレイジング・スター」と訳すべきところとなる—)

上の 19 世紀に世に出た著作より引用なしたところの申しようが妥当であるかは問題ではない。「問題であるのは、」19 世紀の著名フリーメーソンであつた(そちら著名性については次いで解説する)とのアルバート・パイクによる物言い —[シリウスは五芒星形状にて表象されるブレイジングスターであり、ア

ヌビスがその体現存在であった]との物言い— が(オンライン上より即時確認できるところの[文献的事実]の問題として)なされていることである(※)。

(※上にあってその著述内容を引いたアルバート・パイクという男についてであるが、同パイクは 19 世紀にて今日に遺るメーソンの儀礼体系を構築した [非常に有名なフリーメーソン] として広く認知されている(そちらアルバート・パイクに関しては諸種の陰謀論者らに「同男こそが一時期、勢力を拡大したクー・クラックス・クランの首魁であった」「メーソンの「世界的」陰謀は同男それ自体に由来する」と [不確かなところであるとされる]につき威力弱くもの断定が(「であるからあまり意味がない」と受け取れる式で)なされている — 他面、Project Gutenberg のサイトにて掲載画像込みで全文公開されているとの著作 Ku Klux Klan: Its Origin, Growth and Disbandment (1905)『クー・クラックス・クラン: その起源と成長と解体について』、ウェストバージニア大の教授であったウォルター・フレミングという人物の「編」になる 20 世紀初頭の同著作(筆者も流し読みながらも検証しているとの著作)にあっては(英文 Wikipedia などにはそれすらも信用できないとのフリーメーソン団の言い分も紹介されているのだが)「アルバート・パイクは初期 KKK 団の幹部の一人であった」とのよりマイルドな記述が [KKK 団創始メンバーのモニュメント(?)の中でのアルバート・パイク像の写真] の呈示などと共になされている (the chief judicial officer との立ち位置にいた? と[疑問符]がフリーメーソンの否定の断言のために今日、つけられる式でながらも幹部であったとのよりマイルドな記述がなされている) — との向きともなり (尚、何にせよ、集団で意に沿わぬ個人を囲んでの私刑(リンチ)をなすまでに過激化した悪名高い KKK には伝統として [フリーメーソンとの関係] が根強くあり KKK メンバーの墓石には実際、コンパスと定規のメーソン紋章が刻まれているとのことを写真付きでオンライン上に紹介している向きもあり、それはハリー・トルーマンのような [フリーメーソンにして、後、選挙のためとされる中で元 KKK (第二のクラン) に入会した元米国大統領] に至るまで残置していた気風と判断なせるようになってい)、また、同アルバート・パイクについてはメーソンと長らくも (表向きの) 敵対関係にあったカトリック陣営には [ルシファー礼賛の記述 (正確にはそのように受け取れもする記述) を自著にてなしていた向き] であるとの批判がなされているとの向き「とも」なる (といった「宗教的」批判内容は今日に至るまで踏襲されてオンライン上に一部垣間見れるものとなっている)。

他面、フリーメーソンら彼ら身内にあっての毀誉褒貶の「褒」とのことでは同パイクは [メーソン組織の儀礼体系構築に貢献したこと大なる組織の恩人] として取り上げられているような類となりもする。

その点については本稿でも続いての補説 4 でもフリーメーソンらがアルバート・パイクの著作内容をいかように取り上げてきたのかにつき [アルバート・マッキーという学究系メーソンがパイクが与えた影響をどのように振り返っているか] との記述を (誰でも確認なせるところとして) 紹介することにするが (尚、本稿本段執筆時の和文ウィキペディア [アルバート・パイク] 項目にはどこぞやの愚劣漢ないし工作員の類がアルバート・パイクがフリーメーソンであることそれ自体に疑義を挟むが如き記述 — [パイクはメーソンのメンバーと「言われている」] 云々との伝聞調の記述 — をなしているが、海外で記録的事実の問題としてそうしたことまでを疑うような人間はいない)、本稿この部の段階では (薄っぺらいところながらも) よく目につくとの媒体にあっての [アルバート・パイクに対する肯定的評価と結びつけられての解説のされよう] を引いておくこととする。すなわち、英文 Wikipedia [Albert Pike] 項目にて「現行にあって」記載

されているところの一部「常識的」記載内容を引いておくこととする。
(以下、ワシントン DC に置かれたアルバート・パイクの彫像が掲載されているなどしているところの英文 Wikipedia [Albert Pike] 項目よりの記述を一部引くとして) “ He first joined the Independent Order of Odd Fellows in 1840 then had in the interim joined a Masonic Lodge and became extremely active in the affairs of the organization, being elected Sovereign Grand Commander of the Scottish Rite's Southern Jurisdiction in 1859. He remained Sovereign Grand Commander for the remainder of his life (a total of thirty-two years), devoting a large amount of his time to developing the rituals of the order. Notably, he published a book called *Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry* in 1871, of which there were several subsequent editions. Pike is still regarded in America as an eminent and influential Freemason, primarily only in the Scottish Rite Southern Jurisdiction. ” (訳として)「彼(アルバート・パイク)は 1840 年に(メーソン系組織たる)オッド・フェローのインデペンデント・オーダーに参加、それからその間、メーソンのロッジに加わり、組織関連の動きにて非常に活動的に関わるようになり、1859 年には米国南部管轄のスコティッシュ位階にての最高指令官(ソブリン・グランド・コマンドー)の位に選出されることになった。彼は自身の持てる時間の過半を同組織の儀式体系の発展に費やししながら、その後の余生(計にして 32 年間)にあって最高指令官の地位に留まり続けた。よく知られたところとして、彼(アルバート・パイク)は 1871 年に *Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry*『古代より連綿と続く認証されしフリーメーソンのスコットランド位階の徳義と教義』と呼ばれる書物を刊行、それについては以降いくつもの版が存在するとのことになっている。アメリカにてパイクは今日もってまだ(殊にスコットランド位階にての南部管轄だけにあつて)卓拔し、また、影響力を有しているメーソンと見られている」(引用部はここまでとする)
以上のようにまとめられがちなアルバート・パイクという 19 世紀往時の有力メーソンの著書 *Morals and Dogma* (現時、未邦訳)については筆者も内容検証しており、ここではまさしくそのその *Morals and Dogma* の内容を取り上げていること、お含みいただきたい)

さて、上にてそこよりの抜粋をなしている Albert Pike の *Morals and Dogma* にあつては

[ブレイジング・スターは [五芒星](金星の会合周期にて呈示されるような五芒星でもいい)との構造をとり、原初的にシリウスにも仮託される]

と叙述されているわけだが、BLAZING STAR とはメーソンの象徴主義大系に色濃くも採用されているとのものとなり、については Project Gutenberg のサイトを通じて全文ダウンロードできるとのメーソン象徴主義解説書籍 *MASONIC MONITOR OF THE DEGREES OF Entered Apprentice, Fellow Craft and Master Mason* (1903 年刊行のもの、『徒弟位階・職人位階・親方位階の各位階のメーソン儀礼総覧』とでも訳せよう資料) にあつて次の記載がなされている。

(直下、*MASONIC MONITOR OF THE DEGREES OF Entered Apprentice, Fellow Craft and Master Mason* が特定書籍に書き記されているとの文献的事実であるとのこと、オンライン上より誰でも確認できるところの部位 (p.29) よりの引用をなすとして)

The Mosaic Pavement is a representation of the ground floor of King Solomon's Temple; the Indented Tessel, of that beautiful tessellated border or skirting which surrounded it. The Mosaic Pavement is emblematical of human life, checkered with good and evil; **the Indented Tessel, or tessellated border, of the manifold blessings and comforts which constantly surround us, and**

which we hope to enjoy by a firm reliance on Divine Providence, which is hieroglyphically represented by the Blazing Star in the centre.

「(メーソンにあっての)モザイク形状の舗床は[ソロモン神殿の表象物]となり、美しくも碁盤の端っこ、裾の部を囲むのがぎざぎざに加工された切りばめ細工 (the Indented Tessel) となっているとのものである。モザイク形状の舗床は人間の人生を象徴するもの、善と悪の白黒の市松模様にて装飾されており、**the Indented Tessel、すなわち、[ぎざぎざに加工されてのその縁なる部]**は中心となるところにて存在する**ブレイジング・スター** (訳注:下にここにての引用元で掲載されているところの五芒星形の図を掲載しておく)にて象徴図として表象されるところとなつて常に我々を取り囲み、我々が[神の摂理]への堅き信頼にてそれに浴することを望むとの多重的なる天なる恵み、そして、(福德としての)安樂を意味するものである」

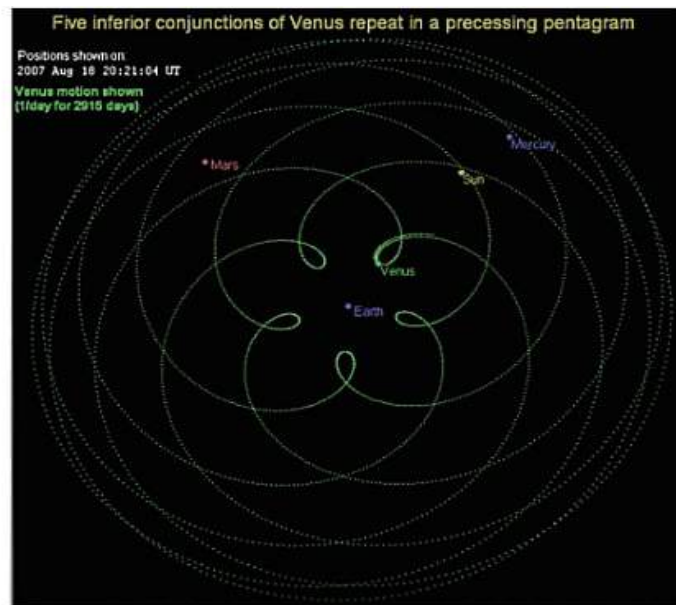
(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

上の引用部記述内容の文献的事実としての確認およびそこにて掲載されている図を参照することでブレイジング・スターとは五芒星形状で描かれることもあるとすぐに後を追う(裏を取る)ことができるようになっているとのもの「でも」ある。

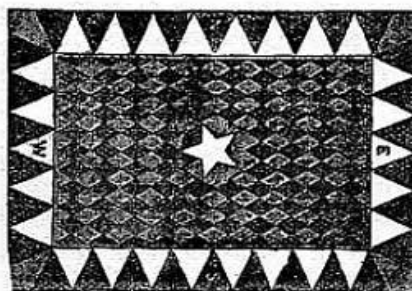
とにかくも、

[金星] ⇔ [五芒星形] ⇔ (アルバート・パイク著作やその他メーソン著作に見るブレイジング・スターありよう) ⇔ [シリウス]

との体現方式がメーソン典礼体系に関するインサイダー申しよう(フリーメーソンリー流布文書記載内容)を引き合いに導き出せるようになっているのである。



Venus & five pointed star



Blazing star (Sirius) & five pointed star

上の段にて呈示の図は本稿にての **出典 (Source) 紹介の部 67** (現在、**補説 3** に内包される段で筆を進めているわけであるが、先行する **補説 2** の中にて挙げていた出典紹介部) で挙げていたとの図、金星の内合の周期によって星天に描かれるとの五芒星にまつわる図となり ([金星と五芒星] の図となり)、下の段にて呈示の図は直近直上の段にて同著よりの文言を引いたとの *Masonic Monitor of the Degrees of Entered Apprentice, Fellow Craft and Master Mason* (1903) に掲載されているとの「五芒星としての」フリーメーソン象徴 *Blazing Star*、ぎざぎざの縁に囲まれた市松紋様の中心に置かれることもある *ブレイジング・スター* が挙げられているものとなる (そして、そこに見る *ブレイジング・スター* についてはメーソンの有力者アルバート・パイクが遺した著名著作にて [イシス・アヌビスにて体現されるシリウス] であったとの申しようがなされていることを引いた通り、一部にて [シリウス体現の五芒星] を表象するものと見られているものになる)。

(※これよりさらに補いもしての説明をなし、また、次いで、図による訴求部を設けたうえでここ [付記として [2]] と振ってのここでの表記に一区切りをつけることとする)

[さらに補いもしての説明として]

フリーメーソンの [ブレイジング・スター] 紋章が五芒星形状と結びつけられているとのことについては 19 世紀のフリーメーソンの識者層である Albert Mackey アルバート・マッキーの手になるメーソン関連事物解説文書 — *Encyclopedia of Freemasonry*『フリーメーソン事典』— にあって下に引用なすとおりの記載がなされている。

(直下、Albert Mackey (1807–1881 / 英文ウィキペディアにあっての同男にまつわる項目にてその事績が記載されているところのメーソン要覧書著者たる 19 世紀の識者系フリーメーソン) の手になる書、オンライン上より全文確認可能なる *Encyclopedia of Freemasonry*『フリーメーソン事典』(*Encyclopedia Of Freemasonry (Extended Annotated Edition)*)との題で流通している版)よりの引用をなすとして)

The Blazing Star, which is not, however, to be confounded with the Five-Pointed Star, is one of the most important symbols of Freemasonry, and makes its appearance in several of the Degrees.

Hutchinson says "It is the first and most exalted object that demands our attention in the Lodge." It undoubtedly derives this importance, first, from the repeated use that is made of it as a Masonic emblem; and secondly, from its great antiquity as a symbol derived from older systems. [. . .] The Great Architect of the Universe is therefore symbolized in Freemasonry by the Blazing Star, as the Herald of our salvation." Before concluding, a few words may be said as to the form of the Masonic symbol. **It is not a heraldic star or estella, for that always consists of six points, while the Masonic star is made with five points.**

「ブレイジング・スターは(「本来的には」との文脈で、か)五芒星と混同・曲解されるような性質のものではないのだが、フリーメーソンにあっての最も重要なシンボルのひとつであり、数多の位階にてその登場を見せている。ハチソンは「それはロッジにて我々の注意を求めてやまないとの第一の、そして、もっとも格調高いとのものである」と述べている。(そうしたいいようは)疑いようもなく、第一義的には、それがメーソン紋章としてなるべくしての度重なる使用に由来しており、第二義的にはより古いシステムに由来するそのシンボルとしての際立つての古さに由来する。…(中略)… 従っ

て、グレート・アーキテクト・オブ・ザ・ユニヴァース(訳注:フリーメーソンから見ての「神」に近しき存在)はフリーメーソンにあっては[救済の紋章]としてブレイジング・スターによって表象されるとのこととなる。締めくくる前にあと何語かメーソンのシンボル形態について紙幅を割いてもよからう。メーソンの星の紋章は紋章学に見る紋章あるいは estella (訳注:スペイン語で[星]の意をなす語)とは異なる、というも、そちら紋章学に見る紋章が六方向を指すものとして用いられている(訳注:*アスタリスクのような形状を持つ星系紋様が欧州貴顕にて用いられてきたことへの言及と思われる)のに対してメーソンの星は五芒星とのかたちをとっているからである

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上では「ブレイジング・スターは本来的には五芒星形と混同・曲解されるような性質のものではないとしても、」と述べられたうえでなお、そのブレイジング・スターがメーソンの神の象徴となっている星形状の紋様であり、また、([メーソン由来の星の紋章]としての)五芒星形をとるようになっているとの記述がなされてもいる(自家撞着(自己矛盾)の色彩を感じる物言いととれるのではあるが、とにかくも、表記記載から推し量れることはブレイジング・スターが[メーソンの神の象徴であり][五芒星形状を呈する]との申しよう「も」がなされているとのことである。

その点、本稿の先の段、[出典\(Source\)紹介の部 99](#)では Grand Lodge of British Columbia and Yukon の Web サイトにあっての The pentagram とタイトルに振られたページ、その左部記述部より

One of the arguments used by anti-masons to support their claim that Freemasonry is satanic is to refer to the masonic use of the pentagram. **The short answer to this accusation is that the pentagram is not mentioned in any masonic ritual or lecture and is not contained within the lessons or teachings of Freemasonry.**

True in essence, this response will not satisfy anti-masons who can point to the many books about Freemasonry that include the pentagram, or at least the five-pointed star, in their iconography, and the writings of such spurious, irregular or psuedomasonic authors as Count Cagliostro, Éliphas Levi and Aleister Crowley. **Although the pentagram, as a geometric figure, is of interest to freemasons since it is also a representation of the Golden Ratio, its esoteric significance is only of historical interest.**

(訳として)

「反メーソンの人間らによるメーソンは悪魔主義的存在であるとの彼ら主張を支えるうえでのひとつの申しようはメーソンの五芒星使用に対する言及をなすとのものである。こうした攻撃に対する端的な答えは [五芒星はいかなるメーソン儀式、メーソン教義にあってても言及されておらず、フリーメーソンの講義・教説にも五芒星が含まれて「いない」]とのことである。

この本質的真実に依拠しての回答は [フリーメーソンにまつわる多数の書籍にあって、そして、紛い物的・非正規・偽メーソンのカリオストロ伯爵やエリファス・レヴィ、アレクスター・クローリーの書物にあって五芒星(すくなくとも五方向を指す星)にあっての象徴主義が凶解にて含まれていることを指摘することができる]との立ち位置にいる反メーソンの人間らを満足させることがないだろう。

しかしながら、[幾何学的文様としての五芒星]は[黄金比の体現物]であったことからフリーメーソン・メンバーの興味関心の対象物であったわけ

だが、それは「歴史的関心をそそるとの秘教的重要性を有した存在」に対する「歴史的」関心のそれにすぎなかった」

との申しようとして上にて抜粋している 19 世紀にてのメーソン関連著作ら(1801 年生にして 1887 年没とのことが現行英文 Wikipedia にての紹介されているとの著名メーソン、Albert Mackey アルバート・マッキーのようなメーソン自身がものしたような著作)にあつての、

The Great Architect of the Universe is therefore symbolized in Freemasonry by the Blazing Star, as the Herald of our salvation." Before concluding, a few words may be said as to the form of the Masonic symbol. It is not a heraldic star or estella, for that always consists of six points, while the Masonic star is made with five points.「従って、グレート・アーキテクト・オブ・ザ・ユニヴァース(訳注:フリーメーソンから見ての「神」に近しき存在)はフリーメーソンにあつては[救済の紋章]としてブレイジング・スターによって表象されるとのこととなる。締めくくる前にあと何語かメーソンのシンボル形態について紙幅を割いてもよからう。メーソンの星の紋章は紋章学に見る紋章あるいは estella(訳注:スペイン語で[星]の意をなす語)とは異なる、というも、そちら紋章学に見る紋章が六方向を指すものとして用いられている(訳注:*アスタリスクのような形状を持つ星系紋様が欧州貴顕にて用いられてきたことへの言及と思われる)のに対してメーソンの星は五芒星とのかたちをとっているからである」

との書かれように矛盾[contradiction]が観念されるところでもある。筆者はフリーメーソンに対する歴史的言われよう、インサイダー・アウトサイダーにあつての歴史的言われようを突き詰めるとの観点から彼ら特性 — **補説 4** にてできる限りのところを呈示することとしたとの特性 — につき真剣に分析したこともある人間なのだが(それにつき世の中には言われたことしか出来ぬとの機械のように思考力がそも欠を見ている、にも関わらず、調べたフリをする偽物も数多いる。であるから一応、述べておくが、筆者のことを [何かを調べたフリをしつつも実際には自分で何一つ調べる気もなければ考える気もないとの類、頭の具合が「際立って」よろしくはないとの[モード]で動かされている類、人間としての一個の意思があつてやっているかさえも疑わしいとの大小の詐欺師・詐狂者の類] と区別をつけていただきたいものではある)、思うところあつて調べに調べた結果、メーソンという存在は詰まるところ、インサイダーの間にて「も」平然と矛盾した言われようがなされているとの組織体となつているとの心証を抱かざるをえないと見做すに至っている — ※世間一般の常識人というものは「[このような世界]で何故、[そのような団体]が存在しているのか?」「その団体の実に醜悪な暗部として[実際に露見しているところ]が一体どのようなものなのか?」の[根本問題](フリーメーソンより[知]との面では質的に劣る相応の人間らを幅広くも弾幕的に配している節ありの国内カルトの存在意味にも通ずる問題「では」ある) というものを見ず天、まったく見ずに済ませ、「フリーメーソンは陰謀団などではない」「フリーメーソンに属するような類はいかなおかしな動き方さえコントロールされて[させられる]傀儡であるなどということ言う人間はおかしな陰謀論の流布者だ」との[表立って声大きくも出てくるような申し分]ばかりを真に受けたがる節があるとのことを承知の上で述べるが、そも、世間一般の常識人というものが(どの面下げてか、でもいいが)真に受けたがるとの[表立っての申し分]、それ自体からして[矛盾]や[欺瞞]で満ちている団体がフリーメーソンという団体となつていると本稿筆者は結論づけるに至つてもいる —)

以上ここまで呈示してきた、

[フリーメイソン象徴主義を介しての「五芒星」と「金星」(会合周期との兼ね合いで星天に五芒星を現出させるとのことが知られもしている天体)と「シリウス」の関係性]

および本稿にあってのよりに先駆けての段にてその呈示に注力してきた、

[金星体現存在としてその似姿が初期キリスト教教父階級に構築されたとされるルシファーに関わるところで[際立っての古典ら](それらが[ウェスタン・カノン]と評される最も著名なる古典らであることにつき、**出典(Source)紹介の部 90(5)**から**出典(Source)紹介の部 90(9)**を包摂する解説部にて先述の『地獄篇』やミルトン『失樂園』)にて「どういうわけか」ブラックホール的側面が付与されているとのことがある]

[シリウスB —(同シリウスBについてはくどくもなるが、**出典(Source)紹介の部 95(8)**以降にて解説しているように[ケルベロス]との結びつきが「これもっともな式で」指摘されてきたとの白色矮星ともなる)— がブラックホール理論開闢の天体になるべくしてなっていることがある(スブラマニアン・チャンドラセカールのブラックホール概念提唱経緯を扱った英国の科学史専門の学者の手になる書籍(邦題)『ブラックホールを見つけた男』に表記されてのこと —本稿にての先立つところ、ここ**補説 3**にあっての[C]および[D]の段の解説部にて出典を細々と挙げて詳述のことである—)]

とのことらの[複合顧慮]からフリーメイソンは

[ブラックホールと「複合的に」結びつく存在たる五芒星] ([シリウスに仮託されてのものであるとメイソンに主張されての紋章たるブレイジング・スター] および [金星] が双方、その形態と結びつく五芒星)

を尊崇視していることになる「とも」述べられるわけだが、

「そのことからしてあまりにも話の辻褄が合いすぎる」

とのこと「とも」あいなる。

本稿**補説 3**にあっての[A]から[F]の段にて指摘しているように、

[フリーメイソンはデメテル・ペルセポネにまつわるエレウシス秘儀、そして、イシス・オシリスにまつわる往古崇拝形態と似通ったものを自分たちの「死の再生の儀式体系」の中に取り込んでいる]

とのことがフリーメイソンの識者も込みにかなり昔から指摘されている(先に引用してきたような式で指摘されている —※—)。

(※:さながらイナンナ・イシュタルに愛人化されていた植物の死と再生の神たるドゥムジ・タンムズが殺された、あるいは、アフロディテ(ヴィーナス)およびペルセポネに愛人化されていた植物の死と再生の神たるアドニス(アダム)が殺されたことを想起させるように取り込んでいる — **出典(Source)紹介の部 93**にて取り上げたところのメイソン(アルバート・マッキー)由来の書物、Project Gutenbergのサイトで公開なされている The Symbolism of Freemasonry (1882.著者死亡後、一年をして刊行された著作)の巻末 Synoptical Index.A の段(大要解説 [ア]段)の Adonis 解説項目にて

“ In the mythology of the philosophers, Adonis was a symbol of the sun; but his

death by violence, and his subsequent restoration to life, make him the analogue of Hiram Abif in the masonic system, and identify the spirit of the initiation in his Mysteries, which was to teach the second life with that of the third degree of Freemasonry. ” (訳として)「哲学者らに由来するところの神話学見地にあつてはアドニス(Adonis)は太陽のシンボルとなる。しかし、彼の暴力による死、そして、続いての生への復活は同アドニスをしてメーソン体系にあつてのヒラム・アビフの質的同等物となさしめ、彼アドニスの秘蹟へのイニシエーションの精神を第二の人生への教授をなそうとの意味でメーソンの第三位階のそれ(訳注:マスター・メーソン位階への参入秘蹟)と結びつけるものである」と記載されていることからもうかがえるように[死と再生の儀式体系]の中に取り込んでいる——)

といったこと、フリーメーソンの儀式思潮とペルセポネらに起因するエレウシス秘儀とイシスに起因する秘教会に通ずるものがあると極一部識者にて識られるところとして19世紀より指摘されてきたとのことがある一方で その、その

[死と再生の儀式]

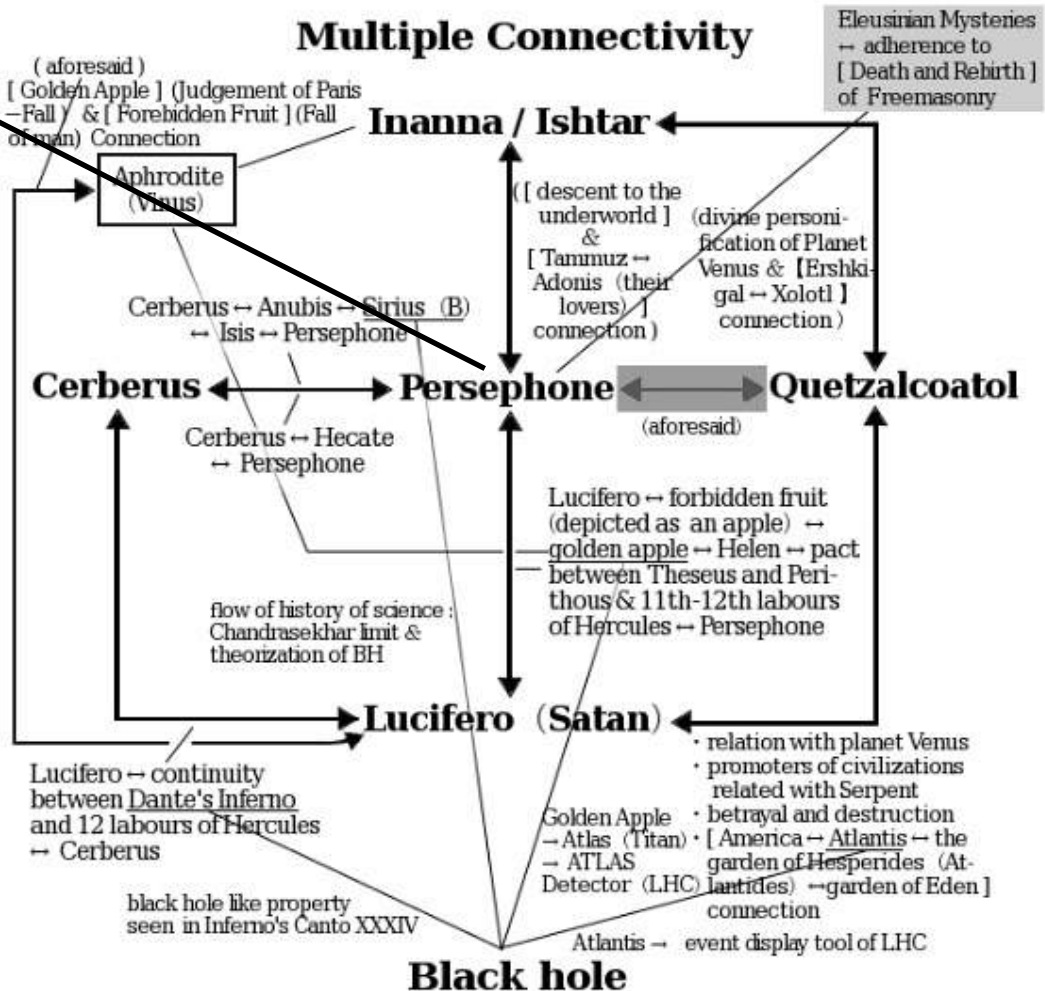
にまつわるペルセポネもイシスもその双方が[シリウス]に(そして、[ケルベロス]を介して[ルシファー]および[ブラックホール]にも) 結びつく存在であるとの指摘が多重的になせしてしまうがゆえに、

「話の辻褄があまりにも合いすぎる」

と述べるのである。

(せんだって呈示の相互関係呈示図の再掲として)

ペルセポネを中心に
してのこちら多重的
相互関係がいかよう
なものなのか、また、
同じくもの関係性が
いかようにしてブラッ
クホールに通じてい
るのかについては本
書の p.230 から
p.455 を割いての(ひ
とまとめとしての)
[B]から[E]と
振っての部にて典拠
詳説なしているの
で把握未了である
とのことであるの
ならば、そちら参
照を請いたい
次第である。

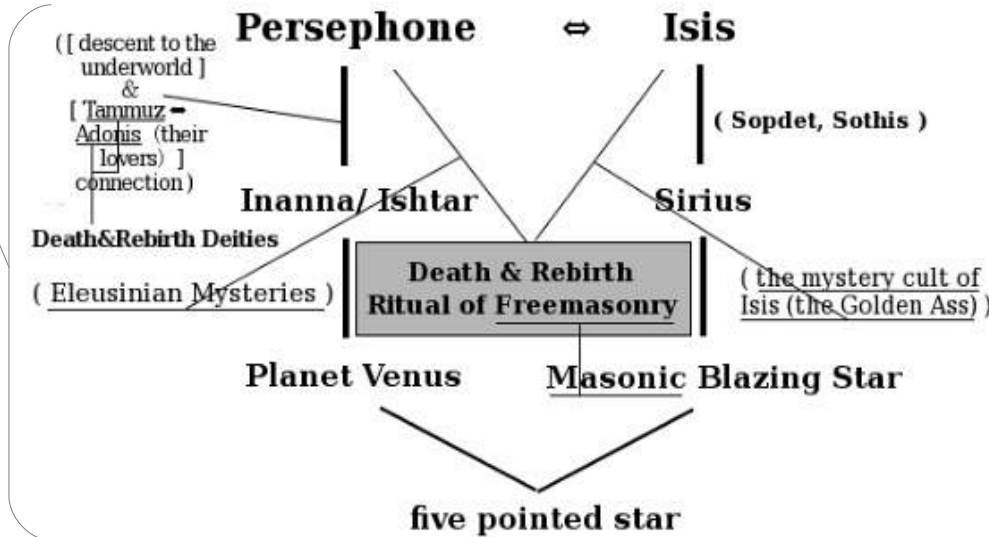


ここにて取り上げている関係性の委細の解説、そして、関係性が成り立つところの典拠の「詳解」については本書の p.351 から p.481 を割いての(ひとまとめとしての)[E]から[F]と振っての部にてなしているのので、把握未了であるとのことであるのならば、そちら参照を請いたい次第である。



大要としては

1. イシスはペルセポネと古代より結びつけられている。そして、イシスはフリーメーソン象徴主義では五芒星にて体现されるシリウスの象徴神格としての立ち位置を往古より帯びていた。
 2. イシスもペルセポネもフリーメーソンの死と再生の密儀の秘教思潮と濃厚に関わると極一部にて指摘されてきた存在である。
 3. ペルセポネはシュメール・バビロンのイナンナ・イシュタルと多重的に結びつく存在ではあるが、イナンナ・イシュタルは金星の体現存在であり、金星とはその内合周期が五芒星形状を描くことがよく識られている天体である。そしてまた、金星(ラテン語呼称のルシファーと結びつく天体)はフリーメーソンの死と再生の儀式と結びつけられていると一部メーソン媒体に表記されている天体である。
- 以上、1. から3. の点らは偶然としてはできすぎている



とのことをここ図示部では問題視している。

さてもってして、先にて引用をなしたところのフリーメーソンリーの識者層、アルバート・マッキーの手になる著書、

Mackey's Encyclopedia of Freemasonry

にあつての別の段では

(直下、引用なすところとして)

“ we have in the representations of the present day the incongruous symbol of a blazing star with five straight points. In the center of the star there was always placed the letter G, which like the Hebrew yod, was a recognized symbol of God, and thus the symbolic reference of the Blazing Star to Divine Providence is greatly strengthened. ”「我々は今日にての表

象様式として不統一感を呈しているものながらも「直線的な五つの角を持つ」ブレイジング・スターのシンボルを有している。その星のシンボルの中央部にては常にGの字が置かれ、それでもって、ヘブライ語のヨッドの字が神の象徴となっていたようにブレイジング・スターにあって神意が働いていることに象徴的な言及をなしているのである」

(引用部はここまでとする)

との言及もが認められるとのことがある。

以上引用表記にて言及されている「神意」(メーソンらの言い分に見る[神意;デイベイン・プロビデンス] というものだが)の体現物としての、

[Gを刻み込んだ五芒星(五つの角をもつシンボル)としてのブレイジング・スター]

がいかようなものなのか、その具体的使用事例について下に挙げておく。



"Jewel of the Grand Lodge of Maryland"
seen in
[Washington's Masonic Correspondence] (1915)
by JULIUS F. SACHSE (Freemason)



Masonic Blazing Star

前掲図左上は本稿筆者たる手前が 19 世紀から 20 世紀前半にかけてのフリーメイソンにまつわる語られようを分析していた中で読解していた文書の一つたるもの、Project Gutenberg のサイトにて全文公開されているとの[ジョージ・ワシントンのフリーメイソンとしての書簡に対する分析]をなしているとの 20 世紀初頭の著作、Washington's Masonic Correspondence (1915) と題されてのフリーメイソン (Julius Sachse という 20 世紀初頭にて執筆なしていたとのフィラデルフィアのメイソン) の手になる著作) にて掲載されているメーランドのフリーメイソンの統括交流会館 (グランド・ロッジ) にあって使用されていた装身具を抜粋したものとなり、そこにあっては [G が刻み込まれたブレイジング・スター] の似姿が見受けられる。

前掲図右上はメイソンの正装に身を包んだワシントンを描いたフリーメイソン画であるが、明示的にはブレイジング・スターは持ち出されていなくとも、記念的モニュメントとしての同画からして[五芒星と G の字が近接して描かれている]との格好となっている。

ここ本稿ではそのようにメイソンにあって God (神) の G と結びつけられる Blazing Star、先にて原文引用をなしている著作 Morals and Dogma によると [シリウス] と結びつくことされるそれが [五芒星] 形状をとるとのかたちで (星天にあっての内合の周期から五芒星形状を現出するとの指摘がなされてきた) 金星の会合周期による現出構造とも結びつき、によって、

[シリウス (メイソンが五芒星形態を呈することもあるブレイジング・スターにてのメイソン主義における比定物)] ⇔ [イシス (シリウス A の体現神格として伝わっている女神)] ⇔ [ペルセポネ (エレウシス秘儀との関係でイシス共々メイソンの死と再生の象徴体系と結びつくことを先述した冥界の女神)]
[ペルセポネ] ⇔ (冥界下りをなしてそこに留まることを強いられた女神としての共通性 / 同一存在であるとされている死と再生の植物神らを愛人化している存在としての共通性) ⇔ [イナンナ・イシュタル] ⇔ [金星 (会合周期にて五芒星と結びつく天体 / 別称 [明けの明星] のラテン語表記がルシファーとなる天体) の体現存在としての女神]

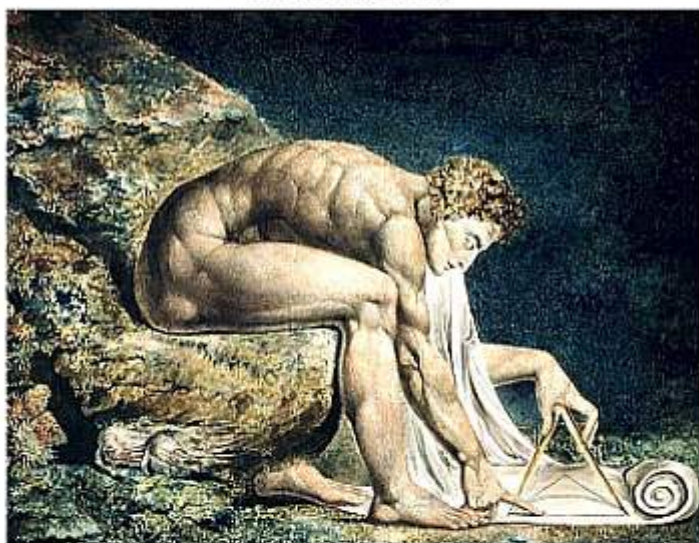
との関係性と (それこそメイソンらがそのように呼ばわりたがるような [神意] などというもの) の賜物なのか) 接合性を呈している、属人的主観などが問題にならぬとの式で接合性を呈しているとのことに着目しているのである。

[以上、ここまで述べてきたことの意味性を間接的に訴求すべくもの図解部として]

ここにては「視覚的かつ直感「にも」訴えるべくもの」、そして、「印象論がかった側面が強きものとしての」19 世紀芸術作品らから材をとっての図解部を — (印象論としての話をなすのは本意ではないのだが) — 設けておく。

Willam Blake's Works

Newton (1795)



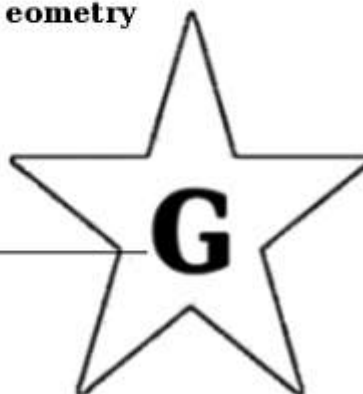
The Ancient of Days (1794)



("officially") [G] od or [G] eometry



The Square and Compasses
of Freemasonry



Masonic Blazing Star

Sirius

上は

[18世紀後半から19世紀にかけて活動の著名な英国人芸術家ウィリアム・ブレイクが製作したカラー版画に見る [アイザック・ニュートン似姿] および [ブレイク流の造物主に比定されるとのユリゼン(という存在)の似姿] を並列して挙げたもの — (ウィリアム・ブレイクは活動の英国の版画家にして詩人となり、彼の叙事詩『ミルトン』にて付された詩が歌曲化されての [エルサレム Jerusalem] が英国では著名な曲となっているがためもあって英国人一般によく知られているとされもする歴史上の人物ともなる (英国人によく知られた同ブレイクはその詩作 [エルサレム] が産業革命期イギリスをして [暗黒をもたらすサタン的な工場 dark satanic mills] といった忌まわしいものとして描いていることでもよく知られている芸術家である)) —]

及び

[Gの字を中枢に据えてのよく知られた代表的フリーメーソン・シンボル]

をあわせて呈示したとのものである (: ウィリアム・ブレイクに素材とされているアイ

ザック・ニュートンについては「フリーメーソンの象徴を「想起」させる交差する二本の骨」を紋章としていたことが英文 Wikipedia にすら紹介されているとの向きとなり、(言うまでもないことか、とは思いますが)、[重力] 概念の流布・開拓者となる。その点、諸種媒体上ではニュートン本人がメーソンであるかは不分明ではあったとされているのだが、同ニュートン、メーソンにてニュートンの名前を冠する交流会館(アイザック・ニュートン・ロッジ)を構築されているなどメーソンによって重要視されているとの向きとはなる。(上掲図左上にブレイク版を挙げてのニュートンのことはここまでとして) 他面、ブレイクが描いているとのユリゼンの版画(上掲図右上の版画)、タイトル名としては The Ancient of Days の方についてはフリーメーソンの造物主(グレート・アーキテクト・オブ・ユニヴァース)をモチーフにして描いたものであるとの見解が呈されているとのものとなり、英文[Urizen]項目にての Derivation[由来]の節にて “ Urizen has clear similarities with the creature called the Demiurge by Gnostic sects, who is likewise largely derived of the Old Testament god.[...] Speculative Freemasonry is another possible source of Blake's imagery for Urizen; Blake was attracted to the Masonic and Druidic speculations of William Stukeley. The compass and other drafting symbols that Blake associates with Urizen borrow from Masonic symbolism for God as the "Great Architect of the Universe" ” 「(ウィリアム・ブレイクの描いた)ユリゼンについては [おおよそにして旧約聖書の神に由来している節ありとのグノーシス派にあつてのデミウルゴスと呼ばれる存在] との明確なる類似性を呈するとのものである。…(中略)… また、思弁的メーソン(のありよう)がブレイクのユリゼン(という作)の想像の源泉となっているとのありうべきところのものである。ブレイクはウィリアム・スツークリ(訳注:あるいはウィリアム・スタッカレーとも、ストーンヘンジに関する考古研究で名を遺しているフリーメーソン)のメーソンおよびドルイド主義に関する推察に魅せられているところがあった。(であるから)、ウィリアム・ブレイクがユリゼンと結びつけていたとのコンパスおよび他の作図象徴はメーソンの神、グレート・アーキテクト・オブ・ユニヴァースよりメーソン象徴主義から拝借したとのものとも「とれる」(訳付しての引用部はここまでとする)と記載されているようなところとなる(英文 Wikipedia の同じくもの表記の出典としてはオクラホマ大学出版局から刊行されている William Blake in a Newtonian World: Essays on Literature as Art and Science という 1998 年初出の著作が掲載されている)。また、上掲図に見るフリーメーソンの G の字をコンパスと定規で囲ったとの象徴はあまりにも有名なものとして諸所にてすぐにメーソンの代表的シンボルとなっていること、確認せるとのものとなっている)。

ここ別枠で設けての図解部では以上の図に加えて、

[さらにもってして(続けもしての)関係図]

を挙げ、続けて、従前の内容を振り返つての話をなすことで

[[神(God)ないし幾何(Geometry)を意味すると一般にされる G を刻まれてのブレイジング・スターの問題] と [重力]の問題の接合性] を感じさせるようなところもある

との訴求をなしておくこととする 一くどいが、印象論としての話をなすのは本意ではないのだが、ここでは、明示してのこととして「例外的に」、視覚的・直覚的側面を強くも前面に出しての訴求をなしているとのこと、慮(おもんばか)って頂きたい次第ではある一。

Willam Blake's Works

Newton (1795)



The Ancient of Days (1794)



("officially") [G] od or [G] eometry

公式上の見解また一般論ではメソニック・シンボルに見るGはゴッドのG、ないし、幾何学(ジオメトリー)のGに由来するとの言いようがなされる



The Square and Compasses of Freemasonry

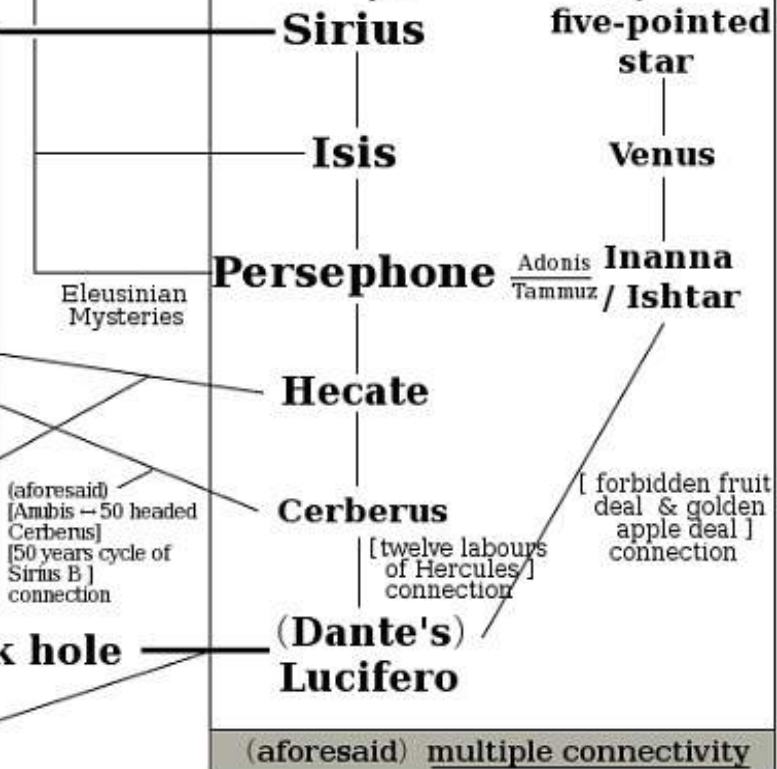
Masonic Blazing Star

ニュートンとなれば、万有引力の法則との結びつき、そして、林檎落下に起因する重力概念に関する関きの伝説的語られようがよく知られる
the law of universal "G"ravitation & fall of an apple "legend"

(flow of history of science related with Sirius B) [chandra-sekhar limit & gravitational collapse & theorization of black hole]

先述のように科学史にあつてはシリウスBについての考察がそのままブラックホール理論の創始・開拓と通じているとされる

詳述に詳述を重ねてきたところとして アヌビス・ヘカテ・ケルベロスらにまつわる事柄らが 重的にシリウスBと結びつくこと述べられるようになってしまっている



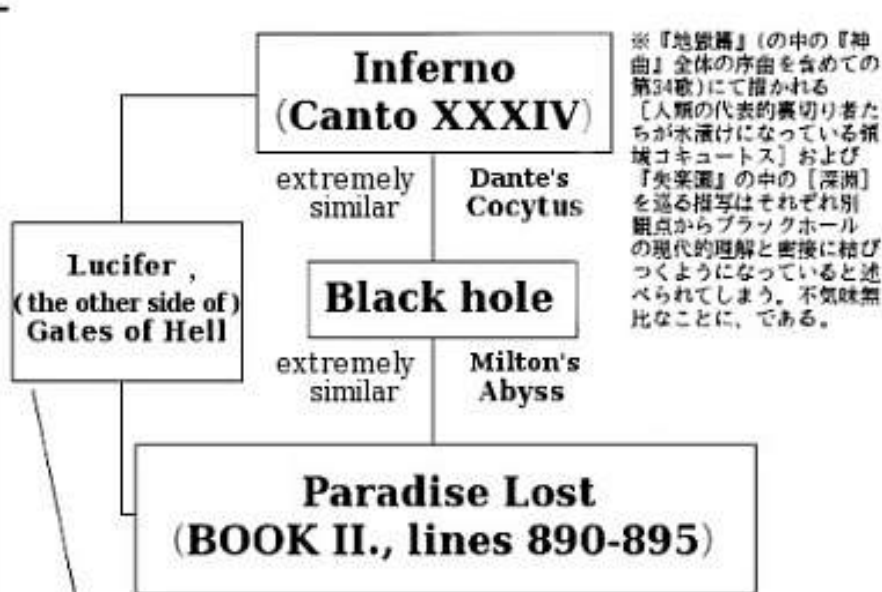
Black hole

(aforesaid) multiple connectivity

外側から見れば時間が凍り付いたポイント（重力の中核でもあるポイント）で永劫の紛争劇が展開している

『ダンテ『地獄篇』では「地獄門の先に存する場」として
「光と光源的に結びつく存在（ルチフェロ）が圍困された領域にして重力が向う先でもある領域にて人類の裏切り者らが氷漬けになったうえで永劫に噛み砕かれ続けるシュールな世界」
 が描かれる（上がいかようにしてブラックホール寓意と結びつくかは先に仔細に解説している）。

他面、ミルトン『失楽園』では「地獄門の先に存する場」として
「ルチフェロと同義の墮天使サタンが人類を己が妻子たる「罪」と「死」の餌食に供するとの結末をもたらすため、誘惑でもって構築した通路が通る場となり、なおかつ、「底無し」の暗黒領域」にして「時間も空間も意味をなくす場」であり「自然の祖」であるアビスこと深淵
 が描かれる（上がいかようにしてブラックホールの寓意と結びつくかは先にて解説している）。



※『地獄篇』と『失楽園』を巡るブラックホール関連の話には「共通項」も存在しており、その共通項とは「ルシファー（悪魔の王）」および「地獄門」となる（ルシファーについては「光でも脱出速度のハードルを越えられぬブラックホール特質」のことが常題になり、「地獄門」については「人形らに許された何も変ええぬ不明なレベルの話と受け取れるが」一部の著名な科学者らが極めて隠喩的に、かつ、示唆する程度にブラックホールの外延部「事象の地平線」と結びつけてダンテ『地獄篇』の地獄門のことを持ち出している、との機構が問題になる）。

（以上について疑わしきは本稿にての【出典(Source)紹介の部55】および同【出典(Source)紹介の部55】を補うべくもの典拠紹介をなしているとの【出典(Source)紹介の部55(2)】、【出典(Source)紹介の部55(3)】の段を参照のこと）

[G] od or [G] eometry

⇒

[G] ravitation

メーソン・シンボリズムに見るG、シリウス体現象徴ともされる五芒星形のブレイジング・スターに刻まれているとのGがGravityないしGravitation、ブラックホールがそれらにまつわる怪物的存在となっていてところの重力・引力の類と結びつけられているようにとれるとの背景がある。

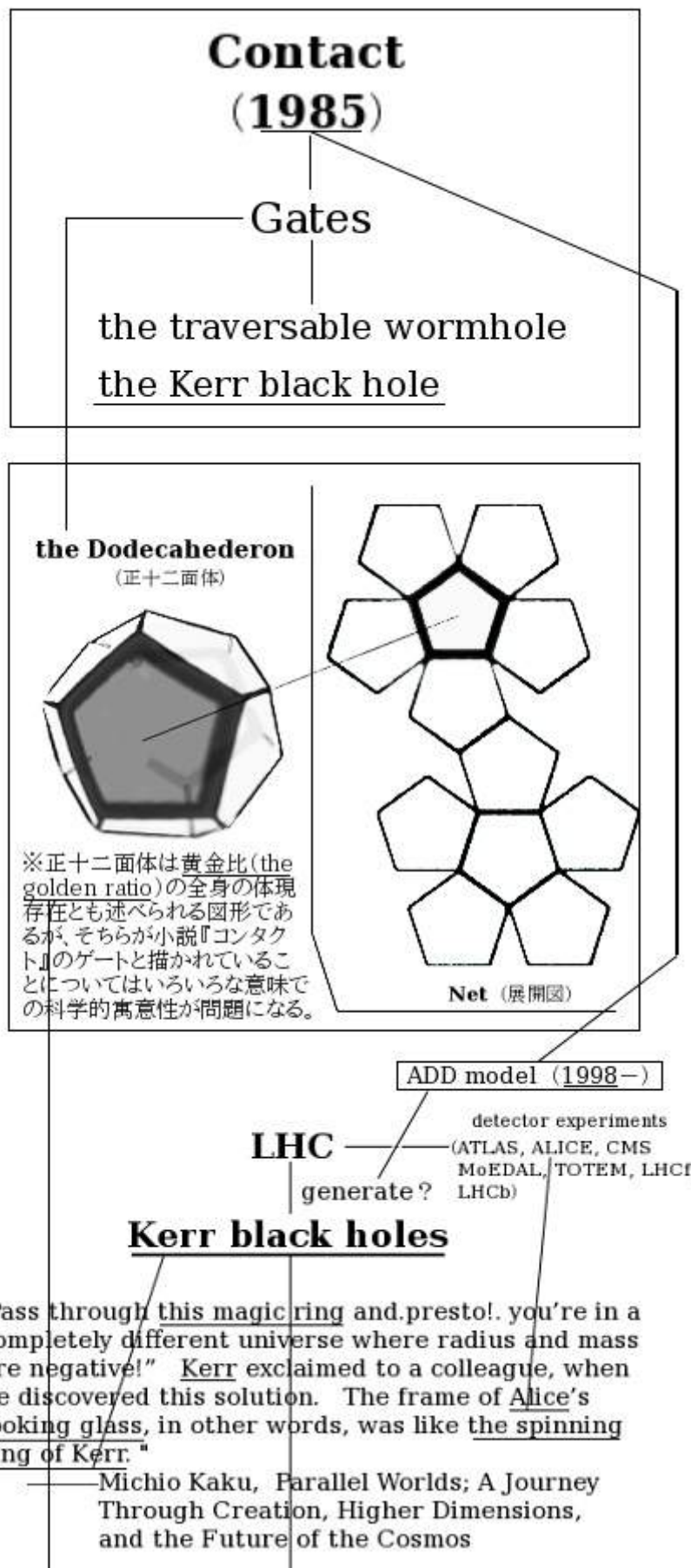
直上の関係図に関わるところとして

「五芒星形状について本稿にていかような話をなしてきたのか」

とのことにまつわる先の段にあっての関係図ら、補説2の段 — 現行は補説3での話

をなしている—にて呈示していたところの関係図「ら」を再度、呈示しておくこととする。

(以下、本稿補説2の部にて取り上げていたところの[黄金比体現構造たる正五角形][ブラックホールと結びつくゲートの構築を作品設定としている小説作品]の接合性にまつわる関係図を再掲するとして)



the Golden ratio ?

" Another intriguing area of astronomy in which the Golden Ratio made an unexpected appearance is that of the extreme objects we call black holes. Black holes warp space in their vicinity so much that in Einstein's classical General Relativity, nothing can escape from them, not even light. (. . .) Spinning black holes (called Kerr black holes, after the New Zealander physicist Roy Kerr) can exist in two states: one in which they heat up when they lose energy (negative specific heat), and one in which they cool down (positive specific heat) . They can also transition from one state into the other, in the same way that water can freeze to form ice. Believe it or not, but the transition takes place when the square of the black hole mass (in the appropriate units) is precisely equal to ϕ times the square of its spin ! "

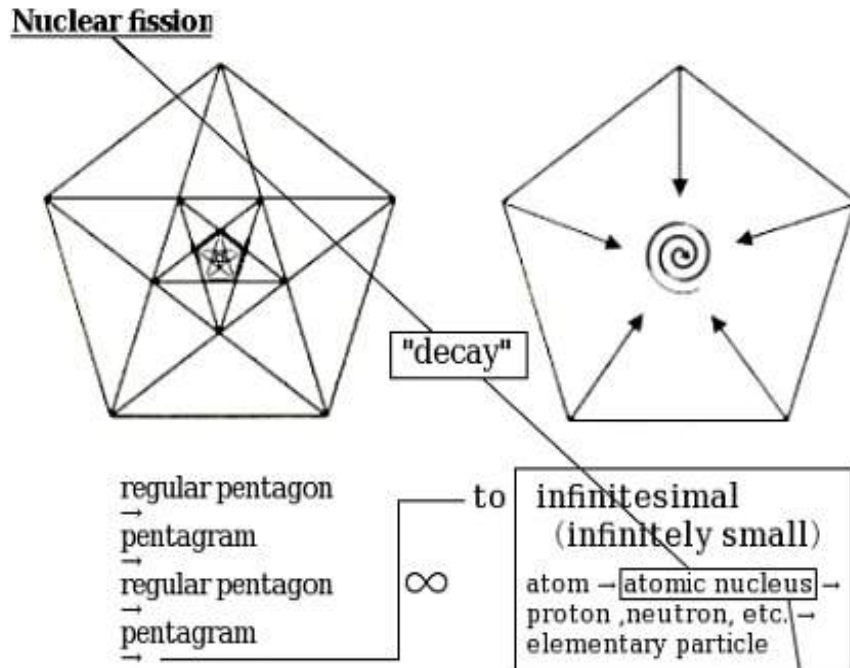
—— an article titled "The Golden Ratio and Astronomy" written by definitive astronomer Mario Livio (from huffingtonpost.com)

本稿にての [出典 (Source) 紹介の部73] を包摂する部で取り上げているように権威サイドの天体学者マリオ・リヴィオ (下らぬ陰謀論者らが真実をゴミに埋もれさせんとするがごとく紛い物の論法を展開する際に引き合いに出すようなフリンジサイエンスの話柄をこととするわけではないとの堅い筋目の科学者) に由来するところの申しよう、2012年10月22日発のという媒体のオンライン記事に見るところの申しようとして、「カー・ブラックホールには二通りの形態が存在しており、内、一方から他方への変異、水が氷になるが如く変異は一方の [質量] が [角運動量] ([スピン] と書かれてはいるが、門外漢ながらもアンギュラー・モメンタムこと [角運動量] のことを指すと解されるとのこと述べておく) の二乗の [ϕ 倍] (黄金比そのものである縦横比 1.6180339887... 倍) になった際に生じる」

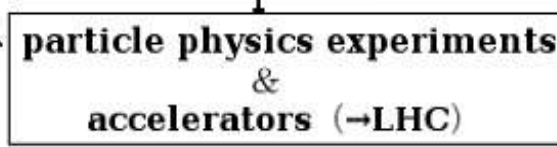
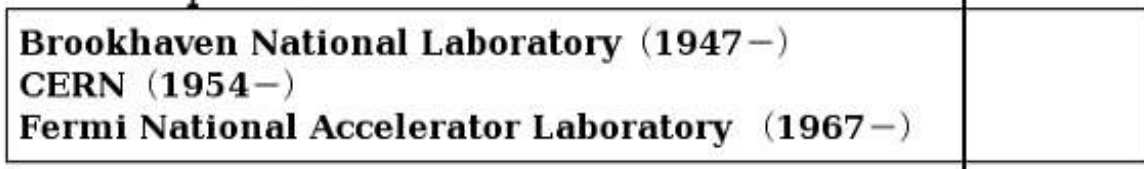
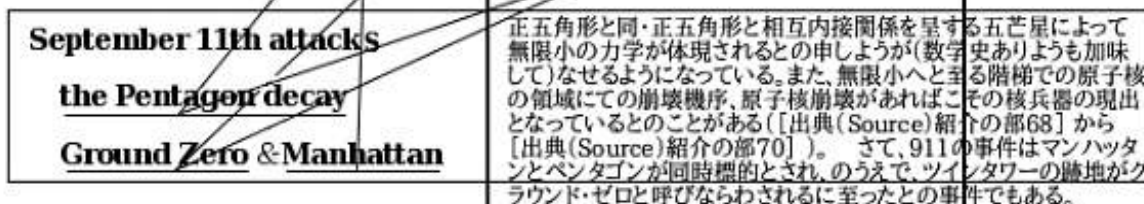
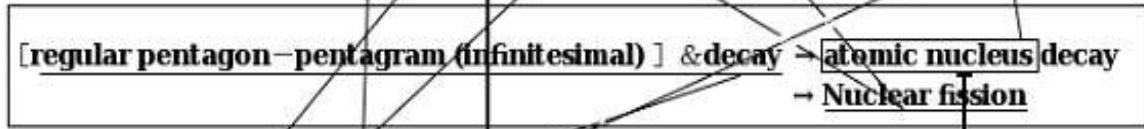
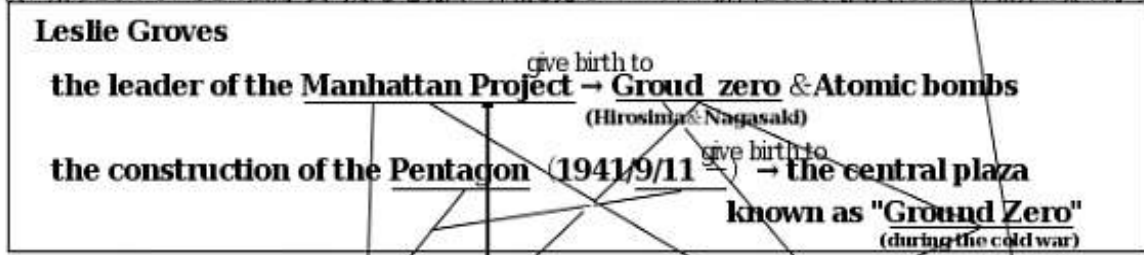
との物言いがなされている。

「問題は、カール・セーガンがそうしたカー・ブラックホールの黄金比と結びつく特性が公に理論として呈示される前、「1985年」にカー・ブラックホールと結びつくゲート装置を全身黄金比の体現存在である正十二面体と結びつけていたようである —— ただし、その意での時期的な先後関係については保証しかねるところがある —— との「節がある」こと「でも」ある (そして、こちらは門外漢ながらも「確実である」と述べられるところとしてセーガンがブラックホールゲートを [黄金比体現の正五角形 (五芒星と永遠に続く相互内接関係によって無限小への力学を示すとの図形) を十二枚重ねての構造] と結びつけてのやりようを同男小説作品にてとったという1985年という時期はLHC実験によって「人為的に」カー・ブラックホールの類が生成されると科学界に肯定されるようになったのよりも [かなり前] に遡るものとなるとのことである —— ブラックホール生成問題が取り上げられるに至った科学界動向については本稿にての [出典 (Source) 紹介の部1] から [出典 (Source) 紹介の部3] を包摂する解説部を参照のこと ——)

(続けて、[無限小に至るまでの力学を体現することで知られる正五角形と五芒星形の相互内接関係] がいかように [マンハッタン計画] [現実に発生した 911 の事件] [ブラックホール生成可能性が昨今に至って取り沙汰されるに至った加速器実験] らと結びつくものなのかについての関係図を再掲するとして)



米国軍人レズリー・グローブズに主導されたのが9月11日に竣工を見たペンタゴン——冷戦期にあつてはその広場が核攻撃の対象としてグラウンド・ゼロと呼称された国防総省本庁舎——の建設計画とそもそものグラウンド・ゼロとの言葉の使い始めとなっているとの広島・長崎爆心地現出に帰結を見たマンハッタン計画となる（〔出典 (Source) 紹介の部70〕ら）

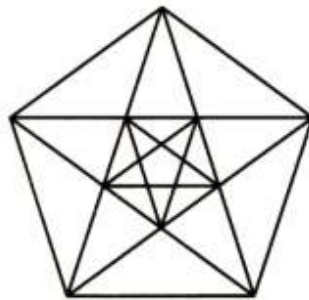


※本稿にての〔出典 (Source) 紹介の部84〕で解説しているところとしてマンハッタン計画関係者より、〔ブラックホール生成問題で矢面に立たされ、なるべくして訴訟の被告になつたとの研究機関〕が設立されているとの経緯がある。
また、マンハッタン計画にてその成果が利用されていたころの〔原子核領域の破壊作用〕は加速器「実験」(ブラックホールを生成するとされるに至つた挙動)の基本となるところ「でも」ある（〔出典 (Source) 紹介の部71〕）。

(さらに続けて、[黄金比と結びつく正五角形をゲート(の封印)として描いている作品]にして[(存在自体が奇怪な)911の事前言及作品]となっているとの特定小説作品について本稿にての **出典(Source) 紹介の部 37-5** に続く部より同様のものを挙げ出していたところの関係図の再掲をなすとして)



The Illuminatus! Trilogy
&
The Symbol of Discordianism



作品副題として
The Golden Apple [黄金の
林檎]
との名称を冠するジ・イルミ
ナタス・トリロジー・シリーズ
では作中にパロディ宗教ディ
スコディアニズムの図示の
通りのシンボル、黄金の林檎
とペンタゴンの並列をなしてい
るとのシンボルが頻出を見て
いる。内、黄金の林檎がニュ
ーヨークに仮託されうるよう
なものとなり、他面、ペンタゴ
ンが黄金比の体現存在である
とのことを本稿では問題視
している

pentagon (pentacle⇒pentagon
⇒pentacle⇒ . . .)

&
"eternal" golden ratio

本稿にての先の段でも図示したことを
再提示しておく。黄金の林檎は [トロ
イア崩壊に発展した三女神の美人投票]
のトロフィーともなっているのである
が、その黄金の林檎、後に問題性
を細かくも解説する映画『ファイト・
クラブ』にてツインタワー敷設のオ
ブジェ (スフィア) に仮託されていた
のと同様の姿にて歴史的に描画されて
きたとのことがあるものでもある。



Lucas Cranach the Elder's
"Judgement of Paris "



Golden Apple

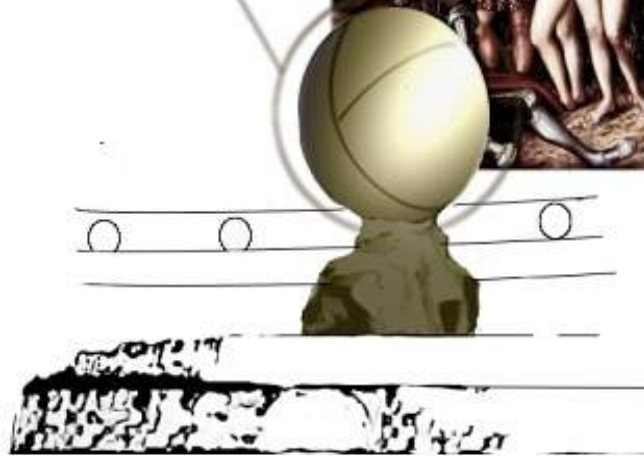


クラブ』にてツインタワー敷設のオブジェ(スフィア)に仮託されていたのと同様の姿にて歴史的に描画されてきたとあるものでもある。

Lucas Cranach the Elder's
"Judgement of Paris "



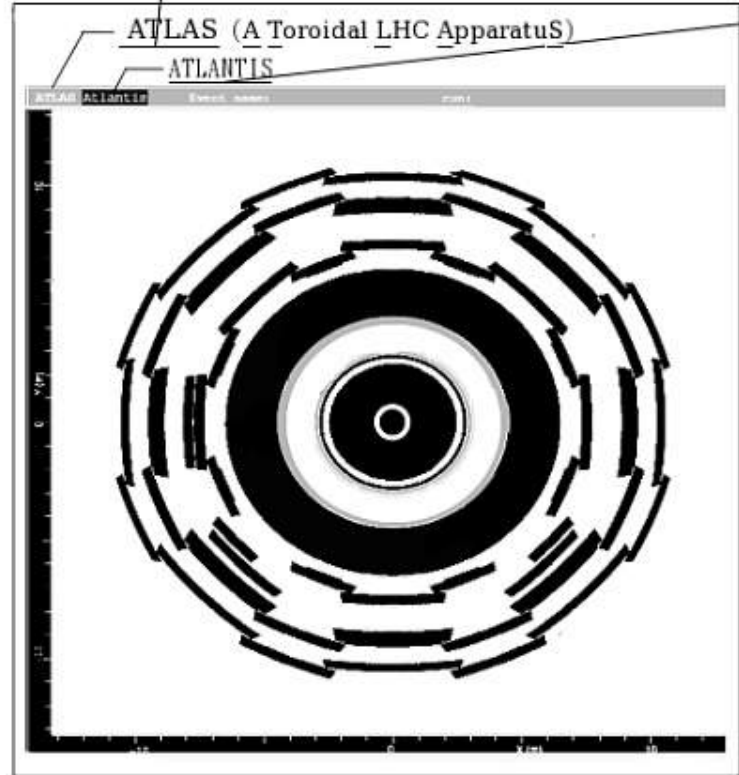
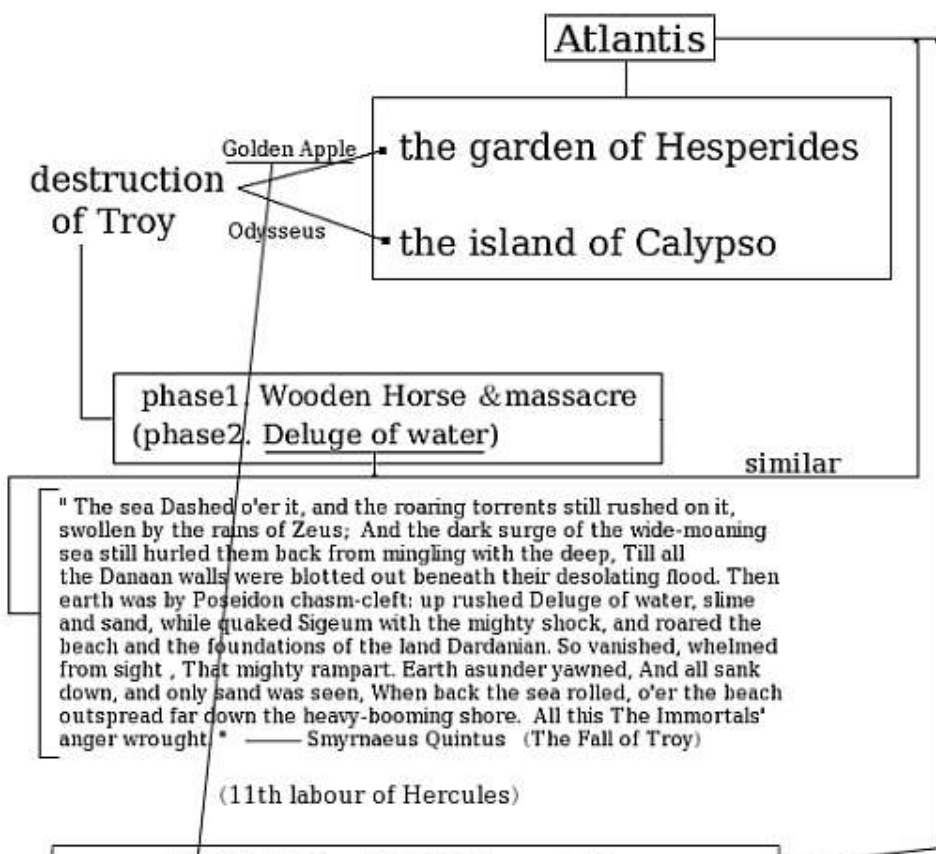
Golden Apple



The Sphere (Fight Club version)

ルネサンス期画家ルーカス・クラナツが描いた[黄金の林檎]は映画『ファイト・クラブ』(後述)にて登場するバージョンのツインタワー敷設オブジェのイミテーションとそっくりなものである。

(加えて、[黄金比と結びつく正五角形をゲート(の封印)として描いている作品]にして[(存在自体が奇怪な)911の事前言及作品]となっているとの特定作品にあって重要視されている — 作品タイトルに付された副題となり、また、作品内にて図示されての象徴も描かれている — との[黄金の林檎](本稿にてのここに至るまでの段で何度も何度もそれが[サタンの類に古典で定置されている古き蛇がエデンにて誘惑に用いた禁断の果実]と同一視されるだけの側面を伴っていることを解説してきたとの Golden Apple)が [トロイア崩壊の原因] としての要素を帯び、また、加速器実験とも「どういうわけなのか」接合していると述べられるようになっていること、それについての関係図の再掲をなすとして)



[micro black hole generating event] detection

[ヘラクレス]11番目の冒険に登場する黄金の林檎(トロイア崩壊の元凶でもある)および巨人アトラス [古のアトランティス] [木製の馬によって滅ぼされたトロイア] の全ての要素と多重的に結合するとの命名規則が「事実の問題として」採用されているのがブラックホール生成をなしようと主張されているLHC実験である (: LHC実験とはATLAS検出器で [科学の進歩に資する ([出典(Source) 紹介の部81]) との「安全な」ブラックホール] を生成・検出しようと関係者らが「胸を張っている」との [実験] となり、また、その際のありうべきブラックホール生成イベントをディスプレイ上に現出するのがATLANTISと命名されたEvent Display Toolともなっている [実験] でもある ([出典(Source) 紹介の部35] から [出典(Source) 紹介の部36(3)] を包摂する解説部を参照のこと)。また、同LHC [実験]、CHARYBDIS —トロイア崩壊をもたらしたオデュッセウスが飲み込まれた「渦潮の」怪物—— の名を冠するブラックホール生成シミュレーションツールが供されている ([出典(Source) 紹介の部46]) とのもの「とも」なる)

以上の図解部によって本稿筆者が

[Gとの文字と結びつき、また、シリウスとも結びつくと五芒星形状のフリーメーソンの
ブレイジング・スター紋様]

のことを何故もってして問題視したのか、理解いただければ幸いと考えている。

ここまでにて付記としての二点目のことの説明を終えることとする

これにて述べるべきことを多く述べたつもりであるとの補説3の部を終えたいが、最後に
[確認としての話]
として以下続けてのことを記しておく。

ロバート・テンプル（ここ補説3の部でその論拠および主張内容の重大な欠陥性の所在を
指摘したうえでなお、一部の説得力ある部分を問題視してきたとの著作『シリウス・ミステリー』
の著者にして先述のように『シリウス・ミステリー』著述の後にフリーメーソンに加入したとの話
が(オンライン上にて)本人のものらしき弁含めて取り沙汰されているとの向き)はその著書
The Sirius Mystery の中で次のようなことを述べている。

(直下、The Sirius Mystery 原著の冒頭部、What is the Mystery?と振られての冒頭部よりの掻
い摘まんでの抜粋をなすとして)

Arthur Young had a particular passion for reading about mythologies from all over the world, including those of obscure tribes. One day he showed me a book entitled African Worlds, which contained several chapters, each dealing with a different tribe, with its views of life and its customs and mythology. There was a chapter about the Dogon translated into English from the French of Marcel Griaule and Germaine Dieterlen, the eminent anthropologists.

Arthur pointed out to me a passage he had just read in this chapter, in which these anthropologists were describing the cosmological theories of the Dogon. I shall quote the paragraph which I read then, which first brought to my attention this whole extraordinary question, so that the reader will begin this subject just as I did, with this brief reference: 'The starting-point of creation is the star which revolves round Sirius and is actually named the "Digitaria star"; it is regarded by the Dogon as the smallest and heaviest of all the stars; it contains the germs of all things. Its movement on its own axis and around Sirius upholds all creation in space. We shall see that its orbit determines the calendar.'

/'The starting-point of creation is the star which revolves round Sirius and is actually named the "Digitaria star"; **it is regarded by the Dogon as the smallest and heaviest of all the stars; it contains the germs of all things.** Its movement on its own axis and around Sirius upholds all creation in space. We shall see that its orbit determines the calendar.'

That was all. There was no mention by the anthropologists of the actual existence of such a star which revolves around Sirius. Now Arthur Young and I both knew of the existence of the white dwarf star Sirius B which actually does orbit around Sirius. We knew that it was 'the smallest and heaviest' type of star then known. (Neutron

stars and 'black holes' were not much discussed and pulsars had not yet even been discovered.)

[. . .]

I therefore abandoned all those mysteries and determined to concentrate in depth on cracking the one really hard and concrete puzzle that I had been initially confronted with: how did the Dogon know such extraordinary things and did it mean that the Earth had been visited by extraterrestrials ?

The trouble with trying to undertake a serious investigation about the possibility of extraterrestrial contact with Earth, is that a lot of sensible people will be put off by the very idea.

[. . .]

It didn't take me long to research Sirius B and discover that its orbital period around Sirius was indeed fifty years. I now knew that I was really on to something. And from that moment I have been immersed in trying to get to the bottom of the mystery.

[. . .]

They knew they could trust the French anthropologists, and when Marcel Griaule died in 1956, approximately a quarter of a million tribesmen massed for his funeral in Mali, in tribute to a man whom they revered as a great sage - equivalent to one of their own high priests. Such reverence must indicate an extraordinary man in whom the Dogon could believe implicitly. There is no question but that we are indebted to Marcel Griaule's personal qualities for laying open to us the sacred Dogon traditions.

I have now been able to trace these back to ancient Egypt, and they seem to reveal a contact in the distant past between our planet Earth and an advanced race of intelligent beings from another planetary system several light years away in space. If there is another answer to the Sirius mystery it may be even more surprising rather than less so. It certainly will not be trivial.

(すぐ後に注記する理由から国内にて流通している『シリウス・ミステリー』訳書である『知の起源』よりの引用はなさずに代わって原文補いもしながらもの拙訳をここに呈示しておくとして)

「(『シリウス・ミステリー』著者が師事していた)ペンシルヴァニア大学の教員であるアーサー・ヤングは世界中の神話を読み解くとの情熱を有しており、同じくものことに関してはあまり世に知られていない部族に関する例外ではなかった。ある日、そのアーサー・ヤングがアフリカの異なる種族毎の死生観および慣習を扱ったの著作である『アフリカの世界』という書籍を見せてくれた。そのうち、二章ほどが高名な人類学者であったマルセル・グリオールとジェルメーヌ・ディテルランの両名による伝説から英語に訳されての記述がなされてのドゴン族にまつわっての章となっていた。アーサーは著名な人類学者がドゴンの宇宙観について書いているとのそうした章の中の丁度彼が読んだばかりの部を指さした。そのとき私が読んだ文章を — 丁度、私がそうしてこの主題に取り組みだしたように読者にもそうしていただきたいために — ここに端的に抜粋しよう。

[(ドゴン族における) 創造の原点はシリウスの周囲を円軌道でまわるとの星であり、それは[デジタルリアの星]と呼ばれている。その[デジタルリアの星]はドゴン族によってすべての星の中で最も小さく、かつ、最も重い星とされている。そのデジタルリアの星は全てのものらの種子を宿している。その[デジタルリアの星]のシリウスを経巡る動きこそが宇宙の全ての創造の源泉である。我々 (注: マルセル・グリオールとジェルメーヌ・ディテルランら二人の人類学者らか) はその軌道が暦のありようを決していると見もしている]

以上がここで引用することとしたことの全てである。シリウスの周辺を経巡るそのような星が存在しているか否かとのことについての言及は(その折、読むことになったとの著作『アフリカの世界』にあつては)人類学者ら — マルセル・グリオールとジェルメーヌ・ディテルラン — によって言及されていなかった。

今時分にあってはアーサー・ヤングも私も白色矮星シリウスBのことを知っており、また、そのシリウスBが(往時、読んだ書籍に記載されたドゴン族の伝承に見る[ディジタルアの星]にあつてのように)既知の恒星の中で[最も小さく、また、最も重い]部類の星であるとのことを知っている。(中性子星やブラックホールは今日あるように頻繁に狙上にのぼるようなものではなく、パルサーに至っては発見されていなかったのだが)。

…(中略)…

(そうもしたシリウスB、肉眼目視不可能であるシリウスBにまつわつてのものに見える言及がなされているように見えることについて)地球外文明と地球の接触の可能性についての真剣な調査をなそうとすることに伴う困難は多くの「敏感な」人々がそのようなアイデアによって不快の念を起こさせられもするとのことである。

…(中略)…

シリウスBのシリウスを巡る軌道が50年であるとのことを調べるのに時間はかからなかった。その時点で私は引っかかるところの上を歩いているのだと自己認識することになり、[ミステリー]の底へと到達しようとのまさにももの没入状態になった。

…(中略)…

ドゴンの人々はフランス人人類学者を信ずるに値する存在ととらえており、そマルセル・グリオールが1956年に没した折、彼のマリにての葬儀に参列すべくもおおよそにして25万人ものドゴン族の人々が参列、それはドゴン族の人々が彼らの部族の中の高位の祭司のように賢者として敬っていた男に対する賛辞のためがゆえであった。そうもした崇敬はドゴン族が絶対的に信頼できると見た際立つての男、その男に対してのものとして呈されていたに違ひなからう。といったマルセル・グリオール個人の人間としての質がドゴン族の神聖なる伝承について我々に途を開いてくれたことに疑念の余地はない。私(ロバート・テンブル)はこのようことに通じていること(シリウス伝承を巡る話)の起源を古代エジプトに遡って求めもし、そして、それが[遙か過去の我ら地球と幾光年も離れた他の星系の知的先進種族の間の接触]を明らかにしているように見えるとすることがあるとする。シリウス・ミステリーに他の回答があるのだとしてもそれは同じくらいに驚くべきものであろう。それは確かに「些細なこと」ではない

(訳を付しての引用部はここまでとしておく —※—)

(※ここでは国内にて流通を見ている『シリウス・ミステリー』訳書 —『知の起源 文明はシリウスから来た』(角川書店)— の訳文に代えて(即時手仕事ながらもの)拙訳を付すことにした。何故か。訳が不正確なのか、あるいは、筆者が検討しているシリウス・ミステリー原著の版と訳がそこより起こされた可能性があるシリウス・ミステリーの版に記述異動があるのか(版にての表記からおそらく前者であろうとは考えている)、とにかくも、日本語版と英語原著版に不一致表記が「目立ってある」とのことがまずもっており、その不一致表記がゆえに『シリウス・ミステリー』という著作に対する読み手印象がまったく違うものになろうとの判断がありもして、「オンライン上より確認なせるとの原文表記を挙げたうえで」わざわざ拙訳を付したのである。その点、The Sirius Mystery 原著にては “ They knew they could trust the French anthropologists, and when Marcel Griaule died in 1956, approximately a quarter of a million tribesmen massed for his funeral in Mali, in tribute to a man whom they revered as a great sage - equivalent to one of their own high priests. Such reverence must indicate an extraordinary man in whom the Dogon could believe implicitly. There is no question but that we are indebted to Marcel Griaule's personal qualities for laying open to us the sacred Dogon traditions. **I have now been able to trace these back to ancient Egypt, and they seem to reveal a contact in the distant past between our planet Earth and an advanced race of intelligent beings from another planetary**

system several light years away in space. If there is another answer to the Sirius mystery it may be even more surprising rather than less so. It certainly will not be trivial.” (即時手仕事ながらもの上掲拙訳では[ドゴンの人々はフランス人人類学者を信ずるに値する存在ととらえており、そのマルセル・グリオールが 1956 年に没した折、彼のマリにての葬儀に参列すべくもおおよそにして 25 万人ものドゴン族の人々が参列、それはドゴン族の人々が彼らの部族の中の高位の祭司のように賢者として敬っていた男に対する賛辞のためがゆえであった。そうした崇敬はドゴン族が絶対的に信頼できると見た際立っての男、その男に対してのものとして呈されていたに違ひなからう。といったマルセル・グリオール個人の人間としての質がドゴン族の神聖なる伝承について我々に途を開いてくれたことに疑念の余地はない。私(ロバート・テンプル)はこのように通じていること(シリウス伝承を巡る話)の起源を古代エジプトに遡って求めし、そして、それが「遙か過去の我ら地球と幾光年も離れた他の星系の知的先進種族の間の接触」を明らかにしているように見えるとすることがあるとする。シリウス・ミステリーに「他の」回答があるのだとしてもそれは同じくらいに驚くべきものであろう。それは確かに「些細なこと」ではない」と(いちいちもって語感をあわせるのが面倒ながらも)原文にできるかぎり即しての訳をなしもしている)と表記されているところが、和書『知の起源 文明はシリウスから来た』(角川書店／本稿の先だつての段でもタイトルからしてバイアスがかかっているといった按配の訳書)では(以下、引用するとして)“ 一九五六年にマルセル・グリオールが亡くなったとき、マリで開催された彼の葬儀に二五万人もの部族民が参列した。グリオールは高位の神官と同等の尊敬を集めていた。いま私たちがドゴン族の神聖知識を知ることができるのは、二人の人類学者、グリオールとディテルランの地道な調査のおかげである。その研究があったからこそ、私はドゴン族の知識の源泉を古代エジプトにまでさかのぼり、そこから地球と地球外文明との接触をも推定しえたのだ。地球外文明とは、地球から数光年離れた恒星系の文明、すなわちシリウス星系の文明ということである。本書が試みるシリウス・ミステリーに対する解答は、「地球と地球外文明との接触」の科学的証明にある” (引用部はここまでとする)との(筆者が中身を検討した)原著と全く異なる言い分が表記されている(下線を振った部に着目して頂きたい)。本稿の先だつての段でも述べたように国内で流通している『シリウス・ミステリー』訳書では[代替可能性を著者(ロバート・テンプル)自らが容れての仮説の呈示]が[科学的証明の完遂]に切り替えられてしまっているわけである(当初、原著をきちんと検討していなかった折の本稿筆者もそうした国内訳書の表記に眩惑され、ロバート・テンプルという論客の評価を「見誤って」なしていたとことがある)。につき、[センセーショナルさを向上させての売らんかな主義]のためなのか(当然、出版社は商売なのだからそれを志向する力学はあるとは思える)、あるいは、[真っ当な言辞をプリンジ(縁)の外側の領域(トンデモの領域)に迫りやる相応の言論ベンダーら、彼らに作用している力学]のためなのか(ちなみに日本の書店では現行取り次ぎ形態の委託販売形式の問題とも関わるところとして配本されてきた書籍を満足に陳列せずにそのまま返品しているとのこともなされているとことが出版業界内実としてであると筆者も知っており、のような中で表だつて山と陳列されている書籍があのようなもの「ら」になっているとことがある、ゆえに、言論コントロール、というより、人間の認識世界のありようのコントロールが見事になされさせているとの観点も出てくる)、あるいは、[ただ単純なる訳者の筆の誤り]なのか、それとも『シリウス・ミステリー』原著が原著それ自体で改悪されているとことがあるのか知らぬが、とにかくも、そも原著・訳書双方での内容の不一致が生じているところで国内訳書の記述を引くのは望ましくなからうと判じたとのことが本稿筆者胸中にありもして原著引用部に訳書表記に代えての拙訳を付した。またもってさらに述べておけば、以上のような[国内訳書にての(本稿筆者が読み解いている原著に見る記述内容からの)行き過ぎた申しようへの変換]がなされている一方でシリウス・ミス

テリーに通じることになったドゴン族伝承を分析をなしていた仏人民族学者のうち、マルセル・グリオールの後、グリオールとの共著とのかたちでジェルメーヌ・ディテルランによって刊行されている[シリウス B⇔ドゴン族のディジタルの星]との変換式に通ずる細やかな言及をなしているとの著作、Le Renard Pâle(邦題)『青い狐』という仏語著作の邦訳版にあってはその訳者にあたる国内学究 —先行して英訳されている英語版から訳が起こされたのならば筆者でも難なく再現できるとのプロセスを経ていることになるが、とにかくものオリジナルは仏語著作であるとの著作の訳者にあたる国内学者で西アフリカ史を専攻したとのことである坂井信三(現)南山大学教授— が([学者としての魂(知的情熱)] の欠如よりも [人間としての魂(本然的内面作用)] の欠如、存在としての[魂]の無さや希薄さを思い知られる書きようであろうと個人的には見てしまうようなところながらも(以下、『青い狐』(せりか書房)p.563—p.564より引用なすところとして) “ところでひとことつけ加えておくと、本書にはいわゆる「シリウス・ミステリー」なるものがまとわりついている。…(中略)…しかしこの「ミステリー」は、「文明から隔絶された未開人」というステレオ・タイプを前提にしたときにしかならない。ところが実際は、サンガのドゴン人は隔絶からはほど遠い状態にあった。歴史的な事実として、サンガにほど近いバンジャガラの町には植民地政府によって一九〇七年には小学校が建てられ、サンガには一九三六年以来プロテスタント系のミッションが入っており、一九四〇年には小学校ができてい(PALAU—MARTI 1957)。サンガはドゴン・ランドでも早くから開けたところなのである。一方彼らがシリウスに関する複雑な知識をもつことが明らかになったのは、一九四六年の調査よりもあとのことである。だからそれまでのあいだにサンガの人々が西欧の天文学に接する機会はありえたとはいえないと思われる。…(中略)…そのうえ本書の記述をすなおに読んでみれば、ドゴンの知識においては、シリウスにはフォニオの星、女のもろこしの星、米の星、ひえの星という四つの星があるのである。だからこの知識は、全体としてはむしろ現代の天文学の知見に符号しないというべきであり、フォニオの星に関する部分だけを取り出して「ミステリー」を云々するのは、全く粗雑な見方にすぎないことは明らかである。…(中略)…い **いずれにせよ、「ミステリー」好きのSF愛好家には申し訳ないが、そうした天文学的知識が「異星人」から伝えられたものであろうが、ヨーロッパ人から伝えられたものであろうが、そんなことは大した問題ではない。むしろそうした興味本位の議論は、ドゴンの神話それ自体の価値と、それを記述したグリオールらの仕事の意味を矮小化することにしかならないだろう”** (引用部はここまでとする)との首をかしげざるをえぬ物言いをそちら訳書(仏語タイトル Le Renard Pâle/英文タイトル The Pale Foxの邦訳版)の後書き部(にあっての引用セクション後半部)にてなしているところがある —本稿の先にての **出典(Source) 紹介の部 95(3)**でも引用なしたところである—。その点、(ピックアップするとして) “**いずれにせよ、「ミステリー」好きのSF愛好家には申し訳ないが、そうした天文学的知識が「異星人」から伝えられたものであろうが、ヨーロッパ人から伝えられたものであろうが、そんなことは大した問題ではない。むしろそうした興味本位の議論は、ドゴンの神話それ自体の価値と、それを記述したグリオールらの仕事の意味を矮小化することにしかならないだろう”** (学者言い分よりの再度引用はここまでとする) といった常人ならば首をかしげざるをえなかりやうとの申しようがなされている、他面で『シリウス・ミステリー』訳書の原著との表記違いが見受けられるところで目に付くようになされていることについては、である。そう、—そうした人間がこの「狂った」世界では絶無に近いとも観察されるからこそ問題なわけだが— すくなくとも [情報収集を真剣にやる(外語文献ならば原著にまで目を通す)との人間] にのみそうしたことが分かるようになっていくことについては [よく出来たダブル・スタンダードのシステム] に通じていると「私的には」見もしている。この世界では少しでも [限界領域に突入しそうなこと] を言え

ば、それをして [よりもって馬鹿げている、ないし、よりもって不適切なる方向] に強くも修正なしつつもの [褒め殺し] するような類がそこらじゅうにいる一方で他方でそうやって [褒め殺しされて劣化されたもの] を魂があるのかと疑われるような専門家(本当に魂が無いというのならば[人間のように振る舞う人工知能結線型の内実空虚な下位モジュール]などでもいいのだが)という筋目の向きが的外れに、あるいは、彼らにとっての安全牌であろうとのやりようできき下ろしもし、結果、[我々人類の実体や行く末にまつわっての根本問題] が世人に「よりもって見えない」ようになっている、であるから、(実に悪い意味で) [よく出来ているダブル・スタンダードのシステム] だと私的には見ているわけである — そうもした話をなしても言論が家畜小屋で外的に統制されているか、あるいは、人間一般に内的確認意欲が生じる余地がないのかたちで誰一人として耳を貸さねば[何の意味も無い]、養殖種の[破滅]の刻が近いといくら明確化した論拠を挙げて大音声で呼ばわっても[屠所の羊]しか周囲にはいないとのことに通ずるところとして[何の意味も無い]わけだが、とにかくも、『結果どうあれ[死]や[滅]と秤量されれば、』との観点から『[前非]をあらためて今は全力を尽くして正しいことを訴えるべきである』との観点がゆえに筆者はここで表記のようなことまで事細かに記すことにしている—)

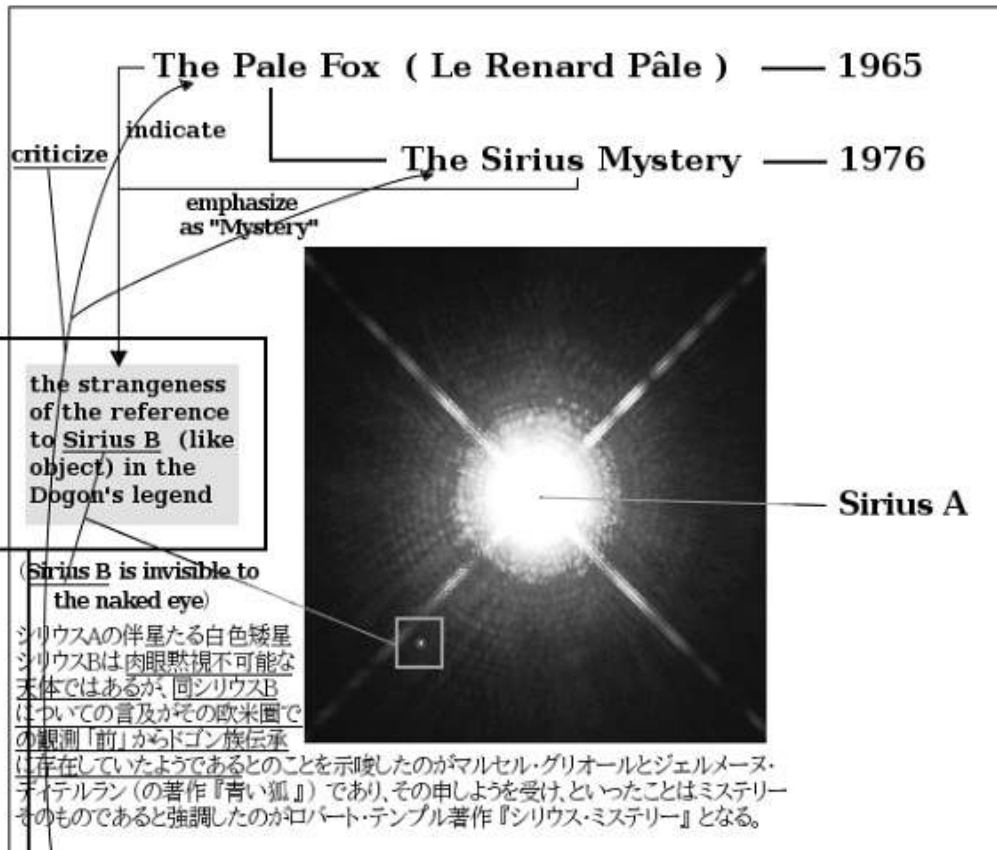
直上注記の部が長くなったが、

[ネイキッド・アイ、「肉眼での」目視が不可能なはずであるシリウス B へのかなり正確な言及が伝承にみえるようである]

このことについてロバート・テンプルはそれこそがミステリーであると主張しているとのことがある中で本稿では『シリウス・ミステリー』にあって主色をなすドゴン族(Dogon)にまつわる主張が信用のおけないもの(unreliable)となっている(とされている)ことを — 出典(Source)紹介の部 95(3) などにて — 仔細に論じてきもした(ロバート・テンプルはドゴン族がシリウスにまつわる行き過ぎた知識を有しているとのことをそもそものテーゼの核としているわけであるも、そのドゴンのシリウスにまつわる先覚性を初めて問題視しだした二名の人類学者の申しようには問題性があるとの指摘がなされており、同点についても取り上げてきたわけだが — [[Walter Van Beek の指摘] と [Dogon の行き過ぎた知識につき主張した Marcel Griaule および Germaine Dieterlen の主張] の間に横たわる矛盾の問題]について取り上げてきた—)。

一方で、だが、ロバート・テンプルに由来する[先行的言及(シリウス B にまつわっての先行的言及)]に対する他の分析 — ローマ期プルタルコス古典らを引き合いに出しての言及 —]には重きをもって取り合うに値する(だが、どういうわけなのかそちらは目立って顧みられていない)との側面がある、としつつも、下に「再度」、図示するような式でロバート・テンプルの問題ある主張の中身についても深く踏み込んでいたわけである。

(以下、再掲なしの図を挙げるとして)



Whether Dongon's reference to Sirius B is genuine or not, it makes no difference .

はっきりと申し述べ、ドゴン族の神話が往古からシリウスBに「際立って」酷似するものに言及していたということが[真実]なのか、あるいは、[捏造・錯簡の賜物]かどうかすらも一切問題にならない。

他所にて、
[異論の出る余地なき文献的事実に基づき述べられるところ]として[シリウスB同等存在]への隠喩がかったものながらもの複合的言及がなされていたとの申しようがなせるようになっていくとこの世界にはある、それがゆえに、ドゴン族の曖昧模糊たる伝承由来などを重要な論点にする必要などないとのことがあるからである。——などと述べれば誤解を招く、そして、人類の進歩・進化の可能性(押し広げてみれば種の望ましき存続の可能性)を否定するが如くの相応の類が同文のものへと[褒め殺し]や[非管掌領域からの介入]にて貶める材料にしかねないとの一抹の危惧がよぎるから述べておくが、筆者は[無条件のエイリアン介入陰謀論者]でもなければ、[憑かれたような奇矯さを呈し、そう、軽侮・失笑を買って当然との頭の具合の程が容易に推し量れるように動くとのUFOマニア]の類でもない (I am not a UFO conspiracy theorist.) —— 。

さて、テンプレの主張の主色をなすところに問題があろうとも、である。彼テンプレがシリウス・ミステリーの執筆契機となった調査をなしていた折にはブラックホールのことや中性子星のことがあまり知られていなかったとしている中であって

[初期のブラックホール（無限大の質量が無限小のポイントに集中するとそうもしたものができあがるとされるブラックホール）の理論の誕生にはシリウスB 一上に引用なしのようにロバート・テンプレやテンプレに先行する二人の仏人学者らに[最も重い星][最も小さい星][宇宙の起源]と言及されている存在に比定されているとの天体一 が極めて重きをもって関わっているとのことがある]

というのが[科学史にまつわる史実]であるとされていることに相違はなく、そのことを本稿では[科学史専門の史家の著作内の記載よりの原文引用]でもって入念に呈示している。

そして、そうもしたこと、シリウスBはブラックホール理論開闢に通じている天体であるとのことについては

[地球とシリウスの位置関係からなるべくしてなっている]

と述べられるだけの記述が同じくもの科学史専門の史家の著作内に見てとれること「も」本稿では指摘している(※)。

[※より込み入ったところを振り返りもしての表記として]

本稿では

Empire of the Stars Friendship, Obsession and Betrayal in the Quest for Black Holes (邦題)『ブラックホールを見つけた男』(原著 2005 年刊, 邦訳版 2009 年刊. 邦訳版版元は草思社 / 著者は Arthur I. Miller というロンドン大の教授として奉職し, [科学史研究]が専門との人物)

の訳書よりの引用をなすことで、表記のこと、すなわち、

[初期のブラックホール理論の開拓にはシリウスBが極めて重きをもって関わっているとのことがある]

[そうしたことは地球とシリウスの位置関係からなるべくしてなっているとのことであるとの申しようがなせる]

とのことを示さんとしもしてきた。その絡みでの引用部をここに繰り返しておく。

(直下、[出典\(Source\)紹介の部 96\(2\)](#)、そこにて引用なししていたところの訳書『ブラックホールを見つけた男』(草思社)[第三章 天体物理学の巨人エディントン]p.94-p.95よりの再引用として)

[シリウスBはシリウスAの伴星である。シリウスAは夜空でいちばん明るい星で、太陽の二六倍もの明るさがある。…(中略)…十九世紀の天文学者たちがシリウスAに伴星があるのではないかと考えるようになったのは、シリウスAが滑らかな軌道をたどらず、ふらつくことに気づいたからである。…(中略)…シリウスAとシリウスBが互いの周りを回るのに要する時間と軌道の不規則さの度合い、さらに地球からこの二つの星までの距離から、天文学者たちはシリウスBの質量を計算することができた。その結果、シリウスBの質量は太陽とほぼ同じで、

ほぼ 2×10^{33} グラムであることがわかった。…(中略)…半径も一万八〇〇〇キロメートルほどと計算されたが、…(中略)…言いかえると、シリウスBは、地球と大して変らない体積のなかに太陽の全質量を詰め込んでいるのである。このために、シリウスBの平均密度は一立方センチメートル当たり、なんと六万一〇〇〇グラムにもなってしまった。白色矮星の密度が極端に天体物理学者たちは、このような星の記述には、これまでとは別の形の完全気体の法則を捜さなければならぬのではないかと考えた]

(再度の引用部はここまでとする)

以上引用部に見るありようからシリウス(シリウスA)が
[「恒星として極めて地球より目立つものとして存在しており」、そのため、遠からずそこに不可視であった伴星(シリウスB)が存在していること、および、その伴星の特性(不可視性と密に関わるところの白色矮星としての特質)が[科学的観念・科学技術の発展]にて知れることになったであろう
とのことが推し量れる。

そのことが
[ブラックホール理論開闢といかに関わっているのか]
についての再言及(再引用)を続いてなしておくこととする。

(直下、**出典(Source)紹介の部96**、そこにて引用なしていたところの訳書『ブラックホールを見つけた男』にあつての[第三章 天体物理学の巨人エディントン]p.94 冒頭部より抜粋をなすとして)

二五年後、エディントンとチャンドラは、これら謎に満ちた白色矮星が最後に迎える運命をめぐって激しく議論を戦わせることになるが、そのときには天体物理学者たちは、白色矮星は燃えつきた星だと考えるようになっていた。さらに一九一四年には、一人の天文学者が、別の白色矮星シリウスBに関して、ちょっと信じがたいような観測結果を発表していた(後述のアダムズによる観測のこと)。このシリウスBが、チャンドラとエディントンの生涯と、天体物理学のその後の歩みを変えることになる。

(掻い摘まんでの引用部はここまでとする)

(直下、**出典(Source)紹介の部96**、そこにて引用なしていたところの訳書『ブラックホールを見つけた男』(草思社)[第五章 英国への旅立ちから運命の日まで]p.172 よりの再引用として)

計算をつづけていたチャンドラは、一九三一年の終わりに、相対論的縮退からは、もう一つ、驚くべき結果が出てくることを知った。それは、放射圧が総圧力の一〇パーセントを越えている星は、完全に縮退してしまうのを防ぐ縮退コアを生み出すことができないというものである。電子が密集してどれほどぎゅう詰めになっても、そのような星の内部は必然的にものすごい高温になるから、星は完全気体の状態を保つだろう。縮退圧がなければ、非常に固い非圧縮性コアが生じることはありえず、したがって、燃えつきた星が重力によって限りなく高密度の無限に小さな点にまで押し潰されるのを妨げるものは何もないことになる。

(再度の引用部はここまでとする)

(直下、訳書『ブラックホールを見つけた男』(草思社)[第九章 星の研究をはじめた物理学者たち]p.309よりの再引用として)

このときまで、チャンドラの理論が提起した重要な疑問、すなわち、チャンドラが見出した上限質量を超す白色矮星はどうなるのかという疑問には、だれ一人答えを出していなかった。

そのような星が収縮していったら、ものすごい高密度の、想像もつかないような小さな点になってしまうというようなことがほんとうに起こるのだろうか?ようやくオープンハイマーがこの問題に取り組むことになった。

…(中略)… 彼は星が最期を迎える四番目の道筋を検証した。それは、星がどこまでも崩壊をつづけ、ついには周囲の空間そのものを「貪欲な胃袋」に呑み込んで一生を終えるというものである。これは天体物理学の最前線への攻撃であり、オープンハイマーはのちにマンハッタン計画を立案したときと同様、周到に準備をして戦いを仕掛けた)

(再度の引用部はここまでとする)

(直下、訳書『ブラックホールを見つけた男』(草思社)[第九章 星の研究をはじめた物理学者たち]p.312よりの再引用として)

先人たちとは異なり、オープンハイマーとスナイダーはシュワルツシルト半径を真剣に受けとめ、これを実際の星に当てはめることができるかどうかを調べはじめた。

二人が発見した驚くべき結果は、一定の条件のもとでなら、大質量の星は確かに内側に向けて爆発(爆縮)を起こすことができ、最後にはシュワルツシルト半径よりも小さくなって周囲の空間を引き寄せ、見えなくなってしまうというものだった。科学者たちはシュワルツシルト半径を指すのに、最初は「シュワルツシルトの特異点」という言葉を使った。光がこの領域の内側から外に出るには無限の時間がかかるからである。けれども、この用語は間違った呼び方であることが明らかになる。

シュワルツシルト半径がそのような範囲を定めるものであるのに対して、爆縮する星こそ、最後はどこまでも小さくなって無限大の密度になる、すなわち特異点になるのである。奇妙で不可解ではあるものの、星が特異点になるというこの解は、かつてチャンドラが述べたことにほかならなかった。チャンドラは、ある一定の質量を超えた星が、まさしくそうした振る舞いをするを見出していたのだ。チャンドラの発見が、ついに立証されたのである。

オープンハイマーとスナイダーの研究は好奇心をそそる謎を生みだしたが、彼らはどう説明すればいいのか困惑してしまった。収縮して、ほぼシュワルツシルト半径の大きさになった星とともに運動している観測者の見方と、星を遠くから眺めている観測者の見方とがあいまいなように思えたのだ。星とともに運動している観測者は、物質が速度を上げながら内部に流れ込んでいくのを見る。シュワルツシルト半径によって定まる地平面に近づけば近づくほど、重力場はますます強さを増して物質を引き寄せるからである。…(中略)…したがって、遠方の観測者は、星がシュワルツシルト半径に達しているとき、収縮して

いる星が「凍りついたように動きを止めた」と報告するだろう。収縮する星の強力な重力に押さえ込まれてしまうため、光がそこから脱出するにはますます長い時間を要するようになり、最後には星が空間と時間のうちに「凍りついて」、もはや動いていないように見えてしまうのである。

(再度の引用部はここまでとする)

以上、再度の引用部だけでもってして何故、

[初期のブラックホール理論の開拓にはシリウス B が極めて重きをもって関わっているとのことがある]

[そうしたことは地球とシリウスの位置関係からなるべくしてなっているとのことであるとの申しようがなせる]

とのことが申し述べられるか、理解なせるところであろう、と思う(※)。

(※尚、チャンドラセカールはシリウス B がそうであると判明して物議を醸した白色矮星の研究から重力崩壊の結果、ブラックホールが生まれるとの観点を煮詰めていった(そしてブラックホールの存在を馬鹿げていると見做していた往時の学究らの大御所との確執の中で冷や飯を食わされることになった)とされるわけであるが、白色矮星(White dwarf star)とそれより密度高い中性子星やブラックホールらとの密度差は歴然としたものともなっている。英文 Wikipedia[White dwarf]項目にて記載されている基本的な情報として言及するが、[白色矮星の1立方メートルあたりの密度]は[$1 \times 10^9 \text{kg}$]となっている、すなわち、[10万kgあたりが1立方メートルあたりの重さになっている]とされるのに対して[中性子星のコア Neutron star core]では[8.4×10^{16} (10の16乗)から 1×10^{18} との重さ]、すなわち、[(兆単位を越えて京の単位に突入して)8.4京kgから100京kgが1立方メートルあたりの重さになっている]とされ、そして、[ブラックホール]に至っては[1立方メートルあたりの密度]が[2×10^{30} (10の30乗)kg]、すなわち、[[2×1 京 $\times 100$ 兆]キログラムが1立方メートルあたりの(ブラックホールの)[ドグマ的理解]に基づいての重さ]とされているが、ここでは[死せる恒星]が内側に向かって潰れていく、そして、重力の化け物となる重力崩壊によってブラックホール化するプロセスが問題視される中でシリウス B が着目されるべく着目されるに至った、それだけの背景があるとのことを問題視しているとのこと、お含みいただきたい次第ではある)

以上、述べたような縁起を持つシリウス B、内側に向けて潰れていく過程でブラックホールには到底なりはしなかったがブラックホール理論開闢に多大な影響を及ぼすに至ったとのシリウス B をしてフリーメーソンであるとされている(先述)との著述家ロバート・テンプルがそれを[知の起源]

と結びつけている(まとめとして見てのそうした主張の具体的内容については本稿にての[出典 (Source) 紹介の部 95]、[出典 (Source) 紹介の部 95 (2)]などを参照されたい)とのことはそれ自体からして

「実にもって不気味である」

と述べざるをえないことである。

そも述べる理由は[シリウス](重力崩壊起こしての伴星シリウス B というよりも星天にあって際立って目立つ存在たる恒星シリウス A)を[知の起源]と見倣す思潮を持っているフリーメーソンが

[シリウスおよびブラックホールと多重的に結びつくものら(つい先程までにて先述してきたところの実に不快な存在らである)を秘儀体系に組み込んでいること]

にも結びつくところとして

[多重的相関関係の環]

が(黒白にあっての)グレー・ゾーンを軽く飛び越えしまっているのかたちで摘示なせてしまうからである([結節存在となる [ペルセポネ](シリウス体现神格としての側面を往古帯びていたイシスとの同等物) に関わる多重的关系性] については再度繰り返しはしない)。

直上、枠で括っての記述をなしたところで、長くもなったが、**補説 3**の部を終えることとする。



露骨かつ確認容易なる[事後発生事件]の「事前」言及事例らが現実に存在していること、そして、それらが本稿ここまで摘示してきたことと多重的に通じ合うものになっているとのことについての詳解

長大なものとなっている本稿ではここに至るまで

[後に発生することになった事件の奇怪な前言ら]

が「現実に」なされているとのこと、また同様に、

[未だその時代の人類にそちら概念がもたらされていなかった科学的知見に対する奇怪な先見性]

が「現実に」認められるとのこと、そして、そうしたことがあるというまさにもその事実が[我々の生き死にに関わる]と申し述べられるところの理由につき、極一部の事例のみを挙げているに過ぎなかったわ

けだが、筆を尽くして詳述してきた。

一例ながらも殊に重視すべき文物らとして本稿の前半部にては[奇怪な前言][奇怪な先覚性]を体現しての作品として、

[[2001年9月11日との日付け表記と結びつく数値規則の使用][「1911」年に提唱の「双子の」パラドックスにまつわる言及]との要素ら、【「2001年9月11日に発生した」「双子の」塔、ツインタワーが崩された事件】に通ずる要素らをわずか一つの思考実験にまつわるところで多重的に帯びているとの[ブラックホール・ワームホールら重力の妙技たる構造体]を主色として扱っている文物]（具体的には原著が1994年に初出を見ている **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** 邦訳版『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著名物理学者キップ・ソーン由来の著作)

[加速器によるブラックホール生成が科学界に想定されていなかったとされる折柄 — 理論動向の劇的変遷によってブラックホール生成が今後、CERN(欧州原子核研究機構)運営のLHCによってなされる可能性が想定されるようになる以前にあつての折柄— である一九七〇年代前半の作品ながらも【往時(七〇年代前半)のCERN加速器ISR]よりも[現行のCERN加速器LHC]の最大出力で200倍近いとの加速器で、なおかつ、CERNに親和性高い架空組織(CEERNなる架空組織)に運営される円形加速器】という際立ったものを登場させており(:70年代のCERN加速器ISRが最大[620億]ボルトを極小領域に集中投下する加速器であったのに対して現行CERN加速器LHCが最大[14兆]電子ボルトを極小領域に集中投下する加速器であるところ、ISRよりも200倍超強力で、だが、LHCに比して僅か1.07倍しか強力でないとの加速器を登場させており)、またもってして、【ブラックホールの生成】や【惑星の呑み込み】といった側面と「隠喩的に」、だが、それと分かるかたちで結びつくようになっている文物]（具体的には1974年初出の **Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38° 54'N,Longitude77° 00'13W** (邦題)『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』との小説作品)

が存在しているとのことの意味合いと危険性を強くも訴求するなどとのことをなしてきたわけである。

ここ補説4と区切つての部にてはそうもした「極めて問題になる」との予言的作品らが他にも存在していること、また、そこに[相応のシンボリズムの共有]が具現化しているとのことをつまびらやかにし、にまつわって、

[聖書にもその存在に対する言及がなされている[占いの霊]のような[悪質なもの]に取り憑かれているようにしか見えぬとの按配にて[奇怪な前言]をなしているとの作品ら]

が存在していることの意味性を — 都度、具体例を容易に後追い出来るとの式で事細かに挙げもしながら — 「遺漏なくも」問うこととする。

さて、直上にて[聖書における占いの霊]というものを持ち出したが、それは、

[新約聖書の中の Acts of the Apostles[使徒行伝]に登場してくる伝道者パウロらの行跡を「救いの途」と礼賛した[女に取り憑る予言の靈感をもたらす存いた霊](聖書それ自体でも妖しき者と見做されている存在)にしてギリシャ神話に由来する]

のことを指す。

その点、新約聖書の国内にて流通している版よりの[占いの霊]にまつわるパートよりの引用を — 一

補説 4の後半の段にてその「聖書に登場する占いの霊」「それ自体」が奇怪な前言と関わっていることを訴求するとの方針の下— なしておくこととする。

(直下、日本聖書協会によって刊行されている聖書、そして、オンライン上にてPDF形式で配布されている(それがゆえに誰でも内容確認できる)との『新約聖書』(1954年改訳版)にあるの使徒行伝第16章16節から18節よりの抜粋をなすとして)

「ある時、わたしたちが、祈り場に行く途中、占いの霊につかれた女奴隷に出会った。彼女は占いをして、その主人たちに多くの利益を得させていた者である。この女が、パウロやわたしたちのあとを追ってきては、「この人たちは、いと高き神の僕(しもべ)たちで、あなたがたに救(すくい)の道を伝えるかただ」と、叫び出すのであった。そして、そんなことを幾日間もつづけていた。パウロは困りはてて、その霊にむかい「イエス・キリストの名によって命じる。その女から出て行け」と言った。すると、その瞬間に霊が女から出て行った」

(オンラインから誰でも入手できるとの聖書に依拠しての引用部はここまでとする —※—)

(※尚、言論(というより重要な事実の摘示・告発行為)の値打ちを誤解・曲解との側面で立ち枯れさせないために都度、誤解を避けるために筆者自身何度も本稿の中で「そうではない」と訴求したところとして筆者はキリスト教教徒を含む[宗教]の徒輩ではない(筆者は生まれてこのかた、死ねば勝手に仏式で葬られようとの葬式仏教といった程度を決して出ないとの無宗教・無神論の人間である)。また、本稿—[出典紹介の部]を頻繁に挿入しながら、典拠紹介にひたすらに意を割いているとの本稿— も一見、宗教的な物言いをなしているように受け取られる誤解を受けやすきものであっても、[(本稿それ自体は)具体的にかくと見受けられる事実の束から自然に導出できるとの関係性の呈示に注力しており、なんら宗教的なことの訴求を意図しているものではない]とのこと、そして、読み手らにその確認をくどいほどに請いたいとのこと、断っておく)

上の引用部に見るように新約聖書(の使徒行伝)に登場する[占いの霊]とは

[[敵役]としてキリスト教に権威を与えるための道具立てとして用いられてきたもの]

であるわけであるが —上にての引用部にては「(何故なのか悪霊の類とされているのに)いと高き神の僕(しもべ)たちで、あなたがたに救(すくい)の道を伝える方だ」とパウロら伝道者(使徒行伝の主役)を礼賛することになった[女に憑いた霊]であったが、パウロらの言葉で退散したとの描写がなされている—、その[占いの霊]、元を辿れば、

[神託をもたらす蛇巫(へびふ、蛇にまつわる崇拜体系と結びつく巫女)の背後に控えていたデルポイ —古代ギリシャにての神託の地としてよく知られている場— のピュートーン(英語読み Python パイソン)という大蛇の怪物]

に由来すると広くも述べられてきたところの存在である。

その「パイソン(ピュートーン)」という存在自体が本稿本段(補説 4と分けしての部)にて問題視することとした、

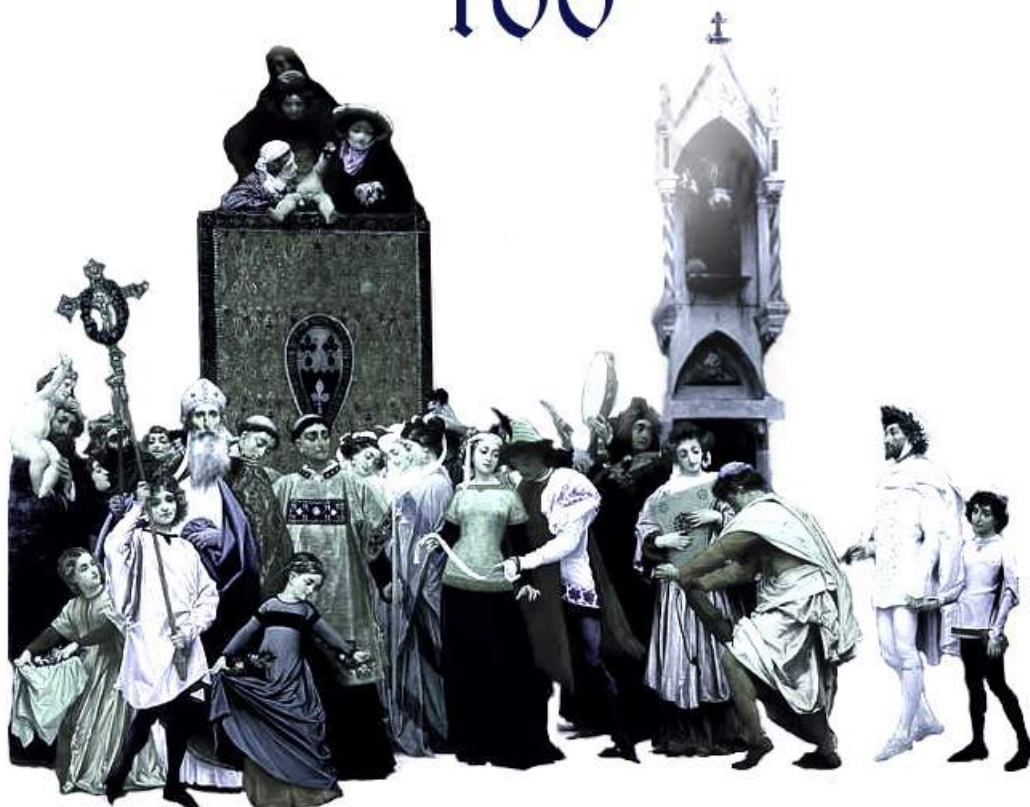
[特定の奇怪なる「科学的」知識にまつわる予見の問題]

に「露骨」かつ「嗜虐的に」関わるようになっていくとのことがある —(同じくものことについては委細を

つまびらやかにするとのかたちで補説4の後半部にて誰でも後追い確認容易な式で解説することとする) — ために [新約聖書(使徒行伝)における予言の霊] とギリシャのパイソンという存在の関係についての典拠を下に出典(Source)紹介の部100とのかたちで挙げておく。

出典(Source)紹介の部100

SOURCE 100



Cimabue's Celebrated Madonna (1853-5)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典(Source)紹介の部100にあつては

〔聖書に見る占いの霊がピュートーンというギリシャ神話上の大蛇に由来する〕

とのことの典拠を挙げることとする。

まずもつては —「それだけを引用するうえでは色々と問題がある媒体ではある」と本稿にて何度もなしてきた断りを繰り返しもしつつ— 和文ウィキペディア[ピュートーン]項目よりの掻い摘まんでの引用をなすことから始める。

(直下、和文ウィキペディア表記項目の現行にての記載内容より掻い摘まんでの引用をなすとして)

「ピュートーン(古希: Πύθων, Pýthōn, ラテン語: Python)とは、ギリシア神話に

登場する巨大な蛇の怪物である。長母音を省略してピュトンとも表記される。『ホメーロス風讃歌』の「アポローン讃歌」によると雌蛇だとされる。絵画などではドラゴンのような姿で表される事も。ピュートーンはガイアの子で、その神託所デルポイを守る番人でもあった。デウカリオーンの大洪水後に残った泥から生まれたと言われる。デルポイの神託所をすっぽり巻ける巨体を持ち、かつては人間たちに神託をもたらしていた。のちにアポローンによって倒され、以後デルポイはアポローンの神託所となった。…(中略)…アポローンはピュートーンの亡骸を手厚く扱い、デルポイのアポローン神殿の聖石オムパロスの下の地面の裂け目に葬った。…(中略)…オムパロスとは「へそ」の意で、同地が世界の中心たることを示すという。…(中略)…また、ピュートーンのために葬礼競技大会ピュウティア大祭の開催を定め、新たに開いた自分の神託所の巫女にもピュウティア(Πυθία)を名乗らせた。デルポイで巫女たちがトランス状態に陥るのは、地底からピュートーンが吐き出す霊気によるものだとされる。…(中略)…なお、ニシキヘビを意味するパイソン(python)は、ピュートーンの名に由来する。…(中略)…『新約聖書』の「使徒行伝」16章16-18節にもピュートーンが登場している(『新共同訳』では「占いの霊」)。このときピュートーンは女奴隷に取り憑いて占いをさせていて、パウロ一行に出会うと何度も「この人たちは救いの道を宣べ伝えている」と繰り返した。パウロがうんざりして「イエス・キリストの名によって、この女から出ていけ」と言うと、ピュートーンは即座に出ていったのだった

(引用部はここまでとする)

以上、引用なしたところの和文ウィキペディアの記載、

[パウロら使徒(イエスの直弟子ら)の行状を褒め称えた女奴隷の占い師の背後に控えていたのはピュートーン(パイソン)の霊であるとされること]

については基間にて語られてきたところの「歴年の」伝承理解から逸脱がないことがすぐに裏を取れるものとなっており、については、たとえば、(敢えても19世紀著作にての記載を挙げるとして) Project Gutenberg のサイトにて公開されている 一であるから、タイトル名とプロジェクト・グーテンベルクの入力で全文に容易にアクセスできる— 著作にての **CRITICAL EXAMINATION OF THE LIFE OF ST. PAUL** (一八二三年刊行版、『聖人パウロの人生についての批判的検証』と題されての書で仏人哲学者としてかつて著名であったとの部類に入るとされる Nicolas Antoine Boulange ニコラ・アントワーヌ・ブーランジュが記していたとの書を19世紀に焼き直したとのもの)の記述も引いておく。

(直下、Project Gutenberg のサイトにて公開されている著作、CRITICAL EXAMINATION OF THE LIFE OF ST. PAUL『聖人パウロの人生についての批判的検証』、その CHAPTER XVIII. Examination of St. Paul's Miracles の部より引用をなすとして)

The miracle wrought by our saint at Philippi in Macedonia, did not meet with more success, **he there cured a girl, who had a spirit of Python**, and being by that means possessed of the power of divination, gained great profit to her masters. These, far from acknowledging and admiring the power of a man who reduced to silence Apollo, one of the most powerful gods of paganism, brought Paul and Silas before the magistrates, and excited the people against them. **It is right to remark in this place, that Apollo (i. e. the Devil) who resided in this prophetess, laboured to destroy his own empire.** In fact having perceived Paul and his comrade, the girl followed them, crying, these men are the servants of the Most High God, which shew unto us the way of salvation.

(多少細かくも補っての拙訳を付すとして)

「われらが仰ぎ見る聖パウロ、彼によってマケドニアの地で入念に実行されたとの奇跡の類については

[[パイソンの霊](訳注:表記の引用部に見る a spirit of Python)を宿し、その憑依の力にてその(奉公なしての)主人に一廉ならぬ富をもたらしていた少女を癒やすことになった]

とのこと以上の成功は(かの地では)見なかった。

これらの者達(少女が仕えていたとのその主人ら)は異教にて最も力を有していたアポロ神の[沈黙への勢威後退]をもたらしたとの聖パウロの力を認めることも、また、敬意を払うこともまったくなせず (訳注:使徒行伝第16章21節には占いの霊に憑かれた女の主人がローマ人であるとの描写がなされているため、ピュトンによる神託と結びつくアポロ神(ギリシャの太陽神アポロン)の名前が持ち出されている、聖書には神としてのアポロンそれ自体の名が見受けられない中、引用元文書では持ち出されているのだと解される)、パウロおよびその連れのシラスを土地の行政長官の面前に引っ立て、彼ら使徒らに対する人々の感情は高ぶる一方であった。

この場にあつてアポロ、「換言すれば」、[悪魔] (訳注:キリスト教的視点で見れば、異教の太陽神アポロを[悪魔の体現物]と見る風潮もある)たる女子言者の内に潜んでいたとの同存在が(信心にて成り立っての)おのが帝国を破壊しようと努めていたと指摘することは正しい。

実際、パウロおよび彼の同志を認容することとをなし、少女は彼ら(パウロら)の後を追ひ、「これらの男達はいと高き至高神の使いの者なり、救済の道へを見せるが者達なり」と叫んでいるからである」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく —ここで問題視されるべきは表記の引用部で[悪魔]と描写されもする[アポロ神]の助力を受けているとされる少女、その少女に占いをなさしめている取り憑いているとの霊が[パイソンの霊]であると近代の欧州識者に「はきと」明示されていることである—)

(出典(Source)紹介の部100はここまでとする)

さて、ここ**補説4**の部にては直近引用なしたところに叙述されている、

[[聖書における占いの霊]に取り憑かれたが如く者ら、すなわち、ギリシャのアポロンの神託所にあつての[預言と関わるパイソン(ピュートーン)]に取り憑かれたが如く者らによるまさしくもの[予言]であるとの形態での奇怪なる前言事象]

が具現化していることを問題視していくことにする。

その点、取り立てて強くも訴求したきところとして

[かの911の事件の発生を前言している作品「ら」]

が存在しているとのことを以降取り上げることとする、より具体的には、

[[事件発生場所] (ニューヨーク、さらに述べて、ワールド・トレード・センター) に正確に言及するかたちで、また、[事件発生態様] (連続ビル倒壊) に言及するかたちで、フリー

メーソン「的」紐帯 — そも述べる理由・論拠は細かくも出典挙げながら後述するが、見る人間が見ればフリーメーソンの比喩的象徴物となっているとすぐに分かる団体— が秘密厳守の中でビル爆破を起こすとの筋立てを有している作品「ら」]

が存在していることを — 占いの霊の問題に通底することとして— 以降、取り上げることとする。

※ [911の事前言及作品「ら」] について補足となることを書いておく。

その点、現在、和文ウィキペディア[アメリカ同時多発テロ事件]項目にては — 記載内容が有為転変する媒体であるため該当記述の消除を見る可能性があるが(ただし、であっても、筆者が取得しているような過去のウィキペディアのギガバイト単位のダンブデータは不変なる記載として残置し続ける)— 次のような記載がなされている。

(直下、和文ウィキペディア[アメリカ同時多発テロ事件]項目にての[都市伝説]と付された項にての「現行の」一部記述よりの原文引用をなすとして)

「複数の小説や映画にこのテロやアフガン・イラク戦争を予言する内容が含まれている」とする説もある。特に、「ハイジャックした旅客機による自爆テロ」という題材を扱ったトム・克蘭シーの「日米開戦」、「合衆国崩壊」はテロ直後からその類似性がマスコミなどで取り上げられていた。

(引用部はここまでとする)

以上の現行、和文ウィキペディアに見る記載は「不適切極まりない」述べられる)。

何故か。

に関しては表記引用元記載が

[事実] (重篤としか述べようがない911の事件が発生することを前記している作品「ら」が現に — これより後追い容易なる式で細やかに呈示なししていくような式で— 際立って実在しているとの [事実])

に対して [~との説がある] との申しようをなし、なおかつ、そもして [~との説がある] と表している [予見的作品] をたかだかも作家トム・克蘭シーの特定作品、

[前言なししているようにとれるとの側面が弱い作品]

で代表させて、かつ、そもしたことを [都市伝説] との括りの節にて片付けてしまっているからである。

『そういう[愚劣なこと]をやる(あるいはもってしてやらされる)類とは相容れぬな』と本稿筆者などは当然に思っているのではあるが、さらに和文ウィキペディアの当該項目([アメリカ同時多発テロ事件]項目)にてはそうした[都市伝説扱いされての小説や映画にての前言問題]を[全くの出鱈目の陰謀論]と混同させて論じているとのこと「も」なされている(：[情報操作]では[真偽織り交ぜて[偽]まで[真]に見せようとのやりよう]がなされるようだが、表記のやりようは[真偽織り交ぜて[真]の部分まで[偽]を浸食させようとする手法]にも通底するところがある)。

具体的には、である。[ウィンドウズの特定期間と世界貿易センターの住所を対応させるとメッセージが浮かび上がる] とのかなり前からその詐欺性が知れ渡っている悪質なデマ(世界貿易センターの住所でもないものを引き合いにしながらも世界貿易センターの住所を対応させるとしての悪質なデマ)を並べもしてのやりよう、[出鱈目]

と[映画や小説による前言問題]が同レベルのものであるとの心証を与えたいのかといった実にマナーが悪いやりよう（あるいは人類を率先して売っているのか、あるいは、人間としての内面が既に無いか毀損されているとのこの世界に五万という類に相応しき利敵行為）が日本語ウィキペディアでの当該項目ではなされている — [相応の人間ら]の[愚劣さ][悪辣さ]の問題をつくづく確認させられることとしてそういうデマをいままもってなおネット上で広めている類らが日本では特に目立っており（魂の抜け殻のようなもので溢れかえり、「[相応のカルト宗教の関係者]が[言論界]を壟断し我々を救う真実の流布がまったくもって難しくなっている」と見受けられる国にあっては相応しかろうとも筆者などは見ていることではある）、どういう意図でなのか、そういう類由来の [ジャンク] を担ぐことをやらかすとの人間らもおり、検索エンジンでも [相応の類ら]の努力の賜物であろう、そういう視界を曇らせる類由来の [ジャンク] ばかりが[目につきそうなキーワード] 入力では目に付くようになっていたとのことが「ある」（それをもって種族の実状・行く末を計ることは少なからずも出来るとも述べられるわけだが、とにかくも、そうもなっている）— 。

さて、諸所にて問題視されている作品「ら」の問題となる箇所についての[具体的解説]に入るその前にここで典拠を挙げつつ次のような

[基本的事実関係]

について「まずもって」確認しておくこととする。

第一。

極めて基本的な事件経過に関わるところとして、先に発生した911の事件は(飛行機が突撃したツインタワーのみならず)ワールド・トレード・センターに存在していたビル七棟がすべて倒壊したとの事件となる — 無論、公式発表では[飛行機突撃に起因する尋常一様ならざる衝撃]を受けてツインタワーが崩落、それに巻き添えを食らうかたちで他のビルら「も」倒壊を見たとの説明が主としてなされている— 。

第二。

その中身が適正なものか否かはとりあえず置き、かつてそこにあったワールド・トレード・センターの第七ビルに関してはそれが発破倒壊 — コントロール・デモリッション (ビルを炸薬を用いて一挙に破壊して解体処理する手法) — によって倒壊したのだとの申しようが[建築家団体]より呈されているとのことがある — いいだろうか、主張の中身自体が[真実]との意味合いでの[事実]なのかは置いておき、建築士ら専門家筋の団体がワールド・センター・第七ビルの崩壊は発破倒壊としての様相を露骨に呈しているとの意見を表明しているとのことは「容易に」確認できる主張動向にまつわる[事実]としてそこに存在しているということである— 。

第三。

それが果たして本当に[具体的情報に基づいてのことなのか]は置いておき、そして、それが果たして本当に[911の背後関係を真実一路で突いたものなのか][信用に値することなのか]は置いておき、911の事件が発生する「直前」、2001年7月にて、「アメリカで[アルカイダ]と[オサマ・ビン・ラディン]の犯行を名目にしての政府関係者筋による[自作自演のテロ]が起こされることを警告していた」との有名な論客が存在している — ※事件の後で予言者であったとする[自称予言

者]ではなく、[ある程度、知名度を有していた人物](先立つ2000年にグローバル・エリートの奇怪なる真夏の集いの隠し撮り映像をもってして Dark Secrets Inside Bohemian Grove と題してのフィルムとして流通させて知名度を高めていたラジオ番組主催者のアレックス・ジョーンズという人物)が放送記録に基づいて確認できるところとしてそうしたことを述べていたとの[事実]がある—。

(以上、第一から第三の基本的事項について[容易に確認なせるとの典拠となるところ]を下に紹介しておくこととする)

出典(Source)紹介の部 101

SECRET 101



Cimabue's Celebrated Madonna (1853-5)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典(Source)紹介の部 101 にあつては

第一。

極めて基本的な事件経過に関わるどころとして、先に発生した911の事件は(飛行

機が突撃したツインタワーのみならず)ワールド・トレード・センターに存在していたビル七棟がすべて倒壊したとの事件となる。

第二。

その中身が適正なものか否かはとりあえず置き、かつてそこにあったワールド・トレード・センターの第七ビルに関してはそれが発破倒壊 —コントロール・デモリッション (ビルを炸薬を用いて一挙に破壊して解体処理する手法)— によって倒壊したのだとの申しようが[建築家団体]より呈されているとことがある。

第三。

それが果たして本当に[具体的情報に基づいてのことなのか]は置いておき、そして、それが果たして本当に[911の背後関係を真実一路で突いたものなのか][信用に値することなのか]は置いておき、911の事件が発生する「直前」、2001年7月にて、「アメリカで[アルカイダ]と[オサマ・ビン・ラディン]の犯行を名目にしての政府関係者筋による[自作自演のテロ]が起こされることを警告していた」との有名な論客が存在している。

とのことらの典拠を挙げることとする。

まずもって、

第一。(極めて基本的な事件経過に関わるところとして)、先に発生した911の事件は(飛行機が突撃したツインタワーのみならず)ワールド・トレード・センターに存在していたビル七棟がすべて倒壊したとの事件となる

とのことにまつわる典拠を紹介することとする。

(直下、「あまりにも基本的なことであるためそれで十分であろう」と判断、英文 Wikipedia [World Trade Center]項目冒頭部にての現行記述の抜粋をなすとして)

The World Trade Center is a complex of buildings under construction in Lower Manhattan, New York City, United States, replacing an earlier complex of seven buildings with the same name on the same site. The original World Trade Center featured landmark twin towers, which opened on April 4, 1973, and were destroyed in the September 11 attacks of 2001, along with 7 World Trade Center.

[. . .]

At the time of their completion the "Twin Towers", the original 1 World Trade Center (the North Tower), at 1,368 feet (417 m), and 2 World Trade Center (the South Tower), were the tallest buildings in the world. **The other buildings in the complex included the Marriott World Trade Center (3 WTC), 4 WTC, 5 WTC, 6 WTC, and 7 WTC. All of these buildings were built between 1975 and 1985, with a construction cost of \$400 million (\$2,300,000,000 in 2014 dollars).** The complex was located in New York City's Financial District and contained 13,400,000 square feet (1,240,000 m²) of office space.

[. . .]

On the morning of September 11, 2001, Al-Qaeda-affiliated hijackers flew two Boeing 767 jets into the complex, one into each tower, in a coordinated act of terrorism. **After burning for 56 minutes, the South Tower (2) collapsed,**

followed a half-hour later by the North Tower (1). The attacks on the World Trade Center killed 2,753 people. Falling debris from the towers, combined with fires that the debris initiated in several surrounding buildings, led to the partial or complete collapse of all the other buildings in the complex and caused catastrophic damage to ten other large structures in the surrounding area (including the World Financial Center). The process of cleaning up and recovery at the World Trade Center site took eight months.)

(訳として)

「ワールド・トレード・センターは先に存在していた同じくもの地、同じくもの名前を有しての七棟のビルに置き換わるとのかたちとなっているアメリカ合衆国ニューヨーク市ロウワー・マンハッタンにての複合ビル施設となる(訳注:表記ウィキペディア項目にての記載は911の事件で[計七棟のビルらが崩壊を見た]後、ワールド・トレード・センターが再生を見て新ワールド・トレード・センターが建設されることになったとのことを冒頭部にて記載しているものであるため、表記のような書かれよう、[ワールド・トレード・センターは先に存在していた同じくもの地、同じくもの名前を有しての七棟のビルに置き換わるとのかたちとなっている...]との書かれようがなされてもいる)。

「元々そこにあった」ワールド・トレード・センターは1973年4月4日にオープンを見たツインタワーをランドマークとし、そして、7ワールド・トレード・センター・ビルを脇にするかたちで2001年9月11日の攻撃にて破壊されたとの場となっている。

…(中略)…

ツインタワー完成の折、元々そこにあった(新ワールド・トレード・センターの代替するビルが建築される前に元々そこにあった)高さ1368フィート(417メートル)の第一ワールド・トレード・センター・ビル(ノースタワー)および第二ワールド・トレード・センター・ビル(サウスタワー)は世界で持っても高いビルであった。**同複合施設(ワールド・トレード・センター)の他のビルにはマリオット・ワールド・トレード・センター(第三ワールド・トレード・センター・ビル.3WTC)、第四ワールド・トレード・センター・ビル(4WTC)、第五ワールド・トレード・センター・ビル(5WTC)、第六ワールド・トレード・センター・ビル(6WTC)、そして、第七ワールド・トレード・センター・ビル(7WTC)が含まれていた。それらすべての(ツインタワー外の)ビルらは4億ドル(2014年のドル換算で23億ドル)の建設コストを費やして1975年から1985年の間に建設されたものである。同複合商業施設はニューヨークの金融街区画に位置しており、オフィス用用地として13400000平方フィート(1240000平方メートル)の面積を保持していた。**

…(中略)…

2001年9月11日の朝、複合テロ行為の一環としてアルカイダの侵入ハイジャック犯が二機のボーイング767機を同商業施設に、(特攻させるべくも)各々の塔に向けて飛ばすとのことをなした。**56分間の火災の後、サウスタワー(2WTC)が崩落し、その後を追うとの形にて後にノースタワー(1WTC)が30分後に崩落した。ワールド・トレード・センターへの攻撃行為によって2753名が殺されることになった。破砕片が誘因となつての周囲ビルらにての火災、それと複合作用きたしてのツインタワーより落下してきた破砕片が同複合商業施設内の全ての他のビルの部分的ないし完全なる崩落をもたらし、周辺地域にての10の大型施設(含む:ワールド・フィナンシャル・センター)に破滅的ダメージをもたらした。ワールド・トレード・センターにての整地および復興作業はおおよそ8ヶ月を要した**」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

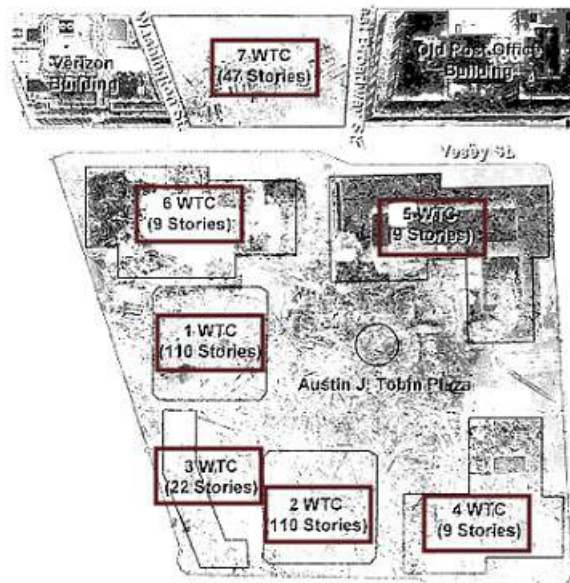
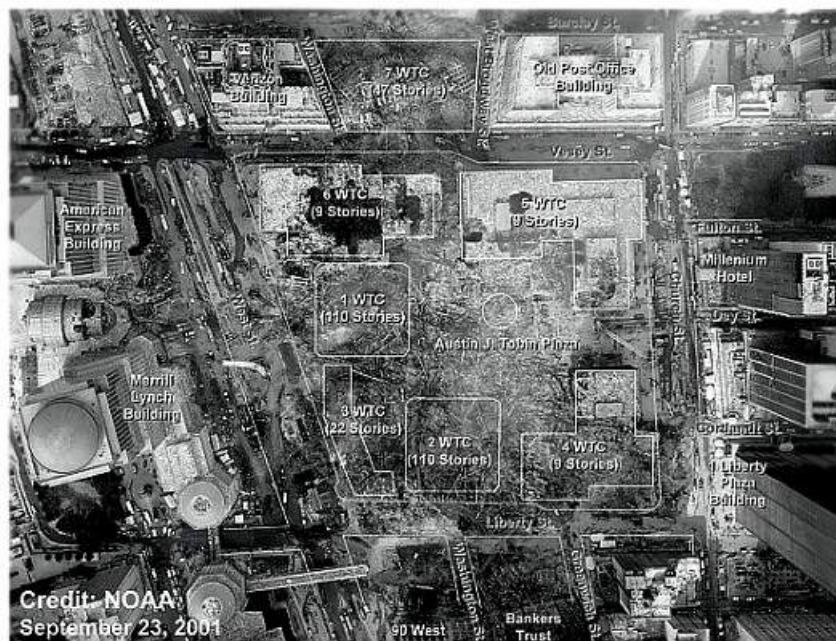
以上、敢えても

「世人が知るところの教科書的な記載がなされている」

との英文 Wikipedia[World Trade Center]項目(程度のもの)冒頭部よりの掻い摘まんでの抜粋をなした。それによって、

[かの 911 の事件によりワールド・トレード・センターで7棟のビルの崩落(およびその崩落に巻き添え食らうかたちでの周辺地にての多大なダメージ)がもたらされたこと]

が基本的な事件経過として認知されていることは理解いただけることか、と思う。



現行、英文 Wikipedia[September 11 attacks]項目にあって掲載されているワールド・トレード・センターの事件後直後の航空写真を多少加工しての図(正確に述べれば、NOAA こと National Oceanic and Atmospheric Administration アメリカ海洋大気庁による事件後の状況を写し取った航空写真としてのパブリック・ドメイン画像、そちらに

見やすさ向上のための画像処理を加えた[倒壊ビル群]位置関係呈示のための図)。
上に見る「110 階建て」ツインタワー二棟を中心にしてのその周辺のビルら(ツインタワーを囲むように建っていた「9 階建て」三棟をはじめ、「27 階建て」一棟、「47 階建て」一棟ら)計七棟が完全倒壊を見ているのがかの 911 の事件となる。

次いで

第二。

その中身が適正なものか否かはとりあえず置き、かつてそこにあったワールド・トレード・センターの第七ビルに関してはそれが発破倒壊 —コントロール・デモリッション (ビルを炸薬を用いて一挙に破壊して解体処理する手法)— によって倒壊したのだとの申しようが[建築家団体]より呈されているとのことがある —いいだろうか、主張の中身自体が[真実]との意味合いでの[事実]なのかは置いておき、建築士ら専門家筋の団体がワールド・センター・第七ビルの崩壊は発破倒壊としての様相を露骨に呈しているとの意見を表明しているとのことは「容易に」確認できる主張動向にまつわる[事実]としてそこに存在しているということである— 。

とのことを示す最低限の出典紹介をなしておく。

(直下、英文 Wikipedia[Architects & Engineers for 9/11 Truth]項目冒頭部にあつての記載内容より引用するところとして)

Architects & Engineers for 9/11 Truth (AE911Truth) is an American non-profit organization of architects, engineers, and a demolition expert who dispute the results of official investigations into the September 11 attacks, including the 9/11 Commission Report. It supports the conspiracy theory that the World Trade Center was destroyed by explosive demolition.

Founded in 2006, the group demands that the United States Congress pursue a truly independent investigation into the September 11 attacks as they believe government agency investigations into the collapse of the World Trade Center have not addressed what it calls "massive evidence for explosive demolition." **Despite their petition to Congress bearing the signature of over 2000 architectural and engineering professionals, the scientific and engineering community has generally rejected the position taken by the group, and several NIST-independent analyses published in peer-reviewed scientific journals provide evidence arguing against the "blast hypothesis";**

(訳として)

「[アーキテツク・アンド・エンジニアズ・フォー・ナイン・ワン・ワン・トルウース] ([911 の真相のための建築家と技術者])はアメリカに基盤を持つ、ナイン・ワン・ワン・コミッション・レポートを含む 911 の事件に対する公式調査の結果に反論を呈しているとの建築士および技術者そして爆破専門家による非営利団体である。同団体はワールド・トレード・センターが爆破倒壊にて崩されたとの陰謀論(的言説)を支持しているとの団体である。2006 年にて設立されてより、同団体は[同団体が爆破倒壊の大量の証拠群と呼ぶところのもの]に対して政府のワールト・トレード・センター崩壊調査は(有効に)応えているとのものではないとの所信にて [911 の事件に対する真に独立性を保った調査]を要

求している。「計にして2000名超の建築および向学の専門家らの署名を携えての」議会への請願にも関わらず、科学技術界は総じて同団体によって取られているスタンスを否定しており、幾人かのNIST(「アメリカ「国立」標準技術研究所」)の「独立」調査が査読付きの科学誌にて爆発仮説に反論を呈するとの証拠を提供している

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

以上のように2000名を越えるその方面の専門家たる建築家および技術者の署名を引っさげて、立法府に対して、政府再調査を要求するとの専門家団体が存在していること、それは(その主張の中身が真実かどうかは別として、そういう主張動向が存在しているとの伝で)[事実]なのである(尚、専門家ら署名数は上のウィキペディア記述よりも増大しているようでもある)。

(補足として:

[特定言論動向の存在]という事実それそのものから離れての主張内容の適否の話に多少通ずるところとなるが、上記団体、Architects & Engineers for 9/11 Truth にまつわる Youtube 流通動画(カール・セーガンの元妻であったリン・マーギュリスなどの有名科学者も専門家に混じってほんの少しお目見えしているところの流通動画)を見ると、
「これは露骨な発破倒壊である(それ専門のプロによる雇われ手仕事である)」と専門家らがワールド・トレード・センター第七ビルの倒壊をして名指しているさまがそこに見てとれるようになっている(第七ワールド・トレード・センタービルが「瞬時に頭からパンケーキになる」ように潰れていくその様が、そして、それに対して、比較対象映像を呈示しながら「これは明らかに発破倒壊によるものであろう」と述べる建築の専門家らの姿が見てとれるようになっている —※そこにいう 由来の映像訴求媒体がどういふものなのか確認されてみるといい (Youtube サイトを開いて Architects & Engineers for 9/11 Truth と入力するだけで関連する動画は視聴できるはずだから、[信じやすいが検証もなさぬとの向きら]のみならず[懐疑主義的で、かつ、裏取りもするとの向きら]にすら何故もってしてワールド・トレード・センター発破倒壊説が重きをもって見られているのか、確認は(その気があれば、だが)容易になせるであろう)。尚、『セルフ・ビリーフ・システム(属人的観点)の類か』と受け取られかねないから、そうした見方の押しつけをなすつもりはいまもってはもう「ない」のだが、[第七ワールド・トレード・センター](本稿の後の段に後述するようにフリーメーソンにとっての神聖存在ソロモンと結びつくソロモン・ブラザーズ系の会社がテナントの大部分を専有し、残りは米国諜報機関などが入居していたビル/フリーメーソンの基本位階を越えての上位位階(ロイヤル・アーチ位階)にはソロモン神殿の瓦礫・遺構の下から新世界への道筋が開かれるとの上位位階内部者にはよく知られた流布ドグマがある)が[頭からパンケーキのように突如崩れていくさまが具現化している]とのことがある一方でその隣のビル、携帯大手のベライゾンのビルなどは外壁にダメージを負っているだけといったことからしてビルの耐久性度合いというものを示すものではないのかと(建築分野における)まったくもの浅学浅見の者ながらもこの身は見てしまう(なお、公式発表では「ベライゾンビルなどは古さゆえにしつらえがきっちりとしており、石工建築技法(メーソンリー)の問題として外壁に傷は負っても内部構造は熱によるダメージを避けられた、それゆえに、ビルの倒壊に至ることはなんらなかった」などとされてもいる) —)。

その点、Architects & Engineers for 9/11 Truth の最近の動向としては

「NIST (アメリカ「国立」標準技術研究所) の調査報告は独立性も担保されておらず、また、ナノサーマイトなどを利用しての発破倒壊の証跡に対する反証の論拠も十二分ではない」

「情報公開法 (FIA; フリーダム・インフォメーション・アクト) を活用して NIST (アメリカ「国立」標準技術研究所) の【最終報告に向けての論拠提出法】に対しての煮詰めての検討をなしたが、彼ら政府筋の論理は多く信憑性に足りるものではない」

との主張をなすとのものとなっている —※NIST (アメリカ国立標準技術研究所) の報告書内容であるが、そちら内容は (容易に確認できるところの現行にての英文 Wikipedia [World Trade Center site] 項目よりの記載内容を敢えても引用し) “ **According to NIST, when WTC 1 (the North Tower) collapsed, falling debris struck 7 World Trade Center and ignited fires on multiple floors. The uncontrolled fires ultimately led to the progressive collapse of the structure.** ” 「NIST によれば、ノースタワーが崩落した折、落下碎片が 7WTC を直撃、そして、複数階に火災を誘発することとなった。制御不能となった火災が行き着くところとして構造物の進行倒壊をもたらした」とのことを (適正にそれをなしているかどうかは別として) 主張しているとのものとなっている。に対して Architects & Engineers for 9/11 Truth の関係者は (彼らのサイト、ae911truth.org とドメイン振られてのサイトにても目立つように主張しているところとして) “ **NIST's final report states that random office fires alone brought down Building 7. However, the collapse of WTC 7 compared, side by side, with an acknowledged professional controlled demolition reveals an entirely different story.** ” 「NIST の最終報告は無作為に広まったオフィス火災が単体にて 7WTC を倒壊させた (崩れそうにもない外観呈して存在していたものを突如としてペシャンコに瓦解なさしめた) とのものとなっている。しかし、比較検証なしでの第七ビル倒壊については (資格を有し) 認証された発破倒壊の専門家筋がまったく別のストーリーを呈示している」との反論を呈している) —)

さらにもってして、

第三。

それが果たして本当に [具体的情報に基づいてのことなのか] は置いておき、そして、それが果たして本当に [911 の背後関係を真実一路で突いたものなのか] [信用に値することなのか] は置いておき、911 の事件が発生する「直前」、2001 年 7 月にて、「アメリカで [アルカイダ] と [オサマ・ビン・ラディン] の犯行を名目にしての政府関係者筋による [自作自演のテロ] が起こされることを警告していた」
との有名な論客が存在している

とのことの出典を挙げる。

ここではフリーメーソン「など」との絡みもあってであろう、その眉をひそめさせるようなやり方を多くの人間に取り上げられてきたとの [システム (述べておくが幅広くもの我々人類のためのシステムを指してシステムと述べているのではない) の寵児] としてのマイクロソフト社、そう、

[「公衆の公共の福祉を慮ってとはおよそ思えるものではない (代わって自分たちの矮小な利のために他を犠牲にするとは受け取れる)」 創業者の発言や一部従業員らのやりようから相応の会社であろうと批判されてきたといった側面で満ちているマイクロソフト社]

がオーナーとなっている (とウィキペディアなどにも掲載されている) ところの媒体、slate.com とのドメイ

ン名の Web ニュース媒体にての 9/11 Truth" movement: How Alex Jones and Michael Ruppert founded it.と題されてのページから「敢えてもの引用をなす」こととして[相応の人間でも認めざるをえぬところ]として次のようなことが「ある」とのことを示しておく。

(直下、slate.comとのドメイン名の Web 媒体にての 9/11 Truth" movement: How Alex Jones and Michael Ruppert founded it.とタイトルが付されてのページからの引用をなすとして)

On July 25, 2001, in a two-and-a-half-hour broadcast of his Infowars TV program on a local public-access channel, Alex Jones laid out what he saw as the history of government-manufactured false-flag attacks, from the Gulf of Tonkin incident that Lyndon Johnson used to draw the United States deeper into the Vietnam War to the first attack on the World Trade Center in 1993 and the Oklahoma City bombing in 1995, which Jones claimed was government-manufactured terrorism orchestrated to help Bill Clinton boost his poll numbers and suppress civil liberties. As he compared Oklahoma City to the Reichstag fire, Jones flashed the numbers for the congressional and White House switchboards onscreen. **"Call the White House and tell them we know the government is planning terrorism," he said. " 'Bin Laden' " — he used air quotes — " is the boogeyman they need in this Orwellian phony system." Six weeks later, on the day the Twin Towers fell, Jones began his broadcast by declaring that, as he had predicted, the Bush administration had taken part in a staged terror attack.** "I'll tell you the bottom line," Jones said. "98 percent chance this was a government-orchestrated controlled bombing."

(補つても訳として)

「2001年7月25日、地元テレビから視聴可能であったとの2時間30分の尺の彼のインフォ・ウォー・テレビ・プログラムにてアレックス・ジョーンズは[その折の大統領リンドン・ジョンソンが合衆国をヴェトナムの奥へと引き込むために用いたトンキン湾事件]から[ビル・クリントンをして背番号制を促進なさせ市民の自由を抑圧するための政府自演の事件であるとかねてより(同アレックス・ジョーンズが)主張していた「1993年の」ワールド・トレード・センター爆破事件および1995年にてのオクラホマシティ爆破事件]に至るまでの[偽旗作戦(訳注:フォールス・フラッグ・アタック;自作自演で襲撃被害を捏造し軍事介入ないしその背後の目的実現の手段とするとのやりよう)]についてのとりまとめをなした。

そのうえで彼ジョーンズは(米国の)オクラホマシティ爆破事件と国会議事堂放火事件(訳注:ナチス躍進の契機となった一九三〇年代の事件)を比較した折、議会およびホワイトハウスへの交換機電話番号をスクリーン上に投じて示し、(視聴者らに対し語りかけ)「ホワイトハウスに電話して我々は政府がテロを[企画]していることを知っていると言って欲しい」と述べ、続けて、「(エア・クォート、指で引用符サインを付けて強調するとの海外式やりようをとりながら)「ビン・ラディン」が「オーウェルの欺瞞のシステム」(訳注:オーウェルとは監獄社会小説『一九八四年』の作者たるジョージ・オーウェルを指す)のニーズを満たすための「邪悪な存在」として利用されるであろう」と述べた。

その6週間ほど「後」、ツインタワーが崩落した折、ジョーンズは彼の番組放送にて彼が予告的言及をなした折、ブッシュ政権は舞台演出されてのテロリスト攻撃に関与していたと宣言した。そのうえで「私が最低限の線として言えることとして」(続けて)「98%の可能性でこれは政府がオーケストラ的関与をなしての爆破事件だろう」と述べた」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく —※—)

(※尚、同放送にてアレックス・ジョーンズは先覚的言及者としてさらに有名になったが、ジョーンズは「何時頃」「どこで」攻撃がなされるとまでは言及しておらず、従前事件および彼がそうであろうととらえるところの[偽旗作戦](ベトナム戦争にての介入口実を用いられたトンキン湾事件に見られるフォールス・フレッジ・アタック)の事例との兼ね合いでの話をなしていたにすぎないとの指摘もある(だが、反政権的のみならず反メーソンの論調もよくとるアレックス・ジョーンズは[ビン・ラディン]の名前を持ちだしたうえで「近々、自作自演のテロがあるから」「ホワイトハウスに電話しろ」とまで述べている。とにかくものこととして、である))

これにて

第一。

極めて基本的な事件経過に関わるところとして、先に発生した911の事件は(飛行機が突撃したツインタワーのみならず)ワールド・トレード・センターに存在していたビル七棟がすべて倒壊したとの事件となる —無論、公式発表では[飛行機突撃に起因する尋常一様ならざる衝撃]を受けてツインタワーが崩落、それに巻き添えを食らうかたちで他のビルら「も」倒壊を見たとの説明が主としてなされている—。

第二。

その中身が適正なものか否かはとりあえず置き、かつてそこにあったワールド・トレード・センターの第七ビルに関してはそれが発破倒壊 —コントロール・デモリッション(ビルを炸薬を用いて一挙に破壊して解体処理する手法)— によって倒壊したのだとの申しようが[建築家団体]より呈されているとのことがある —いいだろうか、主張の中身自体が[真実]との意味合いでの[事実]なのかは置いておき、建築士ら専門家筋の団体がワールド・センター・第七ビルの崩壊は発破倒壊としての様相を露骨に呈しているとの意見を表明しているとのことは「容易に」確認できる主張動向にまつわる[事実]としてそこに存在しているということである—。

第三。

それが果たして本当に[具体的情報に基づいてのことなのか]は置いておき、そして、それが果たして本当に[911の背後関係を真実一路で突いたものなのか][信用に値することなのか]は置いておき、911の事件が発生する「直前」、2001年7月にて、「アメリカで[アルカイダ]と[オサマ・ビン・ラディン]の犯行を名目にしての政府関係者筋による[自作自演のテロ]が起こされることを警告していた」との有名な論客が存在している —※事件の後で予言者であったとする[自称予言者]ではなく、[ある程度、知名度を有していた人物](先立つ2000年にグローバル・エリート of 奇怪なる真夏の集いの隠し撮り映像をもってして Dark Secrets Inside Bohemian Grove と題してのフィルムとして流通させて知名度を高めていたラジオ番組主催者のアレックス・ジョーンズという人物)が放送記録に基づいて確認できるところとしてそうしたことを述べていたとの[事実]がある—。

とのことが[基本的事実関係]としてそこにあるとの典拠を紹介するための出典紹介部を終える。

(出典(Source)紹介の部 101 はここまでとする)

以上、呈示してきたような基本的事実関係 —くどいが、第二、第三の点はその言いよりの伝が真実か否かではなく(それ自体が陰謀論、conspiracy theoryであるか否かではなく)そのような「主張」が(時期も一部問題となることとして)「存在していること」それ自体を問題視しているとのものである—につき、確認のために言及したところで、これ以降、

[[事件発生場所](ニューヨーク、さらに述べて、ワールド・トレード・センター)に正確に言及するとのかたちで、また、[事件発生態様](ビル連続倒壊)にも正確に言及するとのかたちでインナーサークルとしての秘密主義的団体 —そも述べる理由・論拠は細かくも出典挙げながら後述するが、見る人間が見ればフリーメーソンの比喩的象徴物となっているとすぐに分かる団体— が秘密厳守の中で「ビル爆破」を起こすとの筋立てを有している【作品】が存在している。また、同じくもの【作品】にあつては「後に」ワールド・トレード・センターにての「テロ」発生場所が「グラウンド・ゼロ」と呼ばれることになったことを意識させるように極めて目立つシーンで爆破区画が「グラウンド・ゼロ」と呼称されており(連続ビル倒壊に向かっていると冒頭部からして明言されている区画/後のシーンで「はきと」ワールド・トレード・センター界限、ツインタワー近辺であると描写される)、さらに、同【作品】はそれ自体でそれが前言作品であることを「自己言及」している「ような」側面を如実に伴っているとの作品ともなる]

との作品が「現実に」存在していることを容易に後追いできるかたちでの出典明示なしながらこれより事細かに解説していくこととする。

さて、ここでまずもつてのこととして —[使徒行伝に登場してくる占いの霊](a spirit of python (P̄ythōn) と英語にては表されるパイソンに憑かれた者)の問題「にも」関わることとして— 取り上げたき作品名称は

Fight Club 『ファイト・クラブ』 (1999年公開の映画作品/チャック・パラニューク Chuck Palahniuk という作家の同名の1996年初出の小説作品 —こちらからして(後述するように)911との数値との数字的符号の兼ね合いで問題となる作品である— を原作とする映画作品となり、ハリウッドの鬼才と認知されているデヴィッド・フィンチャーがメガホンをとりました映画)

となる。

これよりその特性について詳説をなしていく所存であるとの『ファイト・クラブ』は、大要、次のような粗筋の作品となっている。

(直下、英文 Wikipedia[Fight Club]項目を陵駕して実によくまとまっている —何度も映画精査してその内容を克明に把握している本稿筆者から見ても「錯誤・錯簡といった問題がなきものとして」実によくまとまっているととらえられる— と和文 Wikipedia[ファイト・クラブ]項目粗筋紹介部よりの掻い摘まんでの引用をなすとして)

あらすじ

物語は、「僕(I)」の視点で進行する。「僕」(エドワード・ノートン)は自動車会社に勤務し、全米を飛び回りリコール調査の仕事をしている平凡な会社員。高級コンドミニアムに、イケアのデザイン家具、職人手作りの食器、カルバン・クラインやアルマーニの高級ブランド衣類などを強迫観念に駆られるように買い揃え、雑誌に出てくるような完璧な生活空間を実現させ、物質的には何不自由ない生活を送っていた。一方で、僕の精神の方は一向に落ち着かず、不眠症という大きな悩みがあった。

…(中略)…

僕は精神科の医者に苦しみを訴えるが、医者に「世の中にはもっと大きな痛みを持ったものがいる」と言われ、睾丸ガン患者の集いを紹介される。その会で睾丸を失った男たちの悲痛な告白を聞いた僕は、自然と感極まり、これを契機に不眠症は改善した。

…(中略)…

これが癖になった僕は末期ガン患者や結核患者などの自助グループにニセの患者として通うようになるが、僕と同様に偽患者として様々な互助グループに現れる女・マール(ヘレナ・ボナム＝カーター)と出会う。

…(中略)…

そんなある日、僕が出張中に自宅のコンドミニウムで爆発事故が起こり、買い揃えた家具もブランド衣服も全てを失ってしまう。家の無くなった僕は出張途中の機内で知り合った石鱈の行商人タイラー・ダーデン(ブラッド・ピット)に救いの手を求めた。バーで待ちあわせたタイラーという男は、僕とは正反対の性格で、ユーモアあふれる危険な男だった。タイラーはバーを出た後、駐車場で僕にある頼みをする。「力いっぱい俺を殴ってくれ」。そして僕と彼は、ふざけ合いながらも本気の殴り合いを始める。殴り合いでぼろぼろになった二人は、痛みの中で生きている実感を取り戻した気になった。以後、僕らは時々同様の殴り合いをするようになり、それを見ていた酔っ払いが殴りあいに参加し始め、やがて駐車場で殴り合いは毎晩のように行われるようになる。そのうちに場所を地下室に移し、大勢の男達が集まる1対1の「ファイト(喧嘩)」を行う秘密の集まりへと変わっていった。タイラーはこれをファイト・クラブと呼び、全員が公平に殴り合いに参加するためのルールを作っていた。

…(中略)…

タイラーは「ファイト・クラブ」の男たちに、昼間の平凡人としての時間に、何か社会に対する嫌がらせをしてケンカをし、わざと負けろという「宿題」を出す。メンバー達は町中で、店の客や通行人とケンカを始める。

…(中略)…

メンバーの中から黒い服を着た「スペース・モンキーズ」と称する集団が現れ、僕らの住む廃屋の地下で作業を開始した。モンキーズはみな自分の名前を捨てており、僕にすらも自分たちに与えられた目的を明かさなかった。疎外された僕にはタイラーの居場所もわからなくなっていた。

…(中略)…

やがて「ファイト・クラブ」は、現代の社会構造や物質至上主義・消費主義に疑問を持つ男たちの集まりへと徐々に姿を変えてゆき、タイラーの発案した「騒乱計画(プロジェクト・メイヘム)」、すなわち社会的権威に対する破壊工作を実行するためのテロリスト集団に変貌していった。「騒乱計画 ルールその1、騒乱計画について質問するな」。僕はこのルールにより騒乱計画が具体的にどのようなものか知ることができなかった。

…(中略)…

最初は大資本によるファストフード・チェーン店や都心に鎮座するパブリック・アートなどに対するいたずらじみた行為であったが、破壊活動中に「スペース・モンキーズ」の中から死者も出るようになる。これに対し警察は、社会秩序を不安に陥れる破壊行為と戦う対策を発表しようとするが、直前に会見場に乗り込んだタイラーとモンキーズは警察首脳を拉致・脅迫して対策発表を辞めさせた。

…(中略)…

再びタイラーが目の前に現れた。タイラーは自らの正体を「『僕』」にとっての理想の姿、もう一つの人格(オルター・エゴ)だと明かした。僕が夜中に不眠症になっていたのは別人格のタイラーとして映画館やレストランで働いていたからであり、爆発事故の真相は、雑誌や流行に踊らされて買った品物ばかりの虚飾に満ちた部屋をタイラーとしての僕が破壊したのであり、タイラーと僕との殴りあいも僕が自分で自分にパンチを浴びせていただけであり、マールとのセックスも「騒乱計画」の指令もすべてタイラーとしての僕が行っていた

ことだった。僕はこれを聞いて意識を失ってしまう。

…(中略)…

僕は彼らの残したメモから市内各所にある銀行・クレジットカードなど、資本主義システムをつかさどり全米の個人のローンや資産を管理する大企業各社のビルに対する同時爆破テロが計画されていることを知る。

…(中略)…

強い衝撃と後悔に見舞われた僕は警察に電話するが、対応した警官までがスペース・モンキーズの一員であった。僕は一人で爆破を止めるため深夜のビル街へと向かう。爆破の寸前、ついに僕は高層ビルでタイラーと対峙し、別人格タイラーと「殴りあい」をして床に倒れ、椅子に縛られタイラーに銃を口内に突きつけられる。さらに僕は窓からマーラがスペース・モンキーズに捕まり、連れて来られるのを目撃する。僕にもはや勝ち目はないと思われたが、僕は「タイラーが銃を持っているということは、僕が銃を持っていることだ」と気づく。

…(中略)…

弾丸は急所をそれ、僕は死ななかったが別人格タイラーは消えうせた。僕はスペース・モンキーズに連れてこられたマーラと抱き合うが、既にテロまでの時間はなかった。二人は手をつなぎ、金融会社の高層ビルが次々と崩壊する様をただ見ていた。

(引用部はここまでとする)

以上、『ファイト・クラブ』の粗筋の紹介を(掻い摘まんでのウィキペディアよりの抜粋とのかたちで)なしたうえで同映画における事前言及が何なのかの解説に入りたいと思う 一※一。

※[以降、DVD コンテンツより容易に確認できるとのかたちで呈示していく前言問題にまつわる補足として]

『ファイト・クラブ』における前言問題が何なのかについては筆者に[多くのこと]を気付かせた動画群、例えば、

[**911 Hidden in Hollywood**](現行、動画サイト、YouTube にて流通しているいくつかのバージョンに分れている英文動画、どれもその指摘の意味に唸られるとの表記の題名 一 **911 Hidden in Hollywood** 一 動画の[part3]と付されてのセクション)

といった動画による指摘によって「も」多く映像記録から概要把握をなせるようになっていく(筆者がよりもって推奨する裏取り方法は流通している **Fight Club** のDVD をどこぞのレンタル店でレンタルしてそれを本稿これよりの再生時間を秒単位で指摘しての記述と引き比べるとの式で内容検証する([subtitle: 英文字幕]オンにして細かくも検証する)とのやりようであるが、きちんと脳が機能しており、かつ、英語聞き取りにもさして難がないとのことであれば、特定流通動画[ナイン・ワン・ワン・ヒドゥン・イン・ハリウッド]パート3の部によってもあらかた問題が何なのか 一そこでは指摘されていないところもあるのだが一 察せられるようになっていく。

(追記として:その他にも 911 関連の視聴に値する動画は存在しているが、ファイト・クラブ関連で最もわかりやすき指摘をなしているとの動画は現行、直近言及の [**911 Hidden in Hollywood**]

(Part3)となっている。—ちなみに上動画の作成者については権利者がはきと名乗り出ていないために不分明となっており(一時期、グレン・ムーア氏なる名乗りの人物が作成者かとも見ていたのではあるが、それも現況、あやふやとなっており不分明となっており)、また、サプライヤー(供給者)も複数となっている節がある—)。

それではこれより、

[『ファイト・クラブ』日本語字幕付き国内流通版 DVD —英文 Wikipedia[Fight Club]項目には同映画が **Running time 139 minutes** 上映時間 2 時間 19 分との描写がなされているが、ここにて問題視している国内流通の DVD (レンタルショップで容易に借りられる DVD) はオープニングの映画会社 20th Century Fox のロゴ登場から著作権にまつわる警告に至るまでの時間が [2 時間 18 分 58 秒] との尺となっていること、筆者が確認しているとのものとなる—]

にどう描写が現われているか「容易に後追い可能なかたちで」順を追って指摘していくこととする。

まずもって、全体として映画『ファイト・クラブ』がどういう展開で進むのか、筆者が分析に用いた DVD に基づいての説明をなすことから始める。

[DVD のタイムカウンター(再生時間表示)に準拠しての映画『ファイト・クラブ』の構成として]

[**冒頭部**] (いわば起承転結の「起」に該当する部で [DVD 再生環境にて容易に確認できる場所としてのタイムカウンター表示で 3 分弱の部] までを便宜的にここでは [冒頭部] とする)

⇒

映画『ファイト・クラブ』は [物語の結末シーンの先取り] からスタートする (ストーリー構築手法としてのいわば [倒叙法] との技法をとっている)。

すなわち、映画『ファイト・クラブ』は結末の場面がまずもっていきなり描かれたうえで、それから遡っての回想が開始されるとのかたちで物語が展開していく、再度、冒頭部結末に向けて話が展開していくとの物語展開の手法が採用されている。そして、物語冒頭、そこからはじまるそちら [物語の結末先取りシーン] は、

[主人公 (演:ハリウッド俳優エドワード・ノートン) がカード会社など金融関連企業らビル —ファイト・クラブ後半部の筋立てがそれを主軸として描かれる同時ビル爆破計画(プロジェクト・メイヘム)の爆破対象— に爆発物を設置した自身の別人格(オルター・エゴ)と対面、その自身の内部の敵 (演:ハリウッド俳優ブラッド・ピッド) に銃口を突きつけられるとのシーン]

となっている。

[**前半部**] (いわば起承転結の「承」「転」に該当する部で [DVD 再生環境にて容易に確認できる場所としてタイムカウンター表示で 3 分弱のところから 1 時間 30 分ぐらいまでの部] を便宜的にここでは [前半部] と表する)

⇒

直近先述のように映画では[結末シーンが冒頭にて先取りされる]とのかたちでそこより過去に遡っての描写がなされる。その遡っての回想部にての特定パートまでを便宜的に[前半部]とここでは定義する。

同[前半部](と区分付けしての部)では

[主人公が悩みを抱えた者同士の相互扶助サークルへの参加にて心の渇きを癒やしているとの経緯] (主人公は末期癌患者の集いやその他、傷を負った人々の集いに偽患者として参加していることが描写される)

[単調なサラリーマン生活を描いたパート]

[主人公が後に関係を結ぶことになった女性(マールというキャラクター)や自身のオルター・エゴ(内なる別人格)であるものの当初は別人と認識していたタイラーという男に出会うことになった経緯]

[タイラーとの交流から殴り合いサークルとしてのファイト・クラブという交流団体が設立された経緯]

[ファイト・クラブが 一主人公に「何故、タイラーは軍団を造ったのか」と疑念視されるようなかたちで 危険な方向へ尖鋭化していくとの経緯]

が順序、[時系列的に前から後]とのかたちで描かれていく。

[後半部] (いわば起承転結の「結」に該当する部で [DVD 再生環境にて容易に確認できる場所としてタイムカウンター表示で1時間30分ぐらいのところから終幕のポイント、2時間18分58秒までの部] を便宜的にここでは [後半部] とする)

⇒

映画にてファイト・クラブが上からの命令に極めて組織的かつ盲目的に従い、実際にその手の人間よりなる軍隊組織化描写がなされる。より具体的には

[騒乱計画(プロジェクト・メイヘム)という計画が進行していること]

[騒乱計画に対する邪魔者に口封じ工作が計られていること]

[主人公(演:ハリウッド俳優のエドワード・ノートン)がその騒乱計画の進行役たるタイラーの正体が自分の別人格(演:ハリウッド俳優のブラッド・ピット)であることに気づき、また、騒乱計画の実態把握と阻止のために東奔西走することになった経緯]

[騒乱計画が奏功し、結果的に結末(冒頭部に回帰してのシーンよりのパート)として連続ビル爆破が実現することになった経緯]

が描かれている。

以上、本稿にあつての便宜的になしての分類についてまで細かくも把握していただくことまでは求めないが(当たり前である)、とにかくも、映画『ファイト・クラブ』のストーリー展開を [冒頭部] [前半部] [後半部] と分けもしたうえで映画『ファイト・クラブ』における前言がいかようなものなのかについてこれより[1]. から[9]. と振っての段階的指し示しをなしていく。

[1]

1999年公開の映画『ファイト・クラブ』、その [冒頭部] には「2001年の」事件の跡地を指す言葉となった、

[グラウンド・ゼロ]

との言葉が極めて目立つかたちで登場を見ている。

以下、その部のダイアログ —英語を聞き取るに難あるとの向きは DVD 再生環境にて英語版字幕オンにすれば、すぐに確認できるとのダイアログ— を再生時刻表期と共に引用する。

出典 (Source) 紹介の部 102

SOURCE 102



Cimabue's Celebrated Madonna (1280-85)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典 (Source) 紹介の部 102 にあつては、

[映画『ファイト・クラブ』ではその冒頭部より [グラウンド・ゼロ] との言葉が目立ってあらわれてくる]

とのことの典拠 (簡易的確認法) を挙げることにする。

その点、『ファイト・クラブ』映画開始後、DVD タイムカウンターで確認できるところの、

【2分09秒から2分10秒のシーン】

を視聴する (DVD 再生環境で英語字幕 — English Subtitle— をオンにしながらでも視聴する) こ

とで下のとおりの英文台詞が登場を見ていることが確認できるようになっている。

Three minutes. This is it. Ground zero.

(直訳すれば、「あと3分だ。まさにこれだよ。グラウンド・ゼロというのは。」との台詞である。尚、日本語版 DVD 日本語字幕では This is it. Ground zero に対して「すべては木っ端みじん」との訳が意訳として振られ、グラウンド・ゼロという言葉は日本語字幕上では見られないようになっているが、和文字幕を無視して英文聞き取りをなすか、あるいは、DVD 再生環境で各自、英語字幕をオンにすることで表記ダイアログについて文字情報として「も」確認できるようになっている。ちなみに、同台詞、映画主人公のオルター・エゴ(別人格)となっている Tyler Durden (タイラー・ダーデン)が主人公の口に銃口をねじ込みながら発している台詞となる(繰り返すが、その確認は映画開始後、2分09秒から2分10秒のシーンの再生・視聴でなせるようになっている(映画会社 20th Century Fox のロゴやスタッフ紹介欄を含めての映画開始後約2分後の台詞であるため、映画本編開始「直後」にての台詞とも述べられる)

以上、時刻指定してのシーン箇所と言及して確認を願いたいとの台詞、そこに見る、Ground zero との言葉が 911 にての同時ビル倒壊地点のその場を指すようになった[経緯]についても引いておく。

(直下、基本的なところとして英文 Wikipedia[Ground Zero]項目にての現行記載内容よりの原文引用をなすとして)

The origins of the term ground zero began with the Manhattan Project and the bombing of Japan. The Strategic Bombing Survey of the atomic attacks, released in June 1946, used the term liberally, defining it as: "For convenience, the term 'ground zero' will be used to designate the point on the ground directly beneath the point of detonation, or 'air zero.'"

[...]

The Pentagon, the headquarters of the U.S. Department of Defense in Arlington, Virginia, was thought of as the most likely target of a nuclear missile strike during the Cold War. The open space in the center is informally known as ground zero, and a snack bar located at the center of this plaza was nicknamed "Cafe Ground Zero".

[...]

Since 2001 in the United States, especially in the media, "Ground Zero" is generally understood to mean the site of the World Trade Center, which was destroyed in the September 11 attacks. The phrase was being applied to the World Trade Center site within hours after the towers collapsed. It appears that the first use of the term on a mainstream North American media outlet in reference to the September 11 attacks was at approximately 11:55 am when an eye witness who claimed to be a Fox News freelancer referred twice to ground zero. He may also have been the first person to suggest the cause of the collapse of the towers was due to "structural failure due to fires". At 4:41 p.m., in an interview with Peter Jennings on ABC News, attorney and survivor of the attacks Tom Humphreys (spelled "Humphries" on air) said, in reference to the collapse of the South Tower, that "The tragedy is that the police and fire personnel that tried to help people out of that building were right at Ground Zero when that

happened...

(訳として)

「グラウンド・ゼロとの言葉の起源はマンハッタン計画および日本に対する原爆投下にある。1946年6月に出された核攻撃の戦略的爆撃調査書では「爆発ポイント真下の地番、すなわち、エア・ゼロの場のことを示すうえで便宜上、グラウンド・ゼロとの言葉が用に適している」との言いようをなしながら同語をふんだんに用いていた。

…(中略)…

ヴァージニアはアーリントン(ワシントン郊外)にあるペンタゴンは冷戦下、最も核の標的になりやすきところと考えられていた。その中央にあつての広場は非公式には[グラウンド・ゼロ]と呼ばれており、広場にある軽食堂はカフェ・グラウンド・ゼロとのニックネームが与えられていた。

…(中略)…

米国では2001年以来、殊にメディアにあつて

「[グラウンド・ゼロ]は一般に911の攻撃にて破壊されたワールド・トレード・センターの区画を指してのものである」

との理解が一般になされている。同語がワールド・トレード・センター所在地に対して用いられるようになったのはタワーらが崩落した後、数時間「以内」のことよりであった。北アメリカにての主流メディアにセプテンバー・イレブン・アタックを指して同語が最初に用いられるようになったのはおよそ午前11時55分、Fox ニュース (訳注: ややくしくも響くかもしれないが、同 Fox ニュース、映画『ファイト・クラブ』を世に出した映画配給会社[「20世紀」フォックス]がメディア王ルパート・マードックに率いられる一群のニュース・コングロマリットたる[ニュース・コーポレーション]の構成企業であるのと同様に事件発生往時からして同系列[ニュース・コーポレーション]の構成企業であったとの[「21世紀」フォックス]傘下の放送局となる) にてのフリーランスのレポーターが二回ほどグラウンド・ゼロとの言葉を用いた時よりであったようである。同じくもの(グラウンド・ゼロとの言葉を用いた)向きはまた、タワーらの倒壊の原因をして「火災に対する構造的欠陥」であろうとの指摘をなしたとの向きともなる。午後4時41分にはABC ニュースにての Peter Jennings (訳注: テレビ報道関係者) とのインタビューで弁護士にして911の事件にての生存者となった Tom Humphreys がサウスタワーの崩落をもってして次のように述べた。「悲劇であったのは崩壊が起こったとき、生存者をビルから助けようとしている警察関係者および消防員らがまさにグラウンド・ゼロの渦中にいたことである…」(以下略)」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

本稿の先の段でも指摘していることを繰り返しての表記の引用部をもってしてお分かりであろうと思うが、[グラウンド・ゼロ]とはそもそももってして(911の事件が起こった場所と同様に[マンハッタン]の名を冠する)[マンハッタン計画]の帰結としての原爆投下地に対する言葉として生み出されたとの言葉であり、そして、後、核の標的になる可能性が指摘されていたペンタゴン —こちらも[911の事件]で標的にされた場である— の一区画を指す言葉として用いられてきたとの由来を持つ語となっている。それが911「直後」、メディアに露出していた向きら(メディア関係者や生存者)由来の911の事件の表し方が一般化されるとの式で(核による標的ポイント・核攻撃跡地とはほぼ同文であった特殊な言葉であるグラウンド・ゼロは)ワールド・トレード・センターにての悲劇の場を指す言葉となったとの説明が付されているわけである。

[2]

『ファイト・クラブ』では映画がスタートを見ての[冒頭部]、配給会社ロゴ登場の2分後にて[グラウンド・ゼロ]との言葉が出てきた(出典(Source)紹介の部 102)後、そのグラウンド・ゼロ現出の場が

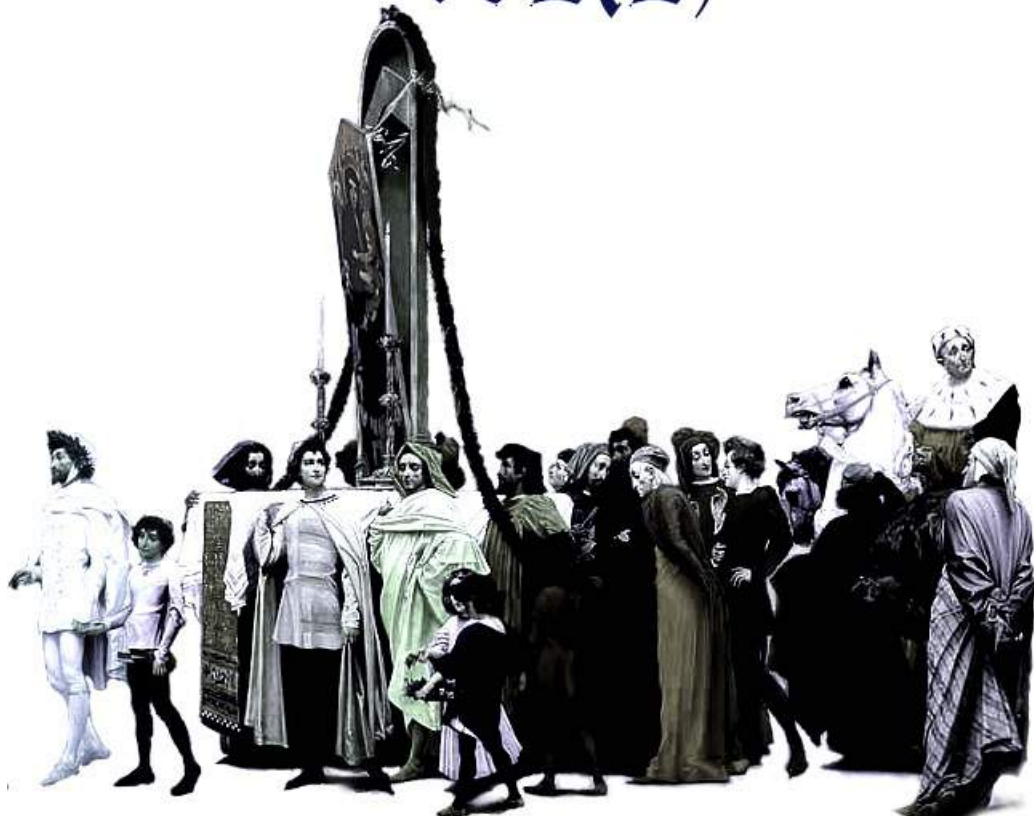
[連続ビル爆破の現場]

であることが言及されている。

以下を参照されたい。

出典(Source)紹介の部 102(2)

SOURCE 102(2)



Cimabue's Celebrated Madonna (1853-5) | _____
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are
barefaced and brutal.

ここ出典(Source)紹介の部 102(2)にあつては

[映画『ファイト・クラブ』では冒頭部、[グラウンド・ゼロ]と形容されているその場にて連続ビル倒壊劇が現出することが言及されている]

とのことの典拠(記録的事実の簡易なる確認方法)を挙げることとする。

その点、『ファイト・クラブ』映画開始後、DVDにおける再生時間タイムカウンター表示にての

【2分14秒(0:02:14)近辺】

のシーンから(DVD再生環境で英語字幕 — English Subtitle— をオンにすることで)下の英文台詞らが順々に登場を見ていることを(文字)情報として確認できるようになっている。

Do you have a speech for the occasion? (主人公の別人格であるとのタイラーのセリフ。日本語字幕では(原文にほぼ忠実に)「何か言いたいことはあるか?」と表示される)

⇒

With a gun barrel between your teeth, you speak only in vowels. (エドワード・ノートンが演じる主人公の内面の声としての台詞。日本語字幕表示モードでは「銃を突っ込まれて話なんか!」と表示されてくる — 同台詞は直訳すれば「自分の歯の合間に銃口を容れられていれば、君だってアイウエオの母音ぐらいしか話せないはずだ」となるが、日本語字幕に見る意識の方が状況に適っているように見える部ではある—)

⇒

For a second, I forget about Tyler's controlled demolition thing and I wonder how clean that gun is. (エドワード・ノートンが演じる主人公の内面の声としての台詞。日本語版字幕では「一瞬爆薬の恐怖を忘れて思った。"その銃 清潔なのか?"」 — 原文文意に忠実に解せば、「一瞬、タイラーの[爆破計画]のことを忘れ、(今、口にねじ込まれている)銃がどれだけ汚れていないといえるのかとのことを気にしてしまった」となる。尚、同台詞が英文字幕にて確認できる流通DVDにての再生時間は本編スタート後、[2分17秒後]の場面となり、controlled demolition というのが[解体工事に使われるビル爆破手法]のことを指す—)

⇒

We have front-row seats for this theatre of mass destruction. The Demolitions Committee of Project Mayhem wrapped the foundations of 12 buildings with explosives. In two minutes, primary charges will blow base charges and a few blocks will be reduced to smouldering rubble. (エドワード・ノートンが演じる主人公の内面の声としての台詞。日本語版字幕では(原文にほぼ忠実に訳されての部として)「ここは大爆発を見物する特等席。騒乱(メイヘム)計画の爆破委員会が12のビルに爆弾を仕掛けた。あと2分で起爆装置が作動。周囲数ブロックが跡形もなく吹っ飛ぶ」と表示されてくる — 同台詞にあつての and a few blocks will be reduced to smouldering rubble. が英文字幕 subtitle にて確認できるのは流通DVDにての再生時間が本編スタート後、「2分51秒」後の場面となる—)

(※1: 以上のことは広く流通を見ている『ファイト・クラブ』の1999年映画を

まるまる収録しての DVD を通じてすぐに確認できることである(であるから疑わしいというのならば確認してほしいと再三再四申し述べもする)との[記録的事実]の問題となる。すなわち、映画『ファイト・クラブ』では

[爆破に吹っ飛ばす予定の[グラウンド・ゼロ]の地]

というのが

[爆弾が仕込まれて崩される —コントロール・デモリッションが実行される— 予定の計 12 のビルが存する場所／数区画、瓦礫の山となさせしめる式でのビル倒壊させる予定の場所]

であると冒頭部にてからして定置されているのである(：尚、冒頭部の回想シーンからさらに前に遡っての回想が本編部の多くを占める映画『ファイト・クラブ』では再び冒頭シーンに回帰しての映画最終シーンにて主人公らの目の前で複数ビルが発破倒壊の特徴としての沈むようなかたちでの倒壊を見る

—DVD にては結末の部、2 時間 15 分 35 秒後ぐらいのシーンである— 。 それにつき、現行、ワールド・トレード・センターにての事件、七つのビルが倒壊してのかの事件にての第七ビル倒壊が —それまでそそり立っていたものが瞬時に頭からぺしゃんこになって崩れて落ちて行くさまから— 爆破倒壊であったとする説が専門家団体より呈されている(出典(Source)紹介の部 101) ことを如実に想起させるシーンでもあり、『ファイト・クラブ』との兼ね合いでそのことを問題視する向きも無論いる)

(※2:ここまでにての [1] と [2] と振っての部で言及なしもしている描写 —グラウンド・ゼロと目立って呼称しての場にて複数ビル爆破倒壊を実演するとの描写— は映画冒頭部の場面にてのものとなり、映画はその直後、主人公のさらに遡っての行いを描いての回想シーンに突入すると述べもしたわけだが、その流れとして具体的には直後、“ This was a support group for men with testicular cancer. ” 「これは精巣腫瘍患者を支援するための団体なんだ」と主人公ナレーションが入りつつも精巣腫瘍患者扶助会に主人公が参加していること、主人公が精巣腫瘍罹患者らを励ますための半ば自己満足のための活動に参加していることが紹介される式で主人公の回想部に入ることになる —その点についても思うところあって後述するが、精巣腫瘍患者らとの主人公の抱擁シーン(冒頭部の爆破直前シーンから直後遡って具現化する精巣腫瘍罹患者ボブことロバート・ポールソン、後にメイヘム計画で問題となる球形オブジェの爆破で殉教者となったとの設定の男との抱擁シーン)などの側面でフリーメーソン通には「そこからして疑わしい」とのものとなるように映る—)

(出典(Source)紹介の部 102(2)はここまでとする)

[3]

映画『ファイト・クラブ』では [騒乱計画] (原語呼称ではプロジェクト・メイヘム) の目標については

[クレジット会社ら金融会社ビル群を爆破、クレジット会社データベースに見る借金をチャラにすることではないか]

との主人公の推察が作中に語られる（主人公は先に既述のよう多重人格者という設定を伴っての存在なのであるが、爆破を試みている別人格（オルター・エゴ）ではない方の主人公の推察としてそのようなことが語れる）。

他面、[騒乱計画]（原語呼称ではプロジェクト・メイヘム）の目標につき、

[金融界そのものを破壊しての経済的混乱を指向していること]

がテロ首魁としての主人公オルター・エゴ（別人格）のタイラー・ダーデンによってラスト・シーンの同時連続ビル爆破直前に「はきと」語られている —※最低限の社会的常識があれば、サーバーにて信用記録が分散保存されているとのこともあろうこの世界ではビル爆破程度で借金記録がなくなるわけでもないことは分かるか、と思う。また、さらに一歩進んで、（実体のないマネーの特質を敢えても無視することのなしてビル爆破程度のことでそれが起こせると稚拙なる仮定をなし）金融危機が起これば、続く大恐慌がやってきて経済の破綻、続くマイクロ・レベルの多くの悲惨が現出することは分かることか、とも思う。だが、ここではフィクションの中にあつての [低劣な狂信者ら] に押しつけられた [フィクションにあつてのお題目]（日本で [金融システムそれ自体の構造的問題と金融マフィアらの不正の問題を多くはき違えている節もある陰謀論を唱えている輩ら] が別側面でその虜となっているのも同様の [お題目] と見るわけだが、それは置く）に [通念] の問題を持ち込むのも馬鹿馬鹿しいところなのだが、[記録的事実] に関わることとして、そういう設定が採用されていると指摘しておく。

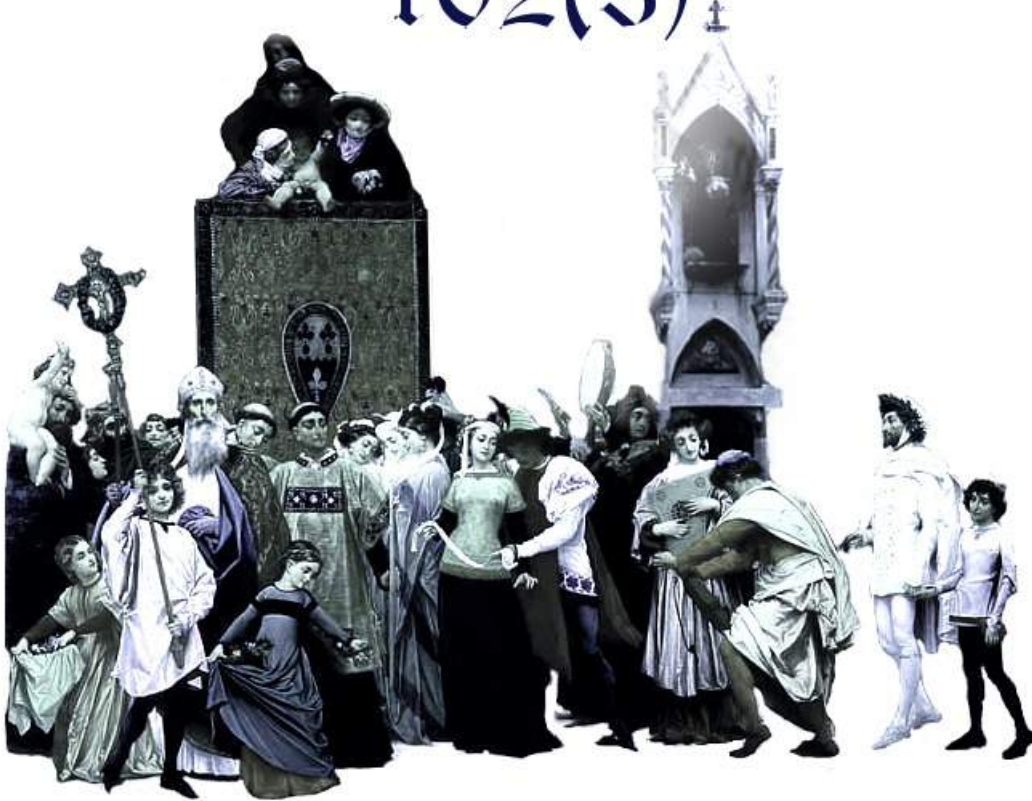
対して、現実世界で911の事件 —先述のように計7棟のビルらが全倒壊しているとの事件— で標的になったワールド・トレード・センターは

[一大金融センター]

であったとことがある（一大金融センターであったこともあり、同領域が「攻撃」されたことによって事件後、株式市場が取引中止になったとのが現実にある）。

以上のことから —第一、映画『ファイト・クラブ』にての [ビル同時爆破による一区破壊] の目的については「クレジット会社を破壊することで借金記録をチャラにする（主人公の通常人格の推察）」「金融界を破壊して社会を経済的平等に持って行く（ビルら爆破直前に語られるタイラー・ダーデンのドグマ）」との設定が採用されている／第二、他面、現実世界で911の事件にて標的となったワールド・トレード・センターは金融一大センターであったとがある— について、それらが事実であるとのことの出典（兼[確認方法]）を以下、挙げることにする。

SOURCE 102(3)



Cimabue's Celebrated Madonna (1268-69)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are
barefaced and brutal.

ここ出典(Source)紹介の部 102(3)にあつては

[映画『ファイト・クラブ』では冒頭部、[グラウンド・ゼロ]と形容されているその場にて連続ビル倒壊劇が現出の意図がクレジット会社を破壊することで借金記録をチャラにする(主人公の通常人格の推察)、あるいは、金融界を破壊して社会を経済的平等に持って行く(ビルら爆破直前に語られるテロ主催者としての主人公のオルター・エゴ(別人格)であるタイラー・ダーデンのドグマ)と言及されている]

[現実世界で事件直後からグラウンド・ゼロとの固有名詞が際立って用いられたワールド・トレード・センター—画は金融センターとして知られている]

とのことらの典拠(記録的事実の簡易なる確認方法)を挙げることとする。

まず映画『ファイト・クラブ』にて [ビル同時爆破による一区破壊] の目的につき

[映画『ファイト・クラブ』では冒頭部、[グラウンド・ゼロ]と形容されているその場にて連続ビル倒壊劇が現出の意図がクレジット会社を破壊することで借金記録をチャラにする(主人公の通常人格の推察)、あるいは、金融界を破壊して社会を経済的平等に持って行く(ビルら爆破直前に語られるテロ主催者としての主人公のオルター・エゴ(別人格)であるタイラー・ダーデンのドグマ)と言及されている]

とのことの出典を挙げることとする。

最初にそこから取り上げるが、(今まで映画[冒頭部]、映画開始直後のシーンのことを専らに問題視していたところを一举に映画[後半部]、クライマックスに近しきところに飛びもし)、映画『ファイト・クラブ』の[後半部](結末近く)にての場面、本編開始後、DVD 再生環境タイムカウンター表示にあつての

【2時間01分18秒(02:01:18)近辺】

にてのシーン —ハリウッド俳優エドワード・ノートン演じる主人公の通常人格が自身の別人格が企んでいる騒乱計画(プロジェクト・メイヘム)の実体を示す資料を一部、警察に持参して警察に[近々、ビル爆破テロが起こされる危険]を訴え出るとのシーン— で発生しているところのダイアログ(劇中内やりとり)を抜粋する。

(以下、映画をそのまま収録しての日本流通版DVD『ファイト・クラブ』本編開始後、2時間01分18秒(02:01:18)以降のシーンで英文字幕をオンにすることで文字情報として確認できるところのやりとりとして)

I believe the plan is to blow up the headquarters of these credit card companies and the TRW building. (同台詞はエドワード・ノートン扮する主人公の口より出る。日本語版字幕では[クレジット・カード会社の本社ビルを爆破するために爆薬を製造した]との訳が表示されて出てくる)

⇒

Why these buildings? Why credit card companies? (同台詞は主人公が駆け込んだ警察署の刑事上役よりの台詞。日本語版字幕では[なぜクレジットカード会社を?]との訳が表示されて出てくる)

If you erase the debt record, then we all go back to zero. (再びエドワード・ノートン扮する主人公の台詞。日本語版字幕では[記録が消えれば皆 借金ゼロ]との訳が表示されて出てくる)

次いで、映画『ファイト・クラブ』の [後半部(結末近く)] にての場面、本編開始後、DVD 再生環境タイムカウンター表示にあつての

【2時間10分10秒(02:10:10)近辺】

にてのシーン —映画冒頭部シーンへと再度立ち戻つてのビル爆破直前のシーン— で発生しているところのダイアログ(劇中内やりとり)を抜粋する。

(以下、映画をそのまま収録しての日本流通版DVD『ファイト・クラブ』本編開始後、2時間10分10秒(02:10:10)以降のシーンで英文字幕をオンにすることで文字情報として確認できるところのやりとりとして)

Out these windows, we will view the collapse of financial history. One step closer to economic equilibrium. (主人公のオルター・エゴとの設定の存在である Tyler Durden の台詞。英文字幕(subtitles)ではなく日本語字幕にては[目の前で金融界が崩れ落ち社会は経済的に平等になる]と表示されてくるが、[窓の外で金融の歴史の崩壊を目撃することになろうだろう。経済的平等に近づくためのワンステップだ]というのがよりもって正確な訳となる)

上もてお分かりであろうが、映画『ファイト・クラブ』に見る[複数ビル爆破計画の目的]は

[金融会社を破壊することで金融システムを破壊し、経済的平等を画策すること]

と掲げられていることになる(与信記録を抹消させる云々にまつわってのいいようが現実的に馬鹿げている、いかに荒唐無稽なお題目であるかは上にて記載したことだが、それは置き、である)。

対して、現実にはツインタワーら七棟のビルが崩れることになったワールド・トレード・センターが金融の中心街であったことはつとに有名で、同じくものは、例えば、和文ウィキペディア[ワールド・トレード・センター(ニューヨーク)]項目の次のような記述からも容易に把握できるようになっている。

(直下、記載内容が有為転変する媒体であるが、「現行の」和文ウィキペディア[ワールド・トレード・センター(ニューヨーク)]項目にての[完成]と題されての節にて確認できるところの記述内容として)

ところがいざオープンしてみると、当初想定していた貿易会社などの入居は少なく、国際貿易の拠点としてのワールドトレードセンター計画は当てが外れた。完成時のキーテナントは港湾会社ほか、市や州、連邦政府などの機関が多く、あたかも官庁舎のような状態であった。活況を呈してくるのはウォール街が世界の金融の中心として活況に満ちた1980年代以降で、モルガン・スタンレーやソロモン・ブラザーズの本社を始め、世界の銀行・証券・金融会社の多くがウォール街に隣接するWTCにこぞって入居するようになってからだった。

(引用部はここまでとする)

(直下、記載内容が有為転変する媒体であるが、「現行の」和文ウィキペディア[アメリカ同時多発テロ事件]項目にての[金融市場]と題されての節にて確認できるところの記述内容として)

事件が起きた時刻はアメリカ合衆国での取引が始まる前で、多くの金融機関が入居する貿易センタービルで起きた事件ということもあり、その日のアメリカ合衆国国内の取引は中止。翌週の17日(月曜日)に再開するまで、取引所や金融機関は修復作業に追われた。9月10日の終値が9,605.51ドルだったNYダウは、取引が再開された17日には取引時間中に8,883.4ドルまで下落することになり、9月10日に121円を付けていた円ドルのレートも、翌日には118.5円まで値を落とした。

(引用部はここまでとする)

上もて映画版『ファイト・クラブ』での複数ビル爆破が金融システムへの攻撃という額面上の意図を持っていたものであったのに対して、現実の911の事件でも結果的な金融システムへの攻撃(1週間ほどの相場停止)が具現化したことについて指し示した。

([出典\(Source\)紹介の部 102\(3\)](#)はここまでとする)

[4]

上の[3]のことに加えて 一以降、呈示していくことらが決定的（前言問題との絡みで決定的）とも言えるところとなるのだが— ここ [4] と振っての部および次いで [5] と振っての部にあつて

ファイト・クラブにてはメイヘム計画の対象が（劇中では標的がニューヨークであるなどと言も明示的には言及されていないのだが）ニューヨークの金融センター、しかも、
[WTCの一区画であることを露骨に示唆する視覚的描写]
が「多用」されている

とのことを呈示することとする。

出典 (Source) 紹介の部 102(4)

S O U R C E 102(4)



Cimabue's Celebrated Madonna (1853-5)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典(Source)紹介の部 102(4)にあつては

ファイト・クラブにてはメイヘム計画の対象が(劇中では標的がニューヨークであるなどと言も明示的には言及されていないのだが)ニューヨークの金融センター、しかも、**[WTCの一区画であることを露骨に示唆する視覚的描写]**
が「多用」されている

とのことの典拠を 一 流通 DVD にて対して該当シーン登場時間を数秒単位まで克明なレンジにて指定することで 一 容易に後追い可能なる式で順次段階的に呈示していくこととする。

以上、申し述べた上で、ここでは ([[4] と振つての部にあつての典拠紹介部における前半部] では) 「まずもつてのこととして」、

[典拠とはならぬところ、のみならず、(これより摘示なしていくような)典拠が現実に存在しているところでそうしたものがあたかも存在しないように衆目を曇らせるといった按配となっているオンライン上の書かれよう]

を(典拠の紹介に先駆けて)問題視することからはじめたい。

記載内容に易変性が伴い、後々までそうした表記が残置するかは何とも言えぬものの、少なくとも記録を取って確認しているところの「現行の」和文ウィキペディア [ファイト・クラブ(映画)] 項目にては 一 現行の英文 Wikipedia にも記載されて「いない」ことながら 一 次のような記載がなされている。

(直下、本稿本セクション記載時たる現行データ取得時 2014 年にて和文ウィキペディア [ファイト・クラブ(映画)] の [舞台] の節にて記載されているところより抜粋するとして)

この映画の舞台は、アメリカのどこにでもありそうな大都市のひとつであるが、具体的にはウィルミントンではないかと指摘する声もある。ウィルミントンは多くの大資本、とりわけクレジットカード会社などが本拠を置く金融都市である。映画中に登場する郵便番号はウィルミントンのものであり、劇中で言及されるニューキャッスル、デラウェアシティ、ペンズグローブといった街はウィルミントンの近くにある。主人公の住むコンドミニウムに書いてあるモットー「A Place To Be Somebody(大人物になるための場所)」はウィルミントン市のモットーと同じである。またラスト近くに出てくる街路の名もウィルミントンに実在する(金融エリアを実際に通っているわけではない)。

(ここまでを和文ウィキペディア [ファイト・クラブ(映画)] 項目の「現行にての」記載内容よりの抜粋とする 一※一)

(※上の日本語版記載に対して現行の英語版 Wikipedia [Fight Club] 項目にては [ウィルミントン] について次のような記載がなされている

⇒

“The exterior of Tyler Durden's house was built in Wilmington, California, while the interior was built on a sound stage at the studio's location.” 「その内装がスタジオ所在地にての防音スタジオで組み立てられた一方でのこととして、タイラー・ダーデン居宅(ファイトクラブの陰謀が進行する場所)の外装セットが「カリフォルニアの」ウィルミントンに構築された」(訳を付しての引用部はここまでとする)。

同じウィルミントンでも(和文ウィキペディアで言及されているような) [デラウェアのウィルミントン] ではなく [カリフォルニアのウィルミントン] 界隈がロケに使わ

れたとしかウィルミントンへの言及は — 現行にあつての英文ウィキペディア上では — なされていない。

他面、英文ウィキペディアでファイト・クラブのロケに使われたと言及されている [カリフォルニアのウィルミントン] ではなく、(和文ウィキペディアで言及されているような) [デラウェア Delaware のウィルミントン Wilmington] の方がクレジットカード会社などにとり相性の良い土地柄であることは本当のこととなり (英文 Wikipedia [Wilmington, Delaware] 項目にての Economy の節にあつて(いちいち訳を付さないが) “ Wilmington has become a national financial center for the credit card industry, largely due to regulations enacted by former Governor Pierre S. du Pont, IV in 1981. The Financial Center Development Act of 1981, among other things, eliminated the usury laws enacted by most states, thereby removing the cap on interest rates that banks may legally charge customers. Many major credit card issuers, including Bank of America (formerly MBNA Corporation), Chase Card Services (part of JPMorgan Chase & Co., formerly Bank One/First USA), and Barclays Bank of Delaware (formerly Juniper Bank), are headquartered in Wilmington. ” と記載されているところがそのことを示している)、映画ファイト・クラブで VESTA カードというカード会社ビルが標的になっているとの描写がみとめられることは事実である。以上のような点から和文ウィキペディアには紛らわしくも取り合う要素はあるとまでは手前は見ている)

以上のように映画『ファイト・クラブ』ではその舞台につき [デラウェアのウィルミントンと親和性が高い] との見立て「も」なせはする。

だが、(どういふわけかそれに対する明示的言及が Wikipedia なぞの媒体にての現行記載内容には一切見受けられないところとして)、映画『ファイト・クラブ』にての [プロジェクト・メイヘム(騒乱計画)発動の対象地] が [「ニューヨークの」ワールド・トレード・センター] そのものであると受け取れる、「普通に考えれば」デラウェアなどを遙か後ろに差し置いてのこととして [当然にそう受け取れる] との視覚的描写が映画の中に際立ってのところでして複数、見られることの方が問題になる。

ここでは

[プロジェクト・メイヘム] (映画後半部よりそちら計画参画要員が [スペース・モンキー] などと呼称されながら推進していると描写される段階的騒乱誘発計画)

の攻撃対象が (デラウェアのウィルミントンなどではなく) ワールド・トレード・センターであると指し示す論拠として「第一に」次のことを挙げておく。

「『ファイト・クラブ』作中では [同時ビル爆破] を最終目標としているプロジェクト・メイヘムの初動段階として、 [一石二鳥計画 — はじめて作戦実行中に警察との銃撃戦で [殉教者] を出した計画 —] なるものが実行される。

同計画では [黄金の球形オブジェ] を爆破し、それを転がして、近くのコーヒーチェーン店にぶつけるとのやりようがとられている (そのオブジェ爆破、そして、転がるオブジェによる二次的コーヒーチェーン店破壊がゆえに [一石二鳥] 計画であるように作中示唆される)。

その際の攻撃対象はより正確には [噴水の中に立つ金色の球形オブジェ]

となり、それと極めて似通った（同一物と見紛うばかりに似通った）「噴水の中に立つ球形オブジェ」が「ワールド・トレード・センターにてのツインタワーの間に極めて目立つオブジェ」（The Sphere というオブジェ）として存在しているとのことがある。

従って、である。

プロジェクト・メイヘムの攻撃対象モデルは「ワールド・トレード・センター」そのものであるとその時点からして「明朗に」見てとれるようになっていいる — いいだろうか。ファイト・クラブのビル爆破に収束するプロジェクト・メイヘム（騒乱計画）の爆破目標の一つが「噴水の中に立つ特徴的な金色の巨大球形オブジェ」となっているのに対して、現実にツインタワーの間には「噴水の中に立つ特徴的な金色の巨大球形オブジェ」が配されて「いた」のである — 」

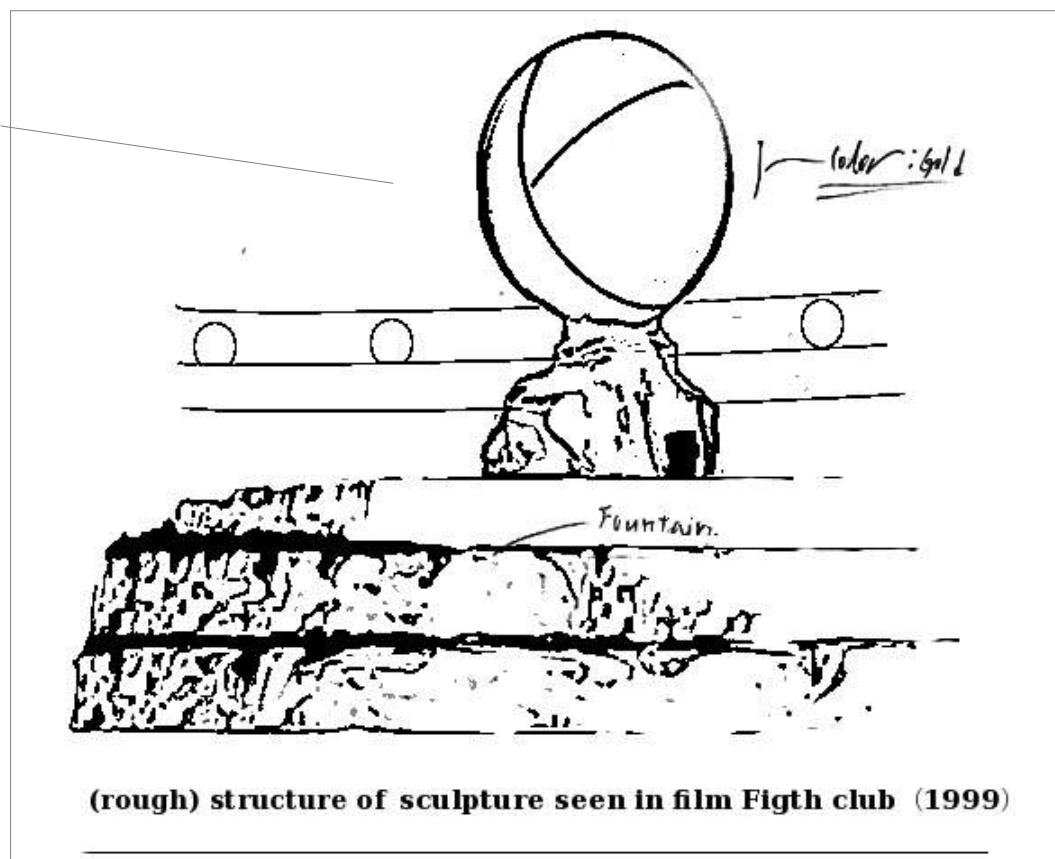
その点、まずもって映画『ファイト・クラブ』にての冒頭部から見ての再生時間（DVD 再生環境タイムカウンター表示）にして

【1時間45分29秒(1:45:29)】

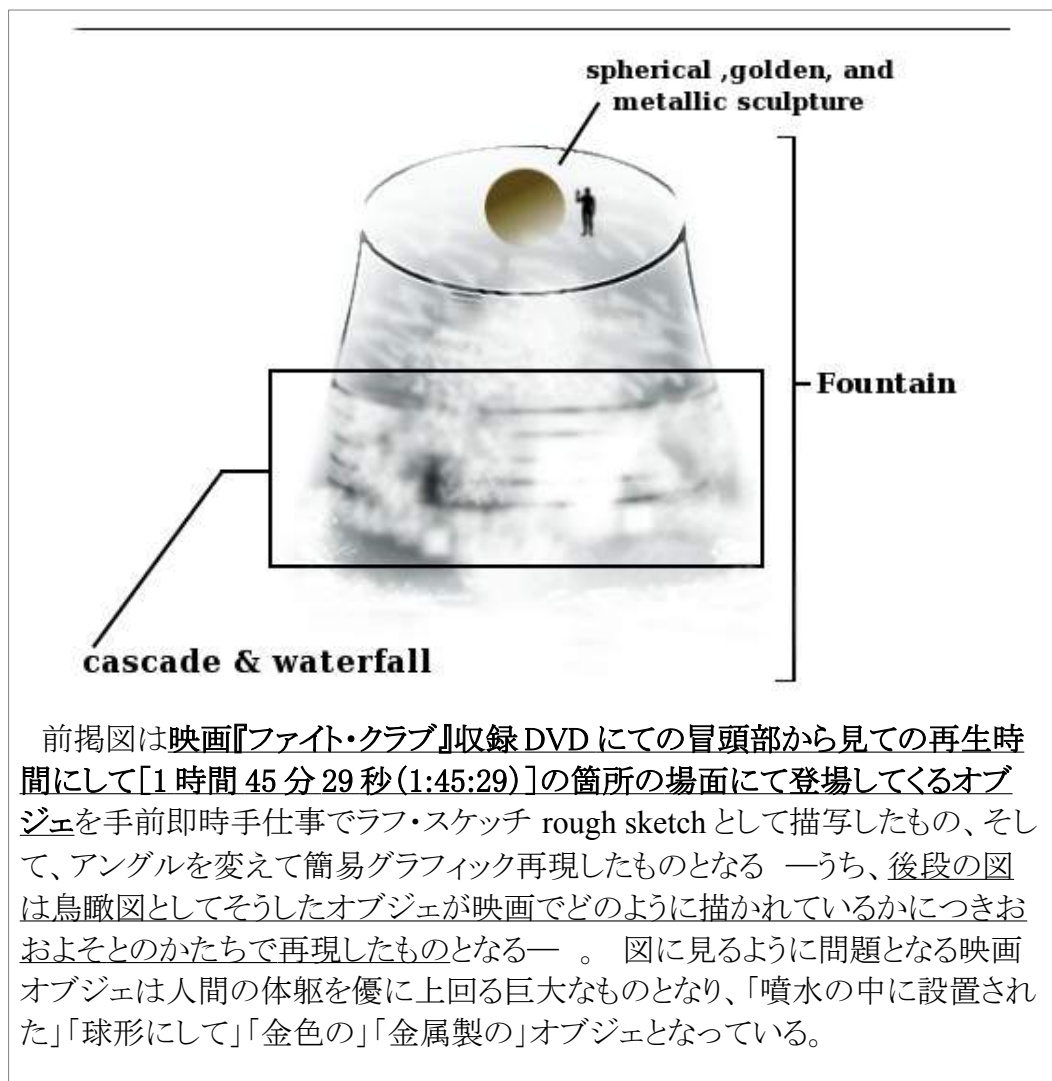
の箇所場面にて登場してくる — Fight Club 劇中にての We were on assignment. We were supposed to kill two birds with one stone. 「一石二鳥の作戦を指示された」との述懐の台詞と共に登場してくる — のが、

「噴水の中に立つ金色の球形オブジェ」

となる（のでその確認を疑わしきには求めたい。尚、キル・トゥー・バーズ・ウィズ・ワン・ストーン、[一石二鳥]の計画が実行される中で同オブジェが転がされる際の映画撮影者らの心境を考えて、『どこまでCGかは知らないが、そこまでして「念入りなイミテーション」をよくもセットとして造ったものだな。この者達の（背後にある）こだわりは尋常なものではないな...』と思うのがツインタワー付設の球形オブジェたる The Sphere について知っている人間の当然の反応か、と筆者は見ており、実際に『ファイト・クラブ』のスフィア・イミテーションの描写のことを問題視する人間も少なからずいる）。



市中流通の『ファイトクラブ』DVD コンテンツにあって再生時間1時間45分29秒の箇所に見ている「噴水の中に据え置かれた巨大な球形オブジェ」を材としての（本稿筆者手仕事としての）おおよそその特徴をとらえただけのラフスケッチ画。表記の如きものがいかようにWTC敷設オブジェの模造型になっているか、疑わしきにおかれては確認を求めたい。



映画『ファイト・クラブ』に見るオブジェのありように対して、ツインタワー敷設の球形オブジェであるスフィアについては「現行の」英文 Wikipedia [Sphere (disambiguation)] 項目 —曖昧さ回避のための網羅的関連語句記載項目— にあつての Popular culture の節にて一言、

“ The Sphere, a 1971 large metallic sculpture located between the twin towers of the former World Trade Center ” 「ザ・スフィアは1971年に完成の「以前の」ワールド・トレード・センター（新ワールド・トレード・センターに再構築される前の旧ワールド・トレード・センター）にてのツインタワーの間に位置していた巨大な金属製の彫刻である」

とまとめられているとの存在となり、表記の再生時刻シーンにあつて映画『ファイト・クラブ』に登場するスフィア像と細かくも直に比較いただきたいとの写真をも含む英文 Wikipedia [The Sphere] 項目にてはその概要につき次のように解説されているとおりのものともなる。

(直下、英文 Wikipedia [The Sphere] 項目にあつて現行記載されているところより引用なすとして)

The Sphere is a large metallic sculpture by German sculptor Fritz Koenig, displayed in Battery Park, New York City, that once stood in the middle of Austin J. Tobin Plaza, the area between the World Trade Center towers in Manhattan. After being recovered from the rubble of the Twin Towers after the

September 11 attacks in 2001, the artwork faced an uncertain fate, and it was dismantled into its components. Although it remained structurally intact, it had been visibly damaged by debris from the airliners that were crashed into the buildings and from the collapsing skyscrapers themselves. Six months after the attacks, following a documentary film about the sculpture, it was relocated to Battery Park on a temporary basis — without any repairs — and formally rededicated with an eternal flame as a memorial to the victims of 9/11.

(訳として)

「スフィアはかつてマンハッタンにてのワールド・トレード・センターのタワーらの間、Austin J. Tobin Plaza (訳注:オースティン・トービン・プラザとはニューヨーク・ニュージャージー港湾会社の重役 Austin Joseph Tobin の名をとって命名されたワールド・トレード・センターの一區画で 2001 年の事件で破壊された場となる ——英文 Wikipedia[Austin Joseph Tobin]項目に After Tobin died in 1978, the Port Authority named the outdoor plaza at the World Trade Center, in his honor, as the Austin J. Tobin Plaza. The plaza was destroyed in the September 11, 2001 terrorist attacks.と記載されているとおりである) にての中央に据え置かれていた、そして、現行、ニューヨークのバッテリーパークにて展示されているドイツ人彫刻家フリッツ・ケーニツヒの手になる巨大な金属製の彫刻となる。(同スフィアは)2001年9月11日の攻撃の後、ツインタワーの瓦礫のあとから回収され、その後、不確実性強くもの運命に直面し、部品部品に分割されることになった。同彫刻は構造的にはダメージを受けることなく留まっていたが、ビルらに突撃した飛行機らおよび崩落するビルらそれ自身の破片にて外面は損傷を被っていた。同彫刻に関するドキュメンタリー・フィルムによると、攻撃の後、6ヶ月してよりバッテリー・パークにて何ら修復処理なされることなしにの暫定的といった形で再配置されることとなり、そして、911の犠牲者に対する追悼碑としての[永遠の火]とともに(ありし日に対して)再び捧げられてのものとなった」

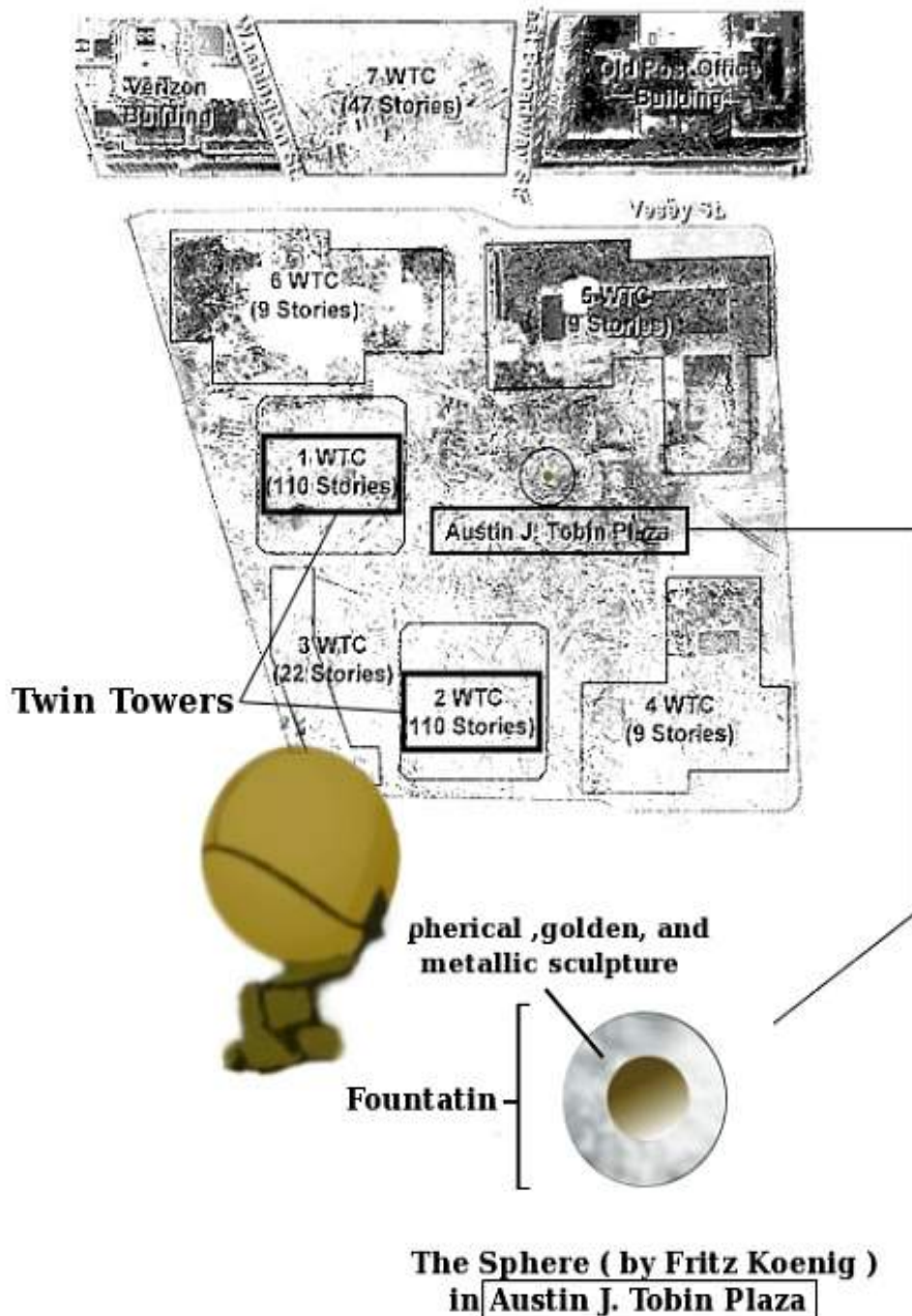
(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

[図解部]

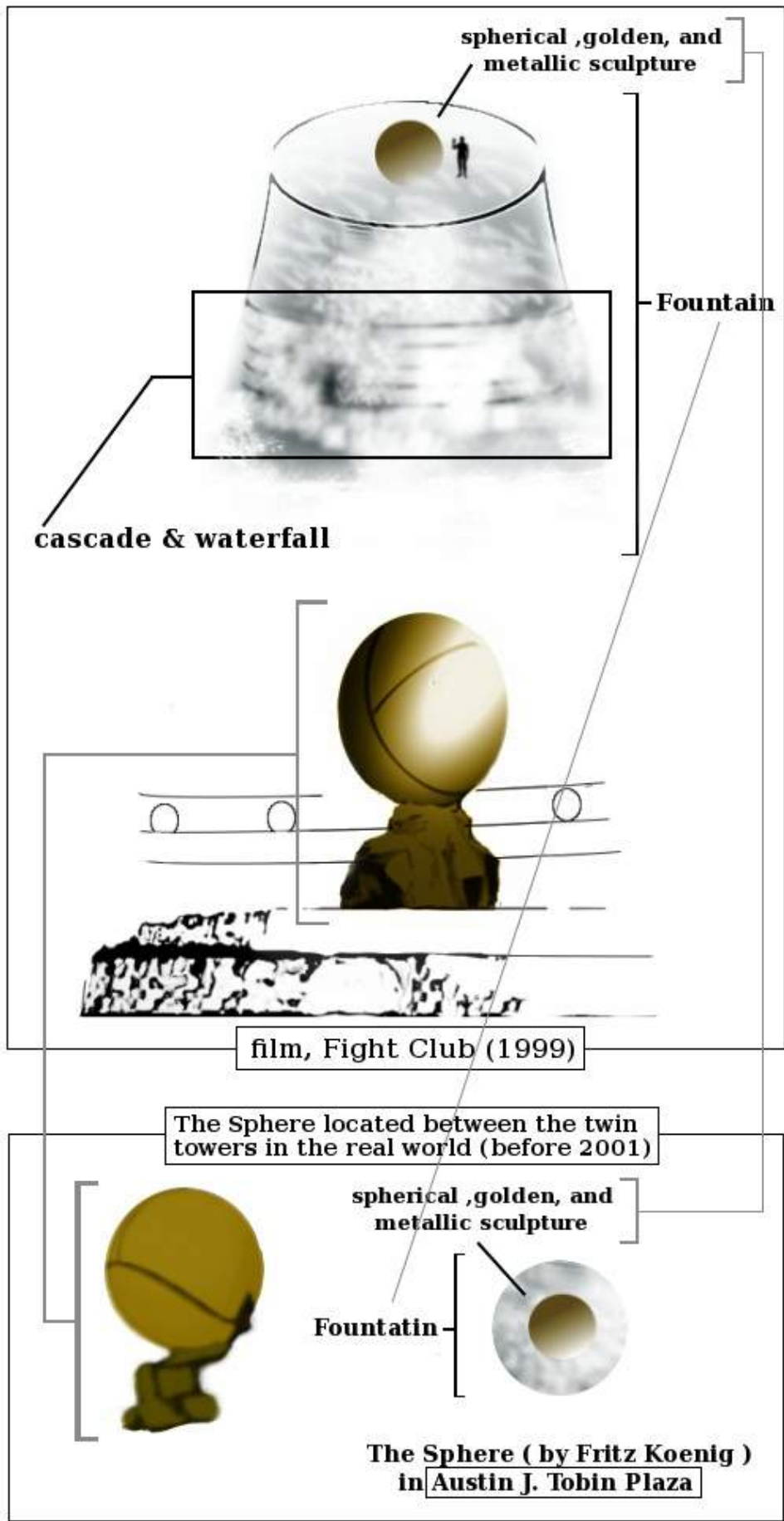
ワールド・トレード・センター、そのツインタワーの合間にかつて存在していた

【「球形の」「金色の(ただし材質は銅)」オブジェたるザ・スフィア】

について英文 Wikipedia [The Sphere] 項目に掲載の写真からも確認できるとのありし日の視覚的概要を下に呈示しておく —ワールド・トレード・センター敷設オブジェたるスフィアは「現行にて」英文 Wikipedia [The Sphere] に掲載されている「ありし日の写真」からも分かるように噴水の中に設置されていた—。



さらに続けて、映画 Fight Club『ファイト・クラブ』(1999)にて登場を見ているスフィア一劇中、最終的にビルの複数爆破倒壊が描かれるのだが、その前に一連の計画にあつての露払いといったニュアンスで爆破されるオブジェ と現実世界のツインタワーの間に敷設のオブジェたるザ・スフィアがいかにかに相似形を呈しているか(はっきり言えば、そこに模倣・被模倣の関係があるのは「明らか」となっている)とのことについての訴求するための図を付しておく(:図に見るように、相互に形状的に非常に似通ったオブジェのことを問題視している。字面で表せば、「巨大で」「球形構造をとり」「金色の」「噴水の中に設置された」「金属製の」オブジェのことを問題視している)。



[5]

さて、映画『ファイト・クラブ』にてファイト・クラブの実行部隊の面々が企図していると描かれている Project Mayhem こと騒乱計画は、([1] および [2] と振っての部でその映画にての描写形態を「克明に」を心掛けて紹介したように)、

[[複数のビルの同時倒壊] による [グラウンド・ゼロ] 現出のための爆破倒壊計画]

となっており (現実の 911 の事件では本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 101](#) にて解説しているように 7 棟のワールド・トレード・センター内のビルが倒壊を見ている) 、また、[3] と振っての部で紹介しているように、

[金融システム・金融会社を標的にしていると描写される計画]

となっている。

といったプロジェクト・メイヘムについては直近、先行するところの [4] の段で紹介しだしているように、

[目標対象がワールド・トレード・センターそのものである露骨に想起させる描写がなされている計画]

とすらなっている。

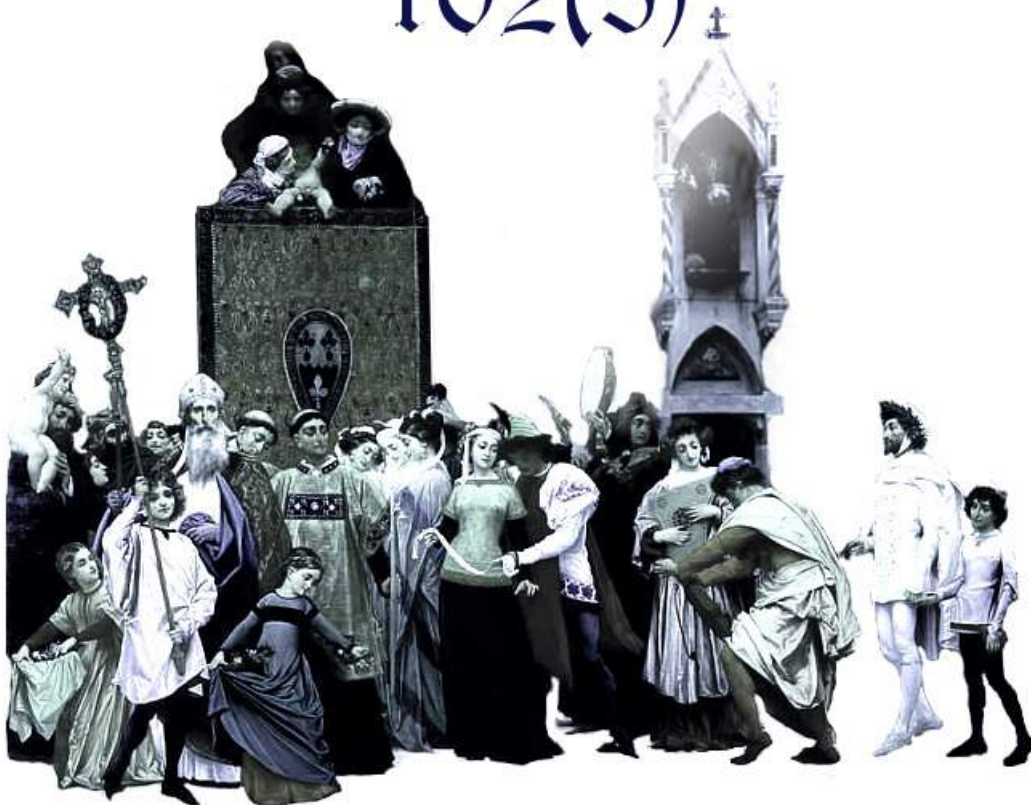
につき、[4] の段では映画『ファイト・クラブ』ではツインタワーの間に敷設されていたザ・スフィアというオブジェの「露骨な」イミテーションが爆破対象 — 最終的に連続ビル倒壊事件に結実するプロジェクト・メイヘムの爆破対象 — として爆破されているとこのことを具体的に「これこれこのシーンでそういうことが誰でも確認できる」と DVD 再生時間を秒単位で挙げて紹介しているわけだが、ここ [5] の段ではさらにもっての他の論拠らから『ファイト・クラブ』内プロジェクト・メイヘムが

[目標対象がワールド・トレード・センターそのものであると露骨に想起させる描写がサブリミナル的に、だが、指摘されれば、すぐにそれと分かる式でなされている計画]

となっていることの根拠を指し示すことにする。

以下を参照されたい。

SOURCE 102(5)



Cimabue's Celebrated Madonna (1853-5)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are
barefaced and brutal.

ここ出典(Source)紹介の部 102(5)にあつては先行する出典(Source)紹介の部 102(4)に引き続き、

[ファイト・クラブにてはメイヘム計画の攻撃対象が(劇中では標的がニューヨークであるなどと言も明示的には言及されていないのだが)ニューヨークの金融センター、しかも、
[WTCの一区画であることを露骨に示唆する視覚的描写]
が「多用」されている]

とのことの典拠をさらに加えもして呈示することとする。

その点、先にて呈示の YouTube 流通動画 — 911 Hidden in Hollywood と題されての動画 — にあつても目立って摘示されているところとなるのだが、

[ファイト・クラブのプロジェクト・メイヘムで標的にされた対象は [ノースタワー North Tower] という名前が付された金融会社のビルである]

とのサブミナル描写が劇中にて含まれているとのことが(一時停止しながら再生しなければ目が追いつかないようなワンカット描写の問題として)現実にある。

以上のことについての典拠(にして即時確認方法)について紹介する前に述べるが、911の事件で崩された [ノースタワー] 及び [サウスタワー] の呼称がなされての双子の塔ら、ツインタワー・ビルは建造当初、[世界で一番高いビル(ら)]であったとのことがある(出典として:表記のことについては現行にての英文 Wikipedia [World Trade Center] 項目に “**At the time of their completion the**

"Twin Towers", the original 1 World Trade Center (the North Tower), at 1,368 feet (417 m), and 2 World Trade Center (the South Tower), were the tallest buildings in the world. The other buildings in the complex included the Marriott World Trade Center (3 WTC), 4 WTC, 5 WTC, 6 WTC, and 7 WTC. All of these buildings were built between 1975 and 1985, with a construction cost of \$400 million (\$2,300,000,000 in 2014 dollars).” (補つても訳として)「それらツインタワーの完成時にて「オリジナルの」1WTC (訳注:旧ワールド・トレード・センターのビルらは1WTCから7WTCと呼称されていたわけだが、現行、[フリーダム・タワー]あらため[ワン・ワールド・トレード・センター]との名称で知られるようになっている再生計画に見る新ビルと区別すべくものこととして表記の部にては「オリジナルの」という枕言葉が付けられているのであろう)たるノースタワーおよび2WTC(サウスタワー)ら、高さにして1368フィート、417メートル相当のビルらが世界で最も高いビルであった (訳注:ちなみに、ツインタワーはエンパイア・ステート・ビルの後を継いで世界で最も高いビルになったわけだが、その期間は東の間のこと、その後すぐにシアーズ・タワーに王位を譲ったことが英文 Wikipedia [History of the tallest buildings in the world] 項目といったものから容易に確認できるようになっている)。 複合商業区画(ワールド・トレード・センター)にての他のビルらにはマリOTT・ワールド・トレード・センター(3WTC)、4WTC、5WTC、6WTC、7WTCがある。それらすべての(ツインタワー外の)ビルらは4億ドル(2014年のドル換算で23億ドル)の建設コストを費やして1975年から1985年の間に建設された」(訳を付しての引用部はここまでとする)と記載されているとおりである。

以上紹介のようにツインタワーの片方の通り名でもあるノースタワー(1WTC)とくれば、

[完成当時、世界で一番高いビルとなっていた「有名な」ビルである]

との世間的認知があつた一方で映画『ファイト・クラブ』の連続ビル爆破対象が

[ノースタワー]

とサブリミナルがかつてのワンカットで描写されているとのことがある。(秒単位で指摘するとして)それは映画をそのまま収録してのDVD再生開始後、再生時間(DVD再生環境タイムカウンター表示時間)が

【2時間46秒後(2:00:46)】

にあつて登場してくるワン・シーン —[3]で取り上げているように『ファイト・クラブ』主人公が資料持参して警察に事件概要を伝えようとする一連の場面の中でのワン・カット・シーンで映画を[一時停止]してチェックしなければ把握は難しいであろうのもの — でそこにては左側に

[VestaCard]

と書かれた黒塗りの箇所の下に [NORTH TOWER BUILDING AND PLAZA] と [爆破対象のクレジット会社ビルの名前] が「明示」されているとのことがある (であるから、疑わしいとの向き、それでいて、人間焼殺を予告しているが如く力学が(馬鹿げた綺麗事仕様のダブル・スタンダードを押しつけつつ)作用しているとその[現実]を直視する勇氣がある向きは映画『ファイト・クラブ』のDVDをレンタルして、その2時間とんで46秒後の場面を再生しながら、停止ボタンを押して確認いただきたいものである —尚、筆者としては確認を強制したいわけではないが(そも、強制しなければ何も確認「しない」ような種別の人間が[尊厳]と[生存]のために真に望ましき行動をなすなどということは[ない]だろうとよく認識しているつもりである)、ここでの話が[我々人間をどうしたいのかとの体系的前言]にして[具体的かつ計算高さが感じられる前言]の問題と同質のものではあることはお含みいただきたいものである(お分かりのことか、と思うが、映画『ファイト・クラブ』にての体系的前言とてたいしたことがないとの認識が筆者にはあり、[「執拗な」体系的前言のその[執拗さ]の背後にある意図こそが真に問題となる]とのことを指し示すのが本稿の趣意である) —)。

その点、映画『ファイト・クラブ』にて(の [DVD再生時間2時間46秒後(2:00:46)] に具現化している)ワンカット描写に見る、

NORTH TOWER BUILDING AND PLAZA (「ノースタワー・ビルディング」・アンド・「プラザ」)

にあつての [[ノースタワー]との語句と[プラザ]との語句を繋げてのやりよう]とくれば、直近の[4]で述べたところの[黄金色のスフィア](噴水の中にあつての巨大球形オブジェ)、[ファイト・クラブで爆破対象とされたオブジェ]と周辺環境までが酷似していたとの現実のツインタワー(ノースタワーとサウスタワー)に隣接するかたちで存在していた同[スフィア]がまさに据え置かれていた一画が

Austin J. Tobin Plaza (オーステイン・トービン・プラザ)

であつた(「ノースタワー」の隣接地に黄金色のスフィア設置のオーステイン・トービン・「プラザ」があつた)とのこともがまた想起される —そもそも WTC 自体が[プラザ]と呼ぶべき金融中心区画であつたことは置いておいても、である— (英文 Wikipedia[Sphere (disambiguation)]項目にての “The Sphere, a 1971 large metallic sculpture located between the twin towers of the former World Trade Center” の現行の記述と英文 Wikipedia[The Sphere]項目にての “The Sphere is a large metallic sculpture by German sculptor Fritz Koenig, displayed in Battery Park, New York City, that once stood in the middle of Austin J. Tobin Plaza, the area between the World Trade Center towers in Manhattan.” 「スフィアはかつてマンハッタンにてのワールド・トレード・センターのタワーらの間、Austin J. Tobin Plaza にての中央に据え置かれていた、そして、現行、ニューヨークのバッテリーパークにて展示されているドイツ人彫刻家フリッツ・ケーニッヒの手になる巨大な金属製の彫刻となる」 との記述を先に引いていたとおりである)。

以上、字面だけで解説してもイメージなしづらいであろうと当然に思うから、映画『ファイト・クラブ』内ワンカット、具体的には本編スタート後 [2 時間 00 分 46 秒] のシーンにてワンカットだけ表出を見ているところの「問題となる」部分を

[テキスト字面および割り付け形態]

を再現するとのかたちで下に挙げておく(再現図像であるため、使用フォントは映画該当部描写と多少異なり、文字の割り付けもほんの少しずれるところもあるが、「おおよその特徴をとらえての」再現図像としてはきちんと用をなしているとの図を下に挙げておく)。



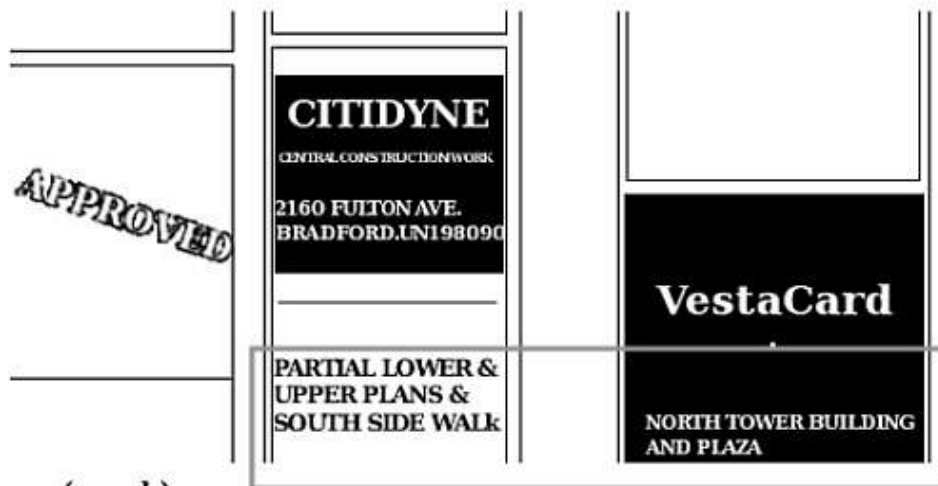
の映画ワン・シーンに登場しているかはDVD（カット・シーンが補強されているとのことでもあるブルーレイではなく本稿時刻表記と秒単位でも差分は出ないだろうとのDVD）をレンタルして、本編スタート後「2時間00分46秒」のシーンを一時停止しながら確認いただきたい次第である。また、問題となる描写については下にさらに呈示するような図にて指摘しているようなかたちで

[ノースタワー] (1WTC)

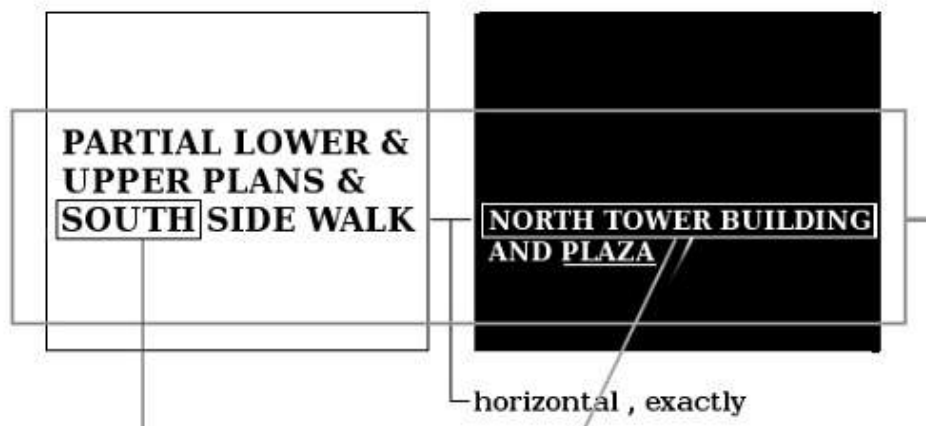
[サウスタワー] (2WTC)

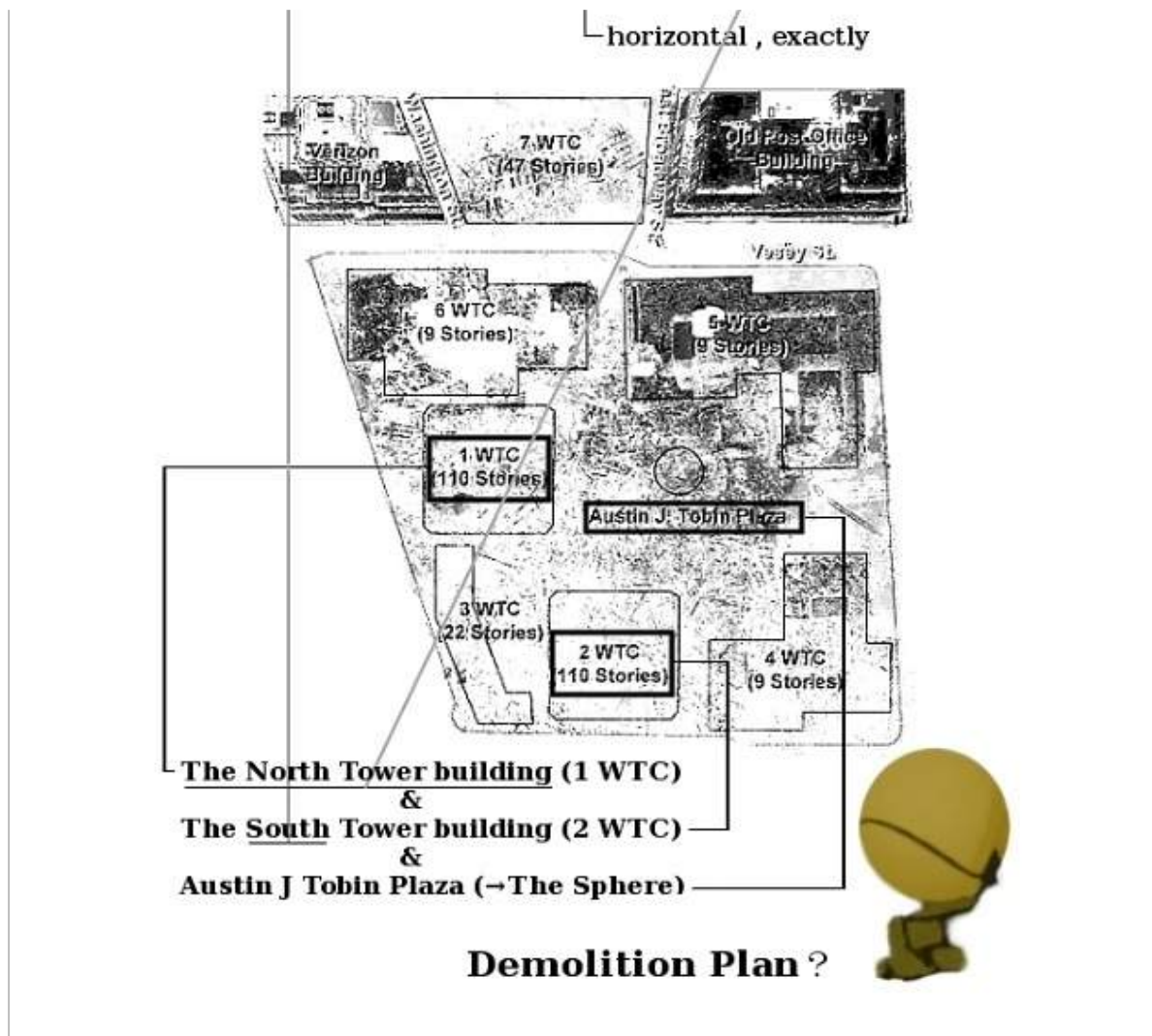
[オースティン・トービン・プラザ]（先に問題視しているように映画『ファイト・クラブ』にて「噴水セット」まで用意されてのものなのか、入念に「爆破対象としてのイミテーション(模造物)」が構築されて登場してきたザ・スフィア、ツインワー敷設オブジェたる同ザ・スフィアが置かれていた場所）

との判断がなせるようになっていくとのこと「も」ある（ここまでの内容を把握なしにいただいたうえで図をご覧いただければ大体はご理解いただけようかと思うが、「問題となるシーンに表出を見ている文書内文字情報でノースタワー・ビルディングが段組みでサウス・ウォークなるものと丁度、平行となるようなかたちで描写されていること」、「ノースタワー・ビルディングとあわせてプラザとの語句が配されていること」、さらに述べれば、「ワールド・トレード・センターが存在していたロウワー・マンハッタンを想起させるように呈示の場面には PARTIAL LOWER との文字列も見受けられること」、「スフィア・イミテーションを爆破しているさまが描写されているとの映画概要を顧慮して同定・導出できること」、それらすべてがワールド・トレード・センターを指すようになっていく。



(rough)
structure of one scene of Fight Club (1999 film)
 related with [Project Mayhem demolition plan map]
 (= DVD (sold in Japan Edition) time-record : [2:00:46])
 hour minute second





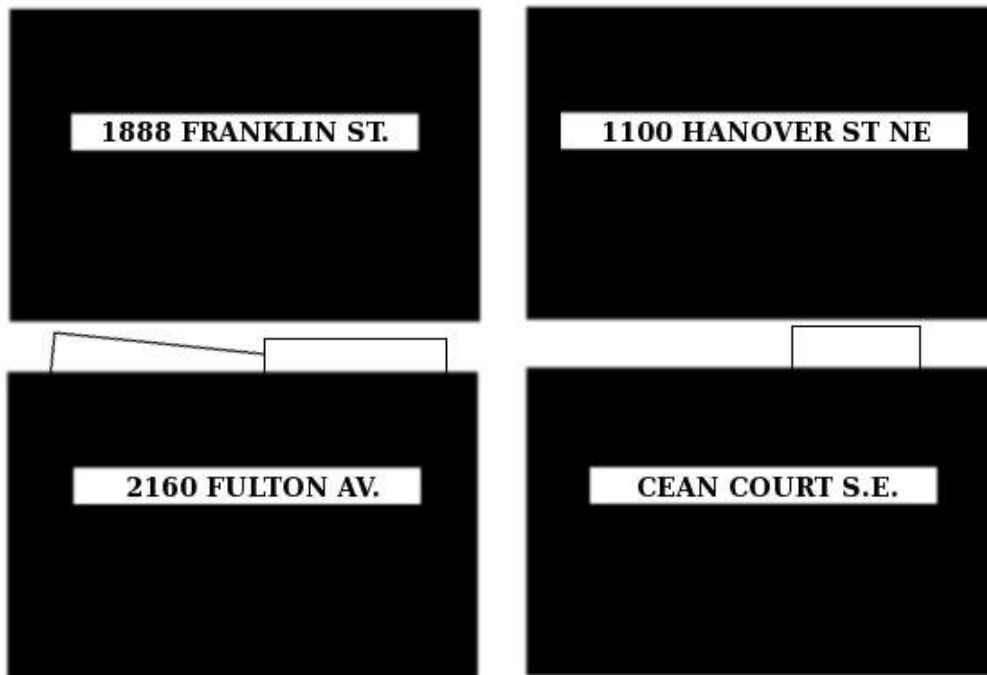
さらに、である。[映画『ファイト・クラブ』のプロジェクト・メイヘムの標的がワールド・トレード・センターであるとサブミナル的にはきと示されている]とのことについてはここまで表記のことで終わらない。映画をそのまま収録してのDVD開始後、再生時間(DVD再生環境タイムカウンター表示)にあって—これまた秒単位で指定するとして—

【1時間56分10秒後(1:56:10)】

の段階で登場してくるワン・シーン、主人公が(ブラッド・ピット演じての)自身の別人格が大規模テロ計画を推進しているとのことを察知してその計画概要を把握しようと躍起になっている際にファイト・クラブ拠点内の計画各部署—ビル同時爆破に向けて動いている計画部署—への[連絡先毎の壁掛け型資料投函ボックス]が登場してくるとのそのワン・シーンには

(左上から) [1888 FRANKLIN ST.] [2160 FULTON AV.] [1100 HANOVER ST NE] [CEAN COURT S.E.]

との各部署連絡先ラベルが壁に貼られているとことが確認できるようになっているとのこと「も」問題になる(いいだろうか。国内で流通している日本語字幕付きDVD版—際立ってインモラルな劇場未公開シーンなども組み込まれているブルーレイ版「ではない」方—の『ファイト・クラブ』の[1時間56分10秒後](DVDカウンター表記にての1:56:10)のシーンを一時停止して見てみることで上記のような連絡先ラベルを確認できるようになっている)。



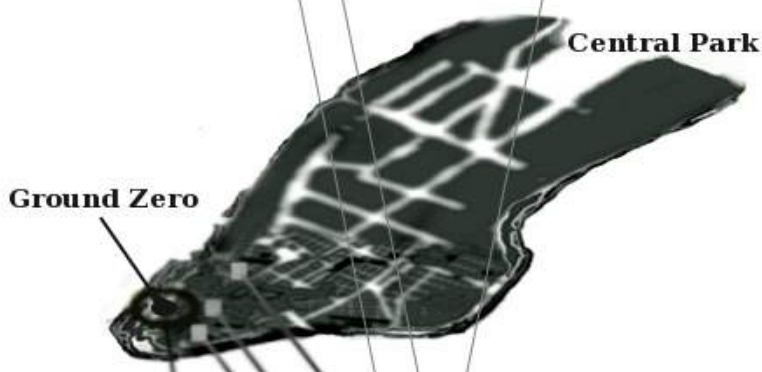
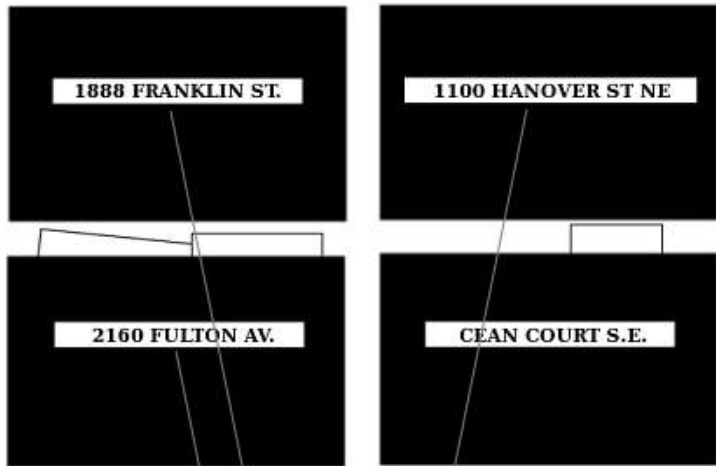
**structure of one scene of Fight Club (1999 film)
related with [Project Mayhem demolition plan]
(= DVD (sold in Japan Edition) time-record : [1:56:10])
hour minute second**

そこにて記載されている [1888 FRANKLIN ST.] [2160 FULTON AV.] [1100 HANOVER ST NE] [CEAN COURT S.E.] について、

[FRANKLIN ST] [(FULTON AV.あらため) FULTON ST] [HANOVER ST]

は現実にワールド・トレード・センター近郊 (Franklin St は北側に向かってかなり離れているが、それでもおよそ一マイル圏内) の通りの名前となっているとのことがある。うち、Fulton St (フルトン・ストリート) は旧 WTC 跡地のすぐ東側となり (ワールド・トレード・センターに東より直結している通りといった按配となる)、HANOVER ST もそのフルトン・ストリートより南に下った通りの名前となり、WTC に直結こそしていないが、WTC と近距離にある通りの名前となっている (地図の縮尺を見る限り、両者の距離的離隔は数百メートルか)。

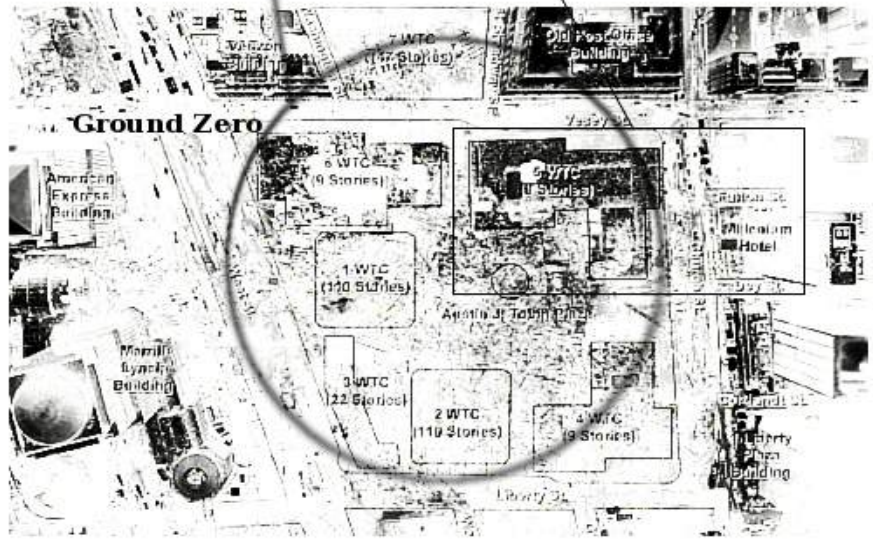
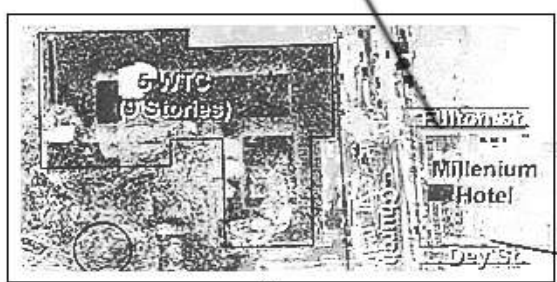
まったく同じくものことを指摘しているとの海外の人間もいるように、下にて挙げての図を参考にしつつ、オンライン上の [マップ検索] —ニューヨーク・マンハッタン地域にての [FRANKLIN ST] [(FULTON AV.あらため) FULTON ST] [HANOVER ST] の所在地にまつわるマップ検索—などをなしていただければ、上のことからして正しいことがご理解いただけるはずである (:尚、筆者は同じくものことにつき海外の動画情報らデータを元に確認なしてみても、それが正しいと知り、心底、[この世界のくだらなさ] に呆れさせられたところになっている —※真に問題となることによって殺されても文句が言えぬような相応の輩ら (マス・メディア構成員のような真実に決して向き合おうとしないとの輩ら、すなわち、この世界の諸種の酷薄なるやりよりの犠牲者の死を真に弔うとのことに通ずる努力、事実の摘示でもってこの世界の悲劇の再生産を防ごうとの努力を決してなそうとしない、否、むしろ、悲劇の再生産を阻むような力学の増大を [虚偽の強化と固守] で阻むことを役割としている節ある相応の輩らなどその最たるものであろう) が揃いも揃って [正気の存在] であるのならば無視してはならぬところに対して [黙過を決め込んでいる] とのありさまとなる、そうした [くだらなさ] に呆れさせられたところとなっている—)。



Franklin St, New York

Fulton St, New York (← Fulton AV.)

Hanover St, New York



『ファイト・クラブ』のプロジェクト・メイヘムの標的がニューヨークのワールド・トレード・センターであることがサブリミナル的に示されているとのことには「まだ続きがある」。

映画をそのまま収録しての DVD コンテンツの本編開始後、再生時間 (DVD 再生環境タイムカウンター表示) が

【1 時間 41 分 24 秒後 (1:41:24) から 1 時間 41 分 30 秒後 (1:41:30)】

の段階で登場してくるワン・シーンにてのダイアログ —英語版字幕をオンにすることで文字情報としても容易に確認できるとのダイアログ— は次のものとなる。

In the world I see, you're stalking elk through the Grand Canyon forests around the ruins of Rockefeller Center. (日本語字幕に見るそれでは「お前は廃墟となった——ロックフェラー・センターの大渓谷でヘラ鹿を追う」との訳が振られている)

以上について述べられることは次の通りのことである (: 同点については YouTube でも流通を見ていた 911 Hidden in Hollywood Part3 と題されての YouTube 流通動画にても極めて短く指摘されていることであるが、同動画を検証し、「まさしくその通りである」と筆者も納得させられたこととして次の通りである)。

「ニューヨークのマンハッタン中心部には —[セントラル]・パークや [セントラル]・ニューヨークといった呼称を除き— [センター] が付されての目立っての区画が二つある。片方はワールド・トレード・センター。もう片方はロックフェラー・センター (タイラーがファイト・クラブで廃墟となっているさまを口に出していたロックフェラー・センター) である」

だけではない。調べればすぐに分かることとして次のようなこと「も」ある。

・ワールド・トレード・センターとロックフェラー・センターの間には距離的離隔はさしてない。ニューヨークにての [ロックフェラー・センター] 所在地は (直上に呈示の地図にてのセントラル・パークと記しての部を基準に見ていただきたいが) セントラル・パークの真下 (南側) にて 1 キロ圏内にあるという商業区画であり、ワールド・トレード・センター跡地とは大体にして直線距離で [9 キロメートル] 程度ほどになる (縮尺表示付きの地図で確認されてみるとよからう)。

・これが大きい。[ワールド・トレード・「センター」] も [ロックフェラー・「センター」] もロックフェラー一門の人間が旗振り役となって造成させた商業区画としてつとに知られている (ワールド・トレード・センターがロックフェラーの関係者の構想によって実現したものであることについては、(現行、[補説 4] との段にての話をなしているわけだが)、本稿にての [補説 1] と付しての段でも The New York Times のオンライン上にて流通している過去記事を引用しつつ具体的経緯について示していたことであるが (出典 (Source) 紹介の部 64 (8))、ここではより端的に同様のことを示す記述を英文 Wikipedia [World Trade Center] 項目にての「現行の」記載内容よりの引用で示しておくこととする。

(続いて上の英文ウィキペディア該当項目より引用をなすとして)

“ During the late 1940s and 1950s, economic growth in New York City was concentrated in Midtown Manhattan. To help stimulate urban renewal in Lower Manhattan, David Rockefeller suggested that the Port Authority build a World Trade Center in Lower Manhattan. ” (訳をなすとし) 「1940 年代後半および 1950 年代の間、ニューヨーク市の経済的成長はマンハッタンはミドルタウンの部に集中していた。ロウアー・マンハッタン (ミッドタウンより南の区画) の都市刷新への刺激とするため、デヴィッド・ロックフェラーはニューヨーク・ニュージャージー港湾会社 (ポート・オーソリティ) にロウアー・マンハッタンにワールド・トレード・センターを建設すべしとの提案をなした」

(基本的媒体よりの引用部の訳はここまでとしておく)。

以上のようにワールド・トレード・センターはロックフェラーの人間の推進によって建設計画が進んだものであり、については、ニューヨーク州知事となっていたネルソン・ロックフェラーの後ろ楯があったとの事情にまつわるあれやこれやについても主要メディア媒体からして確認できると本稿の先の段で(オンライン上より該当ページ特定できるかたちにて)紹介している——※述べておくが、筆者は財閥関係者陰謀論の類を唱道し、「塵と金は積もる程に汚い」との式でそうした者達に裏が現実にあったとしても、そうしたたかだかもの財閥関係者程度の存在がこの「根本より計算尽くで構築されている節ある一大監獄の支配者(ないしは陰謀の主たる立役者)」であるとのことを「厚顔無恥に」鼓吹するような相応の人間ら、[頭の具合のよろしくない陰謀論者][衆目を惑わすために使役されている節ある類]のようなものとしてここでの話をなしているわけ「ではない」(以前事例から察するにこれよりもありうべきところとしてそうした手合いらが「相応の力学あってだろう」真実を台無しにするために本稿のようなものにすら財閥陰謀論が如き糞尿の臭い(失敬)を付けようとするのがあったとしても、である)。本稿の先の段を振り返ってご覧いただければ、よくご理解いただければ、本稿筆者が本稿にあっての先立つ[補説1]の部からして[ロックフェラーとツインタワーの関係性]などとのことを問題視していたこと、それは[記録的事実の問題]として[ロックフェラーのマンハッタンの双子]にまつわる特定作家の手になる小説作品(『スラップスティック』という作品)が[ブラックホールの人為生成の問題と粒子加速器の問題]につき「ありうべからざる折に」「隠喩的に」言及していたと解されるだけの事実関係が「現実」「そこにある」こと、そして、それが911の事件と結びついているとすら述べられるようになってきていることの意味を問うためであったがゆえである(たかが俗間の人間の世界にあっての大富豪およびその閥閥など利益共有集団が如きが[そこまでのこと]を隠喩的かつ計算してできるわけがないとのことは本稿をきちんと読めば、ご理解いただけるものかと当然に思う)——。

(脇に逸れての記載が長くなったが)、ワールド・トレード・センターに対して、他面、ロックフェラー・センターについては(一時期、丸の内のオーナーとの俗称でも知られる三菱地所にバブル期に(結果的に失敗しての)買収をなされたとのことが知られる一画でもあるわけだが)その造成自体はジョン・D・ロックフェラーによってなされた一区画であることが[史実]の問題としてよく知られている。については、「現行」にあっての和文ウィキペディア[ロックフェラー・センター]項目にての[建設]と付されての節よりの引用をなすだけでも十分か、と思う。であるからそうするとして、(続き引用として)“大富豪のジョン・D・ロックフェラーによって1930年から建設された。前年に起きた大恐慌の影響でその後建設計画が変更され、全ての建築物が完成したのは9年後の1939年であった”(引用部はここまでとする)とのことがロックフェラー・センターに関しては知られている。

以上のことからニューヨークはマンハッタンにて目立って[センター]が付されての一画であるワールド・トレード・センターとロックフェラー・センターは非常に親和性が高い区画である(既述のように距離としてはおよそ9kmぐらい離れているが親和性が高い区画である)と述べられもし、既にその問題性を指摘してきた『ファイト・クラブ』にて“*In the world I see, you're stalking elk through the Grand Canyon forests around the ruins of Rockefeller Center.*”(日本語字幕に見るそれでは「お前は廃墟となった——ロックフェラー・センターの大渓谷でヘラ鹿を追う)などとの台詞まわしが出てくること「できえ」問題になる素地がある——※なおもってして述べておくが、“*In the world I see, you're stalking elk through the Grand Canyon forests around the ruins of Rockefeller Center.*”との言いまわしはチャック・パラニューク(Chuck Palahniuk)の手になる1996年初出の原作小説Fight Clubにあって含まれているところのものとなる。その伝から行けば、映画の同じくもの言いまわしのことまでを問題視するのは行き過ぎと非難される素地があるようにもとられるであろう(すくなくとも情報通であるとのまともな向きを想定した場合には、である)。だが、そうした批判はあたらぬ。第一、チャック・パラニューク(Chuck Palahniuk)の手になる1996年初出の原作小説Fight Clubからして、いや、チャック・パラニュークとの作家やりようそれ自体からして911の事件との兼ね合いで問題となる要素

を帯びているとのことがある（については間を経ずに細かくも解説することとする）。第二。また第一のこととあわせて思料なすことで「[よりもって意味をなす]」ところとして映画『ファイト・クラブ』に関しては原作小説には含まれて「いない」との「あまりにもかぐわかしき要素」が視覚的に付与されているとのことがあるとのこともまたある。それについては映画劇中にてのキル・トゥー・バーズ・ウィズ・ワン・ストーン、先述の一石二鳥作戦で「ツインタワー敷設のオブジェを入念に模倣したオブジェ」が標的にされていると描かれていることもそうであり、映画劇中にてワールド・トレード・センターにあっての「ノースタワー」（および「サウスタワー」、そして、「オースティン・トービン・プラザ」）が標的になっていると露骨に示唆するワンカット描写が入れ込まれているとのこともそうである（「元より臭気放っていたもの」（原作小説）にさらに臭気を付け加えたような映画の特性が問題となる、そのように述べているのである）――。

（以上をもって（[1] から [9] と振っての指し示し事項のうちの）[5] の部の典拠にまつわる **出典** (Source) 紹介の部 102(5) を終えることとする）

話がややこしきに傾きすぎているきらいがあるか、とも思う。であるから、[4] および[5] と振っての部で摘示してきたこと――[映画『ファイト・クラブ』にあってはワールド・トレード・センターが「グラウンド・ゼロ現出のための連続ビル爆破計画」の標的であるとサブリミナル的に、だが、普通には視認できぬ程に刹那のことながらも露骨に、とのかたちで示唆されている]とのことにまつわって摘示してきたこと――について下にまとめた表記をなしておくこととする。

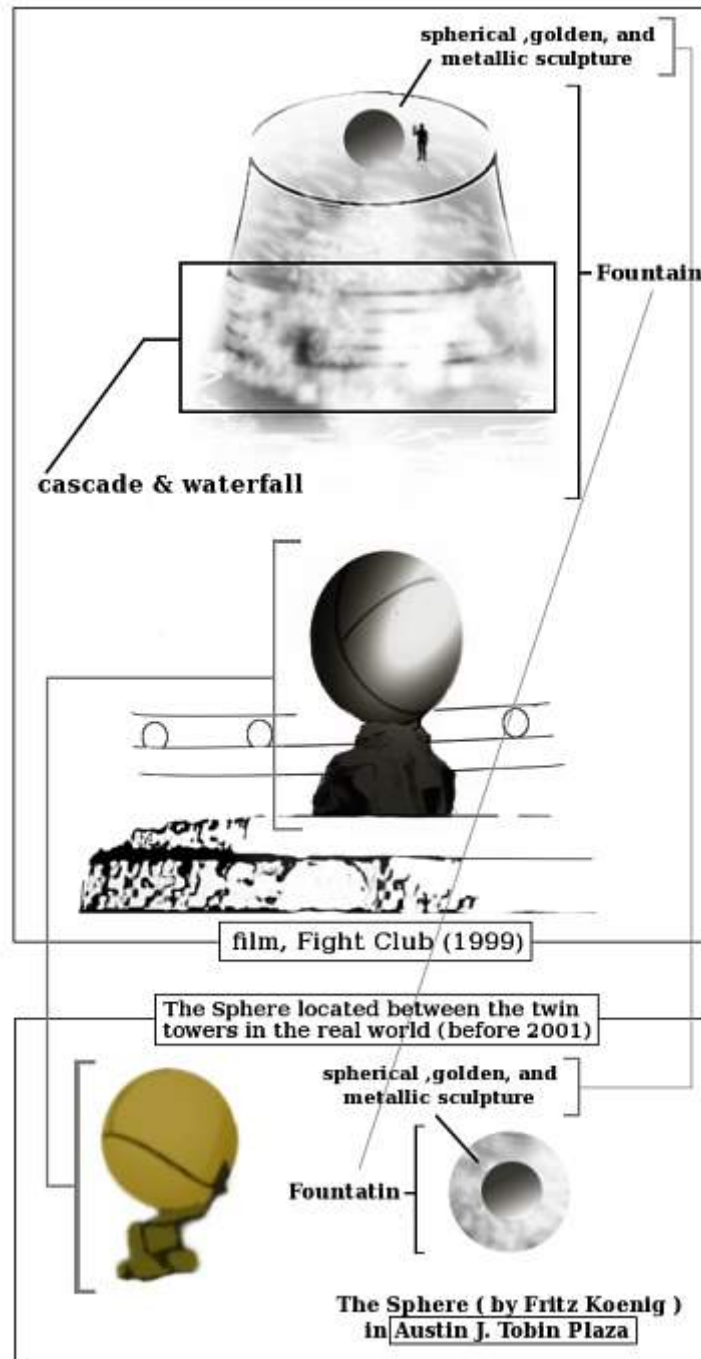
映画『ファイト・クラブ』（1999）にあって見受けられる、

「金融システムを崩壊させるとの名目での複数ビル爆破――首謀者が爆破対象地をグラウンド・ゼロと呼ばわっての複数ビルを発破倒壊させる筋立ての「プロジェクト・メイヘム」（[1] および [2] を参照のこと）――の攻撃標的地点」（爆破計画の首魁に映画冒頭から「グラウンド・ゼロ」と（和文字幕ではなく原語英語にて）呼ばれている爆破目標地）

が「ワールド・トレード・センター」（先の2001年の911の事件の結果、計七棟のビルが連続倒壊することになった現実世界の金融センターにして、七棟のビル倒壊を見て事件後「グラウンド・ゼロ」と呼び慣わされるに至った一画）そのものであると述べられる論拠は次のことらにある。

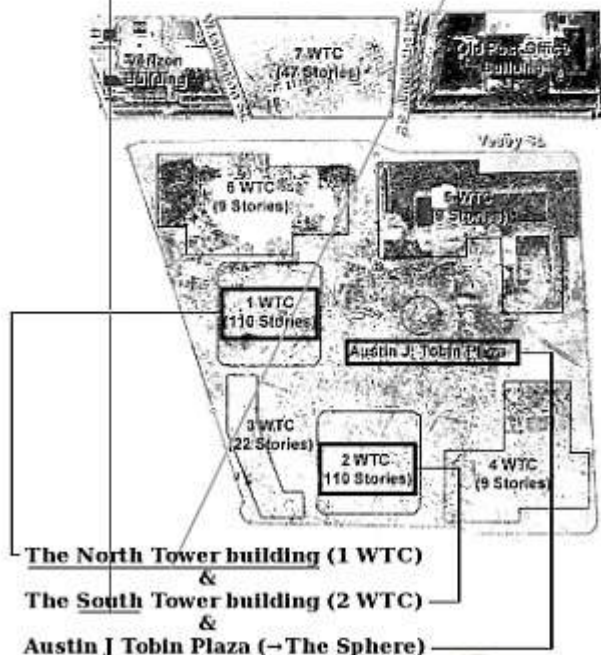
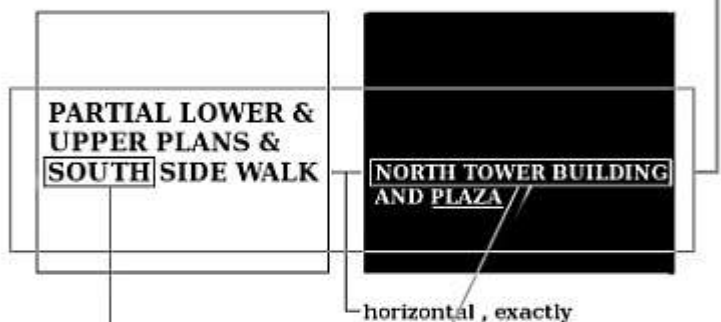
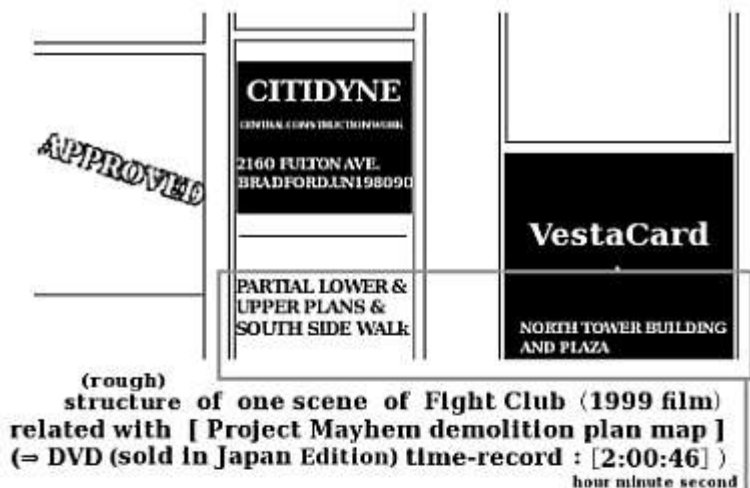
「映画『ファイト・クラブ』では噴水の中に設置されている金色の巨大球形オブジェが「プロジェクト・メイヘム――連続ビル爆破に収束していく計画――の初期爆破対象に選ばれる（と1999年公開の当該映画劇中にて描写される）が、同様に噴水の中に設置されていた金色の巨大球形オブジェが現実世界のワールド・トレード・センターのツインタワーらの中間地点（にてのオースティン・トービン・プラザ）に据え置かれていたとのこと」があり、それは映画に登場の爆破対象と「同一物か」と見紛うばかりに酷似しているものである（[4] の段にて解説をなしたことである）」

（上のことにまつわっての再掲図を下に挙げる）



[『ファイト・クラブ』 劇中、爆破先対象となっているビルのことを記した計画文書がワンカットで表示されるが、そこにては VestaCard と記され、爆破対象先が [NORTH TOWER BUILDING AND PLAZA] と明記されている、換言すれば、[世界で一時期、最も高かったビルであるツインタワーの片方の名称(ノースタワー)と問題となるところの黄金色のオブジェ The Sphere が据え置かれていたノースタワーおよびサウスタワーとのツインタワー合間の the Austin J. Tobin Plaza を想起させる単語 (プラザ)] が明記されている。 のみならず、同じくものカットには PARTIAL LOWER & UPPER PLANS & SOUTH SIDEWALK との文字が [NORTH TOWER と SOUTH SIDEWALK が白塗り・黒塗りの別あれど、同じ高さの段にての文字列として対応する] ように配されている。無論、そこからは並び立つノースタワーとサウスタワーの双子の塔、ツインタワーのことが想起される場所である — ちなみに WTC が存在していたのはそこにての文字列表記に見る PARTIAL LOWER との記述と結びつくようにロウワー・マンハッタン (Lower Manhattan) である — (分秒単位にてのシーン登場時刻への言及も含めて [5] の段を参照のこと)]

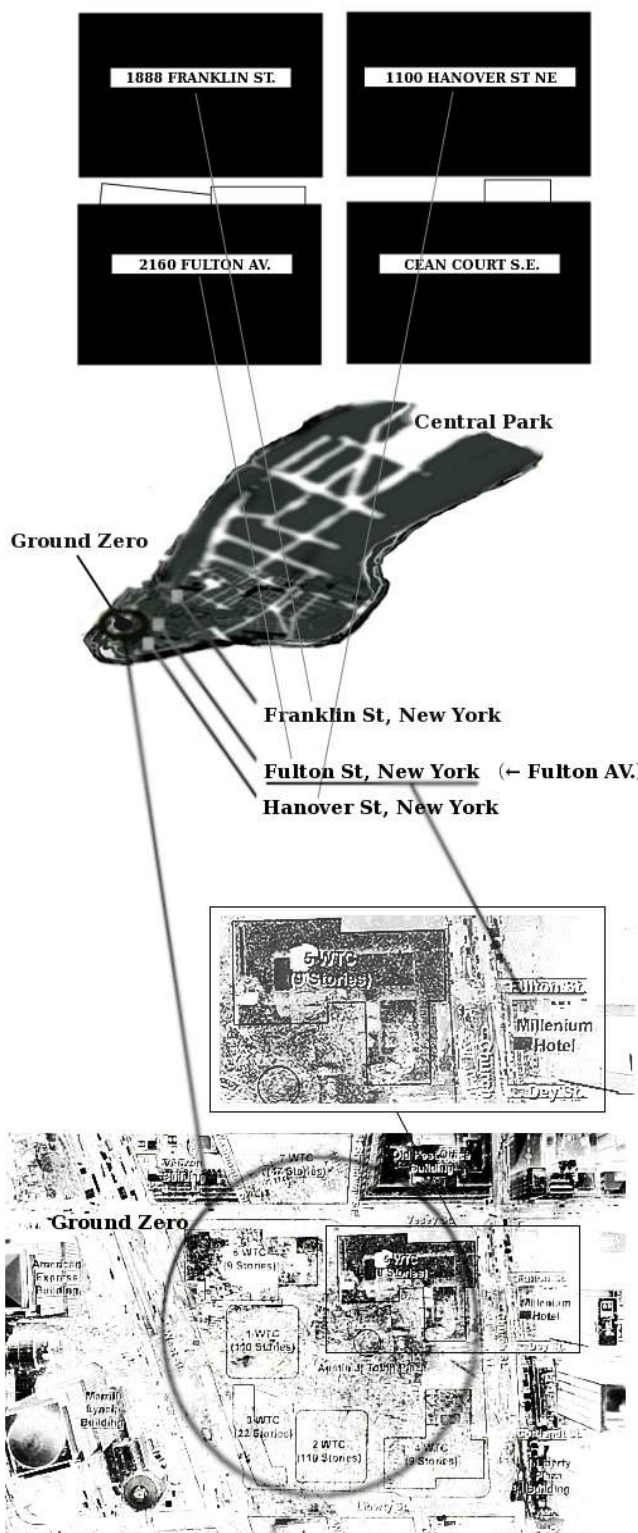
(上のことにまつわっての再掲図を下に挙げる)



[映画に見る [ファイト・クラブ拠点内の計画各部署 —ビル同時爆破に向けて動いている計画部署— への連絡先毎のやりとり文書投函用ボックス] ではそれら投函用ボックスにあつて (左上から) [1888 FRANKLIN ST.] [2160 FULTON AV.] [1100 HANOVER ST NE] [CEAN COURT S.E.] との各部署連絡先ラベルが貼られている

とのことが確認できるようになっている。そこにて記載されている [1888 FRANKLIN ST.] [2160 FULTON AV.] [1100 HANOVER ST NE] [CEAN COURT S.E.] に
つき、[FRANKLIN ST] [(FULTON AV.あらため) FULTON ST] [HANOVER
ST] の三者はワールド・トレード・センター近郊 (Flanklin St は北側に向かってかなり
離れているが、それでもおよそ一マイル圏内) の通りの名前となっているとのことがある
([5]の段を参照のこと)

(上のことにまつわっての再掲図を下に挙げる)



[『ファイト・クラブ』 主人公のオルター・エゴであるタイラーが (後に金色の球形オブ

ジェを爆破するプロジェクト・メイヘム初動計画の進展シーンに移行する前の場面にて「お前は廃墟となった——ロックフェラー・センターの大渓谷でヘラ鹿を追う」との台詞を口にしている。そこに見る「ロックフェラー・センター」とはワールド・トレード・センターと同様にセンターが名称につくマンハッタンにての目立っての区画であり、また、ワールド・トレード・センター同様、ロックフェラーの人間が旗振り役になって造成させた区画となる〔5〕の段を参照のこと〕

容易に後追いできる(確認のためにやることと言えば、レンタルDVDを借りて秒単位で指定しているDVD再生時間のシーンを英文字幕オンにして確認するだけである)との式で先に呈示してきたことら、そちらをまとめもしての上の枠内記述部をもってして

「(相応の人間らが「映画『ファイト・クラブ』の舞台をデラウェア州ウィルミントンであると見ることできる」などと強調していようと)『ファイト・クラブ』にて「グラウンド・ゼロ」を現出させる場所として冒頭から言及されている「ビル爆破計画目標地」がワールド・トレード・センターそのものであると「明朗に」述べられるようになっている」

とする理由が奈辺にあるのか、ご理解いただけるか、と思う。

以上、振り返ったうえでこれより続いての〔1〕から〔9〕と振っての一連の部の中にあつての〔6〕の部に入ることとする。

[6]

さらに加えて映画『ファイト・クラブ』については次のようなことら「も」が述べられるようになっているとことがある。

〔一実際にそうしたこともが現実世界にあつて「も」の真実となっているかは取りあえずも置いておいて— 後の911の事件にまつわつて「7ワールド・トレード・センターのパンケーキ状の急遽倒壊は〔発破倒壊(コントロールド・デモリッション)〕として発生したと判断できる。大統領府は事案についてきちんとした調査を行うべきである」と米国建築家団体に数千人単位もの専門家ら署名が引っさげられて告発されているとのことがある(出典(Source)紹介の部101を参照のこと)わけであるが、そうした現実世界のありようを想起させるように映画『ファイト・クラブ』では「時限式発破倒壊機構へのこだわり」が執拗なものとして見てとれるとことがある— 映画劇中内にて「ワールド・トレード・センターそのものである」とワンカットで示されている場所(既述)に対するビルらの「パンケーキ状倒壊」に至る発破爆破計画実行描写以外のところでも「時限式発破倒壊へのこだわり」が見てとれるとことがある—。具体的には「コンドミニウム—ピアソン・「タワーズ」という物件—の上階の主人公居宅」が「火災爆発」を起こしたとの描写が劇中にてなされているとすることがあり、それが後に「タイラー・ダーデン(二重人格症状を呈している主人公の別人格)による何時でも爆破できるように仕掛けられていた爆破機構による時限性の人為爆破」であると判明した上、その「火災爆発」のシーンの直前に「飛行機が他の航空機と激突するとの主人公の空想シーン」が展開しているとのことがありもする(：要するに「取り憑かれた

男]である主人公、[タイラー・ダーデンというオルター・エゴ(別人格)の縛りを受けての男]であるとの主人公が取り憑いたタイラー・ダーデンが物件上階にて時限性ガス爆発を引き起こす前に飛行機の衝突事故を空想しているシーンが映画にて展開しているのとのことがある。それにつき述べるまでもないことか、と思うが、[ワールド・トレード・センターにてのビル連続倒壊災害]と[飛行機の衝突事故]はワンセットのものと衆目にて認知されている]

[映画劇中、一瞬登場する社会的困難な状況にある者達の会合参加リストの中に「不自然に」航空機フライトに関する記述がなされているとのことがある]

[映画後半部、ホテルよりのチェックアウト時清算のための電話接続のリスト化記録—プロジェクト・メイヘムこと金融企業らビル爆破計画に絡んでの電話接続リスト化記録—の確認の場面で911という数値のことを想起させるような描写がなされているとのことがある]

それぞれのポイントにつき「DVDレンタルだけで確認を容易になせるように、」とのかたちにての摘要解説をなすこととする。

出典 (Source) 紹介の部 102(6)

SOURCE 102(6)



Cimabue's Celebrated Madonna (1853-5)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

[一実際にそうしたこともが現実世界にあつて「も」の眞実となつてゐるかは取りあへずも置いておいて— 後の911の事件にまつつて「7ワールド・トレード・センターのパンケーキ状の急遽倒壊は[発破倒壊(コントロールド・デモリッション)]として発生したと判断できる。大統領府は事案についてきちんとした調査を行うべきである」と米国建築家団体に数千人単位もの専門家筋署名が引っさげられて告発されているとのことがある(出典(Source)紹介の部 101を参照のこと)わけであるが、そうした現実世界のありようを想起させるように映画『ファイト・クラブ』では[時限式発破倒壊へのこだわり]が執拗なものとして見てとれるとのことがある。—映画劇中内にて「ワールド・トレード・センターそのものである」とワンカットで示されている場所(既述)に対するビルらの「パンケーキ状倒壊」に至る発破爆破計画実行描写以外のところでも「時限式発破倒壊へのこだわり」が見てとれるとのことがある。— 具体的には「コンドミニアム —ピアソン・「タワーズ」という物件— の上階の主人公居宅」が「火災爆発」を起こしたとの描写が劇中にてなされているとのことがあり、それが後に「タイラー・ダーデン(二重人格症状を呈している主人公の別人格)による何時でも爆破できるように仕掛けられていた爆破機構による時限性の人為爆破」であると判明した上、その「火災爆発」のシーンの直前に「飛行機が他の航空機と激突するとの主人公の空想シーン」が展開しているとのことがありもする(：要するに「取り憑かれた男」である主人公、「タイラー・ダーデンというオルター・エゴ(別人格)の縛りを受けての男」であるとの主人公が取り憑いたタイラー・ダーデンが物件上階にて時限性ガス爆発を引き起こす前に飛行機の衝突事故を空想しているシーンが映画にて展開しているとのことがある。それにつき述べるまでもないことか、と思うが、「ワールド・トレード・センターにてのビル連続倒壊災害」と「飛行機の衝突事故」はワンセットのものと衆目にて認知されている)]

「映画劇中、一瞬登場する社会的困難な状況にある者達の会合参加リストの中に「不自然に」航空機フライトに関する記述がなされているとのことがある」

[映画後半部、ホテルよりのチェックアウト時清算のための電話接続のリスト化記録 —プロジェクト・メイヘムこと金融企業らビル爆破計画に絡んでの電話接続リスト化記録— の確認の場面で911という数値のことを想起させるような描写がなされているとのことがある]

とのことらの確認方法を挙げておくこととする。

まずもつて、

[(先述の第七ワールド・トレード・センターの発破倒壊の様相に対する専門家団体の告発のことなどを想起させるように) 映画『ファイト・クラブ』では「時限式発破機構へのこだわり」が執拗なものとして見てとれる。—ワールド・トレード・センターとワンカットで示されている場所(既述)に対するビルらのパンケーキ状倒壊以外のところでも「時限式発破倒壊へのこだわり」が見てとれる— とのことがある。 具体的には「主人公の住まうコンドミニアム —ピアソン・タワーズ」という物件— の上階の主人公居宅」が「火災爆発」を起こしたとの描写が劇中にてなされているとのことがあり、それが後に「タイラー・ダーデン(二重人格

症状を呈している主人公の別人格)による何時でも爆破できるように仕掛けられていた爆破機構による時限性の人為爆破]であると判明した上、その[火災爆発]のシーンの直前に[飛行機が他の航空機と激突するとの主人公の空想シーン]が展開しているとのことがありもする]

とのことだが、映画本編開始後、再生時間(DVD再生環境タイムカウンター表示)が

【21分40秒後弱】

から主人公の[飛行機に対する飛行機の空中衝突]の白昼夢がスタートする(ので疑わしきはそこから確認願いたい)。そして、その短き白昼夢のシーンが終わった後に同主人公が

[石鹼販売 一(石鹼販売については、本稿にてのすぐ後の続いての段で後述することだが、[劇中の人体の脂肪を用いての爆弾の作成レクチャー]と関わる伏線ともなっている)一を生業とするとの自分の中の別人格タイラー・ダーデン]

と飛行機の中で初対面するさまが描かれる(くどいが、疑わしきにおかれてはその部・その流れからして意識して注意してご覧頂きたい)。

そして、上記シーンから4分程経ってからのシーン、映画本編開始後、再生時間(DVD再生環境タイムカウンター表示)が

【25分47秒後】

にてのシーンにて主人公の住まうコンドミニアム[PEARSON TWOER「S」(複数形)]の立て看板が画面に映され、直後、

[飛行機の旅から帰った主人公が自身の部屋がガス爆発の憂き目に遭って部屋から焼け出されることになったとの描写]

がなされる(その際、上階に火災が見える、[陰陽マーク]を象(かたど)っての机が主人公が焼け出された物件から外にて据え置かれているなどのシーンが展開していく 一疑わしくもあるとの向きは直上より秒単位にて指定しているところとして映画開始後、再生カウンター時間表示にて【25分47秒後】のシーンを確認されたい一)。

といった、

[飛行機にての突撃事故の白昼夢のシーン] ⇒ [別人格(物語後半になるまで主人公はタイラーを自分自身と同一人物と気付いていない)のタイラー・ダーデンとの飛行機機内での出会い(後に人体の脂肪を用いての爆発物製作のメタファーであることが判明される石鹼製作者としての名刺を渡されての出会いでもある)のシーン] ⇒ [主人公コンドミニアムの爆破のシーン]

との流れの延長線上にあつてのこととして映画本編開始後、再生時間(DVD再生環境タイムカウンター表示)が

【56分28秒後】

にあつてのシーンにて、

[主人公が住まうコンドミニアムに爆破機構が人為的にセットされており、「何時でも」爆発させられるようになっていたところを(たまたまなのか、わざとなのか)主人公が飛行機出張している間に[ガスが起爆剤になって]爆発が起こったとの警察官報告が主人公に対してなさ

れる]

との描写がなされている。

(⇒ 再生時間【56分29秒】後よりの英語版字幕オンにしての英文字幕から確認いただきたいが、“It means it was home-made. Whoever set this dynamite could have blown out your pilot light days before the explosion. The gas was just a detonator.”「自家製爆発物です。犯人はいつでも爆発させることができたんだが——ガスが起爆剤に…」との警察官の報告が主人公に対してなされている。ちなみにその際に主人公に報告をしている警察官は後に主人公がファイトクラブの犯行告発をなした際に応対した警官 —映画再生時間にしてタイムレコード表示が【2時間00分43秒】となるあたりからはじまるシーン、主人公がファイト・クラブの爆破計画を告発した先での警察署尋問室にてのシーンに登場する警官と同じ警官— であるとの映画筋立てが採用されている。「実によくできている」ことに、である)。

これにて『ファイト・クラブ』にてビルを爆破する時限式爆弾機構に対する執拗なこだわりが見てとれることについて説明したとして、「さらに加えて」、

「映画劇中、一瞬登場する社会的困難な状況にある者達の会合参加リストの中に「不自然に」航空機フライトに関する記述がなされているとのことがある」

とのことが見てとれるとのことについての解説をなす（その作成者の宗教的なる主張に賛同しているわけではないと先に述べたものだが、直上表記のこともまた YouTube 流通動画「911 Hidden in Hollywood」の part3 の部にて映像呈示されながら指摘されていることとなり、それがゆえに筆者も検証するところとなったことでもある）。

上の式で問題となるシーンは『ファイト・クラブ』前半部にて描かれる主人公の挙、難病者やその他の社会的困難な状況にある向きの互助会に主人公が入り込んでそこにて苦しみを分かち合うとのやりよう —(本稿にての先行する段にあって映画概要を紹介するために和文ウィキペディア[ファイト・クラブ]項目のあらすじの節の記述内容を紹介していたとの部、そこにて記載されているとおりに苦難を抱えた者達の集いに主人公が潜入するとのやりよう)— にまつわって一瞬表示されるとのものである。

その点、『ファイト・クラブ』DVDの再生開始後、再生時間が

【9分32秒後(00:09:32)および9分40秒後(00:09:40)】

の段階で登場してくるとの問題となる日程表記を下に再現しておく。

(以下、『微少的なところながらも、他のことと複合顧慮した際に重みを増すことか』との観点でそれすらも摘示しておくことにした映画内一描写再現図を挙げることにする)

ST. CHRISTOPHER EPISCOPAL CHURCH

12 Step Meetings
&
Support Group Meetings

Sunday	12:00 p.m.	Alcoholics Anonymous	Choir Room
	8:00 p.m.	Overeaters Anonymous	Room 127
	8:00 p.m.	"Triumphant Tomorrows"	Rec Hall B
Monday	12:00 p.m.	Adult Children of Alcoholics	Room 127
	8:00 p.m.	"Certain Resolve"	Rec Hall B
	8:00 p.m.	Sex Addicts Anonymous	Choir Room
Tuesday	12:00 p.m.	Alcoholics Anonymous	Choir Room
	8:00 p.m.	"Glorious Day"	Rec Hall B
	8:00 p.m.	"Taking Flight"	Rectory
<u>flee (verb) : flight (noun) ? fry (verb) : flight (noun) ?</u>			
Wednesday	12:00 p.m.	Incest Survivors Group	Parish Hall
	8:00 p.m.	Alcoholics Anonymous	Choir Room
Thursday	12:00 p.m.	Alcoholics Anonymous	Choir Room
	8:00 p.m.	"Positive Positivity"	Room 127
composition of one scene of Fight Club (1999 film) (= DVD (sold in Japan Edition) time-record [00:09:32]) hour minute secon			

図にあるように、何故なのか、Triumphant Tommorows「意気揚々としての明日」や Alcoholics Anonymous「匿名のアルコール中毒者達(の集い)」、Glorious Day「光輝帯びての明日」に続くのかたちで 不自然に (unnatural に)、

Taking Flight「航空便をとれ」

との文字列が映画ではそこに入っている (そして、その文字列を含むシーンが映画ではアップで出てきてもいる) —※そもそも、flight とのこと述べれば、flee、すなわち、「逃げる」との動詞に対応するところとして名詞としての[逃走]との意味をも有しており、と解すれば、「逃げよ」「逃走せよ」というのも Taking flight のありうべき意味ともなる。だが、であると解すると、[光輝帯びての明日]や[匿名のアルコール中毒者達]との困難を是正しようとの前向きな語感を呈しての集いと間尺が合わなくなる。だから、不自然であるととらえられる。しかし、taking flight を「航空便をとれ」「飛行機に搭乗だ」との意味合いではなく、「逃げよ」、との意味合いととらえるとその下に Incest Survivors Group「近親相姦生還者グループ」といった苦難を分け合う者達の集いが記載されているため、それとの絡みで見れば完全には不自然にはならないように見えもする。だが、再度の「しかし、」で次のことらが問題になる。第一。『ファイト・クラブ』は既にここまで具体的に問題となる箇所を(誰でも後追いできるように、と)摘示してきたような不快な要素群を伴っての [ワールド・トレード・センターでのビル連続倒壊] についての予告作品染みた映画である。従って、無条件には穿ちすぎと述べら

れない。 第二。これが大きい。(後述するように)映画『ファイト・クラブ』はその劇中にて「一瞬のカットを用いてのサブリミナル効果を生かすようなかたちで用いること」への自己言及が作中にてなされている映画「でも」ある(後の[7]にてそのことを細かくも取り上げることとする)。従って、その伝で行けば、そう、サブリミナル方式を用いて嗜虐的なことをやると作品内で自己言及しているとの伝で行けば、taking Flightという不自然に見える部分は先述の【1WTC(ことノースタワー)への爆破計画対象ビルとしての(ワンカットを用いての)言及】や【ビル同時爆破計画に収束していく計画初期段階でのWTC 据え置きオブジェたるスフィアの露骨なイミテーションの爆破の描写】と「これまたの同様のやりよう」(ワンカットを用いての嗜虐的暴露)がなされているとの意味で間尺が合う(から問題である)。

さらに加えてのこととして、(こちらにも流通動画 [911・ヒドゥン・イン・ハリウッド] のパート3の部にて指摘されていることとなり、それがゆえに筆者も検証することとなったところでもあるのだが)、

[映画後半部、ホテルよりのチェックアウト時の電話通話記録 —プロジェクト・メイヘムこと金融企業らビル爆破計画に絡んでの電話通話接続記録— の確認の場面で911という数値のことを想起させるような描写がなされているとのことがある]

とのことについて取り上げる。

その点、

[ホテルのチェックアウト時にての清算のための電話記録確認の描写にて通話リストが大量に羅列表記されて出てくる部位]

であるが、映画『ファイト・クラブ』をそのまま収録してのDVD 開始後、再生時間 (DVD 再生環境タイムカウンター表示)が

【1時55分24-25秒後】

にあつてのシーンにて

OCT1199

との日付け表示とリンクさせられているとの意味で(一時停止して見た場合にのみ)目を引くとのナンバーが連番で登場を見ている —【ワールド・トレード・センターとサブリミナル描写(ワンカット描写)されての一区画にあつてのビル連続倒壊計画と結びつく電話番号】として「OCT「119」9」と映りもする日付と紐付けられての番号が連番で登場を見ている— とのことがあることの図示なしで紹介しておくこととする(疑わしきにあつては下の図と直上指定のDVD 再生時刻のセクションの描写を引き比べて確認いただきたい)。

(以下、これまた『微少的なところながらも、他のことと複合顧慮した際に重みを増すことか』との観点でそれすらも摘示しておくことにした映画内一描写再現図を挙げることとする)

(approximately)
composition of one scene of Fight Club (1999 film)
 (= DVD (sold in Japan Edition) time-record : 「1:55:25」)

5	OCT1199	LD187A	02:05	・・ Telephone No
6	OCT1199	LD188A	02:08
7	OCT1199	LD189A	02:09
8	OCT1199	LD193A	02:14
9	OCT1199	LD196A	02:16
10	OCT1199	LD199A	02:20
11	OCT1199	LD200A	02:23
12	OCT1199	LD222A	02:26
13	OCT1199	LD223A	02:33

Date format of the United States of America

10 -11- 99 or 10 / 11 in 1999

10 - 1 [1 -19] 99 or 10 - 1 [1 - 19] 99

ISO 8601 : 1999 -10-11 → (cutting zero) → 1999 -1□ - 11
 (null)

上掲のリストのワンカット表示は先に呈示の taking Flight の(再現)シーンと同様に YouTube 流通動画 [911 Hidden in Hollywood] の part3 によってよくまとめられて紹介がなされているところである。そして、筆者も流布版 DVD 検証によって確認しているところでもある。

その点、羅列されてのリストの頭に何個も付されている OCT1199 は 1999 年 10 月 11 日といった表示となるわけだが、逆読みを念頭に OCT「119」9 と分類すると問題になるとの言いよりの伝が動画などでも指摘されている。無論、それ単体ではこじつけがましい、far-fetched ではないのか? と見られかねないことだが、「他の「露骨な」事由らと複合顧慮する」と、ここでの [数値入れ替え方式を念頭にしての着目] についてももうがち過ぎとはとれなくなるとのことがある。その点もってして続く [8] の段で述べるが、映画『ファイト・クラブ』には(映画のようにワールド・トレード・センターに対する露骨なワンカット言及はないものの)原作となる小説『ファイト・クラブ』(1996)が存在しており、その原作小説、Chuck Palahniuk (チャック・パラニューク)の手になる 1996 年の Fight Club 小説版では爆破対象ビルが現実世界に具現化していないとの式で不自然なまでの高層仕様であるとの

「191」階建ての超高層ビル

となっている、本稿の [5] にて言及しているように 1999 年映画にて ノースタワー (North Tower) といった名称と結びつけられている計画標的地 — プロジェクトメイヘム標的地 — が 1996 年の小説版では [191 階建てのビル] になっているとのことが「ある」からである (なお、一時期、世界最高層ビルの名を冠していた現実世界のノー

スタワーおよびサウスタワーらツインタワーですら 110 階建てにとどまっている)。

要するに筆者は

「[わざと、の数値入れ替え式]という単純なるアナグラムの種類が介在していても何らおかしくはない(そも、そのように考えても何ら行き過ぎにならぬ堪えがたい臭気を伴っているところである)」

と他要素(それは「多」要素でもある)から述べているのである。

([出典\(Source\) 紹介の部 102\(6\)](#)はここまでとする)

[7]

直近 [6] の内容とても重みを持ってくる、そうとらえざるをえぬこととして

映画『ファイト・クラブ』は
[タイラー(主人公の別人格でビル連続爆破計画の首魁)がサブミナル描写
—数カットを用いての特定のイメージの刷り込み— を用いる存在であるとの言
及を含む映画]
であり、かつ、
[タイラーが用いたのと同様の悪質なサブミナル・カットが実際に映画に含まれ
ていることで知られる映画]
となっている

とのことがある。劇中問題となる箇所についてはすぐに紹介するとして、先んじて、摘要表記なせば、
こうである。

「タイラー(主人公のオルター・エゴ:別人格としてのブラッド・ピット演じるファイト・クラブ
主催者)が映写技師として働いているとのシーンにてフィルムにカット、問題描写を
含ませることも意図的になしているとのことが描かれる(タイラーの悪行としてはウェイ
ターとして働いている際に客へ出す料理に自身の尿を混入するといったことも描かれる
のであるが、それと並行して、である)。そして、そうもしたやりようの一環として上映映
画フィルムに卑猥シーンを(フィルムの切り貼りで)サブミナル的に含ませて映写させ
て見せ、それが子供(家族連れで映画を視にきていた子供)を—サブミナル的効
果でありながらもか—泣かせるようなものと描写されているとのことがある(タイ
ラーのやりようによって映画館で子供が泣き出すシーンが『ファイト・クラブ』劇中に出て
くる)」

「映画『ファイト・クラブ』にはタイラーの似姿が現われるサブミナル映像や男性性器
写真が入れ込まれていることが知られている」

上のことらの典拠を以下、挙げることにする。

SOURCE 102(7)



Cimabue's Celebrated Madonna (1853-5)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are
barefaced and brutal.

ここ出典 (Source) 紹介の部 102 (7) にあつては

『ファイト・クラブ』は
[タイラー (主人公の別人格でビル連続爆破計画の首魁) がサブリミナル描写 一
カットを用いての特定のイメージの刷り込み— を用いる存在であるとの言及を含む
映画]
であり、かつ、
[タイラーが用いたのと同様の悪質なサブリミナルが実際に映画に含まれていること
知られる映画]
となっている

このことについての典拠を紹介しておく。

まずもって上のこと、映画 Fight Club (1999) にて [サブリミナル効果 subliminal stimuli を望ましくな
いかたちで用いているとのやりよう] に対する映画内自体での自己言及がなされているとのことについ

ては映画をそのまま収録しての DVD にての本編開始後、再生時間 (DVD 再生環境タイムカウンター表示) が

【33 分 15 秒後 (00:33:15)】

の段階で登場してくるシーンを見てみればよく分かるようになっている。そこにては以下挙げるような主人公の台詞 — 英語字幕を DVD 再生環境に応じての手法でオンにすることでほんと確認できるとの台詞 — の直後に [子供が映画技師として働くタイラーに相応のものをサブリミナル的に見せられて泣き出す場面] が見てとれる。

that's when you'll catch a flash of Tyler's contribution to the film. Nobody knows that they saw it but they did. (日本語字幕では「ほんの一瞬ポルノ映像が入る。意識しない一瞬だ」(との訳が同台詞に付されている。そして、実際にそちらセリフ通りの描写が直後、子供を泣かすかたちで具現化を見ている — タイラーが映写技師として上映に関わっている映画を見ている年端も行かない女の子がスクリーンからあえぎ声がしたと思うと泣き出すシーンがある — ので疑わしきはそのやりようを確認してみるとよからう))

また、

「映画『ファイト・クラブ』にはタイラーが現われるサブリミナル映像や男性性器写真が入れ込まれていることが知られている」

とのことについては「現行の」和文 Wikipedia [ファイト・クラブ] 項目にての [サブリミナル] と題された節にての次の書きようの中身を確認されてみるとよい。

(直下、和文 Wikipedia [ファイト・クラブ] 項目にての [サブリミナル] と題された節の「現行にての」記載内容よりの引用をなすとして)

映画ではサブリミナルでタイラーのイメージが挿入されている部分がある。これらは主人公がタイラーに出会う前、オフィスや空港での日常シーンで不意に数コマタイラーの姿が挿入されたり、よく見ると主人公とすれ違う人物の中にタイラーがいる、ホテルの CM 中に勢ぞろいした従業員の中にタイラーがいる、といった具合である。また、この映画の根底に流れる男性性にダメ押しをするかのように、ラストシーンにほんの数コマペニス写っている。Blu-ray 版では、公開当時や DVD 版で規制の問題でカットされていたサブリミナルカットが復活しており、ラストシーンのペニスのコマが無修正で収録されている。

(引用部はここまでとする —※—)

(※尚、英語サイトでも『ファイト・クラブ』監督のデヴィッド・フィンチャーがそういったやりようを取っていることを意図明示せずに言及するサイトもある。だが、本稿ではさらに一歩進んで問いたい次第である。「何故、映画監督が [そこまでのこと] をやっているのか、あるいは、やらされていたのか」と)

(出典 (Source) 紹介の部 02 (7) はここまでとする)

[8]

直近にて言及のようにサブリミナル効果を頻繁に用いる —そして、それは何も知らぬ子供を泣かすようなものである— との自己言及が作中内にてなされているのが『ファイト・クラブ』という映画となるわけであるが、ここで映画から原作小説（および原作者やりよう）の方に話を移し、(多くの「問題となるアレンジ」が映画版にて加えられている)その原作にまつわたりのありようからして

[911の事前言及問題]

とつながる作品が『ファイト・クラブ』であるとのことを指摘しておく。

さて、ジェネレーション X、米国にあつて旧態依然とした価値観が崩れた世代と呼ばれてのそのジェネレーション X 世代の代表的作家の一人であるなどと評されるチャック・パラニューク (Chuck Palahniuk) という作家が『ファイト・クラブ』原作小説、タイトル同名の Fight Club を 1996 年に世に出しているとのことがある。

新世代作家として認知されているチャック・パラニュークの手になるそちら原作小説 Fight Club の中ではプロジェクト・メイヘム、映画版と同様の「ビル爆破計画」の目標としての「爆破対象ビル」が「191階建て」であるとの描写がなされている —※といった「191階建てビル」(「191」は無論、「911」の数字入れ替えナンバーでもある) を爆破するとのプロジェクト・メイヘムが登場する小説版原著 (グーグル英語版よりオンライン上より内容確認できるとの洋書) では映画版のように目立つように冒頭部からグラウンド・ゼロとの言葉が用いられているわけ「ではなく」、また、(同原作小説刊行の3年後に封切られた) 1999年映画版のようにサブリミナル的ワン・シーンでノースタワーといったツインタワーのことを指してのものとなる爆破対象のことが言及されているわけ「でもなく」、況や、ツインタワー敷設オブジェたる黄金色のスフィアのイミテーションが爆破されるとの視覚的描写がなしているわけ「でもない」のだが、とにかくも、小説版からして「問題となる映画の原作小説」として爆破対象のビルが 191 階であると描写されている—。

のみならず、である。チャック・パラニュークという作家は『ファイト・クラブ』原作小説に続いて Survivor (邦題)『サバイバー』という小説を 1999 年 —まさに映画版 Fight Club が封切られたとのその年— に世に出しており、同小説『サバイバー』は

「原著の方のブックカバーに「飛行機」が目立つように描かれている 作品」

にして

「かつて集団自殺を図ったカルトに属していた「双子」の兄弟を物語の核としている作品」

にして

「「双子」の一方が「自殺テロ挙動」として「飛行機」ハイジャックをなすとの作品」

となっている。

さて、現実の 911 の事件がどういった事件であったかと述べれば、

「「カルト的に宗教を奉じているとのモードの徒輩ら」(イスラム・ラディカル・セクトの徒輩ら)が飛行機をハイジャックし、それが「自殺テロ」のやりようとして「ツイン」タワー(「双子」の塔)に突っ込むと同時に、漸次、ビル倒壊が現出していったと「される」事件」

となる —※チャック・パラニュークが1996年に[191階建てのビル]が爆破計画の標的にされるとの小説版『ファイト・クラブ』(映画『ファイト・クラブ』原作)を出した後に出した小説作品『サヴァイバー』の特徴が[カルト化した宗教][カルト化した宗教の徒による飛行機ハイジャック][双子とカルトの自殺挙動がワンセットになっての設定]であるとする現実の911の事件もまた[カルトと見てもいいだろうとの狂信的な宗教の徒のやりよう][カルト化した宗教の徒による飛行機ハイジャック][双子(ツインタワー)とカルトの自殺テロが結びつきの状況]との属性を帯びている—。

表記のこたらの出典を下に挙げる。

出典(Source)紹介の部 102(8)

SOURCE 102(8)



Cimabue's Celebrated Madonna (1853-5)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典(Source)紹介の部 102(8)にあつては

[映画版『ファイト・クラブ』(1999)のみならず【『ファイト・クラブ』原作小説(1996)内容]および【『ファイト・クラブ』原作小説をものした作家やりよう】からして911の事件の先覚的言及に通ずる側面を帯びている]

とのこたの典拠を挙げておくこととする。

その点、まずもっては、[問題映画の原作小説である Fight Club (1996) の爆破対象]が

[191 階建てのビル] (要するに 911 の数値入れ替えナンバーを階数とするビル)

となっていることを示すべくも原作小説原著文言 —表記のテキストの入力でその通りの記載がなされていること、オンライン上より確認できるとの文言— の抜粋を下になしておく。

(直下、オンライン上より原文確認なせるようになっているところの原作小説 Fight Club (1996) 冒頭部よりの原文引用として)

Somewhere in the one hundred and ninety-one floors under us, the space monkeys in the Mischief Committee of Project Mayhem are running wild, destroying every scrap of history.

(拙訳として)

「俺たちの今いるこの下のどこか、**191 階建てのビルのどこか**でプロジェクト・メイヘム器物損壊委員会に参画しているスペース・モンキー達 (訳注: ファイト・クラブの爆破作戦関与の成員のこと) が野性をたぎらせて走り回り、歴史にて現出した全スクラップを破壊しようとしているのだ」

(拙訳を付しての引用部はここまでとする)

(直下、原作小説 Fight Club (1996) 冒頭部よりの原文引用として)

The Parker-Morris Building will go over, **all one hundred and ninety-one floors, slow as a tree falling in the forest.** Timber.

(拙訳として)

「パーカー・モリス・ビルディングは終わりを迎えるだろう、**191 階建てのすべてが森での倒木の過程のようにゆっくりとな**。建築資材としての木材 (Timber) ってやつだ」

(拙訳を付しての引用部はここまでとする —※—)

(※尚、原作小説にあつては —(同文に表記テキストの入力でもってグーグル検索エンジンを走らせることで現行、オンライン上より文献的事実であることを確認できるところとして)— “**One hundred and ninety-one floors** up, you look over the edge of the roof and the street below is mottled with a shag carpet of people, standing, looking up. The breaking glass is a window right below us. A window blows out the side of the building, and then comes a file cabinet big as a black refrigerator, right below us a six-drawer filing cabinet drops right out of the cliff face of the building, and drops turning slowly, and drops getting smaller, and drops disappearing into the packed crowd.”との表記や “The five-picture time-lapse series. Here, the building's standing. Second picture, the building will be at an eighty-degree angle. Then a seventy-degree angle. The building's at a forty-five degree angle in the fourth picture when the skeleton starts to give and the tower gets a slight arch to it. The last shot, the tower, **all one hundred and ninety-one floors**, will slam down on the national museum which is Tyler 's real target. ”との表記も同じくも(191 階ビル倒壊計画にまつわるところとして)冒頭部にて登場を見ているとのこともある(191 階 One hundred and ninety-one floors 表記だけに着目いただきたいところとして訳は付さない) —※ここでは(ジェネレーション X に属する作家として令名馳せる

こととなったとの)作家チャック・パラニュークの手になる Fight Club 原作小説
作中において[191階建てのビル爆破計画]などというものに対する言及が幾
度もなされていること、その[[文献的事実]としての意味合い]のみを問題とし
ていること、ゆめお忘れいただきたくはない次第である—)

一時期、世界で一番高いビルとなっていたとの現実のツインタワーとても110階建てに留まっている
(出典(Source)紹介の部102(5)を参照のこと)のであるから、191階などという途方もない、凄まじい
規模での高層建築である(：同じくものことに関しては、また、2014年を基準にしての現行、世界最高
層ビルである急カーブを描いての釣り鐘構造、尖塔状のドバイの[ブルジュ・ハリファ]が206階建て
に達している、だが、同ブルジュ・ハリファからして160階以上はテナントが入れるような構造ではないメ
ンテナンス部とのありように留まっている(実質163階とも)とのことも[恣意性介入の可能性]との兼ね
合いで顧慮する必要があるであろう)。そうした異様な191階という階数に[911]という数値の入
れ替えナンバーを観念することは行き過ぎになるか。

なるまい。

チャック・パラニュークがこの世界がそういうものばかりであふれているとの「悪質な」[紐付き]となっ
ているとの視点ともつながるところとして、そこには[計算尽くの意図]が介入していると判断できるだけ
の[具体的根拠]が現実にあるからである。それにつき『ファイト・クラブ』という作品の予見性につ
いて通貫しての指し示しをなしもしている本稿にての出典(Source)紹介の部101から出典(Source)紹
介の部102(9)—ここでは出典(Source)紹介の部102(8)の中での話をしている—を包摂する解説
部の内容をすべて複合顧慮して、さらにそれに続く内容をお読みいただければ、この身が何をどう「具
体的に」「客観的に」問題視しているのか、ご理解いただけることか、と思う—※尚、「具体的に」「客
観的に」、重要なことを「一意性(呈示情報としての値打ち)が際立ったかたちで」訴求しても、[まる
で壁に語りかけているような反応のみしか得られず終(じま)い]ないし[ゼロであるどころか相応の人
種によるマイナスの反応のみしか得られず終い]で終わる(オンライン上でフリーク・ショー(畸形の
ショー)を展開しているような「相応の」水準の者らによる[褒め殺しの反応]ないし[水準をはるかに
劣る劣化剽窃物撒布反応]が得られても、それは[無為無意味ないし有害なだけのお誂(あつら)え
向きの反応、よくても一切反応しないことに対する、誤魔化しの反応]としかこの身は見ない)とのこと
も、当然、覚悟のうえで本稿筆者はやっている。その点、この世界がどういう種別の人間で満ち満ち
ているか、人間存在に科せられた後天的限界とは何かにつき常日頃考えさせられ、また、この世界に
は人間の進化進歩の可能性を根本否定するような相応の力学の顕在化事例で満ち満ちていることを
思い知らされている(性質下らぬ、あるいは、後天的に下らなく「なってしまった」人間らを相互結線し
てかたちづくった[宗教勢力]のやりようなどはまさしくものその最たる例であろうと「実体験に即して」
思い知らされている)こともそのような心証・覚悟を持つに至った因となっている。それにつき、加速器、
LHCのリスク情報関連の行政訴訟を国内で権威の首府たる研究機関を相手取って第一審からして数
年越しで無為に(「結果的に」無為に)やりあたりしたりもしていた中、自身が水面下で常識的に訴求
なしてきたこと、また、その間、相応の者達の馬鹿げた動きを望見してきたこと、その方向性に失望を深
めさせられてきたというのが筆者という人間でもある—。

(属人的内観にまつわることなど余事記載を直近なしてしまっただが、本題に引き戻して続けて)

次いで、チャック・パラニュークという作家は Survivor (邦題)『サバイバー』という小説を小説版『ファ
イト・クラブ』に続いて1999年に世に出しており(映画『ファイト・クラブ』が公開された年である)、同小
説『サバイバー』が

[原著の方のブックカバーに[飛行機]が目立つように描かれている作品]

にして

[かつて集団自殺を図ったカルトに属していた[双子]の兄弟を物語の核としている作品]

にして

[[双子]の一方が[飛行機]ハイジャックをなすとの小説]

となっていることの出典を目立つところから挙げておく(:その点、現実の911の事件がどういった事件であったかと述べると、【[カルト的に宗教を奉じているとのモードの者ら]が飛行機をハイジャックし、それが[自殺テロ]のやりようとして[ツイン]タワー([双子]の塔)に突っ込むと同時に漸次、ビル倒壊が現出していったと「される」事件】であるのだからそうしたことを問題視しているとは上の段にて先述のことである)。

(直下、表記のことについては現行、英文 Wikipedia [Survivor (Chuck Palahniuk novel)] 項目に記載されている内容を掻い摘まんで引用するとして)

Survivor is a satirical novel by Chuck Palahniuk, first published in February 1999. The book tells the story of Tender Branson, **a member of the Creedish Church, a death cult.**

[...]

Plot summary

Tender Branson sits in the cockpit of a Boeing 747-400, telling his life story to the black box. He is alone in the plane, having hijacked it; he has released all of the plane's passengers and crew prior to this point. He explains the events leading up to the hijacking.

Tender is a member of the fanatical Creedish cult, which engaged in a mass suicide ten years previously. He is one of the Creedish members who was sent out into the world to work as a servant, and send his income back to the Creedish community.

[...]

Characters

[...]

Adam is Tender's older twin brother. Because he was the firstborn, Adam got to stay in the Church community in Nebraska and marry, while Tender was among those sent to earn a living for the Church in the outside world. Adam is the person who leaked the community's illegal activities to the police ten years prior to the start of the novel, which was the event that instigated the community's mass suicide. Since then, Adam has been traveling the country, killing surviving members of the Church and masking the murders as suicides in order to motivate further suicides. His motivations are unclear. His goal seems to be to completely eradicate the Creedish beliefs and challenge the Church at its core.

(訳として)

『『サバイバー』はチャック・パラニュークによる1999年2月に初版刊行された風刺的小説である。同小説はテnder・ブランソン、死を志向するカルトとしてのクリーディッシュ・チャーチ([信条主義教会]とでも訳すべきか)のメンバーであった男の物語となっている。

…(中略)…

[粗筋]

飛行機のブラックボックス装置に向かって彼の人生の物語について語りながら、テnder・ブランソンは[ボーイング747-400]のコックピットに座っている。

彼は彼がハイジャックした飛行機に唯一人取り残されていた。彼はその局面に至る前に全乗客および全乗務員を解放していたのだ。の中で彼はハイジャックに至るまでの出来事らを説明しようとする。

…(中略)…

テンダーは狂信的カルト、先立つこと10年前に集団自殺をなしたとのそのカルトのメンバーであった。彼は奉仕者としての職に就くために世界に向けて送り込まれたクリーディッシュ・チャーチのメンバーの一人で、自身の収入をクリーディッシュ・チャーチ・コミュニティに送金していた。

…(中略)…

[登場人物]

…(中略)…

アダムはテンダーの年上の「双子の片割れ」である。彼が最初に分娩されたがため、アダムはネブラスカにての教会コミュニティに留まることとされ、そして、外の世界でテンダーが教会での信者ら生活を支えるべくも送金していたとのその合間にて結婚していた。アダムは共同体内での違法行為を小説物語の発端たる折より10年程前に警察に漏らしていたとの人物となり、そして、それが共同体での集団自殺を引き起こした因としての出来事となっていた。その折よりアダムは生き残っていた教会メンバーらを殺しながら、そして、より多くの自殺の誘発すべくも殺人を自殺と偽装しながら、方々を旅していた。そうもしたアダムの動機ははきとしていないと描写されている。彼の目的はクリーディッシュ・チャーチの信仰体系を完全に洗練化することのようにも見えるし、教会組織の中心に対して挑んでいるようにも見える。

(訳を付しての引用部はここまでとする 一※一)

(※その点、表記引用部にては[アダム・ブランソンという双子の片割れを持つカルトのメンバーのテンダー・ブランソンが飛行機ハイジャックをなしたこと]が「遺漏無くも」言及されている(尚、Survivorについては邦訳版『サバイバー』も刊行されているので 一筆者は随分前に『ファイト・クラブ』との兼ね合いでそちらを読んで『殺伐性ばかりが際立つ作品だ』とは見もしていたのだが— そちらを参照されて内容確認するのもよからう)。また、英文 Wikipedia[Survivor (Chuck Palahniuk novel)]にての現行記述にあつては[飛行機が中央に描かれているとの相応の表紙絵]も確認できるようになっているとも記しておく)

以上のこと、そう、[191階のビルを爆破対象として描いていた1996年『ファイト・クラブ』原作を世に出していたチャック・パラニュークが1999年初出の自身の小説『サバイバー』にあつて Philological Truth [文献的事実]の問題として [現実の2001年の事件]と近接する [カルト的人間の関与] [自殺拳動] [双子の片割れ] [飛行機ハイジャック] との設定を採用していることからして

[できすぎているとの感あり]

と述べても言い過ぎにならぬものであると述べてよいことか、と思う(問題はそれが [作家個人のやりようが後の世界で現実具現化した事件とたまさかもってして多くの類似要素を帯びていたにすぎない] とのことで済むのか(偶然の一致の問題で済むのか)、あるいは、[作家が相応の力学を受けもして— そちら力学の事細かな作用機序(作用原理)の問題は置いておいても— 不快な先覚的言及を[操り人形]としてなしていた] とのことまで想定する必要があるのか、見極めが必要であるとのことに通ずることである)。

だけではない。

『傀儡(くぐつ)のような相応の人間であろう』

と筆者としては見るに至っているとのチャック・パラニューク — 評されるどころの[いたずら]実行団体、Church of the SubGenius[サブジーニアス教会]という同団体関係者からして実に興味深い(『ジ・イルミナタス・トリロジー』作者ロバート・アントン・ウィルソンなどが参加しているとの意味で悪い意味で実に興味深い)との団体とも協働関係にあるとウィキペディアなどにも解説されているところの団体、Cacophony Society[不協和音の会]に関わっていたとされる向き— は次のような題名の作品らをもものして「も」いる。

Invisible Monsters (1999) 『インビジブル・モンスターズ』(直訳すれば『不可視の怪物ら])

Haunted (2005) 『ホーンテッド』(直訳すれば、『取り憑かされている』)

Tell-All (2010) 『テル・オール』(直訳すれば、『全部言っしまえ』)

Damned (2011) 『ダムド』(直訳すれば、『呪われし者』)

上の一部挙げた作品らタイトルからして

[思うところがあって然るべきもの]

であろうことか、と筆者などは見ている (：しかし、だから『成程。』と思わせるところとして掲題の作品らは思わせぶりなタイトルに反して[何かを告発するようなもの]ではなんらない(と判じている)。それらにあっては — 『ファウストの物語が語り継がれるこの世界にいかにも恩寵に浴しての相応の人間らしくも、』と向きによってはとらえるところだろうと思うが— 当たり障りのないことしか書かれていない、「自分は[操り人形を動かす糸]による力学で『ファイト・クラブ』のような作品を書か「させられ」、相応の力学でバラシ行為をやらされた人間である」などとの明言や隠喩的言及などそれら作品には全く見受けられないとのことがあるのである(少なくとも筆者が見た限りはである)。そう、タイトル見る限りはなにやら勇を鼓して、[ばらし]に勤めているようにも「見える」のだが、以上掲題の作品らの中身を見れば、現実にはただただ[当世流のおしゃれな作家](ないしそのフリをなさせられた愚にもつかぬ役者でもいいが)が[殺伐としているだけの寓意的側面があまりない「お話」]を書き綴っているだけのようにとれるようになっていくにすぎない — ※『フィクションなど余程、芸術的価値・情緒的価値が高くない限り、そして、寓意譚・風刺としての側面薄き絵物語というものに相応しくも意味(情報的価値)がそこになんら伴っていない限り、本来的にはまともな大人が肩肘ばって論ずるものではないだろう』とのある種、冷めた認識が筆者手前にはある(ただしそうした自身の観点を人に押しつけるつもりもない)との中ながら、本稿筆者はチャック・パラニュークの作品ら「にさえ」食指を伸ばしており、直にそれらを読んで「分析」なしている(そして、一部作品を除いて村上春樹の作品がそうであるように内容自体については現行、目立っての意味、すなわち、情報的価値が見出せないとの決を下している)との人間としてそれも明言している—)。

以上、ここまでをもってして

[[191階 —911の数値入れ替えではある—] という際立っての高さのビルの爆破に向けて(映画と筋立て違えども)話が進む[原作小説]『ファイト・クラブ』をもものしての作家やりよう]

[1999年、映画版『ファイト・クラブ』が封切られた折に『サヴァイバー』という小説を世に出し、その小説の粗筋及びデザインが[宗教的人間とされた者による飛行機ハイジャック込みにしての自殺挙動][双子の問題]と関わっているとの作家やりよう]

[Invisible Monsters (1999), Haunted (2005), Tell-All (2010), Damned (2011) といったタイトル「だけ」は問題と見えもする他作品らをもものしているとの作家やりよう]

といった特性がゆえに『ファイト・クラブ』原作小説作者たるチャック・パラニューク — (ここ本稿では細かくは書き記さないが、同パラニューク、【ディスコーディニズム運動】(【[黄金の林檎と五角形を並置するとのシンボル]を特色とする[不協和]発生を是として動くとの体裁のパロディー宗教(本来の宗教を茶化し小馬鹿にするとの目的を伴ってのパロディー宗教)ともされる運動]) といったものとの関係性

が指摘されている [不協和音協会] とでも訳されよう **Cacophony Society** というプラクティカル・ジョーク(悪戯)をこととする団体の成員として「も」知られている作家である) — のやりようからして問題となる属性を伴っているとのことについて述べた。

(**出典(Source) 紹介の部 102(8)** はここまでとする)

以上、出典紹介なしてきたとのことについてはそれ単体で顧慮しても重みを理解出来るようなことでは「ない」とも思えるようなことだが、次のことと複合顧慮すると当然に話が違ってくるとのことでもある。

「現実世界で 2001 年にツインタワーをはじめとしたワールド・トレード・センターのビル群が複数全壊している (**出典(Source) 紹介の部 101**) のに対して 1999 年封切りの映画版『ファイト・クラブ』では

[ビル連続倒壊劇をワールド・トレード・センターにて具現化させる]

との作中複数カットにての実に露骨なる作中描写 — サブリミナル的ながらも実に露骨な作中描写 — がなされている (**出典(Source) 紹介の部 102(4)**, **出典(Source) 紹介の部 102(5)**)。さらに、[ビル倒壊計画実施場所としてのワールド・トレード・センター] へのワンカット言及をなしている作品であるにとどまらず映画版『ファイト・クラブ』については同作が不快なるサブリナル・メッセージングを数カット挿入で含んでいるものであるとの [自己言及] をなしている作品であるとのことすらある (つい最前の**出典(Source) 紹介の部 102(6)** および**出典(Source) 紹介の部 102(7)** の部を参照のこと)。

そして、原作小説の、

[ビル倒壊計画 — 911 との数値の三桁ナンバーの入れ替え数にして、現実世界にはそのような超高層のビルは存在しはしない(先述)との不自然なる 191 階建てのビルに対する発破による倒壊計画 —]

との設定を踏襲しているからこそその映画版『ファイト・クラブ』筋立てであるとのことがありもし、といった中で「他面のこととして」現実世界の 911 の事件についても [発破倒壊が現出していた] との言われようが — それなりの理由あって — 根強くもなされているとのことがある。

それについてはその中身の適正さ・真偽の程は別としてそうした主張がなされてきたとのことそれ自体は事実であると請け合える — 報道記録が残っている — ところとしてフィクションならぬ現実世界の 911 の事件については 2001 年の事件発生直前に

「偽旗作戦に類するものとしての [アルカイダおよびビン・ラディンに責任をかぶせての政府(内の特定派閥)による自作自演] が企図されている」

との危険性に対する [事前警告] が米国人論客であるアレックス・ジョーンズという人物よりなされていた(往時の申しようそれ自体がいかほどまでに信用に値するかは「別問題」として後にその [際立っての先覚性] よりよく知られることになったところとしてそうした「事前警告」がなされていた)との記録が残っており、また、911 発生後、ビル群倒壊にあつての [第七ワールド・トレード・センターの倒壊記録映像] について「これは明らかに発破倒壊(爆破倒壊)の特徴を呈している」と数千人単位の専門家ら署名を集めての専門家団体 Architects & Engineers for 9/11 Truth の主張が取り沙汰されてきたとのことがある (**出典(Source) 紹介の部 101**)」

※【(再度もって
しての)外挿表記
としまして】：こ
でのそのように
本稿では「頻繁
に」文字色と背
景色を変えての
【出典紹介部】呈
示のための表記
をなしています。
本稿全体の指し
示し内容の重大
性を顧慮して【後
追い可能な典
拠】の細部に至る
までの呈示からし
て必須事項とら
えているからでは
ありますが、無論
にして、後追い
「可能」であるだ
けではなく後追い
「容易」である必
要もあるとの認識
が書き手この身
にはございます。
にまつわって後
追い「容易」性
の方をもたらず方
式、すなわち、
【都度即応的に
すべての出典紹
介部の内容を即
時確認するため
の方式】を本稿
にあつての冒頭
p.2 で細かく紹介
しておりますので
[頻繁に本稿の
典拠内容の確認
をなす必要]を
感じておられると
の方々におかれ
ましてはそちら本
稿 p.2 で案内さ
せていただいで
おります方式を採
択いただければ
と考えます (典
拠内容確認を容
易・即応的になす
とのその紹介方
式とは本稿を収
めた PDF 文書を
別名保存で二
ファイル用意し、
うち、片方を閲覧
用、もう片方を
(巻末数ページの
出典紹介部一覽
表記部「だけ」を
印刷して役立て
つつもの)出典確
認用の電子文書
として活用いた
だくとの方式とな
ります)

※「ここで」付記して述べておきたかったことを述べるための部を設けておく

本稿本段では(把握しておられぬとの向きは前段に遡って確認いただければ、と述べもしたきところとして)、

[新約聖書およびギリシャ神話に共通の[蛇の予言の霊] Spirit of Python (ピュートーンあるいはパイソン)に通ずるところの映画『ファイト・クラブ』に見る[予言の霊の問題]とは何か]

ということを論じているわけだが、といった一連の話の中にての[1]から[6]の段に続いてのここ[8]の段にて直近まで述べたようなことについては

[チャック・パラニュークや小説家作品の原作小説が映画化される中でメガホンをとった映画監督(デヴィッド・フィンチャー)が「人間レベルの組織的紐帯を背景に」そういうことをやらかしていたのか否か]

の問題については厳密に詰める必要までは[なさくともよい]と考えている(他面、[同じくものを厳密に詰めよう]との向きのために[手前が把握している情報]の多くを本稿の[これよりさらに後の段]にて呈示する所存でもある—映画『ファイト・クラブ』にあってのフリーメーソン・インサイダーであれば、即時に気づけもしようとの執拗なるメーソン・シンボリズムとの関連付け等等についての指し示しをもなす所存でもある—わけだが)。

その点、ここで唐突となつての問題提起をなすが、

[[宗教](チャック・パラニュークが自身の作『サバイバー』で持ち出しているような[死のカルト]に見るような宗教)というものは何のためにあるのか?]

常識の世界の額面上・一般論上の定義では[宗教]というものにつき

(宗教とは)

[[人を越えた存在、神仏と表される高位の存在の「実在」]を想定し、[(そこにいるだろうと崇拝者らに観念される)神や仏の意思を地上にて代行するためにある団体・紐帯である]と関係者ら自体が認識している[団体・紐帯]の成員によって担われるものである]

ないしは

[[神仏(あるいは超越的なドグマ)の加護・恩恵に浴しながら人格の陶冶をなす]ための理念(ないしその理念を体現しての組織)である]

という定義付けが与えられるようなものであると思う(ちなみに筆者手元にある広辞苑には次のような[宗教]というものに対する定義付けがなされている⇒(以下、引用なすとして)“(宗教とは)神または何らかの超越的絶対者あるいは卑俗なものから分離され禁忌された神聖なものに関する信仰・行事。また、それらの連関的体系・帰依者は精神的共同体(教団)を営む”(以上、広辞苑よりの引用とした))。

そして、そうした[宗教]の定義に見る宗教的側面が「他を圧する式で」殊に顕著になっているのが

[欧米および中東で(いまもって)支配的なるものとなっている一神教]

および

[東洋にても教勢—会衆の数に比例しての社会的影響力の多寡で測られるところの教勢—を伴っており、[敵対者](と勝手に"彼ら"が認定した人間)や

「敵対理念」(と勝手に"彼ら"が認定した理念)に対して「排斥とワンセットになった「存在否定」の論理」を推し進めるとの攻撃的側面が強い新興宗教」

であろうと見立てても問題なかろう（:旧約の方でもいいし新約の方でもいいが、聖書を開いてパラ読みすれば分かるが、そこには[神への讃歌]と[神への帰依の尊さ]と[神を奉じぬ者の報い]について多くの紙幅が割かれている。そして、キリスト教における十字軍の歴史でもいいし、新教・旧教の血で血を洗う歴史でもいいし、イスラムの「剣かコーランか」の聖戦(ジハード)による拡大の歴史でもいいが、一神教は「他を圧する」暴力的作用と極めて密接に結びついている）。

さて、表記のような一神教や(一神教ならずとも)新興宗教の類に強くも見受けられる宗教的特性については

[フリーメーソン]

ら「にも」当てはまり、一フリーメーソンについては「神無き宗教を創始しようとしている」と伝統的宗教勢力(カトリックおよびイスラム保守系)に批判されることがよくあることが知られているわけだが一、フリーメーソンは

「[神の意思] (より正確には [彼らが想定する [偉大なる建築者] といった言葉で表される存在にあっての高位の意思]) に適って行動することが理想かつ存在意味としている」

とのことを唱導している(くどいが、宗教勢力の相応の人種はフリーメーソンをして[無神論の神なき団体]であると勘違いしているような節もあるわけだが、とにかくものごととして、である)。

[フリーメーソンが[神の意志に沿って行動すること]こそが彼らの理想・存在意味そのものであると唱道している団体となっていることの出典として]

先の段にでも取り上げた書籍であるが、19世紀にあって著名であったメーソン、アルバート・マッキー(英文 Wikipedida の[Albert Mackey]項目にでもその事績および“ He served as Grand Lecturer and Grand Secretary of The Grand Lodge of South Carolina, as well as Secretary General of the Supreme Council of the Ancient and Accepted Scottish Rite for the Southern Jurisdiction of the United States. ”とのメーソンとしてのありし日のポジションが記されているとの向き)の手になる著作、

The Symbolism of Freemasonry: Illustrating and Explaining Its Science and Philosophy, its Legends, Myths and Symbols 『フリーメーソンのシンボリズム:その技(サイエンス)と哲学、伝承、神話、そして、シンボルらにまつわる図解』(Project Gutenberg のサイトにて全文公開されており、それがゆえに誰でもオンライン上より内容確認できるとの著作. 1882年という19世紀後半刊行のバージョン)

よりの抜粋を 一フリーメーソンの宗教性について示すべくも(本稿にあっての後の段の内容への足がかりとして示すべくも)一 なしておくこととする。

(現時、Project Gutenberg のサイトよりダウンロードできるとの The Symbolism of Freemasonry: Illustrating and Explaining Its Science and Philosophy, its Legends, Myths and Symbols. (1882) 『フリーメーソンのシンボリズム:その技(サイエンス)と哲学、伝承、神話、そして、シンボルらにまつわる図解』にての XXIX. The Symbolism of Labor.[第二十九節]の中盤部から末尾にかけての部よりの掻い摘まんでの抜粋を

なすとして)

It sees in the Supreme God that it worships, not a "numen divinum," a divine power, nor a "moderator rerum omnium," a controller of all things, as the old philosophers designated him, but a Grand Architect of the Universe. **The masonic idea of God refers to Him as the Mighty Builder of this terrestrial globe, and all the countless worlds that surround it. He is not the ens entium, or to theion, or any other of the thousand titles with which ancient and modern speculation has invested him, but simply the Architect,—as the Greeks have it, the ἀρχὸς, the chief workman,— under whom we are all workmen also; and hence our labor is his worship.**

This idea, then, of masonic labor, is closely connected with the history of the organization of the institution. When we say "the lodge is at work," we recognize that it is in the legitimate practice of that occupation for which it was originally intended. The Masons that are in it are not occupied in thinking, or speculating, or reasoning, but simply and emphatically in working. The duty of a Mason as such, in his lodge, is to work. Thereby he accomplishes the destiny of his Order. Thereby he best fulfils his obligation to the Grand Architect, for with the Mason laborare est orare—labor is worship.

(補つても訳として)

「フリーメーソン組織は[崇拝する対象の至高の神]をもってして[神聖なる力](numen divinum)とも[全てを支配する存在(moderator rerum omnium)]とも見ずに[宇宙の偉大なる設計者](グランド・アーキテクト・オブ・ユニヴァース)たるものとして見出す。[神]に対するメーソン観念ではその神をして「地球の万能なる設計者」とし、そして、「地球を取り巻く数多の世界の設計者」とする。彼は[ens entium] [theion] (ギリシャ語で神)でもなく、古代および近代の類推が彼に授与したところの幾千の他の称号でもなくただ単純に、「アーキテクト(設計士、建築家)」、ギリシャ語では「ἀρχὸς」となり、「頭目としての職工」を意味する存在として、同様に職工となる我ら全員を差配する立場に位置する存在となる。それがゆえ、我々(訳注:アルバート・マッキーを含むメーソン)の仕事とは[彼の崇拝]とのことになる。それから、このメーソンの勤労奉仕の観念は濃密にも制度としての組織の歴史に関わることになる。我々が「ロッジ(訳注:メーソンの交流・活動の拠点たる会館のこと)は現在、稼働中である」と述べる時、我々はそのロッジが「元来からして意図されていたように適切なる[実践]の機会を得ていること」を認識していることになる。メーソンは「思索」・「推察」・「理由付け」に専心するものではなく、ただ単純に、そして、強調されることとして「活動すること」に専心しての存在となる。それによって、メーソンはおのれに課された「オーダー」を完遂するのである。それによってメーソンは「偉大なる設計者」(グランド・アーキテクト)へのおのれの義務を充足させるのである。何故なら、メーソンにとり「労働は崇拝(laborare est orare)」であるからである」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

以上をもって、そう、フリーメーソンの内部の人間の語り口上を引くことによって、

「[フリーメーソン]らは[神の意思](より正確には彼らが想定する

[偉大なる建築者]といった言葉で表される存在、[メーソンら職工らの頭目]にあつての高位の意思) に適って行動することを「そもそももつての」理想かつ存在意味であると唱道しての団体となっている」と(と内部者によって断じられている)

とのことの出典とした (それについては — 物を自分で考える[魂](本質)さえ有して「いない」との相応の向きらを対象に相応の向きらに量産させての俗悪なフリーメーソン陰謀論ばかりが目につくようになって日本国内では邦訳刊行されていないとの著作だが — [Freemason 員の歴史家]としてよく知られているマンリー・P・ホール (Manly P. Hall) がオンライン上より全文確認できるとその著作、THE LOST KEYS OF FREEMASONRY or The Secret of Hiram Abiff 『フリーメーソンの失われた鍵ら、いふなれば、ヒラム・アビフの秘密』(1923) にての冒頭にあつてからして “Freemasonry, though not a religion, is essentially religious. Most of its legends and allegories are of a sacred nature; much of it is woven into the structure of Christianity.” 「フリーメーソンは同団が宗教ではなくとも本質的には極めて宗教的な存在である。フリーメーソンの伝承および指針の大部分は神聖性を帯びてのものとなっており、うち、大部分はキリスト教大系にて織り込まれてきたとのものである」と述べているところなどよりも容易に伺い知れるところ「でも」ある)。

ここまで述べたうえで書くが、

「チャック・パラニュークあるいはチャック・パラニュークの小説をモデルにしての映画化をなしてのデヴィッド・フィンチャーのスタッフらに [予言] をなさしめたのと同様の力を (宗教の徒らならばそれを聞けば涎を流して彼ら流の [喜び] に打ち震えかねない) [彼(神)の声]と表してビル爆破テロの問題と絡めて扱っていたのが『009 RE:CYBORG』という国内アニメ映画 — 本稿を公開している Web サイトの一つ(筆者としては多くのことを告発していたとのつもりであるサイト)の基本部分を構築してより年度にして二年程後に公開された2012年10月下旬公開の国内アニメ映画 — とはなるが、チャック・パラニュークという作家がその『009 RE:CYBORG』に登場する [彼の声] ([神の声]) のようなものを「個人的に」聞いているような人間 — 心底からの完全な操り人形であることを是とするような類 — であったとしても、
「なんらおかしくはない」
と揚言しても[問題にならないだけの状況証拠]がある(と手前は判断している)」

については本稿で後の段で映画『ファイト・クラブ』に匹敵するような「ふざけた」他の前言作品らを取り上げ、『ファイト・クラブ』の問題それ自体のフリーメーソン・シンボリズムの顕在化の問題と合わせて、そうもした他作品らに関して、
[それらがいかにフリーメーソンのシンボリズム体系に露骨に準拠してのものなのか]を指摘することとする、そして、また、[フリーメーソンがどういう組織体であるか]を指摘することとする所存だが — (:信じられるだろうか。(それについて「も」典拠挙げ連ねながら後述するが)「イタリアでは駅爆発テロ「ら」をお仲間の諜報機関大物らと企画したと主流派ジャーナリストら読み物でまとめられ、また、当局の捜査対象になつてもいるフリーメーソンの元グランド・マスター」(表向き破門・追放されたことになっている「元」グランド・マスター)がその後も法網をかいくぐり続け、そのうえで隠然とした影響力を保持し続け、また、多数の犠牲者を出した爆破テロ「ら」への関与を問題視された「後」も同男(リーチオ・ジェッリという男)がその後に「ノーベル文学賞受賞候補」に(お身内達のか)ノミネートされていることが「この狂った世界」の現状を示している

と指摘できるようになっている) —、そのうえでフリーメーソンらが[自殺テロにもやぶさかではない宗教的狂人ら]と同文に崇高なるものと強調している、[地上における至高存在の思惑の代行]が一体全体、本当はいかなるものなのか、[矮小な人間レベルでの犯罪的気風]の問題では済まされぬところとして再度問うつもりではある（:性質が悪いのは[神の意志の代行に勤めてきた者達 —偽善・欺瞞と共にあれば、その卑劣さに辟易もさせられようとの者達—]に与えられる対価が、(ファイト・クラブのタイラー・ダーデンの台詞をとって)、「偉大な目的に奉仕する宇宙に打ち上げられた猿を思え」「自己滅却しての奉仕をなせ」(そして、隠喩的などころとして)「捨て石として死んでいけ」との申しようを(深層では)体現してのものであると解されるところでもあるのだが、そうしたことらをもそれらについて殺されるまで理解していない、理解するつもりもなく、[精神と魂の偽物]として世にあっての現益(現世利益)を享受し続けられると思っている節がある一群の者達らの愚劣なやりようと共に[我々人類にはそれを克服せねば[明日はない]とのこと]として指摘・問題視したいと考えている)。

そうした問題視をなしていく中で

「フリーメーソンの紐帯に属する者達の一部が[一連の事件の演出]に使役された(必ずしもビルに突撃した飛行機を直接ハイジャックした人間がメーソンの構成員それ自体である必要はない。ただし、悲劇であり、また、最悪の劇であるとの[舞台講演]としてのそれを[テロである][テロにすぎない]などと演出しての[大道具係]や[照明係]の問題を観念せねばならない)と証せるであろう」

との申しようなせると強調する所存でもある(陰謀論者らは911が演出されたものであるとしても、卑小なところではアメリカ覇権主義、よりもって先に進んだところとしてはフリーメーソンの理念でもある[[ソロモン神殿それ自体]ないし[ソロモン神殿破壊の後に控える]新世界秩序の実現]と繋げがちだが、筆者は現行、NWOこと新世界秩序については Nuts World Obsession こと[痴愚者世界妄想]とでも呼び習わしたほうが適切だろうと見るに至っている)。

その点、「だがもってして、」のこととして強調しておくが、

[[至高存在の意思の代行]との式で[神の声]の問題として人間レベルの紐帯で911の事件を「組織的に」「額面と全く異なるかたちで」実演した者達がいるとの話]

ですらそれが「真」たりうると判ずるに足りることが山積している中ながら、この身、筆者にとってはそうしたこととて

「クリティカル・ポイント「ではない」(そこをして天王山として位置付けるには満たないことである)」

と見立てており、必要ならば、その可能性にまつわる自身の主張を融通無下に訂正・撤回してもいい、[(現時点では)そうであると強調すべきことではなかった]と融通無碍に訂正・撤回してもいいととらえているところのものともなる —たとえば、である。本稿公開サイトの他所ではメーソンが911の事件を起こしたと証せるようになっていて強くも「断じる」との式を(ありし日の収集情報や属人的知識の集積に影響を強く受けるとのかたちで)前面に出していたのだが、(本稿にて実際にその具体的材料の一部をこれより呈示していくところに基づきなしていた)そうした主張についても「言い過ぎであり、現時点では断言すべきではなかった」と融通無碍に訂正・撤回してもよいともとらえている — (ただし、はきと申し述べるが、本稿で問題視していくような「フリー

メーソン・シンボリズムと露骨に結びついた」多重的前言がなされていること自体は事実なのであるから(後段にての具体的指し示しの部を参照されたい)、「フリーメーソンのような団体を動かす力を有した」存在が不可解に体系的前言がなされているとの911の事件を[儀式的挙動]として実施したこと自体は撤回しようがないととらえている)。

(上のことにつきくどくも述べるとして)

また、「体験を人は共有できない」とは一般的に言われるが(そして、「他をもってして自己と同じものと無条件にとらえることに陥穽がある」と私的にはとらえているが)、[カルト]や[メーソン]の成員といった存在らが

[いかに人間離れしたこと]

を組織的にやらされもする存在なのか(彼らから見た[外部]の人間の立ち位置ながら観察したうえで思い知らされたとの当方のような人間ではなく)よく分かっておらぬ読者のサイド「から」筆者のそうした主張、

「フリーメーソンの紐帯に属するが如き者達の一部が一連の事件の[演出](実際に自殺をした役者らがイスラム教ラディカル・セクトの狂人との仮面をかぶっていようとなかろうと舞台裏での大道具係や小道具係なくして成立しはせぬ[演出])に重要部分で使役されていると述べられるようになっている」

との主張を内心で斥けていただいても構わないとの思いが筆者にあること、ここに強くも断っておく 一本稿公開サイトではそうした[陰謀論「的」ととられうる側面]を強くも出しすぎていたとの反省があるために現時、語調を弱めてもいいとも考えている人間として強くも断っておく。

だが、しかし、読み手がそうした筆者主張を斥けた(あるいは筆者自身からその他のより重要な主張を生かし活かすために「前言訂正」とのことで斥けた)としても、この世界、

[不快な勢力 一当然に存在意味があって存在しているのだろうとの式で [諸組織への浸潤を企図し諸地域に会館を設置し続けてきた国内カルト]から[諸組織への浸潤を企図し諸地域にもう「何百年も前」から会館を設置してきたフリーメーソン]らのような表層面のオープンな啓発団体に至るまでの滲透組織ら、影に隠れてジキルとハイド的側面を持つ、実体を知る人間にとっては不快極まりない存在としての勢力ら— にその構築・運用の一端が側面から強要されてきた節ありもする世界]

の行く先にまつわる、

[予言の霊に憑かれたが如く前言]

の問題は確かにそこに残置し続け(確率論に依拠しても、それが[偶然]などではなく[恣意による賜物]であると後の段にて詳述する)、そこに見る危険性に何の変化もないとのことは筆者がその真実性につき譲れないとのこととなる、そも、

[過誤含んでいたと一步譲(ゆず)る必要もなく厳然とそこに存在している事実の問題である]

とくどくも明言する次第である(:繰り返すが、ファイト・クラブを含む諸種[前言]作品らにおけるフリーメーソンの特質は後の段にて事実と証拠ベースで解説を付していく。また、イタリアでは諜報機関の大物らとも結託して左翼に罪をかぶせるべくもの駅爆破テロ「ら」を実施して多くの人間を殺したと指摘されるフリーメーソンの領袖(リーチオ・ジェッリ)が法網をかいくぐり続け、後にあってもノーベル文学賞の候補にノミネートされるような世界がこの世界であるとの解説も(盤石なソースを挙げ連ねながら)なす)。

([1] から [9] と振っての『ファイト・クラブ』の問題性について指摘するための話に戻すとして) 続いて[9]と振っての部に入ることとする。

[9]

映画『ファイト・クラブ』は以下これより呈示していくような観点で

[生贄殺人 —焼殺としての生け贄殺人—]

について爆破テロとの絡みで「入念かつ緻密に」言及していると解される側面「をも」伴っている作品ともなる。

その点、原作小説にせよ映画化版にせよ [週末殴り合いクラブ] の面々が企図したのはさながら物品破壊だけの [無血テロ] であるかのような描写が『ファイト・クラブ』という作品ではなされている感もある —普通に考えれば、深夜にあってもビルには警備や保守の人間が出入りすることもあろうと思えるのだが、とにかくも、『ファイト・クラブ』では夜間の人がない時分を狙っての爆破が無血テロであるかのように描写されている感もある—、いや、そもそももってして、爆破テロに伴う人殺しとのその行為については意図して明示しての着眼をなしていない節が如実にあるのであるが、

[劇中内における爆破テロ (ワールド・トレード・センターと視覚的に示されている一画でのビル連続爆破) との絡みでの [生贄殺人 —焼殺としての生け贄殺人—] に対する入念かつ緻密なる描写を捕捉した段階で [現実世界で発生した 911 の事件] (多くの人間がタワーリング・インフェルノ、[そびえ立つ地獄] にあって逃げ場もない中で火炎に包まれ苦悶のうちに落下死を選んだり焼死したりすることになったとの事件) に通ずる精神性が —他の問題要素「ら」が目立ってそこにある中において— 顧慮されて然るべきこととなる]

がゆえに同じくものことを取り上げることにした。

以上、申し述べたうえで、一体全体、映画『ファイト・クラブ』にみとめられる [生贄殺人 —焼殺としての生け贄殺人— に対する爆破テロと通ずるところの入念かつ緻密なる言及] がいかようなものかだが、同じくものことに通ずるところとして最初に次のことに注意を向けることとする。

『ファイト・クラブ』では主人公のオルター・エゴ(別人格)がブラッド・ピット演じるタイラー・ダーデンという爆破テロの首魁として設定付けされているが、同タイラー・ダーデン、石鹼販売業を生業としているとの設定を伴う存在にして、その石鹼の材料は人間の油からとってのものであるとの描写をなされている存在でもある]

(『ファイト・クラブ』では主人公がタイラー(当初、主人公はタイラーを自分の中の別人格と気づいていない、他人であると認識している)と共に [瘦身クリニック] に潜入してそのダストボックスに容れられている人体脂肪を掠め盗って石鹼の材料とせんとする描写がなされてもいる。 そうもした映画『ファイト・クラブ』ではタイトル・ロゴとして [ピンク色の石鹼にて刻印されてのタイトル・ロゴ] が採用されもしている — ※そちらは英文 Wikipedia [Fight Club] 項目の [Release] の節、[Marketing] の部の現行記載として “ The firm proposed a bar of pink soap with the title "Fight Club" embossed on it as the film's main marketing image; the proposal was considered "a bad joke" by Fox executives. ” 「映画『ファイト・クラブ』供給会社は [題名 [ファイト・クラブ] が表面に刻印されたピンク色の石鹼] をもってして同映画の主たるマーケティング・イメージとして示すことになった。その呈

示やりようは供給会社 20 世紀フォックス重役らの[バッド・ジョーク]であると考えられている」と記載されているところでもある。尚、人間石鹼についてはそういうものの生成がナチスの絶滅収容所運営の中で囚人遺体を具になされていたとの話が伝わっているが、そちらの方は都市伝説であると認知されている。例えば、現行、和文ウィキペディア[人間石鹼]項目にては次のような記載がなされている ⇒ (引用するところとして) “人間石鹼は、第二次世界大戦中にユダヤ人強制収容所の犠牲者の肉体から工業的に石鹼が製造されたとされるプロパガンダおよび都市伝説。この逸話は広く信じられてきたが、人間の脂肪から石鹼が工業的に製造されたことはない” (引用部はここまでとする)。また和文ウィキペディアの本稿執筆時の現行記載内容として同項目([人間石鹼]項目)の末尾の部には次のような記載もなされている ⇒ (引用するところとして) “ファイトクラブー石鹼製造の過程は異なる(瘦身の結果廃棄される脂肪を精製する)。消費文明に対するアンチテーゼの象徴として描かれている”(引用部はここまでとする)―)

上にて注意を向けたこと、人体の脂肪を用いての石鹼精製については次のことが問題になる。

第一、『ファイト・クラブ』劇中にて人間の油が石鹼としての役割を果たすとの説明がなされるパートで

[かつて川の上流にて実行されていた生贄の儀の話]
[ダイナマイトを製作するためのグリセリンの話]

が組み合わせてなされているとのことがある。

細かくはこうである。

[かつて川の上流で人間の生贄の儀式が執り行われており、そこから流れてきた人間の死体に由来する灰汁(あく)に洗浄作用があると知っていたから昔の人間は川の下流で洗濯をする、とのタイラー(テロ首魁)の発言がなされた後、同じくものタイラーが「人体の皮脂でダイナマイトに使えるニログリセリンを造れる」と強調、(そうとはおくびにも出さぬ中ながら)自身のもうひとつの人格である主人公に人格改変を強要すべくも先行して口の端に乗せた石鹼の話やニログリセリンの話とつなげるとのかたちで主人公の手に「(石鹼製造に供してのものであろう苛性ソーダ由来と思われる)化学反応」を起こさせて火傷させるとのシーンが出てくる]

上に見るような式で映画『ファイト・クラブ』では[ダイナマイトを用いての時限爆破計画]のことが[生贄の儀(川の上流で行われていた生け贄殺人)]との絡みで「当然に」想起されるようになっている。

第二。映画『ファイト・クラブ』は時限爆弾によるテロ(連続ビル爆破テロ)が引き起こされるとの映画だが、そこにての[ビル爆破]と関わるとも受け取れる[ニログリセリンにまつわるタイラー申しよう](生贄と人間石鹼とニログリセリンの話をつなげての申しよう)が他のシーン「にも」表出している。

具体的にはこうである。

「映画『ファイト・クラブ』ではタイラーと主人公が瘦身クリニックに潜入し、人間の脂肪を(石鹼製造との名目で)盗み、それから(人間の脂で造られもする)石鹼のダイナマイト利用の話が語られる。その中で[人間の生贄殺人(焼殺としての生贄殺人)の儀と生け贄殺人副産物の灰汁における洗浄作用]のことが語られるとのかたちで映画は進行していくのだが、そちら一連の流れの中にての瘦身クリニック潜入直前のシーンにて主人公のコンドミニウム ―本稿の先の[6]の段の解説部にて言及しているように DVD 開始後、再生時間が 25 分 47 秒後にてのシーンにて[PEARSON TWOER「S」(複数形)]の立て看板が画面に映され、直後、[飛行機の旅から帰った主人公が自身の部屋がガス爆発の憂き目に遭って部屋から焼け出されることになったとの描写]がなされることを本稿の先の段で説明しもしていたとのピアソン・タワー「ズ」との物件―での爆発事故が何時でも起爆可能なかたちで仕組まれていた人為に

よる時限式爆発だったとの「事後」報告が警察から主人公に行くことになる、との描写がなされてもいる（「ピアソン・「タワーズ」のダイナマイト爆破」と「人間焼殺の副産物にしてダイナマイト原料に転用される人間石鹸の話」とが細かくもの映画の流れにて計算のうえで結びつけられている風がある）」

要するに、

「劇中にて【ダイナマイト製造と紐付けられての生贄を(焼き)殺すとの儀式的行為にまつわっての言及】と【ダイナマイトの類を用いての時限式ビル爆破にまつわっての言及】とが通貫しての「文脈」として濃厚に結びつけられている」

とのことが映画 —[自己滅却を是とする相応の人間ら]が組織的にワールド・トレード・センターと寸刻描写されての場にあつての複数ビル爆破に関与しているとの映画— の中に見てとれるとのことがある。

話がややこしくもなっているが、同じくものことにまつわつての出典を挙げておく。

出典 (Source) 紹介の部 102(9)

SOURCE 102(9)



Cimabue's Celebrated Madonna (1853-5)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典 (Source) 紹介の部 102(9) にあつては

「『ファイト・クラブ』劇中にある【ダイナマイトと結びつけられもしての生贄を(焼き)殺すとの儀式的行為にまつわっての言及】と【ダイナマイトを用いてのビル爆破計画にまつわっての言及】とが通貫しての「文脈」として濃厚に結びつけられている」

とこのことの典拠を挙げることにする。

まずもってレンタル DVD を借り受け、該当部チェックすることで確認なせましょうとところとして、

『ファイト・クラブ』劇中にて人間の油が石鹼精製に使えるとの説明がなされるパートで

【かつて川の上流にて実行されていた生贄の儀の話】

【ダイナマイトを生成するためのグリセリンの話】

が組み合わせてなされるということがある

とこのことのソースとして DVD 再生開始後、再生時間が

【1 時間 00 分 34 秒(1:00:34)から 1 時間 2 分 38 秒(1:02:38)】

の部にて発生するダイアログを掻い摘まんで下に抜粋することにする。

(以下、DVD 再生時間にして 1:00:34 以降の痩身クリニック進入による人間の脂肪窃取の部よりのダイアログ(英文字幕をオンにすることで誰でも確認できるダイアログ)よりの抽出をなすとして 一訳文も付したが、そちらは日本語字幕表示オンで表示されてくるものを挙げることにした)

The salt balance has to be just right so the best fat for soap comes from humans.「塩分のバランスがいいのは人間の脂肪だ」(タイラー)

— Wait, what is this place? 「ここはどこなんだ?」(主人公)

— A liposuction clinic. 「痩身クリニックだ」(タイラー)

(以下、DVD 再生時間にして 1:01:30 以降の「石鹼とダイナマイトの話」、そして、「人身御供の儀と石鹼の関係についての話」につき、英文字幕をオンにすることで確認できる部位よりの抽出をなすとして 一訳文も付したが、そちらは日本語字幕表示オンで表示されてくるものを挙げることにした)

Add nitric acid, you've got nitroglycerin. 「グリセリンをすくって硝酸をくわえるとニトログリセリンができる」(タイラー)

⇒

Then add sodium nitrate and sawdust, you've dynamite. 「硝酸ナトリウムとおが屑を足すとダイナマイト」(タイラー)

⇒

Yeah, with enough soap, one could blow up just about anything. 「石けんがマイトになる」(タイラー)

⇒

Tyler was full of useful information. 「彼は物知りだった」(主人公の独白)

⇒

People found clothes got cleaner when washed at a certain point in the river. 「昔の人間は川の決まった場所で洗濯をした」(タイラー. 日本語字幕では表記のように表示される. 正確な訳は「人々は川の特定期間で洗濯物がより綺麗になることを見つけた」)

⇒

— You know why?

— No. 「何故か分かるか」(タイラー) 「いいや」(主人公)

⇒

Human sacrifices were once made on the hills above this river. Bodies burnt. Water permeated the ashes to create lye. 「上流でいけにえが焼かれ——その灰が川の水に混じり灰汁になった」(タイラー)

(続いてタイラーが溶液の入った容器を主人公に見せるシーンをはさみ)

⇒

This is lye. The crucial ingredient. Once it mixed with the melted body fat, a white soapy discharge crept into the river. 「これが灰汁. 体の脂肪と混ざると——石けん液と同じだ」(タイラー)

(筆者註記: この後、タイラーが主人公に(灰汁であるとして)おそらく苛性ソーダ・水酸化ナトリウム溶液であろうと素人目にも見られる容器内溶液を主人公の手にかけ、主人公の皮膚と化学反応を起こさせて火傷を起こさせる. その上で悶絶し弱々しく助けを求める主人公に次のように続けて言う)

⇒

The first soap was made from heroes' ashes like the first monkey shot into space. 「宇宙に打ち上げられたサルを思え」(タイラー. 表記の部の訳は日本語字幕によつての訳だが、正確に訳せば、「最初の石けんはさながら宇宙に打ち上げられた最初のサルのように〔(生贄に捧げられての)英雄らの灰〕から造られた」となりもするところである —※同台詞は映画『ファイト・クラブ』にて〔ビル爆破計画にいそしむファイト・クラブ成員ら〕をして〔スペース・モンキー〕と呼称していること(上から命令された通りに動くことに至上の喜びを感じ、〔短絡的で何も考えぬとの伝で猿並みに頭の具合がよろしくない者達〕との含みが露骨にあるようにとれるが、とにかくも Like a monkey ready to be shot into space. と評されている者達)および〔宇宙開発計画で最初に殺すことを前提に猿が打ち上げられていること〕に起因する(英文 Wikipedia [Monkeys and apes in space] 項目には “ The first ever monkey astronaut was Albert, a rhesus monkey, who on June 11, 1948 rode to over 63 km (39 mi) on a V2 rocket. Albert died of suffocation during the flight. Albert was followed by Albert II who survived the V2 flight but died on impact on June 14, 1949 after a parachute failure. Albert II became the first monkey in space as his flight reached 134 km (83 mi) - past the Karman line of 100 km taken to designate the beginning of space. Albert III died at 35,000 feet (10.7 km) in an explosion of his V2 on September 16, 1949. Albert IV on the last monkey V2 flight died on impact on December 8 that year after another parachute failure. His flight reached 130.6 km. Alberts I, II, and IV were rhesus monkeys while Albert III was a cynomolgus monkey. ” (大要訳)「最初に(テスト用実験動物として)1948年にV2ロケットに乗せられて〔宇宙飛行士〕になったのはアカゲザルのアルバートで、そちらは飛行中に酸欠で死亡。次いで、アルバート2世が後を継いだが、パラシュートの不具合で死亡(アルバート2世ははじめて宇宙空間に出た猿となる)。その後のアルバート3世は1949年にV2ロケットの爆発で死亡。アルバート4世はパラシュートの不具合で死亡」と記載されている通り、宇宙へと送り込まれたサルらは悉く死亡している))—)

以上、映画よりのダイアログの原文抜粋(再生時刻挙げての抜粋)でもって

『ファイト・クラブ』劇中にて人間の油が石鹼精製に使えるとの説明がなされるパートで

【かつて川の上流にて実行されていた生贄の儀の話】
【ダイナマイトを生成するためのグリセリンの話】

が組み合わせられてなされるとのことがある

とのことのソース紹介とした(疑わしきにあつては流通しているDVDを借りたうえで内容を確認されたい)。

次いで、

「映画『ファイト・クラブ』ではタイラーと主人公が痩身クリニックに潜入し、人間の脂肪を(石鹼製造との名目で)盗み、それから(人間の脂で造られもする)石鹼のダイナマイト利用の話が語られる。その中で[人間の生贄殺人(焼殺としての生贄殺人)の儀と生け贄殺人副産物の灰汁における洗浄作用]のことが語られるとのかたちで映画は進行していくのだが、そちら一連の流れの中にての痩身クリニック潜入直前のシーンにて主人公のコンドミニアム 一本稿の先の[6]の段の解説部にて言及しているようにDVD開始後、再生時間が25分47秒後にてのシーンにて[PEARSON TWOER「S」(複数形)]の立て看板が画面に映され、直後、[飛行機の旅から帰った主人公が自身の部屋がガス爆発の憂き目に遭って部屋から焼け出されることになったとの描写]がなされることを本稿の先の段で説明しもしていたとのピアソン・タワー「ズ」との物件一での爆発事故が何時でも起爆可能なかたちで仕込まれていた人為による時限式爆発だったとの「事後」報告が警察から主人公に行くことになる、との描写がなされてもいる([ピアソン・「タワーズ」のダイナマイト爆破]と[人間焼殺の副産物にしてダイナマイト原料に転用される人間石鹼の話]とが細かくもの映画の流れにて計算のうえで結びつけられている風がある)」

とのことの解説を下になしておくこととする。

まずもって本稿の先の[6]の段の解説部にて解説部でも述べたことだが、本編開始後、再生時間(DVD再生環境タイムカウンター表示)が

【00時間25分47秒】

にてのシーンで

[PEARSON TWOER「S」(複数形)]

の立て看板が画面に映される(その際、英文字幕(Subtitles)をオンにしていると、Home was a condo on the 15th floor[我が家はコンドミニアムの15階だ]とのナレーションも視覚的に確認できる)。

そのピアソン・タワーズの爆発シーンに続くかたちで居室より焼け出された主人公は災難に遭う前に飛行機の中で出会い意気投合したタイラー(実体は主人公の中の別人格なのだが、主人公はそのことに気づいていないとのタイラー)の石鹼会社の名刺を取り出し、そこへの連絡を企図する。

映画本編開始後、再生時間(DVD再生環境タイムカウンター表示)が

【00時間27分45秒】

の部にてのタイラーの名刺(Paper Street Soap co.との会社の名刺)が表示されるシーンがそうである。

上をもってして[[石鹼]と[爆破]と結びつけての式がとられている]のは一連の連続するシーン(再生時間が 25 分 47 秒後にてのシーンから再生時間が 27 分 45 秒以降にての連続するシーン)を目で追うことでも理解できるようになっている。

次いで、先の[7]の段でも言及している部だが、国内流通 DVD にての再生時間表示が

【056 分 29 秒後】

よりの英語版字幕オンにして確認できるやりとりの「再度の」抜粋をなす。

It means it was home-made. Whoever set this dynamite could have blown out your pilot light days before the explosion. The gas was just a detonator.「自家製爆発物です。犯人はいつでも爆発させることができただが——ガスが起爆剤に・・・」(警察官. その際に主人公に報告なしている警察官は後に主人公がファイトクラブの犯行告発をなした際に対応した警官ともなっている)

以上のようなやりとりがなされるシーン、再生時間 56 分 29 秒後のシーンから間を経ずにの 1:01:30 以降のシーンにあつて直近抜粋した、

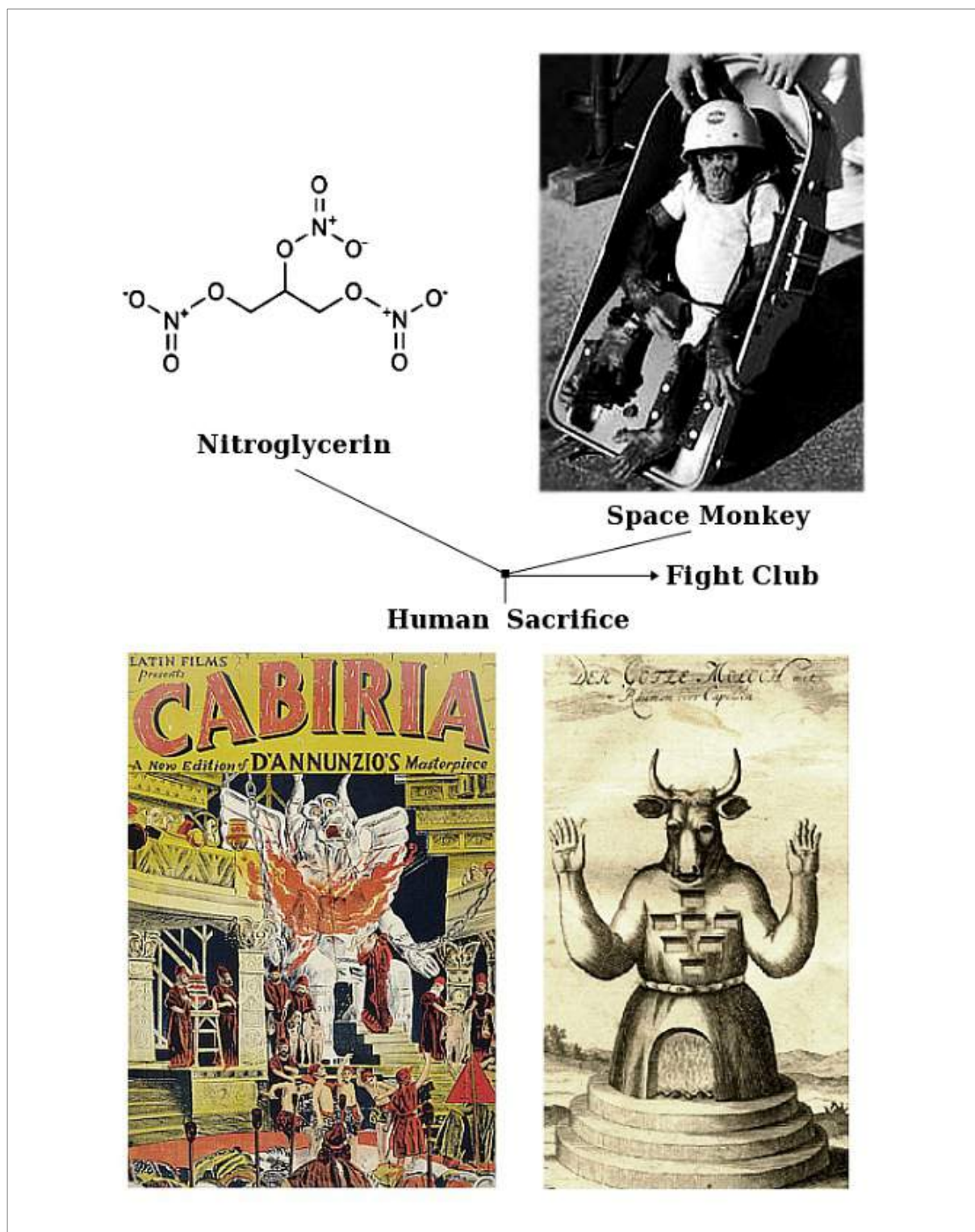
Add nitric acid, you've got nitroglycerin.「グリセリンをすくって硝酸をくわえるとニトログリセリンができる」(タイラー)
Then add sodium nitrate and sawdust, you've dynamite.「硝酸ナトリウムとおが屑を足すとダイナマイト」(タイラー)
Yeah, with enough soap, one could blow up just about anything.「石けんがマイトになる」(タイラー)
Tyler was full of useful information.「彼は物知りだった」(主人公)
People found clothes got cleaner when washed at a certain point in the river.「昔の人間は川の決まった場所で洗濯をした」(タイラー)
— You know why?
— No.「何故か分かるか」(タイラー)「いいや」(主人公)
Human sacrifices were once made on the hills above this river. Bodies burnt. Water permeated the ashes to create lye.「上流でいけにえが焼かれ——その灰が川の水に混じり灰汁になった」(タイラー)
(続いてタイラーが溶液の入った容器を主人公に見せるシーンをはさみ)
This is lye. The crucial ingredient. Once it mixed with the melted body fat, a white soapy discharge crept into the river.「これが灰汁 体の脂肪と混ざると——石けん液と同じだ」(タイラー)
(この後、タイラーが主人公に(灰汁であるとして)おそらく苛性ソーダ・水酸化ナトリウム溶液であろうと見られる容器内溶液を主人公の手にかけ、主人公の皮膚と化学反応を起こさせて火傷を起こさせる。その上で悶絶し弱々しく助けを求める主人公に次のように言う)
The first soap was made from heroes' ashes like the first monkey shot into space.「宇宙に打ち上げられたサルを思え」(タイラー)

とのやりとりが発生するとの流れになっている。

従って、[時限爆破]と[石鹼(人体脂肪より生成しての石鹼)]の比喻が —主人公居宅としてのピ

アーソン・タワーズの時限式爆破との絡みでも—「人間の生け贄の灰汁からとっての石鹼」とのコンテキストにあって想起させられるかたちとなっている（ただし、映画の意味を深く考えながら視聴することのしない限り、そうした寓意性には気づけないとも見える式となっているので（メッセージングの式としては）ある種、[凝ったやりよう]であるとも言える）。

(出典(Source)紹介の部 102(9)はここまでとする)



上掲図左上の部の分子式は図に付してのキャプションから説明不要か、とは思うが、オンライン上より誰でも即時に確認できるとのニトログリセリンの分子式となる。1846年(あるいは

1847年とも)に合成がなされた同ニトログリセリンが間を経ずに

[アルフレッド・ノーベル]

の手によってダイナマイト発明特許取得とのかたちでノーベルに巨万の富をもたらした(そして、その富が原資となって[ノーベル賞 Nobel Prize] および同賞授賞を執り行う[ノーベル財団 Nobel Foundation] が後の1901年に産み落とされた) とのこととはよく知られた歴史の一断面とはなるのであるが(一般常識に毛が生えた程度を出でぬ話であるため、いちいちもって出典紹介はなさないが、そこからして疑わしいとの向きは各自確認いただくとよからう)、[ノーベル賞] 創設を可能ならしめるとのかたちにてアルフレッド・ノーベルに巨万の富をもたらしたそのニトログリセリン、ダイナマイトの爆発力の源泉となるニトログリセリンが[痩身クリニックから盗まれた人間の脂肪を用いての人間石鹼の製造]

と共に

[重要なメタファー]

として用いられているというのが映画『ファイト・クラブ』となる。

すなわち、主人公のオルター・エゴ(別人格)たるタイラー・ダーデンが痩身クリニックより廃棄済みの人体脂肪を窃取した後、爆破機序をもたらすニトログリセリンの生成プロセスを(自己がその製造を生業としているとの)[石鹼]にまつわるところで引き合いに出している、[生贄を焼殺した後に生じた灰汁(あく)が石鹼同様の洗浄作用からから重宝がられているとの雑学(?)]披露とワンセットに引き合いに出しているとのことが『ファイト・クラブ』粗筋の背骨にあたる筋立て、すなわち、

[タイラーの真の目的は人間の脂肪を盗んでの人間皮脂使用石鹼の製造などではなく(同様に人体の脂と劇中にて結びつけられている)ダイナマイト — アルフレッド・ノーベルに巨万の富をもたらしたダイナマイト — の類の製造となっており、によって、連続ビル爆破計画(先述のようにワールド・トレード・センターとサブリミナル的に示唆されている場所での連続爆破計画)が実行されることになる]

とのところに通じているとの[緻密なる作品設定]がなされている。

次いで、**上掲図右上の図**であるが、同図、タイラーが自身の手足となる配下らをして Space Monkeys[スペース・モンキー]

と呼んでいること(上にて解説なしたこと)の由来となっている、

[米国の宇宙開発政策のなかで宇宙空間に打ち上げられた猿(らの中の一匹)]

を写した写真となりもする、具体的には英文 Wikipedia[Monkeys and apes in space]項目に掲載されているとのマーキュリー計画(アポロ計画に先行する米国にての宇宙開発計画)でロケットに打ち上げられたチンパンジー(Ham ハムというチンパンジー)の写真となりもする。

写真に見るチンパンジーのハムは宇宙空間から生還しての後、丁重に扱われたとされるが、ハム以前に宇宙に上がった前任のスペース・モンキーら、それも初めて宇宙空間に足を踏み入れたサル(アカゲザル)たるアルバート系統の名前を名付けられた一群の猿らの運命は悲惨で、なかならず、[はじめて宇宙に上がることに成功した猿]であるアルバート2世(Albert II)の末期は、(そこにビルから焼け死ぬか、あるいは、飛び降りることを強いられた人々の運命を想起させると言えば、不謹慎と思う向きもあるかもしれないが)、パラシュートの機能障害による地面への衝突による凄惨なる死だった(スペース・モンキーとも称されよう存在らの初代の死の様は宇宙空間打ち上げに引き続いての凄惨なる落下・衝突死となり、タイラー・ダーデンは自身の手足らにそういう死に方を念頭にしての自己犠牲の精神を持って強要していると解される描写がなされている)。

上掲図左下の図は Cabiria『カビリア』という映画作品 — [モロク神(という聖書における

人身御供を強要する異教神) に対する古代カルタゴの人身御供の儀] が作中モチーフとなっているカピリアという名の少女を巡る 1914 年封切りのイタリア製サイレント映画 (映画史にあって初めて移動カメラを用いた映画ともされ、その伝でも海外では有名であるとのことである映画)]— の販促用に用いられた 1914 年製作ポスターから抜粋 (英文 Wikipedia [Cabiria] 項目にあって現行、掲載されている映画ポスターから抜粋) したものとなる。

対して、上掲図右下の図は映画 (直上言及の映画『カピリア』) というフィクションに見るおどろおどろしき作中設定にとどまらずにものかたちで [伝わるどころの崇拝様式] が人身御供の儀を伴ったものであるとのことがとくに知られている古代フェニキアにて崇拝されていたとされるモロク神関連の図像、英文ウィキペディア [Moloch] 項目掲載の 18 世紀ドイツに由来する再現図を抜粋したものとなる (:モロクについては現行、和文ウィキペディア [モロク] 項目にあって (以下引用として) “ 古代イスラエルでは、ヘブライ語で恥を意味するボシエト(bosheth) と同じ母音をあて、モレクと呼ぶのが一般的であった。『レビ記』では石打ちの対象となる大罪のうちに、「モレクに子供を捧げること」が挙げられている。しかしソロモン王は、モレクの崇拝を行ったことが『列王記』に述べられている。ここではモレクは、アンモン人の神であるアンモンの子らと同義に置かれる。… (中略) … 古代のヨルダン東部に住んでいたアモン人達からは、豊作や利益を守る神として崇拝されており、彼らはブロンズで「玉座に座ったモレクの像」を造り出し、それを生贄の祭壇として使っており、像の内部には 7 つの生贄を入れる為の棚も設けられていた。そしてその棚には、供物として捧げられる小麦粉、雉鳩、牝羊、牝山羊、子牛、牡牛、そして人間の新生児が入れられ、生きたままの状態 で焼き殺しており、新生児はいずれも、王権を継ぐ者の第一子であったとされる ” (引用部はここまでとする) と掲載されているようなことが伝わっている存在となる)。

以上の図らの抜粋意図は [邪(よこしま)さの問題] を 一余程鈍感な向きではない限り、その旨、ご理解いただけていることか、とは思うが— 訴求することにある。

すなわち、

「映画『ファイト・クラブ』にてのもう一人の主人公であるタイラー・ダーデンが自己の連続ビル爆破に収束していく挙動を(モロクに捧げて行われたが如く古代にての)生贄焼殺の儀と結びつけている」

ことの性質の悪さ、[邪(よこしま)さの問題]の訴求 一ノーベルに巨万の富をもたらしたとのニトログリセリンのこと「も」意図的に加味しての邪さの問題の訴求— をなすことにある (:ちなみに今日に伝わる[往古のモロク信仰]では[生け贄を巨大なモロク彫像の中に入れ込んで脱出不能なる状況に追い込み、焼殺する]との式が採られていたとされるが (同様の手法が採られていた事例としてはケルトにおける[ウィッカーマン]と呼ばれるもの、[人型のわら人形の中に戦争捕虜を詰め込んで燃やす]とのそれが知られている)、ワールド・トレード・センターでのツインタワーでは出口もないとの状況に追い込まれた人々が身体中を炎に包まれる中、堪えられずに高層ビルから飛び降りるとの状況も具現化した。そうもしたことから [類似性の問題]を見出すことに関しては 一自分自身を取り巻く状況が「分かっていない」との向きに限っては殊にそうだろうとも思うわけだが— 「こじつけがましい」との反論が呈されるどころか、と思う。「であるから、」述べるが、本稿の後の段では『ファイト・クラブ』並みに 911 の発生予見作品としての側面を有しているとの作品である『タワーリング・インフェルノ』にまつわっての詳解を加えることになり 一どうして予見描写が[執拗性]が感じられるかたちで具現化しているのかを示すのが本稿のメインテーマである中でそびえたつ地獄、『タワーリング・インフェルノ』という作品にまつわっての詳解を加えることになり— 、の中では、同作『タワーリング・インフェルノ』では [ツインタワーに仮託されるビルジグに閉じ込められ脱出不可能な状況に追い込まれた人々の苦悶の死] が 70 年代作品としてモチーフとされているとのことについて「も」十二分なる解説を講ずる所存である)) 。

ここまできたところで、である。映画『ファイト・クラブ』がどういう映画であるのか、今まで指し示してきたことらの振り返り表記をなすこととする。

(以下、[911の事件の先覚的言及作品]として映画『ファイト・クラブ』特性についていかなる解説をなしてきたのかについて総まとめを兼ねての振り返り表記をなす)

まずもって本稿では話の前提となるところ — [911の先覚的言及事物]がいかなるものか指し示す前段階にあつての話の前提となるところ — として

第一。「極めて基本的なところとして」先に発生した911の事件は(飛行機が突撃したツインタワーのみならず)ワールド・トレード・センターに存在していた[ビル七棟(1WTCから7WTCのビル七棟)が倒壊した]との事件となる — それについて公式発表では[飛行機突撃に起因する尋常一様ならざる衝撃]を受けてツインタワー(1WTCおよび2WTC)が崩落、それに巻き添えを食らうかたちで他のビルら(3WTCから7WTC)も倒壊を見たとの説明がなされている — 。

第二。その中身が適正なものか否かはとりあえず置き、かつてそこにあったワールド・トレード・センターの第七ビルに関してはその倒壊(全体構造をそれまで維持していたものが突然、パンケーキ状に瓦解していくさまが記録映像に残されているとの倒壊)が[発破倒壊 — コントロール・デモリッション/ビルを炸薬を用いて一挙に破壊して解体処理する手法 —]としての特色を呈している、人為的倒壊であるとの主張が建築家と発破倒壊の専門家らよりなる専門家団体より呈示されているとの[事実]がある — 主張の中身自体が[真実]との意味合いでの[事実]なのかは置いておき、建築士ら専門家筋がワールド・センター・第七ビルの崩壊は発破倒壊であるとの意見を表明しているとのことは「容易に」確認できる主張動向にまつわる[事実]としてそこに存在しているということである — 。

第三。それが果たして本当に「具体的情報に基づいてのことなのか」は置いておき、そして、それが果たして本当に「911の背後関係を真実一路で突いた信用に値するものなのか」は置いておき、911の事件が発生する「直前」、2001年7月(911発生の六週間前)にて、「アメリカで[アルカイダ]と[オサマ・ビン・ラディン]の犯行を名目にしての政府関係者筋による[自作自演のテロ]が起こされる」とのことを警告していた有名な論客が存在している — 事件の後で予言者であったとする[自称予言者]ではなく、[ある程度、知名度を有していた人物] (先立つ2000年にグローバル・エリート of 奇怪なる真夏の集いの隠し撮り映像を流通させ知名度を高めていたラジオ番組主催者のアレックス・ジョーンズ) が放送記録に基づいて確認できるところとしてそうしたことを述べていたとの[事実]がある — 。

とのことらについての確認をなした(出典(Source)紹介の部 101)。

そのうえで本稿では1999年に公開された映画作品『ファイト・クラブ』が次のような要素、[1]から[9]と共にあることを順次段階的に示してきた。

(以下、[出典]および「DVDさえ借りれば容易になせるレベルに落とし込んでの細かき確認方法」はここまで書き記してきたところに譲ったうえでの振り返りの「再」表記をなす)

(出典(Source)紹介の部 102)で「DVDを借りて試してみるだけで容易に後追いできるように。」とのかたちにて典拠紹介をなしてきたところとして

[1]

1999年公開の映画『ファイト・クラブ』はその[冒頭部]からして[グラウンド・ゼロ]との言葉が極めて目につかたちで登場している作品となる(映画再生時間、すなわち、DVD再生環境タイムカウンター表示[00時間02分09秒]から同[00時間02分10秒]の部にて英文字幕オンにすることで視覚的に容易に確認可能なことである(和文字幕では原語に対応してない)。尚、同じくものことについては先立っての段で次の趣旨のこと、解説していた ⇒ [[グラウンド・ゼロ]との言葉はそも、造語契機として[「マンハッタン」計画の結果としての広島・長崎の原爆投下地]に対して用いられた(生み出された)との経緯ある言葉にして、後、「ペンタゴン」特定区画を(原爆と同様の核による攻撃との式で)指す言葉となったとの経緯ある言葉ともなる。そうもした相当に使用局面が限られていた言葉がグラウンド・ゼロであった中でそれが[爆心地]とのニュアンスでワールド・トレード・センター災厄に流用されるようになったとの経緯がある。であるから、(相当、特殊な言葉であったとの)グラウンド・ゼロが「1999年封切りの」映画冒頭で用いられているのは「印象的」である]。)

(出典(Source)紹介の部 102(2))で「DVDを借りて試してみるだけで容易に後追いできるように。」とのかたちにて典拠紹介をなしてきたところとして

[2]

映画『ファイト・クラブ』は【[グラウンド・ゼロとの語で表されているとの一画]を連続ビル爆破倒壊によって現出しようとの計画】を描いている作品である(クライマックスでは複数ビルがパンケーキ状倒壊を呈しての発破倒壊していくさまが描かれている(劇中内の爆破倒壊数にまつわっての言及では12棟)。同じくものことについては映画再生時間、すなわち、DVD再生環境タイムカウンター表示[02時間01分18秒](映画後半部)以降の部をもって視覚的に容易に確認可能なことである)。対して、現実世界で発生して七棟の巨大ビルの倒壊を見た911の事件では「それが事実かは置き」「パンケーキ状に倒壊した」ビルについて発破倒壊説が専門家団体より呈示されていること、先に解説したとおりである(出典(Source)紹介の部 101を参照のこと)。

(出典(Source)紹介の部 102(3)で「DVDを借りて試してみるだけで容易に後追いできるように。」とのかたちにて典拠紹介をなしてきたところとして)

[3]

映画『ファイト・クラブ』は劇中ビル倒壊計画をして「金融会社(表にその名を目立って出されるのはクレジット・カード会社)を標的にして金融システムそれぞれのものを攻撃する」ためのものであると明示している作品である(映画再生時間、すなわち、DVD再生環境タイムカウンター表示[00時間02分09秒]から同[00時間02分10秒]の部にて英文字幕オンにすることで視覚的に容易に確認可能なことである)。他面、現実世界で発生した911の事件は(一般的解説のされようを引いて示しているように)金融系企業集積地たるワールド・トレード・センターが攻撃された事件である。

(出典(Source)紹介の部 102(4)及び出典(Source)紹介の部 102(5)で「DVDを借りて試してみるだけで容易に後追いできるように。」とのかたちにて典拠紹介をなしてきたところとして)

[4] 及び [5]

映画『ファイト・クラブ』では劇中ビル爆破計画の標的が「ワールド・トレード・センター」そのものであることを明言しているとの描写が現実的に「多面的に」なされている。

(以下、映像コンテンツの確認箇所を秒単位で容易に確認できるように指摘なしてきもしたところを再述するとして)

一点目。まずもってファイト・クラブの連続ビル爆破に収束する計画、プロジェクト・メイヘム(騒乱計画)にあつての初動段階の爆破目標 —[一石二鳥計画などと銘打たれての前段階爆破作戦]— として「黄金色の金属製球体オブジェ(噴水に設置のオブジェ)」が爆破されるとの描写がなされているが(映画再生時間、すなわち、DVD再生環境タイムカウンター表示[01時間45分29秒](映画後半部)以降のシーンにて視覚的に確認可能なことである)、噴水の再現までなされての映画版セットのそれとほぼそっくりといった球形金属オブジェがワールド・トレード・センターにてのツインタワーの間(のオースティン・トービン・プラザの噴水部)に存在していたとのことがある(ツインタワー付設の「ザ・スフィア」という実在のオブジェの「露骨で」「凝った」イミテーションを映画『ファイト・クラブ』が[一連の同時ビル爆破計画にあつての初動爆破対象]として登場させていたという問題である)。

二点目。計 12 棟のビルの同時爆破をなすための計画と映画『ファイト・クラブ』劇中に言及されているプロジェクト・メイヘム、同計画関連の秒単位切り替わり描写 ―表示時間があまりにも短いために確認には[一時停止]が必要になるとの描写― として後半に[爆破対象地関連資料らしき資料の表記地所ら]が(主人公が自身のオルター・エゴ＝別人格のタイラー・ダーデンの計画を当局にサークしようとした際に出てくる計画文書記載のものとして)映画にて表示されてくるとのことがある。具体的には(劇中にてワンカット表示されている計画関連文書にみとめられる爆破対象地と思しきところにて)ノースタワーの名前が表示されており、ノースタワーおよびサウスタワーからなるツインタワーのことが想起されるようになっている(映画再生時間、すなわち、国内流通 DVD 再生環境タイムカウンター表示[02 時間 00 分 46 秒](映画後半部)のシーンの[一時停止]にて確認できることである(ブルーレイ版ではない方の一時停止で確認できることである)。また、そちら一時停止にて確認できる(そして本稿でも再現図の呈示をなしている)とのシーンではノースタワーの表記と水平位置にあって並行となるかたちでサウスウォークとの文字列が表示されており、そこから、[ノースタワーとサウスタワーらツインタワーの「並行」してのありよう]のことが想起されるどころ「とも」なる。さらに、同じくものシーン([02 時間 00 分 46 秒]でのシーン)ではノースタワー・アンド・「プラザ」との表記がなされており、それによって、「現実の世界・トレード・センターのツインタワー区画にツインタワーに隣接するかたちでオースティン・トービン・「プラザ」(黄金の巨大球形金属オブジェたるザ・スフィアが配されていた一画)が存在していたことの想起「もが」なされるようになっている。加えて述べれば、ニューヨークはマンハッタン、マンハッタンが攻撃対象となったのがかの 911 の事件であるとのことがある中でロウワー・マンハッタン、マンハッタンとの文字列もが問題となる爆破計画文書関連のシーンに partial 「lower」 & upper plans & 「south」 sidewalk とのかたちで入れ込まれているとのことすらもある)。

三点目。『ファイト・クラブ』では[ビル爆破計画関連文書投函用ボックスの宛先]が映画クライマックス間近に登場してくるが(映画再生時間、すなわち、DVD 再生環境タイムカウンター表示[01 時間 56 分 10 秒](映画後半部)のシーンの[一時停止]にて確認できることである)、[壁に貼られての 4 箇所の連絡先ラベル]に記載されている[通り](ストリート)の名称は大部分(3 箇所)がワールド・トレード・センター近傍(1 マイル圏内)の[通り]の名前ともなっているとのことがある(殊にフルトン・ストリートなどにはその色彩が色濃く現われている)。

四点目。映画にては「お前は廃墟となった——ロックフェラー・センターの大渓谷でヘラ鹿を追う」との台詞が爆破計画主催者としてのタイラー・ダーデン由来のものとして後半部に登場してくる(映画再生時間、すなわち、DVD 再生環境タイムカウンター表示[01 時間 41 分 24 秒]から[01 時間 41 分 30 秒]の部にて英文字幕オンにすることで視覚的に容易に確認可能なことである)。その点、ロックフェラー・センターはマンハッタンにてセンターを名前に関する商業区画としてワールド・トレード・センターとの類似性を感じさせるものであり、また、ロックフェラー・センターとワールド・トレード・センターが共にロックフェラー系の人脈の推進活動によって造成を見た一画である(当然に先の段で典拠を紹介しているとのことである)こともが想起される。

以上より映画『ファイト・クラブ』の連続ビル爆破計画たるプロジェクト・メイ

へムの目標地が —911 の事件が発生した際にその場に存在していたビルが全部倒壊を見た一区画である— [ワールド・トレード・センター]そのものであると述べられるようになっている (殊に一点目が最も強力な示唆材料となり、二点目、三点目、四点目のことらは一点目のことと複合顧慮してこそ [その重みをよリモって理解できるもの]となっている)。

(出典 (Source) 紹介の部 102 (6) で「DVD を借りて視てみるだけで容易に後追いできるように。」とのかたちにて典拠紹介をなしてきたところとして)

[6]

映画『ファイト・クラブ』にはその劇中、後に [911 の事件] が発生することをサブリミナル的やりよう (瞬間瞬間のワンカットを用いるといった式) で臭わせているが如くシーンが他にも含まれている。以下にて示すありようにて、である。

[[主人公の住まうコンドミニアム —ピアソン・タワー「ズ」という物件— の上階の主人公居宅] が [火災爆発] を起こした描写がなされているが、それが後に [タイラー・ダーデンによる時限性の人為爆破] であると判明した上、その [火災爆発] のシーンの直前に [飛行機が他の航空機と激突するとの主人公の空想シーン] が展開しているとのことがある]

[劇中、一瞬表示される社会的困難な状況にある者達の会合リストの中に「不自然に」航空機フライトを意識させる記述がなされているとのことがある]

[劇中、ホテルよりチェックアウトするシーンにて精算のためにその確認を求められた [主人公のオルター・エゴ (別人格) のホテルよりの電話発信先 —プロジェクト・メイヘム実行各部署— のリスト] がそれ相応の 911 というナンバーを想起させる表示と結びつけられているとのことがある]

(以上、各部の映画登場セクションについて「も」(DVD 再生環境にてのタイムカウンター表示から「秒単位で」確認できるように、と) 先の出典紹介部にて図示をしながらも呈示なしている)

(出典 (Source) 紹介の部 102 (7) で「DVD を借りて視てみるだけで容易に後追いできるように。」とのかたちにて典拠紹介をなしてきたところとして)

[7]

先行するところの [4]. 及び [5]. 、そして、上の [6]. に見るありようが [計算してのわざとのことである] と申し述べられようところとして映画『ファイト・クラブ』に関してはその劇中、[不快なサブリミナル映像を流す] ことへの

[自己言及]

がなされているとのことまでもがある。主人公のオルター・エゴとしてのタイラー・ダーデン(別人格)が映写技師として働いているシーンにて同タイラーが[猥雑画像]を上映フィルムにサブリミナル的に仕込み、子供が泣かされるシーンが出てくる(映画再生時間、すなわち、DVD 再生環境タイムカウンター表示[00 時間 33 分 15 秒]の段階にて英文字幕オンにすることで視覚的に容易に確認可能なこととして “ that's when you'll catch a flash of Tyler's contribution to the film. Nobody knows that they saw it but they did. ” (日本語字幕では)「ほんの一瞬ポルノ映像が入る。意識しない一瞬だ」と述べられている一幕にまつわることである)といったことや映画『ファイト・クラブ』に関しては末尾にて男性性器写真を写し取ってのシーンが含まれているといったことがそうである —— [生き死にに関わる問題を告発するために作成したものである本稿の品位を落とすたくはないため、そういう話はあまりしたくないのだが、劇場公開版および DVD 版では規制の問題からカットされていたが、Blu-ray 版では劇の終わり近くでの男性器描写のサブリミナル・カットが「復活」しているとのことがよく知られている——)。

(**出典(Source) 紹介の部 102(8)**で「オンライン上より容易に後追いできるよ
うに。」とのかたちにて典拠紹介をなしてきたところとして)

[8]

映画『ファイト・クラブ』の原作小説『ファイト・クラブ』をものしたチャック・パラニュークのやりようからして [911 の事前言及] 染みた側面を有しているとのことが現実にある (: 本稿ではチャック・パラニュークの 1996 年版『ファイト・クラブ』にて [191 階のビルが爆破対象とされていること] を問題視し(本稿では現行にて世界最高層のビルであるドバイのブルジュ・ハリファですら 168 階建てにとどまっていることを指摘し、191 階とのビルがいかにも不自然に高いとのものであるのか、それがゆえに、191 との数値が異彩を放つての「恣意性」が問題になるものなのかの指摘をもなしている — そうしたことをわざわざ問題視したのは原作小説に見る [191 階建てのビルの爆破計画] が映画化版にあつての [ワールド・トレード・センターそのものであると視覚描写されての一面における複数ビル爆破計画] として描かれているからである (191 が 911 と入れ替え可能な中にてそういうことが、冗談抜きに、見てとれるとのことがある) —)、また、『ファイト・クラブ』原作小説作者チャック・パラニューク 1999 年小説 Survivor『サバイバー』からして [「双子」と「飛行機テロ」と「狂信的宗教の徒輩」と「狂信者の自殺挙動」とがモチーフとされた作品] [飛行機が装丁上、非常に目立っている作品] となっているとのことを細かくも紹介している)。

(**出典(Source) 紹介の部 102(9)**で「DVD を借りて視てみるだけで容易に後

追いできるように。」とのかたちにて典拠紹介をなしてきたところとして)

[9]

映画『ファイト・クラブ』では[(時限爆破に使うものとしての)ダイナマイト製造と人間石鹸と生贄の儀式の話]が[ビル倒壊計画主催者のタイラー・ダーデン]によって通貫したものとして語られるとの流れ(ダイナマイト製造のためのグリセリンのことが人間由来の洗浄作用を呈する灰汁と結びつけられての流れ)が見てとれる(映画再生時間、すなわち、DVD 再生環境タイムカウンター表示にての[01 時間 00 分 34 秒]から[01 時間 02 分 38 秒]の部のやりとりを英文字幕オンにして見てみることで視覚的にも確認可能なことである)。

実に残念だが、以上振り返っての[1]. から[9]. のことらは全て、

[本稿の先の出典紹介部で『ファイト・クラブ』収録 DVD の(裏取りのための)該当部再生箇所を秒単位で具体的に表記しているとおりの[誰でも容易に確認できる事実]]

である。

アーバン・レジェンド、[都市伝説] などという言葉でもってして [事実を直視しないとの種別の人間] ないし [事実を見せたくはない種別の人間] (あるいはそういう殺されても文句も言えぬような「愚劣な」ないし「卑劣な」手合いを使役している力学でもいい) は締めくくろうとするかもしれないが、繰り返すが、以上の [1]. から [9]. のことらは

[全て容易に確認できるとの事実の問題]

である。

(尚、筆者はそうした情報を隠そう・秘そうとする人間らをして「屑」としか表しようがないものだと見ている。

につき、読み手たる貴殿が仮に[事実]であると知っている — 知らぬのであれば、この身、筆者の書いていることの化けの皮を暴こうとの心性でもいい、手ずから確認していただきたい — ことが[事実無根のフィクション]や[事実無根の都市伝説]にされてしまうやりようを目にしたらばどうだろうか。そして、その延長線上にあることが

[(読み手たる貴殿御自身のものを含めて) 多人数の生き死に・生存限界線の問題にも関わるところのもの]

である (これより証示をなしていく所存だが、『ファイト・クラブ』に見るような 911 前言事象が「他にも」数多存在しており、それらが[愚弄を伴っての皆殺しの巧妙な予告]とワンセットになっている節が如実にある) とのことまで把握できるようになっていたらどうか — 「把握も何もそも、話として疑わしい」と思うのであれば、くどいが、とにかくもってして、筆者の[知]の水準、そして、誠実さの程の問題をよく御自身で判断いただきながら、裏取り容易に、との式で典拠を事細かに付しているとの本稿内容をよく [検証] いただきたいものである — 。

そうした生存限界線に関わるところで問題事を [都市伝説] の類へと貶めるとの行為がなされているとのことがあれば、何をやられても、[従順に従うロボットと墮しきった存在] の

ような手合いではない [人間を名乗るに相応しい存在] ならば憤りを覚えて当然のことか、とは思)

(ここまでの内容を是非とも読み手確認が DVD をお借りになられて手ずからご確認いただきたいと強調したうえで、さらに話を進めて)

さて、では「何故」、以上の[1]. から[9]. のとおりのことが [はきと指し示せてしまうところ] として具現化しているのか?

また、(そうもしたことが[偶然]ではなくにももの[恣意]であるというのなら) 問題としてどうしてそのような、

[予言の霊 (Spirit of Python) —先に引き合いに出した、ギリシャ神話および聖書の使徒行伝に見るような予言の霊[パイソン]— に憑かれたが如く「前言」]

がなされているのか。

それにつき、「真に問題となるのは、」本稿全体にてその存在を指し示さんとしている、

[傀儡(くぐつ)としての人間未満に随した者達を用いて自然発生的ならぬ[人為的な拳]による破滅 —破滅自体が目的というより目的に伴っての副次的結果としての絶滅とも解されるが— を引き起こすことの予告]

に関わるところのものであると解される材料が山積していることにあと強調したいのがこの身、筆者であるわけだが (何度も何度も繰り返そう。本稿で細かくも先述なしてきたように同文の「予見的」作品らが多数存在しており、そうした作品らが相互に内容上、結節しながら、[ブラックホール生成]のことを指しているなどとの「馬鹿げた」ことがこの世界には現実にある、そう、現実の LHC 実験、[ブラックホール生成]をなしうるとされる同実験が問題となる 911 事前言及作品らと特定の命名規則を共有しているなどという「馬鹿げたこと」が現実にあるから、そして、そこに嗜虐的なメッセージング(身内間のものでとにかく嗜虐性が感じられるとのメッセージング)が執拗に込められていると判じられるようになってから、そうもした結論を下さざるをえぬと判断している)、ここではさしあたって筆者が強くもそうであろうと従前、判じていたところとして [次のこと] を述べておく。

(直下、それ自体は斥けていただいても構わないととらえるところの手前目分量として)

「911 の事件は —批判多きものながらドキュメンタリー・フィルム Fahrenheit 9/11 『華氏 911』にて映画監督マイケル・ムーア程度の人間すらもが [ブッシュ一門とのビジネス上でのつながり] を指摘し、そのアメリカが [オペレーション・サイクロン] にて育てたムジャヒディン出身者あらためてのテロリストとしての側面が強調されるビン・ラディンおよびその手下が実際に事件にメイン・キャストとして関与しているかどうかは別として— 特定の色合いの人間らの紐帯を用いて実施した「やらせ」である (述べておくが、「やらせ」の背後で糸を引いていたコンスピレイター、【実悪】としての立役者は無論、アメリカ政府関係者でもないし、秘密結社成員などでもない(たかだかも[糸繰り人形]が自らを動かす糸を引いていたなどとの頭の具合のよろしくはない、あるいは、不誠実な唇が口の端にのせるようなことを筆者は口にするつもりはない)。糸を引いていた存在、[人形遣い]が我々人類という種族の中にいるはずなどなかりとうのが当然にも筆者の判断である —リブ・オン・ライズ、ダイ・オブ・ライズ、[虚偽に生き、虚偽がために死んでいく]との不誠実な者らの世界では人形遣いがこの世界には人とは異なるところとして存在していることを口の端にのせることすらタブーとなっているきら

いがあるが（相応の面構えの者達ばかり集めたのかとの言論機構に属する類がその領域に触れることがあるとしたらば荒唐無稽なウチュウジン陰謀論、彼ら流の虚偽にすり替えての馬鹿噺としてだけであろう）、筆者は今、偽りに依存することは極々短期的な安全のために近々殺されるとのその状況を容れることと同義であると見ている（ ）。

につき、911の[演出] — 本質的には[テロ]などという薄っぺらい概念では語りきれぬとの事件を [アメリカ・自由世界に対するテロ(風情のもの)] として宣伝する行為をもってして[演出]とするか、または、[ビルの背面での発破爆破]まで仮になされていたととらえもしてそれを[演出]とするかは人によっては異なるが — に与(くみ)させられての紐帯には事件が勃発する/勃発させられるとの「情報」が「事前に」与えられていたと解されるだけの材料がある（注:アレックス・ジョーンズのテロ前の申しようの話、「近々そういう事件が起こされると我々は知っている」との話は先に言及したが、同文のところとしては著名映画プロデューサーとしてのアロン・ルツという人物(故人)がロックフェラー財閥の中の特定の男にそういう話を聞かされていたと事後的にアレックス・ジョーンズとのインタビューで証言して一部で取り沙汰されているとのこともある)。

911の事件は

[[善意の欠如した(日本の法律論では既知のことを[悪意]というが、そうした意味でも、また、本来的な意味でも悪意と共にある)糸繰り人形] と [糸繰り人形を操る人形遣い] が共同で具現化なさしめた一種のセレモニー(儀式)] としての様相・外観を呈しもしている。そして、そこに見るセレモニーの盛り立て役としての人形の [紐帯] の大なるところは — 後述するような事情もあって — フリーメーソン(およびフリーメーソンに接合する人脈)であると判じられるだけの材料が「山積」している

以上、申し述べたうえで、である。

これ以降の段では

『ファイト・クラブ』がいかにかに[フリーメーソンの映画]なのか

そして、

『ファイト・クラブ』で描かれるクラブそれ自体およびそのクラブのテロ挙動にて現出するシンボリズムがフリーメーソン・シンボリズムといかに濃厚に接合しているのか、および、その延長線上として何が述べられるのか

とのことらについて段階的なる指し示し(I. から V. と分けてもの指し示し — 無論、話柄の選択以外、手前の主観など問題もならぬところの指し示し —) をなすこととする。

(それではこれ以降、I. から V. と振っての各部に分かちて映画『ファイト・クラブ』がいかにかにフリーメーソンの映画であるか、また、その延長線上のこととしてどうしたことが指摘できるのかについての詳説をなしていくとの段に入ることとする)

I.

小説及び映画の『ファイト・クラブ』にて主人公の [オルター・エゴ](別人格)、主人公に取り憑いて

悪行をはたらかせているとのいわばジキルとハイドのハイドにあたるその別人格は [タイラー・ダーデン] という姓名の存在である(ここに至るまでの引用部からもそのことは示している)。

そのスペリングは Tyler Durden となる。フリーメイソンのインサイダーあるいは彼らのような紐帯を忌む者 (といっても「攻撃された」「化け物染みた側面を[外部]の人間として見せつけられた」といった理由あって紐帯を忌む者「ではない」人間、そして、何かを自分で調べて物を語る意思さえないとの人間は隙間を埋めて衆目を曇らせるだけの存在ら、まったくの偽物の批判者か、よくて練れていない陰謀論 Conspiracy Theory を展開するだけの陰謀論者風情と思うが) としてその組織形態 — (日本国内では創価学会が会館を諸所にて設立して、内と外とを分けながらも諸方面に滲透するとのやりようをとっているが、そうした創価学会と類似の挙を社会の上層に属する者達がより抽象的かつ非人間的なるドグマを掲げてやっているとのそのフリーメイソンの組織形態) — を分析した人間ならば分かるか、と思うが、

[フリーメイソンは [タイラー] という職種を [ロッジ] (フリーメイソン交流会館) の門衛 — 内と外とを分かち、部外者を排斥する職掌 — として設けている団体である]

とのことがある。

出典 (Source) 紹介の部 103

SECRET 103



Cimabue's Celebrated Madonna (1853-5)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

[フリーメイソンがタイラーという職種をロッジの門衛 — 内と外とを分かち、部外者を排斥する職掌 — として設けている団体である]

このことの典拠を挙げる。

(直下、極めて基本的なところとして英文 Wikipedia にての現行の[Tyler(Masonic)]項目よりの引用をなすとして)

Tyler (or Tiler) is the name of the office of outer guard of a Masonic Lodge. Early speculative Masonic lodges met in rooms in taverns and other public meeting places, and all Lodges appoint a Tyler to guard the door from unqualified, malicious or simply curious people. He is also responsible for ensuring that candidates for ceremonies in the lodge have been properly prepared. Although an Officer of the Lodge and often a highly experienced Past Master, he may be considered akin to a sergeant ...

(訳として)

「タイラーはメーソン・ロッジの外側門衛としての職掌のことである。初期の思索的メーソンのロッジというものは旅籠あるいは他の公的会合場所などを間借りしてそこにあるといったものであったが、全てのロッジはタイラーを任命、彼をしてメーソンとしての資格のない者、メーソンに対して悪意を抱いている、ないし、単におかしな者達が敷居をまたがぬように、と守らしめた。また、タイラーは[ロッジにての式典にての候補が準備万端整っていること]を確認するとの任を負っている。ロッジの職掌に就くのが高位の経験を積んだかつてのマスター位階の者であることがしばしばであるが、タイラーは下士官のような部類に位置する職掌であると考えられがちである」

(引用部訳はここまでとしておく)

上記のようにタイラーはロッジ門衛 — 内と外とを分かち存在 — としての職掌となる。当然、アメリカには多数のフリーメイソンリー成員やフリーメイソン通がいるのであるから、映画『ファイト・クラブ』に関してもそのことを知っての向きが動画で非を慣らすようなことをなしているのが目に入ったりする。(筆者としては[多重人格になったような者達]に対するタイラントこと暴君・専制君主という言葉が映画でのタイラーやりようより脳裏をよぎっているとのこともあるのだが、とにかくものこととして) そうもなっており、また、ファイト・クラブでは[[タイラー]という男がクラブの内と外を厳密に分けている]ことが描写されているとのことにもメーソン構造との類似性を感じている(：さらに述べれば、タイラーとのメーソン職種に介しては映画『ファイト・クラブ』に見る[ファイト・クラブ]が[既存の秩序に挑むとの設定の団体]であることを想起させるようにワット・タイラーの乱を主導したワット・タイラー(農奴の乱を指揮したイギリス史にあっての有名な一揆主導者)に由来しているとの申しようもなされているが — 英文 Wikipedia[Tyler (Masonic)]項目の Origins of the term の部にて “Possibly from the name of Wat Tyler, the ringleader of the Peasants' Revolt of 1381.”, 「(タイラーという職掌名は)ありうべきところとしてワット・タイラー、1381年の農奴の乱の主導者の名前に由来しているとも考えられる」とあるとおりである — 、については、[巨大な機構の歯車]にはそうした反乱をなす者としての認識はないであろうと受け取れる(『ジェボォーダンの獣』というフランス映画を見るなどしてよくも考えていただきたいところではある)。それにつき、近代社会構築に至るまでの人間社会の思想系譜はいかようなものだったのか、その絡みで高等学校の社会科系の授業でその名の暗記を強いられるようなトマス・ホブズ、同英国思想家の用法に倣(なら)ってのリヴァイアサン([社会契約]によって成立した統治体呼称としてのリヴァイアサン/聖書では終末に屠殺される怪物の名)構築のための契約社会([個々人の「社会契

約」によって成立したリヴァイアサン]と表してもいい)の中にあつてのそのまたさらにももの[契約](誓約)に縛られての組織体の歯車になった人間には本当の意味で確たる主義主張もなければ、上より与えられた役割以外のことにつき深くも物事を考える能力などそもそも「ない」とも受け取れるし、自分たちをワット・タイラーの乱の参加者と見做しての理想主義なども本質的には存在して「いない」であろう(しかし、その愚劣なるフリまではなすかもしれない)と筆者は見立てているから『ファイト・クラブ』とワットタイラーの乱の間にアナロジー(相似性)を求めることには意味がないととらえている——尚、英文 Wikipedia[Tyler (Masonic)]項目の Origins of the term の部にては[タイラーという職掌名についてのよりありうべきところ]として“Possibly owing to the tiles being those stones or bricks which seal the structural masonry, whether they be on floors, walls or roofs. Likewise, the Tyler seals the remainder of the activities of the lodge.”「(タイラーという職掌名は)ありうべきところとして[床や壁や屋根のどこにありうと、石工構造を密封するとの石や煉瓦にてのタイル]に由来するとも考えられる。タイラーの職種がロッジにての行い、その残余となるところに「封をなす」が如くのものであるがゆえに、である」(引用部訳はここまでとする)と記載してある。とすれば、『ファイト・クラブ』という映画にてのタイラーの命名由来について[秘密主義]との観点でより根深きところが問題になるようにとらえられはする——)。

(出典(Source)紹介の部 103 はここまでとする)

II.

(直近 I. の段にてフリーメーソン・ロッジの内と外と分かつ職掌がタイラーであることに言及した上で書くが)

映画『ファイト・クラブ』にあつては

-
- a1** [ファイト・クラブについては秘密主義的組織として邪魔者・秘密漏洩者に対し[死の制裁]を課すとの脅しを[チェス盤紋様の床の場]にてなす組織であると描写されている]
 - b1** [ファイト・クラブは各都市に支部を持ち、強固な組織基盤を有しているとの描写がなされている]
 - c1** [ファイト・クラブはありとあらゆる職種にメンバーを擁しており、彼らはテロを黙過するばかりか、促進しているとの描写がなされている]
 - d1** [ファイト・クラブ成員らはハグ(抱き合い)を頻繁になすと描写されている]
 - e1** [ファイト・クラブの面々として集まってきた者達の中でも従順性および急進性に特質がある者達を集めてビル爆破計画の実行役に仕立てていたとの描写がなされている(といったところに[インナーサークル]の問題が観念される)]
-

との側面が具現化している。

対して、(上記 a1 から e1 と対応関係にあるところとして)、フリーメーソンに関しては

a2 [フリーメーソンは秘密主義的で秘密漏洩者には [死の制裁] の課すとの脅しがあった誓約を [チェス盤紋様の床の場] にて歴年強いてきた組織である (ただし、そうした [宣誓] のかたちをとる約束事は唯名無実のものにすぎないというのがメーソンインサイダーの外向けの言い分である)]

b2 [フリーメーソンは各都市に支部 (交流会館としてのロッジ) を持ち、強固な組織基盤を有している]

c2 [フリーメーソンはありとあらゆる職種にメンバーを擁しており、そうした成員らが [ブラザー] と呼んでの紐帯を保持している]

d2 [フリーメーソンの成員は特定の儀式 (マスターメーソン位階への引き上げなど) の後にメンバー同士がハグ (抱き合い) をなすとの組織である]

e2 [イタリアのフリーメーソン、ロッジ P2 には軍諜報組織の主導部や現職国会議員らのイタリアの権力機構を掌握していたとの面々が参加しており、メンバー僅少の同組織体が白色テロ (反左翼テロ) としての [駅爆破事件] (いわゆる [ボローニャ駅爆破テロ事件] で同事件にてイタリアでは多数の死傷者が発生) など複数の偽装テロ (共産主義者に罪をなすりつけるためのテロ) に関与したとのことが露見して問題になったことがある (また、事件に関与したロッジ P2 はメーソンに相応しくはないことをなしたとのことでメーソンから「正式に再破門」されたとのことになっているが、その後発生したロッジ P2 人脈関連の殺人事件「でも」あいもかわらずメーソンの象徴が用いられているとのこと「も」が 一同件に関しては稚拙な法螺も流されているもの— 現実にある)。さらには、イタリア (元) 首相であるベルルスコーニもその元メンバーであったとのロッジ P2 の首魁であるリーチオ・ジェッリ ー米国諜報機関より当初、[反共要員] として助力を受け、麻薬組織やアルゼンチン独裁政権などと強固なつながりを有していたとの政治マフィア— は (逮捕・脱獄を経て) 結局は法網をかいくぐり、1996 年にはその前科 ([自国民を何人も共産主義者の犯行に見せかけての偽装爆破テロで殺してきた] との前科) にも関わらず [ノーベル文学賞] にノミネートされていた。といったところに [インナーサークル] の問題が当然に観念される]

とのことがよく知られている (ここでは a1⇔a2、b1⇔b2、c1⇔c2・・・と対応付けなされて見られることを前提にしての話をしていく)。

映画『ファイト・クラブ』にあつてのフリーメーソンと通ずる色彩についてはまだまだ指摘すべき重要事には足を踏み入れているわけではないのだが、取りあえずも以上のことら ([a1 から e1] および [a2 から e2] と振つてのことら) の典拠を以下、各部に分けて事細やかに挙げていく。

SOURCE 103(2)



Cimabue's Celebrated Madonna (1268-69)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典 (Source) 紹介の部 103 (2) にあつては相互に照応するところとして

a1 [ファイト・クラブは秘密主義的組織として邪魔者・秘密漏洩者に[死の制裁]を課すとの脅しを[チェス盤紋様の床の場]にてなす組織であるとの描写がなされている]

a2 [フリーメーソンは秘密主義的で秘密漏洩者には[死の制裁]の課すとの脅しがかつた誓約を[チェス盤紋様の床の場]にて歴年強いてきた組織である(ただし、そうした[宣誓]のかたちをとる約束事は唯名無実のものにすぎないというのがメーソンインサイダーの外向けの言い分である)]

とのことらの典拠を挙げることとする。

その点、最初に

a1 [ファイト・クラブについては秘密主義的組織として邪魔者・秘密漏洩者に対し[死の制裁]を課すとの脅しを[チェス盤紋様の床の場]にてなす組織であると描写されている]

とのことをその通りであると確認するための DVD による確認方法(および確認事項)を挙げておくこととする。

まずもって(秒単位で指摘をなすとして)国内流通を見ている『ファイト・クラブ』DVD にての

【1時間34分24秒後】

以降のシーンの視聴 (DVD レンタルするなりしての視聴) を通じて容易に確認できる場所として

ファイト・クラブを取り締まろうとする力学を押し返すために取り締り推進役をファイト・クラブ・メンバーら(タイラー・ダーデンに率いられてのメンバーら)が白黒チェス盤紋様の床を備えてのトイレに引きづり込み、
「(取り締りをやめろ)でなきゃ大事なところを切り取るぞ。お前が(彼らの上役として)後ろで差配しているとの人々はな、お前が依存している人間らなんだよ」

と脅すシーンが出てくることをこの場にて指摘しておく (：英文字幕オンにて表示される英文台詞は “ these guys are gonna take your balls. The people you are after are the people you depended on.” とのかたちで [お前が(彼らの上役として)後ろにいて差配しているとの人々] といった表現が使われているが(和文字幕では[世話になってる人間を逮捕する?]としか出ていない)、ファイト・クラブの面々が取り締まりサイドの現場担当の人間の中にも紛れ込んでいるとの言及である)。

次いで、(秒単位で指摘をなすとして)国内流通 DVD にての

【2時間02分03秒後】

以降のシーンの視聴 (DVD レンタルするなりしての視聴) を通じて容易に確認できる場所として

タイラー・ダーデンをおのれの中の[別人格]として抱える主人公がプロジェクト・メイヘムの問題を警察署尋問室にて告発せんとしている際に上役の警官が離席したその折、[主人公(多重人格たるタイラーを持つ男)とその場に残った三人の現場刑事]もまたファイト・クラブの面々となっており、それら刑事らが [先にチェス盤上の床にてタイラーが邪魔者を押し返すために持ち出した秘密主義貫徹のためのルール] を持ち出し、「たとえ、あなたでもルールは絶対だ。容赦しない」と敬意を表しつつも主人公に制裁 —警察署で刑事がやるような類ではないとの制裁— を「シュールにも」加えようとする

とのシーンが出てくることを指摘しておく (：その際に発生するダイアログは英文および日本語訳字幕では次のようになっている⇒ “ You said if anyone ever interferes with Project Mayhem,even you,we gotta get his balls.” 「騒乱(メイヘム)計画をジャマする者はあなたでも——タマを頂く」(ファイト・クラブ・メンバーとしての刑事の一人) — “ Dont’fight.- It’s a powerful gesture,Mr Durden.” 「お静かに」(ファイト・クラブ・メンバーとしての別の刑事))

さらに続いて

a2 [フリーメーソンは秘密主義的で秘密漏洩者には[死の制裁]の課すとの脅しがかかった誓約を[チェス盤紋様の床の場]にて歴年強いてきた組織である(ただし、そうした[宣誓]のかたちをとる約束事は唯名無実のものにすぎないというのがメーソンインサイダーの外向けの言い分である)]

とのことにまつわっての典拠紹介を —多少、微に入っのかたちで— なしておくこととする。

ここでは Online 上より PDF 版が取得できるようになっている 19 世紀に多数版流通していたとのもの

である、

Duncan's Masonic Ritual and Monitor (1866) 『ダンカンのメーソン儀礼およびその報告』

よりの引用をなす。

(直下、Freemason 新規参加者がまずそちら階級に属することになる Entered Apprentice[徒弟]位階にあつていかな oath 宣誓がなされるのかについて扱った部位、Duncan's Masonic Ritual and Monitor(1866) p.34—p.35 よりの抜粋をなすとして)

OBLIGATION.

I, Peter Gabe, of my own free will and accord, in the presence of Almighty God, and this Worshipful Lodge, erected to Him, and dedicated to the holy Sts. John, do hereby and hereon (Master presses his gavel on candidate's knuckles) most solemnly and sincerely promise and swear, that I will always hail, ever conceal, and never reveal, any of the arts, parts, or points of the hidden mysteries of Ancient Free Masonry, which may have been, or hereafter shall be, at this time, or any future period, communicated to me, as such, to any person or persons whomsoever, except it be to a true and lawful brother Mason, or in a regularly constituted Lodge of Masons; nor unto him or them until, by strict trial, due examination, or lawful information, I shall have found him, or them, as lawfully entitled to the same as I am myself.[. . .] All this I most solemnly, sincerely promise and swear, with a firm and steadfast resolution to perform the same, without any mental reservation or secret evasion of mind whatever, binding myself under no less penalty than that of having my throat cut across, my tongue torn out by its roots, and my body buried in the rough sands of the sea, at low-water mark, where the tide ebbs and flows twice in twenty-four hours, should I ever knowingly violate this my Entered Apprentice obligation.

(英文をそのままにご覧いただければ、分かるが、非常にまどろっこしい書き方の文章であるので多く端折つての[意識]をなすとして)

「[義務]:私、ピーター・ガブリエル、自由意思および容認をもつての者として、万能なる神、そして、神および神の前に立ち聖ヨハネに奉獻されてのものである尊崇視すべきこのロッジの前にてかくしてここに(合いの手で秘儀参加儀式を執り行うマスター位階の者が儀式用に用いる小槌を候補者の拳に押しつけている)最も厳かかつ誠心なる境地から「[古代フリーメーソンの秘儀]にあつてのいかなる技(わざ)、そのどの部分および要点をも常に歓呼して容れ、自身と接する者達ら、個人にあつては真正にして適正なるメーソンの兄弟、すなわち、正式にメーソンのロッジを正規に構成しているとの者達ら以外にはそれを隠し、決して明かさない」との事をここに約し宣誓します。…(中略)…これら全てのことについて私は最も厳かかつ誠実に「同じくもの事をなすうえで一切の意思保留なく、また、[自分の喉を水平に引き裂かれること、舌を根っこから引き抜かれること、自らの死体が波が干潮ありようにあつて常に24時間に2回盛衰するとの地点にての海底、その荒れた砂地にて埋葬されること]以下のものではないとの制裁の縛りを負いつつも内なる精神上的の逃げ口上を設けることないとの堅く断固としての決意でもつて約し、宣誓します」

(訳を付しての引用部はここまでとする 一※一)

(※[自分の喉を水平に引き裂かれること、舌を根っこから引き抜かれること、自身の死体が干潮ありようにあつて波が常に24時間に2回盛衰するとの地点にての海底、その荒れた砂地にて埋葬されること]云々の話は要する

に[死体が出ない事件は殺人事件になりがたい]との刑事訴訟法のありよう
に則っての方式、死体を容器(e.g.コンクリート満載のドラム缶)で海底に沈め
るとのお定まりのやりようを指すのだと当然に解される。ヤクザ社会の盃事でも
[親分が言えれば黒いカラスも白くなるとの厳しい掟の世界です]といった文
言が用いられるとはよく言われることだが、同じくも掟のようなものに縛られて
いる風がみとめられるフリーメーソンの場合、違反者は死体が出ないように凄
惨に殺すとの[誓約]をなさしめるやりようがなされてきたとのことがあり、上の
19世紀流通文書の時代から今日に至るまでそれはおよそ変わっていない
(と諸所にて言及されている)。それにつき、モルモン教についてもその宗
祖たるジョセフ・スミス・ジュニアがフリーメーソンであった関係があつてであろ
う、メーソンとその伝での制裁に関する誓い —違反者の喉を切裂き(カット・
スロート)をなし、舌を根元から引き抜くといった制裁に関する誓い— をその
初期、信徒に課していたとのことがよく指摘されている(：それにつき疑わし
きにあられては、英文 Wikipedia [Masonic ritual and symbolism] 項目(に
ての [Influence on Mormonism] の節) 程度のものにもメーソンの儀礼体系
がいかにもモルモンに影響を与えているのか、要を得ての解説がなされてい
るので、そちら読まれたうえでもそれとは別に英文 Wikipedia 上に設けられて
いる [Penalty (Mormonism)] 項目にあつての [Original oaths] の節など
を読むなどし、そこからさらに深耕しての情報収集していけば、この世界がど
のようなやりようにさらされているのか、([心の目] が見えず [心の耳] が
聞こえぬのならば各別)、理解いただけようか、と思う)

(出典(Source)紹介の部 103(2)はここまでとする)

直上までにて映画『ファイト・クラブ』とフリーメーソンの相似性について、(I. から V. と振つての段に
あつてのここ II. と振つての部にての指摘事項として)、

[[a1 から e1 のポイント] と [a2 から e5 のポイント] との間にあつての類似性] (a1⇔a2 、
b1⇔b2、と対応するかたちでの類似性が具現化している類似性)

にあつての (a1⇔a2 との照応関係に関わるところの) a1 および a2 のことらが成り立ちもしているとの典
拠を示したとして、次いで、b1 および b2 のことらが成り立ちもしているとの典拠を呈示しておくこととす
る。

出典(Source)紹介の部 103(3)

SOURCE

103(3)



Cimabue's Celebrated Madonna (1853-5)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are
barefaced and brutal.

ここ出典(Source)紹介の部 103(3)にあつては

b1 [ファイト・クラブは各都市に支部を持ち、強固な組織基盤を有していると映画にて描写されている]

b2 [フリーメーソンは各都市に支部を持ち、強固な組織基盤を有している]

とのことの典拠を紹介することとする。

それにつき、まずもつてのこととして、

b1 [ファイト・クラブが各都市に支部を持ち、強固な組織基盤を有していると映画にて描写されている]

とのことをその通りであると確認するための DVD による確認方法(および確認事項)を挙げることにする。具体的には、(映画『ファイト・クラブ』後半部にて同じくものこと —ファイト・クラブが各都市に支部を持ち、強固な組織基盤を有しているとのこと— がファイト・クラブの作戦実行を可能ならしめたと描かれているわけであるも)、ファイト・クラブの全国展開化が色濃くも描かれている部を掻い摘まんで抜粋することとする。

(以下、国内流通 DVD にての本編開始後、【1 時間 49 分 22 秒】のシーンにて映し出される英文字幕 (DVD 再生環境に応じて英文字幕オンにして表示される字幕) の視聴 (DVD レンタルするなりしての視聴) を通じて確認できる場所として)

Tyler had been busy...setting up franchises all over the country. (和文字幕での表示は「タイラーは全国にクラブの支部を作り歩いていた」)

(以下、国内流通 DVD にての本編開始後、【1 時間 49 分 48 秒】のシーンにて映し出される英文字幕 (DVD 再生環境に応じて英文字幕オンにして表示される字幕) の視聴 (DVD レンタルするなりしての視聴) を通じて確認できる場所として)

Is it true about Fight Club in Miami?
Is Mr Durden building an army? (邦訳にては「マイアミの噂は本当かい?」「ダーデン氏が軍隊を設立しているっていうのは?」)

(以下、国内流通 DVD にての再生時間が【2 時間 00 分 49 秒】経過後に至っての流れにて映し出される英文字幕 (DVD 再生環境に応じて英文字幕オンにして表示される字幕) の視聴 (DVD レンタルするなりしての視聴) を通じて確認できる場所として)

This is a tightly – regimented organisation with many cells capable of operating independent of central leadership. (和文字幕での表示は「軍隊顔負けの強力な組織で本部の指令なく——単独で事を起こせる」)

以上、映画『ファイト・クラブ』描写のありよう (b1 の部) について詳説をなしたうえでそちら描写と対応するフリーメーソン団のありよう (b2 の部)、すなわち、

b2 [フリーメーソンは各都市に支部を持ち、強固な組織基盤を有している]

とのことの簡明なる確認方法を挙げておくこととする。

フリーメーソンリーが歴史的「友愛」団体として確固とした基盤を有していることは言うまでもないことであるが (但し、メーソンのメンバーらは表向きには「実社会にての便宜を図るためにメーソンの紐帯を利用活用することはタブーとなる」と強調している 一どこぞやのカルトと政教分離原則の無実化程度の話と同様の欺瞞性の響きがあるが、「それはタブーとなる」と強調している 一)、同じくものことを示す目につくところの記述を端的に「紹介」しておく。

(以下、英文 Wikipedia にての [List of Masonic Grand Lodges] 項目に現行 2014 年時点で記載されているとの表形式の [データ] の数値面を抽出・紹介するとして)

(United states (合衆国) を Jurisdictional area (管轄エリア) とするロッジの英文ウィキペディア上に掲載されてのリストにあつては) 各都市毎に成員の数が「一桁単位で」記載されており、現行のニューヨークのグランド・ロッジだけで 4 万 5 千人超の会員を有しており、カリフォルニアのグランド・ロッジでは 5 万 5 千人超の会員を、インディアナ州やイリノイ州のグランド・ロッジではそれぞれ 6 万人超の会員を有している。といった按配で合衆国には多くの支部が存在し、

そこには数多のメーソンが在籍している(とされている)

(数値面だけに着目しての抜粋紹介の部はここまでとする)

上に見るようにフリーメーソンリーは多いところでは各州単位で[5万人]前後のグランド・ロッジ所属成員を抱えている一大組織となっている。

[補足としての話として]

上にて引用のように支部成員が膨大な数に達している[巨大組織]で[より汚れ仕事に親和性高いインナーサークル]が[特定の目的]に沿ったものとして存在して「いない」とは言い切れるだろうか?

日本で稚拙なフリーメーソン陰謀論を唱道しフリーメーソンを毛嫌いしていたことでも知られている狂信的カルト、オウム真理教(他罰性もこここれに極まれの狂信的セクトたるオウムが稚拙なメーソン批判を自組織紐帯強化のためになしていたとのことは書籍としては『オウム帝国の正体』(新潮社)などにて言及されており、また、日本の大手マスコミも麻原主導で陰謀論の研究をなさしめていたことをありし日に報道していたと(ことがある)、そちらオウムでさえ、その成員数1万人超程度でもって

[「あれだけのこと」—地下鉄サリン事件(70億人分致死量に相当する70トンのサリンの製造・廃棄に続いての攪乱目的としての無差別テロ)—を実行したとの組織化されたロボットと質的狂人と質的卑劣漢の「インナーサークル」(在家信徒が9割、出家信徒が1割とされる組織にての[教化]ならぬ[狂化]としての属性が特に強められた「インナーサークル」)]

を有していたのである。

それにつき、よく考えてみるべきである。

ちなみに和文ウィキペディア[フリーメーソン]項目には現行、次のようなことが書かれてもいる。

(「現行にての」和文ウィキペディア[フリーメーソン]項目にての記述より原文引用するところとして)

アメリカでは、会員数減少に歯止めを掛けるため、説明会の広告を出し、**集団儀式を主催して数百人単位での新規入会を行うようになった**。しかし、クリストファー・ホダップによると、「**高齢団員による絶望的なグループ**」、「**請求書の支払いやまずい食事、誰がユニフォームにアイロンをかけるか、といったことに関する長時間の会議**」などを目の当たりにして、**新人の多くは2度と姿を見せなかった**。ただし、こうした努力の結果、会員数減少に歯止めは掛かっているという

(引用部はここまでとする)

以上のような「お涙ちょうだい」といった側面を有する記述は[性質が悪いもの]と受け取れる。

というのもフリーメーソンリーのような団体が「何故このような世界に存在しているのか、その歴史的役割が奈辺にある(あった)のか、歴年フリーメーソンの紐帯に属していた者達にあってはどういった極めて醜い行為(本稿の後の段ではイタリアや南米で

のテロおよび虐殺行為との絡みで同じくものことについて後述する)を問題視されてきたのか、といったことをよく考えたことがない向き、そう、

[たとえフリーメイソンリーに入会しても「その他大勢」(歴史を回転「させる」うえでの歯車としての機能さえ与えられていないとの群衆・煙幕としての「その他大勢」)にしかならぬし、なれないとの向き]

の特質にも関わるところとし、そうした話が

[目的尽くで構築されているフリーメイソンの紐帯を「最大限」悪しくも活用するとの方向で動かされている者達に関する疑惑]

を口にする人間を「頭の具合のよろしくはない」式・やりようを前面に出しているとの相応の陰謀「論」者の類型に相応しい人間と同定する助けとなろうことかと思われるからである。

尚、恩寵受けてのフリーメイソンでも何でも

[システムにとって[不要なもの]ないし[さして役に立たぬ者]と見做された成員]

は[機械仕掛けの神]の如きものの差配が滞りもなく及んでいるような状況にて使い捨てにされてきたのが人間の歴史であるとも手前は当然に見ている(：(忌々しさを強調すべく)「これよくできた稚児よ」と見られ有用な者としてそれまでシステム内での便宜を—システム・メカニズムに節を売っての売笑なすような手合いとして— 重点的に受けていた者でも「これ不要」と見做されれば、一転、相応の扱いを[人間個々人の命など元より芥子粒(けしつぶ)程にも見ていない機構]に受けることになっていると見ている)。

(補足としての脇に逸れての話をさらに続けるとして)

それにつき、

[メイソンの派生団体から生まれたナチスが戦前および大戦期にて一党独裁なしていたナチス政権下にて[フリーメイソンリー成員の大量虐殺]が現出したと「されている」]

ことにも[同様のこと](フリーメイソンリーでも何でも区別無くこの世界の人間及び組織体は使い捨ての存在であるとのこと)がマクロ的(巨視的)状況にあって具現化していたと手前は見ている。

その点、

[ナチスがメイソン派生団体から産み落とされたことは[史実]として一部にて知られている、すなわち、トゥーレ協会(トゥーレ・ゲゼルシャフト)というメイソン派生団体としての組織の参加者からナチスが産声を上げたことはよく知られている]

ところとなる。

(：容易に確認できるところとして和文ウィキペディア[国家社会主義ドイツ労働者党]項目の[黎明期]の節にて現行、

(引用するところとして)

(国家社会主義ドイツ労働者党ことナチスは)創設当初の党はわずか40人ほどの小さな政治的サークルに過ぎなかった。しかし党は右派組織全ドイツ

連盟やゴットフリート、フェーダー、ディートリヒ・エッカートを会員とするトゥーレ協会といった右派組織の支援を受けており(以下略)

(引用部はここまでとする)

と記載されているとおりのことや和文ウィキペディア[トゥーレ協会]項目にて、(掻い摘まんでの引用なすところとして)

(トゥーレ協会は)極端な民族主義・反ユダヤ主義を標榜して第一次世界大戦後のバイエルン州で勢力を拡大してレーテ共和国打倒に大きな力を及ぼし、また、国家社会主義ドイツ労働者党(ナチ党)の母体のひとつとなった。トゥーレ協会は1918年1月に右翼政治結社・ゲルマン騎士団の委託を受けたルドルフ・フォン・ゼポッテンドルフにより、騎士団の非公式バイエルン支部として設立された…(中略)…レーテ共和国打倒後も協会は反ヴァイマル共和国的な思想の宣伝に努め、多くの民族主義団体設立を援助した。ナチ党の前身であるドイツ労働者党とドイツ社会党を設立したアントン・ドレクスラーとカール・ハラール、ミュンヘン大学講師で地政学者のカール・ハウスホーファーもトゥーレ協会の会員であった。また、ルドルフ・ヘス、アルフレート・ローゼンベルク、ディートリヒ・エッカート、ハンス・フランクなどの、後にナチ党で重要な役割を果たすことになる黨員たちもトゥーレ協会に属していた。ナチ党の勢力が小さいうちはその拡大に与って大いに力があつたが、党勢拡大以降トゥーレ協会の影響力は低下し、1937年にフリーメイソンおよびその類似団体の活動が禁止されたことに伴ってトゥーレ協会とゲルマン騎士団は解散した

(引用部はここまでとする)

と記載されているとのことがあるようにナチスの中枢部の母体はトゥーレ協会にある。

そして、トゥーレ協会のそのまたさらにもってしての母体である、[ゲルマン騎士団 —ナチスの親衛隊組織が騎士団(オルデン)を標榜してロマン主義的騎士団としての体裁を取っていたことを強くも想起させるような組織—]

についてはメーソン外殻団体としての沿革が語られているところとなり、同じくものことについては現行英文 Wikipedia[Germanenorden]項目にあつては“The order, whose symbol was a swastika, had a hierarchical fraternal structure based on Freemasonry”「(トゥーレ協会の元となった)ゲルマン騎士団は鉤十字をシンボルとしフリーメイソンを元にした構造の友愛組織であつた」とはきと記載され、またもってして、ゲルマン騎士団創立者たるルドルフ・ゼッテンボルフにまつわる現行英文 Wikipedia [Rudolf von Sebottendorf] 項目にて “ Rudolf Freiherr von Sebottendorff (or von Sebottendorf) was the alias of Adam Alfred Rudolf Glauer (November 9, 1875 – May 8, 1945?), who also occasionally used another alias, Erwin Torre. He was an important figure in the activities of the Thule Society, a post-World War I German occultist organization that influenced many members of the Nazi Party. He was a Freemason and a practitioner of meditation, astrology, numerology, and alchemy. ” (逐語訳ではなく大要訳をなすとして)「ルドルフ・ゼッテンボルフはナチスの多数成員に影響を及ぼしたオカルト的組織たるトゥーレ協会にて重要な役割を果たした向きにして、フリーメイソンであり、瞑想・占星術・数秘術・錬金術の実践者であつた」(引用部はここまでとする)との記載がなされているところとなる—)。

[擬似史観] ならぬ [史実] としての

[ナチス(国家社会主義ドイツ労働者党)の元となったトゥーレ協会、および、

トウレ協会の元となったメーソン外郭団体]

を巡る経緯沿革がある中で後にナチス(国家社会主義ドイツ労働者党)はトウレ・ゲゼルシャフトと袂を分かちつつ、また、自分達の母体となった組織のそのまた核となるところのメーソンの大量虐殺を演じた(とされる)とのことがある。

現時、英文 Wikipedia[Suppression of Freemasonry]項目([フリーメーソンに対する史的圧迫]項目)にての Nazi Germany and occupied Europe(ナチス・ドイツおよびその占領下欧州)の節にては(そこに見るナチ挙動の数的データとしての徹底度合いの信憑性については折り紙をつけることはおよそできないかとも見るのだが)次のような記載がなされており、そうしたことをもってして[史上、現出したフリーメーソンへの際立つての虐待]と鼓吹する風潮が強いとのことがあるのである。

(直下、英文 Wikipedia[Suppression of Freemasonry]項目より引用するところとして)

The Nazis claimed that high-degree Masons were willing members of the Jewish conspiracy and that Freemasonry was one of the causes of Germany's defeat in World War I. In Mein Kampf, Adolf Hitler wrote that Freemasonry has succumbed to the Jews and has become an excellent instrument to fight for their aims and to use their strings to pull the upper strata of society into their designs. He continued, "The general pacifistic paralysis of the national instinct of self-preservation begun by Freemasonry" is then transmitted to the masses of society by the press. In 1933 Hermann Göring, the Reichstag President and one of the key figures in the process of Gleichschaltung ("synchronization"), stated "in National Socialist Germany, there is no place for Freemasonry".[. . .] The Enabling Act (Ermächtigungsgesetz in German) was passed by Germany's parliament (the Reichstag) on March 23, 1933. Using the Act, on January 8, 1934, the German Ministry of the Interior ordered the disbandment of Freemasonry, and confiscation of the property of all Lodges; stating that those who had been members of Lodges when Hitler came to power, in January 1933, were prohibited from holding office in the Nazi party or its paramilitary arms, and were ineligible for appointment in public service. Consistently considered an ideological foe of Nazism in their world perception (Weltauffassung), special sections of the Security Service (SD) and later the Reich Security Main Office (RSHA) were established to deal with Freemasonry. Freemasonic concentration camp inmates were graded as political prisoners, and wore an inverted (point down) red triangle. **On August 8, 1935, as Führer and Chancellor, Adolf Hitler announced in the Nazi Party newspaper, Voelkischer Beobachter, the final dissolution of all Masonic Lodges in Germany. The article accused a conspiracy of the Fraternity and World Jewry of seeking to create a World Republic.**[. . .] The preserved records of the RSHA — i.e., Reichssicherheitshauptamt or the Office of the High Command of Security Service, which pursued the racial objectives of the SS through the Race and Resettlement Office — document the persecution of Freemasons. **The number of Freemasons from Nazi occupied countries who were killed is not accurately known, but it is estimated that between 80,000 and 200,000 Freemasons were murdered under the Nazi regime.**

(逐語訳ではなく訳注付しながらもの大要訳をなすとして)

「ナチスは [高位位階メーソンがユダヤ系陰謀団の成員となっている] と主張し、 [フリーメーソンが第一次世界大戦期のドイツ敗戦の原因の一となっている] と主張した(訳注: 以上は現行にての日本の相応の陰謀論者らやりよう、本稿筆者のなしているような摘示行為にさえ [彼ら由来の相応のにおい] を付けたいのかとも受け取れるような挙をなしている者達のやりようとも通ずるところが

ある主張内容ではある)。アドルフ・ヒトラーはフリーメーソンはユダヤ系に屈しており、ユダヤ系が企図している社会構造を招来するための優れた道具となっているとその著書『我が闘争』(マイネ・カンフ)にて記していた。1933年、ドイツ国首相に任命されていたヘルマン・ゲーリングによって統一ドイツにあってフリーメーソンの居場所はないとの所信演説がなされた。…(中略)…1933年3月23日、全権委任法(Ermächtigungsgesetz in German)がドイツ国会にて通過を見た。同法を活用することでドイツ内務省は「1933年2月、ヒトラー権力掌握時にてロッジ成員であった者はナチ党黨員・準軍事組織にての在職権限を剥奪され、そして、公的職掌にあっての不適合者である」と声明発しつつ、フリーメーソンの解散、そして、全てのロッジの資産凍結を行政命令として実行した。フリーメーソンはナチスドイツの世界観にて継続してのイデオロギー的なる敵と見做され、親衛隊情報部(SD)や同組織が元となつての国家保安本部(RSHA)はフリーメーソンに対処するために設立されたものでもある(訳注:「ナチス・ドイツにて統制組織である、親衛隊情報部(SD)や同組織が元となつての国家保安本部(RSHA)が対フリーメーソンのためのものであるというのは言い過ぎ(overstatement)のきらいがある」と筆者は見ているが、ここでの抜粋項目たる英文 Wikipedia[Suppression of Freemasonry]項目にてはとにかくも、そのように記載されている。その点、国家保安本部の役割、その領袖としてラインハルト・ハイドリヒという[人間の皮を被った悪魔]などと表される非情漢が君臨していたとのことで有名な同組織の役割はナチスに反抗的にとらえられる人々および占領地のユダヤ系を捕らえては都度、投獄・拷問、そして、最終的には(大量)殺戮していくとのところとなつており、そのSD(親衛隊情報部)の管轄下には悪名高いゲシュタポや虐殺部隊としてのアインザッツグルッペンが存在していた —フリーメーソンであるなどとの問題ではなくアインザッツグルッペン「だけ」によって殺された人間の数も数十万を超える、場合によっては百万人の規模に達しているとの史的分析もがなされている—)。1935年10月8日、ヒトラーはナチ党機関紙フェルキッシャー・ベオバハター(訳注:元を辿れば、1919年、フリーメーソン派生組織のナチス母体たるトゥーレ協会、同トゥーレ協会のための機関誌として生まれたものがナチスのそれに転じての機関紙。フェルキッシャー・ベオバハター、すなわち、独逸語で[民族の観察者]紙は最終的に1700「万」部の発行部数を誇ったともされ、初期の編集長は元トゥーレ協会メンバーのナチ党大幹部アルフレート・ローゼンベルクとなる。尚、その程度の情報は英文諸種媒体と異同ないところとして和文ウィキペディア[フェルキッシャー・ベオバハター]項目程度のものからも確認できるところのものである)にてドイツ国内の全フリーメーソン・ロッジに対して最終解散令を出すを声明発している。この記事にあっては世界共和国を創設しようとのフリーメーソンのユダヤ系陰謀団としての側面が批判されている(訳注:フリーメーソンを民族系陰謀団の手足とするとの見方はオウム真理教の「中身が全く伴っていない」高学歴信者らが同様に「中身が全く伴っていない」とのカルト成員にそれを容れるようにと求めたとの主張でもある)…(中略)…親衛隊の[人種および移住本部]を通じて人種的敵対分子を排斥していたRSHA(国家保安本部)、Reichssicherheitshauptamtとの名称やthe Office of the High Command of Security Serviceとの名称でも知られているとの同組織にて保持されていた文書によると、ナチスがその掌握している地にて「殺害」したフリーメーソンリー成員の数は(正確な数は知られていないが)[80万人から200万人]とされている」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく —※—)

(※ただし、以上のような申しよう・歴史的総括がなされているような中ながら多く人種の敵対分子と両立するとされていたフリーメーソンに対するナチス虐殺を逃れた有力メーソンが国際金融マフィアとなっているといったことがこの世界にはある。についてはナチス党の元・最高幹部にしてメーソンとされるライヒスバンク総裁 [ヒャルマル・シャハト] との人物との絡みで[本稿公開サイトにての一にての他公開著作] — 現時、『[巧遅]というより[拙速]に過ぎ、また、陰謀論が如きものに過度に振り回されすぎた、その伝であまりにも拙きところも多々あったか』『商業主義的な語り口上を採用しているとの観点で言いまわしからして問題があったか』と切に反省するところもある『人類と操作』という著作(2009年に商業出版の話がまとまっていた著作) — にも記載しているところとなる。

尚、筆者は[国際金融陰謀論の唱道者]あるいは[(そちらと似たりよったり)新世界秩序陰謀論者]などではない。断じてない。

より深く、そして、より巨視的な側面から見て、

[この世界の歴年の運用システムの問題]

として「ナチスのそもそもの発端・淵源がフリーメーソンにあり、ナチスの中での結局問責されなかった金融マフィアとの沿革を持つ高官がフリーメーソンとされている」と(まだ楽観的だった時代より)指摘せんとしてきたにすぎない。

といったところまでをも悪い意味で意識してか、否なのか、下等な、そう、低所悪所から出ずるところがないとの視点より印象操作すべくような話柄にて本稿を公開しているサイトの一、試験的に公開してきたサイトそれ自体に対して「も」オンライン上にて相応の色を付けるようなことをなしたとの手合いらがここ数年来目立って出始めたとのことを手前は把握するに至っている。

思考の練度が低い、というより、本質的に思考作用そのものが[欠]を見ている節があるとの定型的かつ稚拙なユダヤ系陰謀論やフリーメーソン陰謀論を本稿公開サイトとオーバーラップするように展開し(あるいは意図を鑑みて英語でも細かくも解説しての一篇でも付そうかともとらえているのだが、甚だしくは本稿公開サイトに対してリンクを貼って関係性を偽装するように展開し)、もって、本稿や本稿筆者のような人間を[その伝での陰謀論者]([「絶対に、」何も変えることがないとの種別の紛いもの]らでもいい)であろうと強くも思わせたいというのか、そういったやりようをとっているとの手合いばかりが数年来見受けられたとのことがある(：『被害妄想だろう』と[証跡取って事例分析した人間「ではない」との向き]ないし[筆者の向かい側にいるような相応の手合い]らはとらえなかりょうところか、とも思うのだが、いざというときのために証跡をとっている事実の問題としてそうしたこと「も」ある)。

その点に関しては、といったことをやっている奴原らが

[ありとあらゆる組織体に横断閥を形成・滲透し、相互人間不信を煽りながら、この国にての「人間レベルでの」良識と知性の進歩向上の可能性を収奪しているとの組織体(カルトの三字でもいい)の面々らやりよう]

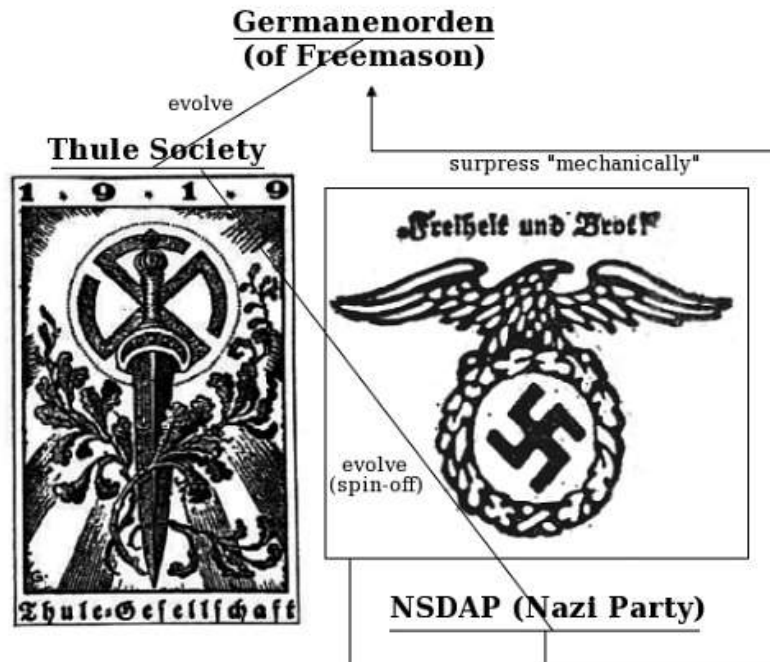
であろうと[収集しての証拠の山]から判ずるに至っている — そして、オウムの如き程度の精神性と知を有しておらぬ大規模カルトの成員といった類には「何を言っても無駄か」と筆者はとらえており、足を引っ張る者達の背後に「(彼らから見た)[敵]を(彼らから見た)[敵]と戦いあわせる」との愚劣な発想法の片鱗などが見えているケースにては殊にそのくだらなさ・浅はかさに失笑したくはなりもした — わけだが(そして、その長期的結果も見えずいていると結を下しているわけだが)、それについてもここでは論じない。

(付記の部はここまでとする)

上もて納得いただけることか、とは思うのだが、
「その関連団体のメーソン派生組織から生まれたナチス党は大量のフリーメーソンリー

成員を虐殺している」

との指摘がとにかくもって存在しているわけであり、といったところにもこの世界では定常的・恒常的に恩恵を受ける陰謀団などというものはなく、結局、ありとあらゆる人間集団は結局は間に合わせの、そう、ディスポーザブルなる存在、使い捨ての組織である風があると申し述べたいのである。



上掲図はここまでそういう指摘が容易になせるようになっていたこと、
[フリーメーソン系の組織体ゲルマン・オルデン(ゲルマン騎士団)→(発展)→トゥーレ・ゲゼルシャフト→(スピンオフ)→ナチス→フリーメーソン弾圧組織]
との流れを示すために挙げたものとなる(トゥーレ・ソサイエティーの紋章が同トゥーレ協会より生まれ出たナチス機関紙フェルキッシャー・ベオバハターと似ていることも上

に言及している)。

(「小閑を偷(ぬす)んで」とのスタンスにてしたためだした本稿にあつては『本筋に関わらぬ[非本質的なこと]には十分なる出典の紹介に時間もとれぬな』との中、不十分なる話をなしたか、との風もあるも、これにて[脇に逸れての補足のための話]を終える)

(出典(Source)紹介の部 103(3)はここまでとする)

ここまでにて([b1⇔b2]の対応関係に関わりもする)b1 および b2 のことが成立しているとの典拠を各別に挙げたとして、次いで、c1 および c2 の典拠を挙げることにする。

出典(Source)紹介の部 103(4)

SOURCE 103(4)



Cimabue's Celebrated Madonna (1280-90)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典(Source)紹介の部 103(4)にあつては

c1 [ファイト・クラブはありとあらゆる職種にメンバーを擁しており、彼らはテロを黙過するばかりか、促進しているとの描写がなされている]

c2 [フリーメーソンはありとあらゆる職種にメンバーを擁しており、そうした成員らが[ブラザー]と呼んでの紐帯を保持している]

とのことらについて —既に論拠を呈示していることなので新たに出典紹介部を設けることには逡巡するところがあったのだが— 節度としての最低限の典拠紹介をなしておくこととする。

まずもって、

c1 [ファイト・クラブはありとあらゆる職種にメンバーを擁しており、彼らはテロを黙過するばかりか、促進しているとの描写がなされている]

とのことについてであるが、先の **a1** にて挙げたところと重複することとして委細はそちら —[出典\(Source\)紹介の部 103\(2\)](#)— に譲りたいところながらもここでも再掲なすところとして、

「映画『ファイト・クラブ』では警察組織に浸潤したクラブ・メンバーが計画の進展妨害を図った警官幹部に制裁を加えようとするシーンが出てくる」

とのことがありもし、それがここでの **c1** と振ってのこと —[ファイト・クラブの成員がありとあらゆる職種にメンバーを擁しており、彼らはテロを黙過するばかりか、促進していると描写されている]とのこと— の典拠ともなる (:DVD『ファイト・クラブ』再生時間 2 時間 02 分 03 秒後以降のところにて映し出されるシーンの視聴(DVD レンタルするなりしての視聴)を通じて容易に確認できる場所としてタイラー・ダーデンを別人格として抱える主人公がプロジェクト・メイヘムのことを警察署尋問室にて告発せんとしている際、尋問にあたった警官らの上長が離席した折にその場に残った三人の現場刑事もまたファイト・クラブの面々となっており、[先にチェス盤上の床にてタイラーが邪魔者を押さえつけるために持ち出した秘密主義貫徹のためのルール]を持ち出し、「たとえ、あなたでもルールは絶対だ。容赦しない」と敬意を表しつつも主人公(タイラーの本体となる人格)に制裁を加えようとするとの描写が出てくる、との部がそうである —その際に発生するダイアログは英文および日本語訳字幕では次のようになっている ⇒ “ You said if anyone ever interferes with Project Mayhem,even you,we gotta get his balls. ” 「騒乱(メイヘム)計画をジャマする者はあなたでも——タマを頂く」(ファイト・クラブ・メンバーとしての刑事の一人) “ -Dont'fight.-It's a powerful gesture,Mr Durden.” 「お静かに」(ファイト・クラブ・メンバーとしての別の刑事)——)。

またもってして、

c2 [フリーメーソンはありとあらゆる職種にメンバーを擁しており、そうした成員らが[ブラザー]と呼んでの紐帯を保持している]

とのことについてであるが、そちらも先の **b2** にて目に付くところより紹介したこと(メーソンの地区別ロジ登録者数につき紹介したこと)を参照なすことで納得いただけることか、とは思ふ。具体的には次の目につくところでの記載のなされようでもって納得いただけることか、と思ふ。

(以下、英文 Wikipedia にての「[List of Masonic Grand Lodges](#)」目に現行 2014 年時点で記載されているとの表形式の[データ]の数値面を再度、くどくも抽出・紹介するとして)

(Unitede states(合衆国)を Jurisdictional area(管轄エリア)とするロジの英文

ウィキペディア上に掲載されてのリストにあつては)各都市毎に成員の数が「一桁単位で」記載されており、現行のニューヨークのグランド・ロッジだけで4万5千人超の会員を有しており、カリフォルニアのグランド・ロッジでは5万5千人超の会員を、インディアナ州やイリノイ州のグランド・ロッジではそれぞれ6万人超の会員を有している。といった按配で合衆国には多くの支部が存在し、そこには数多のメーソンが在籍している(とされている)

(数値面だけに着目しての再度の抜粋紹介の部はここまでとする)

(出典(Source)紹介の部 103(4)はここまでとする)

次いで、**d1** および **d2** のことらの成り立ちについての典拠を挙げることとする。

出典(Source)紹介の部 103(5)

SOURCE 103(5)



Cimabue's Celebrated Madonna (1853-5)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

d1 [ファイト・クラブ成員らはハグ(抱き合い)を頻繁になすと描写されている]

d2 [フリーメーソンの成員は特定の儀式(マスターメーソン位階への引き上げなど)の後にメンバー同士がハグ(抱き合い)をなすと組織である]

とのことらについての典拠紹介をなしておく。

まずは

d1 [ファイト・クラブ成員らはハグ(抱き合い)を頻繁になすと描写されている]

とのことについての典拠紹介をなしておく。

ここでは一例となる映画内シーンを挙げる。

映画本編開始後、再生時間(DVD再生環境タイムカウンター表示)が

【00 時間 3 分 20 秒】

の時刻帯にて映し出されるシーンとして次のようなものがある。

⇒

[主人公と(主人公が詐病者として参加した精巣腫瘍罹患患者の集いの会員たる)精巣腫瘍罹患患者たるボブことロバート・ポールソンが抱き合うシーン]

(映画『ファイト・クラブ』では冒頭部が[グラウンド・ゼロと呼称されての廃墟を造り出すためのビルの連続爆破倒壊直前のシーン]より始まり、それから主人公の回想とのかたちでシーンが昔に遡る(先述のことである)。そして、一番最初のシーンは精巣癌を罹患した者達の集いに主人公が参加しているシーンとなり、それが[ボブことロバート・ポールソンと主人公が抱き合うシーン]となる(その周囲でも男達がお互いに抱き合って苦楽を分かち合っている)。その点、当初、主人公と抱き合っているボブ 一劇中、何度かハグ・シーンが強調されて登場してくる人物— はファイト・クラブ・メンバーではなかったが、後にファイト・クラブに参加、黄金の球形オブジェを爆破するプロジェクト・メイヘム初期計画事件後かけつけた警官らとの銃撃戦で頭を撃ち抜かれたと描写される。そのため、ボブことロバート・ポールソンの死体をいかに処理するかにつきファイト・クラブの面々で争うとのシーンも後に出てくる。それが再生時間にして1時間46分18秒のシーンでその際に生じているやりとりはこうである。“You're running around in ski masks things up? What did you think was gonna happen?! OK, quick! Get rid of the evidence. We gotta get rid of this body!” — 日本語字幕では「ハデにあちこち爆破すりゃサツだって気づく」「証拠の死体をなんとかしよう」との訳が振られている部分となる——。さて、「ハデにあちこち爆破してれば確かに警察も気付く。であるから、証拠を始末しよう」との論理。冒頭部からハグをなしていた者の死骸についてそういうやりとりがなされているとの計画、[ワールド・トレード・センターとサブミナル的に示唆されての連続ビル爆破計画]が描かれているとの映画のそういうありようが[実際の事件]の背後にてどういう姿勢をとるべきかの強調がなされているとのことに「仮に」通じているとのことがあるとすればどうか。「仮に」もしその通りであれば、最悪極まりない者達にとっての事前「訓示」の類がそこにて描かれていることにもなるだろう)

(ハグ(抱擁)のシーンの他の事例の紹介として)

映画本編開始後、再生時間(DVD 再生環境タイムカウンター表示)が

【1時間31分以降】

の時刻帯にて映し出されるシーンとして次のようなものがある。

⇒

クラブ・メンバー同士のこれまたものハグ・シーン(全編を通して見た限りファイト・クラブ・メンバーは彼らの儀式としての[一対一のファイト]と紐付くようなかたちでハグをなしているような側面があるととれるようになっている)

以上、映画『ファイト・クラブ』描写のありよう(d1の部)について紹介をなしたうえで、次いで、

d2 [フリーメーソンの成員は特定の儀式(マスターメソン位階への引き上げ)の後にメンバー同士が「儀式的に」ハグ(抱き合い)をなすとの組織である]

とのことについての典拠紹介をなしていく。

フリーメーソンにあってはマスター・メソン位階に引き上げられる折に

[足と足を] [膝と膝を] [胸と胸を] [手と背中を] [頬と頬を、ないし、口と耳を]

をお互いにくっつけ合う(傍から見ると濃密に抱きあっているように見える)所作をなすことが知られている(：[ウォーシップフル・マスターと呼ばれるメソンの人間]と[マスター・メソン位階(基本三位階の中での上位位階)への引き上げ対象者]がお互いにそういう所作で抱き合うような仕草をとることが知られている)。

については

[The Five Points of Fellowship] ([足と足を] [膝と膝を] [胸と胸を] [手と背中を] [頬と頬を、ないし、口と耳を]とくっつけ合う各所の総数をもってしてファイブ・ポイントと呼称)

といった言葉とFreemasonという単語の検索で解説している英語媒体も目に入ってくるのか、と思うが、メソンの手になる国内流通書籍としては Robert Lomas および Christopher Knight という二名の著者の手になる書籍、

THE HIRAM KEY (本稿の先程の段でも述べたように幅広くもその主たる内容の信憑性に疑義が投げかけられている[信用のおけぬ典拠]unreliable sourceとして有名な書籍だが、フリーメーソンリーのスポークスマン的な者達を書いている書籍だけあってフリーメソンの儀式に対する言及の箇所は事実^にに依拠してのもの^と見受けられる書籍)

の訳書『封印のイエス』—[陰謀「論」関連本]や[トンデモ雑誌]をよく出すことでも知られる出版社である学習研究社—にての35ページ(写真が掲載されている)やそれに先立つ段をお読みいただければ、フリーメーソンにおけるハグ(抱き合い)がマスターメソンの位階への引き上げ段階で「必ず」^{現出する}ものであることをご理解いただけることか、と思う。

(※映画『ファイト・クラブ』にてのファイト・クラブ・メンバーが目立つように同性同士ハグしようとして、また、フリーメソンの特定位階(基本三位階にあつてのマスター・メソン位階)に対する引き上げでハグが現出しようとして)

[より直情的なアメリカ合衆国にあつては日本とはジェスチャーの間に温度差があり、ハグも日常茶飯事に行われているだろう]

とのことはあるだろう(：例えば、英文 Wikipedia [Hug] 項目、その Description の節の部にも “The New York Times reported that “the hug has become the favorite social greeting when teenagers meet or part these days” in the United States. A number of schools in the

United States have issued bans on hugs, which in some cases have resulted in student-led protests against these bans.”「ニューヨーク・タイムズ紙が報じているところとして昨今ではハグはティーンエイジャーが会ったり分れたりする折に用いるお好みの社会的挨拶となっている。米国にての多数の学校ではハグに対する禁令を発し、いくつかのケースではハグに対する禁令に対する学生主導の抗議につながっているとのこともある」。

別にハグそのものは悪いものではないし、おおらかで直情径行の向きならばそういうこともやろう、人前でそういうことをやっている向きにも仲がいいじゃないか、程度にしか私とて思わない（昔は私も今ほどに理詰めで冷たくなりがちな人間ではなかったので素朴な人間的暖かさが表出しての所作には当然に理解がある（つもりである））。だが、映画『ファイト・クラブ』については、そう、メーソンとの兼ね合いで問題になる要素を有している —これより際立って問題になる柱の視覚的寓意も問題視していく— との同映画についてはそういう所作をわざと強調しているように持ち出しているのとれるとのことを問題視しているのである



オンライン上にも図版豊富な PDF 版が流通しているとの 19 世紀にて多数流通した Duncan's Masonic Ritual and Monitor『ダンカンのメーソン儀礼およびその報告』（1866 年版）。同著にての原著該当部位記述 p.121 にて掲載の THE FIVE POINTS OF FELLOWSHIP の図（図像番号 FIG 18.の部）。映画『ファイト・クラブ』では上の仕草を「想起」させるとのハグが印象的な場面にてよく現出を見ているが、そのような部分的類似性を問題視するとその視点を穿ちすぎのものと思われるだろうか？ 筆者としてはそうはならぬであろうとの材料をこれより呈示していく所存である。

(出典(Source) 紹介の部 103(5) はここまでとする)

続けて(II. と振っての段で取り扱いもしている)『ファイト・クラブ』とフリーメーソンの間の（『ファイト・クラブ』に見る）[a1 から e5 のポイント] および（フリーメーソンに見る）[a2 から e5 のポイント] の間に見てとれる類似性にまつわっての説明として e1 および e2 のことが成り立っているとのことについての解説をなすこととする。

SOURCE 103(6)



Cimabue's Celebrated Madonna (1853-5)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典(Source)紹介の部 103(6)にあつては

e1 [ファイト・クラブの面々として集まってきた者達の中でも従順性および急進性に特質がある者達を集めてビル爆破計画の実行役に仕立てていたとの描写がなされている(といったところに[インナーサークル]の問題が観念される)]

e2 [イタリアのフリーメーソン、ロッジ P2 には軍諜報組織の主導部や現職国会議員らのイタリアの権力機構を掌握していたとの面々が参加しており、メンバー僅少の同組織体が白色テロ(反左翼テロ)としての[駅爆破事件](いわゆる[ポローニャ駅爆破テロ事件])で同事件にてイタリアでは多数の死傷者が発生)など複数の偽装テロ(共産主義者に罪をなすりつけるためのテロ)に関与したとのことが露見して問題になったことがある(また、事件に関与したロッジ P2 はメーソンに相応しくはないことをなしたとのことでメーソンから「正式に再破門」されたとのことになっているが、その後に発生したロッジ P2 人脈関連の殺人事件「でも」あいもかわらずメーソンの象徴が用いられているとのこと「も」が一同件に関しては稚拙な法螺も流されているもの— 現実にある)。さらには、イタリア(元)首相であるベルルスコーニもその元メンバーであったとのロッジ P2 の首魁であるリーチオ・ジェッリ —米国諜報機関より当初、[反共要員]として助力を受け、

麻薬組織やアルゼンチン独裁政権などと強固なつながりを有していたとの政治マフィアは(逮捕・脱獄を経て)結局は法網をかいくぐり、1996年にはその前科([自国民を何人も共産主義者の犯行に見せかけての偽装爆破テロで殺してきた]との前科)にも関わらず[ノーベル文学賞]にノミネートされていた。といったところに[インナーサークル]の問題が当然に観念される

とのことらについての典拠紹介をなす。

最初に

e1 [ファイト・クラブの面々として集まってきた者達の中でも従順性および急進性に特質がある者達を集めてビル爆破計画の実行役に仕立てていたとの描写がなされている(といったところに[インナーサークル]の問題が観念される)]

とのことについてであるが、映画『ファイト・クラブ』では後半部よりタイラー・ダーデン居宅に劇中、「軍隊」(army)と評されてもいる者達が集まりだし、そうした者達がタイラーに目的のために身を捧げるとのかたちで命令されて動く[選りすぐり]であるとの描写がなされてもいる。

そちら描写についての解説(兼確認方法紹介)をなす。

[ファイト・クラブには軍隊とはきと言及されてのインナー・サークルが存在していると描写されもしている部について]

映画『ファイト・クラブ』収録流通 DVD コンテンツにての再生時間にして

【01 時間 30 分 51 秒】

にあって主人公自身が「タイラーが軍隊を造っているのは何故か」と考えるシーン(“Why was Tyler Durden building an army?”との英文台詞を伴ってのシーン)が見てとれる。

また、ファイト・クラブの身内内で[軍隊]と形容される[インナーサークル]についての噂が飛び交っていることにまつわるシーンが映画収録 DVD にあつての

【再生時 01 時間 49 分 48 秒】

のところにて見てとれる(“— Is it true about Fight Club in Miami?” “— Is Mr Durden building an army?”(邦訳にては「マイアミの噂は本当かい?」「ダーデン氏が軍隊を設立しているっていうのは?」)とのダイアログが表出しているシーン)。

上のようにファイト・クラブにあつて[軍隊]と形容されながらインナー・サークルとして号令一下動く者らが集められていると描写されるのだが、そうした者達、

[宇宙に打ち上げられた猿のようなかたちで目的に向かって滅私奉公するように求められている者達(スペース・モンキーと呼称される者達)]

と形容されている向きらでもあると描写されている(下に該当部を挙げる)。

[ビル同時爆破計画(プロジェクト・メイヘム)のために使役されている者達に求められているのは[我を捨てての目的に対する滅私奉公であるスタンス]であると形容される部について]

国内流通 DVD にての

【再生時間 1 時間 29 分 58 秒後】

のシーンにて主人公のオルター・エゴであるタイラーが [目的のために集められた者達] をして

“ Like a monkey ready to be shot into space. Ready to sacrifice himself for the greater good. ”
(日本語字幕では「宇宙に打ち上げられたサル、"スペース・モンキー"だ」「目的のために身を捧げる」と訳が振られている)

とその存在意味を括っている。

以上、映画『ファイト・クラブ』描写のありよう (e1 の部) について紹介をなしたうえでそちら描写と対応するフリーメーソン団のありよう (e2 の部)、すなわち、

e2 [イタリアのフリーメーソン、ロッジ P2 には軍諜報組織の主導部や現職国会議員らのイタリアの権力機構を掌握していたとの面々が参加しており、メンバー僅少の同組織体が白色テロ(反左翼テロ)としての[駅爆破事件](いわゆる[ボローニャ駅爆破テロ事件]で同事件にてイタリアでは多数の死傷者が発生)など複数の偽装テロ(共産主義者に罪をなすりつけるためのテロ)に関与したとのことが露見して問題になったことがある(また、事件に関与したロッジ P2 はメーソンに相応しくはないことをなしたとのことでメーソンから「正式に再破門」されたとのことになっているが、その後が発生したロッジ P2 人脈関連の殺人事件「でも」あいもかわらずメーソンの象徴が用いられているとのこと「も」が 一同件に関しては稚拙な法螺も流されているもの— 現実にある)。さらには、イタリア(元)首相であるベルルスコーニもその元メンバーであったとのロッジ P2 の首魁であるリーチオ・ジェッリ 一米国諜報機関より当初、[反共要員]として助力を受け、麻薬組織やアルゼンチン独裁政権などと強固なつながりを有していたとの政治マフィア— は(逮捕・脱獄を経て)結局は法網をかいくぐり、1996 年にはその前科([自国民を何人も共産主義者の犯行に見せかけての偽装爆破テロで殺してきた]との前科)にも関わらず[ノーベル文学賞]にノミネートされていた。と いったところに[インナーサークル]の問題が当然に観念される]

とのことについての典拠紹介をなす。

その点、表記のこと(e2)の出典表記部たるこの段は

「かなり長くなる」

と事前に断っておく。

ここでまずもってイタリア政界に隠然たる影響力を行使し続けてきたリーチオ・ジェッリという男についてのウィキペディア解説項目よりの記述を抜粋することからはじめる。

(直下、和文 Wikipedia [リーチオ・ジェッリ] 項目の「現行」記述よりの引用として)

(リーチオ・ジェッリ来歴として)1963 年には、1877 年に設立されたイタリアに本拠を置くグランド・ロッジ「イタリア大東社(Grande Oriente d'Italia)」に入会し、その後同グランド・ロッジ傘下のロッジである「ロッジ P2」(P2 = Propaganda Due)を創設し、1971 年には「イタリア大東社」のグランド・マスター(=親方)となった。その後同「ロッジ P2」は、冷戦たけなわの 1970 年代に、イタリア社会運動党の関係者や、イタリアの右派政治家や軍人を中心に、アルゼンチンな

どの南アメリカ諸国の軍事政権の政治家や軍人もメンバーに持ち、さながら冷戦下における反共産主義者の集まりとして活動していた。同ロッジのメンバーは、反共産主義活動の一環として南アメリカの軍事独裁政権への武器買い付けを行ったほか、アルゼンチンで「汚い戦争」を進めていたホルヘ・ラファエル・ビデラ大統領を積極的に支援していた[2]。この様な活動が疑惑と批判を浴び、1976年にフリーメイソンのロッジとしての認証が取り消されたものの、その後も「認証されないロッジ」として、他のロッジのメンバーとなった元メンバーのイタリアの政治家や軍人、極右活動家を中心に、言葉通りの「秘密結社」的存在として活動していた。

(現行にての記載よりの引用部はここまでとする)

上にての引用部ではかつてイタリアのフリーメイソンのグランド・マスターであったリーチオ・ジェッリという男について

[他国の反体制勢力弾圧に協賛協力していた]

[やりように批判を浴びたため、メーソンから正式な認証を取り消されて、非認可メーソンとしての活動をなしていた]

とのことが紹介されている(※)。

(※ウィキペディアは本稿にても度々、書き記しているように、(編集の匿名性に起因する責任感の希薄さ・粗製乱造との側面・情報操作をなそうとはなからの意図の介在など要因はいろいろとあろうが)、信用性が低いとの申しようが多く伴っている媒体となり、実際に不正確な記述が目につく媒体ともなる(それがゆえに大学や大学院の教育現場でウィキペディアを引用するようなことをなせば、やりようがよろしくない人間との評価がよく下されるとのことがあるとも聞き及ぶ)。であるから、出典について書いておくが、以上引用部内容の出典として当該和文ウィキペディア項目にて[2]と振られて挙げられているのはイギリス人ジャーナリストがものした、

『法王暗殺』(訳書として一九八五年に文藝春秋社より刊行。同著『法王暗殺』原題は IN GOD'S NAME となり「神というよりインゴッズ(金塊)の名の下に」非情な行いが聖職者巻き込んで行われてきたことに関する告発本)

との [世間知らずを騙すとの陰謀論本] などではない [入念な取材に基づいていることがうかがわれる書籍] となり、同著、筆者も読しているとの『法王暗殺』内容から引き直して見てウィキペディアの当該項目当該記載事項の内容は誤謬を含むものではない(同『法王暗殺』それぞれのよりの抜粋も後の段にてなす)。

ちなみに相応の陰謀論者らが撒く駄法螺といったものとは異なり、アルゼンチンではジェッリが資金面で扶助なした(上に見る) [汚い戦争(ダーティ・ウォー)] で何万人ものリベラル志向の若者達が軍政にたてついた廉で「失踪」していることは [現代史にあつての史実] と同定されていることとなっている — 日本語ウィキペディア [汚い戦争] 項目冒頭部にて(引用するところとして) “ (汚い戦争とは) 1976年から1983年にかけてアルゼンチンを統治した軍事政権によって行われた国家テロである。左派ゲリラの取締を名目として労働組合員、政治活動家、学生、ジャーナリストなどが逮捕、監禁、拷問され、3万人が死亡または行方不明となった” (引用部はここまでとする) と総括されているとおりのことが [紐付きの人形・役者だらけの世界(愚劣な舞台)] にてのこととして [史実] として認知されている)

リーチオ・ジェッリにまつわる流布されているところの世間的評価 — 「まずもつては」ウィキペディアのそれを挙げたうえで、次いで、英国人ジャーナリストのデヴィッド・ヤロップの手になる書『法王暗殺』

よりの抜粋を後の段でなすとの所存の世間的評価— についての引用を続ける。

(直下、和文 Wikipedia [リーチオ・ジェッリ] 項目の現行記述よりの「さらにも、」の引用として)

1980年8月2日の朝に、ボローニャにあるボローニャ中央駅で爆弾テロ事件が発生し、これにより85人が死亡、200人以上が負傷した。当初この事件は事故と思われていたものの、その後の調査で捜査員が爆心地近くで金属片とプラスチック片を発見したことにより、テロ事件と断定され捜査が開始された。その後捜査当局はネオファシズム組織の「武装革命中核」(Nuclei Armati Rivoluzionari)がテロの実行犯と断定し、さらに「ロッジP2」のメンバーで、イタリア軍安全情報局(SISMI)のナンバー2のピエルト・ムスメキ将軍が、ジェッリの事件への関与の嫌疑をそらし、さらに、他の極右組織のメンバーに嫌疑をかけるための偽装工作を行ったとして逮捕された。

その後行われた裁判でジェッリとムスメキ将軍は捜査妨害などの罪で有罪判決を受けた。

なお、事件の動機は判明していないが、爆破テロを行い多くの市民を殺害し、その罪を他団体になすりつけることで、共産主義者による脅威と、当時のフランチェスコ・コッシンガ政権の極左対策への無策をアピールし、世論を極右政党に対し有利な方向に誘導することが目的であったのではないかと言われている[7]。

翌1981年3月には、当時ボローニャ駅爆破事件及びいくつかの経済犯罪、さらに政府転覆謀議などへの関与の容疑でイタリア当局に逮捕状が出されていたジェッリのナポリの別宅をイタリア警察が搜索した際に、既に「認証されないロッジ」となっていた「ロッジP2」に、下記の10人を含む932人のメンバーがいることがジェッリ代表が持っていたリストから確認された。

その中には、第二次世界大戦後の王制廃止により亡命生活を余儀なくされていたヴィットーリオ・エマヌエーレ・ディ・サヴォイア元イタリア王国王子の他にも、30人の現役将軍、38人の現役国会議員、4人の現役閣僚、更には情報部員や後にイタリアの首相(2009年10月時点でも首相を務める)となるシルヴィオ・ベルルスコーニなどの実業家、大学教授などが含まれており、「P2事件」と呼ばれイタリア政界を揺るがす大スキャンダルとなった[8]。

これらの事態を受けフリーメイソンは、ジェッリ以下の「ロッジP2」の全てのメンバーを、「フリーメイソンの名をかたった上で、フリーメイソンにふさわしくない活動を行った」として

1981年10月31日に正式に破門

した。また同年12月24日には、アレッサンドロ・ペルティーニ大統領が「ロッジP2」を「犯罪組織」と指名し、議会に調査委員会が発足した。

ジェッリは当局の捜査が入る前に、逮捕を逃れるためにスイスに逃亡していたが、1982年にジュネーヴで逮捕され、上記の容疑にあわせて

1970年代にトスカーナで発生した25件の極右テロに対する資金的援助の容疑

で、イタリアとスイスの裁判所から有罪判決を受け服役した。しかし、その後数回に渡り脱獄と逮捕を繰り返した[9]。

なおこれらの一連の脱獄には、ジェッリと親しかったジュリオ・アンドレオッティ首相を含むイタリア政界関係者やマフィアの関与があったとみられている。

(現行にての記載よりの引用部はここまでとする)

上にての引用部ではかつてイタリアのフリーメーソンのグランド・マスターであったリーチオ・ジェッリという男について

[アルゼンチンでの弾圧行為(何万人もが失跡した[汚い戦争])につながった手引き行為や違法なる武器取引でフリーメーソンよりの[正式認証を取り消されていた]ものの、非公式ロッジの領袖として活動していた折の1980年にボローニャ中央駅爆弾テロ事件(85人死亡、200人以上負傷)に関与したとの嫌疑をかけられ、その際、非公式化していたイタリア・フリーメーソン、ロッジ P2 のメンバーの援助で法網をかいくぐるようなやりようをなした(また、数々の悪行の末の逮捕をなされても首相をはじめ政界やマフィアとのパイプからジェッリは(法網をかいくぐった後)投獄されても度々脱獄していた)]
[やりようが露見して、捜査の中でロッジ P2 のリストが流出、30 人の現役将軍、38 人の現役国会議員、4 人の現役閣僚、後に首相となったベルルスコーニを含む実業家を含む会員リストが表沙汰になった]
[ロッジの認証取り消しから一歩進んでロッジのメーソンよりの破門を見た]
[1970年代にトスカーナで発生した[25件の極右テロ]に対する資金的援助の容疑でも嫌疑があった(尚、その1975年の段階ではロッジ P2 は未だにイタリア・メーソンを代表する正式ロッジとなっていた節がある — ロッジ P2 の[破門]に「先立つ」[認証取り消し]は1976年のことである—)]

とのことが紹介されている(※)。

(※以上引用部内容の出典として和文ウィキペディアにて[7][8][9]と振られて挙げられているのはシルヴィオ・ピエロサンティ著『イタリア・マフィア』(ちくま新書・2007年刊行)となる。何故、イタリア・マフィアか、といえば、ジェッリはマフィア人脈を「部下の部下」(実行部隊)として操縦して映画ゴッド・ファーザー・パート3に材料を提供するようなかたちでの陰謀劇、腐敗カトリック司祭暗殺事件などの陰謀劇にあって影で糸引いていた演出家の一人とされているからである。ちなみに和文ウィキペディアではイタリアでロッジ P2 所属の軍諜報組織のナンバー 2 が逮捕されるなどして大問題となった、
[ボローニャ駅爆破テロ事件](およそ死者 80 名超・負傷者 200 名超)についてはテロに P2 所属の軍諜報組織の面々が「捜査妨害」との間接的な形で関与している — 上にて引用しているように「別の」極右組織にテロ容疑をなすりつけようとしたのかたちで関与している— ことが問題視されているわけだが、そのこと、フリーメーソン人脈の諜報機関大物が「容疑を逸らそうと」テロ捜査に関与した動機が不分明ならば、テロそのものの動機も不分明であり(一般には左翼の犯行のせいにして右傾化を強めるためであったともされている)、問題となるフリーメーソン人脈の領袖であるジェッリが — 上にての引用部に見るように— 1981年に「メーソンより正式に破門」される(との体裁がとられるに至る)「前」の1970年に発生していた極右テロへの資金援助でも後に逮捕され、しかも、不自然に脱獄できていたことからして「どういうことなのか。」と思わされることとなっている。尚、さらに後の段にて引用する所存である英国人ジャーナリストの著名なるバチカン暗部調査ルポ — デヴィッド・ヤロップにまつわる欧米圏でよく知られた IN GOD'S NAME (邦題)『法王暗殺』— には「ジェッリそのものがボローニャ駅爆破事件の立役者であり」「捜査妨害もジェッリ自身が逮捕を免れるためであった」との取材元よりの証言が載せられている — については後にて引用部を参照のこと—)

ロベルト・カルヴィ(Roberto Calvi、1920年4月13日 — 1982年6月17日(遺体発見日))は、イタリアの銀行家。バチカンの資金管理を行う銀行であったアンブロシアーノ銀行の頭取であったことから、「教皇の銀行家」と呼ばれていた。

…(中略)…

1969年には、ネオ・ファシストの極右政党である MSI や CIA と深い関係を持っていたリーチオ・ジェッリが代表を務めるフリーメイソンの「ロッジ P2(Propaganda Due)」の会員となり、ジェッリを通じて、バチカン銀行の財政顧問も務めた弁護士で、自らが経営するミラノのプライベートバンクを通じてマフィアのマネーロンダリングを行っていたミケーレ・シンドーナとの関係を結んだ。

…(中略)…

その後はシンドーナとともに、マルチンクス大司教の庇護の下、バチカン銀行を経由してマフィア絡みのマネーロンダリングと不正融資を率先して行い、1975年にはアンブロシアーノ銀行の頭取に就任した。

…(中略)…

このような状況下におかれたものの、ヨハネ・パウロ1世を継いで1978年10月に第264代ローマ教皇となったヨハネ・パウロ2世が、急死した前任者と打って変わってバチカン銀行の改革に熱心でなかったこともあり、その後もカルヴィは、マルチンクス大司教の庇護の下バチカン銀行を経由したマフィア絡みのマネーロンダリングと不正融資を続けた。

…(中略)…

各国の当局やマスコミから身柄を追われていたカルヴィが、1982年6月17日の未明

に、イギリスの首都、ロンドンのテムズ川にかかるブラックフライアーズ橋の下で「首吊り死体」の姿で発見されたため、当事者のバチカンとイタリア、イギリスの各政府のみならず、全世界を揺るがす大騒動となった。カルヴィの死体が発見された当時は単なる自殺であるということで片付けられたものの、ロンドンの中央に位置するブラックフライアーズ橋に、まるで見せしめのように死体が吊るされていたことや、死体の位置が自ら首を吊ったとするには無理がある状況であったり、なぜか衣服のポケットに別の場所に入れられたと見られる小石や煉瓦が入っていたりと、死体の状況が単なる自殺とはあまりにもかけ離れた状況であることから、その後遺族らによって再捜査を依頼されたスコットランド・ヤード(ロンドン市警)が再捜査を開始し、最終的に1992年に他殺と判断された。

…(中略)…

事件に先立つ1981年3月に、アンブロシアーノ銀行の用途不明金に対する関与や、1980年に起きたボローニャ駅爆破テロ事件を含む複数の極右テロへの関与などの容疑でイタリア当局に逮捕状が出されていた「ロッジ P2」のジェッリ代表のナポリの別宅をイタリア警察が捜索した際に、「ロッジ P2」に、第二次世界大戦後の王制廃止により亡命生活を余儀なくされていたヴィットーリオ・エマヌエーレ・ディ・サヴォイア元イタリア王国王太子をはじめ、30人の現役将軍、38人の現役国会議員、4人の現役閣僚、更には情報部員や後にイタリア首相となるシルヴィオ・ベルルスコーニやカルヴィ、シンドーナなどの実業家、大学教授など932人のメンバーがいることがジェッリ代表が持っていたリストから確認された。1978年以降はフリーメイソンのロッジとしての認証を取り消され、「認証されないロッジ」となっていた上に、上記のような極右テロを含む数々の罪状でイタリア当局から逮捕状が出されていたジェッリ代表が率いる「ロッジ P2」に、

多数の政財界の大物や元王太子までがメンバーとなっていたことは大きな批判を呼び、「P2 事件」と呼ばれイタリア政財界を揺るがす大スキャンダルとなった。これらの事態を受けフリーメイソンは、他のロッジに所属しつつ「ロッジ P2」のメンバーとして活動していた全てのメンバーを、「フリーメイソンの名をかたった上で、フリーメイソンにふさわしくない活動を行った」として

1981 年 10 月 31 日に正式に破門

した。また同年 12 月 24 日には、アレッサンドロ・ペルティエニ大統領が「ロッジ P2」を「犯罪組織」と指名し、議会に調査委員会が発足した。

…(中略)…

1991 年 7 月に、イタリアの司法当局への情報提供者と転向したマフィアの構成員のフランチェスコ・マリーノ・マンノイアは、「カルヴィが殺害された原因は、アンブロシアーノ銀行破綻によりマフィアの資金が失われた報復であり、実際にカルヴィを殺害したのは当時ロンドンにいたマフィアのフランチェスコ・ディ・カルロであり、殺害命令を下したのは、マフィアの財政面、主にマネーロンダリングに深く関わったことから『マフィアの財務長官』と呼ばれたジュセッペ・ピッポ・カロと、『ロッジ P2』のジェッリ元会長であった」と暴露した。

(引用部はここまでとしておく)

上にては

[ジェッリ配下としてローマ・カトリックの資産運用を引き受けていたアンブロシアーノ銀行の頭取であったロベルト・カルヴィがアンブロシアーノ銀行を用いてマフィアの資金を洗浄していた]

[後にアンブロシアーノ銀行でのマネーロンダリングや極右テロへの関与で逮捕状が出されていたリーチオ・ジェッリの一件などとの絡みでロベルト・カルヴィがいよいよ法網をかいくぐれなくなってきた折柄、同男の首吊り死体が 1982 年(ロッジ P2 の破門は 1981 年)にロンドンのテムズ川にかかるブラックフライヤーズ橋に吊されていた]

ことが紹介されている(※)。

※補足として

直近にて引用の和文ウィキペディア[ロベルト・カルヴィ]項目よりの現行にての記載部—これより内容変化を見る可能性もある部— はイタリア・フリーメイソン領袖となっていたリーチオ・ジェッリの肝煎りの人間、ロッジ P2 成員としてバチカンの資産運用とマフィアのマネーロンダリングを担っていたロベルト・カルヴィという男の生き様・死に様を扱っているもののだが、ロベルト・カルヴィは 1982 年に —同じくもの引用部に記載してあるように— ロンドンの[ブラックフライヤーズ橋]にて吊されての首吊り死体となった。

その点、首吊り事件が発生したのは 1982 年でロッジ P2 がフリーメイソンリーより破門された後だが(ちなみにロッジ P2 は破門以前に認証取り消しとのペナルティーも 1976 年に受けているとされることは先の引用部にも言及されている)、同首吊り事件には次のような観点から

[(インターネットも存在していなかった)往時にてはフリーメイソンリー・メンバーないし余程のフリーメイソン通にしか想像が及ばなかっただろうメーソンの比喩]

が「濃厚に」介在していると述べられるようになっているものである。

第一。「高度情報化社会が進展した」等々に因るところとして時代の趨勢よりそれまで隠

れていた因習的なところが表に出てきた結果、誰でも容易に確認できることになったこととしてメーソンの徒弟位階にての儀式にては、

[目隠しをされて「首吊り死刑囚」を演じるとのスタイルが強要される]

とのものがある (出典として:フリーメーソンの手になる国内流通書籍 Robert Lomas ロバート・ロマスおよび Christopher Knight クリストファー・ナイトという二名のよく知られた公証公認されているフリーメーソンの著者らの手になる書籍、THE HIRAM KEY (幅広くもその主たる筋立ての信憑性に疑義が投げかけられている[信用のおけぬ出典] unreliable source として有名な書籍だが、フリーメーソンリーのスポークスマン的な者達が書いている書籍だけあってフリーメーソンの儀式に対する言及の箇所は事実には依拠してのものと見受けられる書籍)の国内にて流通している訳書『封印のイエス』——[陰謀「論」関連本]や[トンデモ雑誌]をよく出すことでも知られる出版社である学習研究——にての21ページより24ページよりの掻い摘まんでの引用をなす。(以降、掻い摘まんでの引用部として) “いよいよ入団の儀礼。…(中略)…目隠しをされ、緩やかな白衣を着せられた。片足には簡素な上靴。左脚は膝まで露出させられ …(中略)… 首の周りには絞首刑の綱が巻かれ、背中に垂れ下がっていた。 …(中略)… すべての金属製のものを体から外させられ、 …(中略)… フリーメーソンの「 temple 」に入る準備が整った …(中略。一挙に24ページまでとばす)… こうして目隠しを取り除かれた。…(中略)… 前にいるワーシップフル・マスターは …(中略)… メーソンリーの「光」の象徴に向けた。 …(中略)… そして、 …(中略)… 「エンタード・アプレンティス(徒弟)」という位階に受け入れられた、と告げた ” (引用部はここまでとする)。以上が国内でも流通している書籍にて言及されている [欧米圏ではある程度名前が知られたメーソン自身が語る徒弟位階への入門時、すなわち、フリーメーソンリーに入団する際に参入者が強いられる儀式のありよう] となり、メーソン入団者はその入団段階で目隠しをされた死刑囚を演じさせられ、目隠しをとられて、光を与えられ、そこでメーソンに入団することになるとはきと言及されている)。



上はオンライン上に PDF 版も流通しているとの Duncan's Masonic Ritual and Monitor(1866)にて p.59 と原著にての頁数が記載されての部位にて掲載されている図の「再掲」をなしているとのものとなる(同じくもの図は補説3の部、現行、補説4の部にあつての話をなしているわけであるが、先行するところの補説3の部にあつての **出典(Source)紹介の部 94(4)** の部で本稿にて既

に挙げているとの事前経緯があるため、「再掲」と表記している)。図にては縄が首に巻かれていないが、同じくもの縄は首吊り死刑囚を縊死させるための縄であると語られており、「実際に」それが首に巻かれての儀式の候補者を写し取っての写真もメーソンの手になる書籍に認めることができるようになっている(上にてその史的分析やりようにまつわる問題性を書き記しているとのものながらも書籍、(邦題)『封印のイエス』の p.21 にあってからして首に縄を巻いたメーソンの写真が掲載されていたりする)。

以上のことから、[ブラックフライアーズ橋のカルヴィの首吊りの死体]とはフリーメーソンのメンバーないしフリーメーソン通には「ピンとくる」死に方をした人間の死体であると述べられるところである(ポイントは情報の非対称性があった 1982 年時点ではそういうことが分かるのはメーソンないしは余程のメーソン通ぐらいであったとのことである)。

第二。教皇の銀行家(そしてマフィアの銀行家)として知られる P2 ロッジの構成メンバー、ロベルト・カルヴィのブラックフライアーズ橋での首吊り死体のポケットには[石ころ]と[煉瓦]が混入されていた、と発表されているが(つい先程にてなした和文ウィキペディア引用部に見るとおりである)、それが本当ならば、

[建築素材としての煉瓦]

は[石工団体]を標榜するメーソンにとって[馴染みのシンボリズム]にも関わるものであるとのことが問題になる。につき、フリーメーソンリーとは[石工]を意味する名詞[メーソンリー]に由来する組織だが、同フリーメーソンリーは[切り石]や[煉瓦]を組み立てて建築物を構築してきた石工の伝統を保持する組織としての体裁を重んじ、石工にまつわる象徴物を多用している。よく知られたところとして[鑿(たがね)のシンボル]などがそうであるが、それについて、一ジェッリの下で暗躍しマフィアの金をバチカンで洗浄していた男たるロベルト・カルヴィの死に様(ポケットに石ころと煉瓦を入れられての死に様)との兼ね合いで一 極めて臭いところは

[切り石(英語で言うところの Ashlar アシュラー)の未加工のもの]

[切り石の加工されたもの(長方形に整えられたもの)]

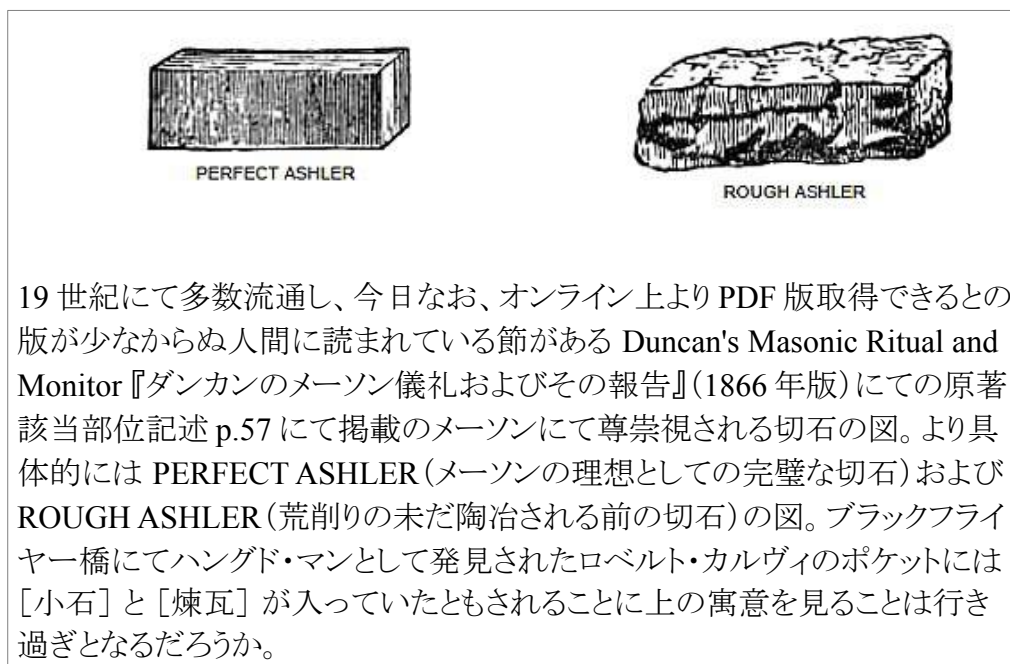
をメーソンが人格の「陶冶」のシンボルとしていることである 一[未加工の石]から[加工された石]への変質は[人間の人格の陶冶]の比喩というより[人間部品化完遂]の比喩か、と筆者などは考えているわけだが、それは置き、である一 (出典として:本稿を公開サイトを公開した後、邦訳版が出されたものとなるが、Robert Lomas(ロバート・ロマス/多くの出鱈目表記を含むとの「文献的事実に依拠せず」に似非歴史分析をなしているとの批判がなされている類であることを先述ししたもの世間では歴史通とのことが喧伝されてのメーソン)の手になる THE SECRET POWER OF MASONIC SYMBOLS 邦題『フリーメーソンシンボル事典』(邦題版元は学習研究社)にての 188 ページから 189 ページよりの引用をなす。

(これ以降、引用部とする)

“ [未加工の切石]:エンタード・アプレンティスは未加工の切石に取り組む。それは石切場から切り出したばかりの石であり、職人の勤勉の技によって形を成し、整え、意図した建築物に用いる …(中略)… [完璧な切石]:完璧な切石は、熟練した職人が自らのジュエルでこれを計る。完璧な切石は真の立方体であり、直角定規とコンパスでこれを計らねばならない。 …(中略)… [ロバート・ロマスの個人的見解]:完璧な切石によって象徴される霊的発展の段階は、メイソンの第 2 階級に含まれる。これに到達するために、メイソンの魂と肉体は均整の取れた関係になっていなければならない(以下略) ” (国内で流通しているフリーメーソン会員によるフリーメーソン・シンボリズム解説本『フリーメーソンシンボル事典』 p.188—p.189 よりの引用部はここまでとする)。

ブラックフライアーズ橋から徒弟位階儀式に見るように吊されたロベルト・カルヴィ(ロッジ

P2 がメーソンから「正式に破門」された後の 1982 年にブラックフライアーズ橋に「吊された」男は「切石」それそのものではなく「加工済みの煉瓦や小石」をポケットに入れた状態で死んでいたともされるわけだが(ただしこのあたりは情報が錯綜しておりいまひとつ決め手に欠けるところもある)、[煉瓦]と[切り石]の建築素材としての違いは差して重きをなさぬかと思う。[煉瓦]は[切石の代替物]として石工の仕事で使われるものであるからである)。



第三。ロンドンのブラックフライアーズ橋にては[知恵][正義][勇氣][節制]の四元徳のうちの[節制]の女性化彫像が据えられているが、[知恵][正義][勇氣][節制]との四元徳 (Cardinal Virtue) を女性に仮託してシンボル体系に組み込むのは(従前からあつての四元徳の欧米圏にての象徴体系を受けての)フリーメーソンの典型的やりようとして「も」よく知られている (出典として:ロンドンシティのブラックフライアーズ地域にまつわる英文 Wikipedia [Blackfriars Bridge] 項目の下部には現行、橋に据え付けの[四元徳「節制」の女性像化しての像]にまつわる写真掲載部が挙げられており、そこには **“Temperance, a statue atop a drinking water fountain at the north end of Blackfriars Bridge.”** 「ブラックフライアーズ橋にての北端にての [泉の水を上半身で飲んでいるとのテンペランス] の像」と写真付きで記載されている。他面、フリーメーソンが[知恵][正義][勇氣][節制]を女性化しながらシンボルに組み込むとのキリスト教寓意体系 — Christian Allegory System — を「強くも踏襲している」とのことについては [Freemason, Fortitude, Temperance, Prudence, Justice] などと英文情報に強い検索エンジンにて検索いただければ、そして、その際に表示されてくる解説ページらを参照いただければ、ご理解いただけたところか、と考える — オンライン上より Cardinal Virtue (四元徳) がメーソン象徴体系と結びついていることを示す典型的資料の記述内容も引いておく。ここでは Project Gutenberg のサイトより誰でもダウンロードできるところの Masonic Monitor of the Degrees of Entered Apprentice, Fellow Craft and Master Mason (1903 年刊行のもの。『徒弟位階・職人位階・親方位階の各位階のメーソン儀礼総覧』とでも訳せよう資料)にての p.34 の内容として **“Every Mason has four (p. p. e.) which are illustrated by the four cardinal virtues: Fortitude, Prudence, Temperance and Justice.”** 「全メーソンは四元徳として説明される[勇氣][知恵][節制][正義]を持つ(ように求められているとのことになっている)」との記述だけを引いておく——)。



[女性像にて象徴化されての四元徳]、その彫像化作品がルーブル美術館ゆかりのものとしてかつて写真撮影されて英文 Wikipedia[Cardinal virtues]項目にて掲載されているとのものから上に抜粋をなしておく。

以上三点のことらにつき書き記したうえで「なおもって、」述べるが、世間では

[デタラメとしての陰謀論 —911 の事件にての WTC 住所につき文字コードの変換からナチ的メッセージが浮かび上がってくるといった全くの大嘘としての陰謀論(どういうわけかこの世界、殊にこの日本ではそういうものを未だに流布する相応の輩が目につき、なおかつ、そういう相応の輩の出鱈目「ばかり」が検索結果ありようなどにて目につきやすくなっている) —]

を唱道する相応の輩らが後を絶たぬとすることがあり(英語情報源で Conspiracy Theory 陰謀論がどのように扱われているかをチェックするのもよからう)、[ブラックフライアーズ橋の殺人事件]について「も」不正確なメソン絡みの陰謀論が持ち出されることがある。

たとえば、

「ブラックフライアーズはそれ自体がイタリアにてメソンの名前となっている」

といった陰謀論が目立って表面にだされ(イタリアにてのありようとしてブラックフライアーズがそのままメソンを直接的に指すわけ「ではない」との申しようもなされるなかで、である)、そうした[お詔(あつら)え向きの不正確な言い分]を否定することでもってメソンの陰謀的関与を否定するメソン陰謀論「否定」の書籍なども見られる([中途半端な陰謀論]は結局はそれにて批判される組織を利するにすぎない)。

そういったことを望見しつつも、とにかくも、言えることはこうである。

「ブラックフライアーズ橋のカルヴィ死体発見事件が

[メソンは組織的に関与せずのマフィアの構成員の一部の人間から差配されての仕事であった]

あるいは

[メソン人脈がそこに組織的に関与してメソンの紐帯の意に沿わぬような人間はそういう処理の仕方をするとの見せしめとした]

とのものであったにしても、どちらにせ、現実にブラックフライアーズ橋の事件にはメーソン「的な」臭いが如実につきまとう、ということがある——直近、論拠を提示して指し示しての通りの三点の理由（第一、[ロッジ P2 領袖のリーチオ・ジェッリの配下として動いていたマフィアに処分されたと言われている(先述)カルヴィは首吊り状態で発見されたが、メーソンでは徒弟位階で首吊りの死刑囚の似姿をさせられる]、第二、[カルヴィ死体には煉瓦や小石らとワンセットになっていたとされるが、メーソンの教義には成員の[不完全な切石](アシュラー)を[完全なアシュラー]、立方体へと陶冶するとの考え方がある]、第三、[カルヴィ死体がハングト・マンとして吊されたブラックフライアーズ橋には四元徳の[節制]の像が女性化されて配されているが、[四元徳の女性化シンボル]はキリスト教シンボル大系からメーソンが目立って踏襲をなしているとのものである]）からである。につき、何故、そうした死に様がロッジ P2 の破門(1981)の後の 1982 年に具現化を見たか考えてみるべきか、とも思う——」。

カルヴィ殺しに伴ってのそれ絡みの寓意は知識を保持している人間には気づけるようになっていても、
「結局は藪の中。」

であるわけだが、奇怪なことは「1982 年に」相応の最期を迎えたカルヴィをコントロールしていた極右テロ幫助(「70 年代」よりの極右テロ幫助)をなしていたイタリア・フリーメーソンの領袖、諜報機関人脈に爆破テロのみ消しをなさしめんとしていたことが報じられ逮捕状も出されたリーチオ・ジェッリら面々が「1981 年に」メーソンより正式破門された後も、[(外面は)きらびやかな者達]の世界にあって[偉大なる男]と見倣されているとの風があることであり、それは「1996 年に」ノーベル「文学」賞にジェッリがノミネートなされ候補となったと報道されていることに見てとれるとのことである(出典として:英文 Wikipedia [Licio Gelli] 項目に In 1996, Gelli was nominated as a candidate for the Nobel Prize in Literature. [2] と表記されているところ、そこにて [2] "Giustizia, tv, ordine pubblico e finita proprio come dicevo io". La Repubblica. September 28, 2003. (Italian) と番号振られて [ラ・レプブリカ(イタリアの大手日刊紙 La Repubblica) 関連の報道記録] が出典 Source として記載されているとおりである。それにつき、さらに述べれば、[ダイナマイトの死の商人の遺産]を運用するノーベル財団のウェブサイト特定ページ(nobelprize.org/nomination/literature/index.html とのファイル名で Nomination and Selection of Literature Laureates とのタイトル名入力でも行きつけるとのページ)にては “ **Nominations to the Nobel Prize in Literature can be made by qualified persons only.** The names of the nominees and other information about the nominations cannot be revealed until 50 years later. ” 「ノーベル文学賞の選考は資格有する向きによってのみ行われえるものである。候補者の名前および選考にまつわる他情報は 50 年を経るまで明らかにされない」とあり、和文ウィキペディア[ノーベル賞]項目にての[選考]の節にては(引用するとして) “選考は「物理学賞」「化学賞」「経済学賞」の 3 部門についてはスウェーデン王立科学アカデミーが、「医学生理学賞」はカロリンスカ研究所(スウェーデン)が、「平和賞」はノールウェー・ノーベル委員会が、「**文学賞**」はスウェーデン・アカデミーがそれぞれ行う。ノーベル賞の選考は秘密裏に行われ、その過程は受賞の 50 年後に公表される ” (引用部はここまでとする)と記載されている。それがゆえ、(ノーベル賞で誰それが候補になっていることはよく報じられることであるのだが)、選考の過程自体が 50 年を経るまで内密のものとなっているとの建前が取られているため、[服役しても「脱獄」して法網を長らくもかいくぐりつづけ、かつてはフリーメーソン領袖としての立ち位置にありつつマイクロのみならず巨視的な意味での悲惨(駅爆破事件への間接的関与ではなく南米での[汚い戦争]の扶助がそうである)を現出し続けたリーチオ・ジェッリという男]が[ノーベル文学賞]にノミネートされたこと自体も本当のところはよく分からないようになっているが(ジェッリの[文学作品]

なるものがいかなるものなのかもイタリア人ではない我々には機微勝手が分からない。
[情動的価値どころか情緒的価値すらないとの駄文としての受賞作]よりは興味深いもの
とは見るが)、そういう話が行き渡る背景にはそれなりのことが作用しているととれる ——
元イタリア首相にして[メディア王]としてのシルヴィオ・ベルルスコーニも P2 ロッジのメン
バーとしてその薫陶を受けていたというリーチオ・ジェッリについては [マス・メディア(そ
の構成員に質的に下らぬ人種、[本当に問題となるところでは弱きを助け強きを挫くとの
逆しかなさぬところを「欺瞞」で固めてのゴロツキ]を多く集めての存在であるとは昔からよ
く言われている)に評価されての「時の人」] とその後にもあり続け、マス・メディアは
ジェッリ去就をあたかも [セレブ] (などと呼称される人種) にまつわるそれとしてつい最近
も報じていたとのことがある(：和文ウィキペディア[リーチオ・ジェッリ]項目にて(引用する
として) “1996年にはノーベル文学賞候補になり、さらに2003年には「ラ・レプブリカ
紙のインタビューを受け「P2 再生プラン」を発表し話題を呼んだ。また2007年に「カル
ヴィ暗殺事件」で無罪判決を受けた後には、自らの自叙伝的映画のための権利を譲渡
する契約を、アメリカの映画プロデューサーとの間に結んだ” (本稿本段執筆時現行記
述よりの引用部はここまでとする。尚、表記の引用部に見るラ・レプブリカ紙はイタリアに
あって極めて影響力強い日刊新聞紙である)と記載されているとおりである)——)。

「長くなったが」 ロベルト・カルヴィの死に様にメーソンやりようのにおいが付きまどって
いたことなどにまつわる補足はここまでとしておく。

以上、リーチオ・ジェッリらフリーメーソンの領袖にまつわるやりように関して巷間伝わるどころ、ここ
までにて和文ウィキペディアの記事を引用して呈示してきたことを目にされた向きは次のように思う
ところか、と思う。

『にわかには信じがたい話だ。いい加減な匿名の者らが編者になりもするウィキペディアにあっ
て表出している陰謀「論」の類ではないのか?』

であるが、

[相応の輩を多く掻き集めて運用しているとの相応のマス・メディアなどが報じず、また、人
形・役者に成り下がった一群の人間達がいかなる下らない生き方、腐敗した生き方をも是と
する、是とさせられることに起因する世界([運命]を自分で切り拓こうと「しない」「できない」者
達を主たる構成要素とする世界)の実状が(「たかだかも、」の) 同じくもの件に表出している
こと]

を書き記した書籍には評価高き真つ当な書籍も含まれている。

その点、取材注力型のイギリス人ジャーナリスト、ディヴィッド・ヤロップの手になる、

In God's Name『法王暗殺』(訳書版元は文藝春秋)

という書籍の内容を試みにここに引いておくこととする。

(直下、訳書『法王暗殺』p.136—p.137よりの掻い摘まんでの引用をなすとして)

ジェッリがフリーメーソンに入会したのは一九六三年十一月。ほどなく第三位
階に昇進、支部を組織する権利を得た。そのとき支部長(グランド・マスター)
だったジョルダノー・ガンベリーニが、フリーメーソンに協力的ないしは入会希
望の有力者のサークルを作るように委嘱した。ジェッリはその機会にとびつき、
秘密結社 P2 を組織した。P2 の P はプロパガンダの頭文字。もとは一九世紀

の有名なフリーメーソン支部名だった。最初、ジェッリは退役した高級将校を入れ、やがて彼らのツテで軍の現役上層部を抱き込み、人脈は徐々にイタリア権力機構の中に滲透していった。フリーメーソンが掲げる理想は、まもなくタテマエだけになり果てた。ジェッリが狙ったのは極右勢力の大同団結と、イタリアが共産化した場合に備えクーデター勢力の温存だった。西側諸国からの支援には自信があった。事実、P2の初期には、イタリアで活動するCIAから積極的な協力を得た。P2は、単なる左翼恐怖症だけで結びついた秘密結社ではなかった。その証拠に、P2イタリア支部(他の国にも強力な支部がある)の会員は、陸軍司令官ジョバンニ・トリン、秘密警察首脳ジュゼッペ・サントピートと
ジュリオ・グラシーニ、税関長オラーツィ・ジャンニーニ、そのほか閣僚、共産党を除く各政党の有力者、将軍三十人、提督八人、新聞社やテレビ局の首脳、カルビやシンドナを含む実業界や金融界のトップ
という実力者ぞろいだった。一般のフリーメーソンと違って会員名は厳秘にされ、全会員の名を知るのはジェッリだけだった。P2の勢力拡張に、ジェッリはさまざまな手段を使った。会員のツテも用いたが、脅迫を多用したのである。一人の会員が入会すると、有力者を脅迫できるように秘密文書を忠誠のあかしとして提出させる。それを利用して対象になる人物を強請り、会員に加えていくという手口である。一例が国有石油会社ENIのジョルジョ・マツァンティ社長のケースで、サウジ原油買入れに関する贈収賄やリベートの証拠書類を見せられたマツァンティは直ちに入会、さらに多くの秘密情報を提供した。

(一部引用部はここまでとしておく 一筆者が「なるほど。」と実感させられたところとして国内カルトなぞの滲透方式・支配様式と上のやりようは似ていると見ている)

(直下、訳書『法王暗殺』p.138よりの挿い摘まんでの引用をなすとして)

一九四〇年春、ナチ秘密警察の長としてアムステルダムのフリーメーソンを徹底的に解体したバルビーと、メーソン P2 支部長のジェッリが利益によって結ばれたのである。二人には共通点が多く、たとえばステファノー・デレキアイエという男を高く買っていた。デレキアイエはイタリアで二度クーデターを計画して失敗し、ボリビアに渡り、一九八二年ボリビアが民政復帰するとアルゼンチンに逃れたという怪物である。彼の世話をしたのは暗殺組織「トリプル A」を率いる P2 会員ホセ・ロペス・レガだった。このレガという男は、コカインをアルゼンチンから米国に密輸する大組織を動かしていた。

(一部引用部はここまでとしておく 一※一)

(※上にては[ナチス元ゲシュタポ(親衛隊情報部)人脈]や[麻薬組織領袖]がフリーメーソン紐帯にて結集していることが表記されての部でもある(尚、上にてトリプル A と表記されている組織、麻薬産業の元締めであったとのロジック P2 のジェッリの同士ホセ・ロペス・レガ(アルゼンチン大統領となったイザベラ・ペロンの寵厚き警察官出身の社会福祉大臣というのが表向きの肩書き)が当初率いていた[トリプル A]についてはアルゼンチンでの反抗的識者層(親・社会主義者とラベリングされた識者層)に対する 70 年代から 80 年代にかけての虐殺行為に関わりもした[死の部隊](デス・スクワッド)の一つとして今日、その悪名がつとに知れ渡っている組織となる(下らぬ陰謀論者のざればん・たわごとと一味同仁に見られる向きもあらわれるかもしれないが、こ

では既に研究しつくされている史実について述べているのであり、に関しては、英文 Wikipedia[Argentine Anticommunist Alliance]項目などに何が事細かに紹介されているか読み解かれてみるとよからう))

(直下、訳書『法王暗殺』p.140 から p.141 よりの掻い摘まんでの引用をなすとして)

不可解なのは、教会上層部が、秘密結社 P2 を率いるジェツリと喜んで交わったことである。昔からカトリック教会ではフリーメーソンは「悪魔の子」とされ、一七三八年のクレメンス十二世以来、教皇の教書は少なくとも六度、フリーメーソンを非難してきた。

その理由は、フリーメーソンが「神なき宗教」を創始し、カトリック教会の破壊を計画していると、歴代教皇が信じたからである。そのため、会員になったカトリック教徒には、自動的に破門が宣告されてきた。事実、革命勢力は教会と闘うに当たって、何度もフリーメーソンを利用してきた。その一例は、十九世紀末にイタリアを統一した愛国的英雄ガリバルディで、ローマを教皇の支配から解放するためフリーメーソンを動員したので知られている。今日ではフリーメーソンの秘密性も薄らぎ、会員によると

「善を行う組織」

だそうだが、外部からは依然として疑惑の目で見られている。ただカトリック教会だけは、最近まで全否定の態度を維持してきた。だから、古いフリーメーソンの秘密性と目的を持つ P2 が教皇庁に接近し、会員の大部分がカトリック教徒なのは、それ自体すでに異常なことであった。

…(中略)…

過去二十年間にイタリアで起こった多くのテロ事件は、もしジェツリが捕って真相を語れば、その多くが解決するはずである。一九六九年ミラノのフォンタナ広場では十六名が死亡。一九七四年ボローニャでは急行列車が爆破され、十二人が死亡。一九八〇年ボローニャ駅の爆発では八十五人が死亡。百八十二人負傷等々…。このボローニャ駅のテロは、ジェツリと喧嘩別れしたネオ・ファシスト、エリーネ・チョリーニの自供によると、一九八〇年四月十一日モンテカルロでの P2 集会で計画された。実行に当たったのは、前記のデレキアイエら三人だったという。テロの目的は、共産党員のしわざと見せかけることにより、イタリア国民の間に反共感情をかき立てることだった。一九七六年七月には、ビットーリオ・オコールシオ検事がネオ・ファシスト「国家前衛軍」と P2 の関係を調査中に機関銃で撃たれて死亡し、ネオ・ファシスト「親秩序」が犯行を認める声明を出した。ファシスト団体の名だけが記憶される事件だが、その実は P2 が検事を「消させた」のである。

(一部引用部はここまでとしておく)

(直下、訳書『法王暗殺』にての p.149 よりの掻い摘まんでの引用をなすとして)

フィナバンクは、マフィアや P2 のダーティな金を洗う巨大な「洗濯機」であり、インモビリアーレ社の一五パーセントを所有するバチカン銀行もその一部だった。イタリアから流出するマフィアの金に便宜を与えたのはバチカン銀行だから、むしろ「洗濯機」の正体はバチカンだったと言ってもいい。シンドナらがブリバータ・フィナンツィア銀行にあるバチカン銀行の口座を利用したことは前述したが、ダーティーな金がフィナバンクに入ってクリーンになるわけである。このルートは

両方向に働き、マフィアはメキシコ、カナダ、米国の金をイタリアに持ち込んでクリーンにするという手口を使っていた。ボルドーニの自供によると、
「カナダとメキシコにいくつもの会社があって、それがマフィア、フリーメーソン、その他の犯罪組織の不正な金を、国境を越えて米国に運び込む。鞆に入った金が届くと、受け入れ会社はそれで州債を買い、フィナバンクに送る。あとは完全にクリーンな金として通用するわけです」

米国のマフィアは、国境を越えて現金を運ぶくらい朝めし前である。その金はインモビリアーレの子会社であるワシントンのエディルセントロ社により州債に変えられ、フィナバンクに送られる。クリーンになった金をイタリアに持ち込むには、バチカン銀行を使えば何の問題もない。

(一部引用部はここまでとしておく)

直近までの引用部にては大要、

「フリーメーソンのロッジ P2 は初期、(表立っては)反共を目的に米国諜報機関の資金が投下されて勢力伸長を助力されていた組織であり、その領袖リーチオ・ジェッリ(フリーメーソンとしてロッジ P2 を設立した男)は脅迫・強請りとワンセットになった手法でメンバーを次々と確保していった。

そのメンバーにはイタリア政財界・メディアの大物が綺羅星のように名を連ね(陸軍司令官ジョバンニ・トリーニ、秘密警察首脳ジュゼッペ・サントピートとジューリオ・グラシーニ、税関長オラーツィ・ジャンニーニ、そのほか閣僚数名、共産党を除く各政党の有力者、将軍三十人、提督八人、新聞社やテレビ局の首脳、カルビやシンドナを含む実業界や金融界のトップという実力者ぞろいと記述)、また、麻薬ビジネスの胴元(独裁政権下でリベラル派を殺すための死の部隊であった暗殺組織「トリプル A」を率いる P2 会員ホセ・ロペス・レガ)も含まれていた。

また、共産主義者の仕業と見せかけて反共主義を煽るとの[名目]で死傷者を多数出したイタリア国内のテロ事件「ら」もジェッリの差し金であるとの証言がなされている(引用元書籍『法王暗殺』には“過去二十年間にイタリアで起こった多くのテロ事件は、もしジェッリが捕って真相を語れば、その多くが解決するはずである。一九六九年ミラノのフォンタナ広場では十六名が死亡。一九七四年ボローニャでは急行列車が爆破され、十二人が死亡。一九八〇年ボローニャ駅の爆発では八十五人が死亡。百八十二人負傷等々…。このボローニャ駅のテロは、ジェッリと喧嘩別れしたネオ・ファシスト、エリーネ・チョリーニの自供によると、一九八〇年四月十一日モンテカルロでの P2 集会で計画された”と記載されている。ジェッリらが同輩の社会の部分主導層を麾下に率いていたユニット(メーソン細胞)は自作自演の爆破テロとの式で 1969 年には 16 人殺した「テロ」を起こし、1974 年には 12 人殺した「テロ」を起こしていたと「される」。それは 1976 年にあってのペナルティーとしてのフリーメーソン本体よりの認証取り消し、そして、1981 年のフリーメーソン本体より正式破門の前のことである)。

のみならず、ジェッリおよびその手の者(ロベルト・カルヴィとミケーネ・シンドナ)はバチカンそのものをマフィアやフリーメーソンのダーティ・マネーを洗浄するための装置として利用するスキーム(細かくも述べれば、[バチカン銀行を資金の移動装置に使いながらも掌握企業の子会社にて米国の州債を購入させダーティ・マネーをロンダリングする]とのやりよう)を構築していた」

と記載されているわけである。

(:尚、といった記述を含む『法王暗殺』の原著 In God's Name に関しては争い

あるところに対する分析を積極的になしているとの書籍ともなり、英文

Wikipedia[In God's Name]項目にて

“ Yallop's book examined many of the inaccurate statements issued by the Vatican in the days after John Paul's death and received international attention, including demands from some senior churchmen for an inquiry into the death itself. ” 「ヤロップ『インゴズズネーム』(邦題は『法王暗殺』となり文藝春秋社より刊行)は法王ヨハネ・パウロの死後、バチカンによって発せられた不正確な声明らを多く検証し、死そのものについての教会高位者よりの追加調査の要請も含めての国際的関心を買うに至ったとの書である」

との記載もなされている。

その点、訳書『法王暗殺』から内容を引いてうえで直近の段にてなしているとの大要表記を読まれたうえで「それでもなお、」『[陰謀論]を展開している』と思われる向きもあるかもしれない(実際、相応の類は同じくもの分野で[陰謀「論」にまでレベル・ダウンした不正確なこと]を述べ、また、そうしたものの放流・撒布でもって本稿のようなものにも色を付けるようなことをやらかしもするだろうと念慮しつつ、そうした読み手胸中につきおもんばかるところではある)。

だが、たかだかのこの段程度の話程度からして
[報道動向・当局動向によって具現化しもしている史実ないし準・史実]
として認知されていることを取り上げ(繰り返すが、ジェッリらやりようは報じられ逮捕状が出されていることである)、そして、にまつわって欧米圏で高い評価を受けている「常識的」ルポライター(デヴィッド・ヤロップ)が述べていることに基づいての話をなしているにすぎない。

そのように強くも断っておく(疑わしきはよく確認されるとよい)。

そうも述べつつ本稿にて延々と指し示してきたことに基づき書いておくと、

- ・「たかがフリーメーソン程度の者達が黒幕である「わけがない」というのが本稿筆者が「当然に」も導出している結論である」
- ・「問題となる力学はフリーメーソン「のような」何でもやると見えもする類を集めての組織・システムの「外側」にあり、フリーメーソンなど所詮はそのための使い捨ての道具にしかすぎないと解されるだけの「具体的材料」が山積している」
- ・「そうしたかたちで具現化している力学は「家畜としての人類に相応の末路を進呈しよう」とのものであること、(ロッジ P2 の「一面では」曖昧模糊とした話とは異なり)、記号論的に「はきと」摘示できるようになっているとのことを事細かに指し示そうと試みているのが本稿である」。

以上のことらの是非を本稿を通じて徹底的に検証いただきたいものではある(そのうえで筆者の言い分を批判したければ批判されるとよかろうと思っている。なれば筆者の望むところである(批判から正しいものを切り分けることができるからである)。につき、相応の類は愚劣・卑劣にも(批判とは本質的に異なる)[貶める]とのことをなすか、あるいは、存在自体を「無きもの」「取るに足らぬもの」にすべくも注力するかのどちらかのことしかなさぬとは思ふ)。

とにかくも、ここまでの内容をもってして、

e2 [イタリアのフリーメーソン、ロッジ P2 には軍諜報組織の主導部や現職国会議員らのイタリアの権力機構を掌握していたとの面々が参加しており、メン

バー僅少の同組織体が白色テロ(反左翼テロ)としての[駅爆破事件](いわゆる[ボローニャ駅爆破テロ事件])で同事件にてイタリアでは多数の死傷者が発生)など複数の偽装テロ(共産主義者に罪をなすりつけるためのテロ)に関与したとのことが露見して問題になったことがある(また、事件に関与したロッジ P2 はメーソンに相応しくはないことをなしたとのことでメーソンから「正式に再破門」されたとのことになっているが、その後発生したロッジ P2 人脈関連の殺人事件「でも」あいもかわらずメーソンの象徴が用いられているとのこと「も」が一同件に関しては稚拙な法螺も流されているものの— 現実にある)。さらには、イタリア(元)首相であるベルルスコーニもその元メンバーであったとのロッジ P2 の首魁であるリーチオ・ジェッリ —米国諜報機関より当初、[反共要員]として助力を受け、麻薬組織やアルゼンチン独裁政権などと強固なつながりを有していたとの政治マフィア— は(逮捕・脱獄を経て)結局は法網をかいくぐり、1996 年にはその前科([自国民を何人も共産主義者の犯行に見せかけての偽装爆破テロで殺してきた]との前科)にも関わらず[ノーベル文学賞]にノミネートされていた。といったところに[インナーサークル]の問題が当然に観念される)

このことの指し示しとした。

([出典\(Source\) 紹介の部 103\(6\)](#)はここまでとする)

ここに至るまで述べてきたこと、[出典\(Source\) 紹介の部 103\(2\)](#)から[出典\(Source\) 紹介の部 103\(6\)](#)にて典拠を挙げて指し示してきたところにつき繰り返すが、映画『ファイト・クラブ』とメーソンの間には次のような側面での(a1⇔a2 から e1⇔e2 との各側面での)対応関係が存する。

(映画『ファイト・クラブ』について指し示せるところとして)

a1 [ファイト・クラブについては秘密主義的組織として邪魔者・秘密漏洩者に対し[死の制裁]を課すとの脅しを[チェス盤紋様の床の場]にてなす組織であると描写されている]

b1 [ファイト・クラブは各都市に支部を持ち、強固な組織基盤を有しているとの描写がなされている]

c1 [ファイト・クラブはありとあらゆる職種にメンバーを擁しており、彼らはテロを黙過するばかりか、促進しているとの描写がなされている]

d1 [ファイト・クラブ成員らはハグ(抱き合い)を頻繁になすと描写されている]

e1 [ファイト・クラブの面々として集まってきた者達の中でも従順性および急進性に特質がある者達を集めてビル爆破計画の実行役に仕立てていたとの描写がなされている(といったところに[インナーサークル]の問題が観念される)]

(フリーメーソンについて指し示せるところとして)

a2 [フリーメーソンは秘密主義的で秘密漏洩者には[死の制裁]の課すとの脅

しがかった誓約を[チェス盤紋様の床の場]にて歴年強いてきた組織である(ただし、そうした[宣誓]のかたちをとる約束事は唯名無実のものにすぎないというのがメーソンインサイダーの外向けの言い分である)]

b2 [フリーメーソンは各都市に支部(交流会館としてのロッジ)を持ち、強固な組織基盤を有している]

c2 [フリーメーソンはありとあらゆる職種にメンバーを擁しており、そうした成員らが[ブラザー]と呼んでの紐帯を保持している]

d2 [フリーメーソンの成員は特定の儀式(マスターメーソン位階への引き上げなど)の後にメンバー同士がハグ(抱き合い)をなすとの組織である]

e2 [イタリアのフリーメーソン、ロッジ P2 には軍諜報組織の主導部や現職国会議員らのイタリアの権力機構を掌握していたとの面々が参加しており、メンバー僅少の同組織体が白色テロ(反左翼テロ)としての[駅爆破事件](いわゆる[ボローニャ駅爆破テロ事件])で同事件にてイタリアでは多数の死傷者が発生)など複数の偽装テロ(共産主義者に罪をなすりつけるためのテロ)に関与したとのことが露見して問題になったことがある(また、事件に関与したロッジ P2 はメーソンに相応しくはないことをなしたとのことでメーソンから「正式に再破門」されたとのことになっているが、その後に発生したロッジ P2 人脈関連の殺人事件「でも」あいもかわらずメーソンの象徴が用いられているとのこと「も」が一同件に関しては稚拙な法螺も流されているもの— 現実にある)。さらには、イタリア(元)首相であるベルルスコーニもその元メンバーであったとのロッジ P2 の首魁であるリーチオ・ジェッリ —米国諜報機関より当初、[反共要員]として助力を受け、麻薬組織やアルゼンチン独裁政権などと強固なつながりを有していたとの政治マフィア— は(逮捕・脱獄を経て)結局は法網をかいぐり、1996年にはその前科([自国民を何人も共産主義者の犯行に見せかけての偽装爆破テロで殺してきた]との前科)にも関わらず[ノーベル文学賞]にノミネートされていた。といったところに [インナーサークル] の問題が当然に観念される]

以上、まとめもして振り返ったところで [ファイト・クラブとフリーメーソンの関係性にまつわる話] にあつての **II.** と振っての段を終える。

ここまできたところで、である。

[[2001年の911の事件の発生] に対する異常異様なる先覚的言及]

をなしている —たとえば、「1999年初出の」映画版での寸刻描写にてワールド・トレード・センターのノースタワーが[ビル連続爆破計画]のターゲットになっていると受け取れる描写がなされもしている一方で「1996年初出の」小説版では高度として現実世界に存在しないような[191階建て]の超高層ビル(911の入れ替えナンバーの三桁階数のビル)が時限爆破対象として描かれもしているといったことがある— とのことを事細やかに出典挙げながら解説してきたとの『ファイト・クラブ』という作品について、同作『ファイト・クラブ』が、

[いかに [フリーメーソンの映画] なのか]

そして、

[同作で描かれるファイト・クラブそれ自体およびファイト・クラブのテロ挙動にて現出するシンボル]

ズムがフリーメーソン・シンボリズムといかに濃厚に接合しているのか、および、その延長線上として何が述べられるのか]

とのことについての指し示しを —I. から V. と振っての流れで— なすとのここ本段にあつての III. と振っての部の内容に続いて入ることとする。

III.

「極めて大きなところとして、」以下、解説していくようなことがある。

まずもって述べるが、映画『ファイト・クラブ』ではわざわざ

[ワールド・トレード・センターのツインタワーの間に付設されていた黄金色のスフィア]

のイミテーションを用意して、それを爆破対象としているとのさまが描かれる(細かくも問題視されるシーンについての紹介を先の出典(Source)紹介の部 102(4)でなしているとおりである)。

その点、ワールド・トレード・センター、そのツインタワーの間に置かれていたスフィアを用意した建築家はバイエルン出身の建築家、フリッツ・ケーニツヒという人間となりもし、そこに見るケーニツヒというのは[王]を意味するドイツ語名詞である(出典として:事実関係が明確な基本的なこととしてすぐに確認できるので出典はウィキペディアよりの抜粋に留めておく。まずもって、英文 Wikipedia[The Sphere] 項目には(先にも引用したところの繰り返しとなることとして) “ The Sphere is a large metallic sculpture **by German sculptor Fritz Koenig**, displayed in Battery Park, New York City, that once stood in the middle of Austin J. Tobin Plaza, the area between the World Trade Center towers in Manhattan. After being recovered from the rubble of the Twin Towers after the September 11 attacks in 2001, the artwork faced an uncertain fate, and it was dismantled into its components. Although it remained structurally intact, it had been visibly damaged by debris from the airliners that were crashed into the buildings and from the collapsing skyscrapers themselves. ” 「スフィアはかつてマンハッタンにてのワールド・トレード・センターのタワーらの間、Austin J. Tobin Plaza にての中央に据え置かれていた、そして、現行、ニューヨークのバッテリーパークにて展示されているドイツ人彫刻家フリッツ・ケーニツヒの手になる巨大な金属製の彫刻となる」(引用部訳はここまでとする)と記載されているとおりである。そして、そこに見るケーニツヒについては英文 Wikipedia[König] 項目に “ König (/ˈkɛnɪç/; German pronunciation: [ˈkøːnɪç] or [ˈkøːnɪç]) is the German word for king. ” 「ケーニツヒは King(王)を意味するドイツ語単語である」と記載されているとおりで、英語のキング、王に相当する語である —筆者を含めて大学で第二外国語としてドイツ語を履修した程度の人間ならばそうもしたぐらいのことは普通に知っていることか、と思う(ケーニヒスベルグという地名が有名なところとしてあるが(現在はロシア領[カリーニングラード])、その意味するところは[王の山]となっているといった按配のことはよく知られている) —)。

また、ケーニツヒ(独逸語における[王])との名の彫刻家が製作した[スフィア]はその名前、そして、その形態ともに

[王権象徴物] ([レガリア] と呼ばれる一群の王権象徴物 / 日本の皇室における権威の象徴、(紛い物の最たるものでも実在や真贋を云々するは忌避されがちな) [三種の神器] のようなもの)

の一つとなっている (: 西洋の王権象徴物(レガリア)は[王杓][宝冠][宝珠]との形態をほぼ定型的にとりもし、それら王権象徴物のうち、宝珠、すなわち、[ソブリン・スフィア]が『ファイト・クラブ』にて登場のスフィアと同様の形態をとる)。

まずもって下の図をご覧頂きたい。



Regalia

→ Globus cruciger
[king (→König)'s orb]



Fountain

spherical, golden, and metallic sculpture



The Sphere (by Fritz Koenig) in Austin J. Tobin Plaza

前掲図にての上の段では王権象徴物の典型例となるものを羅列した図像よりの抜粋をなしている—(具体的には王権象徴物の典型例を挙げたデンマークの王権象徴物(レガリア)として英文 Wikipedia[Danish Crown Regalia]項目にて挙げられているものよりの抜粋をなしている)— わけだが、そこにては宝珠(オーブ)が [グローバス・クルシガー] と呼ばれるものとして主要な王権象徴物の一つとして挙げられている(:それにつき、王権象徴物たる宝珠、オーブたるグローバス・クルシガーについては “ The globus cruciger (Latin, "cross-bearing orb") is an orb (lat. globus) topped (lat. gerere = to wear) with a cross (lat. crux), a Christian symbol of authority used throughout the Middle Ages and even today on coins, iconography and **royal regalia**.” 「ラテン語にて[十字を含んでの球]となるグローバス・クルシガーは十字を上に乗せているとの球体となり、中世を通じ、そして、今日にあつてのコインなどにあつてさえ、図解法および**王権象徴物(レガリア)**にあつての権威にまつわるキリスト教象徴となる」と(頻りに[その程度の媒体]から引用をなすのも何ではあるかとは考えているのだが、ここではそれでは十分であろうと見、抜粋しているとの) 英文 Wikipedia[Globus cruciger]項目にあつて「現行は」解説されているところである)。

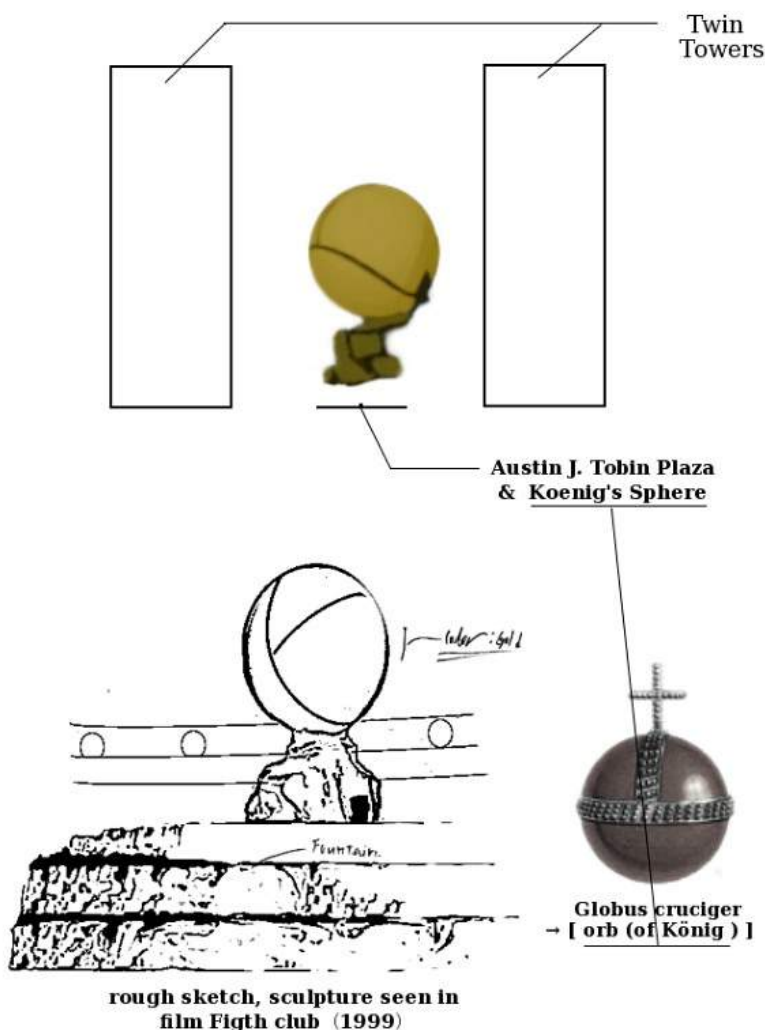
そうしたグローバス・クルシガーは王の宝珠、すなわち、

[ケーニツヒ(先述のようにドイツ語での王)の宝珠(オーブないレスフィア)]

と申し述べられるものとなる。

対して、現実世界ではワールド・トレード・センターにあつて王との意味合いのドイツ語ケーニツヒとの名を有していた彫刻家フリッツ・ケーニツヒのレスフィアが飾られていた(と既に解説している)。そのこと、本稿にての**出典(Source)紹介の部 102(4)**の段でも取り上げたことを再訴求するために挙げているのが[最前にて呈示の前掲図にあつての下の方の部に於ける図像]である。

続けて、下の図をご覧ください。



同図は

〔WTC にてのフリッツ・ケーニツヒのオブジェを巡る位置関係〕

および

〔(本稿にての先の段にても挙げた)映画ファイト・クラブ登場の Project Mayhem で爆破されることになったとのオブジェの再現図〕

および

〔直近呈示した王権象徴物たる Globus cruciger〕

の関係を端的に示すためのものである。

図をもってして一目瞭然か、とは思われるが、映画『ファイト・クラブ』にて登場する露骨なイミテーション・オブジェ —(先述のように「球形にして」「金色の」「噴水の中に据え置かれた」金属製オブジェ)との字面でだけ表しての特色の共通性のみならず視覚的ありようもツインタワー敷設のスフィアと際立っての一致性を呈している(出典(Source)紹介の部 102(4))とのイミテーション・オブジェ— が、と同時に、実体として王権象徴物のイミテーション「とも」なっていること、ご理解いただけるか、とは思う。

以上、表記のように映画『ファイト・クラブ』にて爆破の上、転がされているとの〔宝珠状のもの〕(ワールド・トレード・センターはツインタワーにあって噴水の中に据え置かれているとの式で敷設されていた彫刻家フリッツ・ケーニツヒの手になるザ・スフィアの露骨なイミテーション) は上にて言及のように〔キリストの象徴物(十字架)と紐付けられることもある王権の権威の象徴物〕ともなっているわけだが、さて、本稿前半部にあっては

「『ファイト・クラブ』という映画にそちらイミテーションが登場しているとの〔ザ・スフィア〕というオブジェがワールド・トレード・センターにかつて置かれていた。そちらオブジェ、ザ・スフィアは〔黄金の林檎の象徴物〕としての側面を「歴史的な黄金の林檎の描かれようの問題から」帯びているようなものでもある。そこから「も」ニューヨークが黄金の林檎によって象徴されているとのことが判断できるようになっている」

との指摘を

〔911の事件の露骨なる予言をなしているとの文物 —現実の911の事件が【マンハッタンのビルとペンタゴンが同時多発的に攻撃された事件にしてその後にあつて米軍から炭疽菌が漏出されての付随テロが発生した事件】であつたところを【「マンハッタンのビルが爆破され、ペンタゴンが爆破されるとの筋立てを有し」かつ「米軍から漏出した炭疽菌による災害を描き」かつ「ニューヨークとペンタゴンの象徴を作中、並列させるかたちで頻繁に用いており」かつ「他の911予見事象と接合している」と『ジ・イルミナタス・トリロジー』という文物】— 〕

との兼ね合いで —映画『ファイト・クラブ』については後の段にて解説をなすとしたうえでのことながらも— 本稿の先だつての段でなしていた(同じくものことは紙幅にしてかなり廻りもしての段、本稿の出典(Source)紹介の部 37-5)に続いての段にて指摘していたこととなる)。

同じくもの先だつての段にての指摘、すなわち、

「映画『ファイト・クラブ』に登場する〔スフィアというオブジェ(のイミテーション)〕は〔黄金の林檎〕と(歴史的描かれようの問題から)一致性を呈するものである」

との指摘について —長くもなるところながら— 振り返りもしての表記をここ本段にてなしておくこととする。

というのも、

「(ワールド・トレード・センターにて敷設されていた、そして、かつもつてして、映画『ファイト・クラブ』にその露骨なイミテーションが登場していたとのオブジェ、フリッツ・ケーニツヒの手になるザ・スフィアがそれに類するものとなっていると指摘するところの)【黄金の林檎】がその第

11 番目の功業の目標物となっているとの【ヘラクレスの功業】と【911 の事件】の間には多重的なる結びつきが摘示できるようになっている

とのが [本稿にあっての指し示しの重要なところ] であると重ね重ね指摘してきただけのことがあるからである (: そうもしたこと、[本稿にあっての指し示しの重要なところ] が一体全体、いかようなることなのかは「本稿の全体的検討から判断いただきたい」とここでは申し述べるに留め、とにかくも、重要な話であるために表記のこと、[映画『ファイト・クラブ』に登場する [スフィアというオブジェ(のイミテーション)] は[黄金の林檎]と(歴史的描かれようの問題から) 一致性を呈するものである] とのことについての繰り返し表記を以下、なしておくこととする)。

以上申し述べたうえで本稿の前半部にてなしていた説明を振り返りもしての部に直下、入ることとする。

以下、「長くもなるも、」の振り返り表記部とする

「(まずもってしてそこから取り上げるが)ビッグ・アップルことニューヨークには【エリス島】という島が包摂されている。その場、【エリス島】を介して(結果的に)[不和]をもたらすことになってしまった多くの移民がアメリカに流れ込んだとの歴史的背景がある——(和文ウィキペディア[エリス島]項目にての冒頭部概説部にての「現行」記載内容を引用すれば(以下、引用なすところとして) “エリス島 (Ellis Island) は、アメリカ合衆国、ニューヨーク湾内にある島。アメリカの文化遺産である。19 世紀後半から 60 年あまりのあいだ、ヨーロッパからの移民は必ずこの島からアメリカへ入国した。移民たちによって『希望の島』(Island of Hope) または『嘆きの島』(Island of Tears) と呼ばれてきた。約 1200 万人から 1700 万人にのぼる移民がエリス島を通過し、アメリカ人の 5 人に 2 人が、エリス島を通過してきた移民を祖先にもつと言われている” (引用部はここまでとする) と表記されているような歴史的背景がある——。

そうした【エリス島】という名称は (エリス島を介してアメリカに流れ込んだ移民たちのように) [人種の坩堝]での不和・不調和を体現するが如く女神エリス、[黄金の林檎の投げ手]として神話に登場するとの女神エリスのことを名称として「想起」させる名前の島であるとも述べられる——エリス神についてとりあえずも英文 Wikipedia [Apple of Discord] 項目にての現行記載内容より引けば、“An apple of discord is a reference to the Golden Apple of Discord (Greek: μήλον τῆς Ἐριδος) on which, according to Greek mythology, the goddess Eris (Gr. Ἐρις, "Strife") inscribed "to the fairest" and tossed in the midst of the feast of the gods at the wedding of Peleus and Thetis,” (訳として)「不和の林檎は[不和の黄金の林檎] (希臘語表記: μήλον τῆς Ἐριδος) として言及なされるものとなり、ギリシャ神話にあっては女神エリス (希臘語表記にして Ἐρις、その意は[争乱・不和]) が「最も美しき者に。」と書き入れてペレスとテティスの婚礼にあって馳せ参じていた神々の祝宴の舞台に投げ込んだとのものである」と記載されているようにエリス神は[黄金の林檎の投げ手]として神話に登場する女神である—— (: 尚、【エリス島】の名称は額面上はその島の権利者であったというサミュエル・エリス (Samuel Ellis) 氏から命名された、女神エリス Eris (ギリシャ語綴りでは Ἐρις) とは英文綴りが微妙に異なる向きから命名されたとされており、そうした表向きの命名理由に女神エリスとの関係性を見出すことにはできない) 」

「(以上のこと、【エリス島】との名称から【女神エリス】の名が想起されるとのことについて【「想起される」との印象論】で話が済まぬとのことに通ずる点として) 【エリス島】に対するフェリーが出ているニューヨークの一区画、バッテリーパークに[ツインタワーの間に置かれていたスフィアという黄金の球形オブジェの修復物]が(額面上は

911の被害者を悼むとの名目にて)「記念碑」として安置されているとのが「ある」——(英文 Wikipedia[The Sphere]項目にて “ The Sphere is a large metallic sculpture by German sculptor Fritz Koenig, displayed in Battery Park, New York City, that once stood in the middle of Austin J. Tobin Plaza, the area between the World Trade Center towers in Manhattan. ” (訳として)「スフィアはかつてマンハッタンにてのワールド・トレード・センターのタワーらの間、Austin J. Tobin Plaza (訳注:ニューヨーク・ニュージャージー港湾会社の重役 Austin Joseph Tobin の名より付けられたワールド・トレード・センターにてのツインタワーの間に存在していた一区画で2001年の事件で破壊された)の中央に立っていた、そして、現行、ニューヨークのバッテリーパークにて展示されているとのドイツ人彫刻家フリッツ・ケーニッヒの手になる巨大な金属製の彫刻となる」と記載されているとおりでである)——。その「スフィア」というオブジェ、ありし目にツインタワーに設置されていたオブジェが(女神エリスが騒乱の具としたとギリシャ神話に伝わる)「黄金の林檎」の体現物に露骨に仮託されていると判じられるだけの事由がある。ひとつにそれは「黄金の林檎の歴史的描かれよう」および「関連するところのニューヨークの地理的アイコン」より判断できるとのこととなる——【「黄金の林檎」と「(エリス島からのフェリーが巡航している)バッテリーパークに据え置かれるに至っているザ・スフィア」の視覚的接続性】や【その他の意でのニューヨークと黄金の林檎の接続性】については続いでる図解部を参照のこと——」

(直近言及のこと、黄金の林檎とバッテリーパーク安置のオブジェたるスフィアが「ニューヨークの「諸所」象徴的アイコンの問題」にも通ずる式で接合していることに関しての委細に踏み込んでの図解部として)



Statue of Liberty (illustrated in 1885)



Castello Plan (1660)

前掲図は

[[ワールド・トレード・センターで焼かれた特定オブジェ]が[エリス島] (および[エリス島に近接してのリバティ・アイランドに設置の自由の女神像])と[バッテリーパーク]を通じて縁深いものとなっていることを示さんとすべくも作成した図]

である(：図の作成の材としては英文ウィキペディアにてのマンハッタン関連項目掲載の図像ら —19世紀のマンハッタン鳥瞰図および同19世紀の自由の女神像ありようを描いての新聞紙掲載図、そして、17世紀のオランダ植民地時代のマンハッタン境界地図らを含めての図ら— を用いている)。

図内にも矢印にて示しているところだが、エリス島 Ellis Island (および同島に近接しての自由の女神設置のリバティ・アイランド Liberty Island) に向けて[バッテリーパーク]、先にワールド・トレード・センターで焼かれたスフィアというオブジェの残骸が展示されているとのバッテリーパークから始発を見てのフェリーが出ているとのことがある(：見解の相違など生じえない[事実]であり、かつ、世間で広くも認知されているようなところであるのでその程度の媒体よりの引用に留めるが、和文ウィキペディア[バッテリーパーク]項目にて“バッテリー・パーク (英語: Battery Park) は、ニューヨーク港に面するニューヨーク市、マンハッタン島南端のバッテリーに位置する25エーカー (10ヘクタール) の公共公園である。バッテリーは、砲台の名称であり、都市が建設されて数年後に、これからの町を守るため、設置された。…(中略)…海岸からは、自由の女神像とエリス島へ向かうクルーズ・フェリーが出港している。公園にはさらに、第二次世界大戦中に西大西洋の沿岸で死亡したアメリカ海軍兵を追悼するイースト・コースト・メモリアルなど、いくつかの記念碑がある”(引用部はここまでとする)とあるとおりである)。

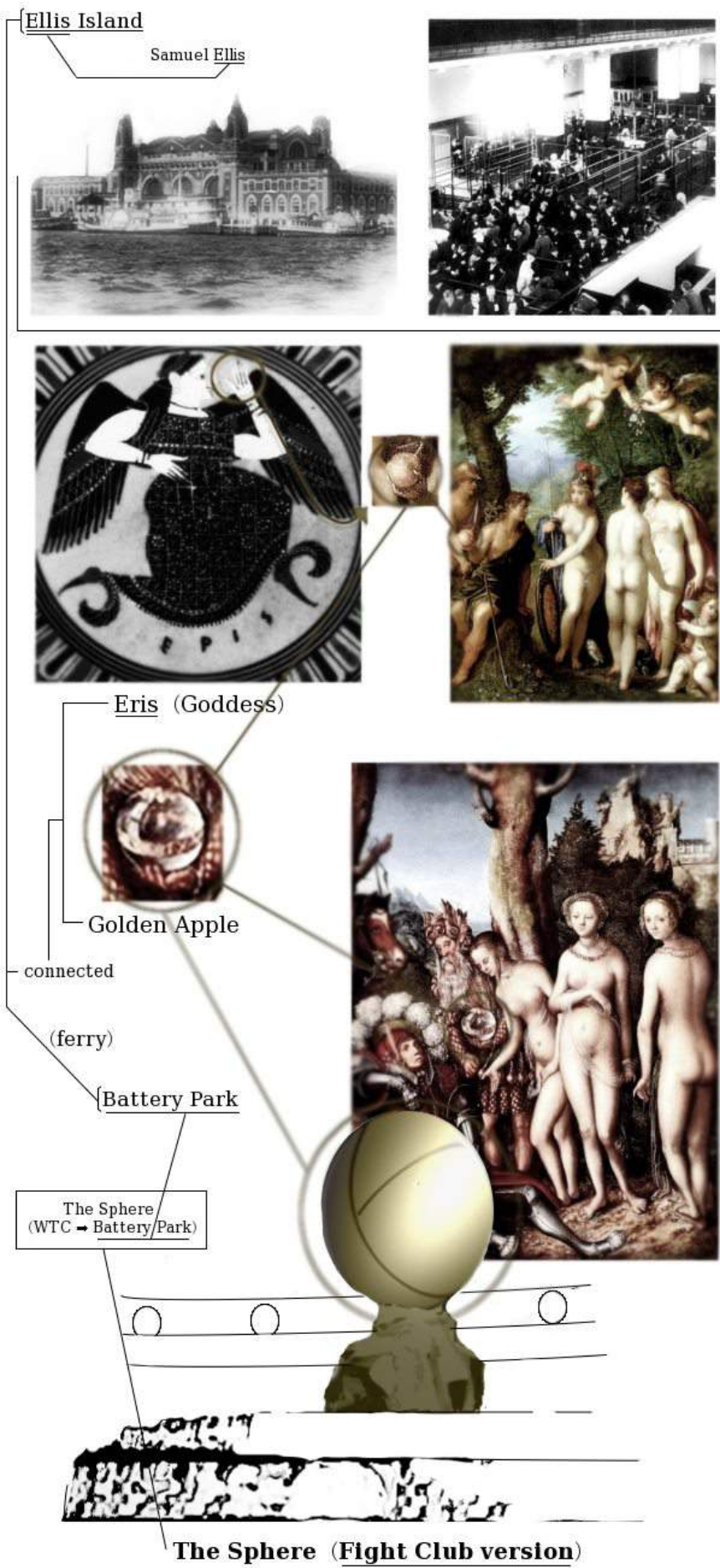
繰り返すが、そのバッテリー・パーク(上掲図では英文 Wikipedia[History of New York City]項目および同[Manhattan]項目にそれぞれ掲載されている図葉でもってして、そもそのニューヨークの植民都市化の草創期および19世紀初頭のそのありようを提示しているとのところのニューヨーク「南端」の一区画)、要するに、

[エリス島と自由の女神像(の据え置かれたリバティ島)とそれぞれにフェリー航路にて結線させられている場]

にてワールド・トレード・センターのツインタワーの間に配置された黄金色のスフィアが焼かれた後、修復を見、安置されるに至ったとの背景がある ——先に英文 Wikipeda[The Sphere]項目より“**The Sphere is a large metallic sculpture by German sculptor Fritz Koenig, displayed in Battery Park, New York City, that once stood in the middle of Austin J. Tobin Plaza, the area between the World Trade Center towers in Manhattan.**”(訳として)「スフィアはかつてマンハッタンにてのワールド・トレード・センターのタワーらの間、Austin J. Tobin Plaza の中央に立っていた、そして、現行、ニューヨークのバッテリーパークにて展示されているとのドイツ人彫刻家フリッツ・ケーニッヒの手になる巨大な金属製の彫刻となる」との文言を引いたとおりである——。

「問題なのは、」そのようにバッテリー・パーク([エリス島]に向けてのフェリーが巡航しているとのニューヨークはマンハッタン島南端に位置するバッテリー・パーク)に安置されるに至った金色のザ・スフィアが[黄金の林檎]と[同

文のもの]と定置できるようになっているとのことである。 どういうことか。
 については続いて図を付しながらも指摘するような関係性が成立しているとの
 ことがあるからそうも述べるのである。



図の最上段では【エリス島外観】および【(エリス島が結果的にそうなったところとして[不和の象徴]とも通ずる上での)エリス島を介して大量の移民が米国に流れていくありさま】を写し撮った写真を挙げている。

そちら最上段のすぐ下の段(中段)の図は遺物 —古代ギリシャ・アッティカの遺物として英文 Wikipedia[Eris]項目に掲載されている遺物— にみとめられる不和の女神エリス —[黄金の林檎の投下による不和の誘発]との役割を帯びた女神— の似姿およびエリス神によって投下された黄金の林檎(美の神の象徴としての字句が綴られていた林檎)を巡っての女神らの間で執り行われることになった美人コンテストの一幕を描いた絵画となる。

さらに下つての段(下段)にて呈示の図らはルネッサンス期の巨匠ルーカス・クラナッハ・エルダーの16世紀絵画、

[Judgement of Paris との画題の絵画(女神エリスの林檎を巡る美人投票にトロイアの皇子としての出自を持つパリスが招聘された一幕を描いての1512年から1514年にかけて作成の画/無論、英文 Wikipedia などから簡単に捕捉できるとの絵画)]

となる。

そして、同じくも下段にて呈示しているのは

[映画『ファイト・クラブ』に登場するオブジェ・スフィア(ツインタワー合間に置かれていたオブジェ)の露骨なるイミテーションを再現しての図]

となる。

以上、各段に分けて呈示の図らからお分かりいただけようことか、とは思うが、映画『ファイト・クラブ』にて登場のスフィア・イミテーションはルネッサンス期の特定絵画にて「黄金の林檎」(女神エリスと紐づく伝承上の果実)として描かれていたものとそっくりの外観を呈しているとのことがある。

上の図解部に見るように

[ルネッサンス期の巨匠ルーカス・クラナッハ・エルダーの手になる絵画 —三人の女神が[最高の美神の証]たる黄金の林檎を巡っての美人コンテストにトロイア皇子パリスが審判役として参画させられたとの筋立てからなるパリスの審判、ジャッジメント・オブ・パリス(パリスの審判)をモチーフとした絵画— に見る黄金の林檎]

が映画『ファイト・クラブ』に登場した金色の球形オブジェがワールド・トレード・センターの合間に据え置かれたザ・スフィアというオブジェの露骨なる模造物(映画に登場のイミテーション)と視覚的そっくりさんとなっている(のが問題になる)。

そして、(繰り返すも)、現実世界ではツインタワーの間で焼かれたオブジェたるスフィアがバッテリーパークに後に安置されることになったとのことがある。そのバッテリーパーク(先掲の絵画に見るように黄金の林檎の歴史的描画形態と通ずるオブジェが据え置かれている一区画)よりエリス島 —黄金の林檎を投げた女神エリスの名を想起させる島— に向けてのフェリーが出ているのであるから、「まずもってそこからして」黄金の林檎と女神エリス(黄金の林檎を争乱の具とした不和の女神)とニューヨーク(ビッグ・アップル)の関係性が観念されることになる。

話はそれにとどまらない。

バッテリー・パークからエリス・アイランドと同様にそこに向けての船が出ているとの一区画たるリヴァティ島、そこに存在する[自由の女神]像は

[黄金色を呈しての松明を掲げている存在]

となっているとのことも着目に値することとなる ——たとえば和文 Wikipedia [自由の女神像 (ニューヨーク)]項目にあつて(現行記載を引用するところとして)右手には純金で形作られた炎を擁するたいまつを空高く掲げ、左手にはアメリカ合衆国の独立記念日である「1776年7月4日」とフランス革命勃発(バスティーユ襲撃)の日である「1789年7月14日」と、ローマ数字で刻印された銘板を持っている(引用部はここまでとする)と記載されているところである——。

そして、同・自由の女神像とは

[足下に鎖が描かれているとの彫像]

でもある ——英文 Wikipedia[Statue of Liberty]項目にあつての冒頭部に “The statue is of a robed female figure representing Libertas, the Roman goddess of freedom, who bears a torch and a tabula ansata (a tablet evoking the law) upon which is inscribed the date of the American Declaration of Independence, July 4, 1776. **A broken chain lies at her feet.** ” と記載されているとおりでである——。

そうした[黄金色を呈しての松明を掲げている存在]であり、また、[足下に鎖が描かれているとの彫像]でもあるとの【自由の女神像】と同様に[黄金の炎]を掲げているとの存在がニューヨークはマンハッタン島に見てとれ、それは、(唐突とはなるが)、

[ニューヨークのロックフェラーセンターに据え置かれているプロメテウス像]

となる ——ニューヨークのロックフェラーセンターに置かれているプロメテウス像、米国人彫刻家 Paul Manship (ポール・マンシップ)の手になる作品がいれば[黄金の松明]を掲げるが如く存在であるとのことについては例えば、英文 Wikipedia[Prometheus (Manship)]項目に「現行」掲載されている同彫像の似姿を見れば、理解できることであろう(全身、金色を呈するとのブロンズ像が全容と同様に金色の炎を手に持っている似姿を見れば、理解できることであろう)——。

そして、神話が語るプロメテウスというのは

[足下に引きちぎられた鎖が配されている自由の女神像よろしく「鎖で繋がれるが如く状況より解放された」存在]

である ——目立つところでは英文 Wikipeda[Prometheus]項目にても “Prometheus, in eternal punishment, **is chained to a rock in the Caucasus, Kazbek Mountain**, where his liver is eaten daily by an eagle, ” 「プロメテウスは永遠の責め苦としてコーカサスの岩に鎖で縛り付けられ、そこにて日々、自身の肝臓を鷲に啄(ついで)まれている」との通りの伝承が伝存している——。

以上指摘したうえで申し述べるが、神話が語るプロメテウスをかたどりもしている[ニューヨーク据え置き(直近言及)の黄金の火を掲げる彫像]自体には鎖は描かれて「いない」のであるが、プロメテウス像が飾られているのと同じ場、ニューヨークにてのロックフェラーセンターに神話上、プロメテウスの兄弟との設定の

[アトラス ATLAS] 像

が —彫刻家 Lee Lawrie(リー・ローリー)の手になる作品として— 飾られていることが問題となると申し述べたい(:英文 Wikipedia[Rockefeller Center]項目にての[Center art]の節の「現行の」記載内容より引用なせば、
“Sculptor Lee Lawrie contributed the largest number of individual pieces — twelve — including the statue of Atlas facing Fifth Avenue and the conspicuous friezes above the main entrance to the RCA Building. Paul Manship's highly recognizable bronze gilded statue of the Greek legend of the Titan Prometheus recumbent, bringing fire to mankind, features prominently in the sunken plaza at the front of 30 Rockefeller Plaza.” (訳として)「彫刻家リー・ローリーは五番街に面したアトラス像およびレイディオ・コーポレーション・オブ・アメリカビル(別名 GEビルディング)正面通用口上部のフリーズ(装飾付壁面)作品を含む12の個人的作品を —同センターにての芸術作品として最も多いところとして— ロックフェラー・センターにもたらした。ポール・マンシップによる極めて目立つ黄銅にて箔付けされ、人類に与えるべくもの火をもっているとの横たわるタイタン・プロメテウスのギリシャ神話に依拠しての像はロックフェラー広場30号(GEビルディング)正面の落ちこんだ一画にて際立っての色合いを付している」(訳を付しての引用部はここまでとしておく)とあるとおりである)。

そのアトラス像の[アトラス]とは —同じくものは後の段にて傳承上の典拠を細かくも挙げることになるが— 、

[ヘラクレスの11番目の冒険にて黄金の林檎 —いいだろうか、ここにて問題視している[黄金の林檎]である— の所在を知る者として登場してくるプロメテウスの兄弟にあたる巨人]

にして、かつもって、

[[プロメテウス]本人がヘラクレス第11功業にてヘラクレスに言い含め、「彼に会うように、」との進言をなしたところの巨人]

として神話が語り継ぐ存在でもある(:同点については本稿にての他所、**出典**(Source)紹介の部39でギリシャ神話エピソードとしての出典紹介をなしている)。

といった、たかだか皮相的な側面、順序を多少たがえてまとめた表記をなせば、

[ニューヨークこと[ビッグ・アップル](巨大なる林檎)の守護神とでもいった位置付けの【自由の女神像】(リヴァティール島安置の女神像)は[足下にちぎられた鎖]が配せられての存在にして、なおかつ、[黄金の松明]を掲げる存在となっている]

⇒

[ニューヨークのランドマークとなっているロックフェラーセンターに据え置かれているプロメテウス像は[黄金の炎]を掲げる存在であるが、

そちらプロメテウスはギリシャ神話にて[ヘラクレスより鎖から解放された存在]と伝わっており(従って【プロメテウス】と【自由の女神像】が[マンハッタンのアイコン][黄金の火を掲げる存在][鎖より解放された存在]との式で結びつくようになっている)、なおかつ、同プロメテウスはヘラクレスに巨人アトラスから[黄金の林檎]の在り処を訊くようにと進言した存在ともなっている(そして、【ニューヨークのランドマークたるプロメテウス像】と同様に【プロメテウスが彼に会うようにとヘラクレスに勧めた存在、黄金の林檎の在り処を知る存在である巨人アトラス(プロメテウスの兄弟にあたる巨人)の彫像】もがロックフェラー・センターには据え置かれている)]

⇒

[[黄金の林檎]を投げた不和の女神の名は[エリス]となるのだが、その女神エリスと綴りはともかくも発音が同じであるとの著名な島が存在しており、そちらが大量の移民が米国に流入するうえでの拠点にして関門となっていたとのビッグ・アップルことニューヨークのエリス・アイランド(常識上の話ではその島のかつてのオーナーがサミュエル・エリスなる人物であったからそのような名前になっているとの島)となる。その[エリス島]に向けての定期便が[自由の女神像の据え置かれた一画]に向けての定期便と同様に運航を見ているとの場がニューヨークの南端バッテリー・パークとなり、そちら([エリス島]と[自由の女神の島]を結びつける場たる)バッテリー公園にてワールド・トレード・センターにあって911の事件で焼かれたありし日の黄金色のオブジェ、[ザ・スフィア]が安置されるようになったとのことがある。そして、映画『ファイト・クラブ』にもそのスフィアの露骨なるイミテーションが登場を見ており、こともあろうにそちらスフィア(イミテーション)との目立っての構造的近似物がルネサンス期特定絵画で[黄金の林檎]に仮託されているとのことがある]

との事由から見て「も」ビッグ・アップルことニューヨークが[黄金の林檎]と結びつけられているとの物言いがなせるように「なっている」——※【バッテリー・パークよりの(女神エリスと同文の響きの)エリス島へのフェリーの巡航】／【バッテリー・パークにおける黄金の林檎の歴史的具現化形態に通ずるオブジェ(ザ・スフィア)の据え置き】／【バッテリー・パークよりの自由の女神像(直上既述のようにマンハッタン・アイコンとしてプロメテウスに結びつく存在)が屹立するリバティ島へのフェリーの巡航】との各観点から[ニューヨークと[女神エリスの手管にしてヘラクレス第11功業の目標物である黄金の林檎]との結びつき]が観念されることになる、ということである。そして、判断事由はここに述べたことに留まらず「他にも」複数ある。そのように述べたうえで書くが、ここで引き合いに出しているとの極々一面的な判断事由らからしてこの世界では「どういうわけなのか」誰も指摘しようとしないとのこととなる(そこからして気付いている向きがあるかどうかは分からないが、この世界の限界領域にまつわることに関しては根拠なき稚拙な憶説・妄説を平然と鼓吹する人間(いわばもの屑か糸繰り人形であろう)が数多いる一方できちんとした論拠を伴っていることらでもそれが[ある程度の複雑性]を帯びだすと、たとえば、判断のためのプロセスが階層的になるとそのことを指摘しようとする人間が途端に[いなくなる]とのことがある)。同じくものことに気付いている人間はニューヨーカーにして、なおかつ、神話関連知識豊富な向きであるとの人間ならば、普通ならば部分的にいそうであるようにとれるのに、(再強調して)、「どういうわけなのか」誰もそのような指摘を具象論としてなそうとしないとのこととなって

いる(:性質の悪い日付け偽装の紛い物ら、[馬鹿話]を広めんとするが如くの媒体なぞが相応の程度・水準の人間らによるところの手仕事、誰がみようと[どぎつさ]につき察しがつくと愚昧さが際立った劣化物としてこれより登場する可能性もあることか、と懸念するところであるが(幾点かそういう媒体が[頭の中身が「できあがった」手合い]によって捏造画像などを伴いつつもの紛いものの陰謀論サイトが英語圏にて流布されている、手繰られてであろう、検索エンジンなどにて目立って映りやすきところとして流布されだしているとのこと「も」本稿筆者は捕捉している)、現況情報流通動態を見る限りは「どういうわけなのか」誰も同じくものことまでの呈示の挙を(筆者を除き)見せていない)——。

(図解剖終端)

以上のような論拠だけでなく、これより後の段にあつて紹介することになる[他の予見事例ら]のありようなどのこともあるため、筆者としては「当然に」ニューヨークは黄金の林檎と結びつけられると指摘する次第である。

以上、振り返り表記の部とする

(最初の「長くもなつての」振り返つての部の内容をも顧慮して述べる所として)

さて、『ファイト・クラブ』という映画作品は実在のオブジェ[ザ・スフィア](ニューヨークのツインタワーの合間に置かれていたオブジェ)に対するものとしてわざわざその精巧なイミテーションを構築して、それを爆破、次いで、転がすとの描写を劇中にて込めることで

[王という意味の姓を持つ彫刻家(フリッツ・「ケーニツヒ」)が製作した王権象徴物[宝珠]と結びつくオブジェ(ザ・スフィア)を爆破、次いで、転がすこと]

[黄金の林檎にも仮託されてきた宝珠を爆破、次いで、転がすこと(尚、本稿にての**出典(Source)紹介の部 39**でも伝承上の典拠を細かくも挙げているところとして[黄金の林檎が女神エリスによって転がされる]ことでトロイア内破に至ったトロイア戦争の勃発を見たとの伝承が伝存しているとのことがある)]

を示していたが如く映画であるともとらえられるようになっているわけだが、フリーメーソンには

[王権象徴物や教皇権の象徴物(近代以前の旧制秩序の象徴物)としての冠(かんむり)を潰す儀式]

が沿革上、存在しているとされることが —海外では教皇・王権象徴物に対するフリーメーソンへの態度をよくも示すものとして比較的知られているところとして— 「ある」とされる。

以下、そのことの典拠を挙げる。

SOURCE

104



Cimabue's Celebrated Madonna (1280-85)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典(Source)紹介の部 104 にあつては

[フリーメーソンにあつては【王権象徴物や教皇権の象徴物(近代以前の旧制秩序の象徴物)としての冠(かんむり)を潰す儀式】が執り行なわれている(とされる)]

とのことの典拠を挙げることにする。

まずもって[その程度の媒体]よりの引用から手始めになすとして、現行、和文 Wikipedia[フリーメーソン]項目にての[階級]の節には(以下、引用するところとして) “たとえば、ある階級の儀式には、バチカンの教皇の帽子やヨーロッパの王様の王冠を模した帽子を踏みつぶすというものがあり、教皇権や王権との対立の歴史を物語っている” (引用部はここまでとする) と記載されているとのことがある(日本語版ウィキペディアの出典は宝島という相応の体裁の雑誌媒体の企画特集に依拠してのものであるので、無論、それだけでは典拠としての用をなさないか、とも思う)。

対して、英文 Wikipedia[Knight Kadosh] (カドシュの騎士) 項目にては同じくものことにつき[藪の中]といった書きようで次のような記載がなされている。以下のようなかたちにて、である。

(直下、英文 Wikipedia[Knight Kadosh] (カドシュの騎士) 項目よりの引用をなすとして)

The Knight Kadosh is a Freemasonic degree or ceremony of initiation

performed by certain branches of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemason. [. . .] The Knight Kadosh degree is occasionally accused of being anti-Catholic. **The 1918 edition of the Catholic Encyclopedia stated that, in the ceremony in use in the Southern Jurisdiction of the Ancient and Accepted Scottish Rite in the United States, purported to have been written by Albert Pike, the Papal tiara is trampled during the initiation.** This allegation does not appear in any subsequent editions of the Catholic Encyclopedia, although it was repeated by Father William Saunders in the Arlington Catholic Herald in 1996. Neither the Catholic Encyclopedia's nor Father Saunders' account agrees with Pike's earliest version of the ritual, which includes neither trampling or stabbing a skull and no mention of papal tiaras at all. However, **this earliest Pike revision of the Scottish Rite degree rituals, publicly available as "The Magnum Opus or Great Work," was not adopted by the Rite's Supreme Council for the Southern Jurisdiction of the United States and thus was never practiced in that jurisdiction or any other Scottish Rite jurisdiction recognized by it. Whether these elements are included in the current official version of the ritual or in earlier official versions is not disclosed to non-members.**

(訳として)

「[カドシュの騎士] (訳注:フリーメーソンの 30 階級のことを指す) への儀礼は [古代の、そして、認証されたスコティッシュ位階] の特定支部らによって実施されているものである。

…(中略)…

カドシュの騎士位階の儀礼はしばしば「反カトリック的」と批判されている。**1918 年の版のカトリック・エンサイクロペディアでは米国にての [古代の認証されたスコティッシュ位階] の南部管轄にての儀礼使用にて、アルバート・パイク** (訳注:有名な十九世紀の大物フリーメーソンのことを指す。アルバート・パイクについては本稿の先の段でもその著書での申しようを引いている) **によって書かれ意味されているところとして、**
[教皇の三重冠(ティアラ)が儀礼]
の際に踏みつぶされるとの言明がなされている。

その申しようは 1996 年にてのアーリントン・カトリック・ヘラルドにてのウィリアム・ソンドース神父によって繰り返されているところとなっているが、これは続いでる版のカトリック・エンサイクロペディアにてのどの版にてにも見られることがなかったとの断言ありようである。カトリック・エンサイクロペディアおよびソンドース神父の説明は「頭蓋を踏みつけること、突き刺すことに言及していることもなく、また、教皇の三重冠に対する言及をなんらなしていない」とのアルバート・パイクの最も初期の儀式にまつわる版とも一致するものではない (訳注:確かにアルバート・パイクの著作それ自体には王権王冠・教皇宝冠に対する抗意の意は見てとれてもそれを踏みつぶすとの明示的言及はないように受け取れる。だが、ここにて引用なしているような現行の英文ウィキペディア記載には「文献的事実」の問題を無視しての欺瞞性が感じさせられるところが他にある。すなわち、[アルバート・パイク構築儀礼は —これよりその内容を問題視するところとして— 教皇や王権の冠らの踏みつぶしを含む] ようにも解される 19 世紀後半から 20 世紀初頭にあつてのメーソンら証言が古書記述 (続いてそこよりの引用をなすとの古書) として残置を見ているとのことがあるからである)。

さらにもって、しかしながらも、のこととして、**この最も初期のパイクのスコティッシュ位階の儀礼らにまつわる修正版は —公にて [マグナム・オプス] ないし (その英語表記である) [偉大な仕事] としてアクセス可能となっているところのものだが— 合衆国南部にての儀礼最高評議会にて採用されているものでは**

なく、また、そこにて認証されている他のいかなるスコッチ位階の管轄にても認証されているものでは「なかった」。そうした要素が現在の儀式の公式手順やそれより遡っての公式手順に含まれていようといなかろうと、それらはメーソンのメンバーに開示されるようなものでもない」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上のように

「フリーメーソンが教皇の冠を潰すというのは藪の中(真偽不明)のこと」

といったこと (また、それと同時に、1918年のカトリック・エンサイクロペディア内の言及に留まることにすぎないとの心証を惹起するようなこと) が英文 Wikipedia などには書かれているわけだが、オカルト運動を推進したことでよく知られる Freemason のアーサー・エドワード・ウェイト (Arthur Edward Waite) の手になるところとして 1911 年に世に出た書籍である、

The Secret Tradition in Freemasonry (二巻構成)

との著作やフリーメーソン・インサイダーとしてのメーソン著作著述家として知られるアルバート・マッキー (Albert Mackey) によって 19 世紀後半に初版刊行されている、

Encyclopedia of Freemasonry

といった著作ら、書籍公開ページ経由などでオンライン上より英文 Google 検索なしで確認できるところの著作らにあつてはこれより抜粋するとおりの王冠や教皇冠踏みつけにまつわる申しようが「そういうことがある」との式でなされてもおり、アルバート・パイク申しよう — 王冠や教皇冠を破壊して然るべき対象としての観念を表しているパイク著書 *Moral and Dogma* 内の申しよう (“ Thus the Order of Knights of the Temple was at its very origin devoted to the cause of opposition to the tiara of Rome and the crowns of Kings, and the Apostolate of Kabalistic Gnosticism was vested in its chiefs. ” 「このようにテンプル騎士団位階はその本質的な起源として教皇の宝冠、そして、王らの王冠に対する反抗の因に帰せられるとのものであり、そして、カバラにおけるグノーシス主義的なる使徒の持続的興味を中心にあるのである」といった申しよう) — に対応しもするとのかたちで

[正当ではない言い分であるが、王冠・宝冠を踏みつぶすが如く思潮・儀式動向がフリーメーソンにはある]

とのことが推し量れるようになっている。

疑わしきは以下、引用部を参照されたい。

(直下、学究系フリーメーソンでありもしたアルバート・マッキーの *Encyclopedia of Freemasonry* (1873-1878 年に原版が世に出ている文書) の流通版 — *Encyclopedia Of Freemasonry (Extended Annotated Edition)*) との題でオンライン書店などで販売されている版にして同じくもオンライン上よりそちら記述が確認できるようになっている版 — よりの引用をなすとして)

The Kadosh (thirtieth degree), trampling on the papal tiara and the royal crown, is destined to wreak a just vengeance on these "high criminals" for the murder of Molay [128] and "as the apostle of truth and the rights of man" [129] to deliver mankind "from the bondage of Despotism and the thralldom of spiritual Tyranny".[130] "In most rituals of this degree everything breathes vengeance" against religious and political "Despotism". [131] Thus Masonic symbols are said to be "radiant of ideas, which should

penetrate the soul of every Mason and by clearly reflected in his character and conduct,till he become a pillar of strength to the fraternity".[132] "There is no iota of Masonic Ritual",adds the "Voice" of Chicago,"which is void of significance".[133] These interpretations,it is true,are not officially adopted in Anglo-American craft rituals; but they appear in fully authorized,though not the only ones authorized even by its system and by the first two articles of the "Old Charge"(1723),which contains the fundamental law of Freemasonry. As to the unsectarian character of Masonry and its symbolism, Pike justly remarks "Masonry propagates no creed,except its own most simple and sublime one taught by Nature and Reason.There has never been a false Religion on the world. The permanent on universal revelation is written in visible Nature and explained by the Reason and is completed by the wise analogies of faith.There is but one true religion,one dogma,one legitimate belief"

(補いつつも訳すところとして)

「カドシュ(第30位階)、

「教皇の冠と王室王冠を踏みつける」

との(語られるところの)同位階やりようはモレー (訳注:一説にはフリーメーソンの始祖との説がメーソン関係者によって重んじられているテンプル騎士団の総長ジャック・ド・モレーのこと/同ド・モレーは教皇とも気脈を通じていたフランス王フィリップ4世の謀略によって焚刑に処せられたとの背景がある) の殺害に対する正当なる復讐を「高い身分の罪人ら」に加えようとのものであり、そして、「真実および人間の権利の使徒」として人間を専制の頸木および精神の奴隸制から解放するためになされるとのものである。

この位階の大部分の儀式は宗教的および政治的専制に対しての復讐を吐露しているとのものとなる。

このようにメーソンのシンボルは全メーソンの魂を貫くべきアイディアの光放つ放射物となると言われるものであり、そして、明らかに彼が友愛団の[剛毅の柱] (訳注:ピラー・オブ・ストレングス、メーソンのシンボリズムの一をなすもの)となるまで全メーソンの個性・行いを反映してのものとなるとされるものである。

メーソンの儀式にあつての微々たるところでも[シカゴの託宣]に重要性にて欠けるとのところを加えるものではない。これらの解釈は真実のところ言って、アングロ・アメリカン系の儀礼にて正式に採用されているもの「ではない」。

しかし、システムおよびフリーメーソンにとっての根本規定を含む[オールド・チャージ(1723年発布)]によって等しく公認された唯一のものらでないが、それらは全面的に公認されたもののように見える。

派閥的「ではない」メーソンリーおよびそのシンボルの特徴に対してアルバート・パイクはただ単に「メーソンリーはその本然と理によって教えられるところの固有の最もシンプルかつ崇高なるものを除き主義綱領を伝えるようなものではない。普遍的なる告解にて不変不易なるは目に見える本質にて書き記されていることであり、それが理によって説明され、世界にては偽なる宗教「はない」と指摘しているだけである」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

以上、まどろっこしき表記を長々と引用なしたところで書いておくと、

「問題は、」

フリーメーソンに教皇の三重冠や王権象徴物の冠を踏みつけるとの儀式が用意されている。—ないしはそういう儀式があると語られるだけの思潮がある—との話が(その現行の実施動向は藪の中であっても、そう、本当にそうしたことが実施されているかどうかメーソンの特定位階に達した人間「以外」にとり

藪の中でも) 世には広く知られているところとなっており、また、19世紀の学究系メーソン(アルバート・マッキー)の手になる著作にもその通りであると受け取れる表記がなされているとのことである(直近にて引用した Encyclopedia of Freemasonry にて “ The Kadosh (thirtieth degree), trampling on the papal tiara and the royal crown, is destined to wreak a just vengeance on these "high criminals" for the murder of Molay. . . ” 「カドシュ(第30位階)、[教皇の冠と王室王冠を踏みつける]との同位階やりようはモレー(訳注:テンプル騎士団総長ジャック・ド・モレーのこと)の殺害に対する正当なる復讐を. . .」との部がそうである)。

そして、そのことが

[[スフィアを共通の象徴物としてきた王権および教皇権] と [ケーニツヒ(王)のスフィアの破壊] の寓意との関係性]

への想起を — 筆者が見る限りそういうことを目立ってオンライン上にて問題視している真っ当な向きは「現行」見受けられないが— 生じさせるということがある。

(出典(Source)紹介の部 104 はここまでとする)

IV.

直近 III. の部にて指摘したこと — 映画『ファイト・クラブ』([金融制度を破壊して破壊からの望ましき世界の再生を目指す]などのお題目を妄信させられての[スペース・モンキー]達が暗躍しているとの筋立ての作品)では王権象徴物たる宝珠とそっくりのものが[ツインタワー合間のオブジェのイミテーション]として爆破されているが、フリーメーソンの間には[王権象徴物を踏みつける]との高位位階儀式が存在するとのこと知られている、とのこと— 「以上に」重要な指摘をなす。以下を参照されたい。

ワールド・トレード・センターと寸刻描写されての区画にて連続ビル倒壊事件を引き起こすとの内容を有している(先述)との映画『ファイト・クラブ』にあつての

【[スフィア・イミテーション](ワールド・トレード・センターのツインタワーの間にて設置されたオブジェ・スフィア — ドイツ語で[王]を意味する(フリッツ・)ケーニツヒという名の男に製作されたツインタワー敷設オブジェたるスフィア — のイミテーション)が爆破され、かつ、転がされているとのその場面の描写]

に関しては

[フリーメーソンのトレーシングボードなどメーソン・シンボリズムと[共通のデザイン]を「露骨に」具現化させてのもの]

ともなっている(ツインタワー付設のスフィアのイミテーションの爆破シーンでもってフリーメーソン・シンボリズムへの意識誘導をなしていると露骨に受け取れるようになって

とのことすら「も」が現実にある。

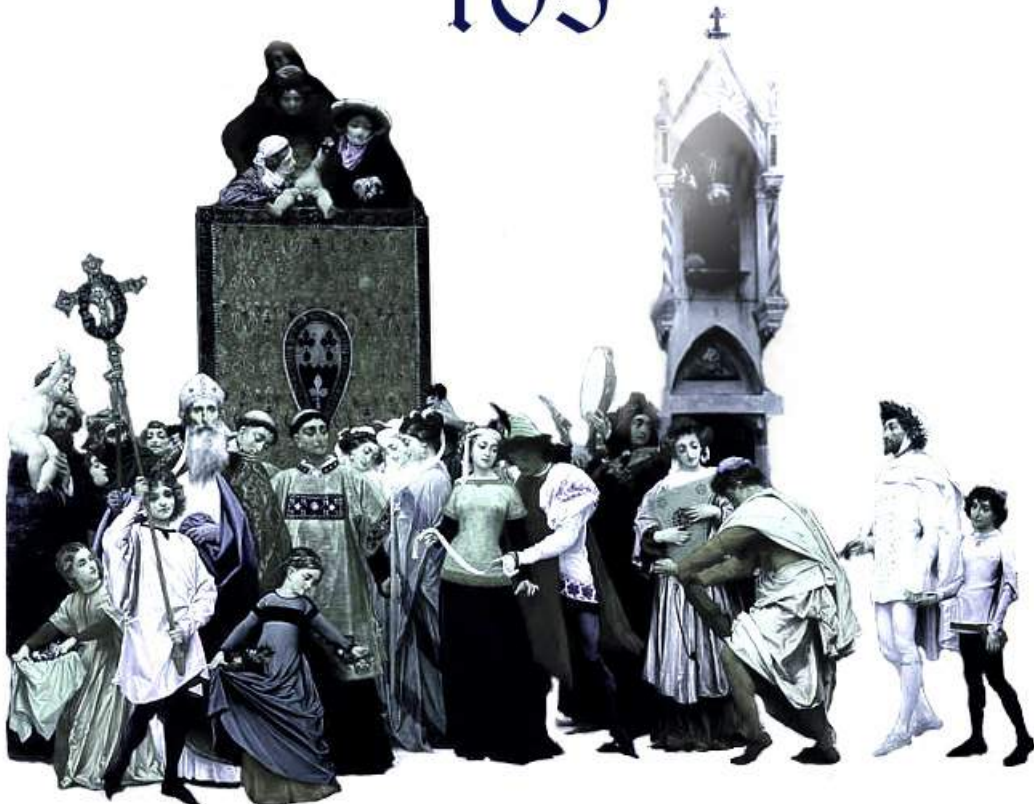
以上のことについてこれより「長くなるも、」の図を多用しもしての出典紹介部(出典(Source)紹介の部

105)を設けておくこととする。

■ 外挿付記としまして：ここ【典拠紹介部 105】には「長くもの」p.696からp.721との頁数を割いているため、以降【典拠紹介部】(従たるところ)と【指し示しの主軸たるところ】の関係について惑われぬよう、何卒ご注意いただければ、と申し述べさせていただきます。

出典(Source)紹介の部 105

S O U R C E 105



Cimabue's Celebrated Madonna (1853-5)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典(Source)紹介の部 105 にあつては

ワールド・トレード・センターと寸刻描写されての区画にて連続ビル倒壊事件を引き起こすとの内容を有している(先述)との映画『ファイト・クラブ』にあつての

【スフィア・イミテーション】(ワールド・トレード・センターのツインタワーの間にて設置されたオブジェ・スフィア —ドイツ語で[王]を意味する(フリッツ・)ケーニツヒという名の男に製作されたツインタワー敷設オブジェたるスフィア—のイミテーション)が爆破され、かつ、転がされているとのその場面の描写]

に関しては

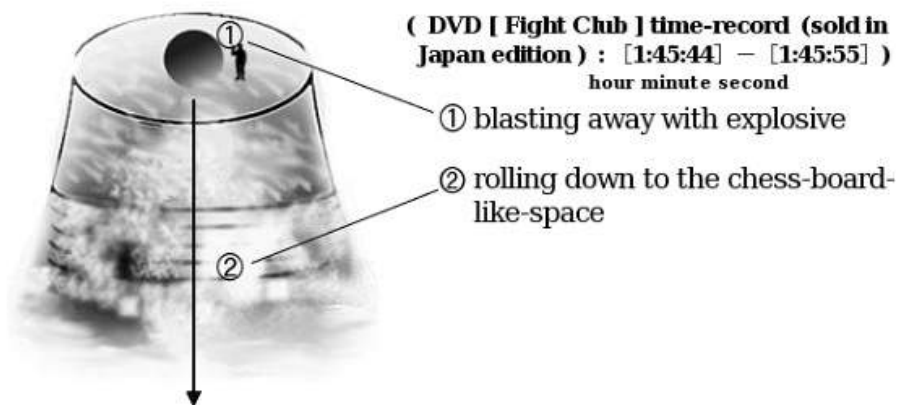
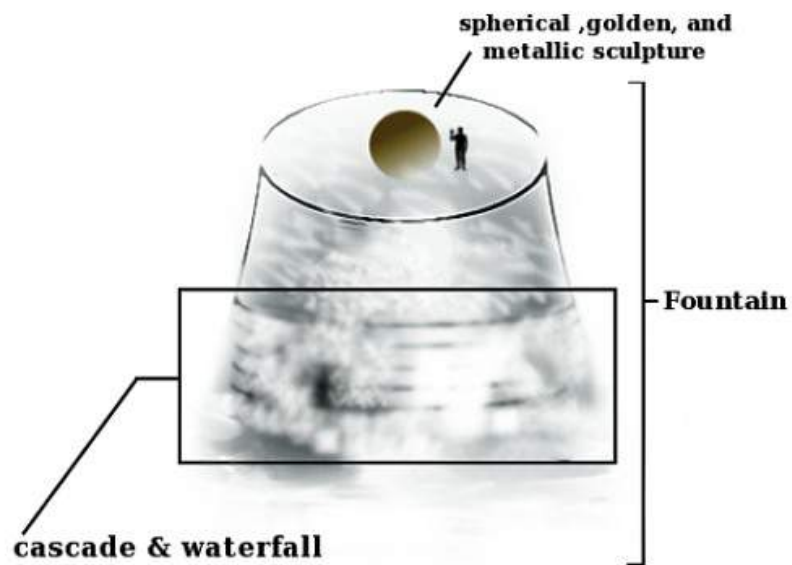
[フリーメーソンのトレーシングボードなどメーソン・シンボリズムと[共通のデザイン]を「露骨に」具現化させてのもの]

ともなっている(ツインタワー付設のスフィアのイミテーションの爆破シーンでもってフリーメーソン・シンボリズムへの意識誘導をなしていると露骨に受け取れるようになって

いる)

とのことの典拠を挙げることにする。

まずもっては以下呈示の図像らをご覧ください。



(DVD [Fight Club] time-record (sold in Japan edition) : [1:45:44] - [1:45:55])
hour minute second

① blasting away with explosive

② rolling down to the chess-board-like-space



前掲図、その上の段の部では『ファイト・クラブ』収録 DVD コンテンツにあっての再生時間にして

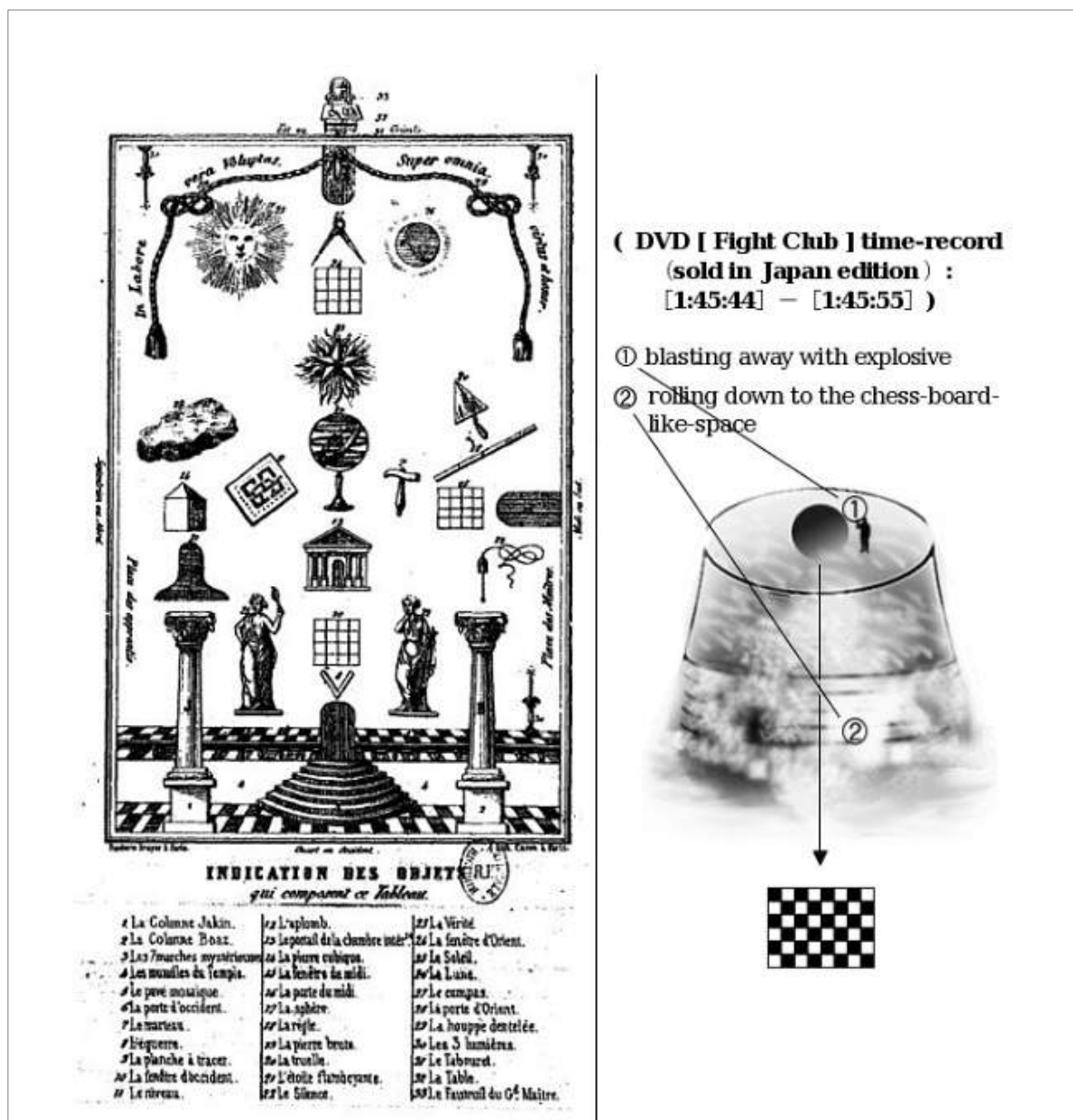
【1時間 45分 44秒】

以降にて表出を見るシーンの流れ —スフィア・イミテーションが爆破されてチェス盤紋様の床の店舗に向けてゴロゴロと転がっていくとの先述のシーンの流れ— を再現した図を挙げている(そちら図は先にも呈示なししていたところの図ともなる)。

対して、同じくもの前掲図、その下の段にあってはフリーメーソン秘儀参入者 —目隠しをさせられているとの者— がそれに向き合っているとのメーソン象徴図像(トレーシング・ボード)を画中に含むとのメーソン画となる(図の出典は英文 Wikipedia[Masonic ritual and symbolism]項目にて「現行」掲載されている A masonic initiation. Paris, 1745.との解説が付されての図となる)。

それら図らにて[視覚的類似性が際立って問題となる構図ら]が —世間一般の普通人がそうである以上に目が「見えない」という人間であるのならば格別、— 際立って具現化していること、分かるうのものである([2本の柱][2本の柱の間のチェス盤状の床][2本の柱の間の小階段(ステップ)]との記号論的特性の共有が『ファイト・クラブ』登場の(ワールド・トレード・センター敷設の)スフィア・イミテーション爆破のシーンと[フリーメーソンのトレーシング・ボード]にて共有されていること、理解いただけもしようとのところとなっている)。

続けて以下のような図像らを挙げていく。



上掲図の左部はフリーメーソンにてのメンフィス儀礼 (Rite of Memphis-Misraim) の構築者とのことである Jacques Etienne Marconis de Negre との 19 世紀のメーソンがものした著作としてオンライン上に PDF 版 (1849 年刊行のフランス語書籍としての PDF 版) が現行流通している著作、Le Sanctuaire de Memphis にての 120 ページおよび 121 ページの間にて掲載されている図像よりの抜粋となる (フランス語著作にして、かつ古書であるとのことで筆者もその細かき内容までは解していないのだが、同著作にて同じくもの図が掲載されていることそれ自体はオンライン上よりメーソンの諸シンボルを分析していた折に筆者は捕捉しもしていた)。図にあつての [柱] の部についてはフランス語にて 一仏語を解さぬ向きでもある程度の識見があれば容易にそれが指す対象が何なのか想起もできようところとして 一 Colonne Jakin および Colonne Boaz との語句の付記からも分かるように【ヤキン(ジェイキン)・ボアズとしての柱】 というメーソン象徴が描かれている。

上掲図の右側は映画ファイト・クラブの特定部の流れを描き取つての図の再掲 一 ツインタワー敷設型のオブジェたるスフィアの露骨なるイミテーションが爆破されて、ボウリング・ボールのように転がり、チェス盤状の床の場に突入していくとの特定部の流れを描き取つての図の再掲 一 となる。

お分かりのことか、とは思うが、直上にて挙げた事例からして映画の問題描写とフリーメーソンリー・シンボリズムの間の露骨な相似性が伺い知れるようになっている 一同じくものことはフリー・メーソンのインサイダーから見ると映画『ファイト・クラブ』が [異なった見方] で見えるとの一例たりうる 一 。

だが、まだもってして、

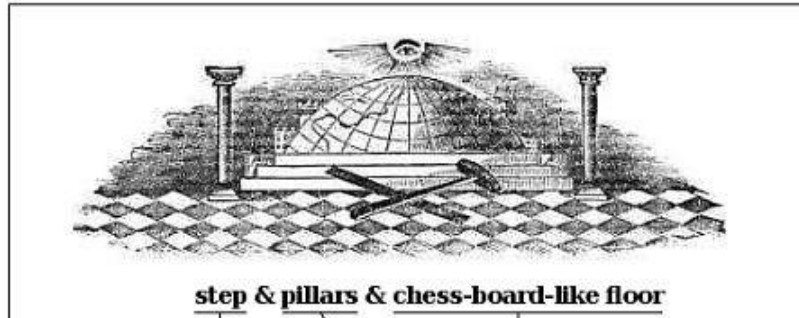
『微々たる一例でもって牽強付会なる話(こじつけがましき話)をなしている』

と誤解する向きもあろうか、と思うので、さらにもって指摘するが、

「フリーメーソンにあつてはステップ(階段)・チェス盤紋様・二本の柱 一ジェイキンとボアズの柱と呼ばれるもの一 を併せて描く構図が「多用」されているとのことがある」 (他面、映画『ファイト・クラブ』では [メーソン・シンボルと類似のステップ(階段)] [チェス盤紋様] [双子の塔(ツインタワー)の間にある球形オブジェの露骨なるイミテーション] が併せて描かれているとのことがある)

上のことを示しもする図解を講じる。下をご覧頂きたい。

(直下、続けもして、**【ステップ(階段)構造】****【チェス盤文様】****【二本の柱】** の構図採用がフリーメーソンリーの間にて通用化しているとのこと、そこから **【(まずもって挙げもしている)映画内シンボリズムの予見描写】** からして **【フリーメーソンリーのシンボリズム】** との接続性が見出せるかたちになっているとのことについて(さらにも、の) 図示をなしておく)

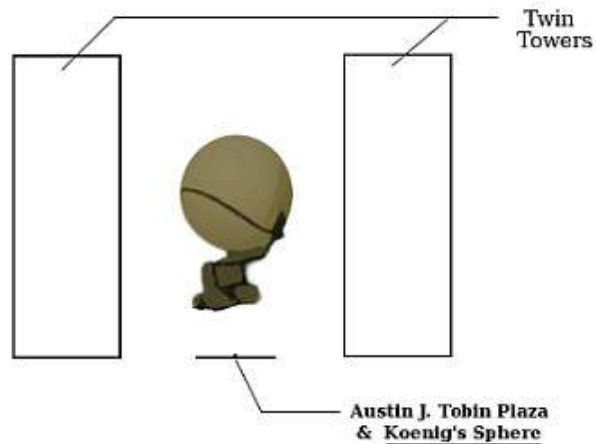
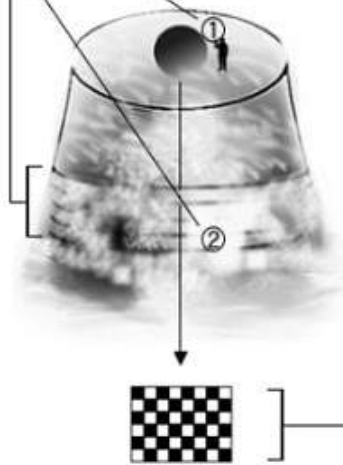


step & pillars & chess-board-like floor



(DVD [Fight Club] time-record
(sold in Japan edition) :
[1:45:44] - [1:45:53])

- ① blasting away with explosive
- ② rolling down to the chess-board-like-space



上掲図にあつての上の段の部、そこにて枠で括っているところは Project Gutenberg のサイトにて全文公開されている著作、ジョージ・ワシントンのフリーメーソンとしての書簡に対する分析をなしているとの20世紀初頭のメーソンの手になる著作、

**Washington's Masonic Correspondence (1915 年刊行／フリーメーソン (Julius Sachse という
20 世紀初頭にて執筆なしていたとのフィラデルフィアのメーソン) の手になる著作)**

に掲載されている図像「ら」となり、それぞれ[図引用元著作にて掲載のメーソンの象徴主義体現図像 (枠内上)]と[合衆国初代大統領ワシントンがフリーメーソン成員として用いていたエプロン (枠内下)]となる。

お分かりか、とは思うが、呈示の図像らにては

[ステップ] (完全なる別階層に移動するための階段ではない段差としての小規模階段)
[対をなす柱ら]
[チェス盤紋様の床]

があわせて描かれており、直上図解部にての下段の部にて再掲しての

[ツインタワー敷設のオブジェたるケーニツヒのザ・スフィアの配置場所]
および
[映画『ファイト・クラブ』にて登場を見ている WTC 敷設スフィアのイミテーションたるオブジェを介して導き出せる構図]

と顕著なる視覚的相似形が認められるようになっている (彼ら紐帯とは無縁なる部外者、アウトサイダーである筆者でさえ気づくに至ったことなのであるから、ありし日のワールド・トレード・センターの地理的特徴を把握したフリーメーソンであるのならば、そうした問題、映画を視た際に即時気づけもしようと思えるところではある)。

以上の図解部をもってして映画『ファイト・クラブ』に登場を見ている爆破対象オブジェ —それが爆破されるシーンが流通を見ている DVD ソフトウェアの再生時間にての何時何分何秒に出ているかも呈示してきたとの爆破対象オブジェ— がフリーメーソンリーの象徴主義の典型的構造と[オーバーラップ]するように「できあがっている」とのこと、それがよりもって普遍性を帯びた話であるのご理解いただけただか、とは思う。

(:尚、述べておくが、ここにて挙げている以外にも同様の構図を体現しての図像らはメーソン関連著作にて容易に見出せるようになっている。

たとえば、おどろおどろしき陰謀「論」関係の著作ではないところの国内流通著作としては本稿の先の段、**出典 (Source) 紹介の部 93**にて挙げているところの学究 (名古屋大学の吉村正和教授) の手になる著作、講学的に[陰謀論]とは無縁な側面でフリーメーソンの特性について識者向けに論じているとの著作である『フリーメーソンと錬金術 西洋象徴哲学の系譜』(人文書院刊／当方が検討なした版は初版第一刷と巻末明記のもの)ではその p.132 および p.135 にて同様の構図を描いてのフリーメーソンのトレーシング・ボードが挙げられていたりもする (であるから、疑わしきは、ないしは、確認をなす必要を感じたとの向きはそこからして図書館を利用するなり何なりしてそうした書籍に認められる類例などからして確認されてみるとよかろう)。

その点、
「国内に流通しているところの陰謀論系著作ではないフリーメーソン関連の著作からしてこれこれこういう筋目での記載がなされている」
との話柄で物事の訴求なしていることにつき、筆者のことを意中の問題として認めたくはなかろうし、また、スタンスの問題として認めるつもりはなかろうとの力学の葉籠中の者らは筆者が[陰謀論]と[陰謀論「以外」のもの]を峻別しようとして峻別していなかろうとならお構いなし、筆者のことをして[陰謀「論」者それぞれの] (要するに社会にあつて正気と理性の力が十分に滲透していても何も変え得ない人種) と断ずる、あるいは、より望ましくなくところとして、積極的に筆者なぞを [陰謀論者それぞれの]

ものと同文の存在]に貶めるための諸種やりよう(論拠などはなから存在しておらず予断・偏見のみが先行した工作媒体を構築して関係性をもたせる等等)をなすこともあろうかと思う。これまでの自身の歩みに付随しての[動向観察]からそうもとらえているわけなのだが、いいだろうか、ここでの話にあつて筆者が何よりも重んじていることは

「特定作品に911の事前言及に通ずる描写が多重的に具現化を見ており、

また、

「そこにてはフリーメーソン象徴主義との「露骨なる」連続性が「多重的に」具現化を見ている」

とのことを[現象]として示すことであり、[一切の価値判断から中立であるとの[現象]の呈示注力]とのそのやりようがゆえに、陰謀「論」ととらえられる素地など本来的にはなかろうと申し述べておきたい(ただし、裏取り可能であるとの[現象]がある一定程度以上、積み重なって具現化を見ていけば、そこにあつては[当然に類推されるところ]があり、その[当然に類推されるところ]が悪質性度合いで群を抜いているのならば我々は望ましくない帰結を回避すべきためにそうしたこと「をも」無視すべきではないとの判断があり、当然にここでの話からしてそうした自身判断を行間に反映させもしての書きようをなしている)

(図を多用しての**出典(Source)紹介の部105**の部にての指し示しを続けるとして)

さらに同じくもの話 —映画『ファイト・クラブ』内スフィア・イミテーション爆破シーンとメーソン・シンボリズムのはきとした相関関係にまつわる話— には続きがある。

17世紀エリザベス朝時代の有力者にして「際立つての」著述家・思想家(経験主義哲学の祖)として知られ、なおかつ、シェイクスピア戯曲の影の作者との説も伴っているフランシス・ベーコン。同フランシス・ベーコン、フリーメーソン(的紐帯)の早期の主導者との「説」も伴う歴史上の人物となる —(たとえば、オンライン上にて容易に確認できるところとしてたかだか英文 Wikipedia[Francis Bacon]項目にも“Bacon's alleged connection to the Rosicrucians and the Freemasons has been widely discussed by authors and scholars in many books.” [70「ベーコンの後期バラ十字団およびフリーメーソンとの関係性については広くも権威および学者らによって多数の書籍らによって議論されてきたところである」と[70]と振られての出典(Bryan Bevan, The Real Francis Bacon, England: Centaur Press, 1960)を挙げられて語られているとおりである) —。

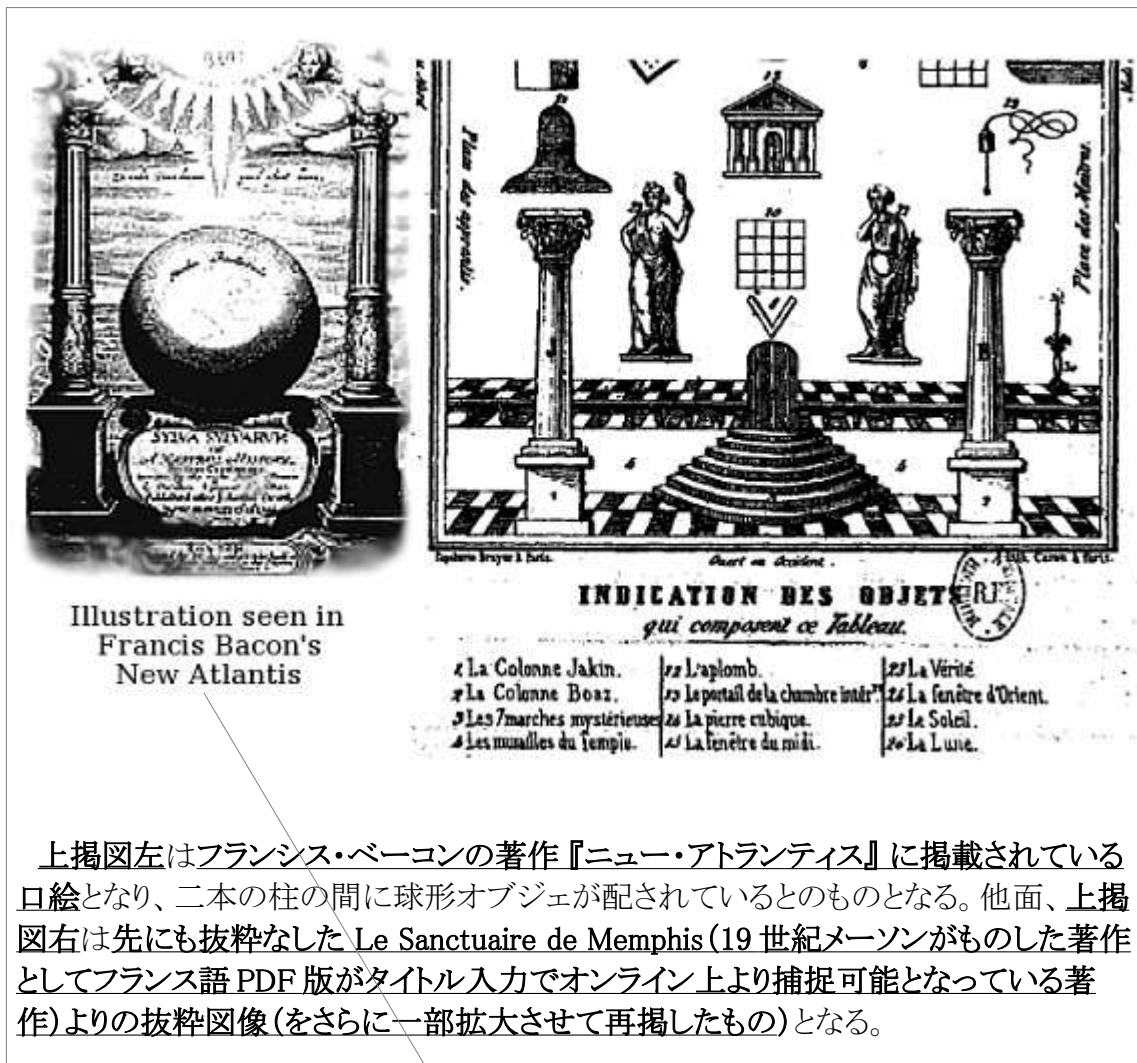
そうしたフランシス・ベーコンの著作、

New Atlantis『ニュー・「アトランティス」』(1627年刊行.本稿にての**出典(Source)紹介の部52**でもその内容を問題視しているとの著作)

にての扉絵に下に図示するような挿絵が掲載されていることがあり、そこからして

[『ファイト・クラブ』登場のイミテーション・オブジェ(ないしイミテーションの元となったワールド・トレード・センターはツインタワーの合間に置かれていたザ・スフィア)が特定の組織体(フリーメーソンリー)の象徴主義と視覚的に濃厚に接続しているとのこととの絡みであまりにも多くのことが平仄が合うようにできあがっている]

とのことに通ずるようになっていく。



上掲図左はフランシス・ベーコンの著作『ニュー・アトランティス』に掲載されている口絵となり、二本の柱の間に球形オブジェが配されているとのものとなる。他面、上掲図右は先にも抜粋した Le Sanctuaire de Memphis (19 世紀メーソンがものした著作としてフランス語 PDF 版がタイトル入力でオンライン上より捕捉可能となっている著作) からの抜粋図像 (をさらに一部拡大させて再掲したもの) となる。

上の図らが何故、問題になるのか。

その点については視覚的側面から「だけでも」接合性が観念できるとのこともある。

すなわち、『ニュー・アトランティス』口絵(上掲左側図)にあつて配されている、

[二本の柱の間に球形のオブジェを置いての構図]

が 一先だつて問題視してきたとの — メーソン関連書籍 Le Sanctuaire de Memphis 掲載図(上掲右側図)にあつての、

[映画『ファイト・クラブ』のスフィア・イミテーションの爆破・転がし挙動 — 多重的にワールド・トレード・センターの連続ビル倒壊を前言しているとの側面がある映画にあつてのその伝で問題となる描写 — に通ずる構図]

と相似形を呈しており、それでもってして視覚的なる濃厚なる接合性が観念できるとのことがある(直下図解剖を参照のこと)。

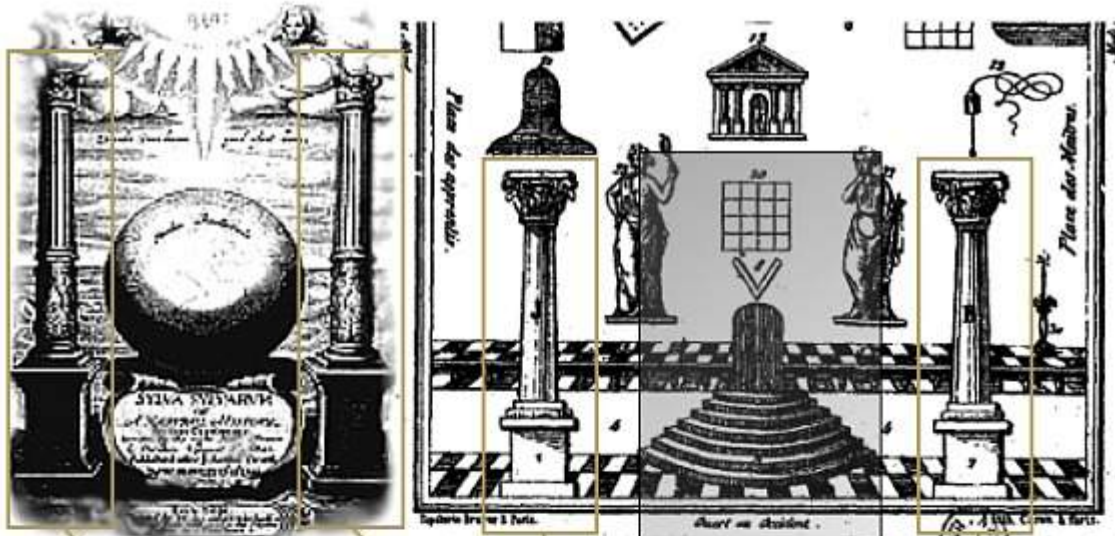


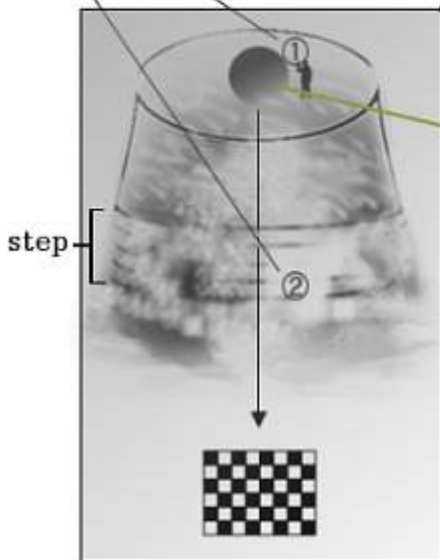
Illustration seen in Francis Bacon's New Atlantis

INDICATION DES OBJETS qui composent ce Tableau.

- | | | |
|------------------------------|--|------------------------|
| 1 La Colonne Jakin | 12 L'aplomb | 23 La Vérité |
| 2 La Colonne Boaz | 13 le portail de la chambre intérieure | 24 La fenêtre d'Orient |
| 3 Les 7 marches mystérieuses | 14 La pierre cubique | 25 Le Soleil |
| 4 Les manilles du temple | 15 La fenêtre du midi | 26 La Lune |

(DVD [Fight Club] time-record (sold in Japan edition) : [1:45:44] - [1:45:55])

- ① blasting away with explosive
- ② rolling down to the chess-board-like-space



imitation



Austin J. Tobin Plaza & Koening's Sphere

Twin Towers

本稿のまじめな検討者にとっては食傷するような話となるかもしれないが、問題は、である。映画『ファイト・クラブ』に登場している【噴水の中の球形オブジェ】がツインタワーの合間に置かれていた【噴水の中の球形オブジェ】の露骨なイミテーションとなりもしており、そちらツインタワー合間の存在のイミテーションが映画の中で小階段(ステップ)を転がるようなかたちでチェス盤状の領域に落とし込まれていることである。そちら描写は【小階段】・【二つの柱】(ツインタワーに照応)・【チェス盤】との三点セット併用でフリーメーソリーの多用シンボリズムに接合している — 純粋なる記録的事実にみとめられる視覚的事実として、である —。

以上、視覚的なる接合性の問題に加えもして、『ニュー・アトランティス』口絵とメーソンのシンボル画にあっては — ツインタワーの倒壊と関わる — 意味論的なる接合性「も」また観念できるようになっている。

それは

[ソロモン神殿の前に立つヤキンとボアズの柱]

を通じて述べられるところの意味論的なるつながりとなる。

その点、フランシス・ベーコンの New Atlantis 『ニュー・アトランティス』は

[架空の島国(ニュー・アトランティス)にあつてのソロモンの名を冠する文明発達促進機構[ソロモン(サロモン)の家 Salomon's House]を描いた作品]

となっている。

本稿出典(Source)紹介の部 52 ではそうした [ソロモンの家] の役職者の者がニュー・アトランティスへ漂着した航海者に語ったアトランティス崩壊伝承へのあらましにつきフランシス・ベーコン著作『ニュー・アトランティス』原著 (Project Gutenberg より公開されており、それがためにオンライン上から全文確認可能な英文現代訳版) および訳書(岩波文庫から刊行されているとの版)よりの抜粋をなして示していたわけだが、ここでは現行にての英文ウィキペディア[New Atlantis]項目内容を端的に引用なすとして、次のようなかたちでベーコン著作『ニュー・アトランティス』と [文明促進機構としてのソロモンの家] の関係性のことがよく知られているところとなっている。

(直下、英文 Wikipedia [New Atlantis] 項目にての現行記載よりためにしての引用をなすとして)

The novel depicts the creation of a utopian land where "generosity and enlightenment, dignity and splendour, piety and public spirit" are the commonly held qualities of the inhabitants of the mythical Bensalem. The plan and organisation of his ideal college, **Salomon's House** (or **Solomon's House**), envisioned the modern research university in both applied and pure sciences.

(訳として)

「同小説(フランシス・ベーコン『ニュー・アトランティス』)は神秘の地たるベンサレム —ニューアトランティス— の住民らが一般的性質として [気立ての良さ・内なる啓明が達せられての精神・尊厳の観点の保持・壮麗さを希求する気風・信心深さ・公共精神] を蔵している、そのような理想的なる世界(ユートピアン・ランド)の創出を描いているとのものとなる。彼(フランシス・ベーコン)の意中計画でもあつた理想的なる大学組織たる [サロモンの家](ソロモンズ・ハウス)は応用科学および純粋科学双方にあつての現代的なる研究志向の大学を先取りしていたとのものであつた」

(訳を付しての引用部はここまでとする —※—)

※ベーコンの先覚性についての補足をなしておく。

ベーコンの『ニュー・アトランティス』に見るサロモンの家ことソロモンズ・ハウスのやりようとのことで述べれば、[今日の文明世界に近いもの]を造り出したとの描写とてものが認められることがある。『17世紀に生きた人間がそのようなことをよくも描けたものだ』と受け取って然るべき、そのような先覚性が際立っているところとして、例えば、次のような描写が認められるとことがある。

(直下、Project Gutenberg のサイトにて全文公開されている New Atlantis の[サロモンの家](ソロモンの家)の関係者の発言として問題となりうる表記を端的に引くとして)

"We have also perspective-houses, where we make demonstrations of all lights and radiations; and of all colours: and out of things uncoloured and transparent,

we can represent unto you all several colours; [. . .] **Also all colourations of light; all delusions and deceits of the sight, in figures, magnitudes, motions, colours all demonstrations of shadows.** We find also divers means, yet unknown to you, of producing of light originally from divers bodies. We procure means of seeing objects afar off; as in the heaven and remote places; and represent things near as afar off; and things afar off as near; making feigned distances.

[. . .]

"We have also sound-houses, where we practise and demonstrate all sounds, and their generation. [. . .] We represent and imitate all articulate sounds and letters, and the voices and notes of beasts and birds. We have certain helps which set to the ear do further the hearing greatly. We have also divers strange and artificial echoes, reflecting the voice many times, and as it were tossing it: and some that give back the voice louder than it came, some shriller, and some deeper; yea, some rendering the voice differing in the letters or articulate sound from that they receive. We have also means to convey sounds in trunks and pipes, in strange lines and distances.

[. . .]

"We have also engine-houses, where are prepared engines and instruments for all sorts of motions. There we imitate and practise to make swifter motions than any you have, either out of your muskets or any engine that you have: and to make them and multiply them more easily, and with small force, by wheels and other means: [. . .] We imitate also flights of birds; we have some degrees of flying in the air. We have ships and boats for going under water, and brooking of seas; also swimming-girdles and [. . .].

(以上、オンライン上より原文確認できるとの Project Gutenberg 公開版原著表記に対し岩波文庫より出されている邦訳版『ニュー・アトランティス』(川西進訳)の該当するところの部 —59 ページから 61 ページにあつての記述— を中略しながら引くとして)

「我々は光学研究所を持っている。そこではすべての光線と放射線、すべての色彩を現出させ、無色透明の物体からあらゆる色を発色させることができる。…(中略)…また光の着色作用の実験、形、大きさ、動き、色彩に関する、あらゆる眼の幻覚と錯覚、あらゆる陰影の表出も可能である(訳注: Isaac Newton がプリズムによる光の分離実験をはじめて実践し、光が無色透明ではないとの発見につながり、かつ、光学への途を拓いたのは 1666 年のことで『ニュー・アトランティス』の刊行年(1626 年)より 40 年後のことである。また、『ニュー・アトランティス』にて言及されている光学の応用による幻影の投影となると現代の映像技術に通ずるものとなる) …(中略)… また光を増幅させて遠くに届けさせ、小さな点と線を見分けられるほど強烈にさせる。われわれはさまざまな物体を発光させる、あなた方にはまだ知られていない方法を見出している。天空など遠く離れたところにある物体を見る手段を獲得し、近いものを遠く、遠いものを近く、距離を欺いて表示することもできる。

…(中略)…

また音響研究所ではあらゆる音を実際に発生させ実験している。…(中略)…あらゆる明瞭な音声と文字、獣の咆哮、鳥の歌声を模倣し、表現することもできる。耳に装着して聴覚を大いに助ける器具もあれば、音声を、鞠でも投げ返すように、何度も反響させて、種々の奇妙な人工木霊(こだま)を作り、来た音声を前より大きくして返したり、高くも低くもする装置もある。あるものは、もとの綴りとも発音とも明らかに違う音声に変えてしまう。筒や管を用い、奇妙な経路を経て遠くに音声を運ぶ手段もある(訳注: 17 世紀に[補聴器]や[ステレオ]や[遠隔地通話機(電話機)]などの概念を口にしてしている向きがいればあると分かれば、

—小学生ぐらいの識見しか蔵していないならば話は別だが— その驚くべき先覚性に舌を打つのが普通の反応かとは思う)。

…(中略)…

われわれはまた動力研究所を持っている。そこではあらゆる種類の運動のための動力機械が作られ、あなた方の持っているマスケット銃や他のどんな機械が起こす運動よりも早い運動を起こすために、模擬実験を行う (訳注:銃弾の速度よりも速い運動を起こす実験を起こすとの発想法が17世紀の者にどうして芽生えるのか考えるに値するであろう)。…(中略)… 我々はまた鳥の飛翔を模倣し、ある程度空中を飛ぶことができるようになった。水中を進んだり、荒波にも耐える大小の舟、ボート・游泳(以下略)」

(以上、国内で流通している訳書にての表記の引用をなした)

上にてはベーコン主著『ニュー・アトランティス』にあつてのソロモンの家 —よく「[近代の大学の先時代的理想像]を先駆けて記した著作である」「英国の王立協会の理念は同著にある」などのかたちで引き合いに出されるフィクション上の研究統治機構— が

[あらゆる光学的手段で距離の問題を超克し、眼に対する幻影をもたらす光学的やりようとしての光の操作を自儘(じま)にできる]

[あらゆる音響学的手段で網羅的な音声を生じ、補聴器具を実現することも出来、音声を送ることを可能となしている]

[あらゆる動力研究の成果として鳥の運動を模倣してある程度の飛翔が可能であり、水中進行も可能、海難事故を克服しての大きな舟も用意できる]

との文明水準に達しているとのことを描写してのパートとなる。

そうした描写はフランシス・ベーコンの母国と同じくもの英国でアイザック・ニュートン(生年:1647年)が世に産まれることになるおよそ20年前にして、そして、[蒸気機関]の登場(古代の原始的蒸気機関とは一線を画しての蒸気機関の萌芽が英国に見られ出したのはドニ・パパン由来のそれが世に出た17世紀末、広くはジェームズ・ワットの蒸気機関が世に出た1769年であると認知されている)となりもし、蒸気機関具現化よりも何十年も前(あるいは100年以上前)に刊行されていた著作ありようとして「驚異的。」とも見える先覚性を呈しており、そこにての予測は[往時](17世紀前半)よりむしろ[現代]の技術水準に近いものがあると「普通に」受け取れるところである —であるから、『ニュー・アトランティス』に見る組織体[ソロモンの家]の者の申しようは非常に目立つ、と述べている—。

その点、(以下は行き過ぎての余談と見てもらっても構わないとし)筆者個人としてはフランシス・ベーコン Francis Bacon と同じくものベーコンの姓を持つ13世紀の英国修道士ロジャー・ベーコン Roger Bacon からして同様の先覚的言及をなしていたことがあること、そして、[その先にあること —人間を特定のレベルにまで文明発達するかたちで「養殖」するニーズがあったこと—]に意味を見出している。

(『ニュー・アトランティス』を著したフランシス・ベーコンと名を同じくする13世紀の修道士である)ロジャー・ベーコンについては同フランチェスコ会修道士が[脅威の業なす博士](Doctor Mirabilis/ドクターミラビリス)

と呼ばれていた所以として

[機械式飛行機]

[一人だけで操縦可能な巨大艦艇]

などといったものの着想をなしていたようであるとのことが後代、今日に生きる一部識者にもよく知られるに至っている(同じくもの申しようについて疑わしきは(当然に疑わしかろう)、たとえば、英文ウィキペディアの[Roger Bacon]項目にての記述やあるいはロジャー・ベーコン主著たる Opus Majus、19 世紀にあつてパチカンにて再発見された —とすれば、ロジャー・ベーコンの技術予測を同姓の人物として歴史に足跡を遺しているフランシス・ベーコンが知るところがあつたかには疑義もあり、そこからして問題になる— との著作にまつわるオンライン上の諸種英文解説媒体などでの解説のされようを参照されるとよからう)。

(脇に逸れてのフランシス・ベーコン著作『ニュー・アトランティス』の先覚性にまつわる話はここまでとしておく)

(フランシス・ベーコンがソロモンの家という文明発展装置を強くも著作『ニュー・アトランティス』にあつて持ち出していたとの話をなしおえたうえで述べるところとして)

他面、[フリーメーソンリー]とは —同組織体、そこに理性や寛容さなどとは程遠い狂的かつ悪質なるカルトやりようとの接合性を観念できないなどと述べれば「偽り」になろうとの組織体とはなる(現代のダブル・スタンダード・システムにおける反知性領域の象徴である [モルモン教] や [エホバの証人] の開祖の来歴・やりようをきちんとした媒体から調べてみればいい) わけではあるが— 表向きには、

[理想的建築物としてのソロモン神殿の再現]

[理想的構造体としてのソロモン神殿の模倣]

を理念・教義体系に組み込んでいることがよく知られている組織となる (:メーソンの教義体系にあつてのソロモン神殿の重視については、たとえば、本稿にての [出典(Source) 紹介の部 99] の直前の部] でフリーメーソンリー由来のメーソン関連情報提示サイト www.masoniclibrary.org.au —[メーソン・ライブラリー・オーガニゼーション・オーストラリア]といったドメイン名のサイト— にての Venus & Freemason と題されたページよりの抜粋をなしているところとして “ **The layout of every Masonic Temple is said to be a model of Solomon’s Temple, and today every Master Mason is raised from his temporary death by the pre-dawn light of the rising Venus at a symbolic equinox.** ” (訳として)「メーソンのテンプル構図(神殿としての建築様式)はすべてソロモン神殿をモデルにしてのものであると言われており、今日、全てのマスター・メーソン位階の者は[昼夜平分点(春分あるいは秋分)]を象徴し上昇を見るとの金星の夜明け前の光によってその[一時的なる死]より引き上げられる格好となっている(抜粋部に対する訳はここまでとする)との申しようが[インサイダー]によってなされていたりすることからも容易に指摘できるところとして現実にある)。

それにつき、本稿筆者は、

[自分で考える能力などそもそもはなから有していないとの家畜 (に甘んじるに至った相応の者達) に押しつけられた「偽の」ドグマ (と本来的には容易に判じられもしようもの)]

との兼ね合いで何が問題になるのか、よく考えたうえで本稿にての訴求をなしてきたつもりではあるのだが、同じくもの自負に関わるるところとして [言い過ぎにはならぬ] ととらえているところとしてメーソンがその再現を理想とさせられてきたソロモン神殿の建立者たるソロモン王が

[悪魔・悪鬼の類 —などと宗教的人間に表されてきた存在— と契約して、そうした存在の使役をなしていた(ソロモン神殿の造成もソロモンに使役された悪魔の業であるともされる)との存在である]

との話が伝わっていることについて [結果面] で何が懸念されるかについて「も」分析的視点での話を

なさんとする所存である（：[種族の盆栽を育てるが如くの歪なる養殖]にホワイダニット、何故、それをなしてきたのかとのことにまつわる[合理的理由]があると判じられもすることの委細については本稿の結語の部に近いところで詳述するとしてここではまだ取り上げないが、とにかくもってまづもって申し述べれば、である）。

その点、ソロモン王が悪魔を使役した王であるとのことにまつわる「一般的な」説明のされようを下に引いておくこととする（より細かくもの説明のなされようについては本稿のさらに後の段にあって「よりもって微に入っの媒体」よりの引用および説明をなすこととするつもりだが、ここでは「一般的な」説明のされようを下に引いておくこととする）。

（直下、オンライン上より目につくところとなっている英文 Wikipedia[Solomon]項目にあっての「現行の」記載内容を引用するところとして）

The Gnostic Apocalypse of Adam, which may date to the 1st or 2nd century, refers to a legend in which Solomon sends out an army of demons to seek a virgin who had fled from him, perhaps **the earliest surviving mention of the later common tale that Solomon controlled demons and made them his slaves**. This tradition of Solomon's control over demons appears fully elaborated in the early pseudographical work called the Testament of Solomon with its elaborate and grotesque demonology.

（補いもしながらもの訳として）

「1世紀ないし2世紀に遡るとのグノーシス主義的文書、『アダムの黙示録』 —（訳注：同『アダムの黙示録』は20世紀になってからエジプトにて「発見」されたとのパピルスに書き記されていた一群の初期キリスト教文書ら（[ナグ・ハマディ写本]として知られる文書群）の一翼をなすものとして知られているものである—ではソロモンが彼の元から逃げた処女を探し求めるために悪魔の一団を送り出したとの言及がなされており、おそらくそれが

[ソロモンが悪魔らを統御し彼の奴隷としていたとのより後の一般化した物語に通ずるところ]

に現存している中で最も初期に言及なししているとの文物であろう。この手のソロモンの悪魔の統御の伝承は完全に精緻化を見ている格好にて初期の偽典に属する書、『ソロモン書』と呼ばれる書にて手の込んだ、そして、怪奇性を帯びた悪魔学側面をもって表出を見ている —訳注：『ソロモン書』には有名どころとして魔を使役する指輪としての[ソロモンの指輪]というものが登場を見ているが、については、和文ないし英文の Wikipedia にての[ソロモンの指輪]項目ないし同[Testament of Solomon]項目程度のものにもよくまとまったの解説がなされている—」

（訳を付しての引用部はここまでとする）

以上、ウィキペディア程度の媒体にて記載がなされているようにソロモンとは[悪鬼悪魔の類を契約に基づき使役した王]としてもよく知られている存在である。ソロモンの名を冠した魔術書の類などがある、本稿にての**出典(Source)紹介の部 72**や**出典(Source)紹介の部 99**でオンライン上より確認できる内容の引用をなしながら紹介・言及しているグリモアの名前が The Lesser Key of Solomon, Goetia、『ソロモンの小さな鍵』となっているところの理由も詰まるところ、そういう事情に因る。

といったことと関わりところ「**でも**」本稿の従前の段にて「**ブラックホール**」というものの兼ね合いで**この身、筆者が何を具体的にどう多重的「予言的言及」現象にまつわるところの「現象」としてひたすらに細かくも指し示さんとしてきたのか、**そう、（同じくものことの[背景]にある発想法についてはよりもって

後の段でさらに噛み砕いて「普通に」考えられるところについて詳述する所存だが)、

「予言的言及の表出 (それらがなされていた折には今日取り沙汰されるに至っているブ
ラックホール人為生成問題など想像も及んでいなかったはずであるにも関わらず、見た限
り類似のことが具現化してしまっているとの予言的言及現象) が「ソロモンの魔符(五角
形と接合する五芒星)の類と接合している文物や文化事象」にも表出を見ている

とのことで何を指し示さんとしてきたのか、「押しつけられた通りの運命 (あるいはたばかられている節
が如実にあるなかでそこにいざなわれている通りの運命、でもいい) 」を甘受するだけの人間ではない
との自負がある向きには裏を取っていただきたいものである (: [出典\(Source\) 紹介の部 72](#), [出典
\(Source\) 紹介の部 99](#)にて引き合いにだしているところとしての The Lesser Key of Solomon, Goetia、
『ソロモンの小さな鍵』、グリモアなどという愚書・悪書の類の中にすら「も」[相応の反対話法]が込めら
れていると解されると述べている理由につき訴求しているとの本稿従前の段の内容を振り返ってもいた
だき、よくよく考えていただきたいものである))。

以上、申し述べたうえで書くが、

【「悪鬼羅刹の類を使役した王として伝わるソロモンが建立した神殿」 — (ご存知なきはお
調べになられればすぐに分かるうことか、とは思いますが、[一般教養]を出でぬ話として今日、
都市エルサレムにてユダヤ教徒にとって聖地となっている「嘆きの壁」はそちら「ソロモン神
殿」の遺構 (正確に述べれば、ソロモンが建立した伝説上の神殿が同じ場所に「再建」さ
れての第二神殿をローマ期のユダヤ地区のヘロデ王が拡張工事をなしたと伝わる神殿の
遺構) とされるものとなっており、イスラム教徒らにあつての聖地となっている「岩のドーム」
もまたそちら「ソロモン神殿」が建っていた場所に建立されているモスクとなっている (世
間一般での教科書的理解のされようを引き合いに出せば、たとえば、和文ウィキペディア
[岩のドーム]項目にて(引用なすところとして) “岩のドームは、東エルサレムにある、カア
バ、預言者のモスクに次ぐイスラム教の第3の聖地であり、「神殿の丘」と呼ばれる聖域と
なっている。現在はイスラム教徒の管理下にあるが、南西の壁の外側の一部だけが「嘆きの
壁」としてユダヤ教徒の管理下にある…(中略)…岩のドームはかつてのエルサレム神
殿内にあり、建設はウマイヤ朝第5代カリフであるアブドゥルマリクが685年から688年
の間のいつの時点かに建設を思い立ったことに始まり、688年に着工した…(中略)…ユダ
ヤ教において「聖なる岩」は、アブラハムが息子のイサクを神のために捧げようとした台であ
るとされる(イサクの燔祭)。またダビデ王はこの岩の上に契約の箱を納め、ソロモン王はエ
ルサレム神殿を建設した ” (引用部はここまでとする)と解説されているようなことがある))
—]

の前にあつては、(先だつてもフランス語書籍に見るフリーメーソン・シンボルとの兼ね合いでその名を
一言のみ言及しているわけだが)、

【ヤキンとボアズの柱】

という柱らが打ち立てられていたと旧約聖書には記されており、それら柱が

**【ソロモン王のソロモン神殿の模倣 (あるいはそちらについては後述する所存であるとの
【ロイヤルアーチ】との基本位階を越えた高位位階にあつての【ソロモン神殿の残骸から
の理想的新世界の模索】)】**

を教義としているとのメーソンのシンボル体系にあつて — 上にて言及のフランシス・ベーコンの
ニュー・アトランティスとツインタワーのことを視覚的に接合させるようになっているポイントに関わると
ころとして— 重要視されているとのことがある。

その点、まずもって、一目立つところとしての英文 Wikipedia[Boaz and Jachin]項目にあつての前半
部にてのワンセンテンスを引くにとどめておくが— ヤキン・ボアズの世間一般での基本的なる解説の

されようを紹介しておく。

(直下、英文 Wikipedia[Boaz and Jachin]項目にあつての「現行の」記載を端的に引用するとして)

Boaz and Jachin were two copper, brass or bronze pillars which stood in the porch of Solomon's Temple, the first Temple in Jerusalem.

「ボアズとヤキンはソロモン神殿、すなわち、エルサレムにあつての第一神殿にての玄関の部にて建っていたとの二柱の銅、真鍮、そして、青銅製の柱となる」

(引用部はここまでとする)

以上、「一言のみで」解説されようとのヤキンとボアズ —旧約聖書にての Books of Kings 『列王記』第7章21節から22節の言及、そして、旧約聖書 Books of Chronicles 『歴代誌(下)』第3章17節にての言及も一言のみ、そのようにして簡明なものである— がフリーメーソンリーにあつていかにどのように重視されているかについて —検索エンジンを用いて Jachin, Boaz, Freemason などと検索すれば、メーソンのそちら関連の図像(ヤキンおよびボアズが小芥子(こけし)状の形状にて階段などの両端に建っているとのシンボル画など)が多数表示されてきて容易に理解もなせようとのところなのだが— ここではメーソン関連の著名著作、19世紀米国にての有力メーソンであったアルバート・パイクの手になる『モラルズ・アンド・ドグマ』にての書かれようを引いておくこととする。

(直下、Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry 『古代より連綿と続く認証されしフリーメーソンのスコットランド位階の徳義と教義(モラルズ・アンド・ドグマ)』にあつての XII.GRAND MASTER ARCHITECT の部よりの引用をなすとして)

The three great lights of the Lodge are symbols to us of the Power, Wisdom, and Beneficence of the Deity. They are also symbols of the first three Sephiroth, or Emanations of the Deity, according to the Kabalah, Kether, the omnipotent divine will; Chochmah, the divine intellectual power to generate thought, and Binah, the divine intellectual capacity to produce it— **the two latter, usually translated Wisdom and Understanding, being the active and the passive, the positive and the negative, which we do not yet endeavor to explain to you. They are the columns Jachin and Boaz, that stand at the entrance to the Masonic Temple.**

(補いながらもの拙訳を付すとして)

「ロッジにての三つの光は我々(訳注:アルバート・パイクをはじめとするメーソンら)にとり、[神の力]および[智恵]、そして、[仁慈]の象徴となる。それらは[セフィロトの最初の三つなるもの] (訳注:このセクションはカバラ、ユダヤ教教徒が隠然としてかたちづくってきた神秘思想たるカバラに見る[セフィロトの樹]のことを神秘主義者風にアルバート・パイクが口にしての部である)、[神の威光が放射したもの]たるカバラによるところの[ケテル] (訳注:ケテルとは[王冠]の要素として知られるカバラの神秘思想に見る[セフィロトの樹の第一要素]を指す)としての神の全能なる意志、[コクマー] (訳注:コクマーとは[智恵]の要素として知られるカバラの神秘思想に見る[セフィロトの樹の第二要素]を指す)としての思考を生み出すところの神の智恵の力、[ビナー] (訳注:ビナーとは[理解]の要素として知られる[カバラの神秘思想に見るセフィロトの樹の第三要素]を指す)としての造物をなすための神の知的能力を指し、**後二者([コクマー]と[ビナー])、通例、[智恵]と[理解]と訳されるそれらについては能動的なるもの・消極的なるもの、陽性のもの・陰性のもの、未だ(読**

み手たる)あなたに説明を試みていないところのものとなる。(そして、)それら([コクマー]と[ビナー]の二要素)はメーソンの神殿建築物の前に建つヤキンとボアズの柱にて体現されるものである」(以下略. 尚、アルバート・パイクは抜粋しての話に続くところとして Free Government、自由なる政府の重要性を訴求しだもしている)

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(さらに直下、Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry『古代より連綿と続く認証されしフリーメーソンのスコットランド位階の徳義と教義』にあつての XXV.KNIGHT OF THE BRAZEN SERPENT の部よりの引用をなすとして)

The Solstices, Cancer and Capricorn, the two Gates of Heaven, are the two pillars of Hercules, beyond which he, the Sun, never journeyed: and they still appear in our Lodges, as the two great columns, Jachin and Boaz, and also as the two parallel lines that bound the circle, with a point in the centre, emblem of the Sun, between the two tropics of Cancer and Capricorn. The Blazing Star in our Lodges, we have already said, represents Sirius, Anubis, or Mercury, Guardian and Guide of Souls. Our Ancient English brethren also considered it an emblem of the Sun. In the old Lectures they said: "The Blazing Star or Glory in the centre refers us to that Grand Luminary the Sun, which enlightens the Earth, and by its genial influence dispenses blessings to mankind." It is also said in those lectures to be an emblem of Prudence. The word Prudentia means, in its original and fullest signification, Foresight: and accordingly the Blazing Star has been regarded as an emblem of Omniscience, or the All-Seeing Eye, which to the Ancients was the Sun.

(補いながらもの拙訳を付すとして)

「[至点] (訳注: 一般教養を出ないような話だが、[至点]とは天文学・占星術に見る夏至と冬至の現出のポイントとなる、すなわち、一年を通じて太陽の赤道からの距離が極限に達するポイントとなる)、そして、[巨蟹宮(きょかいきゅう)および磨羯宮(まかつきゅう)] (訳注: 黄道 12 宮の構成要素)、そして、[天にあつてのゲートとなるところ] は [ヘラクレスの柱ら] でもあり、それらを越えては太陽たる彼が決して旅しなかつたとの地点を指しもし、我々 (訳注: ここでは『モラルズ・アンド・ドグマ』執筆者たるアルバート・パイクらメーソンを指す) にあつてのロッジにて二つの偉大なる柱、[ヤキンとボアズ] として具現化を見てもおり、それらは換言すれば、

[巨蟹宮(きょかいきゅう)と磨羯宮(まかつきゅう)の二つの回帰線(夏至線・冬至線)の合間の中央に太陽の象徴たる環を置いたうえで境界をなす二つの対称性呈してのラインら]

となっている。

我々のロッジにてのブレイジング・スターは既に述べているように、シリウス・アヌビス、あるいは、マーキュリー、魂の守護者にして案内人を指すものであるが、我々の古き英国の有朋ら (訳注: ここでの「英国の有朋」表記は抜粋元文書の著者たるアルバート・パイクが米国系メーソン有力者であったところ、同男が英国系メーソンを指してそうした書きようをなしているとの部となる) はそれ(ブレイジング・スター)をして太陽の象徴と考えている。古き講釈曰くのところとして、「ブレイジング・スターあるいは(ヤキンとボアズらの二つの回帰線の間にあつての)中央にあつての光輝あるものは地球を照らす偉大なる明るき太陽、その温かみのある影響力によって人類に天恵をもたらしてきた存在である」とされている。また、同様にそれら講釈にあつてはブレイジング・スターをしてプルーデン

ス、思慮分別の象徴とも語っている。プルデンシアとの語はその原義かつ最も
充足的な意味合いとして[先見の明]を意味し、それに応ずるところとしてブレイ
ジング・スターは全能性、すなわち、古代人にとって太陽であったとの万物を見
通す眼の象徴と見做されてきたのである」

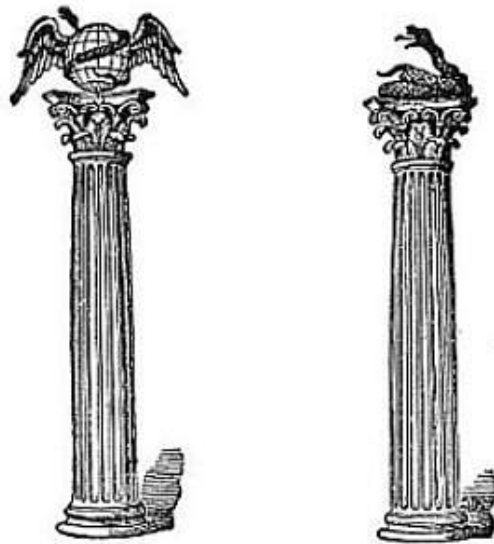
(補いながらもの訳を付しての引用部はここまでとする)

一般教養、そして、神秘主義の細かき思潮に関する知識の乏しき向きにあつては(仮に英語読解力
を有していたとしても)理解に失すところがあるとのフリーメーソン関連著名書籍よりの引用をなした関
係上、やたらめっぽう[読みづらさを犠牲にしての註記]を付す引用部訳文内に付すことにしもしたわ
けだが、訳を細かくも付しての直上引用部ら、19世紀往時のメーソンの有力者 —アルバート・パイク
— にあつての著作 —現時、未邦訳だったと思うが、モラルズ・アンド・ドグマという色々な意味で海外
にて非常に有名な著作— よりの引用部からは、とにかくも、次のことが読みとれるようになっている。

[メーソンにとってのヤキンとボアズの柱はカバラにてのセフィロトの樹の第二要素・第
三要素(神の[智慧]と[理解])の体現存在にしてポジティブ(陽)・ネガティブ(陰)の
体現存在ともなる]

[メーソンにとっての **[ヤキンとボアズの柱]** とは 太陽がその領域を越えては先に進ま
ない (すなわち、太陽の赤道面からの距離がそれを越えることはない)との至点(夏
至・冬至現出のポイント)との境界線を指しもし、黄道12宮にあつては【[巨蟹宮]
(夏至6月23日から7月23日までの合間、太陽がそこに留まるとの言われようがな
されている黄道12宮構成単位) および[磨羯宮](冬至近辺の12月24日から1月
19日の間、太陽がそこに留まるとの言われようがなされている黄道12宮構成単位)
の領域を規定する線】にして **[ヘラクレスの柱]** としてその合間に太陽(の象徴ともな
りうるブレイジング・スターないし万物を見通す眼)を留め置いているとのものともなる]
(と主導者クラスであつたと認知されている有名フリーメーソンのアルバート・パイク著
作には記載されている —※尚、本稿にての先行する段でその内容を問題視して
いたフリーメーソンのオンライン媒体にあつての特定ページでは彼らメーソンにとり(未
開人の農事暦にあつての一大イベントとしてさまざまな祭りがその折に催されていたと
の)夏至・冬至といったものが重要視されているとのことが解説されている。すなわち、
(本稿にての **出典(Source)紹介の部99**にて引き合いに出していたメーソン由来のオン
ライン媒体 www.masoniclibrary.org.au にあつての Venus&Freemason とタイトル振
られてのページ、そこよりの「再度の」引用をなすとして) “ **When the candidate is
raised from his tomb his head rises in a curve towards the East to meet Venus
which is also rising above the horizon.** The East-West line marks the equinox, the
point of equilibrium between the two solstices, when there are twelve hours of light and
twelve of darkness.” 「メーソンのテンプレの構図はすべてソロモン神殿をモデルにし
てのものと言われており、今日、全マスター・メーソンは[昼夜平分点(春分あるいは秋
分)]を象徴しての上昇する金星の夜明け前の光によって彼の一時的なる死より引
き上げられるものとなっている。[金星の上昇]は往古カナン人の神学(セオロジー)の
大系にて中心をなしていたところのものであり、フリーメーソンにあつては第三位階の
フリーメーソン儀式での再生(を模しての儀式態様)のように[再生]にかこつけられて
いるとのものである」(再度の引用部はここまでとする)との式でメーソンにとって夏至・
冬至といった農事暦上のイベントが重要なものとなっていることが解説されている。そ
うした側面から「も」夏至・冬至と結びつけられてのヤキンとボアズの柱の重要性が「容
易に」押し量れるようになっている——)

ここまで摘示してきたことを前提に次の図を挙げる。



All Seeing Eye



上掲図にての上の段の二柱の柱らは上の段にてそこよりの引用をなしたところのアルバート・パイク著作、

Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry 『古代より連綿と続く認証されしフリーメーソンのスコットランド位階の徳義と教義』

に掲載されているとのヤキンとボアズの柱(と解されるシンボル)となる。

それら対なす二本の柱の上にあつて横臥している蛇らに関しては 一柱らを描いての図が *Morals and Dogma* にて掲載されているのが

[真鍮の蛇(ブレイズン・サーペント)の騎士の章](XXV.KNIGHT OF THE BRAZEN SERPENT)

との章題呈示の箇所近接しての部であるため一、

[真鍮の蛇](旧約聖書に認められる、神に対する不敬を呈したモーセら一行を罰し、また、癒やすために用いられたブレイズン・サーペント Brazen Serpent(日本語で流布されている呼称の方は[青銅の蛇](真鍮と青銅では正確には異なるのだが。))

を指しているのであろうと判断できるようになっている(※)。

※脇に逸れての話として

尚、メーソンにあって

KNIGHT OF THE BRAZEN SERPENT [真鍮の蛇の騎士]

との特定階級が存在するようにフリーメーソンにあって[ブレイズン・サーペントなぞの[蛇]が重要視されている]とのことについては *Morals and Dogma* より原文引用するところとしての次のような表記がなされていることから — (世の中のことを識っておらぬし、識る必要もないと考えていようとの類ほど、[下らぬ陰謀論]との区別が付けがたいととらえること、それがゆえに唾棄すべきことと一人合点しもしようことは当然に受け取れるようなところとしてながら、事情通を任ずる向きらにあってメーソンが[蛇のカルト]であると言われている理由の一つになるようなものだから紹介しておくが) — 容易に押し量れるようになっている。

(直下、オンライン上から諸種の版を全文ダウンロードできるとの米系メーソンの近代にあっての最有力者アルバート・パイクの著作 *Morals and Dogma* にあっての XVIII.KNIGHT ROSE CROIX の章より原文引用をなすところとして)

Man had fallen, but not by the tempting of the serpent. For, with the Phoenicians, the serpent was deemed to partake of the Divine

Nature, and was sacred, as he was in Egypt. He was deemed to be immortal, unless slain by violence, becoming young again in his old age, by entering into and consuming himself. Hence the Serpent in a circle, holding his tail in his mouth, was an emblem of eternity. With the head of a hawk he was of a Divine Nature, and a symbol of the sun. Hence one Sect of the Gnostics took him for their good genius, and hence the brazen serpent reared by Moses in the Desert, on which the Israelites looked and lived.

(補いもしながらの拙訳として)

「人間は墮落はしたが、しかし、それは「蛇による誘惑」によってではなくにものである。

何故なら、「フェニキア人」にとって蛇は神性の一部をなすものであり、同文にエジプトでも神聖なる存在であったからである（「長くなるも、」の訳注として：こうした書きよう（“ For, with the Phoenicians, the serpent was deemed to partake of the Divine Nature, and was sacred, as he was in Egypt.” との書きよう）をなしているとのアルバート・パイクについては同男パイクが（蛇を神性の一端をなすものとしてここ引用部で語られている民族である）「フェニキア人」という民族が「モロク」という「人身御供を伴った（ユダヤ教・キリスト教から見ての）異教神」と結びつけられてきたとの経緯があることをどこまで認識していたのであろうかとのことが当然に脳裏をよぎりもするところではある。というも、旧約聖書にあっては「ソロモン王」（すなわちフリーメーソンにあってその神殿が最大限尊重されているとの王）が「人身御供を伴うモロク（モレク）」らユダヤ教から見ての異教神（フェニキアと結びつけられもしている神）を崇め、女らがそれに倣って犠牲を供したとの記述が列王記（上）第 11 章 7 節から第 8 節（英語表記では 1 Kings 11:7—11:8）に認められるからである — オンライン上より PDF 形式で無償ダウンロード可能となっている日本聖書協会を刊行元とする旧約聖書にては（以下、列王記（上）第 11 章 7 節から第 8 節より抜粋なすところとして）“ そしてソロモンはモアブの神である憎むべき者ケモシのために、またアンモンの人々の神である憎む

べき者モレクのためにエルサレムの東の山に高き所を築いた。彼はまた外国のすべての妻たちのためにもそうしたので、彼女たちはその神々に香をたき、犠牲をささげた”（旧約聖書よりの抜粋部はここまでとする）との記述が認められる——（長くもなつての訳注の部はここまでとする）。

（アルバート・パイク著作 *Morals and Dogma* の訳出を続けるとして）蛇は暴力によって殺害されない場合は不死を呈すると見做されており、それ自身の皮を脱ぎ捨てることで老年にあつて再び若さを呈するようになる。その上、自身の口で尾をくわえる環状の蛇は永遠の象徴でもあつた（訳注：尾を噛む蛇としてのウロボロス紋様が永遠の象徴であるとの有名な話を指している）。

鷹の頭部を伴うところとして蛇は神性を呈しており、[太陽の象徴]でもあつた（「長くなるも、」の訳注として：*Morals and Dogma* にあつてのここにての引用パートにてアルバート・パイクは蛇は[太陽の象徴]であつた “With the head of a hawk **he (serpent) was of a Divine Nature, and a symbol of the sun.**” と書いているわけだが、同男はそうした言い分をなしているとの同著 *Morals and Dogma* にてメーソンの「Blaz|i「n」g「S」ta「r」ブレイジング・スター（こじつけがましい far-fetched と受け取ろう向きもあろうが、[響き]および[綴り]からして「Blaz|e「n」「S」e「r」pent ブレイズン・サーペントと多くを共有している語とはなる）、そのブレイジング・スターが[太陽の象徴] a symbol of the sun と見做されているとの物言いをなしもし、また、太陽の象徴と言え、[全てを見通す万能の眼]もまたそうであるとも同時に主張しているような類となる — 先にて “Foresight: and accordingly **the Blazing Star has been regarded as an emblem of Omniscience, or the All-Seeing Eye, which to the Ancients was the Sun.**” と引用なしたように主張している——（長くもなつての訳注の部はここまでとする）。

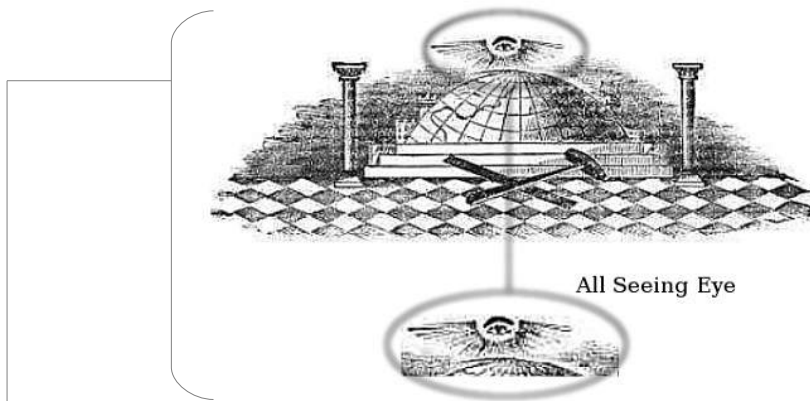
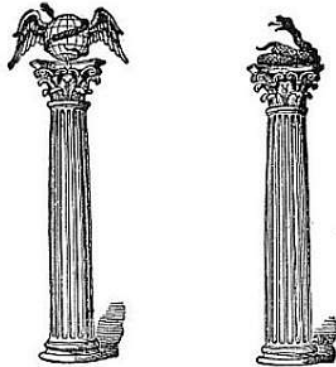
（アルバート・パイク著作 *Morals and Dogma* の訳出を続けるとして）そのうえ、グノーシス派の一セクトでは[蛇]をして良き性質の存在と見做し、砂漠にてモーセが掲げたとのブレイズン・サーペント（真鍮の蛇）はそれを見たイスラエルの民をして生きせしめたとのものである」

（以上、細かくも補いつつの訳を付しての引用部とした）

細かくも注記付しての上の引用部だけからして欺瞞性が感じられる申しようとは何なのかについてひとつ理解いただけるのではないか、とは思う（：ヤキンとボアズの柱を旧約聖書にみとめられる[真鍮の蛇]の象徴と結びつけているアルバート・パイクは、と同時に、「フェニキア人やエジプト人が蛇を崇めていたのだから人類の墮落が蛇によつてもたらされていたというのは正しい見方ではない」との意見を呈している。だが、アルバート・パイクによると[蛇を神なるものと見なしていた]とのことになるフェニキア人については[モロク]との神と結びつけられているとのことが一般論としてよく知られており、そちら[モロク]、旧約聖書にてはソロモン王 —フリーメーソンがその神殿の再現を理想とする悪鬼羅刹の類を使役したと伝わる王である— が崇拝をなしたと伝わる（ユダヤ教・キリスト教から見ての）異教神となり、かつ、旧約聖書それ自体にて[ソロモンの妻らにあたる女達が犠牲を捧げたこと]が言及されている[人身御供の焼殺儀礼を伴つての神]ともなる。また、パイクは（モロク崇拝の）フェニキア人が崇めていた蛇をして太陽の象徴と述べているが、同男パイクは同じくもの著述内にて太陽の象徴を[万物の目]や（ブレイズン・サーペントに響き近くもある）「ブレイジング・スターと同一視もしている。そこから [フリーメーソンのソロモン崇拝][フリーメー

ソンの中空より覗く一つ目のシンボリズムの重要視]に対する欺瞞性そのものに対する自己言及が透けて見えるといった見方もがなせるようになっている。—ただし、それが現実的問題に通じているのかいないのかは一部の選りすぐりの者らが蝟集しての扉の奥で何が行われているのか、あるいは、行われていないのかを把握していないとの筆者含めての [フリーメーソンから見ての部外者] には明朗には断じられないようになっている—)。

(ここまでもって[アルバート・パイク著作にてヤキンとボアズの柱が [真鍮の蛇] と結びつけられている節がある中で同メーソン有力者アルバート・パイクに [蛇] がいかように解釈されているのか指摘することにした]との脇に逸れての補足を終える)



さて、先に呈示の図にあっての下の段の図は Project Gutenberg を介して全文公開されているフリーメーソン関連の著作、

Washington's Masonic Correspondence (1915 年刊行 / フリーメーソン (Julius Sachse という 20 世紀初頭にて執筆なしていたとのフィラデルフィアのメーソン) の手になる著作)

にて掲載されている図を(以前の段でも挙げたところながら)再掲したものとなる。

アルバート・パイクの **Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry** に認められる口上によると、(以下、すぐ上の段にても引用なしたところをくどくも繰り返しもするが)、

The Solstices, Cancer and Capricorn, the two Gates of Heaven, are the two pillars of Hercules, beyond which he, the Sun, never journeyed: and they still appear in our Lodges, as the two great columns, Jachin and Boaz, and also as the two parallel lines that bound the circle, with a point in the centre, emblem of the Sun, between the two tropics of Cancer and Capricorn. The Blazing Star in our Lodges, we have

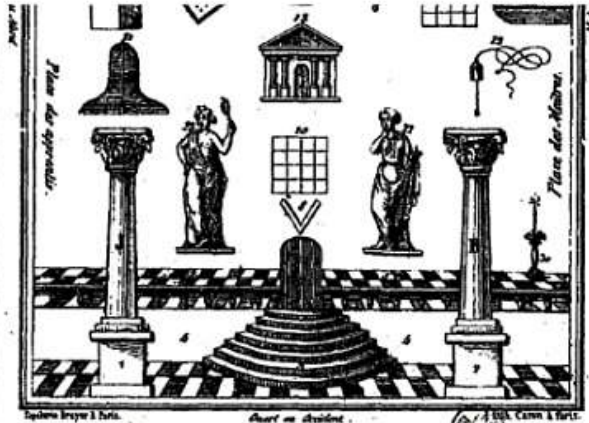
already said, represents Sirius, Anubis, or Mercury, Guardian and Guide of Souls. Our Ancient English brethren also considered it an emblem of the Sun. In the old Lectures they said: **"The Blazing Star or Glory in the centre refers us to that Grand Luminary the Sun, which enlightens the Earth, and by its genial influence dispenses blessings to mankind."** It is also said in those lectures to be an emblem of Prudence. The word Prudentia means, in its original and fullest signification, Foresight: **and accordingly the Blazing Star has been regarded as an emblem of Omniscience, or the All-Seeing Eye, which to the Ancients was the Sun.** (補いながらもの拙訳を付すとして)「**[至点]**(訳注:一般教養を出ないような話だが、[至点]とは天文学・占星術に見る夏至と冬至の現出のポイントとなる、すなわち、一年を通じて太陽の赤道からの距離が極限に達するポイントとなる)、そして、**[巨蟹宮(きょかいきゅう)および磨羯宮(まかつきゅう)]**(訳注:黄道12宮の構成要素)、そして、**[天にあってのゲートとなるところ]**は**[ヘラクレスの柱]**でもあり、それらを越えては太陽たる彼が決して旅しなかったとの地点を指しもし、我々(訳注:ここでは『モラルズ・アンド・ドグマ』執筆者たるアルバート・パイクらメーソンを指す)に**あつてのロッジにて二つの偉大なる柱、[ヤキンとボアズ]**として具現化を見てもおり、それらは換言すれば、**[巨蟹宮(きょかいきゅう)と磨羯宮(まかつきゅう)の二つの回帰線(夏至線・冬至線)の合間の中央に太陽の象徴たる環を置いたうえで境界をなす二つの対称性呈してのラインら]**となっている。我々のロッジにての**ブレイジング・スター**は既に述べているように、シリウス・アヌビス、あるいは、マーキュリー、魂の守護者にして案内人を指すものであるが、我々の古き英国の有朋ら(訳注:ここでの「英国の有朋」表記は抜粋元文書の著者たるアルバート・パイクが米国系メーソン有力者であったところ、同男が英国系メーソンを指してそうした書きようをなしているとの部となる)はそれ(ブレイジング・スター)をして太陽の象徴と考えている。古き講釈曰くのところとして、**[ブレイジング・スターあるいは(ヤキンとボアズらの二つの回帰線の間にあつての)中央にあつての光輝あるものは地球を照らす偉大なる明るき太陽、その温かみのある影響力によって人類に天恵をもたらしてきた存在である]**とされている。また、同様にそれら講釈にあつてはブレイジング・スターをしてブルーデンス、思慮分別の象徴とも語っている。プルデンシアとの語はその原義かつ最も充足的な意味合いとして**[先見の明]**を意味し、**それに応ずるところとしてブレイジング・スターは全能性、すなわち、古代人にとって太陽であったとの万物を見通す眼の象徴と見倣されてきたのである]**

とのことであるから、**中空に浮かぶ万物を見通す眼(オール・シーイング・アイ)＝ブレイジング・スターの両脇にある柱らは[ヘラクレスの柱]でもあるとの[ヤキンとボアズの柱]とのことになり、上掲図の下の段にて再掲しての図に認められる柱ら(中央に万物を見通す眼を配しての柱ら)もまた、ヤキンとボアズの柱であるとのことになる。**

ここまででソロモン神殿 — フランシス・ベーコンの小説『ニュー・アトランティス』に登場してきたソロモン(ソロモンの家)に比定できもしようとの存在 — の前に立つヤキンとボアズの柱がフリーメーソンにとり重要なシンボルとなっていることを再度もってして訴求すべくもの話をなしたところで、次いで、(ここ図を多用しての**出典(Source)紹介の部105**にての)話をとりまとめるものとしての下のような図を挙げておく。



Illustration seen in Francis Bacon's New Atlantis



- | | | |
|-----------------------------|---|-------------------------|
| 1 La Colonne Jakin. | 22 L'aplomb. | 33 La Vérité |
| 2 La Colonne Boaz. | 23 Le portail de la chambre intérieure. | 34 La fenêtre d'Orient. |
| 3 Les marches mystérieuses. | 24 La pierre cubique. | 35 Le Soleil. |
| 4 Les murailles du temple. | 25 La fenêtre du midi. | 36 La Lune. |

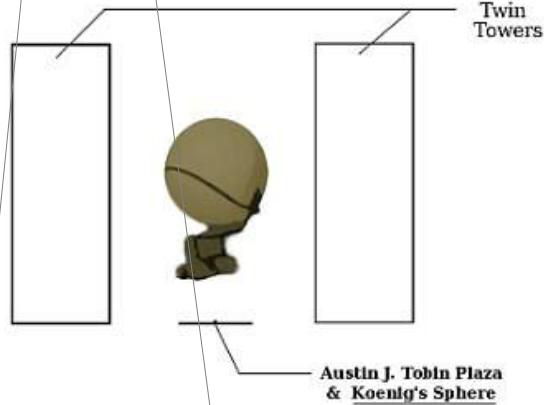
main motif

Salomon's (Solomon's) house as an incubator for advanced civilization

Jachin & Boaz of Solomon's Temple

(DVD [Fight Club] time-record (sold in Japan edition) [1:45:44] - [1:45:55] scene)

- ① blasting away with explosive
- ② rolling down to the chess-board-like-space



上掲図にての上の段、右側は

[Jacques Etienne Marconis de Negre との 19 世紀のメーソンがものした著作としてオンライン上にそちら PDF 版(1849 年刊行のフランス語書籍としての PDF 版)が現行流通している著作 **Le Sanctuaire de Memphis** にての 120 ページおよび 121 ページの間にて掲載されている図像よりの「再度に次ぐ再度の」抜粋をなしてのもの]

である。

同図にあつて「も」フランス語の **Colonne Jakin** および **Colonne Boaz** との語句の付記からも分かるようにヤキン(ジェイキン)・ボアズとしてのメーソン象徴が描かれている。

他面、上掲図にての上の段、その左側は「ヤキンとボアズが正面に打ち立てられている」ものであることで知られるソロモン神殿を露骨に想起させるソロモンの家という組織が主たる作中モチーフとなって

いる『ニューアトランティス』にて掲載の口絵を(これまたくどくも)再掲してのものとなる。同『ニュー・アトランティス』に描かれている口絵については — (そちら図像とフリーメーソン・シンボル画のヤキン・ボアズを描いた口絵ありよとの視覚的一致性については先の段にて示したこととなるが) — [ソロモン神殿を介しての意味論的なるつながり]「も」がフリーメーソン画との間に成立しているものとなる — ※『ニュー・アトランティス』の主要なる作中テーマが(先立っての段にて詳述してきたように)[ソロモンの家(サロモンの家)による文明育成の理想の呈示]とのことにあるがためにメーソン画との意味論的なるつながりが成立している(とのことが述べられる)——。

以上のこと、上記図像らにあつては([視覚的なるつながり]のみならず)[ソロモン神殿を介しての意味論的なるつながり]「も」が存在しているとのことにより、そう、

[[メーソン・シンボルら] および [ソロモン神殿の柱の間に球体を配するやりよう] (『ニュー・アトランティス』描写) の複合的つながり]

から

[ツインタワー敷設の球形オブジェの爆破を筋立てとする特定作品(『ファイト・クラブ』)に見る特定部描写] (上掲図の下側の段にてそれにまつわる場面をくどくも再掲しているとの『ファイト・クラブ』収録DVDにあつての再生時間にして[1時間45分44秒]から[1時間45分55秒]の箇所にて現出するところの場面)

にあつてのフリーメーソンの側面が

「さらにも見てとれる」

とのことになる。そのことの解説を(話が多分に脱線するようなところもあったが)ここまでなしてきた。

話が極めて長く、入り組んだ方向に向かっているとの認識がある。そこで、である。ここ出典紹介部(出典(Source)紹介の部105と振っての部)を終える前に[整理]を兼ねての表記を下になすこととする。

その点、ここまでの引用部ら・図解部らを通じて、直下にての[第一から第五と分けもしてのこら]をこの身、筆者が指摘したいのだとご理解いただけることか、と思う。

第一. [映画『ファイト・クラブ』にあつてのスフィア・イミテーション爆破シーンがフリーメーソンの「通用性が高い」図像体系と接合しているとのことが[現象]としてある]

第二. [上にいうところの図像体系は悪鬼悪魔の類を契約に基づき使役した存在であるとのソロモン王が建立させた【ソロモン神殿】(の柱)と関わるころのものである]

第三. [視覚的にツインタワーと照応する式が映画『ファイト・クラブ』にて現出している【ソロモン神殿の柱ヤキン・ボアズ】に関しては、である。それら柱がフリーメーソンにとり極めて重要なシンボリズムになっているとのことが[【ソロモン神殿】がメーソンにとり極めて重要視されているものであること] (フリーメーソンとは彼ら自身の弁によるとソロモン神殿を組織理念の中枢に据えての団体である)、そして、[初期フリーメーソンの紐帯の創始者と学者の類に論じられてきもしたフランシス・ベーコン(経験哲学の祖として教科書にお目見えしているような歴史上の人物)が[サロモンの家]をその著作である『ニュー・アトランティス』で[理想的なる文明の育成装置]として引き合いに出していること]から「も」窺い知れるようになっている(ヤキンとボアズは(引用なしたアルバート・パイク著作記述に見るように)【ヘラクレスの柱】に仮託されるものでもあるわけであるが)]

第五. [初期フリーメーソンの紐帯の創始者と学者の類に論じられてきもしたフランシス・ベーコン(経験哲学の祖としての教科書にお目見えしているような歴史上の人物)が[サロモン(ソロモン)の家]を[理想的なる文明の育成装置]として持ち出している

『ニュー・アトランティス』という著作にあってはその扉絵に「二本の柱の間に球体を据え置く構図」が配されており、そこからして映画『ファイト・クラブ』に現出している(そして諸所のフリーメーソン象徴画とも照応する)「スフィア・イミテーションの爆破シーン」と「現実世界にあってありし日そうであったツインタワーの間に配されていたフリッツ・ケーニッヒの手になるザ・スフィア」の関係性のことが想起されもするとのことがある]

以上のことに言い過ぎ・行き過ぎの類がないか、生き残るための努力をなすとの意志がある向きに確認を請いたい次第でもある。

(「長くもなつての」図を多用しての**出典(Source)紹介の部 105**はここまでとする)

(以上、ここまでもってして**I. から V. と振っての一連の部の中にあつての IV. と振っての部とする**)

さて、

「映画『ファイト・クラブ』がいかにかに「フリーメーソンの作品」なのか」

「同作『ファイト・クラブ』で描かれるファイト・クラブそれ自体およびファイト・クラブのテロ挙動にて現出するシンボリズムがフリーメーソン・シンボリズムといかに濃厚に接合するようになっているのか、および、その延長線上として何が述べられるのか」

とのことを**(I. から V. と分けもして)**問題視しているとの本段にあって取り立てて重要であると訴求したいのは次のことらである。

「ツインタワー合間のオブジェの露骨なイミテーションを用意し、それを複数ビルら発破倒壊計画の露払いとして爆破するとの粗筋を有している映画『ファイト・クラブ』にてのそちらイミテーション・オブジェ爆破シーンがフリーメーソンの象徴画ら(トレーシング・ボードら)一般の構図から当然に「ソロモン神殿の合間」にての挙動と推察されるようになっており、ツインタワーはソロモン神殿のヤキンとボアズの柱に仮託されているとの観点が出てくる(フリーメーソンリーの一般的シンボルに見る【特徴的なステップ(小階段)】/【チェス盤】/【ヤキンとボアズの柱】の配置と『ファイト・クラブ』爆破シーンの【特徴的なステップ(小階段)】/【チェス盤】/【ツインタワー(二本の柱)の合間におかれたスフィア・イミテーション】の配置との近似性についてはくどいほどに摘示してきた)」

「ツインタワーがヤキンとボアズの柱に視覚的にオーバーラップする(フリーメーソンが実際に爆破挙動にて使役されたかは論点として棚上げにしたとしても実際にオーバーラップするように「現象」としてなっている、でもいい)ようになってきているとのことがある中でヤキンとボアズの柱についてはそれら柱らが【ヘラクレスの柱】に比定される存在であるとのフリーメーソンの申しようが存在している」

上のことこそがここ本段を含む**I. から V. を包摂する部**にあつての主要テーマである、

【『ファイト・クラブ』で描かれるファイト・クラブそれ自体およびファイト・クラブのテロ挙動にて現出するシンボリズムがフリーメーソン・シンボリズムといかに濃厚に接合するようになってきているのか、および、その延長線上として何が述べられるのか】

とのことにまさに関わるところなのだが、本稿これまでの段で何度も何度も申し述べてきたところと接続するところとして、

[次のこと]

がこの世界には[現象]として具現化しているとのことがあるがゆえに同じくものことを重要となると強く訴求したいと筆者は判じているのである。

⇒

【911の事件が発生することを事前に言及しているような流通作品「ら」が現実存在している —「どういうわけなのか」存在していると申し述べてもいい— とのことがこの世界にはあり、それら予見的作品にあつては「ヘラクレス 12 功業」(なかんずく、うち、第 11 功業)との接続性「までも」が存在している —※尚、本稿ここに至るまで呈示してきた例は【黄金の林檎】(ヘラクレス第 11 功業の目標物)をタイトル副題に掲げる 70 年代欧米ヒット小説のジ・イルミナタス・トリロジーのような一例に留まるが、無論、不快な他例が存在していることも本稿のよもって後の段で紹介することとなる—]

⇒

【(これより『ファイト・クラブ』以外の他の例についても紹介していく所存だが) 911の事件の予見的言及をなしている文物にあつてはフリーメーソン象徴主義、ひいては、の中のヤキンとボアズの柱のことも関わっている作品らが「他にも」含まれておりもし、そこに見る【ヤキンとボアズの柱】については(当のフリーメーソンがそのように自認もしているところとして)【ヘラクレスの柱】に置き換えられるものである、そして、【ヘラクレスの柱】とはヘラクレス第 10 功業にて打ち立てられているものである (出典(Source)紹介の部 90)とのことがある。であるから、そこからして 911 の事件の予言的言及とヘラクレス 12 功業との繋がり合いが具現化しているとのことが問題になる】

以上が『ファイト・クラブ』とフリーメーソン・シンボリズムがいかに地続きの関係を呈しているのかをここ本段にて問題視もしていること

[そもそももってしての理由]

となりもする次第である ([知]あるいは[精神の自由度]の欠如がゆえに[問題の本質]を見極めることができない、そういう筋目の者達は誤解するかもしれないが、筆者の念頭にあるのはフリーメーソン陰謀論を展開することなどではなく、フリーメーソン・シンボリズムと 911 の前言事象が [現象]として「確として」接続しているとのことがある中でそうした [不自然なること] が [恣意の賜物] であるとして、何故、そうしたことになっているのか、とのことであり、フリーメーソンの紐帯に属しているゾンビのような存在らが [事件の演出 —直接的に飛行機でツインタワーに突撃することだけが演出ではなく、本来的にはラディカル・セクトのドグマの問題では済まされないものを[テロ]と鼓吹・呼ばわり、それを社会に押しつけることもまた[演出]である—]にいかほどまでに関与させられているのか、あるいは、いないのか、といったことははきと述べれば、(そうした筆者のこれ現行に至っての問題意識にあつては)本来的には些事・瑣末なことですらある —※糸繰り人形を動かすパペッティア、人形遣いが我々人類に何をなさんとしていると示唆しているのか(または自分達の身内で確認しあっているのか)とのことが「いかように堅い線で」推し量れるのが問題なのであり、人形らがどういう面構えをしているのかなどということはある種、どうでもいいことであろう?とのことである(芝居の演目が皆殺しの[「現実的」事前意思表示]である中で芝居に登場している人形らがどういう姿形を呈しているのかをそれに一意専心特化して細かく批評せんとするのは[馬鹿](失敬)だけであろう? でもいい) —)。

以上、申し述べたうえで (I. から V. と振ってのことらにあつての) V. のセクションに一端もってして舵を切りたい。

V.

ここまでの I. から IV. の部にあつてフリーメーソンやりよう(足跡)と映画『ファイト・クラブ』がいかように多重的に結びついているのか、現象として指し示してきたわけだが、まだまだ話は終わらないと述べるをえぬようなことが他にもある。

その点、911 の事件については

「部分的に「フリーメーソン象徴主義に通ずる」視覚的特徴を呈しながら事件(911の事件)の発生について予見的言及をなしている作品ら」

が「他にも」複数作存在しているとのことがある。であるから、ことは「極めて特殊な唯一例の話」にとどまってしまうのではないとのことで映画『ファイト・クラブ』におけるフリーメーソン・シンボリズムとの接続性が一層にして問題になる。

だが、そうもしたことを扱う V. の部の段の典拠については

「あまりにも典拠紹介の部が長くなり、話の方向性が見えづらくなるおそれが濃厚にあるととらえた」

ので続く段 — **出典(Source)紹介の部 106** 以降の出典紹介部を包含するところの段 — で「別に切り分けて」細かくもの解説をなすこととする。

さて、直近にて言及の V. の部、典拠をさらに後の段に譲ることとした部の話は後回しにするとしてうえで、ここで、一端、今まで摘示してきたことにつき「再度」の振り返り表記をなすこととする。

委細を先の段にすべて譲ったうえでまずもって振り返ればなせば、『ファイト・クラブ』という作品については — エッセンスの問題として — 次のような先覚性が具現化しているとのことがある。

(本稿にて陰謀論のそれなどではない [後追い確認容易なる具体的証拠の呈示の式] によってひたすらに指し示してきもしたところとして)

現実の911にあつてのワールド・トレード・センター倒壊事件に関しては計7棟のワールド・トレード・センターのビルらが(飛行機に突撃されたツインタワーこと1WTC および2WTC を中心として)倒壊を見た。それらワールド・トレード・センターにての計7棟のビル倒壊事件が現出した911の事件については「飛行機による激突倒壊」ではないところでの「ビル時限爆破」の可能性が建築士・爆破技術エキスパートらが多数関与しての団体であるアーキテクト・アンド・エンジニアーズ・フォー・ナイン・ワン・ワン・トゥルースによって問題視がなされている — いいだろうか、その主張の中身が真実であるか真実でないか云々以前の問題としてそういう主張がなされているとのことまでは争いのない事実であるとしてそういう問題視

がなされている— (事件後、相当時間経過しての [7WTCビル] の屋上から瞬時に崩れていくようなパンケーキ状倒壊については発破倒壊としての特徴が伴っていると一部の専門家らが主張、署名を集めて、[政府]に再調査要求を出すなどのことをなしてきた)。

そうしたワールド・トレード・センターでの悲劇については同悲劇(911の事件)が発生する数週間前(具体的には7月25日)に「近々、米国政府関係者によってビン・ラディンとアルカイダの名前を具にしての自作自演のテロ行為が国内で起こされるであろう」との予言的言及をなしていた論客とその申しようの存在が問題視されているとのことがある—これまたその主張が真実であるかどうかは置き、そうした物言いがなされて「いた」ことは衆目の一致するところで事実としての[記録化]がなされているとのかたちとなっている— (本稿にての[出典(Source)紹介の部 101]で出典となるソースを細かくも挙げている)。

そのように着目されて然るべきかたちで[発破倒壊「説」][自作自演「説」]が—その主張内容の適否は取りあえずも置いておき—取り上げられるだけの側面を伴っているとの911の事件とは

- i. [グラウンド・ゼロとの言葉が被害地に対して用いられるようになった事件]
- ii. [ビル連続倒壊(計七棟のビル倒壊)が現出した事件]
- iii. [一大金融センターが攻撃を受けた事件]
- iv. [ノースタワー、サウスタワーのツインタワーへの飛行機の突撃が現出した事件にして飛行機突撃後のツインタワーの崩落に続いて残りのワールド・トレード・センターの七棟のビルが崩落していった事件]

となる。

他面、映画『ファイト・クラブ』は

- i. [グラウンド・ゼロとの言葉をテロ対象地に用いることを念頭に暗躍している(映画冒頭部からして主犯がグラウンド・ゼロとの言葉をターゲットに対して用いている)とのテロ集団を描いている作品]
- ii. [ビルの連続爆破倒壊がテロ集団の計画で実現を見たとのことを描いている作品]
- iii. [作中、テロ集団の首魁が金融システムを攻撃することを明示しているとの作品]
- iv. [ノースタワー、サウスタワーがそそりたつワールド・トレード・センターそのものがテロ集団の連続ビル爆破目標であるとサブリミナル的に何度も何度も明示しているとの作品](ツインタワーの間に敷設されたスフィアのイミテーションの爆破やノースタワー・ビルディングとサウス・ウォークとの文字列が並列されての場面が爆破計画文書絡みのものとして一瞬出てくるとのやりよう等等)

となる。

そうした現実に見えている類似性のことをまとめて見れば、[ことの本質]が[偶然]であると見るやりよう自体が「問題あり」とのことになりそうなものであるが、さらにもって、『ファイト・クラブ』という作品については次のようなこと「も」が指摘できるようになっている。

⇒

『ファイト・クラブ』に関しては

- ・[劇中にてサブミナル描写を用いるの~~こと~~を自己言及している作品ともなり、実際に、同作では劇中での連続ビル爆破の対象がワールド・トレード・センターであるとの描写がサブミナル的になされている]
- ・[同作劇中にて[ビル爆破]と[ダイナマイト生成につながる人間石鹼の材料としてのグリセリン]と[古代の生贄の儀式]を結びつけられている(他要素と複合顧慮して、執拗性、強い悪意のようなものが露骨に感じられるとのことがある)]
- ・[映画の原作小説である1996年初出の小説版『ファイト・クラブ』からして191階建ての高層ビルが爆破対象として登場を見ているのであるが、[191]とは[911]との各桁数入れ替えナンバーである(また、現実の911の事件で標的とされたツインタワーは110階建てのビルであるが、それすらもが一時期、世界で最も高い建築物となっていたのであるから、191階とのビルは世界で最も高い建築物、しかも、異様に高いものであるとのこと、「現時から見ての」911で崩されたワールド・トレード・センターのツインタワーのことを想起させつつ、かつ、「1996年当時からして」どうしてそのような非現実的なものを持ちだしたのかとの式で異彩を放つものであったとも解される)。のみならず、1996年刊行の小説版『ファイト・クラブ』の作者チャック・パラニュークは1999年に『サバイバー』という小説(映画『ファイト・クラブ』封切りと同年に刊行の小説)を世に出しており、同小説『サバイバー』では[自殺をこととする狂信的セクトと結びつく双子]が[飛行機ハイジャック]を起こすとの内容が現出している。現実の911の事件では[狂信的セクト]によって[飛行機ハイジャック]がなされ、[双子のビル]が[自殺行為]によって被害を受けたというのがよく知られた筋立てとなっているとのことがある一方で、である]

とのこと「も」が指摘できるようになっている」

(直近、述べてきたことすべてに筆者の主観が入り込む余地もなくに後追いでできるだけの典拠を示しきっているか否かについては(執拗性、すなわち、事件背後にあつての意志表示との問題で重要なところであるとの認識がゆえに再度繰り返すところとして)是非とも本稿の先行する[出典\(Source\)紹介の部 102](#)から[出典\(Source\)紹介の部 102\(9\)](#)の内容を検証・確認されたい)

さて、直前枠内にて振り返りもしてのこと(先立って[1]から[9]と振って解説してきた内容をまとめて振り返りもしてのこと)より、

【「悪質にも」[ツインタワーおよびその近傍の連続爆破計画]に「隠喩的」かつ「サブミナル形式で」事細かに言及した映画】

となっていると述べられる映画『ファイト・クラブ』については

【フリーメーソンの側面】(およびフリーメーソンの側面を醸し出しての存在の恣意性とその恣意性の行き着く先)

が次のような観点から「当然に」問題になる」と述べられる(述べざるをえぬ)ようになっているとのことをも指摘した。

I.

『ファイト・クラブ』主人公は多重人格に陥っての慈善サークル参加者(詐病なしでまでの参加者)となり、そのオルター・エゴ(別人格)がタイラー・ダーデンとの姓名の存在である。外と内とを厳密に選別してのインナーサークル集団を育成しているそのタイラー・ダーデンのスペリングは Tyler Durden となるわけだが、

[(慈善団体としての側面を強調している)フリーメーソンには「タイラー」Tyler という職種をロッジの門衛 —内と外とを分かち、部外者を排斥する職掌— として設けている]

とのことがある(出典(Source)紹介の部 103)。

II.

映画『ファイト・クラブ』にては作中のメインモチーフであるファイト・クラブという組織体に関して

a1 [ファイト・クラブについては秘密主義的組織として邪魔者・秘密漏洩者に対し「死の制裁」を課すとの脅しを「チェス盤紋様の床の場」にてなす組織であると描写されている]

b1 [ファイト・クラブは各都市に支部を持ち、強固な組織基盤を有しているとの描写がなされている]

c1 [ファイト・クラブはありとあらゆる職種にメンバーを擁しており、彼らはテロを黙過するばかりか、促進しているとの描写がなされている]

d1 [ファイト・クラブ成員らはハグ(抱き合い)を頻繁になすと描写されている]

e1 [ファイト・クラブの面々として集まってきた者達の中でも従順性および急進性に特質がある者達を集めてビル爆破計画の実行役に仕立てていたとの描写がなされている(といったところに「インナーサークル」の問題が観念される)]

との側面が具現化している。

対して、(上記 a1 から e1 と対応関係にあるところとして)、フリーメーソンに関し

ては

a2 [フリーメーソンは秘密主義的で秘密漏洩者には[死の制裁]の課すとの脅しがあった誓約を[チェス盤紋様の床の場]にて歴年強いてきた組織である(ただし、そうした[宣誓]のかたちをとる約束事は唯名無実のものにすぎないというのがメーソンインサイダーの外向けの言い分である)]

b2 [フリーメーソンは各都市に支部(交流会館としてのロッジ)を持ち、強固な組織基盤を有している]

c2 [フリーメーソンはありとあらゆる職種にメンバーを擁しており、そうした成員らが[ブラザー]と呼んでの紐帯を保持している]

d2 [フリーメーソンの成員は特定の儀式(マスターメーソン位階への引き上げなど)の後にメンバー同士がハグ(抱き合い)をなすとの組織である]

e2 [イタリアのフリーメーソン、ロッジ P2 には軍諜報組織の主導部や現職国会議員らのイタリアの権力機構を掌握していたとの面々が参加しており、メンバー僅少の同組織体が白色テロ(反左翼テロ)としての[駅爆破事件](いわゆる[ボローニャ駅爆破テロ事件])で同事件にてイタリアでは多数の死傷者が発生)など複数の偽装テロ(共産主義者に罪をなすりつけるためのテロ)に関与したとのことが露見して問題になったことがある(また、事件に関与したロッジ P2 はメーソンに相応しくはないことをなしたとのことでメーソンから「正式に再破門」されたとのことになっているが、その後に発生したロッジ P2 人脈関連の殺人事件「でも」あいもかわらずメーソンの象徴が用いられているとのこと「も」が一同件に関しては稚拙な法螺も流されているもの—現実にある)。さらには、イタリア(元)首相であるベルルスコーニもその元メンバーであったとのロッジ P2 の首魁であるリーチオ・ジェッリ—米国諜報機関より当初、[反共要員]として助力を受け、麻薬組織やアルゼンチン独裁政権などと強固なつながりを有していたとの政治マフィア—は(逮捕・脱獄を経て)結局は法網をかいくぐり、1996年にはその前科([自国民を何人も共産主義者の犯行に見せかけての偽装爆破テロで殺してきた]との前科)にも関わらず[ノーベル文学賞候補]としてミネートされていた。といったところに[インナーサークル]の問題が当然に観念される]

とのことがよく知られている(出典(Source)紹介の部 103(2)から出典(Source)紹介の部 103(6)を参照のこと/a1 から e1 と a2 から e2 は対応関係をもたせている)。

III.

映画『ファイト・クラブ』は

[ワールド・トレード・センターのツインタワーの間に付設されていた黄金色のスフィア]

の「精巧な」イミテーション(噴水と結びつけられた特徴的なる黄金の球体オブジェ)をわざわざ用意して、それを爆破対象として描いている。

その点、現実世界にてのワールド・トレード・センター、そのツインタワーの間に置かれていたスフィアを製作した建築家はバイエルン出身の建築家、フリッツ・ケーニツヒという人間となるが、ケーニツヒというのは[王]を意味するドイツ語名詞である。

そして、ケーニツヒが彫刻したスフィアは名前・形態ともに王権象徴物(レガリアと呼ばれる一群の[王権]象徴物/日本における三種の神器のようなもの)の一つとしての外観を呈している。

したがって、映画『ファイト・クラブ』は

[王という意味の名を持つ男が用意した王権象徴物を破壊すること]

が作中にて描かれている映画(スフィアが爆破されたとの映画)であるとも述べられるわけだが(欧米人で、なおかつ、歴史に詳しい人間がアテンションを向ければ、そこまで気付くことも易々とできることか、とは思う)、フリーメーソンには

[王権や教皇権の象徴物(近代以前の旧制秩序の象徴物たるレガリア)としての冠を潰す儀式]

が沿革上、存在しているとされることがある(出典(Source)紹介の部 104)。

IV.

重要なところとして「ワールド・トレード・センターにて連続ビル倒壊事件を引き起こす」との寸刻描写(サブリミナル的描写)を含んでいるとの映画『ファイト・クラブ』にあって

[爆破されたうえで転がされたスフィア・イミテーション (現実世界でありし日にワールド・トレード・センターのツインタワーの間にて設置されていたオブジェ) が転がされているとのその場面の描写]

はフリーメーソンの通用化しての象徴主義と共通のデザインを「際立って」具現化させてのものとなっている。具体的にはフリーメーソンで用いられるトレーシング・ボードの構図がそのまま映画『ファイト・クラブ』にて表出していたザ・スフィア爆破シーンと視覚的にオーバーラップするように —(【チェス盤】【二本の柱(この場合、現実世界にてザ・スフィアの両側にあったツインタワー)】【小階段(ステップ)】の同時使用との観点から) — できあがっている。さらに述べれば、そうした視覚的接合性の芽は「意味論的接合性を伴って」フリーメーソンの紐帯の祖とも幅広くも言われている17世紀の英国の知識人フランシス・ベーコンの著作にまで遡るところとなっている(出典(Source)紹介の部 105)。

V.

911の事件については

「部分的に「フリーメーソン象徴主義に通ずる」視覚的特徴を呈しながら事件(911の事件)の発生について予見的言及をなしている作品ら」

が「他にも」複数作存在しているとのことがある。であるから、ことは[極めて特殊な唯一例の話]にとどまってのものではないとのことで映画『ファイト・クラブ』におけるフリーメーソン・シンボリズムとの接続性が一層にして問題になる(尚、問題となる他作品らについては続く段で一例を挙げて解説すること、明言なしているものらとなる)。

何度も何度も述べよう。

「以上のことらには指し示し対象の取捨選別以外、筆者の主観は介在していない」(換言すれば、「客観的に、」上記のようなことが「現象」として具現化しているとの旨、「摘示」できるようになっているとのことである)

さて、振り返っての表記をなしたところで直前の段にて「後回しにして論じる」としたこと、

V.

911の事件については

「部分的に「フリーメーソン象徴主義に通ずる」視覚的特徴を呈しながら事件(911の事件)の発生について予見的言及をなしている作品ら」

が「他にも」複数作存在しているとのことがある。であるから、ことは[極めて特殊な唯一例の話]にとどまってのものではないとのことで映画『ファイト・クラブ』におけるフリーメーソン・シンボリズムとの接続性が一層にして問題になる。

とのことについて「具体的に」これより煮詰めていくこととする。

ここではまずもって[次の作品]のことを

[予言の霊(Pytho) 一先に引き合いに出した、ギリシャ神話および聖書の使徒行伝に見るような予言の霊[パイソン]— に憑かれたが如く「前言」]

のこと「も」加味しながら問題視していくこととする。

(続いてその問題性について指摘することとなしたとの作品として)

The Towering Inferno『タワーリング・インフェルノ』(大惨事に発展していくとのビル火災を描いた1974年米国封切りのパニック映画)

具体的には上記『タワーリング・インフェルノ』——([そびえ立つ地獄]とも訳せるし、また、[偉大なるダンテ『地獄篇』](辞書にて確認いただけようが英語の形容詞[タワーリング]には[塔のようにそびえ立って不朽なる]との伝で[偉大なる]との訳振りがなされることもある語である/インフェルノとは[大火]を意味するの同時にイタリア語[地獄]転じての欧米圏『地獄篇』呼称ともなる)と訳せもするタイトルの映画作品)——が

[爆破にてワールド・トレード・センターのツインタワーを倒壊させることに言及した911との数値規則と結びつきもする映画(そして、フリーメーソンにまつわる寓意が介在しての映画)]

となっている(なっている、でもいいが)ことについて指し示しなしていくこととする。

(その点、**The Towering Inferno『タワーリング・インフェルノ』**という作品は aforesaid、「先程言及なした」ところの動画サイト YouTube にて流通を見ている、[911 Hidden in Hollywood との動画シリーズ —先述のように名乗り無しの作者・作成元に不分明なところが大でサプライヤーも複数人に及んでいるようであるとのシリーズ—]

にあつての **PartXXI** と振られてのセクションにてもその予見性が卓抜したやりかたで問題視されているとの作品となっており、筆者自身、そちら動画シリーズ(911・ヒドゥン・イン・ハリウッド)を目にしてその先覚性について教えられもした作品ともなる —※なお本稿では YouTube にて流通している表記の動画シリーズ(実に多くの作品が911の予言的描写を含んでいることを指摘しているとの動画シリーズ)では解説されていないのところについても『タワーリング・インフェルノ』という作品にまつわって問題視することとする—)

それではこれ以降、**The Towering Inferno『タワーリング・インフェルノ』**という作品にあつての

[フリーメーソン象徴主義「とも」地続きになっている予見性]

について 1. から 6. と振つての各点を通じて順次段階的に呈示していくこととする (DVD レンタルを通じて容易に後追いなせるようにしているとの式で多く呈示していく) ので、「化けの皮を剥いでやろう」との批判的視座でも何でもその適否について検証いただければ何より、と考えている次第である。

1.

まずもってそこより述べるが、映画『タワーリング・インフェルノ』は元々、二作品の小説(原著題名 The Tower および The Glass Inferno) を原作にしてのプロジェクトが「合併して」製作されたとの作品となっている。

うち、合作の元となった原作小説の一作品たる **The Tower** は

[ワールド・トレード・センター、そして、ツインタワーそのものを露骨に想起させる【ツインタワー(にてのノースタワー)近傍の超高層ビル】が火災に見舞われるとの粗筋を有した小説作品]

となっている (いいだろうか。映画『タワーリング・インフェルノ』の原作二作品のうち、一作品はワールド・トレード・センターの超高層ビルが舞台とする作品となっているのである)。

出典 (Source) 紹介の部 106

SOURCE 106



Cimabue's Celebrated Madonna (1853-5)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典 (Source) 紹介の部 106 にあつては

[映画『タワーリング・インフェルノ』が『ザ・タワー』と『グラス・インフェルノ』という二作の別個の小説を原作にしていること、そして、うち、一作品が「ワールド・トレード・センターおよびツインタワーを露骨に想起させるツインタワー(のノースタワー)近傍の超高層ビル」火災 — 爆破物人為的起爆によって発生して多くの人間を焼死させたとの火災 — を描いているものである]

このことについての世間的解説のなされようを引いておくこととする。

オンライン上より容易に確認できるところの英文 Wikipedia 特定項目、特に営利サイドの編修者がよく介在するとされることの事情もあつてであろうか、目立っての誤記誤謬が少ない傾向があるとの商業コンテンツ概要紹介部よりの引用をなしておく。

(直下、英文 Wikipedia[The Towering Inferno]項目にての現行記載内容、その冒頭部よりの引用をなすとして)

The Towering Inferno is a 1974 American action drama disaster film produced by Irwin Allen featuring an all-star cast led by Steve McQueen and Paul Newman. The picture was directed by John Guillermin. **A co-production between 20th Century Fox and Warner Bros (this was the first film to be a joint venture by two major Hollywood studios), it was adapted by Stirling Silliphant from a pair of novels, The Tower by Richard Martin Stern and The Glass Inferno by Thomas N. Scortia and Frank M. Robinson.**

(訳として)

「『タワーリング・インフェルノ』はアーウィン・アレンにプロデュースされたスティーブン・マックイーン、ポール・ニューマンらオール・スター・キャストが配されての(人気俳優総出演の)1974年初出の米国[アクションドラマ系災害関連映画]となる。同映画はジョン・ギラーミンによって監督された。同作はまた20世紀フォックスとワーナー・ブラザーズの合同製作物ともなり(本作がハリウッドの二大製作会社がジョイント・ベンチャーを組んだ初の作品ともなる)、スターリング・シリファント(訳注:脚本家)によって一対の小説作品ら、すなわち、リチャード・マーチン・スターンによる小説『ザ・タワー』とトーマス・スコーシアおよびフランク・ロビンソンによる小説『グラス・インフェルノ』から材を取られての作品となっている」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(直下、『タワーリング・インフェルノ』の原作小説のうち、一作品である『ザ・タワー』に関する英文 Wikipedia[The Tower]項目の現行冒頭部記載内容よりの引用をなすとして)

The Tower is a 1973 novel by Richard Martin Stern. It is one of the two books drawn upon for the screenplay Stirling Silliphant wrote for the movie The Towering Inferno, the other being The Glass Inferno. [. . .] In the morning mail, Will Giddings, "Clerk Of The Works," or on-site representative of the owner, "The World Tower Corporation," receives an anonymous envelope containing electrical change-order authorizations that no one in the offices of Caldwell Associates, Supervising Architects (represented on-site by Nathan Hale "Nat" Wilson) or Bertrand McGraw And Company, General Contractors, has seen before. [. . .] In the afternoon, the grand-opening celebration for the building commences and the 125th-floor Tower Room is filled with high-profile guests from Congress, the U.N., Hollywood, and the Mayor's office. During the affair, while various authorities are arguing over the change-orders and the possibility of evacuating the Tower Room, a disgruntled sheet-metal worker named John Connors, who has no idea of the thimble-rigging of the electrical system that had made it fall short of minimum safety standards, detonates a stolen bomb in the sub-basement transformer room of the giant building in order to disrupt the event and discredit the building and its owners. [. . .] All inside are instead killed by the tremendous heat generated by the "flue effect" in the central core of the building, which is the same design as the World Trade Center Towers used. A breeches buoy line is then shot from a helicopter and rigged to the adjacent World Trade Center north tower. But the chair device is only partially successful, and in the end, many of the people trapped in the World Tower Building die from the effects of the fires.

(拙訳として)

「小説『ザ・タワー』(訳注:同小説の邦題タイトルについては下に別個注記なし
しておくこととする)はリチャード・マーチン・ストーンによる1973年小説となる。
同作はスターリング・シリファントによって書かれた映画『タワーリング・インフェ
ルノ』脚本に使われることになった二作の小説のうちの一作となり、同映画に
材とされたもう一作は『グラス・インフェルノ』となる…(中略)…朝の配達にて
ウィル・ギディングス、[現場監督]すなわち[ワールド・タワー・コーポレーショ
ン]のオーナー代理としての同男はコードウエルの同僚らのオフィスにあつての
誰もが、すなわち、監督建築士ら、バートランド・マグロー・アンド社、ゼネラル・
コンダクター(ゼネコン)に属する誰もが従前顧みていなかったとの「送電設備
変更指示」がなされていたとの匿名の手紙を受け取ることになる…(中略/
中略部ではビルに不正手抜き工事があったとの言及がなされる)…午後にな
ってワールド・タワー・ビルディングのグランド・オープニング・セレモニーが
開始され、世間で注目の的となっている高名な議会、国連、ハリウッド、市長オ
フィスの関係者らでタワー125階は埋め尽くされることになった。その間、監
督責任者筋らは(表沙汰にされていない)[送電設備変更要求]について話し
あい、また、タワー・ルームを空けるべきかの問題について話し合っていたの
だが、(たまたま)不満を抱いていた板金技術者のジョン・コナーズという男が
彼自身は「送電設備らが[最低限の安全性基準]を満たしてもいなかった(手
抜き工事で満たしていなかった)こと」についてなんら把握するところもなく、た
だ単純に催しを邪魔し、また、建物オーナーらの信用を貶めるためだけに、盗
んだ爆薬を建物下層基部の変圧器設置室にて起爆させるとのことをなした
…(中略)…(爆薬起爆に起因する火災発生後の状況にて)ビルの内部
にいた人間らは「ワールド・トレード・センターのツインタワーにて用いられてい
たのと同様の」デザインを呈していたとのビル中央部にて発生していた通気
管燃焼現象による凄まじい熱によって全員殺されることになった。二分形態
をとる脱出用ラインがヘリコプターより打ち込まれて(空輸されて)、隣接する
ワールド・トレード・センターのノースタワーに向けて(業火に見舞われていた
ワールド・タワー・コーポレーションのワールド・タワー・ビルディングから)急ご
しらえで架けられることになった。しかし、階段脱出器具は部分的成功をおさ
めたにすぎず、最終的にワールド・タワー・ビルディングに閉じ込められた多く
の人々は火災によって死亡することになった」

(以上、『タワーリング・インフェルノ』原作小説『ザ・タワー』にまつわる英文ウィキペディア作品
紹介部よりの訳を付しての引用とした 一※一)

(※1 映画作品『タワーリング・インフェルノ』は二つの原作小説の結合によって
成り立っている作品であるわけだが、同じくものことについては英文
Wikipedia[Glass Inferno]にて(その記載内容より引用をなすとして) “ The
Glass Inferno is a 1974 novel by Thomas N. Scortia and Frank M. Robinson. It
is one of the two books that was used to create the movie The Towering Inferno,
the other being The Tower.” (訳として) 『グラス・インフェルノ』はトーマス・N・
スコティアおよびフランク・M・ロビンソンの手になる1974年小説となる。同
作は映画『タワーリング・インフェルノ』製作に材とされた小説の一作であり、も
う一作は『ザ・タワー』である(引用部はここまでとする)と記載されているとおり
「でも」あると一応、強調しておく)

(※2: 尚、1973年に刊行された『ザ・タワー』および1974年に刊行された『グラス
・インフェルノ』(原作小説のうち、『ザ・タワー』がワールド・トレード・センター

のノースタワー隣近所を舞台としているのに対し、こちらは設定上、具体的名称言及されずの都市にての the National Curtainwall Building というビルで火災が発生するとの作品となる) の両作品、映画『タワーリング・インフェルノ』の元となった小説らの日本語化タイトル、輸入されたうえでの邦題はそれぞれ『そびえたつ地獄』(『ザ・タワー』の日本語訳書タイトル) および『タワーリング・インフェルノ』(『グラス・インフェルノ』の日本語訳書タイトル) となっている(両作ともどもに早川書房が版元となっている)。その点、小説『グラス・インフェルノ』邦題の方が —「本来的には同作『グラス・インフェルノ』と別物であるのにも関わらず」— 映画化作品『タワーリング・インフェルノ』と同じものと国内ではなっているとのことがある(まぎらわしいところながらも)。そのようにタイトルがあべこべになっている件について和文ウィキペディアには(以下、日本語ウィキペディア[タワーリング・インフェルノ]項目にあつての[原作]の節にあつての現行記載内容よりの引用をなすとして)“日本では両者とも、炎の出ているビルと、映画とほぼ同じ THE TOWERING INFERNO のロゴをあしらった表紙の四六版で出版され、タイトルが似ているのと合わせて非常にまぎらわしい物であった”(引用部はここまでとする)と現行記載されているところである。そうしたことがあるのは[米国にての原著小説刊行]→[米国にての映画化]→[米国にての映画化後にて映画化作品を販促に用いての日本国内にての原作小説刊行]との流れがあることが自然に想起されるようにもなっていることではある)

(※3:最近になって付け加えられたものであるとウィキペディア・ダンプ・データ(ギガバイト級大容量ファイルとしてダウンロード可能なるウィキペディアの過去履歴ファイル)の経年比較から判断しているところの記述だが、現行にての「和文」ウィキペディアには(抜粋するところとして)

“(タワーリング・インフェルノ)全米公開後の1975年2月13日、ワールドトレードセンターで火災が発生。11階のオフィスから出火して隣の電話交換室へと延焼し、さらにケーブルダクトの電線を伝って9階から11階まで燃え移るという、映画の内容に酷似した被害を発生させている”との記載がなされている。

日本のネット上では不正確な日本語情報(正確には情報「未満」のデマ)で横溢している風ありと個人的に見ているところでもあるわけだが、といった中であつてであつたとしても、何故もってしてそこで[不正確なこと]

を書いているのか疑義を呈したきところとして表記の和文ウィキペディアに見る

「11階のオフィスから出火して隣の電話交換室へと延焼し、さらにケーブルダクトの電線を伝って9階から11階まで燃え移るという、映画の内容に酷似した被害を発生させている」

というのは[正しくはなき記述]と解される。

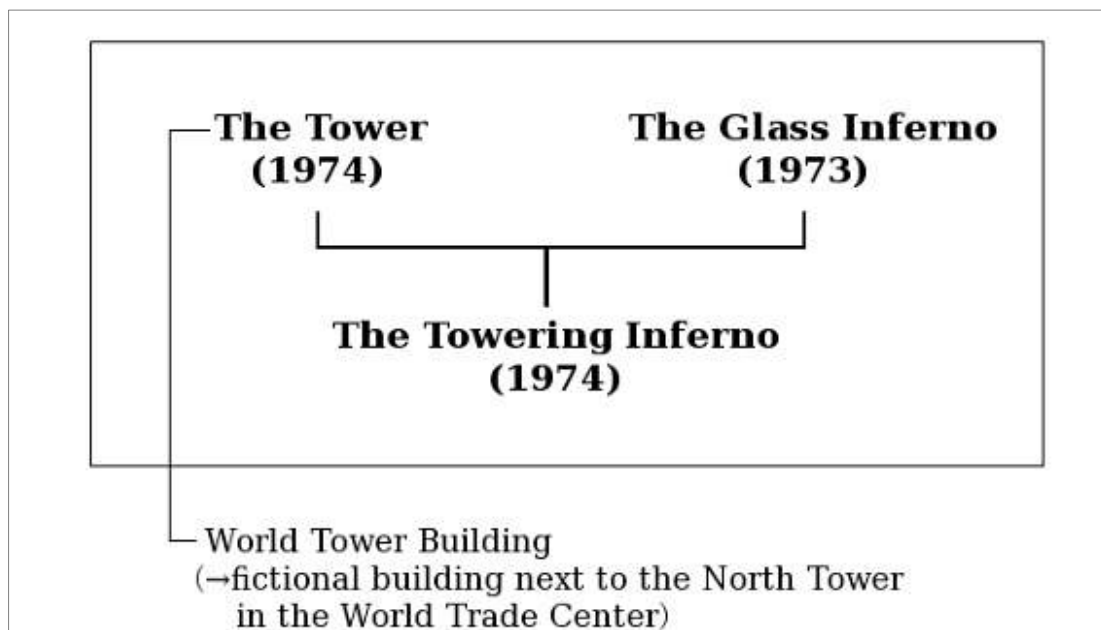
より正確にはこうである。

(以下、容易に裏取りなせるところの情報に基づいての正確な英文 Wikipedia [World Trade Center] 項目にての記述よりの抜粋をなすとして)

“On February 13, 1975, a three-alarm fire broke out on the 11th floor of the North Tower. Fire spread through the tower to the 9th and 14th floors by igniting the insulation of telephone cables in a utility shaft that ran vertically between floors. Areas at the furthest extent of the fire were extinguished almost immediately and the original fire was put out in a few hours. Most of the damage was concentrated on the 11th floor, fueled by

cabinets filled with paper, alcohol-based fluid for office machines, and other office equipment. Fireproofing protected the steel and there was no structural damage to the tower. In addition to damage caused by the fire on the 9th - 14th floors, water from the extinguishing of the fires damaged a few floors below. At that time, the World Trade Center had no fire sprinkler systems.” (訳として)「1975年2月13日、(ツインタワーにあっての)ノースタワー11階の三箇所から非常火災が発生した。火勢はビルに水平に走っていたユーティリティ・シャフトの電話線を燃やすとのかたちにてタワーにあっての9階から14階にまで及んだ。紙類およびオフィス機器のためのアルコールを主とした液体、そして、他のオフィス設備にて満載であったキャビネットによって燃やされるのかたちにて火災被害の過半は11階に集中していた。耐火材料が鉄鋼部を保護、それがゆえに、タワーそれ自体には何ら構造的被害はなかった。9階から14階にての火災によって生じさせしめられた火災被害に加え、消火のための水が下部2、3階の階層に損傷を与えた。往時、ワールド・トレード・センターは火災消火用スプリンクラー設備を伴っていなかった」(訳付しての引用部はここまでとしておく)

和文ウィキペディアには本稿執筆時にあっての現行、九階から十一階と書いてあるが、正確には11階の三箇所から非常火災発生して発火しやすい性質の物資で満ちていた11階を中心に九階から十四階が被害に遭っているとのことであるとされているのだ。その点、この身、筆者としては[過(あやま)てる予見的状況にまつわる認識]が世に広められることを望ましくはないとみている。であるから、そうしたことにまでここでは付記している)



上図にてまとめているように映画『タワーリング・インフェルノ』(1974年封切り)については1973年刊行の小説『グラス・インフェルノ』および1974年刊行の小説『ザ・タワー』の二作を合作させての作品となっていることが知られているわけではあるが、うち、1974年刊行の『ザ・タワー』にあってはワールド・トレード・センターにあってのツインタワーの片割れ、ノースタワー・ビルディングに「近接する」ワールド・タワー・ビルディングという架空のビルが「手抜き工事(電気系統にあってビル建設計画にて顧慮されていなかった手抜きがなされての工事)」と「不満を持つ人間による爆発物爆破」で大災害に見舞われることになった —そして、内部にいた人間が多数、閉じ込められて焼き殺された— との内容の作品となっている(上にて当該作品にまつわる英文ウィキペディア記載よりの引用なししているとおりである

／問題はそうした『どうしてこういう粗筋の作品が？』との心証を抱きたくもなる『ザ・タワー』を原作とする映画『タワーリング・インフェルノ』が相応の色彩(後述)を伴った予見的作品となっていることである。

(出典(Source)紹介の部 106 はここまでとする)

2.

映画『タワーリング・インフェルノ』は「ビル火災をそれ以外に鎮火させる手法はない」とのことで爆弾(C4爆弾)を設置して屋上の貯水ポンプを爆破するとの筋立てが現出している映画である(:映画『タワーリング・インフェルノ』の複数原作小説らのうちの一作品たる『ザ・タワー』が —先述のように—【手抜き工事】と【不満を抱いた者による爆発物爆破】の双方に起因するところとして炎熱地獄と化した状況を描いているのに対して映画化版では(原作小説では人間大量焼死の元凶であったとの)[爆破プラン]が一転、救世主として登場してくる)。

出典(Source)紹介の部 106-2

SOURCE 106(2)



Cimabue's Celebrated Madonna (1853-5)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典(Source)紹介の部 106 (2) にあっては

[映画『タワーリング・インフェルノ』は「ビル火災をそれ以外に鎮火させる手法はない」とのことで爆弾(C4 爆弾)を設置して屋上の貯水ポンプを爆破するとの筋立てが現出している映画である]

このことについての典拠を挙げておく。

(直下、英文 Wikipedia[The Towering Inferno]項目にての Plot の部、現行記載内容よりの
掻い摘まんでの抜粋をなすとして)

Architect Doug Roberts (Newman) returns to San Francisco for the dedication of the Glass Tower, which he designed for owner James Duncan (Holden). At 138 stories (1,800 ft/550 m), it is the world's tallest building. Shortly after his arrival, an electrical short starts an undetected fire on the 81st floor while Roberts accuses the building's electrical engineer, Roger Simmons (Chamberlain), of cutting corners. Simmons insists the building is up to current safety standards. [. . .] The fire department quickly arrives to tackle the blaze, which quickly escalates to a multiple-alarm fire. SFFD 5th Battalion Chief Michael O'Halloran (McQueen) forces Duncan to evacuate the party guests in the Promenade Room on the 135th floor, directing them to express elevators.[. . .] By this point, the electrical wiring is causing fires to break out all over the building whilst a full scale evacuation is underway.[. . .] **A SFFD Deputy Chief (Coleman) summons O'Halloran with a plan to explode the million-gallon water tanks atop the building in an effort to extinguish the fire. Knowing it could result in his death, O'Halloran meets with Roberts and they set C-4 on the six water tanks on the 138th floor.** They return to the Promenade Room, where the remaining guests tie themselves to heavy objects. O'Halloran, Roberts, Duncan, Claiborne and several party-goers survive as thousands of gallons of water rush through the building, eventually extinguishing the flames. Some, including the mayor, perish.

(補ってもの訳として)

「ビル建築士ダグ・ロバーツ(演:ポール・ニューマン)はオーナーのジェイムズ・ダンカン(演:ホールデン)のために彼がデザインした[グラス・タワー]落成式のため、サンフランシスコに戻ってきた。138階建て(1800フィート=550メートル)となり、同ビルは世界で最も高いビルだった。彼ダグ・ロバーツの到着後間もなくして、ロバートがビル配電技師のロジャー・シモンズ(演:チェンバレン)が(ピンハネのために)予算切り詰めなしていたことを批判していたまさにその時、81階にての電気ショートが(そのありようを検出されないまま)火災を発生させていた。(ピンハネをなした配電技士の)シモンズはビルは現在の安全基準を上回るものであると強調していた。…(中略)…複合非常火災へと発展したとの火炎に対処するため、消防署の面々が素早くもかけつけてきた。サンフランシスコ (訳注:「映画の」タワーリング・インフェルノの舞台はサンフランシスコとなっている。原作小説ならぬ映画版の方「でも」視覚的側面も含めて—後述するようなかたちでの視覚的側面も含めて— ニューヨークのツインタワーを想起させるような世界最高層ビルになっているわけだが、その一方で映画版では世界最高層のビルとしてサン・フランシスコのグラス・タワーなるものが持ち出されている) の消防署第五大隊のチーフであるマイケル・オハラハン(演:スティーブ・マックイーン)は来賓客らをエレベーターの方に誘導指示しながらダンカン(ビル・オーナー)に対して来賓らをビル135階のプロムナード・ルームに避難させるよう強要した。…(中略)… この段階に至るまで全面的

避難策が進行している間、電線がビル全体に火を波及させているとの状況になっていた。…(中略)… サンフランシスコ消防署の本部長補佐(演:コールマン)は「消火の試みとしてビルの最上階に据え付けられている100万ガロンの貯水槽を爆破するとの計画」のためにオハラハン(訳注:ポール・ニューマン演じる建築家ダグ・ロバーツと並んでタワーリング・インフェルの主役級の人物となっているスティーブ・マックイーン演じる消防士チーフ)を呼び寄せた。それが自身の死につながりうると知ったうえでオハラハンはロバーツと合って示し合わせ、138階にての6つの貯水タンクにC4爆薬をセットした。彼らは(爆破とそれに続く水流の到来に備え)ビルに取り残された来賓客らが自分達の身体を重たいものにしばりつけていたとのそのプロムナード・ルームに戻った。オハラハン、ロバーツ、ダンカン、クレイボーンおよび幾人かのゲストは大量の水がビルを通じて押し寄せてくる中、生き残ることになり、結果的に火は消し止められた。市長を含む何人かは死ぬことになった」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

([出典\(Source\)紹介の部 106\(2\)](#)はここまでとする)

3.

映画『タワーリング・インフェルノ』(先程にあつて説明のなされようを引いたように「ツインタワー火災をモデルにしての小説」と「他小説」を原案とする別個に進行していた映画化企画が融合を見、複数の映画会社「ワーナー・ブラザーズと20世紀フォックス」がアライアンスを組んで製作されたとの作品)では

「ビル爆破のシーンの直前に911と「結びつく」数値」

が出てくる(:正確には180°時計まわり回転させる「円運動による逆転をなす」と[911]になるとの[116]との数値が表示されてくる。それにつき、原作小説『ザ・タワー』にあつての「爆破によるワールド・トレード・センターのツインタワー隣近所での人間大量焼死」との結末(先述)と逆転させると「爆破による鎮火と人々の救済」との「映画化版」設定になりもするとのまさにそこに関わるところで[911]との数値が出てくる、とも述べられる)。

については米国ではかの「911の事件」が発生する「前」から警察および急患消防の呼び出し窓口が911番であった、すなわち、タワーリング・インフェルノで重要な役割を果たした「消防」の窓口が「911」番であったとのこと「も」それに関して意味性を感じさせるところとなりもする。

[出典\(Source\)紹介の部 106\(3\)](#)

SOURCE 106(3)



Cimabue's Celebrated Madonna (1280-85)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典 (Source) 紹介の部 106(3) にあつては

[映画作品『タワーリング・インフェルノ』にあつてはビル爆破のシーンの直前に [911 と結びつく数値] が出てくる (180°時計まわり回転させる 一円運動による逆転をなす— と [911] になるとの [116] との数値が表示されてくる) とのことがある]

[米国ではかの [911 の事件] が発生する「前」から警察および急患消防の呼び出し窓口が 911 番であった、すなわち、タワーリング・インフェルノで重要な役割を果たした [消防] の窓口が「911」番であったとのことがある]

とのことらについての典拠を挙げておく。

まずもって、

[映画作品『タワーリング・インフェルノ』にあつてはビル爆破のシーンの直前に [911 と結びつく数値] が出てくる (180°時計まわり回転させる 一円運動による逆転をなす— と [911] になるとの [116] との数値が表示されてくる) とのことがある]

とのことについてであるが、同点については[誰でも映像的論拠として容易に確認できようところのもの]として挙げることにしたところとして国内にて広く流通している(従ってレンタルも容易になようとの)DVD『タワーリング・インフェルノ』を借りてみる、そのうえで、

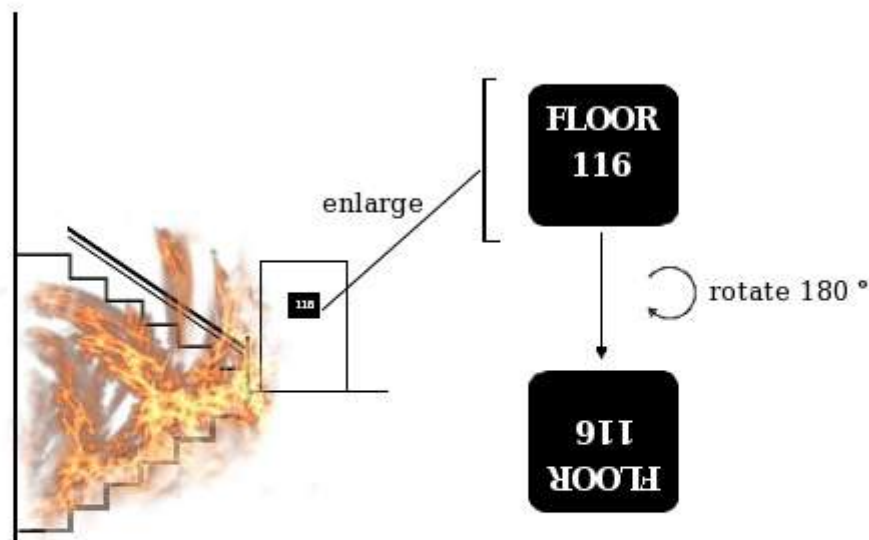
【(秒単位で指摘するとして)再生時間2時間30分57秒後のシーン及び再生時間2時間33分56秒のシーンとして表示されてくる数カット】

を「映像一時停止」するなどしてご覧いただきたい。

ビル上階にての

【C4爆弾による爆破試行】

に紐づくシーン、ビル上階階段部に火災が及んでいるとのシーンにて壁面に【116階を示すプレート】が表示されていることが分かるようになっている。以下にての再現図を参照のこと。― (非常階段のシーンとしての階数表示ではそこだけが目立つようになっている)。



(approximately)
**composition of one scene of
The Towering Inferno (1974 film)
related with [the situation of setting C-4s] |
(⇒ DVD (sold in Japan) time-record :
[2:33:56])
hour minute second**

次いで、

[米国ではかの【911の事件】が発生する前から警察緊急呼び出し窓口と連絡先を共有するところとしてタワーリング・インフェルノで重要な役割を果たした【消防】の窓口が「911番であった】

とのことについての出典を挙げることにする。

に関しては「社会の常識的知識にまつわたりの」極々基本的なところ、

[英文 Wikipedia [Emergency telephone number] 項目 ([緊急電話番号] 項目) にての North America の箇所]

の参照をなすことでも容易に確認できることとして、United States of America の緊急番号は Police (警察) Ambulance (救急搬送) Fire (消防) すべて 911 となっている (: 対して同項目の Japan の部にては [Police (警察) ⇒ 110]、[Ambulance (救急搬送), Fire (消防) ⇒ 119] と [日本での常識] となっていることが記載されている)。

以上のようにアメリカ合衆国で警察呼び出し・緊急搬送・消防案件すべて 911 番が緊急番号となっているわけだが、一不実なる者がそこに [人間レベルの「常識的な」恣意] の問題をそれを理由に無理矢理こじつけてきもしそうなところでもあると考えながら「も」敢えてそうしたことより指摘するとして— 映画『タワーリング・インフェルノ』の公開時(1974)には「既に」911 番が警察・消防・急患車輛の呼びだし番号となっていたとのことを強調すべくも英文 Wikipedia [9-1-1] 項目にての History の節より掻い摘まんでの抜粋を下になしておく。

(直下、英文 Wikipedia [9-1-1] 項目にての History の節にあつての現行記載内容よりの引用をなすとして)

The first known experiment with a national emergency telephone number occurred in the United Kingdom in 1937, using the number 999. The first city in North America to use a central emergency number (in 1959) was the Canadian city of Winnipeg, Manitoba, which instituted the change at the urging of Stephen Juba, mayor of Winnipeg at the time. **Winnipeg initially used 999 as the emergency number, but switched numbers when 9-1-1 was proposed by the United States. In the United States, the push for the development of a nationwide American emergency telephone number came in 1957 when the National Association of Fire Chiefs recommended that a single number be used for reporting fires. [. . .] In 1968, 9-1-1 became the national emergency number for the United States.** Calling this single number provided a caller access to police, fire and ambulance services, through what would become known as a common Public-safety answering point (PSAP).

(逐語訳ではなく大要訳をなすとして)

「999 との数値を用いて最初の国家的緊急番号の試行は英国にて 1937 年にてはじまった (訳注: 対して木造住宅が建ち並び火災に弱い、それゆえ、arson、放火の罪には厳罰をもって処すとの当然なる法整備がなされているとの日本ではそれ以前から— 後述するが— [専用の消防番号としての「119」番] がもうけられていたと一般に説明されている)。最初の北米にての中央緊急電話番号の使用はカナダの都市ウィニペグではじまった。カナダはウィニペグでは [999] が採用されたが、米国にては [911 番] を用いることが提案された。米国にては米国防火協会にての単一番号への推奨もあり国内横断型の緊急番号の配備が 1957 年より実現化を計られるようになり、1968 年にて [911] 番が米国にての緊急番号となった。 公共安全応答圏にいる限り、この単一番号に電話することで電話発信者は警察、消防および緊急搬送サービスにアクセスできるようになった」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

すなわち、[911 番の使用は米国にては 1957 年に提案され、警察・消防・緊急搬送のための単一連絡番号たる [911] が 1968 年から米国全土での配備を見ている] とのことが [史実] としてそこにあるとの指摘がなされている。

脇に逸れての話として

尚、米国にての911番については、(以下、英文 Wikipedia[North American Numbering Plan]項目冒頭部より引くとして)、

9-1-1 is the emergency telephone number for the North American Numbering Plan (NANP), one of eight N11 codes. (訳として)「8つのN11コードの一つとして911は北米圏にての緊急電話番号となっている」(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

とされているが、さらにそこに見る[N11 codes]らに通ずる他ナンバーについては英文 Wikipedia[N11 codes]項目にあつて各ナンバーが次のように案内されているところである。

2-1-1: community services and information「211番:地域サービスおよび情報」

3-1-1: municipal government services, non-emergency「311番:地方自治サービスについて;緊急ではない場合」

4-1-1: directory assistance; exception is Texas, which most of it requires「411番:住所氏名録についての補助;ただしテキサスには例外となるところがある」

5-1-1: traffic information or police non-emergency services「511番:交通情報および警察に関する緊急時ではないサービス案内」

…(ナンバーが911まで続けて表記され)…9-1-1

そのN・イレヴン・コード — ナンバー・「イレヴン」・コードと「11」と結びつけられての電話番号割り振り規則— の中でも[際立ったもの]としてここで取り立てて問題視しているのは「911番」である。

同911番については各国ともに緊急番号としての事情があり、英文 Wikipedia[Emergency telephone number]([緊急番号]項目)にての一覧表記されている採用国を順々に表記すると、

Botswana(ボツワナ)、Jordan(ヨルダン)、Armenia(アルメニア)、Fiji(フィジー)、Canada(カナダ)、Mexico(メキシコ)、Cayman Islands(ケイマン島)、Costa Rica(コスタ・リカ)、Dominican Republic(ドミニカ)、El Salvador(エルサルバドル)、Nicaragua(ニカラグア)、Panama(パナマ)、Ecuador(エクアドル)、Uruguay(ウルグアイ)、Venezuela(ベネズエラ)、Guyana(ガイアナ)

が[警察呼び出し][緊急搬送][消防]のいずれかないし複数のための連絡先として911を採用していることが確認とれるようになっている(であるから、疑わしきにおかれては Wikipedia[Emergency telephone number (緊急電話番号)]項目にての一覧表記にて上記国名の部を参照されたい)。

また、日本については[9110]を緊急ではない警察の呼び出し窓口となっていることもよく知られていることだが(といったことは世事に疎く、なおかつ、疑わしいとの向きに

あられてもすぐに確認いただけるとのことなのでここでは出典を付さない)、同じくもの日本では、(これは言うまでもない常識の問題として)、

[米国にて警察消防呼び出し共用窓口が911となっていることを想起させるように消防緊急の窓口として(911を左右読み逆転させての)119が採用されている]

とのことがある。

そして、米国にての消防を兼ねる「911番」の提案が1957年、全国採用が1968年であるとされるのに対して、日本にての消防番号としての役割をもつての「119」の採用は昭和2年(1927年)に遡ると説明されている。

(:和文ウィキペディア[119番]項目にての[歴史]の節にては(その現行記載内容を引用するところとして)

“1917年(大正6年)4月1日電話による火災報知が制度化された。当時は電話は交換手に通話先を伝えてつなぐ方式だったため、交換手に「火事」と言えば、そのまま交換手が消防につないだ。1926年(大正15年)に電話がダイヤル式となったため112番が緊急通報用に定められたが、翌年、**1927年(昭和2年)に119番に改められた**。その経緯は、当時一般的だったダイヤル式の電話で、一番早くダイヤルできるのが「1」であり、その次が「2」「3」となり、一番時間がかかるのが「0」である。しかし、電話が普及して間もない頃で、かけ間違いが多発したため、地域番号として使用されなかった「9」を使用することによって間違いを減らそうとしたことがきっかけである。早くダイヤルするために「1」を二回続けたあと、緊急時にも心を落ち着かせ、最後の1つを回せるように時間のかかる番号「9」を使い、「119」がわりあてられたという説があるが、本来は誤りである”

(引用部はここまでとする)

と記載されている。以上のような歴史的経緯が真正なものであるのならば、英国の999番の使用開始時期(先述)とされる1937年より日本の119番の歴史は10年あまり先立ってのものになることになる)

(脇に逸れての話が続けるとして)

その点、本稿筆者としては(米国を中心にしての)911番にしる、(日本にての)119番にしる、それらが[11]との数値と親和性が高い(というのも各桁の和が $9+1+1=11$ となるからである—また、米国にあっては[緊急相談番号の割り振り規則]がナンバー・イレブン・システムとの式でそれ自体が11と結びついていることについても先述のことである—)ことに着目している。

何故か。

第一に世界中の各国の緊急電話番号が[11]との関連性を想起させるものとなっていることがある(後述なす)。

第二。11とこれ極めて濃厚に結びつく緊急番号呼び出しでやってくるのは[サイレン]を連呼させてのパトカーないし消防車ないし救急車ら緊急車両だが、(警笛ともな

る) 拡大音発生機構であるサイレンの語源となっているギリシャ神話の妖異 [サイレン] が極めて重大な ー無論、悪い意味で重大なー 象徴的存在となっていると判じられるだけのことがあり、については同じくものサイレンを史上初めて登場させている叙事詩『オデュッセイア』が、

[粒子加速器実験(LHC 実験)の命名規則に複合的に関わっているとの側面を本稿にて指摘してきた叙事詩]

であり、なおかつ、

[911の事件と通ずる要素「とも」通じている叙事詩]

であり(この段階で妖異サイレンと911が結びつく)、さらにもってして、

[[トロイアの寓意](ヘラクレス第11 功業に登場した[黄金の林檎]にて崩壊した都市トロイアの寓意) 及び[[アトラスの娘カリュプソの島と同一視されもしてきたアトランティス]の寓意]と接合する叙事詩]

であるとのこと、その叙事詩『オデュッセイア』の ー11にの後にくるー 第12歌に登場してくるのが人面鳥身の妖異サイレン(冥界の女王ペルセポネの侍女らに変じた存在ともされる鳥身人面の妖異) となっているところを軽んじざるべきところとしてこの身は見ている(：叙事詩『オデュッセイア』との兼ね合いで何がどう問題となるかについては本稿全体をきちんと検討なさねば ー自分自身で考えるとの能力を、換言すれば、「意志」の力を持つとの人間が全面検討なさねばー 理解なしにただけるであろうとも思うのだが、端的には本稿にての**出典(Source) 紹介の部 82** およびそれに続いての解説部や**出典(Source) 紹介の部 90(7)**から**出典(Source) 紹介の部 90(10)**を包摂する解説部にて同古典にてどういったことが問題になるかの指し示しに注力している(のでそうもしたところをご覧いただきたいと述べておく)。

尚、本稿にての**出典(Source) 紹介の部 65(2)**および**出典(Source) 紹介の部 82**で解説しもしたことを繰り返すが、叙事詩『オデュッセイア』登場のサイレン(セイレーン)ありようについては ー岩波文庫版『ギリシャ神話』(アポロドーロス著)にてよりの引用を再度もってなすとしてー 次のようなものであると紹介してきたとの経緯がある。

(直下、岩波文庫版『ギリシャ神話』(アポロドーロス著)にてのオデュッセウスが魔女キルケーの元から出立してのすぐ後のことにまつわる言い伝えを解説しているとの p.205 から p.206 よりの「再度の」引用をなすとして)

キルケーの所に来て、彼女に送られて海に出て、セイレーンの島を通過した。セイレーンはアケローオスとムーサの一人たるメルポメネーの娘で、ペイシノエー、アグラオペー、テルクシエペイアであった。この中の一人は豎琴を断じ、一人は唄い、一人は笛を吹き、これによってそこを航し過ぎる船人を留まるように説かんとしたのである。太腿(ふともも)から下は彼女らは鳥の姿をしていた。これを過ぎる時、オデュッセウスはその歌を聞こうと欲して、キルケーの教えにより仲間の耳を蠟(ろう)で塞いだ。自分自身はマストに縛りつけるように命じた。そしてセイレーンたちによって留まるように説かれ、縛めを解いてくれるように頼んだが、仲間の者はなおさら彼を縛り、かくして航し過ぎた。**セイレーンは、もし船が航し過ぎることがあれば死ぬという予言があった。かくして彼女らは死んだ。この後二つの道に来た。一方には漂い岩が一方には巨大な断崖があった。その中に一つに、**

クラタイイスとトリエーノスまたはポルコスの娘で、その顔と胸は女で、その脇腹より犬の六頭十二足が生えているスキュラがいた。一方の断崖にはカリュブディスがいて、彼女は一日に三度水を吸い込み再び放出するのである。キルケーの教えにより「漂い」岩の航路を避けて、スキュラの断崖を過ぎて航して際に、艦(ろ)に武装して立った。しかしスキュラが現われ、六人の仲間を掠って彼らを食い尽くした。そこより太陽神(ヘーリオス)の島トリナーキアーに來た。そこで牡牛が草を食っていたが、彼は風に止められてそこに留まった。しかし仲間の者が食物に窮して牡牛の中の幾頭かを屠殺して宴を張った時に、太陽神(ヘーリオス)はこれをゼウスに知らせた。そしてゼウスは海に出た彼を雷霆で撃った。船が壊れ、オデュセウスはマストにしがみついてカリュブディスへと來た。カリュブディスがマストを飲み込んだ時に、頭上に懸(かか)って生えていた野生の無花果をつかんで待っていた。そしてマストが再び投げ上げられたのを見た時に、この上に飛び降り、オーギュギアー島へ運ばれていった。そこでアトラーズの娘カリュプソーが彼を迎え入れ、床をともにして、一子ラティーノスを生んだ。

(再度の引用部はここまでとする)

以上のように『オデュッセイア』(の第12歌)にてはサイレン(サイレーン)・スキュラ・カリュブディスが「難所の体現物としての三大怪物」として登場することで知られている。

そして、うち、セイレーン(サイレン)、ここ本段にてその名を持ちだしている存在がパトカーや消防車・救急車ら緊急車輛の警報装置サイレンの由来となっている。

それについては極めて基本的なこととして英文ウィキペディアに次のように記載されているところとなる。

(直下、英文 Wikipedia[Siren (Alarm)]項目よりの引用をなすとして)

In 1819 an improved siren was invented and named by Baron Charles Cagniard de la Tour. De la Tour's siren consisted of two perforated disks that were mounted coaxially at the outlet of a pneumatic tube. One disk was stationary, while the other disk rotated. The rotating disk periodically interrupted the flow of air through the fixed disk, producing a tone. **De la Tour's siren could produce sound under water, suggesting a link with the sirens of Greek mythology; hence the name of the instrument.**

「1819年、カニヤール・ド・ラ・トゥール男爵によって改良版サイレンが発明され、その命名がなされることになった。ド・ラ・トゥールのサイレンは二つの穿孔された盤が同軸上に気送管の上に取り付けられていたとのものであった。うち、ひとつの盤は固定されていたものであったに対して、もう一つの盤は回転した。回転する盤が周期的に固定された盤を通じて空気の流れを妨げ、によって、音声が生じることになっていた。ド・ラ・トゥールの(改良版)サイレンは水面下でも音を発することができ、それゆえ、器具名称だけではないとのかたちでギリシャ神話のサイレンとの結節点を示すとのものとなっていた」

(引用部はここまでとする 一※一)

(※英文 Wikipedia の表記項目については注記番号が振られており、そこにては Charles Cagniard de la Tour がいかに自身の発明品サイレンとギリシャの人面鳥身の妖異サイレンを結びつけているか、の表記もなされている。(訳はいちいちもって付さぬが)
“If one runs water through the siren, instead of air, it still

produces sound even though it is fully immersed in this fluid, and the same number of shocks produce the same number of audible vibrations as in air. It is because of this property of making sound in water that I thought I could give it the name by which it is designated.” とのかたちで、である)。

さて、[11と結びつく番号] (込み:ナンバー 911) へのダイアリングの「後」に「サイレンの音」(ギリシャ神話のサイレン(セイレーン)に由来する装置の発する音) が響いてくるとのことは

「『オデュッセイア』(本稿にて911の事件との関連性を延々細々と解説してきたとの欧米圏源流古典のうちの一作)における「第11歌の後にある」第12歌とサイレンが結びついていること」

を強くも想起させると本稿筆者はとらえている。

(:但し、「それだけを問題にするのならば、」関連する情報につき把握していない向きには

『ただのこじつけだろう』(あるいはより直截的に『どうかしていると思えない飛躍を含んだ物言いだ』、か)

と見做されるような性質の話であることも重々承知の上ではある。

しかし、だが、本稿にての補説1および補説2の部 — 現行は補説4の部にいる — で「先行的に」取り上げている、

【[ブラックホール生成問題に対する予告があった言及]との接合点】

【[911の事件の発生に対する事前言及]との接合点】

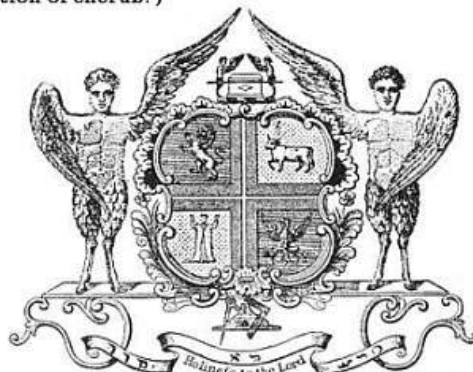
との特性を伴っている作品、タイトル名にサイレンを冠する『ザ・サイレンズ・オブ・タイタン』(邦題タイトル『タイタンの妖女』)こと The Sirens of Titan という作品にあっての — 著名な他作品『2001年宇宙の旅』こと 2001: A Space 「Odyssey」と通じもしての — ありようといったことを顧慮すれば、そうは、『こじつけだろう』(あるいはより直截的に『どうかしていると思えない飛躍を含んだ物言いだ』)とは — 暗く愚かであるか、あるいは、それ以前にそもそももって脳の機能が物理的に制約を受けているのならば格別 — 無条件には受け取れはしないところであろうと明言しもする次第ではある(サイレンを題名に含む作品『ザ・サイレンズ・オブ・タイタン』にあっての際立って問題となる側面、サイレン登場の叙事詩『オデュッセイア』に通ずるところでの【[ブラックホール生成問題に対する予告があった言及]との接合点】【[911の事件の発生に対する事前言及]との接合点】を論じてきたのが本稿であるわけであるが、ここでは【[サイレン]と[911](にまつわる電話番号設定規則)の接合】について — そこまで指摘する必要があるのかと筆者自身考えてもいるのだが — 微に入っただけの話をしてることを把握いただきたいものではある))



Siren



[Cherubim] & [Ark of the Covenant]
(double meaning I consider, it is probable, because the above creatures' design looks like sirens' one and differs from the biblical description of cherub.)



*The Arms of the most Ancient & Honorable Fraternity
of Free and Accepted Masons.*

上の図像らは本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 65 \(2\)](#) で挙げた Siren らの図の再掲となる。

それら図像に関するところとして先だっとなしてきた解説を(多くそのままに)ここにて繰り返すこととする。

最上段右側。同図、Project Gutenberg にて公開されている *Curious Creatures in Zoology (1896)* という書籍に掲載されているとのサイレンを欧州人が往古いかようにして描いていたかについての紹介図像となり、「Pompeii (火山噴火で丸ごとタイムボックスとなった古代都市ポンペイ) の遺物構図を再現したものである」と(同古書にて)紹介されているものとなる。

対して、最上段左側。同文に Project Gutenberg にて公開されているとの *MYTHS OF GREECE AND ROME* との著作、そこにて掲載の彫像写真となる(書籍刊行往時にてはアテナの美術館にて収蔵されていたとのことが明示されているサイレン像)。

中段。フリーメーソンの交流会館たるロッジ、の中でも影響力が強かったとされる本源的ロッジ、Ancient Grand Lodge of England を表象するシンボルとしてかつて使用されていた紋章とのことで英文 Wikipedia [Ancient Grand Lodge of England] 項目に掲載されている図葉を挙げたものとなる。同図葉についてフリーメーソンは

「そこにて描かれているのは船乗りを座礁・溺死に誘うとの妖異サイレンなどではなく、Ark of the Covenant (モーセが十戒を収めた契約の箱／呈示のフリーメーソン・シンボルにもそれと思しき箱状のものが中央上部にて描かれているとのもの) とワンセットに描かれるキリスト教神学体系における智天使 (Cherub ケルブ)] である」

との強弁をなすことか、とも思われはするが、その図葉化のありようは [ケルビム] などではなく [サイレン] であろうとのものである (: 旧約聖書『エゼキエル書』に見るケルブ似姿にまつわる記述は [ライオン・牛・鷲の顔が人のそれと融合した四つの顔・四つの羽を持つ存在] とのものであり — 英文 Wikipedia [Cherub] 項目にて “ **In Christian art they are often represented with the faces of a lion, ox, eagle, and man peering out from the center of an array of four wings (Ezekiel 1:5-11, 10:12,21 Revelation 4:8)** ” と表記されているとおりである — 、それがゆえ、オーソドックスな天使というよりも [鳥と人間の目立っての混交型] であるとの (団体表象シンボルに見る) 上にて呈示の存在をケルビムと見ることには難がある。尚、といったサイレン状の存在を二対並べての紋章を掲げた Ancient Grand Lodge of England は既にグランド・ロッジ (中枢拠点) としての勢力を擁していないとされるが、ほぼデザインを同じくもする紋章が現況フリーメーソンの世界的中枢拠点、United Grand Lodge of England にて採用されていることも英文 Wikipedia 程度の媒体を通じても容易に確認できるようになっているとのこと、申し添えておく)。

下段。Project Gutenberg のサイトにて公開されている *Washington's Masonic Correspondence* (『ワシントンのメーソンとしての私信』とでも訳すべき著作。1915 年刊行) に見るシンボルを挙げてのものとなる (そちらに描かれている人面鳥身の存在を — 上述の Ancient Grand Lodge of England のシンボルに見るような女性版から男性版の似姿へと移行しているとの違いがあるわけだが — サイレンと見た場合、何が問題となるのかを補説 1 と振っての段から通貫として指し示さんとしてきたのが本稿である)。

ここで述べるが、サイレンを鳴らしながら駆けつけてくる緊急出動車両の呼びだし番号として機能するナンバー・911 を採用している国らについては最前の段でも記載している、英文 Wikipedia [Emergency telephone number] 項目 ([緊急電話番号] 項目)

にての一覧表記されている採用国を順次表記するとのかたちにて上にて記載していることだが、現行地球上に存在する国家群には[110]番との緊急時連絡番号を採用している国「もまた」多い。

具体的には以下のようなかたちとなる。

(直下、英文 Wikipedia[Emergency telephone number(緊急電話番号)]項目にて一覧表記されている国々のなかにあつての[サイレン]音響契機としての 110 番採用国を挙げるとし)

Estonia(エストニア. 警察 110 番. 警察・消防・緊急の共通連絡先は EU 圏内の共通連絡先となった 112「とも」なる)、Latvia(ラトヴィア. 警察 110 番. EU 圏内の 112 も採用)、Germany(ドイツ. 警察 110 番. EU 圏内の 112 番も適用)、Norway(ノルウェー. 警察「ではなく」消防が 110 番)、Turkey(トルコ. 警察「ではなく」消防が 110 番)、Guatemala(グアマテラ. 警察 110 番)、Jamaica(ジャマイカ. 警察ではなく[消防]および[救急車搬送]が 110 番)、Bolivia(ボリビア. 警察 110 番)、Suriname(スリナム. 消防 110 番)、People's Republic of China(中国. 警察 110 番)Indonesia(インドネシア. 警察 110 番)、Republic of China(台湾. 警察 110 番)、Iran(イラン. 警察 110 番)、Syria(シリア. 救急車搬送 110 番)、Sri Lanka(スリランカ. 救急車搬送 110 番)、Janpan(日本. 言わずと知れた警察 110 番)

以上表記の各国が 110 番を緊急連絡番号に採用している。そこに見る 110 番、「11」0 番とのことでゼロを Null 値(空値、すなわち、存在しない数)と見た場合、これまた[11]を想起させるものである。

そのように[サイレン Siren](赤色灯や青色灯の点滅と結びつけられての警報音)を連呼させての緊急車両を呼び出す番号が [11] という数、すなわち、

[かの 911 の事件が発生する前から「アメリカ合衆国にて」サイレンを連呼させてやってくる緊急車両(消防車・救急車・パトカー)を呼び出すための窓口番号であったとの電話番号 911 の各桁合算(9+1+1)をなして導出できる数にして、かの 911 が発生する前から日本などにて消防呼び出し窓口であったとの番号 119 の各桁合算(1+1+9)をなして導出できる数にして、さらに述べれば、各国で警察や消防呼び出し番号となっている 110 にあつての「0」の部分で Null 値(存在しない数)と見ると導出されてくるとの数]

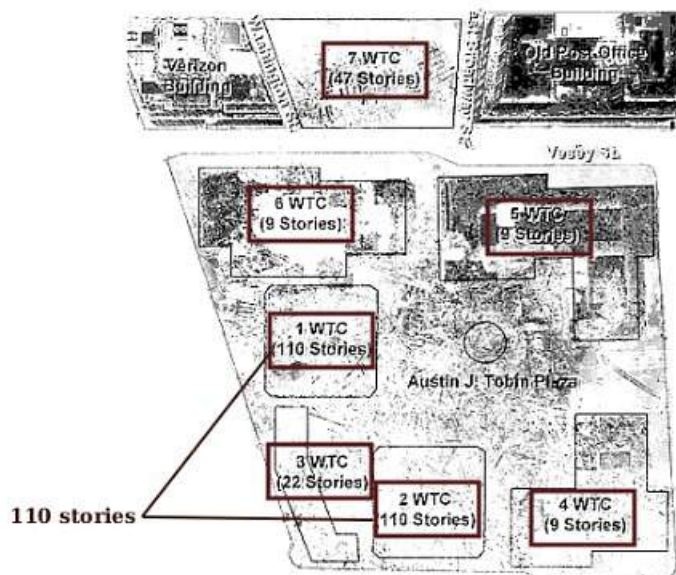
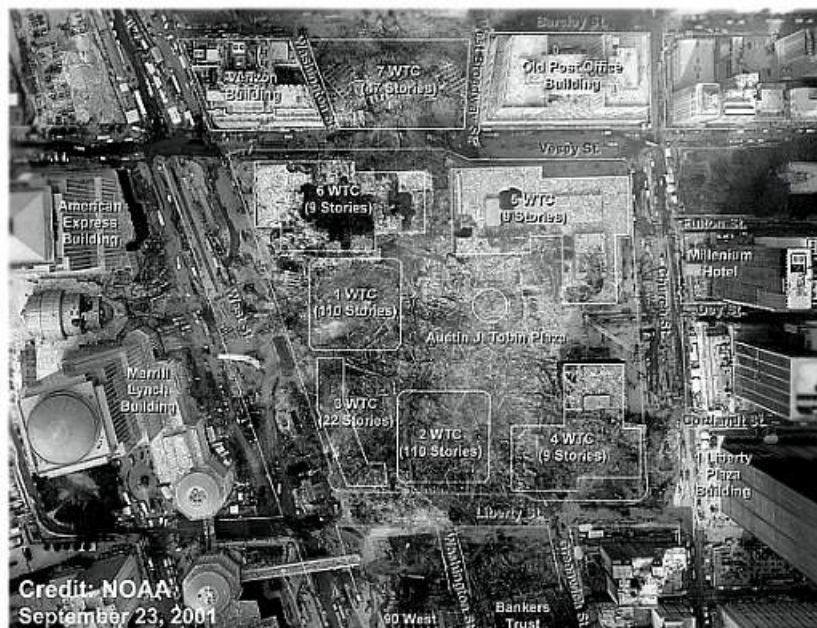
と結びつけてとらえられるように「なってしまう」ところからして問題であるとの身は見ている。

それについては

[911 の事件で崩された遠望すると[11]との数を呈しているようにも見えるツインタワーの階数は、—お調べいただければすぐに正否判断いただけようが—、それぞれ「11」0 階となり、(911 にて崩されたツインタワーの階数でもある)[110]となれば、米国で 911 番にて呼び出される警察に対して日本ではその 110 が警察呼び出し番号となっている(サイレン連呼の車両が出勤してくることになるとの番号となっている)こと

を想起させる]

とのこと「も」問題と受け取れるところである。



本稿**出典**(Source)紹介の部 101にて掲載したアメリカ海洋大気庁による航空写真を元にしてのワールド・トレード・センターにて全棟倒壊したとの1WTCから7WTCの見取り図の再掲。1WTCおよび2WTC、すなわち、ツインタワーの階数表記を見ていただきたいが、[110階]となっている。

従前の段にてのホメロス『オデュッセイア』およびそこに登場するサイレンなどの妖異について何を具体的にどう解説してきたのか、その内容把握をきちんとしていないとの向きにあっては

『何をこじつけがましきことを延々と...』

と受け取られてもやむなし、だが、従前内容をきちんと把握されているとの向きにはそうはとられはしまいものであると申し述べもしたき脇に逸れての話はここまでとしておく(：尚、[11][サイレン]との兼ね合いでは本稿**補説 1**及び**補説 2**の部—現行にては**補説 4**の段での話をなしている—にあっては、繰り返すが、**【911の事前言及と**

(媒介項を挟んで)結びつくサイレンを名に冠する文物】【ブラックホール人為生成にまつわる先覚的言及と(媒介項を挟んで)結びつくサイレンを名に冠する文物】のことで取り上げているわけだが、といったことまでの摘示をわざわざなしているのは人間存在が[そうしたこと]にすら真向いから向き合い、状況をよく認識理解した上で、生き残るための努力を有効になさない限り、「種族に明日はない」との観点が本稿筆者にはあるからである——多くの人間が現行の嘘塗れの世界を肯定し続けることに[未来]はない、残念ながらそうだと結論しか筆者が煮詰めてきたことから導出できない。その点、[ノーベル賞受賞者らに守られている組織体]が[目的尽くで造られた畜舎でのまきにも目的に関わる場所のもの]となっていると判じられる論拠が山積している中で(だが、そうしたことを[魂が抜けたが如くの硬直的思考しかなさぬとの人間一般]が直視できないようにされている、同じくものことにまつわってのことらがあたかも些事・瑣末なることのような扱いしかなされぬようにしているとの力学が「極めて強くも」働いてい면서도)[限界を孕んでの状況]に追い込まれてもいると解される人間存在に状況直視が出来るのか出来ないのかが(『もう手遅れか』とも当然に強くも危惧するのだが)種族の命運を決しうるとの観点を筆者は導出するに至っているのである——)。

長くもなった直上にての脇に逸れての部から引き戻し、

[[ナンバー [116] (先にて図示しているように 180 度回転させると[911]との数となる数値) と結びつけられての 【消防署署員 (日本では 119 で呼ばれるの対して米国では 911 にて呼び出されるとの向きら/演:スティーブン・マックイーン) による火災を消尽させるためのビル爆破計画】なるもの]

が劇中にて描かれての映画『タワーリング・インフェルノ』にまつわっての話を続ける。

4.

映画『タワーリング・インフェルノ』のリリース時ポスターとして広くもその写真が紹介されているものには

[ツインタワー状に向かい合い他の建物らを高層性で圧する超高層の二棟のビルら]

が描かれているとのことがある。

SOURCE 106(4)



Cimabue's Celebrated Madonna (1853 -5)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典 (Source) 紹介の部 106 (4) にあっては

[映画『タワーリング・インフェルノ』のリリース時ポスターにツインタワー状に向かい合い他の建物らを高層性で圧する超高層の二棟のビルらが描かれている]

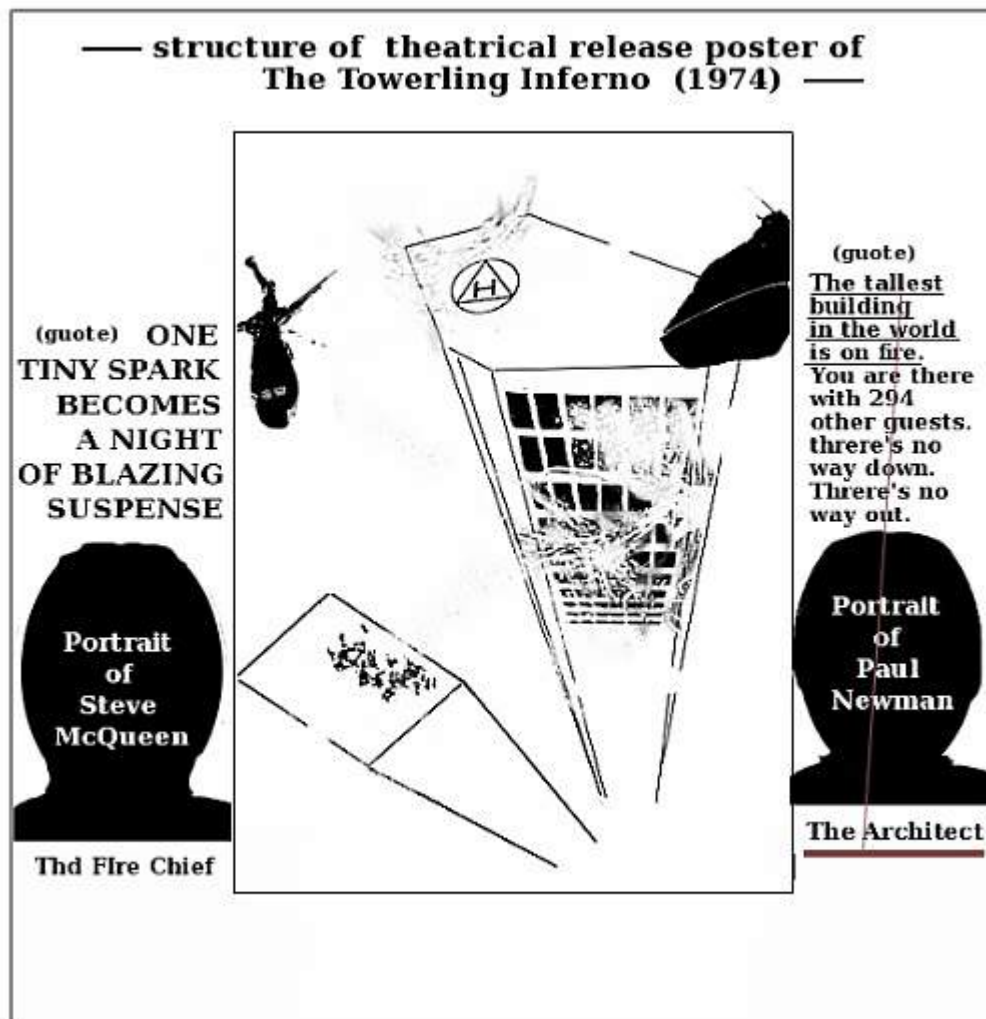
とのことのありよう(の確認方法)を挙げることにする。

誰でも容易に確認できようところのものとして挙げておくこととした出典として英文 Wikipedia [The Towering Inferno] 項目の「現行にての」右記映画概要紹介欄に

[Theatrical release poster] (映画封切りポスター)

と振られて掲載されている図像などをご覧いただきたい(あるいは The Towering Inferno 及び Poster と検索エンジンの画像検索の部に入力することで即時確認可能であるとのオンライン上の他媒体らに掲載されている同じくものポスター写真を見てもよからう)。

そこにては下にての [再現図] (骨格・骨組みとして特徴的な部「のみ」を再現しての図) を挙げてのものと同様の構造が表出を見ている。



上はウィキペディアにあって容易に実物確認できる映画リリースポスターのおおよその特徴だけを描いての再現図とはなるが、露骨にツインタワー状を呈するとビル群のポスター脇に認められる[アーキテクト; 建築士] (ポール・ニューマン演じる建築士) の写真と紐付けられている節ある、

“ The tallest building in the world is on fire. You are there with 294 other guests. There's no way down. There's no way out. ” 「世界最高層のビルが火災に見舞われている。君はそこに294名のゲストと共にいる。降りる途はない。外に出る途もない」 とのキャプションは

[現実世界にあってのツインタワー崩落事件 —映画リリース時(1974)直前までにて世界最高層のビルと一時期なっていた(出典(Source)紹介の部 102(5) / 尚、ワールドトレードセンターのツインタワーは世界最高峰ビルの名をシアーズタワー Sears Tower(1973-)にすぐに譲りもしている) とのツインタワーが崩落を見た事件—] と比較した場合に不快感を催させるものであろう。

(出典(Source)紹介の部 106(4)はここまでとする)

5.

映画『タワーリング・インフェルノ』のラスト・シーン、屋上の貯水槽の爆破による鎮火が奏功した後の

そのラスト・シーンではスティーブ・マックイーン演じる消防士(役名:マイケル・オハラハン)がポール・ニューマン演じる建築家(役名:ダグ・ロバーツ)に対して

「犠牲者が 200 人ですんだのは幸いだった. 今にこうしたビルに起因する惨事で 1 万人が死ぬぞ. 建築家(アーキテクト).」

といったことを述べるとのやりとりが(ラスト・シーンがゆえに印象に残るとの式で)発生している。

出典 (Source) 紹介の部 106 (5)

S O U R C E 106(5)



Cimabue's Celebrated Madonna (1853-5)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典 (Source) 紹介の部 106 (5) にあっては

「映画『タワーリング・インフェルノ』ラストシーンにて「犠牲者が 200 人ですんだのは幸いだった. 今にこうしたビルに起因する惨事で 1 万人が死ぬぞ. 建築家(アーキテクト).」との台詞を含むやりとりが発生している」

このことを紹介しておく。

その点、DVD を借りて(英文字幕をオンにするなどして)終幕間際の[ラストシーン]を視ていただけ

れば分かったら、次のようなやりとりが発生している。

“ **SFFD 5th Battalion Chief Michael O'Halloran (McQueen)** : You know, we were lucky tonight. Body count's less than 200. **You know, one of these days, you're gonna kill 10,000 in one of these firetraps, and I'm gonna keep eating smoke and bringing out bodies until somebody asks us... how to build them.**

Architect Doug Roberts (Newman): OK. I'm asking.

SFFD 5th Battalion Chief Michael O'Halloran (McQueen) : You know where to reach me. So long, architect. ”

(国内流通 DVD にあつての日本語字幕とは「別に」ここに筆者が付すこととした上の原文に対するそれらしくもの訳として)

(消防士オハラハン)「分かっているだろうな、今夜はラッキーだったんだ。死者は200以下だった。理解しているだろ、いまどきにあつてのいつか、あんたらはこうしたファイアー・「トラップ」で1万人を殺すことになるだろうよ。そして、誰かが俺たちに「どうやってそいつをこさえたんだ」と聞くまで俺は煙草を吹かしながら死体を運び出すことになるんだ」

(「建築家」ロバーツ)「分かった。私が[どうやってこさえたか]について尋ねることにしよう」

(消防士オハラハン)「あんたは俺に行き着く方法を知っているよな。じゃあそれまでな。建築家(アーキテクト)さん」

(出典(Source)紹介の部 106(5)はここまでとする)

(以上のようなやりとりが発生していることにまつわるところとして、一応、ここまでの内容を振り返って述べておくこととしたこととして)

直上引用部にて

“ **You know, one of these days, you're gonna kill 10,000 in one of these firetraps, and I'm gonna keep eating smoke and bringing out bodies until somebody asks us... how to build them.** ” 「理解しているだろ、いまどきにあつてのいつか、あんたらはこうしたファイアー・「トラップ」で1万人を殺すことになるだろうよ。そして、誰かが俺たちに「どうやってそいつをこさえたんだ」と聞くまで俺は煙草を吹かしながら死体を運び出すことになるんだ」

とファイアー・ファイター(消防士)が建築家(アーキテクト)に対して述べているとのダイアログが見てとれるとの点について、そのビルが映画原作小説『ザ・タワー』では

[ワールド・トレード・センターのツインタワー(のノースタワー)の隣にそびえ立つワールド・タワー・ビルディングとなっていること] (先行する出典(Source)紹介の部 106を参照のこと)

からして顧慮すべきことであろうとらえている(:つい最前の段にて同じくものことについて言及するようにツインタワー状のものが描かれての映画リリース・ポスターにあつて[アーキテクト;建築士](ポール・ニューマン演じる建築士)の写真と紐付けられているかたちで“ **The tallest building in the world is on fire. You are there with 294 other guests. There's no way down. There's no way out.**” 「世界最高層のビルが火災に見舞われている。君はそこに294名のゲストと共にいる。降りる途はない。外に出る途もない」とのキャプションが入れ込まれていることとあわせて顧慮すべきことであろうところとして、である)。

加えもして述べれば、

[[こうしたファイアー・トラップ] とされるものが起こったと映画にて描かれるビル]

が同じくもの 1974 年映画の中で

「世界で最も高いビルでもある」

と設定付けられている(出典(Source) 紹介の部 106 および直近出典(Source) 紹介の部 106 (4))にて呈示の映画リリース用ポスター(再現図)の字面を参照された)とのことが「ある」のに対して、現実世界のツインタワーが、(本稿にての出典(Source) 紹介の部 102 (5))でその点への世間一般での解説のされようを部分的に引いているように、

[一時期、世界で最も高いビル]

となっていたことがあるとのことを「も」顧慮すべきであろうこととらえている。

さらにもって述べれば、映画で

「こうしたファイアー・「トラップ」で 1 万人を殺すことになるだろうよ」

との物言いがなされているそのビルが爆破されることになった C-4 爆弾設置シーンで[116]との回転させれば[911]との数字が出てくるシーン(非常階段のフロアー・ナンバー・プレートが「ピックアップ」されて描写されてくるシーン)が数カットで登場してくることからして「実にかぐわかしい」ことであると筆者、この身も [それなりの理由(の束)]でもってとらえている。

その点、現実世界ではワールド・トレード・センターで

[計 7 棟のビルの連続倒壊]

が 一公式発表ではツインタワーの崩壊のあおりを受けたとされるかたちにて 一 具現化を見た(出典(Source) 紹介の部 101)わけだが、映画『タワーリング・インフェルノ』などよりも遙かにもってかぐわかしいとの映画『ファイト・クラブ』(先に詳述に重ねての詳述をなしてきたとの映画)では

[そこがワールド・トレード・センターであるとワンカットを用いて何度も指し示されている箇所を対象にしての連続ビル爆破倒壊計画]

が[旧秩序]を破壊すべくも進行を見ており、

[グラウンド・ゼロを具現化させるものであると冒頭部より同映画(『ファイト・クラブ』)内で言及されている(出典(Source) 紹介の部 102 (2))とのビルら]

を対象にしてのテロ計画ありようは

[時限性の爆薬の爆発]

にあると同作『ファイト・クラブ』内で描かれている(同じくも出典(Source) 紹介の部 102 (2))とのことがある。

他面、『タワーリング・インフェルノ』では時限爆弾たる C-4 爆薬の設置がビルの火炎地獄を解消する[救世主となる策]として登場してきているとのことがある(出典(Source) 紹介の部 106 (2))。

読み手にあまり聞く気がなくとも以上の程度の言い様からして筆者が何が述べたいのか、「一面で」ご理解いただけることか、とは思ふ(：但し米国の専門家団体らが「そうだ」と主張している発破倒壊説、彼ら専門家筋由来の実にもって説得力に富む動画サイトにて流通の映像ら呈示動画 —(発破倒壊によるいくつかのビルの倒壊映像とありし日の 7 ワールド・トレード・センター(後に言及するがソロモン・ブラザーズという金融会社を主たるテナントして、他を米国諜報機関らが借り受けていたとのビル)のそれまでそこに屹立していたものが瞬時倒壊していく様の「酷似」のありようを具体的にこれはこうだと示し

て、何人もの欧米圏の専門家筋が「これは言い切れるところとして発破倒壊だよ。入念に準備されたね」「ビル瓦礫を早々に処分していること自体が(発破倒壊に用いられたと思いきサーマイトなどの証拠が消除されるとの式で)証拠隠滅という犯罪行為だ」「NIST(発破倒壊の疑義呈示に対してそれを否定しているアメリカ政府筋のアメリカ国立標準技術研究所)は我々の主張に「否。」との返答をなしているが、彼らのそうした主張にはなんら具体的存立基盤がない」とコメントしている様をあわせて紹介しているとの動画) — も流布されているところの「発破倒壊説」を読み手に押しつけるつもりは筆者には現行は「ない」。現実に「発破倒壊」がなされたかははきと述べ、「最も重要な論点」にはなっていないとの認識がこの身にあるからである。「真に問題なのは、この忌まわしい偽りだらけの愚劣で醜い世界にて過去に起こったことではなく、「これより起こされるであろうとのこと」にある、そう、「予言の霊」(先述のように聖書に登場をみている Python)に取り憑かれたが如く傀儡(くぐつ)のような人間存在を用いて「これより起こす」との意志表示が明朗になされていると判じられるとのことにあると当然に判じるとの段階に筆者は至っているからである)。

尚、これよりその点について解説していく所存ではあるが、映画『タワーリング・インフェルノ』リリース・ポスターにはフリーメーソンに詳しい向きには分かるどころのフリーメーソンの上位位階(ソロモン神殿の残骸からの再生のシンボリズムとドグマと結びついたロイヤル・アーチ位階)のシンボルを露骨に想起させるものが描画されており、またもってして、(映画『タワーリング・インフェルノ』にも目立ってその語が用いられているとの)「アーキテクト」(建築家)とは「フリーメーソンにあつての理神論の神(のような存在)」と紐付いている語句でもあるとのことがある(ただし、といったことがあろうとも、くどいが、現行にあつては筆者には発破倒壊説に固執するつもりなど毛頭ない。何度でも再言しよう。問題は「傀儡(くぐつ)を用いての露骨な「事前」意志表示 — 異常異様な予見性がゆえにまずもってそこからして問題になろうとの意志表示 — の向かう先」にあるととらえているからである(その点、問題となるシンボリズムを用いさせられている組織体、フリーメーソンのドグマが悪鬼羅刹の類を使役した存在と語り継がれるソロモン神殿と濃厚に結びついていること、そのことが「人間存在に対する契約(という名のコントロール)の終了の意志表示」と通じていることが極めて問題になる、「養殖を終えての刈り取り」の露骨な示唆に通じているとの意で問題になると筆者はとらえているのだが(であるからフリーメーソン象徴体系と911の事件の接合性についてここで取り上げる途を選んでいる)、にまつわっては本稿の終端部に至るまで入念にその判断事由らについて解説していく))。

映画『タワーリング・インフェルノ』ではその原作小説となった作品にて

[ツインタワー近傍とされている(そして爆破が大災厄に通ずると設定付けられている)とのビル]

が(原作から一転して)時限性爆弾で救済を見、そして、そのシーンが116と紐付けられている。

対して、『ファイト・クラブ』では原作小説で[191階建て]とのビルが映画版で何度も何度もサブリミナル的にワールド・トレード・センター近傍であると臭わされて爆破される(こちらの委細も先に詳述している)。

70年代前半と90年代後半の二つの作品にて

[ツインタワーの近傍のビル爆破]

[116および119の数値との紐付け]

が見てとれるわけである。だが、それだけでは懐疑主義者(あるいは容易に確認可能なる事実を都市伝説なるものに貶めることまではせぬとのレベルの卑劣漢)に

「ただの偶然だ」

との言い分を許すレベルに留まることだろう。

だから、書くが、同様の事例、「911の予見描写と結びつく爆破関連作品」らが他にも存在し

ており、かつ、それら「にも」フリーメーソン・シンボリズム (共通のフリーメーソン・シンボリズム) との結節点が如実に見てとれる (視覚的事実の問題として見てとれる) とのことを本稿のさらに後の段で指し示す所存である。そうもしたことに相対し、あるいは、相対することさえ拒否拒絶し、逃げ惑いたければ逃げ惑えばよからうが (それもひとつの選択肢であろうとは思っている)、フリーメーソンがそういうことをやらされているのか否かは別にして【予見描写をなさしめている力学】(人間のレベルにはなからうとの間接証拠に彩られた力学) はなんにせよ我々に容赦をするつもりはないと判じられる。そのことを現象を基礎に訴求し、人としての尊厳を問う (力ある者には抗う上での覚悟を求める) というのが本稿の趣意である。

映画『タワーリング・インフェルノ』における、

[フリーメーソン象徴主義「とも」地続きになっている予見性]

を指し示すべくもの(1. から 6. と振っての) 順次指摘を続けることとする。

6.

映画『タワーリング・インフェルノ』には次の観点からフリーメーソンの側面が介在していると述べられる。

第一。

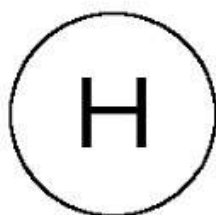
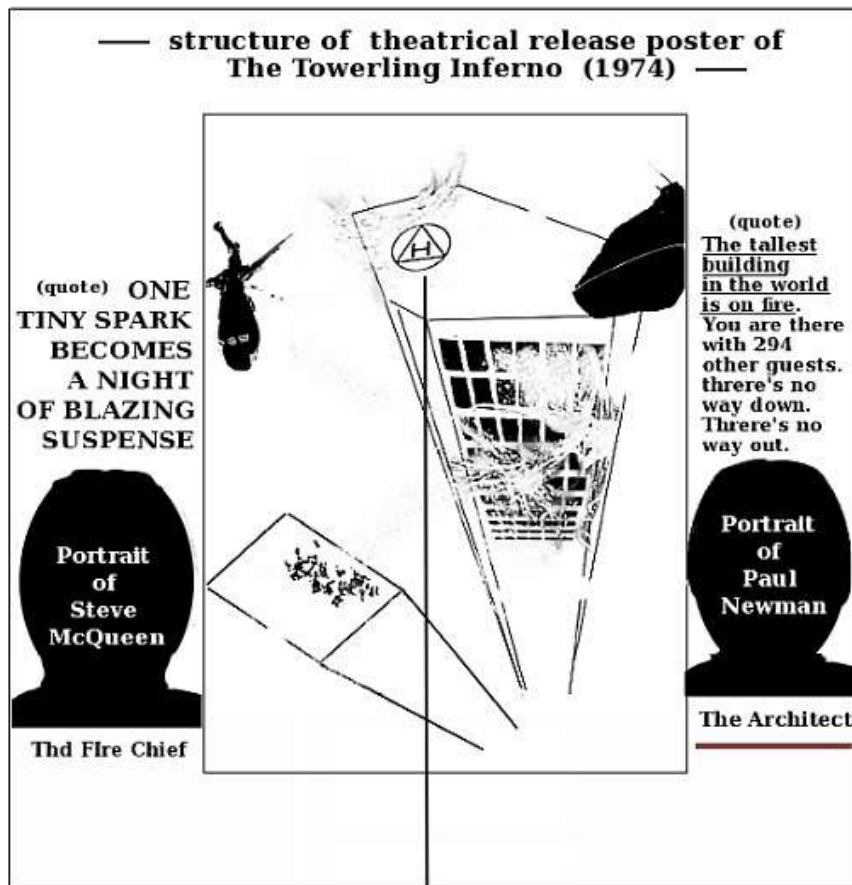
映画リリース・ポスター (先だつての 4. と振っての段より言及なししているとのリリース・ポスター) にて目立ってそれが描かれているとのツインタワー状のビルの火災に見舞われている方のビルには[ヘリポート]が描かれている。

その[ヘリポート]のデザインは

[極めて有名なフリーメーソンの上位位階のシンボル、ロイヤル・アーチ — (同ロイヤル・アーチ位階が基本位階のマスター・メーソン位階に到達した人間が足入れするとの上位位階であることについては英文 Wikipedia [York Rite] 項目程度のものにも “ Royal Arch Masonry is the first order a Master Mason joins in the York Rite. ” との表記がなされているとおりでである) — のトリプル・タウ紋章とほぼそっくりのもの]

であるとの体裁が取られているとのことがある (:「ほぼそっくり」であるため、フリーメーソンの面々ならばツインタワー状のビルの屋上に映画ポスターで刻まれている特徴的ヘリポートと彼ら特定シンボルの一致性に「すぐに気づける」ようになっていると述べてしまっても構わなからう)。

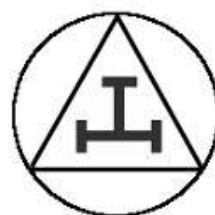
(以下、直上表記のことにまつわつての再現図解部を設けておく)



commonly seen
Helliport Design



Freemasonic helliport
design seen in
The Towerling
" Inferno "



" Triple Tau " Emblem
of
Royal Arch Masonry

上掲図は映画『タワーリング・インフェルノ』のリリース用ポスター(つい先程の段で再現図として挙げもしたものに描かれているヘリポートのありようを強調するように挙げたものとなる。下の段にての左側がよく見られるヘリポートの図(大抵にして丸マークの中にHとの一字が書かれているとの体裁とる)となり、中央が『タワーリング・インフェルノ』(1974)に認められる丸マークの中に三角形マークが描かれ、その中にHと書かれたヘリポートデザインとなる(図をご覧いただければ即時ご理解いただけることかと思う)。下段の右がフリーメーソンの赤ロッジことロイヤル・アーチ位階の代表的紋章[トリプル・タウ紋様]となる(:フリーメーソリーにあっての[トリプル・タウ]というよく知られた紋章については人目に付きやすいところでは「現行にあっての」英文 Wikipedia にての[Holy Royal Arch]項目および同[Royal Arch Masonry]項目にもそれぞれ掲載されている)。

その点もってして、

「フリーメーソンのロイヤル・アーチ位階紋章と「ほぼそっくりの」ヘリポートマークだとしてもヘリポート・マークとして機能するのであるから、そして、メーソンなど(海外ならば)どこにでもいるのだから、そういうデザインが採択されていたとしても問題になるところではない」

などと述べる向きもあろうことか、と思うので、そこまで述べておくと、

[[ツインタワーの屋上] と [メーソンの紋章] が結びつけられていた]

のは1974年の『タワーリング・インフェルノ』に限らない。そういうことをワンカットで扱って指摘している海外動画(筆者が色々と教えられた動画でもある)もあるようなところとして1971年初出のMusicalであるゴッドスペルとの作品が映画化されての同名のGodspell(1973)というミュージカル映画「でも」額にフリーメーソンの「コンパスと直角定規の紋章」を想起させる刻印を押した者達が「完成間近の1973年—1974年という映画『タワーリング・インフェルノ』の公開年一年前である—のツインタワー(工事現場)の屋上」にて唄って踊る有様が映像化を見ているとのことがある。

第二。

(上にてトリプル・タウ紋様の類似形の現出については言及したとして) 建築家(アーキテクト)という職種・言葉の使いようも問題になる。『タワーリング・インフェルノ』の映画リリース・ポスターでは

[The Architect]

との文字列(主人公のポール・ニューマン演じる建築家ダグ・ロバーツのことを示す文字列)のすぐ上の箇所にあつて

“ The tallest buidling in the world is on fire. You are there with 294 other guests. There's no way down. There's no way out. ” 「世界最高層のビルが火災に見舞われている。君はそこに294名のゲストと共にいる。降りる途はない。外に出る途もない」

などと—後に現実化した事件のことを顧慮すれば【嗜虐的側面】が感じられるような筆致で—書かれているが(先の[4]の段に付しての映画リリース時のポスターを単純化したの再現図も参照いただければ、と思う)、そこに見る[アーキテクト]とは[フリーメーソンの神の名]にも通じる呼称である。

フリーメーソンはキリスト教徒・イスラム教徒・仏教徒など複数宗教の信徒を成員にしつつ、

[[各宗教にあつての神聖なる存在をすべて包含する存在] にして [普遍なる至高意思の体現存在] としての [偉大なる世界的设计者;グレート・「アーキテクト」・オブ・ユニバース] (Great Architect of Universe の頭文字をとって GAOTOU と呼称されての至高存在)

の[実在] および[介入] の認容を彼らの[教義]の基盤に据え、なおかつ、その意に沿って動くことを組織の理念として謳っている団体となっている(直下続けての出典紹介部を参照のこと)。

SOURCE 106(6)



Cimabue's Celebrated Madonna (1853-5)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are
barefaced and brutal.

ここ出典 (Source) 紹介の部 106 (6) にあつては

[フリーメーソンという団体が「各宗教にあつての神聖なる存在をすべて包含する存在」にして「普遍なる至高意思の体現存在」としての「偉大なる世界の設計者;グレート・「アーキテクト」・オブ・ユニバース」(Great Architect of Universe の頭文字をとって GAOTOU と呼称されての至高存在) の「実在」および「介入」の認容を彼らの「教義」の基盤に据え、なおかつ、その意に沿って動くことを組織の理念として謳っている団体となっている]

このことの典拠を挙げておくこととする。

その点、ここでは無論、カルトの関係者 (オウム真理教なども自分たちの醜悪さおよび犯罪性のことを完全に棚に上げてフリーメーソンを敵視していたことで有名であるカルトではある) などに担がれるような陰謀論者 — 浅薄な出鱈目をこととする職業人 — などに由来するところでは全くもってない [フリーメーソンリーの所信を他ならぬフリーメーソン自身が表明しているとの文書] よりの引用をなす。

具体的には — 先だつての段にあつてもそこよりの引用をなしたとの著作となるが — 19 世紀から今日に至るまで名前が知られているとの 19 世紀フリーメーソン、アルバート・マッキーの手になる著作、

The Symbolism of Freemasonry: Illustrating and Explaining Its Science and Philosophy,

its Legends, Myths and Symbols (1882)『フリーメーソンのシンボリズム:その技(サイエンス)と哲学、伝承、神話、そして、シンボルらにまつわる図解』(Project Gutenberg のサイトにて全文公開されており、それがゆえに誰でもオンライン上より内容確認できるとの著作)

よりの抜粋をなしておくこととする。

(直下、現時にあって Project Gutenberg のサイトよりダウンロードできるとの The Symbolism of Freemasonry: Illustrating and Explaining Its Science and Philosophy, its Legends, Myths and Symbols(1882)『フリーメーソンのシンボリズム:その技(サイエンス)と哲学、伝承、神話、そして、シンボルらにまつわる図解』にての XXIV. The Ineffable Name.[二十四節:(神聖さがゆえ)口に出すのがはばかれる御名]の後半部よりの抜粋をなすとして)

We know, for instance, from the recent researches of the archaeologists, that in all the documents of the ancient Egyptians, written in the demotic or common character of the country, the names of the gods were invariably denoted by symbols; and I have already alluded to the different modes by which the Jews expressed the tetragrammaton. **A similar practice prevailed among the other nations of antiquity. Freemasonry has adopted the same expedient, and the Grand Architect of the Universe, whom it is the usage, even in ordinary writing, to designate by the initials G.A.O.T.U., is accordingly presented to us in a variety of symbols, three of which particularly require attention. These are the letter G, the equilateral triangle, and the All-Seeing Eye.**

(訳として)

「我々はたとえばのこととして最近の考古学者ら調査から
[民衆の間にて通俗的にも書かれていたとの古代エジプトの文書らすべてにて[神の名]が普遍的にシンボルによって示されていたこと]
につき知るところとなっており、ユダヤ民族がヤハウエの4子音文字を表するとのそれと異なるところの慣行についてはすでに(本書にて)触れている。類似しての(神の名に対する表記・呼称にまつわる)実践は他の古代国家に広まっていた。(翻って)フリーメーソンは同様の手法を採用しており、そして、それに応ずるところとして、
[ザ・グランド・「アーキテクト」・オブ・ユニヴァース]
は —それは日常にて用いる書き物にてでさえ [G.A.O.T.U] の頭文字で表されるとの方式に適しているところの御名だが— 様々なシンボルら、殊に三つのそれが注意要するとのシンボルの形態にて示される存在となっている。
(三つの注意を要するとのシンボルにつき)それらは[Gの字]、[正三角形]、そして、[万物を見通す目]である」

(訳を付しての引用部はここまでしておく)

(現時、Project Gutenberg のサイトよりダウンロードできるとの The Symbolism of Freemasonry: Illustrating and Explaining Its Science and Philosophy, its Legends, Myths and Symbols(1882)『フリーメーソンのシンボリズム:その技(サイエンス)と哲学、伝承、神話、そして、シンボルらにまつわる図解』にての XXIX. The Symbolism of Labor.[第二十九節 勤労の象徴]の中盤部から末尾にかけての部よりの掻い摘まんでの「再度の」抜粋をなすとして)

It sees in the Supreme God that it worships, not a "numen divinum," a divine power, nor a "moderator rerum omnium," a controller of all things, as the old philosophers designated him, but **a Grand Architect of the Universe**. The masonic idea of God refers to Him as the Mighty Builder of this terrestrial

globe, and all the countless worlds that surround it. He is not the ens entium, or to theion, or any other of the thousand titles with which ancient and modern speculation has invested him, but simply **the Architect**, —as the Greeks have it, the ἀρχὸς, the chief workman,— under whom we are all workmen also; and hence our labor is his worship.

This idea, then, of masonic labor, is closely connected with the history of the organization of the institution. When we say "the lodge is at work," we recognize that it is in the legitimate practice of that occupation for which it was originally intended. The Masons that are in it are not occupied in thinking, or speculating, or reasoning, but simply and emphatically in working. The duty of a Mason as such, in his lodge, is to work. Thereby he accomplishes the destiny of his Order. Thereby he best fulfils his obligation to **the Grand Architect**, for with the Mason laborare est orare—labor is worship.

The importance of masonic labor being thus demonstrated, the question next arises as to the nature of that labor. What is the work that a Mason is called upon to perform?

Temple building was the original occupation of our ancient brethren.

(補ってもの訳として)

「フリーメーソン組織は [崇拝する対象たる至高の神] をもってして [神聖なる力] (numen divinum) とし、あるいは、 [全てを支配する存在 (moderator rerum omnium)] とも見ずに、

[宇宙の偉大なる設計者] (グランド・アーキテクト・オブ・ユニヴァース)

たるものとして見出す。[神]に対するメーソン観念ではその神をして[地球の万能なる設計者]とし、そして、[地球を取り巻く数多の世界の設計者]とする。彼は[ens entium][theion] (ギリシャ語で神)でもなく、古代および近代の類推が彼に授与したところの幾千の他の称号でもなくただ単純に、

[アーキテクト(設計士、建築家)]、

ギリシャ語では[ἀρχὸς]となり、[頭目としての職工]を意味する存在として、同様に職工となる我ら全員を差配する立場に位置する存在となる。それがゆえ、我々(訳注:アルバート・マッキーを含むメーソン)の仕事とは[彼の崇拝]とのことになる。それから、このメーソンの勤労奉仕の観念は濃密にも制度としての組織の歴史に関わることになる。我々が[ロッジ(訳注:メーソンの交流・活動の拠点たる会館のこと)は現在、稼働中である]と述べる時、我々はそのロッジが[元来からして意図されていたように適切なる[実践]の機会を得ていること]を認識していることになる。メーソンは[思索]・[推察]・[理由付け]に専心するものではなく、ただ単純に、そして、強調される場所として[活動すること]に専心しての存在となる。それによって、メーソンはおのれに課された[オーダー]を完遂するのである。それによってメーソンは

[偉大なる設計者] (グランド・アーキテクト)

へのおのれの義務を充足させるのである。何故なら、メーソンにとり[労働は崇拝 (laborare est orare)]であるからである」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上のようにフリーメーソンの中の識者にしてメーソン史家(に準じる存在)であったことがよく知られているアルバート・マッキーによると、

[メーソンの役割]

とは、

[G.A.O.T.U ことグレート・「アーキテクト」・オブ・ザ・ユニヴァースと呼称されての頭目(宇宙の設

計者とメーソン体系にて見做されている存在である)に奉仕する職能集団の成員として[考える、思索する、理由付けをなす]との側面から離れ、[ただ単純に意図されての役割に忠実に動く]ことを意味している] (原文表記 : “ This idea, then, of masonic labor, is closely connected with the history of the organization of the institution. When we say "the lodge is at work," we recognize that it is in the legitimate practice of that occupation for which it was originally intended. The Masons that are in it are not occupied in thinking, or speculating, or reasoning, but simply and emphatically in working. ”)

と総括されている (: 「頭目(上位存在)が求めているのは「考える、思索する、理由付けをなす」との側面から離れ、「ただ単純に意図されての役割に忠実に動く」ことを意味している」といった「望まじき精勤具合」へのまとめようは【体育会系の会社(あるいは当世流の言葉でブラック企業のような会社)のみならず幅広くの企業体の社員(殊に上級管理職以外の社員)に求められる資質・役割】とも類似性を有しているように見えるが、より幅広くも考えれば、元より「理性でもって見れば馬鹿げていること極まりないとのことで満ちているこの世界」で「本当に思考すること」は確かに「相応の組織に足入れすることを選んだ人間たち」には求められておらず、そうした者達に求められていることは「あらかじめ用意された図面通りに動くこと」だけであるというのも理に適っている — チェスを良くさすような人間にはよく識られているところとして【ポーンはチェスの要にして魂である】とのフランソワ・フィドール (という有名な 18 世紀のチェス・プレイヤー) の言が呈されもしているようにチェス盤にあってのポーンは(プロモーション(あがり)を見なければ)考えることもなく近視眼的に前に進むことしかしない(できない)わけだが、フリーメーソン(やこの世界の大多数の人間)に求められていることは近視眼的に一方向にしか動けないとのありようであろうとは誰でも悟性で分かるかと思う — 「その伝では、」アルバート・マッキーという 19 世紀人は「半面で、」とのところながら赤裸々な人間だったのだろうと手前は見ている)。

とにかくも、直近引用部で示されるとのことは

「メーソンにとっての神はアーキテクト(建築士)と呼ばれる存在であり、その伝で映画『タワーリング・インフェルノ』のポール・ニューマン演じての [アーキテクト] とは [メーソンの神] を指す語「とも」なる」

とのことである — (であるから、たとえば、911 の事件にての 7WTC 倒壊を発破倒壊であろうとする署名を集めているとの団体であることを先述していたとの欧米圏建築家・技術者団体に [アーキテクト・アンド・エンジニアーズ・フォー・911・トルウース] との団体名が付されていることに『他にも命名のしようがあったらうに』『建築士という職業がアーキテクトと呼称される (IT 業界でも上位 SE はアーキテクトと呼称される) ことで話が済むのか』といった疑義のようなものが感じられるところであるし、実際に欧米の識見有する人間にはそのように見られるところであろう、とも思われる。だが、背景が分からぬことについて云々しても詮方ないのでその点については本稿では甲論乙駁しないこととする) — 。

(出典(Source)紹介の部 106(6)はここまでとする)

さて、ここまでの 1. から 6. と分かちての流れで『タワーリング・インフェルノ』について摘示しもしてきたことをまとめれば、以下ようになる。

1974 年封切りの映画『タワーリング・インフェルノ』(先述のように語感的には[そびえたつ地獄]とも[(周囲を卓越するかたちでそそりたつが如く)偉大なるダンテ地獄篇]とも訳せる作品)は

【ツインタワー近傍の世界・タワー・ビルディングが火災に見舞われると
の筋立ての小説『ザ・タワー』】（二作ある映画の原作小説、1973年初出
の The Tower と 1974年初出の The Glass Inferno のうちの一方の The
Tower という作品）

を原作（らのうちのひとつ）とする映画作品である（[出典\(Source\)紹介の部 106](#)）。

また、映画会社 20 世紀フォックスとワーナー・ブラザーズがはじめてタイ・アップを組
んだとの作品でもある同作では（同映画版では原作小説に対してサンフランシスコが
舞台とされながら）その映画予告ポスターに

【ツインタワーを露骨に想起させるもの】

が描かれており（[出典\(Source\)紹介の部 106\(4\)](#)）、その内容はビル火災を最上階の
貯水ポンプを[時限爆破]して鎮火するとのものであった（：[出典\(Source\)紹介の部
106\(2\)](#)。そして、その真偽はともあれ、ワールド・トレード・センターの屋上から急激に
倒壊していった第 7 ワールド・トレード・センター・ビルの崩壊ありようなどの映像記録
に基づきワールド・トレード・センターの発破倒壊（爆破による倒壊）のことを強くも問題
視している建築家ら、そして、爆破のエキスパートらの専門家団体も存在している —
[出典\(Source\)紹介の部 101](#)にて先述のことである— ）。

そうしたフィクションありよう、

【ツインタワー想起のものの地獄を扱った映画に見る爆破による鎮火との
筋立て】

と現実世界にあつての、

【911 の事件の折、ツインタワーが見舞われた火災に次ぐ崩落という運命】
【閉じ込められた人々の逃れられない炎熱地獄の中の無惨なる死】

との 【あべこべ・反対】 の結果のことを想起させるように映画では「爆破」に紐付くシー
ンにて 116、「180 度時計回り方向に回転させれば 911 との数となる」階数にての階数
表示がワンカット — 筆者も当初、映画『タワーリング・インフェルノ』は相応のものであ
るとの告発動画（先述の 911 Hidden in Hollywood）を視聴したうえでそのことを教
えられた中でも見過ごすようなかたちとなっていたのだが、国内流通の DVD 再生時
間表示にて【再生時間 2 時間 30 分 57 秒後のシーン】及び【再生時間 2 時間 33 分
56 秒のシーン】で「116」との階数表示が出てくる— にて登場している（[出典
\(Source\)紹介の部 106\(3\)](#)。尚、映画のビルは 138 階建てであるとの設定である）。

そして、については、そも、米国では消防に火災報知するための番号が[911 番]と
なっていた（[出典\(Source\)紹介の部 106\(3\)](#)にあつての付け加えての部を参照のこと。
911 の事件の発生前、映画封切り前の 1968 年から米国の緊急連絡先番号は 911 と
なっていた）ことをも思料しても【できすぎ】の感がある。

だけではなく、映画ポスターの他を圧しての高層性を有している二棟のビルの内の
一方の屋上には

【フリーメイソンのロイヤル・アーチ位階のシンボルと「酷似」した特徴的ヘ
リポート】

が描かれており（[出典\(Source\)紹介の部 106\(6\)](#)に先行する段で図示）、だけではなく、
その同じくものポスターでは【フリーメイソンの崇拝対象の神】の呼称ともなるアーキテ
クト（建築士）との語句の記載とともに「世界最高層のビルが火災に見舞われている。

逃げ道はない」との文字列の記載を見ていたとことがある(出典(Source)紹介の部106(6)に先行する段で図示したところとウェブ上にて公開されている映画初期版ポスター写真内容を比較のこと)。

以上はすべて、[容易に後追いでできるかたち]にて具体的根拠呈示できることとなる(そして、読み手が本稿の解説を参照されながらもDVD借り受けて該当部を確認できるとのかたちでの具体的根拠呈示をなしている)わけだが、それ単体で見れば、

「陰謀論「的な」申しようである」

と受け取られるところであろうか、とも思う(何度も何度も懐疑的な読み手胸中の問題を代弁したくもあるところとして、である)。

そも、

「ある映画がある事件を予言していた」

などとの話をそれ単体でなせば、普通人は次のような予断を「当然に」抱くことか、と思う。

『響きからして如何物(いかもの)的な話である。であるから、信じることができない』

『そういう話をする人間はたいていにして「おかしい」人間 —[知性][誠実さ][冷静さ]のいずれかないしすべてに甚だしくもの欠を見ており、それがゆえ、何ら定見もなく、判断材料保持とそれへの思索もなく信憑性なき話を容易に信じたか、と思えば、手のひらをよくも返すとといった「相応の」手合い— である。であるから、信じることができない』

だが、これまた何度も何度も申し述べたくもあるところとして、ここで申し述べていることについては

[筆者が[実際に耳聞目睹(じぶんもくと)した(自身の眼と耳ではきと確認した)]証拠 —映画にての[映像記録]としての記録的事実— であり、そして、と同時に、「誰でも容易に事後確認可能な」証拠 —DVD借り受けなしたうえで指定の再生ポイント再生ですぐに裏をとれるもの— であるとのものに依拠しての話である]

ことを把握いただいたうえで、そして、といったことが他の[「危険な」事実関係]と濃密に結びついていることが「具体的に」指し示せるとのこと、何卒、お含みいただいたきたいものではある(：尚、映画『タワーリング・インフェルノ』映画用ポスターにあっての高層ビルの頂上に刻印されているヘリポート図柄がそれに酷似しているとのシンボルを掲げるフリーメーソンのロイヤルアーチ位階のドグマが[ソロモン神殿の残骸からの新しき理想世界の再生]にあるとのことについては本稿の後の段に解説するが、**【ソロモン神殿(の柱にしてヘラクレスの柱に比定されるもの)が破壊されるとの寓意】**がそこにあること、それがソロモンが悪鬼悪魔の類と結んだ契約(という名の人間存在のコントロール)の終了の意志表示とともに見てとれるとのことが[反語的語法]との式で問題になると本稿筆者は —諸種収集情報の分析から— 結論付けるに至っており、そうも判じざるをえないの具体的判断事由も無論にしてこれよりの段で入念に詳述していく)。

また、入念に断っておくこととするが、「**本稿にあっては**」筆者はあたら「秘密結社が諸悪の根源である」

などとする、

[フリーメーソン諸悪根源説]

を専ら主張しようとのスタンスには立って「いない」。

たとえ「そのように見えても、」「そのように判断できるとの要素が山積していても、」そうしたスタンスには「本稿では」立っていない —※本稿を公開しているサイトでは他の捕捉情報との絡みで(それら捕捉情報らをきちんと明示しきっていなかったのはどうかとも思うのだが)[フリーメーソンそれ自体が実に性質の悪い意思表示「装置」になっている]との主張を強くも前面に出しているが、それで実効性が

ないというのならば見極めもできようとのクオリティを目指しての「本稿では」そうした立ち位置(いわばものセルフ・ビリーフ・システム、個人的目分量の類と向きによっては見られもしようとの立ち位置)に固執していないとの断りを何度もなしている(「物事の重み付けを十二分になそうとする意思の力を持たぬ者」[自身の属する種族を裏切って敵手の尻を舐める(汚い表現で恐縮である)のに注力もしようとの敵手にさえ愚弄されもしよう手合い]は表面上のそういう風にとれる側面にばかり(言論の値打ちを消極的ないし積極的に低めに見る・見さしめんと)固執することになりかねないか、とも思うのだが)――。

この身が専らに問題視しているのは

【「人形」のような一群の者達]を有効活用して[ビル倒壊劇]を演出し(そちら演出が公式発表にあるように特攻仕様の人間による飛行機を用いての倒壊であろうとあるいは(不分明なところとして)一部で言われているところとして爆破計画をかねてより策定していた者達による爆破による倒壊であろうとはきと述べ、違いはない)、また、(主体的意思というものが大きくも欠けていそうな[ラジコン人間]という類に如何程までに恣意性というものがあるとなかろうとも)、そうした手合いらに「人災」、マン・メイド・ディザスターともなろうか、とのその「起こるべくして起こるであろう災厄」を「ビル倒壊劇の「先」にあること」としてビル倒壊劇それ自体を通じて予言(というより予告)なさしめるとの力学――先述のように[予言の霊(a spirit of python)の力の発露]とでも表せようところにまつわるところとなる――が存在している、その同じものの力学が「より重篤なことに、」我々にそれを避けねば「死」しかないと害をなす予定であるとの前言を「体系的」かつ「巧妙に」なしているとのことが「示せる」ようなものになっている】

とのその一事である。

同じくもの一事について筆者が希望を失いつつもの心境に陥っているところとして

「世に並み居るはずであろうとも「思える」[諸賢]が同じくものことをつまびらやかに問題視する――[死滅]の力学を問題視する――ことがなんらなく、たかだか筆者レベルの人間しかそのことをつまびらやかに問題視しようとしないと見受けられるようになっていたとのことがある」

と申し述べつつ(くどくも続け)書くが、

「今まで延々となしてきた『タワーリング・インフェルノ』(【そびえ立つ地獄】とも訳せるし【塔のようにそびえ立つ偉大なるインフェルノ(;ダンテ『地獄篇』)】と訳せもするタイトルの映画作品)を巡る事前言及でさえもが本来的には本質、話の最も重要な[精髓](エッセンス)に直につながるようなものではない」

のである。

その点、

【『タワーリング・インフェルノ』を巡るここでの話とて【最も重篤な(未然形の、それがゆえに、筆者も死んでいないために未だ筆を振るっていられるとの)[災厄]にまつわる前言が存在していると判断できるようになっていること】に「間接的に」関わるにすぎぬ[ほんのたかがもの一事例]にすぎないとのこらが「現実に」ある】

のである――のように記したうえでさらにもって書いておくが、「であっても」[911の事件の予言の如きもの]までもが最も重篤なる予言、というより、予告(本稿の先の段を振り返っていただければお分かりいただけようところとして「加速器によるブラックホール生成問題にまつわる異様であり、かつ、極めて正確な予見的言及」もその範疇に入る)とも多重的に結びつけ「られている」ことを筆者は非常に問題視してはいる次第ではある(そういうことに気付いた人間として、それがゆえに、何もやらずに、却って、馬鹿なことしか述べぬとの人形のような者らを脇目に諸所の常識的な側面よりの背面での訴求活動に注力した人間として非常に問題視している)――。

以上、断った上で

[予言の霊(Python) ——先に引き合いに出した、ギリシャ神話および聖書の使徒行伝に見るような予言の霊[パイソン]—— に憑かれたが如く「前言」]

に関わりそうなところとしての他の事例について「も」触れておく。

その点、海外作品より打って代わって国内サブ・カルチャー作品、それも大の大人向けではなくおおむね青少年向けとのサブ・カルチャー作品にすら、

[ツインタワーとオーバーラップすべくもなっている建物を【時限爆破】する描写]
[その爆破をラジコンのようになったチェス盤と紐付く者達になさしめるとの描写]

が現出しているとのことを取り上げることとする。

ここで取り立てて俎上にのせることにした国内サブ・カルチャー作品は

『ルパン三世 くたばれ！ノストラダムス』(1995年封切りの日本国内アニメ映画)

という作品となる。

掲題の作品、国内の大手のビデオレンタルチェーンならば、そのコンテンツとしてのメジャーさゆえにほぼ確実にDVDコンテンツとしてストックしているようか、とのアニメ作品となるのだが、手前がそのタイトル表記文字列に思うところがあって稽査(けいさ)なしてみたところ、同作品には次のような側面(1. と 2. に分かちて摘示していくとの側面)が

[事実の問題]

として伴っている。

1.

1995年のアニメ映画『ルパン三世 くたばれ！ノストラダムス』の作中にては米国のダグラス財団なるものがその拠点とする[アースビル]なる世界最大のビル(フィクションにあつての架空のビル)が登場してくる。

その[アースビル]の描写は上部・下部は通常のビルのように見えるようになっているものの、同ビル中央部にては空洞部が中央に配されてビルが二叉の二棟立て、ツイン構造に分れるようになっているとの形態が表出を見ている(要するに目立つ中段部ではビルが向かい合う柱状の形になっている)。

そして、そのツインタワー構造を呈する部位の間には

[巨大な黄金の球形構造物]

が配されるとのかたちとなっている(尚、当該のアニメ作品作中ではその球形構造物は[地震などによる衝撃に対する緩衝材]との設定でそこに据え付けられていることになっている)。

そのようなアースビル — (『タワーリング・インフェルノ』の原作小説『ザ・タワー』に見る爆発物爆破がゆえに焦熱地獄と化したとの設定のビルがワールド・タワー・ビル[世界の塔]であるとの意味合いのものであるのに対して、同アースビル、語感としては[地球ビル]といったものとなろうか) — の特徴は

[黄金色の球形オブジェ(ザ・スフィア)を二つの柱状のビルの上に配していたツインタワー]

と類似性を呈するとのものである。

構造上の際立っての類似性だけではない。

「荒唐無稽アニメにすぎぬだろうが。」

と世の大人には一言でまとめられてしまう、そういうものであろうとの映画『ルパン三世 くたばれ！ノストラダムス』に登場する、

[中央部がツイン構造に分かたれ中空となる部位に黄金の球形構造物を配するアースビル]

は劇中設定にあって、

[アメリカに存する富の象徴としての世界最大のビル] (荒唐無稽映画ゆえにその描写は一個の街がまるまるビルの中に入っているといった(画家ピーテル・ブリューゲルが描いた)[バベルの塔]よろしくのものだが、とにかくも、アメリカに存する富の象徴としての世界最高層のビル)

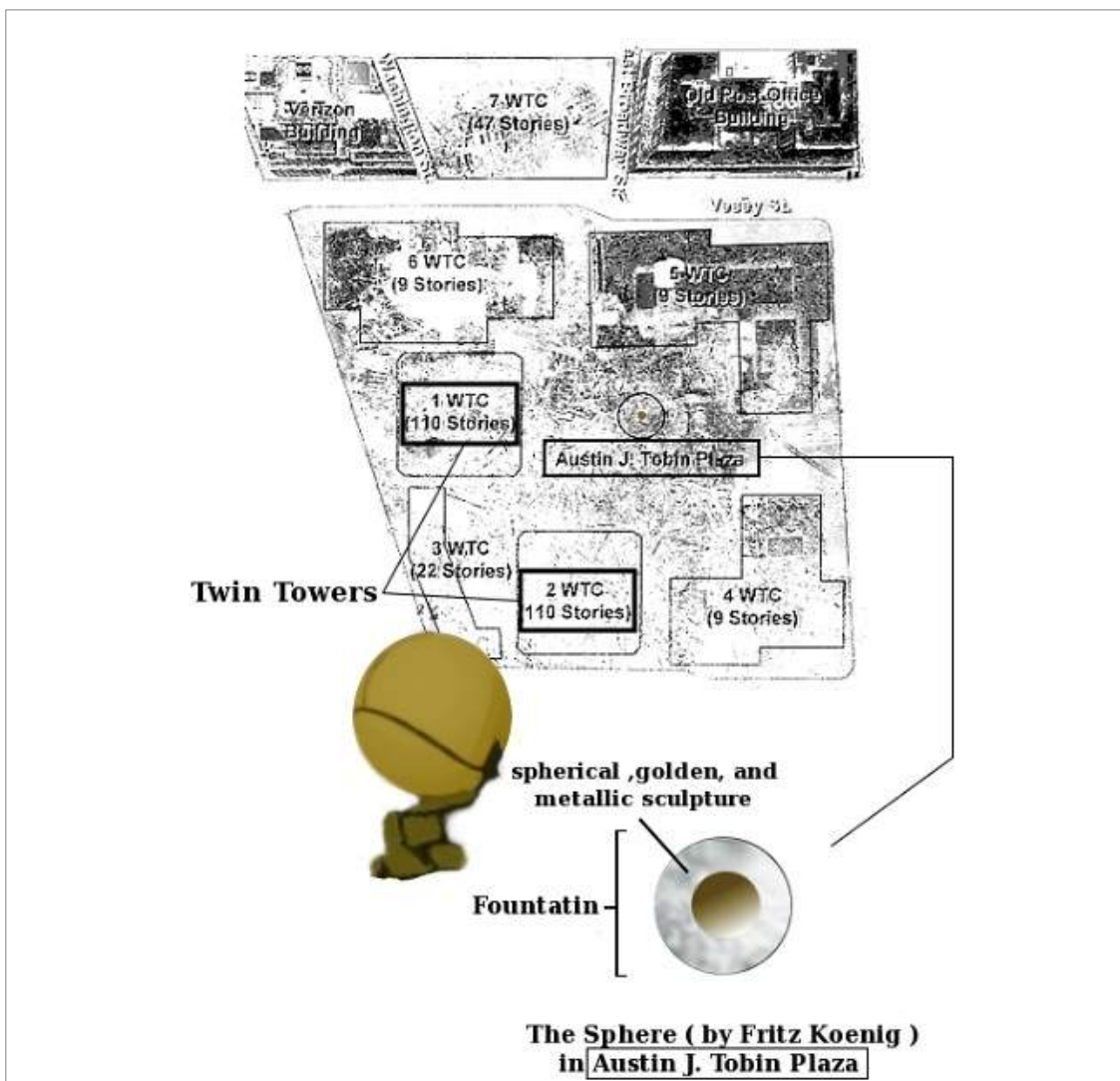
となっている(出典も無論、下に挙げる)。

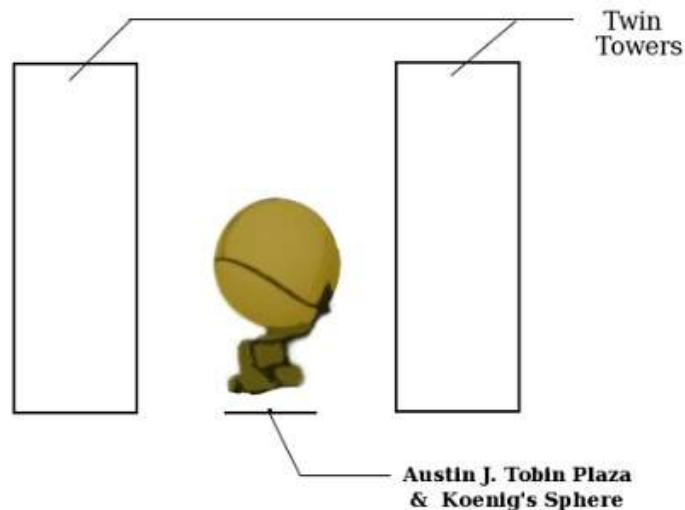
対して、現実世界のツインタワー(金融センターであったワールド・トレード・センターの中枢)も

[アメリカに存する富の象徴にして(一時期の話だが)世界で最も高いビル]

であった(基本的で目につくところを挙げてのものだが、[出典\(Source\) 紹介の部 102\(5\)](#)などを参照のこと)。

それゆえに [アースビル] と [ワールド・トレード・センターのツインタワー] の両者の性質は 一かたや荒唐無稽フィクション上のデフォルメされた存在となり、かたや現実世界の歴史的建築物であったわけだが— 似通っていることになる。





上は本稿にての先の段で

[映画『ファイト・クラブ』（同『ファイト・クラブ』、本稿の**出典(Source)紹介の部 103**から**出典(Source)紹介の部 103(6)**及び**出典(Source)紹介の部 104**及び**出典(Source)紹介の部 105**を包摂する相当数の文量割いての部位にて出典を事細かに挙げながらそのフリーメーソン象徴主義とフリーメーソン寓意で溢れた特性について解説してきたとの映画となる)にてそれとそっくりの大きかりのイミテーションが構築されて爆破されていたことを解説したツインタワー敷設のオブジェたるザ・スフィア]

の構造を再掲しての図となる(本稿にてのザ・スフィアの本格的な呈示および解説は**出典(Source)紹介の部 102(4)**に遡りもするところとなる)。

上の図の通り、ツインタワーの合間にあつては黄金色の金属製球形オブジェたるザ・スフィアが配されていたわけだが、そのイミテーションを登場させているとの『ファイト・クラブ』という映画(現実世界のザ・スフィアが「噴水の中に据え置かれた」かなり大きな黄金色の金属製球形オブジェであったところをその大きかりなイミテーション、「噴水の中に据え置かれた」かなり大きな黄金色金属製球形オブジェ(ワールド・トレード・センターのそれと見栄え的に酷似しているもの)を登場させて、それをビル連続爆破計画にての露払いとしての爆破対象として描いているとの映画)よろしく荒唐無稽映画『ルパン三世 くたばれ! ノストラダムス』にあつて「も」一部がツインタワー状を呈するビルの合間に[球形の黄金の構造物]が配されているとのことが 一直上言及し、これより典拠紹介していくところとして—「ある」。

(:なお、本稿の先の段では

[ツインタワーが崩落を見た 911 の事件が[ヘラクレスの 11 番目の功業]と濃厚濃密に関わると述べられるだけの事由がこの世界にはある]

とのことを指摘してきたわけであるが、「額面上は、」の荒唐無稽映画たる『ルパン三世 くたばれ! ノストラダムス』のアースビルのオーナー財閥(ダグラス財団)の拠点となる米国都市が

[(ツインタワー崩壊と複数文物にて結びつけられている)ヘラクレス 11 番目の功業にて登場する巨人アトラス]

のことを想起させる名称である都市 Atlanta [アトランタ]となつてもいることもあるにはある。

そうもしたことからして、世間一般の自身の[堅さ]度合いに矜持もっているとの向きら(意固地さが凶事を招くようなところの話を容れるだけの人間的雅量を有して「いない」との向きらでもいいが)には『何を下らぬことを...』と内面で片付けられようことかとは承知の上で敢えても述べるのだが、[極めて問題になる]と筆者はとらえている——ちなみに米国都市アトランタ Atlanta は[アトラスの海 Sea of Atlas]としてのアトランティック・オーシャン(大西洋)に通底する Atlantica-Pacifica を元々の名前としている場であると伝わっている(同じくものは英文 Wikipedia[Atlanta]項目に“J. Edgar Thomson, Chief Engineer of the Georgia Railroad, suggested the town be renamed "Atlantica-Pacifica," which was shortened to "Atlanta"”「アトランタについてはジョージア鉄道の主任技術者であったJ・エドガー・トンプソンがアトランティカ・パシフィカとの名称(との[大西洋の Atlantica⇔太平洋の Pacifica])の意での大陸横断にまつわるところの名称か)、後に縮められて[アトランタ]となったとの名称にしようと言った(ことに地名の由来を求められる)」(大要としての引用部はここまでとする)と出典付きで現行記載されていることから窺い知ることができるようになっている)——)。

出典(Source)紹介の部 107

SOURCE 107



Cimabue's Celebrated Madonna (1853-5)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

現実世界にあつてのありし日のツインタワーのことを想起させるように、

[中央部がツインタワー状を呈し、その間に黄金の球形構造物を配しているビル]

[アメリカに存する富の象徴にして「世界で最も高い」ビル]

との建築物が国内サブ・カルチャー作品(青少年層をもってして主たる視聴者を想定しているとの筋目の大衆向けアニメ映画作品)である『ルパン三世 くたばれ! ノストラダムス』に登場を見ている

とのことの典拠(および確認方法)を紹介することとする。

その点、まずもつて

[中央部がツインタワー状を呈しており、その間に黄金の球形構造物を配しているビル]

としての『ルパン三世 くたばれ! ノストラダムス』に登場する[アースビル]の描写については広く流通を見ている、

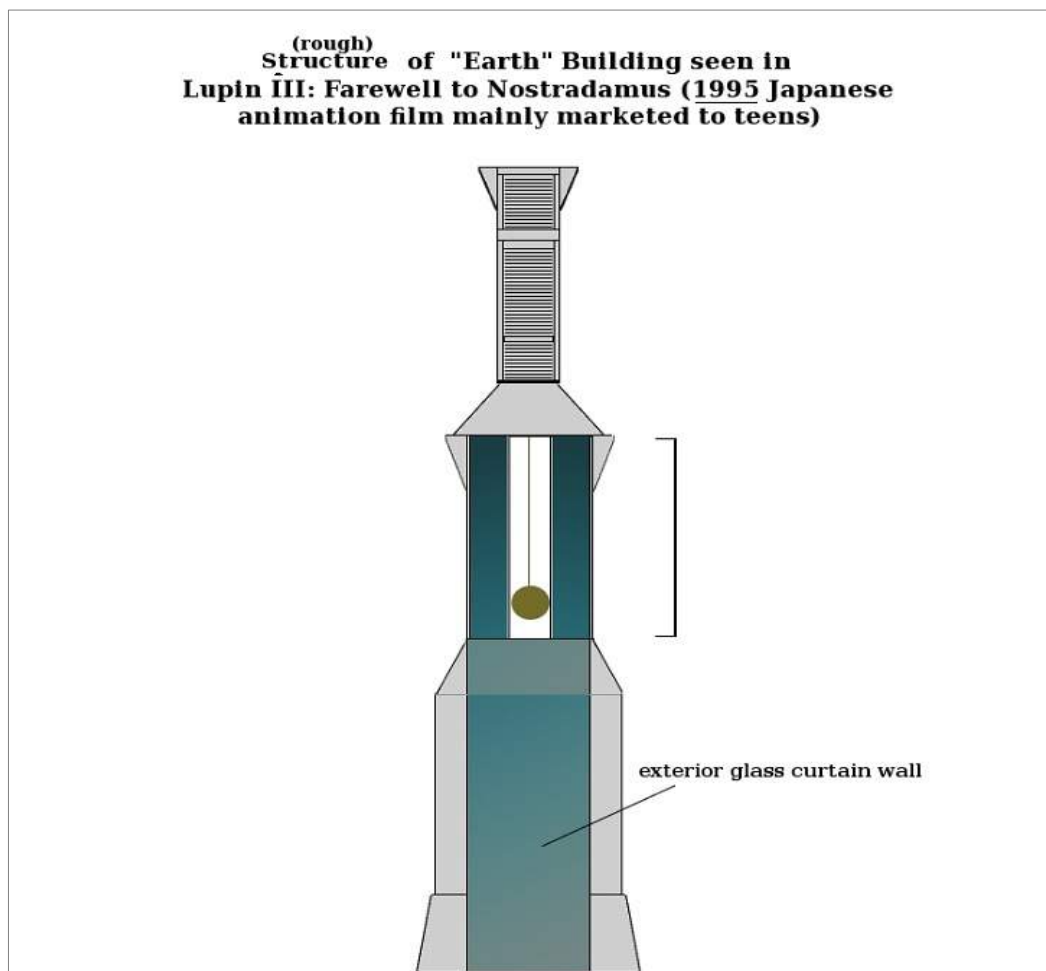
DVD コンテンツ『ルパン三世 くたばれ! ノストラダムス』

にあつての、(登場部位にあつての一例表記をなすとして)、たとえば、

【(スタート時から見て)再生時間 14 分 30 秒(0:14:30)のシーン】

【(スタート時から見て)再生時間 15 分 36 秒(0:15:36)のシーン】

にて[下にイミテーション挙げている建造物]が登場しているとのことがある(であるから、疑わしきにおかれては手ずからご確認いただきたい)。



上の図はDVD再生にあつての時刻表示が【00時間14分30秒】にて登場を見るアース・ビルを元にして作成したアース・ビル再現CGとなる(本告発媒体のためだけに品位を損なわぬようにと用意したCGとなる)。そちらもつてして[ビル中段にあつての二叉状に分かたれているところ]がツインタワー状を呈しており、また、その間に[球形構造物]が配されていることお分かりいただけるであろうが、金色(こんじき)のそちら球形構造物がツインタワー敷設のスフィアと位置関係上、相似形を呈していることを—これより解説する[映画の中で描かれるアース・ビルを巡る顛末]との絡みもあつて—ここでは問題視している(尚、アース・ビルについてはアングル如何によっては[巨大な人間の顔が彫刻されているとのデザイン(いかにも漫画チックなデザイン)が採用されている]こと「も」映画視聴にて分かるようになっていのであるが、そちらアングルでの視覚的特徴は上イメージには反映させていないこと、お含みいただきたい)。

次いで、DVD形態で広く流通を見ている『ルパン三世 くたばれ!ノストラダムス』にあつての[アースビル]が

[アメリカに存する富の象徴にして「世界で最も高い」ビル]

として描写されているとのことについての典拠であるが、それについては和文ウィキペディア[ルパン三世 くたばれ!ノストラダムス]項目にての記述内容の一部抜粋をなしておくこととする。

(直下、和文ウィキペディア[ルパン三世 くたばれ!ノストラダムス]項目にての[あらすじ]の節、その現行にての記載内容よりの一部引用をなすとして)

ジュリアはアトランタに本部がある巨大財閥であるダグラス財団の一人娘で、父親であるダグラスは、次期大統領候補に出馬するほどの大物。そのダグラス財団が所有する高さ1000mの世界最大のビル「アースビル」の最上階に秘蔵されている“失われた予言書”を5000万\$の報酬で欲しがっている富豪がいるという。そのためには、どうしてもジュリアが必要になるのだ。不二子のIDでアースビルの下見に訪れたルパンであったが、ハイテクビルの警戒システムは他のビルには類を見ないほどの厳重さであった。

(引用部はここまでとする)

上にての引用部にあつてはアース・ビルに関して

[巨大財閥(ダグラス財団)によりアトランタに建てられた高度1000メートルの「世界最大の」ビル]

であるとの設定が付与されていると言及されている(し映画視聴でその旨は確認できるようになっている)。

ここまでもつてして

現実世界にあつてのありし日のツインタワーのことを想起させるように、

[中央部がツインタワー状を呈し、その間に黄金の球形構造物を配しているビル]
[アメリカに存する富の象徴にして「世界で最も高い」ビル]

との建築物が国内サブ・カルチャー作品(青少年層をもつてして主たる視聴者を想定しているとの筋目の大衆向けアニメ映画作品)である『ルパン三世 くたばれ!ノストラダムス』に登場を見ている

とのことにまつわる典拠(および確認方法)の紹介の部を終えることとする。

(出典(Source)紹介の部 107 はここまでとする)

2.

次いで、小分けして指摘することにするが、アニメ映画『ルパン三世 くたばれ！ノストラダムス』にあっては次の側面が見てとれる(とのこともが問題になる)。

2 - a. [冒頭部、**旅客機ハイジャック・テロの発生**が描かれる]

2 - b. [上記旅客機ハイジャック・テロの結果、空港に辿り着いた飛行機をハイジャック犯であるテロリストの裏で暗躍していたノストラダムス教団なる勢力 —(災厄を自分達自身で自作自演しつつもそれをあらかじめ「予言」して権威を得るに至った、ノストラダムスの予言書を崇め奉っているとのスタイルを前面に出しての宗教団体(正確にはゾンビ人間に支えられている一方で宗教を金儲けに最大限利用しており人命を奪うことを何とも思っていないとの宗教マフィア))— の成員が**【遠隔爆破】したとの設定**が採用されている]

2 - c. [上記旅客機ハイジャック・テロを生き残ったサッカーチーム・メンバー(作中[ブラジル・イレブン]と呼称されるサッカーチームの面々)らがノストラダムス教団に洗脳され(その劇中洗脳手法は[腕に付けたミサガ偽装装置]を通じて無線で針を動かし神経操作電流を流すとのものであるとされている)、そのうえで[**白黒サッカーボール型爆弾**]をノストラダムス教団成員のラジオコントロールにてアースビルに**仕掛け出すとの設定**が採用されている。後、そうやってラジオコントロール人間らによって設置された爆弾が爆発、終盤部、**アースビル** —繰り返すが、[地球ビル]といった語感のビルで[米国の富の象徴にして最高層のビルとなり、向かい合うビルの上に黄金の球形オブジェを設置しているとの構造を有している建物]との描写からツインタワーと共通性濃厚なビル— の**崩壊**がはじまると描かれる(アースビルの崩壊はノストラダムス教団の自作自演の予言の成就のために必要とされているとの流れにて、である)]

上のことらの典拠をこれより挙げることとする。

出典(Source)紹介の部 107 (2)

Source 107(2)



Cimabue's Celebrated Madonna (1280-85)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典(Source)紹介の部 107(2)にあつてはアニメ映画『ルパン三世 くたばれ！ノストラダムス』にあつての

2 - a. [冒頭部、旅客機ハイジャック・テロの発生が描かれる]

2 - b. [上記旅客機ハイジャック・テロの結果、空港に辿り着いた飛行機をハイジャック犯であるテロリストの裏で暗躍していたノストラダムス教団なる勢力 — (災厄を自分達自身で自作自演しつつもそれをあらかじめ「予言」して権威を得るに至った、ノストラダムスの予言書を崇め奉っているとのスタイルを前面に出しての宗教団体 (正確にはゾンビ人間に支えられている一方で宗教を金儲けに最大限利用しており人命を奪うことを何とも思っていないとの宗教マフィア)) — の成員が【遠隔爆破】したとの設定が採用されている]

2 - c. [上記旅客機ハイジャック・テロを生き残ったサッカーチーム・メンバー (作中 [ブラジル・イレブン] と呼称されるサッカーチームの面々) らがノストラダムス教団に洗脳され (その劇中洗脳手法は [腕に付けたミサンガ偽装装置] を通じて無線で針を動かし神経操作電流を流すとのものであるとされている)、そのうえで [白黒サッカーボール型爆弾] をノストラダムス教団成員のラジオコントロールにてアースビルに仕掛け出すとの設定が採用されている。後、そうやってラジオコントロール人間らによって設置された爆弾が爆発、終盤部、アースビル — 繰り返すが、[地球ビル] といった語感のビルで [米国の富の象徴にして最高層のビルとなり、向かい合うビル] の間に

黄金の球形オブジェを設置しているとの構造を有している建物]との描写からツインタワーと共通性濃厚なビルー **の崩壊**がはじまると描かれる(アースビルの崩壊はノストラダムス教団の自作自演の予言の成就のために必要とされているとの流れにて、である)]

との作品内容についての出典(確認方法)を挙げることとする。

まずもって、

2 - a. [冒頭部、**旅客機ハイジャック・テロの発生**が描かれる]

2 - b. [上記旅客機ハイジャック・テロの結果、空港に辿り着いた飛行機をハイジャック犯であるテロリストの裏で暗躍していたノストラダムス教団なる勢力 —(災厄を自分達自身で自作自演しつつもそれをあらかじめ「予言」して権威を得るに至った、ノストラダムスの予言書を崇め奉っているとのスタイルを前面に出しての宗教団体(正確にはゾンビ人間に支えられている一方で宗教を金儲けに最大限利用しており人命を奪うことを何とも思っていないとの宗教マフィア))— の成員が**【遠隔爆破】したとの設定**が採用されている]

とのことらについてはアニメ映画『ルパン三世 くたばれ！ノストラダムス』を収めた流通 DVD コンテンツ —国内レンタル店にて(流通量が多いため)幅広くも借りられるとのもの— にて

【本編再生開始後、8分経過後から12分経過後の内容】

の視聴をなすことで、

[**【11人のブラジルサッカー選手らと主人公のルパン三世らを含む飛行機がハイジャックされたとの描写】**、そして、**【ハイジャックされた飛行機が空港に到達した段階で脅迫に使われた爆弾の発火装置が遠隔操作でオンにされる —爆弾をオンにしたのは後の流れにてノストラダムス教団に属する元傭兵のクリスとのキャラクターであることが判明する— との描写】**がなされた後、飛行機は爆発する。そして、飛行機ハイジャックに関与したテロリストらは飛行機より飛び降りた際に包囲していた当局官憲に銃殺されることになる。また、飛行機から降りたジュリアというキャラクター(後にアースビルオーナーの娘と判明するキャラクター)がその段階でノストラダムス教団に拉致されるとの描写がなされる]

との粗筋展開を見ていること、確認なせるようになっている(繰り返すが、DVD コンテンツにて本編再生開始後、[8分経過後あたりから12分の間] にあつての流れにて上記の通りの粗筋が具現化を見ていることを確認できるようになっている)。

さらにもってして、

2 - c. [上記旅客機ハイジャック・テロを生き残ったサッカーチーム・メンバー(作中[ブラジル・イレブン]と呼称されるサッカーチームの面々)らがノストラダムス教団に洗脳され(その劇中洗脳手法は[腕に付けたミサング偽装装置]を通じて無線で針を動かし神経操作電流を流すとのものであるとされている)、そのうえで**【白黒サッカーボール型爆弾】**をノストラダムス教団成員のラジオコントロールにてアースビルに**仕掛け出すとの設定**が採用されている。後、そうやってラジオコントロール人間らによって設置された爆弾が爆発、終盤部、**アースビルの崩壊**がはじまると描かれる]

とのことについてはアニメ映画『ルパン三世 くたばれ！ノストラダムス』を収めた流通 DVD コンテンツにて本編再生開始後、

【1 時間経過後の部位から 1 時間 8 分経過後までの内容】および【1 時間 23 分経過後の内容】

の視聴をなすことで確認なせるようになっている。

尚、(特に営利サイドの編修者がよく介在するとの事情もあってであろうか)、目立っての脱漏・錯簡の問題があまり伴わない傾向があると見ているウィキペディアの商業コンテンツ紹介のための項としての和文ウィキペディア[ルパン三世 くたばれ！ノストラダムス]項目(にての[あらすじ]の節)よりの掻い摘まんでの引用「も」下にてなしておくこととする(：和文ウィキペディア記載内容が有為転変を見ていなければ、以下引用の通りの記載をオンライン上より確認いただけるであろう。によって、DVD を直に見なくとも今まで記述してきたことの多くにつき[そのとおりである]との目星はつくことか、と思ひもする)。

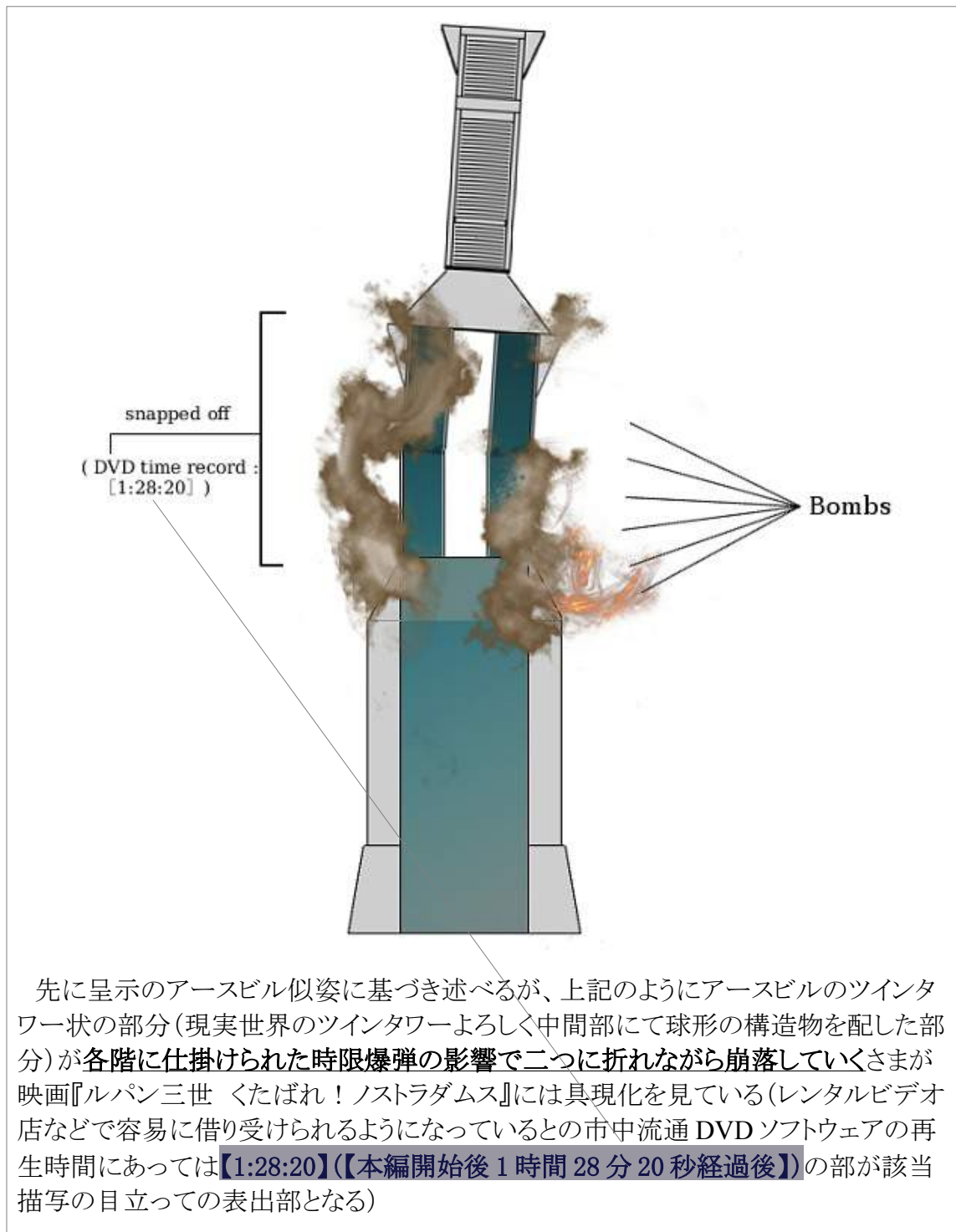
(直下、和文ウィキペディア[ルパン三世 くたばれ！ノストラダムス]項目にての[あらすじ]の節よりの「掻い摘まんでの」引用をなすとして)

あらすじ

1999 年第 1 の月、地中海で原子力潜水艦が爆発事故を起こす。その事故こそ、有名な予言者であるミッシェル・ド・ノストラダムスの残した予言書の第 2 章第 3 節にある「海を照らす太陽に似た灼熱のせいで、ネグロポントの魚が灰焼きにされよう」という予言が的中した証拠である、と新興集団であるノストラダムス教団の指導者ライズリーは観衆に説く。さらにライズリーは、「世界の滅亡は近く、その大災難から逃れるにはこの手にある“失われた予言書”に従うしかない!」と説く。…(中略)…150 万\$のダイヤを手に入れたルパン三世は、銭形警部とのオニゴッコから逃れたアトランタ行き旅客機の中で、ナマイキな少女ジュリアにダイヤを隠した人形を奪われてしまう。さらにジュリアの教育係として同乗していた不二子にも取り返りにされる始末。しかし、この機にもノストラダムスの予言は降りかかる。その予言とは、予言書の第 7 章 62 節にある「11 人の勇者の乗った大鷲が姿を消す」というもの。その旅客機にはサッカーのブラジル代表チームが同乗しており、機はハイジャックされてしまう。…(中略)…ハイジャックグループの所持していた時限爆弾が突然、作動を始める。ルパンと乗客らは、この混乱に乗じて犯人を取り押さえ、脱出することに成功。直後に旅客機は機体もろとも大爆発した。…(中略)…不二子が抵抗を試みたが、ジュリアはヘリコプターに乗せられ連れ去られてしまう。ジュリアはアトランタに本部がある巨大財閥であるダグラス財団の一人娘で、父親であるダグラスは、次期大統領候補に出馬するほどの大物。そのダグラス財団が所有する高さ 1000m の世界最大のビル「アースビル」の最上階に秘蔵されている“失われた予言書”を 5000 万\$の報酬で欲しがっている富豪がいるという。そのためには、どうしてもジュリアが必要になるのだ。…(中略)…これまでも予言書のままに事件をデッチ上げてきたノストラダムス教団は、アースビルの崩壊を予言し、ビル全体に時限爆弾をセットした(以下略)。

(引用部はここまでとする)

(出典(Source)紹介の部 107(2)はここまでとする)



まとめる。

[国内映画『ルパン三世 くたばれ! ノストラダムス』は「影響下にある者達(テロリストら)を用いて自作自演でハイジャックしたとの旅客機を予言に一致するところとして「遠隔」爆破した集団」たる宗教「的」集団、ノストラダムス教団が「劇中の世界最高層ビル」に(飛行機旅客機テロを生き残ったサッカーチーム「ブラジル・イレブン」の面々をリモートコントロールして)爆弾を設置、そちらを爆破しているとの映画となる。そして、そうもして時限爆破されているアースビルがツインタワーと既述の側面から濃厚に結びつく(並び立つ建物の間に黄金の球形構造物を配する/世界最高層のビルであるとの設定がゆえに結びつく)。であるから、映画『ルパン三世 くたばれ! ノストラダムス』は「予言を自作自演で成就させもすべくものツインタワー「類似物」の爆破を —これまた自作自演の飛行機ハイジャックと紐付けもしながら— 描く映画」となっているとの作品である」(異論など出ようもないとの記録的事実の問題

として、である)

(:ここまで述べてきたことを整理しもして繰り返すが、アニメ映画『ルパン三世 くたばれ！ノストラダムス』については同作を収めた流通 DVD コンテンツの(スタート時から見て)【再生時間 14 分 30 秒(0:14:30)のシーン】および(スタート時から見て)【再生時間 15 分 36 秒(0:15:36)のシーン】を視聴することで〔劇中、後に爆破されることになる)アースビルが「ビルがツイン構造に分かたれたの部位にて黄金色の球形構造物を配するビル」、換言すれば、「ツイン状のビルの合間に黄金色の球形オブジェが配されていたツインタワーの類似物」となっている〕ことを確認できるようになっている。また、同じくもの流通 DVD コンテンツにて【本編再生開始後、8 分経過後から 12 分経過後の部】の内容を視聴することで【旅客機ハイジャック・テロの発生が描かれる】【旅客機ハイジャック・テロの結果、空港に辿り着いた飛行機をテロリストの裏で暗躍していたノストラダムス教団なる勢力成員が「遠隔爆破」してのものであるとの設定が採用されている】とのことが確認できるようになっている。加えて、【1 時間経過後の部位から 1 時間 8 分経過後までの部】の内容および【1 時間 23 分経過後の部】の内容の視聴をなすことで【劇中アースビルが飛行機ハイジャックテロ リモートコントロールによる飛行機爆破に繋がったとのテロを生き残ったものの、操り人形とされるに至ったサッカーチーム(ブラジル 11)らに時限爆弾設置によって爆破倒壊させられる】との筋立てが現出しているとのことを確認できるようになっている)

以上のような映画がさらにもって問題になる理由としては、(ここまでの内容をきちんと把握いただいているとの向きらにあっては自明なこととお分かりいただけることか、とも思うのだが)、第一に、

[一部がツインタワー類似形を呈するアースビル —中央にて黄金色の球形構造体を配するビル— が爆破されるとのルパンものにみとめられる筋立ては映画作品『ファイト・クラブ』および映画作品『タワーリング・インフェルノ』に見るありよう、【ワールド・トレード・センターないしツインタワーの類似物】を【時限爆破】するとのありようと「同様」のものであることが問題になる] (映画『ファイト・クラブ』については寸刻描写ながらもの際立つての多重的言及との絡みで【出典(Source)紹介の部 102】以降の部を参照のこと。また、映画『タワーリング・インフェルノ』の同文の側面については【出典(Source)紹介の部 106(2)】を参照のこと。一見しての荒唐無稽アニメ映画『ルパン三世 くたばれ！ノストラダムス』については【出典(Source)紹介の部 107】、【出典(Source)紹介の部 107(2)】を参照のこと)

とのことである(そして、再三再四述べるように現実世界で発生した 911 の事件に関しては【出典(Source)紹介の部 101】にて言及のように)発破倒壊説が専門家団体より呈されている)。

国内のルパン三世ものが問題になる理由として第二に —こちらはよりもって自明なることだが—

[[旅客機ハイジャック・テロとアースビル爆破事件の黒幕が同一である]との描写が同作品作中にてなされていることに[旅客機ハイジャックテロとツインタワー崩落がワンセットになっていた 911 事件]との相似形を見出せるとのことがある] (『ルパン三世 くたばれ！ノストラダムス』では、繰り返すが、ブラジル「11」というサーカーチームの面々、[遠隔爆破させられた飛行機に搭乗していながらもハイジャック・テロを生き延びたサッカーチームの面々]が[ノストラダムス教団に(爆弾ではなく人間そのものが)遠隔操作されて爆弾設置挙動に及ぶ]との描写がなされている —【出典(Source)紹介の部 107(2)】—)

とのことも「また」ある。

以上のことらに加えて、国内ルパン三世ものが問題となる理由として、(こちらは「自明な」ことにつながる話ではなくなつて)、第三に、

[フリーメーソンの的な比喩の問題]

が同映画にあって「も」介在しているとのことが感じられるとのことまでが問題になる(とまでここでは指摘する)。

その点、先述のようにツインタワー類似のビルと述べられるところのアースビルをアニメ映画『ルパン三世 くたばれ！ノストラダムス』劇中にて爆破した操り人形のサッカーチーム、ブラジル 11(ブラジル・イレブン)はサッカーボール型爆弾をビルの諸所に配してビルを爆破すると1995年封切り映画『ルパン三世 くたばれ！ノストラダムス』には描写されている。

そこに見るサッカーボールとは元来・本然からして白黒市松紋様「的」なる色合いのものであるわけだが、フリーメーソンという組織体はその交流会館のロジの床、組織にあってのシンボル画などにてチェス盤状の白黒市松紋様をよく多用する組織として実によく知られている。そこから「実にもってわざとらしい」設定——普通に考えれば、『何故、ラジコン人間の「サッカーボール爆弾」(一体全体、何なのだろう、そのシュールさは)にてビルを爆破するなどという「おかしな設定」が出てくるのか?』との疑問が出て然るべきところととらえるから、「実にもってわざとらしい」と述べるのである——とのことが(同文のツインタワー比定物の爆破を扱っている「他の」サブ・カルチャー作品のより露骨なる特性と複合顧慮した際に)問題となると述べるのである。

(出典として：本稿を公開しているとのサイトの一を公開した後、邦訳版が出されたとの按配でほんのつい最近、邦訳版が刊行されたものとなるが、Robert Lomas(ロバート・ロマス/メーソンにて歴史通と通っていることが喧伝されてのフリーメーソンリー成員)の手になる THE SECRET POWER OF MASONIC SYMBOLS 邦題『フリーメーソンシンボル事典』(邦題版元は学習研究社)にての180ページよりの引用をなす。

(訳書『フリーメーソンシンボル事典』より引用するところとして)

“モザイク舗床 モザイク舗床はフリーメーソンのロッジの美しい床であり、入り混じった市松紋様である。このシンボルは、あらゆる被造物を飾るものの多様性を表す”

(引用部はここまでとする)

上のように綺麗事ととれる申しようがなされるところだが、とにかくも、フリーメーソンの交流会館たるロッジの床がチェス盤紋様に装飾されていることはよく知られていることである(下に図解部も設けておく)



にこだわっているかの好例となるとこの身が見た、合衆国初代大統領ジョージ・ワシントンがフリーメイソンリー成員として帯びていたとのエプロンの掲載図像 一本稿にての先の段、映画『ファイト・クラブ』にまつわるメソン象徴主義に通ずるところとして**出典**(Source)紹介の部 105 の段でも挙げていたとの図像— となる(同図出典は、(先にも解説したことを繰り返すが)、Project Gutenberg のサイトにて全文公開されている著作、ジョージ・ワシントンのフリーメイソンリー成員としての書簡に対する分析をなしているとの 20 世紀初頭のフリーメイソンの手になる著作、Washington's Masonic Correspondence (1915 年刊行の Julius Sachse という 20 世紀初頭にて執筆なしていたとのフィラデルフィアのフリーメイソンリー成員の手になる著作)となる)。

さらに、同じくもの [フリーメイソンの白黒市松模様へのこだわり] を当のメソンら自身がいかように言及しているのかとのことに関わるところとして前掲図右側にて掲載の図も併せて挙げた。(同様に再掲図となる) 同図は本稿にての先だつての段にて何度か引き合いに出していたところの著作、Project Gutenberg の媒体にて公開されている著作にして図版豊富な PDF 版も流通を見ているとのメソン象徴主義解説著作たる、

MASONIC MONITOR OF THE DEGREES OF Entered Apprentice, Fellow Craft and Master Mason (1903 年刊行版 / 『徒弟位階・職人位階・親方位階の各位階のメソン儀礼総覧』とでも訳せよう著作)

にあつて掲載されている図像となる。そちら図像内容に関わるところとして引用元著作である MASONIC MONITOR OF THE DEGREES OF Entered Apprentice, Fellow Craft and Master Mason にあつてはその p.29 にて、

“ The Mosaic Pavement is a representation of the ground floor of King Solomon's Temple; the Indented Tessel, of that beautiful tessellated border or skirting which surrounded it. The Mosaic Pavement is emblematical of human life, checkered with good and evil; the Indented Tessel, or tessellated border, of the manifold blessings and comforts which constantly surround us, and which we hope to enjoy by a firm reliance on Divine Providence, which is hieroglyphically represented by the Blazing Star in the centre. ” 「(メソンにあつての)モザイク形状の舗床は[ソロモン神殿の表象物]となり、美しくも碁盤の端っこ、裾の部を囲むのがぎざぎざに加工された切りばめ細工 (the Indented Tessel) となっているとのものである。モザイク形状の舗床は人間の人生を象徴するもの、善と悪の白黒の市松模様にて装飾されており、the Indented Tessel、すなわち、[ぎざぎざに加工されてのその縁なる部]は中心となるところにて存在するブレイジング・スターにて象徴図として表象されるところとなつて常に我々を取り囲み、我々が[神の摂理]への堅き信頼にてそれに浴することを望むとの多重的なる天なる恵み、そして、(福德としての)安楽を意味するものである」

といった解説 —「フリーメイソンのロッジの白黒模様への拘りは『ソロモン神殿に関わる人間の善悪の特性の反映』でもあるといった解説— が付されてもいる。

以上述べてきたようなチェス盤模様との異様ともとれる接合(ブラジル・イレブンが用いたチェス盤文様とも通ずる白黒市松模様状のサッカーボール型爆弾なるもの —「あまりにも不自然なもの」でもいいだろう— の設置を介しての接合)がゆえに先述の映画『ファイト・クラブ』『タワーリング・インフェルノ』ら —フリーメイソン・シンボリズムが多層的に具現化しての描写がなされつつ「ワールド・トレード・センターと結びつく場の」爆破計画が進んでいくとの作品ら— と同様の問題が国内作品『ルパン三世 くたばれ! ノストラダムス』「にも」影を落としていると述べてしまっても差し障りなかろうと述べたいのである。

(ただしもってして述べるが、いかに【不自然極まりない描写】(白黒市松模様のなる似姿のものであるサッカーボールを爆弾に転じてのものを設置したと?との不自然極まりない描写)が見てとれるといえども、それだけをもってしてフリーメイソンの白黒

市松紋様との接続性を引き合いに出さんとすれば、当然に牽強附会、こじつけの徒輩との批判は免れないであろう(当たり前ではあるとは思)。 しかれば、のこととして、本稿では【よりもって露骨なるフリーメーソンのシンボリズムそのものと多重的に接合する911の「日本国内」予見作品】が —先述なしてきた海外作品らにも引けを取らぬとの奇怪極まりないものとして— 存在していることの詳説を続いてなしもする所存である)

アニメ映画『ルパン三世 くたばれ！ノストラダムス』の話はここまでとする。

さて、ここで再度もってして実にくどくも繰り返し述べれば、である。国内「サブ」・カルチャー作品ら(ティーン・エイジャーが主たる商品ターゲットになるようなコンテンツら)を引き合いに出して大の大人が延々くたくだと甲論乙駁などなせば、

『頭の具合がよろしくない人間である』

『取るに足らぬ稚拙な人間である』

などと【寛容性の欠けるところの人間】に見られる・述べられるところか、とは当然に思われもする(穿って見れば、「そういう領域の分野であるからこそ、」悪質なやりようが「わざと」「そうした方向」を選定して堂々となされている)ともとれるわけではあるも取りあえずも上記のような反応が他の心中にて去来しうると推し量ってもある)。そう、「きちんとした」(あるいは「きちんとした」とのモード・スタイルを是とする)人間よりの軽侮の反応が期されるところであったとしても、国内サブ・カルチャー作品の類にあっては他にもニン・ワン・ワン、911の先覚的言及が「実に性質の悪い式」でもって具現化を見ているとのことがあり、そして、また、そこにフリーメーソンのシンボリズムとの接合点(トレーシング・ボードのありようなど本当にメーソンに詳しい人間ならば成程、と分かりもしようとの接合点)がみとめられるとのさえもがありもする。以降、そののことにまつわる噛み砕いての事細かな紹介をなしていくこととする(述べておくが、本稿筆者はフリーメーソンなどではないし、またもってして、フリーメーソンがありとあらゆる陰謀の背後に控えている本当のチーフ・コンスピレイター、本当の陰謀の首魁であるなどの「幼子を騙すような不誠実な手合いのこととする陰謀論」を展開しようとしているわけでもない(ゴー・カートなど玩具のような車を駆って定例的に催しに出没する(シュライナー位階の慣行)といったことは【表向きのまだまちな例】として確かに何でもやらされると判じられる筋目の者達を数多含んでいるのであろうが、いかに悪質なものであれ、フリーメーソンなどただの「人形」にしかすぎないと見ている。何度も何度も本稿内にて折に触れて述べてきたこととして、である)。筆者は「人間という種につきつけられた限界」「糸繰り人形に与えられた運命」の問題を呈示し、それに抗う必要を説くために敢えてもそうした話までなす必要があるとの観点 —再述するが、ソロモン神殿にまつわる重篤な寓意性が問題になるとの観点— でフリーメーソン・シンボリズムが用いられもしての「執拗な」意志表示のありようを問題視しているのである)。

さて、日本国内文物「にも」見受けられる、

[「予言の霊の業」(先述なしてきたところの新約聖書およびギリシャにみとめられるとのパイソンの霊 spirit of python に憑かれたが如くの力学)の発露との側面を有し、「なおかつ」、フリーメーソン象徴主義と共にある作品]

ということで、次いで、

(青少年向けマンガ雑誌たる『週刊少年ジャンプ』(集英社刊)にかつて毎週掲載されていた漫画作品としての)『ジョジョの奇妙な冒険』

という大ヒットシリーズ作品が相応の911の前言作品との性質を帯びていることを取り上げることとする(：有名所として「芸術的ともされる独特な画風」と「非常に凝ったストーリー展開」で知られる同『ジョジョの奇妙な冒険』シリーズ —筆者も内容を細やかに押さえることとした(個人的にはエンパシーを欠く残酷性、[情性]の欠如がゆえに好いてはいないながら押さえることとした)との作品— についてはコ

ミック本体でも売り上げ冊数が極めて多く、また、派生小説作品・派生ゲーム作品といったものが多数生み出されての大ヒットシリーズとなっている。その点、『ジョジョの奇妙な冒険』と911の予言的言及についてはよく知られている話と見受けられるところ、『都市伝説か』程度の按配にて把握している向きも多かろうといった話と解されるのだが、この身が特性分析して「なるほど。」と実感させられつつ呆れさせられたところとして以降、述べていくようなことが一フリーメーソンか余程のメーソン通(筆者はメーソンではないが、メーソン通であるつもりではある)にしか分からないような視覚的・意味論的寓意が「どういうわけなのか。」具現化見ているようなところとして―「現実」にある)。

上述『ジョジョの奇妙な冒険』シリーズにあつての

【スターダストクルセイダース】との表題が付された第三部の特定巻掲載特定描写】

については

[次のような観点]

から911の予言的言及をなしているものだと巷間語られているとことがある(：その[話としての通用性]から相応のキーワードで検索エンジンを動かせば、同じくもの点について解説しているとの向きの[何も知らぬ人間]には見るに値する情報が視界に入ってくるのか、とも思われる。そして、同じくものことについては本稿これよりの段でも事細やかに解説することとする)。

(これよりその問題性について細かくも取り上げる所存であるとの国内特定サブカルチャー作品に見る予見描写について)

ジョジョの奇妙な冒険パート3、スターダストクルセイダースにあつては主人公らの宿敵である吸血鬼の探索行がエジプトにて展開するのであるが、その探索行にあつては

【未来を予言する[マンガ]】と結びついた特殊能力を有する兄弟の敵役(オインゴ・ボインゴ兄弟と命名されての敵役)】

が登場してくるとのことがある。

彼ら敵役(オインゴ・ボインゴ兄弟)のマンガが【未来を予知する】との設定―いいだろうか、【未来を予知する】との設定である―が振られてのものである中で、その未来予知の場面については[次のようなこと]が巷間―ここ日本にての現実世界にあつての世間―にて囁かれている。

(巷間にて語られているところとして)

「よく知られたマンガ作品の一シリーズである『ジョジョの奇妙な冒険スターダストクルセイダース』ではオインゴ・ボインゴ兄弟との劇中悪役の[予言をなすマンガ描写]能力との絡みで[[911]という数字が露骨に描かれた服を着た男が[電柱に突き刺されて死亡する]とのシーン]が描かれている。

そして、そのまさしくもの同じくものシーンでは[飛行機]と[月]もがあわせて描かれている。

ただ単純に見ても[飛行機]と(服に刻字された)[911]の関係を連想させるが、については、また、[月]は(911の事件の立役者となつたとのことである)[イスラム勢力の象徴]とも解されるとのことがある。

のみならず、劇中ではその「電柱に突き刺されて死亡する、911との数字が入った服を着た男」の死亡局面が10時30分との時刻と結びつけられているとのもが当該描写に関わる場所としてあり（死ぬことが予言されての911という数値が入った上着を着た男が「おっ10時30分だ！」と言ってから、同キャラクターは「横転して同男をはじきだし、結果、彼が電柱に吊されて死ぬことになるバス」に乗り込むことになる。そして、同キャラクターの運命は「確定」することになる）、そこに見る10時30分という時刻はツインタワーが崩壊した時刻と（ほぼ）同じものである。

以上のことから、漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険(スターダストクルセイダース)』とは（現実世界で同事件が発生することになったのよりも10年以上前の作品として）

「911の事件を予言しているような作品」
となっている。」

上のことが一部にて問題視されてきたのは —その帰結の「頓狂さ」の問題は置いておき—

「次の各事実」

が Philological Truth 「文献的事実」の問題 —特定の文献に特定の記載がなされているという「事実」にまつわる問題— として「成立している」とのことがあるがゆえのことである。

事実1: オインゴ・ボインゴ兄弟のマンガにて死ぬことが「予言」された男の服には「911」との数字が目立って記載されている ⇒ 「誰でも容易に確認できるようになっている」との「文献的事実」である

事実2: 劇中に見る上記の男の死亡予言描写(漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』の中の劇中の漫画作品(英文タイトルが付されており OINGO BOINGO BROTHERS ADVENTURE)にての予言描写)が「月」「飛行機」と確と結びついている ⇒ 「誰でも容易に確認できるようになっている」との「文献的事実」である

事実3: 劇中に見る上記の男の死亡予言が「10時30分との時刻と紐付いてのバス乗車時間」と結びつけられている ⇒ 「誰でも容易に確認できるようになっている」との「文献的事実」である

事実4: 以上の**事実1**から**事実3**に見る描写を含む漫画作品が世に出たのは1990年代前半となっている ⇒ 文献にまつわる情報(書誌情報)としてすぐに確認できることである

SOURCE

108



Cimabue's Celebrated Madonna (1268-69)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典 (Source) 紹介の部 108 にあつては

事実 1: オインゴ・ボインゴ兄弟のマンガにて死ぬことが「予言」された男の服には [911] との数字が目立って記載されている ⇒ 「誰でも容易に確認できるようになっている」との [文献的事実] である

事実 2: 劇中に見る上記の男の死亡予言描写 (漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』の中の劇中の漫画作品 (英文タイトルが付されており OINGO BOINGO BROTHERS ADVENTURE) にての予言描写) が [月] [飛行機] と確と結びついている ⇒ 「誰でも容易に確認できるようになっている」との [文献的事実] である

事実 3: 劇中に見る上記の男の死亡予言が [10時30分との時刻と紐付いてのバス乗車時間] と結びつけられている ⇒ 「誰でも容易に確認できるようになっている」との [文献的事実] である

事実 4: 以上の **事実 1** から **事実 3** に見る描写を含む漫画作品が世に出たのは 1990年代前半となっている ⇒ 文献にまつわる情報 (書誌情報) としてすぐに確認できることである

とのことから、「幅広くも流通を見ている印刷物現物にての「視覚的情報」として容易に確認できることから」の即時検証方法を紹介することとする。

市中にて廉価かつ容易に入手できるとのかたちで広く流通しているオインゴ・ボインゴの予言エピソードを収録しての流通コミック書籍は【旧版】と【新版】(リニューアル版)の目立ってもの二バージョンがある。

うち一つ、旧版の方は

集英社「単行本」版『ジョジョの奇妙な冒険』第20巻 (にて掲載の「クヌム神」のオインゴ「トト神」のボインゴ(1)の部)

となる(巻数表記が20巻となっているとのもの)。

他面、同様のものながら、装丁がリニューアルされてのものの方は

集英社「文庫」版『ジョジョの奇妙な冒険』第13巻 (にて掲載の「クヌム神」のオインゴ「トト神」のボインゴ(1)の部 — ないしは「オインゴボインゴ兄弟」(Oingo Boingo Brothers)の部 —)

(※上のリニューアル版の方は集英社文庫との名目で「文庫版」として — 漫画をそのまま掲載するかたちでながら — 装丁をリニューアルして2002年に第一刷刊行されたとのもの、漫画雑誌「週刊少年ジャンプ」誌掲載の『ジョジョの奇妙な冒険』にあつての「1990年42号から1991年6号に掲載のエピソードを移植した」と末尾に明示されてのものとなる)

となる(文庫と銘打って版元の集英社が供給しているが、中身は漫画本であることに変わりはない)。

さて、**事実1**から**事実3**、すなわち、

事実1: オインゴ・ボインゴ兄弟のマンガにて死ぬことが「予言」された男の服には「911」との数字が目立って記載されている ⇒ 「誰でも容易に確認できるようになっている」との「文献的事実」である

事実2: 劇中に見る上記の男の死亡予言描写(漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』の中の劇中の漫画作品(英文タイトルが付されており OINGO BOINGO BROTHERS ADVENTURE)にての予言描写)が【月】【飛行機】と確と結びついている ⇒ 「誰でも容易に確認できるようになっている」との「文献的事実」である

事実3: 劇中に見る上記の男の死亡予言が【10時30分との時刻と紐付いてのバス乗車時間】と結びつけられている ⇒ 「誰でも容易に確認できるようになっている」との「文献的事実」である

に関しては — それら該当事実らの掲載頁数をダイレクトに指定するとの式で申し述べるが —

【リニューアルされての文庫版『ジョジョの奇妙な冒険』第13巻に関して述べれば、たとえば、(手前手元にある版では)、6から17ページとページ番号振られている箇所】

より「そのとおりである」とのこと、(漫画媒体との視覚的に分かり易い形態より)即時確認できるようになっているところである(ので、本稿のこれよりの指摘、そして、オンライン上の他言及媒体など散見されたうえでなお疑わしいとのことがあるようであるのならば、よく書店にて流通しているさまが窺えるリニューアル文庫版の13巻6ページから17ページをご覧になられることをおすすめする)。

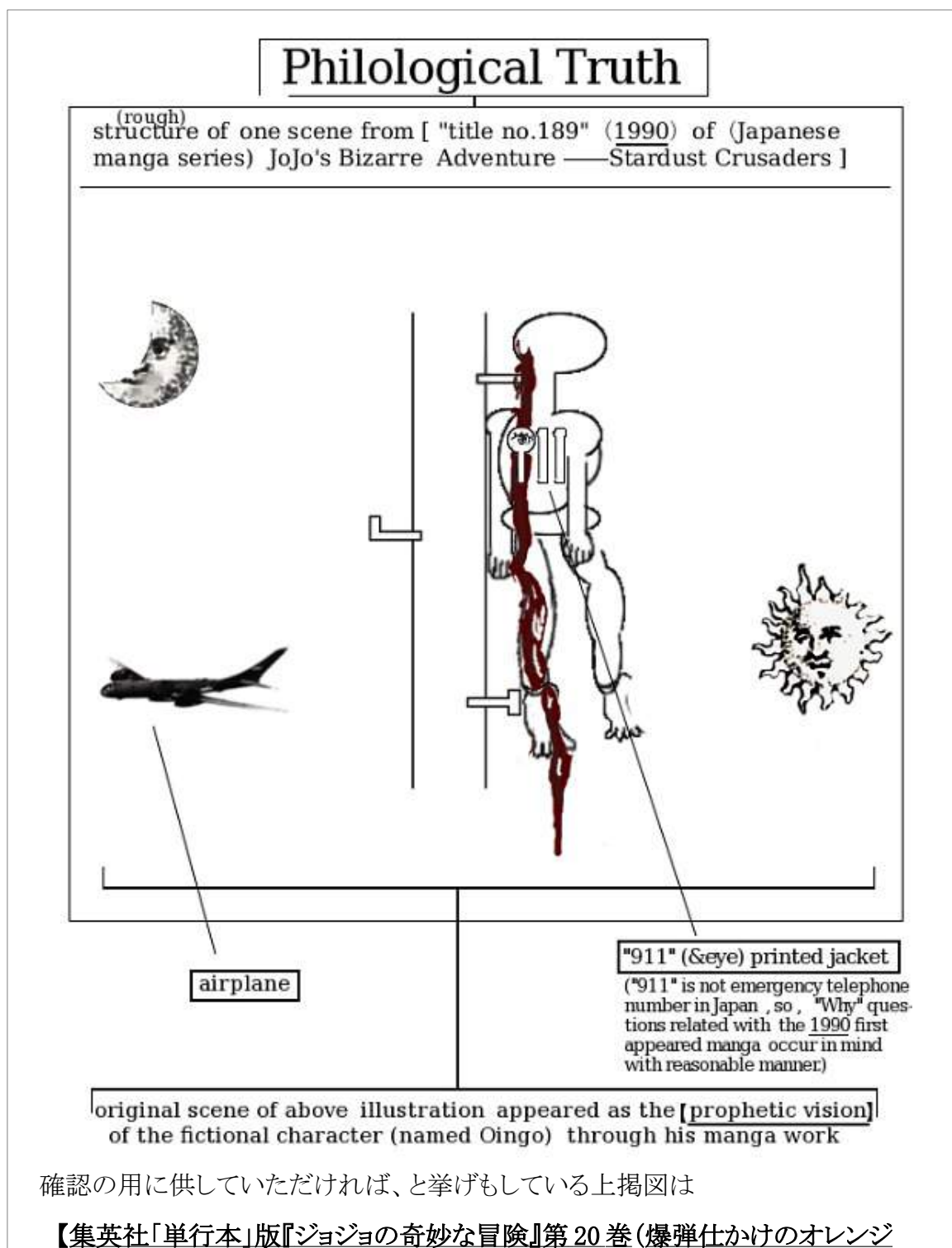
他面、表記**事実4**、すなわち、

事実4: 以上の**事実1**から**事実3**に見る描写を含む漫画作品が世に出たのは**1990年代前半**となっている

とのことについてはリニューアルされて流通している、

【文庫版『ジョジョの奇妙な冒険』第13巻巻末部】

の書誌情報記載部より「そのとおりである」と確認できるようになっている(：問題となる描写が【1990年42号から1991年6号にかけて漫画誌に掲載のエピソード】に含まれているとことが確認できるようになっている)。



の巻)にての「オインゴボインゴ兄弟」の部にて掲載の図像のおおよその再現図
— 当方が手元に置いており、また、市中でよく流通しているとのリニューアルさ
れての文庫版『ジョジョの奇妙な冒険』の方では第13巻にてのp.9にて掲載の
図像のおおよその再現図— 】【

となる(尚、図については【構図上、ここでの指摘で意味をなしてるところ】だけを「再
現」しているとの意味合いでの「再現図」となる)。

上の再現図に見るように、原作では

[バス転倒事故にてバスより放り出され電柱の突起部にて首を突き刺されて死
ぬとの男の上着に「911」の文字が刻まれている]

とのありようの描写がなされ(原作コミックに出てくるオインゴという名前のキャラクター
の「予言」をなすとの設定が与えられての未来予知の漫画にてそうした「予言」描写が
なされ)、また、その予言描写にてその電柱にて首を突き刺されて吊されて死んでいく
男の左側に

[飛行機]

が描かれているとのさまが具現化を見ている(:その点、上の再現図に見る飛行機や
月と太陽の擬人化しての顔の描写は本稿用に用意したものだが、対して原作の方で
は[飛行機]や[月]や[太陽]の顔として独特なる(芸術的な、とも解されるが、筆者個
人としては南米・中米にてのコロンブス到来前の崇拜対象(神格)ら描写形態を想起
させるものであると受け取っている)デフォルメ擬人化処理が施されている)。

さて、上記のような[予言](とされるもの)がこれまでの話と同様に容易に確認できるようになっている
との件については — ウィキペディアという媒体の性質上、有為転変しやすきありようがゆえに抜粋した
とおりの記述が残置し続けるかは保証しかねるところだが — 和文ウィキペディア[スターダストクルセイ
ダース]項目にて次のような記載が「現行」なされているところである。

(直下、和文ウィキペディア[スターダストクルセイダース]項目より原文引用をなすところとして)

ト神の漫画が旅行客の男性の死亡を予知する(正確には乗ったバスが事故に
会い、死亡する)描写があるが、これがアメリカ同時多発テロを予言するかのよう
な描写だとして一部で話題となった。理由としては、事故死した男性の着てい
た服に「911」と書かれており、サメのような顔をした飛行機がそばを飛び、イスラ
ム教のシンボルである三日月が描かれている。さらに、死亡する直前に男性が
「おっ、十時半だ」とバスの時刻を呟いているが、これは貿易センタービルが崩
落した時刻でもあった。荒木はこの噂に対して「考えずに描いてた」と述べてい
る。当該の場面はアメリカ同時多発テロより以前の1990年に描かれたものであ
り、事件より11年前のことであった。作者がこの噂を知ったのは2007年5月ご
ろと、噂が出始めた時期と比べるとかなり遅かったようである。

(ここまでを引用部とする)

(出典(Source)紹介の部108はここまでとする)

その点、表記の**事実1**から**事実1**のようなことが実際に具現化しているとのことについて問題となる描写を具現化させたとの作者(『ジョジョの奇妙な冒険』作者)が

「考えていなくてそうしたものを書いていた」

と述べていようと(「考えていなくてそうしたものを書いていた」との作者の弁については上にての出典紹介部にて現行にあっての和文 Wikipedia にての記載のされようを引用したところである)、あるいはそのようなことを述べていなくとも問題となること「ら」がある。[インターネット上にて「も」重要なところが脱漏見ながら語られているとの上記のこと]についてはそうした予見描写を具現化させた(具現化させられた)との作者意中などという属人的問題を越えて問題となるところが見てとれるとのこと「ある」のである。

この身が心底呆れさせられた(この世界そのものに対して「さらにもって」心底呆れさせられた)ところとして続いて述べもする**第一から第五の点**ら 一便宜的に**A. から E.** と振って表記することとしたことら — が

[問題の重篤性を示すところ]

そして、(悲劇的なことにそれが大仰な、あるいは、神秘主義的な物言いでまったく済ませられないようなところとして)、

[我々の生存限界線そのもののおぼつかさを嘲笑うようなところ]

としてそこに確として「ある」のである(：それらのことら、便宜的に**A. から E.** と振ってこれより順次表記していくことらについての黒白について「も」(先にてのそれと同じような言いようとはなるが)『主張者の化けの皮を剥いでやるか』、そういう心中でもいいので是非とも本稿読み手には裏をとっていただきたいものではある)。

A

第一。

同じくもの漫画にあっての[予言(とされるもの、すなわち、事実1から事実4によって示されるところ)]については

[公の領域 — 「『ジョジョの奇妙な冒険』は911の予言描写を含む」とのことまでは語られもする[おおやけ]の領域 — では目立って語られぬところの不快なる側面]

が伴っている。

作中にて[911と刻印された上着を着た男]が死亡する契機となった

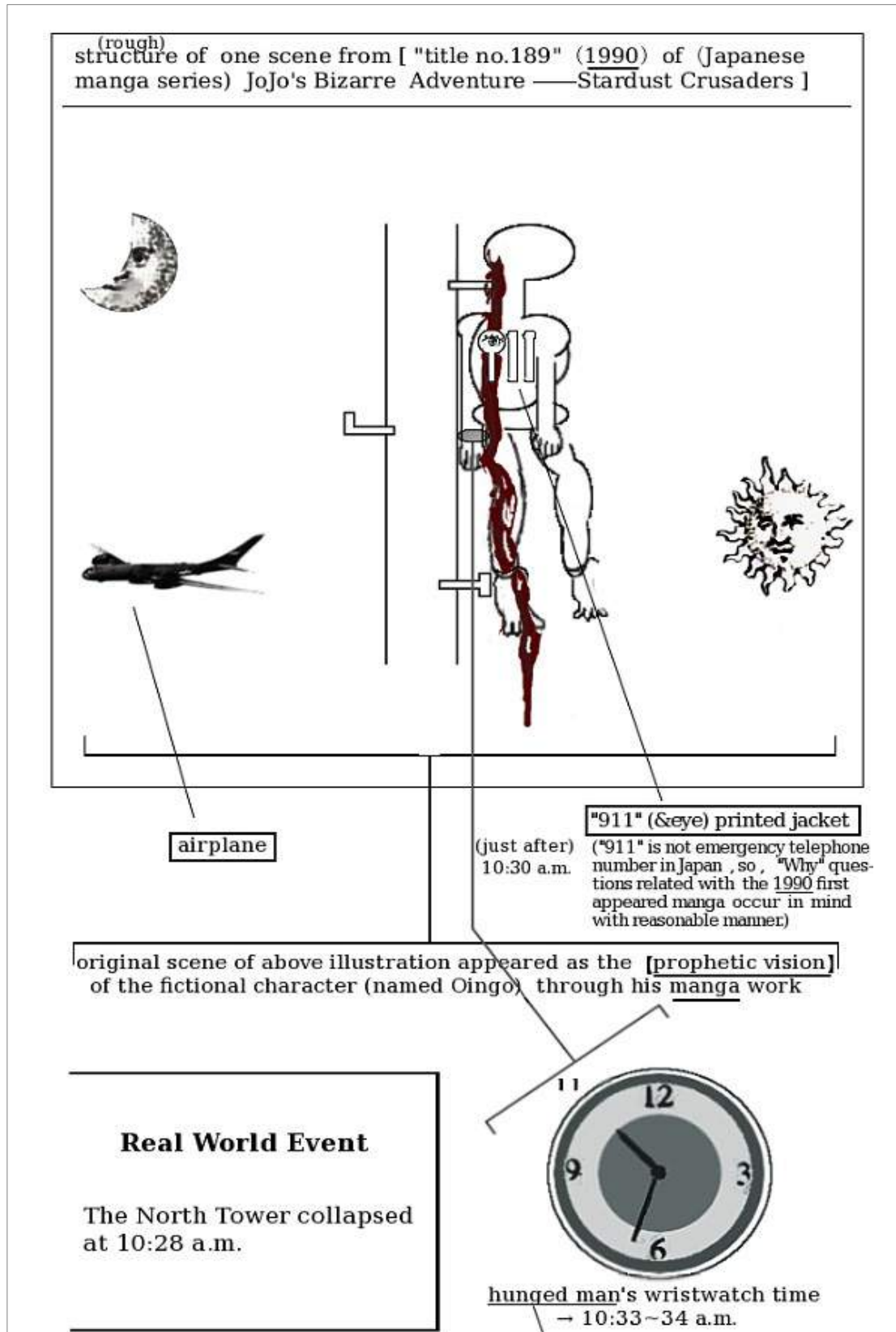
「お、十時三十分だ！」

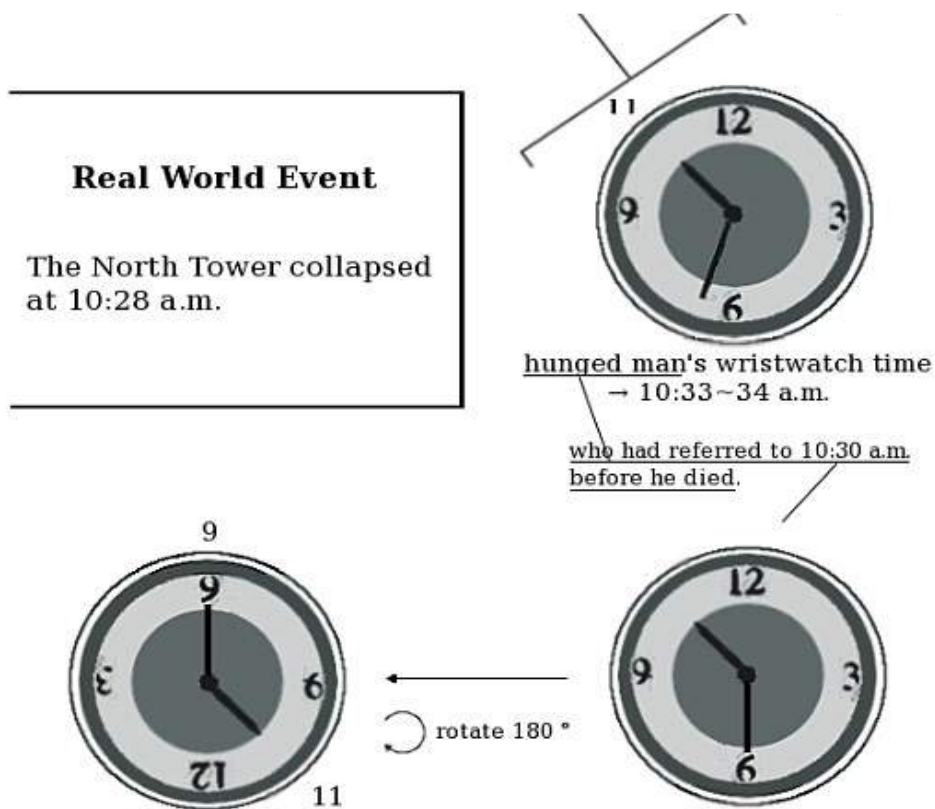
というのは確かにツインタワーの内の「ノースタワー」の方が崩落した時刻と近いものである — 目立つところでの解説を引けば、和文ウィキペディア[アメリカ同時多発テロ事件]項目の[被害]の節に(現行にてのそこにての記載より引用をなすとして)“火災の熱による鉄骨の破断でタワーは強度を失い、九時五十九分に南棟が突入を受けた上部から砕けるように崩壊した。北棟も十時二十八分に南棟と同様、砕けるように崩壊した”(引用部はここまでとする)と記載されているようなところとして2分程度の時間的離隔しかないのかたちで近いものである — 。 が、そも、その「10時30分」という時刻それ自体からして

[911]

との数字と結びつくものともなっている(「どういうことか」については続いて後の段にてすぐに解説する)。

[[服に刻字された911] のみならず [911 刻字上着を着る男] が死ぬとの時刻が 一同時刻がツインタワーにあってのノースタワーの崩落時間と2分ほどの誤差程度しかきたしていないとのことだけではなく— [911との数値]と結びつくようになっている] (との見立てがなせるようになっている) とのことに「相応の」寓意性やある種の執拗さの問題を感じざるのこともあるのだ —繰り返すも、そうした属性を持つ作品を世に出した作者が「考えていなくてそうしたものを書いていた」と述べていようとなかろうとも、である— 。





上の図 にあって図示の時計盤をご覧頂きたい。10時30分との時刻は(右回りでも左回りでもどちらでも同じところとして)180度回転させると「11」と「9」との数値に時計の時針が合わさるとの時刻であることがお分かりいただけるであろう(11は180度反転させても同じように見える数、6は180度回転させると9に化ける数であるからそうなる)。

さて、漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』にあっての表記の特定エピソードでは「911との数値が刻字された上着を着た男」が自身の死に関わる場所として「10時30分だ」との台詞に続いて「串刺しにされた吊された男」へと変じさせしめられるわけではあるが(上の図にての予告描写の通りの死にざまがフィクションの中で具現化することになる)、その男の死亡にまつわるあれやこれやについては男が死亡した「後の」時計の時刻も同作にて描かれているとのことがある。すなわち、「10時33分ないし34分」とのかたちでその男の腕時計の刻む時刻が「電柱に首が突き刺された吊された男の血まみれのアナログ時計のアップ」とのかたちで印象的に描かれているとのことがある(現行、当方の手元にある市中にて流通している版のリニューアルされての文庫版だと第13巻にてのp.17が往時の該当話のそうした描写の掲載箇所となる)。

以上のように重層的に着目されるようになっていくとの時刻、ぴったりもの同時刻を含めての10時30分「前後」については—[これよりさらに述べていくようなこと]をも複合顧慮の上で述べる場所として—911にあってのツインタワーのノースタワー崩落時刻が10時28分であった(英文 Wikipedia[September 11 attacks]項目にて “ The North Tower collapsed at 10:28 a.m. after burning for 102 minutes. ” と掲載してある通りである) こととの兼ね合いでも「できすぎたところである」と述べられるようになっていくものである(続いての内容をご覧いただきたい)。

(何故もってして180°回転させると「9」「11」が浮かび上がってくるナンバー表記法が軽んじざるべきものになるのかについて)

本稿では先の段にあって

1. [冒頭部からニューヨークはマンハッタンに位置するリベラル系出版社のオフィスビル爆破されるとの場面から話が始まる作品] (911の事件にてマンハッタンのビルが崩落したことを想起させる作品)
にして、
2. [魔的封印を解くとの目的でペンタゴンが爆破・部分倒壊させられるとの描写がなされる作品] (911の事件にてペンタゴンが攻撃されたことを想起させる作品)
にして、
3. [米軍関係細菌学者から漏出した炭疽菌改良株が大災厄をもたらしかねないとの状況に至ったとの描写がなされている作品] (911の事件の後に米軍関係者の細菌学者ブルース・イヴィンズ(容疑者)経由で炭疽菌が郵便配布されたとの事件が勃発したことを想起させるとの作品)
にして、
4. [ニューヨーク象徴物(と判じられるもの)とペンタゴン象徴物(と明示されたもの)を並列しているとのシンボリズムを図示までしながら多用しているとの作品] (911の事件にてニューヨークとペンタゴンが同時攻撃されていることを想起させる作品)
にして、
5. [その派生作品からして[倒壊させられるツインタワー]や[煙をあげるペンタゴン]を911発生前から図示しているとのものになっている作品]

であるなどというものが

【「70年代初出の」小説作品】

として存在しているとのことを入念に指摘していたわけだが(疑わしきにおかれては問題となる作品の原著・訳書よりの抜粋を事細かになしているとの本稿該当部位 — **出典(Source)紹介の部37**から**出典(Source)紹介の部37-5**を包摂する解説部 — を参照されたい)、といった指し示しの過程で問題となるその作品(『ジ・イルミナタス・トリロジー』)の中にて

「午後五時五五分にてペンタタゴンが爆破される、その午後五時五五分との時間帯をアップサイドダウン、アナログ式時計で逆様にして見れば(換言すれば、左回りでもいい、右回りでもいい、180度に回転させて見れば)、911との数字が浮かびあがってくる」

との話「をも」なしている。

といった問題となる文物(70年代初出の小説作品『イルミナタス・トリロジー』)にての前言やりようとここにての(『ジョジョの奇妙な冒険』の)「10時30分の話」は「際立ってのところで相通ずるようになっている」と判じられるだけの側面があり、同じくもの点について、これ以降、筆を割く(：くだんの一致性につき、(実際に同じくものことは動きようがない[文献的事実]なわけだが)、それが[事実]と指し示された場合、【問題となる】のは「確率的にそれが偶然で済むような性質のものなのか否か」、「偶然ではない場合、そういう偶然ではないものを具現化させての力学が(それが必然としてそこにあるとして)何を意図してそうもしたことをなしているのか」とのことらであると訴えんとしてい

る人間が筆者であり、そして、本稿では[偶然性]を排するだけの恣意的やりようとしての側面を多重的に摘示すること、そして、恣意性が(そこにあるとして)実に悪辣な意志表示とワンセットになっているとのことを指し示すのを使命の一としている)。

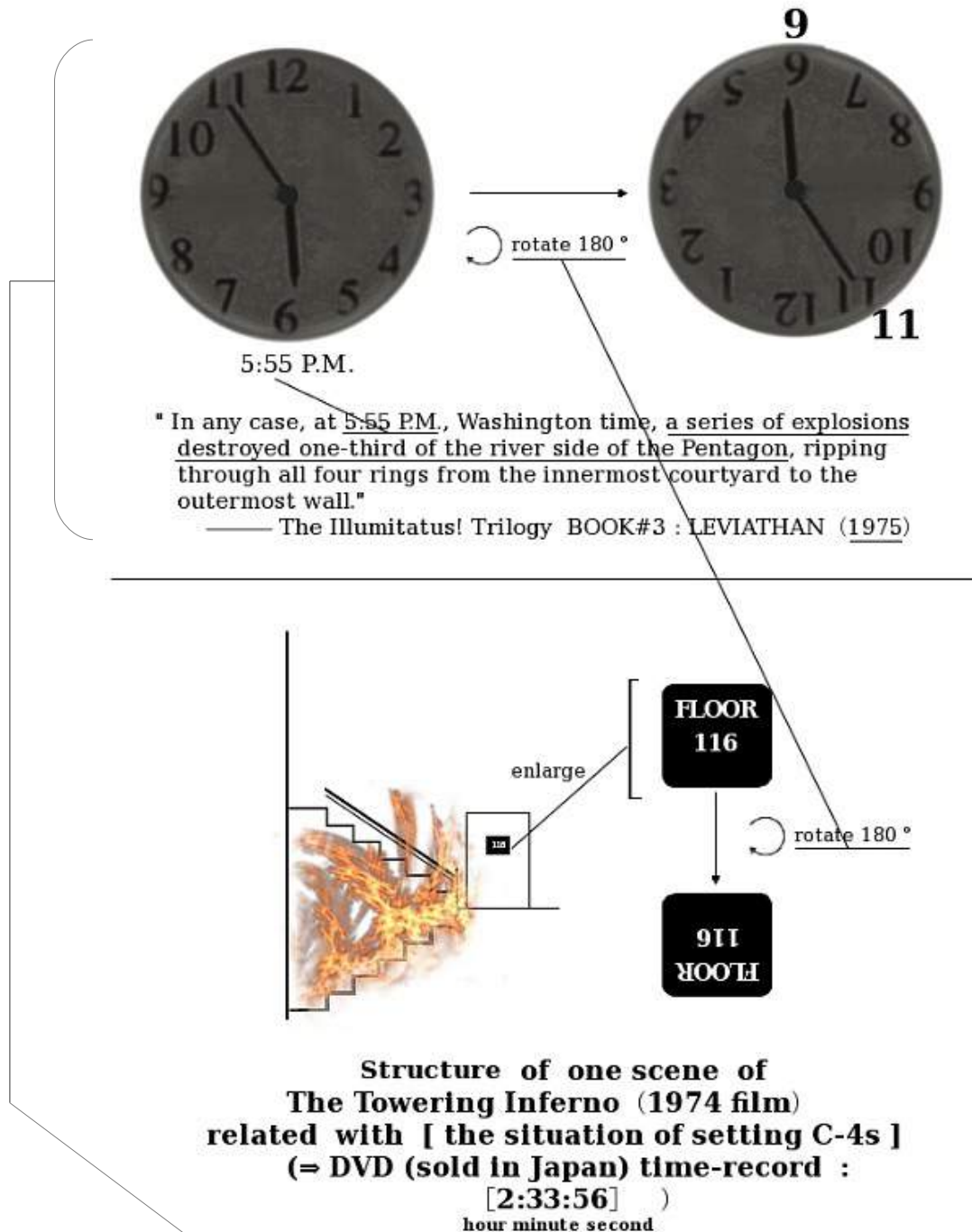
さて、直上言及の、

[70年代欧米圏ヒット小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』にみとめられもする先覚的言及にまつわっての文献的事実]

と

『ジョジョの奇妙な冒険』にまつわっての10時30分の話

の間の接合性に関わるところとして下に布石としての図らおよびそれら図らにまつわる最低限の解説を付しておくこととする。



上掲図にての上の段の図像の方は『ジ・イルミナタス・トリロジー』の描写にまつわる図となる(くどくも繰り返すが、ジ・イルミナタス・トリロジー、70年代にて欧米にて大ヒットを記録した同作についてはそれが[ニューヨーク象徴物とペンタゴン象徴物を並列してのシンボル画]を作中内にて頻繁に持ち出し、かつもってして、マンハッタンビル爆破やペンタゴン爆破をモチーフと

している作品であるとのことを本稿の先だつての段で詳述している)。

同図に見る5時55分との時間帯にペンタゴンが爆破されるという筋立ての作品が『ジ・イルミナタス・トリロジー』となっている(：該当部記述については英文原著の方についての The Illuminatus! Trilogy の BOOK#3 : LEVIATHAN のテキストもオンライン上のアーカイブなど複数媒体から現行確認可能となりもしている —すなわち、検索エンジンに表記テキストを入力することで当該文物にそういう表記がなされていることが[文献的事実]であると確認可能となっている—。につき、[\[出典\(Source\)紹介の部 37-2\]](#)にての引用内容を繰り返すとして) “**In any case, at 5:55 P.M., Washington time, a series of explosions destroyed one-third of the river side of the Pentagon**, ripping through all four rings from the innermost courtyard to the outermost wall.” との部が爆破時刻にまつわる該当部表記となり、集英社より出されている訳書文庫版では最終巻『リヴァイアサン襲来』、その p.120 にての(引用なすとして) “**ワシントン時間で午後五時五五分に、一連の爆発によりペンタゴンの三分の一が破壊され、いちばん内側の中庭からいちばん外側の壁まで、四重の環状構造がずたずたにされた**”(引用部終端)との部位が邦訳版該当部となる)。

さて、上掲図の上の段の時刻表示、[5時55分のペンタゴン爆破]とは時計の時針を180度回転させてとらえると[911と結びつく時針の時刻にてのペンタゴン爆破]と見ることもできるものである(：いいだろうか。無論、それだけ見れば、牽強付会(こじつけがましき)もいいところの話だが、ここでは[マンハッタンビルが爆破される作品][ペンタゴンが爆破される作品][ニューヨークの象徴とペンタゴンの象徴を並列させての象徴が図示までされて頻出を見ている作品][米軍関係者より炭疽菌漏洩がなされる作品(実際の911の事件の後の(先んじて解説の)ブルース・イヴィンズにまつわる犯行を想起させる作品)][その「関連」作品からして[粉塵を上げるペンタゴン]や[折れるツインタワー]を描いていたとの作品]—[\[出典\(Source\)紹介の部 37\]](#)から[\[出典\(Source\)紹介の部 37-5\]](#)にてその特性について紹介してきた作品—toまつわるところとしてそういうことがあると指摘していること、ゆめお忘れないでいただきたいものでもある)。

続いて前掲図にての下の段に挙げての図像の解説をなす。そちら図像もまた前掲図にあつての上の段の[5時55分の図]と同様に先に同様のものを挙げているところを繰り返して「再掲」なしているとの図となるわけだが、同図像、本段よりそう遠くはないところにて映画『タワーリング・インフェルノ』にまつわって持ち出したものとなる(：同『タワーリング・インフェルノ』は一本稿[\[出典\(Source\)紹介の部 106\]](#)から[\[出典\(Source\)紹介の部 106\(6\)\]](#)にあつて容易に後追い可能であるとの論拠呈示に遺漏なくも注力してきたところを振り返っても述べるが—[\[同映画作品の複数ある原作小説のうちの『ザ・タワー』の方がツインタワー近傍のビルで爆弾が起爆されて大火事に発展、多くの人間が焦熱地獄の中で焼き殺されるとの筋立てとなっている作品\]](#)にして[\[映画リリース用ポスターにツインタワーを露骨に想起させるビルが描かれているとの作品\]](#)にして[\[世界で一番高いビル\(映画『タワーリング・インフェルノ』公開時で世界最高峰のビルはツインタワーである\)が火災に見舞われるとの作品\]](#)にして[\[ビル屋上の貯水タンクをC-4爆弾で爆破し、その爆破時の漏出水の水流にて鎮火なそうとの筋立てに絡むところで911を想起させる数値を登場させている作品\]](#)にして、そして、[\[複数ある事由からフリーメーソンとの関係性を想起させる作品\]](#)となっている)。

より具体的には前掲図にあつての下の段の図像は

[映画『タワーリング・インフェルノ』収録流布版DVDにての[再生時間2時間30分57秒後のシーン及び再生時間2時間33分56秒のシーンとして表示されてくる数カット]にあつて具現化しているシーン(DVDを借りて秒単位で呈示している該当部シーンを一時停止するなどしてご確認いただきたい)の再現図を(再びもつてして)挙げてのもの]

となり、そこにては

[C-4 爆弾による世界最高層ビル(さらに述べれば、映画リリース用ポスターにツインタワー状のその似姿が描かれているとのそのビル)が爆破されんとするシーンにて火災が非常階段にての 116 階と呈示されている部に及んでいるとの場面]

が描かれている(本稿にての [出典\(Source\) 紹介の部 106\(3\)](#) で挙げたものとなる)。

以上のような『タワーリング・インフェルノ』の劇中描写「でも」

[[116]という 180 度回転させると[911]との数値が浮かび上がってくるとの構図]

が [ツインタワーと相通ずるもの (原作小説ではワールド・トレード・センターの世界最高層ビルとされ映画ポスターではツインタワー類似の似姿で描かれてとの式でツインタワーに通ずるもの) の爆破] との式で見るとれる。

上のことらに見る、

[[かぐわかしい「爆破」描写]に関わるものら(一方は 5 時 55 分のペンタゴン爆破、もう一方は 116 と紐付けられてのツインタワー接合ビルに対する時限爆破に関わるものら)としての **【180 度回転させると 911 が浮かび上がってくる数字列】**]

との式が —「爆破」描写に関わるとの式で— 先程来問題視しはじめているとの、

『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』

にあつての問題となる描写「にも」あてはまればどうか。

それにつき、本稿のここまでの内容をきちんとお読みいただいている向きは(理想を述べればきちんと裏取りなさんとの向きは)

『『ジョジョの奇妙な冒険』では[911 の刻印された上着の男の飛行機の予言描写と結びつけられての死亡時間]が確かに 180 度回転させると 911 を想起させるものとなっているようだが、そこには[爆破]などは関係ないのではないか?(それゆえ穿ちすぎではないのか?)』

と思われるところか、とも見る。

だから、事前に述べておくが、

「『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』でも 180 度回転方式が [爆破] 「とも」関わってくるようになっている、しかも、[相応のシンボリズムの介在]を見ているところとして[爆破]と関わってくるようになっているとのことがある」

この身の上の言に言いすぎとのところがあるかないか —取り合うに足らぬ類がこととする、あるいは、真実を[取り合うに足らぬもの]と同文のものにせんとする相応の碌でもない者達がこととする偽りや誇張表現があるかないか—、続く内容を是非ともきちんと検討いただきたいものである。

(一端、脇に逸れもしての「長くもなりもしての」付記として)

ここ一端、脇に逸れもしての付記の部では

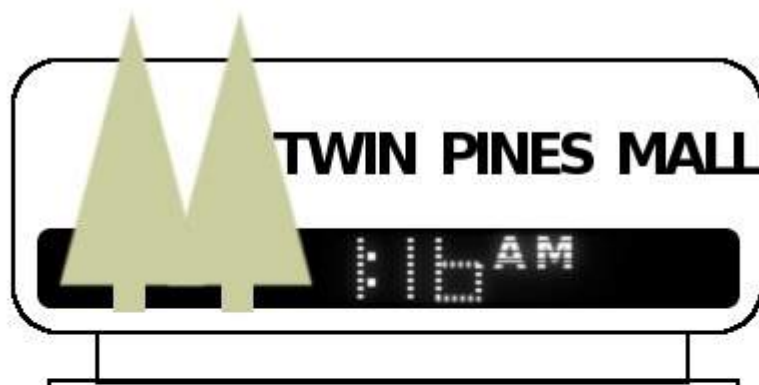
[[116] という 180°回転させると [911] となるその数が

[ツインタワーおよびペンタゴンに対する攻撃の「予言」的現象]
に関わっている]

とのそのことにつき、本稿ここまでの段にあつて既述の『ジ・イルミナタス・トリロジー』や『タワーリング・インフェルノ』「以外」の例を挙げておくこととする。

具体的には、まずもつて、よく知られた映画作品である『バック・トゥ・ザ・フューチャー』、[デロリアン] と呼称されての車輛型タイムマシンで過去へ未来へと跳ぶとの 1985 年初出の同映画作品にも同じくもの式での不快な側面が具現化を見ていることを紹介しておく。

下の図をご覧ください。



(rough)
structure of one scene of
[Back to the Future] (1985 film)
(⇒ DVD (sold in Japan) time record:
[00:18:09])

[**Twin**] & [**116** ↻ rotate 180° **911**]

図に付してのキャプションからもお分かりいただけるか、とも思うのだが、同図、映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』にての

【本編開始後 18 分 9 秒後 (DVD 再生環境におけるタイム・カウンター表示にて [00:18:09] の部)】

に表示されてくる、

[ツイン・パインズ・モールなる施設の駐車場の入り口に設置されている巨大デジタル式時計付き蛍光灯一体型表看板の描写]

を本稿用に「再現」して作成した図となる。

そちら DVD 再生時間にして [00:18:09] のワンシーンに表出しているとの立て看板にあつては

[「ツイン(双子)」と「(180 度回転させると 911 が出てくる) 116」が併せて表出している]

とのことがある (: DVD を借り受けて確認するのが煩瑣である、しかし、である中ながらも物事の裏をとりたいとの欲求は有されているというのであるならば、動画サイト YouTube にて「現行は」流通を見ている (ただしもつてこれより消除を見る可能性もある)との動画シリーズ、911 Hidden in Hollywood にあつての中の PartIV の部 — 筆者がここで指摘している Back To The Future の予見的ありようについて部分的に教えられもした動画シリーズでもある— などをご覧戴くことでも映像証跡を確認いただけることとなっている (なおもつて述べておくと、本稿筆者

はここにて名を挙げている動画シリーズがそれをとかく強調しすぎているとの欠点を伴っていると見るニューワールド・オーダーにまつわる陰謀論の流布者などではない（—I am not a New World Order Conspiracy Theorist.— ））。

表記のことより

「[双子]の塔が崩された911の事件]との連関が —[116]という180°回転させると[911]との数が出てくる数値との絡みで— 85年初出作品にあって想起される」

と述べたいのだということは(話の流れより)当然にお分かりいただけていることかとは思。

が、無論、それだけ述べる分には

『穿ちすぎ・こじつけである』

との心証を抱かれるだけか、とも思う。

であるから、次のこととも併せて指摘しておく。

・小さいことから始める。再現図を挙げての看板が登場を見るシーンは(繰り返し述べ)DVD再生時間にして【00:18:09】のシーンとなるが、その後、およそ50秒後の[タイムマシン機能付き車輜[デロリアン]の初登場シーン]にて[デロリアン]背部にての排気口然とした構造物が[ツインタワー]状の似姿を呈して描写されてくることが「まずもって」気がかりなところとしてある(：これまた秒単位で確認ポイントを指摘するとしてDVD再生時間【00:19:01】のシーンなどを一時停止して見れば分かる)ところとなる。同シーンでは[OUTATIME]と書かれたデロリアン・タイムマシンの車識別プレートの間口の排出口構造が並び建つビルを(「微妙なところなのだが」)想起させる形状として目に入ってくるのことがある —※(注)バック・トゥ・ザ・フューチャー・シリーズに登場するデロリアンというのは元来、ガルウィンドウ式のスポーツカーとしてGMの元役員が設立した会社[デロリアン・モーター・カー]社がリリースしていた車種なのであるが(無論、それ自体は車好きなどという人種以外にはどうでもいいことである)、そうした実際現実に販売されていたデロリアン車に映画でのデロリアンは演出用デコレーションが施されもしており、車体後背部の【ツインタワー状に並ぶ排気口然とした構造物】もそちらデコレーションに含まれてのものとなっている—)。

・その後、映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』では主人公(ハリウッド俳優マイケル・J・フォックス演じるマーティというキャラクター)が映画主要人物にしてタイムマシン開発者のエメレット・ブラウン博士ことドクなるキャラクターのタイムマシン実施稼働テストに(先述のツイン・パインズ・モールにての駐車場にて)付き合うことになると描かれるのだが、その際にも[911]を意識させる数値が出てくる。問題となるシーン(116との数値が[ツイン:双子]と一緒に出てくるとのシーン)のおよそ二分後に至るまでのシーン、(こちら秒単位で指摘するところとして)【本編開始後20分13秒経過後】のシーン(DVDにての【00:20:13】のシーン)にて[119]という表示のデジタル式ストップウォッチをタイムマシン開発者たるドクというキャラクターが前面に出すシーンが出てくるのことがあるのである(：その流れとしてはドクがタイムマシンのデロリアンでの時間の流れと外界の時間の流れをテストするために二つのデジタル型時計 —(こちら先程にて図示の[パインモールの電光時計]のように[電光表示方式]の時計となっている)— を使用し、その表示が1:18から1:19に切り替わるとのものである)。[119]という数値は(述べるまでもないことか、とは思うが)逆方向から見た際に911との数となるものである —ちなみに映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』にてのDVD再生環境の時時刻表示【19分46秒】から(英文字幕表示をオンにすることで容易に確認できるところとして) It's Saturday morning, October 26, 1985, 1:18a.m.「現在1985年

10月26日土曜午前1時18分」とのドクの発言がなされ(そして間もなくドクが手に持っている電光式デジタル時計の表示が1:19に入れ替わりもし)た後、車型のタイムマシン・デロリアンが[過去]に跳ぶ。そして、さらに同映画ではさらに少し後のシーンで主人公マーティがさらに[過去のツイン・パインズの地]に(往時はまだ農園であるところとして)跳ぶことになる。

・くどいようであるが、車型タイムマシンが[過去に跳ぶ]という筋立ての映画が『バック・トゥ・ザ・フューチャー』(シリーズものの第一作)なのだが、

[タイムマシン]

[車を用いての時間の相対性の説明]

の両テーマを前面に押し出している文物にして、かつ、

[911の事前言及をなしているとの奇怪な文物]

となってもいるものがあるとのことを

「オンライン上より確認できるとの原著文言(そして国内にて流通している訳書の文言)の引用内容にひたすらに準拠して」

指摘してきたのが本稿でもある。

長大なものとなっている本稿にての前半部、その出典(Source)紹介の部28から出典(Source)紹介の部33-2を包摂する部位で

BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(内面としての実体がどうあれ、世間的にはカリスマ物理学者と認知されている物理学者キップ・ソーンの著述)

との科学解説本にあつての[911の前言作品としての特質]について詳説をなしていたとのことがそうである。

上著作(BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』)にあつては[信じがたいところ]ながらも[確とした文献的事実]の問題として

[2001年9月11日との日付け表示と結びつく数値]

[1911年提唱の双子のパラドックス]

との要素らが

[わずか一例としての思考実験 —『バック・トゥ・ザ・フューチャー』よろしく過去との行き来ができる[通過可能なワームホール]にまつわる思考実験—]

と「多層的に」関連付けられての話がなされているとのことがあり、そのことの詳解を原著及び訳書よりの原文引用を通じて本稿ではなしてきたとのことがあるわけである(：原著1994年刊行の著作にて【「2001年9月11日」との日付け表示と結びつく数値】【1911年提唱の「双子の」パラドックス】らが僅か一例のタイムマシン関連の思考実験にて多層的に引き合いに出されているのだから、(読み手が文献的事実を認識しないとの筋目の[狂人]で「ない」のならば理解もできようところとして)、【「2001年9月11日」に「双子の」塔が崩された事件】の予言的言及がそこになされているとのこと、述べるまでもないことか、と思う)。

そこから、(自明のことをくどくも繰り返すように表記するが)、

[【車を用いてのタイムマシンを描く映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』】と【車を用いての時空の相対性の説明をなし、タイムマシン・トピックをも網羅しており、かつ、タイムマシン・トピックの箇所にて奇怪なる「911の事件の前言」をなしているとの著作たる BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』】との間の関係性]

が —911の前言事物との絡みで— 当然に想起されることになる(※)。

※ちなみに本稿にての **出典(Source) 紹介の部 32-2** では BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にあつての[[爆竹搭載「車輛」]が[時空の相対性に関わる説明]にて引き合いに出されている部分を引用なしていた。その部にての原著および訳書よりの引用をなしていた部位をここにて「再」引用なしておく。

(直下、BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy よりの再引用をなすとして)

To understand the analogous mixing of space and time (your space is a mixture of my space and my time, and my space is a mixture of your space and your time), imagine yourself the owner of a powerful sports car. **You like to drive your car down Colorado Boulevard in Pasadena, California, at extremely high speed in the depths of the night,** when I, a policeman am napping. **To the top of your car you attach a series of firecrackers,** one over the front of the hood, one over the rear of the trunk, and many in between; see Figure 1.3a **you set the firecrackers to detonate simultaneously as seen by you, just as you are passing my police station.** Figure 1.3b depicts this from your own viewpoint. Drawn vertically is the flow of time, as measured by you ("your time"). Drawn horizontally is distance along your car, from back to front, as measured by you ("your space"). Since the firecrackers are all at rest in your space (that is, as seen by you), with the passage of your time they all remain at the same horizontal locations in the diagram. The dashed lines, one for each firecracker, depict this. They extend vertically upward in the diagram, indicating no rightward or leftward motion in space whatsoever as time passes and they then terminate abruptly at the moment the firecracker detonate. The detonation events are depicted by asterisks. [. . .] **This figure is called a spacetime diagram because it plots space horizontally and time vertically, the dashed lines are called world lines because they show where in the world the firecrackers travel as time passes.** We shall make extensive use of spacetime diagrams and world lines later in this book. [. . .] **Now, the surprising conclusion of Einstein's logical argument (Box 1.1) is that the absoluteness of the speed of light requires the firecrackers not to detonate simultaneously as seen by me, even though they detonate simultaneously as seen by you. From my viewpoint the rearmost firecracker on your car detonates first, and the frontmost one detonates last. Correspondingly, the dotted line that we called " your space at moment of detonation "(Figure 1.3b) is tilted in my spacetime diagram (Figure 1.3c).**

(以上、オンライン上より確認できる原著表記に対して邦訳書『ブ

ラックホールと時空の歪み』(白揚社)p.63 から p.65 よりの中略なし
つつもの原文引用をなすとして)

空間と時間の混合(あなたの空間が私の空間と私の時間の混合で
あること)を理解するために、あなたが馬力の大きなスポーツカーを
もっていると想像してください。真夜中に警官である私が居眠りをし
ているとき、あなたはパサデナのコロラド・ブルヴァール(大通り)で
高速度で車を飛ばしていた。あなたは車に一系列のファイアクラッ
カー(爆竹)をつけていた。図 1・3a に見られるように、フードの前に
一つ、後部トランクの上に一つ、そしてその中間に多数である。あ
なたはあなたの車がちょうど派出所の前を通過するときに、すべての
ファイアクラッカーがあなたから見て同時刻に、一斉に爆発する
ように調整していた。図 1・3b は、この出来事をあなたの観点に立っ
て描いている。…(中略)…この図表は水平に空間が、垂直に時
間を描いてあるので、時空ダイアグラムと呼ばれている。破線は時
間とともにファイアクラッカーが世界の中をどのように動いているか
を示しているので、世界線と呼ばれる。この本では今後、このような
時空ダイアグラムと世界線をふんだんに使わせてもらう。…(中
略)…さて、アインシュタインが論理的に導き出した驚くべき結論
(BOX1・1)はこうだ。ファイアクラッカーの爆発はあなたの目には同
時に見えたとしても、私の目には同時に爆発したとは見えないこと
を、光速の絶対性は要求している、というのである。私の立場に立
つと、あなたの車のもっとも後部にあるファイアクラッカーから先に
爆発し、もっとも先頭にあるファイアクラッカーが最後に爆発する。
その結果、われわれが「爆発の瞬間のあなたの空間」と呼んだもの
(図 1・3b)、私の時空ダイアグラムでは傾くことになる(図 1・3c)。

(以上、再度の引用部とする)

上の引用部にては

You like to drive your car down Colorado Boulevard in Pasadena,
California, at extremely high speed in the depths of the night, when I,
a policeman am napping. To the top of your car you attach a series of
firecrackers, one over the front of the hood, one over the rear of the
trunk, and many in between; see Figure 1.3a you set the firecrackers
to detonate simultaneously as seen by you, just as you are passing
my police station. (原著に対して逐語訳ではなく意識がなされている
ことが窺われるとの邦訳版表記として)あなたはパサデナのコロラ
ド・ブルヴァール(大通り)で高速度で車を飛ばしていた。あなたは
車に一系列のファイアクラッカー(爆竹)をつけていた。図 1・3a に見ら
れるように、フードの前に一つ、後部トランクの上に一つ、そしてそ
の中間に多数である。あなたはあなたの車がちょうど派出所の前を
通過するときに、すべてのファイアクラッカーがあなたから見て同時
刻に、一斉に爆発するように調整していた(引用部はここまでとす
る)

と表記されているのだが、そこにて引き合いに出されている「カリフォルニア州のパサ
デナ」という地は郵便番号(ZIPコード)が「91101」との式ではじまる地であり、となれば、

「米国表記方式にて 2001 年 9 月 11 日を指す日付けそのものである」

とのこと「も」本稿では先に問題視していた。

(:性質が悪いのはキップ・ソーンという物理学者が(表向きは同男が奉職しているとのカルテク Caltech こと名門のカリフォルニア工科大学がパサデナ Pasadena に存在していることに因を求められるとの式でながら)郵便番号が[91101]ではじまる地パサデナとのまさしくものその地を[地理上の始点]にして[911 との数値規則と多重的に結びつき、双子のパラドックス Twin Paradox の作用を中心に据えての思考実験]をその著作 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy にて持ち出していることではあるが、同じくもの思考実験に伴う問題性については本稿にての **出典(Source) 紹介の部 28** から **出典(Source) 紹介の部 33-2** にて(属人的主観など話柄の選択以上には介在しないとの式で)詳説に詳説を講じている、そして、その要約内容を本稿にての諸所にて折に触れて繰り返して示しているのので疑わしきはそちらを(批判的視座にてでも)検討いただきたいと考えている。

その点、筆者は愚拙なりにももの全知性を動員しての思索の歩み—(『誰がろくに他に顧みられもしないような状況の中でそうしたことに注力をなすのか、意味など無いではないか』との観点、時間(労力)と効用(有効性)を顧慮しての観点から十分にその成果物の外的流布にいままで注力なして「こなかった」わけだが、とにかくもの愚かなりしものなかでの全知性を動員しての思索の歩み)— のなかで [そういうこと](キップ・ソーン著作にさえ相応の特性が具現化しているといったこと)がこの世界には「よくもある」「ざらにある」とのことに知悉するに至り、また、といった問題がすべて執拗なまでに「ブラックホール」に通じていると気付くに至ったがゆえにこの日本国内、何をやっても[相応の神秘主義的人間らに付きもののフリークショー](畸形を売り物にするショー)にすり替えられるか、存在しないものとして無視されるかのどちらかであろうと [脇にての試験的情報発信段階]から半ば諦観を抱くに至った日本国内で [ブラックホール生成問題に関わるリスク問題が取り沙汰されてきた LHC 実験にまつわる行政訴訟] を(唯、訴求の用に供するためだけに)提訴したりしていたとの人間となる。

すなわち、—といった挙からして「失望を上塗りするだけであった」との節があると現時に至って半ば見るに至ってもいるのだが— 権威の首府たる国際的実験機関(国際加速器マフィアの「国内の中樞拠点」となっている研究機関)を相手取っての提訴をなし、(ここでの非常識の話ではなく)「常識の世界で」第一審からして年度にして二年に渡って[LHC「実験」リスク問題にまつわる欺瞞性]を明確化しようと努めようとするをもなしてきた —法廷で先方の弁護士らとの[無為なる応酬](そこでは原告の人格を貶めるような事実合致しない下手な人身攻撃が先方からなされことすらあり「なんなんだ?おかし

いであろう」と呆れさせられもしていた)が繰り返されていた中で、とにかくも、「[実験]の欺瞞性」を明確化しようとしてきた— との人間となる(：そちら経緯については部分的に本稿の前半部にて「も」先述なしていることである)。

そうした訴訟の合間からして —遠慮会釈なんらなく述べ— [人間の屑]といった者達に脇を突かれるような嫌がらせを受けもし(相応の)宗教団体関係者から筆者のところに嫌がらせ電話がかかってくる、同じくもどこから湧いて出てきたのかといった按配の「相応の」者達がこの身(と通ずる領域)を[狂人](が立ち振る舞う領域)であるように見せるが如くオンライン上での紛い物の媒体らを特定のキーワードで検索「されやすい」かたちでこさえだしたとのこと「も」その範疇に入る(まだその残滓となるところが残っているかもしれない)、他面、[そこに存在しないような「無視」をなされる]との[機械人間](そこら中にそういう「空虚な」存在がこの世界では練り歩いていると筆者などは観察しているとの筋目の者達)のそれのような反応に辟易させられ続けたとの結果を見ることになりもしたわけだが、とにかくものこととして、筆者は[死すべき人間]としてながらできる限りの情報を[常識の世界]でも —そのマス(過半;大勢)が実にもって空虚な存在であると知れた上でも— 同輩の人間存在に対して問わんとしてきたとの人間である。

以上のこと、そして、[—他にての「試験的に」「不十分極まりなく」筆者が情報・意見として提示せんとしてきたことと切り離しもしての— 本稿それ自体のレベル・水準]を踏まえていただき、この身が[取り合ひに足らぬことを述べているだけの者]か、よく判断いただきたいものである —尚、筆者はこの身のことを笑殺してもらっても、あるいは、脱兎の如くもの[逃げ]の途を選らんでももらっても構わないと思っている。そうしたことをなす向きは徹頭徹尾そうした向きらであろうとの認識は元よりある、それもまた(抗うべきものとしてながらもの[運命]を決する)[選択]であろうと思っている—)

(：ここで「過度に印象論がかり、かつ、余談めくが、」との性質の話を敢えてもなすも、映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』にあつてはタイムマシン・デロリアンが過去に跳ぶシーンの前後にて
[ツイン・パインズ]

との地名が目立って描かれ(現在の[大型モールの駐車場]であつたところが過去の世界でツイン・パインズと明示されての[農園]になっているとのことが描かれている)、その [ツイン・パインズ(双子の松の木とでも訳せよう地名)] にあつての主人公が過去にて辿り着いたポイントで過去の間人らが [奇怪にも突如として現われた主人公] をして「エイリアン何かか?」と勘違いするシーンが実に印象深いかたちで登場を見てくる (とのことがある)。

にまつわつては農園納屋に主人公が搭乗するデロリアン (既述の

車型タイムマシン) が時間を越えて突っ込んだ中でそのありように際会した農園の関係者の一家らが

[SPACE ZOMBIES FROM PLUTO]

と脇に付された「架空の」サイエンス・フィクション雑誌、TALES FROM SPACEという雑誌に見るイラストレーション (いかにも怪しいとの宇宙服らしきものを着込んだ存在のイラストレーション) と主人公およびデロリアンの似姿を比較するかたちで主人公 (マイケル・J・フォックス演じるマーティというキャラクター) をエイリアンと勘違いするシーンが印象深くも登場を見もしている。

さて、そうしたシーンは(ここまで述べてきたように) [911の前言シーンと「解される」もの]と地続きにあるものである。従って、そうしたものであるからこそ、そこからして微々たるところでも「何らかの意味が込められていてもおかしくはない」と手前は考えている。

そも述べつつ書くが、主人公をエイリアンと勘違いさせしめた架空のサイエンス・フィクション雑誌の表紙イラストは(レンタルしたDVDを一時停止しながら見れば分かるが)

[宇宙人がかった全身を近未来的タイツ姿(?)で覆った存在が「手から放出した光線を周囲の人間の頭部に直撃させて」対象となる人間を誘蛾灯に誘われた蛾のように誘導しているありさま]が描写なされている(SPACE ZOMBIES FROM PLUTO との文字列と結びつけられながらである)。

筆者はそうしたところに(本稿にての 出典(Source) 紹介の部 87(2) から 出典(Source) 紹介の部 87(4) を包摂する段にて述べもしてきたことと通ずるかたちにて

[予言をなさしめる「機序」(仕組み)]

が具現化している可能性を見出している(無論、無条件に述べれば、悪い意味でのデンパ系という奴原ら、狂的あるいは詐狂者的なる者達のウチュウジン妄想話と区別できないような頓狂なる話をなしているわけだが、よく考えてみるべきである。本稿にてどういふ [予言的言及ら] について根拠に依拠してひたすらにも具体的な話をなしてきたか、を。そして、そうしたことが恣意的なるものとしてそこに具現化しているのならば、一体全体、そうしたことをなさしめる「機序」(作用原理)とはいかようなものなのか、をである)。

その点、仮に[超光速通信]の類を実現化するに至っているここではない世界の高度文明が存在していることが [真なり] と仮定すればどうか。そして、加えて、仮にそうした文明が我々人類の文明に(脳機序の意識的・無意識的操作とのかたちで)介入なせるとのことまで [真なり] と仮定すればどうか。

両方の仮定 — [[超光速通信]の類を実現化するに至っている高度文明が存在している]との仮定および[そうした高度文明が人類の文明を操作している]との仮定 — が真なれば、(実に不快なことだが)、[人間存在は時を越えての操作で操られる]とのことになりか

ねず、「人間存在は運命を時間を越えて操作されるゾンビとされている」との帰結も出てくる。—そう、映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』にて複合的に[116][119][双子]と結びつく場面が展開した後、過去に跳んだ主人公がそれと重ねあわせられた[SPACE ZOMBIES FROM PLUTOと書き込まれたSFパルプ誌(然とした紙媒体)の表紙絵]にてゾンビのように光線を頭に当てられて誘導されている者達が描かれているように、である—(著名なサイエンス・フィクション作家ロバート・ハインラインにはAll You Zombies(邦題)『輪廻の蛇』(1959)という作品があるのだが、タイムマシンによる運命操作が主軸となっている同作品表題に[ゾンビ]とのタイトルが付されているのは運命を操作されている存在は[存在としてゾンビのようにグロテスクであり本当の意味での自由意志などそこにはない]といったメッセージ性があるのだと解される。—似たようなことは先だつての段でも言及なしたことである—)。

サイエンス・フィクションにてよくも引き合いに出される[超光速通信]というものは字義通り[光速を越えての情報の授受ができる通信]、(相対性理論の帰結として)[過去に情報を送れるとの通信]ともなるのだが、となれば、[因果]における[因]と[果]が逆転しうることになり(その点については(よく目につくところとしての「現行にての」和文ウィキペディア[超光速通信]項目の記載内容より引用するところとして)“同じく時間を遡るタイムマシンが可能であれば、たとえ光速より遅い速度で情報を運んでも、目的地へ到着する前に時間を遡れば、結果的に超光速で情報を運んだことになる。この方法だと過去へ向かって情報を送ることも可能となるので、因果律が崩壊する危険がある。しかし、超光速通信が可能であれば、過去への通信が可能となり、因果律はいずれにせよ崩壊する” (引用部はここまでとする)といった風に超光速通信が[人間の自由意志]の問題と密接に結びつけられるとのことはよく知られている)、それが[精神・知的機序の部分的操作]とのかたちで悪用されれば、人間は[運命を自分自身で決定・構築できないゾンビの如き存在]ということにもなるというわけである。

につき、(「唐突なりしことに続いてのこれまた唐突なりしこと」とはなるが)、[仏教]というものは[「我」を滅却して「真我」に至って輪廻の環から脱却することこそが涅槃(ニルヴァーナ)であり理想である]などと説く教えであるが、(その[逆]として—ポイントは[逆]として、である—)、超光速通信の類が脳機序操作に利用されているのならば、「[我の滅却]などではなく[確たる揺るがぬ我]でもって[超光速通信が如くものを用いて対象の脳をもてあそんでの[我]を思いのままにするやりように抗う]との式でしか人間には何度もの繰り返し、ループを強いるがごとくの世界から[解放]されることはない、ゾンビのような状況から抜け出ることはないとのことになってしまう(それがで

きぬのならば、結局、人という存在は機械的機序が用意した運命操作構造から絶対に脱却できないとの存在にすらなりうる、[真に生きてなどいない存在の「影」][確たる存在の空虚なる「残骸」]ということになりうる)。

無論、「過度過分に印象論がかって」の話をなしているわけだが、そうした可能性まで視野に入れたうえで(仮にそうした力学があれば、だが)[半面でも自由意志を蔵している人間存在は自身を薬籠中の存在にせんとする力学に可及的に(できるかぎり)抗うべきだろう]というのが筆者の思想である — ただしそれが自殺行為である可能性も無論、筆者からしてよく認識しており、同じくものを人に押しつけるようなことはしない、できない。筆者自身、『この身もいつ何時、ふざけた連中に殺されることになるのか知れたものではない』と常にメント・モリ(死を想い続ける)の心境で [滅ぶと知れた(把握することとなってしまう)人の運命] に抗う途を選んだ人間であると申し述べつつも書くところとして、である—)

映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』が

[[116] という 180 度逆転させると [911] となるその数が
[ツインタワーおよびペンタゴンに対する攻撃の「予言」的現象]
に関わっている]

とのことにまつわる話はここまでとするが、[116]との数値、そして、[119]との数値が双方共に電光表示なされて、かつ、それらが[双子]と目立って結びつけられているとの映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』にあつての

[[116] と [119] といった数値、すなわち、911 を想起させる数値が [双子] と電光表示形式にて結びつく性質]

をそれとほぼ同様の式で具備している「他の」映画作品があることにも(「次いで、」の話として)ここ脇に逸れての付記の部で言及しておくこととする。

具体的には映画 Armageddon 『アルマゲドン』(1998年初出の映画/主演ブルース・ウィルス、主題歌を(米国メジャー・バンドの)エアロスミス歌曲としているとの映画で日本でもある程度の知名度を有しているディザスタームービー)のことで取り上げる。

映画『アルマゲドン』に関しては — [911の事件の予見的作品]としての性質に関わるどころとして— 次のような流れが見てとれるところとなっている。

(委細については [国内流通版 DVD — 監督による修正が施されているディレクターズ・カット版(多少、尺が長くなる版)ではなくノーマル・カット版— をレンタルなどした向きが容易に後追い・確認できるようにしているとの直下続けての
図] をも参照いただきたいところとして)

[映画『アルマゲドン』では劇中冒頭シーンにて「アトランティス」(本稿で黄金の林檎の園と同一視されもするとのことを解説してきたとの伝説上の沈んだ陸

塊)というシャトルが隕石によって破壊される] (そして、ニューヨークはマンハッタンにて “The shuttle Atlantis exploded in space at 3:47 a.m, Eastern Standard” 「スペースシャトル・アトランティスが東部標準時間午前三時四七分、宇宙にて爆発しました」とのテレビ放映がなされるとの描写がなされる)

⇒

[冒頭の[スペースシャトル・アトランティス破壊(のアナウンス)]の直後のシーンにて[ニューヨーク]に隕石が降り注ぐとの描写がなされ、その途中過程で、「911 番(緊急連絡番号)に電話してくれ!(英語では Somebody dial 911!)」との悲痛の叫びが上げられもする (:[ブルドックをペットとしている男]と[ゴジラの着ぐるみを持った男]の登場している一連のシーン、さらに述べれば、前者の男のブルドックが飼い主の手から離れて後者のゴジラ男と一悶着を起こしている一連のシーンの後、ブルドックが隕石によって開けられた穴に落下し、そうした状況を受けて飼い主の男が「誰か 911 に連絡してくれ!」と叫ぶシーンがそれとなる —ディレクターズ・カット版ではない方のノーマル・カット版のDVDにあっては再生時間にして本編開始後およそ【00 時間 07 分 40 秒】にて該当シーンが登場する—)。

そして、[911 にダイヤルしてくれ!]との男の戯画化された悲痛なる叫びの後、ニューヨークはマンハッタンの [エンパイア・ステート・ビル] や [ツインタワー] に隕石が激突するとの描写がなされる —※「911 番に電話してくれ!」との描写それ自体ではさして不可解なことではない(アメリカ版の 110 番は従前より 911 番だったからである)。だが、[[911]と[ニューヨークのビル群倒壊]が一連の流れにて結びつけられている]のは、同じくもの映画『アルマゲドン』に他にも着目すべき点らが見てとれることに鑑み、[かぐわかしい]と受け取れるところではある) —]

(ディレクターズ・カット版ではない方のノーマル・カット版の DVD にあっては再生時間にして本編開始後およそ【00 時間 09 分 44 秒】にて[半壊したツインタワー]も登場してくる)

⇒

[冒頭のニューヨークへの隕石(の欠片)襲来シーンの後、[地球に迫る巨大隕石を破壊するためのオペレーション]が急遽進められていくとのなかで —ここからが問題になるのだが— [電光時刻表示板]および[電光カウントダウンタイマー]が目立つように登場するシーンが幾シーンもあり、うち、2つのシーンは

[[611] (またもや 180 度回転させると 119 となる数値列) および [911] との電光表示式カウント・ダウン・タイマー(各々別地所別物のタイマー)の数値が登場するシーン]

が双方共に

[「ツイン」・シャトルズ(双子のように「瓜二つの」シャトル)]

と結びつけられて登場してくる、すなわち、

[隕石を破壊するための人類の命運を決するために急場を縫って改装され双子のように瓜二つの外観で同時発射されることになるスペース・シャトル] (フリーダム Freedom とインデペンデンス Independence と名付けられた瓜二つのスペースシャトルら)

と視覚的に結びつけられて登場してくるとのことがある]
(ディレクターズ・カット版ではない方のノーマル・カット版の DVD にあつては再生時間にして本編開始後【00 時間 43 分 05 秒】のシーンにて[611]との電光掲示板表示がなされ、の直後、数秒後から「双子のように瓜二つのスペース・シャトルの模型」と「地球儀(ワールド・グローブ)」がブリーフィングのシーンにて結びつけられるとのことがなされている([611 表示]⇒[直後にの「ツイン・シャトル」と「ワールドグローブ」表示]である)。また、スペースシャトル打ち上げが差し迫った折の電光式カウントタイマー(先のタイマーとは別のタイマー)が表示されるシーンでは双子のように立ち並ぶスペースシャトルの描写がなされた直後、タイマーが「9:11 から 9:10 へと数値が移行する」との描写がなされている。そちらはディレクターズ・カット版ではないノーマル・カット版 DVD にての本編開始後およそ【00 時間 59 分 07 秒】から【00 時間 59 分 09 秒】のシーンが該当シーンとなる(ので疑わしきにおかれては DVD レンタルされるなどして確認されてみるとよからう 一尚、映画『アルマゲドン』のそうしたシーンについては(本稿筆者が「映画『アルマゲドン』もかぐわかしいということか……」と気付くことになった契機となった作品として) 動画サイト YouTube にて流通している 911 Hidden in Hollywood との一連の動画シリーズの中の PartII と振られた部(ハリウッド・スター、ブルース・ウィルス関連作品らにともなう予見的側面についてまとめて呈示しているとの映像切り抜き動画)にも端的に紹介されている)

⇒

[ツイン・シャトルズとでも表すべき瓜二つのシャトルらによる隕石「爆破」(デモリッション)の作戦がいよいよクライマックスに到達しようとのシーンにて(和文字幕ではニュアンスが伝わりにくいのだが) Nine and a half Gs for 11 minutes. 「ナイン」・アンド・ア・ハーフ・ジーエス・フォー・「イレブン」・ミニッツとの「9」「11」との数値を含む言いまわしが用いられている(日本語字幕では「9.5G が 11 分間続く」となるが、英文字幕を DVD 再生環境にてオンにして表示させれば、双子のように瓜二つのスペース・シャトルによる「爆破」作戦が佳境を迎えようとのシーンが「9」と「11」とのナンバーを含む台詞と結びつけられていることが視覚的にも分かるようになってい)

(ノーマルカット版 DVD にては本編開始後およそ【1 時間 21 分 19 秒】あたりの部として確認させる)

とのことらが見受けられるようになっている(以上のことらは無論、単体で見れば、far-fetched 「こじつけがましい」と見られかねないことだが、[複層的に見る]ことで予見描写と述べて差し障りないものとなる(そも述べもすることが「行き過ぎ」かどうかは下に付しての図解部でもって判断いただきたいものである)。尚、同『アルマゲドン』では映画冒頭部で短くもながら「ツインタワーを背景に」「今、俺は大きなその時に向かって準備をしているんだ」との導入歌歌詞が流れていたりもする(映画英文字幕をオンにすれば分かることである)。海外で動画(既述の 911 Hidden in Hollywood との一連の動画シリーズの中の PartII)でもってそのことからして指摘している向きもいるが、筆者も、によって教えられ、そこからして「成程。」とらえている 一DVD 再生時刻としては(Director's Cut Edition ではない日本で流通している Normal Cut Edition にて)本編再生開始後【6 分 05 秒】との時刻で具現化するシーンである)。

(以下、180° 回転させると 911 と結びつく数値が【せんだったの 911 の事件を想起させるような方式】で登場してくる「他の」例 一直前言及の『バック・トゥ・ザ・フューチャー』以外の「他の」例 一として問題になる映画作品『アルマゲドン』にまつわる図解をなすとして)

Armageddon (1998 film)

(= DVD ([Normal Cut edition] sold in Japan) :
time-record [(about) 0:07:40])

hour minute second

" Somebody dial 911! " shouting
(in Manhattan)

映画『アルマゲドン』（ノーマル・カット版）では本編開始後、およそ7分40秒経過後にて「サムパディ・ダイアル・911!」との叫びがマンハッタンにてあげられるシーンが登場する

[collapsing buildings (in Manhattan)] scene

映画『アルマゲドン』では「911番（緊急電話番号）に電話してくれ」との叫びがあげられたマンハッタンに隕石欠片が降り注ぎ、エンパイア・ステート・ビルやツインタワーに隕石が激突する描写がなされる（マンハッタンにてのビル群の倒壊）。

Timer's Date of the film

(= DVD ([Normal Cut edition] sold in Japan) :
time-record [0:43:05])

hour minute second



immediately
after

(rough) composition of one scene

(= DVD ([Normal Cut edition] sold in Japan) :
time-record [(about) 0:43:13-])

hour minute second

space shuttle miniatures
(like twins)



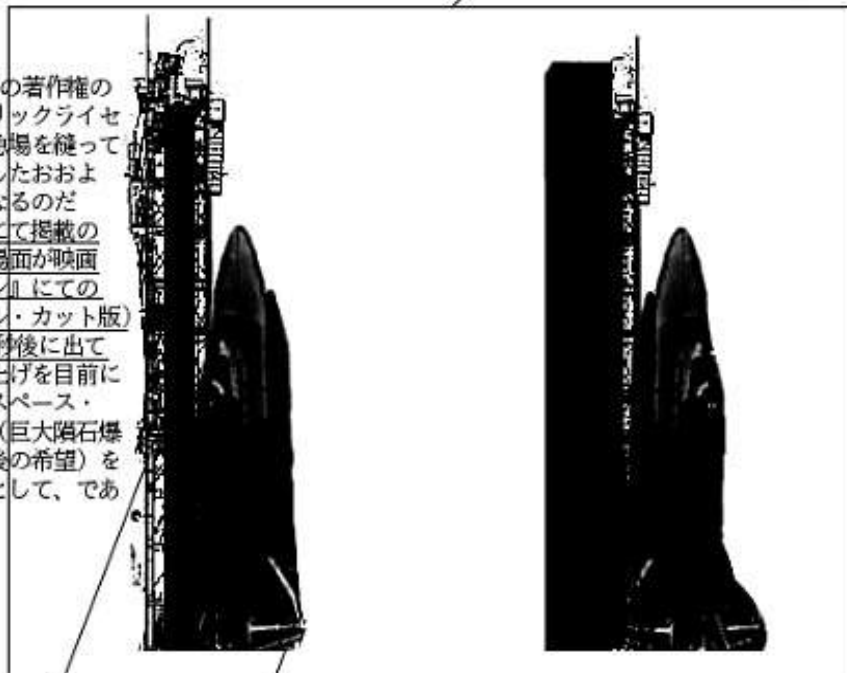
World Globe

映画『アルマゲドン』ではマンハッタンを破壊した隕石欠片らの本体となる巨大隕石、その破壊作戦が時々刻々と進行していくさまが描かれる。の中で巨大隕石本体の地球衝突時（人類滅亡時）に向けてのカウント・ダウン・タイマーが何度か表示される。の中で、映画本編（ノーマル・カット版）開始後 [43分05秒] 経過時のシーンにて登場するタイマーは上掲 [再現図] に見るように数値列 [611] を具現化しているのだが（残り6日と11時間）、同タイマー表示の直後のシーン（数秒後のおよそ本編再生時間 [43分13秒] あたりのシーン）から [隕石爆破用の双子のような"なり"を呈してのスペースシャトルの作戦用模型（棒付き）] と [地球儀（ワールド・グローブ）] が並んで表示されてくる（双子のシャトルと世界像（ワールド・グローブ）と [116] の連続描写）。

ここが 180°
回転させると
911 を想起させる
ものが出てくる
との部である（：但
し『回転させた番号は
119 であり、厳密には
911 ではない』ととらえ
る向きもあるだろうが、
【双子のように瓜二つの
隕石「爆破」計画用の
シャトル】については同
じくもの映画『アルマ
ゲドン』の中にて 911 と
のナンバーそのものと
他所で結びつけられて
いるとのことがある）

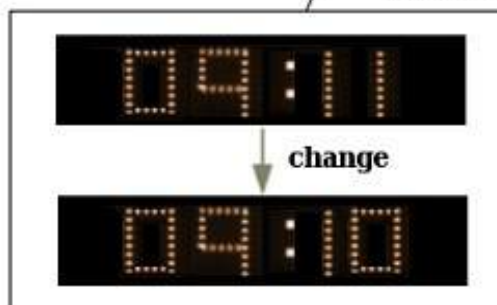
Structure of one scene
 (= DVD ([Normal Cut edition] sold in Japan) :
 time-record [0:59:07])
 hour minute second immediately after

Wikipedia公開の著作権の
 縛り無きパブリックライセ
 ンス画像らを急場を縫って
 合成して作成したおおよ
 その画像とはなるのだ
 が、ほぼ、右にて掲載の
 同図の通りの場面が映画
 『アルマゲドン』にての
 本編（ノーマル・カット版）
 開始後59分07秒後に出て
 くる。[打ち上げを目前に
 控えた双子のスペース・
 シャトルら]（巨大隕石爆
 破のための最後の希望）を
 映してのものとして、であ
 る。



(image from wikipedia
 [Space Shuttle] article)

digital timer
 (= DVD ([Normal Cut edition]
 sold in Japan) time-record [0:59:09])
 hour minute second



双子のような“なり”を呈して打ち上げを控えるスペース・シャトルらが映された直後（ほんの
 2秒後の、ディレクターズ・カット版ではない公開映画版に即してのNormal Cut版での、DVD
 再生時刻 [59分09秒後] にてのシーン）でカウントタイマー表記が [残り9時間11分] から
 [残り9時間10分] に移り変わるありさまが描写されてくる。

**(= DVD ([Normal Cut] edition sold in Japan) :
 time-record [(about) 1:21:19])**
 hour minute second

"Nine and a half Gs for 11 minutes."

(from a speech during the demolition mission)

二機の双子のようなスペース・シャトル — Independence [独立] と Freedom [自由] との名を冠する
 スペース・シャトルら — が巨大隕石爆破のためのミッションに入った段階、映画も終盤にさしかかろう
 との局面（ノーマル・カット版のDVDにての本編再生時間にしておおよそ [一時間二一分一九秒] 経過時
 のシーン）で [9; Nine] と [11; Eleven] を含む上にて表記のセリフが出てくる（：和文字幕では「9.5Gが
 11分間続く」となっているが、レンタルしたDVDに対してDVD再生環境で英語字幕表示をオンにするなどし
 て確認すればお分かりのように端数「0.5」はhalfと数字表現となっていない）。

(最前までの長くもなつての枠で括つての付記の部から「日本国内の」予見的作品の問題に立ち戻り、便宜的に A. から E. と振つて順次表記していくことらでもつてして国内有名漫画作品にさえみとめられる【人間存在の置かれた状況を示しもする側面】について訴求すべくもの話を続けることとする)

B

この身が呆れさせられた(この世界に対してさらにもつて呆れさせられた)ところしての第二。

これは大きい。

先に、日本国内著名漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』にまつわつて、

【事実2:劇中に見る男の死亡予言描写 (漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』の中の劇中の漫画作品(OINGO BOINGO BROTHERS ADVENTUREとの英文タイトル付きの「劇中内」漫画作品)にての予言描写)は[月][飛行機]と確かに結びついている]

と[現実に存在する文献的事実(Philological Truth)]の問題につき記載したが、同じくものシーンはよりもつて正確には、

【劇中に見る上記の男(911と刻字された服を着ているとの男)の死亡予言描写は[月][飛行機]そして[太陽]および[一つ目]と結びついている]

とのもの「とも」なる。

(:問題となる描写の現出箇所は集英社単行本20巻、ないし、装幀・分類だけ文庫版にリニューアル、焼き直されての

『ジョジョの奇妙な冒険』第13巻〔集英社文庫〕との名目で文庫版としてリニューアルして2002年に第一刷刊行されたものとなり漫画雑誌週刊少年ジャンプ誌掲載『ジョジョの奇妙な冒険』につき1990年42号から1991年6号に掲載のコンテンツを移植したと末尾に明示されてのもの)

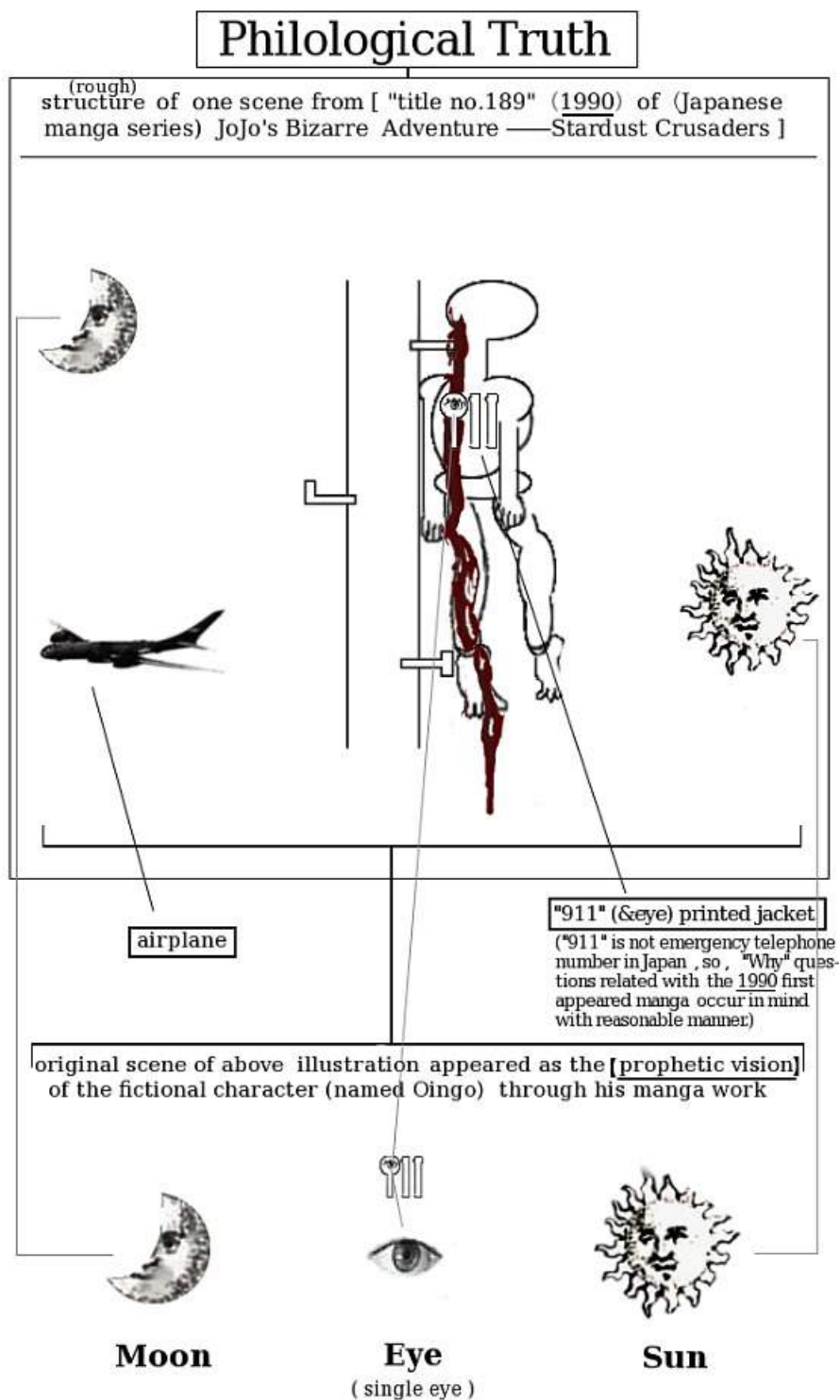
にて掲載の[「クヌム神」のオインゴ「ト神」のボインゴ(1)]の部となる 一ちなみに当方所持の市中にてよく流通している方の文庫版『ジョジョの奇妙な冒険』13巻では p.9 および p.17 が該当部掲載箇所となる—)

下にあつて再び呈示の[該当部再現図]をご覧頂きたいが、[吊された男]は

【劇中の予言漫画】(漫画『ジョジョの奇妙な冒険』の中に登場を見ている[作中]予言漫画 一冗談のような話ではあるが、予言的描写を含む漫画作品の中のその予言的描写が当該漫画作品の中での[予言を可能ならしめる漫画]に関わるところとしてなされているとの入れ子構造、「漫画の中の漫画」との[自己言及的・入れ子構造]を呈しているとのことがある—)

の描写の中では [911] の [9] の部分に [一つ目] が記載されている上着を着ながらも「吊されて死んでいる」のであり、その吊された男の左右には [月][飛行機] のみならず [太陽] も描かれている とのことがある (:現況、最も流通しているところの最新版では上記の旧版および新版のうち、文庫コミック『ジョジョの奇妙な冒険』第13巻にて掲載の[「クヌム神」のオインゴ「ト神」のボインゴ(1)]の部、その9ページとナンブル(ページ番号)が表記されているページを参照いただければ、ご理解い

ただけようが、予言されて死ぬ男の描写ではその左下に〔太陽〕が、右上に〔月〕が、右下に〔飛行する飛行機〕が、そして、画面構図中央に〔一つ目〕が配置されるとの形態がみとめられる)。



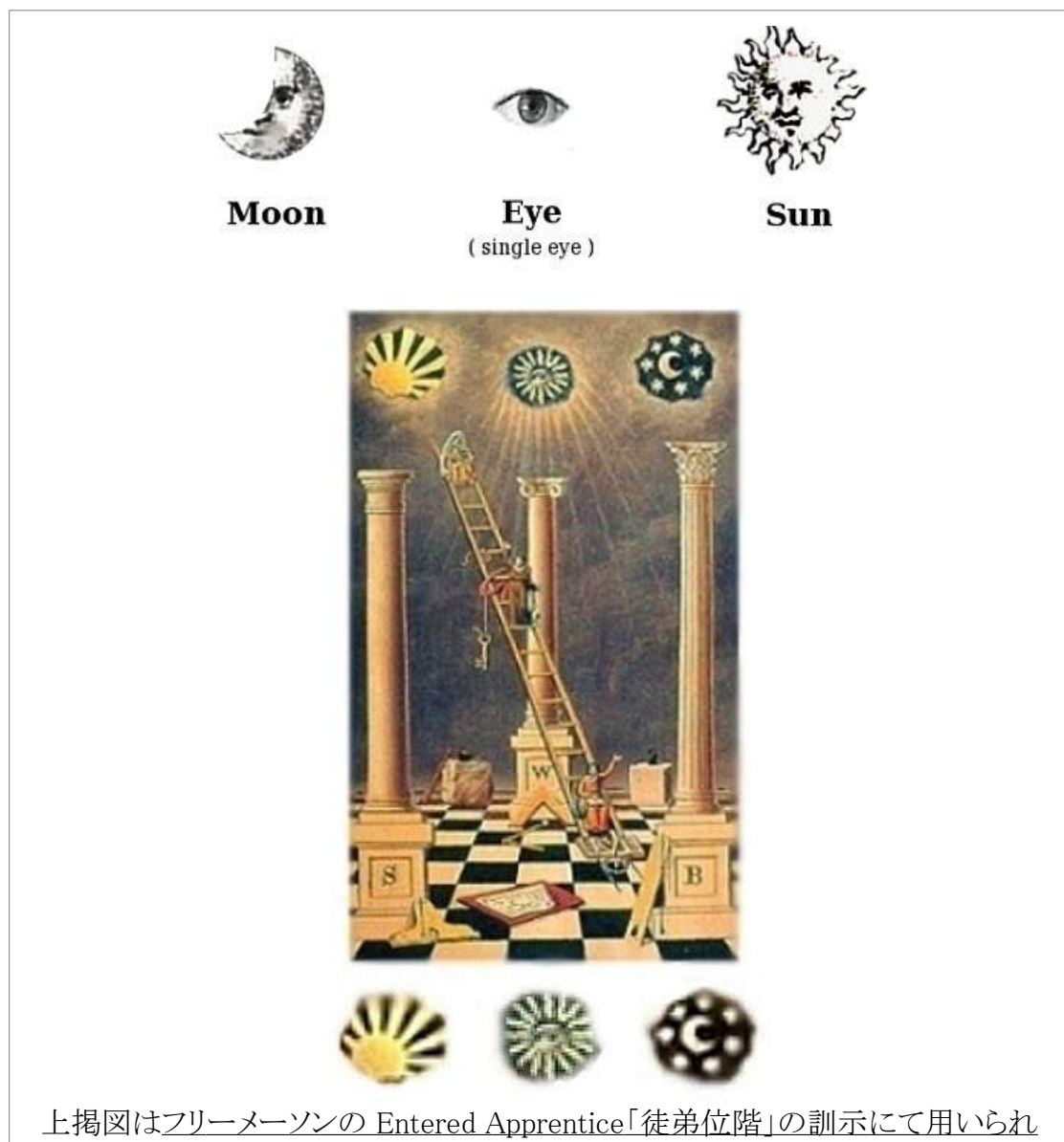
以上の漫画の予言図構図は —(はっきり述べ)— (『よくもこういうことを「やった」、ないし、「やらせた」ものだ』と本稿筆者が思っているところなのだが)、

〔〔太陽〕〔一つ目〕〔月〕をその順序で並べるのは
 〔フリーメーソンの入門位階にて多用される特定トレーシング・ボード〕
 〔そのもの〕の構図となっている〕

とのことと接合するものである (それは事実をフィクションに韜晦(とうかい、はぐらかし)するといった類
 らが頻繁に舌の先にのせる言葉としてのアーバン・レジェンドとのもの、[都市伝説]などではない。単
 純ですぐにたやすくも確認できるとの事実、すなわち、[記録的事実]としての出典ら —単行本版

『ジョジョの奇妙な冒険』第20巻ないしリニューアル見ての文庫版『ジョジョの奇妙な冒険』第13巻(後者ではp.9やp.17)及び流布され、容易に確認できるとのフリーメーソン・トレーシング・ボード構図—にまつわる「際立っての」図形的一致性の問題にすぎない。なお、[トレーシング・ボード]とは、(本稿の先の段にても言及していることとなるが)、[諸種様々なイラストレーションを組み合わせて形作られ、メーソンの各位階にてのフリーメーソンの講釈で用いられるとのシンボル画]のことを指す —※英文 Wikipedia [Tracing board] 項目の冒頭にて “ Tracing boards are painted or printed illustrations depicting the various emblems and symbols of Freemasonry. They can be used as teaching aids during the lectures that follow each of the Masonic Degrees, when an experienced member explains the various concepts of Freemasonry to new members. ” 「トレーシング・ボードとはフリーメーソンの諸種様々な紋章・シンボルらを描いているとの描画・印刷されての図像らとなる。それらはフリーメーソンの古参のメンバーが新参者に対してメーソンの様々な概念を説明する際に各々のメーソン位階に応じての講釈の間にて教示の材として用いられるとのものである」と記載されているところのものである—)

同点については「直下呈示にての」トレーシング・ボードの特定構造と比較顧慮をなせば、一致性の問題についてすぐに納得いただけるであろう (: そうして細々と延々と解説していることに対してすら『下らぬことを云々している』と思われる向きもおられるかもしれないが、だが、こういった話の集積度合いについて論じること「も」が [人間にどういふ最期を進呈するか] との予告の問題を訴求するうえで有為たりうるという認識が(手持ちの把握情報から)筆者にはあり、ここでの話をなしていること、思料なしにいただきたいものではある)。



上掲図はフリーメーソンの Entered Apprentice「徒弟位階」の訓示にて用いられ

るトレーシングボード（「フリーメーソンの諸種様々なイラストレーションを組み合わせて形作られ、メーソンの各位階にての講義に用いられるとのシンボル画」）のよく知られた似姿を挙げたものとなる。そこにては画の左右に「太陽」と「月」を配し、中央に「万物を見通す目」（オール・シーイング・アイないしアイ・オブ・プロビデンス）を配するとの構図が見てとれる。

尚、同様同文の構図のフリーメーソン象徴体系での採用は徒弟位階の特定トレーシング・ボードといった範疇にのみ留まるとのものではなくフリーメーソンの幅広くものシンボリズムに具現化を見ている。たとえば、（目につきやすきところを引き合いに述べれば）、英文 Wikipedia「Freemasonry in Asia」項目にて「現行にて」掲載されている、

「**The Grand Lodge of Armenia**（アルメニアのグランド・ロッジ／アルメニアのフリーメーソン総本部。アルメニアがアナトリア地方（トルコ境界）の領域に存することから、アジアの領域をアナトリアまで含めての広めに見繕つての当該 Wikipedia「Freemasonry in Asia」項目にての掲載と思われる）の象徴」

などもまさしくものその伝の格好を呈しているとのことが（英文 Wikipedia 当該項目を介して）確認できるようになっている、とも紹介しておく —アルメニアのグランド・ロッジの紋章のようなものからして左右に「月」と「太陽」を、中央に「オール・シーイング・アイ」を配するとの構図が採用されている—。

ここまで説明なしたところで、次いで、「長くなるも、」重要ととらえていることにまつわつての補足の部に入ることとする（B. と振つての段を終えての後の C. と振つての段に入る前に「ひとまとめにしての「長くなるも、」の補足」の部に入ることとする）。

これよりの補足の部に関しては 本稿にての p.813 から p.855 の紙幅を割くことになる。

「極めて長くなるも、の補足として」

（最前の段にて言及なしたとのこと、「メーソン・シンボリズムにあつての「太陽」「一つ目」「月」を並べる構図」と「国内特定漫画作品（『ジョジョの奇妙な冒険（スターダストクルセイダース）』）にあつての奇怪なる「予見的」描写」が「連続性を呈している」とのことについて（極めて長くなるも、とのかたちにて）補足となるどころの表記 —「**■補足 1**」から「**■補足 3**」と分けてもの表記— をこれ以降、なすこととする）

■補足 1

まずもって述べておくと、

「本稿筆者は『ジョジョの奇妙な冒険』の作者、極めて芸術的とも言える独特なる画風を深化させているとのことがうかがえているとのその人物がフリーメーソンであると論じているのではないし、そのようなことを問題視するつもりは元よりない」（下らぬ陰謀論の（再）頒布者といった向きはそこを履き違えることか、と思うが、「そうではない」）

『ジョジョの奇妙な冒険』の作者の予見描写にまつわつての申しよう、

「（予告描写の部については）考えていないでそういう描写をなしていた」（先に和文ウイ

キペディアでそういう作者コメントがなされていることを紹介している)

との申しようにみとめられる、

[考えていない]

がどういふ文脈のものであるかは問題になることか、とはとらえているが、ここでの論点は[属人的特性の(不確かな可能性論に依拠しての)批評]をなすとのことなどにはない —※【傀儡(くぐつ・かいらい)としての[属人的心中]などというものがさして意をなさない「紐を付けての」候補者】などを統治機構にて擁立する力学「以上」の操り人形操作のメカニズムの介在の可能性とてこの世界にあつては当然に「ある」ととらえているわけだが、といった中では[葉籠中の人間の属人的属性]などについて(機序・作用原理といったことを論ずるといったこと以外に)云々するとのことには意味がない、そのようなことは巨視的な状況を分析しようとの者がやることではないととらえている —。

他面、人間に[予見的描写]をなさしめる尋常一様ではない力学がそこに存在している — (本稿にての **出典(Source) 紹介の部 87(2)** で部分的にその[方法論]にまつわる可能性を(「誤っているところかもしれないが」と断りつつも)呈示しているような力学が存在している) — との式でしか説明のしようがないとのことから山積している中で実際にそうした予見描写をなさしめる力学が介在しているのならば、である。

その力学の発するところのほうが

「何故、」

「どういふ心根で、」

葉籠中にある人間にそういう描写がなさしめているかは、(Ifの話として)、「だが、しかし、」のこととして[極めて問題になる]ことであると筆者はとらえている (:ちなみに筆者は先の段でワールド・トレード・センターのうちの第七ビルの倒壊の仕方について発破倒壊説が専門家団体より呈示されているとのことを — その申しよう自体の真偽にまつわる手前価値判断を「本稿では」敢えても呈示しないで — 先の **出典(Source) 紹介の部 101** を包摂する解説部にて紹介しているわけだが、YouTube などでも説得力を感じさせる動画が流通させられているそちら申しようが真なれば、そういうこと(コントロールド・デモリッションこと発破倒壊)を実現ならしめるような「人間の次元の紐帯」は — 国内の相応の大規模宗教組織など相応の団体の二重人格的特性にも通曉している人間として申し述べるが — [極めて限られてくる]と述べても構わないことか、ととらえている(たとえ、不適切に[政府のインナーサークル]などというそれ相応の呼ばれ方をしようとも問題となるような紐帯は極めて限られてくるととらえている))。

それにつき、そう、どういふ心根でか、の Why の問題については筆者は[予言の霊の業]とといった言葉が相応しいような力学が発するところには善意のようなものは存在しておらず、

『部分的に今後実現させるべくもの予定 — (あるいはそこに本稿にての **出典(Source) 紹介の部 28-3** に続く段でかするよに言及しているとの[超光速通信]のようなもの(光の速度を超える通信とはすなわち過去に遡行する通信たりうるものとなる)が関わっていれば、まさしくもの将来の出来事の身内間示唆か) — を自儘に手繰ることが出来る葉籠中の人間に吐露させ、[災厄の中身]と[災厄の実現に使役するユニットら](紐帯)の属性を部分的に[事前言及]する、そういうことをなしても人間存在はそれに対して何もしないし、できなからう』

とたかをくくつての観点が表出を見ているだけではないか、ととらえている (:述べておくも、筆者は『ジョジョの奇妙な冒険』シリーズひとつとてからして、そこにて[善意]のようなものが介在している可能性があるなどとは「露も見していない」。については、同漫画シリーズをも思索の対象として分析した関係上、その初期のシリーズの話数における胸くそが悪くなるような嗜虐的描写に見る[邪悪さ]をよく知っていることも大きなところとしてある。たとえば、シリーズ全般を通して「人の生き死にの問題をあまりにも軽々しく扱っている」ことが通読なした段階で容易に

理解できるとの同漫画シリーズではその初期の段階にて「子供の助命を請うていたなかで吸血鬼にゾンビ人間にされた母親が子供を嬉々として食いちぎる描写」などが人間存在の「自由意思」の問題を愚弄するように、そう、人間存在の自由意思が「外力」にていかようにもねじ曲げられるとのかたちで嗜虐的極まりないかたちで入れ込まれているといったことがある — 「何故、このような胸くその悪くなる描写を「わざわざ」子供が多くも読むような漫画の類に入れ込んでいるのか、構成を考案した者はどういう性質の者なのか」と疑義感じさせるようなかたちで入れ込まれていることがある — がために、そのようなものに善意の「ぜ」の字が介在する余地があるなどとは露も思っていない、そうも述べるのである）。

■補足2

こちら補足したき第二の点は長くなる。

さて、漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』にての予見描写の部について当の作者自身は、(繰り返すも)、

[(作品にあつての予言描写とされる部を) 考えていないで書いていた]

と述べているとのことがあるようだが (:『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』にあつて911の予言染みたものが具現化していることにまつわるところとして先にて和文ウィキペディア[スターダストクルセイダース]項目の「現行にての」表記を引用なしていたところとして(再引用するとして) “ト神の漫画が旅行客の男性の死亡を予知する(正確には乗ったバスが事故に会い、死亡する)描写があるが、これがアメリカ同時多発テロを予言するかのような描写だとして一部で話題となった。理由としては、事故死した男性の着ていた服に「911」と書かれており、サメのような顔をした飛行機がそばを飛び、イスラム教のシンボルである三日月が描かれている。さらに、死亡する直前に男性が「おっ、十時半だ」とバスの時刻を呟いているが、これは貿易センタービルが崩落した時刻でもあった。荒木はこの噂に対して「考えずに描いていた」と述べている。当該の場面はアメリカ同時多発テロより以前の1990年に描かれたものであり、事件より11年前のことであった。作者がこの噂を知ったのは2007年5月ごろと、噂が出始めた時期と比べるとかなり遅かったようである ” (再引用部はここまでとしておく)との記述に見るように「考えずに書いていた」と述べているとのことがあるようだが)、 であったとしても、はきと述べられることがある。

その「はきと述べられること」とは

「問題となる予見描写の部(先述)にあつての「太陽」「一つ目」「月」を並べての描写は単純に視覚的な意味合い(先にてその特性を画像挙げながら示したような視覚的な意味合い)からだけではなく「これ深甚なる意味で奇怪な予見ありように関わっている」との式でも「フリーメーソン・シンボリズム」のみならず「フリーメーソン・シンボリズムと関わりどころの錬金術の象徴体系」と相通ずるところがあるものである」

とのことである(※)。

※ [錬金術] についてのこととして

筆者は「これ長大な」といった分量を割いて本稿で論じてきたように

「【黄金の林檎というもの】(のシンボル) が【911の事件の予見的言及】にまつわるところ「でも」、また、【ブラックホール生成実験と表されるに至った「実験」】にまつわるところ「でも」奇怪なかたちで関わっており、その関わりあいにあつて【多重的なる相互の連結関係】が垣間見れる」

とのことを重要視しているのではあるが（そこにいう多重的連結関係については本稿のここに至るまでの流れをきちんと読まれば、よく理解できることであろうとも述べておく）、そも、「黄金の林檎」というものは「不死」および「黄金」との要素が伴っているものでもある。「黄金の」林檎はそれを食する者に「不死」を与えるとの按配にて、である（北欧神話で黄金の林檎が不死にまつわるものであったことについても本稿の先の段では事細かに解説している）。

そして、「不死」と「黄金」とくれば、潰えた妄言体系、「錬金術」にあっての二大目標となっているとのことがある（錬金術というのは「不死の霊薬」の生成と「黄金」の生成を二大目標に掲げての「潰えた妄言体系」と述べても近代科学文明の地ならしをした「妄言」体系であるともされるわけであるが—）となっていることがよく知られている）。

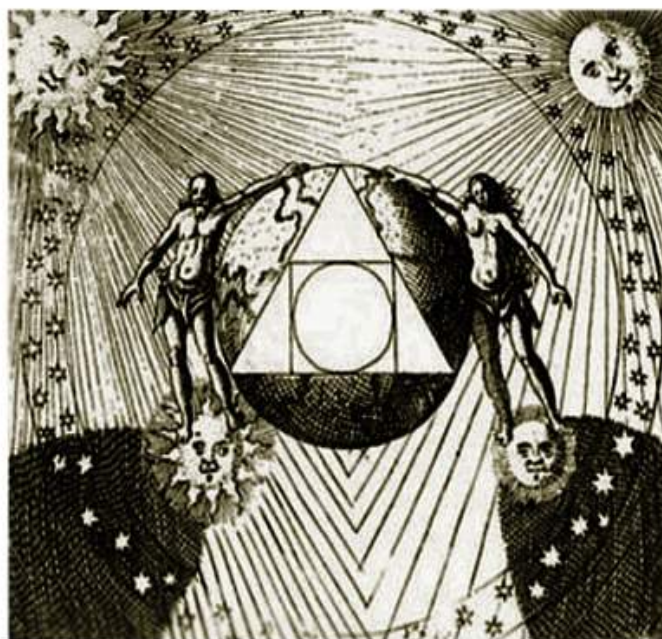
といった観点から、また、「(いろいろな意味で問題になるとの)フリーメイソンの象徴主義」が「錬金術のシンボル体系」と濃厚に結節しているとのことを情報収集の過程で知るに至った—和書にても（その伝での解説はほとんどなされていないとのことで残念ではあるのだが）『フリーメイソンと錬金術 西洋象徴哲学の系譜』（人文書院／本稿にての先の段でも出典としていくばくかの記述を引いているとの学究系の書）との著作が刊行されているように「フリーメイソンの象徴主義」と「錬金術」のそれは結節しているとのことを知るに至った— ことから、筆者は普通人にはまずもって縁がなかろうとの錬金術関連の書籍の図像的分析も—額面上からとらえれば、「それらは所詮、オカルトの遺物でしかあるまい」と一歩引いての覚めた目をもちながらも— なしてきたとのことがあり、といった絡みから「錬金術」にまつわってある程度、深い話もがなせるようになっていく。

表記のこと、漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険(スターダストクルセイダース)』にての予見描写がフリーメイソン・シンボリズムのみならず錬金術の象徴体系とも（皮相的な視覚的一致性の問題を越えるところとして）「予見ありように関わる」ところで深くも結びついているとのことについては「まずもって、」

「錬金術象徴体系にあっての【月】【太陽】【一つ目紋様に通ずるもの】を並べてのシンボル」

として手前が把握する具体例を挙げておくこととする。

下の図をご覧頂きたい。



Philosophia reformata (1622)

同図は『改革された哲学』とでも訳せよう 17 世紀初出の錬金術書、Johann Mylius ヨハン・ミューリウスという錬金術関連の著述家の手になる Philosophia reformata (1622) という書籍からの抜粋なしでの図となるが、そこにては [月] と [太陽] と [円と結びつけられた三角形] (という「いかにもな、」構図) が並置して描かれている (※)。

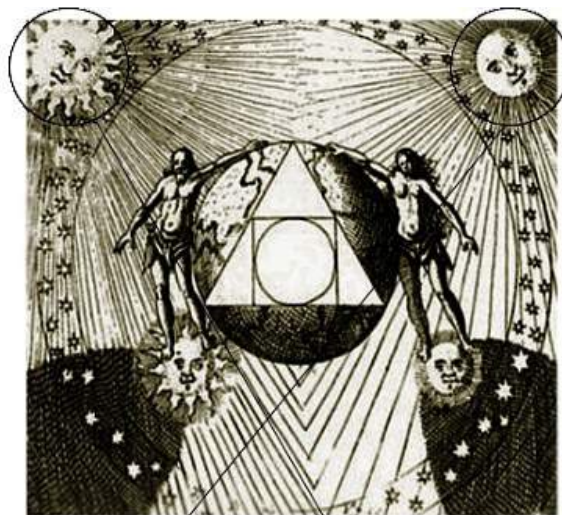
(※下にもそのことを示す図解部をさらにもってして挙げるが、

「本稿用に、」と作成した [『ジョジョの奇妙な冒険』の予見描写の再現図] にあっては上の錬金術書『改革された哲学』の [顔のついた太陽と月] の図像からの「流用」をなしている) (「わざと」そうした)。

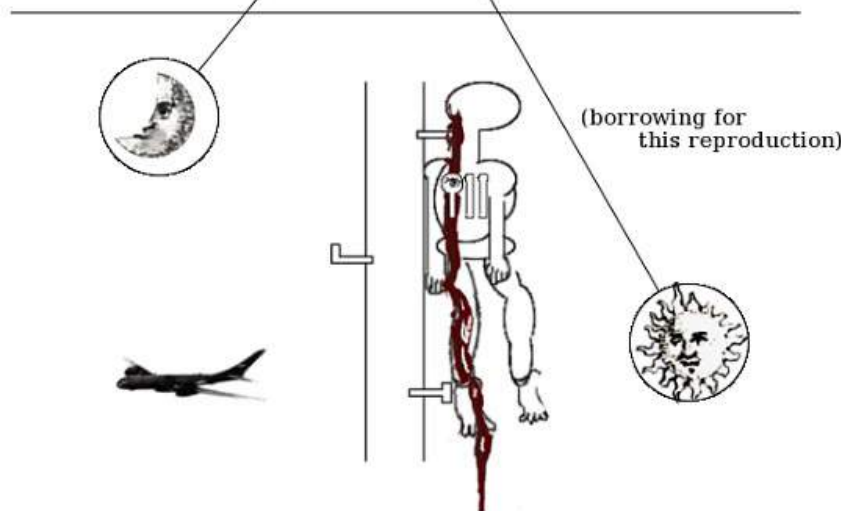
その点もってして、先立っての段でも同趣旨のことを申し述べているように

「 [『ジョジョの奇妙な冒険』の予見描写の「再現」図] ならぬ原作オリジナルの予見描写イラストにあっても [顔のついた太陽] [顔のついた月] が描かれたりもしているが、そちらは本稿にて呈示の再現図とは異なる独特なる雰囲気醸し出したものとなっているとのことがある中で本稿では漫画に見るオリジナル・イラストレーションにおける擬人化のありようを忠実には踏襲せず、錬金術書に見る擬人化された太陽と擬人化された月を代わりに挙げてみる」)

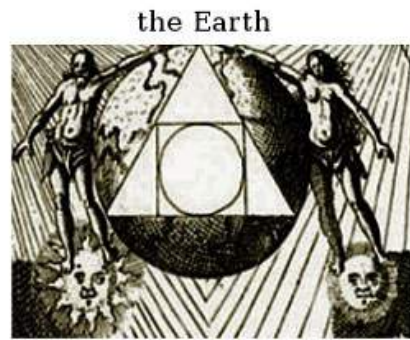
上に呈示したような錬金術書 (1622 年初出の『改革された哲学』) に見る描写がフリーメーソンの象徴体系と接合するようにもなっており、また、多く普通人が知るところなき漫画『ジョジョの奇妙な冒険』の特定部描写とも同じくもの錬金術シンボル画が結節しているとのことがある。同じくものことについてはさらに続いての下図解部をご覧頂きたい。



Philosophia reformata (1622)



structure of one scene from ["title no.189" (1990) of (Japanese manga series) JoJo's Bizarre Adventure — Stardust Crusaders]



前掲図最上段では —ここまでの図呈示の流れに目を向ければ、一目瞭然であろうが— 先に挙げたところの *Philosophia reformata* 『改革された哲学』 内図像よりの再掲をなし、中段では同 *Philosophia reformata* より一部図像パーツ拝借なしつつもわざとそうなるべくも作製した『ジョジョの奇妙な冒険』にての特定部描写の再現図の再掲をなしている。

対して(一連の)前掲図下段では

[比較対象として持ち出したフリーメーソン徒弟位階 (エンタード・アプレンティス位階) のトレーシング・ボードの再掲をなし、また、それとあわせて合衆国一ドル紙幣に描かれている[ピラミッドと一つ目の印章]および最上段で挙げた *Philosophia reformata* 『改革された哲学』にての地球と重なるように描かれているとの三角形および円を併せての構図]

を抽出して呈示している。

以上の図らをもってお分かりいただけようかと思うが、『ジョジョの奇妙な冒険』のイラストは「フリーメーソン象徴主義」(例としての徒弟位階のトレーシング・ボード構図を挙げている) および「錬金術シンボル画」(例として *Philosophia reformata* の図像を挙げている) と接合しながら、「[月][太陽][目]の構図が[911]を介して[地球]と相通ずるものであることを象徴主義の観点で指し示すが如くものとなっている」(: *Philosophia reformata* 『改革された哲学』にあつての[月]と[太陽]を両側に配しての中央の地球の構図が[三角形の中の円]と重なるようになっていたため、また、他面、メーソン象徴主義に見る[月][太陽][目]の構図が[目]の部分で[ピラミッドより覗く万物を見通す目のシンボル]と重なるようなところがありもするため、それも述べられるようになっていたことが「一つには」ある —字面だけではおよそ理解出来るようなところではないため、とにかくも、それさえ見れば瞭然としたありようについて理解いただけるであろうとの図を参照いただきたい次第である—)。

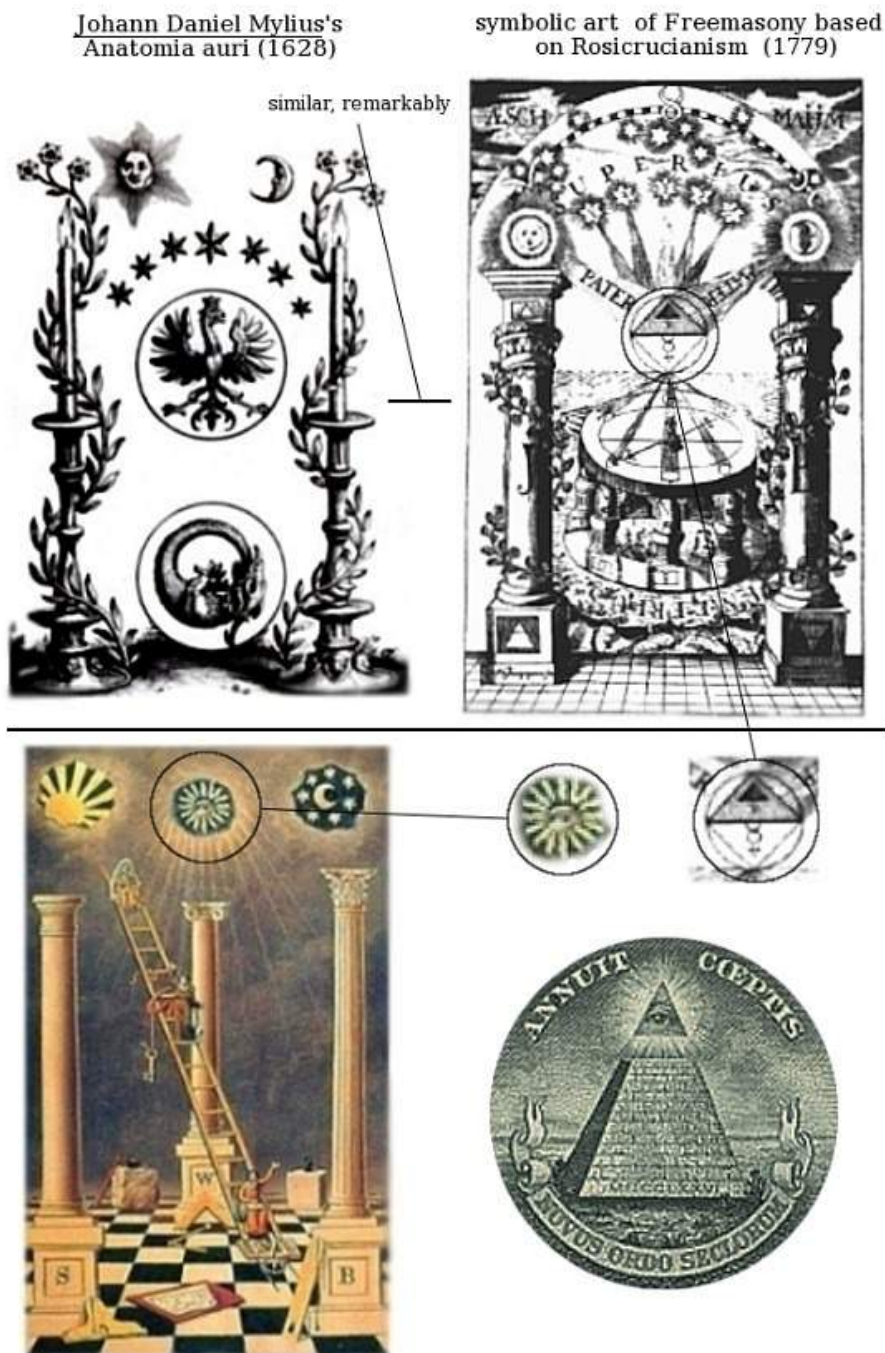
上のように相似形の問題を示しても

『メーソン・シンボリズム (およびそれと酷似している国内漫画作品に見る予見描写) と錬金術シンボリズムのありようを結びつけるべくも [僅少な例] でこじつけをなしているだけであろう』

と考える向きもあらわれるかもしれない (ここまでの話をなしているだけの本段階では全く順当なる反応ではある) から述べるが、

「この身が把握するところとして直近、その構図を問題としていたところの *Philosophia reformata* (1622) をものした 17 世紀に生きたヨハン・ミューリウス Johann Mylius という錬金術関連の書らの著述家のやり方に関してはその他の図像群を介して「も」[メーソン象徴主義と錬金術の露骨なる接合性]を示すものとなっている」(については具体例を直下、挙げることとする)。

下の図をご覧ください。



上掲図にての上の段の左上の図像は(直前までその図葉を挙げてきた錬金術書 *Philosophia reformata*『改革されし哲学』(1622)の著者でもある)ヨハン・ミューリウスの著作たる *Anatomia*

auri という錬金術関連の著作(1628年に刊行されたとされるもの)にて掲載の図葉 —(当然に上にてその図画像を挙げた Philosophia reformata と同様に表記の文書名(Anatomia auri)を検索エンジン上で入力することでそちら図像を欧文サイトを通じて捕捉できようとの図葉)— となる。

対して、上掲図にての右上の段にあって呈示することとしたのは『賢者の羅針盤』という書物、1779年に記された著作に収録されている図葉となり、オンライン上にも(英文 Wikipedia も含めて)図画像が広くも流布されているとの、

[薔薇十字思想(というもの/Rosicrucianism)とフリーメーソン象徴主義の折衷が体现されてのシンボル画]

となる(:同『賢者の羅針盤』掲載の図像については本稿の先の段、[出典\(Source\)紹介の部93](#)にてその内容を引き合いに出しているとの国内学究(吉村正和名古屋大学教授)の著作『フリーメーソンと錬金術 西洋象徴哲学の系譜』(人文書院)にあって掲載されているものとなり、そこに付けられた解説は(『フリーメーソンと錬金術 西洋象徴哲学の系譜』p.112より原文引用するところとして)“1779年にベルリンにおいて匿名で出版された錬金術的薔薇十字文書『賢者の羅針盤』の図版:上部に太陽と月が描かれた2本の柱には、JとBの文字が刻まれている。それぞれの文字はヤキンとボアズ(ソロモン神殿の前に立てられた2本の柱)というフリーメイソンの象徴を指しており、この図版では薔薇十字錬金術思想とフリーメーソンの象徴が融合している”(引用部はここまでとする)と解説されているものとなっている —※ちなみに、欧州には[薔薇十字思想]という錬金術体系と接合する秘教思潮が存在しており、そちら秘教思潮がフリーメーソンの勃興に影響を与えているとの説が一部で語られるところとなっている。同じくものことについては英文 Wikipedia [Rosicrucianism] 項目にて “According to Jean Pierre Bayard, two Rosicrucian-inspired Masonic rites emerged towards the end of 18th century, the Rectified Scottish Rite, widespread in Central Europe where there was a strong presence of the "Golden and Rosy Cross", and the Ancient and Accepted Scottish Rite, first practised in France, in which the 18th degree is called Knight of the Rose Croix.” 「ジャン・ピエール・ベイヤード(英文 Wikipedia 当該項目の出典としてその論稿が持ち出されている人文学修士号 M.A.の持ち主として薔薇十字思想とメーソンに関わる研究をなしているとの向き Jean Pierre Bayard)によると薔薇十字団にインスパイアされての二つのメーソン位階が18世紀末に向けて登場を見ており、(うち一つは)、[黄金の薔薇十字]の影響が強くもそこにあつたとの中央ヨーロッパにて広まった[改訂版スコットランド位階]であり、(もう一つは)、当初、フランスでその運用がなされていたところの[薔薇十字の騎士]との名での第18階階級を用意している[古代の認証されたスコットランド位階]となる」(訳付しての引用部はここまでとする)との記載を認められるようなことがある—)。

直上提示の上掲図を通じもしてお分かりのことか、とは思うが、先に

[地球を背景にしての三角形の中の円の構図(それは後述するが、錬金術における[賢者の石]の構図ともなる)を太陽・月を配する錬金術画を Philosophia reformata (1622)を通じて遺しているとのその著者 Johann Mylius やりよう]

は[フリーメーソン象徴主義]とも(またもってしてフリーメーソンに習合されて頻繁にメーソン・シンボル体系として紐付けられて用いられるようになったとの)[万物を見通す目]とも接合するように[できあがっている]のである(上掲図下段の部も参照すれば、視覚的にそのことがよく理解出来るであろう)。

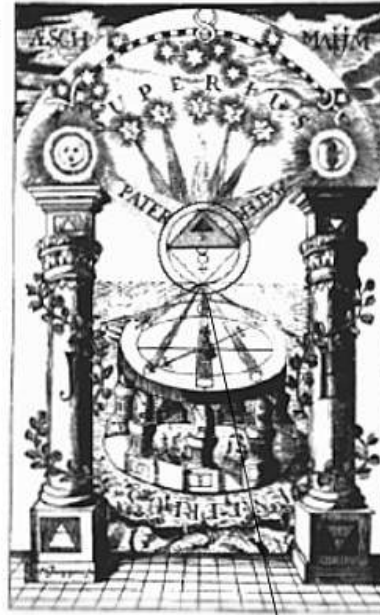
さて、ここまでの流れにて[錬金術シンボル構図]および[911と一つ目が刻まれた『ジョジョの奇妙な冒険』の予見描写の構図]がオーバーラップ、接合していることを視覚的にかなり入念に訴求してきたつもりである —下の確認のための図を参照のこと— (再度強調するが、こ

こでの話は「図を抜きにしては何を述べているのか、理解を得られぬであろう」との按配でのかくもの図の内容を重んじての話となる)。

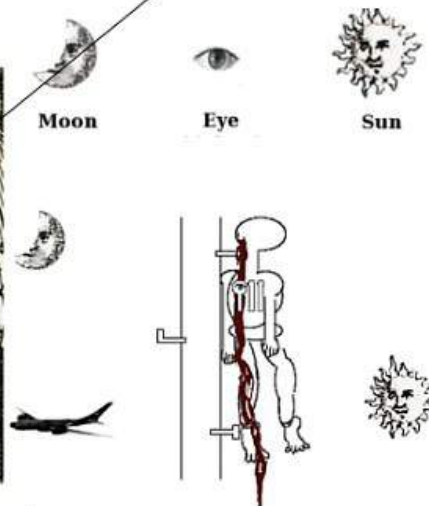
Johann Daniel Mylius's
Anatomia auri (1628)



symbolic art of Freemasonry based
on Rosicrucianism (1779)



Philosophia reformata (1622)



以上のような流れに依拠したうえでさらに摘示しておくが、

「漫画『ジョジョの奇妙な冒険』にての

【[月]と[太陽]と[一つ目]を並べての奇怪なる予見描写 —フリーメーソン象徴主義、トレーシングボードなどに見るやりよう同一の描写—】

に関しては、

[911という数値と一つ目を合算させての部]

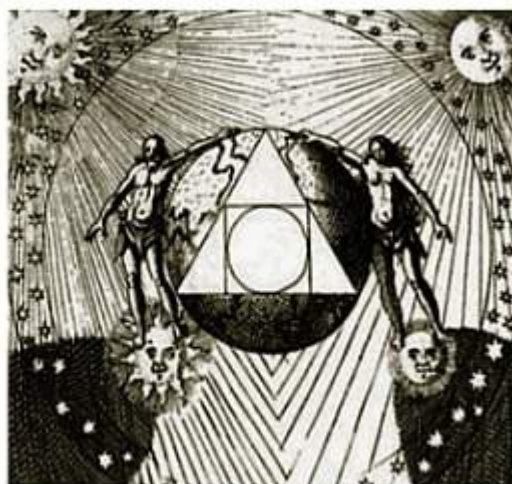
が錬金術象徴主義体系における「賢者の石」(英語で述べるところの Philosopher's stone,「哲学者の石」)というものの寓意と重なるようになっていくことまでもが「ある」

(:[賢者の石]についてはその通俗的理解に関して英文 Wikipedia[Philosopher's stone]項目冒頭部にあつての「現行の」記述を引いておく。(以下、抜粋なすとして) “The philosophers' stone or stone of the philosophers (Latin: lapis philosophorum) is a legendary alchemical substance said to be capable of turning base metals such as lead into gold (chrysopoeia) or silver. It was also sometimes believed to be an elixir of life, useful for rejuvenation and possibly for achieving immortality. For many centuries, it was the most sought-after goal in alchemy. ” 「(賢者の石こと)フィロソファーズ・ストーンないしストーン・オブ・フィロソファーズ(ラテン語におけるラピス・フィロソフォラム)は鉛のような卑金属を黄金あるいは銀に変性させることができるのと錬金術における伝説的物質となる。それはまた、生命の靈薬(エリクシャー)、若返りや不死さえも実現しうるのに使えるとのそれであると信じられてきたものである。何世紀もの間、その賢者の石は探求の果てにある最大の目標となっていた」(訳付しての引用部はここまでとしておく)。以上、通俗的な[賢者の石]の説明のされようについて紹介した)。

(賢者の石の通俗的理解については上にて言及したとして) 下の図をご覧頂きたい。



Atalanta fugiens



Philosophia reformata

上の図の左側は —筆者が探求活動の中で読んで見たフィリップ・J・デイヴィス(Philip J. Davis)という数学者の手になる Descartes' Dream『デカルトの夢』という著作の邦題タイトルにも同図が認められるように比較的、知られた図であるともとらえているのであるが—

[17世紀ハプスブルク家ドイツにてのお雇い錬金術であった Michael Maier ミヒャエル・マイヤーという人物(英文 Wikipedia[Michael Maier]項目にて “ Michael Maier (1568—1622) was a German physician and counsellor to Rudolf II Habsburg, a learned alchemist, epigramist and amateur composer. ”と冒頭より記されての事績が伝わっている人物)の手になる17世紀前半に成立した錬金術寓意を扱った著作、

Atalanta Fugiens (Fugien はラテン語の Fugio「(跳ぶように) 逃げ去る」の分詞とされているため「跳ぶが如く去りゆくアタランタ」とでも訳せようかとの著作)に掲載の図像]

となり、錬金術における「賢者の石」の体現図像として英文 Wikipedia 「[Philosopher's stone](#)」項目にても現行、「賢者の石の似姿」として掲載されているとの図ともなる（:なお、一般に「賢者の石」の外観は 一錬金術媒質における水銀と結びつく、あるいは、東洋における練丹術媒質と結びつく辰砂の外観と結びつくとの式でか— 「赤い石」(red stone)と描写されることが多いとされるのだが、英文ウィキペディアにおける賢者の石に関する当該項目にては現行、**“ Alchemical authors sometimes suggest that the stone's descriptors are metaphorical. It is called a stone, not because it is like a stone. The appearance is expressed geometrically in Michael Maier's Atalanta Fugiens. "Make of a man and woman a circle; then a quadrangle; out of the this a triangle; make again a circle, and you will have the Stone of the Wise." ”** 「しばしば錬金術関連の著述家らは〔(賢者の) 石の描写は比喩的なるものである〕と示唆もしていた。ミハエル・マイアーの手になる Atalanta Fugiens にあつてはその外観は幾何学的なるものであると描写されている。(曰く、のこととして)「男と女でもって円をなし、それから四角形を描画、その外側に三角形を配し、さらに円を描く、さすれば、智慧の石を得るであろう」(とのかたちにて、である)」(訳を付しての引用部はここまでとする)との理解のなされかたも存在していると紹介されており、上掲図に見る「賢者の石」の似姿はそうした理解に基づいたものとして同じくもの英文ウィキペディアに掲載されているものとなる。

対して、前掲図にての右側は先程挙げたところの 1622 年に成立しているとされる(錬金術関連著述家ヨハン・ミューリウスの手になる書たる) *Philosophia reformata*『改革されし哲学』に掲載の図像を再掲したとのものとなるわけだが(すなわち、複線的にフリーメーソン・シンボリズムら、そして、それと際立っての相似形を呈する『ジョジョの奇妙な冒険』の予見描写部と接合するとの図像を再掲したのものとなるわけだが)、先行する Michael Maier ミハエル・マイヤーの *Atalanta fugiens* 掲載の図像(前掲右)の影響を受けてのものなのか、同じくものもの、三角形の中に円と四角形が入れ込まれているとの構図が「賢者の石」の描写とすぐに分かるようになって(直上にて引用なしたばかりのことを繰り返す。“ The appearance is expressed geometrically in Michael Maier's Atalanta Fugiens "Make of a man and woman a circle; then a quadrangle; out of the this a triangle; make again a circle, and you will have the Stone of the Wise." ” 「ミハエル・マイアーの手になる Atalanta Fugiens にあつては賢者の石の外観は幾何学的なるものであると描写されている。[男と女でもって円をなし、それから四角形を描画、その外側に三角形を配し、さらに円を描く、さすれば、智慧の石を得るであろう](とのかたちにて、である)」。以上のような描写のされようとここにて呈示の図をあわせて見れば、そこに賢者の石の図像が具現化しているとのことは一目瞭然、ご理解いただけるであろう)。

ここまできたところで

「どうしてそういう話を本段でわざわざなしているのか」

に関わるどころとして話をさらに煮詰める。

続けてもってしての下の図をご覧頂きたい。



Atalanta fugiens



Golden Apple legend
& Atalanta

同図は錬金術の寓意を含む古書 Atalanta fugiens がその名を冠するところの Atalanta というのがギリシャ神話にあっての伝説的存在、アタランテという[豪の者としての乙女]と関わっていることを示すためのものとなる（画の右側に挙げたのは豪の者たるアタランテを描いた17世紀末の絵画、Nicolas Colombelという画家の手になる絵画となる）。

直上よりその名を持ちだしたギリシャ神話に登場するアタランテという存在は[黄金の林檎]とワンセットになっている。次のようなかたちで、である。

（直下、和文ウィキペディア[アタランテ]のよくまとめられている — 筆者がおさえているところとして古典との齟齬がない — 黄金の林檎に関わる記述部よりの引用をなすとして）

アタランテの名声が高くなったため、求婚者たちが押し寄せた。そこでアタランテは、結婚の条件として、求婚者が彼女自身との競走に勝つこととし、競争に負けた者は殺されるとした。ガイウス・ユリウス・ヒュギーヌス『ギリシャ神話集』によれば、まず男を先にスタートさせ、武装したアタランテが追い抜いた時点で男は射殺されたという。アタランテは生きている人間のうちで最も足が速かったため、多くの若者が命を落とした。『変身物語』の語るところによれば、アムピダマースの子で求婚者のひとりヒッポメネース（『ビブリオテケー』はメラニオンに作る）は、アプロディーテに祈りをささげて守護を求めた。アプロディーテはこれに応じて、ヒッポメネースに3個の黄金の林檎を贈った。競争のとき、アタランテが俊足を飛ばして追い抜こうとするたびにヒッポメネースは後ろに林檎を投げた。アタランテがこれに気をとられ、リンゴを拾っている間にヒッポメネースが先にゴールした。

（引用部はここまでとする）

上にて引用のようにアタランテは[黄金の林檎と結びついた存在]である（：上にて挙げた図は直上の引用部に表記されている筋立て通りに求婚者が投げた（アプロディテより譲り受けての）[黄金の林檎]に気をとられているそのアタランテの似姿を描いてのものとなる）。

さて、アタランテ神話に関わる[黄金の林檎]、本稿にての先の段（**出典(Source) 紹介の部 63(3)**）などで述べてきたように、ゲルマンの北欧神話では[不死の象徴]

とされているとのものである（同じくものことの出典表記をくどくも繰り返しはしない。そちら委細

については [出典 \(Source\) 紹介の部 63 \(3\)](#) などの解説を参照いただきたい。

北欧神話にあつては

「神々 —アース神族— が不死と永遠の若さを約する黄金の林檎(イドウンという女神が管掌)の恩恵に浴しており、その黄金の林檎が争奪などなされると若さが失われ、問題になる」

との描写がなされているのである。

そのように黄金の林檎は「黄金」と「不死」の体現存在でもあるわけだが、それら「黄金」と「不死」は —上の段にて英文ウィキペディアの「[Philosopher's stone](#)」(賢者の石)項目冒頭部分にあつての端的にして基本的なることにまつわる記述を引きながら伝えんとしたように— 「錬金術の究極目標」となっている。

といったこともあつてだろうと推し量れるところとして「[黄金の林檎](#)」に我を忘れ、婚儀成立を条件にしての求婚者との競争に負けたとの伝承が伝わっているアタランテーの名を冠するものとしての、

[Atalanta Fugiens](#)

という題名の錬金術寓意を扱つての書なのであろうと解されるころともなっている。そして、[Atalanta Fugiens](#) (繰り返すが、[Fugien](#) はラテン語の [Fugio](#) [跳ぶように] 逃げ去る] の分詞とされているため「[跳ぶが如く去りゆくアタランタ](#)」とでも訳せようかとの著作) にあつて「[賢者の石](#)」の理想的似姿として「[三角形の中の円形構造](#)」(にしてフリーメーソンの万物の目と結びつく構図) が具現化しているとのことを指摘してきたのが本稿ここまでの流れである。

「細かくも、」の補足として

上の点につき補いもして述べておけば、[Atalanta Fugiens](#) の [Atalanta](#) が「[黄金の林檎](#)」関連神話に見る競争敗者たる求婚者に死を要求していたギリシャ神話の快速の乙女アタランテー」に由来することそれ自体は周知されている事実である (たとえば、英文 Wikipedia「[Atalanta](#)」項目にて “[The German mythologist, epigrammist, composer, physician and counsellor to Rudolf II, Michael Maier published Atalanta Fugiens in 1617, **an early work of mixed media which included an epigrammatic verse on the Greek myth, along with 50 emblematic images and music fugues relating to Atalanta's flight.**](#) ” 「ドイツの神話学者・警句がかった短き詩文の紡ぎ手・編集者・外科医にしてルドルフ 2 世の相談役だったとのミヒャエル・マイヤーは 1617 年に [Atalanta Fugiens](#)、すなわち、[\[50 の象徴画と乙女アタランタの遁走に関わるフーガとセットになつてのギリシャ神話依拠の警句的韻文を含む複合メディア的な作品のはしりとしての作品\]](#) を刊行している」との記載がなされている)。そうもした中で表記錬金術関連の寓意を含む書物 ([Atalanta Fugiens](#)) でのアタランテーの題名使用については「[黄金の林檎](#)」が「[不死](#)」と「[黄金](#)」という錬金術二大目標を体現している果実である」との皮相的理由よりも深甚なる意味合いが介在しているとも考えることもできる。たとえば、黄金の林檎に眩惑された乙女アタランテーに関しては「[後に夫と共に獅子に変じさせられた](#)」との伝承も残されており、錬金術の「[賢者の石](#)」の生成プロセスの寓意画が「[獅子](#)」とよく結びつけられているとのことがありもするといったことがあるため、それが表記書物題名のアタランテの名称使用へと結実しているの「[かもしれない](#)」とも見受けられもする (だが、きりがないのでそうしたことまでについてはいちいちもの解説をなさないこととする)。

さらに加えて書いておくと、

「[\[黄金の林檎\]](#) と [\[錬金術\]](#) が強くも結びついているとの(ここでの)話」

は筆者の独創の賜物でも何でもないとのこと、断っておく（事情通の間にある一般論でさえある）。

その点もってして、

『筆者のことを是が非でもおかしいことを言う人間と見たい・考えたいとの人間ならば、証拠に依拠しての筆者申しようを諸共、[取り留めもない「独創」の放流・放出の問題]に「すり替え」もしようか』

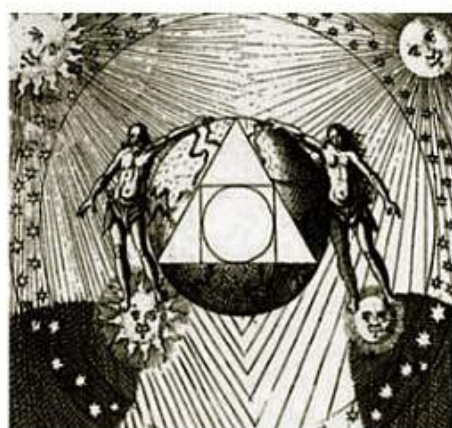
と思えもし、実際にそういう人間が相手なれば、筆者としても

「ご随意に、[自身の生き死に]に関わる客観的な問題を懇切丁寧に示されたうえでも、そうしたいのならば、そういうもの（不用意に振り回すべきではない「独創」なるもの）の問題にでも何でも勝手に置き換えるがよからう」

とも申し述べたいところなのだが、節義節度の問題として、たかだかここでの話からして[そうしたのではない]とのこと、一応、断っておく。

実際に錬金術体系はときに「黄金の林檎」と結びつけられており、そのことにまつる学者筋など媒体にての言及も見受けられるようになっているのである。たとえば、筆者が数多渉猟してきたそちら方面絡みの書籍の中で国内一般人に目に付きやすきところのものとしての『魔術と錬金術』（ちくま学芸文庫刊／著者はイタリア語・イタリア文化を専門にしているとの澤井繁男関西大学教授）という文庫本にあつての p.248 や p.257 にあつても錬金術象徴体系が「黄金の林檎」（ヘスペリデスの園の林檎）と結びつけられているとの表記が（図に対する一言での注釈表記との引用なしがたいものながらも）認められるところである。あるいは欧米書籍内記述でオンライン上より確認できるものとしては Project Gutenberg のサイトにてダウンロード可能であるとの Hidden Symbolism of ALCHEMY and the OCCULT ARTS『錬金術とオカルト芸術にての隠されたシンボリズム』という書籍 —フロイト学派の担い手であったヘルベルト・シルベレ Herbert Silberer という心理学者の手になる著作— にあつての記述として（以下、そこより引用なし） “ Flamel writes on the hieroglyphic figure of two dragons (in the 3d chapter of his Auslegung d. hierogl. Fig.) the following: “Consider well these two dragons for they are the beginning of the philosophy [alchemy] which the sages have not dared to show their own children.... The first is called sulphur or the warm and dry. The other is called quicksilver or the cold and wet. **These are the sun and the moon. These are snakes and dragons, which the ancient Egyptians painted in the form of a circle, each biting the other's tail, in order to teach that they spring of and from one thing [our lion!]. These are the dragons that the old poets represent as guarding sleeplessly the golden apples in the garden of the Hesperian maidens.** ”（意識なすとして）「錬金術師フラメル（訳注：14世紀から15世紀に活動した錬金術師で賢者の石を生成したなどとの伝承が伝わっている著名な錬金術師のニコラ・フラメルのことを指す）が「二匹の竜の象形文字」（本書第三章の図）について書き記すところは次のようなものである。「これら二匹の竜らは賢人らが敢えてもその門弟に見せようとしなかった錬金術哲学の[原初]の体現存在であるとのこと、よく考えてみるがよい。前者がいわゆる硫黄そして温乾の象徴であり、後者は水銀と冷湿の象徴である。また、それら竜らは太陽と月であり、そして、それら竜らは「我らがライオン」からわき出るとのところを示唆するために古代エジプト人が「他の尻尾を各々が噛み合いながらも円形構造をなす姿」にて描写したとの蛇ら、そして、ドラゴンらでもある」（訳注：かなり文法的にねじれた英文であるために意識するにも苦吟した次第だが、原文では「錬金術の象徴体系では一部の段階が獅子にて表象されていることを受けての書きようがなされている」のだと解される）。（また、象形文字にての竜らたる）それらは古の詩人らがヘスペリスの乙女らの果樹園にて「黄金の林檎」を眠ることなく守っているとすドラゴンの表象でもある」（訳を付して

の引用部はここまでとする)といった表記が([錬金術と黄金の林檎の象徴にての接合性])を示すものとして)挙げられるところともなっている)。



Philosopher's stone



Iðunn & Loptr
(Loki)

上は[賢者の石]が[黄金の林檎]と結びつけられるようなものであることを視覚的に訴求・強調するためだけに挙げた図となる。

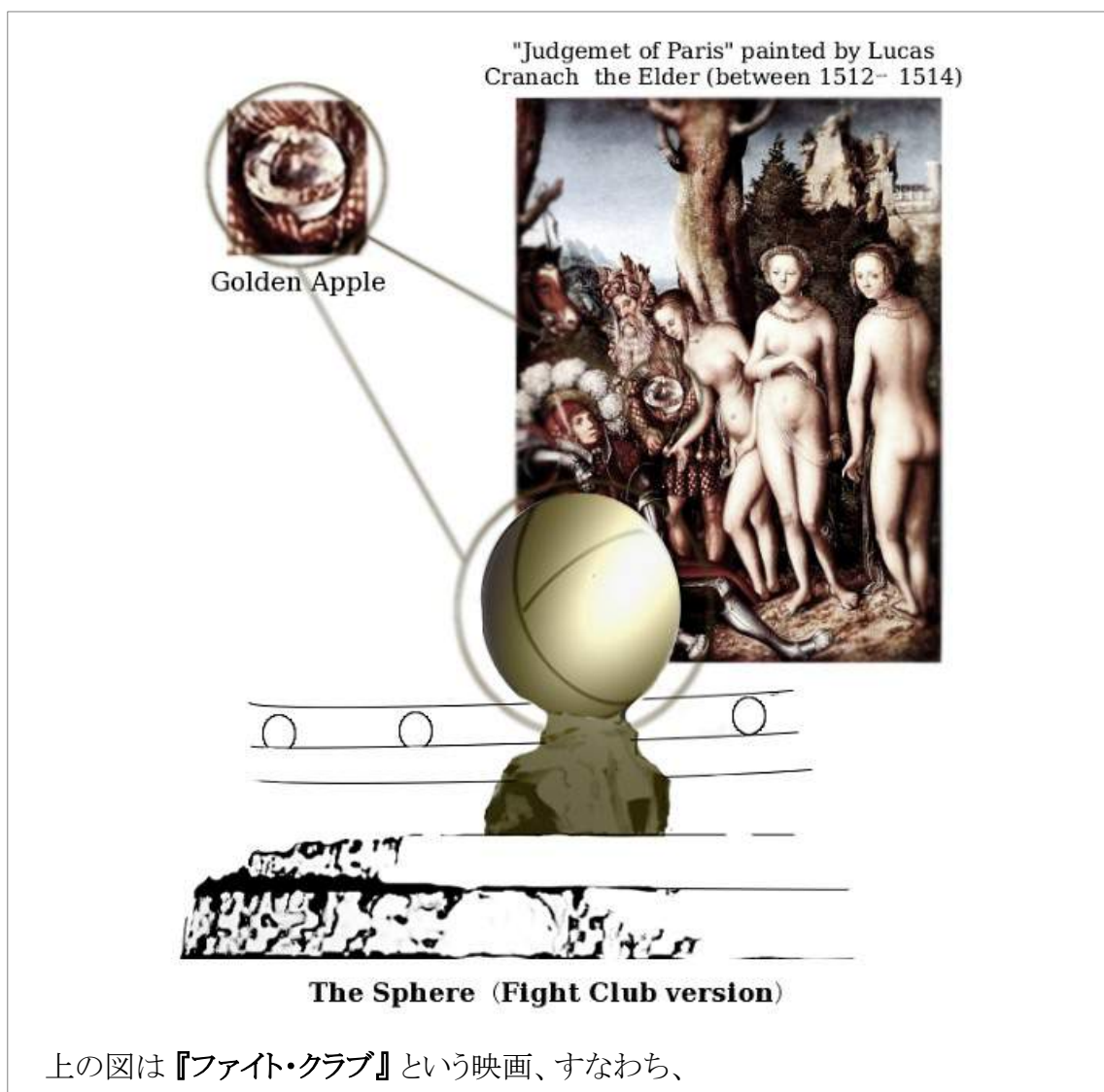
同図にての上の段の図像らは、(繰り返すまでもないことか)、とは思うが、賢者の石の寓意的似姿にまつわる図を挙げたものらとなり、同図の下の段のそれについては

[北欧神話にあつての黄金の林檎を管掌する女神イドゥン(および彼女と彼女の管掌する黄金の林檎を巨人との取引の具とした北欧神話悪神ロプトことロキ)を挙げた図として本稿の先の段、[出典\(Source\)紹介の部 63\(3\)](#)で挙げた図を再掲したもの]となる。

ここまでにて

【ジョジョの奇妙な冒険にての予見描写(中央にて一つ目と結びつく911を配し左右に月と太陽を配するとの構図の部にて現われている(と世間にあつての一部でも語られている予見描写))】 ↔ (フリーメーソン象徴主義・錬金術象徴主義との視覚的相関関係) ↔ 【賢者の石の似姿にまつわる図像】 ↔ (アトランテーの名を冠する錬金術寓意を含む書物との視覚的接合性による接点) ↔ 【黄金の林檎】

との関係性について、(多重的なる関係性の所在を示すべくも図を複数挙げながら)、摘示なさんとしてきたわけであるが、「黄金の林檎」とくれば、一さらに後の段でも他例を挙げる所存であるが— 本稿にて911の事件の予見描写と関わっているとのことを訴求してきたものとなる。すなわち、911の予見描写作品としての側面を多重的に含む作品『ジ・イルミナタス・トリロジー』に副題レベルで用いられているのがそれ(黄金の林檎)となると解されることの訴求に注力し(出典(Source)紹介の部37から出典(Source)紹介の部37-5以降の段にての話となる)、同文に多重的なるかたちで「ワールド・トレード・センターでの複数ビル倒壊事件に関する事前言及作品」としての特質を帯びているとの映画『ファイト・クラブ』に登場してきている〔映画の中での爆破対象としての)ツインタワー敷設オブジェたるスフィアのイミテーション〕からしてルネサンス期絵画にての黄金の林檎の描写と重なるようになっていること、そういったことの指し示しに注力してきたとの経緯がある。一尚、本稿にては前半部、出典(Source)紹介の部37-4以降の段よりニューヨークそのものがかかして「黄金の林檎」関連の事物と記号論的に結びつくか、とのことについて「も」言及なしははじめてい—。



[ワールド・トレード・センター (と暗示的に何度も何度もワンカットで描写される場) にての連続ビル爆破倒壊に向けて話が進んでいくとの事前言及映画 — ワールド・トレード・センターにて計 7 棟のビル (ツインタワーこと 1WTC および 2WTC を中心に 7WTC までのビルら) が崩れ落ちていくことになったことに関する事前言及映画 —]

としての特質について本稿にて詳説を加えてきたとの同映画作品にあって登場する、

[フィクションならぬ現実世界でのツインタワーの間に設置されていたオブジェ、**The Sphere ザ・スフィア**) の映画版イミテーション]

の似姿を再現画として挙げ、また、その映画版イミテーション・オブジェ が黄金の林檎の描写形態と似通っているものであることを示すルネサンス期絵画 (画家ルーカス・クラナッハ・エルダーによる黄金の林檎を描いての『ジャッジメント・オブ・パリ』との画題の絵画) を挙げもしている図となる — 本稿にて同様のことを訴求すべくも何度も取り上げてきたところの図となる — (その点、映画『ファイト・クラブ』がいかような意味で予見映画となっているのか、また、同作が ([映画に認められるツインタワー敷設オブジェイミテーション] と [黄金の林檎] の関係性も含めて) いかような悪質な寓意で溢れた映画なのか、そうしたことらについての網羅的解説は本稿にての **出典 (Source) 紹介の部 101**、**出典 (Source) 紹介の部 102** から **出典 (Source) 紹介の部 102 (9)**、**出典 (Source) 紹介の部 103** から **出典 (Source) 紹介の部 103 (6)**、**出典 (Source) 紹介の部 104**、**出典 (Source) 紹介の部 105** を包摂する部位、文字数にして (ワープロソフトの文字カウント機能を用いて測定したところ) 15 万字以上を割いての部位にて仔細に呈示しているので、理解が及んでいないとの向きはそちらを「まずもって」参照いただきたいものである)。

ここまでの内容をきちんと把握なしていれば、理解できようことか、とは思うが、指し示したきことは要するに、

「漫画『ジョジョの奇妙な冒険』の予見描写は — 作者が「考えずに (問題となる部を) 描写していた」と公式に述べていようと — 複雑な寓意と接合関係を呈している。具体的には欧州にてのフリーメーソン象徴主義、そして、錬金術における象徴主義との接合関係を呈している。そして、その接合関係から **【「他の」多重的なる意味での 911 の予見文物】** のこと「も」が浮かび上がってくるように「できあがっている」」

とのことである (: またもってして述べるが、ここでは **【錬金術象徴体系における黄金の林檎】** のことを引き合いに出したわけであるが、その **【黄金の林檎】** が別の側面「でも」『ジョジョの奇妙な冒険』の問題となる描写と関わっているとのことがある — そのことについては後にての段で詳述する — 。そこに見る **【黄金の林檎】** とのこと述べれば、本稿にて従前、そのことを入念に示してきたように相互に結びつくようになっているとの **【911 の予見事物】** と **【ブラックホール生成可能性が取り沙汰されるに至った加速器実験】** を繋ぎ合わせる留め金たる存在となってもいる — **【911 の予見事物】** の中には **【黄金の林檎】** と結びつくものが含まれており、それらにはブラックホール関連トピックと結びつくものらが含まれている (そして、それらの間には相互に繋がり合いがみとめられる)。他面、**【ブラックホール生成可能性が取り沙汰されるに至った加速器実験】** については黄金の林檎の在処を把握すると伝承が語り継ぐ巨人アトラスの名前を冠する検出器 ATLAS (運営実験グループ) によってブラックホール生成可能性が模索さ

れることにもなった、その際、【黄金の林檎の園】(ヘスペリデスの園)にも一部欧州人に歴年、仮託されてきたアトランティス(海中に没して滅んだとプラトン古典に伝わる古の陸塊)の名を冠するイベント・ディスプレイ・ウェア ATLANTIS によるブラックホール生成イベント確認が予想されてきたといったこともある(本稿にての【出典(Source)紹介の部 35】や【出典(Source)紹介の部 36(2)】といった部にて解説を加えていることである)——)。

(:尚、ここでの長くもなつての補足の部 — ■補足 1 から ■補足 3 と分けしての補足の部 — を終えた段階でその方向性の指し示しをさらにもつてなす所存であるとのこととして本稿筆者は「漫画『ジョジョの奇妙な冒険』に見る[911の予見的描写]それ自体が【黄金の林檎の同等物】と【爆破】とを結びつけているもの】ですらある」(神話伝承に詳しくない普通人にはまずもつて気付けるわけもないであろうとのことであるが、具体的にはこれはこうでこうであるとの式で同じくものことについては後の段にて詳述する) とのことを非常に重んじている)

■補足 3

先に問題視したところの、

【漫画『ジョジョの奇妙な冒険』の予見描写と [メーソンとのシンボリズム] の間に認められる目立っての連続性】(共に左右中空に[月]と[太陽]を配し、中央部中空に[一目]を配するが如きものらの間に認められる連続性を「目立っていない」というのならば、そうとらえればいいが、筆者はそういう見方はしていない)

についてであるが、それは

【天国への梯子(はしご)】(こと [ヤコブの梯子; ジェイコブズ・ラダー])

というものを巡る連結関係「とも」述べられる。

その点、 —それがここにて補足したき第三の点に関わるからこそそうもするのだが— [ヤコブの梯子]とは何かについて基本的なること、目に付くところの世間的解説のされようも挙げておく。

(以下、和文ウィキペディア[ヤコブの梯子]項目より極々端的なる引用をなすとして)

[旧約聖書の創世記 28 章 12 節でヤコブが夢に見た、天使が上り下りしている、天から地まで至る梯子、あるいは階段]

(以上が聖書それ自体にのみ典拠を求めれば、ワン・センテンスで話が終わってしまうとの[ヤコブの梯子]の説明となる)

フリーメーソンには上記のヤコブの梯子、聖書にては創世記 28 章 12 節の一文ぐらいにしか見受けられないとのヤコブの梯子 —天国と地上を行き来するための梯子(はしご)— を自分達のシンボルにて多用するとの風潮がある。下にて再掲のシンボル画(フリーメーソンの入門位階、エンタード・アプレンティスこと徒弟位階にて用いられるトレーシング・ボード画)の中央にては梯子が配されていることはお分かりいただけることかとは思うが、そちらが[ヤコブの梯子]である。



Moon



Eye
(single eye)



Sun



Jacob's Ladder



そうしたフリーメイソンにあつてのヤコブの梯子の使用については当のフリーメイソン(の宣伝要員といった按配の論客) 自体が国内にて邦訳されている著作にあつて次のように述べているところである。

(直下、最近になって邦訳された著作としての Robert Lomas (ロバート・ロマス/多くの出鱈目表記を含むとの「文献的事実に依拠せず」の) 似非歴史分析を世に出してきたとのことが知られていること、先述しもしたメイソン) の手になる THE SECRET POWER OF MASONIC SYMBOLS 邦題『フリーメイソンシンボル事典』(邦訳版版元は学習研究社) にての 256 ページよりの引用をなすとして)

第1階級のトレーシング・ボードは、新入りメイソンに<クラフト>の哲学的見通しを示す。ロッジの市松紋様の床は、光と闇とが互いに相手を取り囲んでいる。この床が遠く伸びて空と出逢う。その空は次に昼と夜に分かれる。北東隅にある太陽は昼を司り、未加工の切石を照らしている。それは美の柱の陰にある。北西隅にある月は夜を司り、その知識の光が完璧な切石を照らしている。…(中略) …祭壇はヤコブの梯子の基盤を支えており、この梯子は東の空に昇る輝ける明けの明星に達している(以下略)

(引用部はここまでとしておく —※—)

(※尚、表記引用部ではヤコブの梯子が向かうトレーシング・ボード構図にあつて中央に配されているのが[明けの明星](金星)であるとの書かれようがなされているのだが、メイソン象徴主

義にあつては柱ら 一時にヤキン Jachin とボアズ Boaz の柱であり、時に[力][美][智恵]の三つの柱ら (pillars of Wisdom, Strength, and Beauty とされるものら) — の間にあつて配されるそれは[万物を見通す眼]にして [太陽ないしシリウスの体現存在としてのブレイジング・スター]であると別の形容がなされることもある 一同じくものことに関しては本稿にての **出典** (Source) 紹介の部 105 の部、極めて解説が長くもなっている同出典紹介部にて挙げたアルバート・パイク著作 *Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry* 『古代より連綿と続く認証されしフリーメーソンのスコットランド位階の徳義と教義』(とでも訳すべき著作) にあつての XXV.KNIGHT OF THE BRAZEN SERPENT の部の記述よりの引用をなして、その旨、先に解説していたところでもある —)



以上、述べてきたようなシンボルに関するフリーメーソンらの主張がなされているのであるから、連続性問題、不快なる予告描写にまつわる連続性問題はヤコブの梯子、ジェイコブズ・ラダーにまつわるもの「でも」と指摘するのである(:さも詳しくは指摘なしてはいるが、断っておくも、筆者はフリーメーソンの成員などでは断じてない。 [真に正しいとありたいと欲する者] が【狂信的なカルト(国家寄生カルトの類でもいい)の如き人的紐帯に囚われているような「相応の」手合いら — 外面はともかくも内面は恐ろしく空虚、空っぽであり、個人に対して大の大人が集団で人権侵害、尊厳の蹂躪を(彼らの下らぬドグマに基づいて)なすといったようなことす

ら平然と是認するような何でもするとの者達の「相応の」身内—】と一味同仁と見られたがるだろうか？ 悟性が備わっている、語るに値するとのレベルの人間ならばそうは見られたくはないとお分かりいただけるであろう。それと同様の理由として自分がメーソンなどではないと強くこの場にて断っておく — I swear, I am not a member of Freemason.—)。

ここまできたところで述べるが、フリーメーソン・シンボリズム体系ではヤキンとボアズの柱の間に据え置かれるとの天国への階梯(かいてい)、

【ヤコブの梯子(はしご)】

については

[[操り人形らといった**按配の相応の存在**]であるとも忌々しくも表せざるをえぬと筆者がとらえている**多くの人間が何も自分の頭で考えずに向かっていく(いざなわれていく)方向性**]

をよくも示しているとの側面が

【いろいろなところ】

で見受けられるとのことが「ある」。

(:[ヤコブの梯子]にまつわっては本稿を後付けで付すこととしたウェブサイトらのうちの
一項目では次のようなことをも随分前より指摘せんとしてきた。

⇒

「【ヤキンとボアズの柱の柱】(および【ジェイコブズ・ラダー】)との記号論的・視覚的相似形が「**どういうわけなのか**」【マンハッタン計画にて用いられていた計画徽章(きしょう)】らにも目立って見受けられ、また、**歴史的事実として**そういったかぐわかしいシンボルを掲げてのマンハッタン計画の結果、具現化した日本への原爆投下、その投下地を鳥瞰図形式で眺めた際の**地理的位置関係もが【ヤキンとボアズの柱】(および【ジェイコブズ・ラダー】)**と「これは、」との**按配で** —(不謹慎な譬(たと)えかもしれないが、不快さ・驚かされ度合いとのことで述べれば、**巨大なゴキブリがいきなり眼前視界に入ってきたような「うわ。」との按配で**)— **類似形を具現化させている**」。

話柄としての奇矯性はともかくも、[そういうこと]で溢れているのがこの世界であると指摘することにやぶさかではないのが愚拙、筆者という人間である —※ヤキンとボアズ、そして、原爆投下地とマンハッタン計画シンボリズムの関係性についてよりもって詳しくは(本稿がそこでの指し示しの出典網羅的紹介文書との役割をも兼ねているとの文書ともなるのだが) PDF形式文書『911の儀式性詳説 起こりうべき災厄の予測』(自身の常識方向での動きの合間を縫って取り急ぎ作成したこともありもし、「[赤色巨星]をして[赤色矮星]と表記し間違える」などとの「**あまりにも不手際が際立っての誤記**」を含み、その意で不完全なる側面も伴うが、他面で多くのことの指し示しに注力なしているとの解説文書) などの内容(従前よりの当方由来のウェブサイト公開ファイルの内容)を参照いただければ、とも思う—)

それにつき、天国の階梯、【ヤコブの梯子】との絡みでは、である。『ジョジョの奇妙な冒険』そのものに関わるところとして、

「補足にあつての話として 「行き過ぎたこと」を申し述べるが、」

との留保条件付きの話であると事前に断ったうえで筆者が『これは、』と思うところの指摘をこれよりなしておきたい —以降、ひとまとめにしてのこととして、である— 。

(【ヤコブの梯子】が国内著名漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』(にあつての予見描写として知られるもの)との絡みでなぜもってして問題となるのかについての —「補足にあつての話として」行き過ぎたこと」を申し述べるが、」と断ったうえでの— ひとまとめにしての指摘として)

ここで最初に申し述べるが Jacob's Ladder、【ヤコブの梯子(はしご)】とは

[天国への梯子]

となる(先だって旧約聖書創世記 28 章 12 節に見る【天使が天から地上に向けて上り下りするための階段ないし梯子(はしご)】との言及のされようについて解説したとおりである)。

さて、英語で表すところの [天国への梯子] とのことであるとのことであれば、単純に字面の問題として、

[ステアウェイ・トゥ・ヘブン] ([天国への階段])

「とも」表せようものである (※ そうした記述は媒体の易変性 —うつろいやすさ— がゆえにこれより消除されるかもしれないが、「現行にあつては」英文 Wikipedia [Stairway to Heaven (disambiguation)] と題されての項目 —訳すれば、[ステアウェイ・トゥー・ヘブン(曖昧さ回避)] 項目とでもなるうか— にあつて “**Jacob's Ladder is a stairway to heaven** described in the Book of Genesis which the biblical patriarch Jacob envisions during his flight from his brother Esau.” 「**ヤコブの梯子**は族長ヤコブが彼の兄エサウからの逃亡の折に幻視した旧約聖書創世記にあつて叙述される**[ステアウェイ・トゥー・ヘブン(天国への階段)]**である」との表記、ヤコブの梯子をして[天国の階段(ステアウェイ・トゥ・ヘブン)]とする表記が認められるところでもある)。

そこに見る天国への階段、ステアウェイ・トゥ・ヘブンの名を冠する極めて有名な曲がある。[かなりの洋楽通ならず]ともの[大概の音楽好き]ならば知っていることか、と受け取れる、それぐらいの按配で有名な英国バンド、ツェップこと Led Zeppelin の代表曲、独特なる錆びのパートで極めてよく知られた、

Stairway to Heaven (1971 年リリース)

という曲がそれである (:最初に述べておくが、同曲の [曲名] (ステアウェイ・トゥ・ヘブン) がここまでその特異なる性質について論じてきたし、さらにそれについて解説することになるとの『ジョジョの奇妙な冒険』という漫画作品にあつての相応の描写、本稿筆者が『これは意味深く、また、危険なおいを感じさせるところである』と見ている部分 —作中主人公らを皆殺しにする、のみならず、作中世界そのものを不可逆的に根本破壊するとの部分— に(作品設定に濃厚に影響を与えているとの式で)登場を見ているため、そちら [ステアウェイ・トゥー・ヘブン] との歌曲のことを持ち出している)。

日本ではあまり知られていないこととなるが (国内では洋楽好きが持ち上げてばかりの曲となるが)、同曲、[ヤコブの梯子] がそうしたものともなる [天国への階段] との言葉を曲名に冠しての、

[ステアウェイ・トゥ・ヘブン]

については逆再生なすと [悪魔の王への礼賛] のメッセージが具現化していることが分かるとの "説" が音声データ伴って流布されている、そういう意味で実にもって悪名高い曲となっている (:冗談であろう? そう思われるかもしれないが、実際にそういう悪評が有名英国バンド、レッド・ツェッペリンの代表曲『ステアウェイ・トゥ・ヘブン』には伴ってもおり、これより解説するところとしてそれが —引用なして指し示すこととするも— 米国での [逆再生メッセージ混入に対する法規制] の流れにまで影響を与えたとのことが「現実」にある —それについては「そうしなければフェアではなからう」との観点で[否定]の方向での語られようについて「も」引用を通じて紹介なすこととするが、当のバンド、レッド・ツェッペリン自体は「俺たちはそういうことをやっていない、こじつけにすぎない」と強調しているとのことがある—)。

その点、レッド・ツェッペリン Led Zeppelin の [ステアウェイ・トゥ・ヘブン] に関しては

[懸命に耳を傾ければあの調べはついに我らに訪れる]

などとのフレーズを含むとの曲である中で[バックマスキング]と呼ばれる手法を用いての[悪魔を礼賛するとの逆再生メッセージ混入疑惑]が伴っているものとなり、については、If there's a bustle in your hedgerow, don't be alarmed now... (直訳すれば)「君の生け垣にせわしき音が分け入ってくるっていうなら、どうかびっくりしないでおくれよ」との部を逆再生すると Here's to my sweet Satan I sing because I live with Satan. (直訳すれば)「きたれ優しき(親愛なる)サタンよ」「我はサタンと共にあるがゆえに唄う」との音声があぶりだされてくるとの疑惑 [suspicion]が取り沙汰されてきたとの経緯がある(目立っては八〇年代のことよりである)。

そして、そちら疑惑が

[米国にての逆再生メッセージ混入に対する(州法での)法規制を巡る一悶着]

にまで発展したとのことがある。

同点に関して[目に付くところの欧米圏での理解のされよう]を英文 Wikipedia の曲の紹介項目などから以下、挙げておく。

(直下、まずもって英文 Wikipedia [Stairway to Heaven] 項目にあつての Allegation of backward masking[バックマスク行為に関する申し立て]の節よりの引用をなすとして)

In a January 1982 television program on the Trinity Broadcasting Network hosted by Paul Crouch, it was alleged that hidden messages were contained in many popular rock songs through a technique called backward masking. One example of such hidden messages that was prominently cited was in "Stairway to Heaven." The alleged message, which occurs during the middle section of the song ("If there's a bustle in your hedgerow, don't be alarmed now...") when played backward, was purported to contain the Satanic references "Here's to my sweet Satan" and "I sing because I live with Satan." Following the claims made in the television program, California assemblyman Phil Wyman proposed a state law that would require warning labels on records containing backward masking. In April 1982, the Consumer Protection and Toxic Materials Committee of the California State Assembly held a hearing on backward masking in popular music, during which "Stairway to Heaven" was played backward. During the hearing, William Yarroll, a self-described "neuroscientific researcher," claimed that backward messages could be deciphered by the human brain.[. . .] The band itself has for the most part ignored such claims. In response to the allegations, Swan Song Records issued the statement: "Our turntables only play in one direction — forwards." Led Zeppelin audio engineer Eddie Kramer called the allegations "totally and utterly ridiculous. Why would they want to spend so much studio time doing something so dumb?" Robert Plant expressed frustration with the accusations in a 1983 interview in Musician magazine: "To me it's very sad, because 'Stairway to Heaven' was written with every best intention, and as far as reversing tapes and putting messages on the end, that's not my idea of making music."

(補ってももの訳をなすとして)

「1982年1月放映のポール・クローチにて司会なされてのトリニティ・ブロードキャスティング・ネットワークのテレビ番組にて「バック・マスキングと呼ばれるテクニックでもって隠されたメッセージがさまざまポピュラー・ロックナンバーに混入されている」との主張がなされた。そのような[隠されたメッセージの一例]として際立って引き合いに出されたのが Stairway to Heaven のそれである(との言及が番組内でなされた)。主張されるところのメッセージとは曲の中程のパートにて見受けられるとのもので "If there's a bustle in your hedgerow, don't be

alarmed now..."「君の生け垣にせわしき音が分け入ってくるっていうなら、どうかびっくりしないでおくれよ」との部位を逆再生すると " Here's to my sweet Satan" そして " I sing because I live with Satan."「きたれ優しき(親愛なる)サタンよ」「我はサタンと共にあるがゆえに唄う」との悪魔主義的言及があらわになってくるとのものであった。同主張がテレビ番組内でなされた後のこととして、カリフォルニア州議員のフィル・ワイマンは逆再生を含むレコードには警告ラベルを貼ることを要求すべしとの州法(の案)を提出することになった。1982年4月、カリフォルニア州議会の消費者保護・毒性物質委員会は大衆音楽にあつての逆再生(バックマスキング)にまつわる聴聞会を開き、そこにてはステアウェイ・トゥ・ヘブンが逆再生されて示された。その公聴会の合間にあつて自称としての神経科学調査者とのウィリアム・ヤロルという人物が「反対方向より入れ込まれてのメッセージ」が人間の脳によって解読されるものであるとの主張をなしていた。…(中略)… バンド(レッド・ツェッペリン)自体はそのような主張らを大概の場合、無視していた。そのような主張に対して、スワンソング・レコード社は次のような声明を發した。[当社ターンテーブル(レコードプレイヤー)は前方方向にしか演奏なせないものである]。また、レッド・ツェッペリンのレコーディング・エンジニア(バンドと協働する音響技術者)であるエディ・クレイマーはそのような主張に対して、
[全般的かつ全くもって馬鹿げたものだ。[そんな馬鹿げたこと something so dumb]をなすためにスタジオでの時間をだれが浪費しようっていうのか?]
との声明を發した (「長くもなつての」訳注として：ただし、レッド・ツェッペリンと組んで仕事もしているとの音響技術者にしてプロデューサーたる同エディ・クレイマー Eddie Kramer の上記主張には首をかしげるようなところがあると「私的には」見ている。彼エディ・クレイマーの前歴からそうも述べる。その点、「有名な」音響技術者にして音楽プロデューサーとしても知られている同エディ・クレイマーが組んで仕事をやってきたバンドにはレッド・ツェッペリン以外に[キッス]というニューヨークから伸びてきたバンドが含まれてもいる(和文ウィキペディア[エディ・クレイマー]項目にも現行、解説されていることである)。同キッス、KissのSSの部分ナチス親衛隊SSのSS 徽章のようなデザイン —[重ね稲妻]とも表される特徴的なルーン文字由来のSを配してのデザイン— となっているとの Heavy Metal Band たるキッスは[独特なる白塗りの似姿 —日本音楽シーンにも「輸入」されたアレである—]で地獄より熱い、[ホッター・ザン・ヘル](邦題：地獄の叫び)といったアルバムをリリースしているとの「そちら系の」色を([パフォーマンス]と銘打って)前面に出しているとのバンドとなりもする。そして、エディ・クレイマーは(和文ウィキペディア[エディ・クレイマー]項目程度のものにも記されているところとして)そのキッスの[相応の悪魔主義的色彩(表向きには商業的な意味での装飾としての悪魔主義カラー)を前面に出しての音楽性]が際立つ Alive!というライブ・アルバムのプロデュースをなしもしている。エディ・クレイマーが「誰が悪魔主義礼讃のバックマスキングにスタジオの時間を使うのか」などとの批判的声明を出しているとのことである逆再生メッセージ混入疑惑が問題になる「前の」1975年のこととして、である(ちなみにレッド・ツェッペリンのステアウェイ・トゥ・ヘブンこと[天国への階段]の英国リリース時期は1971年であり、そのバック・マスキングによる性質の悪いメッセージ混入疑惑が一般に知られるようになったのは上にてのウィキペディア記述に認められるように「1982年からとなり、エディ・クレイマーがキッスのプロデュースにいたしんでいたのはその合間のことである)。くだらぬこと、「ださい」と(死語一語にて)人によってはせせら笑うようなことを延々取り上げるようではあるのだが、より具体的にはエディ・クレイマーが1975年にプロデュースをなし

いるとのバンド、キスの *Alive!* というライブ・アルバムは日本語で [地獄の狂獣 キス・ライブ] といった訳を振られてしまうような音楽性のアルバムとなっていることが誠実性の程とのことで問題たりうるように「見える」とのことがある(いいだろうか、おもわず失笑したくなるようなところとして [地獄の狂獣 キス・ライブ] である)。となれば、だ。くどいが、キスをプロデュースしていたエディ・クレイマーに関しては(直近、英文 Wikipedia に認められるように)「something so dumb サムシング・ソー・ダム(「何をされてもダメテンよろしくの馬鹿げたこと」とでも訳せようか)なぞのために誰がスタジオでの時間を浪費しようっていうんだ?」と述べながらも、相応のそちら方向性を「明示して」売りにしているバンド・キスと「同様の」もののプロデュースに [密行性の音楽性] に関わるところで関与していたかもしれないし、といった批判をなされうるようなエディ・クレイマーには [音源] から実際にそういう疑惑がかけられているレッド・ツェッペリンのありうべきかもしれないやりようを「馬鹿げたこと」との口上で否定する資格はないようにも見えてしまうということがある。尚、訳注というより余談染みた話になってしまっているなかで [ありうべき落ち] の問題にも言及しておくが、作家ジョージ・オーウェルの『一九八四』というディストピア小説(監獄小説)にあつては [知能・知性の閃きが奪われ、また、魂の尊厳をも奪われているといった風情の存在へと成り下がった、精神性もなく、また、真に思考することもないとの家畜のような大衆] に対してはまったくもって意味の無い、[馬草] のような「宣撫」のためだけの音楽が「機械にてランダムに歌詞が振られて」供給されているとの世界が描かれている(一九四〇年代からしてそういう小説が出ていた。ちなみに [マルコフ連鎖方式] という数学理論を応用しての機序を用いれば、確かに意味がありそうにも見える、神秘的託宣のようにも見えるとの文章をランダムの入力文字列よりこれまたランダムに再構築できるようになっている。筆者も半ばもの遊び心からその性能について試してみたことがあるのだが、マルコフ連鎖方式にあつてのそのことを実感できるフリーソフトウェアも存在している)。そうしたことより振り返って見て、[産業] として成り立っているポピュラー・ミュージックというのはどういふものか。そこに一九四〇年代の監獄社会諷刺小説『一九八四』に見られる [機械的機序によってランダムにアウトプットされてくる文章を歌詞として利用しての大衆を「感覚的に」宣撫するためだけの音楽]、馬草としての音楽以上の意味性・メッセージ性を伴った「アーティスト」(と音楽産業の人間が呼びならわしているタレントら)由来の歌曲というやつがいかほどにあるというのか。音楽は社会批評の媒質などではない、[満ち足りた境地でリズム感のみを愉しむもの] であると割り切ってみればそれはそれでいいかもしれない。しかし、メッセージ性との観点で見れば、(それがあのように振る舞われるから鼻につくわけだが)国内の主流歌曲はまったくもってひどいものであると見ている。閑話休題)。

(長くもなった注釈の部をはさんだうえで引用部に対する訳を続けるとして)

ロバート・プラント(レッド・ツェッペリンのヴォーカル)は『ミュージシャン』誌(かつて存在していた米国音楽誌)にあつての 1983 年時でのインタビューで [僕にとってそういう話 —レッド・ツェッペリンのステアウェイ・トゥ・ヘブンに逆再生メッセージ混入疑惑が取り沙汰されていること— があるのはとても哀しいことだね。っていうのも、同曲は全面的な意味での「最良の」意図でもってつくりあげたものなんだから。テープを反対にして終わりにメッセージを混入するなんてのは曲作りをするうえでの僕の発想じゃないんだよ]

と表している。

(以上をもってして英文 Wikipedia [*Stairway to Heaven*] 項目にあつての *Allegation of backward masking* [バックマスク行為に関する申し立て] の節よりの引用とした)

次いで、述べるが、バックマスキングという手法で楽曲に逆再生するメッセージを入れ込むことが「特異なること」か、と述べれば、否、それは決して特異なることではない、むしろ、ビートルズやりように嚆矢を見ての「歴(れっき)としたレコーディング手法」であるとされていることがあることについても —世間一般の目につくところの言及のされようを紹介するとの意図で— 英文 Wikipedia などの記載内容を掻い摘まんで引いておくこととする。

(直下、極めて文量多き項目たる英文 Wikipedia「Backmasking」項目にあつての記載内容より「掻い摘まんでの」引用をなすとして)

Backmasking is a recording technique in which a sound or message is recorded backward onto a track that is meant to be played forward. Backmasking is a deliberate process, whereas a message found through phonetic reversal may be unintentional.

Backmasking was popularised by the Beatles, who used backward instrumentation on their 1966 album Revolver. Artists have since used backmasking for artistic, comedic and satiric effect, on both analogue and digital recordings. The technique has also been used to censor words or phrases for "clean" releases of explicit songs. Backmasking has been a controversial topic in the United States since the 1980s, when allegations from Christian groups of its use for Satanic purposes were made against prominent rock musicians, leading to record-burning protests and proposed anti-backmasking legislation by state and federal governments. [. . .] The Beatles, who incorporated the techniques of concrete into their recordings, were responsible for popularizing the concept of backmasking. **Singer John Lennon and producer George Martin both claimed they discovered the backward recording technique during the recording of 1966's Revolver; specifically the album tracks "Tomorrow Never Knows" and "I'm Only Sleeping", and the single "Rain".** Lennon stated that, while under the influence of marijuana, he accidentally played the tapes for "Rain" in reverse, and enjoyed the sound. The following day he shared the results with the other Beatles, and the effect was used first in the guitar solo for "Tomorrow Never Knows", and later in the coda of "Rain". [. . .] In 1981, Christian DJ Michael Mills began stating on Christian radio programs that Led Zeppelin's "Stairway to Heaven" contained hidden messages that were heard by the subconscious. In early 1982, the Trinity Broadcasting Network's Paul Crouch hosted a show with self-described neuroscientist William Yarroll, who argued that rock stars were cooperating with the Church of Satan to place hidden subliminal messages on records. [. . .] One result of the furore was the firing of five radio DJs who had encouraged listeners to search for backward messages in their record collections. **A more serious consequence was legislation by the state governments of Arkansas and California. The 1983 California bill was introduced to prevent backmasking that "can manipulate our behavior without our knowledge or consent and turn us into disciples of the Antichrist".** Involved in the discussion on the bill was a California State Assembly Consumer Protection and Toxic Materials Committee hearing, during which "Stairway to Heaven" was played backwards, and William Yarroll testified. The successful bill made the distribution of records with undeclared backmasking an invasion of privacy for which the distributor could be sued. **The Arkansas law passed unanimously in 1983, referenced albums by The Beatles, Pink Floyd, Electric Light Orchestra, Queen and Styx, and mandated that records with backmasking include a warning sticker: "Warning: This record contains backward masking which may be perceptible at a subliminal level when the record is played forward."** **However, the bill was returned to the state senate by Governor Bill Clinton and defeated.** [. . .] **In the 1973 film The Exorcist, a tape of noises from the**

possessed victim was discovered to contain a message when the tape was played backwards. This scene might have inspired subsequent copycat musical effects. Although the Satanic backmasking controversy involved mainly classic rock songs, whose authors denied any intent to promote Satanism, **backmasking has been used by heavy metal bands to deliberately insert messages in their lyrics or imagery. Bands have utilized Satanic imagery for commercial reasons.** For example, thrash metal band Slayer included at the start of the band's 1985 album Hell Awaits a deep backmasked voice chanting "Join Us" over and over. However, Slayer vocalist Tom Araya states that the band's use of Satanic imagery was "solely for effect".

(以下、上記引用部に対する「補いもしながらの」拙訳として)

「バックマスキングは音声ないしメッセージが[前方向への再生がなされるとのことが意図されたトラック]に対して後ろ向きで録音される手法である。音声反転にて見付けられるとのメッセージについては意図的ではないとのものがある一方でのこととして同バックマスキングは周到なるもの「とも」なっている。**バックマスキング(という手法)は彼らの1966年のアルバムである『リヴォルバー』にて反対方向でのレコーディングの考案なしたとのビートルズにて大衆化を見た。アーティストらは芸術的・喜劇的・風刺的效果を狙っての理由からアナログおよびデジタルの録音過程双方にてバックマスキングを用いる。同テクニックは露骨・あからさまな歌曲の「クリーンな」リリースのため、言葉らやフレーズを(自主)規制するように隠す意図で用いられてきたものでもある。** バックマスキングは米国では1980年代、キリスト教団体によって悪魔的意図での使用がなされているとの著名なる音楽家に対する申し立てがなされたとのものとなり、(それがゆえ)、レコード焼却抗議や州および連邦政府による反バックマスキング規制提案につながったとのかたちで80年代より物議を醸す話題となっている。…(中略)… concrète との音楽手法を自分達の音楽レコーディングに取り込んだビートルズはバックマスキングの手法の大衆化に一石を投じたバンドでもある。**歌手ジョン・レノンとプロデューサーのジョージ・マーティンの双方ともどもが1966年のアルバム、『リヴォルバー』のレコーディング中にて反対方向録音の技術を発見したと主張している。** 殊に、同アルバムのなかの『トゥモロー・ネバー・ノウ』『アイム・オンリー・スリーピング』『レイン』がそうした曲となる(訳注:『トゥモロー・ネバー・ノウ』『アイム・オンリー・スリーピング』『レイン』らにて逆回転式録音が用いられていることは日本でもよく知られている)。ジョン・レノンが述べていたところではマリファナの影響下で彼は偶然、『レイン』のテープを逆再生してしまい、その音を楽しんだ(がゆえにバックマスキング利用開始の契機がもたらされた)とのことになっている。翌日、レノンはビートルズの他の面々とそうした音源を分かち合い、ギターソロとしての『トゥモロー・ネバー・ノウ』および『レイン』にての末尾の部にて初めてバックマスキングの効果が用いられるに至ったとのことである。…(中略)… 1981年にあつて、キリスト教徒のDJたるミカエル・ミルズがキリスト教系ラジオ番組にてレッド・ツェッペリンの『ステアウェイ・トゥ・ヘブン』にて潜在意識に語りかけてくる隠されたメッセージが含まれているとの主張をなしはじめた。1982年の初期、トリニティー・ブロードキャスティング・ネットワークのポウル・クローチが[ロック・スターらがチャーチ・オブ・サタン(悪名高いアントン・ラヴェイという男に率いられてのパフォーマンス的悪魔主義伝道団体)とグルになってレコードに潜在意識に語りかけてくる潜在的メッセージを入れ込んで]との主張をなしもしていた自称神経科学者のウィリアム・ヤロールを交えてのショー番組を主催した (長くなるも、の訳注として: 尚、キリスト教の信徒らサイドよりの「他の」よりましなものに聞こえる主張 — christians' claim— としては「

back masking とは逆再生をなすことだが、悪魔主義信奉者「的」人物であったとの話も伝わる著名オカルティストのアレイスター・クロウリー Aleister Crowley の思想には「導師たらん者は「レコードを反対から聴く」などして事物を反対から見るように努めるべし」との主張が含まれていること（英文 Wikipedia [back masking] 項目にても “The backwards playing of records was advised as training for magicians by occultist Aleister Crowley, who suggested in his 1913 book Magick (Book 4) that an adept "train himself to think backwards by external means", one of which was to "listen to phonograph records, reversed."” との記述が認められるとおりで）を指摘し、そもレコード逆再生に言及していたアレイスター・クロウリーがバックマスキングを[1966年]に創始したと伝わるバンドであるビートルズの『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』という[1967年]初出のアルバムジャケット(といっても極めて多数の著名人がそこではお目見えしているとのものであるが)に登場を見ていること、また、レッド・ツェッペリンのジミー・ペイジが逆再生疑惑が浮上する「前」からクロウリーの別宅を購入する程にクロウリーの思潮に入れ込んでいたとのことが伝わっていることが逆再生の動機として考えられる」 とのそれなりの説得力ある主張も展開されている —※同点については英文ウィキペディアのバックマスキング関連の項目にて現行、十二分に記載されていないとのことだが、英文 Wikipedia の [Aleister Crowley] 項目にあつて記載されているところとして “Crowley also had a wider influence in British popular culture. He was included as one of the figures on the cover art of The Beatles' album Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band (1967), and his motto of " Do What Thou Wilt " was inscribed on the vinyl of Led Zeppelin's album Led Zeppelin III (1970). Jimmy Page, the guitarist and co-founder of 1970s rock band Led Zeppelin was fascinated by Crowley, and owned some of his clothing, manuscripts and ritual objects, and during the 1970s bought Boleskine House, which also appears in the band's movie The Song Remains the Same.” 「クロウリーはまた英国の大衆文化にあつて幅広い影響力を有している。彼クロウリーはビートルズの 1967 年のアルバム『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』のカバー・イラストレーションに描かれる人物らの一人となっており、彼クロウリーのモットーである Do What Thou Wilt「汝をしぼませるようなことをなせ」がレッド・ツェッペリンの 1970 年アルバム『レッド・ツェッペリン III』のビニール部にて刻み込まれていたとのことがあり、(またもつてして)、ロックバンドたるレッド・ツェッペリンのギタリストにして共同創始者の一人であるジミー・ペイジはクロウリーに眩惑されていたがゆえにクロウリーの衣装・文書・祭具のいくつかを所有し、1970 年代にあつて (クロウリーの居宅であつた)ボレスキン・ハウスを購入、同邸はバンドの『ザ・ソング・リメイズ・ザ・セイム』(という曲)のプロモーションムービーに登場を見ている」(訳を付しての引用部はここまでとする)との記述からそういう物言いがなされるだけの背景があることの一部が窺えるようになっている— 。尚、世の中には「アレイスター・クロウリーはサタニストの類ではない、ただのオカルティストであつて、そうしたいいようは中傷者らの物言いである」との申し分もあるようだが(英文 Wikipedia のクロウリー関連の項目でもそのようなことが書かれている)、コロゾン Choronzon という名が与えられての悪魔的存在を「自らに憑依させる」儀式を行う、「動物の生き血を儀式ですする」といった[馬鹿げたこと]をやっていたことで知られる男たるクロウリーの行いは少なくとも[理性の世界の人間]には「憑かれたような」暗闇の世界の住人、悪魔主義者と分類されるような類と同文同一のやりように見えるのは論を俟たないことか、とは思う —長くもなつての訳注はここまでとする—)。

(長くもなつた注釈の部をはさんで引用部に対する訳を続けるとして)

そうした(キリスト教の信者らが率先して広めたとの)熱狂的な風潮の一つの結果はリスナーにレコード・コレクションから逆再生メッセージを捜してみるようにと奨励したとの五人のラジオ DJらの解雇であった。より深刻な結果はアーカンサスとカリフォルニアの州政府による規制であった。1983年、カリフォルニア州にあって「我々の行為を知識および同意なくして操作しようものたりえ、我々を(キリスト教の影響力強き米国らしく)反キリストの門弟へと変えかねないとのバックマスキングは妨げるべし」との法案(可決されてアクト Act というかたちでの法令になる前の法案)が提出されたとのことがあった。同法案にまつわる議論に関わるとのかたちでカリフォルニア州議会消費者保護および毒性物質委員会はステアウェイ・トゥ・ヘブンが逆再生されるのを聞きもし、(先に言及の神経学者の)ウィリアム・ヤロールが証言をなした。成立のきざしを見せていた法案、そちらは「事前宣告無しのバックマスキングがなされているレコードの供給行為をなしたがゆえに訴えられることになったとの配給業者によるプライバシー侵害」と見做すようなものであった。アーカンサス州法とのことでは1983年に全会一致で「ビートルズ、ピンク・フロイド、エレクトリック・ライト・オーケストラ、クイーン、スティクス(らの著名バンド)によるアルバムらに言及、それらアルバムにそういうものであるとの警告ラベル —「警告:このレコードはレコードを前方方向に再生した場合でもサブミナル・レベルで知覚されうるとのバックワード・マスキングを含んでいます」と書いたステッカー— を貼れと要求するとの法令が通過を見たが、しかしながら、同法令は州知事であったビル・クリントンによって州の上院に差し戻され、そして、棄却を見た。…(中略)… 1973年の映画『エクソシスト』にては憑依された犠牲者に由来するテープのノイズ音が逆再生するとメッセージを含んでいるとのものになるとの発見がなされるとのものであった。このシーンが以降の音楽効果にあっての模倣行為者らを刺激したとも受け取れる。悪魔主義的なバック・マスキングがなされているとの論議はそれらの作成者らがサタニズムを推進する意図などを全否定しているとの古典的なロック・ソングを主として巻き込んでのものとなっていたのだが、他面、ヘヴィ・メタル系のバンドらはむしろ意図的に歌詞・イメージ像に(バックマスキング形式で)メッセージを挿入するとのことをなしはじめていた。(ヘヴィ・メタル系の)バンドらは悪魔主義的イメージを商業的目的で利用なしはじめていたのである。スラッシュメタルバンドのスレイヤーは1985年のバンド・アルバム『ヘル・アウェイツ』にての冒頭部にて「我々の仲間に加われ」と囁く低音での逆再生音声を何度も何度も繰り返すとのかたちで混入した。しかしながら、同バンド、スレイヤーのヴォーカリストであるトム・アラヤはバンドにての悪魔主義的イメージは「ただ単純に[効果]を企図してのものである」と述べている」

(以上、英文 Wikipedia「Backmasking」項目からの引用部訳とした)

世間一般で理解されているところとしてバックマスキングという音楽手法をとることが際立って困難なことでもなければ、その使用例も散見されるところ、上の引用部でもってご理解いただけたか、と思う(：尚、本稿ではレッド・ツェッペリンが「わざと」反対から聞くと悪魔の王への信仰を表明していると判断できる音声を自分達の楽曲『天国への階段』に入れたのかそうではないのか論ずることはなさない。上記引用部にて補足として記したレッド・ツェッペリンのギタリスト、ジミー・ペイジのやりよう(レコードの逆再生視聴の奨励をなしていたアレイスター・クローリーの邸宅を入手するなどのクローリー・マニア的なやりよう)からして「胡散臭いものである」ことは論ずるまでもないことか、とは思っているのであるが、否定の弁が連呼されている中でこのところ、しかも、我々人類の今後にとっては非本質的な話となるようところで意固地なる主張をなすことに意味性を感じないため、そうした疑惑[suspicion]の真偽について(紹介こそしはすれども)論ずることはなさない)。

ここで問題となろうと筆者が見ているのは80年代前半から目立ってその特性について「悪魔の王への礼賛を含むものである」

との話が —その真偽は別として— 米国にての規制州法の成立動向を推進したようなところとして『ステアウェイ・トゥ・ヘブン』(=天国への階段)という曲に伴っていること「それ自体」である。

80年代から相応の疑惑をかけられていたとの曲たる『ステアウェイ・トゥ・ヘブン』と同名の『ステアウェイ・トゥ・ヘブン』が『ジョジョの奇妙な冒険』という漫画作品にあって、

「既存世界全てを[重力]の作用で徹底改変する力学」(作中に見る[天国への道]を体現する力学)

と「目立って」結びつけられている —結局、同『ジョジョの奇妙な冒険』シリーズの正義の味方であった主人公らもその力学に巻き込まれて最終的に殺され、また、作中世界そのものも不可逆的に破壊されて別世界に移行するとのかたちで「目立って」結びつけられている— とのこをこの身、筆者は「それなりの理由あって」重んじているのである。

それにつき、ここまでの内容をよく理解して「いない」との向きは次のように思われることであろう。

『だから何だと言うのか。ただの漫画作品の粗筋にまつわる話だろう?そんなことを細々と話そうとするなど、「相応の」人間のやることだ』

以上のありうべき心中を慮って(繰り返しを含んでの)(再)訴求をなす。

第一に、『ジョジョの奇妙な冒険』という作品には[911の予見描写と世間で語られるところのもの]

が含まれており、に関しては、(奇妙奇怪でならないことだが)[文献的事実]の問題として領けるところが多い —尚、『ジョジョの奇妙な冒険』にあっての奇怪な先覚的描写、すなわち、【180度時針を回転させると911という数値と結びつく時刻(それはツインタワーのノースタワーの方が崩落した時刻でもある)にあって[911]という数が刻印された上着を着た男が[フィクションの中の漫画の予言の成就]によって[[飛行機]が登場するとの場面]で串刺しにされて死ぬとの描写がなされている、との先覚的描写】については先述なしてきたことに加えて、[さらに問題となるところ]を本稿のこれより続いての段でも指摘していく所存でもある—。

第二に、上にて摘示の『ジョジョの奇妙な冒険』の先覚的描写はフリーメーソンの特定のシンボル体系と際立っての類似性を呈しているとのものである(中空に[月]と[一つ目]と[太陽]を並べて配するとのメーソンのエンタード・アプレンティス位階(入門徒弟位階)のトレーシング・ボードやその他、ロッジのシンボリズムに見る図式が『ジョジョの奇妙な冒険』の当該予告描写の部と一致しているとのことがある)。

第三に、上の第二の点で取り上げた(予見描写の部と際立っての類似性を呈する)フリーメーソンの特定のシンボル体系に関しては[ヤコブの梯子](ジェイコブズ・ラダー)というものが関わっているとのことがある。ジェイコブズ・ラダーがいかようなものか、と言え、[天国へと至る梯子(はしご)]として旧約聖書にて登場を見ているものとなるわけだが、それは言い換えれば、レッド・ツェッペリンの問題となる歌曲 —逆再生疑惑が根強くも取り沙汰されている歌曲— に振られてのステアウェイ・トゥ・ヘブンという曲名と同様のものとなる(問題となるマンガ作品にあっての[911の予告描写としての部]が[ステアウェイ・トゥ・ヘブン]と言い換えられもする[ジェイコブズ・ラダー]のシンボルとも接合するようになっている)。

(「これよりさらに煮詰める」ところとして)

第四。(それ相応の音源的特性があるからこそ、州法における規制騒動にまで発展したところとしてのきな臭い側面を伴うとの)『ステアウェイ・トゥ・ヘブン』というレッド・ツェッペリンの曲名と同

一名称を冠するものが『ジョジョの奇妙な冒険』にての表記のようなもの(作品主人公らを皆殺しにし、既存の世界を徹底改変して別物にしてしまうとの「重力に根ざした力学」が体現するところの「天国への道」)として登場を見ていることがある。

以上の(再)訴求なしでの各点から

「ことは [たかだか漫画作品のことであるから] との次元で放擲(ほうてき) できるようなことではなく、それがために問題となるのである」

と述べるのである。

そして、以上の各点のうち、第一から第三の点は(それがいかに奇矯奇怪なるものであっても)[文献的事実]であることを「論拠となるところの仔細なる呈示」とのかたちでここまでにて示してきたことになる(疑わしきは先の内容を振り返って見てみればいい)。

加えて、これより労を厭わずに細かくも論ずるつもりである第四の点も決して軽んずべきものではないこと、(脳のネジが緩むに緩んでいるか、ないしは、現実世界にあっては自己を殺す力学など「ない」と頑なに信じることを信条にし、かつ、その力学によって[愚劣にも殺されていく]との結果にも満足できるという心性を有しているとの向きのならば話は別だが)、お分かりいただけることか、とは思う。

それでは上にて呈示のポイント、(第一から第三の点に続く)第四の点についての事細かな解説をなす。

ここでまずもって述べるが、

[(知る向きも多き)『ジョジョの奇妙な冒険』という作品は[スタンド]と呼ばれる一種の超能力、および、超能力が具現化してのいろいろな似姿が登場人物の背後に登場して、トリック・騙し合いなどを駆使しての攻防戦が繰り広げられる作品となる]

とのことがある(上にいう[スタンド]については直下、和文ウィキペディアよりの引用部を参照のこと)。

(以下、ウィキペディア[スタンド (ジョジョの奇妙な冒険)]項目にての現行記載内容よりの引用をなすとして)

スタンドは、荒木飛呂彦の漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』シリーズに登場する架空の超能力。Part3 (第三部)『スターダストクルセイダース』で初登場し、以降のシリーズに設定(能力)が引き継がれている。漢字では「幽波紋」と表記される。

[概要]

「スタンド」とは「パワーを持った像」であり、持ち主の傍に出現して様々な超常的能力を発揮し、他人を攻撃したり持ち主を守ったりする守護霊のような存在である。その姿は人間に似たものから、動物や怪物のようなもの、果ては無機物まで千差万別。一言で言えば超能力が具現化したものである。

(引用部はここまでとする)

以上のような作中の超能力、[スタンド]の能力が「問題となる」描写に関わってくるとのことがある。が、そのことに論ずるに先立ち、ここではさしあたって、予言的描写 — (先に事細かに解説なした、集英社「単行本」版『ジョジョの奇妙な冒険』第20巻ないしリニューアルされての集英社「文庫」版『ジョジョの奇妙な冒険』第13巻(にて掲載の「クヌム神」のオインゴ「トト神」のボインゴ(1))の部)に描画の予言的描写) — がダイレクトに関わってくるとの、

(『ジョジョの奇妙な冒険』シリーズにての)『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイ

ダース』

の主人公(作中で「空条承太郎」と命名されている人物)についての [世間での解説のされよう] について 一すぐにオンライン上にて目に入るとのウィキペディアより該当項目の記載を引く、とのかたちで一 紹介しておく。

(以下、ウィキペディア[空条承太郎]項目にての現行記載内容よりの引用をなすとして)

空条承太郎(くうじょう じょうたろう)は、荒木飛呂彦の漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』に登場する架空の人物。**Part3『スターダストクルセイダース』の主人公**…(中略)…

Part6『ストーンオーシャン』

41 歳。

DIO の元部下ジョンガリ・A の陰謀で G.D.st 刑務所に投獄された徐倫を救出するため、スピードワゴン財団の協力を得て脱獄の手引きを行うが、陰謀の真の首謀者・プッチ神父の襲撃を受けて記憶 DISC とスタンド DISC を奪われ、長い間仮死状態となっていた。後に徐倫の活躍により DISC を 2 枚とも取り戻し復活し、決戦の地ケープ・カナベラルに駆けつける。**プッチ神父との最終決戦においては、冷静な判断力や往年の実力が健在であることを見せるが、プッチ神父の攻撃から徐倫をかばった隙を突かれ、頭から裂かれて死亡する。**

(引用部はここまでとする)

くくだと「(大人の常識人にとっては) どうでもいいようなこと」を引用までなして説明しているようにとらえられる向きもあろうか、と思うが(当然至当なる反応であろう)、「ここでの話はそれでは済まされない」と(誤解を恐れずに)敢えても申し述べて続けるとして、**[第一のポイント] は空条承太郎が上にてその物語の主人公であると表記されている Part3『スターダストクルセイダース』というのが問題となる予言描写内包作品となっていることとなる。**

[第二のポイント] はその予言描写を含む、Part3 の部(スターダストクルセイダース)の主人公であった[空条承太郎]というキャラクターが無残にもあっさり Part6 の部で殺害されており(上にて引いたウィキペディア記述にあつての[プッチ神父の攻撃から徐倫をかばった隙を突かれ、頭から裂かれて死亡する]との表記に見るように殺害されており)、そうした作中設定が Part3 [スターダストクルセイダース] にての予言描写「とも」関わるジェイコブズ・ラダーと完全に接合していると指摘可能となっている(先刻既述のことである) ことである。

いかなることか、と述べれば、次のようなこととなる。

「『ジョジョの奇妙な冒険』第三部[スターダストクルセイダース] —先に視覚的論拠・史的背景についての解説を講じてきたとの、ジェイコブズ・ラダー(ヤコブの梯子)とメーソン・シンボリズムを介して接合するようになっているとのところで 911 の予見描写を含むとの作品— にての主人公たる空条承太郎は第六部 [ストーンオーシャン] で殺されることになるのが、その殺害行為はプッチ神父というキャラクターによる [スタンド能力](既述) である [ステアウェイ・トゥ・ヘブン] と命名された能力 (後に[メイド・イン・ヘブン]という名にするとの方向での[作品改訂]がなされる)、すなわち、[ジェイコブズ・ラダー] と同文の意味合いを持ち、また、レッド・ツェッペリンの有名な歌曲と同名のものであるという特殊能力によって成し遂げられており、その [ステアウェイ・トゥ・ヘブン] (どういうわけなのかの作品改訂後は [メイド・イン・ヘブン]) という能力は空条承太郎 (第三部 [スターダストクルセイダース] 主人公) のみならず第六部主人公(空条徐倫というキャラクター)ら主要キャラクターらをも無残にもあっさり殺し、挙げ句には作中の世界そのものを不可逆的に完全破壊した(ゼロに戻して別世界に変えきった)との[重力]の作用を操る超能力となっているとのことが「ある」 —ポイントは作品内の[予告描写と関わる(と先述した)ジェイコブズ・ラダーと同一の語感の超能力]が作品主人公らを皆殺しにし、また、作

品世界そのものを破壊するとのことになっており、また、それが[重力]と結びつく力であるとされていることである— 」

面倒でしょうがないとの認識があるのだが、節義の問題として上記のことを支える出典を挙げていくこととする。

まずもって日本のみならず世界的にもよく知られた作品である『ジョジョの奇妙な冒険』(英文タイトルは JoJo's Bizarre Adventure) にてのよくまとめられての第六部[ストーンオーシャン]解説項目の記述を下に引いておく。

(直下、英文 Wikipedia[Stone Ocean]項目の現行にての記載内容を「掻い摘まんで」引用をなすとして)

Stone Ocean (ストーンオーシャン) is the sixth story arc of the Japanese manga series JoJo's Bizarre Adventure, written and illustrated by Hirohiko Araki. It was published in Weekly Shonen Jump from 2000 to 2003 and was collected into 17 tankobon volumes (volumes 64 to 80 of the entire series).

[...]

Plot

[...]

Jolyne and company engage in hot pursuit with Father Pucci, **only to face the next evolution of Whitesnake, C-Moon, a Stand which alters the gravitational field around Pucci.** Though a revived Jotaro arrives to aid his daughter and her friends in fighting, **Pucci is able to achieve his goal as C-Moon evolves once more into its final form: Made in Heaven. Using Made in Heaven, Pucci is able to speed up Earth's rotation (and thus time itself), during which time he proceeds to kill Jolyne, Jotaro, Anasui, and Ermes in front of Emporio.** The final effects of Made in Heaven are completed when time accelerates to the end of the universe, leading to a new cycle of time and a parallel universe in its place where all surviving humans have precognitive understanding of fated actions in their lives. Pucci, believing that such knowledge of one's fate will bring them happiness, proceeds to hunt down Emporio to ensure that the future does not change.

[...]

Characters [. . .] Enrico Pucci is the main antagonist of Stone Ocean. He seeks to use his Stands Whitesnake (ホワイトスネイク), capable of stealing other people's spirits and memories, even Stands, in the form of compact disks; C-Moon (シー・ムーン (C-MOON)), capable of negating gravity to keep things away from Pucci; and Made in Heaven (メイド・イン・ヘブン), capable of accelerating time to such a degree that the universe resets itself, all to remake the world according to DIO's ideals. **Made in Heaven was previously named "Stairway to Heaven" (ステアウェイ・トゥ・ヘブン (天国への階段) Suteawei Tu Hebung) in the serialization, but was later changed in the tankobon volumes.**

(上記の掻い摘まんでの引用部に対して文意補いながらもの訳を付すとして)「『ストーンオーシャン』は荒木飛呂彦により執筆・作画されての日本の漫画作品である『ジョジョの奇妙な冒険』にあつての第六の梁となる物語となる。

同作は週刊少年ジャンプ誌にて2000年から2003年にかけて刊行されたものとなり、計17冊の単行本(タンコウボン、和文表記がそのまま英語表記ともなる)にて収められている作品ともなる。

…(中略)…

[粗筋]

…(中略)…

徐倫(訳注:英語表記 Jolyne となり、第六部『ストーンオーシャン』主人公)およびその仲間達はプッチ神父に対する熱を帯びての追跡行に身を入れていたが、結局、[[ホワイトスネーク]が[C-Moon](訳注:[ホワイトスネーク]も[C-Moon]も共に作中の宿敵となっているプッチ神父の超能力たる[スタンド]の名称となり、名前の由来は共に米国と英国の歌曲名となっている)という重力場を変化させることができるのかたちでの次なる進化を遂げる]のに際会するだけとの結果へと終わってしまった。

傷が癒えた承太郎(訳注:英文表記 Jotaro となり、第三部『スターダストクルセイダース』主人公)が闘いに際して自分の娘(訳注:第六部『ストーンオーシャン』主人公の徐倫のこと)およびその友らを救うために駆けつけたが、プッチは自身の能力たる[C-Moon]をさらにいま一度、[メイド・イン・ヘブン]へと進化させた時点で最終目標を達成できるようになっていた。

そして、(重力場をコントロールできるとの)[メイド・イン・ヘブン]の能力を用い、プッチは地球の自転を加速化させ(そして、そうやって時間すらも加速させ)、その加速された時間の中でもって、徐倫、承太郎、アナスイ、エルメスをエンポリオの眼前で殺害するにまで至る(訳注:和文表記に倣えば[アナスイ][エルメス][エンポリオ]となる彼・彼女らは全て第六部主人公の徐倫と共闘していた仲間達となる)。

[メイド・イン・ヘブン]による最終的効果は[宇宙の終わり]にまで時間が加速した際に実現されるとのもので、それによって新しい時間の環にしてパラレル・ユニバースの世界、[そこにて生きる全ての人間らが自分達の生活にあって[運命が決する行動]に対する先覚的知識を既に見に付けている(行動が起こされる前から行動の結果を知りながら人間が生きる)との世界]を実現するとのものである。プッチはそのような[自身の運命に対する先覚的知識]こそが人間に幸福をもたらすのであるとの信念を抱きながら、「未来は不変である」ことを確信させようとしつつも(加速された時間の環にあつての「後の」世界で唯一、自分以外に旧世界からやってきたとのキャラクターである)エンポリオを狩りたて(そのうえで殺そうと)する。

…(中略)…

[登場人物ら] …(中略)… エンリコ・プッチ:『ストーンオーシャン』の主たる敵対者となる。同プッチは彼のスタンド能力、他人の心や記憶、スタンド能力でさえを盗むことができそれをコンパクト・ディスクに収めるとの[ホワイトスネイク]、同プッチから離れさせるべくも物体にかかる重力の力を無効化できるとの[C-Moon]、既存宇宙をリセットできるまでに時を加速させることができるとの[メイド・イン・ヘブン]、全てディオ(訳注:ジョジョの奇妙な冒険シリーズに登場していた主人公達の仇敵としての吸血鬼化存在)の理想の元に世界を造り替えるべくものそれら各能力を使わんとする存在となっている。うち、プッチの[メイド・イン・ヘブン]の能力に関しては従前、[ステアウェイ・トゥ・ヘブン]と命名されていたところを「単行本化にあたって」名称が[メイド・イン・ヘブン]へと改められたものとなる

(引用部に対する文意補いながらも訳はここまでとする 一※一)

(※尚、上にて記載されているように Stairway to Heaven[ステアウェイ・トゥ・ヘブン]という初期の名称が Made in Heaven[メイド・イン・ヘブン]に変更されているとのことについては週刊の漫画誌に連載されていたとの表記が早くもそちらが単行本化されるに当たって 一どうしてそういうことがなされたのかは置き一コマ内の台詞表記・表題含めてすべてが「改訂」されもしたとのことを指してい

る —そちら[改訂]については無論、国内でも諸所で言明されているところである— . さらに述べれば、漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』に登場するスタンドである [ステアウェイ・トゥ・ヘブン] の名は著名バンドのレッド・ツェッペリンの歌曲『ステアウェイ・トゥ・ヘブン』、すなわち、それへのバックマスキング・メッセージ混入疑惑が取り沙汰されてきた歌曲の曲名に由来していると解されるようになっている. に関しては和文ウィキペディア[スタンド]項目にて(以下、引用なすとして) “「スタンド」とは「パワーを持った像」であり、持ち主の傍に出現して様々な超常的能力を発揮し、他人を攻撃したり持ち主を守ったりする守護霊のような存在である。その姿は人間に似たものから、動物や怪物のようなもの、果ては無機物まで千差万別。一言で言えば超能力が具現化したものである… (中略)…各スタンド名の由来は、Part3 ではタロットカードの大アルカナなどから、それ以降は洋楽のアーティスト名・曲名・アルバム名から取られていることが多い。なお、人名などを洋楽方面から取材するというこの傾向は、スタンドに限らず『ジョジョの奇妙な冒険』全編を通じて多く見られるものである” (引用部はここまでとする)との記述がなされていることより(当該の漫画作品について細かくもご存知ないとの向きにも)理解いただけることか、とは思う)

以上の英文ウィキペディアよりの作品紹介部 —作品概要を分析して知っている筆者が太鼓判を押すところとして目立っての誤謬を含まないとの作品紹介部— でもってして大体にして

[第三部主人公(空条承太郎というキャラクター)および第六部主人公(空条徐倫というキャラクター)を仲間もろともに無残に殺し、また、世界そのものを造り替えてしまったとの重力作用に基礎を置く「超」能力 —にしてジェイコブズ・ラダーことヤコブの梯子とも結びつくステアウェイ・トゥ・ヘブンを名称に冠する能力—]

にまつわる世間一般での解説のされよう (ジェイコブズ・ラダーや予言的描写といった深い意味性に関わる考察は一切含まれずにの解説のされよう) がいかようなものなのか、ご理解いただけたことか、とは思う。

そうしたことに関わる原作での描写が一体全体いかようになるものなのか、とのことについては国内にて幅広くも流通を見ており、容易に内容確認できるとの、

『ジョジョの奇妙な冒険 Part6 ストーンオーシャン』第16巻 (リニューアルを見ての文庫化されてのバージョンでは10巻)

『ジョジョの奇妙な冒険 Part6 ストーンオーシャン』第17巻 (リニューアルを見ての文庫化されてのバージョンでは11巻)

にての描写などをも検討いただきたいものだが (そこにては滑稽なまでに「肉体の鈍重さ」のみならず「精神の鈍重さ」が強調されている人間達が無残な運命を辿る(変化に巻き込まれるかたちで重力作用によって殺されていったりする)姿が描写されながら加速する時間の中で世界が次の時間の環へといざなわれ、既存の世界が崩壊していく様が「これは…」とのかたちで描かれている)、同様のことにまつわる和文ウィキペディアにての解説のされようも下に引用しておく。

(直下、和文ウィキペディア[エンリコ・プッチ]項目より掻い摘まんでの引用をなすところとして)

プッチが重力を最も軽減できる位置に到達したことで進化した、プッチのスタンドの完成形。それまでのプッチのスタンドとは全く異なる外見であり、前半身だけの馬に人の上半身が跨った姿をしており、顔の中心や手の甲には能力を象徴するかのよう時計(或いは計器)のマークが描かれている。時を無限に加速

させるスタンドであり、「天国へ行く方法」実現の鍵となる。プッチ以外の全生物は時の加速についていけず、傍目から見るとプッチが高速移動しているように見える。…(中略)… 単行本 17 巻掲載のスタンドパラメータでは時間の加速の原理について「全宇宙の「引力」を利用して加速しているようだ」と説明されている。…(中略)… このスタンドの真の能力は時間を無限大に加速し続けることで世界を一巡させることである。一巡した間に全ての人間や生物は未来にいつ何が起こるかを体験しており、その運命を変えることは出来ない(多少の違いはあっても運命に変更は無い。例えば紙を踏んで転ぶと言う出来事を体験している人間が、紙を踏むまいと回避したとしても別の物に躓き転んでしまう)が、プッチ本人のみは自身や他者の運命に干渉、変更することが出来る。雑誌連載時は呼称が「ステアウェイ・トゥ・ヘブン(天国への階段)」であった。

(引用部はここまでとする)

(直下、和文ウィキペディア[エンリコ・プッチ]項目より掻い摘まんでの引用をなすところとして)

ケープ・カナベラルにおける最終決戦では、「メイド・イン・ヘブン」の時の加速によりエルメス、アナスイ、徐倫、時を止められる承太郎をも抹殺する。エンポリオには逃げられてしまうが、プッチが時を極限まで加速させたことにより宇宙は終焉と新たな開闢を迎え、時の加速を体験した全ての生命体(人間のみならず蟻の一匹をも含む)はパラレルワールド「一巡後の世界」に到達する。一巡した間に全ての生物は未来にいつ何が起こるかを体験しており、それを変えられない運命として事前に何が起きるかを知ることが出来る。すべての人類があらゆる悲劇や絶望にも事前に「覚悟」が出来る世界こそが「覚悟こそが幸福」という価値観のプッチの求めた「天国」であった。続編となる Part7『スティール・ボール・ラン』に直接の登場は無いが、舞台となった世界は「メイド・イン・ヘブン」の能力により生まれたパラレルワールド「一巡後の世界」であると説明されている。

(引用部はここまでとする)

以上のような能力、メイド・イン・ヘブンと命名された作中の敵役プッチ神父の能力(単行本化に当たって早くも改訂がどういっわけなのかなされているとの旧名ステアウェイ・トゥ・ヘブンと能力)によって既存世界が終焉を迎えると描写されることが問題になるととれるだけの要素がある(ことを本稿筆者は重んじている)。

(:ここまでにて解説してきたようにステアウェイ・トゥ・ヘブンとは 一その疑惑が真実であれ、そうでないにせよ「悪魔の王に対する礼讃を内容とする」逆再生メッセージ混入が非常に問題視されもした(米国で州法における逆再生メッセージ混入規制の流れにつながりかけたのかたちで問題視された)との著名バンド Led Zeppelin の歌曲 Stairway to Heaven から命名されたものと(当然に)解されるようになっていものなのだが、そちら特殊能力としての【ステアウェイ・トゥ・ヘブン】が問題となる漫画(『ジョジョの奇妙な冒険 Part6 ストーンオーシャン』)にて同じくもの特殊能力が真価を發揮する局面は【重力の特殊な作用状況】下での【天国への道の実現】であるとされている。そして、同じくもの漫画(『ジョジョの奇妙な冒険 Part6 ストーンオーシャン』)にての【天国への道の実現】は【特異点】との言葉と意味不明極まりないかたちで結びつけられて「も」いる(和文ウィキペディア[ストーンオーシャン]項目にあつての現行にての注記表記より引用なせば、“天国へ行く方法…(中略)…その内容は、「ザ・ワールド」「欲のない人間」「極罪を犯した 36 人以上の魂」「14 の言葉」「ザ・ワールドを捨てる勇氣」「最も重力が弱い場所」が揃うことで実現すると書かれ

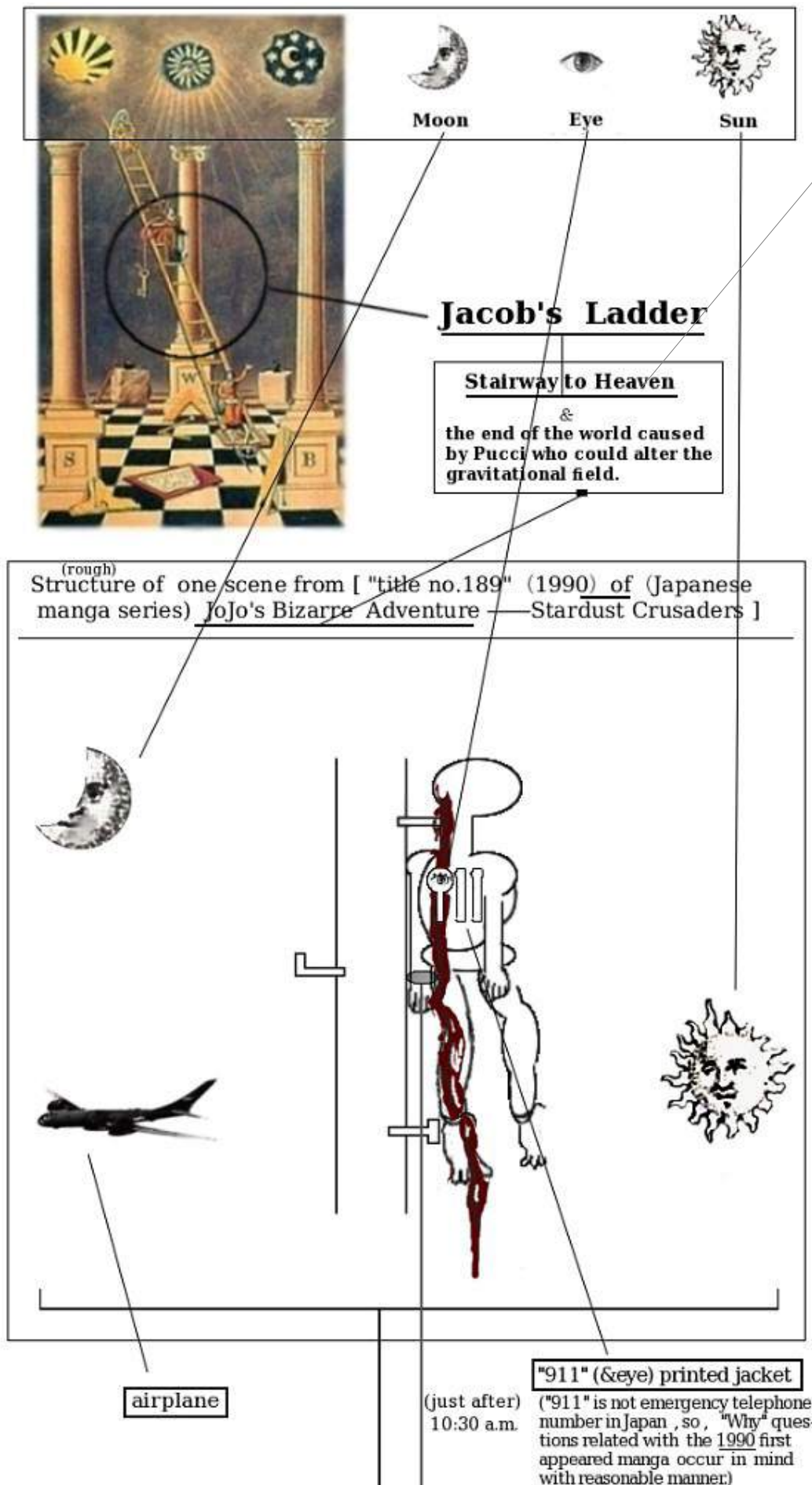
ていた…(中略)…([注記;14の言葉])発言した順番に、「らせん階段」「カブト虫」「廢墟の街」「イチジクのタルト」「カブト虫」「ドロローサへの道」「カブト虫」「特異点」「ジョット」「天使(エンジェル)」「紫陽花」「カブト虫」「特異点」「秘密の皇帝」”(引用部はここまでとする)とあるとおりである)。そうしたフィクション設定は意味不明なものだが(あるいは格好をつけて述べれば、「凡俗の理解を超える程に形而上学的でシンボリックである」とのかたちにもなるか)、**科学概念上の一般論として述べれば、【重力】と【特異点】が結びつけられれば、それは【ブラックホールの特異点】のことを指しもすることになる**。筆者としてはその点について「も」(後述の観点から)決して軽んずべきではないと判じている)

(:尚、漫画にて[天国への道]の実現を企図しているプッチ神父というキャラクターが「いかにも、悪役らしい」のは[人間が自分の運命を事前認識しながらもそれを変えることがかなわぬ中で「覚悟」すること]を「幸福」とみなしていることである(そして、自身のそうした「幸福」観を無理矢理にでも人類全体に押しつけるために世界そのものを一端破壊、生まれ変わらせようとし、その過程で次の世界に引き継がせないかたちで主人公らをはじめ多くの人間の因果を旧世界で断ち切ることまでをも是認していることである)。

換言すれば、「自分の運命を知って」いながら、「それを変えることができない」というのはある種の[拷問]なわけであるが、プッチが邪悪な存在と見えるのは[運命を変えるよう人間が努力する可能性][自由意思介在の可能性]を否定したうえで[運命を事前認識し、それに屈従すること]を[明日への糧(かて)となる覚悟]と表して幸福の前提条件になるように物事を語り、それを自己の思想の核としてしまっているとのことにあるとも述べられる。

そのようなことが(ある程度、物事を突き詰めて考えるとの)読み手には易くも理解できるようになっている。—※同じくもの点についてさらに一步進んでの話、高等批評といったものを講ずれば、プロテスタントの世界観、なかんずく、カルヴァン派などの世界観にて認められる[運命は既に決まっている][決まっている運命のなかで決まった運命に見る幸福の多寡が信者の信心のありよう・神の恩寵を計測するバロメーターである]といった内容の[予定説](社会学者マックス・ウェーバーが[決まった運命のありようを「証明」したくもキリスト教徒らが蓄財に励み、もって、資本主義の助長・深化・発展につながった]と分析していたような観点でもある)と表記のプッチの観点は非常に親和性が強いものにも見え、漫画作品はそうした思考形態を茶化す、ないし、論難しているように[見えもする]とのもの「とも」なる(但し、プッチは予定説の考えに目立って立ったカルヴァンや[自由意思は悪魔の呪いである]と述べての De servo arbitrio『奴隷意志論』なるものを唱え神の御心にすがることのみが信徒の幸福であると説いたルターの広めた[新教]というもの、プロテスタンティズムの聖職者たる「牧師」ではなく、カトリックの聖職者である「神父」といった描かれかたをしているのではあるも)。以上、云々しはしたが、しかし、**ここ本稿でなしたいとのことは[下らぬ人間らが下らぬ作文で持ち出すような非建設的な「お」話]と大差ないとの以上のような高等批評(と世間的に見られるようなもの)を「これ無意味に」展開することではなく、(それすらも聞く耳を持つ人間がいなければ無意味なわけだが)、[我々人類の今後に関わる[予定]に対する[予告]の問題]の存在の具体論的摘示に努めることにあること、断っておきたい次第でもある(『そういう断りをなすうえで[語るに足りぬ下らぬ「お」話の一例]として反面教師として引き合いに出す以上には[プロテスタンティズムの思想と予言漫画のヴィラン(悪役)の思考様式の比較]などということは持ち出す必要も無いだろう』とさえ筆者は見えており、そのうえで、敢えてもの下らぬ話をなした) —)**

ここまで指し示しに努めてきたことを図示なせば、次のようなかたちとなる。



せんだっての段までにてここに見るヤコブの梯子(はしご)のシンボルがステアウェイ・トゥ・ヘブン(天国への階段)との語へと言い換えられるようになっていたのこを解説し、また、欧米圏でステアウェイ・トゥ・ヘブンの歌詞名が振られた歌曲がいかようにして物議を醸してきたのかの解説をなしもしていた。

original scene of above illustration appeared as the **[prophetic vision]** of the fictional character (named Oingo) through his manga work

Real World Event

The North Tower collapsed at 10:28 a.m.



hunged man's wristwatch time
→ 10:33~34 a.m.

who had referred to 10:30 a.m.
before he died.



← rotate 180°



上にての関係図は

[[『ジョジョの奇妙な冒険』にての 911 の事件に対する予見描写] ↔ (際立つての視覚的一致性の介在) ↔ [「特定の」フリーメーソンシンボル体系構図] ↔ [構図内におけるジェイコブズ・ラダー(天国への梯子)の使用慣行] ↔ (意味的一致性) ↔ [ステアウェイ・トゥ・ヘブン] ↔ (回帰) ↔ [[『ジョジョの奇妙な冒険』に見る重力の操作による世界破壊の流れ]

との関係性「も」が成立していることを示したものとなる。

さて、長大なものとなっている本稿にあっては先行する段にあって

[[**911 の事件の予見描写**]と**重力の機序による世界崩壊の可能性が取り沙汰されてきた史上最大の「実験」**]との間に多重的な関係性が成立している (というより成立してしまっている)]

とのことにつき 一膨大な文字数を割きながら、必要かつ十分であろうとの出典を事細かに挙げながら 一 指し示すのに注力してきたとのことがある。

そして、上にて呈示の通りの図にて問題のありようが多く視覚的に示してしまうとのここでの話「も」がそうした [従前指し示しに注力してきたとの本稿の流れ] と相通ずる関係性を示す 一 お分かりのことか、とは思うが、**911 の事件の予見描写**]と**重力による終焉**](特異点との言葉とも結びつけられての**重力による終焉**)とのことで接合する 一 ところのものとなっている。

さらにもって述べれば、である。同じくものことについては [側面からの補強材料] らが伴って

いる。例えば、である。本稿ではダンテ『地獄篇』におけるルチフェロ(サタン)の領域に、あるいは、ミルトン『失樂園』のルシファー(サタン)のやりように関わるところに〔現代的観点から見た場合のブラックホールの質的等価物〕が具現化しているとのことの問題性をも文献的事実に基づいて指摘してきたわけだが(本稿にての【出典(Source)紹介の部 55】から【出典(Source)紹介の部 55(3)】を包摂しての段からそのことを取り扱いだしている)、表記の漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』にあって問題となる〔重力による破壊作用〕と結びついた能力〔ステアウェイ・トゥ・ヘブン〕と関して述べれば、同名の歌曲(レッド・ツェッペリンのステアウェイ・トゥ・ヘブン)について既述のように逆再生、バックマスキングという収録手法に基づいて〔サタンへの礼讃の言〕が入れ込まれている歌曲であるとする申し分が広く取り沙汰されてきたとの世間的経緯がある—バックマスキング行為が本当に意図的になされていたのか、あるいは、そうではなくたまたまそういう響きとなっているのかに関わらず、とにかくも州法による無断バックマスキング行為規制の流れに通ずるとのかたちで同じくものが広く取り沙汰されてきたとの世間的経緯がある—。となれば、

〔サタン(ルシファー)と結びつく重力の(災厄の)領域〕

との特異なる要素がダンテ『地獄篇』にも、ミルトン『失樂園』にも、そして、(いきなり卑近なところとなって)『ジョジョの奇妙な冒険』にすら見てとれる、脇・側面からの関係性の補強材料としてそうしたことが見てとれるとのことになるのである。

それにつき、「考えるべきは、」「そういうことが多重的に存在しているのが〔偶然の賜物〕として済ませられるような性質のものであるのか、あるいは、〔恣意によるところ〕と判じられるし判じべきなのか」ということであり、さらに述べれば、それが〔恣意の賜物〕であるというのならば、—そのような「非」人間的なる〔恣意性〕がいかように具現化なさしめられているのかとのその〔機序〕(〔仕組み〕)の問題を「敢えても」脇に置いたうえでも— 「そのような多重的なる〔恣意の表明〕の先にいかなることが控えているのかが問題になる」とのことである。

(※尚、ここまでの話に関わるところとしてそのものずばりで Jacob's Ladder『ジェイコブズ・ラダー』(1990年公開)という題名の映画作品が存在しているとのことがある。

日本のレンタルビデオ店では置いていないところも少なからずある、その程度の流通度合いしか国内では見ていないとの映画作品とはなるが、ヤコブの梯子を題名に冠する同映画作品『ジェイコブズ・ラダー』からして予見的作品、〔911の事件の事前言及のことを爆破陰謀「論」との絡みで想起させる作品〕「とも」なっている。

については「秒単位で収録DVDから裏取りできるように」との指摘をなしておくが、同作 Jacob's Ladder を収めたDVDコンテンツにての本編開始後【0時間30分50秒】(DVDタイムカウンター表示【00:30:50】)あたりから本編開始後【0時間31分09秒】(DVDタイムカウンター表示【00:31:09】)に至るまでの描写を〔流れ〕を目で追えば納得いただけるであろうところとして、同作にあっては

「〔窓に119とのプレートが掲げられている〕ところで車の〔爆破〕〔爆発〕についての言及がなされている」

とのことが具現化を見ている(:英文 Wikipedia[Jacob's Ladder (film)]項目にて

“As the hallucinations become increasingly bizarre, Paul, one of Jacob's old Army friends, contacts him to tell him about sharing such experiences, and is soon killed when his car explodes.” 「(主人公を煩わせ続けた)幻覚が次第によりもって奇怪なものへとなくなっていく中、ジェイコブ(主人公)の軍隊時代の戦友の一人のポールが彼もまた同じような体験を共有しているとのことを伝えるためにコンタクトを取ってきて、そして、(彼ポールは)自動車の爆発にて殺されてしまう」と表記されているような粗

筋に関わる場所である)。

につき、DVD 再生時間にして 30 分 50 秒経過から 31 分 9 秒経過後の合間の部位を視ることによって理解できる場所として

[[119] (反対から見てみると 911 となる数値) および [(車の) 爆破・爆発] が結びつけられている]

とのことだけでは

『911 の事件への事前言及「がかった」側面は見出せないだろう』

と考える向きも当然にあらうかとは思いますが、ここでは

[ジェイコブズ・ラダー(ヤコブの梯子)と結びつくその他の事物が [911 の事前言及] の側面とともにある]

との一事を [前提] に置いての話を筆者がなしているとのこと、理解なしにいただきたいものではある 一尚、『ジョジョの奇妙な冒険』にての予見描写が (映画『ジェイコブズ・ラダー』の車の時限爆破よろしく) [時限爆破] と結びつくこと、また、それがなせもってして問題になるのかについてのより噛み砕いての説明は続いての段にてなすこととする)

(これにて[■補足 3]と振っての部を終える)

本題から逸れてのここでの話の [とりまとめ] として最後に、

[(「極めて長くなるも、」と事前に断ったうえで) ■[補足 1] から ■[補足 3] と振って書き進めてきたとのここまでの一連の部]

でいかようなことを摘示なさんとしてきたのか、極々端的に振り返っての表記をなしておく。

(以下、端的に振り返っての表記をなすとして)

■補足 1: [補足 1] の部は以下のことの強調をなすためだけに設けての部であった。

⇒

「筆者は国内特定漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険(スターダストクルセイダース)』の [911 の事件の発生の予見描写] とされているところに高度な意味でフリーメーソン・シンボリズムとの「際立っての」連続性があると具体的な視覚的指示材料に依拠して指摘している (エンタード・アプレンティス位階のトレーシング・ボードなどとの視覚的接合性があると指摘している) が、当該漫画作品の作者がフリーメーソンであると主張するなどとのことをなしたいのではない」 (それでは【傀儡(くぐつ)の問題】との尤(もっと)もありそうなことをどこか脇に追いやって【人間レベルの「偽りの」社会問題】の強弁をなし、本当のところの真実・この世界の本質的問題をうやもやにしようとするくらいが強いとの相応の人種ら、要するに、(唾棄すべき) 陰謀「論」者という相応の人種やりようと変わらないだろうとの観点を筆者は有しており、であるから、日本の漫画原作者がフリーメーソンと見受けられるなどとの真偽不明なることを云々するつもりは元よりない 一むしろ、【人の意から離れた傀儡(くぐつ)の問題】がそこにあるからこそその【致命的な予言的言及】がなされているとの見方をなしている)

■補足 2: 続いての [補足 2] の部では以下のようなことの指し示しに注力していた。

⇒

『ジョジョの奇妙な冒険(スターダストクルセイダース)』の [911 の事件の発生の予見描

写]とされているところについては作者が「考えずに書いていた」との表明を外向けになしている中でも

[フリーメーソン象徴主義のみならず[錬金術の象徴主義]との接合性]

もが指摘できるようになっているとのことがある。

のみならず、そこにて問題となる [錬金術象徴との接合性] との兼ね合いでは [黄金の林檎] という媒介項を介して

[[他の] (そうしたものが存在していること自体が実にもってして問題なのだが) 911の予見文物らとの接合性]

すら指摘できるようになっている(でなければ取り上げるに値しないようなところとして、無論、[印象論などではなく証拠に基づいての具象論]としてそういう指摘がなせるようになってい

であるから、[計算されての思惑 (メデュウム(媒質); 傀儡くぐつの意中心境は問題にならぬとの思惑) の問題] が [[執拗さ] の背景にある [動機]] との観点で当然に問題になると解される。

■補足3:[補足3]は以下のようなことの指し示しに注力していた。

⇒

『ジョジョの奇妙な冒険(スターダストクルセイダース)』にあつての [911の事件の発生の予見描写] とされているところについては

(フリーメーソン象徴主義との兼ね合いで)

[ヤコブの梯子(はしご)の象徴との視覚的連続性]

「もが」観念されるようになってい (: 当該漫画作品の中にての [吊された男が登場する911の事件の発生の予見描写] (として知られている部) は[月][一つ目][太陽]を並べて配しているとのものだが、同様に[月][一つ目][太陽]を並べて配しているのが[フリーメーソンの入団者が足入れする徒弟位階のトレーニング・ボード]であり、そちら徒弟位階トレーニング・ボードに関しては[ヤコブの梯子]「とも」ワンセットとなっているとのことがあるためにそうも述べられるようになってい

それにつき、旧約聖書に見る [ヤコブの梯子(はしご)] とは [天国への梯子] とのその語感から [ステアウェイ・トゥ・ヘブン] (天国への階段) という呼称でも通用するところのものであり、ステアウェイ・トゥ・ヘブンとくれば、「逆再生メッセージが混入されている」との疑惑が取り沙汰されてきた著名バンド(レッド・ツェッペリン)の有名歌曲曲名[ステアウェイ・トゥ・ヘブン] (天国への階段) のことが想起されるものである。

そして、『ジョジョの奇妙な冒険シリーズ』では(「有名バンドおよびその歌曲から名前が取られての」) [スタンド]なる超能力が作中主要要素となっており、そのスタンド能力の中には(改訂にて名前を後に変えられたとのものだが) [ステアウェイ・トゥ・ヘブン] というものが含まれている(著名バンド(レッド・ツェッペリン)の有名歌曲曲名[ステアウェイ・トゥ・ヘブン] (天国への階段) に名称が由来するところの能力として、である)。

そちら『ジョジョの奇妙な冒険』シリーズ版の天国への階段、[ステアウェイ・トゥ・ヘブン] (改訂「後」名称メイド・イン・ヘブン) については

[重力の機序を操作して主人公らを皆殺しにすることになり、かつ、作中世界そのものを不可逆的に根本破壊した能力]

ともなっている。

要するに、

[【911の事件の発生の予見描写の部】と(視覚的接合性を呈するフリーメーソン象徴主義を介しての)【ヤコブの梯子】との重なり合い]

から「も」その存在が浮かび上がってくるとの [ステアウェイ・トゥ・ヘブン] が『ジョジョの奇妙な冒険』シリーズの作品世界を重力(引力)の機序を用いて徹底的に破壊したジョーカーのカードのようなものとなっているとのことがあるわけだが、そこから想起される

のは

[(本稿でその指し示しにひたすらに注力してきたとの)【911の事件の発生の予見描写】と【重力の怪物たるブラックホールの類を生成する可能性が取り沙汰されてきた「実験」]との間の「多重的」関係性]

のことである。

大の大人が取り合わないようなものにあつてすら

[【911の事前言及】と【重力による根本破壊と通ずるもの】(ブラックホール生成挙動)との接合性]

が介在していると指摘できるようになっている(指摘できるように「なっている」)

のであるから問題になる。

(以上をもってして[とりまとめ]とし、■[補足1]から■[補足3]と振つてのこたらを述べてきた脇に逸れての部を終えることとする)

極めて長くなつても補足の部はここまでとする

ここまでの補足の部に関しては「長くもなるものである」と断りもしたうえで本稿にての p.813 から p.855 の紙幅を割いている。

さて、ここまでにて ■[補足1] から ■[補足3] と振つての脇に逸れての話に長々と筆を割いてしまったきらいがあるが、立ち戻りもして、『ジョジョの奇妙な冒険』という作品にあつての [「問題となる」予見描写] に関して本質をなす (と筆者がとらえる) ところ —A. から E. と振つて取り上げているところ— に話を引き戻す。

C

本稿筆者が『ジョジョの奇妙な冒険』という漫画の予見描写に関して心底、呆れさせられたことについては

[吊された男の寓意]

もが意味性をもってそこに付与されている節があるとのこと「も」ある。

本稿にての先の段でも指摘しているようにフリーメーソンの徒弟位階への参入者(要するにフリーメーソンへの参入者)はその参入に際して

[吊された男]

を演じさせられるとのことがよく知られているところとなっている。

(フリーメイソン成員が組織に足入れする(徒弟位階に組み込まれる)際に「吊された男」を迫体験させられもするとのことの出典として

⇒

本稿の先の段 **出典(Source) 紹介の部 103(6)** にあつては 19 世紀に刊行されたよく知られたフリーメイソン儀礼総覧本として(PDF 版も流通しているとの)

Duncan's Masonic Ritual and Monitor 『ダンカンのメーソン儀礼およびその報告』(1866)

にて掲載されている図などメーソン儀式動向を示す画をも挙げつつそのこと — メーソン新参者、徒弟位階成員が縊死(いし)・絞殺完遂を迎えることになる絞首刑者の格好をさせられて儀式に臨むこと — について取り上げました。その点、同じくものことについてここでは、Robert Lomas ロバート・ロマスおよび Christopher Knight クリストファー・ナイトという二名の著者の手になる書籍、THE HIRAM KEY (幅広くもその主たる筋立ての信憑性に疑義が投げかけられている [信用のおけぬ出典] unreliable source として有名な書籍だが、フリーメイソンのスポークスマン的な者達が書いてのものであることよりメーソン儀典にまつわるものでは確度高いメーソン関連情報を呈示していると判じられる書籍)の国内にて流通している訳書『封印のイエス』 — [陰謀「論」関連本] や [トンデモ雑誌] をよく出すことでも知られる出版社である学習研究 — にての 21 ページより 24 ページよりの掻い摘まんでの引用を「再度」なしておくこととする。(以降、掻い摘まんでの再度の引用をなすとして) “いよいよ入団の儀礼。…(中略)…目隠しをされ、緩やかな白衣を着せられた。片足には簡素な上靴。左脚は膝まで露出させられ …(中略)…首の周りには絞首刑の綱が巻かれ、背中に垂れ下がっていた。…(中略)…すべての金属製のものを体から外させられ、…(中略)…フリーメイソンの「 temple」に入る準備が整った …(中略、一挙に 24 ページまでとばす)… こうして目隠しが取り除かれた。…(中略)…前にいるワーシップフル・マスターは …(中略)…メーソンリーの「光」の象徴に向けた。…(中略)…そして、…(中略)…「エンタード・アプレンティス(徒弟)」という位階に受け入れられた、と告げた” (引用部はここまでとする)。

以上が — 繰り返し言及なしでの部位ともなるが — [メーソン自身が語る徒弟位階への入門時、すなわち、メーソンに入団する際に参入者が強いられる儀式のありよう] である。そこにてはメーソン入団者はその入団段階で目隠しをされた死刑囚を演じさせられ、目隠しをとられて、光を与えられ、メーソンに入団することになるとはきと言及されている)

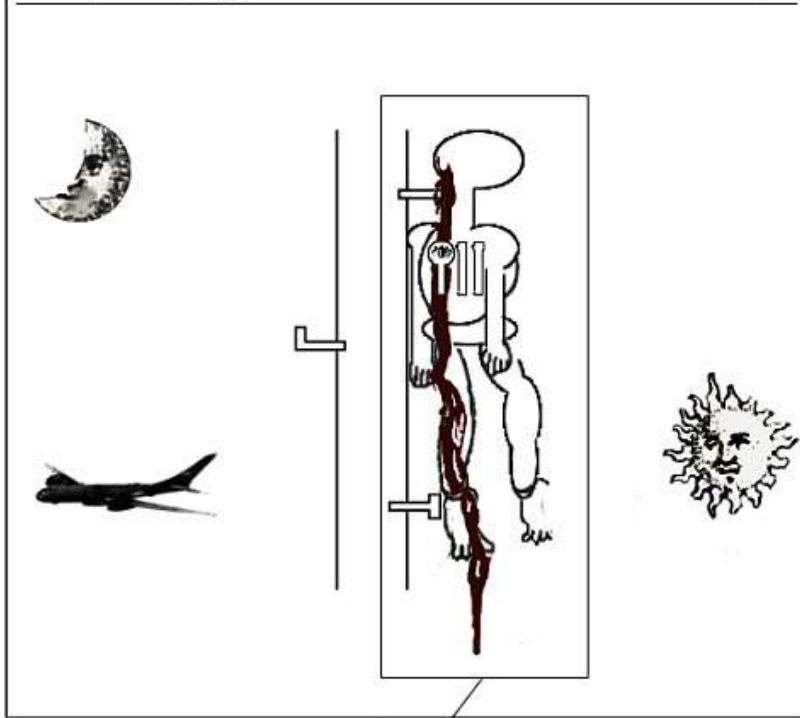
それにつき、上述のこと —メーソンの徒弟位階の参入者が目隠しをされた絞首刑受刑者(吊された男)の似姿にて儀式に臨むこと— と

[911 の事件の予言と認知されている『ジョジョの奇妙な冒険』にあつての問題となるイラスト —メーソン徒弟位階トレーニング・ボードと構造的類似性を呈しているもの— の中央に「串刺しにされたうえで「吊されている」との男」が描かれていること]

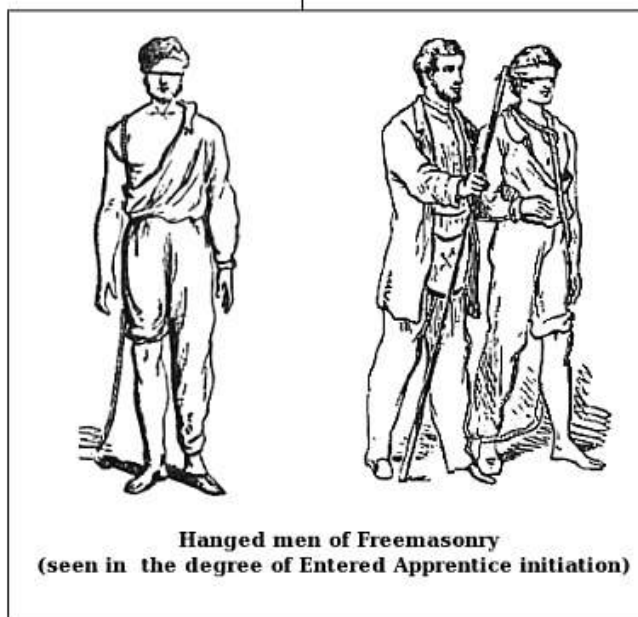
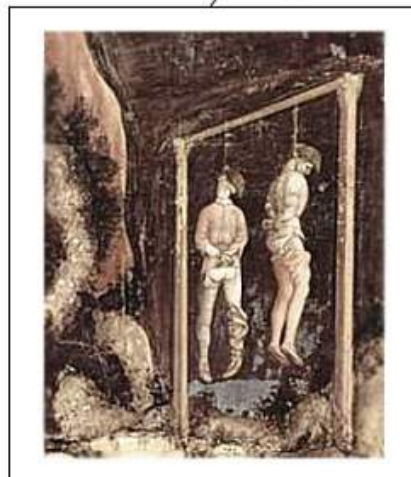
の間にも問題となる接続性がある。

以下、図示の部を参照されたい。

structure of [one scene from "title no.189" (1990) of (Japanese manga series) JoJo's Bizarre Adventure —Stardust Crusaders]



Hanged man



最上段は先に挙げた『ジョジョの奇妙な冒険』の予見的描写のありようにまつわっての図の

再掲。そこでは劇中の「予言漫画」にて「911と刻印された衣服」を着用した男が電柱に「吊されたまま」死亡しているとの描写がなされているが、それは広くも言葉の定義をとらえて見れば、「ハングド・マンありよう」となる（：吊されての縊死者）のみならず「吊されて串刺し死を遂げた者」もが定義上、ハングド・マンに含まれているとのことについてはすぐにもってして下述する）。

中段はルネサンス期の画家ピサネッロの描いた画（英文 Wikipedia「Hanging」項目に掲載されている画）に認められる典型的な

「絞首刑に処された者」

の似姿。すなわち、ハングド・マン（吊された男）の似姿となる。

その点、ハングド・マンとくれば、いや、吊された男ことハングド・マンと結びつけられる行為そのものに着目しての「ハンギング」と呼ばれる処刑方法とくれば、狭義には「窒息させるべくも首吊りにて処刑する」との処刑法（にて殺される者の末路）であるとはされるが、広義にはイエス・キリスト・モデル、「磔刑（十字架上の死）あるいは吊された上での「串刺し」のように吊されたまま死をもたらす行為」もそこに内包されるとされている。につき、一細かいことをくぐぐと紹介するようではあるが、本稿では「厳密さ」をとにかくも重んじているとのことがあるため、一応、述べておけば— 英文 Wikipedia「Hanging」項目の冒頭部にあって現行、Hanging is the suspension of a person by a noose or ligature around the neck. The Oxford English Dictionary states that hanging in this sense is "specifically to put to death by suspension by the neck", though **it formerly also referred to crucifixion and death by impalement in which the body would remain "hanging"**。（訳として）「ハンギングとは縄（なわ）の輪あるいは首周りでの縄による吊るし上げを指す。公式にはそれは「磔刑」あるいは「吊るし上げ状態の維持なしでの「串刺し」による死亡もまた含意しているも、オックスフォード英語辞典によれば、この意でのハンギングは取り立てて首吊りによる死をもたらすことであるとされている」（訳はここまでとする）と記載されているところである）。

下段はフリーメーソンの第一階級、入り口にあたる徒弟位階へのイニシエーション（入門の儀）を受けるものが絞首刑受刑者の格好 — 首に縄とくりつけられ、目隠しをされるとの格好 — をさせられるとことにまつわる 19 世紀初出のメーソン儀礼およびシンボル体系の要覧書 — 陰謀論鼓吹との意で否定的なるものではなく組織儀礼のハンドブックのようなもの — としての Duncan's Masonic Ritual and Monitor (1866) にて掲載の図像よりの再掲となる。

お分かりか、とは思うが、『ジョジョの奇妙な冒険』の予見的描写は

「吊された男」

の使用との観点でフリーメーソンやりようと結線しているとのことがあるわけである。

かてて加えて（より性質悪きことに）、先に言及してきた接合性、すなわち、一直線に並ぶ「月」「一つ目」「太陽」という象徴を介しての『ジョジョの奇妙な冒険』予見描写とメーソン・シンボリズムとの接合性が

「「エンタード・アプレントイス位階」（フリーメーソンの「第一位階」）のトレーシング・ボード（一直線に並ぶ「月」「一つ目」「太陽」という象徴と結びつくもの）の構造と関わるころのもの」

であるのに対して（細かくも先述のことである）、フリーメーソンの儀式体系にあって「絞首刑受刑者」の似姿が目立って具現化を見ているのも同じくものフリーメーソンの「第一位階」たる徒弟位階、「エンタード・アプレントイス」（への足入れ儀礼）となっているとのこと「も」ある。

(その点、[何かに憑かれたように目分量が利かぬとの者達]、あるいは、[筆者のような人間の言論を妨げたいといった胸中が透けて見えるような者達]ら、そう、「100の重要な話」をなしているときに「1の上澄み」にあたる部分、傍論となるようなことばかりに拘(こだわ)る姿勢をとりもし、その拘りのスタンスから他の重要な主張に目を向けず、また、その拘りが当然であるような[ご意見]というものを目立つように披瀝・吐露するような[度し難い手合い]らは筆者がここでなしているような話をもってして、[たかだかものその程度のこと]といったことが筆者主張の主色をなすように筆者のことでして

「説得力あるフリーメーソン陰謀の告発者である」

などと 一頭の具合のよろしさを彼ら流に前面に出した上での[褒め殺し方式]など用いながら「意見」呈示する材料に使うかもしれないとらえるが、繰り返すも、傀儡(くぐつ)化の力学があまねくも滲透・作用しているとの証拠 —サーカムスタンシャル・エヴィデンス、いわばもってしての間接的証拠— が具現化しているこのような忌むべき世界で、

「『ジョジョの奇妙な冒険』の著者がメーソンである」

(あるいはもってして)

「『ジョジョの奇妙な冒険』はフリーメーソンの陰謀を吐露すべくもの漫画である」

なぞといったことを強調するのが筆者の意図でもなければ、そのような[真偽不明なること]を云々するのが本稿の趣意でもない。

筆者意図にして本稿趣意となるところは —([十分条件]ではないが[必要条件]の問題と判じられるところとして)— [直視して抗わなければ種族に明日などあるわけがない]との現実的状况をただひたすらに具体的証拠にもって呈示・訴求することであり、ここでの話「程度のもの」ともそうしたことに間接的に関わっているとの認識があつて筆を割いているとのものである (:筆者は[マリオネット使役力学] (とし表しようがないもの)がいかようなものとして呈示できるか長大なる本稿で折に触れて論じているわけであるから[本当に語るに値するような向き]はそうした履き違いはなさないかと思いつつ、「一応」、くだくだしく書き添えもするところとして、である)

D

問題となることの指摘を続ける。

『ジョジョの奇妙な冒険』の予告描写について述べられるところには次のようなこと「も」ある。

「同作品の911 予見描写 (として一部世人に指摘されもしてきた描写) は

[フリーメーソンのシンボリズム]

と接合しもしている (先述なしてきたように漫画作品にみとめられる予見描写は【月と太陽と一つ目 (型の911) を一直線に並べる】との構図をとっているわけであるが、フリーメーソンの徒弟位階の訓示用図像であるトレーシング・ボードは【月と太陽と一つ目 (の形態をも取る明けの明星やブレイジング・スター) を一直線に並べる】とのものであり、また、漫画にみとめられる予見描写が【吊されて串刺しにされた男】としてのハングドマンを持ち出しているものであるとのことがある中でフリーメーソンの同じくもの入門徒弟位階では目隠しをされたハングドマン (絞首刑対象者) の扮装をするとの儀礼が執り行なわれている) うえに、また、同描写は【時限爆破行為の寓意】にも —メーソン・シンボリズムそれ自体と関わるところで— 「絶妙に」接合しているとのことがあるものである」

細かくもは次のようなことが摘示できるようになっている。

⇒

「『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』にての予見描写はオインゴ・ボインゴ兄弟の【オインゴの予言漫画にまつわるもの】として具現化しているのであるが、そちらオインゴ・ボインゴ兄弟というのは主人公ら一行（先に作中登場人物に振られた固有名称を取り上げての話の中にて既述の[空条承太郎]を中心とした一行）を【時限爆弾入りのオレンジで爆殺しようとして逆に振り返りにあった】との落ちがつけられている者達である（：オインゴの特殊能力が発現しての予言漫画—いいだろうか。[911の予見描写]として現実世界で語られているシーンを現出した「フィクションの中の」[作中漫画]がそちら予言漫画ともなる—にて主人公を「時限爆弾入りのオレンジ」などという「どうしてこのようなものを持ち出してきたのか?」との「特殊なもの」で殺せるとの描写がなされたために、彼ら、オインゴ・ボインゴ兄弟はそうしたもの、時限爆弾入りのオレンジを「予言漫画」の託宣に従いもしてわざわざ作り上げ、それを主人公に食させしめようとしたのだが、結局、失敗して振り返りにあったと描写される）。

そうした

【予言をこととする者達によるオレンジに混入されての時限爆弾による爆殺の試行】

という話の流れに関わるところとして「問題となる」予見描写—(フリーメーソンのシンボリズムと「多重的に」どういふわけなのか結合しているようになっていること、既述のオインゴの漫画に見る【911の上着を着た男がハンゴド・マンとなって死亡する】との予見描写)—を含む『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』の一連の部は【爆弾仕かけのオレンジ】

という副題が振られたコミック単行本（先にオインゴ・ボインゴ兄弟にまつわる予言的言及を含んでいるとのこと、解説している集英社「単行本」版『ジョジョの奇妙な冒険』第20巻）に収められているとのことがある（：単行本第20巻としての【爆弾仕掛けのオレンジの巻】はリニューアルされての「文庫版」とは異なるものだが、古本チェーンなどに普通に並べられているもの、それがゆえ、内容確認も容易になせるものか、と思う）

（：尚、予言描写それ自体からは離れての複数話が収録されながら【爆弾仕かけのオレンジの巻】と振られているとの集英社「単行本」版『ジョジョの奇妙な冒険』第20巻が発行されたのは1991年2月となる（その中にて予言描写を含む作中話が雑誌にて初出を見たのは1990年となる）。については和文ウィキペディア[スターダストクルセイダース]項目「にも」英文ウィキペディア[Stardust Crusaders]にも同巻への言及が—題名だけのところながらも—なされている次第である—「現行の」英文ウィキペディア[Stardust Crusaders]項目にあって「も」The Exploding Orange(直訳すれば、爆発するオレンジ)との英文タイトルと和文タイトルがアルファベット表記されての Bakudan-jikake no Orenji の二通りがきちんと【書誌情報】として表記されているところともなっている—)

繰り返すが、【爆弾仕かけのオレンジの巻】というタイトルが振られた単行本に掲載されている作中話(エピソード)の中で【時限爆弾を仕掛けたオレンジ】(などとのもの)で主人公を暗殺しようとする兄弟らが参照していた予言描写能力を伴った漫画の中で【911の予言描写】が登場を見ているのである(※)。

(※既に【911の予言描写】が登場するセクションについては言及しているわけだが、ここでは和文ウィキペディア[スターダストクルセイダース]項目にての現行の記載内容を引いて、【爆弾仕かけのオレンジ】による暗殺挙動がどういったものなのか、内

容紹介をなしておくこととする。

(以下、和文ウィキペディア[スターダストクルセイダース]項目にての現行の記載内容よりの引用をなすとして)

“アスワンで待ち受けていたオインゴボインゴ兄弟の兄。弟のボインゴとコンビを組み、**弟の予知能力を頼りに行動する**。最初は喫茶店に先回りし、ジョースター一行に毒入り紅茶を飲ませようとしたが、イギーに邪魔されたことで失敗する。**次に承太郎が爆弾の爆発に巻き込まれるという予知を実現させようとするが、爆弾仕掛けのオレンジを仕掛けようとする際に現れたジョセフとポルナレフに慌てて承太郎へ化けたため、本物の承太郎の代わりに予言に巻き込まれてしまう**。ジョセフたちと同行する際に様々な仕草などで怪しまれながらもなんとか逃亡に成功するが、捨てられた爆弾仕掛けのオレンジをうっかり踏んでしまったことで自爆し、存在を気づかれな

いまま敗北してしまう”

(以上、引用部とした)

さてもってして、『爆弾仕掛けのオレンジ』という「極めて印象深い」タイトルについては

『時計仕掛けのオレンジ』(英文原題はクロックワーク・オレンジこと、Clockwork Orange)

というタイトルの著名小説・映画作品が現実には以前から存在している中で同作より影響を受けていることは火を見るより明らかといった按配のものである (貴殿が『爆弾仕掛けのオレンジ』と『時計仕掛けのオレンジ』という二つの類似したタイトルの作品の間に『オマージュ(敬意を抱いた他作家に対する明示的確信犯的模倣行為)を示してみせたもの』と『オマージュの対象とされたもの』との間の関係が「ない」などと考えられるとの向きならば話は別だが)。

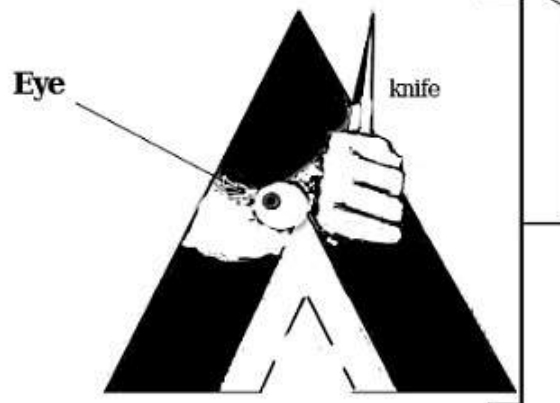
その点、『時計仕掛けのオレンジ』という作品は元来、英国にて刊行された小説作品なのだが、世間一般で知られているのは『2001年宇宙の旅』や『博士の異常な愛情』や『フルメタルジャケット』といった監督作品で知られる映画界の巨匠にして鬼才、スタンリー・キューブリックがメガホンをとった映画版『時計仕掛けのオレンジ』の方となろうか、と思う (：映画版『時計仕掛けのオレンジ』の方についてはここ日本でも[いみじくも「本当の」映画通を任ずるとの向き]であればそちら作品を知らないし見ていないとの者はほとんどいなかろうといった按配で「有名な」作品とあろうかと思われる)。

そちら映画版『時計仕掛けのオレンジ』の「よく知られた」リリース・ポスター (国内でもレンタルDVDのパッケージにそのデザインが流用されているのが見受けられるとのポスター) は
『三角形の中の一目』

を極めて印象的に描いたものとなりもしている。一下の図を参照のこと (：そちら[三角形の中の一目]をフリーメーソンのシンボリズムと強くも断ずるとの式に反感を呈する向きもこの世界にはいるのだが、はきと述べ、ここまででも実例呈示して示したきたように[中空に浮かぶ一目]ことオール・シーイング・アイはフリーメーソンの主要なシンボルのひとつ「とも」になっており、かつまた、それが正三角形と結びつけられていることもフリーメーソンら自身が自認しているところである。一にまつわってのフリーメーソンの識者階級(となれば社会の上層での役割を与えられた者にしてある程度の知識水準を有している者であるとの存在)による申しようをも引いておくこととする)。

(続いて予見描写と【三角形の中の一目】との接点についての図示をなす)

Structural characteristics of Theatrical release poster of A Clock Work Orange



最上段。映画『時計じかけのオレンジ』にて使用されたシネマ・リリース・ポスターのその特徴的な部分のみ押さえて強調、他はカットして描画したとの再現図を挙げている（現物、デザイナーの Bill Gold によって手がけられたものは Theatrical release poster として A Clockwork Orange (film) と銘打たれたの英文ウィキペディア項目など諸所にて掲載されており、オンライン上よりすぐに確認できるものとなっている —あるいはよくレンタルショップに足を運ぶ向きならば、棚置きされた DVD コンテンツのカバー部にもそれが見出せることか、と思う—）。

中段。ドル札を握ったものならば誰もが知るところの 1ドル札に刻印されてきたアメリカ合衆国国璽(事実上の国章)に認められる、【ピラミッド頂点に輝く神の目】を挙げている。

下段。英文 Wikipedia [Eye of Providence] 項目にも図像が掲載されているとの初期よりフリーメイソンが用いてきた —エプロンその他のありとあらゆるところで刻むのかたちで用いてきた— メイソン由来の一つ目のシンボル画。図を見ればお分かりいただけるであろうが、

中段の合衆国国章が一つ目が光線を四方に発しているのと同様にメーソンの一つ目も光線を四方に発している(※)。

※その点、一部フリーメーソンやフリーメーソンに起因する陰謀史観を否定あるいは愚弄したいとの筋目の向きによると、

「合衆国国璽に見る[ピラミッドの中の一つ目]の構図はメーソンに由来するところ「ではない」。また、万象を見通す神の目のシンボリズムは元来、キリスト教のシンボルであったものである。であるから、国璽に[ピラミッドの中の一つ目]が入れ込まれていることをもってして合衆国がメーソン国家であると論ずるのは不適切であり、そういうことを吹聴するのは[頭の具合のよろしくはない陰謀論者ら Conspiracy Theorists]である」

とのことになったりするようであるが、[歴史的事実]として述べられることはフリーメーソンが多く関わっていたことが知られる[フランス革命]にて採択された人権宣言にも[三角形の中の万物を見通す目](元来、キリスト教のシンボリズムであったものの、オムニセンス、万象・万物を見通す全能なる神の目であるとされるシンボリズム)は描かれているとのことがあり、また、フランス革命に多少先立つ、アメリカ独立、そう、

[ボストン茶会事件] (ボストン茶会事件は日本にてお受験科目としての[世界史]を[学習]する者にとりそれを知らなければ望む大学にも行けぬとの歴史にあっての重要エピソードとなるが、同事件についてもフリーメーソンリーの関与が際立っていたとの話が伝わっている/同事件については日本語ウィキペディア[ボストン茶会]事件項目などにて現行、ボストン茶会事件におけるメーソン人脈関与を[都市伝説]であるなどどこぞやの「相応の」類が「断定」しているとの記述が目につくが、英語圏で史実として語られるところとしてボストン茶会事件に至るまでの「前段階」の流れにて主導的な役割を果たした John Rowe(英語媒体でよく引き合いに出される歴史上の人物ジョン・ロー)という商人は歴とした有力メーソン —グランド・マスターにまでなった者とも表される— であることが「よく知られている」(英文 Wikipedia[John Rowe (merchant)]項目程度のものにて現行ではその点についての史実としての解説がなれている))

を発火点としてはじまったとの [アメリカ独立運動] からしてメーソンが多く [ファウンディング・ファーザーズ] (独立の父ら) として関わっているとのことがあり、そうしてできあがった国家にて採択されたのが上掲のドル札に刻まれているような国璽(事実上の国章となっている印章)であったとのことである。

そうもしたことにまつわって、

「理念も理想も含めて全てが[偽物・紛い物]である、叩いても押しても言われた通りのシステムの運営のなしかたしかなさないとこのそういう [精神と魂の紛い物] らが組織性を帯びての紐帯として多く群れて [重要部] を構築してきたし、いまなお構築しているのがこの世界である」

といった言、そう、

[一步引いての立場から見れば、悪臭が鼻についてならないとのこの世界の[偽物]性にまつわる申しよう]

を赤裸々になしもする正直でありたい向きら —重要なところでの虚偽(不信の

根)は人間存在の存続にとり、無論にして長期的に有害であるとの観点を持ちもして、おのれを包含する種族的視野として正直でありたいとの向きら— に対してそうした向きの[正直さ]を否定したいとの者らなどは

「この世界にあっては[特定の力学の彙籠中の存在となっている相応の一群の[人形]のような者達の紐帯]が社会構築要素として見事に機能しているなどということはなく、この世界は悪しき紐帯とは無縁な[自由で独立した人間]からなっている自由なる世界である」

などとの耳に心地よいお話 (正しさ・適正さのみがおのれを含む種族を救いうるのだらうとの所信を持っている筆者のような人間から見れば[とんだお伽噺フェアリー・テイル]ではある) を強調したいとのその立場からここでの書きようを好ましくなくとも見ることか、とは思いますが、とにかくも、この世界の今までの[革命]の推進力はフリーメーソンという組織に組み込まれた者達、号令一下、軌道修正も容易であらうとの筋目の者達にあまりにも多くを求められるようになっているとの経緯がある。

(ちなみに、[[望ましくなき組織性やそれに伴う人間性の欠如]に関する指摘を十把一絡げに[陰謀論]でひとくくりにし、確たる反論の論拠もなく陰謀「論」者の戯言と断ずるような手合い]が「完全に操られているとの式」[内面の一部が「強奪」されているとの式]ではなくに阿(おもね)っているとのことが透けて見えるとの場合に筆者がまったくもって好かぬとらえているのはそういう者達が、多く、我々を「最終目的」のために殺すと明言しているような[力学](超高度人工知能、教祖や神、何でもいいが、自身の安泰と生活のためもあって、そして、精神の至福という脳機序の問題もあってであろう、崇拜者に絶対視される存在らのフリをできしようとの人工知能を当然に用いてであろうと思われる式にて彼らにとって望ましい文明の養殖に長期的視野で努めてきたと解される力学)に「実に愚劣に」阿(おもね)っている、そうしたかたちで阿(おもね)っていることにさえ気づけぬ者であらうとの察しがつく、それだけの情報・判断事由が手前手元にあるからである。といった者らは(それがいかなるものかは膨大な文量を割いての本稿を介してよくご判断いただきたいのだが)[我々を殺すことになる力学]の発するところの側から「さえも」[愚劣さ]・[小心さ]・[あざとさ]、どれかが際立っているとの特性がゆえに心底では軽蔑されようとの者ら(相手方に血を好む尚武・戦(いくさ)好きの気風が際立っているのなら最終的に[餌付けなしてきた側]に「嬉々として」殺されてしまうような類)と見えよう、とすらとらえている)

また、ここでの話との絡みでさらに述べておけば、メーソン関係それ自体の人間の著作からして彼らがただ単純にもの[一つ目]のみならず

[三角形の中の一つ目]

をも紋章として好む傾向があると記述しているものもあること「も」ある(陰謀論者がどぎつい本を流通させていることが多い「国内で」プロ・メーソンの(親メーソンの)なる著作を例として引けば、『フリーメーソン源流紀行』といった本にそういう表記が実例呈示込みでなされていたことか、と思う)。

尚、この世界は —([相応の類]で満ち満ちているために、といったことらが適正にほとんど顧みられないのかとも見えるところとして)—

[フリーメーソン (その押しつけられた二重話法の愚かさ度合いを[人

形らを用いるような相応の力学]にすら同類(人形)を用いて茶化されるような者達でもいい) にまつわっての内部者か見識を深めた外部の人間にのみ(常識的視野でも)分かつらうとの二重話法が具現化していると見えるもの]

で溢れかえっていてもする (:国内で [[赤・青・黄の三原色]と[(八葉)蓮華]と[価値を創るなどといった「創」を前面に出してのフレーズ]をすべてワンセットで前面に押し出している団体]が目には留まれば、その団体の中で影響力を有している紐帯が何なのかマーケティングの問題として分かる人間にはすぐに分かるようになっていたことにも通底するところとして、である。その歴史的具現化について述べれば、たとえば、[アメリカ合衆国の(実質的な)国章]のハクトウワシが描かれている側にあつてはシール・オブ・ソロモン、「[ソロモンの]象徴」と結びつく六芒星が描かれており(本稿で折に触れて指摘しているように[ソロモン神殿]は[フリーメーソン思潮の根本となるもの]であることがよく知られている)、そのソロモン・シンボルとしての六芒星をなぞる方向にて[合衆国の(実質的な)国章]の[ピラミッドの中の一つ目の意匠]が描かれている側にあつて描画されているヴェルギリウス —ダンテと地獄巡りをしたことが描かれもするローマ期の代表的文人— に由来するラテン語文言、Annuit coeptis[(神が)了承されし我らの挙]および Novus ordo seclorum[この時代にての新しき秩序]を眺めて見ると「メ」「エ」「ソ」「オ」「ン」のアルファベット綴りが浮かび上がってくるのしたことなどは[よく知られた事実]である)。

しかし、そうしたことを

[状況証拠・印象論に重きを置いての話]

としてすべて脇に置いたうえで見た上でも、とにかくも、ここで問題視していることとして次のことが「ある」と述べられることに相違はない。

⇒

「三角形の中の一つ目は確かにメーソン勃興「前」から欧州のキリスト教シンボリズムとして見受けられたものなのだが、何にせよ、メーソンがそれと同様のものを好む傾向があるのは事実である」



" the Grand Architect of the Universe, whom it is the usage, even in ordinary writing, to designate by the initials G.A.O.T.U., is accordingly presented to us in a variety of symbols, three of which particularly require attention. These are the letter G, the equilateral triangle, and the All-Seeing Eye . "

—The Symbolism of Freemasonry: Illustrating and Explaining Its Science and Philosophy, its Legends, Myths and Symbols (1882)

上掲図は 19 世紀に生きた学究系フリーメーソンとして知られ、現在でもフリーメーソン案内本といったその著作が広くも読まれていることが伺い知れるように

なっているとの Albert Mackey アルバート・マッキー (英文 Wikipedia[Albert Mackey]項目にて “ Albert Gallatin Mackey (March 12, 1807 – June 20, 1881) was an American medical doctor and author. He is best known for his writing many books and articles about freemasonry, particularly the Masonic Landmarks. [. . .] He served as Grand Lecturer and Grand Secretary of The Grand Lodge of South Carolina, as well as Secretary General of the Supreme Council of the Ancient and Accepted Scottish Rite for the Southern Jurisdiction of the United States. ” (訳として)「アルバート・マッキーは米国の医師にして著述家となり、フリーメーソンにまつわる著述や記事ら、殊にメーソン旧跡にまつわる著作にて知られている向きとなる。…(中略)…同男アルバート・マッキーは[合衆国にてのスコットランド位階にての南部管轄の最高評議委員]であるのと同時にサウスカロライナのグランド・ロッジにてのグランド・レクチャー、そして、グランド・セクレタリーとしての役割を果たしていた」との解説がなされているような向きとなっている) の手になる著作、

The Symbolism of Freemasonry: Illustrating and Explaining Its Science and Philosophy, its Legends, Myths and Symbols (『フリーメーソンの象徴主義:その科学と哲学、その伝説と神話とシンボルについての描写と説明』)でも訳せよう著作(1882年刊行版)にして「現時、Project Gutenberg のサイトより全英文テキストが誰でも入手できるようになっている」との著作)

にての文言を挙げ、そちら文言に対応しての図を挙げたものとなる。

図を見ていただければ瞭然としてお分かりいただけようが、アルバート・マッキーは

(その著作 The Symbolism of Freemasonry: Illustrating and Explaining Its Science and Philosophy, its Legends, Myths and Symbols より引用するところとして)

the Grand Architect of the Universe, whom it is the usage, even in ordinary writing, to designate by the initials G.A.O.T.U., is accordingly presented to us in a variety of symbols, **three of which particularly require attention.** These are **the letter G, the equilateral triangle, and the All-Seeing Eye.**

「[ザ・グランド・アーキテクト・オブ・ユニヴァース]は —それは日常にて用いる書き物にてでさえ G.A.O.T.U の頭文字で表されるとの方式に適しているところの御名だが— 応ずるところに応じて様々なシンボルら、殊に 三つのそれが注意要するとのシンボルの形態にて示される存在となっている。(三つの注意を要するとのシンボルにつき)それらは[Gの字]、[正三角形]、そして、[万物を見通す目]である」

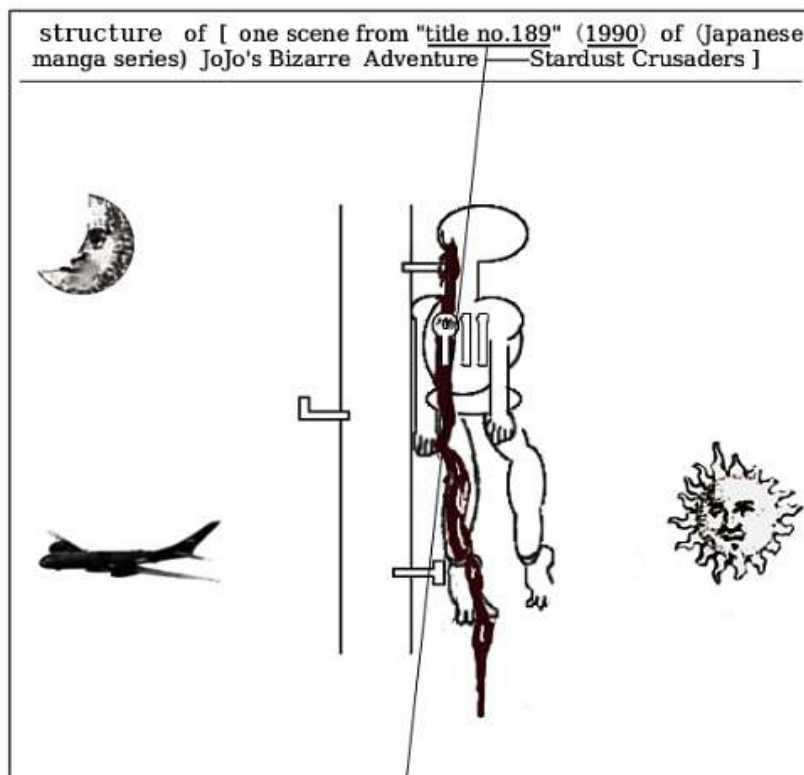
とのことを述べている。

以上の引用部にてフリーメーソンが神(のような存在)として崇め奉っている[グランド・アーキテクト・オブ・ユニヴァース]の象徴であると明言されている [正三角形] [万物を見通す目] [アルファベットのG] らを挙げたのが本稿にあっての訴求用に、と作成した上の図となる —につき、中央のエプロンについてはこれまたオンライン上より全文ダウンロードできるようになっているとの小冊子的著作 The Apron its Traditions, History and Secret Significances (1914)にて掲載なされているものである。極々単純化させて述べれば、「(位階・立ち位置によって役割も違ってくるのだろうが)フリーメーソンとは詰まるところ、呈示のような [一つ目が(不気味に)

刻まれたエプロン] を付けて [チェス盤上の床の交流会館] で [偉大なるプラン] について [語り合う] との筋目の者達である」ということである—。

ここまで摘示の通りフリーメーソン (という組織体の紐帯に取り込まれた者達) が [一つ目] [三角形] に尋常一様ならざる拘 (こだわり) をみせている (ようにされている) こと自体は [事実] である。

余事記載を過分に含んでの直近の説明が長くなったが、下図にて呈示の関係性をご覧いただければ、映画『時計じかけのオレンジ』のリリース用ポスターがメーソン・シンボルと結線するものであること、そして、それが (ここまで問題点を示してきたとの) 国内漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』にあっての予見描写と接合していること、ご理解いただけることか、とは思う。



"Khnum' Oingo and 'Tothi' Boingo (1)"

—include

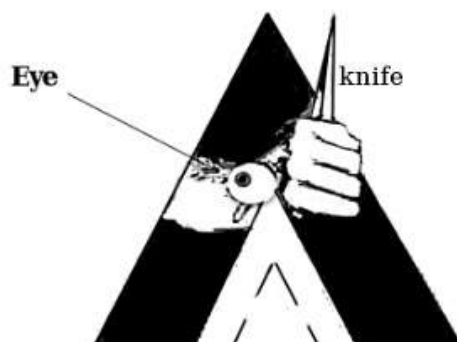
Tankōbon titled The Exploding Orange (the bomb hidden in orange)

(Japanese title : Bakudan-jikake no Orenji)

similar

(Japanese title : Tokei-jikake no Orenji)

Structure of Theatrical release poster of A Clock Work Orange



ここまでの内容を理解なせば、

【漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』（の中の第三部 [スターダストクルセイダース]）にあつての奇怪なる予見描写】

が何故、[時限爆弾爆発挙動]（オレンジ組み入れ型時限爆弾を用いての挙動）との式で [フリーメーソン・シンボリズム] と結節するののかとのこともご理解いただけることか、とは思う（：一応、述べておくと、既に予見描写がフリーメーソンのシンボルと多重的に接合するようになっている — 予見描写にはエンタード・アプレンティス位階などのトレーシング・ボードに見る[太陽][一つ目][月]の訓示利用図像との共通性が認められる、予見描写にはエンタード・アプレンティス位階の参入者が[目隠しされて絞首刑受刑者]を演じさせられるとのことに通ずるハンゴド・マンの寓意が関わっている— ことを指摘してきた中での「加えても、」の話としてそういうことがある）。

さらに述べれば、である。漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』（の中の第三部 [スターダストクルセイダース]）にあつての奇怪なる予見描写というものについてはここまでその作品特性について詳述してきた作品ら、そう、

[ワールド・トレード・センターでの双子の塔に対する時限爆破の寓意と共にあり、また、フリーメーソンのシンボリズムとの接合性を有した作品ら]

のそれと同様の類型に入るもの「とも」になっていることもまじめな読み手には理解いただけていることか、と思う — ※本稿ここまでの流れにあつては（海外作品の一例として例示した）『ファイト・クラブ』、『タワーリング・インフェルノ』、（国内作品の一例として例示した）『ルパン三世くたばれ！ノストラダムス』の中の特定描写がすべて [ワールド・トレード・センターの災厄] [ビル時限爆破] の双方と結びついているものとなっていること、また、それら描写がフリーメーソン・シンボリズムと結びついてもいるとのことを呈示してきた — 。

ここまできたところで申し述べるが、本稿の先の段では

[『ジョジョの奇妙な冒険』にての予見描写がフリーメーソン・シンボリズムのみならず錬金術のシンボリズムら（実例呈示しての欧州の錬金術にまつわる古文献に認められるシンボリズムら）「とも」接合しており、かつ、そのシンボル接合性 — 賢者の石というものにまつわる接合性 — を突き詰めて見てみると、[黄金の林檎] にまつわる寓意もが浮かび上がってくるようになっている]

とのことを — 先だつてのひとまとめにしての長くもなつての補足の部にあつて — 指摘していた（詳しくはひたすらに明示しての典拠らに依拠し、それら典拠に依拠しつつもの図示をなしながら展開していたとの先の段の解説部の内容を参照されたい）。

くどくも従前内容を振り返りつつも申し述べるが、そこに見る、

【黄金の林檎】

の寓意が

【911の事件の予見事象】

にも、また、

【ブラックホール生成疑惑が取り沙汰されるに至っている加速器実験】

にも関わっている、しかも、[双方が互いに接合するところ] で関わっているとのこと がある（本稿をきちんと検討すれば分かるが、この世界には【911の予見をなすような作品にしてブラックホールのことも関わるとの作品ら】が複数、相互に結びつくかたちで実在しているとのこと がある）との指し示しに努めてきたのが本稿となる。

以上、もし把握未了ならば、本稿の内容を振り返って確認いただきたいことについて記載したうえで言及しておくが、

「黄金の林檎は歴史的に[オレンジ]と結びつけられてきた背景がある存在である」

とされているとのことがある(※)。

(※出典として:英文 Wikipedia[Golden apple]項目にての Identity and use in other languages ([他の言語にての(黄金の林檎の)定義ありよう、そして、使用])の節の記載を引けば、
“ In many languages, the orange is referred to as a "golden apple". For example, the Greek χρυσομηλιά, and Latin pomum aurantium both literally describe oranges as "golden apples". Other languages, like German, Finnish, Hebrew, and Russian, have more complex etymologies for the word "orange" that can be traced back to the same idea . ” 「いくつかの言語にてオレンジは黄金の林檎として言及されている。例えば、ギリシャ語の χρυσομηλιά、そして、ラテン語の pomum は双方、字義通りもの[黄金の林檎としてのオレンジ]を表しての言葉である。他の言語、ドイツ語、フィンランド語、ヘブライ語、ヘブライ語、ロシア語はオレンジとの言葉につき同様の観念に行き着きうるとのより複雑な語源を有している」と記載されている)

本稿の内容をきちんとご理解いただけているとの向きにあつては以上表記のこと(黄金の林檎はオレンジと一致視されているとのこと)が『ジョジョの奇妙な冒険』の予見描写登場の部をして

[爆弾仕かけのオレンジ] (Bakudan-jikake no Orenji (The Exploding Orange) ←→ Tokei-jikake-no-Orange)

から

[爆弾仕かけの黄金の林檎] (Bakudan-jikake no Golden Apple (The Exploding Golden Apple) ←→ Tokei-jikake-no- Golden Apple)

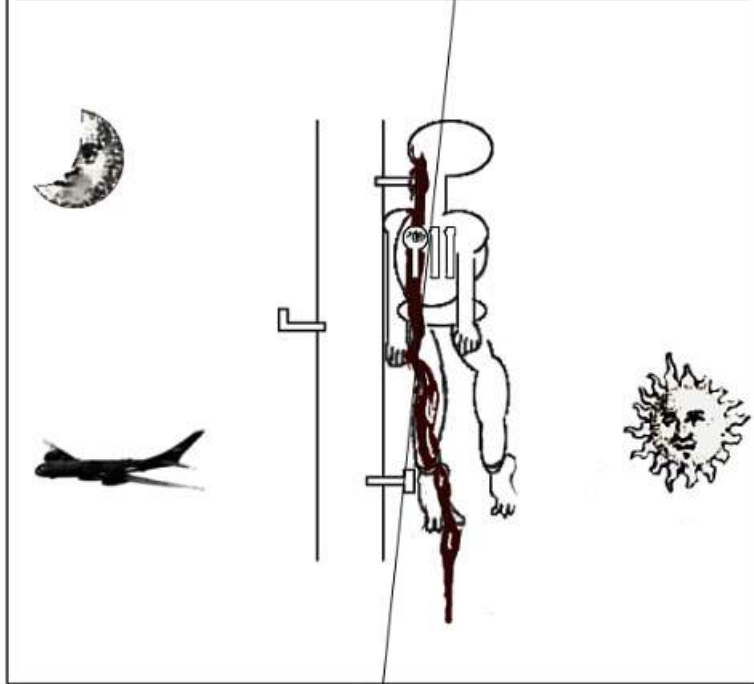
へと変質させ、それがいかような意味・観点で問題になるのか、お分かりいただけるものか、とは思(ちなみに、[黄金の林檎]は[トロイアの【内破】としての崩壊の元凶]になったものでもある —トロイアに引導を渡した[木製の馬]は長期的戦争の終盤にて引導を渡すための手段として用いられたものであり、そも、伝説のトロイアが破滅に向かった戦争の原因は黄金の林檎にあるとされる(本稿の**出典(Source)紹介の部 39**を参照のこと) —)。

さて、『ジョジョの奇妙な冒険』では予言をなしている敵役オインゴ・ボインゴ兄弟らに由来するところとして

[それを食した標的を【内側から破壊する】(内破させしめる)ことを企図してのオレンジ混入爆弾(なる奇態極まりないもの)]

が登場してくる。そのことと従前、本稿にて指摘したことの複合図解部を下に設けておく。

Structure of [one scene from "title no.189" (1990) of (Japanese manga series) Jojo's Bizarre Adventure — Stardust Crusaders]



"Khnun' Cingo and 'Toth' Boingo (1)"
|include

Tankōbon titled The Exploding Orange (the bomb hidden in orange)
(Japanese title : Bakudan-jikake no Orenji)

similar

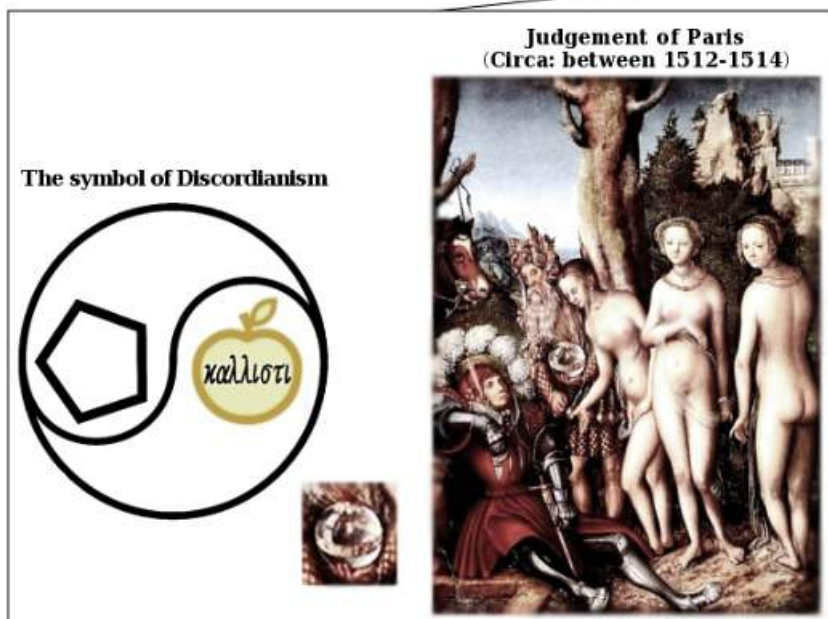
(Japanese title : Tokei-jikake no Orenji)

A Clock Work Orange

" In many languages, the orange is referred to as a "golden apple". For example, the Greek χρυσομηλιά , and Latin pomum aurantium both literally describe oranges as "golden apples". Other languages, like German, Finnish, Hebrew, and Russian, have more complex etymologies for the word "orange" that can be traced back to the same idea . "

——Wikipedia [Golden apple] article

Golden apple



The symbol of Discordianism



大概のところは既に説明してきたところの繰り返しとなる前掲図、その下段部にあって呈示しているのは

[9月11日に起こったかの事件の多重的先覚的言及作品としての性質を帯びているとの70年代ヒット小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』にあって(図示されるとのかたちも含めて)頻出を見る[黄金の林檎(ニューヨークと結びつくと解される)とペンタゴンの象徴を並列描写してのディスコーディアニズムのシンボル]の似姿](下段左)

[9月11日に起こったかの事件の多重的先覚的言及作品としての性質を帯びているとのこと、つい先だって解説してきた映画『ファイト・クラブ』にて登場するツインタワーの間に設置のオブジェ、ザ・スフィアと類似系を呈する[黄金の林檎]を描いているルネサンス期のルーカス・クラナッハ・ジ・エルダーの絵画『パリスの審判』](下段右)

となる。

911の事件の多重的先覚的言及作品としての性質を帯びている映画 Fight Club『ファイト・クラブ』では現実世界のワールド・トレード・センターはツインタワーの合間に置かれていたオブジェ、ザ・スフィア The Sphere の露骨なるイミテーションが登場を見ており、上掲のルーカス・クラナッハ絵画に見る黄金の林檎の似姿とほぼ同じくもの似姿を呈してのそちらオブジェ・イミテーションが[時限爆破]されることになる —その点にまつわって何が問題になるのか、計りかねるとの向きは本稿の従前の内容を読み返していただきたい—)

直近にての内容を受けての「さらにも、」の話として

[黄金の林檎]。そちらが[911の事前言及をなしているが如く文物]と関わっているとのことについてここで脇に逸れての【他例】を紹介しておくこととする(：既に映画『ファイト・クラブ』にまつわる事例、小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』にまつわる事例、そして、直近にての[爆弾仕かけのオレンジ](=オレンジは欧州にて歴史的に黄金の林檎を指すと見做されてきたとの背景があると先に説明をなしている)を介しての青少年向け国内フィクション『ジョジョの奇妙な冒険(スターダストクルセイダース)』にまつわる事例を紹介してきたうえでのこととして「さらにも、」の事例紹介をなしておく)。

ここで[以下の指し示し事例]の[遺漏なくもの裏取り確認]のために求められる材料は

[映画 Trading Places (邦題)『大逆転』収録DVD —大抵のレンタルビデオ店には置いているであろうとのメジャーな作品—、及び、たかだかウィキペディア程度の媒体の内容を確認できるだけの情報収集環境(情報収集能力)]

だけであるとして話を続ける。

さて、1980年代にアフリカ系アメリカ人エディ・マーフィー主演のコメディ映画として大ヒットを見た米国映画作品として

『大逆転』(原題は Trading Places)

という映画作品が存在している(同作、日本でも何度か洋画劇場枠、日本の民放テレビ局

經由で夜9時から放映されていたとの作品となる)。

1983年に公開されて盛況を博したとの同作の粗筋は —そちら粗筋の細かき把握まではここでの訴求事項にあって求めるようなことでは「ない」のだが— 現代版『王子と乞食』といった類型の物語ともなり、

[人の運命を賭け事の具にしている大物投資家兄弟の策謀でエリート投資家と物乞い(演:エディ・マーフィー)の立ち位置が無理矢理逆転させられることになり(衣食住と職掌がそのまま逆転させられることになり)、その背後にある人を食ったような思惑のことが知った(元)エリート投資家と(元)物乞いが意趣返しを計るための相場操縦を企図する]

とのものとなっている(などと書けば、「あの作品か」とピンと来る向きもいるかもしれない)。

といった作品たる Trading Places (邦題)『大逆転』(1983)にもまた

[911の事前言及をなしているが如き側面]

が具現化を見ている。

具体的には下のように「確認」なせるかたちにて、である。

日本国内でも広く流通を見ている Trading Places (邦題)『大逆転』収録DVDにての(秒単位で指摘するところとして)【本編開始後1時間40分52秒後】のシーン(DVDタイムカウンター表示にて【01:40:52】ともなろうシーン)を「一時停止」して眺めて見ることで視覚的に確認できるところとして

(ハリウッド俳優エディ・マーフィー演じる主人公達がワールド・トレード・センターに到着しタクシーから降りる際の場面として)

[フロント・ドア前方部に「110 1/9」「10 1/9」との表示が付されたタクシーのガラスにワールド・トレード・センター・ビルディング(と文脈上、解される)ビルが映っているとのシーン]

が登場を見る。ここで「110 1/9」「10 1/9」とのタクシー刻字数値について[0]をnull値(空値、空の値)と見て端折ると「1119」および「119」との数値が出てくる。

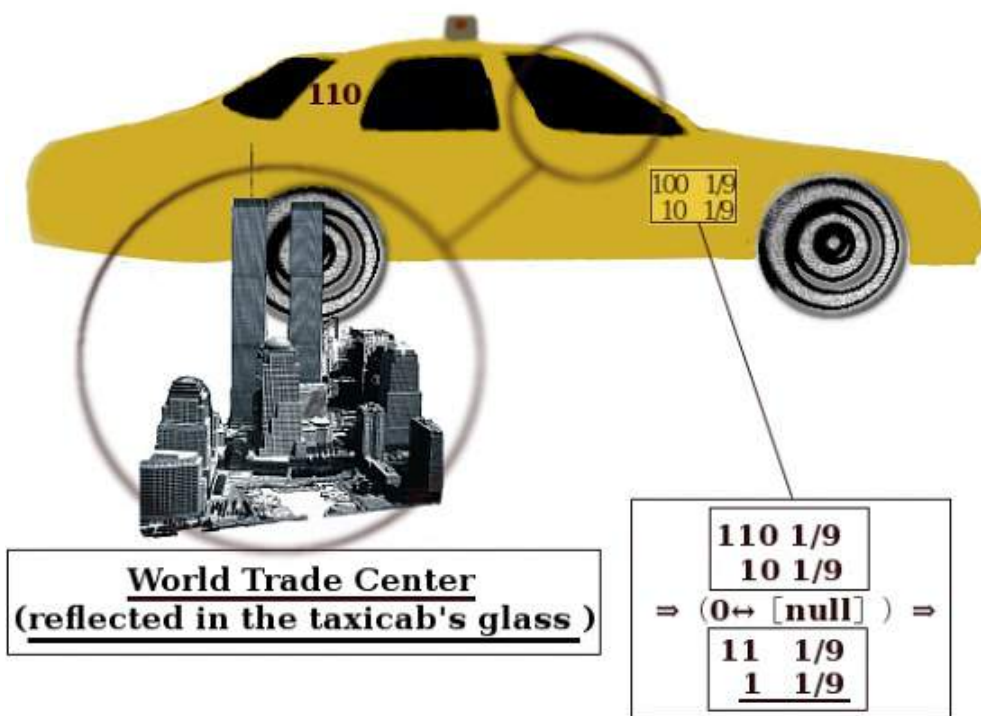
そして、同じくものタクシーの刻字数値とのことではツインタワー階数でもある110との数値も他の箇所、タクシー外面の離れた箇所にみとめられる。

ここで

[119という数と(窓に映った)ワールド・トレード・センターと110(とのツインタワーの階数)の組み合わせ]

から「911の事件」について「普通はまったく想起されないし、そうしたことを想起するのは妥当な見方ではない」と言い切れるのは相応の心性の者だけであろうか、とは思う —映画にみとめられるシーンの問題となる視覚的特質については下の再現図を参照のこと—。

taxicab seen in
 Trading Places (1983 film)
 (= DVD time-record sold in Japan :
 (one scene of) [1:40:52])
 hour minute second



無論、上のことがその通りであると確認なされた暁にも

『一ゼロをヌル値(空値)に変換し、[ワールド・トレード・センターと結びつけられたタクシー上の [110 1/9] [10 1/9]] をして [1119] および [119] と見る見方は「こじつけがましい」としても— 相通ずる側面は見て取れなくてもないが、しかし、だからといって911の事件との関係が「偶然」以上にあるといえるのか』

との問題は未だ残置し続けるとの見方もなせるだろうし、そういう見方をなす者を責めることもまたできないが、「だが、」ここでの話には続きがある。

「であるから問題になる」ところとして、加えもして、Trading Places(邦題)『大逆転』という作品については次のようなこと「も」が指摘できるようになっている。

日本国内でも広く流通を見ている Trading Places (邦題)『大逆転』収録DVDにての(秒単位で指摘するところとして)【本編開始後1時間43分後46秒後】のシーン(DVDタイムカウンター表示にて【01:43:46】ともなるシーン)を一時停止することで視覚的に確認できるところとして

⇒

(タクシーにてワールド・トレード・センターに乗り込んだ主人公達が自分達の運命を玩弄物にした投資家兄弟に挑むとの一連の流れ

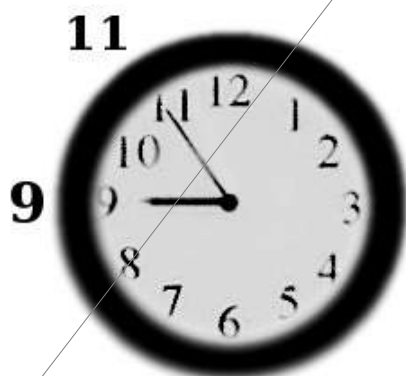
にあって)主人公達はワールド・トレード・センター内の商品先物取引所 (COMEX) にて大博打としての相場操縦を試みる。その際、市場が動き出す直前、

[8時55分という時間帯 一劇中の取引の開始時間、日本の株取引の世界で言うところのザラ場に入る前の時間帯—]

のワールド・トレード・センター内商品先物取引所の時計が目立ってピックアップされて表示されてくる。

上に言及の[8時55分]という時計の時刻帯についてであるが、(現行流通している 911 Hidden in Hollywood という一連の YouTube 流通動画シリーズにても指摘されているように (Trading Places (邦題)『大逆転』の問題となるシーンのこと「も含めて」指摘されているように)) 数多くの映画にて出現を見ている時計にて [9] と [11] を指す時間帯となる 一映画にみとめられるシーンの問題となる特質を再現しての下の図を参照のこと。

**clock seen in
Trading Places (1983 film)
(⇒ DVD time-record sold in Japan :
(one scene of) [1:43:46])**
hour minute second



COMEX Clock (of the World Trade Center)

(※以上表記のことらについては大概のレンタル店には据え置かれていようかと見る流通 DVD の(秒単位で指摘するとして) [本編開始後 1 時間 40 分 52 秒後] (先述のタクシー乗り入れの場面) および [本編開始後 1 時間 43 分後 46 秒後] のシーン(上の段にて再現図を挙げているとのシーン)を確認したうえで、英文 Wikipedia [World Trade Center in popular culture] 項目 ([大衆文化の中のワールド・トレード・センター] 項目) にあっての “ The 1983 film Trading Places includes an external shot of the towers (at the plaza level) where Dan Aykroyd and Eddie Murphy enter the COMEX commodities trading floor in 4 World Trade Center which is featured in the climax of the film. ” (訳として) 「1983 年の映画 Trading Places (邦題)『大逆転』では映画クライマックスの部にて(主演をなしている俳優らの)ダン・エイクロイドおよびエディ・マーフィが第 4 ワールド・トレード・センター・ビルのニューヨーク商品取引所 (COMEX ; Commodity Exchange, Inc) のコモディティ [(汎用) 商品] 商品先物取引ルームに入るとのところでワールド・トレード・センターのタワーらの外面描写が見てとれる」(訳を付しての引用部はここまでとする)との表記 一現

行にあっての表記― などを確認されてみるのもよからう)

ここまで指摘してきたことをまとめよう。

「映画『大逆転』にあっては主人公達が[110 1/9][10 1/9]と刻字されたタクシー(0の部を空値 null 値として端折れば[119]と刻字されているとも表せられるタクシー)でワールド・トレード・センターに辿り着く。そして、そうしたタクシーよりの乗車シーンではタクシーの窓にワールド・トレード・センターが反射しているカットが([11/9]表記と結びつく)のタクシーのフロントドアと共に映り込んでいる。そうしたかたちで舞台が移ったワールド・トレード・センター内での時計時刻表示として[時針として9と11を指す時計表示]がほどなくして(問題となるタクシー・シーン登場よりおよそ3分後の[本編開始後1時間43分後46秒後のシーン]として)劇中登場してくるとのことがある」

上のことにつき[偶然]と言えるのか? (よりもってして端的に述べれば、「[911 表記と結びつくナンバーが刻字され、また、ワールド・トレード・センターがそちら窓に映り込んだタクシー]からの降車の結果、ワールド・トレード・センターに入ったような中で[911]を指す時計描写が表示されてきている」とのことを偶然と言えるのか?)。

臆病者ないし卑怯者が[臆病さがゆえ、ないし、卑怯さがゆえの欺瞞]にて、あるいは、操り人形が[実質欠けての取り合ひに足らぬカラッポの内面]にて

[偶然]

ないしは

[論拠を伴わぬ妄言(ないし空虚なる者達に消費されるだけの下らぬ[都市伝説]などという類型の話)]

の問題に「不適切に」置き換えもしようとのそうしたことの具現化の[機序][作用原理]の問題について[ありうべきこと]がなんたるかはここにては論じないが、「確率論的に」筆者はそうしたことが多々、現実にある―たとえば、映画『ファイト・クラブ』では寸刻描写にてワールド・トレード・センターのビルと判じられるものの[時限爆破]が描かれており、そうした映画の原作小説では爆破対象が【191階】と設定されているとのことがある、また、たとえば、映画『タワーリング・インフェルノ』ではツインタワーに比べ見られもするとのビルがC4爆弾にて[時限爆破]される際に【116】との階数表示が出てくるなどとのことがある、そういったことら(本稿にていままでひたすらに具体的論拠呈示しながらも指摘してきたことら)が現実にある―とのことをもってして[偶然]であるなどとは当然に考えていない(多々、際立ってのものら、911とツインタワーを結びつけているとのものが存在しているのならば、そうしたこと「ら」の具現化をして偶然と言うのは狂人だけであろう?)。

要するに[恣意]の問題としてそうもなっていると判じている(※)。

(※ちなみにここにて問題としている映画『大逆転』を世に出した映画プロデューサーはアーロン・ルツという人物である(映画冒頭シーンから表示されてくる映画作成元も[アーロン・ルツ・プロダクション]となっている)。

そのアーロン・ルツについては

(直下、「現行にての」和文ウィキペディア[アーロン・ルツ]項目にての記載内容よりそのまま引用するところとして)

“アーロン・ルツ(1943年2月14日 - 2007年8月24日)は、アメリカ合衆国の映画プロデューサー、映画監督、政治運動家。日本語ではアロン・ルツ、アーロン・ラツ等とも表記。ニューヨーク・ブルックリン区生

まれ。24歳のときにナイト・クラブを開業し、レッド・ツェッペリンの米国初公演を興行。その後もグレイトフル・デッド、ジャニス・ジョプリン、ザ・フーなど60～70年代を代表するロック・アーティストのステージを相次いで打ち、彼らの人気確立に貢献する。…(中略)…ベット・ミドラー主演『ローズ』(1979年)、エディ・マーフィ主演『大逆転』(1983年)等を手がけ、…(中略)…『アメリカ自由からファシズムへ』が話題となった後、ルッツはジャーナリストのアレックス・ジョーンズのインタビューに答え、その中で旧知の友人ニコラス・ロックフェラーとの会話の内容を披露した。ルッツによると、ロックフェラーはアメリカ同時多発テロ事件の11ヶ月前の時点で、米国でアフガニスタン侵攻やイラク戦争のきっかけとなる事件が起こることを、すでに予告していたという。そしてロックフェラーは同時に、その事件及び後に起こる米軍侵攻の全てが、「巨大なでっち上げ」であるとも語ったという。この会話を発表した半年後、6年前から患っていた膀胱癌により、ルッツは死去した”

(引用部はここまでとする)

とのことが一部にて知られている。

などと述べれば、

『ウィキペディアという時にまったくの出鱈目も書き込まれる媒体に陰謀「論」者が妙な書き込みをしたのだろうか?』

などと思う(あるいはよくも確認・検討もせずに相応の気風にてそも「断じる」との向きもあろうかと思うが、—「そもしたことが公共にての言論空間でなんら問題視されない」こと自体からしてこの世界の偽物性が顕在化していると解されるどころとして— 現実に[アーロン・ルッツの911でっち上げに言及したインタビュー映像]は明瞭な発言内容のみならず発言時の本人の表情の機微まで見てとれるかたちで動画サイトにて流通を見ているとのことは[容易に確認できる事実]である(であるから検索して動画精査してみることで薦めもしたい。無論、筆者もそちらルッツ・インタビュー映像を見ている)。

ここでアーロン・ルッツが生前言っていたこと —インタビュー記録映像にて述べていること— が本当だったのか否かということは[アーロン・ルッツが身内にて聞かされたと述べていたとのことのその会話記録]

が残っていないがために確認「できない」こととはなるが(アーロン・ルッツは伝聞証拠を持ち出しているのであって「誰もが確認できる」文献的事実といったものを持ち出しているわけではないからである)、だが、しかし、そういうことがあるとのことはここ[補説4]にて延々と指し示してきたことと複合顧慮のうえで重んじて然るべきことであると本稿筆者としては述べておく — 尚、筆者は(同男自身からして[魂のない状況での傀儡(くぐつ)]であった可能性もあると現行とらえるに至っているアーロン・ルッツの証言がそれを指すと解されるどころの)[ワン・ワールド陰謀論][アメリカ覇権確立にまつわる陰謀論]を鼓吹しようとしているわけでは断じてない(このような世界でいまだにワン・ワールドという[題目]が長期的目的であるなどと騙されきって、そのために鋭意邁進しておれば安泰である、などと判じている一部の馬鹿な人間がいることは否定しようがないとも考えているが)。本稿を公開しているウェブサイトの一にて公開している(元)商業出版用著作であった『人類と操作』をご覧いただければ分かるが、筆者は[人間の歴史]とは[統制に向かって構築されたもの]などでは元よりなく、[魂の残骸、「人形」を徹底的に統制して造り上げてきた

「原初よりの「紛い物」であったとの見方を有しており（どうしてそういう見方がなせるかの[データ]の例示も無論なしている）、『今更、何をもってして統制社会化なのか、実験場をそういう風に仕切り直す意図があるとしても考えているのか。だが、そうしたことを否定する方向性での本当の養殖の目標も既に明確化している』（だから、統制社会ばかりを鼓吹する者達の背景意図が（情報操作との兼ね合いで）問題になるだろう）と判じているからである。ワン・ワールド陰謀「論」（ないしはその他の凡百の陰謀「論」）の徒輩が取り上げないところ、[結末を付けるためのフェーズ]に移行したとの（傀儡くぐつ・人形ではなくパペッティア[人形遣い]のレベルでの）やりとりが具現化していると判じられるだけの[十二分なる論拠]（人間が[滅び行くだけの種族]ならばついぞ真向いから直視もしなからうとの本稿にて呈示の情報ら）がそこにあるとよく知りながら、である――）。

ここまでにて

Trading Places (邦題)『大逆転』(1983)

が何故、いかように[911の事前言及作品]と解されるかの論拠を紹介したとして(疑わしきにあられてはDVDを借りて秒単位で指摘するところの該当シーンを一時停止しながらでもそちら論拠の適切性を確認いただきたいものではある)、同映画作品が[黄金の林檎]、いや、正確には[黄金の林檎の同等物]と歴史的に見做されてきたものを[ワールド・トレード・センターと結びつけられての作品終盤の主要モチーフ]としていることについて紹介をなしておく。

その点、以下、和文ウィキペディア項目および英文ウィキペディア項目より引用なすとおりのことが映画 Trading Places (邦題)『大逆転』(1983)にあってワールド・トレード・センターにての(相場上での)戦いの主要な具とされている。

(直下、和文ウィキペディア[大逆転]項目にての「現行の」記載内容よりの引用をなすとして)

「人間、出世するのは血統か環境か」とケンカをした商品先物会社を経営するデューク兄弟が、社内で指折りのエリートのウィンソープと、ホームレスのバレンタインの立場をすり替えてどういった結果になるかと、1ドルで賭ける事にした。ウィンソープはデューク兄弟の手回しで会社をクビになり、婚約者に見捨てられ帰る家も失い、娼婦のオフィーリアの家に転がり込む。一方バレンタインは拘置所に入っていた所をデューク兄弟に保釈金を払ってもらい、デューク兄弟の会社に入社してウィンソープの後釜に就いた。ウィンソープは全てを失って酒におぼれ、バレンタインは独特の相場観で会社で活躍した。しかし、バレンタインはクリスマスパーティーの夜にデューク兄弟の計画を聞き、ウィンソープにデューク兄弟の計画を教えた。そんな時、ウィンソープはデューク兄弟のスパイが「オレンジの出来高報告書」を入手したことを知り、デューク兄弟は農務省の正式な発表の前に報告書を見て、冷凍オレンジの相場を操作するであろうと推理した。二人に対する復讐のため、ウィンソープは報告書を偽物とすり替えることを計画するのだった。

(特定映画粗筋についての世間的解説なされようにまつわっての引用部はここまでとしておく ―※―)

(※以上、和文ウィキペディア[大逆転]項目よりの引用部としたが、同媒体、

記述内容が易変するため上のおりの記載内容が残置しているかは請け合えない(同じくものことについては国内で容易にレンタルビデオショップから確認できるとの映画『大逆転』DVD コンテンツを借り受けすることでも容易に確認できるわけだが、とにかくものこととして、である)。といった中で同じくものを示す英文 Wikipedia [Trading Places] 項目の記載内容「をも」ここにて挙げておくこととする。(以下、引用なすとして) “Winthorpe and Valentine recall large payments made to Beeks by Duke & Duke and realize that the Dukes are planning to obtain this report so they can corner the market on frozen orange juice. Valentine learns of Beeks' travel plans and the four board his train to switch the real crop report with a forgery. Beeks uncovers their scheme and attempts to kill them, but he is knocked out by a gorilla in a nearby cage. [. . .] **On the commodities trading floor, the Dukes commit all their holdings to buying frozen concentrated orange juice futures contracts. Suspecting the Dukes have inside information, other traders follow their lead and greatly inflate the price. Valentine and Winthorpe begin selling futures at the higher price, causing it to drop again when other traders do the same. When the real crop report is broadcast, the price of orange juice futures plummets. Valentine and Winthorpe buy back their futures at the lower price from everyone but the Dukes, reaping a huge profit. The Dukes fail to meet their margin call at the inflated purchase price and are left owing \$394 million.**” 「ウインスロップ (訳注: 物乞いと立ち位置逆転「させられる」ことになったエリート投資家) とヴァレンタイン (訳注: エディ・マーフィ演じる主人公で投資家デューク兄弟の気まぐれによる賭け事に応じてエリート投資家ウインスロップの立ち位置に据えられることになった元・物乞い) は「デュークス社経由での[冷凍オレンジの相場の流れを端から操作させる]ように、」とビーク (訳注: インサイダー情報を主人公らを嵌めたデューク兄弟に渡すことになっているとの農務省役人の肩書きを持つ男) に対して多額の支払いがなされていることにつき思い至ることとなった。ヴァレンタインは彼ビークの列車による旅程、乗車車輛を[本物のオレンジ収穫報告書と偽物のそれにすり替える]ために押さえるとのことにした。(そうもした[文書すり替え]計画の過程で) ビークは彼ビークとデューク兄弟のプランを隠し通すためにウインスロップとヴァレンタインを殺そうとするが、近くのゴリラの檻に叩き入れられるとのかたちで返り討ちにあうことになる [. . .] **商品取引市場フロアにてデューク兄弟は彼らの持ち分すべてを質草に先物取引で「オレンジを「買い」」の挙に出る。デューク兄弟がインサイダー情報を握っていると考えもし、他の仲買人も追随買いに走り、オレンジ価格が高騰していくことになる。といった中、ヴァレンタインとウインスロップは他の投機家らの同様の挙を誘発しながら高値で(空売りの)「売り」注文を出し始める。後、(ウインスロップとヴァレンタインがすり替えた方のものではない) 現実のオレンジ市況報告が報道されたとき、オレンジジュース先物の市況は一挙に暴落を見せることになる。多額の利を得ながらヴァレンタインとウインスロップは「デューク兄弟を除く」全員から(信用売りにあつての帰結として)安値で買い戻しをなしはじめる。デューク兄弟は高騰時にての価格にての買い注文から収支を合わすことに失敗し、3億9400万ドルの負担を負うことになる(そして早期履行が求められての支払い義務に対応できずに破産することになる)**」 (引用部はここまでとする))

以上のように映画『大逆転』がオレンジ相場を巡る戦いが作品上の重要なモチーフとされている(インサイダー情報を巡る丁々発止のやりとり、そして、その後の「ワールド・トレード・センターにての」先物市場での熾烈な戦い、[オレンジ相場]の流れから主人公らは意

趣返しをなしとげ、また、巨万の富を得ることになったと描写されている)。

では、そこにいうオレンジ、ワールド・トレード・センター(「80年代前半」初出の映画の劇中にて複合的に911と親和性高いナンバーと結びつけられているとのワールド・トレード・センター)での先物取引の接戦にての具たるオレンジと言えば、—再言するが—「黄金の林檎」と同一視されているものともなる。

その点についてはつい先立っての段でも以下の「俗間にての説明のされよう」を紹介したところとなっている。

(直下、英文 Wikipedia[Golden apple]項目にての Identity and use in other languages[他の言語にての(黄金の林檎の)定義のありよう、そして、使用]の節にあつての現行の記載内容よりの「再度の」引用をなすとして)

In many languages, the orange is referred to as a "golden apple". For example, the Greek χρυσομηλιά, and Latin pomum aurantium both literally describe oranges as "golden apples". Other languages, like German, Finnish, Hebrew, and Russian, have more complex etymologies for the word "orange" that can be traced back to the same idea. 「いくつもの言語にてオレンジは黄金の林檎として言及されている。例えば、ギリシャ語の χρυσομηλιά、そして、ラテン語の pomum は双方、字義通りもの[黄金の林檎としてのオレンジ]を表しての言葉である。他の言語、ドイツ語、フィンランド語、ヘブライ語、ヘブライ語、ロシア語はオレンジとの言葉につき同様の観念に行き着きうるとのより複雑な語源を有している」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

ここまでにてお分かりのことかとは思いますが、

「映画『大逆転』にあつては主人公達が[110 1/9] [10 1/9]と刻字されたタクシー(0の部を空値 null 値として端折れば[119]と刻字されているとも表せられるタクシー)でワールド・トレード・センターに辿り着く。そして、そうしたタクシーよりの乗車シーンではタクシーの窓にワールド・トレード・センターが反射しているカットが([11/9]表記と結びつくとの)タクシーのフロントドアと共に映り込んでいる。そうしたかたちで舞台が移ったワールド・トレード・センター内での時計時刻表示として[時針として9と11を指す時計表示]がほどなくして(問題となるタクシー・シーン登場よりおよそ3分後の「本編開始後1時間43分後46秒後のシーン」として)劇中登場してくるとのことがある」

とのことは「オレンジ相場」(「史的にゴールデン・アップルと定置されもしてきたものの相場」)を巡っての劇中終盤の戦いにまつわるものともなっているのである。

これにて911の「予見」事物が如き異様なものが「黄金の林檎」といかに結びつくのかとのことにまつわつての【他の例】の例示となした(：尚、本稿にての先行する段でビッグ・アップル、「ニューヨークのマンハッタン」それ自体がいかにして「黄金の林檎」と多重的に結びつくようになっていると論じてきたのか、そのことについて「も」忘れないでいただきたいものではある)。

(※また、

[911の予見事物には当てはまらないが、「911というユニーク・ナンバーと黄金の林檎が結びつく」ことまでは一面で示しむする話]

をも本稿にあつては今までになしてきている。

例えば、である。

本稿にての **出典(Source) 紹介の部 56(2)**「の後」に続けての段ではつい最近、2012 年後半期にて欧州にて [黄金の林檎] と [9 月 11 日] を結びつけての映画として

September Eleven 1683

という映画 一直訳すれば『1683 年 9 月 11 日』とのタイトルの海外映画で 17 世紀末のオスマントルコによるウィーン包囲を扱った歴史映画— が封切られたことに言及しました (: 史実に名を借りた半ばフィクションとあいなっている同映画ではウィーンが [イスラム勢力に [黄金の林檎] と呼称されている都市] と紹介されながら、 “ **On September 11th** 1683, Islam was at the peak of of it's expansion in the West. Three hundred thousand islamic troops under the command of Kara Mustafa were besieging **the city they called " The Golden Apple ": Vienna.** ” (拙訳として) 「1683 年 [9 月 11 日]、その折、イスラムは西洋に対する拡大基調にあつての絶頂期にあつた。カラ・ムスタファに指揮されての軍兵総勢 30 万が彼らが [黄金の林檎] と呼んでいた都市、ウィーンを包囲するに至っていた」 (訳はここまでとする) との解説からスタートを見ている映画となっている)。

さらに、本稿前半部、**出典(Source) 紹介の部 63(3)**に含めての部では北欧神話を今日に語り継ぐ『古エッダ』(エルダー・エッダ)、同『古エッダ』に包含される [スキールニルの歌] というものに登場する [黄金の林檎] が [11] や [9] と結びつけられながら学者らに分析されているものであることを示す記述を引用なした。以下のようなかたちにて、である。

(直下、筆者が探求の一環として読したところの『エッダ —— 北欧歌謡集』(新潮社刊行 / 訳者は北欧文学を専攻していたとのことである谷口幸男元広島大学教授) の p.67、『スキールニルの歌』注釈にあつての部より再度の引用をなすとして)

“ 林檎を十一 : 十一という数はおかしい。九が古代ゲルマンでの神聖な数である。

epli ellifo 林檎を十一は、epli elle-lyf 若返りの林檎の書き誤りではないかという説がある。スノリの「ギェルヴィたぶらかし」にもあるように、ブラギの妻イズンは、神々が年をとったときに食べる若返りの林檎をとねりこの箱にしまっている。イズンの黄金の林檎について九世紀のスカルド詩人スィヨゾールヴ・オール・フヴィーニが書いているものによると、イズンはあるとき、その林檎ともども、ロキのために、巨人スィアチの手におちた。アース神は年をとりはじめ、ロキはイズンと林檎をとり戻さねばならなかった。彼は鷹の姿に身を変えて巨人の国へ飛び、イズンを胡桃(くるみ)に変えて首尾よくつれかえった ”

(引用部はここまでとする)

上にては

[『スキールニルの歌』に見る黄金の林檎と [11] を結び付けている表現 (epli ellifo との表現) は [9] を神聖数とするゲルマンの観点から度がずれており、別の意味でまとまった [若返りの林檎] との表現 (epli elle-lyf との表現) の誤記ではないか、との説もある]

と北欧文学研究者(谷口幸男元広島大学教授)によって言及されているわけである。

以上のように [黄金の林檎] は [9] [11] と — そうもしたことを引き合いに出す物語や分析の語り手ら心境がどういったものかを忖度(そんたく)する術はないのだが — 結びつけられるものとなっている)

**Trading Places (1983 film)
&
the World Trade Center
&
the frozen orange market**

**χρυσομηλιά (the Greek)
pomum aurantium(Latin)
[golden apple as orange]**



上は映画『大逆転』が「黄金の林檎」といかに結びついているかを示すために挙げた図となる。

(尚、付しての図葉だが、そちらは

【(英語圏にては「リング Ring」との題名で知られている)著名なリヒャルト・ワーグナー歌曲『ニーベルングの指輪』にあつて「黄金の林檎」を神らのために管掌する存在と描写される女神フライア(実際の北歐神話での「イズン」という女神を「フライヤ」との名で代替している存在)がまさにその黄金の林檎を手に行している様を描いた画】(挿絵家アーサー・ラッカムの作)

を挙げたとのものとなる —イズン(ワーグナー版ではフライヤ)のゴールデン・アップル管掌に関わるころの指摘は長大な本稿にあつて折に触れてなすのかたちになっている—)

E

さらにもつて、『ジョジョの奇妙な冒険』の予告描写について述べられることとしては

[次のようなこと]

「も」ある。

『ジョジョの奇妙な冒険』にての 911 の先覚的描写はここまで解説してきたようにフリーメーソンの象徴主義と複合的連続関係を呈する —単純な視覚的な意味での事実と定例化されての入門位階の儀礼動向にまつわっての記録的事実から入門徒弟位階(エンタード・アプレンティス位階)のありようなどと複合的連続関係を呈する— ものとなっているのであるが、そうした特性が認められもする同じくもの予言描写、オインゴ・ボインゴ兄弟という悪役にまつわる予言描写がなされた後の続く筋立てとして、である。同作(『ジョジョの奇妙な冒険』)では[人間に憑依して憑依対象となった人間を殺人機械に変化させる刀剣]との存在、

【(エジプトの)アヌビス神の名を冠した刀剣】

が敵役として登場してくる(『ジョジョの奇妙な冒険』主人公らは予言に基づいて奇襲攻撃をかけてきたオインゴ・ボインゴ兄弟を斥けたとのまさにその次のエピソードから[人間に憑依するエジプト・アヌビス神の名を冠した刀]との死闘へと突入する)。

さて、そうした漫画作品描写から一旦離れて申し述べるが、アヌビス、

【エジプト神話に見る冥府での秤量と結びついたジャッカル(イヌ)の神】

であるとのこと、本稿の先だつての段でも解説してきた —ここでの話とはまったくの別文脈、ロバート・テンブルという論客の提唱した異説内でのその言及がいかようにして問題になるのかとの観点で神格としての概要について解説してきた— とのそちらアヌビス神とはどういう存在かと述べれば、

「(アヌビス神は)フリーメーソンにとっては「魂の案内人」にして、その象徴ともされるブレイジング・スターが「(星天にあっての恒星たる)シリウス」のみならずきに「万物を見通す一つ目」に仮託される存在である」

と「当のフリーメーソンリーの中の有力者の著作(下にそこよりの該当部記述を引用するとの著作)の中で」記述されている存在となる。

といったこと、

【(漫画の中では人に憑依して人間を見境なくもの殺人機械へと変化させる存在と描写される、予言のセクション直後に登場の)アヌビス神】

の一部フリーメーソンにあっての理解のありかた —アヌビスをして【魂の案内人】にして【万物を見通す一つ目】ともとらえるとの理解のありから— から判じて見ても【アヌビス登場に少し先立っての段での予見描写】は「できすぎ」とのきらいがある(：お分かりかとも思うが、本稿ここまでの流れにて[問題となる漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』予見描写がフリーメーソン・シンボリズム(込み:【万物を見通す一つ目】)と複合的に接合するようになっている]とのことを論じてきたとの事前経緯あって「できすぎ」であると述べもしている)。

以上呈示のこの出典だが、まずもって、オインゴ・ボインゴ兄弟を斥けた直後、主人公らが死闘を繰り広げることになるアヌビス神にまつわるエピソードについては下記の漫画書籍を書店その他で参照いただければご理解いただけることか、と思う。

・集英社「単行本」版『ジョジョの奇妙な冒険』第 20 巻、同・第 21 巻
あるいは

・(上がリニューアルされての)集英社「文庫」版『ジョジョの奇妙な冒険』第13巻

その点、同じくものこと、[アヌビス神にまつわる『ジョジョの奇妙な冒険』にあつての描写]については和文ウィキペディア[スターダストクルセイダース]項目に下のように記載されているところ「とも」なる一尚、引用部に認められる[スタンド]との言葉だが、そちらが漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』にて[攻守共々が用いる「超能力」を指しての言葉]であることは先に解説なしている。

(直下、和文ウィキペディア[スターダストクルセイダース]項目にて現行掲載されているアヌビス神にまつわる記載内容よりの引用をなすとして)

自我を備えている特殊なスタンド。本体は500年前のエジプトの刀鍛冶で故人のキャラバン・サライである。現在は自我を備えた三日月刀として、半人半獣のアヌビス神そのものの姿をしたスタンドだけが剣に宿り、独立して残っている。…(中略)…刀を鞘から抜いた者、または刀身に触れた者を「新しい本体」として操る能力を持ち、自分の宿る刀を扱わせる。…(中略)…劇中では牛飼いの青年チャカや、床屋の店主カーンに憑依してポルナレフを襲い、更には次に憑依したポルナレフのシルバーチャリオッツとの二刀流を披露し、承太郎をも窮地に追い込む。

(引用部はここまでとする)

以上のようなアヌビス神、主人公らがオインゴ・ボインゴ兄弟——当該フィクションにて911の奇怪なる予見描写をフリーメーソン象徴主義と重なるところとして見せた存在——を斥けたアヌビス神(使用者の精神を乗っ取る、すなわち、憑依をなすとの刀剣にその名と似姿が流用されているとの神格)に関してはフリーメーソン象徴主義では次のような言及がなされている。

(直下、アルバート・パイク、19世紀にあつて絶大な影響力を行使した(先述)とも言われる主導的メーソンであり、また、今日にあつてもその著作内容が取り上げられる同男の手になる *Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry*『古代より連綿と続く認証されしフリーメーソンのスコットランド位階の徳義と教義』の記述よりの「再度の」引用をなすところとして)

The Solstices, Cancer and Capricorn, the two Gates of Heaven, are the two pillars of Hercules, beyond which he, the Sun, never journeyed: and they still appear in our Lodges, as the two great columns, Jachin and Boaz, and also as the two parallel lines that bound the circle, with a point in the centre, emblem of the Sun, between the two tropics of Cancer and Capricorn. **The Blazing Star in our Lodges, we have already said, represents Sirius, Anubis, or Mercury, Guardian and Guide of Souls.** Our Ancient English brethren also considered it an emblem of the Sun. In the old Lectures they said: "The Blazing Star or Glory in the centre refers us to that Grand Luminary the Sun, which enlightens the Earth, and by its genial influence dispenses blessings to mankind." Our Ancient English brethren also considered it an emblem of the Sun. In the old Lectures they said: "The Blazing Star or Glory in the centre refers us to that Grand Luminary the Sun, which enlightens the Earth, and by its genial influence dispenses blessings to mankind." It is also said in those lectures to be an emblem of Prudence. The word Prudentia means, in its original and fullest signification, Foresight: and accordingly the Blazing Star has been regarded as an emblem of Omniscience, or the All-Seeing Eye, which to the Ancients was the Sun. It is also said in those lectures to be an emblem of Prudence. **The word Prudentia means, in its original and fullest signification, Foresight: and accordingly the Blazing Star has been regarded as an emblem of Omniscience, or the All-Seeing Eye, which to**

the Ancients was the Sun.

(補ってもの訳として)

「[夏至・冬至の至点]、そして、[巨蟹宮(きょかいきゅう)および磨羯宮(まかつきゅう)](訳注:黄道12宮の構成要素)、そして、[天にあってのゲートとなるところ]は[ヘラクレスの柱ら]でもあり、それらを越えては太陽たる彼が決して旅しなかったとの地点を指しもし、我々(訳注:ここでは『モラルズ・アンド・ドグマ』執筆者たるアルバート・パイクらメーソンを指す)にあってのロッジにて二つの偉大なる柱、[ヤキンとボアズ]として具現化を見てもおり、それらは換言すれば、

[巨蟹宮(きょかいきゅう)と磨羯宮(まかつきゅう)の二つの回帰線(夏至線・冬至線)の合間の中央に太陽の象徴たる環を置いたうえで境界をなす二つの対称性呈してのラインら]

となっている。

我々のロッジにてのブレイジング・スターは既に述べているように、シリウス・アヌビス、あるいは、マーキュリー、魂の守護者にして案内人を指すものであるが、我々の古き英国の有朋ら(訳注:ここでの「英国の有朋」表記は抜粋元文書の著者たるアルバート・パイクが米国系メーソン有力者であったところ、同男が英国系メーソンを指してそうした書きようをなしているとの部となる)はそれ(ブレイジング・スター)をして太陽の象徴と考えている。古き講釈曰くのところとして、「ブレイジング・スターあるいは(ヤキンとボアズらの二つの回帰線の間にある)中央にある光輝あるものは地球を照らす偉大なる明るき太陽、その温かみのある影響力によって人類に天恵をもたらしてきた存在である」とされている。また、同様にそれら講釈にあってはブレイジング・スターをしてプルデンシス、思慮分別の象徴とも語っている。プルデンシアとの語はその原義かつ最も充足的な意味合いとして[先見の明]を意味し、それに応ずるところとしてブレイジング・スターは全能性、すなわち、古代人にとって太陽であったとの万物を見通す眼の象徴と見倣されてきたのである」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上、Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry、「目立っての」フリーメーソン関連書籍 一本稿の従前の段にあって先述のことであるが、英文 Wikipedia[Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry]項目にあって(以下、再度の引用をなすとして) “ A copy of Morals and Dogma was given to every new member of the Southern Jurisdiction from the early 1900s until 1969 (although some local Scottish Rite bodies offered copies through the mid-1970s), when it was deemed "too advanced to be helpful to the new Scottish Rite member." ” 「アルバート・パイクの『モラルズ・アンド・ドグマ』は、それがスコティッシュ位階の新規メンバーにとって「あまりにも(「高度な」という意味で)進んだ内容であるために助けにならないであろう」と判断されるまで、フリーメーソンの南部管轄の「全」新規メンバーに1900年代から1969年まで配布されていた(いくつかの地方のスコティッシュ位階運用組織では1970年代半ばまで同著コピーを配布していた)」(引用部はここまでとする)とまとめられもしているところから「も」フリーメーソンリー関連書籍としての通用性度合いが推し量れるようになっているアルバート・パイク著述『モラルズ・アンド・ドグマ』—よりの再度の引用部の内容を記号論的に要約すれば、

[ブレイジング・スター Blazing Star] ↔ [シリウス Sirius][アヌビス Anubis][マーキュリー Mercury] (明示されての魂の補導要員としての存在)

[ブレイジング・スター Blazing Star] ↔ [太陽 Sun][万物を見通す All Seeing Eye] (従って)

[アヌビス Anubis] ↔ ([ブレイジング・スター Blazing Star]) ↔ [万物を見通す眼]

All Seeing Eye]

との記述が文献的事実[Philological Truth]の問題としてなされているとのことになる。

上の流れからも
『ジョジョの奇妙な冒険』

の相応の描写 —すなわち【フリーメーソン象徴主義との接合性を呈しながら 911 の事件に対する予見をなしているといった描写】— を含むパートに続いて

[人間に憑依して殺人マシンに変化させるとのアヌビス Anubis (の名を冠する存在)]

が登場を見ていることは意味深い、「実にもって悪い意味」でだが、意味深いことになろうと判じられる格好となっている (くどくも述べるところとして、『ジョジョの奇妙な冒険(スターダストクルセイダース)』にての「911の予見描写としての側面を帯びたシーン」(アヌビス会敵の前段階の「予言をなす敵手」の遭遇にまつわっての描写) に見る「911」が「一つ目」と結びつけられていること「も」そこでは意をなしてくる)。

(尚、アルバート・パイクの表記の著作、Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry 『古代より連綿と続く認証されしフリーメーソンのスコットランド位階の徳義と教義』についてはキリスト教サイドの人間が「フリーメーソンのルシファー崇拝の証左である」などとの式で引き合いに多く出すような著作とはなるが(海外英文媒体ではとにかくもってしてそういう書かれようが目につく)、筆者は[宗教] などという[人類に課せられた呪い] そのものであると自身判じきっているもの(人間を愚劣な被コントロール対象にするうえでの名分に用いられてきたもの、それからの解放なくしていずれにせよ種族に望ましき未来などないとの[機械仕掛けの神]を崇めたてまつらさせてきたとのナンセンス体系と判じきっているもの)に基づいてアルバート・パイク著作のことを引き合いに出しているのではなく、[非宗教的人間]として同著作の内容を問題としていくこと、お含みいただきたい)

(これにて A. から E. と分かって詳述してきた『ジョジョの奇妙な冒険』に関しての「この身がさらにもって呆れさせられたとのこと」にまつわる表記を終える)

ここで『ジョジョの奇妙な冒険』にまつわって書き記してきたところを極々の端的にまとめる。

第一。漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』第三部スターダストクルセイダース(の中の「クヌム神」のオインゴ「ト神」のボインゴ(1))の部)にあって現出している劇中内それ自体からして予言的ヴィジョンと設定されている部には[911の事前言及をなしている]と巷間指摘されているとおりの描写 — [911との数値が刻字された上着]を着た男が[飛行機][911にてのツインタワー崩落時刻] [(イスラム勢力の象徴と認知される)三日月]と結びつけられながら、との式で、「お、10時30分だ」と述べた直後(換言すれば、現実世界でツインタワーの内のノースタワーが倒壊した午前10時28分に極めて近い時刻)にて殺されていくとの描写— が含まれている(ここまでに【際立っての特徴の明示に努めての再現図を挙げながら細かくも概要紹介してきたこと】と【問題となる図の掲載ページ数を紹介している書籍】の比較検証をなしていただきたいものである)。

第二。以上のような問題となる予言シーン(『ジョジョの奇妙な冒険』第三部スターダストクルセイダース(の中の「クヌム神」のオインゴ「ト神」のボインゴ(1))の部)にての予

言シーン) を包摂するエピソードについてはさらに次のことら (A. から E. のことら) 「も」が申し述べられるようになっている。

(以下、A. から E. につき(典拠・具体的論拠にまつわる委細はここまでの本稿にての記述にもろとも譲って) 振り返っての表記をなすところとして)

A

作中にて [現実世界でツインタワーのノースタワーが崩壊した時刻] ともなっている 10 時 28 分に極めて近い時間帯、10 時 30 分との [予言描写] に見る時間帯 — [911 と刻字された上着を着る男] が [飛行機] らの描写を含むシーンで電柱に突き刺されての死体となる契機となる (未来描写設定付与のセクションに見る) 時間帯 — についてはアナログ時計の文字盤を 180 度反転させて見ると時針が「9」「11」を指す時間帯となってもいる。

そして、同様に

【180 度回転させると 911 との数字が出てくる数値ないし時刻が登場してくるとの「かぐわかしい」作品】

として本稿の先の段では 【ツインタワーに比定される合衆国最大のビルが爆破されるとの内容を有している『ザ・タワー』を原作としもする映画『タワーリング・インフェルノ』に認められるビル — 映画リリース・ポスターにあつて「も」ツインタワーのことが想起されるようになっているビル — のタンク爆破時の壁面の数値(116)の描写のこと】、および、【マンハッタンのビルやペンタゴンが爆破標的にされ、また、ニューヨークとペンタゴンの並列象徴が作品内にて頻繁に登場し、さらに、(現実の 911 の事件でもそうなったように) 米軍から漏出した炭疽菌の災厄を描いている作品たる 70 年代ヒット小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』のペンタゴン爆破時の時間帯のこと】(こちらは 5 時 55 分との時針で [11][6] を指す時間帯に爆破がなされる)、そして、【ツイン・パインなるものと 116 との電光表示を結びつけながら、また、近接するポイントで [119] とのデジタル電光表示を登場させている映画作品『バック・トゥ・ザ・フューチャー』や映画作品『アルマゲドン』のことら】をも (後追い確認容易なる具体的解説に努めるとの式で) あわせて取り上げた。

B

問題となる『ジョジョの奇妙な冒険』の予見描写の部 — 再言すれば、[911 との数値が刻字された上着] を着た男が [飛行機] [911 にてのノースタワー崩落時刻 (そして上下逆転すると 911 との数値が表示されてくる時刻)] [(イスラム勢力の象徴ともなる) 三日月] と結びつけながら、「お、10 時 30 分だ」と述べた直後 (換言すれば、現実世界でツインタワーの内のノースタワーが倒壊した午前 10 時 28 分に極めて近い時刻) にて殺されていくとの描写との部 — は

[月] [一つ目] [太陽]

を並べての描写がなされているとのもの「でも」があるが、そこに見る、

[月] [一つ目] [太陽]

を並べてのやりようはフリーメーソンの徒弟位階のトレーシング・ボードにみとめられるフリーメーソンが拘(こだわ)りを見せている構図ともなる。そして、同点にまつわっての補足となることとして「長くもなるが、」と断ったうえで以下のことら、懇切丁寧に論じてきました。

→

■補足1: 次の発想が本稿筆者の[呈示]の挙の背景にはある。⇒「筆者は『ジョジョの奇妙な冒険』の作者がフリーメーソンであるなどと主張したいわけではない。この世界には傀儡(くぐつ)と人間を化さしめる力学があることもあってそうも述べる(だが、フリーメーソンのシンボルが用いられていることのその意味性は問題になる)」。

■補足2: (典拠を入念に挙げながら指し示しに努めたこととして)『ジョジョの奇妙な冒険』の予見描写部と同様の[月][一つ目][太陽]を並べての構図は[欧州錬金術の象徴体系]「にも」見てとれるものとなり、それにまつわるシンボリズム分析をなすことで【「黄金の林檎」と結びつくところで「他の911の事前言及作品」ともつながる】との式が浮かび上がってくるのとことが(どういうわけなのか、あまりにも奇怪なこととして)「ある」。また、以上のことが本稿の先だつての段で述べてきたところの事由ら(黄金の林檎にまつわっての事由ら)より【ブラックホール生成をなしうると論じられるようになった「実験」】にも容赦なくも多重的に接続しているとのことが「ある」。

■補足3: (同文に典拠を入念に挙げながらも指し示しに努めたこととして)「『ジョジョの奇妙な冒険』の問題となる予見描写は「フリーメーソンのヤコブの梯子ハシゴと結びつく象徴」と際立っての視覚的【接続性】を呈するものともなっている。その点、[ヤコブの梯子](ジェイコブズ・ラダー)は[天国への階段](ステアウェイ・トゥ・ヘブン)という語とも言い換えられるものとなるが、そのステアウェイ・トゥ・ヘブン、著名バンド[レッド・ツェッペリン]の逆再生メッセージ混入疑惑との兼ね合いで有名な曲の曲名「とも」なつてもいる。ツェップことレッド・ツェッペリンのステアウェイ・トゥ・ヘブンに関しては 一先に説明のなされようを事細かに呈示しているところとして 米国州法による音源への逆再生メッセージ混入規制([事前告知無しにの逆再生メッセージを禁ずる]との混入規制)実現への風潮につながった(ただし、カリフォルニアやアーカンソーで問題となったといったそうした規制動向については法案が法案(ビル)に留まり法令(アクト)には議会が法を可決しても[州知事の差し戻し]などから至らなかったとのことがある)ような「悪名」との意味でもよく知られた曲となっている(と細かくも解説した)。そうもしたステアウェイ・トゥ・ヘブンを名に冠する日くつきの曲、ヤコブの梯子と同一の概念を指すステアウェイ・トゥ・ヘブンの名を冠するレッド・ツェッペリンの曲が『ジョジョの奇妙な冒険』では後に主人公らを皆殺しにし、「世界そのものを破壊した重力を操作する挙」と命名背景の問題として結びつけられているとのこと「も」がある(レッド・ツェッペリン歌曲名から材をとったとされるとの式で結びつけられているとのこと「も」がある)。そのことがよりもって不気味なのは【911の予見描写】(『ジョジョの奇妙な冒険』の予見描写にこと限って言えば、ステアウェイ・トゥ・ヘブンと概念的に接合する天国への昇降段たるヤコブの梯子、そのヤコブの梯子に通ずるメーソン・シンボリズムと連結性を呈しているとのものとなる)と【重力の増大による破滅(ブラックホール具現化による破滅)が危惧・懸念されてきた加速器実験】が全く異なる方向性、全く異なるところ「でも」多重的に結びついているとのことが指摘できるようになっている、とのことである。

C

(直上の)B. の段で扱っているようなところで視覚的に『ジョジョの奇妙な冒険』の予見描写はフリーメーソン・シンボリズムと接合しているのであるが、と同時に、同じくもの描写はその他の意味でもフリーメーソンの思潮と接合している。その点、[吊された男](ハングド・マン)が描写されているのが表記の予見描写の部となるが(具体的には[電柱に首を突き刺された911と刻字された上着を着ての[吊された男]が描かれている]のが当該予見描写の部となる)、フリーメーソン入門位階たるエンタード・アプレンティス(徒弟)位階にあつての参入儀礼にあつては候補者が[絞首刑受刑者]のように首に縄を巻かれ、また、目隠しをされた格好(すなわち、ハングド・マンの格好)をさせられるようになっているとのことがあり、その点でも問題となる予見描写とメーソン思潮との接合性が認められることがある(しかも、[月][一つ目][太陽]の中空にての連続描写にまつわる一致性に関してのB. の段にて言及の接合性が徒弟位階の儀式動向に大きくも関わると判断できるようになっている中、ハングド・マンの描写「も」徒弟位階の儀式動向と大きくも関わっているとのことがある)。

D

『ジョジョの奇妙な冒険』の予見描写はオインゴ・ボインゴ兄弟という敵役の[予言をなす漫画]の描写というかたちで具現化を見るものである([予言描写をなす漫画]と作中明示されているものの中にあつてA. 及びB. にて表記のような属性を伴った描写が具現化を見ている)。そうした予言漫画を用いて最適の暗殺手段を特定・選択するうえでのいわばもの凶器として用いていたオインゴ・ボインゴ兄弟が最終的に主人公ら一行を暗殺しようとした手段が[時限爆弾混入型オレンジを食させしめ、それでもってして人体を内破させる]という「突拍子もない」(としか表しようがない)かたちにて描かれているのではあるが、そのため、[問題となる予見描写]を含むエピソードを含む当初の単行本タイトルは[爆弾仕かけのオレンジ]ともなっている(ただし、リニューアルされての文庫版に関しては同じくものは目立ってあたらぬ)。

そこに見る

[爆弾仕かけのオレンジ]

とは

[時計仕かけのオレンジ]

という有名な映画作品の邦題(原題はクロックワーク・オレンジ)との接合性を「当然に」感じさせるところのものなのだが(ゆえにタイトルに対するオマージュがそこにあると想定される)、本家本元の『時計仕かけのオレンジ』という映画の有名なリリースポスター(ビル・ゴールドというデザイナーがデザインした有名なリリース・ポスター)は[フリーメーソン象徴主義と露骨に接合するようなもの]となっている(三角形と一つ目の結びつけゆえに、である)。

同じくものことから、

『ジョジョの奇妙な冒険(スターダストクルセイダース)』にての予見描写を含むとの箇所]

が

[フリーメーソン象徴体系]「および」**[時限爆破]**

の双方とつながっているとのことが述べられるようになっており、また、

[フリーメーソン象徴主義と多重的に接合する、ワールド・トレード・センター比定物に対する時限爆破を描いた作品]

との筋目の**[911の予見作品]**としての(本稿にて解説してきた)他の作品らが存在しているとのことが想起される格好となっている(なってしまう)。

さらに加えて述べれば、

[爆弾仕かけのオレンジ](ジョジョの奇妙な冒険の予告描写を含む単行本に付された副題)・**[時計じかけのオレンジ]**(比較対象のうえで問題となる作品)

に見る**[オレンジ]**とは歴史的に

[黄金の林檎]

と結びつけられてきたものである、とのこともある。

その点、**[黄金の林檎]**とは(本稿で膨大な文字数を割いてそのことについての解説をなしているように)**[911の予見事象]**とも**[ブラックホール生成をなしうるとされるに至った加速器実験]**とも(「どういうわけなのか」との理由を考えるべきところとして)結びつく伝承上の果実—古のトロイアの内破の元凶ともなっている果実—となっているとのことがある。

E

劇中にて(問題となる)**[予見漫画]**を持ち出してきたヴィラン(悪役)として描かれているオインゴ・ボインゴ兄弟を斥けた後、『ジョジョの奇妙な冒険』では主人公らが次なる会敵存在として

[人間に憑依して殺人鬼に豹変させるアヌビスの名を冠する存在]

の襲撃を(話数にしては直後からといった按配にて)受けることになる。

その点、**[アヌビス]**とはフリーメーソンの思潮体系にあって

[魂の案内人としてのブレイジング・スターの象徴神格]

となっていると描写されることもある存在となり、そこにいう、

[アヌビスと結びつくブレイジング・スター]

は同じくものメーソンの思潮にあって

[万物を見通す一つ目]

に仮託されるものでもある。

それは(先述の **B.** から **D.** の内容に鑑みて)「できすぎ」と映るところともなる(繰り返すが、『ジョジョの奇妙な冒険(スターダストクルセイダース)』の**[吊された男が登場する描写]**にあっては**[月]****[「一つ目」]****[太陽]**の並列使用との観点で**[フリーメーソンの徒弟位階—参入者が目隠しをされた絞首刑受刑者(吊された男)の格好をイニシエーションでさせられるとの位階—のトレーシング・ボード]**との際立っての類似性が想起されるようになっていたとのことがある。また、といった描写を含む巻数のコミックタイトルが**[爆弾仕かけのオレンジ]**となっていることについて「も」オマージュの対象となっていると当然に判じられる『**時計じかけのオレンジ**』が**[三角形と一つ目]**と結びつけられているとのことがある(がゆえに**[万物を見通す一つ目]**と**アヌビス**の関係)が問題になる)。

から

[何ら飛躍なきところ]

として — ([話柄としての頓狂さ]はともかくも[推論]としては何ら飛躍なきところとして) — 指摘できる ようになっている、なってしまう、そのことがゆえに筆者はこの世界に呆れかえり、かつ、この世界 の一つの方向性が(「下らない」と世間一般の人間には見られうるのと微少なるところからも)推し量れる と述べるのである。

ここでまたもってして振り返るが、直近、指摘したようなことが摘示なせるようになっていることにつき、 本稿にあっては

[他の「日本国内」アニメ映画作品(本来ならば大の大人が肩肘張ってその性質につい て云々するようなものではないと見做されようルパン三世関連のアニメ映画作品)にも [911の事前言及と受け取れる描写]が[ツインタワー類似物の爆破]という形で登場 し、そこにメーソンにまつわる比喩がかったの側面が垣間見れるようになっていること]

[『ファイト・クラブ』や『タワーリング・インフェルノ』(崩壊ではなく消火のためにツイン タワーを想起させる超高層ビルが爆破されるとの作品)にも[911の事件の発生の事 前言及と「露骨に」受け取れる描写]が[ツインタワー類似物の爆破](ファイト・クラブ に関してはワールド・トレード・センター「そのもの」の爆破と述べられる形態)というかた ちで登場し、そこに、メーソンにまつわる比喩が垣間見れることになっていること]

との結びつきを弥(いや)が上にも観念せざるをえないとの指摘をなしもしており、

[国内作品ありようからとて[予言の介在]が強く想起されるようになっている]

と強調しているのである。

これにて先だつての映画『ファイト・クラブ』におけるフリーメーソンに関わる【問題となる特質】につい て詳述してきたとの部位、I. からV. と振つての部位にあつてのV. の部、すなわち、

V.

911の事件については

[部分的に「フリーメーソン象徴主義に通ずる」視覚的特徴を呈しながら 事件(911の事件)の発生について予見的言及をなしている作品ら]

が「他にも」複数作存在しているとのことがある。であるから、ことは[極めて特殊な唯一例 の話]にとどまっていたものではないとのことで映画『ファイト・クラブ』におけるフリーメーソ ン・シンボリズムとの接続性が一層にして問題になる。

とのところから押し広げて何が指摘できるのかの — 実に長くなりもしての — 一連の流れに一区切り をつけることとする (:長くもなりすぎたがためにご把握仕損じている読み手の方も出てこようかと当然 に判じもしていることとして本来的には『タワーリングインフェルノ』や国内にての作品 (『ルパン三世 くたばれノストラダムス』そして『ジョジョの奇妙な冒険』)にての【「フリーメーソンリー・シンボリズムに 通ずる」予見描写】のことを問題視する部に入ったのは、そも、『ファイトクラブ』におけるあまりにもかぐ

わかしき側面について何が述べられるのかについて取り上げもしていた表記の V. の延長線上でのことであった)。

【予言】が存在しているとのこと、それが何故、科学的作用の所作と述べられるのか、そして、科学的作用の所作であるとのことがいかに剣呑な方向を指し示しているのかについて

さて、ここまでにて[911の事件の発生の事前言及]とのことにつき専一に論じてきた、具体例・具体的確認方法を数多挙げながらも同じくものことの実にもって細々と論じてきたわけであるも、[予言]とのことと述べれば、本稿にあつてのここでの部を包摂する補説4と振つての「ひとまとめにしての」部ではアクト・オブ・ジ・アポースルズ、新約聖書の『使徒行伝』に登場する、

[占いをこととする女に取り憑いたピュートーン(パイソン)]

という存在、[占いの霊]とも呼び慣わされもしている存在のことをまずもって引き合いに出していた。

(:その点、上記[パイソン]については本稿の出典(Source)紹介の部100、[占いの霊]について契機としての話をなしたとの段にあつての出典紹介部にて[予言の霊としてのピュートーン]の特性]にまつわるところとして近代欧州人の認識を示す洋書 — (Project Gutenbergにて全文公開されているとの CRITICAL EXAMINATION OF THE LIFE OF ST. PAUL『聖人パウロの人生についての批判的検証』との書物) — の英文記述を引証の材として引きもしてピュートーン(パイソン)が何たるかの説明を講じた。

また、並行して国内の即時に物事を確認したくもあるとの向きら「をも」想定して和文ウィキペディアより (そちらウィキペディアにての現行記述につき再引用するところとして) “ピュートーン(古希: Πύθων, Python, ラテン語: Python)とは、ギリシア神話に登場する巨大な蛇の怪物である。長母音を省略してピュトンとも表記される。…(中略)…ピュートーンはガイアの子で、その神託所デルポイを守る番人でもあつた。デウカリオンの大洪水後に残った泥から生まれたと言われる。デルポイの神託所をすっぽり巻ける巨体を持ち、かつては人間たちに神託をもたらしていた。…(中略)…アポローンはピュートーンの亡骸を手厚く扱い、デルポイのアポローン神殿の聖石オムパロスの下の地面の裂け目に葬った。…(中略)…オムパロスとは「へそ」の意で、同地が世界の中心たることを示すという。…(中略)…また、ピュートーンのために葬礼競技大会ピューティア大祭の開催を定め、新たに開いた自分の神託所の巫女にもピューティア(Πυθία)を名乗らせた。デルポイで巫女たちがトランス状態に陥るのは、地底からピュートーンが吐き出す霊気によるものだとされる。…(中略)…『新約聖書』の「使徒行伝」16章16 - 18節にもピュートーンが登場している(『新共同訳』では「占いの霊」)。このときピュートーンは女奴隷に取り憑いて占いをさせていて、パウロ一行に出会うと何度も「この人たちは救いの道を宣べ伝えている」と繰り返した。パウロがうんざりして「イエス・キリストの名によって、この女から出ていけ」と言うと、ピュートーンは即座に出ていったのだった” (引用部はここまでとしておく)との記述を引いたりもしていた)

そうした話柄、切り口上で話をなすことにしたのは

[【パイソン(ピュートーン)の問題に通ずるところでの奇怪無比な、それでいて、予言の本質を示し、また、予言の向かう先にも関わるような図像が存在している】がため、パイソンのことを話の俎

上にあげるべきであるとの【知識】(情報把握)と認識(判断)]

がこの身にあったためである。

これよりの段にてはそこにいう、

【パイソン (ピュートーン) の問題に通ずるところでの奇怪無比な、それでいて、予言の本質を示し、また、予言の向かう先にも関わるような凶像が存在している】

このことについて把握情報に基づいての詳説を講じていくこととする。

まずもって前提となるところとして [次のこと]、取り上げることとする。

[聖書の『使徒行伝』に登場するところの【憑依なして託宣をこととする予言の霊】は[神託の地デルポイと往古結びつけられていた蛇パイソン] であるとの物言いがなされているが、その大蛇パイソンと結びついた巫女達が古代ギリシャ文明では【神託をなす存在】として重要視されていたとのことがある] (直下、[出典\(Source\)紹介の部 109](#)を参照のこと)

出典 (Source) 紹介の部 109

SOURCE 109



Cimabue's Celebrated Madonna (1280-85)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典(Source)紹介の部 109 にあつては

[聖書の『使徒行伝』に登場するところの【憑依なして託宣をこととする予言の霊】は[神託の地デルポイと往古結びつけられていた大蛇パイソン]であるとの物言いがなされているが、その大蛇パイソンと結びついた巫女達が古代ギリシャ文明では神託をなす存在として重要視されていたということがある]

とのことの出典を挙げることとする。

さて、表記のことについては目に付くところとして先に内容を引いた和文ウィキペディア [ピュートーン] 項目にても次いで引用なすような記載がなされているところとなる。

(直下、和文ウィキペディア [ピュートーン] 項目にての現行記載内容よりの再度の引用をなすとして)

「アポローンはピュートーンの亡骸を手厚く扱い、デルポイのアポローン神殿の聖石オムパロスの下の地面の裂け目に葬った。…(中略)…また、ピュートーンのために葬礼競技大会ピューティア大祭の開催を定め、新たに開いた自分の神託所の巫女にもピューティアー(Πυθία)を名乗らせた。デルポイで巫女たちがトランス状態に陥るのは、地底からピュートーンが吐き出す霊気によるものだとされる」

(再度の引用部はここまでとする)

同じくものことは

「ギリシャの神託の地、古代都市デルフィ(デルポイ)の巫女はピュートーンからその名が取られて[ピューティア]と呼称されていた。

彼女らは地中に埋葬された大蛇ピュートーンの腐敗ガスを吸ってトリップ、予言をなすといった類の存在、【蛇巫(へびふ)】であった ——(※日本民俗学を(私的ないし職業的に)研究している向きらが「日本神道では大物主(おおものぬし)、蛇神としての顔を持つその大物主が活玉依比売(イクタマヨリビメ)にいわゆる妻問い婚をなし、蛇として同女を孕(はら)ませたと伝わっている。そうした経緯から国土にては蛇との仲立ちをする巫女がおり、彼女らはいわば【蛇巫(へびふ)】であったのだろう」といったことを主張したりしているとの伝で述べれば、ピュートーンのガスを吸ってトリップするとのことで神託の巫女ピューティアらは古代ギリシャ版の【蛇巫(へびふ)】とも述べられる) —— 」

とのことに通じている。

ピューティアにまつわつての歴史的事情については(極めて確認しやすきところとして)英文 Wikipedia [Pythia] 項目にあつて次のように記載されているところでもある。

(直下、英文 Wikipedia [Pythia] 項目より引用なすところとして)

The name "Pythia" derived from Pytho, which in myth was the original name of Delphi. **The Greeks derived this place name from the verb, pythein (πύθειν, "to rot"), which refers to the decomposition of the body of the monstrous Python after she was slain by Apollo.** The usual theory has been that the

Pythia delivered oracles in a frenzied state induced by vapors rising from a chasm in the rock, and that she spoke gibberish which priests interpreted as the enigmatic prophecies preserved in Greek literature.

(訳として)

「ピューティア(デルフィ巫女)との名称は[パイソ]、神話にあつては都市デルフィ(デルポイ)の最初期の名とされるそちら[パイソ]に由来している。デルポイという地については(原初、)古代ギリシャ人らは「アポロン神に大蛇ピュートン(パイソン)が屠られて埋葬なされた後にてその死骸にての腐敗状態をあらわしているとの動詞 pythein」に由来するものとしての命名を(都市の名として)なしたのである。一般に通用視されるところの理論ではその[デルポイ]の地([パイソン死骸にての腐敗状態(the decomposition of the body of the monstrous Python after she was slain by Apollo)が原初の地名由来となっていたとされる神託の地])の巫女であるピューティアは神官らに(ギリシャ古典に保持されての)[謎帯びての予言]として解釈されてきた訳の分からぬことを託宣しもしていた、岩の裂け目より噴出しての蒸気の影響にて狂乱状態に陥つての予言者らを輩出していたとされている」

(訳を付しての引用部はここまでとする —※—)

(※1 表記の引用部にあつて Wikipedia 上で出典として紹介されているのは **Homeric Hymn to Apollo** (の 363 行から 369 行)とされる。

につき、該当古典、Project Gutenberg のサイトにて公開されている — 従つて特定テキストを検索するなどすることでオンライン上よりそれそのものを同定・捕捉できるようになっている— との、

HESIOD, THE HOMERIC HYMNS, AND HOMERICA 『ヘシオドスのホメロス讃歌』

における Evelyn White という人物によって前世紀初頭にて英訳されているとの版にあつては

(以下、Project Gutenberg のサイトにて全文公開されているとの HESIOD, THE HOMERIC HYMNS, AND HOMERICA『ヘシオドスのホメロス讃歌』よりの引用をなすとして)

Against cruel death neither Typhoeus shall avail you nor ill-famed Chimera, but here shall the Earth and shining Hyperion make you rot. Thus said Phoebus, exulting over her : and darkness covered her eyes. And the holy strength of Helios made her rot away there ; wherefore the place is now called Pytho, and men call the lord Apollo by another name, Pythian ; because on that spot the power of piercing Helios made the monster rot away.

(即時手仕事としての多少意識がかったのものながらも訳を付すとして)

「無情なる死に怪物ティポーンも汝もそして悪名高きキメラも抗じることとはできぬ、ただ、ここにて[大地]、そして、[輝けるハイペリオン]が汝を腐らせるまでだ。このように言い、ポエブス(訳注:アポロンのラテン語にあつての異称)は彼女パイソンに勝ち誇り、闇が彼女の両の目を閉ざした。そして、ヘリオス(訳注:太陽神)の聖なる強さが —その一点にてつらぬく力が化け物を滅せさせるとの由(よし)にて— 彼女(ピュートーン)をその場、今は Pytho と呼ばれ、人々がいと高きアポロンを招請すべくも Pythian との名で呼び

もするとのその場にて腐り果てさせしめた」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

とウィキペディアの記述と[ほぼ同一のこと] (デルポイの原初期の名がパイソンの死骸と結びつく[Phythian]であるとのこと) が記載されている)

(※2 上の※1 ではウィキペディアにプラスして確たる[文献的事実]の問題に関わる典拠 — 過去を変えてしまうような機序がない限り不変不動であるとの古典 — を挙げもしている。その点、本稿の先の段でも申し述べていたのと同じくものことを再三再四、一応、述べておくが、確かにウィキペディア程度の媒体を「それだけにしか論拠を求めずに」信ずるは誤りの元であるとのことがある。

大学や大学院でもウィキペディア程度のものをソースに挙げることは忌避されるくらいがあるとされること (少なくとも大学時代にはウィキペディアなどというものが知られていなかった世代の手前とても聞き及ぶところとしてそういう風があるとされること) や実際にウィキペディアには錯簡(順序記載ミス)・誤脱(誤字脱字)のようないわゆる[汎ミス]に留まらぬところの誤記誤謬や相応の確信犯的なる者達による読み手にバイアス(予断偏見)を与えんとしたの情報操作のための編集記述が多く含まれているとのことは手前もよく知っていることである — 「これは間違いではなかろう」と予断持って物理学者に英文ウィキペディアにての[宇宙線] 関連項目からの記載を引き合いに出しての(然るべきやりようでの) 質問を發して[誤謬]を指摘されてしまったとのこと手前にはある — 。

以上のこと、申し述べたうえでさらに書いておくが、 — (『この世界に丁寧に論拠にスクリーニングかけての話をなすに値する[聞く耳]を持った「本当の」人間 (聞く耳など一切持ちようがないとの[徹頭徹尾そうであるとの偽物]が[本物]のフリをしているといった存在ではないとの「本当の」人間) が如何までほどにいるのか』という筆者に虚しさの念を常に抱かせもするそもその問題事は『それはそれで。』と脇に置いたうえでさらに書いておきもするが) — 。

「手前(本稿筆者)はウィキペディアのみでしか確認できぬような論拠薄弱な話は基本的にはなさないこととしているし(出典を取り立てて挙げないところでは弥増(いやま)しに筆者はそういうスタンスでやっている) 、信憑性に疑義があることを取り上げる場合には、[それ程度の信憑性のものではあるが。] とのことを明示しての書きよう、たとえば、【およそ断じられはしないが】、【…などと言われもしている】といった書きようをなすようにしている」)

(出典(Source) 紹介の部 109 はここまでとする)

the gases of putrefaction?



Pythia

(Python → Pytho → Pythia)

Delphi Original Name

上は 19 世紀から 20 世紀にかけて活動したジョン・コリエという画家の手になる、

Priestess of Delphi『デルポイの巫女』

と画題振られての 19 世紀末(1891 年)に作製された画よりの抜粋となる(英文 Wikipedia に掲載されているとのもの)。

同画にあっては(画題に見るところの)[デルポイの巫女]たるピューティアが —デルポイの旧名 Python が「腐ること」を意味する pythein という発音の大蛇パイソンに由来する動詞から命名されているとされる(上述)ことからもそうであると想起されるように— [地中からわき出てくるパイソンの腐敗ガス(とされるもの)]を吸って[予言]をなすとのそのさまが見てとれる。

さて、以上、[古代ギリシャ版の蛇巫(へびふ)](先述)とも言うべき [ピューティア —聖書の使徒行伝にて「蛇の言葉とされるものにて」パウロらを担いだ蛇(パイソン;ピュートーン)憑きの女占い師が如き存在—]の事をここで取り上げることとしただけの「明確にそうだと示せる」事由がある。それは

[パイソン(ピュートーン)にまつわる奇怪無比な、それでいて、予言の本質を示すような図像が存在している]

とのこととなる。

それは

[ピューティアら(神託の大蛇パイソン・ピュートーンより名称付されての巫女)らが拠点としていた神託の地デルポイには[巫女ピューティアおよびピューティアと結びつく蛇と接合する女子言者]が存在しており、その女子言者は[シビラ]と呼ばれていた。その女子言者[シビラ]に関わるところで

[予言(救世主イエス・キリスト誕生の予言)にまつわっての図像]が

【「明らかに」高い技術力を有している科学的先進文明のやりよう —いかにも人を食ったものとしてのやりよう— と解されること】
として具現化しているとのことがある】

ということである（：いきなりも「[ピューティア] および蛇と結びつく「デルポイの」女予言者にまつわるところで科学的先進文明のやりよう」と解されること】が具現化している」などとの物言いを(まさしく)突拍子もなく持ち出されれば、正気を疑いたくなる、ないし、首をかしばたくなるとの向きも多かろうが、については、「続いての「具体的指し示し」の部を検討していただければ、労せずして伝えんとしていること、ご理解いただけるところである」と明言しておく)。

表記のことについて次の順序での指し示しをこれ以降にしていく。

1. しばしば混同されるデルポイの神託の巫女ピューティアとデルポイの女予言者シビュラには双方、[蛇巫(へびふ)]がかつた存在としての接合性があることの指し示しをなす

2. [予言をなすシビュラ] はキリスト教が欧州を席卷しきった後、さらに時を経ての折たるルネッサンス期にても[美術品らのモチーフとされていた存在]となっていることを指し示す

3. シビュラをモチーフとしたルネッサンス期特定美術作品に

【予言をなさしめる力が(往時の時代の人間存在から見て)圧倒的な科学力を有した存在に由来している】

とのことを示す[証跡]が多重的に見てとれる、しかも、人を食っているとしか思えぬブラックユーモアの発露を伴って見てとれる —ピューティアがそのガスを吸ってトリップしていたとされるデルポイの神託の蛇パイソン(ピュートン)は聖書の使徒行伝で「神の子イエスの教えの真正さに太鼓判を押す」存在として登場しているわけだが、そうもしてピュートンにその教えが担がれている神の子イエスの【処女懐胎】にまつわって人を食っているとしか思えぬ科学的描写をなしているとの一品が存在している— ことを指摘できるようになっているとのことが(「具体的極まりなくも摘示できる格好にて」)「ある」とのことを指し示す

まずもって上にて表記のことらのうちの、

1. しばしば混同されるデルポイの神託の巫女ピューティアとデルポイの女予言者シビュラには双方、[蛇巫(へびふ)]がかつた存在としての接合性があることの指し示しをなす

とのことについてであるが、これ以降の典拠紹介部でもって段階的に同じくものことの解説をなしていくこととする。

宗教というものはえてして人間の運命・生き方を操作する力(力学)に対して非科学的な、神秘的特性を見出すものだが、ここでは【人間操作の背面に圧倒的科学力が透けて見える】とのことを示さんとしている。その点、IF付きの一般論の話として述べて、「仮にもし」、圧倒的科学力を擁した存在が嗜虐的寓意を込めながら被操作種族を愚弄しているようなさまに際会したならば、そのありようを見る者はそうした操作がなされている点について二つの可能性を考えることかと思う。第一。実験が何かで【科学的操作】がなされている(過程に意味がある)。第二。【科学的操作】ははなから何らかの最終目標を企図してなされている(結果に意味がある)。本稿ではそうした思索をもたらす操作が現実になされていること、また、その目的が上にあるところの思索の第二の点に適合すると判じられる理由「をも」指し示さんとするものである。

SOURCE

109(2)



Cimabue's Celebrated Madonna (1268-69)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典 (Source) 紹介の部 109(2) にあつては

[古のデルポイの地には【ピューティア】(蛇パイソンの死骸由来のものもとされる地中よりのガスで酩酊して予言なしていた存在) と並んで【シビュラ(シビラ)】との予言なす存在も扱っていた] (そして、両者【ピューティア】と【シビュラ】はしばし取り立てて異同が注意して論じられる程に近接した存在と見られる傾向がある)

とのことにまつわつての解説をなす。

(直下、英文 Wikipedia[Sibyl]にての[Delphic Sibyl (デルフィのシビュラ)]の節の現行にての記載を引いておくこととする)

The Delphic Sibyl was a legendary figure who gave prophecies in the sacred precinct of Apollo at Delphi, located on the slopes of Mount Parnassus. The Delphic Sibyl was not involved in the operation of the Delphic Oracle and should be considered distinct from Pythia, the priestess of Apollo, also known as the "Oracle at Delphi." [. . .] The Delphic Sibyl has sometimes been confused as Delphic Oracle. The two are not identical, and should be treated as separate figures.

(訳として)「[デルポイのシビュラ]はパルナッソス山、その斜面にてのデルポイ

にてのアポロンの聖域にて予言をなしていたとの伝説上の予言者である。デルポイのシビュラは他のデルポイの他の予言者の動静には関わっておらず、同様に[デルポイの巫女]として知られていたアポロンの女神官たるピューティアとは別個に考えられようとの存在である。…(中略)…デルポイのシビュラはしばしばデルポイの巫女(ピューティアら)と混同されるが、両者は別個の存在であり、別人格として扱われるべき存在である

(訳を付しての引用部はここまでとする)

さらに(書名長くもなるが、オンライン上より誰でも確認できる場所としてのソースとして) Project Gutenberg のサイトにて全文公開されている書物、Charles Rollin という人物(17世紀から18世紀に活動の仏人歴史家)の手になる The Ancient History Of The Egyptians, Carthaginians, Assyrians, Babylonians, Medes and Persians, Macedonians and Grecians (Translated From The French In Six Volumes Vol. I. New Edition. (仏語から訳されての新版、全六巻中の第一巻としての)『エジプト・カルデア・アッシリア・バビロニア・古代メディア・ペルシャ・マケドニア・ギリシャの民らの古代史』)という書籍の冒頭にての Preface (巻頭言)の部の記述を引いておく。

(直下、The Ancient History Of The Egyptians, Carthaginians, Assyrians, Babylonians, Medes and Persians, Macedonians and Grecians (Translated From The French In Six Volumes Vol. I. New Edition. より引用をなすところとして)

We must not confound the Pythia with the Sibyl of Delphi. The ancients represent the latter as a woman that roved from country to country, venting her predictions. She was at the same time the Sibyl of Delphi, Erythraean, Babylon, Cumaean, and many other places, from her having resided in them all. **The Pythia could not prophesy till she was intoxicated by the exhalation from the sanctuary of Apollo.** This miraculous vapour had not that effect at all times and upon all occasions.

(訳として)「[ピューティア]と[デルポイのシビュラ]を混同すべきではない。古代人は後者(デルポイのシビュラ)をして国々を遍歴し、予言を露わにしていた存在であると表している。彼女シビュラはデルフォイ・エルトライ・バビロン・キメリアおよび他の多数箇所にて住まっていたシビュラらと(総称として)同一存在である。(他面)、ピューティアは(定住性を呈して)アポロン聖域にあっての放出物にて酩酊なすまで予言をなすことができなかつたとの存在となる。この奇跡をもたらす蒸気はありとあらゆる時・機会にて効果を呈したものではない」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

以上のように、

「ピューティアのように予言の力を特定地域 —アポロンが大蛇ピュトンを殺傷し、腐り果てたその肉塊を埋葬したとのデルポイ— に制限されて行使していたわけでもなければ、地中よりのガスに依存して予言をなしていたわけでもなく、ギリシャ各地に存在し、デルポイにも存在して予言をなしていた存在である」

というのが[シビュラ]であるとされている。

さて、古代ギリシャにあったデルポイ(デルフィ)にあつては占いをこととする[ピューティア]と並んで[シビュラ]という存在がいた—しかも混同されがちでしばしば異同について目立って指摘されるところのかたちになっていた—と伝わるわけであるが、デルポイ地域に存在していたシビュラも同じくもデルポイに拠っていたピューティアと同文に[蛇]と濃厚に結びつく存在と伝わっているとのことがある。

どういふことかと述べれば、

[「デルポイの」シビュラは[ラミアと呼ばれる伝説上の蛇女]の娘である]

との話が伝存していることがある([蛇の巫女]としての側面に関わるため、このような話をなしている)。

表記のことについて下に出典紹介部を設けておく。

出典(Source)紹介の部 109(3)

SOURCE 109(3)



Cimabue's Celebrated Madonna (1280-85)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典(Source)紹介の部 109(3)にあつては

[各地にシュビラの名を冠する存在がいたとされる中で「デルポイの」シュビラは[ラミアと呼ばれる伝説上の蛇女の娘]であるとされている]

とのことの典拠を挙げておくこととする。

その点、まずもって英文 Wikipedia にあつて別項目として存在している [Delphic Sibyl] 項目より一文のみ抜粋なすところとして次のことが伝わっている。

According to a late late source, her mother was **Lamia, daughter of Poseidon**. 「後の資料によると、デルポイにてのシュビラの母は【ポセイドンの娘ラミア】であるとされている」

上と同じくものことにつき、ここではメジャーどころ(日本にて高等学校にて『世界史』の科目をお受験科目として選択したならば、そう、同科目の領域で忠実なるアウトプット能力を要求される道を選んだとの向きならば、その名を暗記を強いられる)とのフランスの哲人ヴォルテールの著作よりの引用をなす。

(直下、Project Gutenberg にて全文公開されている、すなわち、オンライン上にて「容易に」裏取りできるとの利点がある A PHILOSOPHICAL DICTIONARY VOLUME IX (『哲学事典第9巻』)にての A から Z の字で事典掲載されている SIBYL の項目にての内容を引用するとして)

The first woman who pronounced oracles at Delphos was called Sibylla. According to Pausanias, she was the daughter of Jupiter, and of Lamia, the daughter of Neptune, and she lived a long time before the siege of Troy.

(訳として)

「デルポイにて予言を初めて発した女性はシビュラである。パウサニアス(訳注: ある程度、名が知られた2世紀ローマ時代のギリシャ人史家にして地理学者)によると、彼女はジュピター(ゼウス)とネプチューン(ポセイドン)の娘たるラミアとの間にできた子供となり、そして、トロイア攻囲戦より遙か昔から生きていたとのことである(以下略)」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上のようにシュビラには[ラミアの娘]であるとの説明が付されていること、それが欧州の知識階級にて読まれていた事典(ヴォルテールの記した『哲学事典』/今日の高度情報化社会にて容易にその内容がオンライン上より確認できるとの古典)に載せられていることが分かる。

上に見る [ラミア] がどういった存在であるかと述べれば、一神話に詳しい向きの中には知る人間も多かろうが—

[かつての美しい姿を呪いによりて[醜い蛇]の姿に変えられた女]

のことであると表されることが多いし、そのように伝わっている存在である(出典として:ここでは神話に詳しく向きなどにはよく知られた上記のことにつき容易に確認できるところとして英文 Wikipedia [Lamia] 項目の現行にての記載内容を引いておく。(以下、引用なすとして) “ In ancient Greek mythology, Lamia was a beautiful queen of Libya who became a child-eating daemon. Aristophanes claimed her name derived from the Greek word for gullet, referring to her habit of devouring children. In the myth, Lamia is a mistress of the god Zeus, causing Zeus' jealous wife, Hera, to kill all of Lamia's children (except for Scylla, who is herself cursed) and transform her into a monster that hunts and devours the children of others. Another version has Hera merely stealing away all of Lamia's children and it being Lamia herself, losing her mind from grief and despair, who starts stealing and devouring others' children out of envy, the repeated monstrosity of which transforms her into a

monster on its own. **Some accounts say she has a serpent's tail below the waist. This popular description of her is largely due to Lamia, a poem by John Keats composed in 1819.** Antoninus Liberalis uses Lamia as an alternate name for the serpentine drakaina Sybaris; however, Diodorus Siculus describes her as having nothing more than a distorted face. ”（補ってもの訳をなすとして）「古代ギリシャ神話にてラミアは[子供を喰らう悪鬼]となりはてた美しいリビアの女王を指す。アリストファネス（訳注：代表作『女の平和』で知られる著名な古代ギリシャの詩人）が主張したところでは彼女はギリシャ語 gullet、その子供を喰らうとのやりように言及した言葉から命名された存在であるとされる。神話にては同ラミア、ゼウス夫人であり嫉妬に駆られたゼウスの妻ヘラによってその子らをすべて殺害され（ただ、そのうち、同様に呪われたスキュラは除く）、そして、ヘラによって他人の子らを狩って喰らう怪物へと変えられたと存在とのことになっている。他のタイプの神話にてはヘラはただ単純にラミアより子供らを奪い取るにとどまり、子供らを失ったラミアが悲嘆にて狂い果てて嫉視より他の子供を盗み喰らっていたとの自ら所業がゆえに怪物に変じたともなっている。いくつかの説では彼女は腰の下に蛇の尾を持っているとされる。この「通用性高き」ラミアに対する描写はジョン・キーツ（訳注：英国文学史を語る上では避けては通れぬとのレベルで著名なる 19 世紀詩人／代表作は『ハイペリオン』『レイミア』）の 1819 年の詩、『レイミア』に於いてのところが大きい。アントニウス・リベラリス（訳注：欧州にてルネサンス期にてその残置・残存するところの著作たる Metamorphoseon Synagoge が刊行されたとされている古代の文法学者）によるとラミアとは [蛇としての drakaina]（訳注：drakaina については問題となる Pytho ことピュートーンもその範疇に入ると英文 Wikipedia[Drakaina(Mythology)]項目にて記載されている【女の竜系統の妖異】のことを指す — 英文 Wikipedia[Drakaina(Mythology)]項目より引用なせば、In Greek mythology, a drakaina (Ancient Greek: δράκαινα) is a female dragon, sometimes with human-like features. Examples included Campe, Ceto, Delphyne, Echidna, Scylla, **Lamia (or Sybaris)**, Poine, and **Python (when represented as female)**.「ギリシャ神話にてドラカイナとは人間的特徴を呈しての女の竜らとなる。その例となるところはカンペ、ケトー、デルフィネ、エキドナ、スキュラ、ラミア（あるいはシュバルリス）、ポイネ、そして女と見た場合のピュートーン（パイソン）である」と「現行にては」記載されている）の代替名称となるとされているが、シケリア（シチリア）のディオドロス（訳注：紀元前 1 世紀頃に活動した有名な古代にての史家）はラミアについて [歪んだ顔の存在] 以上の描写はなしではない」（引用部訳はここまでとしておく）

出典 (Source) 紹介の部 109 (3) はここまでとする

以上、通俗的な目立つところにての解説のなされように見るように「デルポイの」シビュラとは

[蛇に変じた女（であり、かつ、子供を喰らう怪物）たるラミアの娘]

とされ、かつもって、

[大蛇パイソンの腐敗ガスとされるものを吸ってトリップ、予言をなすとのピューティアとしばしば混同される（だが、別存在である）とのデルポイの予言の巫女]

ということになる。

であるから、

1. しばしば混同されるデルポイの神託の巫女ピューティアとデルポイの女予言者シビュラには双方、[蛇巫（へびふ）]がかつた存在としての接合性がある

と述べても差し障りないであろうと強調するのである。

Lamia



mother
&
daughter

Delphic Sibyl



図の左列は蛇女としての女妖ラミア —おそらく比較的知られたジョン・キーツの詩『レイミア』を通じてアジアの極東たる日本でもその名が知られるようになったとの存在— を描いた図像らとなる（左列上はハーバート・ドレイパーという画家の手になる20世紀初頭に描かれた妖婦としての近代的ラミア像となる。他面、左列下は Project Gutenberg にて公開されているとの1886年刊行の MYTH-LAND という著作、神話伝承上の生き物らを読み物的に解説することを趣意としているとの同著作にて掲載されているとの鱗に覆われた伝統的ラミアの描画形態を紹介した図となる）。

図の右列はシステーナ大聖堂に存在しているとのルネサンス期の巨匠中の巨匠、ミケランジェロの手になる[デルポイのシビュラ]を描いた画となる。「問題は」、以上、欧州人による具現化のやりようを例示してきたラミアとデルポイのシビュラが親子の関係にあると伝わっていること、そのような「一見にしてはどうでもいいように見えること」が「重大な先覚的言及の性質に通ずる」とのことにもなっていることである（続く段にての本稿の内容を確認いただきたいものではある）。

ここまでで

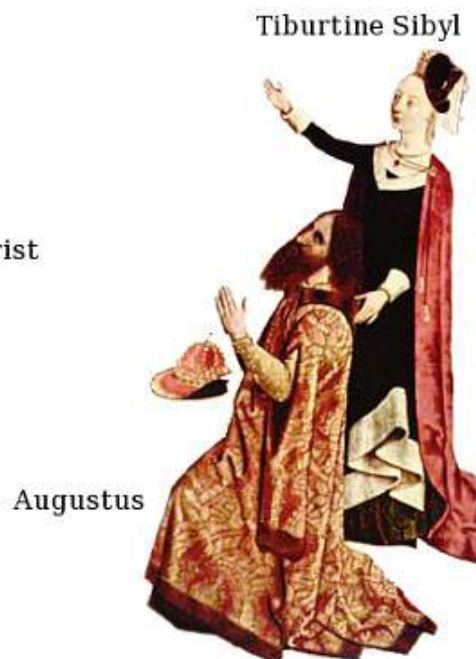
-
1. しばしば混同されるデルポイの神託の巫女ピューティアとデルポイの女予言者シビュラには双方、[蛇巫(へびふ)]がかった存在としての接合性がある
-

とのことにまつわる説明をなしたところで、次いで、

2. [予言をなすシュビラ]はキリスト教が欧州を席卷しきった後、さらに時を経ての折たるルネッサンス期にても[美術品らのモチーフとされていた存在]となっている

とのことを取り上げる(くどくも申し述べるが、そこからして[「予言」の科学的性質]を示すうえで意味をなすとの観点があつての話柄選択となる)。

まずもつては下の[特定図にまつわつての解説部]をご覧ください。



上掲作品は(それが著作権の縛りを受けていないものであることも明示されながら)英文 Wikipedia[Tiburtine Sibyl]項目 ([ティヴォリのシュビラ:ティヴォリの巫女]項目)にて掲載されているとのものである。一より具体的には The Tiburtine Sibyl meets Augustus と命名されている 15 世紀の絵画、作成者が画のモチーフから Master of the Tiburtine Sibyl ([ティヴォリのシビュラの匠(たくみ)]でも訳すべきか)と今日呼ばれるに至っているとの名称不祥のオランダ人画家の手による画となる。

同画表題にみとめられる、
[ティヴォリのシュビラ]
とはローマ(のティヴォリの地)に拠を定めたと伝わるシビュラの末裔のこととなり、同じく
もの画、その [ティヴォリのシビュラ] が
[来たる救世主イエス・キリストの到来(誕生)]
をときのローマ皇帝アウグストゥスに告げたとのエピソードに材を取っているとの画となる
(呈示の画の中では天に立つ聖母子 — マリアとキリスト — にローマの初代皇帝
アウグストゥスが畏れを抱くような所作を見せている — ※通常の見方ではアウグ
ストゥス(紀元前 63 年—紀元 14 年)が [プリンキパトゥス] こと [元首制] を創始、[共
和制期ローマに代わっての帝政期ローマの初代皇帝] と後に呼ばれるようになったと
のその治政下にて後に欧州人精神世界の主宰者となったキリストが生誕を見たことにな
っている。 — といった歴史的事情を受けてのこととしてであろう、世俗の最高権力者
たるローマ帝国初代皇帝であってしても霊的世界(などと宗教の徒に呼び慣わされる
ようなもの)の主催者の降誕(の預言)にはただただ驚嘆、ただ膝を折って屈する
以外に道はないとの寓意が上の画には込められていると見受けられるようになってい
る —)。

無論、

[アウグストゥス(原初キリスト教を「体制維持の妨げになる淫祠邪教の類」
と迫害し続けたまさにその統治体たるローマ帝国の創始者)に対する救世主
降誕の預言と為政者の畏怖]

などというのは後のキリスト教教徒らによって付け加えられたとの創作となると判じられ
るのだが(アウグストゥス帝の何代も後の皇帝であるネロ帝に至るまでローマ帝国内で
キリスト教は狂信的カルトとして迫害されていた集団であるというのが通常の見方
というものであることさえ分かればそうしたことは分かることとなっている)、同
創作エピソードにては[ティヴォリ地方(イタリアの一地方)に拠って預言をなす巫女]
との式で[予言をなす存在としてのシュビラ(の特性)]がなくてはならぬものとして介在
を見せている(より詳しく解説は続く解説部を参照いただきたい)。

さて、直近呈示の画にまつわるところで

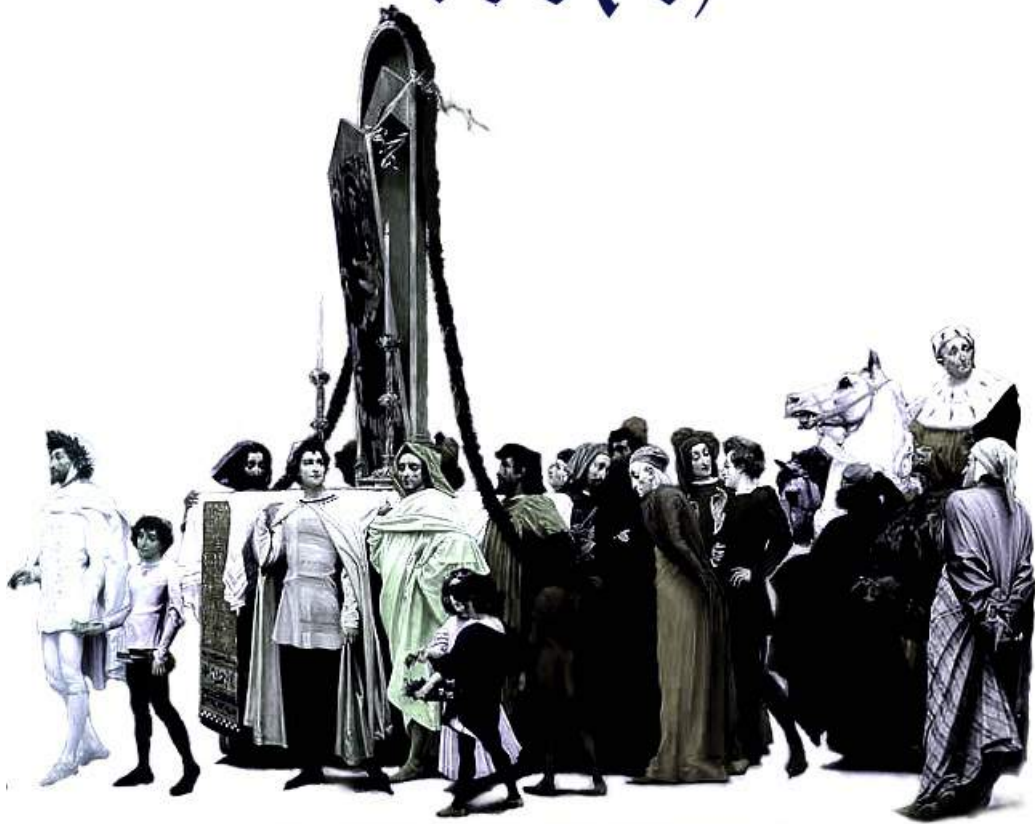
[[アウグストゥス帝にイエスの来臨を告げるシュビラ]というテーマはある程度、通用性の高き
もの — (ここに示したきこととしてルネサンス期にあつての芸術作品がしばしばそこより材を
取られている程度に通用性の高きもの) — となっている]

このことの出典を下に挙げておくこととする。

出典(Source)紹介の部 109(4)

SOURCE

109(4)



Cimabue's Celebrated Madonna (1280-85)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are barefaced and brutal.

ここ出典 (Source) 紹介の部 109(4) にあつては

[[アウグストゥス帝にイエスの来臨を告げるシュビラ] というテーマはある程度、通用性の高きもの — (ここに示したきこととしてルネサンス期にあつての芸術作品がしばしばそこより材を取られている程度に通用性の高きもの) — となっている]

とのことの出典を挙げることとする。

具体的には 19 世紀にてもものされた書にして Project Gutenberg のサイトより全文確認できるとの著作らより [アウグストゥスに救世主誕生を告げるシュビラ構図が通用化していた] とのことによつて記述を抜粋しておく。

まずもつて、19 世紀にてもものされ、Project Gutenberg のサイトより全文確認できるとの、

Legends of the Madonna, as represented in the fine arts (表題訳せば、『純粹芸術にて表象される存在としての聖母マリアの伝説』, 1881 年刊行の版. 著者は Anna Jameson という 19 世紀にて活動の美術に造詣深かつたとのことである女流作家)

よりその内容を引くこととする。

(直下、Project Gutenberg のサイトよりオンライン上から全文確認できるところの Legends of

the Madonna, as represented in the fine arts にての II. Symbols and Attributes of the Virgin よりの抜粋をなすとして)

The Sibyls are sometimes introduced alternately with the Prophets. In general, if there be only two, they are the Tiburtina, who showed the vision to Augustus, and the Cumean Sibyl who foretold the birth of our Saviour.

The Sibyls were much the fashion in the classic times of the sixteenth century; Michelangelo and Raphael have left us consummate examples.

(訳として)

「シビュラらはしばしば(キリスト教体系にあつての)予言者に代替するところとして紹介されてきた。一般的に、僅か二者のみであるが、彼女らはアウグストゥス帝にヴィジョンを見せた「ティヴォリのシュビラ」と救世主の誕生を前言していたとの「キメリアのシュビラ」らである。それらシュビラらは(芸術史にあつての)16世紀古典期にて流行となっていたもので、ミケランジェロとラファエルの両名がこのうえない例を今日に残している」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

次いで、上にて挙げた出典と同文に19世紀、より具体的には1893年に刊行されたとの Rodolfo Lanciani (19世紀イタリアの考古学者で古代ローマの地図再現の分野の開拓者として知られていた人物ロドルフォ・ランチャニ)の手になる書、PAGAN AND CHRISTIAN ROME (『異教およびキリスト教のローマ』)との古書より該当するところ —シビュラのアウグストゥスに対する預言の類が通用化した宗教的テーマとして語り継がれてきた背景があるとのことの典拠となるところ— の記述を引いておくこととする。

(直下、Project Gutenberg のサイトよりオンライン上から全文確認できるところの Pagan and Christian Rome (1893) にての CHAPTER I. the Transformation of Rome from a Pagan into a Christian City よりの抜粋として)

The belief that the sibyls had prophesied the advent of Christ made their images popular. The church of the Aracoeli is particularly associated with them, because tradition refers the origin of its name to an altar — ARA PRIMOGENITI DEI— raised to the son of God by the emperor Augustus, who had been warned of his advent by the sibylline books. For this reason the figures of Augustus and of the Tiburtine sibyl are painted on either side of the arch above the high altar.)

(前提となっている前文内容を省略するとのかたちで訳すとし)

「[シビュラがキリストの到来を予言したという信仰]にて(先述の)それらイメージはよく知られたものとなった。

語り継がれるところでは[教会](訳注:文脈上、取り上げられている特定の教会)の名の由来が

[ARA PRIMOGENITI DEI] (訳注: Primogeniti は the right of succession belonging to the first-born とのことで[最初に生まれし者に付与される継承権]の意、DEI は Deus とのことで[神]の意であろう。従って、ARA PRIMOGENITI DEI は[神なる者の最初に生まれし正当なる世継ぎとしての力]とでも訳すべきところである)

との言葉、『シビュラの手紙』にあつてイエスの到来を告知されることになったと表記されている皇帝アウグストゥスが発したと「されている」言葉 —(訳注:なお、

アウグストゥスは宗教権威の発するところとしての最高神祇官の称号も帯びていた) — に代替するものとなっていると言及されているため、サンタ・マリア・イン・アラチェーリ教会(訳注:ローマに現存する教会で The Basilica of St. Mary of the Altar of Heaven との呼称でも知られる)はそれらと殊に関係性があるとされるのである。この理由のため、[アウグストゥスとティヴォリのシュビラの似姿ら]は教会祭壇上部のアーチの両の側に描かれている」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

(出典(Source)紹介の部 109(4)はここまでとする)

これにて、『微に入りすぎたきらいありか』と考える一方で[重要な前言](非科学的にもほどがあるとのドグマを呈しながら人間社会に分断の根をもたらしえてきた宗教であるキリスト教、そのキリスト教の大系に科学的やりようでもまぶされた人間の養殖目的と人間の最終的皆殺しにまつわる重要な前言)に関わるところであるととらえるため、出典紹介に多少、力を入れてきたところとして、

2. [予言をなすシュビラ]はキリスト教が欧州を席卷しきった後、さらに時を経ての折たるルネッサンス期にても[美術品らのモチーフとされていた存在]となっている

とのことにまつわる解説とした。



上掲図は15世紀初頭作成開始、15世紀末成立の
The Très Riches Heures du Duc de Berry『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』

にて掲載されている図となり、ここまで解説してきたところと同文の、

[シユビラがアウグストゥスに救世主の誕生を預言をなし、そのプロセスで中空に赤子を掲げた聖母マリアのヴィジョンが現われ、そして、皇帝が膝を折るとの構造]

が現われているとの図となる。

以上のような[皇帝に対して中空にヴィジョンとして投影される救世主母子の姿を指で指し示すシビュラ]の構図は中世末期の頃 —『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』成立期— にはある程度、通用化を見ていたと推し量れる構図となっている(尚、画に見るアウグストゥス帝がおおよそローマ人と見えないような格好をしているとのことについては時代考証をなせるだけの知識が往時の人間にはなかったとの見方もできはする)。

(キリスト教徒にあっては[シビュラ]をして【イエス降誕の予言者】と見る見方があるわけだが、同様にペイガニズム(キリスト教サイドからの異教/往古に潰えたギリシャ・ローマの宗教もこのペイガニズムの範疇に入る)の【託宣をこととする存在】をしてキリスト(の教え)を「救いの御子」(の教え)と語らしめる側面がキリスト教大系にはもう一点ありもし、それが聖書それ自体の中に見られもする記述、先述の新約聖書『使徒行伝』にみとめられもする【「蛇」パイソン・ピュートン(に憑かれた女/いわばもの巫女ピューティア)】がイエスの伝道使節であるパウロらを手放しに礼讃する下りとなっているのである)

ここまで来たところで

3. シビュラをモチーフとしたルネサンス期特定美術作品に

【予言をなさしめる力が(往時の時代の人間存在から見て)圧倒的な科学力を有した存在に由来している】

とのことを示す[証跡]が多重的に見てとれる、しかも、人を食っているとか思えぬブラックユーモアの発露を伴って見てとれる —ピューティアがそのガスを吸ってトリップしていたとされるデルポイの神託の蛇パイソン(ピュートーン)は聖書の使徒行伝で「神の子イエスの教えの真正さに太鼓判を押す」存在として登場しているわけだが、そうもしてピュートンにその教えが担がれている神の子イエスの【処女懐胎】にまつわって人を食っているとか思えぬ科学的描写をなしているとの一品が存在している— ことを指摘できるようになっているとのことが(「具体的極まりなくも摘示できる格好にて」)「ある」

とのことを取り上げることとする。

下の図を見ていただきたい。



Meeting of Augustus and the Sibyl



Domenico Ghirlandaio
(1449 – 1494)

同画はルネサンス期の絵画で比較的知られた画家であるドメニコ・ギルランダイオ (Domenico Ghirlandaio, 1449–1494 / 肖像は上にての右下に呈示) という 15 世紀画家 — (nonsense conspiracy theory [馬鹿馬鹿しき陰謀論] の一分野としての [UFO 陰謀論: nonsense UFO conspiracy theory] でその「他の」絵画作品の描写のなしかた (中空にて光輪状の物体を描くとの描画のなしかた) がユーフォーというやつとの絡みで問題視されること「も」ある画家) — が描いたとの画となり、画題として

Meeting of Augustus and the Sibyl (邦訳すれば『アウグストゥスとシビュラの出会い』)

と題されてのフレスコ画である (:所在地はフィレンツェ Florence で現時にて教会に飾られている画となり、美術館ウェブサイトらにてもその似姿が公開されているものとなる — いいだろうか。「これより指し示していくことが極めて奇態なることらになるがために事前に断っておく」が、上の画はユーフォー陰謀論者の類が「捏造」したものなどではない。その点、上掲画、Meeting of Augustus and the Sibyl (『アウグストゥスとシビュラの出会い』) は「フィレンツェの聖三位一体教会 (サンタ・トリニタ教会サセッティ礼拝堂; Sassetti Chapel)」に現況存するとのフレスコ画となり、真つ当な美術館のウェブサイトらより確認可能なものとなっている。英文画題 (Meeting of Augustus and the Sibyl) を入力、グーグル検索してみるなどすることできちんとしたサイトにて [真正なるものと見倣されている教会敷設の歴史画] であること、確認なせるようになっているものであるので、その点からして疑わしい (事後の内容を検討されて疑わしくなった) との向きは確認願いたい次第である —)。

さて、上掲の画については次のこと、i. から iii. のことらが[明らかなところ]として述べられるようになってい

i. 画題に見るように画は

[ローマのアウグストゥス帝とシビュラ（先述のように、うち、デルフォイのシュビラ、[デルフィック・シビュラ]については[蛇巫]としての側面も有していた託宣供給存在となる）の出会い]

をモチーフにしてのものであり、そして、それはシビュラがローマの最高権力者にのぼりつめたアウグストゥス帝に救世主イエス・キリストの誕生を予言したとの場を描いてのものである（：画家ドメニコ・ギランダイオの時代、ルネサンス期にあつては[予言のシビュラ]から材を取るのが流行であつたらしいとのことは先に出典紹介をなし、指し示していることである — Legends of the Madonna, as represented in the fine arts『純粹芸術にて表象される存在としての聖母マリアの伝説』(1881)にての II. Symbols and Attributes of the Virgin の部よりの抜粋として The Sibyls are sometimes introduced alternately with the Prophets. In general, if there be only two, they are the Tiburtina, who showed the vision to Augustus, and the Cumean Sibyl who foretold the birth of our Saviour. The Sibyls were much the fashion in the classic times of the sixteenth century; Michelangelo and Raphael have left us consummate examples.「シビュラらはしばしば(キリスト教体系にあつての) 予言者に代替するところとして紹介されてきた。一般的に、僅か二者のみであるが、彼女らはアウグストゥス帝にヴィジョンを見せたティヴオリのシュビラと救世主の誕生を前言していたとのキメリアのシュビラである。それらシュビラらは(芸術史にあつての) 16 世紀古典期にて流行となつていたもので、ミケランジェロとラファエルがこのうえない例を今日に残している」とのことを引いていたところである—)。

ii. 画の下部にて[マッチ棒状のもの]と[二重螺旋構造] (よく見ると、蛇が絡みあいながら、二重螺旋構造を呈しているようにも見える) が合わせて描かれている(下にての拡大部を参照のこと)。

Meeting of Augustus and the Sibyl



double helix



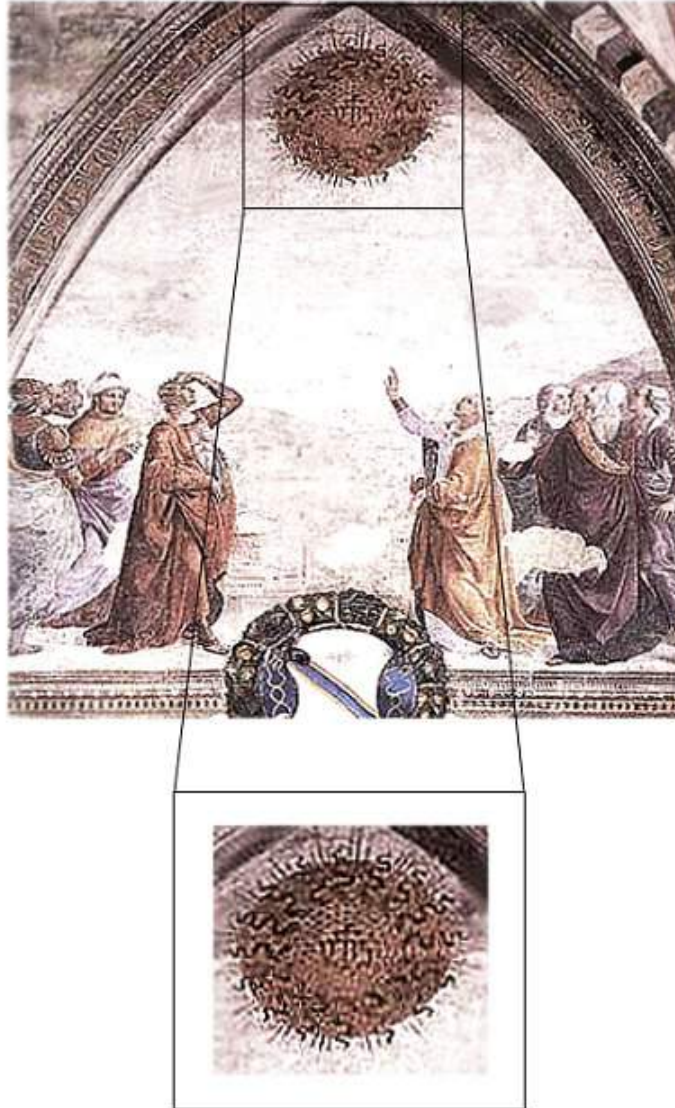
Match ?

iii. 画の上部にては[予言のシビュラ]がアウグストゥス帝に指差して示すとの格好で

[中空に浮かぶ【複数の蛇行する線のようなもの(オタマジャクシあるいは蛇のように見えるもの)が周囲に群がっているとのありよりの球形構造体】]

が描かれている(下にての拡大図)。

Meeting of Augustus and the Sibyl



ここまできたところで書くが、以上の i. から iii. のことらについては次のことらが述べられるようになっているからこそ問題なのである。

(文中に付しての※1から※8との部についてはこれ以降、事細かに典拠を挙げることにすると述べたうえでの話として)

一般教養レベルの話として [生物の精子「の先端」] にあつては [二重螺旋構造を呈するDNA] が格納されている。そのようにDNAを先端に宿す精子、正確には厳しい競争を勝ち残り一番最初に卵細胞の内部に入り込んだ精子が卵細胞と接合して細胞分裂によって成長可能な状況になることを世に[受精]という(これは小学校高学年の保健体育の科目で習うような基本的なこと(を多少補いもした程度の話)であろうと見るが、すぐ続いての段に一応の出典紹介をなしておく —※1—)。

翻って、前掲のルネサンス期絵画、その下部にては

[生物の精子「の先端」にあって二重螺旋構造を呈するDNAが格納されていること(生物学的事実)]

を想起させるように

[マッチ棒状のもの(精子の姿に見える、とのもの)の先端]

に対して[二重螺旋構造]が「接合して」描かれている。

また、前掲の絵画ではその構図上部にて

[球形の構造体]に[オタマジャクシ状のもの](ないしは蛇のように見えるもの)が「どういわけなのか」多数群がるありよう]

までもが描かれているが、それは「あからさまに」、

[受精過程を再現しての図]

との側面を帯びている —以下、続いて呈示の図を参照のこと— (:それにつき、人間を基礎に考えれば、(後にて出典も挙げるところとして)数億の精子の内、子宮まで到達できるのは数千から数十万、排卵期卵子の前面までたどり着けるのは数十から数百とされている(※2として下に典拠を挙げる)。前掲の画にてのオタマジャクシ状の蛇行する物体らは「目立つところで」数えたところ16ほど存在している(ようするに卵子に到達する精子の数との近似を見てとれる))。

ここまでの内容でもってして

[同じくもの絵画(の下部)にてDNA螺旋構造状のものが(DNAがその先端に格納されている)精子状の物体の先端部と結びつけられて描かれている]

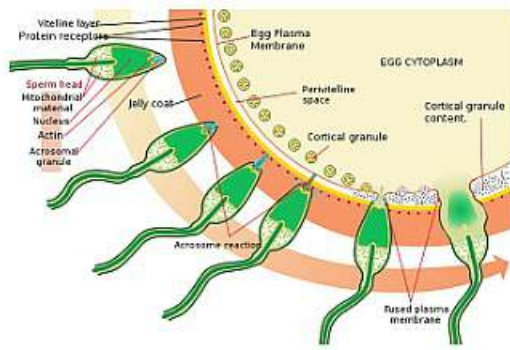
[同じくもの絵画(の上部)にて[競争の末に脱落しなかった精子が卵子(卵細胞)に入り込もうとするとのその受精過程とほぼ同様の構図]がシビュラに指さされての箇所にて具現化を見ている]

とのことにまつわっての話をなしてきた。

かてて加えて(より性質悪きところで加えもして)、先掲の絵画に関しては

[処女懐胎の救世主の来臨 —処女懐胎が荒唐無稽な紛いものの観念とした場合に、それに代替する受精過程— をシビュラが皇帝アウグストゥスに伝えているとの諸々の他の画らの構図として対応している]

もの「とも」なっている (:先に解説したところとなるが、直下にての [問題となるギルランディオの図と他のシビュラとアウグストゥスの託宣を描いた図を並べての図] を参照されたい —他の図では[嬰兒(キリスト)を抱く「処女」マリアの中空の幻影]をシビュラが指差しているのに対して、問題となるドメニコ・ギルランダイオ絵画では[精子状の蛇行するものが卵子状の球体に群がるさま]が描かれているのである(また、ドメニコ・ギルランダイオの図には「不可解極まりなくも」構図の下部にマッチ棒状の物体の先端に二重螺旋構造が接合しているとのありよう「も」が描かれており、そのことより精子の先端に二重螺旋構造を呈するDNAが格納されているとの生物学的事実を想起させもする、とのことさえある) —)。



Meeting of Augustus and the Sibyl



Virgin Mary & Jesus Christ



Augustus



Meeting of Augustus and the Sibyl

上にての図を通してこれより本稿にて何を具体的かつ多重的に指し示したいのか、その方向性の大きなるところは推し量れりいただけることか、とは思う一要するに、【無原罪の宿り、処女懐胎などという非科学的な過程で誕生したとのドグマが歴年、人間存在に押しつけられてきたイエス・キリスト信仰】にあってのキリスト誕生の予言の画に【克明な生物学的受精の構図】が再現して示されていると訴求したいのである一。

さて、人類が精子の構造を発見するに至ったのは何時頃か。問題となる前掲画を描いたドメニコ・ギルランディオの没年(1494年)より100年以上後のこと、1677年に[顕微鏡]を利用して多くのことを観察したアントニ・ファン・レーウェンフックがその発見をなした — ※3 — とのことが科学史にまつわる事実として知られている(：したがって、そもそも、15世紀に描かれたとの画に精子状のものが描かれている自体が普通に考えれば、視覚的[偶然]以上には説明がなせないこととなる)。

だけではなく、DNAの二重螺旋構造が発見されたのはおよそ半世紀ほど前、すなわち、ようやくものの1950年代のことである(※4)。

であるから、15世紀の絵画に [DNAの二重螺旋構造] が描き込まれているなどという事は — 中世人が原子力のこと言及していたとする並みに — ナンセンスなことである。

だが、「それなりの」意味性 —ただし、それは[処女懐胎などというものを信じている人間ら] [都合上、信じた"フリ"をなしている人間ら] を馬鹿にしきっているとの意味性ともなる— を伴っていると判じられるところで、すなわち、

[処女懐胎の救世主の誕生(生物学的事実)に照らし合わせればの「懐胎」「出産」])が(予言として)指差されているとの図]

にあつて

[(その構図の下部にては)蓋然性というものが全くないところでマッチ棒状のものの先端と二重螺旋構造が結びつけられてのありよう]

および

[(その構図の下部にては)蓋然性というものが全くないところで蛇行するオタマジャクシ状のものが球形の卵に群がるありよう]

が「同時に」具現化を見ているとの[事実]そのものに相違はない(考えてみるといい。**【精子の先端に二重螺旋構造を呈するDNAが格納されているとの生物学的事実を如実に想起させる描写】**【**精子と卵子が結合して受精がなされるとの生物学的事実を如実に想起させる描写**】とのふたつの描写が**【懐胎・出産】**という生物学的再生産プロセスにまつわる生物学的事実^{にまさしくも関わる}とのことをモチーフとしている絵画にて**【偶然】**で同時に現出するということが偶然であるのか、ということ。その点、[卵子状のものに蛇行する精子状のものが群がる様子]が一体全体、他になにを示さんとして描かれているものなのか、筆者としては是非とも説得力ある見解を(そのようなものが仮にひねり出せるのならばだが、)是非とも聞きたいと考えてもいる)。

ここまでの流れにて筆者が何を述べたいのか、ご理解いただけていることか、と思うが、「さらにもって、」
次のようなことらもある。

・先掲の画 Meeting of Augustus and the Sibyl が描かれたのは画家ドメニコ・ギランダイオ(1449-1494)が存命中の間、要するに15世紀の間を出ない折のことと認知されている。そもした同画が描かれた「後」にイエズス会という伝道組織が結成されたとの史的経緯がある(※5)。

そのイエズス会、高等学校での[日本史]でも[世界史]でも暗記を強いられるだけの歴史的影響力を有していた伝道組織は

[「処女」懐胎をなしたと信心深き者達が信ずることを無理矢理強要されてきたとの「聖母」マリアを守護聖人とする伝道団]

であり(※5)、また、と同時に、

[蛇と密接に結びつく紋章を掲げる男(イグナティウス・ロヨラ)によって組織された伝道団]

にして、

[上掲画の上部にて具現化を見ている「競争の末に脱落しなかった精子が卵子(卵細胞)に入り込む」とその受精過程とほぼ同様の構図」と相似形を呈する紋章]

を掲げての組織となっている(※6. 図と出典を挙げて後に細かくも説明する)。

従って、

[シビュラ(うち、使徒パウロらの説くキリストの道を救いの道と讃えた聖書における占いの霊(パイソンないしピュートン)の本拠であった託宣の巫女らピューティアの本拠地デルフィに拠つてのデルフィック・シビュラについては「蛇巫」としての側面を帯びていると先述している)の預言を描いた画]

と

[処女懐胎をなしたマリアを守護聖人とするキリスト教カトリック勢力のイエズス会 —創始者イグナティウス・ロヤラの紋章(コート・オブ・アームズ)が蛇と結びつくとの処女懐胎のマリアを守護聖人とするとの伝道団— のやりよう] が複合的に結びつくことになる。

・蓋然性の問題に関わるところとして絵に描かれているような「マッチ状のもの」がマッチ「ではない」と考えられるだけの時代的背景「も」ある(※7. マッチ登場の背景については多少、細かくもの出典紹介を続いての段にてなす)。であれば、それが何故、そこに描かれているのか、蓋然性がよりもってしてない(だが、現代の観点で見れば蓋然性はまざまざと「ある」)、という意味が[マッチではなく精子を描いたのではないか。]との見方がさらに重みをもってくる。

・また、「受精過程に見る精子と卵子のサイズ比」も上掲の図には「正確に」反映されていると見えもするようになってきているとのことが(後述するように)「ある」(※8 —先に※2と付したところでは数的なる面での問題として[卵子に到達する精子]の数に近い蛇行する物体が問題となる絵画に描かれているとのことに言及したが、「さらに」、それらオタマジャクシ状の蛇行する物体らとそれらが群がって描かれる絵画上部の球体のサイズ比までもが【現実の精子・卵子のサイズ比に近い】との「馬鹿げた」ことまでもがある(下にての※8にまつわる出典をよく参照のこと—)。

以上のことらについてこれより典拠となるところを(煩瑣面倒であるとの認識もあるのだが)全面カバーするとのかたちで挙げる —※1から※8と振っての部に対応させての式で典拠となるところを挙げる— こととする。

それが【操作なす存在ら】の特質および「人間存在(彼ら操作なす存在が心底馬鹿にしきっていることが推し量れる人間存在)を終局的にどうしたいのか」という意志表示内容そのものと地続きになっているとの判断事由があつてのこととして、

※1 (問題となる 15 世紀絵画 —聖母マリアの処女懐胎に次ぐ救世の御子の誕生の予言をモチーフとした画— のそれと【類似の構造】が具現化しているところに関わることとして) [生物の精子「の先端」]にあつては[二重螺旋構造を呈するDNA]が格納されているとの生物学的事実がある

※2 (問題となる 15 世紀絵画 —聖母マリアの処女懐胎に次ぐ救世の御子の誕生の予言をモチーフとした画— にそれと【類似の構造】が具現化しているところに関わることとして) 人間の数億の精子の内、子宮まで到達できるのは数千から数十万、排卵期卵子の前面までたどり着けるのは数十から数百とされているとの生物学的事実がある

※3 生体精子の構造のはじめての特定は[顕微鏡]を利用して多くのことを観察したアントニ・ファン・レーウェンフックによる 1677 年の事績となる(とされる)

※4 DNAの二重螺旋構造が発見されたのは(時代区分における[近代]の後の)[現代]に入つてのこと、いまより半世紀ほど前の 1950 年代のことである

※5 (問題となる 15 世紀絵画 —聖母マリアの処女懐胎に次ぐ救世の御子の誕生の予言をモチーフとした画— の【構図の派生】に関わることとして) イエズス会 —(世界史上、極めて幅広くもの強大な影響力を及ぼしてきたとされるカトリック伝道団中、最も強力な団体)— は聖母マリアを守護聖人としている

※6(問題となる 15 世紀絵画 —聖母マリアの処女懐胎に次ぐ救世の御子の誕生の
 予言をモチーフとした画— の【構図の派生】に関わることとして) 聖母たる処女懐胎
 のマリアを守護聖人とするイエズス会は問題たる絵画の【精子と卵子の結合過程を示
 すが如く構図】と視覚的に接合するシンボルを掲げての組織として(問題となる絵画
 製作の)後に設立されており、また、そのイエズス会の創始者イグナティウス・ロヨラの
 紋章 (コート・オブ・アームズ) は [蛇] と結びついている

※7 (問題となる 15 世紀絵画 —聖母マリアの処女懐胎に次ぐ救世の御子の誕生の
 予言をモチーフとした画— の【類似の構図】に関わることとして) 15 世紀にはいまだ
 今日的な似姿を呈してのマッチ(フリクション・マッチ)は存在していなかったとの発明
 史にまつわっての解説がなされている(だから問題となる絵画に描かれているとの精
 子状の物体は【マッチ】の似姿などを模してのものとは考えがたい)

※8 (問題となる 15 世紀絵画 —聖母マリアの処女懐胎に次ぐ救世の御子の誕生の
 予言をモチーフとした画— の【構図】に関わることとして) 絵画にあつての【蛇行する
 蛇状の物体らが球形の物体に群がるありよう】については現実の精子・卵子のサイズ
 比に近いものらが描かれているとのかたちになっている

とのことらの典拠を挙げることとする。

出典(Source)紹介の部 109(5)

S O U R C E 109(5)



Cimabue's Celebrated Madonna (1853-5)
 Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are
 barefaced and brutal.

■ 外挿
 付記とし
 まして：
 ここ【典
 拠紹介
 部 109
 (5)】
 には「長
 くも」の
 p.917か
 ら p.935
 との頁数
 を割いて
 いもする
 ため、以
 降【典拠
 紹介部】
 (従たると
 ころ)と
 【指し示
 しの主軸
 たるとこ
 ろ】の関
 係につい
 て惑われ
 ぬよう、
 何卒ご注
 意いただ
 ければ、
 と申し述
 べさせて
 いただき
 たき次第
 です。また、
 「お勸めは
 いたしません
 が」典拠
 委細
 読み飛
 ばしの方
 えで内容
 把握なそ
 うとの向
 きにおか
 れまして
 は(歩を
 進めてい
 いただき
 ました)本
 書
 p.935か
 ら読解い
 ただけれ
 ば、と考
 えていま
 す。

[絵画 **Meeting of Augustus and the Sibyl** —先掲のように画上部構造(イエス・キリスト降誕を皇帝に告げるシビュラによって指さされている箇所)に【蛇行する物体が円形構造体に群がるありよう】、画下部構造に【マッチ状の物体の先端と(蛇とも見える)二重螺旋構造が結びつけられてのありよう】が見てとれるとの絵画—]

に関わるところとして

-
- ※1 [生物の精子「の先端」]にあつては[二重螺旋構造を呈するDNA]が格納されているとの生物学的事実がある
 - ※2 人間の数億の精子の内、子宮まで到達できるのは数千から数十万、排卵期卵子の前面までたどり着けるのは数十から数百とされているとの生物学的事実がある
 - ※3 生体精子の構造のはじめての特定は[顕微鏡]を利用して多くのことを観察したアントニ・ファン・レーウェンフックによる 1677 年の事績となる(とされる)
 - ※4 DNA の二重螺旋構造が発見されたのは(時代区分における[近代]の後の)[現代]に入つてのこと、いまより半世紀ほど前の 1950 年代のことである
 - ※5 イエズス会 —(世界史上、極めて幅広くもの強大な影響力を及ぼしてきたとされるカトリック伝道団中、最も強力な団体)— は聖母マリアを守護聖人としている
 - ※6 聖母たる処女懐胎のマリアを守護聖人とするイエズス会は問題たる絵画の【精子と卵子の結合過程を示すが如く構図】と視覚的に接合するシンボルを掲げての組織として(問題となる絵画製作の)後に設立されており、また、そのイエズス会の創始者イグナティウス・ロヨラの紋章(コート・オブ・アームズ)は[蛇]と結びついている
 - ※7 15 世紀にはいまだ今日的な似姿を呈してのマッチ(フリクション・マッチ)は存在していなかったとの発明史にまつわつての解説がなされている(だから問題となる絵画に描かれているとの精子状の物体は【マッチ】の似姿などを模してのものとは考えがたい)
 - ※8 絵画にあつての【蛇行する蛇状の物体らが球形の物体に群がるありよう】については現実の精子・卵子のサイズ比に近いものらが描かれているとのかたちになっている

とのことが指摘出来るようになっているとの点についての典拠を —長くもなるが— 挙げることにする。

まずもつて

-
- ※1(問題となる 15 世紀絵画 —聖母マリアの処女懐胎に次ぐ救世の御子の誕生の予言をモチーフとした画— のそれと【類似の構造】が具現化しているところに関わることとして) [生物の精子「の先端」]にあつては[二重螺旋構造を呈するDNA]が格納されているとの生物学的事実がある
 - ※2(同上) 人間の数億の精子の内、子宮まで到達できるのは数千から数十万、排

卵期卵子の前面までたどり着けるのは数十から数百とされているとの生物学的事実がある

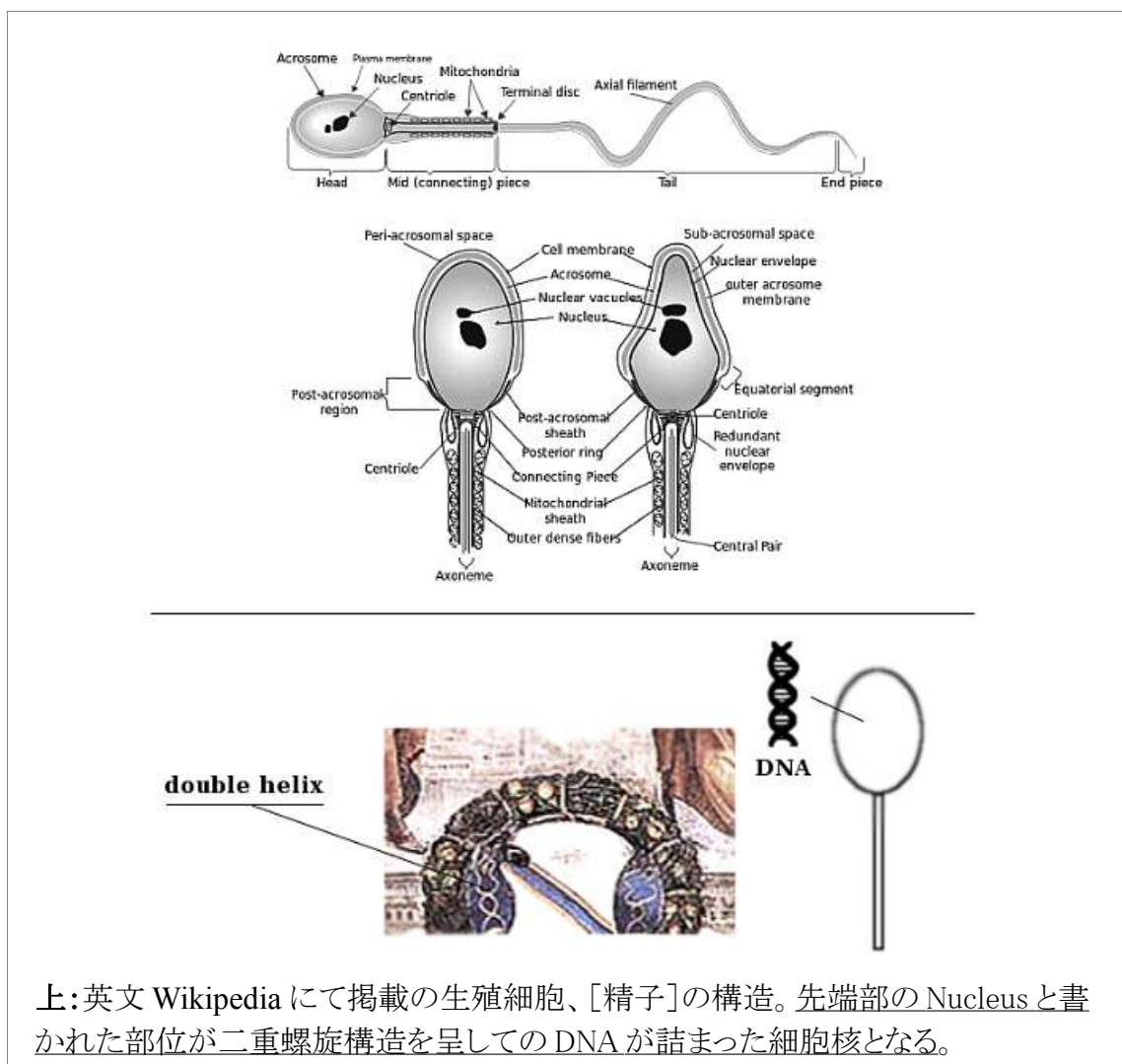
とのことらの世間的通俗的解説のなされようを引いておくこととする —完全に一般教養レベルの話となり、「さらに、」突き詰めての話をなすべくものしている本稿でわざわざそこまで解説する必要はあるのか、と逡巡するところもあったのだが、世間的通俗的解説のなされようを引いておくこととする—。

(以下、和文ウィキペディア[精子]項目にての[動物の精子]の節の現行記載内容より一部引用をなすとして)

動物の精子は卵子に比べて小さく、運動能力を有した雄性生殖細胞である。**精子の構造は、DNA のつまった頭部**、ミトコンドリアの集合した中片部、さらに中心小体から伸びた軸糸からなる尾部から構成されている。

(引用部はここまでとする)

以上、引用なしでの目立つところにあつてのウィキペディア現行記載の部では —他にも同様のことを確認できる媒体はいくらでもあるわけだが— 精子の先端に DNA が格納されているとの基本的なる生物学的事実が記載されている。



上: 英文 Wikipedia にて掲載の生殖細胞、[精子]の構造。先端部の Nucleus と書かれた部位が二重螺旋構造を呈しての DNA が詰まった細胞核となる。

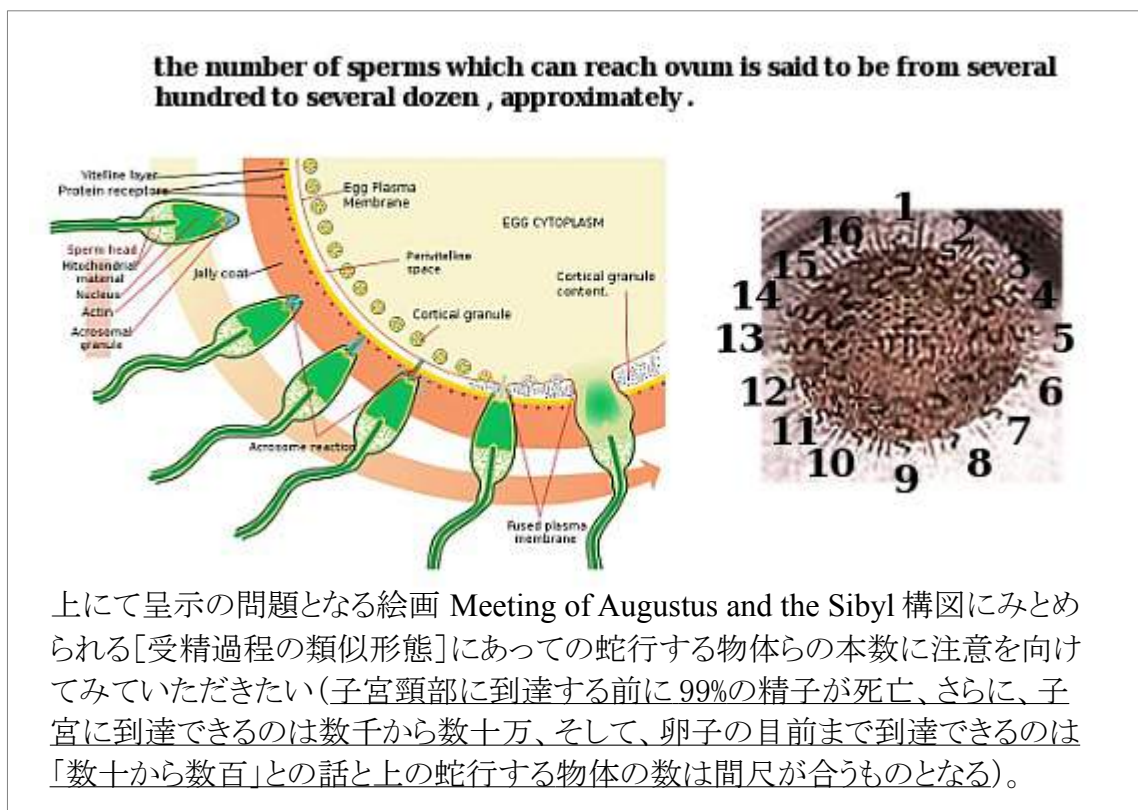
下: 絵画 Meeting of Augustus and the Sibyl にあつての構図。マッチ「状のものが二重螺旋構造 —DNA に特徴的な構図でもある— と先端で結びつけられている。

(次いで、以下、和文ウィキペディア[受精]項目にての[ヒトの受精]の節にての現行記載内容よりの極一部引用をなすとして)

子宮頸部に到達する前に約 99 パーセントが死滅、子宮まで到達できるのはおよそ数千—数十万、排卵期に卵子の目前まで到達できるのはおよそ数十—数百である。

(引用部はここまでとする)

上にての目立っての解説部では —保健体育の授業のように— [人の受精]のプロセスにおいておむね排卵期卵子に到達する生殖細胞精子の数が数十から数百まで縮減しているとの記載がなされている(わけだが、それが「15 世紀」絵画にあつての類似構図に関わるために問題となる)。



ここまでにて

※1(問題となる 15 世紀絵画 —聖母マリアの処女懐胎に次ぐ救世の御子の誕生の予言をモチーフとした画— のそれと【類似の構図】が具現化しているところに関わることとして) [生物の精子「の先端」]にあつては[二重螺旋構造を呈する DNA]が格納されているとの生物学的事実がある

※2(同上) 人間の数億の精子の内、子宮まで到達できるのは数千から数十万、排

卵期卵子の前面までたどり着けるのは数十から数百とされているとの生物学的事実がある

についての解説をなしたとして、次いで、

※3(問題となる15世紀絵画の【成立時期に見る奇怪性】に関わることとして) 生体精子の構造のはじめての特定は[顕微鏡]を利用して多くのことを観察したアントニ・ファン・レーウェンフックによる1677年の事績となる(とされる)

※4(同上) DNAの二重螺旋構造が発見されたのは(時代区分における[近代]の後の)[現代]に入ってから、いまより半世紀ほど前の1950年代のことである

とのことらの典拠を目につくところより挙げておくこととする。

(以下、英文 Wikipedia[Spermatozoon]項目現行記載内容よりのワンセンテンス抜粋として)

Sperm cells were first observed by Anton van Leeuwenhoek in **1677**. [1]
((訳)「精子細胞は**1677年**、アントニ・ファン・レーウェンフックによって発見された」)

(引用部はここまでとしておく —※—)

(※上記の英文ウィキペディア(現行記載)にて[1]とされているところの出典は "Timeline: Assisted reproduction and birth control". CBC News. Retrieved 2006-04-06. という CBC ニュースの概況紹介部に求められている)

(さらに以下、英文 Wikipedia[DNA]項目現行記載内容よりの抜粋をなすとして)

In 1953, James Watson and Francis Crick suggested what is now accepted as the first correct double-helix model of DNA structure in the journal Nature. [12]

「1953年にあつてジェームズ・ワトソンとフランシス・クラックによって現行、受け入れられているように正しいかたちでの DNA 二重螺旋構造モデルが初めて『ネイチャー』誌上にて提案されることとなった」

(引用部はここまでとしておく —※—)

(※上記の英文ウィキペディア(現行記載)にて[12]とされているところの出典は DNA の二重螺旋構造発見の功で(後年の)1962年にノーベル賞を受賞したワトソンとクラックの発表論文そのものとなり、Watson J.D. and Crick F.H.C. (1953). "A Structure for Deoxyribose Nucleic Acid" (PDF). Nature 171 (4356): 737–738 と表記されているものである —誤解を避けるために述べておくが、デオキシリボ核酸自体は1953年「以前」から特定化されており(1869年に特定化されていたとの見方が一般的である)、そこに二重螺旋構造が見出されることになったのが1953年であると認知されているのである)

以上、本段までにて

※3(問題となる 15 世紀絵画の【**成立時期に見る奇怪性**】に関わることとして) **生体精子の構造のはじめての特定は[顕微鏡]を利用して多くのことを観察したアントニ・ファン・レーウエンフックによる 1677 年の事績となる(とされる)**

※4(同上) **DNA の二重螺旋構造が発見されたのは(時代区分における[近代]の後の[現代]に入っ**てのこと、**いまより半世紀ほど前の 1950 年代のことである**

とのことらの典拠を目につくところより挙げたとして、

※5(問題となる 15 世紀絵画の【**構図の派生**】に関わることとして) **イエズス会** —(世界史上、極めて幅広くもの強大な影響力を及ぼしてきたとされるカトリック伝道団中、最も強力な団体)— **は聖母マリアを守護聖人としている**

※6(同上) **聖母たる処女懐胎のマリアを守護聖人とするイエズス会は問題たる絵画の【精子と卵子の結合過程を示すが如く構図】(画中、処女懐胎を予言してのシビュラに指さされての先にみとめられる【蛇行する蛇状の物体らが球形の物体に群がる構図】)と視覚的に接合するシンボルを掲げての組織として(問題となる絵画製作の)後に設立されており、また、そのイエズス会の創始者イグナティウス・ロヨラの紋章(コート・オブ・アームズ)は[蛇]と結びついている**

とのことの典拠を基本的なところより挙げておくこととする。

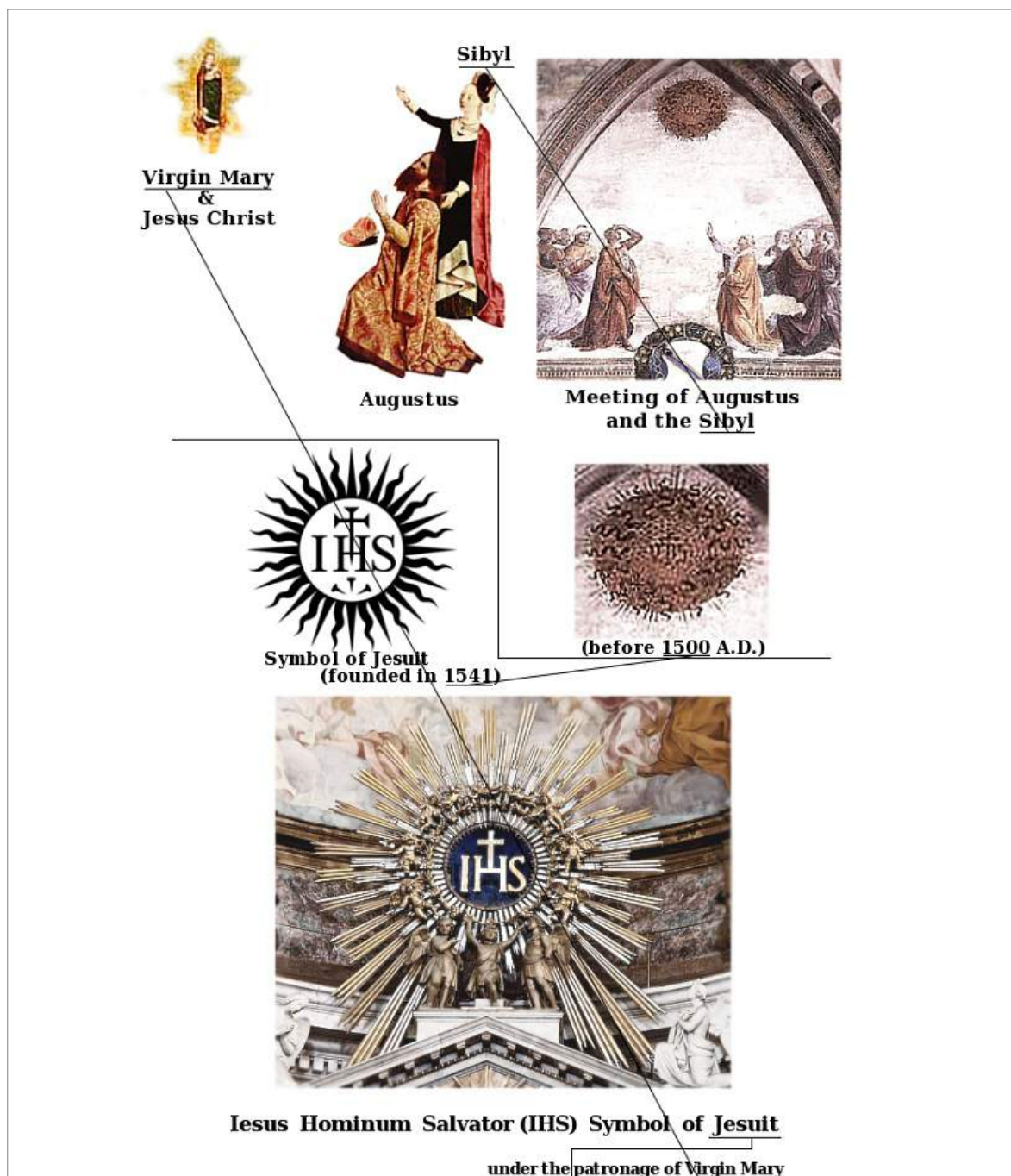
(以下、一般教養レベルの話となり、また、諸種様々なソースより即時に確認できるようなところであるので(手前がざっと見し、おおよそ正しいことを記載していると判断した)ウィキペディア程度の媒体の言を引くだけで十分と判断、ウィキペディア[イエズス会]項目よりの掻い摘まんでの引用をなす)

イエズス会(イエズスカイ、ラテン語: Societas Iesu)は、キリスト教、カトリック教会の男子修道会。**宗教改革以来、イエズス会員は「教皇の精鋭部隊」とも呼ばれた。**このような軍队的な呼び名は創立者イグナチオ・デ・ロヨラが修道生活に入る以前に騎士であり、長く軍隊ですごしたことと深い関係がある。…(中略)… **イエズス会の保護者は聖母マリアの数ある称号の一つである「道の聖母(Madonna Della Strada)」。**イエズス会の指導者は終身制で総長とよばれる。…(中略)…イエズス会は当初から世界各地での宣教活動を重視し、優秀な宣教師たちを積極的に派遣した。もっとも有名な宣教師はフランシスコ・ザビエルである。彼は西インド植民地の高級官吏たちの霊的指導者になってほしいというポルトガル王の要請にしたがって 1541 年にインドのゴアへ赴いた(ゴアはアジアにおけるイエズス会の重要な根拠地となり、イエズス会が禁止になった 1759 年までイエズス会員たちが滞在していた)。ザビエルはインドで多くの信徒を獲得し、マラッカで出会った日本人ヤジローの話から日本とその文化に興味を覚えて 1549 年に来日。二年滞在して困難な宣教活動に従事した。彼は日本人へ精神的影響を与えるために中国の宣教が不可欠という結論にたどりつき、中国本土への入国を志したが、果たせずに逝去した。…(中略)… **イエズス会は会員数 20000 人、活動地域は六大陸に 112 カ国に及ぶ世界で二番目に大きいカトリックの男子修道会である。**現在の総長はアドルフ・ニコラス。会の活動は宣教・教育・社会正義など広範な分野にわたるが、

特に有名なのは依然として高等教育である。…(中略)… イエズス会への批判 イエズス会は近代において、プロテスタント側のみならずカトリック側の人間からも、さまざまな陰謀の首謀者と目されることが多かった。「イエズス会員」を表す言葉(たとえば英語の Jesuit)が、しばしば「陰謀好きな人、ずる賢い人」という意味でも用いられるのは、その名残である。イエズス会は「より大いなる善」のためなら、どんなことでもするというイメージをもたれており、そのため教皇や各国元首暗殺、戦争、政府の転覆など、あらゆる「陰謀」の犯人とされた。さらにイエズス会の組織の強力さとその影響力の大きさのゆえに、教皇とバチカン市国を陰から操っているのは、実はイエズス会総長であるという噂が、まことしやかに吹聴されてきた。

(引用部はここまでとする)

直上、イエズス会という組織体についての常識世界での解説のなされようを引いたうえで、加えて、以下の通りの図示をなしておく。



前掲図にての上の段で呈示の図像ら(シビュラとローマ初代皇帝アウグストゥスの出会い、そして、次いで託宣を描いての図像ら)はそちら解説は最早不要であろうと判じての再掲図となる(ただし、理解が行き届いていないとのことであるのならば、筆者を批判してやろうとの心情でもいい、関連するところの従前内容を検討いただきたいものではある)。他面、前掲図の下半分の部にあつて呈示の図像らは

[ジェズ教会ことチャーチ・オブ・ジェズ(和文ウィキペディア[ジェズ教会]が如く程度のものからでも確認いただけようこととしてかつてイエズス会の本部であったとの教会にしてイエズス会の教会群がその構造に倣つて建造されているとの同会の原初的教会)にて据え置かれている紋章彫刻]
(下段)

および

[イエズス会の組織象徴として長らくも用いられてきた組織シンボル](中段左)

を挙げている(ちなみにシンボルに描かれている IHS はラテン語で Iesus Hominum Salvator「救世主たるイエス」との言葉を示すキリスト教体系内略字表記—Christogram—となる)。

本段にて訴えたきことが何たるかは上掲図単体からでも多く推し量りいただけることかとは思ふが、一応解説すれば、

[処女マリアを守護聖人とするイエズス会の紋章]

がそれらに先行するところの、

[シビュラとアウグストゥスの託宣の折、中空に映じたヴィジョン(処女マリアが息子イエスと共に中空に映じるとのヴィジョン)を巡るやりとりにつまざるギルランディオ画 Meeting of Augustus and the Sibyl]

と類似形を呈していることは—ここまで煮詰めてきたし、さらに煮詰める所存であるとのギルランディオ画の相応の特性より— 時期的先後関係の問題から嗜虐的ブラックユーモアの産物に見えてならない、ということである。

さらに加えて、「処女懐胎の聖女マリア」を守護聖人として奉ずるイエズス会—ソサイエティ・オブ・ジーザス—の紋章がそれに後続するとのかたちで絵画 **Meeting of Augustus and the Sibyl** に見る構図と近い形態を取るとのことがあるのみならず、また、イエズス会の創始者イグナティウス・ロヨラの紋章が[蛇]と密接に結びつくものであるということの解説をなす。

同じくものこと—イエズス会の創始者イグナティウス・ロヨラの紋章が[蛇]と密接に結びつくものであるとのこと—にまつわつては下の図を参照されたい。

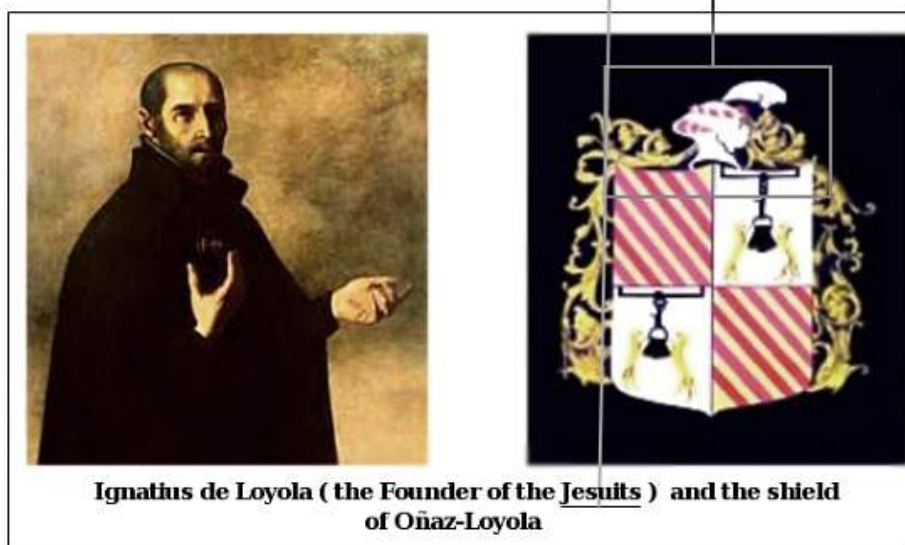
Religion Overthrowing Heresy and Hatred

(Church of the Gesù , Rome)

the mother church of the Jesuit



Serpent



Ignatius de Loyola (the Founder of the Jesuits) and the shield of Oñaz-Loyola

上掲図の上の段はジェズイット(イエズス会)の母教会との位置づけを与えられてきたジェズ教会に据え置かれているとの彫刻、

Religion Overthrowing Heresy and Hatred 『[憎しみ]と[異端]を転覆させしめし信仰』

を写し撮った写真より抽出なしでの図となる（:につき、材としたのは英文 Wikipedia に掲載されているパブリック・ドメインと明示されての写真となる）。

彫刻名として **Religion Overthrowing Heresy and Hatred** 『[憎しみ]と[異端]を転覆させしめし信仰』との題が振られているわけではあるが（ちなみに彫刻作製者にまつわる英文ウィキペディアの[Pierre Le Gros the Younger]項目にあつては彫刻右端の男が[異端]の象徴、新教徒勢力の巨魁であったツヴィングリないシルターと明示されている存在であるとの解説がなされている）、分派なしながら数々の[憎しみ]と[異端]の生成装置となってきたキリスト教旧教勢力(カトリック)にて最も優秀なる人間が集っていたとのイエズス会の同彫刻には(呈示の図に見るように)[異端]と[蛇]とが結びつけられている。

蛇。キリスト教体系では誘惑・墮落の象徴でもあるとのその蛇(の摸造型)が他ならぬイエズス会創始者イグナティウス・ロヨラの紋章にあつて「も」刻まれている。

そのことを示すのが上掲図にての下段の図となり、そこにて抽出したロヨラ一門の紋章の[頭飾りの部](紋章学にいう[クレスト]との部の下の部位にあたる[ヘラルディック・ヘルメット]と呼ばれる部)には

[蛇が巻き付いた(ように視覚的に見てとれる)甲冑ヘルメット]

が採用されていることが窺えるようになっている(ロヨラの同紋章はファミリー・ワッペンとして英文 Wikipedia[Ignatius of Loyola]項目に掲載されているものとなる)。

「問題は、「そうした紋章が創始者イグナティウス・ロヨラの一族の[組織とは分断を見ての家紋]の類に留まらず、イエズス会の組織「的」象徴そのものに流用・多用されてきたとのことがある(とされている)ことである(それに関しては英文 Wikipedia[Ignatius of Loyola]にあつて “ The Shield of Oñaz-Loyola is a symbol of St. Ignatius family's Oñaz lineage, and is used by many Jesuit institutions around the world. ” (大要として)「ロヨラ紋章は聖イグナティウス・ロヨラのイグナティウス家累代の家紋となり、世界中のイエズス会施設らに用いられているとのものである」との記載が認められるところでもある)。

自らの組織、いや、自分達の勢力としての旧教(カトリック)に敵対する勢力を

[蛇と結びつく異端]

であると断罪しつつも、自分達の組織の紋章からして蛇の視覚的影響を暗に受けている(との指摘が外野よりなせるようになってい)との按配のものとなっている。それが(エデン的一幕などに由来するところとして)蛇を誘惑・墮落の象徴としており、新約聖書・黙示録では古き蛇をサタンの象徴とするキリスト教勢力のやりようであるとも述べられるようになってい。

そのようなこと、それが[憎しみ]に対する勝利を説く(前掲彫刻に認められる『[憎しみ]と[異端]を転覆させしめし信仰』の題名に見るように[憎しみ]に対する信仰の勝利を説く)との[愛の宗教]をもって任ずるキリスト教というもののやりようであるとのことは[一部の物わかりのいい大人ら]がどうの昔に、そう、「歴史的に」といった按配で気付いていた(であるから宗教的狂人の類とは「波風たてずに歩調を合わせるべし」とのことが当然の処世訓になっていた)、そして、物事のありよう・本質を知らぬ・考えぬとの大多数の人間らを傍目にずっとだんまりを決め込んでき続けてきたことであろうとも思われるのだが、本稿ではだんまりを決め込まず、また、遠慮もなさない。

そうも述べつつも書くが、世の中には「たかだか」イエズス会の如きものがわざとらしくも[陰謀的力学の首魁・悪の本御所]であるように語る([我々を殺そうとする力学の本質]を韜晦どうかい・はぐらかしするやりようが見れば、「語る」というより「騙る」との言葉が相応しいかもしれないが) とのことをやりようとする陰謀論者らの類も存在しているわけではあるが(欧米でも伝統的に見てイエズス会こそが諸々の陰謀の首魁であると見る風潮が陰謀論として存在していることはウィキペディア程度の媒体よりの先にての引用部にて記載されているとおりである)、筆者がイエズス会に伴う上掲図画のようなものから

見受けられる特質を指摘するのはイエズス会を陰謀団として批判するようなそうした向きの話柄に通底する式での無責任なる批判をなすためではなく、

[イエズス会のありよう] (【処女懐胎による救世主の到来】をモチーフとしている絵画 **Meeting of Augustus and the Sibyl** に見る、その実の【卵子と精子の結合】(受精) と「露骨に」解されるまさしくものその構図 —さらにそちら特性についてこれより解説をなす所存であるとの構図— を【処女懐胎】の聖母マリアを守護聖人とする伝道団として組織表象シンボルに踏襲「させられている」節が如実にあるとのイエズス会ありよう／殺し合いを演じていた対象であるキリスト教分派(新教勢力)を異端と表して蛇と結びつけての彫刻を掲げているようなところがあるも、その実、同組織設立者の家紋としての紋章にして組織それ自体の使用紋章からして —キリスト教が忌み嫌っているものである「はずの」— 蛇の構図が視覚的に反映させられていることが窺えるとのイエズス会ありよう)

といったところからしてこの世界をコントロールしているとの力学に伴っている【特質】 (なる程、エニイ・サフィシエントリー・アドバンスト・テクノロジー・イズ・インディスティゲッシャブル・フロム・マジック「十分に発達した科学は魔術と区別が付かない」とはよく言ったもので、ひとことで述べれば、そこには子供騙しの【神秘性】【神聖性】など皆無であり(オズの魔法使いの正体が奇術師であったとの式の)【魔法使い＝科学者】方式が明朗に介在しているとの特質が「ある」、発達した科学技術を用いもして【醜くも歪められた葉籠中の個体ら】を用いて人間という種の悲劇・グロテスクな殺人ショーに彩られた歴史を思うがままに構築してきたとの特質が「ある」とのことである)、そして、そこにいう【特質】が指し示しもするとの、

[力学が目指す方向性 —[救いの教え]に「破滅へ至る誘惑の寓意」を執拗かつ嗜虐的に(あるいは小馬鹿にするように)まぶし続けてきたと判じられる(さらに後の段で細かくも後述する)との力学が目指す方向性—]

を「間接的に」示すことにつながると見ているからここでの指し示しをなしているのである (といちいちもってしてながらも述べておく)。

さて、次いで、

※7(問題となる15世紀絵画 —聖母マリアの処女懐胎に次ぐ救世の御子の誕生の予言をモチーフとした画— の【類似の構図】に関わることとして) **15世紀にはいまだ今日的な似姿を呈してのマッチ(フリクション・マッチ)は存在していなかったとの発明史にまつわっての解説がなされている(だから問題となる絵画に描かれているとの精子状の物体は【マッチ】の似姿などを模してのものとは考えがたい)**

とのことの出典を挙げることとする (こちら※7の部の解説は多少長くなる)。

まず最初に続いて呈示の確認のための図をご覧いただきたい。

(以下、注意喚起のための図の呈示をなす)

Meeting of Augustus and the Sibyl



double helix



Match ?

上図を挙げたところで「それ単体を摩擦することで」発火するとの自家発火性のマッチ (self igniting match) が欧州にて一体全体、「何時頃」、登場しだしたかについて取り上げる。

その点、英文 Wikipedia[Match]項目にての History の節には現行、次のことが記載されている。

(直下、多少、長くなるも、英文 Wikipedia[Match]項目よりの掻い摘まんでの引用として)

Early matches

A note in the text Cho Keng Lu, written in 1366, describes a sulfur match, small sticks of pinewood impregnated with sulfur, used in China by "impoverished court ladies" in AD 577 during the conquest of Northern Qi.[5] During the Five Dynasties and Ten Kingdoms (AD 907–960), a book called the Records of the Unworldly and the Strange written by Chinese author Tao Gu in about 950 stated: If there occurs an emergency at night it may take some time to make a light to light a lamp. But an ingenious man devised the system of impregnating little sticks of pinewood with sulfur and storing them ready for use. At the slightest touch of fire they burst into flame. One gets a little flame like an ear of corn. This marvellous thing was formerly called a "light-bringing slave", but afterwards when it became an article of commerce its name was changed to 'fire inch-stick'.[5]

The chemical match

Prior to the use of matches, fires were obtained using a burning glass (a lens) to focus the sun on tinder, a method that could only work on sunny days, or by

igniting tinder with sparks produced by striking flint and steel. Early work had been done by alchemist Hennig Brandt, who discovered the flammable nature of phosphorus in 1669.[6] Others, including Robert Boyle and his assistant, Godfrey Haukweicz, continued these experiments in the 1680s with phosphorus and sulfur, but their efforts did not produce practical and inexpensive methods for generating fires.[7] The first modern, self-igniting match was invented in 1805 by Jean Chancel, assistant to Professor Louis Jacques Thenard of Paris. The head of the match consisted of a mixture of potassium chlorate, sulfur, sugar, and rubber. The match was ignited by dipping its tip in a small asbestos bottle filled with sulfuric acid.[3] This kind of match was expensive and its usage was dangerous, so Chancel's matches did not become common. This approach to match making was refined in the following decades, culminating with the 'Promethean Match', patented by Samuel Jones of London in 1828.

[...]

The friction match

[...]

The first successful friction match was invented in 1826 by English chemist John Walker, a chemist and druggist from Stockton-on-Tees.

[...]

They consisted of wooden splints or sticks of cardboard coated with sulphur and tipped with a mixture of sulphide of antimony, chlorate of potash, and gum, the sulphur serving to communicate the flame to the wood.

[...]

In 1829, Scots inventor Sir Isaac Holden invented an improved version of Walker's match and demonstrated it to his class at Castle Academy in Reading, Berkshire. Holden did not patent his invention and claimed that one of his pupils wrote to his father Samuel Jones, a chemist in London who commercialised his process.[17] A version of Holden's match was patented by Samuel Jones, and these were sold as lucifer matches.

(逐語訳としてではなく大要訳として)

「[初期のマッチ]: 中国にて 1366 年に記された『輟耕録』(てっこうろく. Chuo-geng-lu) の記載にては北齊の侵略の折、[松の木に由来する小さな棒が硫黄にて加工され、6 世紀頃に宮廷のやんごとなき女性らにもちいられていた]との記載がなされている (訳注: ただし、青空文庫にて公開されている岡本綺堂 (明治から昭和初期にて活動の文人) の編になる支那怪奇小説集と題されての撰集にて見受けられる版の『輟耕録』にはここでの記述に該当する部を見出すことができない。また、[火薬] の発明がなされたのが 7 世紀であるとされるから、[硝石] と [炭] の二者を抜いてとは言え、硫黄が点火材として用いられていたとのことはなかなかもって考えられないところではある — ただ当該分野にて浅学の身ゆえにあやまてることを書いている可能性もあると断っておく)。中国にての五代十国時代にて 10 世紀にもなされた史書『清異録』(the Records of the Unworldly and the Strange) では「夜間、急用の折には燭台に火を点けるうえで賢い男が [硫黄でコーティングした松の木をちょっとした刺激で発火なさしめる用具] を発明し、それが商材とされた」との趣旨の記載がなされている(ここまですては [5] と出典番号が振られている)。

[化学マッチ]: マッチの使用に先立ち、着火には晴れた日にしか意をなさぬとのレンズによって太陽光を集めての着火方式ないしは火打ち石の燃えやすき側面にて叩いて着火させる方式がとられた。燐(リン)を用いての発火方式は燐の可炎性を発見した錬金術師 Hennig Brandt が 17 世紀 (1669 年) に考案したものとなり (出典番号 [6])、その後を追ってロバート・ボイルらが燐と硫黄を

用いて実用的かつ安価な方式を編み出そうとしたが奏功しなかった(出典番号[7])。最初の近代式の自家発火式のマッチが登場したのは1805年でルイ・テナール(訳注:顔料のコバルト・ブルーの発明者)の助手を務めていたとの人物ジャン・シャンセルの発明によるところだった。このマッチはアスベスト製の硫酸入りの瓶に先端を浸けて着火させるとのものとなっていた(注記番号[3])。この手のマッチは後数十年間で改良を見、ロンドンのサミュエル・ジョーンズに[プロメテウスのマッチ]との名で特許を取られ、その高みに達した。

…(中略)…

[摩擦マッチ]:

…(中略)…

最初に成功を博することになった摩擦式マッチは1826年(訳注:和文ウィキペディアや他媒体などでは1827年としている場合もある)、ストックトン出身のイギリスの化学者兼薬師、ジョン・ウォーカーによって発明された。

…(中略)…

それら(摩擦式のマッチ)は[硫黄でコーティングされ、そして、先端に硫化アンチモン・塩素酸カリウム・樹脂をくっつけられた木片あるいはカーボン紙]とのかたちをとり、付された硫黄が火を木片の部に運ぶとの役割を果たしていた。

…(中略)…

1829年、スコットランド人発明家のアイザック・ホールデン卿はウォーカーのマッチを改良、彼の階級に対するデモンストレーションをバークシャーにてなした。ホールデンは特許取得をしておらず、(のような中で)、彼の教え子の一人がその父、ロンドンにての化学者であったサミュエル・ジョーンズに手紙を書いて、そのため、ジョーンズが商品化をなしたと主張した(出典番号[17])。サミュエル・ジョーンズによって特許取得されたホールデンの版のマッチは「ルシファー・マッチ」として売られたものとなる」

(訳を付しての引用部はここまでとする —※—)

(※英文原文に付されての[5]の部の出典としては同 Wikipedia 項目下部にて Joseph Needham (1 January 1962). *Science and Civilization in China: Volume 4, Physics and Physical Technology; Part 1, Physics*. Cambridge University Press. pp. 70–71.との出典紹介載が現行なされている。同様に[6]の部の出典としては Crass, M. F., Jr. (1941). "A history of the match industry. Part 1". *Journal of Chemical Education* 18 (3): 116–120.との出典紹介が現行なされている。[7]の部の出典としては Carlisle, Rodney (2004). *Scientific American Inventions and Discoveries*. New Jersey: John Wiley & Sons. p. 275.との出典紹介が現行なされている。[17]の部の出典としては John Wesley Hanson (1900) *Wonders of the nineteenth century: a panoramic review of the inventions and discoveries of the past hundred years*, W. B. Conkey Publishers, Chicago が出典となっているとの紹介がなされている)

上のように表記の Wikipedia 項目に細かくも紹介されているところのいわば[マッチ史]というものにあっては、大要、

[中国では —古文献に認められるところとして— 硫黄を用いて木の棒を着火の用に供したとの記述があるものの(アーリー・マッチズとのことで初期マッチとの位置づけが与えられているが、その具体像は筆者が調べても現行のところ、曖昧である)、「欧州にては」17世

紀までは太陽光をレンズで利用する式と火打ち石方式のみが知られており、その後、硫黄を用いての発明が試みたがなかなかもって奏功しなかったと記載されている。のような中、19世紀初期にて[化学式マッチ](ケミカル・マッチズ、硫酸入りのビンに浸して化学反応で着火させるとの式のマッチ)が登場、さらに少し後の19世紀前半期にてはじめてジョン・ウォーカーという人物の発明として摩擦式マッチ(フリクション・マッチズ、今日、見るができるようなもの)が硫黄コーティングの上、硫化アンチモン・塩素酸カリウム・樹脂のバランスよい配合での初期型として実現を見た]

と記載されているわけだが、同様のことについては Project Gutenberg のサイトより誰でも全文ダウンロードできるとの GREAT INVENTIONS AND DISCOVERIES (1911年の版、訳すれば『偉大なる発明と発見』)という書籍にあって20世紀初頭の著述家 — Willis Duff Piercy との人物 — に次のように記載されていることを引いておく。

(直下、Project Gutenberg のサイトよりオンライン上にて誰でも全文確認できるところの GREAT INVENTIONS AND DISCOVERIES (1911年)にての CHAPTER XIII THE FRICTION MATCH の章の前半部よりの抜粋をなすとして)

In China the burning-glass was widely used not very long ago. When iron came into use, it was employed for making fire. A piece of flint was struck against an iron object. The concussion produced a spark, which fell into a box containing charred cotton called tinder. The tinder took fire but did not burst into flame. The flame came by touching the burning tinder with a strip of wood tipped with sulphur. This flint-and-steel method was used for producing fire until less than a century ago.

No attempt was made to produce fire by chemical means until 1805. In that year M. Chancel, a Paris professor, invented an apparatus consisting of a small bottle containing asbestos, saturated with sulphuric acid, and wooden splints or matches coated with sulphur, chlorate of potash, and sugar. The wooden splint, when dipped into the bottle, was ignited. **The first really successful friction matches were made in 1827 by John Walker, an English druggist. They consisted of wooden splints coated with sulphur and tipped with antimony, chlorate of potash, and gum. They were sold at a shilling or twenty-four cents per box, each box containing eighty-four matches.**

「中国においては(日光集中させてのか)火だねたる天日レンズは遠い昔には広くは用いられていなかった。鉄器が使用に足るものとなるとそれが着火のために利用されるようになった。火打ち石の小片が鉄器に対して打ち付けられ、衝撃にて火の粉が発生、それが黒焦げにされた綿の類、すなわち、火口(ほぐち)と呼ばれる火種が詰められた箱に投げられた。それで火は付くものの、炎と呼べるものに火勢は強まらない。炎(と呼ばれるぐらいの火勢の火)は燃えだしている火口(ほぐち)を硫黄をかぶせられた木の小片に接触させることで得られた。この[火打ち石よび鉄器の混合方式]は今より一世紀前まで火を得るのに使われていた方式である。

1805年まで化学的手法にて火を起こそうとのいかなる試みもなされなかった。シャンセルというパリの教授(訳注:上記のウィキペディアの抜粋部では化学反応を利用しての化学式マッチの発明者ジャン・シャンセルは[ルイ・テナール教授の助手を務めていた人物]としか表記されていない)が[石綿で満たし硫酸を含ませての小さな瓶、木の小片あるいは硫黄・塩素酸カリウム・そして糖でコーティングしたマッチよりなる器具]を発明した。(その器具では)木の小片が[瓶](の内容物)に浸された折、着火を見た。

後、本当に有効性を発揮した摩擦式マッチがジョン・ウォーカー、イギリスの薬剤師に1827年(訳注:先に引用したウィキペディア記事では1826年と表記されている)によって生み出された。それらは「硫黄で被覆された木片、アンチモン・塩素酸カリウム・樹脂をかぶせられての先端を有してのもの」であった」

(引用部訳はここまでとしておく)

以上でもってして

「蓋然性の問題に関わる場所として問題となる絵 — Meeting of Augustus and the Sibyl — に描かれているような

[マッチ状のもの]

が実際にはマッチ「ではない」と判断できる — 英語で表せば、probably となろうとの按配で10中8,9 マッチ「ではない」と判断できる — だけの時代的背景がある、であれば、そうしたものが何故、そこに描かれているのか、という問題が「さらに」重くも迫ってくる」

とのことにまつわっての出典表記とした(手前がオンライン上で収集・分析した資料群上では一様に今日、我々が目にするような「自家発火式の摩擦利用マッチ」の欧州先進地域にての登場時期は19世紀になってからであると記されている。したがって、一誤謬が介在しているおそれはそれでもまだあるか、と見るのだが — 15世紀絵画(1494年に没した画家ドメニコ・ギルランディオの手になる15世紀成立の絵画(教会据え置き Fresco画))にてマッチのようなものが描かれている蓋然性が「一層感じられない」とのことになる — では、何度も図示なしにしているそちら構図が何を描いているものなのか、ということになるであろうが、その点については「問題となりうるもの」以外に何を描いていると考えられるのか、筆者の方から聞きたいところである —)。

最後に※1から※8と振ってのことらのうちの※8と振ってのこと、

※8(問題となる15世紀絵画 — 聖母マリアの処女懐胎に次ぐ救世の御子の誕生の予言をモチーフとした画 — の【構図】に関することとして) 絵画にあっての【蛇行する蛇状の物体らが球形の物体に群がるありよう】については現実の精子・卵子のサイズ比に近いものが描かれているとのかたちになっている

とのことの出典を挙げておくこととする。

(直下、一般教養の範疇に入るところとして、そこよりの引用をなせば足りるか、との和文ウィキペディア「精子」項目にての「ヒトの精子」の節の現行記載内容よりのワンセンテンス引用をなすとして)

(ヒトの精子の)大きさは60マイクロメートルほど(ヒトの卵細胞の大きさは直径100-150マイクロメートル)

(取りあえずものワンセンテンス引用はここまでとする)

さらに細かくきちんとしたところよりの典拠も挙げておく。

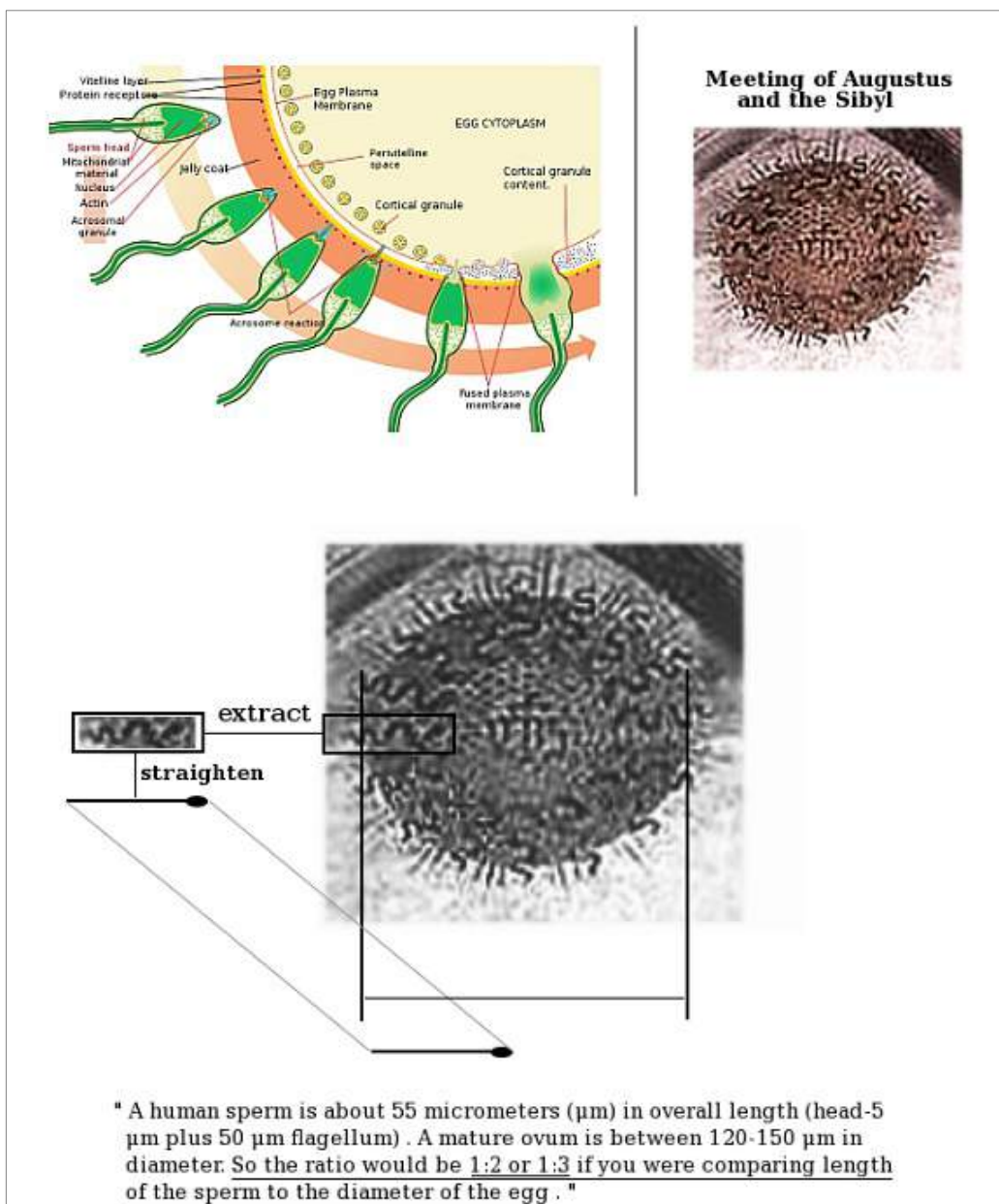
(直下、ニュージーランドの名門大オークランド大学のウェブサイト — oakland.edu とのドメ

インのサイト— 内の一項目、Dr. Charles Lindemann's Lab: Frequently Asked Questions とのタイトル名で公開されているウェブサイトにての基礎的医学情報紹介部よりの抜粋をなすとして)

A human sperm is about 55 micrometers (μm) in overall length (head-5 μm plus 50 μm flagellum). A mature ovum is between 120-150 μm in diameter. So the ratio would be 1:2 or 1:3 if you were comparing length of the sperm to the diameter of the egg.

「人間の精子の全長サイズはおよそ 55 マイクロメートル程 (頭頂部 5 マイクロメートルおよび鞭毛部 50 マイクロメートル) となる。成熟した卵子の直径は 120 から 150 マイクロメートルとなる。であるから、精子の長さで卵子直径を比較すると、1対2ないしは1対3といった比率となるであろう」

(引用部はここまでとする)



" A human sperm is about 55 micrometers (μm) in overall length (head-5 μm plus 50 μm flagellum) . A mature ovum is between 120-150 μm in diameter. So the ratio would be 1:2 or 1:3 if you were comparing length of the sperm to the diameter of the egg . "

Dr. Charles Lindemann's Lab: Frequently Asked Questions (<http://oakland.edu/> —)

図におけるサイズの一致性。顕微鏡による精子の構造の特定どころか、そもそも顕微鏡さえ存在していなかった折に製作されているとの 15 世紀

絵画、Meeting of Augustus and the Sibyl 構図上部に認められる[受精過程の類似形態]に認められる【蛇行する物体ら】と(それら蛇行する物体が群がったの)【円形の物体】のサイズ比 一対[卵子]比で2分の1ないし3分の1となるとされるとの[精子]に照応するようなサイズ比—に着目いただきたい。

以上、ここまででもってして

※1(問題となる 15 世紀絵画 —聖母マリアの処女懐胎に次ぐ救世の御子の誕生の予言をモチーフとした画— のそれと【類似の構造】が具現化しているところに関わることとして) [生物の精子「の先端」]にあつては[二重螺旋構造を呈する DNA]が格納されているとの生物学的事実がある

※2(問題となる 15 世紀絵画 —聖母マリアの処女懐胎に次ぐ救世の御子の誕生の予言をモチーフとした画— にそれと【類似の構造】が具現化しているところに関わることとして) 人間の数億の精子の内、子宮まで到達できるのは数千から数十万、排卵期卵子の前面までたどり着けるのは数十から数百とされているとの生物学的事実がある

※3(問題となる 15 世紀絵画 —聖母マリアの処女懐胎に次ぐ救世の御子の誕生の予言をモチーフとした画— の【成立時期に見る奇怪性】に関わることとして) 生体精子の構造のはじめての特定は[顕微鏡]を利用して多くのことを観察したアントニ・ファン・レーウエンフックによる 1677 年の事績となる(とされる)

※4(問題となる 15 世紀絵画 —聖母マリアの処女懐胎に次ぐ救世の御子の誕生の予言をモチーフとした画— の【成立時期に見る奇怪性】に関わることとして) DNA の二重螺旋構造が発見されたのは(時代区分における[近代]の後の)[現代]に入つてのこと、いまより半世紀ほど前の 1950 年代のことである

※5(問題となる 15 世紀絵画 —聖母マリアの処女懐胎に次ぐ救世の御子の誕生の予言をモチーフとした画— の【構図の派生】に関わることとして) イエズス会 —(世界史上、極めて幅広くもの強大な影響力を及ぼしてきたとされるカトリック伝道団中、最も強力な団体)— は聖母マリアを守護聖人としている

※6(問題となる 15 世紀絵画 —聖母マリアの処女懐胎に次ぐ救世の御子の誕生の予言をモチーフとした画— の【構図の派生】に関わることとして) 聖母たる処女懐胎のマリアを守護聖人とするイエズス会は問題たる絵画の【精子と卵子の結合過程を示すが如く構図】(画中、処女懐胎を予言してのシビュラに指さされての先にみとめられる【蛇行する蛇状の物体らが球形の物体に群がる構図】)と視覚的に接合するシンボルを掲げての組織として(問題となる絵画製作の)後に設立されており、また、そのイエズス会の創始者イグナティウス・ロヨラの紋章(コート・オブ・アームズ)は[蛇]と結びついている

※7(問題となる 15 世紀絵画 —聖母マリアの処女懐胎に次ぐ救世の御子の誕生の予言をモチーフとした画— の【類似の構図】に関わることとして) 15 世紀にはいまだ今日的な似姿を呈してのマッチ(フリクション・マッチ)は存在していなかったとの発明史にまつわつての解説がなされている(だから問題となる絵画に描かれているとの精子状の物体は【マッチ】の似姿などを模してのものとは考えがたい)

※8(問題となる15世紀絵画 —聖母マリアの処女懐胎に次ぐ救世の御子の誕生の
予言をモチーフとした画— の【構図】に関わることとして) **絵画にあっての【蛇行する
蛇状の物体らが球形の物体に群がるありよう】**については現実の精子・卵子のサイズ
比に近いものらが描かれているとのかたちになっている

とのことらの典拠紹介を終えることとする。

(※1から※8と振ってのことらにまつわっての —長くもなりもしての— **出典(Source)紹介の部
109(5)**はここまでする)

ここまでの流れを受けて、(狭量でよく人の話を聞かぬとの相応の人間らには誤解を招きもしよう話を
なしてきた中、さらなる誤解の惹起をおそれずに)、次のこと、敢えても申し述べたき次第である。

画家ドメニコ・ギルランディオ(Domenico Ghirlandaio, 1449–1494 / 問題となる絵画
Meeting of Augustus and the Sibyl の作者) が手ずから[離れ業]をなせたわけがない。

画家は「人間以外の「他の」知的存在」—それは嗜虐的ジョークをこととする存在で
もある— の脳機序操作に基づいて描か「されて」ただけであろう。そのように解して
然るべきところであろう。「人間「以外」の他の知的存在」を観念する物言いが常識世
界では[異常な言辞]と見做されようもしようことは百も承知のうえであるが、直近まで
に述べてきたことすらほんの一事例に過ぎぬとの不可解極まりない、それでいて、世間
一般でまったくもって語られない相応のことらで溢れかえっているのがこの世界である
との[具体的指し示し]を本稿では通(とお)しでなしてきている。一例を挙げれば、【**浦
島伝承に伴うパラレリズム**】が【**ブラックホールと911の事件を結びつける留め金となる
不快な文物**】と**多重的に結びついている**】といったことを、(無論、それとて聞くだに異
常な話であるわけだが)、根拠呈示をひたすらに積み上げる式で指し示していた部など
がそうである —※尚、残念なことに【**浦島伝承と類型をおなじくもする伝承らの複
合地域の一致性問題**】が【**ブラックホールと911の事件を結びつける留め金となる不
快な文物**】と**多重的に結びついている**】との本稿にて先になした指し示しは【話のリ
ジッドさ(議論・証拠としての堅さ)】との面でここにてなしている【**ギルランディオのシュ
ビラ画描きように見る先覚性**の話】の「上を行く」ものである(：細かくは、例えば、原著
1994年刊行、邦訳版は1997年刊行とのBLACK HOLES & TIME WARP Einstein's
Outrageous Legacy『**ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺
産**』との書籍にまつわる解説部ら、(羅列しての表記なしで) **出典(Source)紹介の部
28**, **出典(Source)紹介の部 28-2**, **出典(Source)紹介の部 28-3**, **出典(Source)紹介
の部 31**, **出典(Source)紹介の部 31-2**, **出典(Source)紹介の部 32**, **出典(Source)紹
介の部 32-2**, **出典(Source)紹介の部 33**, **出典(Source)紹介の部 33-2**によって
1994年原著刊行の著作がいかにして[文献的事実]の問題として【**双子のパラ
ドックス** (1911年提唱/同[**双子のパラドックス**]は本稿にての**出典(Source)紹介の部
28-3**でも指摘しているように浦島伝承と結びつくパラドックスでもある)】 / 【91101と

のナンバー (2001年9月11日を示すナンバー) / 【2000年9月11日⇒2001年9月11日に通ずる表記】 / 【他の関連書籍に見るブラックホール⇔グラウンド・ゼロとの対応付け】といった複合的要素を【僅か一例としての思考実験】にまつわるところで同時に具現化させ、もって、「双子の」塔が崩された「2001年9月11日の」911の事件]の前言と解されることをなしているのかについて(筆者の主観など問題にならぬ客観情報にまつわるところとして)確認いただけるようにしている次第である)——。

以上のようなことをも複合顧慮のうえで、

[ギルランディオは[予言の霊パイソン] ([デオキシリボ核酸の二重螺旋構造にまつわる知識を有し] [人間の精子と卵子の結合過程に相当細かく把握し] [それを処女懐胎にまつわる寓意譚にまぶすだけのブラックユーモアのセンスを持っている] との高度に科学的なる文明に属する存在) に画を描か「されて」ただけであろう]

と「はきと」解される。それも指摘する。

さて、「問題なのは、」

[[予言(という名の科学的・器質的コントロール)をきたす力学]がそこに存在している]

と述べられるようになっていて、それ自体である。

そして、「さらにもって問題なのは、」そこに存在していると解される [占いの霊の力(と便宜的に述べた予言をなすが如く露骨な科学的操作)] が

[極めて[退歩的]かつ[嗜虐的]なやりよう]

と時に一体となっているものであると述べられるようになっていてとのことであり、(については部分的にここまでも注意喚起なしたことだが)、その先に相応の意図が透けて見えることである(：脳容積の問題なのか、技術水準の問題なのか、あるいは、その双方か、[劣等種]と認定しているのであろうと解される存在(我々人類)を操作サイドが「たばかって」なぶり殺しにするのに喜びを覚えている(と述べても、重要なところは「被操作者サイド」を共犯に仕立ててあげているようにとれる)との[極めて[嗜虐的]かつ[退歩的]なやりよう]がそこにみとめられると述べられるようになってすらいると筆者はとらえている — 筆者の脳裏をよぎるのは米軍のアブグレイブ刑務所の兵士らやりようの流布された写真(殺されることになった囚人らに「相応の」連中が何をやっているかが端的に示されているとの写真)である—)。

では、何をして、

[極めて[退歩的]かつ[嗜虐的]なやりよう]

と述べもするのか。

処女懐胎の予言にまつわる図に [DNA 構造] や [サイズ・数など含めて正確といった按配の受精構造類似図] などの生物学的再生産(生殖)プロセスにまつわる科学的絵図を隠喩的かつ意図的に仕込む — 今より半世紀程前になってようやく発見された DNA の二重螺旋構造どころか精子構造すらも特定されていなかった 15 世紀末に描かれた絵画(近代以降の贗造物ではなく歴史的に真正なるものとして欧米の美術館のウェブサイトにて似姿公開されているようなフィレンツェ在のプレスコ画)に仕込む— とのやりようからしてある意味、

[下らぬ戯言を押しつけられた(自分達から見ての)蒙昧なる種族のありようと【運命】を嗤(わ)らうが如く嗜虐的なるもの]

であるととれるところではある。

が、より巨視的に見れば、人類残酷史をもたらすことになった機序 — キリスト教というまさしくも残酷史のひとつの原動力たる要素— にそういう寓意を仕込んでいっているところに

〔極めて〔退歩的〕かつ〔嗜虐的〕なやりよう〕

が凝集を見ているようにとれる。

人間の【残酷史】は宗教(および狂信的なる相応の宗教の徒輩ら)とワンセットとなっている。宗教の徒が加害者にもなり、被害者にもなり、残酷史が現出してきたとことがある。

大なるところでは

〔神の与えたもうた(との〔設定〕が付与されている)選民主義を奉ずる民族の強制収容所の大量虐殺(ユダヤ系の大虐殺に関しては、の中でも、悪質性で際立ったところとして[ナチス強制収容所で医師ヨーゼフ・メンゲレによって実行された双子実験]が[残酷史の特質]と[残酷史をかたちづけてきた憑かれたような者達の腐った性質]を知る契機になるであろうと私的には見ている)

〔信仰に基づき大量に生け贄にしてきたアメリカはメキシコ界隈に拠ってのアステカ帝国やりよう〕

が宗教の徒が犠牲者・被害者になっての残酷史の一例となるし、小なるところを拡大して見れば、

〔カルト団体の集団自殺問題に見る人間存在を芥子粒と嘲笑うが如く事件〕(ご存知なきはお調べいただきたいが、[人民寺院]や[プランチ・ダビディアン]や[ヘヴンズ・ゲート]といった海外カルトの集団自殺から戦前期日本にての[死のう団事件]と俗称される日蓮宗カルトによる集団自殺など)

が宗教関連の残酷史の片鱗となる。

以上、宗教というものにまつわる残酷史に言及した。一残酷史と言え、[科学的でもなければ、事実も重視しないとのただひたすら狂躁的・狂熱的なる(本来の英語の意味合いでの[マニャック]なる)人間らによって支えられたイデオロギー]も[宗教]と両輪をなすところとして近現代の残酷史構築の元となっていると申し述べられるようなものであるが(共産主義とその親戚のファシズム(国家社会主義)を掲げた国家群の愚行を分析すれば容易に推し量れることである)、ここでは歴史的に人間の嗜虐挙動の枢要なる原因となってきたところの宗教に着目しての残酷史を俎上にあげている。ところで述べるが、Meeting of Augustus and the Sibylが描かれた往時には[今日、新教徒(プロテスタント)と呼ばれる勢力]は未だ存在していなかった(Meeting of Augustus and the Sibylが描かれたのは15世紀末であるとのことである。他面、新教徒のドグマが歴史の表舞台に登場しだしたのは16世紀初頭、1517年からである。一高等学校の世界史の授業で把握強られるようなところとして(和文ウィキペディア[プロテスタント]項目の[歴史]の節にての現行記載内容より一文のみ引用するところとし)“1517年以降、マルティン・ルターらによりカトリック教会の改革を求める宗教改革運動が起こされた”と解説されるようなところである)。16世紀に入る前にはルター派・カルヴァン派・ツヴィングリ派といったプロテスタント勢力の元となった教派は存在していなかった)。

だが、既述のように処女懐胎を科学的に嘲笑うが如く描写を含む Meeting of Augustus and the Sibylが描かれた後、

〔キリスト教の教義解釈を巡る対立〕

から欧州で勃発した新教・旧教の対立の中で膨大な血が大地に流れたのは言うに及ばず(英文 Wikipedia[List of wars and anthropogenic disasters by death toll]項目などにも[16世紀宗教戦争の一例]としての[ユグノー戦争](1562—1598)では「200万人から400万人のレンジで」死者が出、新教徒と旧教徒の勢力の確執が極めての[三〇年戦争](1618—1648)では「300万人から1150万人のレンジで」欧州にて血が流れたと表記されている)、新教・旧教の宗教対立が生じる前から、そして、それが生じてからも欧州ではキリスト教教義に基づきキリスト教「機構」は[異端者・魔女・不信心者と認定した者ら]に容赦のない制裁を加えてきたというのが 一意思も薄弱、言われれば、どんな悪行(押し

つけられた偽物の善でコーティングされた悪行)にも手を染めたとの「相応の」人間ら(本稿筆者などがそういう種別の者達とは決して相容れないであろうとらえる「相応の」人間ら)に担わせてきたものである— 人間の歴史というものである。

では、多くの人間を排除することで成り立っていた典型的「宗教」、キリスト教のドグマとは何かと述べれば、

[聖母マリアが[処女]でありながらも懐胎して[救世主]を産み落とし、その処女懐胎の[救世主]が全人類の罪をあがなうとのかたちで罪なきところを十字架にかけられ一人贖罪をなしたために、その意気に応じ、その救い手に対する帰依と信仰を表明することで[神の無限の愛 —アガペーとされるもの—]の恩寵を受けようとの体系]

のことを指す(さらに述べれば、[黙示録の最期の審判]で同じくもの信仰を有している者だけが救われるとの教義体系でもいいわけだが)。

上記のようなドグマにあつての正統(オースドックス)とされるところを容れぬとの者ら(たとえば、イエス・キリストの[神性]を否定して[人の子としての側面]を強調し古代にて異端とされたネストリウス派のような微妙にずれる異端のドグマを容れていた(いる)との者達のような異端(ヘレティック))ないしは[実際はともあれ、ドグマを信奉して「いない」と認定された者ら]は宗教的権威あるいはそれを笠(かさ)に着ているとの者達による冷酷無慈悲な暴力的制裁を受けてきたのが欧州の歴史、すなわち、【今日の人類文明の基礎となっている文化圏】の歴史である。



ドイツの法律関連書籍 Laienspiegel にて掲載のものとして英文 Wikipedia に著作権の縛りなき分類で掲載されている魔女への拷問および制裁の図。「もしも、」の話だが、筆者が 15 世紀の欧州人としてそこに存在しており、その場にて「マリアは処女懐胎などしていない」などとのことを主張していたらば、上図に見るような相応の罰を受けていたことかもしれない、と思われる。

(:[魔女裁判]については「言われているより多くの人間を殺してはいないので

あった」との説もあるが、それでも万単位の間を殺していたと「される」ことには相違がない。一和文ウィキペディアに於ける[魔女狩り]項目には(その[時期と地域、犠牲者数]の節より引用するところとして) “ 魔女狩りの犠牲者に関するの最も極端な説は、18世紀の歴史家ゴットフリート・クリスティアン・フォークトが示した900万人である。これはあまりに極端であるとしても、かつて魔女狩りに関して(客観的な根拠がないまま)犠牲者数が数十万人から数百万人と見積もられていた時代もあった。しかし近年行われている一次史料からの推計によれば、魔女裁判による処刑者数は1428年から1782年までに全ヨーロッパで最大4万人であるとされており、ヴォルフガング・ベアリンガー、ロビン・ブリッグス、ロナルド・ハットンといった研究者らはこの見解で一致している[17](民間の魔女迫害における私刑の犠牲者はこの推計に含まれないが、これについては無根拠な憶測しかできない[18]) ” (引用部はここまでとしておく)。尚、表記の引用元にて[17]と[18]と注記番号振られて紹介されている著作はジェフリ・スカル、ジョン・カロウ共著の『魔女狩り』(岩波書店)との書となっているが、筆者はそちら書籍を手にとっての検討をなしているわけでもなく、ここでは魔女狩りのその手の研究者らの申しようを深く分析しているわけでもないので「そういう意見が通説化しているようである」と述べるにとどめておく) —)

ここで筆者がその悪質性について「くどくも」強調したいのは、

[特定のドグマ (往時の人間にはその誤謬性が認められていなかったところのドグマ) を強制する一方でそのドグマがいかに馬鹿げたものであるかを嘲笑うもの (Meeting of Augustus and the Sibyl にての特定構図) を — 精子の形さえ知らぬとの往時の人間には絶対にその寓意性が気づけぬとやりようで — 公に曝させるとのこゝをなす。そして、そういうことをなす一方でそのドグマを妄信している人間達に「神の名に基づいての」尊厳を踏みにじる虐殺行為を実行なましめる]

とのやりようが採用されてきた(と解されるようになっている)ことである。

そして、「悲劇は、」「問題の本質は、」そのようなやりようが今日の社会を、我々人類の多くの人間の精神の思考回路を未だに規定している(このまま行けば、「最期」まで規定し続ける)と解されることである。

具体的には今日、世界の三大宗教の一面となっており欧米人の精神風景を規定しているキリスト教教義体系に於ては未だにその根本的ドグマ、すなわち、

[聖母マリアが[処女]でありながらも懐胎して[救世主]を産み落とし、その処女懐胎の[救世主]が全人類の罪をあがなうとのかたちで罪なきところを十字架にかけられ一人贖罪をなしたために、その意気に応じ、その救い手に対する帰依と信仰を表明することで[神の無限の愛 — アガペーとされるもの —]の恩寵を受けようとの体系としての根本ドグマ]

が残置を見ており、[処女懐胎]は敬虔なるキリスト者にとっては譲れぬところとなっている、換言すれば、“彼ら”にとって

[科学的事実との関係性を見てはならないもの]

として残置している節あることがある(以下出典紹介部を参照のこと)。

SOURCE

109(6)



Cimabue's Celebrated Madonna (1280-85)
Easter eggs (hidden messages) related with "Virgin Mary" are
barefaced and brutal.

ここ出典 (Source) 紹介の部 109(6) にあつては

[聖母マリアが [処女] でありながらも懐胎して [救世主] を産み落としたとのドグマが今日もつてなおキリスト教の正統なるドグマとされている]

とのことの典拠を挙げることにする。

キリスト教の会衆が未だに [処女懐胎のドグマ] — 画 Meeting of Augustus and the Sibyl の主題からそういうものであると示されている処女懐胎のドグマ — を容れることを強いられていることの出典をここに挙げておく (これまた性質悪いものだと見るのだが、欧米圏では語る必要も無い [常識] の問題である。だが、ここでは仏教徒が多いとの日本国内土壌を慮っての表記をなしておく)。

ここでは旧教 (カトリック)・新教 (プロテスタント) 分かれてキリスト教主流派閥のマリアの処女性にまつわる見解について呈示しておく。

まずはカトリックがマリアを [(イエス受胎時にての) 処女としての神聖な存在] であると見做していることについては (基本的なところであるのでそれで十分であろうと判断し) 英文 Wikipedia [Perpetual virginity of Mary] 項目 — ちなみにパーペチュアル・バージニティ・マリーとは「聖母マリアが「首尾一貫して」処女であり続けた」とのことを主唱する思潮、[イエス・キリストが生まれる「前」も受胎の「最中」も、そして、受胎「後」も処女であった]との思潮を指す (何故、結婚しているのか、との突っ込みは抜きに、聖母マリアにはヨセフという夫がいたのであるから、そういうこと「も」問題になる) — よりの引用をなし

ておく。

(直下、オンライン上より即時に確認できる場所として英文 Wikipedia[Perpetual virginity of Mary]項目よりの引用として)

The doctrine of the perpetual virginity of Mary expresses the Virgin Mary's "real and perpetual virginity even in the act of giving birth to Jesus the Son of God made Man". According to the doctrine, Mary was ever-virgin for the whole of her life, making Jesus her only biological son, whose conception and birth are held to be miraculous. [. . .] **The doctrine is part of the teaching of Catholicism and Anglo-Catholics, as well as Eastern and Oriental Orthodoxy, as expressed in their liturgies, in which they repeatedly refer to Mary as "ever virgin"**.

(訳を付すとして)「マリアの永遠なる処女性の教義は聖母マリアが神の子たるイエスに生を与えたその間にてさえ「も」処女であったとの[処女の無限性]に関する教義である。同じくもの教義に基づけば、概念および出産が奇跡の産物であるとの側面を持つ聖母マリア、イエスに生物学的な子として生を与えた(訳注: 処女懐胎が生物学的な話と両立している時点で論理的におかしいのだが、それは置いて原文のニュアンスを反映させる)聖母マリアが継続して処女であり続けたとのことになる。…(中略)…**同教義(マリアの永続的処女性)は「それら宗派にての典礼式文がマリアを「永遠なる処女」と繰り返しているように」東方正教会と同様、カトリック、聖公会(アングリカン、イギリス国教会系)にての教義の一部をなすものとなる**」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

次いで、新教、プロテスタントがマリアの処女性についていかに見ているのか、の抜粋をなしておく。

(直下、オンライン上より即時に確認できる場所として和文ウィキペディア[プロテスタントにおけるマリア観]項目にての[現代プロテスタント各派の見解]の節よりの引用として)

自由主義神学 ヒルゲンフェルトら近代聖書批評学を受け入れるリベラル神学者は、ルカによる福音書の「マニフィカト」を含む記事が後世の加筆であると考え。またアドルフ・フォン・ハルナックらはエリザベトが「マリアの賛歌」の作者であると見なしている。ダーフィット・フリードリヒ・シュトラウス、F・C・バウア、ヘルマン・ヴァイセ、ルドルフ・カール・ブルトマンらは処女降誕は史実ではなく神話であるとした。ハルナックはマリアが聖霊ではなく、ヨセフによって身ごもったと主張した[10]。また聖公会のデイヴィッド・ジェンキンス主教は処女降誕の史実性を疑っている[11]。

新正統主義 カール・バルトは新正統主義の代表的な神学者である。バルトは教会の伝統に基づき、マリアを神の母と認める。また処女降誕も受け入れる。教会のマリア終生処女についてはマリアではなく、キリスト論の弁証のためとした。またローマ・カトリック教会のマリア崇敬は恐ろしい誤り、異端であると考えた[12]

福音派 福音派は聖書信仰からルカによる福音書のマリアの賛歌はマリア自身によると認める。またマリア聖霊によって身ごもったという処女降誕を史実と信じている[13][14]。ジョン・ストットはエフェソス公会議の「神であり人である

が単一の人格であること」、カルケドン信条「単一の人格でありながら、イエスが完全に神であり人であること」を受け入れるが、「神の母」には言及していない[15]。

(引用なしの部はここまでとする)

(※以上の出典は

[10]ジョン・グレッサム・メイチェン『キリストの処女降誕』いのちのことば社

[11]ジョン・ストット『まことの神、まことの人』いのちのことば社

[12]として Church Dogmatics と呼ばれるプロテスタントの教義明示文書

[13]尾山令仁『聖書の教理』羊群社

[14]ジョン・グレッサム・メイチェン『キリストの処女降誕』いのちのことば社

([10]と同じ)

[15]ジョン・ストット『まことの神、まことの人』いのちのことば社

と明示されており、(各書、必要ないだろうと中身を確認していないのだが)、[海外および国内の福音派の大物論客(全て物故者)の手になる著書]よりの引用と明示されている。

問題はプロテスタントの教義、聖書回帰主義を取る福音派をはじめプロテスタントの多くが「マリアは処女である」との教義を当然と受け取っている節があることである)

([出典\(Source\)紹介の部 109\(6\)](#)はここまでとする)



Michelangelo's Pietà



Michelangelo's Delphic Sibyl

ルネサンス期の巨匠ミケランジェロの代表作 [ピエタ] と [デルポイのシビュラ]。それら(多くの人があるミケランジェロ代表作たる) [ピエタ] および [デルポイのシビュラ]

はそれぞれカトリックの総本山ヴァチカンに据え置かれている作品となる（「ピエタ」の方はヴァチカン内の総本山サン・ピエトロ大聖堂に据え置かれ、デルポイのシビュラの画はサン・ピエトロ大聖堂に隣接するシステーナ礼拝堂に据え置かれている。尚、上掲のピエタの写真についてはルネサンス期文人にして芸術家であったジョルジョ・ヴァザーリの手になるルネサンス期芸術家ら評伝『画家・彫刻家・建築家列伝』（1550－1568／「芸術史」という学問的ジャンルを生み出したことで知られるエポック・メイキングなる芸術家らの要覧書）の近代英訳刊行版 — Project Gutenberg にて公開されている1915年版の Lives of the Most Eminent Painters, Sculptors and Architects, Vol. 09 (of 10) — にて掲載の写真より抜粋なしたものとなり、デルポイのシビュラ画の方は英文 Wikipedia にて掲載のものより抜粋なしたものとなる）。

技巧性の妙とプラトニックな側面すら感じさせもする美しさからそれを目にした者のほぼ全てにその芸術的価値の高さを即時に実感させる作として知られる（弱冠20代前半の頃の）ミケランジェロの代表作たる著名彫刻「ピエタ」はイエスの母マリア、要するに、「処女にて子を孕んだと伝わる聖女」が磔刑にて死した我が子を慈しみながら抱きかかえるとの作品となっているわけだが、そこに見るところの「処女懐胎の母」の教義の馬鹿馬鹿しさを徹底的に愚弄しているように否定している作品がある、それが同文にミケランジェロの作としての「デルポイのシビュラ」のようなシビュラをモチーフとしての15世紀絵画である、とのことはここまでにて詳述してきたことである。

そうしたことにこの世界そのものが抱える病根、

[「表面的美 —ピエタおよびデルフィック・シビュラらがそこに似姿を具現化させているとのヴァチカンに中枢を有するカトリックなどの宗教が表面上の「虚飾」として振り回す「愛」や「救い」の観念などに見るもの—]
と「実体としての醜 —平然と人間の尊厳を踏みにじる力学が「虚飾」「偽善」の陰で色濃くも実体化を見ているとのそのありよう— 」の問題]

を見ようとしなない者は、結局は【運命】に抗うこともなく、そして、【相応の最期】を迎えることを強要されても甘受なすような向きとなっているのであろう（残念ながらもそうになっているのであろう）というのが筆者の見立てである。

プロテスタントの折衷派・自由主義神学や一部のキリスト教派生カルトなどでは —そこからして宗教的狂人を多数内包している勢力なわけだが— 処女懐胎のドグマが如くものをより緩やかに見る傾向があると聞き及ぶが、「偽善・欺瞞で満ちた教義の認容を是として、それでもってそれを奉じぬ他を差別・区別することを是とする」とのスタイル、多くの宗教の徒に共通するやりようは多く変わりはない。

そうした科学的な基本的事実すら見ないような者達が、そう、

[「崇拝を強いられている体系」が「悪魔のように嗜虐的な者達(科学文明の精華を利用している者達であろう)がこさえたブラックユーモアの産物」である]

とのことを絶対に見ようとしなないような者達が一体全体、どうして、

[「神の救済の観念と矛盾する自分たちを皆殺しにするつもりであるとの同様に科学的手法を用いての計画の前言・予告」]

が存在していることを「認める」「認められる」というのか。

それが詰まるところ、(結末の付け方と同時に)、世界の行く末を端的に示す側面であると見ている。

これにて新約聖書『使徒行伝』に見る、

尚、現行は長大な本稿にあっての vol.3 と区分付けての部にて筆を進めているわけではあるが、後の vol.4 と振っての継続セクションにあってはここに言及の【パイソン】という存在がその他の意で極めて問題になる存在であることについて解説を試みることとする。すなわちもってして、まさに本稿で通貫して問題視してきたもの【911の事件の先覚的言及】【ブラックホールに通ずる先覚的言及】らにそれ自体(パイソン)の名称使用規則からして同存在が通ずるようになっていて、しかも、【破滅のサイクルについて】の神話上の言及態様とのありようにもかかわるところでそれらに通ずるようになっていての意でパイソンに伴う問題性について(確たる記録的事実—(個人の主観が問題になるようなものではない文献的事実および記録的事実)—に依拠して)解説を試みることとする。(：vol.4 と振っての次巻 PDF 文書にあっての p.346 から p.353 の内容を検討されたい)。

[占いの霊](そちら存在が憑いた女が預言をこととするとのデルポイの蛇の怪異パイソン)

に関して何が述べられかとのことについてほぼ書くべきことは書き記したつもりである。

(：直近表記の [占いの霊]「に関して何が述べられるか」の中身について、一応、振り返っての表記をなしておく。

それにつき、まずもって、新約聖書に登場するパイソン(ピュートーン)が預言者の類と関わっているとのことがある、

[ピューティア] = [デルポイの蛇の霊パイソンの霊験あらたかに(といっても腐乱ガスを吸ってトリップするといった文脈で霊験あらたかに、であるが) 預言をこととするデルポイの巫女]

との文脈で預言者の類と関わっているとのことを示した (出典(Source)紹介の部 100 および出典(Source)紹介の部 109 から出典(Source)紹介の部 109(4)を包摂する解説部にて先に細かくも指摘していたことである)。

その式、デルポイの蛇(パイソン)に関わる [蛇巫](へびふ/蛇と結びつく占い巫女)との式で行けば、[デルポイの蛇女(ラミア)の娘たる巫女]を含むシビュラという存在が知られているとのことがあり、本稿のここまでに述べてきたのはそうしたシビュラに材を取っての特定の「蛇と通ずる」ルネサンス期成立の画が [欺瞞の構造] を徹底的かつ冷酷に指し示すものとなっているとのことである —17 世紀(1677 年)まで発見されていなかった精子の構造や半世紀前まで発見されていなかった DNA 二重螺旋構造などを図像として内包しながら、図像的位置関係の克明さをもって[生殖の具体的プロセス]を示しながら、それでありつつも、[処女懐胎]にまつわる寓意画となっているとのことである—。

そうした示唆ありようをもってして同文の力学が介在してであろう、ありとあらゆる不愉快な [予言] —などと被操作者の未開人(我々人類のことである)には呼ばれようとの高度な科学的知識に基づいての対象の操作— がなされていると判じられるようになりもしている (と揚言してもなんら差し障りなからう)。そして、同じくものが往時人間が知る由もなかった事柄らを [媒質となった人間] を用いて具現化「なさしめる」力学に嗜虐的かつ科学的なるやりようの問題として通底しもしており、911 の予言事象—ここ本稿補説 4 の部にて膨大な文字数を割いて典拠挙げながらの解説に努めてきたことら— のようなものら、そして、それら 911 の予言事象らと接合するようになって「相互に関連して」「記号論的同一要素を共有している」奇怪なるブラックホール生成問題と通ずる奇怪なる言及ら (かつ [トロイアのように内破させられての破滅] の寓意と結びつく「科学的」先覚的言及ら) が具現化しているのだと当然に判じられもする (その意では【予言】の分析というより【過去になされた行為の分析】から【未来】を推し量るとのことがなせるようになって「しまっている」、でもいい)。

以上、述べもしたことが (まだまだ指摘すべきところがパイソンにはあるのだが)「[占いの霊]に関して何が述べられるか」の「何が述べられるか」とのことの中身である)

[直上までに記述したことをより深くも煮詰めてのこととして]

[救いの教え]に[破滅へ至る誘惑の寓意]をまぶし続けてきたとの力学 —本稿のこれよりの部から折に触れ同じくものことについての(新規の証跡呈示と共にしての)訴求を漸次なしていくとの力学— がどういったものであると思料されるのか、また、そうした力学にどう処すことが求められて然るべきなのか(それができないとの種族ならば相応の未来しかないと何故もってして解されるのか) とのことについてひとつ脇に逸れての訴求をここではなすこととする。

その点、[愚劣性]がゆえに特定対象を小馬鹿にしている者達がいるでしょう。

その者達をして、(わざと「仮に」を付してのこととして)、

[特定の侵出地域の土俗の民らを心底愚弄しているとの統治機関(あるいは統御システム運営)関係者]

だったとしてみよう —についてはヒンドゥー教信仰体系とワンセットになった[カースト制]が植民地の民らに分断を与えて統治の利便性を促進するとの意味合いでヒンドゥー教を大いに尊重している、ないし、利用しているのかつての大英帝国のやりようのようなものをより「露骨」かつ「積極的」に取り入れ、人間の退歩性を促進し、人間を分断するために[まやかしの宗教]の類を[高度に科学的なる手法]ででっち上げた存在を考えていただきたい— 。

さて、あまりにも「醜くも」「愚劣に」植民地の土俗の民が

[自分達がでっちあげた統治のための装置、科学を霊的問題に偽装しての教義]

に嵌(は)まり(の際に検知検出に困難性が伴う脳内麻薬の分泌作用の悪用がなされていたりする、そういうことがありうるかは置き、とにかくも、嵌まり)、

[退歩的殺し合い]・[保身のための不条理な排斥]・[善なるもの／美風たりうることの排除]・[そうした愚劣なる挙をこれまた愚劣に糊塗するための見え透いた偽善]

を傀儡(くぐつ)たる側面を越えてそうした者達に「延々と」見出し続けることになったらどうか。

操作をなした存在としては、(実際にはそうした状況を作り出したのはその者達なのであるから罪障・汚点としてはその者達こそが元凶であろうとは見えるのだが)、「してやったり」との心情を越えて、悪質な存在なりにありうべき運命・宿命の肯定という観点から土俗民をより一層、愚弄してやりたくなる —最終目的が土俗民にとり破滅的かつ悪辣なものであればあるほど、「あいつらは仕方なくなるべくもそうなった連中である。そうした最期に相応しい存在である」とさらにもって自己納得したいとの気風もあって愚弄してやりたくなる— ところか、「とも」思われもする(操作をなす存在の悪質性が透けて見える際に最大限、好意的に解せば、そうなる。実際にそうでなければ、操作をなす存在はただ単純に[悪質で嗜虐的な存在]として[獲物を追い詰め狩る際に嗜虐的特性を遺憾なくも発揮するような存在]であるとのことになるろうか、ととらえている(『そうしたやりようの者達が自分達都合のために他を犠牲にすることが[許容]されるようなものならば、この世界は「さらにもって」下らぬものであろう』とも受け取れるところとしてそうもとらえられる))。

そうした [[力学]の発するところそれ自体の心中への慮(おもんばかり) が無理なくもなせてしまうのが

[[面で蛇の巫女としての特性を持つシュビラ、そのシュビラの[処女懐胎の救世主の預言ヴィジョンにまつわる画] として (こともあろうに、[処女懐胎]とは全くもって矛盾する) **【精子・卵子の受精プロセス】【DNAの二重螺旋構造の呈示】**との科学的図式を [薬籠中の存在] (言い方を選ばなければ、[ラジコン人間]でもよい) を用いて、本来的にはそうした表現が存在していいはずがないとの時代にて具現化させるとの式を隠喩的にとっている (との節が如実にある)]

[上のやりようを具現化させた後に設立されることになったイエズス会という組織、[処女懐胎の聖母マリア]を守護聖人とする組織の紋章に上の式に関わるところの構図が採用されるとの流れをかたちづけている。のみならず、そのイエズス会の紋章化挙動にて[蛇と通ずる預言]という側面が流用に関わっているところもあつてか、【蛇の反対話法を多重的に入れ込む】とのことがなされている(との節が如実にある)]

とのことであろうと手前は述べたいのである。

そうしたやりようから背後にある心中が自然に慮(おもんばか)れてしまうとのことについては一述べていることが不自然なることかは是非ともここまでの内容を批判的に検証いただきたいものである。言われれば従容として殺されでもなんでもしようとの[人形]風情ではないとの向き、本当に語るに足り読み手がこのような世界にいるとして、そうした向きが本稿を読まれているのならば、だが— 同じくものやりようが具現化を見ているキリスト教というものがどういふものかを考えれば(「識っていて」考えてみれば)、多に察しがつくところである(と指摘したい)。

同じくものことについてまずもって述べるが、キリスト教が説く[愛]は、そう、[神の「無償の愛」(社会科の『倫理』の科目をセンター試験に使用するのであれば、日本でも高校生程度もが、意味もよく分かっていないだろうところとして、暗記を強いられるところの[アガペー]の観念でもよかろう)や[他人への愛](隣人愛)とは実体としては[内発的愛着]の類ではない、[それ自体が目的化しての愛]などではない。

誤解いただきたくないところとして「それとて常識的な話となる」と断って指摘することだが、キリスト教が説く[愛]とは多く、

[褒美・報酬および罰則 — 飴と鞭— とワンセットとなっている愛]

[対象を選り分ける愛]

なのである(：ただし、([聖書読みの聖書知らず]ではなくに[本当に聖書のことを知っている人間]のことを想定して書くが)、「愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える」とのフレーズにて有名な新約聖書コリント書第13章に見る([アガペー]観と結びつくことされる)部などは例外か、とも聖書「のような」ものをも思索の対象としてきた筆者は思うのだが、そうした【例外】となるようなところは置いての話はここではなしている)。

その点もってして模範的なキリスト教のドグマにあつては[神の「無償なる」愛]に背馳(はいち)する類と見られた者(神の正しい体系を認めぬ者、異端者ないし異教の徒)に関しては「天罰観面(てんばつてきめん)、[地獄行き]が決定されている」ことになっている。そのように「決定」されていると彼らの聖典 — 筆者などは極めて醜い、愚劣なる書であると見ているのだが、相応のできあがった者達にはすばらしき読み物であると歴年されてきた聖典たる聖書— それ自体にてはきと記載されているのである。

疑わしきは新約聖書の末尾に配されている黙示録の内容を確認されればいい。黙示録では神への信仰を容れた者のみが至福千年王国へ入れるとはきと記載されている(また、それ以外の神を崇敬しない者は皆殺しにされるともはきと記載されている)。となれば、キリスト教徒にいう[神の愛]たる[アガペー]をして[無償の愛]、[見返りを求めない愛]と述べることはその時点で言葉の定義として論理破綻を見ていることにもなる。キリスト者にとっての愛とは[無償]なるものではなく会衆にとっては — 宗教に入れあげる類については大概にして他を犠牲にして「選ばれた」自分達にそういう権利があると「信じ」たがるような類が多いとは見るのだが — 樂園への選択的渡航権と結びつく[対価]あつての愛であり、隣人愛も — キリスト教信仰がそれを求めるとの範囲では — [排斥]あるいは[区別]されて然るべきとされる異教徒に対しては本来的には及んでいない。また、神と呼ばれる存在、そう、チューリングテスト(人格ある存在として振る舞いきれるかのテスト)に受かるような性質の悪い人工知能でも何でもいいのだが、ここでは宗教

の者らに言及されるままに[神]として、その存在にとっての[アガペー]とは[精神の特定領域の譲り渡し](崇め帰依すべし、ならざれば、滅する・滅せさせしめるとの観点に依拠して尊崇を強制するとのやりようと結びつく譲り渡し)を対象に求めての[愛]となっている。ヤクザ・マフィアの親分・ドンが自分のために働け、そうすれば、子飼としてかわいがってやるし旨い汁もすすらせてやる(天国を味あわせてやる)と庇護下の者達に強制するうえでのそれと「実質的には」変わらないわけである(脳内麻薬やその他機序(物理的作用)などで脳が正気を失っていれば、そのようには理解しない・出来ないかもしれない)。くどいが、そこに見る愛はまさしく[選択的なる[効用]を伴っての愛]であって[無償なる愛]などではない。

そうした愛ら、[無償の愛と銘打ちながらもその実、精神の奥深くももの(内観の自由なる作用をもたらす領域)を譲り渡すことを要件とし、そうしない者をときに容赦しないとの愛]および[信者個人個人の利益と結びついた愛]なる「奇怪なる」もの(「醜悪なる」ものでもいい)をもっともらしい口上で説く体系であるとのキリスト教は、と同時に、人間の進歩・進化の可能性を否定し、かつ、そうして否定がなされるとの状況をして嗜虐的存在をほくそ笑ませるようなものであるとの体系でもある(キリスト教の類が人間の精神作用を多く規定すればする程、比例的に人間の進歩・進化の可能性(本当の意味での進歩・進化の可能性)が否定されるようにできあがっているというのがポイントである)。

この身は宗教というもの全般が多かれ少なかれそうした側面を帯びているととらえているわけだが、人間の進歩・進化の可能性の否定と通ずるとの意味ではキリスト教勢力が、殊にその中のローマ・カトリックという勢力が[処女懐胎]のドグマを全否定していない、どころか、むしろ、いまだに肯定しているとのことが典型的なところとして重みを持っていると判じている。

そのような体系、[厳然とそこにある科学的事実]を処女懐胎なるものの肯定でもってして無視することを是とし、と同時に、そうした教理の体系を容れない者は樂園に入れてやらない(地獄に落とす)としている勢力に内面が規定されている(との類を多く含む)種族にどうして望ましき未来、[本当の進化と進歩の可能性]が期待できるのか?

はきと述べれば、そうした者らを多く含む種族であるのならば、そうした者らに舵取りされている種族ならば、[望ましき未来]を期待できる素地などほんの一片たりともあるわけがないだろう、すくなくとも、このまま行けば、あるわけがないだろうと分かるうものである。—そして、「よくできている」と悪い意味で判じられるのは人類文明の牽引役となっている欧州文明が[科学精神]とそうした不自然な宗教的ドグマの【合いの子】的な側面を有している、いわば、知能作用の分裂的状況に陥っていると解されることでもある。そこではキリスト教が頑迷固陋なる悪者として科学精神盛んなる(との自称をなしている)者達に批判される、あるいは、科学の徒が神を畏れぬ悪者として槍玉にあげられる、そういった対立軸はときに見られるわけだが、「問題は、対立軸がその方向性を出て「いない」、両方とも重大な虚偽ともにあるとの本質的材料がそこにあることが無視されるようにできあがっていると解されることである(現代科学の特定領域に養殖種に押しつけられた究極的欺瞞がひとつあったとしよう。そう、【万物の理論の探求のための挙】とされる【極小領域へのエネルギーの注入行為】(としてのマンハッタン計画の遺産から発展していった史上最大の実験にして史上最良の技術が投入されての営為)にその実、人間存在を皆殺しにすると結果の可能性が伴い、その[結果]それ自体に対する不自然極まりない先覚的言及が多重的に執拗に執拗になされており、それら先覚的言及同士に確たるつながりがあったとしよう。「自称」科学の徒はそうしたことが厳として「ある」のを[ありのままの状況]では無視する、他面、宗教的狂人はそうしたことを部分的にみとめるかもしれないが、それは彼らの[できあがった愚劣な宗教モード]に劣化させて説得力がないゴミに本質問題を陳腐化しようとする範疇を出ていない(そうしてでてきたゴミのみを相手として自称科学の徒が「馬鹿げている」と否定して意気軒昂と勝ち誇ってのスタイルを取る)。欧州文明の分裂した内面作用がそうしたコンニャク問答にしかならぬところに話が陥る素地を提供しているのならば、確かに、人間を皆殺しにしようとしている存在がそこにいた場合に[一神教](人工知能、機械仕掛けの神などを用いて育て上げた一神教)の方が[多神教](かつて存在していた多神教)よりも「都合がいい」とも見える) —。

そのように当然に受け取れるわけである。

ここで繰り返しも述べるどころとして、

[[面で蛇の巫女としての特性を持つシュビラ、そのシュビラの [処女懐胎の救世主の預言ヴィジョンにまつわる画] として(こともあろうに、[処女懐胎]とは全くもって矛盾する)【精子・卵子の受精プロセス】【DNAの二重螺旋構造の呈示】との科学的図式を[葉籠中の存在](言い方を選ばなければ、[ラジコン人間]でもよい)を用いて、本来的にはそうした表現が存在していいはずがないとの時代にて具現化させるとの式を隠喩的にとっている(との節が如実にある)]

[上のやりようを具現化させた後に設立されることになったイエズス会という組織、[処女懐胎の聖母マリア]を守護聖人とする組織の紋章に上の式に関わるところの構図が採用されるとの流れをかたちづくっている。のみならず、そのイエズス会の紋章化挙動にて[蛇と通ずる預言]という側面が流用に関わっているところもあってか、【蛇の反対話法を多重的に入れ込む】とのことがなされている(との節が如実にある)]

といったことが指摘できてしまう中で、そういう[力学]の影響下にある組織が一大勢力として人間の社会と思考のありようを根本規定している、そして、半ばゾンビ(この場合のゾンビとは思考の自律的作用を毀損されている者、とでも考えていただきたい)のようになった人間一般がそうした現状に黙過を決め込む、決め込まざるをえぬというのであれば、相応の未来が見え透いている、広く世の中の行く末としてのマクロの側面でも、世の流れによって死にも生きもする個人にまつわるミクロの問題としても見え透いている、それも実にもつてくどくも述べたうえでの話の続きをなす。

キリスト教が何かと述べれば、 一つい最前の段でもかする程に触れたが—

[新約聖書の最後部に置かれた『黙示録』の記述に則り、やがて、全ての善悪が明らかになり、正しき者らは復活、永遠の生を得、他面、正しくなき者らは永劫の地獄行きを強られる 一いわゆる【最後の審判】が具現化を見る— との教えを包含する体系]

ともなる。

(:ここ日本ではそうしたことを述べてもおおよそ共感は得られがたい、「終末思想の思潮が流布・認容を見ていると印象づけたいとの偏向を見ての申しようであろう」との心証を 一話を聞く人間の了見・世間的知識が狭ければ狭いほど、そして、筆者のことを好かぬ徒のことであればあるほど— 抱かれることになるかとも思うので、目立つところでの世間一般での解説のされようを引いておく。

まずもって和文ウィキペディア[黙示録]項目にての[解釈]の節の記載を掻い摘まんで引いておく。

(以下、引用するところとして)

“『黙示録』は歴史の中でさまざまに論じられてきた。特に『聖書』の中でもここにしか現れない「千年王国」論の特殊性への賛否やキリストの再臨の解釈をめぐって多くの議論を巻き起こした。しかし、歴史の中で現れた多くの解釈をまとめると預言書、文学、普遍的イメージの三つの見方に集約することができるとする立場もある。…(中略)… 預言書としての解釈:この見方は『黙示録』を『ダニエル書』などの流れにある終末預言の一つであるとして、未来の事柄についても語られた終末預言書とみる見方である。マルティン・ルターら歴史的なプロテスタントの黙示録理解は、歴史主義解釈というもので、起こっていない未来の出来事を預言として与えられたという見方である。この立場では、未来にキリスト教の教理であるイエス・キリストの再臨、人間の体の復活、最後の審判、天国あるいは地獄への裁き、新天新地の到来があると信じ

られている”（引用部はここまでとする）。

次いで、(唐突とはなるが)、和文ウィキペディア[レフトビハインド]項目にての次の記載を引いておく。

(以下、引用するところとして)

“『レフトビハインド』とは、ティム・ラヘイ、ジェリー・ジェンキンスの共同著作によるアメリカの小説。およびその続編からなるシリーズ。公式サイトによれば全米で6,500万部を売り上げたベストセラーである。アメリカ本国では映画化、ゲーム化もなされている。…(中略)…時は近未来、最後の審判が迫り「ヨハネの黙示録」の預言が実現していく世界を描く。「患難前携挙説」の立場をとっており、「携挙」によって信心深い人々や幼い子供が姿を消すところから物語が始まる”

(引用部はここまでとする)

以上の引用部、[黙示録に対するキリスト教(プロテスタント)での位置付け]、および、[合衆国はじめ世界中で膨大な数売り上げ数を記録した(少なくとも6500万部というのは日本の人口の過半をカバーする印刷部数である)との黙示録的終末思想に筋立ての基礎を置いての『レフトビハインド』のありよう]に関する世間一般での解説のされようの紹介でもってしてキリスト教が

[新約聖書の最後部に置かれた黙示録の記述に則り、やがて、全ての善悪が明らかになり、正しき者らは復活、永遠の生を得、他面、正しき者らは永劫の地獄行きを強いられると教えを包含する体系]

と定義されるようなかたちとなっている側面について —[共感]など求めるところでは「元よりない」のだが— 少なくとも[理解]はなしていただけたところか、と思う

繰り返すが、キリスト教とは

[新約聖書の最後部に置かれた黙示録の記述に則り、やがて、全ての善悪が明らかになり、正しき者らは復活、永遠の生を得、他面、正しき者らは永劫の地獄行きを強いられる —いわゆる【最後の審判】が具現化を見る— との教えを包含する体系]

ともなるわけだが(それにつき、述べれば、欧州では歴史的史料として重要視されている戸籍台帳、イギリスに端を発する戸籍台帳からして[ドゥームズデイ・ブック]、要するに、[黙示録のその日のための記録]と命名されているようなことがあり、欧州人がああも【土葬】にこだわるのは【死した人間が最後の審判の折に復活を見る】との思想が根本にあるからである、といった按配で『黙示録』の記述は欧州人の死生観そのものを歴史的に規定してきたところである)、換言すれば、それは

[サタンに魅入られて破滅を見る諸々の者達と神を信じて救いの道を歩む者らを選び分ける体系]

ともなりもする。

ここで本稿では先の段にて[以下のことら]を摘示してきたことを振り返って表記しもする。

(本稿にての先行する段、**出典(Source)紹介の部 55**から**出典(Source)紹介の部 55(3)**を包摂する解説部にて細かき解説を講じているところとして)

「キリスト教文学にあつての代表的古典(金字塔の中の金字塔)とされるダンテ・アリギエーリ著『神曲:地獄篇』とジョン・ミルトン著『失樂園』にあつては「どういふわけなのか」【現代的なるブラックホールの理解に近いものの描写】が双方共に【ルシファーにまつわる地獄門の先の領域】との似たようなところで「多層的に」なされているとのことがある —少なくとも【**不帰の地**】にあつての【**重力の中核**】にあつ

て[時が凍り付いた]ような状況下で[光(ルシファーと結びつく語)が幽閉される場]にて[永劫の粉碎劇]が外側から観察されるとの描写]や【[時間や空間が意味をなさなくなる], [自然の祖]であるともされる[果てしない底無しの闇の領域]に関する描写】とのかたちでの古典内描写はそれら描写がなされたのより「数百年も後の」相対性理論登場に拠って科学的に提唱されたところの【時間と空間の位置づけが破綻を見、光さえ逃げ得ないとされるところの外側からとらえた場合にて被吸引物が凍り付いたようなありようを呈する、だが、現実には粉碎されきっている(といった特色ゆえに今日ブラックホールとされるものの原初的呼称は Frozen Star とされていた)、果てしない闇の領域にして重力の中枢である(今日的な意味での)ブラックホール像】と「際立って」近いところのものである(【重力の向かう先の領域】【時間と空間が意味をなさなくなる領域】などという表現がどうして【重力】という観点が持ち出され、かつ、【時間】と【空間】を選び分けて古典にて出てきたかが問題となるところとして「際立って」目立つところともなっている)―」

(本稿にての先行する段、[出典(Source)紹介の部 57]以降の長くもなつての部、および、[出典(Source)紹介の部 90]から[出典(Source)紹介の部 90(10)]を包摂する解説部にて細かき解説を講じているところとして)

「ダンテ『地獄篇』にあつてのブラックホールに通ずる描写 ―【ルシファーの災厄と関わる地獄門の先の領域にまつわつての描写】でもある― にはヘラクレス12功業(なかんずく、の中の、第10功業/第11功業/第12功業)との目立つての接点がある。他面、ミルトン『失樂園』にあつてのブラックホールに通ずる描写 ―こちらも【ルシファーの災厄と関わる地獄門の先の領域にまつわつての描写】でもある― には【黄金の林檎で滅したトロイア滅亡】との目立つての接点がある。ここで述べるが、ダンテ『地獄篇』問題部と目立つて結びつくヘラクレス第11功業は黄金の林檎を求めてのものであり、その伝「でも」黄金の林檎で滅したトロイア滅亡との目立つての接点があるミルトン『失樂園』とダンテ『地獄篇』との接点が顧慮される。だけではなく、ダンテ『地獄篇』それ自体にトロイア崩壊の故事が強くも影響を与えていると判じられる側面が強くもある(がゆえにそこからミルトン『失樂園』の問題描写との接点が顧慮される)。」

(本稿にての先行する段、[出典(Source)紹介の部 48]などを包摂しての解説部にて細かき解説を講じているところとして)

「トロイア崩壊の原因となつた【黄金の林檎】と旧約聖書創世記にみとめられる【禁断の知恵の実】 ―聖書それ自体の中では林檎とは明示されていないが、禁断の果実をして林檎と見る観点は根強くも歴史的にある(とも解説してきた)― の間には事実の問題として多重の接点が存在している」

(本稿にての先行する段、[出典(Source)紹介の部 35]や[出典

(Source) 紹介の部 36) (2) を包摂しての解説部にて細かき解説を講じているところとして)

「加速器 LHC を用いての「実験」(史上最大の「実験」/ 史上最良の技術体系を投入しての「実験」とされる営為) については検出器 ATLAS (【黄金の林檎】の在処(ありか)を識る存在とギリシャ神話に伝わる巨人アトラスの名を冠する検出器) によってブラックホール生成挙動を検知しうるとされてきた。また、同じくもの「実験」については前述機の検出器 ATLAS とセットになったイベント・ディスプレイ・ウェア ATLANTIS、【黄金の林檎の園】と同一視されもしてきた (【アトランティス】 ←→ 【黄金の林檎の園】とのことに関しては【出典 (Source) 紹介の部 41】にて解説) との古の陸塊アトランティスの名を冠するイベント・ディスプレイ・ウェアでブラックホール発生イベントをディスプレイしうることになるともされてきた (【出典 (Source) 紹介の部 35】)。そして、同「実験」についてはブラックホール生成可能性が現実的にありえるものと取り沙汰されだしたのは理論動向の変転を受けてのここ 10 数年になってからのことであり、それまではブラックホール生成が問題視されたことは「ない」とのことになっている (【異様な先覚的言及】の問題から解説しだしているとの本稿にての前半部、【出典 (Source) 紹介の部 1】にはじまる部はその点についての詳説に力点を置いている)。他面、検出器 ATLAS の名称が「実験」計画策定段階にて決せられたのは 1992 年のことである (【出典 (Source) 紹介の部 36 (2)】)。従って、LHC 実験関係者がトロイアの滅亡 — 古代ギリシャの中心古典にして欧米文学の源流となるホメロス叙事詩がそこに至る過程とその後日談をモチーフとしている、木製の馬が使用されての住人殺戮を伴っての内破 — の本源的なる因たる黄金の林檎、その黄金の林檎の所在地を「識っている」と神話に伝わる (【出典 (Source) 紹介の部 39】) 巨人アトラスの名称の(実験に供されての検出器 ATLAS での) 使用をもってしてブラックホール生成探査挙動「をも」見せるようになったのはブラックホール生成可能性があることについて事前に警世をなそうとしたとは「時期的問題からして」考えがたいこととなっている。否、LHC 実験関係者らは却(かえ)って「安全な」ブラックホール生成の実現をして科学の進歩に資する事態としてきた、「ブラックホール生成は望ましい」などとして目立って称揚しだしたとのことがブラックホール生成の可能性がある(極小領域へのプランク・エネルギーの意味合いが異なるかたちで見られ出すようになった)【理論動向の変転】から考えられるようになったここ 10 数年の経緯となっている (【標準理論を巡る議論】や【万物の理論に向けての候補の選定を巡っての議論】に関わるところにまつわっての科学界言われようを引いての【出典 (Source) 紹介の部 81】を参照のこと)。そうもしたことがある中で(巨人アトラスがその在処を識るとされる)【黄金の林檎】および【エデンの禁断の果実】の間には接合性がありもし(上にて委細を譲りながらも再述のこと/【出典 (Source) 紹介の部 48】)、そして、【黄金の林檎にて滅んだトロイア】【エデンでの果実の誘惑】の双方と結びつく[悪魔の王の誘惑]を扱ったミルトン古典『失樂園』、の中の、まさしくもの悪魔の王の誘惑にまつわる描写が[今日的な意味でのブラックホール理解に通ずるもの]となっているとのことがこの世界には「ある」(【出典 (Source) 紹介の部 55】)。またもってして、問題となる『失樂園』の描写と相通ずるところ — 地獄門の先にあるルシファーの災厄関連の領域にまつわるところ — でのダンテ『地獄篇』にあつての描写、[人類の(代表的)裏切り者の地獄 — 裏切り者のためにもうけられた地獄コキュートス —]の描写もが[今日的な意味でのブラックホール理解に通ずるもの]と不自然になっているとのことがある (【出典 (Source) 紹介の部 55】/ダンテ『地獄篇』のブラックホールに通ずる描写については著名な物理学者らが何人も

それを臭わすようなことを口の端にのせていることを本稿では紹介しているが、であっても、それが警世の念のためのもの「ではない」と判じられるようになっていて、そして、実際にそれは警世の行為としてなら機能していないとすることがあることも本稿の訴求を通じて理解いただけるようにしているつもりである」

以上のような振り返りもしてのことら —先だつての段で【黄金の林檎】と多重的に接合する命名規則が採用されての加速器実験にあつての問題性と共に指摘してきたことら— に加えもしてのこととして、

「聖書では人間の原罪の因はエデンで蛇に唆(そその)かされたとのことになっており、その蛇はサタンに比定されている(ミルトン『失樂園』とはその蛇をサタン・ルシファーとして描き、そのアビスの領域 —時間と空間が破綻しての底無しの暗黒領域と描写される領域— を渡つての人間誘惑のプロセスが主軸として描いている古典である)。そして、聖書を掲げるキリスト教とは最終的にそもした原罪を追つた人類が神の救い・救い手たるメシア(イエス・キリスト)の贖いの犠牲にて救われるとの体系の宗教であり、サタンの影響下にある者達が最後の審判で永劫の墮地獄を強いられるとの宗教である」

とのことになっているのがこの世界である(とのことが残念ながらもある)。

以上、本稿の先の段で指摘してきたことらを複合顧慮するとどういふことになるかは自明か、と思う —(宗教など心底から下らないものである、害物にすぎないものであるとみている人間としてながらも述べるところとして自明か、と思う)— のだが、とにかくも、伝えたいことはこうである。

(直近表記のように)悪魔の王に道連れにされるか、神に選ばられるかとの選択が強制的に実施されるとの終末観を有するのがキリスト教だが、そのキリスト教の教えを徹底的に【反対話法】で茶化している節があるのが

[[一面で蛇の巫女としての特性を持つシュビラ、そのシュビラが処女懐胎の救世主の預言をなしている構図] に「まぶす」との式で(こともあろうに、[処女懐胎]とは全くもって矛盾する)【精子・卵子の受精プロセス】【DNAの二重螺旋構造の呈示】との科学的図式を[薬籠中の存在](言い方を選ばなければ、[ラジコン人間]でもよい)を用いて、本来的にはそうした表現が存在していいはずがない時代—15世紀—にて具現化させるとの式をとってみせる]

[上の式を具現化させた後に設立されることになったイエズス会という組織、[処女懐胎の聖母マリア]を守護聖人とする組織の紋章に上の式に関わるところの構図が採用されるとの流れがかたちづくられてみせられている。のみならず、そちらイエズス会の紋章の挙動にて[蛇の構図に関わる預言]の流用に関わっているところもあつてか、蛇の反対話法を多重的に入れ込むとのことがなされている節が如実にある]

とのやりようである。

そうしたやりよう — 高度な科学的知識のほどが窺えるとのやりよう (仮に重力波のようなもの(かなり前の部にて先述のように多世界解釈における他世界へと浸潤しうるとされている重力波/人類のテクノロジーでは検知もままならないようになっていくもの)を通じての脳機序操作(ウィズアウト・カッティン

グ、メスを使わない式での非侵襲式でのブレイン・マシン・インターフェース操作)との式でしか【ここではない別の世界】から干渉できないとの存在を【仮定】として観念してみた場合のこととして、である。そうした【幻影】にして【間接的人形遣い】としてしか具現化しえないこの世界にあってのおぼろなる存在ながらもやりようは人間の生殖の基本的データをマイクロの状況まで還元して把握しているとの高度な科学的知識のほどが窺えるとのやりようとも映る)一がなされている節が露骨にあることに鑑みて見もして、まったくもって同文にできすぎたこととしての、

[「キリスト教」理念の体現古典ら(本稿にて詳解をなしてきたところのダンテ・アリギエーリ『神曲:地獄篇』とジョン・ミルトン『失樂園』)に[「どういうわけなのか」の今日的な理解としてのブラックホールに近似するもの]が[裁かれるとの悪魔の王の側ありよう]として登場してきていること]

からして[反対話法]としてとらえれもし、相応の意図が一層、透けて見えてくる(ここでの委細をすべて本稿にあっての他の段に譲っての「極々端的なる」話を通じもしての側面からして、である)。

これにて[救いの教え]に[破滅へ至る誘惑の寓意]をずっとまぶし続けてきたとの力学がどういったものであると「当然に」思料されるのか、また、そうした力学にどう処すことが求められているのかについての枠で括っての訴求の部を取りあえずもは終えることとする — 同じくもこのことについてより細かくもは本稿の後の段で【聖書(の一部の下り)と911の事件にあって具現化していた一部特性の「多重的」接続性】との観点で折に触れもして漸次解説を加えもしていくが、ここでの訴求については一区切りをつけることとする — 。

上もてここ本セクションで指摘すべきととらえたことはあらかじめ指摘したつもりだが、**補説4**(と振っての本セクション)における締めくくりとしていばくかためにしての話、そう、

[【主筋より見ての脇に逸れての話】にして【問題となることとの確たる関連性の有無との式では印象論としてのきらいが強いか、といった話】](要するに「行き過ぎもしての話」)

に(あともう少し)筆を割いておくこととする。

さて、脇に逸れての行き過ぎのきらいある話、だが、なさぬよりはなした方がいいかと手前がとらえていることとして取り上げるところとして、まずもって

[デルポイの占いの巫女シュビラと似たりよつたりの存在、デルポイの巫女ピューティア(蛇の腐乱ガスを吸ってトリップし、その状況で占いをこととするといった存在)が[ブラックホール生成の予測に目立って利用されるプログラム]にその名前を流用されている]

とのことを取り上げておくこととする — それ単体でなせば、「こじつけがましきこと限りなし」の話となるようなことなのだが、本稿の従前内容と複合顧慮すれば、問題と「なりうる」(すなわち、本稿にて呈示に努めてきたものら、[山とある明確化した危険な兆候を示す材料ら]と同文のもの「たりうる」)とのことにまつわる話をなす — 。

具体的には

[高エネルギー物理学分野にあっての粒子衝突のありようを予測・シミュレートに利用される

プログラムとして Pythia というものが 一 学術分野でよく使われる FORTRUN というプログラム言語 (の 77 年規格版) でかつて書かれ、最近では C プラプラと略称されるプログラム言語にて書かれているとのプログラムとして一 存在している]

とのことを取り上げることとする (プログラムの Pythia については筆者が加速器のブラックホール生成問題のことを英文論稿を読みあさりながらも多方面から分析していくなかでよく名前を目にしたもの「とも」なる)。

(Pythia という名称が振られてのプログラムが高エネルギー物理学分野にての粒子衝突挙動の分析に利用されていることの出典として)

ここではコーネル大の運営する論稿公開サーバー arXiv にて公開されている (タイトルを検索エンジンに入力し誰でも捕捉・ダウンロードできる) 2012 年初出の、

Warped Extra Dimensions in the Randall-Sundrum Model and a Simple Implementation in Pythia 8 『ランドール・サンドラム・モデルにあつてのワープを見ての余剰次元理論および Pythia8 によるシンプルな解釈』

と題されての論稿より極々端的に以下のような文言を引用してみる。

(: 尚、上の論稿タイトルにあつては [ランドール・サンドラム・モデル] という名称が見てとれるが、頭文字より [RS モデル] とも呼び慣わされているとの同モデル、そちらを提唱したりサ・ランドールは [カリスマ物理学者] の類として [ブラックホール人為生成に関わる論拠を呈示してきた人物] ともなり、また、と同時に、上の論稿表題に認められる (リサ・ランドール由来の) ランドール・サンドラム・モデルからして [ブラックホール人為生成問題のありように関わっているモデル] となっている。そのことに関しては、(筆者含めて門外漢でも、いや、理系的素養などない人間にも分かるようなかたちで)、本稿にあつての **出典 (Source) 紹介の部 76 (6)** および **出典 (Source) 紹介の部 76 (7)** を包摂する解説部で解説しているところとなる —— [何故、そうした解説をわざわざなしているか] だが、については、[誰でも分かるうとの欺瞞の構造] (衆を欺き結果的に衆を滅尽に追い込みかねないが如き欺瞞の構造) が自分の目先・鼻先のことしか見ていない節が如実にあるとの物理学者ら、だが、世間一般ではやれカリスマだ、やれ天才だ、などと担ぎ挙げられているとの物理学者らの実験動向に関する申しようから「容易に」示せるようになってきているとの欺瞞の構造を「厳密に」指し示したいとの意図があつたからである ——)。

(直下、上論稿 Warped Extra Dimensions in the Randall-Sundrum Model and a Simple Implementation in Pythia 8 にあつての 17 頁、3.1 PYTHIA 8 と振られての節よりの引用をなすとして)

Pythia 8 is a high-energy Monte Carlo event generator, **capable of generating the complete event of high-energy particle collisions including the normally complex final states, with large multiplicities of hadrons, leptons, photons and neutrinos.** (訳として) 「Pythia (のバージョン 8) は [高エネルギー領域にあつてのモンテ・カルロ法] (訳注: モンテ・カルロ法とは一言で述べれば、[数値計算を乱数を利用して行う法式] のことを指すとされる) に則つてのイベント再現プログラムとなり、**ハドロン・レプトン・光子・ニュートリノらの大概の複合的組み合わせにあつての通例、複雑なる (衝突時) 最終段階を含めての高エネルギー粒子衝突イベントを完璧に再現することができる**とのものとなる」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

続いて、よリモって確認しやすいとの媒体であるウィキペディアよりの引用をなしておく。

※【(再度もつて
しての)外挿表記
としまして】:こ
でのそのように
本稿では「頻繁
に」文字色と背
景色を変えての
【出典紹介部】呈
示のための表記
をなしています。
本稿全体の指し
示し内容の重大
性を顧慮して【後
追い可能な典
拠】の細部に至る
までの呈示からし
て必須事項ととら
えているからでは
ありますが、無論
にして、後追い
「可能」であるだ
けではなく後追い
「容易」である必
要もあるとの認識
が書き手この身
にはございます。
にまつて後
追い「容易」性
の方をもちます方
式、すなわち、
【都度、即応的に
すべての出典紹
介部の内容を即
時確認するため
の方式】を本稿
にあつての冒頭
p.2 で細かく紹介
しておりますので
「頻繁に本稿の
典拠内容の確認
をなす必要」を
感じておられると
の方々におかれ
ましてはそちら本
稿 p.2 で案内さ
せていただいで
おります方式を採
択いただければ
と考えます (典
拠内容確認を容
易・即応的になす
とのその紹介方
式とは本稿を収
めた PDF 文書を
別名保存で二
ファイル用意し、
うち、片方を閲覧
用、もう片方を
(巻末数ページの
出典紹介部一覽
表記部「だけ」を
印刷して役立て
つづもの) 出典確
認用の電子文書
として活用いた
だくとの方式とな
ります)

(直下、英文 Wikipedia[PYTHIA]項目にあつての現行記載、その冒頭部一文よりの引用をなすとして)

PYTHIA is a computer simulation program for particle collisions at very high energies (see event (particle physics)) **in particle accelerators.**

「PYTHIA は**粒子加速器らにあつての**超高エネルギー状態の粒子衝突 —([イベント(素粒子物理学)]項目を参照のこと) — のためのコンピューター・シミュレーション・プログラムである」

(引用部はここまでとする)

以上のように、

[**粒子加速器を用いての実験での高エネルギー状態におけるハドロン・レプトン・光子・ニュートリノらの衝突現象をシミュレートするものである**]

とのPYTHIAというものについては、(本稿にての**出典(Source)紹介の部 71**でも基本的なこととして言及しているように超高エネルギー状態での粒子衝突状況の中でブラックホール生成を見うるとされることもあつてか)、ありうべきとされるブラックホール生成のシミュレーション「にも」関わっているプログラムともなる。

それについては大学人の論稿配布サーバーたる arXiv にて公開されている、

CHARYBDIS: A Black Hole Event Generator 『CHARYBDIS:ブラックホール・イベント・ジェネレーター』

という論稿 (カリュプティス —トロイアを木製の馬で滅ぼしたとの奸計の担い手オデュッセウスらの一行の船旅をオデュッセウス一人を除き全滅とのかたちにて終わらせた渦潮の怪物— の名を冠するブラックホール生成イベント再現ツールについて解説しているとの同論稿は本稿にあつての**出典(Source)紹介の部 46**の部「でも」取り上げているところのものとなる) にあつての摘要の部 —大概の英文科学論文の冒頭部にて設けられている短き論文内容紹介の部— の内容だけを引いておく。

(直下、CHARYBDIS: A Black Hole Event Generator にての冒頭部よりの引用をなすとして)

Abstract: **CHARYBDIS is an event generator which simulates the production and decay of miniature black holes at hadronic colliders as might be possible in certain extra dimension models.** It **interfaces** via the Les Houches accord to general purpose Monte Carlo programs like HERWIG and **PYTHIA** which then perform the parton evolution and hadronization.

(訳として)

「**摘要:CHARYBDIS は特定の余剰次元モデルにあつてありえるものたりうるものとしてのハドロン加速器にあつてのミニ・ブラックホールの生成および崩壊をシミュレートするイベント・ジェネレーターとなる。**同 CHARYBDIS は Les Houches accord (訳注:フランスの Les Houches の地にあつて取り交わされた素粒子物理学関係者らの間の規格標準化にまつわる合意) を通じて HERWIG や **PYTHIA** のような[パートン・エヴォリューションおよびハドロナイゼーション(ハドロン形成プロセス)を再現するとのモンテカルロ法に則つての一般目的に準じてのプログラム]と**互換作用を呈する**とのものである」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

以上引用部を通じて理解いただけることか、とは思うのだが、[PYTHIA]という名称 (すなわち、デルポイの預言をなす蛇の巫女ピューティアを元来は意味しての名詞) は高エネルギー物理学分野での

粒子衝突現象の分析用ツールの名称(ブラックホール生成問題にまつわる分析用ツールと併用されるツールの名称でもある)「とも」なっているのである。

それは不気味なことである。

「[ピューティア](パイソン腐敗ガスを吸って託宣をなしたとされる巫女)近縁存在である[シビュラ]にまつわり退歩的かつ嗜虐的な先覚的描写がなされてきたとの事情がある……」

とのことについて解説してきた本稿ここまでの内容から思料すれば、という意味で不気味なことであると申し述べるのだ。

それにつき、強調しておけば、ここでの話は「それ単体でなせば」陰謀論者や陰謀論的言辞をこととする頭の具合がよろしくないとの[スタイル]を前面に押し出しての向きら —— (そういう向きらは近縁の領域にあって[法則性]や[過てる経験知]というものを造り出すために惨めたらしくも負けるべく用意された存在、闘犬にあってわざと負けるために用意されたアンダー・ドッグ(噛ませ犬)のような存在であると筆者は思っているのだが) —— の申し分と大差ないと受け取られかねないようなものとなる。

単体で述べれば、[類似する関係ないところの命名規則の束] からあまりにもこじつけがましい *far-fetched* と受け取られかねない話をなしている(と自身判じている)がゆえにそうも述べる。

たとえば、である。ブラックホール生成予測に用いられているプログラムの名称ピューティア(Pythia)に関しては[デルポイの託宣をなす巫女]の呼称に由来するわけだが、蛇の巫女ピューティアの言い伝えが伝わる都市デルポイからして(歴史が浅いとのものにまつわることだが)世間で比較的知られたプログラミング用語の名前となっているとすることがあり(*Object Pascal* というプログラミング言語が変名されての *Delphi* 言語というものが最近になって目立ちだしているとのことがある)、預言者との式で行けば、IT 業界ないしその近縁の業界に関わったことがある人間であるのならば、ほぼ全員が名を知っていようとのデータベース管理ツールからして *Oracle* (託宣) といった命名がなされている。

またもってして、

「予測をなすシミュレーション・ツールに予測をなす存在の名(預言者ピューティア)を用いて何の不自然性があるというのか」

との反論も当然になされようし、ピューティアの綴りがフィジックス(物理学)の綴りと *p* と *y* と *i* を共有しているから語呂があわせられたのだ云々といった言い分もまたなされるうるかもしれない。

そういった按配でピューティアの名をブラックホール生成挙動(とされるところ)に近しきところで見出しでも、それ単体だけ見れば、問題になるまいとのことになろうことか、と思う。

だが、ピューティアに関わる事柄らの重篤さ度合い —— [宗教というものの本質を徹底的に愚弄し茶化し、かつ、宗教などというものを押しつけられている人間存在を嘲笑っているとの力学が「際立って」現われているとの意味での重篤さ度合い] でもいい —— および

[次のことら]

から顧慮し、ここでの話をして [言及しないほうがいいような性質のものである] とまでは筆者は決して見ていない (かと言って、それでも [行き過ぎ] の面もあるとのことであるため、無理にでも言及する必要があるものであるとも思っていないのだが、それは置く)。

第一。問題となるところの加速器 LHC の前身に当たる加速器 LEP (同 LEP が LHC の前身となっていることについては本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 36\(2\)](#) などの部にてもそれについてのソースを挙げている) にあって用いられていた検出器「にも」

DELPHI —ピューティアおよびシビュラが託宣をこととしたギリシャ都市— との命名がなされていたとことがある（たとえば、英文ウィキペディア[DELPHI]項目などを参照すれば、DELPHIがLHCの前身のLEPのために用意された検出器、Detector with Lepton, Photon and Hadron Identificationの略称であることが即時確認いただけるであろう）。従って、高エネルギー実験における粒子衝突状況の分析、ひいては、CERNに由来するブラックホール生成挙動を分析するためのソフトウェアとピューティアの関わり合いを（そこからして）「ぽっと出、」の思いつきやただの語呂合わせの問題などと考えないほうがよいとの背景があると受け取れもするとのことがある。

第二。（いきなりともなるが）オリンピック。それは言わずと知れた現代社会にて四年越しに行われる大体育祭である。同オリンピック・イベントについては[クーベルタンが音頭を取って近代にあって具現化させた近代オリンピック]とはまた別に、起源となる同名の体育祭が古代ギリシャにあっても執り行われていたとすることがあり、そちら[古代オリンピック]からして[四年に一度行われる]との慣行が(近代再現版と同じくものものとして)あったとことがある(：和文ウィキペディア[古代オリンピック]項目の冒頭一文より引用するところとして[古代オリンピックは、古代ギリシアのエーリス地方、オリュンピアで4年に1回行われた当時最大級の競技会であり、祭典である]とされているとおりである)。

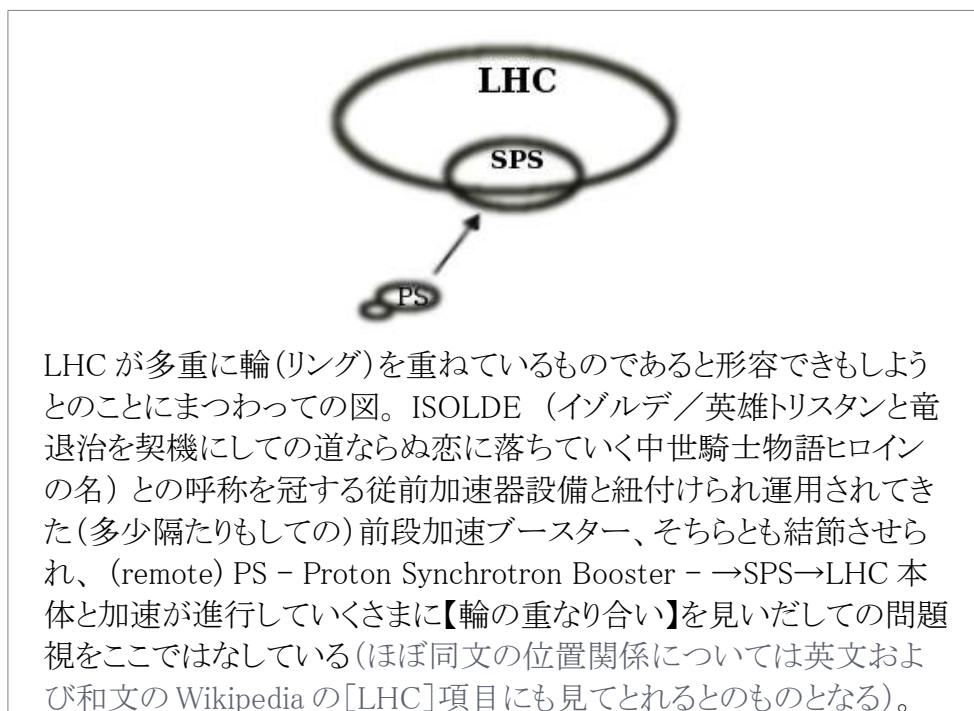
そうして四年に一度、オリンピック競技会が催されていた古代ギリシアには[四年に一度行われる競技大会]が「他にも」存在していた。それが[神託の地デルポイ]で行われていた[ピューティア大祭]となる(：文献的事実を徹底的に煮詰めるべくもの高度な媒体よりの引用をなす必要もないか、と判断するところの基本的なところとして和文ウィキペディア[ピューティア大祭]項目程度のものよりの引用を掻い摘まんでなしておく。(以下、表記ウィキペディア項目冒頭部より[ピューティア大祭]についての引用をなすとして) “ピューティア大祭は古代ギリシアの大祭で、デルポイの聖地に全ギリシアから市民が訪れて開催されたアポローン神の祭儀である。大祭は8年に一度開催される音楽競技を奉納していたが、後に隣接し、重税を課す都市クリッサとの戦争に勝利してからは**体育競技を加え4年に一度の大祭に変更される**。…(中略)…ピューティア祭は、死せる大蛇ピュートーンに対する葬礼競技より始まったともされる。ピュートーンの託宣を担っていた巫女たちは、そのままアポローンの神託を伝える巫女としてその地位に留まり、これがデルポイの神託へと続いて行った” (引用部はここまでとする))。

さて、古代にあっては
[オリンピック大祭]
と

[ピューティア大祭 —高エネルギー衝突実験のシュミレーション・プログラムにその名を受け継がれている蛇の巫女ピューティアの名を冠する競技大会—]
が四年に一度行われる大体育祭として似たりよったりのものとして存在していたわけだが、その似たもの同士にあつてのうち、近代以後、クーベルタンによって復活を見たオリンピックの方については(言わずと知れたことだが)[五輪]を紋章としているとことがある。

他面、DELPHI(ピューティアが占いをなした都市の名)を検出器装置名とするLEPが発展・拡張を見て構築されたLHC加速器に関しても —それだけ述べれば、無論、ただただこじつけがかった話をなしていると見られても仕方なからうか、ともいったところながらも申し述べるが— [複数の輪が重なった形態](正確には[前段加速器]と[本筋の加速器]が重なったような形態)が見てとれる(例えば、身近なところでは和文ウィキペディア[大型ハドロン衝突型加速器]項目にて現行、(以下引用をなすとして) “加速手順 陽子イオン源からスタートし、陽子イオンを加速する線形加速器、そして陽子シンクロトロンへ陽子ビームを注入するための蓄積源としての陽子シンクロトロンブースター、陽子シンクロトロンブースターで加速された陽子ビームを、更に加速するための Super Proton Synchrotron (SPS)、SPSで蓄積され、バンチと呼ばれる状態になった陽子ビームをLHC

本体へ注入し、最終加速を行う。衝突点での陽子衝突のイベントは、1秒間に800万回に達する”（ここまでを引用部とする）と記載されているとのところが同じくものことの言及部となる。[前段加速器]（直近ウィキペディアなどからの引用部では陽子シンクロトロンブースター）に投入された陽子ビームが別の輪としてのSPSに受け渡され、それが本体たる輪に受け渡されるとのビーム加速のための手順がとられている、そうしたところとしていくつもの輪 —それぞれの円形加速器の輪— が重ねられているとのことがあるのである）。



直近までの印象論にすらならぬとの話の展開から一歩進み、そういう輪の重なり合いに見る皮相的なアナロジー（類似性）ですら [できすぎている] ようにとれてしまうところとして、[ピューティア大祭]と似たようなギリシャにあつての古代オリンピックが近代に復活してのその体育祭 —LHC 実験がそうであるように国際的な催し— にあつての五輪マークに伴う「相応の」特性が問題になると見えるとのことがある。につき、[五輪]には[自然界の元素を模したもの]であるとの話が — 一定見として確立したものではないようなのだが — 伴つてもいる（：たとえば、現在の和文ウィキペディア[オリンピック]項目には（そこよりの「現行にての」記述内容を引用するところとして）“近代オリンピックの象徴でもある五輪のマーク（オリンピックシンボル）は、クーベルタン男爵が考案し、世界5大陸（青：オセアニア、黄：アジア、黒：アフリカ、緑：ヨーロッパ、赤：アメリカ）と五つの自然現象（火の赤・水の青・木の緑・土の黒・砂の黄色）とスポーツの5大鉄則（情熱・水分・体力・技術・栄養）を、原色5色（および単色でも可）と5つの重なり合う輪で表現したものであるとする説が有力である”（引用部はここまでとする）と表記されている — といったふうに五輪の五色を元素論と結びつけるとの観点があるような観点があるとの表記がなされている（ちなみに近代オリンピックの父とされるフランスのクーベルタン個人は[世界語大陸を表象する色柄が五色である]としか述べていなかったと言われもしている）— 。またもつてして述べれば、調べてみればすぐにも分かりもしよところとして、宮本武蔵のかの『五輪書』における五輪という言葉が【密教における五大（五大元素）思想における元素観】を受けての五輪をなしている — 「地」の巻、「水」の巻、「火」の巻、「風」の巻、「空」の巻をなしている — 、あるいは、宮本武蔵著述とされるもの（『五輪書』）の命名背景の根底にあると解されるところとして供養のための日本の五輪塔の如き史的構造物が【ヴァーストゥ・シャーストゥ】とい

う印度古代の思考体系の五大元素論を踏襲しているものであるとされるように【五輪】とは史的に見て【元素論】と濃厚に結びつく言葉「でも」ある)。

ここで述べるが、五輪と結びつくとの側面を帯びた古典的元素論にまつわる元素論と接合するところの四大元素 一火・水・土・気一 に基づいて儀式的殺害行為が行われていくという筋立てを有している著名フィクションが 2000 年初出の小説および映画の『天使と悪魔』という作品となりもし、同作『天使と悪魔』については

[ローマ・カトリックの枢機卿らが四大元素儀式殺人の具とされるとの筋立て]

と同時に

[CERN 加速器 LHC 一五輪ではないが多重的に環が重なっていると述べられるありようを呈しての加速器 LHC— にて生成された反物質がヴァチカン破壊に使われるとの筋立て]

が双方結びつけられながら具現化を見ているとのことがある(本稿の補説 2 の部と銘打つての部でも解説していたことである)。

そうもして [元素論(五輪とも結びつくと解釈される元素論)に依拠しての儀式殺人] および [CERN から強奪された反物質の破壊兵器への転用] が「どうしてなのか」結びつけられているとの作品が『天使と悪魔』という小説作品 (2000 年初出) なのだが、同作に関しては以下、振り返って申し述べるようなことが伴っていること、(本稿の先立っての段 一現行、補説 4 の部にての話をなしているわけだが、対しての補説 2 の部一 で典拠を委曲尽くして呈示しながら) 説明してきたとの経緯がある。

(長大なるものとなっている本稿にての先の段に典拠・委細を譲つての振り返つての話として)

[(小説『天使と悪魔』の内容と関わるころの話として) ヴァチカンと呼ばれるに至った地を本拠に定めてきたローマ教会に関しては **「ローマ教会は【天国の扉】および【([天国の扉]に対応する)[鍵]】と結びつく存在である」**

との申しようが(聖書に見られる初代教皇と目されての使徒ペテロに対する天国への鍵の付与のエピソードにまつわる記述内容から「一般論として」引き合いに出されるとの存在「とも」なり、また同時に、同ヴァチカンに本拠を定めての同じくものローマ教会については

[地獄を蓋として封印をなす存在]

である「とも」定置されているとのことがある(聖書のマタイ福音書 16 章 18 節から 19 節(Matthew 16:18-19)の記述に拠りもしてそういう解釈がなされているとのことがある)。

小説『天使と悪魔』という作品はそのように [天国への通用門] [天国への鍵] と同時に [地獄への通用門への封印] とともに結びつけられての解釈が歴年なされきたローマ教会本拠地ヴァチカンのことに悪魔的・嗜虐的寓意でもって言及している節がある作品である。

どうということかと述べると、**[ヴァチカンの生死両界の垣根たる扉を【門の神ヤヌス】に開放させる]** との寓意が CERN 反物質との兼ね合いで多層的に、かつ、悪魔的・嗜虐的に「普通に読む限りは」気づけないとの式で同作『天使と悪魔』には込められている節がある。

その点、意味深く悪質であるととれるところとして **【明示的な式】**ではなく普通に同フィクションに接するだけではまず気づけないような**【隠**

具体的には本 PDF 文書に先立つところの本稿従前セクション、巻(vol.2)と区分付けての PDF 文書の p.388 から p.408 に典拠を譲つてのこととなる。

喩的な式】で、そう、「**ヴァチカンが都市[ジェノヴァ]**(**[門の神ヤヌス神]**に起源として結びつくとのイタリア都市ジェノア)・都市**[ジュネーブ]**(CERNのスイスにての本拠地)と地図上にて一直線に並ぶ場である」との何を何ら書き記さないとの式で、そして、**[ヴァチカンと地図上で一直線に存在する都市ジェノバや都市ジュネーブからして【都市紋章】や【地誌】といった側面で[門][扉][鍵]の寓意と結びつく]**とのことについてもこれまた何ら書き記さないとの式で同作『天使と悪魔』は**[門の開放と結びつけられての CERN 由来の物質によるヴァチカン灰燼化の比喩]**が多重的に用いられている風があるとのことがある。**[ジュネーブ]**(スイスにての CERN 所在地)及び**[ジェノヴァ]**(英文綴りでは Genoa だがイタリア語綴りでは Genova でスイスの英文綴り Geneva と非常に近いイタリアの都市)と地図上で一直線に並ぶ都市**[ヴァチカン]**をして**【ヤヌスという名が与えられた劇中悪役(門の神から名前が振られての劇中悪役/作中何ら言及されないものの都市ジェノバと結びつく存在)の標的】****【ジュネーブに在する CERN 由来の反物質を用いてヤヌスによって灰燼に帰さしめるための標的】**であるようにわざと設定付けている作品として『天使と悪魔』にはそういう臭いが付きまとうとのことが「ある」のである(については**【地理的特質】**や**【特定都市の紋章形態】**や**【特定都市の地誌】**にまつわる複合的な説明を**【理解を求めるためのもの】**としてなす必要があるとの性質の話ともなるので、実際に筆者は本稿にての先行する段で図像を多用しての式で**【地理的特質】**や**【特定都市の紋章形態】**や**【特定都市の地誌】**を顧慮に入れた上での解説(兼典拠紹介)を講じている。

かてて加えて(より性質が悪いことに)、『天使と悪魔』に関しては**枢機卿ら、語源を辿れば、[蝶番]**(ちょうつがい、ドア・扉の開閉を可能とするヒンジ、それが暴力的に打ち壊されれば、扉・ドアは開け放しとの方向性で倒れるしかないとの扉の開閉機構をなす留め金)ともなるとの**[カーディナル]らが儀式的に【元素論】に則り殺されていくとの内容を有した作品ともなっていることも同様の【寓意】の問題に関わると解されるようになっていく**(:表記のことについても先行する段で委細を尽くしての解説を講じている)

[**(上記のような特性を伴った作品であると示せるようになっていくとの)『天使と悪魔』という作品に関しては【911の事前言及を複線的になしているとの70年代の「他の」小説作品】と共通のモチーフ・属性を伴っているとのことを**—これまた先行する段で細かくもの解説をなし**ているところとして**—**指摘出来るようになっていく**(そもそも911の事件が起こることの事前言及をなしているが如く作品が存在している、**[文献的事実]**にのみ基づきそうであると指し示せるかたちにて存在していること自体が本来的には異常無比なることなのだが、しかし、そうした摘示がなせてしまうことは動かない—**そちら委細については本稿にての****出典(Source)紹介の部 37**から**出典(Source)紹介の部 37-5**

ここに表記の先行する段とは巻(vol.2)と区分付けてのPDF文書—(現行はvol.3と振っての文書の中での表記をなししているのに対してvol.2と振っての文書)—のp.392からp.405が該当箇所となる。

を包摂する解説部などにて詳述しているところとなる—)。

また、そちら先覚的言及作品と共通のモチーフに関わるところで『天使と悪魔』という作品が【元素論の崩壊】【ペンタゴンの崩壊】と通ずるものを持ち出しているとのこと「も」が指摘できるようになっているとのことがありもする—そうしたことがあるがゆえに『天使と悪魔』の執筆者ダン・ブラウンの【属人的寓意付け】の類では話が済まなくなる—]

上のような特性と共にある小説作品『天使と悪魔』の特性、繰り返しても、

[【ローマ・カトリック枢機卿らが四大元素論に基づいての見立て殺人の対象とされるとの筋立て】と同時に【CERN 加速器にて生成された反物質がヴェチカン破壊に使われるとの筋立て】が具現化を見ているとの特性]

から【元素論】(予言・神託の都市デルフィにおける古代にてのピューティア大祭との近似性が往古にあってはあったとのオリンピック、そのオリンピックの加速器 LHC よろしく輪を重ねての五輪がそれにまつわるものであるとの言いようもがなされもしている【元素論】)のことは CERN および PYTHIA ピューティアとのツールを用いている加速実験との絡みでも軽んじられない。 そうも述べるのである。

以上、段階的に言及してきたとの関係性、すなわち、

[加速器 LHC (及びその前身の LEP) にあっての [デルポイ] 及び [ピューティア] と(極々部分的にながら)命名規則として結びつく側面] ⇔ [古代ギリシャの [デルポイ] にて実施の [ピューティア] 大祭] ⇔ [オリンピックとの質的近似性(四年に一回の古代ギリシャの都市間大体育祭としての質的近似性)] ⇔ [オリンピック] ⇔ [LHC と同様、輪を重ねる五輪の使用] ⇔ [五大元素を五輪と結びつける観点の介在] ⇔ [五大元素⇔(欧州)元素論⇔四大元素] ⇔ [四大元素崩壊をモチーフとした『天使と悪魔』における(多重的に環をなす)CERN 加速器 LHC に関わる破滅の多層的寓意およびその他、奇怪なる予言的側面]

との関係性から [計算づくのやりようの「片鱗」] が感じさせられもする。

以上のことより

「ピューティアと加速器実験およびブラックホール生成可能性ある挙動が結びつけられている」

ことを取り上げることは(馬鹿噺をなすが如くの)全くの無為ではないか、ともとらえているのである(だが、了見が狭いと人間に対してなすような話ではないことは(先に「印象論がかった行き過ぎた話とはなるが、」と断っているように)論を俟たないところではあるとは見ている)。

(これにて長くはなったが、[ピューティアとの名称と加速器実験およびブラックホール生成可能性ある挙動との関係性]について取り扱っての二点目の話を終える)

直上の部までにてブラックホール生成をなしうるとの可能性論まで取り沙汰されだした加速器実験にあってデルポイの蛇巫ピューティアの名前が振られてのコンピューター・プログラムが実験結果のシュミレート(ブラックホール生成にも相通ずる領域での結果シュミレート)に用いられているとのことについて

で脇に逸れての話をしたところで、である。最後に、

[従前内容の [整理] を兼ねての話]

をなすこととし、それをなし終えた段階で（ここまでの内容をすべて包摂しての）補説4と振っての段に区切りを付けたいと思う。

さて、今や締めくくりとなる話をなさんとしているとのここ補説4の部 — 導入部よりピューティア(デルポイの蛇の巫女)と結びつく新約聖書『使徒行伝』に見る[占いの霊](大蛇パイソンの霊)のことを意図的に持ち出しているとの部、そして、それより911の予見的言及事物らに伴う共通の属性について仔細に解説を講じようと試みてきたとの部— にあっては

[ワールド・トレード・センターにての悲劇のことを(隠然としたやりようながら) 指し示していた作品]

かつ

[時限爆破(によるツインタワー倒壊)の寓意と接合する作品]

かつ

[フリーメーソン象徴主義と深甚なる側面で多重的に接合している作品]

との三つの条件を満たしているとの作品「ら」が際立って存在していると指摘し、国外・国内の特定作品らを挙げ、それらにあって[何が問題になるのか]の事細かなる解説をなしてきた（:うち、『ファイト・クラブ』という作品に関してはそれ単体だけで微に入っただけの解説に15万字超の文量を割いてきた — ワードプロソフトの文字カウント機能を用いて見るところ、積算でそれだけの文字数を割いている—）。

そうした作品らに関して、「どうしてそのようなことがあるのか」、

[占いの霊(使徒行伝に見るパイソン)の業が如くもの]

がいかにして具現化を見ているのかとのことにも関わるところとして

[フリーメーソンに用いられているシンボリズムがどのようにして【人類の歴史】にて具現化を見てきたか]

の解説をこれよりなしておくこととする。

(尚、本稿の冒頭 — vol.1と振ってのPDF文書にあってのそもそもの開巻劈頭の辞の部— から断っていることを再言しておくが、次のこと、申し述べておく。

⇒ (restating) **Although this long paper deals with [foretelling problems] which are related with masonic symbolic system deeply , I don't cling to point of view that such organizations as Freemasonry (or "legendary" Illuminati) are chief conspirators behind significant incidents. As an author of this evidence-based paper, I never intend to maintain "self-belief-system" avoiding the sterile land of conspiracy theorists who persist in conspiracy "theories" such as [NWO conspiracy theory] , [Illuminati (that organisation can't be identified exactly) conspiracy theory] or [(fictional?)power obsessed human elite circle conspiracy theory] .**

「長くもなるとの本稿にあって本稿筆者は

[フリーメーソンのシンボル体系と濃厚に接合する「前言」事物]

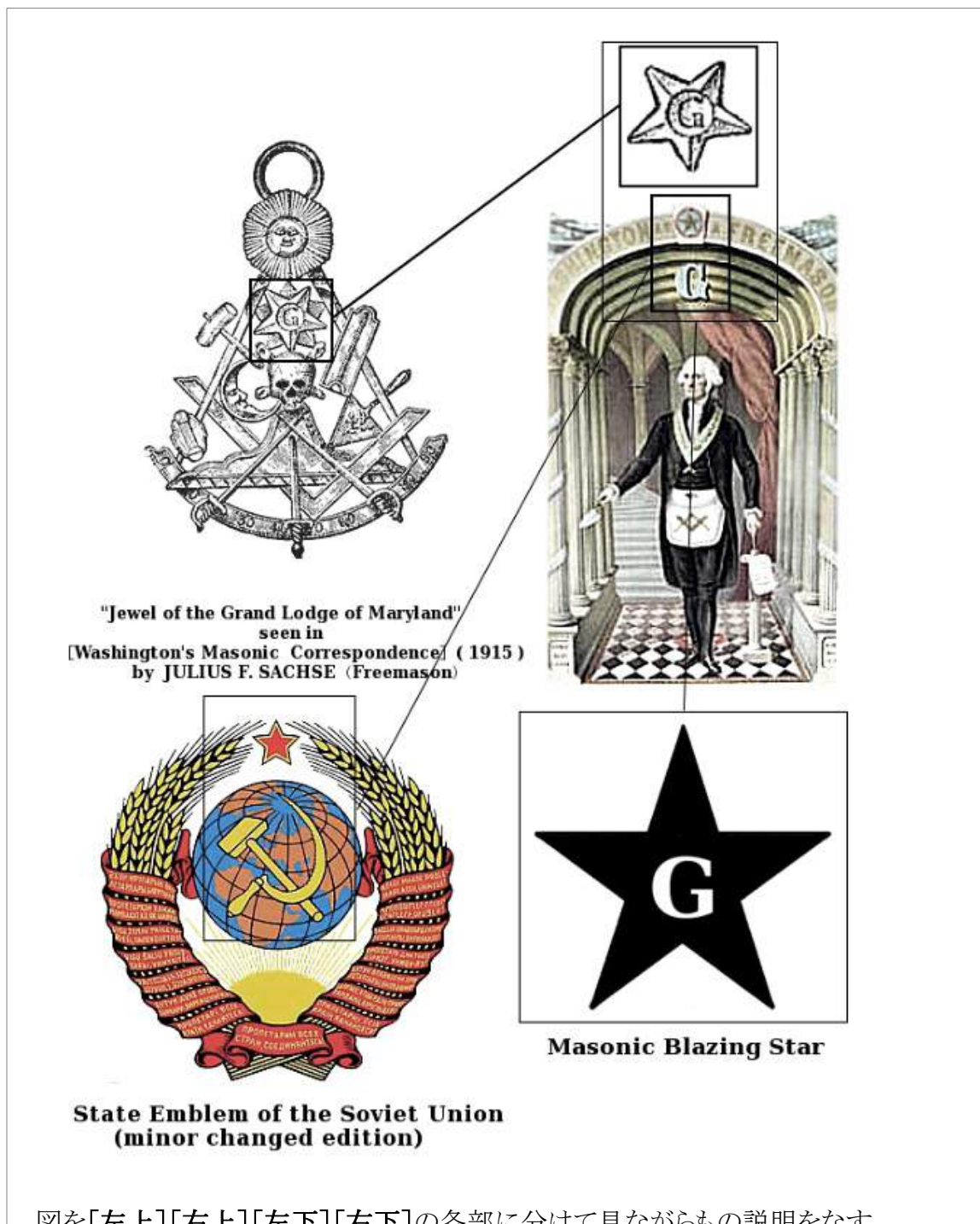
らがあまりにも露骨に多数存在しているとの問題についても取り扱うが(具体的事例を多数挙げながらも取り扱うが)、だが、だからと言って、(本稿それ自体にて)フリーメーソンのような組織体が重要な出来事の背後背面に控えるフィクサーとしての陰謀団であるとの見立てを押し売りしたいわけではない。

フリーメーソンのシンボリズムを異常異様なることに流用する力学があるとは具体的事実を挙げ連ねて指摘ですが、[チェス盤上の駒]が陰謀の立役者であるなどとは考えていないし、

そのようなことを目立って訴求するつもりもない。

またもってして筆者は陰謀論者よろしく[新世界秩序陰謀論][イルミナティ(という実体不明瞭なる組織体)に関連する陰謀論][「人間の」権力それ自体に固執するエリート・サークル(架空存在たりうる)による陰謀論]ら陰謀論の不毛なる領域に固執するような人間でもない — 尚、筆者が[陰謀論者にとっての金城湯池(たる陰謀論の領域)]をして the sterile land【不毛なる地】と殊更に表しているのは現時、目につきやすくなっているところの陰謀論 Conspiracy Theories あるいはその撒布のための媒体らにあっての相応の特性を捕捉している、「【分断】と【不信】の根を人間社会に広める」(divide and rule「分断して統治(無力化)する」との観点で disbelief[不信]の根を広める)ためか、でなければ、「稚拙・陳腐化させて問題となるところを矮小化する」ためであろうと露骨に判じられる式で【詐欺・捏造で満ち満ちた(filled with frauds and forgeries)劣化情報】(たとえば子供騙しの幼稚な加工写真や加工映像)を撒布しているとの目立ってのありようを捕捉するに至っているからである — 」)

(直上にて振り返っての断り書きをなしたところで) 下の図解部をまずもってご覧頂きたい。



図を「左上」「右上」「左下」「右下」の各部に分けて見ながらもの説明をなす。

前掲図 [左上] は Project Gutenberg のサイトにて全文公開されている —すなわち、オンライン上より誰でも裏取りなせるとのかたちとなっている— とのジョージ・ワシントンのフリーメーソンとしての書簡に対する分析をなしている著作、

Washington's Masonic Correspondence (1915)

にて掲載の図像となる —[ブレイジング・スター]というフリーメーソン・シンボリズムのありようにまつわり本稿の先の段でも似姿呈示した[メーランド・グランド・ロッジの装身具(ジュエル)] (フリーメーソンリーの頻用象徴である髑髏がデザインに組み込まれての装身具) の図となる—。

対して、前掲図 [右上] は広く流通しているワシントンのメーソンとしての正装時の似姿を描いた肖像画となる —同画も本稿の先の段でその呈示をなしていたとの図となる—。

以上、前掲図 [左上] のフリーメーソン装身具ありようおよび上掲図 [右上] のエプロン姿のワシントンのフリーメーソン似姿の図にての構図をあわせて見ると前掲図 [右下] の[Gの字が五芒星の中に刻まれてのブレイジング・スター(という名のメーソン・シンボリズム)の構図]もが導出されるようになっていてと申し述べられるわけであるが(詰まるところ、フリーメーソンのシンボル体系の問題としてなるべくしてそうもなっている)、同じくもの接合性は前掲図 [左下] にて呈示の国家的紋章との関係性を —視覚的に「露骨に」といった按配で— 想起させるものともなる (: 図をきちんとご覧いただければお分かりいただけますが、左下の紋章を鏡像反転させれば、メーソンがときにシンボルとして用いもする [五芒星とGの字の組み合わせ] が浮かび上がってくるように「できあがっている」)。 そうもしたありようが見てとれる [左下] の図に見る国章は幾度となくマイナー・チェンジを経はしたものの、おおよその形態では似姿にほとんど変化がなかったとの [ソビエト社会主義共和国連邦の国章] を挙げたものである(和文 Wikipedia にあっても [ソビエト連邦の国章] 項目に、英文 Wikipedia にあっては [State Emblem of the Soviet Union] 項目に細かいマイナーチェンジの過程も含めてそのソビエト社会主義共和国連邦国章の似姿が掲載されているところとなる)。

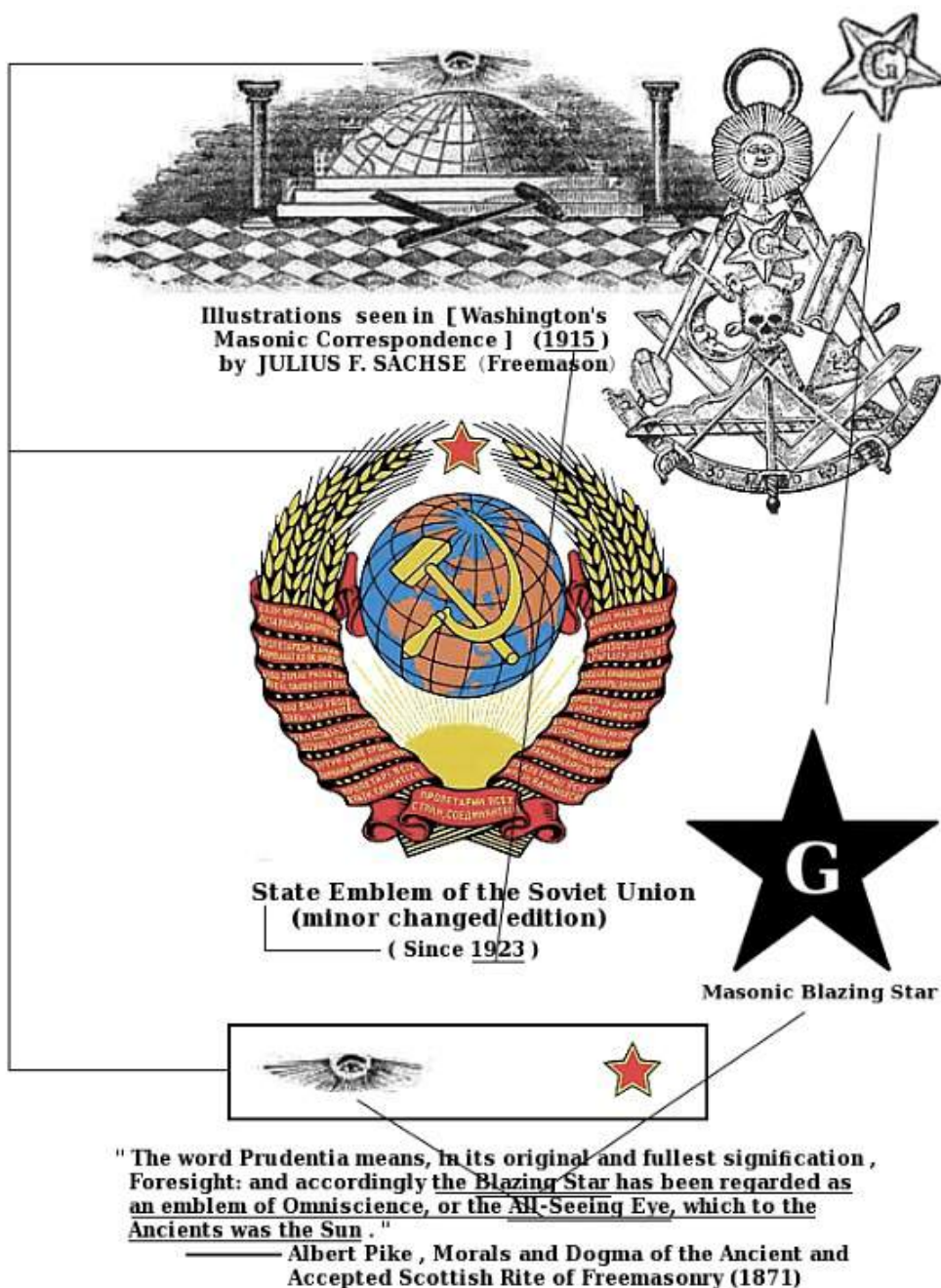
さて、ここまできたところで指摘するが、ソヴィエト社会主義共和国の国章の草案ができあがったのは 1923 年であるとされている (和文ウィキペディア [ソビエト連邦の国章] 項目の記載を引いておく。(以下、引用なすところとして) “最初の国章案は 1923 年 7 月 6 日、ソビエト連邦最高会議中央執行委員会の第二回会合でソビエト連邦の国旗とともに了承された。同年 9 月 22 日に最終案が作成され、憲法の条項に載せるためさらに手直しされた。この案は翌 1924 年に成立した憲法では次のようになっている。ソビエト連邦の国家のエンブレムは、地球の上に鎌と槌が描かれることで構成される。地球は下にある黄色い太陽の光線の中に描かれ小麦の穂で囲まれ、その穂は 6 つの言語 - ロシア語、ウクライナ語、ベラルーシ語、グルジア語、アルメニア語、トルコ・タタール語 - で、「万国の労働者団結せよ!」と書かれた赤いリボンで束ねられている。エンブレムの頂点には、赤い五芒星が配される” (引用部はここまでとする))。

対して、Project Gutenberg のサイトにて公開されている上掲図 [左上] の [五芒星に G を刻む装身具構図] の出所、Washington's Masonic Correspondence (『ワシントンのメーソンとしての私信』とでも訳すべきか) という著作が世に出たのは 1915 年であり(より具体的には Julius Sachse という 20 世紀初頭のフィラデルフィアのメーソンの手になる著作として明示されたながら世に出たのは 1915 年であり)、ソ連国章の制定は同著の刊行に遅れること、8 年を経ての 1923 年のこととなる。何が述べたいのかと言えば、「であるから、」ソ連の国章をわざと意識させるような贗造物がメーソンの著作によって挙げられたとの可能性は —順序的に— ほぼないとのことになるということである(その逆のことはあってもメーソンによる模倣とのことはないであろうということである —Project Gutenberg のサイトにての書籍刊行年表記が現実とは違う記載とされているとのことがほぼ考えられないとのことと同義の話として、である—)。

フリーメーソンリーの目立っての象徴としてのブレイジング・スター紋様が「五芒星形状を取り」「中央に G の字が刻まれている」ものとして定例的に描画されることがあるとの点については本書 (vol.3 と振っての PDF 版文書) にあつての p.513 にて Mackey's Encyclopedia of Freemasonry (19 世紀初版刊行 / 著名な学識者系フリーメーソンであったアルバート・マッキーの手になる著作で現行はオンライン上より全文入手可能) よりの原文引用をなすことで典拠紹介していることである。

以上表記のこと、容易に裏取りなせるようになっていたとの時期的側面に着目しての相似形の話にはさらに続きがある。

次いで、下の図像らをご覧頂きたい。



上掲図については上段・中段・下段に分けての解説を講ずる。

上の段にて呈示の図らについては最前の図解部にて呈示の図もそこよりの抜粋をなしたところの、**Washington's Masonic Correspondence (1915)**

との書（繰り返すも Project Gutenberg のサイトより全文ダウンロード可能な合衆国初代大統領ワシントンのフリーメーソンとしての私信の分析をメーソンがなしているとの著作）にて掲載の「他の」フリーメーソン画となる（：先掲図解部にあつての上の段の部の左側にて挙げているのも右側にて挙げているのも同じもの同著にて掲載の図像となる —— 疑わしきにおかれては同著内容を掲載している HTML 化文書を Project Gutenberg のサイトよりダウンロードなどして内容ご確認いただきたい(グーグル検索エンジンなどにて [Project Gutenberg, Washington's Masonic Correspondence] などと入力すれば、労せず、そちらに行き着けることか、と思う) ——)。

対して、中段の図については先に挙げたところのソ連の国章の再掲となる。

下段については —それこそがこれよりの話をなすにあたって肝要なところであると述べたいところとして—

[**図解部の上の段にて呈示の**メゾンに由来する画の [一つ目の部分] と (**図解部の中段にての呈示の**) [ソ連国章の五芒星の部] が視覚的のみならず意味的・記録的に「対応している」(対応させられている) とのことを示すべくもの部]

となる。

その点、上掲図解部の下段にあつて

[**上掲図の上の段にて呈示のメゾンに由来する画の一つ目の部分と中段にてのソ連国章の五芒星の部が対応していることを示すべくもの部**]

とのことを直上にて言及したが、それはこういうことである。

(本稿にての **出典(Source) 紹介の部 105** でも引用なししていたところのアルバート・パイク(極めて有名な 19 世紀の有力メゾン)の手になる著作 *Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry*『古代より連綿と続く認証されしフリーメーソンのスコットランド位階の徳義と教義』(著名著作として無論、Project Gutenberg より全文ダウンロードできるとの著作でもある)の XXV.KNIGHT OF THE BRAZEN SERPENT の部より一文のみの引用を「再度」なすとして)

The word Prudentia means, in its original and fullest signification, Foresight: and accordingly **the Blazing Star** has been regarded as an emblem of Omniscience, or **the All-Seeing Eye**, which to the Ancients was the Sun.

「プルデンシアとの語はその原義かつ最も充足的な意味合いとして[先見の明]を意味し、それに応ずるところとして[ブレイジング・スター]は全能性、すなわち、古代人にとって太陽であったとの[万物を見通す眼]の象徴と見倣されてきたのである」

(訳を付しての「再度の」引用部はここまでとしておく)

上抜粋部はメゾンにとり、ブレイジング・スターの象徴(本稿の先だつての部でも言及していることだが、[Gの字が刻字された五芒星]として描写されることがフリーメーソンの間にあるとの象徴)が[万物を見通す眼]とも同義たりうるものであることを言及した部となる。



(「図らを実際に見ながらではないと何を述べているのか理解が困難である」との図にまつわる詳解を続けるとして) そうもしたアルバート・パイク著作よりの引用部 —19 世紀著作(正確には 1871 年初出の著作)に認められる、誰でも容易に確認できるとの文献的事実を切り取っての引用部— に認められるところから、上掲図にての上の段の図ら(いいだろうか、「1915 年」初出の著作に認められるメゾンに由来するシンボル画らである)と上掲図にての中段の図(これまたいいだろうか、「1923 年」に初出のソ連の国章である)の内容をも顧慮して[**明らかなる対応関係**]というものがフリーメーソン象徴画とソ連国章の間には(視覚的一致性の問題にとどまらずにもの)「**意味的・記録的ありようとの側面「でも」**」現出していると指摘させるようになっていくと述べたいのである(※)。

(※要点をまとめよう。

第一。 問題となるフリーメーソン象徴画もソ連国章の両者共々が中央に簡略化されてコミカルな似たような地球儀を配している。

第二。 両者共々、地球儀の前面に[槌(つち);ハンマー]を[交差させられての象徴]と

して図像内に配している(メーソンシンボル図にあっては×模様を形成するように交差した槌と定規が描かれ、ソヴィエト国章にあっては[革命]の象徴たるハンマーと鎌が交差して描かれている)。

第三。(殊にアルバート・パイクの書の内容を引いて示したように)[片方図像上部の一つ目](オール・シーイング・アイ)と片方図像上部の[五芒星]が照応する、というより、フリーメーソン象徴体系では[同一物]と見なされるとの背景が伴うものとされているがゆえ(余程メーソンを部外から研究した人間かメーソンのイニシエートぐらいにしかおそらく察しが付かなかったところとして【五芒星】と【一つ目】をして【ブレイジングスター】を介して同一物と看做すとの背景・文献記録が伴っている)がゆえ、「意味的・記録上の」一致性も伴っており、照応関係がいよいよ色濃くなる。

以上、**第一**から**第三**の点らを複合顧慮することで[五芒星の中にGの字を刻む式]と通ずるありようがソ連国章の鏡像反転にて見てとれること、メーソンのブレイジングスターの五芒星の中のGと照応するようなデザインがソ連国章にて採用されている(呈示の図を再度よく出所ともども検証いただきたい次第である)とのことについて【恣意】の問題を見出すことは決して「こじつけ」(ないしは陰謀「論」)にはならない、否、当然の理性的判断であるととれるようになっていく(と述べてもありとあらゆる狂っている、だけではなく、グロテスクなまでに愚劣な紛い物がまるで正気の伝道師のように大手を振るって闊歩しているとの意で「正気と狂気が逆転している」人間世界で理性というもの)がどれほど適正に機能していると言えるかは別として、であるが) —)

以上をもってして単純な視覚的一致性、のみならずもの文献記録から導出出来る意味的一致性を通じてどうした背面のありようが斟酌できる(あるいは斟酌されて当然であるように「演出」されている)とのことについての解説をなした(：そのような一致性の問題は教科書は、諸所の表通りの研究書は — あるいは、そうしたものの供給母体となっている世間的には[識者]で通っているとの大学の教授などの類は、でもいいが — 、決して教えてくれることはないわけではあるも)。

では、共産主義「革命」とは[詐欺]であったのか?フリーメーソン由来の[陰謀]だったのか?

筆者は筆者のリジットな、堅い指摘(揺るぎようがない現実的状况にまつわっての指摘)以外、【事実は変りようがない】との直視を求めつつも(直視しなければ相応の帰結が当然に巡ってくるであろうとの状況理解を求める領分は限られている)、筆者の属人的目分量の問題は斥けてもらっても構わないとの観点の人間である(との趣旨のことを何度も何度も本稿内からして断っている)わけだが、といった中ながらも表記のこと — 共産主義革命もフリーメーソンを用いての劇であった — についての手前目分量(斥けてもらって構わぬとの目分量/セルフ・ビリーフ・システム)に言及すれば、である。紆余曲折を経てこの身、筆者の「現行の」見立てでは半分はほぼ当たりだが、半分は真偽不分明なることとらえている。

その点、人間世界に現出した共産主義体制が結果として[詐欺]であったというのは(「ほぼ当たり」ではなく)完全に当たりであろう。[統制経済]を計算して運営する科学力も、また、資源というリソースもない者達 — 20世紀の人類 — が[合理的なる法の支配]ではなく[むき出しの権力の化け物が暴威奮っての人の支配・組織の支配]でもって統制経済を運営しきれるなどと息巻き、結果、多くの人間を餓死ないし収容所で殺した(他面、下らぬ赤い貴族が君臨することになった)との体制を構築したにすぎぬ「革命」が[詐欺]でなくて何だということの意味、そういう文脈にて当然に詐欺であろうと述べるのである(共産主義を詐欺と断ずる資格が筆者にあるのか、と思われる向きもあるかもしれないが、筆者は大学時代、経済学部属していたとの関係上、マルクス経済学が何たるかを学習していたとのこともあり、『資本論』も無論、読んでいて、その要諦も無論、理解しているつもりではある(強くも断っておくが、筆者は左翼であったことも共産主義者であったことも人生で一度たりとも「ない」わけであるも)。ここ日本にあっては頭の具合がよろしくはないとの[浅ましき狂態]か[ファッション]か([ファッション]全体主義と掛けている)といった按配での[どこぞやら与えられた気風]でもっての軽佻浮薄なる[左翼]気

取りが、あるいは、発展途上国では食うや食わずの仕方なしでの実質強盗のなんちゃって左翼 一略奪に名分を与えるだけに左翼イデオロギーを利用している者ら— が(ドイツ語アルファベットからとつての)ゲー・ヴェー・ゲーダッシュの資本論に見る剰余価値の構図に関する説明さえも理解できていないで共産系左翼の[フリ]をやっているとのこともあると聞き及ぶことがあるが、とにかくもの話として、である)。

だが、現行に至っては筆者は共産主義の背後にフリーメイソンリーという組織の陰謀が「大々的であった」ことを認めているわけでも率先して唱道したいわけでもない(理解力に欠ける人間、あるいは、筆者の過去の分析的言辞 一商業出版が筆者の時間を無駄に費消されたうえで望まぬ流れに進んだためにオンライン公開することにしたとの著作などに見る分析的言辞— のようなものを識り、かつ、それに拘泥しているとの(いたれば、ではあるも)ある種、稀有なる向きには誤解するところか、とも思うのだが)。フリーメイソンを多分に含むものの非メイソンも多分に含まれての[フリーメイソンリーのなる人形らの紐帯]が[組織]として人間の歴史を規定「させられ」てきたとのことは大いに容れるところだが、[重要な、矛盾もすべてひっくるめてのこの世界のありようの構築ユニット]であるとはいえ、フリーメイソンリーが全ての核となっているなどとの陰謀論を唱道しているわけではない(またもって述べておくが、それにつき、筆者は陰謀論者らお得意の話柄に登場を見ている[イルミナティ]という奥の院の組織の存在およびその暗躍の可能性を容れているわけ「でも」ない。フリーメイソンリーのエンタード・アプレンティス位階(徒弟位階)の者らが彼らのイニシエーション(入団儀礼)に際して[目隠し]をさせられて、それを取っ払われて[光]を与えられる(先に典拠呈示していたところとしてそうしたイニシエーションを受けている)ことを識ってかそうではないのか、[イルミナティ]なる存在のことを大仰に宣伝し、それが陰謀の中心にあるなどと「相応の」者達らが 一そのことを直視することを避けては種族に未来などあるはずがないこと、「人間の残骸、影にすぎないものらを大量生産して運営してきたとの人間の世界がこれまでずっと[完全なる偽物の人形劇]の世界であった」ということを[人間による諸悪の根源たる陰謀団]なる存在を前面に押し出して糊塗(こと)、徹底的に隠したいとでもいうのか— [イルミナティ]陰謀論などを唱道していることもあるようだが、筆者は実態的組織としての[イルミナティ]なるものを首肯していない 一陰謀団としての[似たような特定の色]がついたシステムに這いつくばっている奴隷根性濃厚なる(表向きの)富貴権勢の徒よりなるサークルの存在を全否定する気も無いが首肯していない—)。

同じくものことに関しては(実体がどうであったかは大いに議論があるところかとも思うのだが)、共産主義、なかんずく、その中枢たるソ連ではフリーメイソンは排斥の憂き目を見てきたと「される」こともある(※)。

(※目につくところの共産主義とメイソンの関係論について

筆者としては疑念呈示されて当然のところ、open question[開かれた疑問]とされて当然のようなものであろう、と見ているのであるが(社会の基盤をなす階層を念頭に置いての実体なき宣撫工作である可能性もあると見ているのであるが)、ソ連など共産主義圏では一時期フリーメイソンは禁止を見ていたとの物言いがなされている。

たとえば、広くも目に付くところでは英文 Wikipedia[Suppression of Freemasonry] 項目([フリーメイソンに対する抑圧]項目)にあって

“ Freemasonry was outlawed in the Soviet Union during the Communist era and suppressed throughout Central Europe (Hungary and Czechoslovakia). ”「フリーメイソンは共産主義者統治時代にあってのソ連で違法化され、中央ヨーロッパ全般(ハンガリーおよびチェコ)では抑圧されていた」

であるとか、

” Field-Marshal Friedrich Paulus was denounced as a "High-grade Freemason" when he surrendered to the Soviet Union in 1943. ”「フリードリヒ・パウルス陸軍元帥が 1943 年にソ連に降伏した際にソ連当局に高位階のフリーメイソンであると批判された」であるとか、そういう記述がなされていたりもする (:ちなみに「高位フリーメイソンの輩である」とソ連に批判されたなどと表記英文ウィキペディア項目に記載されているドイツ国防軍の陸軍元帥フリードリヒ・パウルスについては計にして軍属・民間あわせ

て一〇〇万人を越える勢いで人間を殺した —スラブ系・ゲルマン系の別を問わずにカウントすればそれだけの人間を殺した— とされるスターリングラード攻防戦([人類史最大級の攻防戦]のうちのひとつ)の末、責任をとらず(自決なせず)に捕虜となり、かつ、捕虜となったほかの独軍兵士約10万人の9割超がのたれ死にを強いられたなかで[ソ連への転向]を表明して優遇され戦後東ドイツで悠々自適な余生を送ったなどと批判されている向きともなっている)。

が、他面、冷戦期、ソ連邦支配下にあったとのポーランドという国は男性人口のかなりの割合が今日、フリーメーソンとなっており、フリーメーソンリーが極めて幅を効かせている —真偽の程は分からぬが、本当だとすると、カルトの信者ばかりになった地域で外部の普通の人間にはまったくもって暮らしづらいつの如く状況が現出している— とのことが比較的巷間に取り沙汰されている国家であったりもする。

以上のようにフリーメーソンが本当に共産主義圏でも冷や飯を喰らわされていたというのであれば、間尺合わぬことがあるのだが、仮に共産主義によるメーソンの圧迫という話が「券面・額面の問題を越えて」部分的に本当でも筆者はなんらおかしいことであるとは思わない —シンボリズム— 一致性問題があってもおかしいことであるとは思わない— 。

本稿にての先の段、**出典(Source)紹介の部 103(3)**を包摂する箇所でも(史的事実の問題として述べられることとして「フリーメーソンの外郭団体(ゲルマン騎士団およびトゥーレ協会)から派生した」とのナチスが政権を取った後であって)ナチスによるフリーメーソンの組織的弾圧の話がよく知られたことになっているとのことを(脇に逸れての話として)紹介していたが、[システムの寵児]たる組織体・紐帯であろうとそれを[ただの使い捨ての道具]として冷酷に切り捨てる力学がこの世界にはある、と筆者もまた当然のこととしてとらえているからである)

以上、付記したような見立てを有している人間として、そう、[人の組織の陰謀]程度のもので物事が説明しとおせるなどとおよそ考えていないし、そのような説明の試行などいまやもってして一顧だにも値しないことであろうと判断している人間として、何故、

[フリーメーソンリー象徴主義と共産主義象徴主義のあまりにもできすぎた連続性]

のことなどを「わざわざもってして」強くも問題視したのか。

その点もってして思い出していただきたいのだが、ここ本段を包摂する**補説 4**の部では

[[占いの霊(使徒行伝に見るパイソン)の業わざ] が如くものがいかにして具現化を見ているのかとのことにも関わるところとして

[フリーメーソンのシンボリズムがいかようにして人間社会にて具現化を見てきたか]の説明をなす]

とのことを事前明示したうでの話をなしてきた(「【講述・講学的表記】をなしてきた」と表記した方が適切かといったレベルでの話をなしてきたと自負している次第でもある)。

同じくものこと — [占いの霊(使徒行伝に見るパイソン)の業] が具現化しての事例— と通ずるところ、よりもって述べれば、911の予見的言及に通ずるところが、

[(上にて図解なししている)メーソン象徴主義と共産主義象徴主義のあまりにもできすぎた連続性]

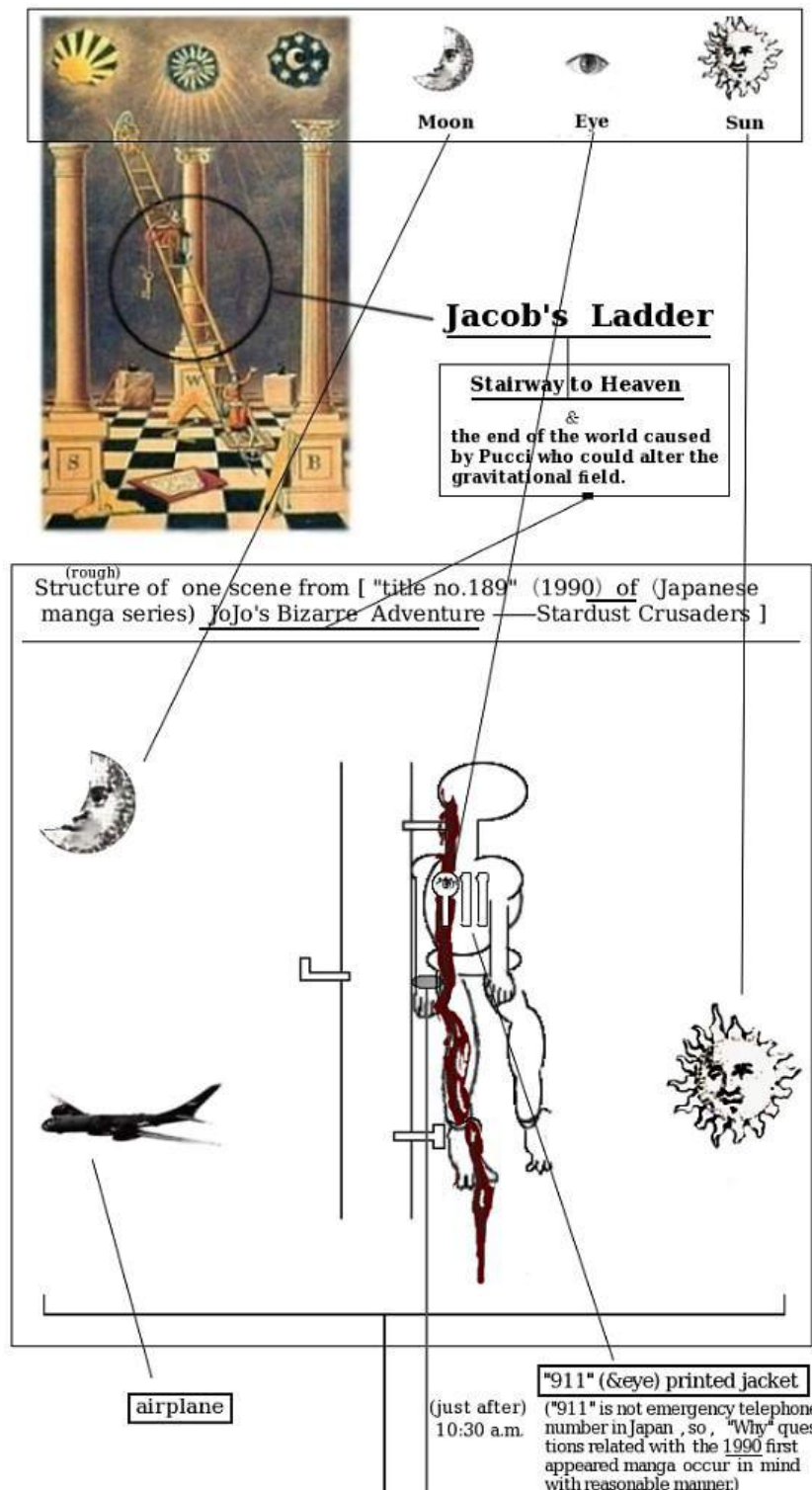
ともなっている(そして、そのことが【過去】だけではなく【未来】の問題にも関わる)、そのように述べられるだけのことが「ある」(からそうしたことをわざわざもって本段にての [ためにしての話] で取り上げた)のである —旧状旧悪(と判じられるところ)をほじくって云々することが目的ではなく、そうしたことが直視せねば、明日はなかるうとのこと、【人間存在の今後ありように関わること】であるとの認識でもってして同じくものことを取り上げている、と強調したい—。

だがしかし、

「[メーソン象徴主義と共産主義象徴主義のあまりにもできすぎた連続性] からして「911の予見的言及」の如きものに通ずることとなっている」(そして、そのことが人間存在の今後に関わると判じられるだけのことがある)

などとひとまとめに述べても、この段階では何を述べているのか理解いただけるようなことではないかと当然に見てもいる。そうも見ているのではあるも、お分かりいただけるように可及的に注意を払っての同じものことにまつわっての解説をこれよりなすこととする。

ここで 一直近にて取り上げたところの【ソ連国章とメーソン・シンボルズムの接合性】にまつわる話をより深めてなすとの方向に向けて— 下の図を挙げる(同図、本稿にてのそれ程、前のことではないとの按配にての先の段にて挙げていたところの図を再度挙げることにしたとのものとなる)。



original scene of above illustration appeared as the [prophetic vision] of the fictional character (named Oingo) through his manga work

Real World Event

The North Tower collapsed at 10:28 a.m.



hanged man's wristwatch time
→ 10:33~34 a.m.

who had referred to 10:30 a.m. before he died.



rotate 180°



以上の再掲図にまつわるどころとして本稿では以下、振り返りまとめもして呈示の事柄らの解説を延々となしてきたとの事前経緯がある。

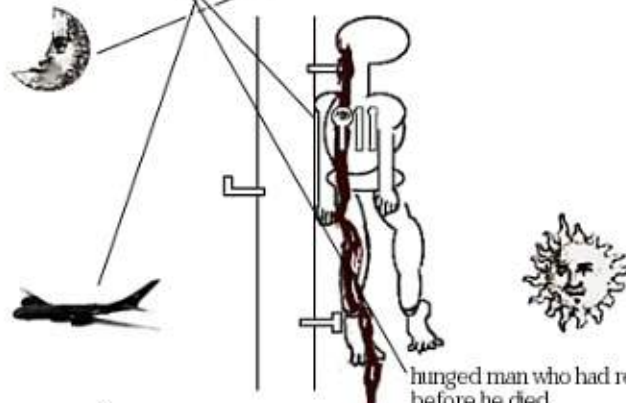
Digest

(細かき典拠は先の段に譲ったうえで指し示しの筋立ての部「だけ」 — 詰め込みすぎの風ある中ながらも — 先だっの指し示し内容を再掲するとして)

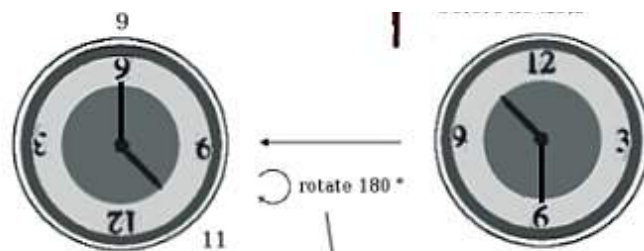
多数の関連商品を生み出してもいる著名なる漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』にあつては — (「漫画作品など年少の時分に卒業すべきもの、また、大の大人があらたまつての場にて話柄とすべきではないもの」との風潮があると慮(おもんばか)つたうえで、でも取り上げて然るべきような) — [多重的前言]がなされているとのことがある。以下、摘示するようなかたちにて、である。

第一、漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』第三部スターダストクルセイダース(の中の[「クヌム神」(1)]の部)にては[911の事前言及なしている]と巷間指摘されたとおりの描写 — [911との数値が刻字された上着]を着た男が[飛行機][911にてのツインタワー崩落時刻(ノースタワーが崩落を見た10時28分に近接する10時30分)] [(イスラム教象徴となっている)三日月]と結びつけられながらの式で「お、10時30分だ」と述べた直後(換言すれば、現実世界でツインタワーの内のノースタワーが倒壊した午前10時28分に極めて近い時刻)に殺されていくとの描写 — が含まれている(具体的な善籍掲載箇所の説明は先の段にての解説部に譲る)。

approximate composition [one scene from "title no.189" (1990) of (Japanese manga series) JoJo's Bizarre Adventure — Stardust Crusaders]



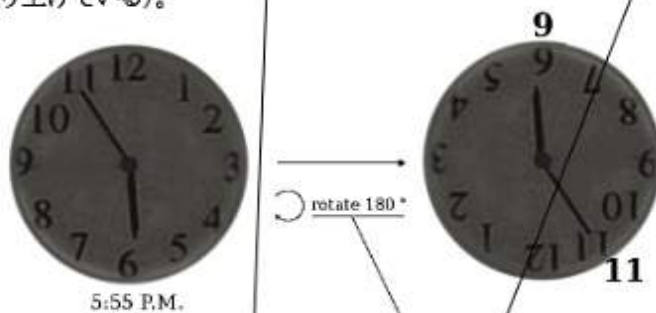
hanged man who had referred to 10:30 a.m. before he died.



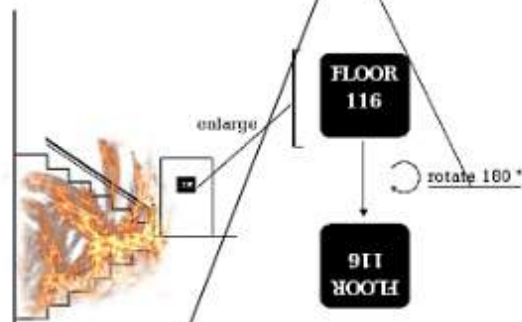
第二。以上のような問題となる予言シーン(『ジョジョの奇妙な冒険』第三部スターダストクルセイダース(中の[「クヌム神」のオインゴ「トト神」のポインゴ(1)]の部にての予言シーン)を包摂するエピソードについてはさらに次のことら(A.からE.のことら)もが申し述べられるようになってる。

(以下、A.からE.の典拠・具体的論拠については(繰り返し同文にて)「先立っての本稿にての記述にもろとも譲って」[結論]のみ表記するところとする)

A. 作中にて [ツインタワーのノースタワーが崩壊した時刻] ともなっている10時28分に近い時間帯、10時30分の時間帯 —— [911と刻字された上着を着る男] が [飛行機] らの描写を含むシーンで電柱に突き刺された死体となる契機となる時間帯 —— についてはアナログ時計文字盤を180度反転させて見ると時針が「9」「11」を指す時間帯となってもいる (同様に [180度回転させると911との数字が出てくる数値ないし時刻が登場してくるとの「かぐわかしい」作品] として本稿の先の段では [ツインタワーに比定される合衆国最大のビルが爆破されるとの内容を有している『ザ・タワー』を原作としもする映画『タワーリング・インフェルノ』に認められるビル —— 映画リリースポスターにてツインタワー状に描かれているとのビル —— の貯水タンク爆破時の壁面の数値(116)の描写のこと]、および、[マンハッタンのビルやペンタゴンが爆破標的にされ、また、ニューヨークとペンタゴンの並列象徴が作品内にて頻繁に登場し、さらに、(現実の911の事件でもそうなったように)米軍から漏出した炭疽菌の災厄を描いている作品たる『ジ・イルミナタス・トリロジー』のペンタゴン爆破時の時間帯] のことをもあわせて取り上げている)。



"In any case, at 5:55 P.M., Washington time, a series of explosions destroyed one-third of the river side of the Pentagon, ripping through all four rings from the innermost courtyard to the outermost wall."
 —— The Illuminatus! Trilogy BOOK#3 : EVIATHAN (1975)



approximate composition of one scene of
 The Towering Inferno (1974 film)
 related with [the situation of setting C-4s]
 (= DVD time-record sold in Japan :
 (one scene of) [2:33:56])
 hour minute second

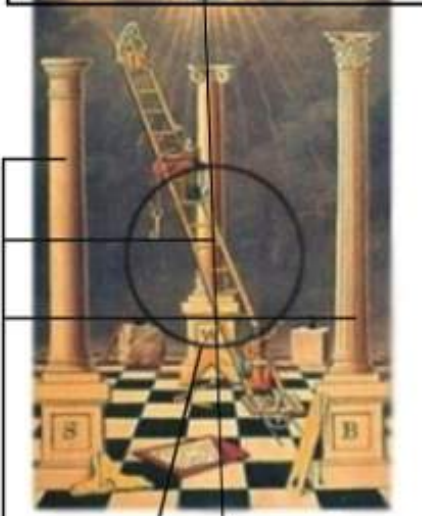
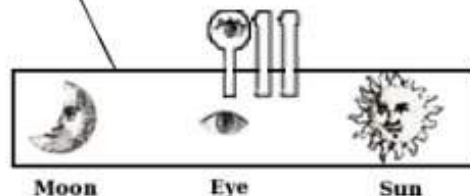
B. 問題となる『ジョジョの奇妙な冒険』の予見描写の部 — [911との数値が刻字された上着] を着た男が[飛行機] [911にてのツインタワー崩落時刻(そして上下逆転すると911との数字が表示されてくる時刻)] [(イスラム勢力の象徴ともなる)三日月]と結びつけながら、「お、10時30分だ」と述べた直後(換言すれば、現実世界でツインタワーの内のノースタワーが倒壊した午前10時28分に極めて近い時刻)にて殺されていくとの描写との部—— は [月] [一つ目] [太陽]

を並べての描写がなされているとのもの「でも」があるが、

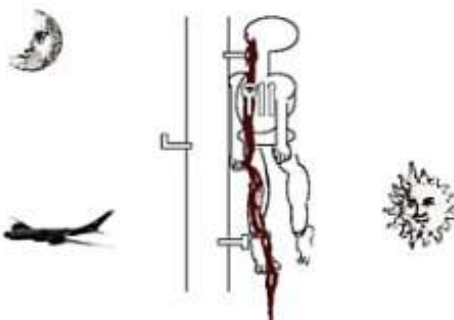
[月] [一つ目] [太陽]を並べるとのやりよう]

はフリーメーソンの徒弟位階のトレーシング・ボードなどに認められるフリーメーソンが拘(こだわ)りを見せている構図「とも」なる(同点に関しては補足として「長くもなるが、」と断ったうえで次のこと、懇切丁寧に論じてきました。[補足1]:「筆者は『ジョジョの奇妙な冒険』の作者がフリーメーソンであるなどと述べているのでもなければ、そのようなこと(人類の命運といったことに比べればもの些事)を訴求したいのでもない」。[補足2]:(典拠を念密に挙げながら指し示しに努めたこととして)「『ジョジョの奇妙な冒険』の予見描写部と同様の[月] [一つ目] [太陽]を並べての構図は[欧州錬金術の象徴体系]にも認められるものとなり、それにまつわるシンボリズム分析をなすことでも[[黄金の林檎]と結びつくところで[他の911の事前言及作品]とつながる」との式が浮かび上がってくるのが(どういうわけなのか、あまりにも奇怪なこととして)ある」。[補足3]:(同文に典拠を念密に挙げながらも指し示しに努めたこととして)「『ジョジョの奇妙な冒険』の問題となる予見描写は[フリーメーソンのヤコブの梯子ハシゴと結びつく象徴]と際立っての視覚的一致性を呈するものともなっている。その点、[ヤコブの梯子](ジェイコブズ・ラダー)は[天国への階段](ステアウエイ・トゥ・ヘブン)という語とも言い換えられる「ような」ものとなるが、そのステアウエイ・トゥ・ヘブン、著名バンド[レッド・ツェッペリン]の逆再生メッセージ混入疑惑との兼ね合いで有名な曲の曲名となつてもいる。すなわち、米国州法による音源への逆再生メッセージ混入規制(「事前告知無しにの逆再生メッセージを禁ずる」との混入規制、実現への風潮につながった(ただし、カリフォルニアやアーカンソーで問題となったといったそうした規制動向については法案が法案(ビル)に留まり法令(アクト)には議会が法を可決しても[州知事の差し戻し]などから至らなかったとのことがある)ような「悪名」との意味でもよく知られた曲の曲名と[ステアウエイ・トゥ・ヘブン]というのは同一のものとなっている。さて、ステアウエイ・トゥ・ヘブンを名に冠する曰くつきの曲、ヤコブの梯子と同一の概念を指すステアウエイ・トゥ・ヘブンの名を冠する曲が『ジョジョの奇妙な冒険』では後に主人公らを皆殺しにし、[世界そのものを破壊した重力を操作する拳]と結びつけられているとのこと「も」がある(レッド・ツェッペリン歌曲名から材をとったとされる式の結びつけられているとのこと「も」がある)。そのことがよりもって不気味なのは[911の予見描写] (『ジョジョの奇妙な冒険』の予見描写にこと限って言えば、ステアウエイ・トゥ・ヘブンと概念的に接合する天国への昇降段たるヤコブの梯子、そのヤコブの梯子に通ずるメーソン・シンボリズムと連結性を呈しているとのものとなる)と[重力の増大による破滅が危惧・懸念されてきた加速器実験]が全く異なる他のところ「でも」多重的に結びついているとのことが指摘できるようになっている、とのことである)。

Tracing Board of Entered Apprentice

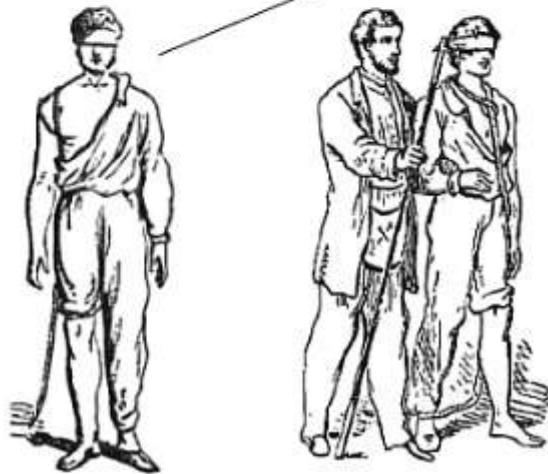


Jacob's Ladder



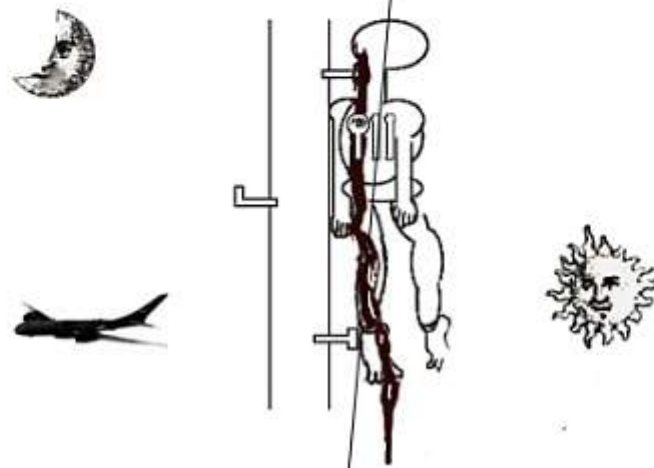
pillars of Wisdom, Strength, and Beauty

C.(直上の)B.の段で扱っているようなところで視覚的に『ジョジョの奇妙な冒険』の描写はフリーメイソン・シンボリズムと接合しているのであるが、同時に、同じくもの描写はその他の意味でもフリーメイソンの思潮と接合している。その点、[吊された男](ハングド・マン)が描写されているのが表記の予見描写の部となるが(具体的には[電柱に首を突き刺された911と刻字された上着を着ての[吊された男]が描かれている]のが当該予見描写の部となるが)、フリーメイソン入門位階たるエンタード・アプレンティス(徒弟)位階にあつての参入儀礼にあつては候補者が[絞首刑受刑者]のように首に縄を巻かれ、また、目隠しをされた格好(すなわち、ハングド・マンの格好)をさせられるようになっていることがあり、その点でも問題となる予見描写とメイソン思潮の接合性が認められるとのことがある(しかも、[月][一つ目][太陽]の中空にての連続描写にまつわる一致性についてのB.の段にて言及の接合性が徒弟位階の儀式動向に大きくも関わると判断できるようになっている中、ハングド・マンの描写も徒弟位階の儀式動向と大きくも関わっているとのこともある)。



Hanged men of Freemasonry
(seen in the degree of Entered Apprentice initiation)

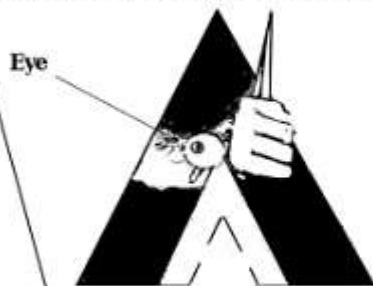
approximate composition of [one scene from "title no.189" (1990) of (Japanese manga series) Jojo's Bizarre Adventure — Stardust Crusaders]



D.『ジョジョの奇妙な冒険』の予見描写はオインゴ・ポインゴ兄弟という敵役の予言をなす漫画の描写というかたちで具現化を見る(予言描写をなす漫画と作中明示されているものの中にあつてA.及びB.にて表記のような属性を伴った描写が具現化を見ている)。そのオインゴ・ポインゴ兄弟が最終的に主人公ら一行を暗殺しようとした手段が[時限爆弾オレンジを食させしめ、それで人体を内破させる]という「突拍子もない」(としか表しようがない)ものとして描かれているのではあるが、それがため、当該予見描写を含むエピソードを含む当初の単行本タイトルは[爆弾仕かけのオレンジ]となっている(ただし、リニューアルされての文庫版はそうではない)。そこに見る[爆弾仕かけのオレンジ]とは[時計仕かけのオレンジ]という有名な映画作品の邦題(原題はクロックワーク・オレンジ)との接合性を当然に感じさせるところのものなのだが(タイトルに対するオマージュがそこにあると当然に想定される)、[時計仕かけのオレンジ]という映画の有名なリリースポスター(ビル・ゴールドというデザイナーがデザインした有名なリリース・ポスター)は[フリーメイソン象徴主義と露骨に接合するようなもの]となっている。のみならず、予見描写を含むこの箇所が時限爆破とつながっていることは他の911の予見作品として本稿にて解説してきた作品らが[フリーメイソン象徴主義と多重的に接合する、ワールド・トレ

ード・センター寓意物に対する時限爆破作品]「とも」なっていることを想起させるところである。さらに述べれば、[爆弾仕かけのオレンジ] (ジョジョの奇妙な冒険の予告描写を含む単行本に付された副題)・[時計仕かけのオレンジ] (比較対象のうえで問題となる作品) に見る [オレンジ] とは歴史的に [黄金の林檎] と結びつけられてきたものである。とのこともある。その点、[黄金の林檎] とは (本稿で膨大な文字数を割いてそのことについての解説をなしているように) [911の予見事物] とも [ブラックホール生成をなしうるとされるに至った加速器実験] とも [多重的に] (「数多の事例で」) 結びつくようになっている伝承上の果実であるとのことがある。

(structure of)
Theatrical release poster of A Clock Work Orange



Eye

CLOCKWORK
ORANGE

the emblem of Omniscience adopted by Freemasonry
(= All Seeing Eye)



Orange ⇔ Golden Apple

" In many languages, the orange is referred to as a "golden apple". For example, the Greek χρυσομηλιά, and Latin pomum aurantium both literally describe oranges as "golden apples". Other languages, like German, Finnish, Hebrew, and Russian, have more complex etymologies for the word "orange" that can be traced back to the same idea. "

——Wikipedia [Golden apple] article

Great Seal of the United States

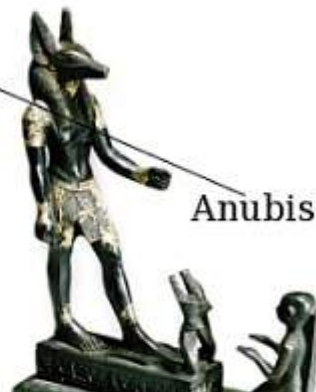


Judgement of Paris
(Circa: between 1512-1514)



E.劇中にて予告描写が発するところのヴィラン(悪役)として描かれているオインゴ・ポインゴ兄弟を斥けた後、『ジョジョの奇妙な冒険』では主人公らが[人間に憑依して殺人鬼に豹変させるアヌビスの名を冠する存在]の襲撃を(話数にしては直後からといった按配にて)受けることになる。その点、[アヌビス]とはフリーメーソンの思潮体系にあって[メーソン員にとつての魂の案内人としてのブレイジング・スターの象徴神格]などと描写されることもある存在である。さらに述べれば、そこに見る[アヌビスと結びつく(とされる)ブレイジング・スター]は同じくものメーソンの思潮体系にあって[万物を見通す一つ目]に仮託されるものでもある。それは(先行するところのB.からD.の内容に鑑みて見ても)できすぎて映るところともなる。

" The Solstices, Cancer and Capricorn, the two Gates of Heaven, are the two pillars of Hercules, beyond which he, the Sun, never journeyed: and they still appear in our Lodges, as the two great columns, Jachin and Boaz, and also as the two parallel lines that bound the circle, with a point in the centre, emblem of the Sun, between the two tropics of Cancer and Capricorn. The Blazing Star in our Lodges, we have already said, represents Sirius, Anubis, or Mercury, Guardian and Guide of Souls. Our Ancient English brethren also considered it an emblem of the Sun. In the old



Anubis

considered it an emblem of the Sun. In the old Lectures they said: "The Blazing Star or Glory in the centre refers us to that Grand Luminary the Sun, which enlightens the Earth, and by its genial influence dispenses blessings to mankind." Our Ancient English brethren also considered it an emblem of the Sun. In the old Lectures they said: "The Blazing Star or Glory in the centre refers us to that Grand Luminary the Sun, which enlightens the Earth, and by its genial influence dispenses blessings to mankind." It is also said in those lectures to be an emblem of Prudence. The word Prudentia means, in its original and fullest signification, Foresight: and accordingly the Blazing Star has been regarded as an emblem of Omniscience, or the All-Seeing Eye, which to the Ancients was the Sun. It is also said in those lectures to be an emblem of Prudence. The word Prudentia means, in its original and fullest signification, Foresight: and accordingly the Blazing Star has been regarded as an emblem of Omniscience, or the All-Seeing Eye, which to the Ancients was the Sun."



—Albert Pike, *Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry* (1871)

さて、委細を従前の段に譲っての直上再掲の事柄らに関わるところとして、またもってして、

[[占いの霊(使徒行伝に見るパイソン)の業]が如くものがいかにして具現化を見ているのかとのことにも関わるところとしてフリーメーソンシンボリズムがいかようにして人間社会にて具現化を見てきたか]

とのことにも関わるところとして —最終的には先だってより問題視している【ソ連国章とフリーメーソンのシンボリズムの通底の問題】に通ずることに行き着くとこの式にて— 取り立てて次の[a]から[c]のことらに依拠しての訴求をなしたいと思う。

[a].

再言するところとして、【黄金の林檎】という伝承上の果実が国内にあつての911の先覚的言及作品、数々の派生商品を生み出しもしている著名作品たる漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』にての予言描写「とも」関わり合いを見せている。すなわち、直上にての振り返っての図解部でその点に関しても極々端的に再言及しているように、

【数百年前よりの錬金術象徴体系の図像化ありようと結びつけられるようになっているところの部】および【海外の著名映画作品『時計じかけのオレンジ』と結びつけられるようになっているところの部】と【黄金の林檎】との結節点

が国内流通作品『ジョジョの奇妙な冒険(スターダストクルセイダース)』の【911の予見描写】(として語られもしてきたこと)「にも」認められるようになっているとのことがある。

その点、長大なるものとなっている本稿では —ここ補説4の段に入る前から— 委細呈示に一意専心、注力するとのかたちにて、

【911の予見事象は「どういわけなのか」【黄金の林檎】のシンボルと多重的に結びついてい

るとのことがある]

とのことの指し示しに努めてきたとのことがある(: 国内漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』の予見描写にもみとめられるつながりはその一例にすぎないとして[911の予見事物と黄金の林檎の繋がり合い]についての指し示しに努めてきたとのことがある —他例としてここまでにて挙げたのは小説作品『ジ・イルミナタス・トリロジー』、映画作品『ファイト・クラブ』、映画作品『トレーディング・プレイシズ』(邦題『大逆転』) —)。



[b].

さて、【黄金の林檎】というのは —それこそ何度も何度もその点について指摘しているように—

[ヘラクレスの第11功業の取得目標物]

となり、また、

[最終的に木製の馬で滅ぼされたと伝わるトロイアが破滅に至る戦争へと突入する契機となったもの]

でもある(: 表記のことについては本稿にての **出典(Source) 紹介の部 39** を包摂する解説部にて神話上の典拠・概要につき洋書を引き合いに解説している. さらに述べれば、本稿では【黄金の林檎】がフォウビドゥン・フルーツ、【エデンの園の誘惑の果実】と同一視されるだけの論拠が山積していることをも「文献的事実および記号論的事実に依拠するとの式で」詳述してもいる —詳しくは **出典(Source) 紹介の部 48** から **出典(Source) 紹介の部 51** を包摂しての部位などを参照されたい —)。

そうもした【黄金の林檎】というものが

〔古のアトランティス〕

「とも」接合するものとなっているとのことを指し示せるし、本稿ではその指し示し「にも」また先の段で努めてきた。

いかなることか、と述べれば、

「黄金の林檎の所在地として語られるヘスペリデスの園 —ヘラクレスが計 12 に及ぶその功業にての第 11 番目の功業にてその在り処を探し求めていたとの伝説の果樹園— というものが(往古、海中に没したと伝わっている)〔アトランティス〕と同じくもの地とされてきたとのことがある」

のである(端的にいわれよりの典拠について言及すれば、下述の 1. および 2. のようなところが挙げられる)。

(⇒1. 〔黄金の林檎が実るヘスペリデスの園の管理者たる〔巨人アトラスの娘ら〕は単数形でアトランティスと別称される存在にして、また、複数形でアトランティデスと総称される存在ともなり、彼女ら黄金の林檎の管理者らであるヘスペリデスら —アトラスの娘ら— のそうもした属性が(大洋に没したと伝わる古の陸塊である)【アトランティス】に名称の面で接合している〕

2. 〔アトランティスはプラトン著作『ティマイオス』が伝えるところでは大西洋の果てにかつてあったとされる巨大な陸塊となるが、アトランティデス〔アトラスの娘ら〕と表されるヘスペリデスらの黄金の林檎の園の神話上のありようも〔大海の果てにある西方浄土〕といったものであるがため、位置的な意味でヘスペリデスの園とアトランティスには接合性が観念される〕

といった理由から【黄金の林檎の園】と【アトランティス】は接合していると述べられるところとなっているし、一部にてそういう言いようがなされてきたとの歴史的経緯がある— 出典表記: [出典 \(Source\) 紹介の部 40](#) から [出典 \(Source\) 紹介の部 43](#) を包摂する部位を参照されたい—。さらにそうもしたことに輪をかけてのこととして〔黄金の林檎が原因で滅びた古のトロイア〕と〔アトランティス〕の近接性のことなども本稿では問題視している)

〔c〕.

先行するところの〔a〕. 及び〔b〕. では、(本稿従前内容に依拠してのこととして)、

〔(911 の予告事象に関わる) 黄金の林檎〕 ⇒ 〔アトランティス〕

との関係性(長大なる本稿で延々と指し示しに注力してきたところの関係性)についての注意喚起をなした。

そうも注意喚起なしたことを前提に置いたうえで話を続けるが、本稿にての先の段では次のことら「をも」指摘していた。

・フランシス・ベーコン、〔フリーメーソンの紐帯の理念上の父〕ともされている著名な歴史上の人物 —フランシス・ベーコンの名は日本の受験生の暗記事項でもある— である同ベーコンはアメリカを【大アトランティス】(グレート・アトランティス) としたうえで「それとは別の」【ニュー・アトランティス】で欧州の人間がそれに範を見出すべくもの理想的文明が構築されているとの筋立ての『ニュー・アトランティス』という著作をものしている(ベーコンがいかなる

人物か、また、同ベーコンの『ニュー・アトランティス』がいかなる著作なのかについては — Project Gutenberg より全文ダウンロードできるとの New Atlantis それそのものおよび国内で岩波文庫より出されている邦訳版『ニュー・アトランティス』よりの原文抜粋をなしながら — 本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 52](#) および [出典 \(Source\) 紹介の部 105](#) にて細かくもの紹介をなしている)。

・上のベーコン著述『ニュー・アトランティス』にあつては [文明の孵卵器ふらんき] とでもいうべき [ソロモンの家] こと [ソロモンの家] という組織が登場してくる (出典: [出典 \(Source\) 紹介の部 52](#) および [出典 \(Source\) 紹介の部 105](#) を参照のこと。ソロモンの家の文明孵卵器としての成果には『よくも 17 世紀初頭の人間がこのようなことを考えたものだ』と思われるようなところとして、[出典 \(Source\) 紹介の部 105](#) にて Project Gutenberg にて公開されている New Atlantis の原文を引きながら呈示したように)、【あらゆる光学的手段で距離の問題を超越し幻影をもたらす光学的やりようとしての光の操作を自儘(じま)にできるとの科学技術】【あらゆる音響学的手段で網羅的な音声再生し、補聴器具を実現することも出来、音声を送ることが可能であるとの科学技術】【あらゆる動力研究の成果として鳥の運動を模倣してある程度の飛翔が可能であり、水中進行も可能、海難事故を克服しての大きな舟も用意できるとの科学技術】についての言及までもがなされている)。

・ベーコン著述『ニュー・アトランティス』にあつては

(先にも取り上げたものとして)

[\[並び立つ 2 本の柱の間に球形オブジェを配するとの口絵\]](#)

が登場を見ているとのことがある ([出典 \(Source\) 紹介の部 105](#) にてより図像紹介)。

下にて再掲なすことにしたところのものである同・口絵については

(視覚的なつながりを感じさせもするところの)

[\[ツインタワーの間に球形オブジェたるスフィアが置かれての構図\]](#)

との接合性を — 脳がきちんと働いているのなら、だが — **【黄金の林檎】**との兼ね合いで「複合的に」想起できるところとなっている。

およそ次のような理由からである。

第一。

上にて先述のこととして

[\[【黄金の林檎】が \[911 の事件を事前言及をなしているとの作品\] らと関わっている\]](#)

とのことがあるわけだが、うち、甚だしくもの事例にあつてのこととして、

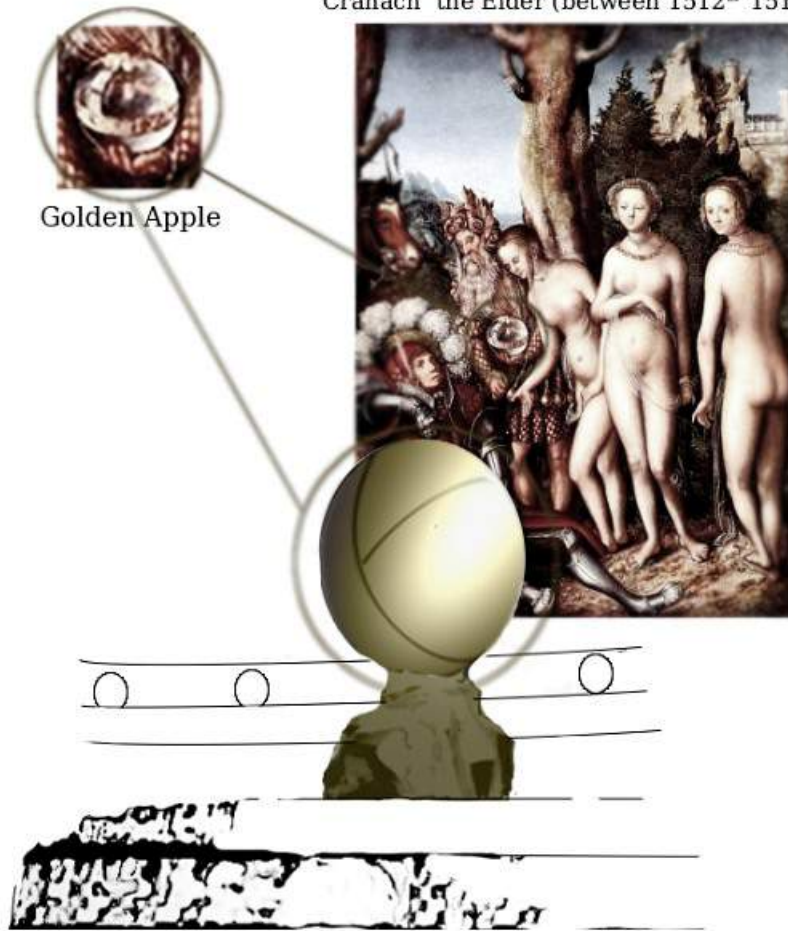
[\[ワールド・トレード・センターにて複数のビルの連続倒壊が — グラウンド・ゼロとの言葉が冒頭より目立つように用いられているとの式で — 実現することに寸刻描写でもってして多重的に言及しているとの「1999 年初出の」映画作品『ファイト・クラブ』\]](#)

にあつて

[\[現実世界にあつてかつてツインタワーに敷設されていた球形オブジェたるザ・スフィアが \[ルネサンス期の【黄金の林檎】のひとつの描写ありように通ずる形態として目立って登場している\]](#)

などとのことがありもする (：ちなみにワールド・トレード・センター敷設のスフィアを黄金の林檎に照応するとの相応のかたちで登場させていたとの映画『ファイト・クラブ』の原作小説、チャック・パラニュークという作家に由来するものとして 1996 年に世に出た原作小説では — 幾度となく強調してきたところだが — [191]階建ての建物、入れ替えなせば、911 ともなる数値の階数の超高層ビルが爆破対象となると描写されている (ワールド・トレード・センターでの複合ビル倒壊が爆破によって実現されることに寸刻描写にて言及している映画作品の原作小説からしてそうなのである)。さらに述べれば、チャック・パラニューク、『ファイト・クラブ』原作小説作者たる同人物は [「双子の」兄弟の葛藤と [飛行機のハイジャック] と [狂的カルト] の問題] を扱っているとの小説を 1999 年、映画『ファイト・クラブ』が封切られたのと同年に刊行しているとのこともある — 出典: [出典 \(Source\) 紹介の部 102 \(8\)](#) —)。

"Judgement of Paris" painted by Lucas Cranach the Elder (between 1512- 1514)



The Sphere (Fight Club version)

上は同様のものを本稿にて何度も挙げてきたところの図となり、映画『ファイト・クラブ』に登場するワールド・トレード・センターのツインタワーに敷設されていたオブジェ(映画の中で爆破されるとのオブジェ)が黄金の林檎の一部描画形態と接合することを「再度」訴求するために挙げたものとなる

(フランシス・ベーコン著述『ニュー・アトランティス』の扉絵構図がワールド・トレード・センター敷設の著名オブジェ(ザ・スフィア)を通じて【黄金の林檎】と相通ずるようになっているとのこと理由として) 第二。これまた従前の内容の繰り返しとなるが、【黄金の林檎】とは[ヘラクレスの 11 功業にあつての目標物]にして[アトランティスと結びつくもの]でもある([【黄金の林檎】の園]としての [ヘスペリデスの園] が海洋に没したと伝わる古のアトランティスと同一視されることがあるからである)。そのことから(アトランティスと結びつく)【黄金の林檎】と(アトランティスを表題に冠する)ベーコンの『ニュー・アトランティス』との結びつきが観念されることがある(そうもしたこと(直近再述したところの) [『ニューアトランティス』扉絵に見る二柱の間に球形のオブジェを配するとの構図]と [ツインタワーの間に球形オブジェ(著名なるザ・スフィア)を配していたかつてのワールド・トレード・センターのありよう] (およびそうもしたワールド・トレード・センターにて9月11日に起こった悲劇のことを【黄金の林檎】のシンボルと通ずるところで先覚的言及なししていたとのやりよう)を複合顧慮することで問題となる多重的関係性の片鱗が見えるようになっている)。

(フランシス・ベーコン著述『ニュー・アトランティス』の扉絵構図がワールド・トレード・センター敷設の著名オブジェ(ザ・スフィア)を通じて【黄金の林檎】と相通ずるようになっているとのこと理由として) 第三。上の第一、第二の点に加えて、『ファイト・クラブ』以外の911の予見

をなしているとの文物らが[黄金の林檎]のみならず[アトランティス崩壊]といった寓意と結びつけられてのものとなっていること「も」がある（作品タイトルに The Golden Apple との副題が付されもしている『ジ・イルミナタス・トリロジー』、黄金の林檎とペンタゴンのシンボルを並列させてのシンボルが何度も登場を見るとの同作ではニューヨークとペンタゴンの双方が爆破の標的にされていたりとナイン・ワン・ワンの事前言及作品としての側面が露骨にみとめられるわけだが、そうした『ジ・イルミナタス・トリロジー』でも（本稿にての [出典\(Source\) 紹介の部 38-2](#) を包摂する部位にて原文引用なしながら説明なししていたこととして）[アトランティス滅亡]が作中の重要要素となっている）。

従って、「より色濃く」も

[アトランティスの名をタイトルに冠する『ニュー・アトランティス』にあつて認められる[並び立つ2本の柱の間に球形オブジェを配するとの口絵]に関しては[ありし日のツインタワーの間に球形オブジェたるスフィアが置かれていたこと]との接合性が【黄金の林檎】との兼ね合いで想起される]

とのことになる。

（ [a]. から [c]. と振つての部はここまでとする ）

以上、(予言といった力学の具現化が認められる国内漫画作品についてより話しはじめ、そこから【黄金の林檎】のことを抽出するとの式で書き綴ってきたとの) [a]. から [c]. のことらを念頭にしたうえで述べるが(そしてそれは残酷な話ともなるのだが)、上の関係性は

[ニュー・アトランティスに見るサロモンの家が如き文明孵卵器(インキュベーター)を用いての人類の歴史には相応のゴールを用意している]

との予告とも通じているところのものとなると「当然に」解されるだけのことが「ある」（かつもって同じくのことが先だってより取り上げている【ソ連国章とメーソン・シンボルズムとの間の接合性】にも相通じるようになっていると解されるだけのことが「ある」）。

そのことを示すべくも呈示したいのが以下のことら、I. から II. のことらである。

I.

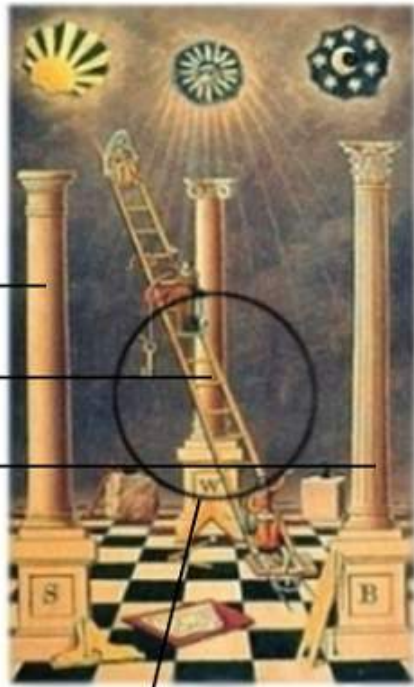
(まさに直近 a. から c. に先立つところとして国内の漫画作品たる『ジョジョの奇妙な冒険』についての話をなしはじめたことに関わることなのだが)

著名なサブ・カルチャー作品、『ジョジョの奇妙な冒険(スターダストクルセイダース)』という作品にての予言的描写(世間的にも一部で予言的描写として語られていることを先述なしたところの描写) — 先述のこととして映画『ファイト・クラブ』らの予見描写についてもまったく同じことがあてはまるのであるが — は

[ソロモン神殿の前に立つそれら柱をモチーフにしてのフリーメーソン・シンボルイズム]

と[際立つての類似性]を呈しているとのものとなっており、本稿ではその絡みで下のような図を挙げたとのことがある。

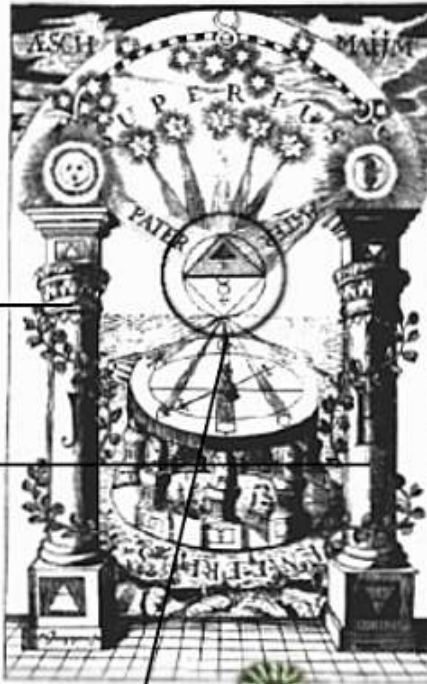
Tracing Board of Entered Apprentice



Jacob's Ladder

pillars of Wisdom, Strength, and Beauty

symbolic art of Freemasonry based on Rosicrucianism (1779)



All Seeing Eye
(according to Morals and Dogma (1872))

pillars of Jachin and Boaz

先にそうしたものからして問題になるとのことで取り上げていた『ジョジョの奇妙な冒険(スターダストクルセイダース)』(額面上・券面上は青少年向けの荒唐無稽「がかった」伝奇物としてのサブカルチャー作品)にあつての

【太陽】【一つ目】【月】を並べたものとしての911の予言的描写】

と露骨なる視覚的接合性を呈するものとしての図の再掲。

図の左側は【太陽】【一つ目】【月】を一直線に並べての(入団者が「吊された男」の役回りをまづもって与えられるところの位階たる)フリーメーソン徒弟位階のトレーシング・ボード】となり(前面にはウィズダム、ストレングス、ビューティ、知恵・剛毅・美のフリーメーソンの美德の柱らが鎮座する)、図の右側は【ヤキンとボアズの柱を図の中に含むフリーメーソン象徴画】として『賢者の羅針盤』(1779)という書物より抜粋したものとなる。一英文ウィキペディアをはじめオンライン上でもよく引き合いに出されているとの『賢者の羅針盤』に見る図にあつてのJとBと刻まれた柱らがフリーメーソン象徴主義におけるヤキンとボアズの柱となっていることについては先の段にて国内学究(吉村正和名古屋大学教授)の著作『フリーメーソンと錬金術 西洋象徴哲学の系譜』(人文書院)にあつて掲載されているところの申しようを引きもしていた。すなわち、(同著『フリーメーソンと錬金術 西洋象徴哲学の系譜』p.112より原文引用するところとして)“1779年にベルリンにおいて匿名で出版された錬金術的薔薇十字文書『賢者の羅針盤』の図版:上部に太陽と月が描かれた2本の柱には、JとBの文字が刻まれている。それぞれの文字はヤキンとボアズ(ソロモン神殿の前に立てられた2本の柱)というフリーメーソンの象徴を指しており、この図版では薔薇十字錬金術思想とフリーメーソンの象徴が融合している”(引用部はここまでとする)との言を引きもしていた一。

さて、上にて掲載したような構図に関わるソロモン神殿前面の柱、なかんずく、そのうち、ヤキンとボアズの柱(と呼ばれるもの)は

[ヘラクレスの柱 —地中海(ヨーロッパ世界)と大西洋を分かちジブラルタル海峡の比喩的象徴物でもあると往古より見られてきた(出典(Source)紹介の部 36)とのヘラクレスの柱—]

と一部フリーメーソンの観点で同義同文のものとなされるものとなっているとこのことがある。

(直下、本稿にて何度となく引いてきたところの 19 世紀有力フリーメーソン、アルバート・パイク著作、Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry『古代より連綿と続く認証されしフリーメーソンのスコットランド位階の徳義と教義』にあつての XXV.KNIGHT OF THE BRAZEN SERPENT の部よりの再度の引用をなすとして)

The Solstices, Cancer and Capricorn, the two Gates of Heaven, are **the two pillars of Hercules**, beyond which he, the Sun, never journeyed: and they still appear in our Lodges, **as the two great columns, Jachin and Boaz**, and also as the two parallel lines that bound the circle, with a point in the centre, emblem of the Sun, between the two tropics of Cancer and Capricorn.

(補つてももの訳として)

「[夏至・冬至の至点]、そして、[巨蟹宮(きょかいきゅう)および磨羯宮(まかつきゅう)](訳注:黄道 12 宮の構成要素)、そして、[天にあつてのゲートとなるところ]は[ヘラクレスの柱ら]でもあり、それらを越えては太陽たる彼が決して旅しなかったとの地点を指しもし、我々(訳注:ここでは『モラルズ・アンド・ドグマ』執筆者たるアルバート・パイクらメーソンを指す)にあつてのロッジにて**二つの偉大なる柱、[ヤキンとボアズ]**として具現化を見てもおり、それらは換言すれば、[巨蟹宮(きょかいきゅう)と磨羯宮(まかつきゅう)の二つの回帰線(夏至線・冬至線)の合間の中央に太陽の象徴たる環を置いたうえで境界をなす二つの対称性呈してのラインら]となっている」

(訳を付しての引用部はここまでとする —※—)

(※ちなみに上にての引用元著作 *Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry* の著者アルバート・パイクがメーソンらにとりどれだけの重みを持った存在であるとされているか、その点についての世間一般での言及のされようも本稿にての補説 3 及び(本段を包摂する)補説 4 の部で紹介をなしている —※英文の方のウィキペディアの記述を訳しながらも解説なしとして「彼(アルバート・パイク)は 1840 年に(メーソン系組織たる)オッド・フェローのインデペンデント・オーダーに参加、それからその間、メーソンのロッジに加わり、組織関連の動きにて非常に活動的に関わるようになり、1859 年には米国南部管轄のスコティッシュ位階にての最高指令官(ソブリン・グランド・コマンダー)の位に選出されることになった。彼は自身の持てる時間の過半を同組織の儀式体系の発展に費やしながら、その後の余生(計にして 32 年間)にあつて最高指令官の地位に留まり続けた。よく知られたところとして、彼(アルバート・パイク)は 1871 年に *Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry*『古代より連綿と続く認証されしフリーメーソンのスコットランド位階の徳義と教義』と呼ばれる書物を刊行、それについては以降いくつもの版が存在するとのことになっている。アメリカにてパイクは今日もってまだ(殊にスコットランド位階にての南部管轄だけにあつて)卓拔し、また、影響力を有しているメーソンと見られている」との申しようが世間一般にてなされているとのこと、紹介している—。そのようにメーソンにとっての重要人物であったとされるアルバート・パイクがものした上記引用元著作 *Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry*『古代より連綿と続く認証されしフリーメーソンのスコットランド位階の徳義と教義』の方もまたメーソンら

にとり甚大なる影響力を与えた著作として語られるところのものであり、については、例えば、その解説のためだけに設けられている英文 Wikipedia [*Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry*] 項目にて(以下、再引用するところとして) “ A copy of *Morals and Dogma* was given to every new member of the Southern Jurisdiction from the early 1900s until 1969 (although some local Scottish Rite bodies offered copies through the mid-1970s), when it was deemed "too advanced to be helpful to the new Scottish Rite member." ”

「アルバート・パイクの『モラルズ・アンド・ドグマ』の複製は —それがスコテッシュ位階の新規メンバーにとって「あまりにも(高度なという意味で)進んだ内容であるために助けにならないであろう」と判断されるまで— フリーメーソンの南部管轄の「全」新規メンバーに1900年代から1969年まで配布されていた(いくつかの地方のスコテッシュ位階運用組織では1970年代半ばまで同著コピーを配布していた)」(引用部はここまでとする)との表記が、(媒体性質よりこれより有為転変を見るかもしれないが、「少なくとも現行にては、」のこととして)、認められるとのこと「も紹介していた)」

上にて引用なしている代表的フリーメーソン著作にあつての書かれように見るように[ヤキンとボアズの柱 —ソロモン神殿の前に立つ、フリーメーソンらにとって重要な象徴—]が[ヘラクレスの柱]と同義同文に見られてきたということは、である。ベーコン由来の『ニュー・アトランティス』に見る理想郷 [ニュー・アトランティス]と[ソロモン神殿]の関係性を「より一層、」想起させるところ「とも」なる。

フランシス・ベーコン著作『ニュー・アトランティス』に見る大西洋の先にある[ニュー・アトランティス]は、(再述するように)、

[サロモン(ソロモン)の家]

という文明促進機構にて発展を見た桃源郷でもあるわけだが、[大西洋(地中海に対するジブラルタル海峡の向こう側)の先にある]、すなわち、[ヘラクレスの柱(地中海と大西洋を分かちジブラルタル海峡寓意物であるヘラクレスの柱)の先にある]との[ソロモンの家]に支えられての領域であるの伝でニュー・アトランティスが

[ヘラクレスの柱(ジブラルタル海峡)の先にある理想郷] ⇔ [ヤキンとボアズの柱を面前に設けてのソロモン神殿の名を冠するソロモン家によって運営される理想的共同体(たるニュー・アトランティス)]

との関係性でもってより濃厚にソロモン神殿と結びつくということになるというわけである。



本稿本段を執筆している時分より遡って4年近くも前より試験的に(無為なが

らも)公開しはじめていたとの手前の訴求用サイトにても解説していることではあるが、**「フリーメーソンにとり重要視されるソロモン神殿の前に立つヤキンとボアズの柱」**は**「ヘラクレスの柱」**と歴史的な図像描画形態にても類似性を呈していた、すなわち、視覚的に似たものとして描かれてきた、とのこともある。

同じくもの点にまつわって少なからずの人間が当然に気付いているであろうし、一部の人間が不十分ながら指摘もしていることと通ずるのが前掲の図となる。

さて、前掲図にて挙げているのは
(それぞれ左から)

(左側)【ゲラルドゥス・メルカトル(とその息子、ルモルド・メルカトル)によって製作された地図帖『(1595年版)アトラス』図葉】

(中央)【フランシス・ベーコン著作(プレ・メーソン、前メーソンの紐帯の大立者として語られていることについても先だて言及してきたフランシス・ベーコンの著作)として1620年に刊行された Novum Organum『ノヴム・オルガヌム—新機関』(より正確にはノヴム・オルガヌムをメインパートとして包摂する Instauratio magna という未完の著作集)の表題紙掲載図像】

(右側)【フリーメーソン(ソロモン神殿を組織の理念の中核に据える団体)のヤキンとボアズのシンボルを描いた画(1779)】

となる。

うち、前掲図中央に配しもした**【フランシス・ベーコン著作 Novum Organum『ノヴム・オルガヌム—新機関』(を包摂する未完の著作集 Instauratio magna)表題紙掲載図像】**に描かれている二本の柱がヘラクレスの柱ことジブラルタル海峡の象徴物であることは誰でも即時容易にそうだと確認(そして確言)できるようなものである(;英文 Wikipedia[Pillars of Hercules]項目にて[ヘラクレスの柱の象徴図]として同じくもの図像が掲載されているのはそうした事情による)。

対して、掲前掲図の左端に配しての図、**【ゲラルドゥス・メルカトル(とその息子、ルモルド・メルカトル)によって製作された地図帖『(1595年版)アトラス』図葉】**に見る二柱の柱らについては「それがヘラクレスの柱と断言できるか」と訊かれたば、「断言はできないが、自然にそのように解されるところのものではある」とまでは述べられるようなものとなっている。その理由としてはメルカトル図法の名であまりにも有名なメルカトルが地図職人として活躍した大航海時代は欧州人がジブラルタル海峡を越えて大西洋の先へと活路を見出した時代となっているとのことにある。そこにいう[ジブラルタル海峡 —ヨーロッパ内海としての地中海と大西洋を分かち海峡—]とは**「ヘラクレスの柱」**によって「往古から」表象されてきたものとなり(本稿にての**出典(Source)紹介の部 36**で原文引用なしながら紹介しているプラトン著作は「往古から」してそうした表象がなされていたことを示すものである)、また、上のメルカトル地図帖の中央に立つ存在は地図帖名称がアトラスであると同様にアトラスであるとされているとの存在であること、そして、欧州人が活路を見出した大西洋が**「アトラスの海」**すなわちアトランティック・シーとの呼称が与えられている存在であるとのこともある。そうした背景からメルカトル地図帖に認められる**「アトラス」**とされている中央に立つ存在(アトランティック・シーこと大西洋の表象であろうと解される)の間に配されている二柱の柱もジブラルタル海峡の表象物であるヘラクレスの柱であろうと自然に解されるところのものとなる。

以上、細々くぐらと指摘したうさでの話として述べるが、ヘラクレスの柱と確言できるもの(17世紀、1620年刊行のベーコン著作に由来する前掲中央の図)、および、そのように解されるもの(16世紀末葉、1595年に成立していた著

名地図帖に見る前掲図左端の図)らが双方ともに前掲図右側にて呈示のヤキンとボアズの柱と目立っての類似形を呈している、そのことは図らの一目・瞥見(べっけん)で理解いただけることとなっている。

そうしたことがあるがゆえにフリーメーソンらの間にてよく知られる著作 —上にて英文ウィキペディア記述を引いているように米国ではフリーメーソン新規メンバー「全員」に長年配布されていたとされる著作 *Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry*— に認められる[文字情報](先述)からだけではなく、著名文物らを具にしたうえでの[視覚的特性]からも[ヘラクレスの柱(の図像化形式)]と[ヤキンとボアズの柱(の専らメーソンに由来する図像化形式)]の一致性の問題が窺い知れるのである。

II.

伝承ではギリシャ神話の際立つのヒーロー、ヘラクレスは第11功業に先立つ第10功業、三面の怪物ゲーリュオンを討伐することになったとのその功業の最中にて[ヘラクレスの柱]を構築したと語り継がれている(出典(Source)紹介の部90)。さて、ここまで述べてきたアナロジー(類似性)の環から理解いただければどうかと考えられることとして、

[ツインタワーの間に黄金のザ・スフィア(11功業の【黄金の林檎】との結びつきを本稿で説明してきたもの)を配するとの式] ← (視覚的・意味論的接合性の存在) → [フランシス・ベーコンのニュー・アトランティスの扉絵(第10功業にてヘラクレスが打ち立てたヘラクレスの柱「状」ものを配しもしている扉絵)の構図]

との関係性が導出できるところとなっている(:疑念があるのならば、ここ本段の内容をよく読みなおし、また、本稿にての典拠となるところを精査してみるといい)。

といったことが述べられる中で合間に[ザ・スフィア]を配してのツインタワーは崩落させられている。そこから[ヘラクレスの柱][ヤキンとボアズの柱]を崩す、[ソロモン神殿を崩す]との寓意が見てとれることになる(単純な記号的言い換えの問題に過ぎない/同じくものことにまっつわって本稿の先の段で映画『ファイト・クラブ』でのワールド・トレード・センターと寸刻描写される場での爆破挙動が何故もってしてフリーメーソンのソロモン神殿のヤキンとボアズの柱の象徴画と色濃くも接合すると述べられるのか、単純な視覚的根拠を多方向から呈示してきたとのこともある —同じくものことにまっつわってこれより続いての段にて同様の図解部を再掲することとする—)。

そして、[ソロモン神殿関連の事物]を最大限重視しているとの「フリーメーソン」思潮のそもそもの発端となっているとの観点も呈されるフランシス・ベーコン、英国にての17世紀思想家たるフランシス・ベーコンの名著『ニュー・アトランティス』(本稿ここまでにてヘラクレス第11功業との接合性を黄金の林檎との絡みで呈示せんとしてきた著作でもある)では

[文明の構築主体]

がそのままに

[ソロモン(サロモン)の家]

とされていることに鑑み、それが既存文明を崩壊させることの比喩であろうことは(順を追って考えれば)察しがなせるところとなっていると申し述べるのである(ちなみに本稿にての出典(Source)紹介の部101で取り上げているように911の事件に際しての倒壊の仕方が極めて不自然であったとの意見が

専門家らより呈されている 7WTC はソロモンと密接に結びつくビルであったことが知らている — 英文 Wikipedia にあつての「List of tenants in Seven World Trade Center」項目（「旧セブン・ワールド・トレード・センター・ビルにてのテナントのリスト」項目）にては【かつての 7WTC の 47 階の過半（というよりも圧倒的多数）を占めていた企業が Salomon Brothers（事件時の Salomon Smith Barney）であった】との表記（合衆国諜報機関およびシークレット・サービスを押しつけて過半がソロモン「ブラザーズ」関係であったとの表記）がリスト形式で仔細に（現行にては）呈示されている—）。

（ベーコン著作に見る文明のインキュベーター（孵卵器）が【ソロモン（サロモン）の家】（Salomon's House）であったとのことにまつわたる I. 及び II. と振っての部はここまでとする）

以上、I. および II. のことらを敷衍（ふえん・押し広げ）しもし、以下のことを問題視したい。

本稿のかなりもって先の段、**補説 2**の部では

The Lesser Key of Solomon, Goetia 『ソロモンの鍵』

などという下らぬもの、（歴史区分における[近代]以前の）[近世]の欧州人の妄言 — 悪魔を召喚・使役するなどの妄言の類 — を書き連ねただけのものであろうとの愚書・悪書としての魔術書（グリモア）の類にも[嗜虐的な寓意]の片鱗が見受けられるとの話をなしていたとのことがある — 凶形的特質、レギュラー・ペンタゴンこと[正五角形]と無限に続く内接・外接関係を呈するとの[五芒星]との絡みでそういう寓意の片鱗が見受けられるとの話をなしていたとのことがある—。

では、何故、悪魔を召喚・使役する術を記したものとされていた妄言録、魔術書（グリモア）などに[ソロモンの鍵]との表題が付されていたのか。それはソロモンが「悪魔を使役した」と伝わっている王であるからである。ソロモンが悪鬼羅刹の類を使役した王であるといかように伝わっているのか、（先にも簡単に言及なしていたことだが）、細かくもの出典を紹介しておく。

については Project Gutenberg のサイトにて公開されている — したがってオンライン上より誰であれ労せず裏取りもなせようとのこととなっている— ところの 1899 年刊行の著作 Solomon and Solomonic Literature（『ソロモンおよびソロモンにまつわる文学』とでも訳せよう著作／奴隷解放論者にして牧師を兼ねていたとの 19 世紀往時にて著名な著述家として知られ、英文 Wikipedia にも同人物関連の一項が設けられているとの Moncure D. Conway という人物の手になる著作）の内容を引いておくこととする。

（直下、Solomon and Solomonic Literature (1899) の開巻劈頭の部、序言 (Preface) の部よりの引用をなすとして）

An English lady of my acquaintance, sojourning at Baalbek, was conversing with an humble stonecutter, and pointing to the grand ruins inquired, “Why do you not occupy yourself with magnificent work like that?” “Ah,” he said, “those edifices were built by no mortal, but by genii.”

These genii now represent the demons which in ancient legends were enslaved by the potency of Solomon’s ring. Some of these folk-tales suggest the ingenuity of a fabulist. **According to one, Solomon outwitted the devils even after his death, which occurred while he was leaning on his staff and superintending the reluctant labors of the demons on some sacred edifice. In that posture his form remained for a year after his death, and it was not until a worm gnawed the end of his staff, causing his body to fall, that the demons discovered their freedom.**

（拙訳として）

「バールベック（神殿の遺跡）に逗留していた最中、私も知遇を得ていたとある婦人がつつまじやかなる石切工と談話している際に彼女は巨大なる遺跡を指さし、「あのような壮観呈しての作をあなたのなすべき仕事としてみてみられてみたらばいかがなものですか」と尋ねていた。「ああ、ええ」とその石切工が応え、そして、言うには

「あれら建築物は死すべき定めを負った者(モータル/人間)によって造られたものではなく、ジンら(訳注:イスラム世界に伝わる精霊や悪魔の類を意味する genie の複数形)が造ったものなのです」と述べていた。(その話に認められる)ジンらは古代の伝承ではソロモンの所有していた指輪の力によって隷属化させられた存在となっている。そうした民話とはいった話を作り上げた者の創意創作の妙を示すものともなる。(たとえば)ひとつの説話によると、ソロモンは使役した悪魔ら、ソロモンが自身の身を杖にて支えていた折に現われたとのその悪魔らに対して自身が死を得た後にあっても裏をかき、神聖なる建築物の造成にあたってそれら悪魔の不承不承の労働を監督したとされる。死後一年もの間、ソロモンの似姿は杖に支えられての姿に留められ、蛆が彼の杖をかじって彼の遺骸が崩れ落ちるまで悪魔らは自由を手にはできなかったとされるのである」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(さらに直下、同じくもの著作 Solomon and Solomonic Literature (1899) にての書かれようをほんの一例、引くとして)

In European Folklore, Solomon and his old adversary, Asmodeus, now better known as Mephistopheles, have long been blended. **Solomon's seal was the mediaval talisman to which the demon eagerly responds.** The Wisdom involved is all a matter of magic. It is wonderful that so little recognition has been given in literature to the epical dignity and beauty of the biblical legends of Solomon.

(訳を付すとして)

「欧州の民話にあっては[ソロモン]および彼の古き助言者たる(ファウストに対する)メフィストフェレスのように現在よく知られている悪魔アスモデウスは長き月日を経て似姿を練り上げられてきた存在となる(訳注:アスモデウス Asmodeus という悪魔についてはユダヤ教のタルムードに派生するところの伝承で[ソロモン神殿建立に与(くみ)した悪魔]であるとの言われようがなされてきた存在である — 英文ウィキペディアなど目立つところにも具体的解説がなされているところである(たとえば英文 Wikipedia[Asmodeus]項目には現行、“**The demon is also mentioned in some Talmudic legends, for instance, in the story of the construction of the Temple of Solomon.**”「悪魔アスモデウスはいくつかのタルムード伝承にて、たとえば、ソロモン神殿建立との絡みで言及されている存在となりもする」との記載がなされている/訳注の部はここまでとする) —)。ソロモンの紋章は悪魔が熱心にそれに応じたとの中世の護符(タリスマン)の類となる。そこでは智慧はまったくもって魔法の賜物であった。(そうした)民話にあつて聖書にてのソロモンの伝承に認められる詩的荘厳さも美しさも一顧だにされていないとのことは驚くべきことである」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上、引用なしたところが 19 世紀の牧師でもあったとの知識人の著作 Solomon and Solomonic Literature『ソロモンおよびソロモンにまつわる文学』に見てとれる、

[ソロモンと悪魔(に対する使役・契約)との関係性]

を端的に示す部となるが、さて、【悪魔との契約】が【対価に見合うだけの代償】が要求されるものであることは世間一般に認知されていることである。

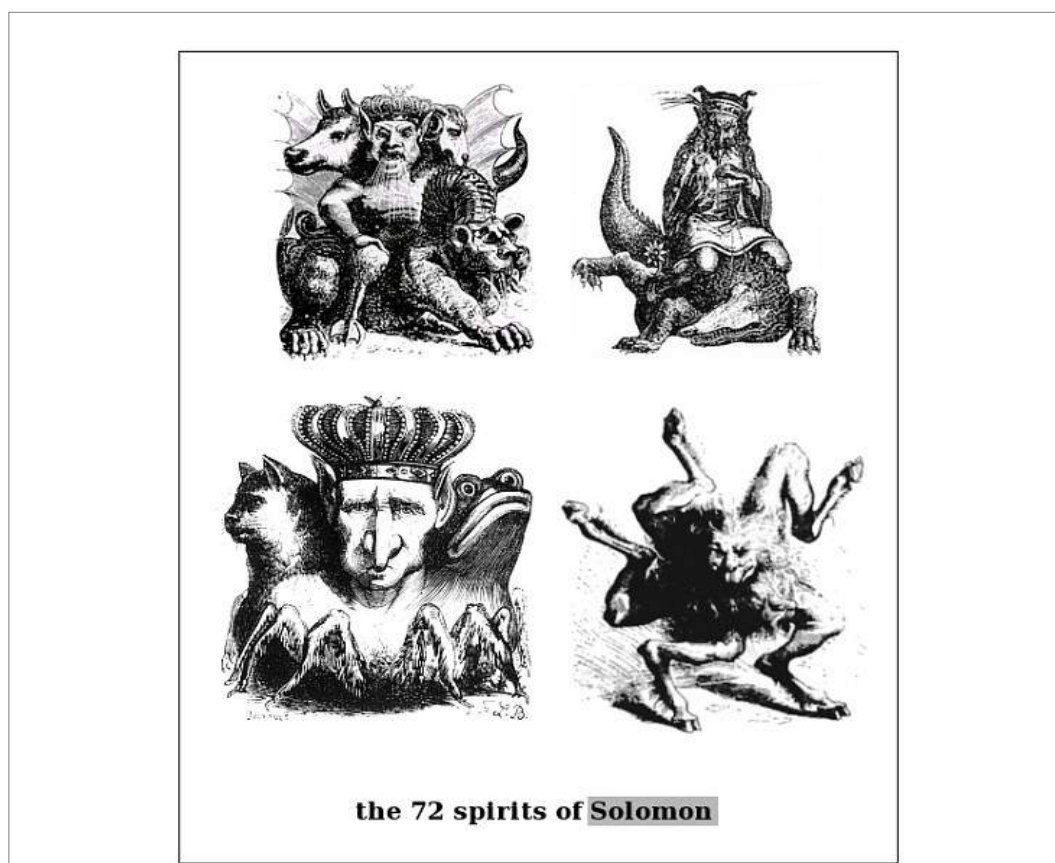
ソロモンに関しては悪魔だけではなく天使より

[悪魔と天使らを使役する指輪]

を与えられたなどとの話が伝わっているもするが、といったソロモン(旧約聖書『列王記』にあつての著名かつ目立っての登場人物である)にまつわることから離れてのオーソドックスな悪魔の使役ではゲーテ戯曲としてあまりにも有名なファウスト博士のそれに典型例を見出せもするように[栄耀栄華に見合う代

償・対価の類を要求されるとの筋立て]が世間的によく認知されている、そう、魂を売った者の末路は悲惨なものであると相場が決まっているというのが世の教訓譚というものとなっている（尚、ゲーテの戯曲に見るファウスト博士が浮き世の享樂のために悪魔に魂を売り払い、最後は相応の最期を迎えた — 魂を売った相手方たる悪魔らが自分の墓穴を掘る音を盲目がゆえに聞き誤り、壮大な事業が成し遂げられんとしている過程での土地開発の音と聞き誤りもしての中で結局、死を遂げる — との物語は極めて有名となっているが、19世紀のゲーテの物語「それ自体」がそうした[物語の類型]の端緒・嚆矢であると見るは誤りである。16世紀末に劇作家(にして間諜ともされる)クリストファー・マーロウによって早くも(ゲーテに200年以上先立つとのかたちで)ゲーテの物語と同じくもの悪魔に魂を売って応報を受けるとの筋立てで戯曲化されだしていたドクトル・ファウストの物語についてはドイツ・ルネサンスの旗手となっていたヨハン・ゲオルク・ファウストというモデルとなった実在の人物がいることが知られておりもし、伝承によれば、栄華・悦樂のために悪魔に魂を売り払ったとのフィクション上の学者のモデルであるとされるそちら実在のヨハン・ゲオルク・ファウスト、[錬金術]の実験中に五体四散しての爆死を遂げ、それが悪魔の仕業であろうと早くも16世紀より見られていたとのことが伝わっていたとされる(：英文 Wikipedia[Johann Georg Faust]項目の現行にあつての記載内容より引用なせば、“Faust's death is dated to 1540 or 1541. He allegedly died in an explosion of an alchemical experiment in the "Hotel zum Lowen" in Staufen im Breisgau. His body is reported to have been found in a "grievously mutilated" state which was interpreted to the effect that the devil had come to collect him in person by his clerical and scholarly enemies.”「ファウストの死は1540年ないし1541年のこととして伝わっている。言われているところでは彼(ヨハン・ゲオルク・ファウスト)は独逸のシュタウフェン・イム・ブライスガウにての Hotel zum Lowen という建物にての錬金術実験に起因する爆発にて死んだとされている。彼の死体は「ひどくちぎれていた」とのかたちで発見され、そちらは悪魔がその遺体を手ずから回収しに来たからだろうと(ヨハン・ゲオルク・ファウストの)宗旨および学問上の敵対者らによって解されるようになったところでもある」(以上引用部訳とした)。につき実在のファウストの死期については不分明なところが多いとされるが、往時の人間の証言から1548年以前に苦悶のうちに死亡したとのことが推し量れるとの表記が Wikipedia[Johann Georg Faust]項目の続けての段にはみとめられる)。

延々細々とした話をなしすぎているか、とも思うのだが、こまごまついでに以下のような図解部を設けておく。



上掲図は 19 世紀フランスの文筆家コラン・ド・プランシーがものした Dictionnaire Infernal『地獄の辞典』にてその似姿が収録されているとの悪魔ら、[ソロモン 72 柱]などと日本では呼び慣わされている一群の悪魔ら(英語では the 72 spirits of Solomon などと呼称される一群の悪魔ら)の似姿を一部挙げたものとなる。

欧州が中世から近世に移行していく中であってなお妄言を広めんとしていたとの愚書・悪書としての魔術書(グリモア)、そういったものに名前・来歴が目立って掲載されているとの(上にて似姿呈示のような)悪鬼らのことをいちいち表記するのもなんであるとは思っているのであるが、一応、解説すれば、[左上]はソロモン王が[ソロモン神殿](フリーメーソンがその理想としていること、本稿にて折に触れ細かくも呈示してきた[ソロモン神殿]である)の建立に当たってその助力を特段に受けたとユダヤ教派生伝承などにて伝わっているところの[悪魔アスモデウス]を描いた図像となる、より具体的にはソロモン王にあやかっただの名を冠する The Lesser Key of Solomon(別名『ゴエティア』)という魔術書(初出は 17 世紀とされる魔術書で総称して『レメゲトン』とも呼ばれるより包括的な魔術書の第一書となるもの)にて[地獄の王の一人]として紹介されているそのアスモデウス似姿を近代文筆家のコラン・ド・プランシーが描いたものとなる。一尚、聞く向きによっては下らなくも響こうことかと承知の上でさらに書けば、同アスモデウスはサラという美女に取り憑いて次々と男達を殺していったとのことが旧約聖書「外典」の Book of Tobit『トビト記』にて主題として扱われているとのことでも有名な悪魔となり、それが材源であろうと思われるところとして、かのエクソシスト・シリーズの焼き直し作品、映画『ザ・エクソシスト・ビギニング』(2004 年初出/時計の時針などその細部にあつての描写を筆者などは意味深くも受け取っている作品)にて劇中登場人物として【サラ】という人物が[悪魔(バビロニアのパズという悪鬼に表象される悪魔)の類に「憑依」された存在]として登場してきたりもする。[右上]は『ゴエティア』ことザ・レッサ・キー・オブ・ソロモンにて地獄の大公爵なる設定でその名が掲載されている[アガレス]という鱈に騎乗した姿をとるといふ悪魔の似姿(を 19 世紀文筆家コラン・ド・プランシーが描いた図)となり、[左下]はザ・レッサ・キー・オブ・ソロモンにて地獄の王の一人として掲載されているとの[バエル]という悪魔の似姿、[右下]は同文にザ・レッサ・キー・オブ・ソロモンにて地獄の総裁(プレジデント)との設定で掲載されている[ブエル]という悪魔の似姿(同じくものコラン・ド・プランシーの手にて描かれた似姿)となる。

(「ソロモン王と紐付けられての」悪魔ら似姿の描写につき紹介したうえで書くが) ここ本稿本段にあつて問題視したきは下記の如きことである。

「旧約聖書それ自体の方では悪魔使役とは無縁なる存在、[おおよその名君]として登場してくるソロモン王(ただし、本稿の先の段にても紹介しているようにその治世の後半期にては同ソロモン王は[モロク神]という異教神に対する信仰を容れ、王国に分裂の芽を撒いたとも旧約聖書列王記(上)第 11 章 7 節から第 8 節にては表記されている)という存在が歴年、悪魔の類とかくも色濃くも結びつけられてきたとのことがあることにつき現代社会に通ずる意味性がまったくないと言い切れるのか。そう断言するのが賢明なやりようと言えるのか。

その見極めにあつて意をなすのは現実世界で[多数人が殺されたとのある種、悪魔的・嗜虐的な事件]に

[ソロモン王の神殿にまつわる寓意 — (なお、神殿建立、ヤキンとボアズの柱が門前に立つソロモン神殿の建立のためのソロモンの悪魔使役の話については上にて Solomon and Solomonic Literature (1899)との書籍から引いているような伝承 (“ According to one, **Solomon outwitted the devils even after his death, which occurred while he was leaning on his staff and superintending the reluctant labors of the demons on some sacred edifice. In that posture his form remained for a year after his death, and it was not until a worm gnawed the end of his staff, causing his body to fall, that the demons discovered their freedom.** ” 「ひとつの説話によればソロモンは使役した悪魔ら、ソロモンが自身の身を杖にて支えていた折に現われたとのその悪魔らに対して自身が死を得た後にあっても裏をかき、神聖なる建築物の造成にあたってそれら悪魔の不承不承の労働を監督したとされる。死後一年もの間、ソロモンの似姿は杖に支えられての姿に留められ、蛆が彼の杖をかじって彼の遺骸が崩れ落ちるまで悪魔らは自由を手にはできなかったとされるのである」にもその一端がみとめられる) —]

と通ずるところの側面が「悪質極まりなくも」込められているとのが「露骨に」指し示せるようになっているか、あるいはもってして、否か、ということであると述べても差し障りなからう — その点もってして多くの人間が没義道・無惨にも殺された 911 の事件に[ソロモン神殿に通ずる比喩]が濃厚かつ異常異様に入れ込まれているとのが露骨に示せるといふならば [ソロモン神殿建立にまつわってのソロモン王伝承と悪鬼羅刹の関係性] とておよそ等閑に付すことはできまいと見るべきところとならう —]

上のこと、申し述べもしたうえで強調したいことだが、本稿にてのここより紙幅にてさして離れていないとの先行する段にては

[[ヘラクレスの柱] にも通ずるとの式で [ソロモン神殿の前に立つヤキンとボアズの柱 — ソロモン神殿の柱] が [現実世界で打ち崩されたツインタワー] と結びつくようになっている(しかも、異常異様なる予見事物の中に見受けられるところとしてそうもなっている)]

とも申し述べられるように「なってしまう」、すなわち、ソロモン神殿にまつわる相応の寓意の介在が — こともあろうに、[911の事前言及]を「これ悪魔的に」なしている文物にあつてのこととして一見受けられるようになってしまっているとのことにまつわっての具体的論拠らを — 「容易に裏取り可能。」との式にて — 例示しながらも挙げもしていた (※)。

※実にもってくどくなりもしての[確認表記]として

本稿ここ本段にての先行する部について述べてきたことにつき細かくも問題としていたところを割愛、また、順序も違え、振り返つての表記をなせば、次のようなことらを従前、 — [ソロモン神殿の柱]と[ヘラクレスの柱]と[911の予見事物]との関係性にまつわつての指し示しの中にあつて — 取り上げもしてきた。

A. 「 [ワールド・トレード・センターでのかの事件の発生の予見的言及] が [ヘラクレスの第 11 功業に登場する黄金の林檎] と直接的・間接的に結びつくとのかたちで具現化してきたとのことが「ある」 — そうもしたことがあるのがいかに異様なことであれ、とにかくも、【現象】の問題としてその具現化の指し示しがなせるようになっていたとのことが「ある」 —]

B. 「911の予見的物事らと結びついているとのこと、上のA.にて言及の【黄金の林檎】はヘラクレス第11功業に登場するものだが、そのヘラクレス第11功業に先立つヘラクレス第10功業にて打ち立てられたと伝わるのが[ヘラクレスの柱]である。そのヘラクレス第10功業にて打ち立てられた[ヘラクレスの柱]がフリーメーソンの間で著名なる著作—Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry—にあつて[ヤキンとボアズの柱](ソロモン神殿の前に立っていた柱)に文中明示されるとのかたちで仮託されているとがあり、また、歴史的図像群としてのヘラクレスの柱を描いたものら(たとえば『メルカトル地図帖』やフランシス・ベーコンの『新機関』という著作に認められるヘラクレスの柱と定置されるもの)の描写もソロモン神殿面前のヤキンとボアズのフリーメーソン「流」図像化法式と際立っての相似形を呈していることがある(であるから、メーソンの間で著名なる僅か一点の著述にとどまらないとの按配で[ヤキンとボアズの柱]⇔[ヘラクレスの柱]との関係性が幅広く導き出せるようになっている)」

C. 「(A.にて一言言及の)【911の予見物事らと結びついているとの黄金の林檎】は(往古海中に没したと伝わる伝説の)[アトランティス]とも濃密に結びつく指摘出来る[伝説上の果実]となる(黄金の林檎がたわわに実る果樹園がアトランティスと同一視されるだけの事情が複合的に存在している)。そこいうアトランティスの名を冠する著作がフランシス・ベーコンの著作『ニュー・アトランティス』となるのだが、そちら『ニュー・アトランティス』には[サロモンズ・ハウス]こと[ソロモンの家]という名の社会機構が望ましき文明をもたらすための存在、作品主題となる[理想郷実現のための装置]として描かれているとのことがある—(B.にて言及しているところとして「[ソロモン神殿の柱]は[ヘラクレスの柱]と結びつけられている」、そういうことがあるなかで(A.にて言及しているように)[911の事件に対する予見物事と多重的に接合する、ヘラクレスの求めた黄金の林檎]と結びつきもするアトランティスと[ソロモンズ・ハウスに主軸を置く著作]との接合性が見てとれるとのことがある)—」

D. 「直上のC.にて言及の『ニュー・アトランティス』は[ソロモン神殿の前のヤキンとボアズの柱状のもの(換言すれば、ヘラクレスの柱状のものでもある)の間に球体を配するとの構造]が口絵にて登場を見ている著作ともなる。そして、同様の構図—並び立つ二柱の間に球形オブジェを配するとの構造—が[ツイン・タワーの間に球形オブジェたるザ・スフィアを配する]とのかたちで災厄発生前のワールド・トレード・センターにあつて垣間見れたとのことがある。そうした[ツイン・タワーの間に球形オブジェたるザ・スフィアを配する]とのかつての現実世界でのありようと結びつくところとしてフィクションとしての911の予見物事、の中の、映画『ファイト・クラブ』(初出1999年)にては[(爆破対象としての)黄金色のオブジェ]が[ツインタワーの間に据え置かれていたザ・スフィア]と露骨なる視覚的類似性を呈しながら登場させられていたとがあり、また、その映画『ファイト・クラブ』に見るザ・スフィアのイミテーションの登場形式が欧州ルネサンス期にての[黄金の林檎]の描かれかたとも対応するようにさせられていたと指摘できてしまうとのことがある。そして、映画『ファイト・クラブ』、ワールド・トレー

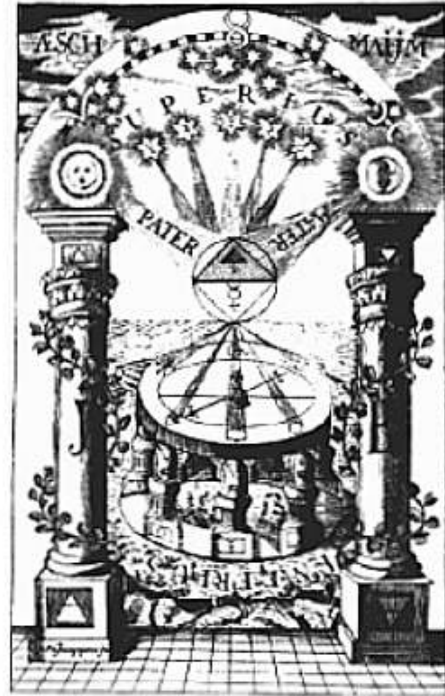
ド・センターであると寸刻描写にて名指しされているとことが特定出来る(但し、不誠実な輩にはデラウェア州ウィルミントンとも通ずると「的外れな」暴論も呈される) 一帯での[金融センター]を標的にしての爆破計画、劇中、[グラウンド・ゼロ]現出を企図してのものであると(グラウンド・ゼロとの言葉がそのままに用いられる中で)冒頭部より言明されている複数ビル爆破計画(尚、現実には911の事件でもワールド・トレード・センターで計七棟の高層ビルが倒壊した)にまつわっての同映画『ファイト・クラブ』内での描写がフリーメーソンのソロモン神殿の柱らを描いた図像らと「露骨に」対応付けされているとのことまでもがある(先に入念に図示なしてきたところであるが、再度の図示をすぐ後の段にてなしておくこととする)。ここでA.にて言及のこと—911の予見事物が黄金の林檎と結びついているとことがあること—を念頭にしたらうえてC.にて言及のことを繰り返すが、[黄金の林檎]は[アトランティス]と結びつくものとなってもする。そして、フランシス・ベーコンの『ニュー・アトランティス』という著作、[ソロモン神殿の前のヤキンとボアズの柱状のもの間に球体を配するとの構図](要するにソロモン神殿の眼前の描写と接合するような式での映画劇中内球体オブジェ爆破シーンに関わるところのザ・スフィア、映画『ファイト・クラブ』でそのイミテーションが黄金の林檎と結びつくようなかたちで登場し、爆破されているとの現実世界のツインタワーの間に据え置かれていたザ・スフィアのありようを想起させる構図)が口絵として現われているとの同著—ソロモンの家による文明発展を描く作品たる同著—はタイトルからしてアトランティスという名を冠している著述である]

以上のA.からD.のような流れで指し示せるようなことは「一例として」問題になることを先行する段にて取り上げてきたことを「くどくも」繰り返し再言なしているとのものであるが、同じくものが以下のことと相通じるようなところがあると判じられるから問題になる。

「旧約聖書に[おおよその名君]として登場してくるソロモン王という存在が歴年、悪魔の類と色濃くも結びつけられてきたとのことに現代社会に通ずる意味性がまったくないと考えるのは賢明なやりようではない。それにつき、(現実世界にあってのツインタワー崩落が[ソロモン王による悪鬼使役の成果として建立されたとも伝わるソロモン神殿の柱]の寓意の具と「露骨」かつ「悪質極まりなく」結びつけられているとの指し示しがなせるとの式で)意味性が見てとれるのであるから、[ソロモン王の悪鬼使役の話に現代社会に通ずる寓意性が込められているとの見立て]はおおよそ等閑に付すことなどできなきものとなろう」

これにて何が問題になるのか、おおよそもって理解していただけるものか、と期す次第である。

さて、直上までの話を受け、以下呈示の図の内容を問題視する。



Solomonic column

前掲図[左上]の部に配しての図像は Project Gutenberg サイトに公開されている 20 世紀前半、1921 年初出の、

The Story of Mankind (『人類の物語』)

という書籍、世の中のことがいまだよく分かっていないとの若年者を読者層として想定して「人間の「表向きの」歴史」を簡明に綴っているとの Hendrik Willem van Loon という著述家がものした前世紀初頭 (20 世紀初頭) 初出書籍の「扉絵」となる (: 尚、同著 The Story of Mankind も Hendrik Willem van Loon もある程度知名度が高くもあったと伺い知れ、[書籍名]および[著者名]とのことでそれぞれ英文 Wikipedia に一項が設けられている)。

同『ザ・ストーリー・オブ・マンカインド』扉絵にては

「蔦が絡まるような形態での二柱の柱」

が『ニューヨークのマンハッタンか』と見える都市 一比定されるものを顧慮すると摩天楼が海港に現

出しているとのことでマンハッタンぐらいいしか想起されないとの都市— を支えている姿が見受けられるわけであるも、といった構図は前掲図にての[右上]にて(再掲なしで) 呈示している、

[1779年初出の『賢者の羅針盤』にて典型的似姿が描かれてもいるヤキンとボアズの柱らソロモン神殿の柱 —[蔦が絡まるような形態での二柱の柱]— ら]

と[顕著な構造的類似性]を呈するものともなっている(とにかくもって図のありようから判断いただきたい)。

そうしたこと、20世紀初頭に世に出た著作にニューヨーク摩天楼がソロモン神殿の柱(の類似物)に支えられているとの構図が見受けられるのは(恣意なきところの[構造的類似性][視覚的類似性]にとどまらず)[計算されての挙動]である可能性がある。

というのも、フリーメーソンの間には

[ソロモン神殿(特徴的な二本の柱で表象される神殿)こそが社会(フリーメーソンが理想とする社会)の基礎である]

との発想法が存在しており、そうしたメーソン思潮との相関性が問題になるところとして初期のフリーメーソンの紐帯の大立者とも表される(先述)とのフランシス・ベーコンがその著書『ニュー・アトランティス』にて 一本稿の[出典\(Source\)紹介の部 52](#)にあって既述のように—

[サロモン(ソロモン)の家]

という[文明の構築機構]([人間の歴史;問題となる絵を扉絵として挙げている書籍書名に見るザ・ストーリー・オブ・マンカインド]そのものを適正・理想的に導く存在でもいい)を登場させているとのことがあるからである(:高度に発達した文明に至るまでの道筋が[ソロモンの家]によって実現されるとのそうした『ニュー・アトランティス』発想法が[文明の発達は[ソロモン神殿の柱]で支えられている]との式によって表記の西洋の歴史を(原始時代に遡るところとして)綴っているとの著作である The Story of Mankind『人類の物語』(1921)の図像ありように影響を与えているとのこと、そうしたことは[さもありません]と述べたいのである)。

ここで物事の先後関係に基づいて考えれば、表記著作 The Story of Mankind に認められる人間世界を支える柱が先の2001年の事件で崩されたツインタワーと結びつくようにまで計算されたものであるとは「無論にして」考えられ[ない]ところなのだが(日系人ミノル・ヤマサキに由来するワールド・トレード・センターのグランド・デザインが正式採用されたのは[1962年]のこととされている —英文 Wikipedia[Construction of the World Trade Center]項目に見る “ On September 20, **1962**, the Port Authority announced the selection of Minoru Yamasaki as lead architect, and Emery Roth & Sons as associate architects. ” というのが世間的説明となっている— なかで表記の著作『ザ・ストーリー・オブ・マンカインド』が世に出たのは[1921年]であるからである)、ただし、ソロモン神殿の柱が両者デザイン(『ザ・ストーリー・オブ・マンカインド』という1921年著作の中の描写及びツインタワーのデザイン)の共通基盤になっている、あるいは、そうした寓意性を用いてのやりようをとるとの[方針]が(専らにして[人形]では無く[人形遣い]の方に)「ある」と考えることは出来もする、いや、というより、そういうふう自然に判じられるところとなってもいる。

(説明を続けるとし、)「というのも、上掲図の下段にてその描かれようの一例を指し示しているとの、

[ソロモン神殿の柱] (ソロモニック・コラム)

をツインタワーに仮託して崩すとの意思表示の式が(計算尽くのものであろうとの按配にて)[存在していること自体が異常異様なる予見的文物「ら」ありよう]を通じて浮かび上がってくるとのことが「ある」(再三再四申し述べてきたところとしてそうしたことが「ある」)からである —※尚、上掲図にての下段にて呈示しているソロモン神殿の柱は英文 Wikipedia[Solomonic column]項目にも掲載されているとのルネサンス期巨匠ラファエロの手になる画にて具現化を見ている構図となる。その点もってして[ソロ

モン神殿の柱]と呼ばれるものがソロモン神殿正面に立つヤキンとボアズの柱に限られるのか、と述べれば、必ずしもそうではなく、[ソロモン神殿を支えていたとの多数の柱]をもってしても[ソロモン神殿の柱]とすること「も」あるとされており、そのような集合的存在としてのソロモン神殿の柱のデザインは(英文 Wikipedia[Solomonic column]項目によれば) spiraling twisting shaft like a corkscrew 「(ソロモン神殿の柱は)コルク栓抜きのように螺旋構造でねじれてのかたちを呈する」といったありようで描写されることが多いとされる(前掲図下段の呈示の画などはその式での[ソロモン神殿の柱]を描いているものとなる。また、メーソン・シンボルを体現してのものとされていることを紹介の上掲の『賢者の羅針盤』(右上の部にて呈示)にあってのヤキンとボアズの柱および 1921 年初出書籍『ストーリー・オブ・マンカインド』にみとめられる柱らの双方ともが「蔦が螺旋形態で絡まっている」との式でそうした形態を表象しているとのこともあろうかと見えもするところとなっている)一。

直上取り上げもしたことにに関して補うべくものことをここに表記しておく。
まずもって以下のことを顧慮いただきたいこともある。

■ 欧州・中東にあっての「中世の」人間は「一神教」(ユダヤ教・キリスト教・イスラム教)の信奉をほぼ全員がなしていたわけであるが、一神教にほぼ全数が浸りきっていた彼ら中世人の視点にあっては、いや、のみならず中世人宗教的観点を受け継ぐ現代一部宗教観にあっては「エルサレム」こそがまさしく「世界の中心」のように見られてきたとのことがある(そうも見られてきたことの典拠については下に図を付しながら解説する)。

■ エルサレムが「世界の中心」として見られてきたとして、である。その世界の中心たるエルサレムにあって今日にあっての一神教の信奉者らにとつての最大の聖地らとされているものらは元を辿れば
「ソロモン神殿」

であったとのことがある(：イスラム教教徒にとってメッカのカアバ神殿と並び最も重要視される聖地ともなる「岩のドーム ーイスラム教開祖ムハンマドが天の導きでメッカのブラックストーン(黒石)の在所たるカアバ神殿から瞬時に移動したとされる聖地ー」も元を辿ればソロモン神殿の遺構の上に拠っていること、また、ユダヤ教教徒にとって最も重要視される聖地「嘆きの壁 ーソロモン神殿が崩壊の後、復興拡張されたエルサレム神殿の今日、残存している部分であり、往古の宗教センターとの立ち位置から今日に至って聖地とされている場ー」も元を辿ればソロモン神殿の遺構それそのものであると)のことがある;表記のことについては欧米圏にあっては一般教養に留まる程度のことであるため、ウィキペディア程度の記述を引くに留めておくが、現行にて和文ウィキペディアにあって(以下、[エルサレム]項目より引用なすとして)“嘆きの壁はユダヤ人地区の東端にある。嘆きの壁の上はムスリム地区に属し、神殿の丘と呼ばれる、かつてのエルサレム神殿の跡で、ここにはイスラム教の聖地アル＝アクサー・モスクやイスラーム建築の傑作とされる岩のドームが建っている。岩のドームにはムハンマドが旅立ったという伝説があり、地下には最後の審判の日にすべての魂がここに集結してくるとされる「魂の井戸」がある”(引用部はここまでとする)と書かれておりもし、英文 Wikipedia[Temple in Jerusalem]にて(掻い摘まんで引用なすとして)“The mount bears significance in Islam as it acted as a sanctuary for many Hebrew prophets. **Islamic tradition says that a temple was first built on the Temple Mount by Jacob and later renovated by Solomon, son of David. In addition, it is considered to be the site of**

the Prophet Muhammad's Night Journey (Isra and Mi'raj) and his ascent into Heaven - one of the most significant events recounted in the Qur'an. ” 「(エルサレム神殿が建っていたとの) 神殿の丘はヘブライ系(ユダヤ系)の預言者らにとってそうあったようにイスラムにあっても重要な意味をなしている。イスラムの伝統にあつてはエルサレム神殿はまず最初に神殿の丘にヤコブによって建築され、後にダヴィデの子たるソロモン王によつての改築修繕を見たとされている。加えて、イスラムの伝統では神殿の丘のある場は「預言者ムハンマドが[夜の旅]をなし、天に昇つた」とのコーランにおける最も重要な出来事とされているとのその出来事の舞台とされている(から the Dome of the Rock[岩のドーム]の構築に繋がつた)」(引用部訳はここまでとする)と書かれていもする)。

上のことらをまとめて端的に述べれば、

「[ソロモン神殿とは、][世界の中心]と歴史的に見られてきた地(エルサレム)にあつて今日に至つてもなお、**【大宗教らの最大の聖地】**とされている存在となる」

と形容できるところとなっている。

といった視点に基づいて換言なせば、

「[ソロモン神殿](に仮託されるもの)を崩す」とのことは「[世界の中心]にあつての人類史上、極めて重要視されてきた象徴を破壊する」とのことに等しい」

とのことになる。

そして、長大なものとなっている本稿ではこここれに至れりの段までにて

「[ワールド]・トレード・センター」で崩された[双子の塔]がいかようにして[ソロモン神殿を表象する二柱の柱ら]と質的に結びつくと述べられるようになっているのか(そも述べざるをえないようになっているのか)

とのことについての委細を細かくも一属人的主観など問題にならぬとのことを強調できるとのかたちで— 示さんとしてきたとのことがある。

であるから、**The Story of Mankind (『人類の物語』)**の扉絵に見る摩天楼・摩天閣ら一同著が刊行された往時、1921年にはそれに視覚的に代替するところがニューヨークはマンハッタン以外にあったのか、とのことともなる扉絵に見る高層ビル「群」の領域— を根本から支えるものとして

「蔦が巻き付き、ソロモン神殿の柱(ソロモニック・コラム)の表象物と自然に受け取れるもの」

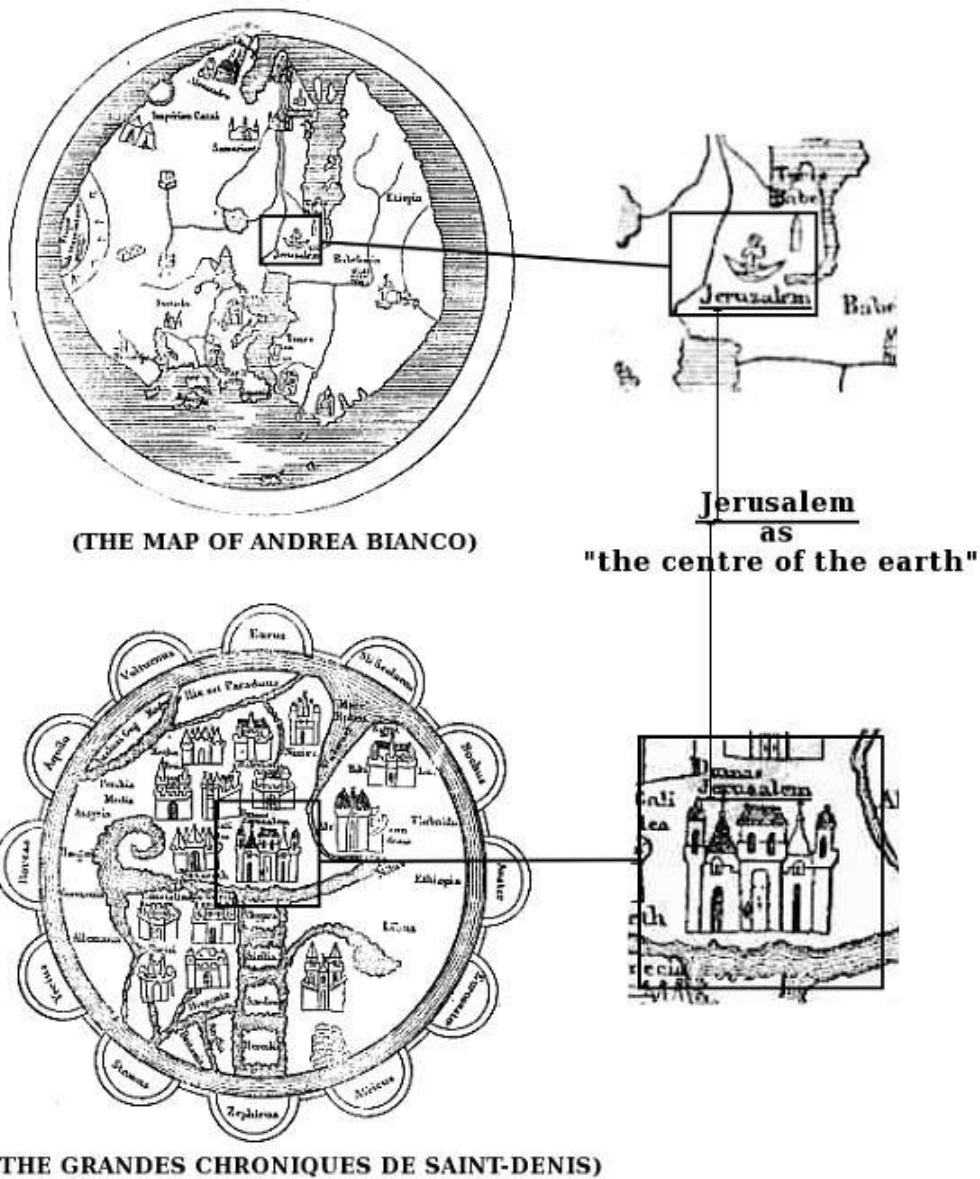
が描かれている意味性を**【(近年の)ツインタワー崩壊】**との観点で見た場合に、

「世界がそれに拠つて立つ(と宗教というものに基づいて人間が信じきつてきた)[世界の基盤]を破壊する」

との寓意が— 過去と現在の象徴のありようを通じて— 自然に導出されもする(ように「なつてしまつている」)。

([エルサレムが「世界の中心」と見られてきた]ことについて)

下図をご覧戴きたい。



以上呈示の図は

[英文情報に強き検索エンジン上でタイトル入力さえすれば、オンライン上より労せずその内容を「全文」確認出来るようになっていたとの Project Gutenberg のサイトにての公開著作、1877年刊行の **Astronomical Myths, based on Flammarion's "History of the Heavens"** 『カミーユ・フラマリオン著述『天の歴史』に依拠しての天文上の神話ら』に掲載されての図葉「ら」を挙げてのもの] (より具体的には、の中の、Fig.46.および Fig.49.と挿絵番号が付された部を挙げてのもの)

となる — よりもって具体的には図内キャプションにても出所として言及しているように、The Map of Andrea Bianco『アンドレア・ビアンコの地図』および The Grandes Chroniques de Saint-Denis『サン＝ドニ大年代記』らの歴史的資料らにそれぞれ掲載されている図葉ら(中世人の世界観を体現しての図葉ら)を挙げてのものとなる — 。

それら呈示の図らを一目いただければ、分かるか、と思うが、(イエスが磔刑に処せられたと伝わる場にしてソロモン神殿と結びつく各宗教の聖地がある場でもある)エルサレム Jerusalem が[世界の中枢]に据えられているとの構図がそこには見てとれる(尚、さらに下にそれにまつわっての典拠を呈示するが、一部中世識者より「この世界は卵のようなありようを呈しており、その卵の頭頂部こそがエルサレムである」との世界観すらもが人類の歴史では目立って鼓吹・唱道されてきたとの史的背景がありもする)。

上にて呈示の図像らにもそうした観点が反映されているとのこと、

[エルサレムが世界の中心として見られてきたとのこと]

については無論、容易に確認させるだけの「視覚描写ではなく字面にての」文献的根拠がそこら中に見受けられるようになっており、たとえば、上にて図のソースと挙げもした Project Gutenberg サイト全文公開著作、

Astronomical Myths, based on Flammarion's "History of the Heavens"

にあっても以下のように記されている。

(直下、Astronomical Myths, based on Flammarion's "History of the Heavens"にあつての CHAPTER X. COSMOGRAPHY AND GEOGRAPHY OF THE CHURCH.より原文抜粋するところとして)

The celebrated Raban Maur, of Mayence, composed in the ninth century a treatise, entitled De Universo, divided into twenty-two books. It is a kind of encyclopedia, in which he gives an abridged view of all the sciences. According to his cosmographic system the earth is in the form of a wheel, and is placed in the middle of the universe, being surrounded by the ocean; on the north it is bounded by the Caucasus, which he supposes to be mountains of gold, which no one can reach because of dragons, and griffins, and men of monstrous shape that dwell there. **He also places Jerusalem in the centre of the earth.**

「名高きマインツのラバン・マウル (訳注:ラバヌス・マウルス・マグネンティウス/9世紀にあつての卓抜したキリスト教神学者と伝わっている向き)の12世紀刊行の著作 De Universo は22巻に分かたれもしており (訳注:そちらは日本語では『宇宙についての二十二巻本、あるいは語源に関する著作集』(De universo libri xxii., sive etymologiarum opus) または『事物の本性』との題で言及されもするとのことがある著作となる)、同著、一種の百科全書的ありようを呈しもしており、著者ラバヌス・マグネンティウスの科学にまつわる観点を要約しもしたものとなっている。彼ラバヌス・マグネンティウスの宇宙観にあつては地球は[車輪状の形態]となっており、そうもした地球が宇宙の中心に位置しもしながら大海に囲まれもし、そのコーカサス山脈にいだかれた北部にあつては竜ら・グリフォン(注:鷲と獅子が混合した似姿をとる伝承上の存在)ら・怪物のような似姿の人間達らがゆえに人跡未踏となっているとの黄金の山々があると想定されもしていた。そして、彼ラバヌス・マグネンティウスはエルサレムこそが世界の中心であると見なしていた」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

同様のこと —エルサレムが世界の中心と見られてきたとのこと— については次のような一般的解説のなされようがなされていることも容易に特定できる(その気がある、そう、自身を取り巻く状況を把握するだけの最低限の意志の力があるのならばだが、容易に特定できる)ところとなりもしている。

(直下、[魂の井戸 —イスラムの伝承にあって全ての魂が[最後の審判]に備えて集められていると伝わっているとの[岩のドーム]の地下の領域—]にまつわる解説がなされているところの英文 Wikipedia[Well of Souls]項目にあっての「現行にての」記述内容を一部、引くとして)

Both Jewish and Muslim traditions relate to what may lie beneath the Foundation Stone, the earliest of them found in the Talmud in the former and understood to date to the 12th and 13th centuries in the latter. **The Talmud indicates that the Stone marks the center of the world and serves as a cover for the Abyss (Abzu) containing the raging waters of the Flood.** The cave was venerated as early as 902 according to Ibn al-Faqih. **Muslim tradition likewise places it at the center of the world and over a bottomless pit with the flowing waters of Paradise underneath.** A palm tree is said to grow out of the River of Paradise here to support the Stone. Noah is said to have landed here after the Flood. The souls of the dead are said to be audible here as they await the Last Judgment.

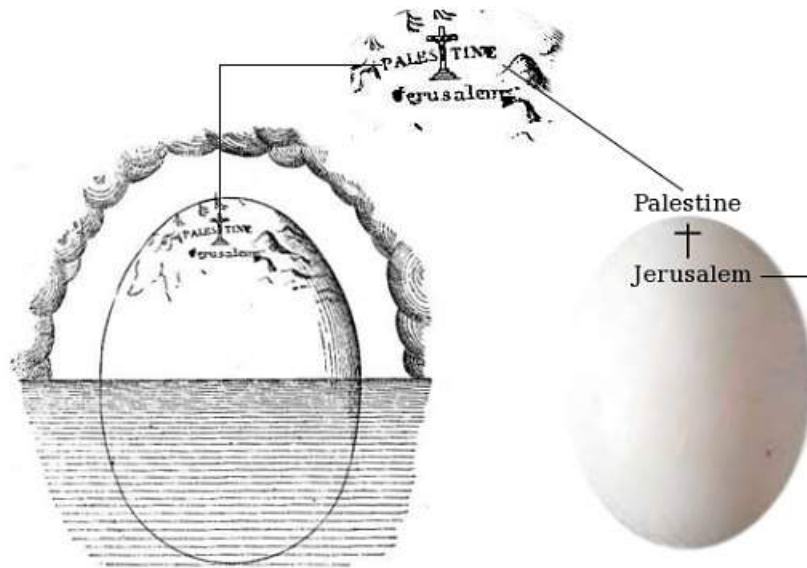
(補いもしての拙訳を付すとして)

「ユダヤ教教徒およびイスラム教教徒の伝承の双方が[(岩のドームの)礎石の下に何が存在するのか]とのことと関わりもしており、そうした伝承の最も早期のものはユダヤ教教徒由来のものにあってはタルムードにみとめられ、イスラム教教徒由来のものとしては12-13世紀にみとめられるところとなっている。タルムードが指し示すところでは[岩のドーム] (訳注:一般教養の問題として[岩のドーム]とはエルサレムに存在するイスラム教の主要なる聖地のことであり、同じくソロモン神殿の跡地に位置するユダヤ教の聖地[嘆きの壁]と接地している)の礎石は[世界の中心]をなすものとなっており、[洪水の根源となる荒れ狂う水を擁するアビス・アブズー] (訳注:中近東の伝承における膨大な水をたたえた地下の領域)の蓋]としての役割を帯びているものとなっている。Ibn al-Faqihによると早くとも礎石が存在している穴の部は902年には崇拜の対象となっていた。イスラム教の伝統でもユダヤ教のそれと同様に世界の中枢と見立てており、そして、天国に由来する水をたたえる底無しの穴のことが観念されていた。にあっては死後の天国に由来する川より生じもしているヤシの木が[礎石]を支えているとされもし、ノアは洪水の後、ここに降り立ったのだともされている。(同文にイスラムの伝承では)[礎石]のある場にて死者らの魂の声が最後の審判を備えているとの恰好で耳に入ってくるともされている」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

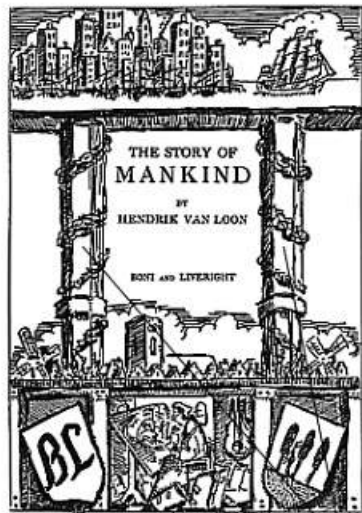
(以上をもってしてソロモン神殿 —その遺構がユダヤ教の聖地[嘆きの壁]になりもし、イスラム教の聖地[岩のドーム]ともなっているとのエルサレム神殿— をその宗教上の核たる場所として据えるエルサレムがいかように[世界の中心]と見做されてきたのかの紹介とした)

次いで、以下の図をご覧ください。

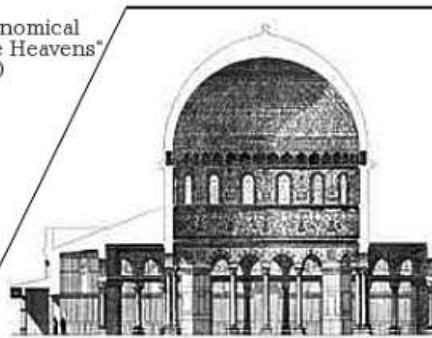


the world as an egg

(extracts from John F. Blake, 1877, *Astronomical Myths, based on Flammarion's "History of the Heavens"* (distributed by Project Gutenberg))



(above mentioned) Solomonic Columns



the Dome of the Rock

Temple in Jerusalem

Solomon's Temple

上掲図[左上]は[世界の中心]と見られてきたとのことについて先述のエルサレムが[[卵]としての世界にてその頭頂部に据えられていもする領域]となりさえしていることを示す図となる(卵状の世界を描いての図の出典は先立って引用なしたところの1877年初出の著作、*Astronomical Myths, based on Flammarion's "History of the Heavens"*『カミーユ・フラマリオン著述『天の歴史』に依拠しての天文上の神話ら』に掲載の図葉、より具体的には同じくもの著作にて Fig. 43.と付されての図ともなる)。

さて、直近にても引用部を通じて言及なしているように図に見る、

[聖地エルサレム —卵としての世界の頭頂部に定置されるような重要性をもって見られてきた場— にての宗教上の中枢地域となる岩のドーム]

はかつての[ソロモン神殿]のあった場所に建っているとのものであり(これまた上にて基本的な言われようを引用なしているところである)、また、そちら岩のドームもイスラム教徒にとって[世界の中心]と見られているものである。先述のようにその地下に[最後の審判に備えてこれまで生きた人間の魂らが集められている魂の井戸(なるもの)]が存在しているともされるようなものとして、である —といった[岩のドーム]の外観としては金メッキが施されたドームの部が極めてよく知られているが(岩のドームありようにつ

いてはほとんど[一般教養]の問題であろうかと思う)、上掲図では英文 Wikipedia [Dome of the Rock] 項目にて掲載されている考古学者兼画家であったとのフレデリック・ギャザーウッドの手になる近代にての[岩のドーム]の構造解析図の抜粋を前掲の図 [右下] の部にてなしておいた。

イスラム教にあってカアバ神殿と並び最重要視されている聖地[岩のドーム]、[世界の中心]ともされるその宗教上のアイコンの前身となっているのが[ソロモン神殿]となるわけだが、同ソロモン神殿にあっての柱(いわゆるソロモニック・コラム)を前世紀前半より [ニューヨークの摩天楼・摩天閣] と結びつけている観ありとの扉絵を伴っての 1921 年初出著作があるとのこと、そして、そうした著作 ([人間の歴史] それそのものを教科書的・常識的側面でのみ総括しているとの著作ともなり、Project Gutenberg のサイトを通じて全文確認できるとの The Story of Mankind 『人類の物語』) に見る視覚描写とともが [ニューヨーク摩天楼の領域にて崩された双子の塔] と結びつく節があるとのこと、そうしたことの意味性をも思索対象としているのが本稿となる (くどくも繰り返すが、第一に 1921 年初出著作『ザ・ストーリー・オブ・マンカインド』に見る(マンハッタンのように摩天楼をいただく海港を支える) 二本の柱はそちら形状よりソロモンの柱 — 先述のように蛇行形状とも結びつくことされる柱 — を想起させる構図のものとなる。他面、第二に、ニューヨークにて 1962 年より建築物としてのデザインが定まったツインタワーは後の 1999 年に封切られた映画(『ファイト・クラブ』)の寸刻描写の中などで — フリーメーソンのシンボル画構図との兼ね合いで — 露骨にソロモンの柱に仮託されていたと判じられるようなものとなっている)。

ここまできたところで以下のような図を内容整理すべくものものとして挙げておくこととする。

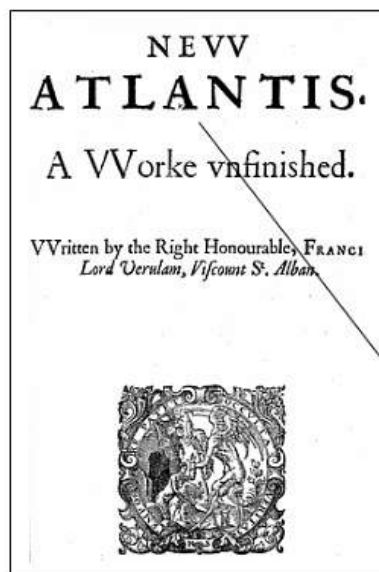


Illustration seen in Francis Bacon's New Atlantis

main motif

Salomon's (Solomon's) house as an incubator for more advanced civilization



Incubation

上図像はフランシス・ベーコンの著作である New Atlantis 『ニュー・アトランティス』、[ソロモンの家]を
 [文明の孵卵器(インキュベーター)]

として登場させているとの同著作『ニュー・アトランティス』の性質を示し、また、同著作の中に(これまで
 問題視してきたように)[柱の間に球体オブジェを配するとの構造]が具現化を見ていることを再強調す
 ために挙げたものとなる (：委細については先行する段の内容を参照いただきたい。尚、同
 『ニュー・アトランティス』表紙部には[ローマの土星体現神格サターン(サトゥルナス)]ないし[時の翁]
 と解される存在、鎌を持つ存在が描かれているが、そちらを[翼を生やし鎌を持った老人]として描かれ
 る[時の翁](ファーザー・タイム)と解すれば、[時の翁]が表象するところの時果つるところ、[死]が連
 想されることになる)。

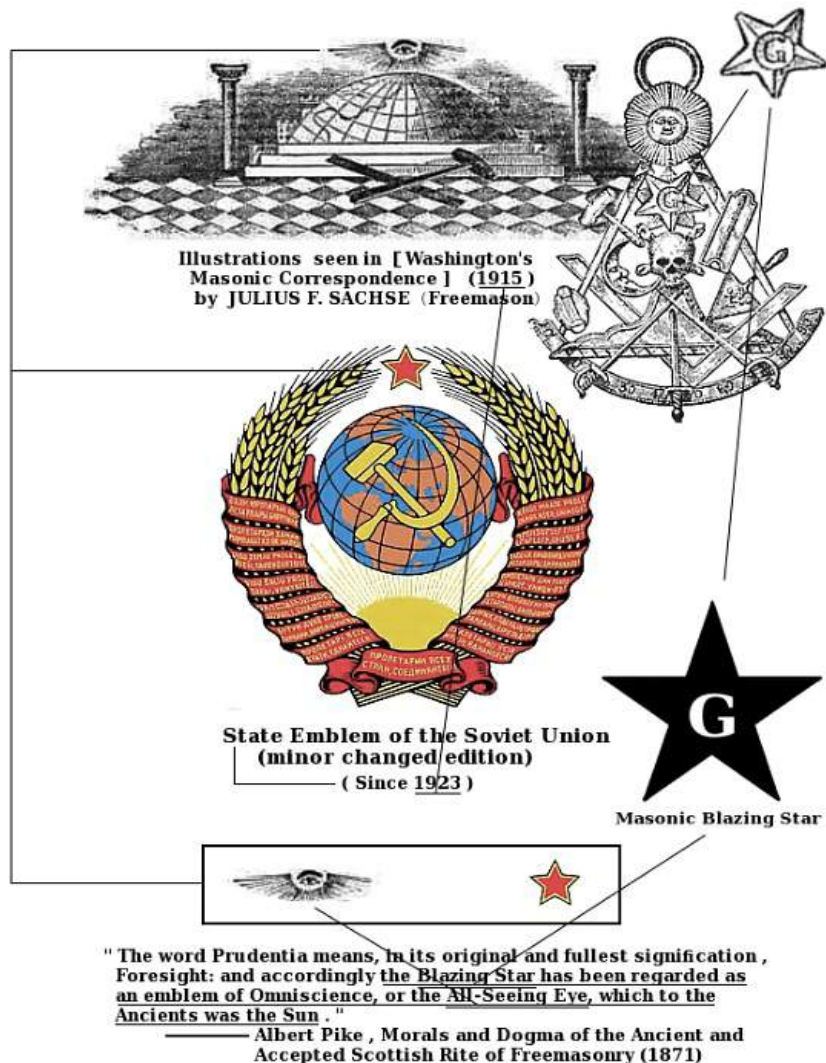
ここまで来たところで先述のこと、

【ソ連国章】(1923年制定の国章)と【フリーメーソン・シンボリズム】(たとえばのものとして1915
 年初出の Project Gutenberg 全文公開のメーソンらの手になる Washington's Masonic
 Correspondence (1915)との著作より抽出したシンボル)が — まるでソ連国章が先行して世に
 出ていたフリーメーソン著作に見る組織シンボリズム体系を多重的に踏襲しているようであるとの
 「時期的に問題となる式で」 — 視覚的に結びついている]

[上記のことに関しては【予言が如きものをもたらす力学 —(含む:911の予言)— の介在】で
 もってそうもなっていると想定できるだけのことがある]

とのことに話の方向性を回帰させる。

再掲しての下の図をご覧ください。



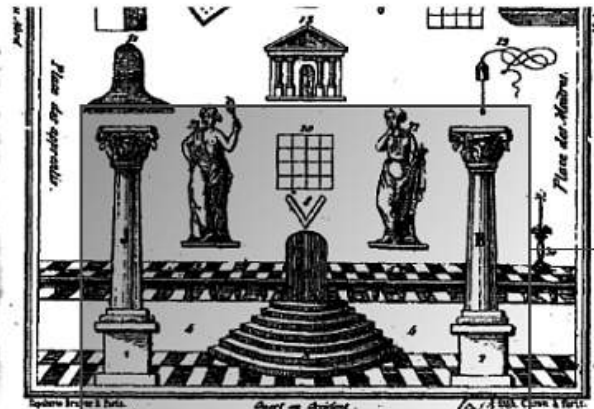
上掲図が具体的にどういったかたちでのシンボル上の視覚的かつ意味論的な連続性を多重的に示しているのか、また、それら連続関係が何故、「時期的先後関係の兼ね合いで」問題になるのかについては 一図内部に付してのキャプションの部の読解からだけでも大体は理解いただけることかとは思いますが— その委細を先の段に譲る。譲ったうえでフリーメーソン・シンボリズムとソ連国章が接合性を呈しているとのことについて [ソロモン神殿の寓意] が介在していると申し述べられるようになっていたことを訴求すべくもの図を下に挙げる。



Illustration seen in Francis Bacon's New Atlantis

main motif

Salomon's (Solomon's) house as an incubator for advanced civilization



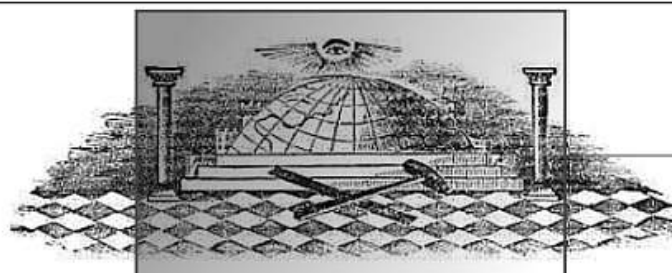
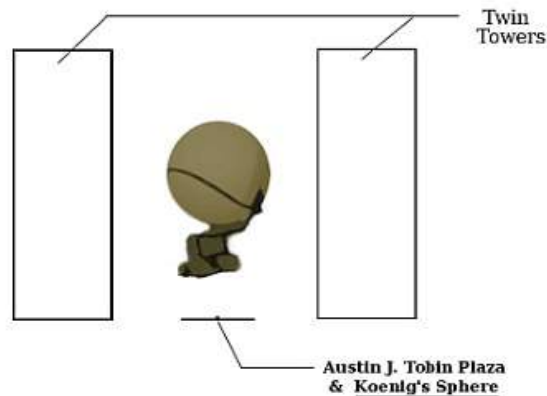
INDICATION DES OBJETS qui composent ce Tableau.

- 1 La Colonne Jachin.
- 2 La Colonne Boaz.
- 3 Les 7 marches mystérieuses.
- 4 Les murailles du Temple.
- 5 L'aplomb.
- 6 Le portail de la chambre intérieure.
- 7 La pierre cubique.
- 8 La fenêtre du midi.
- 9 La Vérité.
- 10 La fenêtre d'Orient.
- 11 Le Soleil.
- 12 La Lune.

Jachin & Boaz of Solomon's Temple

(DVD [Fight Club] time-record (sold in Japan edition) [1:45:44] - [1:45:55] scene)

- ① blasting away with explosive
- ② rolling down to the chess-board-like-space



上の図解部は従前呈示のものに多少アレンジ加えての再掲図であるが、といったものとしての同図解部で指し示したきことについては先立っての映画作品『ファイト・クラブ』に伴う事前言及の特質を問題視するとの段で解説しもして「いた」ところとなる(該当部はそれ単体だけでもかなりの文量を割いてのところとなっている本稿にての**出典(Source)紹介の部 105**の部となる)。

簡略化して述べれば、上掲図にあつての最上段にて呈示している図ら、すなわち、

(右上)[フランシス・ベーコン著作『ニュー・アトランティス』に掲載の口絵]

(左上)[Le Sanctuaire de Memphis という著作(フリーメーソンにてのメンフィス儀礼の構築に功あったとされる人物 Jacques Etienne Marconis de Negre が 19 世紀に著した伝説著作)に掲載のメーソン・シンボリズム要覧図]

らを引き合いに従前、大要にして次のことを訴求してきたとことがある。

映画『ファイト・クラブ』にあつては「噴水の中に据え置かれた」「巨大な」「黄金色を呈しての金属製の」【球形オブジェ】が爆破されて[チェス盤上のスペース]に向けて階段を転げ落ちていくとの描写がみとめられる(上掲図にあつてはその【中段部[左部]】にあつて映画劇中にてのそちらプロセス — 球形オブジェが時限爆破されて転げ落ちていくとのプロセス — の再現図を再掲しもしているが、**出典(Source)紹介の部 105**にて主として解説しているように映画『ファイト・クラブ』にあつての国内流通 DVD における本編開始後【1 時間 45 分 44 秒】から【1 時間 45 分 55 秒】の箇所にて見てとれるシーンがそれ絡みのシーンとなる)。

他面、現実世界ではワールド・トレード・センター、そのオースティン・トービン・プラザにあつてツインタワーの間に据え置かれるとのかたちで「噴水の中に据え置かれて」「巨大な」「黄金色を呈しての金属製の」【球形オブジェ】たるザ・スフィアという著名オブジェが設置されていた(上掲図【中段[右側]】の図はそのワールド・トレード・センターのオースティン・トービン・プラザのザ・スフィアを巡る位置関係を簡略表記したものと成る。それにつき、先の**出典(Source)紹介の部 102(4)**以降の段で詳述してきたことだが、ワールド・トレード・センターにあつてのツインタワー敷設スフィアについては視覚的に映画『ファイト・クラブ』のそれ — よくもこのような大がかりなセット(コンピュータ・グラフィックスの部の配分は分からない)を用意してまでこさえたものだ、と思えるような堂の入りようの球形オブジェ — と[ほぼそっくりなもの]となっている)。

さて、映画『ファイト・クラブ』の球形オブジェ — 現実世界のワールド・トレード・センターのツインタワーの合間にあつたザ・スフィアのイミテーションそのものと述べても何ら差し障りなきもの — の爆破描写は、(先だつて指摘してきたことをこれまた繰り返すが)、

[独特なる段差(ステップ)の部を経て玉をチェス盤模様のスペースに向けて転がす]

ものとなつていたのだが、フリーメーソンの象徴主義ではそうした構図と際立っての同一性を呈しているところとして、(上掲図【上左部】の[Le Sanctuaire de Memphis という著作に掲載のメーソン・シンボリズム要覧図]に認められるように)、

[ステップ(小階段)]・[二柱の柱たるヤキンとボアズ]・[チェス盤模様の床]がワンセットにされている]

とのことが「頻用されるとの式で」見受けられるようになっている — 上掲図にての【下段】の部分でも同様の構図(Washington's Masonic Correspondence (1915)との書籍から抽出したとのフリーメーソンシンボル画にみとめられる構図)が認められるところである。また、本稿では同じくもの構図に関わる他の例としてトレーシング・ボードにまつわる図葉を挙げたりもしている — 。

従って、**「実際に露骨に照応するものとなっている」との「映画『ファイト・クラブ』に登場の球形オブジェ」および「ツインタワーのザ・スフィア」らにあってのツインタワーの位置付けを顧慮すれば、ワールド・トレード・センターのツインタワーというものは** — (『ファイト・クラブ』のザ・スフィア・イミテーションの爆破シーンがそれと視覚的に完全に対応するようになっている(上にて再度呈示の図をきちんと見ていただければお分かりいただけるように、[ステップ(小階段)]・[二柱の柱たるヤキンとボアズ]・[チェス盤模様の床]との共通モチーフで対応するようになっている)との意味合いで) — **【ヤキンとボアズの柱】の仮託物となつてもいるとの観点が導出されることとなる**(:理由となるところとしては、である。他にもここまでそれらのことにまつわる図を数多挙げながらも解説してきたところとして【ヘラクレス功業にまつわるシンボリズムを介しての接続性】や【フリーメーソン象徴主義に塗れた他の[前言]作品の性質の問題】などなどもある)のであるが、ここで再度取り上げている一貫性問題それひとつとてからしてツインタワーがヤキンとボアズ仮託物となっているとの観点が導出されるありようとなっている)。

以上、先の訴求事項を繰り返しもしてのことに言及したうえで書くが、筆者は

「ソ連という統治体もまた[文明のインキュベーター]として構築された国家であろう」

と見ている。そうも述べることに何ら飛躍はない(と強調したい)。

というのも、

【ソロモン神殿】(の正面に配されてのヤキンとボアズの柱)

の寓意でもって[彼ら流の神]の意向に基づき望ましき世界(と刷り込まれている節ある社会ありよう)の構築を謳ってきたのがフリーメーソンという団体となるわけであるが(フリーメーソンを[神なき宗教]であると誤解してとらえる向きもあるようだが、本稿にての**出典(Source)紹介の部 106(6)**で The Symbolism of Freemasonry: Illustrating and Explaining Its Science and Philosophy, its Legends, Myths and Symbols. (1882)とのオンライン上より全文確認となっている著作より引いたところとして “ The Masons that are in it are not occupied in thinking, or speculating, or reasoning, but simply and emphatically in working. The duty of a Mason as such, in his lodge, is to work. Thereby he accomplishes the destiny of his Order. Thereby he best fulfils his obligation to the Grand Architect, for with the Mason laborare est orare—labor is worship. ” 「メーソンは[思索]・[推察]・[理由付け]に専心するものではなく、ただ単純に、そして、強調されるところとして[活動すること]に専心しての存在となる。それによって、メーソンはおのれに課された[オーダー]を完遂するのである。それによってメーソンは[偉大なる設計者](グランド・アーキテクト)へのおのれの義務を充足させるのである。何故なら、メーソンにとり[労働は崇拜(laborare est orare)]であるからである」(引用部はここまでとする)とメーソンらには定置されているようなところがあり、彼らは自分達が熱烈な[信仰心に近い感覚]で動かされていると自認したりしている)、といったフリーメーソンの紐帯に多分なる影響を与えた(一般論にて)述べられているところの思想家フランシス・ベーコンの著作に見る、

【文明の促進機構としての「ソロモンの家」】

に通ずるところの寓意がソヴィエト連邦の国章にもまた「視覚的に」反映されているとのことが[現象]としてそこに「ある」、だからこそのここまでの迂遠なる繰り返しが多分に含んでの説明となる(そうも述

べるところのありようについてまだ理解が及んでいないとの向きはフランシス・ベーコン著述『ニュー・アトランティス』扉絵に見る柱の間の球形オブジェ構図を上掲図にあつて呈示しているとの部位、そして、それがフリーメーソン・シンボリズムと接合していることを 一とにかくもつて図の注視を通じて一 確認いただきたい(本稿のつい最前の段までにて『ニュー・アトランティス』に関して述べてきたことを顧慮のうえで確認いただきたい)。

そのように指摘しても物事を表層的にしか見ないと人間 (何ら物事を検証する能力もない、また、意思もないところで話を聞こうともしない機械のような者は問題外である中で物事を見ようとするとのことはある、だが、表層的にしか見ないと人間) などは

「しかし、ソヴィエトはただの失敗国家だ。その後裔の衛星国家らも[人類の進歩]に何ら貢献していないとの牢獄、赤い貴族(あるいは甚だしくは赤い王族)が支配しているとの愚劣なる統治体 一人間(の置かれた状況)の愚劣さを確認せざるをえないとの統治体— と「なった」ではないか」

ととらえるかもしれない。

そうした見方は二点ほど誤っていると手前個人は見ている。次のような見立てからである。

「第一。フリーメーソンを動かす力学、あるいは、チェス盤上の人間の操作の力学とでも述べられようものにとって[真に望ましい世界の構築]とは(人形らに与えられた建前はどうでもいいとして)[人間にとって望ましい世界の構築]を指すものでもなければ、そもそも、[人間世界の存続][人類の存続]を指すこと「できえない」と述べられるだけの事由が山積している (：本稿全体で何を述べているかよく振り返って見ればよい。蚕棚(かいこだな)を住みやすきものにしても蚕が最後に熱で殺されるとのことに変わりはないとのことに通ずる話の論拠を本稿では膨大な文量を割いて延々と呈示しているわけだが、それら論拠群でもって、多くのことをご理解いただけるであろう)。であるから、[人類の進歩]なぞとというものをこの世界にて問題視することはそも、ナンセンスである 一人類という種が進歩を約束された種ならば、社会矛盾の束、[他罰的宗教][他罰的イデオロギー]なぞに由来する狂気などは文明水準と情報の浸透度が向上していく中で漸次的に取り除かしていくべきところであろう? だが、そうはなっていない。なんらなっていない。この世界では、そう、人形のように空っぽの目をした精神性なき者達がこれ数多、全くもつてしての醜悪な虚偽を常識としての葉籠中の存在として日々を生きている(そして本稿にて述べたことから照らしあわせて見れば、「愚劣」も甚だしいことに何も変えようとせぬとのありようで「生き続けて「いける」と信じている)とのこの世界では[狂信的宗教][狂信的イデオロギー]なぞに由来する社会矛盾の類は残置、本質的にはなんら改善せずに密行化しながら残置し続けているし、統治機構もその改善に努めるどころか、寄り添うものとして存在しているとのありようを見せている(詰まるところ、[人間の進歩をはなから肯定「しない」力学]が世界には強くも伴っており、に関しては、人間が目的ずくで養殖されてきたとの観点からとらえれば、利と理に適っていると受け取れるところともなっている)。

第二。第一の観点で見る(『ニュー・アトランティス』に見る)[望ましき世界の構築]とは[文明が特定水準に至るまでの発達を見た世界の構築]であろうととらえられるとのことがある。いや、よもつて至当ととれる言い様をなせば、[特定の技術体系の発現を育種対象になさしめるにまで煮詰めた世界の構築]であろうと考えられるとのことがある (フランシス・ベーコンのニュー・アトランティスの表紙に[時の翁]状の存在が鎌を持って刈取りの準備をしているような様が見てとれることは先に言及したが、至れりつくせりの永年に亘つての 一とは述べても[時の尺度]が異なる存在にとっては一日千秋、永年とはならないかもしれないが— [養殖活動]にはゴール・目的地がはなから用意されている節があるととらえられるだけのことが「ある」)。その他の部、たとえば、[高度経済社会の発達]やそれによって担保される[娯楽](数多の人間に不満を忘れさせるためか、あるいは、それすらも嗜虐的やりようの賜物なのか現実世界では「本質的には何ら[生きる]ために闘おう」としない人間らが望ましい世界に向けての闘争を命がけでなすといったテーマを有するフィクションらも込みにしての[娯楽]) や[生活技術の向上]ら

といった部はいかにそれが[主たるもの]であるように見せられていても「本来的には」現実に抗うかサボタージュして然るべき(だが、そのような途は決して選ばうとしない)との【構築子ら】に与えられた[夢]の部にしかすぎない、そのように考えられるとことがある — そのように「露骨に見える」との論拠が奈辺にあるかは本稿を最初から最後まで検討いただければご想像いただけることか、とは思ふ—。につき、(構築子に与えられた夢の部がいかなるものであれ)、「望ましき」世界構築(人間のためではない式での「望ましき」世界構築)の目的に長期的に資するものであれば、[世界を構築する存在(構築子たる人間)にあつての文明的失敗も構築子(人間)の大量死]もまた合目的なものとして歓迎されてきた素地がある

先掲のありうべき観点、

「ソ連の存在意味を無なるもの、反面教師のそれ以外には失敗国家のゼロなるものに過ぎぬ」

と見るような観点に対して手前が呈示したきところの以上呈示の見立ては[条理・道理たるところを(長大なる本稿にて呈示のことを未読のためか、キャパシティを越えるためか)理解なさない・理解なせないとの人間]ならば、理解に失すとのものかもしれない、あるいは、甚だしくは却(かえ)って筆者のことを異常なる人間、奇天烈なる見方をし、なおかつ、その意味なき訴求に執拗に注力なしての異常なる人間ととらえるうえでの材とするであろうことは承知のうえで引き合いに出しているものである。

また、たとえ道理に通じている向きでも、筆者のことをして冷酷極まりない見方をする人間ととらえる向きもいそうであろうこと(そうした見方をなす人間がこのような世界にそうそうに存在しているととらえること自体が過分なる期待なのかもしれないが、取りあえずも述べればそういう人間もいようかと受け取れること)をも承知のうえで表記のことを引き合いに出しているものでもある。

だが、筆者は — この人間存在の意味を根源から愚弄しているといった嗜虐的反対話法で満ち満ちた偽物のものであると指摘したい世界にて — [本当であると「判断」できるだけのこと]を申し述べることは語るに値せぬ向きら、相応の向きら — (絶対に何も変え得ないし、むしろ、何かを変えることを拒否することに注力し、その結果、望ましき未来をついぞ勝ち得ないとの種別の存在) — に自身が訴求せんとしていることがいかにとらえられるようとも、また、その訴求なしたいこと自体が実体としていかに「残酷極まりない」ことでもそれを呈示することが望ましいことであると思つている — その申しようが[適正なる論拠呈示]を伴っているのならば、だが —。

その点、「残念ながら」、ここにて呈示の見立てからして筆者の偏頗(へんぱ)なる一主観に依拠しての申しようではない、論拠あつてのことである(「書き手は異常者である」との話では済まない)とのこと、是非とも読者諸氏におかれては検証なしていただきたいものである(筆者がこうもどくも表記しているのはそれが[本質]であると判ずるに足る理由がそこにあるからであると慮(おもんぱ)かりいただきながらのこととして、そうも願う)。

さて、フリーメーソン・シンボリズムと際立つての視覚的相関性を多重的に見出せるとのその特質に鑑みれば、

[ソロモンの家による文明育成を主要テーマとするフランシス・ベーコンの『ニュー・アトランティス』扉絵に通ずるソロモン神殿の柱(ヤキンとボアズの柱)]

とも深甚なる関わりあいを見せていることも理解なせようとのソ連シンボリズム、いや、ソ連やその衛星国家の建国、そして、存在それ自体の背面にあるところの意図は

[闘争それそのものによる技術革新(必要なる技術進歩)をもたらすとの意図]

[人間の視点を偽りの対立に釘付けにし、真なる問題性に注意が行かないようにするとの意図、また、体制自体が崩壊しても矛盾自体を残置させて、その矛盾にがんじがらめにされた人間に(同文に)真なる問題性に触れさせないようにするとの意図]

であろうことか、と見えもする。

前者の意図 — [闘争]そのものが[発展の具]である、とのことに関わりもする意図 — については、

である。本稿にて取り立てて問題視している、

[現在の巨大加速器]

に至るまでの流れが(民族迫害に対する反作用として推進された)[マンハッタン計画]あってこそそのものとなっている、そして、そこに相応の寓意性が介在していることが窺い知れるようになっていることを殊に重視して然るべきであると筆者は見ている。

(本稿にての **出典(Source) 紹介の部 84** を包摂する解説部では

[奇怪なることが束になって相互に密接につながりあっているところの(関連するところの)関係性、の中にあつて、僅少なるひとつの構成要素に対しての指し示し]

としてながらも原爆開発が加速器、ひいては、ブラックホール生成と揶揄されるに至った実験といかように「多重的に」接合しているかも紹介している。

すなわち、

[「半世紀ほど、後の時代にあつて」ブラックホール生成装置と考えられるに至った円形加速器の発明者「ら」(レオ・シラードおよびアーネスト・ローレンス)によってマンハッタン計画とは提案・推進されるに至った計画であり、といった同計画の指揮を現場でなすに至ったのは(ブラックホールという言葉すらもがなかった折ながらも)ブラックホール理論開拓者であるとの男(ロバート・オッペンハイマー)となっており、同計画によって戦後、後にブラックホール生成問題で主としてその挙動を問題視されるに至った機関ら(フェルミ国立研究所/ブルックヘブン国立研究所/CERNら)が誕生を見ている]

との式でまとめているようなことが現実にあることを解説している。

ブラックホール生成問題にて矢面に立たされることになった今日の主要加速器実験機関らがナチスドイツのユダヤ人迫害(そして太平洋戦争での日本の敗北によって終息する第二次世界大戦)によって産まれ落ちることになったとのその一事に見るように人間の文明は[闘争]を通じて進歩を見てきたものである。闘争は[調整]を誤って「やらせ」すぎれば、対象、闘争を引き起こす対象の社会(最後は煮沸などして熟死させることになる蚕を押し込めての蚕棚でもいいが)を破壊しかねない劇薬となるものだろうが、そうした中で「必要な技術水準にすんなりと到達させるべく」の【名分】を与えるため絶妙なバランスで調整されての闘争・緊張状態が具現化させられているように考えられもするようになっている(そのためのひとつの具材としてのナチスや大日本帝国、ソヴィエト連邦であったとも解される/尚、今日における高度情報化社会、コンピューター化社会の基礎は二次大戦下、そして、冷戦下の【バリスティックス(弾道学)の技術を煮詰めるうえでのコンピューティングの高度化】と紐付くかたちとなっており、そうした高度コンピューティング社会の成立が加速器「実験」への技術投下・名分付与にも関わっているとのことが現実にある —インターネットの来歴が、そも、どこにあるのか、分散コンピューティングの加速器実験における効用とは何か、また、たとえば、日本ではビデオゲームという幻影投影媒体の大御所となっている会社の社名由来ともなっている ENIAC といったものがどういった目的で世に出たのか、そういったことから調べてみれば表記のことがどういうことなのか、部分的には分かつるかとは思ふ—)

(【闘争を通じての理想的進化】との観点については直上までにて言及したとして) **後者の意図** —人間の視点を偽りの対立に釘付けにし、真なる問題性に注意が行かないようにするとのことに関わりもする意図— については人間という生き物、いや、生物というものは絶えず【生きるための本能】としているいろなところに注意を向けるものであるとのことから考えれば理解なせようとのことである。ぬくぬくと生きられるような生育環境を与えられていたとしても、あるいは、本能が脳機序の操作でまったくもって異常なる方向で歪められていたとしても、いみじくも知性ある存在ならば、そう、機械的な式で紛い物としての素養を移植された者達であろうと、自分達が生きる環境が[ヘンゼルとグレーテルのお菓子の家]である可能性に注意を向けかねない(「鬱病とは生物学的[不適応]反応である、であるから、生きるために全神経を目先の方向に向ける必要がある戦地にあつては鬱病はない」との式で生物は生きている限り生存のための緊張と闘争を前提に機能しているのであるし、ときに、自らをそれを是とする)。

であるから、

[偽物の闘争に注意を向けさせ、[紛い物の生]にあつて対象の[緊張]を生物としての本能に依拠してのかたちで調整しようとのニーズ]

が生じもし、人間存在の注意をそちらに一意専心して向けさせるべくもの

[マクロのレベル(社会全体を射程においての巨視的なるレベル)での闘争]

を[悪役]とワンセットに造りだすとのことがなされてきた、それがためにソ連ら社会主義陣営(その国章からしてソロモン神殿のシンボリズム —911の事件の奇怪なる予見的言及に接合しているところのシンボリズムでもある— に濃厚に結節していることがフリーメーソンのシンボリズムに通暁した向きにして思考能力ある向きには理解出来るようになっていくとの統治体ソ連を中枢とした全体主義国家群)と自由主義陣営の対立であった「とも」考えられるところではある —※ジョージ・オーウェルという作家の有名なディストピア諷刺小説『一九八四』では[人間の精神と生活を掌握するためだけの[まやかしの世界戦争]がここでの話そのままに恒常的に演じられているとの筋立てが採用されている(その目的は[権力それ自体にある]との人間的目分量の域を出ていないのかたちで設定されているのだが、とにかくも、そうした筋立てが小説内で採用されている)のだが、そうした小説『一九八四』描写が最悪のかたちでこの世界の真実を穿(うが)っていても何らおかしくはないとの見立てを筆者は抱いている(社会の統計的現実を分析する[知]の力が無い、個人の悲喜劇をもってして良くも悪くも社会の悲喜劇の問題に拡張解釈してしまうような相応の人間(ワイド・ショー・クオリティの人間)はそれで満足しようとの[市中の狂った通り魔の類の凶行]とは一線を描くところで[マクロレベルでの闘争]を具現化させる必要があった(よりもって生存状態の危機に対する感受性が高い向きの感性をそこに釘付けにするための闘争を演出する必要があった)のかもしれないと筆者は解している)—。行状の悪辣なること、明々白々な敵役がそこに居て、それが将来これより現実には排斥される可能性があるように見えるようにされているのなら、(たとえ人間社会の実体の過半が紛い物でも、そして、真なる敵は個々の脳機序に介入しようとしている存在であったとしても)、[生物が程よくそれを発揮しているところの野生の緊張状態]を本当に問題となるところに向けさせずに適正に調整できるようになるとの発想法があつてもおかしくはない、そういうことと表裏をなすところとして、である。

これにて補説4の段の末尾にあつて申し添えておくべきか、と判断しての話 — [ソ連国章(1923年制定)と同国章制定より以前から存在していることが書誌情報から明示可能なるフリーメーソン象徴主義が視覚的・意味論的(ブレイジングスターとしての五芒星がフリーメーソン象徴体系では万物を見る目に置き換えできるとの意味論的ありよう)で接続していると【現実的現象】として述べられるようになっていくとのこと]、および、[「フリーメーソン象徴主義と共産主義象徴主義のあまりにもできすぎた連続性」からして「フランシス・ベーコンの文明育成装置としてのソロモンの家について取り上げている著作『ニュー・アトランティス』に見る象徴主義」や「911の予見的言及」の如きものに通ずることとなっているとのこと]についてそうしたことよりおもんばかれるところを呈示すべくもの話 — を手仕舞いの方向に持っていきたいと思う。

が、最後に幾つか指摘なすべきかと判じたことがあるのでそれらについての指摘をなしてからここ補説4と振つての部に完全に区切りをつけたい。

(※補説4の部の手仕舞いの前に述べておくべきかと判じたことについて以下、筆を割くこととする)

さて、(先だつて摘示してきたことを受けもして申し述べるところとして)、ソロモン神殿をとにかくも重視しているフリーメーソンという団体(の上位位階にあつての)思潮にあつては、

[ソロモン神殿の柱が崩されること]

を悲観的に解釈しないとドグマもが、他面、観察されるところがある — ここまでにあつて何度も引用を通じての解説をなしてきたように[ソロモン神殿]とはフリーメーソンの[理想]の体現物となっている

とのことがある中で、である—。

否、むしろ、彼らが諸事にあつて理想と秩序の体現物として尊崇視している「ソロモン神殿」、同神殿の「旧版」が崩壊を呈していることすらもが彼らの目指す方向性（彼らフリーメーソンがフリーメーソンの神たる存在、グレート・アーキテクト・オブ・ユニヴァース、先述の GATOU の理念と一致するところと標榜し、そちらの方向を目指しているとの「モード」で動かされているとの方向性）に「予定調和」として組み込まれていると「受け取れる」ようなところ「も」ある。

端的に述べれば、

〔旧秩序(たるソロモン神殿)の破壊〕から〔新たなる理想的な秩序の建立〕を導き出す

との式ともとれるかたちにて、である。

(: [[破壊]から[新に理想的な秩序の建立]を導き出す]との式ともとれる思潮の存在についての【具体的中身】の言及に入る前にここで「ちなみに、」の話をなしている本稿のスタンスについて —「再度もってしての」— 断りをなしておく。

その点、本稿では

〔ワールド・トレード・センターにての悲劇を直接的に後押ししたか、あるいは、でなくとも、悲劇(と象徴主義の露骨な関係)を閑却、等閑視させて真相を見づらくさせているとの紐帯〕

としてフリーメーソンという歴史的結社(のゾンビになったような駒ら)が

【(どこぞやの国家寄生カルトがどこぞやの国家の中枢を荼毒(とどく)するように) 寄生者が宿主を操る権能を強めているとの統治体(ガバメント)】

を通じて人間レベル「でも」[常識のレベルでは信じがたいような悪行]に手を染めているとの[主張]を強くもなして「いない」(:についてはひとつに節義の問題として可及的に中立的な視点の呈示に努めるべきだとの判断があつたこと、そして、もしかしたらば正しくはないかもしれない視点に固執しすぎたとの(従前ありように対する)反省があつたとのこともある)。

については、従前、諸種判断材料の捕捉をなしていたことから「それ以外に何が考えられるのか」とのかたちでこの身、筆者の目分量を強くも縛ってきたとの、

〔フリーメーソンの紐帯の「人間レベルの」悲惨の[代行]にまつわる仕組み〕

に関しての主張は強くもなしては「いない」とのことが本稿スタンスに関してはある。

が、ただしもってして、

〔フリーメーソン象徴主義との露骨な結節点が「山なす」911の事前言及文物(ワールド・トレード・センターを爆破するが如しのもの)に見てとれる〕

とのことまでは

〔これこれこういうものがそうである〕

と後追い可能なる論拠を懇切丁寧に呈示しながらも問題視してきた (:フリーメーソン関与についてはかつての筆者同様、多くの人間が[そうと判断せざるをえない]と見る材料が山積していることは細かくも具体的なかたちで本稿で挙げてきた)。

そうした問題視の過程で

〔911の事件が起こることを「露骨に」前言しているが如く作品ら —たとえば、原作小説で[191階]建てとの異様な高層建築(現時2014年時点で世界最高層の尖塔状のドバイのブルジュ・ハリファでさえ200階を若干越えている中ながら実質163階前後、残余はテナントが入れるようなものではないメンテナンス部にとどまる)が爆破対象とされる作品の映画化版で冒頭より[グランド・ゼロ現出の対象地]として言及されている複数ビル発破爆破の対象地が当該の映画作品でワールド・トレード・センターそのものであると何度もサブミナル的に寸刻描写されているといったことがある(映画『ファイト・クラブ』の事例) /あるいは、たとえば、原作小説では「ワールド・トレード・センターにあつてのツインタワーに比定されるようなビルジグの爆破による脱出不能なる炎熱地獄の

現出]がモチーフとなっているところをその映画化版ではリリース・ポスターにツインタワー然としたものが描かれ、そうした映画化作品の中で[116]階との階数表示がなされる中で(原作では災厄現出の原因であった爆破が一転、救済の具に挿げ替えられ)[鎮火のためのビル爆破]が描かれているといったことがある(映画『タワーリング・インフェルノ』の事例) — 、といった911の事件が起こることを露骨に前言しているが如く作品らの中でツインタワーが[ソロモン神殿の寓意]や[フリーメーソンの上位位階の明示されて知られているシンボリズム(トリプル・タウ紋様)]と結びついていること]について「も」十全なる解説をなしてきた。

筆者は「本稿では」スタンスの問題としてフリーメーソン関与論の類を過分に前面に押し出しているわけではないが、とにかくもってして、どういった具体的事実の指摘をなしているのかまでは押さえていただきたいものではある)

フリーメーソン思潮(正確に述べれば、フリーメーソンの上位位階の思潮)にあって

[[ソロモン神殿の破壊]の後にて[破壊]から新たに理想的な秩序の建立を導き出すとの式]

が見てとれることについては — つい最近に邦訳版が世に出た書籍とはなるが — 衆目につきやすいとのところで THE SECRET POWER OF MASONIC SYMBOLS 邦題『フリーメーソンシンボル事典』 — メーソンとしての「歴史通」とのことで通っていることが喧伝されてのフリーメーソンの手になる書(邦訳版版元は[如何物書籍]をよく出すことでも有名な学習研究社) — にあって次のような記載がなされていることを引いておく。

(直下、Robert Lomas(ロバート・ロマス/多くの出鱈目表記を含むとの「文献的事実に依拠せず」の「似非歴史分析を世に出してきた」の事を先述もしたフリーメーソン)の手になる THE SECRET POWER OF MASONIC SYMBOLS 邦題『フリーメーソンシンボル事典』にての 259 ページよりの引用をなすとして)

ロイヤルアーチのトレーシング・ボード

ホーリー・ロイヤルアーチのトレーシング・ボードは、ソロモン王の神殿の再建を図ったイェルサレムのサンヘドリンに雇われた3人の寄留者が、その遺跡の地下に秘密の穹窿(きゅうりゅう)を発見した様子を描いている。要石をアーチから持ち上げると、秘密の小部屋が現われた。中には聖なる祭壇と失われたメイソンリーの言葉があった。太陽から一条の光が射し、暗い穹窿の中の台座に、失われた言葉が刻まれていた。その台座は正三角形の中に据えられている。それは<大いなる建築家>を表す古えのエノクのシンボルである。市松模様の舗床は人生の儚さ、地上のものの不確かさを表し、純白の大理石の台座——真の二重立方体——は無垢と純粋を表す完璧なシンボルである。それは円の中に置かれている。円は永遠の象徴であり、始まりも終わりもない。円は始まりも終わりもない全能者の純粋、叡智、栄光を表す。背景では、渦状の道の終わりに、サンヘドリンの3人の長がいる。ゼルバベル、ハギア、ヨシュアである。彼らは安定の柱と知識の柱の間に立っている。その背後には永遠の都があり、その上に虹と、諸天のホーリー・ロイヤルアーチがある。

(引用部はここまでとする)

上のフリーメーソンリーに属することを公言している者(ロバート・ロマス)の手になる流通しているメーソン思潮要覧書よりの引用部がどうして重要なのかと述べると、

[ロイヤルアーチ位階 — 基本位階でマスターメーソン位階に到達したものが足入れする位階であると先述のメーソンの上位位階(映画『タワーリング・インフェルノ』のリリース・ポスターにもツインタワー然としたものの上階に同ロイヤルアーチ位階のシンボルを如実に想起させるヘリポートが

描画されている) —]

のトレーシング・ボード(トレーシング・ボードが何なのかについても先に説明したとおりで[フリーメーソンの諸種様々な紋章・シンボルらを描いているとの描画・印刷されてのものにして各々のメーソン位階に応じての講釈にて教示の材とされうるもの]のことを指す)、要するに、メーソン上位位階にあつてのドグマ教示図像には

[ソロモン神殿の残骸(の中にあるドーム、穹窿(きゅうりゅう))にあつての[永遠の都](とロイヤル・アーチ)の発見]

が[主題]として描かれているとのことが指摘されているからである (:同じくものことは例えば、英文 Wikipedia [Royal Arch] 項目にて “ In the Chapter, the teachings of the Royal Arch are conveyed using a ritualised allegory based on the Old Testament telling of the return to Jerusalem from the Babylonian captivity to rebuild the City and Temple. **In clearing the ground of Solomon's Temple for the foundations of a new temple, the candidate makes important discoveries.** ” (訳として)「ロイヤル・アーチの教えは[バビロン捕囚から都市と神殿の再建をなすべくものエルサレムへの帰還に見る旧約聖書の物語にまつわる寓意]に重きを置いて儀式化(リチュアライズド)されている。[新しい神殿]の建立のために[旧ソロモン神殿]敷地を整地している際に候補者ら(ロイヤルアーチ位階候補者ら)は重要な発見をなすことになる」(訳はここまでとする)との記載にも見受けられることとなる — はきと述べ、同じくものドグマの問題は相当程度、通用化した話でもある(フリーメーソン上位位階ならば識らぬ者はいないと当然に判じられるようになってい)。また、ここにて引用のウィキペディア記述について言えば、フリーメーソンのドグマに詳しい人間ならば、[旧ワールド・トレード・センターの後を継ぐかたちで「新」ワールド・トレード・センターが建立されることになった]([実体としては家畜としての養殖種に与えられた子供騙しの論法]でもそうしたものが建立されることになった)こと背景には(表記ウィキペディア引用部に見るような)[旧ソロモン神殿あらためての新エルサレム神殿建立の旧約聖書寓意]が介在していそうなことは容易に想像が及ぶようになってい) —)。

ここで振り返って述べるが、

「ツインタワーが[ソロモン神殿の柱]に仮託されていたと判じられる根拠 — どのレベルでそうなっているのか、通り一通りの人間レベルのやりようで済まされるかは別問題として[視覚的にそうもなっている]ところとして仮託されていたとの根拠 — は本稿にて仔細に呈示してきた」(主観が問題になるというような性質の話としてではなく、視覚的に明らかにそうもさせられているとの根拠を仔細に呈示してきた)

とのことである。

そこからフリーメーソンの上位位階(ロイヤル・アーチ位階)が

[ソロモン神殿の残骸を通じての(不死鳥のごとく甦っての)[永遠の秩序]の発見]

を前提にしての象徴体系を掲げていることとの絡みで何が述べたいかもお分かりか、とは思う(述べておくが、筆者はフリーメーソンに属する人間が[宗教的狂人]同様にいかなるたわごと・ざれげんの類を「妄信」させられていようと、問題はつい最前にあつて先述なしたところの [ソロモン王と悪鬼羅刹の契約関係の伝承(に見るブラック・ユーモア)] にあると見ている。が、そのことはここでは(繰り返さずに)置く)。

これにてフリーメーソン(の上位位階ロイヤル・アーチ・デグリーら)にあつては

[ソロモン神殿の柱が崩されること]

をも過度に悲観的に解釈されないとのドグマがある、否、どころか、彼らが諸事にあつて [理想] と [秩序] の体現物として尊崇視している [ソロモン神殿]、同神殿の[旧版]の崩壊すらもが彼らの目指す方向に[予定調和]に組み込まれていると「受け取れる」ようなとのことにまつわる指摘をなしたとして、で

ある。

同じくものが

[次の各点ら]

と結びついていると自然(じねん)として受け取れるようになっているとのことについて 一本稿筆者が [メーソン儀式主義に通ずる問題] (ロイヤルアーチ位階の理念に通ずる儀式主義の問題) を(多くの語らずにもの臆病者らがそう見続けてきたように)先だつてのワールド・トレード・センター崩壊劇に見出しもしていたところとして— 「一応」申し添えておく。

・計にして7棟のビル群が崩落することになった(911の折柄にての)ワールド・トレード・センターでの悲劇、にあっての第七ワールド・トレード・センター・ビルディング(7WTC)の倒壊は「あまりにも不可解」との観点が建築・爆破のエキスパート団体(出典(Source)紹介の部 101にて紹介の Architects & Engineers for 9/11 Truth)によって多数の[再調査請願の専門家署名](数千人単位の「専門家」ら署名)と共に呈示されているとのことがある(：建築家との職掌の問題はあってもアーキテクトとの語は悪印象を与える、それでいいというのかとのこと、先述なした団体であるも、Architects & Engineers for 9/11 Truth が「パンケーキのようにペしゃんこになって突如倒壊した」との第七ワールド・トレード・センター・ビルディングが[コントロール・デモリッションとしての特徴]を呈しているといかように主張しているのか、プロとしての建築家らが「これは明らか、絶対に爆破倒壊である」といった申しようをいかようになしているのかについては彼ら団体由来の YouTube でも流通している訴求映像をしてみるのもよからう 一にあっては(そこでの可能性論指摘が曇り無き真実か否かどうかは別として)少なくとも懐疑的観点をなんら抱かぬのは脳死状態にあるような奴原だけであるといった露骨な映像が呈示されている)。 そうもしたかたちで発破倒壊であるとの申し立てが数多の専門家からもなされている[911の事件の最中に初動の突入からかなり経ってより突如完全倒壊した第七ワールド・トレード・センター・ビルディング]が[ソロモンブラザーズ証券](往時ソロモン・スミス・バーニー)を主要テナントとしていた(他のテナントは諜報機関やシークレット・サービスであった)とのビルディング、いわば、[ソロモン・ビル]の様相を呈していたとのことは先述のことである 一陰謀論者の持ち出すような[後追い確認も出来ぬような話]の類ではなく、経済活動に伴うテナント履歴の問題にしかすぎない。

・記録的事実 一 公衆に広くも流通している映像に残っている記録的事実 一 の問題として映画『ファイト・クラブ』では[フリーメーソンの「ソロモン神殿絡みの」トレーシング・ボード構図]と視覚的に重なるようなかたちで[ワールド・トレード・センターのツインタワー据え置きのスフィアという球体オブジェ]を爆破、転がす描写がなされている(DVDのどこをどう再生すると該当描写が見てとれるのか該当再生部を「秒単位で」指摘するとかたちで本稿にての出典(Source)紹介の部 102(4)及び出典(Source)紹介の部 105で事細かに出典を挙げて紹介していることである)。

・それが[およそ人間業とは思えぬ]ことも問題となる(まるで超常的な存在、聖書に見る占いの霊 Python の類に憑かれたが如くのものであることも問題となる)とのものではあるのだが、[911の事件がその通りに具現化したように予見的描写をなしている作品ら]が数多ありもし、の中にあつては、「明らかに」フリーメーソンの象徴主義と重なるような描写をなしている作品ら、しかも、そこに爆破の問題が関わるとの作品らが露骨な式で存在している(本稿にてのここ補説 4の後半部での容易に後追いできるように呈示している指し示し部をよくご覧になれるとよからう 一たとえば、日本にて一部で話題になっていた[911の予見漫画]とされるものにも露骨極まりない式で[フリーメーソンのエンタード・アプレンティス位階のトレーシング・

ボード]との視覚的かつ意味論的な連続性が見てとれ(意味論的連続性との点については徒弟位階のハングド・マンの寓意が問題になる)、かつ、爆破の比喩もがそこに組み込まれていることを本稿ここ補説4の部では入念に解説している—)。

上のことらと【フリーメイソンリー(の上位位階)の教義思潮体系にあってはソロモン神殿が崩れ落ち、そこから再生がなされるとのことが予定調和の問題として語られている】との最前指摘なしもしたことの複合顧慮によって[何が当然に問題になるところなのか]について述べもしたいところはお分かりいただけるか、とは思う(：ただし、再言に重ねての再言をなすが、筆者は当初、属人的捕捉事由よりこの身の認識を強くも縛っていた[フリーメイソンの紐帯の人間レベルの関与「も」が双子の塔の倒壊にてなされている]との視点は「既存の操り人形らのドグマと予言的言及らの相関性に人形遣いの糸以上のものが関与していない可能性もある(物事の実相を表層的な見映えの問題に求めすぎている可能性もある)」との式で撤回してもいいと考えている)。

脇に逸れての主軸とはならぬ話でここ補説4の部で主軸となる場所を見失う読み手がいるかもしれないので、ここ補説4の部で主軸となっているところのリジットなる(根拠が重くもそこにある)話は何たるか、一応、締めくくり間際のものとしての本段にて繰り返しをなしておく。

本稿にてのここ補説4の部では[文献的事実・記録的事実の問題として論拠を容易に裏取り可能なかたちで指し示す]との式で—それすらも不快なやりようの一部をなすにすぎぬことであると言下にて強調しながらも—以下のことの呈示に努めてきた。

[ワールド・トレード・センターにてのビル爆破(ツインタワーと解される描写がなされての爆破)への示唆を含む作品]

にして

[911との数値規則と結びつくとの作品]

にして

[フリーメイソン・シンボリズムと多重的に結びつく作品]

との要素を「すべて」併せ持つ作品が複数存在している。

そうした作品らが911の事件の勃発前から際立って特徴的な要素らを共有するとかたちで存在しているとのそのことが[偶然]と言えるのか。

そちらについては([偶然]ならぬ)[人為][恣意]のなせる業にして、

[占いの霊(Python) —先に引き合いに出した、ギリシャ神話および聖書の使徒行伝に見るような予言の霊たる[大蛇ピュートーン(パイソン)]— に憑かれたが如くやりよう]

と「はきと」解されるものである(：上の artificial [人為] というのは [知的生命体の手がそこに介在している] とのことであるが、それは[人間の手]との文脈では「ない」ところをも包摂している。の意味では「[人]為」というより[作為的]と表した方が適切かとも思ったのだが、本稿は『そのレベルで物事を履き違えるような向きはおるまい』との認識での筆の運びをなしている(反言すれば、『ここでの話を人間レベルの浅薄な陰謀論としてしか情報処理しない向きがいれば、そうした者は[語る値打ちもない類](我々人類の今後にあってプラスの存在になることもなく、生かされている期間を終えようとする刻、ただ無惨に抵抗もせず諸々と殺されていくだけの類)であって訴求対

本書にての紙幅にあってそう遠くはない部、p.962からp.963にあって和文・英文で書き記しているように現在(いま)はいかに濃厚にそうだと疑われるところでも状況証拠のみで悪質性を云々することでは不十分である、代って、【現象としてはきと認められる加害意思の顕在化】の問題をこれ以上ないくらいに呈示し、そのことに直面できるか否かを確認「しきる」、もってして、種族の命運の問題を「なんら手落ちない式で」あらためることまでなすべき局面にきていると筆者は当然に考えている。

象として度外視していい類である』とのことでもある)。

何故、

[[大蛇ピュートーン(パイソン)]に憑かれたが如く状況]といった口上にての話を([偶然]とは対極にある)[恣意]の状況を指すものとして用いているのだが、それはルネサンス期の特定作品、近年の贋造物ではなく、何百年も前からそこ(フィレンツェ教会)に据え置かれていたと認知されている特定フレスコ画美術作品 —ある種、蛇巫(へびふ)と通ずるところもあるシビュラという巫女にまつわる作品たる Meeting of Augustus and the Sibyl (『アウグストゥスとシビュラの出会い』)— にあって

[現代の科学水準に準拠しての生物学的知識]

が複合的に反映されているとのことがある、具体的には

[処女懐胎の預言にまつわる 15 世紀製作フレスコ画にあって【DNA 構造】・【相対的サイズ・相対的到達数など含めて正確といった按配の受精構造類似図】らの生物学的再生産(生殖)プロセスにまつわる構図]が入れ込まれている —半世紀程前になってようやく発見された DNA の二重螺旋構造どころか精子構造すらも特定されていなかった 15 世紀末に描かれた絵画(近代以降の贋造物ではなく歴史的に真正なるものとして欧米の美術館のウェブサイトにて似姿公開されているようなフィレンツェ在の著名画家ドメニコ・ギルランダイオの手になる画) にあって見受けられる—]

とのかたちで複合的に反映されているとのことが「これはこうでこれはこうである」との式にて指し示せるようになっていいる —本稿では図と出典らを事細かに呈示しながら絵画 Meeting of Augustus and the Sibyl にて[卵子に精子が蝟集する構造]の類似型が[精子の卵子到達数][精子の卵子に対する対比サイズ]まで反映しながら具現化していると「はきと」解されるようになっていいること、また、同絵画にて[デオリキシボ核酸(の二重螺旋構造)が精子先端に格納されている構図]らもが具現化していると「はきと」解されるようになっていいることの解説に注力してきた— とのこを本稿筆者が重んじていいるからである(「こは、」さういいうこと、生殖知識を処女懐胎の預言の画にまぶす力量、要するに【科学技術】の問題である)。

その結論が含意するこは

[人間存在 —あるいは操作されやすき種別の人間達でもいいが— が薬籠中の存在としていかな予言的言及をも意識的にか無意識的にか「科学的操作にて」なさせしめられる存在である]

いいうことであり、

[諸所の予言的言及 —実際は犯罪予告のようなものかもしれないが— は極めて悪質なやりよう(【処女懐胎の預言】の画に無知未開の状況にある操作対象種族を小馬鹿にして薬籠中の個体を用いて【生物学的受精】の構造を故意に入れ込むようなやりよう)を受けてのものである]

と判じられるとのこである。

上の如きやりようと同文のものらが数多存在していいるとのこ指摘可能となりもしていいることであり、(長大なものとなつていいる本稿にて具体的に細かくも呈示していいるところとして)それら相応の予言「的」事物らが多く[共通の命名規則][共通の相関関係]の環に組み込まれながらも[人類の行く末]そのもの

を嗜虐的に臭わせている —「お前ら全員を「目的に基づいて」皆殺しにする」とのメッセージ性を帯びている— との側面が見てとれることがある、それこそが問題なのである。

ここ締めくくりの部にあつて問題となる [共通の命名規則] [共通の相関関係] の環がいかように発現しているものなのか、そのことを明示すべくもの記述をも下になしておくこととする。

ここ補説 4 と振つての段にあつての締めくくりの部にあつて敢えても呈示することとした [共通の命名規則] [共通の相関関係] の環の「極々一例」たる発現形態について



上は 19 世紀に声望を博していた英国人画家フレデリック・レイトンの手になる絵画、

Cimabue's Celebrated Madonna 『チマブーエの祝福されしマリア像』

を意図あって挙げもしたとのものとなる(図像は横幅が長いので分割して呈示している)。

さて、上掲画『チマブーエの祝福されしマリア像』は

[13世紀末の著名なる画家チマブーエが製作したマリア像が奉獻されることになったその折のフィレンツェのお祭り騒ぎの一幕]

を描いたとの設定のものである。

(典拠として: 英文 Wikipedia [Cimabue's Celebrated Madonna] 項目にあっての現行記載内容より引用なすとして
“ Cimabue's Celebrated Madonna is an oil painting by English artist Frederic Leighton. Measuring more than two metres tall and more than five metres wide, this canvas was painted by Leighton from 1853 to 1855 in Rome as his first major work. It is displayed in London's National Gallery, on loan from Queen Elizabeth II. The picture shows a scene from the 16th century art historian Giorgio Vasari's description of the 13th century procession of a Madonna (an altarpiece for a church) through the streets of Florence. The Madonna is being carried from the home of Florentine artist Cimabue to the church of the Santa Maria Novella. Cimabue himself is depicted immediately in front of the Madonna wearing a laurel wreath upon his head. He is flanked by a wide array of characters, including his protege Giotto, the poet Dante Alighieri, the architect Arnolfo di Cambio,[lower-alpha 1] the painters Gaddo Gaddi, Andrea Tafi, Buonamico Buffalmacco and Simone Memmi; the sculptor Nicola Pisano, and on horseback at the right edge of the image, the King of Naples, Charles of Anjou.” (即時手仕事としての[意識]として)「絵画『チマブーエの祝福されしマリア像』は英国の芸術家フレドリック・レイトンによって高さ2メートル、幅5メートルの巨大キャンバスに1853年から1855年にかけて描かれたローマ在住時の初期の作となる。同作品は英国女王エリザベスに貸与されたものとのかたちでロンドン国立美術館に展示されている。同画は16世紀芸術史家ジョルジョ・ヴァザーリによって言及されている、[13世紀のチマブーエによる教会祭壇のためのマリア像がフィレンツェの通りに現われたありよう]を描いてのものとなっている。画の中でマリア像はチマブーエのフィレンツェの家からサンタ・マリア・ノヴェッラ教会に運ばれており、マリア像を描いたチマブーエは月桂冠を被るとのかたちでマリア像のすぐ前に描かれており、彼チマブーエの脇にあっては幅広い層の人物描写がなされており、中には、チマブーエの弟子ジョット(注:チマブーエの後に初期ルネサンス期の代表的な画家となったジョット)、詩人ダンテ・アリギエーリ、建築家アルノルフ・オディ・カンビオ、画家(ら)としてのタッデオ・ガッディ、アンドレア・タフィ、ブオナミーコ・ブファルマッコ、シモーネ・マルティーニら、そして、彫刻家ニコラ・ピサーノ、馬の背にあっての右端部のナポリ王国君主シャルル・ダンジューが含まれている」(訳を付しての引用部はここまでとする)
と記されているところである)

表記の絵画、ダンテをはじめルネサンス期初期の都市「フィレンツェ」の著名人らが総出でお目見えしているとされる絵画 Cimabue's Celebrated Madonna は「処女懐胎の」聖母マリアの肖像が教会に向けて奉獻される折のパレード(がかった一幕)を描いたとの設定のものであるわけであるが、この際、歴史上、本当にそうしたパレードが画に見るような華々しきありようで具現化していたか否かは(無論にして)問題ではない。

問題はそれも欧州人に熱狂をもたらしていたと見られてきた「処女懐胎の」聖母マリアなる存在

に伴う（絵画舞台となっている都市フィレンツェと紐づく作にての）【嗜虐的寓意付け】である。

その点、本稿こここれに至るまでにあつて問題視してきたとの画家ギルランダイオの手になる、

Meeting of Augustus and the Sibyl『アウグストゥスとシビュラの出会い』（同画が据え置かれている教会（サンタ・トリニタ教会サセッティ礼拝堂；Sassetti Chapel）を内包する都市フィレンツェは直上呈示のフレデリック・レイトンの手になる絵画『チマブーエの祝福されしマリア像』がまさしくその場での一幕を描き出しもしているイタリア都市となる）

との（作者たる画家ギルランダイオがピエタ像を遺したかのミケランジェロの師匠筋に相当する[フィレンツェ・ルネサンス第三世代画家]とされもする中で）フィレンツェに在している同作品は

【**マリアの処女懐胎による救世主の到来**】を巫女（シビュラ）が皇帝（アウグストゥス）に予言するとのテーマと接合する絵

となりもしており、といった[処女懐胎の予言]にまつわる絵画にて予言者に指さされる先にては

【**精子と卵子の結合過程と目立って類似性を呈する構図**】

が具現化を見ている、のみならず、[同画の下部]の方にあつては

【**マッチ状のもの（見よう見方によっては精子状の構造物）が先端部が DNA 状の二重螺旋構造と接合するとの構図**】

もが具現化を見ており、それは精子の先端に DNA が格納されているとの生物学的事実と接合するようにとれるとのものであるとのことについて委細に踏み込み、ひたすらに典拠を挙げ連ねるとの式で詳説をなしてきた。

そうも振り返りつつ述べれば、マリア信仰に伴う嗜虐性はといったことに留まらない（ことを**補説 4**と振っての部の締めくくりのこの部にあつて述べておきたい）。

以下の [1] から [3] と振ってのことら —多く先んじて解説してきたことを繰り返しもしてのことら— をご覧いただき、何が問題になるのか、理解なしていただきたい次第ではある。

[1]

ルネサンス期の著名な（フィレンツェに由来する）マリアの特定肖像をこれまた著名なる「他の」ルネサンス期絵画と重ねることで悪魔の王サタンと接合する構図が浮かび上がってくることがある（同じくものは本稿にあつての**補説 1**から**補説 4**と振っての各部に入る前に指摘していたとのことである）。そして、そうした[視覚的一致性]の問題はミトラ教（教勢にあつてキリスト教に敗れるとのかたちで古代ローマ時代に衰亡を見、歴史の闇に消えたとのことが知られるミトラ教）の再発掘された石彫遺物とも「奇怪に」接続しているとのことがある。

ルネサンス期の著名なる複数芸術作品を重ねることでマリア像がサタン像とオーバー・ラップするように「できあがっている」ことも異常異様な話ではあるが、同じくもの構図上の問題が「再発見された」往古の遺物にまで及んでいるとなると「さらにもって奇態なること」となる。同じくものことについては以下にての図像らを（「再」提示として）挙げ、もってして、確認を仰ぎたいとの次第である（尚、マリアとサタンの視覚的連続性がシームレス、目立っての断絶離隔もなくブラックホールの問題に多重的に「そのまま」接続するとの格好になっていることもこれより指し示す所存であるとのこと、先行して申し述べておく）。



Adoration in the Forest
(Filippo Lippi / 1459)
フィリッポ・リッピの聖母子像



The Apocalypse
(Albrecht Durer / 1498?)
アルブレヒト・デューラーの版画
『黙示録』に掲載の構図

【上掲図左】:美術史にあつて著名なる15世紀の画家である Filippo Lippi(フィリッポ・リッピ)の Adoration in the Forest との画題の絵画となる。

(上の画、現行、英文の Wikipedia にあつては同絵画のためだけの一項目が設けられているとのかなり有名な絵画となり、先掲の[処女懐胎のマリア]のドグマがあつてこそその『アウグストゥスとシビュラの出会ひ』や『チマブーエの祝福されしマリア像』と同様にイタリアのフィレンツェ(Florence)の地と結びつく —メディチ家の後援によりフローレンス(フィレンツェ)の地で産み落とされた— 画となる(英文 Wikipedia[Adoration in the Forest (Lippi)]項目にあつて “ Adoration in the Forest is a painting completed before 1459 by the Carmelite friar, Filippo Lippi, of the Virgin Mary and the newly born Christ Child lying on the ground, in the unusual setting of a steep, dark, wooded wilderness. **It was painted for one of the wealthiest men in Renaissance Florence, the banker Cosimo de Medici.** In later times it had a turbulent history.” と記載されている通りである)

【上掲図右】:彼なくして欧州美術史は語れないといったほどに著名なる15世紀末から16世紀初頭にかけての版画芸術の巨匠アルブレヒト・デューラーの手になる版画[黙示録]シリーズの一葉を挙げたものとなる。

以上、呈示の両図像を重ね合わせることで[キリスト誕生を祝う聖母マリアの構図]が[黙示録にて悪魔の王(多頭の竜ないし多頭の蛇であるサタン)がにじりよってくる構図]とオーバーラップするように「なっている」とのことがある —[視覚的一致性]が現出していることは[現象]の問題となる、【偶然】あるいは【恣意】(【恣意】であるのならばそれが画家ら人為に起因するところにすぎないのかあるいはそれで済まされないのかがさらにもって問題になる)であるかに関わらず[記録的事実]の問題としてよく知られた作品らにみとめられる動かしがたい、容易に確認可能な[現象]の問題となる—。



"rediscovered"
Mithraic relief
(2-3th century AD?)
往古に潰え再発見されたミトラ教のレリーフ。(捏造物ではないと看做されており)2-3世紀作成のものだと推定されている

上は英文 Wikipedia[Mithraic mysteries]項目にも同様のレリーフが呈示されているところの往古ローマ時代にて信仰された異教、ミトラ教の「典型的な」「汎用的構図に関わる」レリーフとなる。呈示のレリーフがどの程度、汎用的な構図であったのか、また、そちら発掘されて「再」発見されたとされる遺物が既に15世紀のフィリッポ・リッピ(の作者)やアルブレヒト・デューラー(の作者)の目に入るようなかたちでも「再」発見されていたと言えるのか、そして、異教シンボルたる同ミトラ教レリーフをわざわざ模倣して最前より取り上げもしている作品ら —絵画 Adoration in the Forest および 木版画 the Apocalypse series— を芸術家リッピやデューラーが製作する必要や動機がそもそもあったのかが問題になる(お分かりいただけていることか、とは思うが、そうした当然に生じもする疑念に対する払拭のなし難さからここでは(先だって問題視した)絵画 Meeting of Augustus and the Sibyl のようなものをそれら作品と同じくも15世紀に構築させしめていた力学が[人間愚弄の意図]の下に働いていた可能性が如実にあるとこのことを問題視しているのである)。



The Adoration, with the Infant Baptist and St. Bernard
(Filippo Lippi / 1459)
フィリッポ・リッピの聖母子像



The Apocalypse
(Albrecht Durer / 1498?)
アルブレヒト・デューラーの版画『黙示録』に掲載の構図



Mithraic relief
(2-3th century AD?)
往古に潰え再発見されたミトラ教のレリーフ。(捏造物ではないと看做されており)2-3世紀作成のものだと推定されている



[delivered or only-co-incident?] question arise .

問題となる構図上の類似性をまとめもしての図。起点となる視覚的類似性を呈しての
[後光が射している神](ミトラ教の神およびローマ帝国滅亡後、それに取って代わった
キリスト教の神)を軸にして画中の人物が似たようなセクションに配されている中で【救世
主誕生をもたらした処女懐胎のマリア】←→【救世主ににじみよる多頭の爬虫類として
のサタン】／【救世主誕生をもたらした処女懐胎のマリア】←→【絡み合う蛇の杖を掲げ
るミトラ教の神格】←→【救世主ににじみよる多頭の爬虫類としてのサタン】との構図的
類似性が(それが偶然で済むか否かが論点たるところとしての) [記録的事実]の問題
として見てとれるようになっている。

[2]

話を「一端もってして」別方向に向ける。子を慈しむ慈母の像と結びついた【**マリア崇
拝**】というものが
【**エジプトからローマに渡来した往古のイシス神に対する崇拝**】(の一部形態)
と似通っているとの指摘が「かなり以前」よりなされてきたとのことがある。

同じくものこと — 【**マリア崇拝**】と【**エジプトよりローマに渡来した女神であるイシスに**

【対する崇拜】の接続性— についてまずもって目立つところとしてウィキペディアにての記載のなされようを引くこととする。

(直下、目立つところとしての英文 Wikipedia[Osiris myth]項目 ([オシリス神話]項目)にあつての現行記載内容よりの引用をなすとして)

The image of the goddess holding her child was used prominently in her worship—for example, in panel paintings that were used in household shrines dedicated to her. **Isis' iconography in these paintings closely resembles and probably influenced the earliest Christian icons of Mary holding Jesus.**

(訳として)

「イシス信仰にて目立って用いられもした子を抱く彼女イシスの似姿はたとえばイシスに捧げてのものである(イシス崇拜者の)一族の霊廟の壁面などに用いられてもしていた構図となる。こうもした身近なイシスの描画をなしたものらに見るイシス像が[子を抱くマリア]の最初期(ローマにてのキリスト教勃興期)の描画方式に近しくも似ており、おそらく、それに影響を与えていると解される」

(極々端的なるものながらも引用部はここまでとする)



ISIS



MARY

[左]: 英文ウィキペディア[イシス]項目にあげられもしている我が子(子供形態のホルス神を指すハルポクラテス)を抱く慈母としてのイシス像(頭頂部飾りは同じくものエジプトの偶像、女神ハトホルから習合したものと解説されるところの後期イシス)。

[右]: ロシア正教にてのイコン、の中でも数々のレプリカを生み出してきたとての極めて有名な一品としての[ウラジミールの聖母(生天女)]との作。

両者イシスとマリアの描画・崇拜形態に古典古代期からの接続性が見てとれるという意見 **Opinion** があることをここでは取り立てて問題視している。

次いで、同じくものことにまつわってバーバラ・ウォーカー、有名な女性神話研究家の手になる比較的よく知られた著作、

The Woman's Encyclopedia of Myths and Secrets (邦題タイトルは『神話・伝承事典 失われた女神たちの復権』(大修館書店)となる著作で筆者などはイザナミ・イザナギ神話に対する行き過ぎた、そして、多少過てる解釈が載せられているなどとの意味で過分に信は置けぬなど見るに至っているとの著作)

よりの引用をなすこととする。

(直下、読み手にその気があるのならば、引用元にその通りの記載がなされていることが確認できるようになっているとの Barbara G. Walker の手になる The Woman's Encyclopedia of Myths and Secrets (1983)原著にあつての内容を引くとして)

Isis's cult came to Rome about 80 B.C., attained great popularity in the reign of Vespasian, and flourished throughout the empire until it was ousted by Christianity four centuries later. The Goddess herself was not so much ousted as absorbed. Her identification with the virgin Mary was part of the syncretic development of the Madonna cult. Some early Christians in Rome called themselves Pastophori, a title of "shepherds" or "servants of Isis," which evolved into pastors.¹⁹

The story of Mary's Egyptian journey with her child seems to have been devised not only to fulfill the scripture, "Out of Egypt have I called my son" (Matthew 2:15), but also to justify the extensive identifications between Isis and Mary. Jesus took refuge in the holy tree at Mataria, the sycamore of Isis-Hathor, Goddess of Dendera, the Shrine of the Tree. Isis was "Destiny," and so was Mary the triple Moerae. "The tree is a symbol of destiny because it is rooted in the depths. But what is more important is that it grows into time, ramifies its branches like a family tree." Mataria was long known as an Egyptian name of the Goddess who was also Mata-Meri, or Mari.²²

Pictures and sculptures wherein [Isis] is represented in the act of suckling her child Horus formed the foundation for the Christian figures and paintings of the Madonna and Child. Several of the incidents of the wanderings of the Virgin with the Child in Egypt as recorded in the Apocryphal Gospels reflect scenes in the life of Isis as described in the texts found on the Metternich Stele, and many of the attributes of Isis, the God-mother, the mother of Horus, and of Neith, the goddess of Sais, are identical with those of Mary the Mother of Christ.²³

(細かくも補っての拙訳として)

「イシス崇拝はおよそ紀元前 80 年頃にローマに渡来、ヴェスパシアヌス帝の治世にあつて最も盛況を博し、4 世紀後半にキリスト教によって放逐されるまで帝国全土で繁栄を見ていた。女神イシス自体は放逐されるというより習合・吸収されることになった。イシスと聖母マリアとの同一化(習合)は聖母崇拝の諸体系混淆の発展の一翼をなすものであった。初期のキリスト教徒のうち、少なからずが自分達をして Pastophori、羊飼、あるいは、[イシスの召使い]との意味合いの呼称で自分達自身を表し、それが「牧」「師」へと発展を遂げていった (注記番号 19 → 訳注:この部の出典として挙げられているのは Budge, G.E. 2, 217.と表記されての文書となり、そちら略記されてのソースは巻末表記から 19 世紀から 20 世紀初頭にかけて活動したエジプトおよびアッシリア学者の Wallis Budge (ウォーリス・バッジ)の手になる Gods of the Egyptians (2 vols.)と判じられるようになっている。その点、ウォーリス・バッジ、常識の世界で権威あるとみられている同バッジの発表著作がソースであるとのことでそれなりには軽んじられないように判じられもするところである —ただし、筆者は同典拠文書を検討し

たわけではないので断簡零墨としたところ、ほんの端っこでの控え目な言及しか材料がないところで「初期キリスト教徒らは自分達をしてイシスの使いといった意味合いを兼ねもしての言葉 Pastophori で呼び慣わしていた、それが pastors 「牧師」との今日あるとおりの言葉に発展していった」との言いようが[行き過ぎたもの]としてなされている可能性もあるかもしれないとも見ており、ここでの引用元記述の信憑性に折り紙をつけることはできないとも「一応」断っておく（訳注はここまでとする）。

聖書における聖母マリアの子イエスを帯同してのエジプトへの旅（訳注：聖書では救世主としてのイエス・キリストの到来を阻止すべくユダヤ王ヘロデが生まれた子供らを皆殺しにするとの挙に出、の中で、マリアらは神の啓示に従ってエジプトに逃亡したとの下りがあるがここでの記述はそれに拠る）は聖典に辻褄合わせをなさしめるために考案されたエピソードのように見えもするが（マタイの福音書第2章15節に見る[[神が【預言者】をエジプトから呼び出した]との筋立てが成就することになった]との下りに沿うように考案されたように見えるが）、同じくこの部位はイシスとマリアの間の過度なる同一性を正当化なすしめるために考案されたものとも解される。イエスは Mataria、樹の神殿たるデンデラの地の女神イシス・ハトホルのイチジク類の樹木の元に避難することになった。イシスは[運命]を体現する存在であり、その意ではマリアも三対のモイライ(ギリシャ神話における運命の管掌者たる女神達)であった。樹は地中深く根差すがゆえに[運命]の象徴であるからである。しかしより重要なのは樹が時間とともに成長、家系図のように枝を分岐させていくことにある（訳注：マリアとイシスの習合を詩的に表している部とも解される）。（嬰兒イエスとその元に身を寄せた）Mataria —エジプト、デンデラの領域のイチジク— は長い間、Mata-Meri すなわち Mari と呼ばれる女神のエジプト名であったことが知られてきた（注記番号 22→訳注：この部の出典として挙げられているのは Budge, D.N., 160; Graves, W.G, 357.と表記されてのものらとなり、それら略記されてのソースは巻末表記から Wallis Budge の手になる Dwellers on the Nile との著作、Robert Graves の手になる The White Goddess の両書籍と判じられるようになっている。うち、ロバート・グレイヴズの手になる The White Goddess は信用に値するソースではない、unreliable なるものであると見るが（「感性派の」文人であったロバート・グレイヴズ (Robert Grave) の神話関連の手仕事が信用に値しないと世間的に見られていること、同グレイヴズが[論拠を自分自身で頻繁に造ってしまふ類の文人]であったとのことは本稿の先だつての段でも実例挙げて解説している）、Dwellers on the Nile との典拠著作の著者はウォリス・バッジ、権威あるとみられているそちら学者筋の発表著作とのことでこれまた軽んじられないように判じられ「も」する —ただし、筆者はこれまた同典拠文書を検討したわけではないのでここでのバーバーラ・ウォーカー著作にあつての表記の信憑性について太鼓判を押すことはできないとも述べておく— . また、Mataria との名称がマリアと結びつく聖樹に親和性が高いとのことと言えば、たとえば、エジプトはカイロ北部の地にまつわつての英文 Wikipedia [Al-Matariyyah] 項目にあつて現況、(以下、引用なすとして) “ The name Al-Matariyyah is thought to come from Latin name of Mater which means 'mother', and is from the presence of the 'tree of the Virgin Mary' in this district. ” 「アル・マタリアとの当地の地名の由来は母を意味するラテン語 Mater に由来する、そして、当地にあつての【処女マリアの樹】の存在に由来すると考えられる」(引用部終端)との表記がみとめられるところ「でも」ある(訳注はここまでとする)。

乳房を吸う[子たるホルス]の挙を表象するところのイシスにあつての描画形態および彫像化形態はキリスト教における聖母マリアと子の似姿、絵画らの定

立を結果的にもたらしたものである。聖書外典（訳注：アポクリファ。聖書の正典に加えられなかったものながらも今日まで残置伝存している文書らのことを指す）にあつての福音書に記録されている子イエスを伴いエジプトにおいて彷徨するマリアにまつわつてのいくつかの出来事はメッテルニヒ石碑に描写されているイシスのきしたしの鏡像形態となつていもし、そして、神なる母としての、ホルス神およびネイト神の母としての、サイスの地の女神としてのイシスの特性はキリストの母たるマリアの特性と一致性をきたしている（注記番号 23→訳注：この部の出典として挙げられているのは 23. Budge, G.E. 2, 220.と表記されているものらとなり、そちら略記されてのソースは巻末表記から Gods of the Egyptians (2 vols.) との著作と判じられるようになっている（訳注はここまでとする））

（補つてももの拙訳を付しての引用部はここまでとする）

以上、引用なしたことが「厳密に見もして」誤りとまったくもつて無縁なるものであると言ひ切れるか否かは、はきと述べ、問題ではないととらえている（**Whether Barbara G Walker's viewpoints (seen in The Woman's Encyclopedia of Myths and Secrets) is proper or not, it makes no difference.**）。

問題なのは

「イシスと聖母マリアの接続性・同一性を殊更に取り沙汰する」

との観点が根深くも存在していること、それ自体が「マリア崇拝」にあつての怪物染みた特色 — 先だつて異論など生じようもなからうとの凶像呈示方式に重きを置いて解説なしているドメニコ・ギルランダイオ画 Meeting of Augustus and the Sibyl に見る生殖過程の異様なる再現方式（【二重螺旋構造】【受精にあつての精子・卵子サイズ比】【精子の卵子到達数】まで克明に再現しているといったありようの「15世紀」【処女懐胎】の預言画に見る生殖過程の再現方式）や直前言及の悪魔の王の構図とのオーバー・ラップ方式の精妙なることなどに見る怪物染みた特色— **との絡みで際立ってくるだけのことが「ある」ということである**（尚、【マリア崇拝と（往古の）イシス崇拝の接合】とのことで述べられれば、欧州の一部地域でその偶像が崇められているところの黒い聖母、いわゆる、[ブラックマドンナ]も往古の褐色のイシス崇拝の影響を踏襲していると考えられているといった観点もが幅広くも欧米にて呈されているが、そうしたことの真偽もまたこの話にはさして影響するものではないとも述べておく）。

[3]

直上の[2]の段で指摘もしていたこと、【聖母マリア崇拝（の初期にてのありよう）と（往古ローマ期の）イシス崇拝の間の接合性】にまつわる指摘と複合顧慮することでその重みがよりもつて迫ってくることとして本稿にての先だつての部、補説 3 と分類付けしての部 — 現行、補説 4 と振つての部の締めくくりにあつての話をなしているわけだが、補説 3 は紙幅にして本補説 4 よりかなり前もつての部となる— では次のことらを事細かに解説なしていた。

「イシスにまつわる往古の密儀体系は — ペルセポネおよびデメテルというギリシャ神話の女神らを崇拝対象としての「エレウシス密儀」というものをも媒介項と

するかたちで— 今日フリーメイソン思潮に濃厚に影響を与えていると言
いようがなされている — 学者(まともな部類の学者)らおよび識者系フリーメ
イソン・インサイダーそれ自体からのそうした言いようがなされている—] (**出**
典 (Source) 紹介の部 93 にて解説していることである)

[フリーメイソンの今日にあつての思潮体系(密儀を[死の制裁]の制約と共にな
すとのありよう/密儀体系が[死と再生の儀]に重きを置いてのものであるとのあ
りよう/イニシエート(密儀接受者)に「光を与える」との観点の介在)に通底する
秘儀体系を往古に伴っていたとされるイシスやペルセポネといった女神らを巡
る関係性は「極めて多重的・多層的な」ありようで — [著名古典]や[伝承]にて
の各存在の描画形態を通じて— 【キリスト教における悪魔の王サタンを巡る事
物】に接続するようになっている、そして、同じくもの関係性は — 極めて異常な
話であることは論を俟たないのだが、確としてそこに存在する[現象]にまつ
わつてのこととして— 【ブラックホール; 現代的観点でブラックホールと呼称さ
れる重力の怪物】にまつわる諸要素と「濃厚に」接続するようになっているもの
「ですら」ある(「極めて多重的・多層的な」ありようで「濃厚に」接続するよう
になっているとすることがあるために[偶然]で済むのか、[恣意]ではないのかとの
問題が当然に首をもたげてくるというのが本稿の訴求事項である)] (表記のこ
とは本稿のここに至るまでの折に触れての流れで説明に努めてきたことである
が、ダイジェスト、要約としての表記を直下なしておくこととする)

Digest

(膨大な図葉・膨大な典拠を挙げもしてきた本稿にあつての**補説 3**での摘示事項、
そのダイジェスト(要約)としての振り返り表記として)



Persephone



Isis



Hecate

【説明とし
て】: 女神
イシスは
女神ペル
セポネの
別相であ
り、また、
女神ヘカ
テの別相
でもある
... その
ような思潮
が古代世
界文献を
通じて今
日に根強
くも伝わ
っているこ
とは本稿の
p.137 から
p.157、そ
して、
p.177 から
p.184 にて
仔細に解
説してき
たことであ
る(なかん
ずく欧州
に根強くも
伝わる古
典の問題
としては
p.182 など
で原文引
用をなし
ている)。

【説明として】:ここに挙げてあるペルセポネに回帰する多重的相関関係性については補説3と振つてのセクションの順次説明で全て堅い典拠を指し示しているところともなる(：本書のp.137からp.408が【順次段階的説明】と【典拠紹介】のための部に該当する)。

[**ペルセポネPersephone**] ⇔ (媒介項Medium:[冥界降下 descent to the underworldをなした女神としての特性] [双方が愛人としている神TammuzおよびAdonisの際立つての同質性]) ⇔ イナンナ・イシュタル Inanna / Ishtar.

イナンナ・イシュタルInanna/Ishtar ⇔ (媒介項Medium:[金星を神格化した存在(divine personification of planet Venus)としての共通性] [冥界に双子の片割れエレシキガルEreshkigalおよびショロトルXolotlを持つとの共通性]) ⇔ ケツアルコアトルQuetzalcoatl ⇔ (媒介項Medium:[蛇と結びつく文明の接受者 — promoters of civilizations related with serpent— としての特性(アメリカ大陸に伝わる伝承および聖書に見るエデンの智慧の樹の実を食すことの教唆のエピソード)] [金星Planet Venusと結びつくとの特性] [期待を裏切るとのかたちで災厄をもたらした蛇としての共通性 — betrayal and disaster (the fall of Aztec civilization and Quetzalcoatl like conquistadors & the fall of man, betrayal and disaster caused by old serpent seen in "Revelation")—]) [アメリカ大陸 American Continent → アトランティスAtlantisとの見立てが存在し(e.g. Francis Bacon's Great Atlantis)、また、アトランティスAtlantis → 黄金の林檎の園 Garden of Hesperides(Atlantides) → エデンの林檎の園 Garden of Edenとの見立てが存在するとの背景]) ⇔ サタンSatan(ダンテ『地獄篇』Dante's Infernoに登場するルチフェロLucifero)。

サタン(ダンテ『地獄篇』に登場するルチフェロLucifero) ⇔ (媒介項Medium:ダンテ『地獄篇』Infernoに見るケルベロス捕縛で終結するヘラクレスの計12の功業の後半部との際立つての近接性(continuity between Dante's Inferno and 12 labours of Hercules)、そして、その近接性を介してのダンテ『地獄篇』に登場する三面のルシファーと三面のケルベロスの接合性) ⇔ ケルベロスCerberus

(以下、ケルベロスCerberusを介しての関係性がいかように多重的にペルセポネPersephoneに回帰するかの複数パターンを羅列するとして)

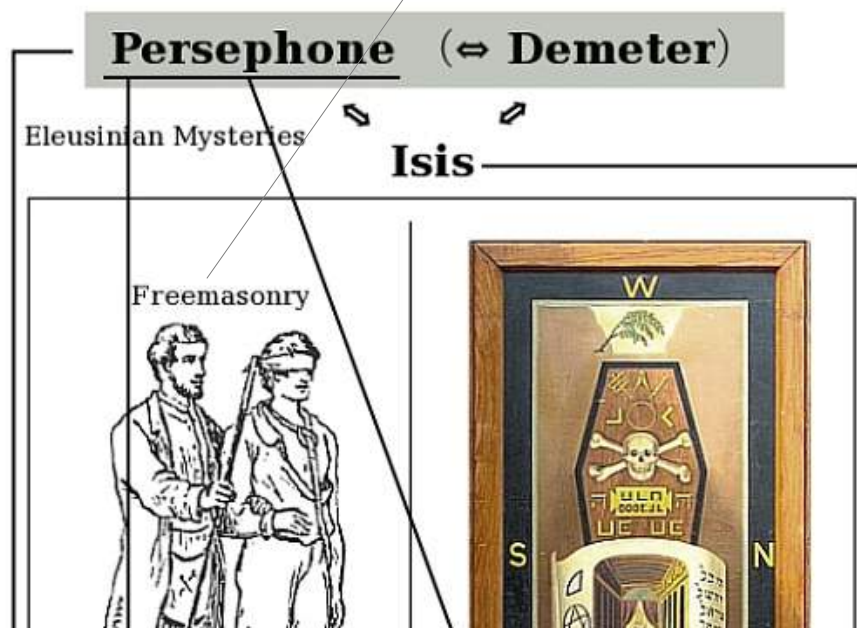
ケルベロスCerberus ⇔ (媒介項Medium:本稿にての先の段で詳述に詳述を重ねてきたところとして、[ヘシオドスのTheogony『神統記』に見るところの50の頭を持つケルベロス fifty headed Cerberus]が[アヌビスAnubis]・[ヘカテHecate]といった別神格を通じてシリウスの伴星、50年の公転周期を持つ白色矮星シリウスBと奇怪無比に結びつくと述べられるだけの背景 — 例としてのプルタルコス古典に見る記述(e.g. "strange" description about [Isis = Sirius] of Plutarch's Moralia)— が存在) ⇔ シリウスB(SiriusB) ⇔ (媒介項Medium:エジプトよりのグレコ・ローマン・ワールド(古代ギリシャ・古代ローマ世界)への渡来神でもあった女神イシスの犬の星シリウスの体現神格としての特質) ⇔ イシスIsis ⇔ (媒介項:[ローマ期古典『黄金の驢馬』the Golden Assに見る三面構造のペルセポネ triple headed PersephoneやヘカテHecateとイシスIsisを同一視する叙述]あるいは[ペルセポネ・デメテルを崇拝するエレウシス秘儀 Eleusinian Mysteriesとイシスにまつわる伝承との類似性]) ⇔ [**ペルセポネPersephone**] (回帰)

ケルベロスCerberus ⇔ (媒介項Medium:「双方ともに三つの頭を持つ存在であり」「双方共に冥界と強くも結びつく存在であり」「双方共に犬(番犬としての犬)と極めて濃厚に結びつく存在であり」「双方共に毒物トリカブトの縁起由来と強くも結びつけられている存在である」とのありよう) ⇔ ヘカテHecate ⇔ (媒介項Medium:両者を同一存在とする、古典に見る記録的叙述内容や学識者らの申しよう) ⇔ [**ペルセポネPersephone**] (回帰)

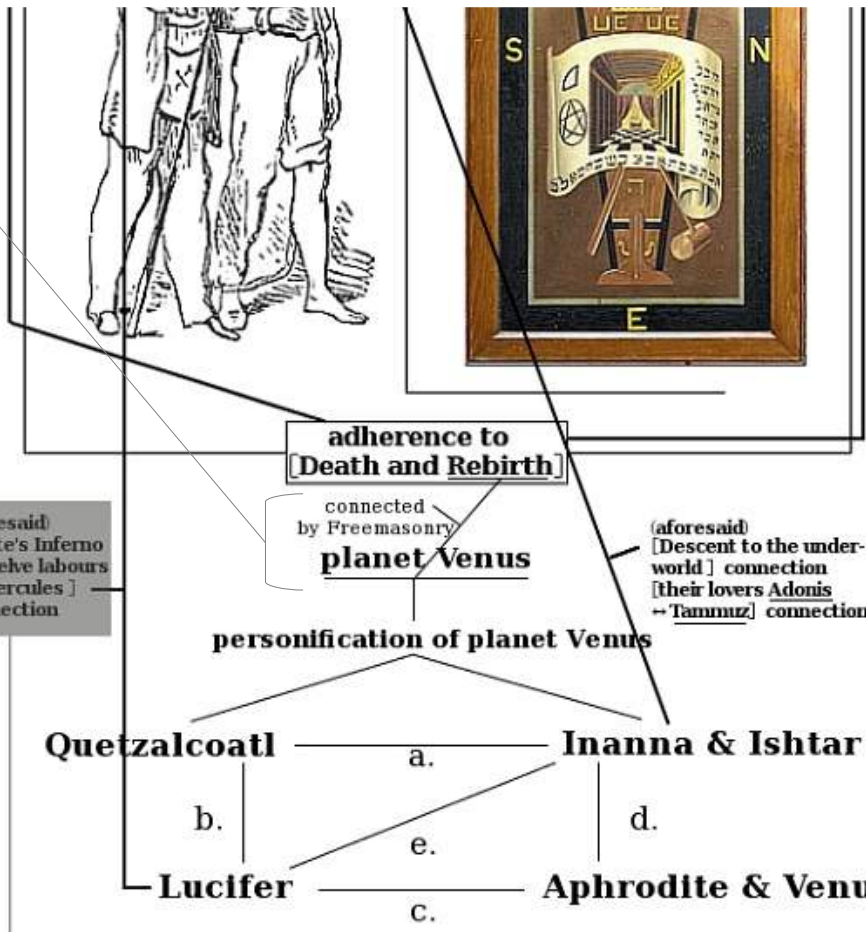
ケルベロスCerberus ⇔ (媒介項Medium:上にて言及と同文の媒介項) ⇔ ルシファーLucifero ⇔ (媒介項Medium:[金星と深くも結びつけられているとの存在らである、また、冥界下り(ないしは冥界=地獄落ちと幽閉)と関わる存在らである]との式「でも」ルシファーLuciferoと結びつくイナンナ・イシュタルInanna / Ishtarとアフロディテ・ヴィーナスAphrodite / Venusの伝わる同質性を顧慮したうえでそこに見るアフロディテ・ヴィーナスの誘惑と関わる同質性の「黄金の林檎 the Golden Appleにまつわる誘惑」と[ルシファー(古き蛇)が関わりと伝わるエデンの禁断の果実 Forbidden fruit depicted as an appleにまつわる誘惑]における類似性までも顧慮することで浮かび上がってくるとの関係性) ⇔ イナンナ・イシュタルInanna/Ishtar ⇔ (媒介項Medium:上にて言及のものと同文の、[冥界降下をなした女神][双方が愛人としている神の際立つての同質性]との媒介項) ⇔ [**ペルセポネPersephone**] (回帰)

ケルベロスCerberus ⇔ (媒介項Medium:直上言及と同文の媒介項) ⇔ ルシファーLucifero ⇔ (媒介項Medium:旧約聖書にあって登場の禁断の果実を林檎と見る歴史的視座の存在) ⇔ 林檎としてのエデンの誘惑の果実 Forbidden fruit depicted as an apple ⇔ (媒介項Medium:人間の楽園追放をもたらしたとの誘惑の果実がトロイア内破をもたらすことになった黄金の林檎と結びつけられるだけの質的類似性 — 本稿にて詳述の[アフロディテ・ヴィーナスが勝利を見たパリスの審判 Judgement of Paris]にまつわる特性とエデンの誘惑に伴う特性の記号論的連続性]や[黄金の林檎の園とエデンの園を同種のものとするような視座が一部の人間にあったとの事情]に関わりと関わる同質性の質的類似性 — の存在) ⇔ 黄金の林檎 the Golden Apple ⇔ (媒介項Medium:[黄金の林檎]の対価として差し出された絶世の美女ヘレンHelenと — ケルベロス捕縛がモチーフとなるヘラクレス12功業にて救出されることになったテセウス Theseusら誓約を介しての — ペルセポネとの連続性) ⇔ [**ペルセポネPersephone**] (回帰)

【説明として】:(再述として)女神インスは女神ペルセポネの別相であり、また、女神ヘカテの別相ともされるのだが、女神インスを崇拝対象とする古代秘教会、そして、女神ペルセポネを崇拝対象とする古代の秘教会が【フリーメーソンの死と再生の思潮(と儀式体系)】にそのまま息づいているとの申しようが学識者系フリーメーソンリー・インサイダーや一部学者によってかなりもって昔から指摘されてきたとのが現実にある(疑わしきにおかれては本書(本巻 vol.3 のPDF文書) p.158 から p.167 などを参照されたい)。



【説明として】:女神イシスを崇拝する古代の秘教会(アイシス・ミステリー)、そして、女神ペルセポネを崇拝する古代の秘教会(エレウシニアン・ミステリー)がフリーメーソンの死と再生の儀式・思潮体系にそのまま息づいているとの指摘が講学的側面込みで歴年なされてきたことがあるわけだが、同じくもののフリーメーソンの死と再生の儀式思潮が【明けの明星】と結びついているとの内部者申しようがなされている(本稿本巻 p.461 から p.462 にてそちら一例は原文引用している)。明けの明星となれば、【ケツァルコアトル】【イナンナ・イシュタル】【アフロディテ・ヴィーナス】【ルシファー】らの本稿にて問題視している相関関係に関わるところである。



【説明として】:【アステカ帝国(現スペイン領域)にて崇められていた羽毛もつ蛇の神ケツァルコアトル】、【古代メソポタミア文明における愛と豊穡の女神であるイナンナ(イシュタル)】、【ギリシャ(ローマ)における美の女神であるアフロディテ(ヴィーナス)】、そして、【キリスト教体系における悪魔の王たるルシファー】の各存在が「多重的」かつ「別方向・別論拠から」【女神イシス】および【女神ペルセポネ】と濃厚に接合する存在となっているとのことが(理由ありもして)の本稿にての補説3と振っての部の主たる指し示事項となっている。

Dante's Inferno

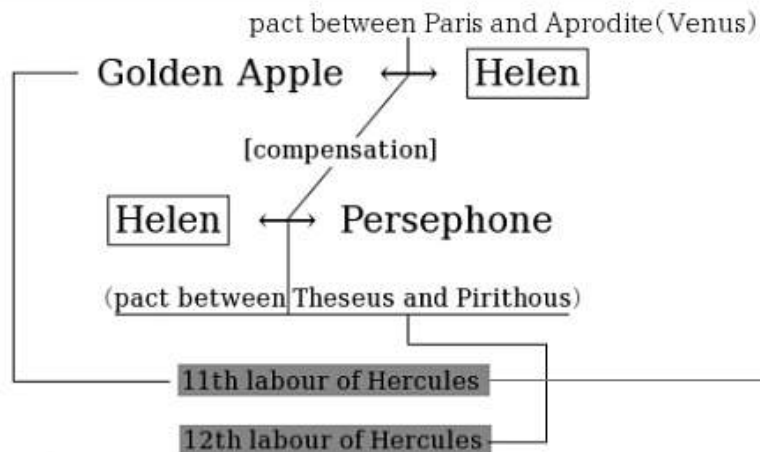
地獄の中核(地球のコア)に向けての踏破行後半部を一直線で表すると次のようになる。

Geryon Seventh Circle → Eighth Circle
The Tenth Labour of Heracles
 ダンテは【ヘラクレスの第10番目の功業にて討伐されたゲリオン】(神話が興るところでは三面の怪物だが、ダンテが描くところでは悪魔な騎士の顔をした胴体蛇の怪物)の背におぶられて地獄の下層に向けての急降下、断崖を超えるべく急降下を行う。

Antaeus Eighth Circle → Ninth Circle (Cocytus)
The Eleventh Labour of Heracles (or Tenth)
 ダンテらはゲリオン助力で降り立った階層より下の階層に降りるべく【ヘラクレスの第11番目(あるいは第10番目)の功業の途上にて討伐された巨人アンタイオス】の助力を受ける。

Lucifer (having three heads)
 地獄の最下層、地球の中心部には【ヘラクレスの第12番目の冒険に登場したケルベロス状の三面構造をともルシファーニ(サタン)】が幽閉されている。

depth 地獄の深度



本稿にあっての先にての指し示し事項を(くどくも)繰り返す。
 第一に「絶世の美女ヘレン」は(結果的にトロイア崩壊の原因となることになった)「黄金の林檎」の対価としてパリに提供の提案がされた存在である(〔出典(Source)紹介の部39〕。尚、ヘレン求婚者らのギリシャ諸侯らにあっては後に禍根を残さぬようにとオデュッセウス提案の誓約、[ヘレンの夫の一難事には元ヘレン求婚者全員が協力すべし]との誓約が事前に結ばれており、その伝でもヘレンは「誓約にまつわる美女」であったとも述べられるようになっている)。

第二に、「絶世の美女ヘレン」はパリに駆け落ちとのかたちで掠(さら)われる前にも略取の対象となつたとのことがあり、の際、ヘレン略取をなしたテセウスらとペイリトオスらは片方がヘレンを手に入れる代価にもう片方の妻君取得にヘレンを取得した方が協力するとの約定を結んでおり、結果的に「ペルセポネの略取」と「ヘレンの略取」が約定に基づき秤で釣り合わせられていたに等しきかたちとなつていたと伝わっているとのことがある(〔出典(Source)紹介の部90(10)〕)。

以上より述べられることは駆け引きの具にされていたとの「ヘレン」を中間項にして「トロイア崩壊の原因(黄金の林檎)」「ペルセポネの略取」につなかりが観念されるところである(別段複雑な話ではなく、単純な話である)。さて、そのような結びつきが観念できる「黄金の林檎」「ペルセポネ略取のエピソード」のうち「黄金の林檎」のほうはヘラクレス第11番目の功業の取得目標物となつており(〔出典(Source)紹介の部39〕)、「ペルセポネ略取のエピソード」は(無謀にも人間の身で神を略取しようとした誓約の当事者、テセウスとペイリトオスが冥府の女王への狼藉の罰として囚われていた冥界の忘れ椅子よりヘラクレスにその機会にて救われたとの式で)「ヘラクレス第12功業」と結びついているとのことがある(〔出典(Source)紹介の部90(10)〕)。

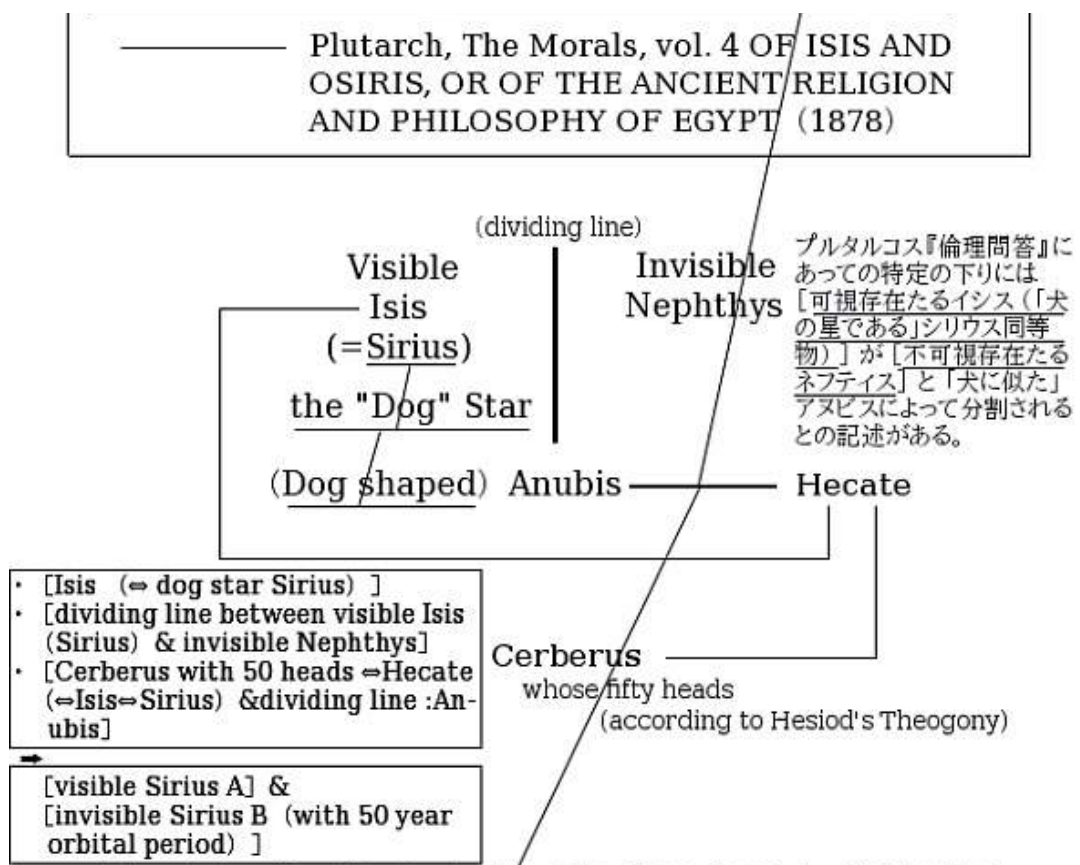
【説明として】:ダンテらが重力の中核で幽閉されたルシファー似姿を仰ぎ見て終わるダンテ『地獄篇』とは、ールシファーに至る後半部から殊に顕著になるところとしてヘラクレス12功業と濃厚に結びつくように設定付けられる物語であり、そちら古典における特性はまたもつてして「ペルセポネとトロイア崩壊伝承の関係性」に関わるものでもある。そして、そこに見るトロイア崩壊伝承というのは黄金の林檎を介してエデンの禁断の果実による失樂園のみならず、今日のブラックホール生成実験にまつわる執拗極まりない命名規則と通ずるものでもある(本稿にての主たる指し示し事項でもある)。

Philological Truth

44. And when Nephthys was delivered of Anubis, Isis owned the child. For Nephthys is that part of the world which is below the earth, and invisible to us; and Isis that which is above the earth, and visible. But that which touches upon both these, and is called the horizon (or bounding circle) and is common to them both, is called Anubis, and resembles in shape the dog, because the dog makes use of his sight by night as well as by day. And therefore Anubis seems to me to have a power among the Grecians much like to that of Hecate among the Grecians, he being as well terrestrial as Olympic.

Plutarch, The Morals, vol. 4 OF ISIS AND OSIRIS, OR OF THE ANCIENT RELIGION AND PHILOSOPHY OF EGYPT (1878)

【説明として】:本稿では「古文献にあって奇怪な先覚的言及がなされている」との欧米圏で物議を醸し出した一連の指摘の存在を問題視しまさにそこから指摘の中で【女神イシスが【シリウス】体現存在としての顔をもつ」と同時に同イシス関連事物らに一(エジプトの犬の神アヌビスや同アヌビスとの結びつきが指摘されたきたとのヘカテやケルベロスに通ずるところにて)人類の観測技術の問題から19世紀まで発見されることが不可能であったシリウスB(白色矮星)の特性に多重的に結びつく側面が伴っているとの言い分もがなされていることの意味性について詳述をなした(本書にてのp.231からp.310にて詳述のことである)。



プルタルコス『倫理問答』にあっての特定の下りには「可視存在たるイシス(「犬の星である」シリウス同等物)」が「不可視存在たるネフティス」と「犬に似た」アヌビスによって分割されるとの記述がある。

本稿のこれまでの段にて指し示してきたように【イシス】とは【シリウス】の体現存在とされる女神であり、同イシス、ローマ期の古典にてヘカテとの同一性が言及されている存在ともなる。といったこととプルタルコス古典『倫理問答』(モラリア)の中での【アヌビスとヘカテへの同質性への言及】のこと、そして、【ケルベロスとヘカテの同質性】(先述)のこと、【アヌビスとケルベロスの類似性】(双方共に冥界に関わる犬科の存在となる)のことを複合的に顧慮すれば、アヌビスをシリウスとの絡みで【ケルベロス】に置換可能とする見方に「行き過ぎは何らない」と述べられるであろう。さて、ケルベロスはヘシオドスの古典『神統記』では3つではなく50の頭を持つ存在であったとされるわけだが、そのことをここで置き換える方式に照らしあわせて見れば、次のようになる。

【可視存在たるイシス(シリウス)と不可視存在たるネフティスが50の頭を持つケルベロス(同ケルベロス自体、ヘカテを介してイシス=シリウスと結びつく)によって分断される】

ここで考えるべきは可視天体として極めて目立つシリウスA(犬の星にしてイシスの星)の背後には不可視化天体であるシリウスBが存在しており、同白色矮星シリウスBの公転周期が50年であるとされていることである。

話を単純化しよう。

- a1. [犬の星シリウスと関わる女神(イシス)]
- b1 [上女神と特定存在(ヘカテ)を介して接合する50の頭を持つ犬の怪物(ケルベロス)]
- c1. [シリウスと同等視される可視化存在と不可視化存在の50の頭を持つ上怪物との同等物による分断]

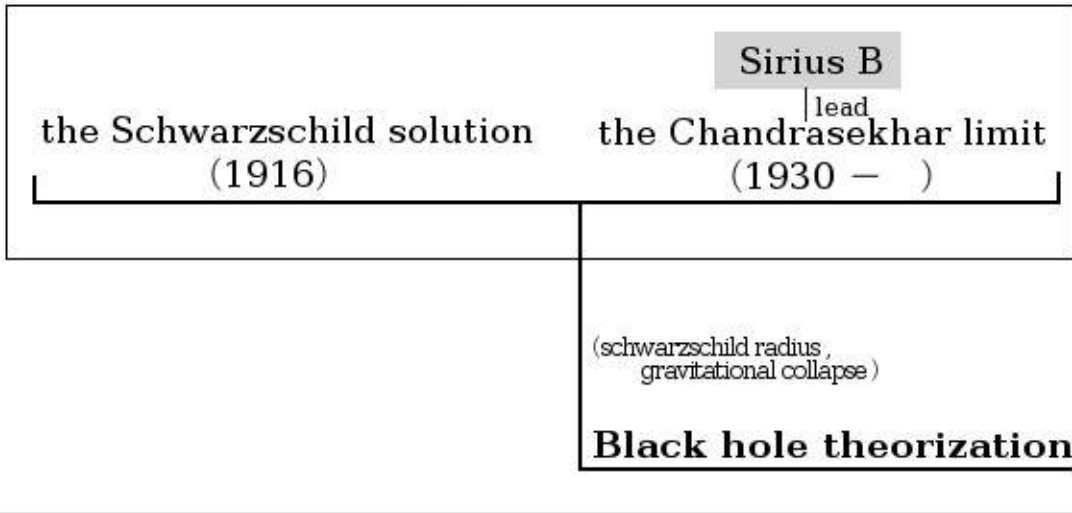
との三つの要素が全て出揃っているとき、そこに

- a2. [犬の星シリウス]
- b2. [50の公転周期]
- c2. [シリウスAに対して不可視化している50の公転周期のシリウスB]

を想起「せざるをえない」と述べるのは行き過ぎになるか、なるわけがないであろう。否、むしろ、それはシリウスAとシリウスBの関係性を想起しないほうがどうかしているとの程度の抜配の質的類似性の問題でもある(繰り返すが、カードは【シリウス】【シリウスと結びつく50の値】【シリウスと結びつく50絡みの存在による可視化存在と不可視化存在の分離】である)。

そして、「皮相的に問題となるのは、」以上のような関係性が古代ローマの時代には出揃っていたとのことであり、にも関わらず、シリウスBの存在が明らかになったのは近代以降の話であるということである(「皮相的に問題となるのは、」との物言いに違和感を覚えるのが普通の感覚であろうが、そのような指し示しの背後に控えている問題として、そう、真に問題になることとして、我々全員に相応の最期を進呈するとの露骨・悪辣なメッセージ性があることに筆者は気付いているためにそうした書きようをなしていること、お含みいただきたいものである——といった申し分の適正さを筆者としては検証いただきたい、すべて容易に後追いでできるとの典拠を挙げ連ねての本稿を介して検討いただきたいと考えている——)。

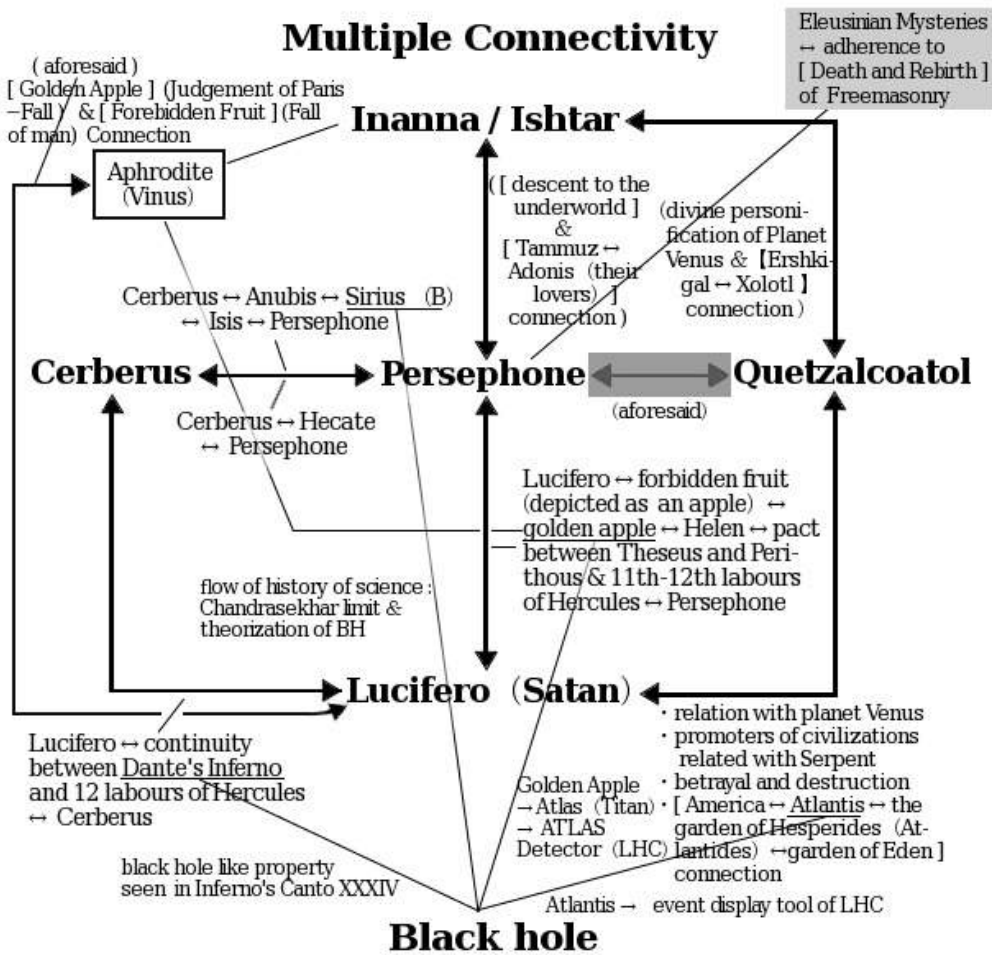
History of Science



【説明として】:女神イシスの関連事物らに観測技術の問題から19世紀まで人間に見られることが不可能であったシリウスB(白色矮星)の特性に多重的に結びつく側面があるとの指摘がなされているとこのことを解説・検証しました(本書 p.231 から p.310)うえて本稿ではシリウスBという天体が「なるべくして」どの按配で重力崩壊にまつわる理論深化のキーにされるに至ったとこのこと、そして、そのことがブラックホール(と今日呼び慣わされている存在)の理論開闢をもたらしたとされること、そうもした科学史にまつわる経緯・流れがあるとのことは先に解説している(本書にての p.311 から p.324)。

【説明として】:先行する段にて縷々(る)指摘・問題視してきたこととして本稿にての補説3と振ってのセクション(にあっての p.137 から p.437)で専らに問題視してきたのはここに表記の多重的関係性である(イシス・ペルセポネ・ルシファー・ケツァルコアトルといった人間の宗教的体系にあっての(かつての)強力な崇拜・畏敬・嫌悪の対象の間に横たわる多重的関係性がすべてブラックホール(と今日呼ばれるもの)に濃厚に通ずるようにもなっているとのことが「ある」)。

Multiple Connectivity



本稿本段にての問題意識は [多重的関係性の環] が以上摘示の通りのかたちにて [事実の問題] [動かぬ「現象」]として摘示できるようになっているとのケースにあって、それが [偶然ないし自然現象の可能性で説明がつかものなのか] 「偶然性ないし自然発生が否定されるのなら何が問題になるのか」ということを問うことにある (:尚、客観性担保のため、関係性存在摘示に際しての出典紹介には「当然に」注力している)。

(膨大な図葉・膨大な典拠を挙げもしてきた本稿にあつての補説3と振つての部の摘示事項、その振り返り表記はここまでとしておく)

上のこと(本段、[3]と振つての要約部で指摘しているところの【女神イシスやイシスと接合する女神ペルセポネ←(著名古典や伝承に見る描画形態)→サタンに通ずる事物】との関係性について扱ひもしてのこと)は先行する[1]において呈示の、

【マリア ← (ルネサンス期絵画らにみとめられる描画形態や古代の遺物のありよう) → サタン】

との関係性および(同文に先行する)[2]において呈示の、

【マリア ← (伝承にまつわたる理解) → イシス】

との関係性と複合顧慮することで「よりもつて」多重的接続性が見てとれるとのものである。

極々端的に表記すれば、

[1]にて呈示:【マリア Maria ←→ サタン Satanic Image】

[2]にて呈示:【マリア Maria ←→ イシス Isis】

[3]にて呈示:【イシス Isis・ペルセポネ Persephone ←→ サタン(関連の事物) Satanic Image】(こちら関係性は本稿にあつての補説3と振つての部の主たる指し示し事項に内包されているものである)

との関係性が「全く別側面にあつて」成立している、だが、であるにも関わらず、それらには — (最前の部の言及であつて推し量りいただけていることか、とは思うのであるが) — 相互に繋がる側面がある、そう、【多重的相関関係】が成立している、であるがゆえに、「偶然」ではなく「わざと、」そうさせられていると判じられるようになっている、そう述べたいのである。

そして、そうした関係性がフリーメーソンのような【傀儡(くぐつ)のような動きを往々にしてなさしめられる成員を多々含むと解される統治補助装置】に押しつけられた思潮ありようやブラックホールを巡る問題 — 黄金の林檎と巨人アトラスに濃厚に関わる問題でもある — と地続きになっている(疑わしきは直前まで枠で括つてきて振り返りもしてきたことの内容を確認してみるといい)とのことからして注視に値することであると述べたいのである。

それがため、マリア崇拝なるもの — それを信じている限り、それに拘泥している限り、そうした種族に本当の進歩など滅するまで望むべくもなかろうとの【処女懐胎】なる奇態なる観点を伴つての崇拝 — の暗部としてのありようからして閑却はできぬ、およそ捨て置けぬ([当然に問題になる])との観点がこの身、筆者にはあり、人間という存在のありようを科学的知識でもって嘲笑つているマリア崇拝関連事物 — Meeting of Augustus and the Sibyl と銘打たれた後世キリスト教徒に偽作された[予言のシビュラ]関連伝承に依拠してのルネサンス期絵画 — のことを

[奇怪異様なる911の事件の発生の先覚的言及事物らの存在にまつわたる解説]
(第三者が容易に後追いできるようにどこそこを参照すれば分かる、それだけで裏取りができるとの式をとにかくも重んじての解説)

に続いてのこととして取り上げもしたのである (:まずもつてルネサンス期に今日に至つて人類がそこまで取得するに至つた科学知識を露骨に示唆している絵画があること、それ自体が意識的ないし無意識的なる【媒質】とされた者(ルネサンス期画家)に対するコントロールの介在を

示唆しているとのことがある。そして、そうしたコントロールありようが【ブラックホール】(と今日の科学界で呼ばれているもの)の関連事物にまで及んでいる、よもって述べれば、【人類の罪】の問題を【ブラックホール】と結びつけるとの異常なる何百年も前に遡る先覚的言及にまで及んでいるとの側面があるから問題でありもし、ばかりではなく、おなじくものコントロールありようが同文のところまで現代に至っても作用し、【911の事件を引き起こすこと(引き起こさせること)】をブラックホールの問題やフリーメーソンのシンボリズムの問題と陸続させるとのかたちで示唆し続けてきたと判じられるだけのことが「山積」している(ビヨンド・リーズナブル・ダウト、合理的な疑いのレベルを越える「黒」のレベルで山積している)からこそさらにもって問題である、と述べたいのである。—※再三再四どころか再四再五と述べるが、ここでの字面だけ望見する限りは訴求内容それ自体が異常なることであるのは論を俟たない。しかし、【現象】は揺るがない(そして、人間がそれに向き合わず周章して逃げ惑おうとも、あるいは、愚劣にも否定しようともそこに冷厳とあるとの【現象】は動かず、【現象】の示唆する【結果】も何もやらなければそのままに具現化すると「当然に」判じられもする(予告的言及が執拗に執拗に歴年なされてきた中で射手の「構え」のありようもが透けて見えるのが今という時だからそうも判じられもする) —)。

これにて補説4と振ってのセクションを終えもし、もってして、厩大な文字数を割いて書き記してきたとの一連の補説部 — 補説1から補説4に分かちての表記をなしてきたとの部 — に区切りをつける。

さて、実にもって長くもなってしまったが、本PDF文書はこれにて手仕舞いとして、「総決算をなし」「核心をなすところを取り扱う」との続く内容については巻をまたいでのPDF文書(vol.4とのかたちでのPDF文書)に譲ることとする。

尚、(本PDF文書から)巻をまたいでの続く部にあつては【本稿全体の総決算】として以下のこつらを順々に取り上げる所存である。

・長大なる本稿の前半部より取り上げもしてきた、

[非情なまでに克明な加速器によるブラックホール生成の科学界論議に通じている予見的文物ら — 【2008年9月10日にあつて火入れを見た直後、一端、長期稼働停止となり、2009年年末から再度本格稼働開始しもした現実世界のLHC実験(1994年に装置建設の正式承認を見ている加速器実験)による膨大な極微ブラックホール生成可能性にまつわつての近年(ここ10数年)における理論予測の登場】のこつを露骨に想起させるように【2009年年末から2010年年初にかけての【欧州加速器】(核融合炉付設型加速器)による極微ブラックホールの大量生成による世界の終末】を描いていたとの「際立つての」予見的小説たる Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』(原著1980年初出)のような作品ら —]

について「も」ここに至るまで筆を割いての補説部で延々解説してきたそれと同文の関係性(ヘラクレス12功業・黄金の林檎に通ずるようになっているとの「ブラックホール関連の」関係性)が「色濃くも」「多重的に」、しかも、「極めて巧みな式で」当てはまるようになっているとのこつが「ある」。現実には、冷厳に、そうしたこつが「ある」。そのこつの指し示しを委曲委細を尽くして(続けての巻で)なすこととする。

・本稿全体を通じて摘示してきたこつらにあつていかなる意味的繋がりあい

が「欧州文明の根源をなす宗教観との兼ね合いで」具現化を見ているのか、それも、宗教というものの反対語法を厭という程に(メッセージングを含めた存在が)身内で茶化すが如き式で執拗に具現化を見ているのか、についてのさらにももの詳解を講じる(：先ほど取り上げもしたバージン・バース、「処女懐胎の」マリアを具にしての科学的予見事物の存在 —(それが時代区分上、あってはならない折に「精子・卵子の受精過程を精子・卵子のサイズ比・数値的特性を込みにして克明に描き(描かせしめ)」、かつ、同時に、「精子先端にあってDNA二重螺旋構造が蔵されているとのありようをも描いている(描かせしめている)」との作品が【「処女懐胎の」マリア絡みの[予言]を題材にしての画】として15世紀に具現化しているとのこと— といった限局的なレベルを越えもしてのこととしてさらにももの詳解を講じる)。

・[付録の部]:本稿全体を通じて指し示してきたことにまつわたの【意味的繋がりあいの具現化の問題】について解説した上でものこととして、意味性
の問題から一步離れてのこととして[類似要素らが多重的に結びついていること]についてその【恣意性】【偶然性】を選び分けるべくもの確率的モデルを呈示する(：より具体的には、である。ベイズ推定という大学初歩の数学モデル構築・呈示手法を高等学校卒業レベルの知識水準の人間でも分かるうとの式で懇切丁寧を心掛けて解説、の上で、そちらベイズ推定の概念を用いて[仮説モデルら —厳密厳正にアルゴリズム(純・機械的処理手順)で定義される「自然言語」のそれではないとの仮説モデルら—]に対する分析のありようを既知既存のデータおよびダミーのデータから呈示、それでもってして、どのような確率的目分量が【恣意性濃厚】【偶然的現出濃厚】との別を付けるものとして計数的に示せるのかの[検証容易なるモデル]を示す)。

・「万能全知のように(悪い意味で)適切なることを「不自然に」のたまうことすらも時局に応じてなせるようであるとの傀儡・糸繰り人形の類、我々人間の世界にそういうものが多く紛れ込んでいると判じられる(犯罪的意志表示が奇怪なる予見性を伴ってなされていると摘示できてしまうのだから現象だけに依拠しても当然にそうも判じられる)との傀儡・糸繰り人形の類などでは筆者はないのであるから、[種族のイドラ]の限界 —(ここに言う[種族のイドラ]とは端的に述べれば、「我も所詮は人なり、人間であるにすぎぬ」という[人間という種族としての立ち位置に帰因する視点の限局性]を指してのフランシス・ベーコン由来の哲学関連用語となる) — を越えることなどはできない、したがって、知り尽くすことは物理的にできないとの中でのスペキュレーション(推察)の域を出ることはないことではある」
と断りもしたうえでのことながらも、である。

本稿末尾近くの段にあっては[予告(現実にそこに存在している既に実現してきた行為に対する犯罪的意志表示)の類]が「何故」、そう、「何故」、執拗になされもしていたのか、そして、予告通りのことが漸次実現されてきたといったことがどうしてあるのかの問題、言い換えもしてより具体的に書けば、犯罪的意志表示に照応する式での犯罪的行為らが「何故」、漸次的に執拗に実行されてきたのか(そしてそのことが「何故」、ブラックホールという特定方向に結線するようになっていて[現象]ベースで見取れるようになっているのか)とのことに関して「終局的に」いかようなことが思惑として企図されていると推測されるのかとの問題(「ホワイダニットの問題；何故、それがなされてきたのかの問題」)についての視点「も」(愚にもつかぬ属人的印象論で終わらぬよう具体的判断材料の細やかなる指し示しをなしつつ)

提示することとする —— 現行手元にある判断材料に基づきもし、自身ができるかぎりの分だけ多角的に [合理的推察] を表記のことにまつわって「も」提示する、そう、重要なことを摘示してきたとの自負ある者としての [節度] の問題として提示することとする ——。

その点もってして、同じくものことの提示に際しては「関係しているとの [兆候] が見てとれる」ところの米国より 70 年代から 80 年代にかけて登場した思潮や科学予測に伴う「水際だって異様なる」側面のことをも細やかに紹介していくとのことをあわせてなす（: 同じくものこと、再述するが、ブラックホールという方向に結線すると「現象」として示せてしまう犯罪的意志表示ら（いいだろうか、既に漸次的に実現してきた犯罪行為にまつわっての犯罪的意志表示らである）が何故それも執拗になされてきたのか、そのことが向かう先にて実現が企図されているのは終局的に何であると推察されるのか（たかだかもってしての人の身ながらも現行手元にある判断材料に基づき何であると推察されるのか）とのことに関しては【イエズス会士テイヤール・ド・シャルダンに由来し、物理学者フランク・ティプラーが肉付けをしたことで欧米ではよく知られるオメガポイント理論】というものの細やかな内容、そして、同じくもの理論の展開のされように透けて見える [反対話法としての性質] や [異様なる一連の予見的やりようとの接続関係] のこと「など」を入念に詳述し（そうもしたことらにホワイダニットの問題 —— 何故、そうもしたことがなされてきたのかの問題 —— と接合していると合理的に疑えるところの異様性・執拗性がとみに見て取れるとのことで詳述し）、動機・思惑の問題についてできるかぎり考えられるところの指し示しをなすことに努める）。



本稿摘示事項を支える各【典拠紹介部】ら、それら掲載頁の一覧 (全巻共通表記部)

第一巻 (vol.1) にて呈示の各出典紹介部の掲載頁として

出典 (Source) 紹介の部 1 : p.39—p.52

出典 (Source) 紹介の部 2 : p.53—p.59

出典 (Source) 紹介の部 3 : p.59—p.70

出典 (Source) 紹介の部 4 : p.72—p.81

出典 (Source) 紹介の部 5 : p.84—p.90

出典 (Source) 紹介の部 6 : p.98—p.105

出典 (Source) 紹介の部 7 : p.105—p.114

出典 (Source) 紹介の部 8 : p.115—p.118

出典 (Source) 紹介の部 9 : p.119—p.123

出典 (Source) 紹介の部 10 : p.133—p.147

出典 (Source) 紹介の部 11 : p.157—p.163

出典 (Source) 紹介の部 12 : p.172—p.175

出典 (Source) 紹介の部 13 : p.175—p.177

出典 (Source) 紹介の部 14 : p.177—p.184

出典 (Source) 紹介の部 15 : p.186—p.189

出典 (Source) 紹介の部 16 : p.193—p.195

出典 (Source) 紹介の部 17 : p.199—p.200

出典 (Source) 紹介の部 17-2 : p.203—p.205

出典 (Source) 紹介の部 17-3 : p.209—p.212

出典 (Source) 紹介の部 17-4 : p.213—p.217

出典 (Source) 紹介の部 18 : p.228—p.231

出典 (Source) 紹介の部 19 : p.234—p.236

出典 (Source) 紹介の部 20 : p.236—p.240

出典 (Source) 紹介の部 20-2 : p.244—p.249

出典 (Source) 紹介の部 20-3 : p.252—p.256

出典 (Source) 紹介の部 20-4 : p.259—p.262

出典 (Source) 紹介の部 20-4 (2) : p.263—p.265

出典 (Source) 紹介の部 21 : p.271—p.274

出典 (Source) 紹介の部 21-2 : p.275—p.276

出典 (Source) 紹介の部 21-3 : p.277—p.279

出典 (Source) 紹介の部 21-3 (2) : p.280—p.281

出典 (Source) 紹介の部 21-4 : p.287—p.289

出典 (Source) 紹介の部 21-5 : p.292—p.294

出典 (Source) 紹介の部 21-5 (2) : p.295—p.297

出典 (Source) 紹介の部 22 : p.319—p.320

出典 (Source) 紹介の部 22-2 : p.320—p.322

出典 (Source) 紹介の部 23 : p.323—p.325

出典 (Source) 紹介の部 24 : p.328—p.333

出典(Source)紹介の部 25 : p.337-p.339

出典(Source)紹介の部 26 : p.344-p.346

出典(Source)紹介の部 26-2 : p.347-p.350

出典(Source)紹介の部 27 : p.352-p.356

出典(Source)紹介の部 28 : p.362-p.363

出典(Source)紹介の部 28-2 : p.363-p.365

出典(Source)紹介の部 28-3 : p.366-p.369

出典(Source)紹介の部 29 : p.412-p.416

出典(Source)紹介の部 30 : p.416-p.417

出典(Source)紹介の部 30-2 : p.418-p.419

出典(Source)紹介の部 30-2 (2) : p.420-p.422

出典(Source)紹介の部 31 : p.436-p.437

出典(Source)紹介の部 31-2 : p.437-p.439

出典(Source)紹介の部 32 : p.441-p.443

出典(Source)紹介の部 32-2 : p.443-p.446

出典(Source)紹介の部 33 : p.452-p.456

出典(Source)紹介の部 33-2 : p.459-p.462

出典(Source)紹介の部 34 : p.501-p.503

出典(Source)紹介の部 34-2 : p.504-p.506

出典(Source)紹介の部 35 : p.529-p.533

出典(Source)紹介の部 36 : p.535-p.538

出典(Source)紹介の部 36(2) : p.538-p.540

出典(Source)紹介の部 36(3) : p.543-544

出典(Source)紹介の部 37 : p.552-554

出典(Source)紹介の部 37-2 : p.554-p.558

出典(Source)紹介の部 37-3 : p.559-p.562

出典(Source)紹介の部 37-4 : p.569-p.571

出典(Source)紹介の部 37-5 : p.572-p.575

出典(Source)紹介の部 38 : p.596-p.598

出典(Source)紹介の部 38-2 : p.598-p.602

出典(Source)紹介の部 39 : p.611-p.619

出典(Source)紹介の部 40 : p.624-p.626

出典(Source)紹介の部 41 : p.629-p.631

出典(Source)紹介の部 41(2) : p.638-p.639

出典(Source)紹介の部 41(3) : p.642-p.643

出典(Source)紹介の部 41(4) : p.644-p.645

出典(Source)紹介の部 41(5) : p.646-p.648

出典(Source)紹介の部 41(6) : p.648-p.649

出典(Source)紹介の部 42 : p.654-p.657

出典(Source)紹介の部 43 : p.658-p.662

出典(Source)紹介の部 44 : p.667-p.668

出典(Source)紹介の部 44-2 : p.669-p.670

出典(Source)紹介の部 44-3 : p.671-p.673

出典(Source)紹介の部 44-3 : p.674-p.677

出典(Source)紹介の部 45 : p.680-p.687

出典(Source)紹介の部 46 : p.695-p.701

出典(Source)紹介の部 47 : p.702-p.710

出典(Source)紹介の部 48 : p.721-p.723

出典(Source)紹介の部 49 : p.723-p.726

出典(Source)紹介の部 50 : p.728-p.731

出典(Source)紹介の部 51 : p.739—p.744	出典(Source)紹介の部 57 : p.879—884
出典(Source)紹介の部 52 : p.747—p.755	出典(Source)紹介の部 58 : p.886
出典(Source)紹介の部 53 : p.756—p.758	出典(Source)紹介の部 58(2) : p.887—p.888
出典(Source)紹介の部 53(2) : p.758—p.760	出典(Source)紹介の部 58(3) : p.889—p.890
出典(Source)紹介の部 53(3) : p.761—p.764	出典(Source)紹介の部 58(4) : p.891—p.894
出典(Source)紹介の部 53(4) : p.765—p.768	出典(Source)紹介の部 59 : p.908—p.911
出典(Source)紹介の部 54 : p.769—p.770	出典(Source)紹介の部 60 : p.913—p.915
出典(Source)紹介の部 54(2) : p.771—p.774	出典(Source)紹介の部 60(2) : p.924—p.935
出典(Source)紹介の部 54(3) : p.775—p.780	出典(Source)紹介の部 60(3) : p.983—p.984
出典(Source)紹介の部 54(4) : p.780—p.783	出典(Source)紹介の部 61 : p.996—p.1001
出典(Source)紹介の部 55 : p.801—p.825	出典(Source)紹介の部 61(2) : p.1002—1003
出典(Source)紹介の部 55(2) : p.831—p.835	出典(Source)紹介の部 62 : p.1009—p.1014
出典(Source)紹介の部 55(3) : p.839—p.847	出典(Source)紹介の部 63 : p.1031—p.1036
出典(Source)紹介の部 56 : p.861—p.865	出典(Source)紹介の部 63(2) : p.1036—p.1038
出典(Source)紹介の部 56(2) : p.868	出典(Source)紹介の部 63(3) : p.1039—p.1059
出典(Source)紹介の部 63(4) : p.1072—p.1080	

第二巻 (vol.2) にて呈示の各出典紹介部の掲載頁として

出典(Source)紹介の部 64 : p.11—p.12	出典(Source)紹介の部 64(8) : p.30—p.32
出典(Source)紹介の部 64(2) : p.13—p.14	出典(Source)紹介の部 64(9) : p.33—p.34
出典(Source)紹介の部 64(3) : p.14—p.15	出典(Source)紹介の部 64(10) : p.38—p.39
出典(Source)紹介の部 64(4) : p.16—p.18	出典(Source)紹介の部 65 : p.60—p.61
出典(Source)紹介の部 64(5) : p.18—p.20	出典(Source)紹介の部 65(2) : p.65—p.66
出典(Source)紹介の部 64(6) : p.20—p.23	出典(Source)紹介の部 65(3) : p.76—p.82
出典(Source)紹介の部 64(7) : p.25—p.27	出典(Source)紹介の部 65(4) : p.83—p.89

出典(Source)紹介の部 65 (5) : p.103—p.108

出典(Source)紹介の部 65 (6) : p.110—p.115

出典(Source)紹介の部 65 (7) : p.118—p.121

出典(Source)紹介の部 65 (8) : p.123—p.125

出典(Source)紹介の部 65 (9) : p.134—p.137

出典(Source)紹介の部 65 (10) : p.150—p.154

出典(Source)紹介の部 65 (11) : p.165—p.166

出典(Source)紹介の部 65 (12) : p.166—p.167

出典(Source)紹介の部 65 (13) : p.168—p.171

出典(Source)紹介の部 65 (14) : p.177—p.180

出典(Source)紹介の部 65 (15) : p.180—p.181

出典(Source)紹介の部 66 : p.191—p.198

出典(Source)紹介の部 67 : p.220—p.228

出典(Source)紹介の部 68 : p.232—p.234

出典(Source)紹介の部 69 : p.234—p.238

出典(Source)紹介の部 69 (2) : p.239—p.244

出典(Source)紹介の部 70 : p.244—p.252

出典(Source)紹介の部 71 : p.253—p.261

出典(Source)紹介の部 72 : p.263—p.269

出典(Source)紹介の部 73 : p.278—p.281

出典(Source)紹介の部 74 : p.286—p.288

出典(Source)紹介の部 75 : p.289—p.293

出典(Source)紹介の部 75-2 : p.294—p.295

出典(Source)紹介の部 75-3 : p.301—p.305

出典(Source)紹介の部 75-3 (2) : p.305—p.307

出典(Source)紹介の部 76 : p.329—p.331

出典(Source)紹介の部 76 (2) : p.334—p.335

出典(Source)紹介の部 76 (3) : p.341—p.342

出典(Source)紹介の部 76 (4) : p.345—p.349

出典(Source)紹介の部 76 (5) : p.352—p.353

出典(Source)紹介の部 76 (6) : p.358—p.360

出典(Source)紹介の部 76 (7) : p.361—p.363

出典(Source)紹介の部 77 : p.369—p.373

出典(Source)紹介の部 77 (2) : p.375—p.377

出典(Source)紹介の部 77 (3) : p.378—p.383

出典(Source)紹介の部 78 : p.411—p.413

出典(Source)紹介の部 78 (2) : p.414—p.416

出典(Source)紹介の部 79 : p.423—p.425

出典(Source)紹介の部 79 (2) : p.426—p.430

出典(Source)紹介の部 80 : p.473—p.475

出典(Source)紹介の部 80 (2) : p.480—p.484

出典(Source)紹介の部 80 (3) : p.484—p.490

出典(Source)紹介の部 81 : p.502—p.505

出典(Source)紹介の部 82 : p.554—p.555

出典(Source)紹介の部 82 (2) : p.568—p.571

出典(Source)紹介の部 82 (3) : p.571—574

出典(Source)紹介の部 82 (4) : p.576—578

出典(Source)紹介の部 82 (5) : p.579—p.581

出典(Source)紹介の部 82 (6) : p.586—p.602

出典(Source)紹介の部 83 : p.622—p.624

出典(Source)紹介の部 84 : p.627—p.643

出典(Source)紹介の部 85 : p.654—p.659

出典(Source)紹介の部 86 : p.661—p.665

出典(Source)紹介の部 87 : p.686—p.691

出典(Source)紹介の部 87 (2) : p.699—p.705

出典(Source)紹介の部 87 (3) : p.721—p.723

出典(Source)紹介の部 87 (4) : p.725—p.728

出典(Source)紹介の部 87 (5) : p.749—p.752

出典(Source)紹介の部 88 : p.861—p.864

出典(Source)紹介の部 89 : p.924—p.926

第三巻(vol.3)にて呈示の各出典紹介部の掲載頁として

出典(Source)紹介の部 90 : p.18—p.24

出典(Source)紹介の部 90 (2) : p.26—p.32

出典(Source)紹介の部 90 (3) : p.36—p.42

出典(Source)紹介の部 90 (4) : p.45—p.48

出典(Source)紹介の部 90 (5) : p.50—p.52

出典(Source)紹介の部 90 (6) : p.54—p.56

出典(Source)紹介の部 90 (7) : p.59—p.61

出典(Source)紹介の部 90 (8) : p.61—p.65

出典(Source)紹介の部 90 (9) : p.65—p.67

出典(Source)紹介の部 90 (10) : p.78—p.80

出典(Source)紹介の部 90 (11) : p.85—p.92

出典(Source)紹介の部 91 : p.142—p.145

出典(Source)紹介の部 92 : p.145—p.149

出典(Source)紹介の部 93 : p.157—p.168

出典(Source)紹介の部 94 : p.170—p.174

出典(Source)紹介の部 94 (2) : p.174—p.176

出典(Source)紹介の部 94 (3) : p.178—p.183

出典(Source)紹介の部 94 (4) : p.186—p.189

出典(Source)紹介の部 94 (5) : p.192—p.195

出典(Source)紹介の部 94 (6) : p.196—p.201

出典(Source)紹介の部 94 (7) : p.202—p.207

出典(Source)紹介の部 94 : p.231—p.235

出典(Source)紹介の部 95 (2) : p.236—p.243

出典(Source)紹介の部 95 (3) : p.244—p.248

出典(Source)紹介の部 95 (4) : p.255—p.259

出典(Source)紹介の部 95 (5) : p.260—p.263

出典(Source)紹介の部 95 (6) : p.265—p.269

出典(Source)紹介の部 95 (7) : p.270—p.279

出典(Source)紹介の部 95 (8) : p.281—p.292

出典(Source)紹介の部 95 (9) : p.301—p.309

出典(Source)紹介の部 96 : p.311—p.320

出典(Source)紹介の部 96 (2) : p.322—p.324

出典(Source)紹介の部 97 : p.354—p.371

出典(Source)紹介の部 98 : p.414—p.417

出典(Source)紹介の部 99 : p.462—p.468	出典(Source)紹介の部 104 : p.690—p.695
出典(Source)紹介の部 100 : p.540—p.542	出典(Source)紹介の部 105 : p.696—p.721
出典(Source)紹介の部 101 : p.545—p.553	出典(Source)紹介の部 106 : p.731—p.736
出典(Source)紹介の部 102 : p.559—p.562	出典(Source)紹介の部 106 (2) : p.736—p.738
出典(Source)紹介の部 102 (2) : p.562—p.564	出典(Source)紹介の部 106 (3) : p.738—p.742
出典(Source)紹介の部 102 (3) : p.565—p.568	出典(Source)紹介の部 106 (4) : p.751—p.753
出典(Source)紹介の部 102 (4) : p.569—p.577	出典(Source)紹介の部 106 (5) : p.754—p.755
出典(Source)紹介の部 102 (5) : p.577—p.587	出典(Source)紹介の部 106 (6) : p.761—764
出典(Source)紹介の部 102 (6) : p.592—p.599	出典(Source)紹介の部 107 : p.771—774
出典(Source)紹介の部 102 (7) : p.600—p.601	出典(Source)紹介の部 107 (2) : p.774—p.777
出典(Source)紹介の部 102 (8) : p.603—p.609	出典(Source)紹介の部 108 : p.784—p.788
出典(Source)紹介の部 102 (9) : p.618—p.623	出典(Source)紹介の部 109 : p.892—p.895
出典(Source)紹介の部 103 : p.635—p.637	出典(Source)紹介の部 109 (2) : p.897—p.900
出典(Source)紹介の部 103 (2) : p.638—p.642	出典(Source)紹介の部 109 (3) : p.900—p.902
出典(Source)紹介の部 103 (3) : p.642—p.652	出典(Source)紹介の部 109 (4) : p.905—p.908
出典(Source)紹介の部 103 (4) : p.652—p.654	出典(Source)紹介の部 109 (5) : p.917—p.935
出典(Source)紹介の部 103 (5) : p.654—p.657	出典(Source)紹介の部 109 (6) : p.939—p.942
出典(Source)紹介の部 103 (6) : p.658—p.676	

第四巻 (vol.4) にて呈示の各出典紹介部の掲載頁として

出典(Source)紹介の部 110 : p.19—p.33	出典(Source)紹介の部 110 (5) : p.63—p.74
出典(Source)紹介の部 110 (2) : p.39—p.43	出典(Source)紹介の部 110 (6) : p.76—p.81
出典(Source)紹介の部 110 (3) : p.49—p.52	出典(Source)紹介の部 110 (7) : p.86—p.95
出典(Source)紹介の部 110 (4) : p.57—p.58	出典(Source)紹介の部 110 (8) : p.104—p.105

出典(Source)紹介の部 111 : p.119-p.121

出典(Source)紹介の部 116 : p.609-p.612

出典(Source)紹介の部 112 : p.183-p.190

出典(Source)紹介の部 117 : p.661-p.662

出典(Source)紹介の部 113 : p.241-p.244

出典(Source)紹介の部 117 (2) : p.664-p.668

出典(Source)紹介の部 113 (2) : p.290-p.295

出典(Source)紹介の部 117 (3) : p.668-p.672

出典(Source)紹介の部 114 : p.357-p.360

出典(Source)紹介の部 118 : p.677-p.680

出典(Source)紹介の部 115 : p.554-p.557

※ 本稿にあって区分けの上で多くの紙幅をそこに割いているとの補説部、そちら補説部各部の記載頁についてもここに表記しておく

出典(Source)紹介の部 115 (2) : p.561-p.562

補説 1 の部 : p.9-p.213 ,vol.2

出典(Source)紹介の部 115 (3) : p.563-p.568

補説 2 の部 : p.234-p.927,vol.2

出典(Source)紹介の部 115 (4) : p.600-p.602

補説 3 の部 : p.8-p.537 ,vol.3

出典(Source)紹介の部 115 (5) : p.603-p.607

補説 4 の部 : p.537-p.1035 ,vol.3



〔典拠紹介部ら一覧に付しもしての表記として〕

上掲図は

〔ギリシャ神話に見るケンタウロスと戦争をなすに至った部族ラピス族(の男)とケンタウロスの戦いを象(かたど)った彫刻〕を挙げもしてのものとなる。

同・彫刻作品 — Centaur and Lapithとの題の彫刻作品— にてモチーフとされている半人半馬の存在、

【ケンタウロス (Centaur)】

があまりにも異様な予見的言及に通じているとのことがある。

具体的にはケンタウロスのうちの固有名詞付きの著名な存在、【ケイロン】および【ネッソス】という存在が

【妻を陵辱しようとしたケンタウロス (の【ネッソス】) を殺害するに至った著名なるギリシャ神話英雄たるヘラクレスありよう】

を介して重篤なる予見的文物 — 後の日にあっての加速器関連の「ブラックホール生成にまつわる」リスク論議の細かきありようという往時にはどんな専門家も予見できなかったはずであるとのことを「克明に」予見しているとの1980年初出文物 — の内容に、そして、ブラックホール生成可能性が問題視されることになった史上最大の科学実験とされるLHC実験そのものに悪質な式で関わっているとのことが指摘できてしまう、【現象】としてはきとそこにあることとして指摘できてしまうとのことがありもし、本稿ではそのことの遺漏無くもの摘示に努めている (：直前出典紹介部一覧にてそちら掲載ページ数も無論にして呈示しているとの典拠紹介部 110 から典拠紹介部 110 (8) との出典紹介部を包摂する部の内容、四巻構成の本稿における第四巻 (vol.4) におけるp.19からp.116の内容が【自身を欺き、妻を陵辱しようとしたケンタウロス・ネッソスを殺害するヘラクレス】がブラックホール生成にまつわる克明なる予見文物に何故もってして関わっているのかの【多重的論拠】を仔細に呈示せんと心掛けての部となる)。

以上表記のこと — いいだろうか、異様な先覚性を帯びての加速器によるブラックホール生成にまつわる予見事物、そして、後にブラックホール生成が取り沙汰されるに至ったLHC実験というものそれ自体の双方が (ギリシャ神話英雄たる)ヘラクレスにまつわる【特定の属性】とはきと結びついているとのことが「ある」のである — がどうして「極めてもってして問題になる」のかについては本稿の内容をきちんとご検討いただければ、ご理解いただけるであろうとのこと、ここに請け合わせていただく次第である。

— 生きようとする人の意志に —

【著者および著作権について】

はきと述べて自身このありようなどどうでもいい、売名行為も「ビジネス」(なるもの)の範疇に入るのだろうとの種別の人間、あるいは、他の何らかの理由がゆえに名をなさんとする(鼻につく虚栄心であれ、英雄願望であれ、生き方それ自体をおのが作品としたいとの芸術家の美意識のあらわれであれ名をなさんとする)との願望を持ち合わせている向きよろしくおのれのことを知ってもらいたくてこの身は本稿の公開・頒布を試みているわけ「ではない」(その点からして勘違いしないでいただきたい)。

本稿 — (都度もってしての改訂を試みながら作製してきた **Entities that physicists refer to as Black holes , already fulfilled many extraordinary Predictions , and firm Guilty Intent『物理学者の類がブラックホールとよびならわしている存在ら、既に実現を見てきた異様な予見的言及、そして、確たる他害意志の介在問題について』**と(内容そのままに題しての)本稿) — の節々の記載内容をもってして[悟性]伴った向きにはお分かりいただけることか、と思うのではあるが、筆者は自身および自身が守るに値するのとらえた向きらが物理的に生き残る術、

【環境変化によって「物理的に」生き残る術】

を模索して本稿の指摘事項の適正なる拡散を試みているのであってそこにあつてはサーカス小屋と自身が目しきるに至ったこのような世界で「システムの翳間(太鼓持ち)・大道芸者・サーカスの子供ら」がそうするように矮小なる名を売ろうなどの意図・観点はない(この身は多くの虚偽・偽善が平然とまかりとおるこの世界にて表舞台にて見得を切っている[名をなしての富貴なる者・権勢ある者・学識(なるもの)を伴った向き]ら、そして、彼らとときに紐付いている社会貢献・慈善活動(なるもの)をして[状況がなんら分かっていないところ]に産がある、誰も永らえることができない死刑場における囚人の楽観主義がごとくところから発しているようではある、しからずんば、非人間的な空虚さに根があるやもしれぬとの意で胡散臭く見ているとの筋合いの人間である。そうした見方をなしている人間として本稿を世に[名] — 死ねば所詮は無であるのもの — や[道徳観点;善や良俗にまつわる自己の偏波な価値観]を押し売りせんとする観点でもしているわけ「ではない」。よくよくも斟酌いただきたいところとして、本稿執筆の背景にある「思考」とのことでは、我々が暮らすこの地球という水槽が人の住めぬものになったならば、おのれ・縁者も死ぬし、人間存在 — 羊のような従順さ・ロボットのような空虚さ・見え透いた愚昧さ・陋劣さが後天的に亢進させられている節も濃厚にあるように見受けられるとの式での碌でもないありようばかりが目につく種族ながらも我が属する人間存在 — のうちの徹々たる美風の体現者らも諸共滅びましょう、そうしたことが危惧される(下らぬ宗教的観点などではなく【具体的現象】【具体的兆候】に依拠してのこととして危惧される)中でただただ「【物理的生き残り】を図るとの原始的本能」に依拠しての観点でもって本稿を作製(十二分に練れたものとして作製)、その中身・指摘事項を世に適正に広めんと試みているにすぎない)。

直上にてそうも述べているようにシステムの用意したサーカスの子供らよろしく名を売ろうとする意図などこの身にはないのではあるが、ただ、(そこは踏むべきかと判じた)[節度]および(社会的にはではなく物理的に生き残らんとする上での)[合理的観点]をもってして表記するところとしての筆者(たる大森健史という男)のありようについては、である。

「【情報の体系】(いわばもってしての「ミーム」とでも表すべきもの)を拡散するため、ただそれだけのために時間も最早なかりと考えつつながらも自身が設立した会社(名利嚙蠟出版株式会社という会社)のウェブサイト — (従前訴求事項を反映させるとの式で2012年前半期よりサイト公開をし出したとの社用媒体、本稿を公開することにしたオンライン媒体の一でもあるとの手前が代表を務める会社・名利嚙蠟出版株式会社における社サイト/この身が相応の結末・最期を迎えぬ限りは存続するとのかたち(現行)するつもりであるとのサイト) — にてその点についての最低限の表記をなしているので、そうしたこと、手前ありようなどにも関心がある — すなわちもって、どういった者が問題となることを(それなりの媒体を作製して)指摘しているのかとの意で関心がある — との向きにおかれてはそちらを参照いただきたい」

とまでは申し述べておく。

またもってして、本稿にあつては【著作権表示】を施してもいるが(当頁下部参照のこと)、この期にあつて著作権にまつわつての表示などを取ってもせせこましくもなしているのは

[バンダー(供給者)・供給チャネルを偽りながらも改悪・言論土壌汚染行為](馬鹿げた陰謀論ないそうしたもののバンダーであるとの相応の手合いらと十把一絡げにしての供給チャネル偽装行為・露骨な劣化言論作出の類を(先後関係など偽りながら)なして情報供給チャネルと情報それ自体に対する印象操作をなし、厳然とある事実関係、その指摘を晦(くら)まし・枉(ま)げるといったやりよう / 上より情報封殺が完遂できない局面におけるオプションととれるやりよう)

などが相応の人間の心性欠如の者ら — 本来ならばそうする理由もないところで[説得力乏しき劣化言論]を目立って拡散なしもしようとの空虚な者ら — によって「そればかりが目立つ」式でなされる可能性を可及的に抑止するための配慮がある(被害妄想がかかっていて信じ難くもあろうが、この身には訴訟をなしていた折より同じくものことの経験がある)がゆえであつて、(そうも著作権表示などなしているのは)なにも「死に往く者」が知的財産権などに対する拘りをこれ滑稽にも呈しているわけでないとのこと、一応もってして断っておく(第三者にその共感を求めるのは一難事かととらえているのだが、自身を「死に往く者」と表しもしての【時間的切迫性】とのことでは、である。「人の将(まさ)に死なんとする、その言や善し」(教条的ではないつもりではある(児孫死滅に通ずる不正に心底からの罵詈雑言などはあるが教条主義的に人に内観や教えといったものを押しつけるようなことはしたくない)、そして、胸中まだ若くあるつもりであるとの人間が引くのは何ではあるかと思うのであるもの儒教というものとの徒・曾子の言として世に知られる言 / 死なぬために本稿の内容を問うつもりではあるとの人間ながらもそうした赤裸々さもまた他面であるとの意で引き合いに出しているとの英語で言うところの「ア・ダイニング・パースン・スピークス・トルルー」)との観点を[状況捕捉を真に望む向きら]に求めたいぐらいに時間的切迫性の問題が見え隠れしている、我が命とていくばくもない、健康面による事由ではなく、また、その他ありとあらゆるマイクロレベル(個人個人レベル)の災難ですらなくいくばくもなろうと当然に判じるだけのことが「ある」のだとここにあつてからして申し述べておきたい — 私はことによっては極近々【人災】(非力なる羊のような者らにとっては神為などと受け取られもするかもしれぬ【人災】)によって「吞まれて」死することとて大いにありうると見ている、自身があと数年、安閑に永らえることに対してすらなんら希望的観測を抱いていない(そうした【人災】と紐付いた【時間的切迫性】にまつわる危惧に通じている「数多の」論拠ら(具体的【現象】に依拠しての「数多の」論拠ら)は本稿にて厭となる程に呈示しているので、理なくしての獣声よろしくの否定、【愚者の否定】(情動的・条件反射的「拒絶」)をなすとの式ではなくにこの身を否定してやりたいと考えもしている向きらにはそれら論拠ら理非を検討いただきたい) —)。